緋弾のアリア　欲望の交差

いちごムース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　欲望の交差

【Ｎコード】
Ｎ７６９４Ｔ

【作者名】
いちごムース

【あらすじ】
東京都武偵高校、そこは武力を行使する探偵・・・通称『武偵』を育成する特殊な学校。「欲望のメダル」の力と「特殊体質」を持つ遠山キンジは、そのことを周囲に秘密にして日々を送っていた。しかし始業式の日に強襲科の神埼・Ｈ・アリアと出会い、彼の日常は変わっていく。

第一弾　プロローグ（前書き）

緋弾のアリアに仮面ライダーを混ぜ込んだ原作改変小説です。苦手な人はお下がりください。

第一弾　プロローグ

空から女の子が降って来ると思うか？

最近の映画やアニメではだいぶ減ってきた展開だ。
主人公は少女と出会い不思議で特別な物語が始まっていく。・・・・
そんなプロローグだ。
そして主人公は正義の味方や勇者となって大冒険が始まる。

ああ、空から女の子がふってこないかなぁ・・・・・。
んなこと俺は、絶対に言わない。
親方！！空から女の子が降ってきた！！
そんな台詞はいてみろ。絶対に面倒なことに巻き込まれるに決まってる。
飛鉱石やら天空のお城やらの厄介ごとにロボット投下。・・・最後は魔法の言葉で足場が崩れてしまいそうだ。
それは危険で下手をすると命を落とす。それに・・・めんどくさい。

だから俺、遠山キンジは・・・
空から女の子なんて降ってこなくていい。
俺はとにかく平和な生活を送りたいんだ。。・・・あんな‘人間を超える力”も俺の‘体質”も使わなくても良いように・・・
だからまずは転校してやるんだ。こんな狂った学校から・・・

・・・ピン、ポーン・・・

（こんな、朝っぱらから誰だよ。）
枕元の携帯の時計は朝の7時。まだ俺は眠気が取れてない。
居留守でも使ってやろうか。・・・やめよう。あの慎ましいチャイムから察するに・・・たぶんあいつだろうな。でなきゃ、こんなに嫌な予感なんてしない。
俺はいそいそとワイシャツをはおって制服のズボンを履く。そしてドアの覗き穴から外を見た。
・・・あぁ、やっぱりな。
「・・・はぁ・・・」

予想通り、白雪が立っていた。
純白のブラウス、臙脂色のスカート。
シミ一つ無いセーラー服を着て漆塗りのコンパクトを片手に前髪を直している。・・・何やってんだよ白雪。こんな所で。
「白雪・・・。」

ドアを開けると白雪はサッとコンパクトを隠した。
「キンちゃん。」

ぱあっと明るくなった白雪は昔のあだ名で俺を呼んできた。
「その呼び方・・・やめろって言っただろ。」

「ご、ごめんね。キンちゃん。あっ！ま、また！キンちゃ、・・・・も、申し訳ありません旦那様！」

別に俺はお前のご主人様じゃない。
星伽白雪。
キンちゃんって呼び方で分かる通り、俺と白雪は幼馴染だ。
外見は名前の通り雪肌。長く伸びたつやつやの黒髪の前髪は幼い頃

からパッツン。目はおっとり優しげでまつ毛はけぶるように長い。
「ていうか、軽々しく来るのはよくないぞ。ここは仮にも男子寮なんだからな。」

「あ、あの。で、でも私昨日まで伊勢神宮に合宿に行ってて・・・キンちゃんのお世話何もしてあげられなかったから」

「しなくていいって。」

ガーン!!という効果音が白雪から聞こえた気がした。
「・・・で、でも・・・すん・・・ぐすん」

「あー。わかった。分かったから」

今にも泣きそうな白雪を、俺は仕方なく部屋に入れることにした。
「お邪魔します。」

「で、何しにきたんだよ」

俺は適当に座卓の脇に腰を下ろす。
「こ、これ」
白雪はふわりと正座をすると持っていた和布の包みを解く。
そして出てきた重箱を俺の前に差し出すと、そのフタを開ける。
そこには卵焼き、海老、銀鮭といった豪華なメニューがあった。はっきり言っておせちだぜ・・これ。
「これ・・・作るの大変だったんじゃないか?」

こうゆうのって前の日からいろいろと仕込まなきゃいけなかったんじゃないか?
「う、ううん、ちょっと早起きしただけ。キンちゃんがまたコンビ

ニ弁当ばっかり食べてるんじゃないかなって・・・心配しちゃって」

なんでばれてる。・・・たしかに俺はコンビニ弁当ばっかりで栄養の偏った食事をしていたが・・・・なんか監視カメラでも付けられてないか心配になってきた。

まあいいとりあえず食おう。

「頂きます。」

やっぱり白雪の料理はうまいな。特に和食が。・・・たまにはお礼でも言うか。

「・・・えっと、いつもあんがとな」

「えっ。こ、こちらこそありがとうございますっ！」

「なんでお前がありがとうなんだよ・・・」

「だって、キンちゃんが食べてくれて、お礼を言ってくれたから」

おどおどしすぎだぞ白雪。強く生きろ。

すると頭を下げていた白雪のセーラー服の緩みから見えてしまった。

・・・黒いレースの下着が。

（く・・・黒はないだろ！）

じわっ。

体の芯に血が集まるような感覚がした。

だめだ。

「ごちそうさまっ！」

俺は白雪から逃げるように立ち上がる。・・・なんとかセーフだったようだ。

白雪はテキパキと重箱を片付けると、ソファーに俺が脱ぎっぱなしにしていた武偵高の学ランを取ってきた。

「キンちゃん。今日から一緒に2年生だね。はい、防弾制服」

俺はそれをしぶしぶ羽織る。すると今度はテレビの脇に放置していた拳銃も持ってくる。

「・・・始業式ぐらい・・・持たなくていいだろ。んなもん」

「駄目だよキンちゃん、校則なんだから」

と、白雪はホルスターごと帯銃させる。

校則・・・『武偵高の生徒は学内での拳銃と刀剣の携帯を義務づける。

はぁ、まったく普通じゃない。

「それにまた『武偵殺し』みたいなのが出るかもしれないし」

武偵殺し・・・年明けに周知メールが出てた連続殺人犯のことだ。

たしか・・・武偵の車やなんかに爆弾をしかけて自由を奪った挙句、マシンガンのついたラジコンヘリで追い回して海に落とす。そんな手口の奴らで2週間前にも仮面戦士（ライダー）科の須藤って奴が大怪我をしたらしい。

「でも、たしかあれ逮捕されただろ」

「で、でも模倣犯とかがでるかもしれないし。今朝の占いでキンちゃんに女難の相が出てたし・・・もしもキンちゃんに何かあったら、私、私・・・ぐす」

白雪女難の相はあたってるぞ。朝からお前で・・・。

仕方ない。これ以上内申点下がったら今の俺の目標の『普通の高校への転入』も出来なくなるしな。まあ、武装と‘あれ’を持っていくぐらいはしてやるか。

「分かった分かった。これで安心だろ」

俺は溜息をつくと兄の形見のバタフライ・ナイフをポケットにし

まい、俺の人外の‘力’の‘ベルト’と3枚のそれぞれ色の違うメダルを懐にしまう。
「カッコいいよキンちゃん。さすが先祖代々『正義の味方』だね」
「やめてくれよ。・・・ガキじゃあるまいし」
　すると白雪は4月には生徒全員が名札をつけるというルールで俺にそれを付けてくる。さすがは生徒会長。真面目だな、俺なんかと違って。
「・・・俺はメールのチェックをしてから出る。先に行ってろよ」
「あっ、じゃあその間に皿洗いとかお洗濯とか」
「いいって。先に行っててくれ」
「・・・はい。じゃあ、その。後でメールとか・・・くれると、うれしいですっ」
　白雪はもじもじとそんなことをいい出て行った。
俺はだらだらとメールやウェブをみる。そんなこんなで時刻はいつの間にか7時55分となっていた。
　しまった。だらだらしすぎた。
俺は普段バイクで通っているが今は整備に出していて7時58分のバスに乗らなければならなかったのに・・・

生涯

生涯、俺はこの7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろうな。

なぜならこの後女の子が降って来てしまったんだから。
神崎・H・アリアが。

La bambina da I'ARIA（前書き）

2話目です。いちおう「変身」はします・・・。

La bambina da I'ARIA

雨が降ったら、雨を浴びて楽しめ　アンチュール・ランボーの言葉だ。・・・なんかもうこれって逆にポジティブだよな。

俺もランボーの言葉に習って自転車で登校することにした。

ここ、武偵高こと東京武偵高校は、レインボーブリッジの南に浮かぶ人口浮島の上にある。学園島とあだ名されたこの場所は『武偵』を育成する総合教育機関だ。

そもそも武偵は凶悪化する犯罪に対抗して新設された国家資格で、武偵免許を持つものは武装を許可され逮捕権を得るとか警察に近い活動ができる。ただし警察と違って武偵は金で動く。簡単に言うと金の許す限りどんな仕事でもする『便利屋』みたいな仕事だ。

この東京武偵高校では、一般(インケスタ)の通常授業の他に武偵の活動に関わる専門科目を履修できる。探偵科、通信科(コネクト)、鑑識科(レピア)・・・この辺はまだ平和だが、俺が去年まで在籍していた強襲科(アサルト)や、俺の‘力’がバレてしまえば俺の意思とは関係無しに転科しないといけない仮面戦士(ライダー)科はまったく平和じゃない。

・・・・俺は体育館に向けて自転車をターンさせる。これなら始業式に間に合いそうだ。

こんな学校って言っても始業式から遅れるのは嫌だしな。・・・・内申点に響くし。

そんなことを考えていたら不吉な声が聞こえた。

「コノ　チャリには　爆弾　が　仕掛けて　ありやがります」

は？　・・・なんだよその脅迫文みたいな内容は・・・。

「チャリを　降りやがったり　減速しやがったり　すると　爆発

しやがります。」

あぁ、もしかしなくても『武偵殺し』の模倣犯って奴だな。・・・それよりも問題なのはさっきの言葉・・・『爆弾』だ。おいおい、何の冗談だよ。

さらに俺の自転車の後ろにはタイヤ付のカカシみたいな乗り物がついて来ていた。確か昔ＴＶで見たことあるぞ。たしか・・・『セグウェイ』とか言ったな。

「助け　を　求めては　いけません。ケータイを使用した　場合も　爆発　しやがります。　と言うか　とっと　と　爆発　しやがれです」

・　・なんか早く爆発しろって言われてるぞ、俺。

ご丁寧にセグウェイの上にはスピーカーとサブマシンガンが取り付けられている。加えて今更ながらサドルにおそらくプラスチック爆弾と思われる物体にやっと気づいた。

この爆弾の大きさを考えると、軽く自動車も木っ端微塵だな。ハハ！・・・マジやばい。死ぬかもしれないぞ俺。なんてこった。ハイジャックならぬチャリジャックだぜ？

どうする俺？たぶん‘力’を使えば爆発してもたぶん助かる。でも使いたくない。・・・背に腹は変えられないか。

俺はしぶしぶ腰に‘ベルト’をつけようとした。

「っ！！？」

その時だった。このありえない状況の中、さらに俺はありえないものを見た。

女子寮の屋上の縁に女の子が立っていて・・・

「（飛び降りた！？）」

飛び降りた少女は武偵高の制服に長いピンク色の髪のツインテールだった。その少女はパラグライダーを広げ、こちらに降下してくる。
「ばっ、馬鹿！くるな！このチャリには爆弾が・・・」

少女は黒と銀の拳銃を2丁抜くと・・・
「ほらそこのバカ！とっとと頭を下げなさい！」
ババババババ！

俺が頭を下げるより早く、少女はセグウェイを銃撃した。あんな不安定な状態で銃弾を命中させて、破壊する。なんて腕前だ。・・・にしても初対面の人にいきなりバカっていわれたな。いや俺が先に言ったけど・・・。
俺は少女を巻き込まないように第二グラウンドのほうに曲がると少女もついて来る。
「く、来るなって言ってんだろ！このチャリには爆弾が仕掛けられていて、減速すると爆発するんだ！」

「　バカっ！」

少女は俺の真上に陣を取ると俺をゲシゲシと蹴って来る。おいっ！痛いだろ！
「武偵高第一条にあるでしょ？『仲間を信じ、仲間を助けよ』　いくわよ！」

少女は気流をとらえてフワリと上昇する。つーか『いくわよ！』ってなんだ？俺を助ける気か？どうやって？
　ぶらん
　さっきまで手で引いていたブレークコードのハンドルにつま先を突っ込んだ彼女は逆さづりの姿勢になる。そしてそのまま、物凄いスピードで真っ直ぐ飛んでくる。・・・あぁなんとなくわかったぜ。

「マジかよ・・・」

こっちが気づいたことに気づいた少女は・・・

「ほらバカっ！全力でこぐっ！」

ああもうヤケクソだ！やってやるよ！

上下互い違いのまま、俺は少女と抱き合った。・・・なんか昔、こんな映画のシーンがあったな。男女が逆だけどな。

息苦しいぐらいに少女の下っ腹に顔が押し付けられた。・・・なんか甘酸っぱい香りがするな。そんなことを考えていると・・・

ドガアァァァァァァン！！！

俺の自転車は木っ端微塵になった。やっぱり本物だったんだな。

熱風に吹き飛ばされた俺たちは、桜の木にパラグライダーをもぎ取られて体育倉庫の扉に突っ込んでいった。何かにぶつかったような感じだが・・・よく分からないまま俺は意識を失った。

・・・・

・・・・・・・・・・

「うっ、・・・っ痛ッてぇ・・・」

気がついたら狭い箱のような空間に尻餅をついたような体勢で収まっていた。これは・・・跳び箱か？しかし何なんだ？身動きが取れないな。そして俺はすぐに気づいた。俺の上のモノに・・・

「ん？」

額と頬に何かやわらかいものがあたったような・・・

かくん。

俺にあたっていたのは

「っ！！」

先ほど俺を助けてくれた勇敢な少女だった。
何がどうなってこうなったかは知らないが、俺は彼女を抱っこしてこの中に入っていた。
ありえない。
ありえないぞ。
女子と密着しすぎだ。
俺の体の中の血が熱くなるのを感じた。やばい。こうゆうのは禁止なんだぞ、俺。
「・・・くっ・・・」

この子は俺の腹にまたがる姿勢なせいで息が苦しい。とりあえず姿勢を変えようともがいてみた。
「・・・・・？」

名札を発見した。始業式なんでほとんど書かれていないが名前に『神崎・Ｈ・アリア』と制服の上のところに。俺がそれから目を逸らすと
「・・・・！！」

少女のめくれ上がったブラウスに気づいてしまった。どうやら転がりこんで入った勢いで、ズレてしまったらしい。おかげで『６５Ａ↓Ｂ』といういわゆる『寄せて上げるブラ』が丸出しだ。
・・・もしこの胸が大きくて押し当てられていたらあぶなかった。
『あのモード』になってしまっていたかもしれない。
「へ・・・へ・・・」

「？」

「ヘンタイっ！！」

少女の・・・アリアの意識が目覚めた。すると
「サッ、サイッテー！」

ぽかぽこ　と腕が曲がったままの力の籠もってないパンチを連打してきた。
「お、おい、やめろ」

「このチカン！恩知らず！人でなし！」

どうやらアリアは自分のブラウスをめくり上げたのは俺だと思っているらしいな。
「ま、まて！違うっ！これは俺がやったわけじゃ、な！！」

ガガガガガガガガンッ！！
突然の轟音が体育倉庫を襲った。
「うっ！まだいたのね！」

アリアはその紅い瞳で跳び箱の外を睨みながら、スカートの中から拳銃を取り出した。
「『いた』って何がだ！」

「あの変な二輪！『武偵殺し』のおもちゃよ！」

『武偵殺し』？『変な二輪』？・・・さっきのセグウェイのことか！ってことはさっきのあの音は銃撃ってことか！体育の授業でも拳銃を使う武偵高では、跳び箱も防弾性で助かったぜ。・・・でもこんな追い詰められた状態でどうする？・・・やっぱり・・・使うしかないのか。

「あんたもっ、ほら！仮にも武偵高の生徒でしょ！」

「むっ、無理だって！」

あの‘力’でも使わない限りさっきの爆発で拳銃を失くした俺は何もできない。

「これじゃ火力負けする！向こうは7台いるわ」

7台・・・7丁のサブマシンガンがこっちに向けられているってことか！？

「／／／！！」

その時、予想外のことが起きた。

銃を撃つために無意識に前のめりになったアリアの胸が、俺の顔に押し付けられてきた。

ああ。

アウトだな。

知らなかった。女の子の胸は、小さくてもやわらかいんだな。

緊急時にも関わらず、俺はそんなことを考えてしまっていた。・・・自分の決めた禁忌（タブー）を破ってしまったことに気づいてしまっているから・・・。

ドクン、ドクン。

火傷しそうになるほど熱くなった俺の血液が、俺の中央に集まるのを感じる。

あぁ。なっちまった。ヒステリアモードに。

「・・・やったか・・・」

「射程圏外に追い払っただけよ。きっとすぐまた来るわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」

「・・・は？」
いきなり口調が変わった俺に、アリアは眉を寄せる。
そして俺はアリアをいわゆる『お姫様抱っこ』で持ち上げる。
「きゃっ！？」

「ご褒美にちょっとの間だけ、お姫様にしてあげよう」

いきなりお姫様抱っこされたアリアはネコっぽい犬歯の口を開きながら顔を真っ赤にすると俺は跳び箱の縁に足を掛けてバッ、と倉庫の端まで一足で跳んだ。
そしてアリアを積み上げられたマットの上に・・・ひょこん、と座らせてやった。
「な、なな、なに！？」

さっきまでの俺とは一変して俊敏な動きをする俺に、アリアは目をぱちくりさせる。
「お姫様はそのお席でごゆっくり」

「あ・・・あんた・・・どうしちゃったの？おかしくなっちゃったの？」

アリアのそんな声を邪魔するように再び銃弾が飛んでくる中・・・
俺は腰に‘ベルト’をつけて3枚のメダルを入れて一言・・・
「変身！」

そう言った。

La bambina da ARIA（後書き）

戦闘は次回ということで・・・

変身（前書き）

今回は短めな上、物語の都合上変身しての戦闘は短めです。

変身

「変身！」
ベルトのメダルを入れた部分を傾けて右腰についているものを右手に持ってスキャンすると、俺の周りを無数のメダルが包み込む。
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タットッバッ！！』
俺は上下3色。赤、黄色、緑・・・タカの視力、トラの腕力、バッタのジャンプ力を合わせ持つ戦士の姿、オーズ　タトバコンボへと変身した。

「さて、俺もおもちゃで遊ばせてもらうよ」

そう呟いた俺はセグウェイの待ち構える外にその身を出していく。
ご丁寧にもセグウェイどもは横1列に並んでいた。
ズドドドドドドドドドッ！
セグウェイは一斉にサブマシンガンを連射してくる。
しかしその銃弾は当たらない。
当たるわけがない。
‘今’の俺にははっきりと視えるからだ。
俺は‘トラ’に力を込めると鉤爪・・・トラクローを展開し飛んできた銃弾をすべて‘切り裂いた’。・・・もしも変身しないでよけなかったら頭を撃ちぬかれていたな。
「いい狙いだ。でも・・・」
俺の目・・・‘タカ’の黄緑色の複眼を紅く輝かせた俺は相手を完全に捉え・・・
「動きが単調で狙いやすい」

‘バッタ’の足で高く跳び上がり・・・
「セイヤァァァ！」

トラクローから放った金色に輝く‘斬撃’で退避しようとしていたセグウェイをさっきの銃弾のようにすべて切り裂く。
「ふぅ・・・」

正直・・・銃さえあれば変身しなくても‘ヒステリアモード’の俺でもなんとかなっただろうな。この程度の相手は（こんな雑魚なんか）話にならない。と・・・そんなことを考えながらも俺は体育倉庫に戻る。
アリアは今の出来事に目を丸くして跳び箱の中に入っていた。何でか怒っているようにも見える。俺は傾いているベルトを横にして変身を解いた。

「お、恩なんか着けないんだからねっ！私一人でもなんとかできたっ！これはほんとのホントっ！」

強がりながらアリアは跳び箱の中でうごめく。どうやら服の乱れを直してるらしいな。・・・だけどそれは難しいだろうな。さっきお姫様抱っこをした時に気づいたんだが、アリアのスカートのホックは爆風で壊れていたんだから。
「それに今のでさっきのことをうやむやにしようとしたってそうはいかないんだから！あれは強制わいせつ！れっきとした犯罪よ！」

・・・うわー。すっげぇこっち睨んでる。・・・跳び箱の隙間から。
「・・・アリア、それは悲しい誤解だ」

俺は制服のベルトをはずして跳び箱の中に投げ入れる。

「あれは不可抗力だ。理解してほしい」

「あ、あれが不可抗力ですって!?」

跳び箱の中から俺のベルトでスカートを押さえつけたアリアが出てきた。その姿は予想以上に小さい。・・・だいたい１４２センチくらいか？

「は、ハッキリとあんた・・・」

アリアは顔を真っ赤にしながらこっちを睨んでくる。

「あ、あたしのふ、服を脱がそうとしてたじゃない!!そ、それにあんた・・・む、

胸見てたあぁぁぁぁ!!これは事実!このっ!ヘンタイっ!!」

さらにアリアは赤くなる。耳まで真っ赤だ。

「あ、あんた、い、いったい何するつもりだったのよ!責任取りなさいよ!」

なんだよ、責任って。

「よし、アリア、冷静に考えよう。俺は高校生、今日から2年だ。中学生を脱がしたりするわけないだろう。年が離れすぎだ」

「あたしは中学生じゃない!!」

・・・まずいな。

どうやら説得を失敗したらしい。・・・そういえば女ってのは実際より年上に思われると怒ってしまうって橘先輩から聞いたことがあるな。・・・ってことは・・・

「・・・悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだね。助けられた時からそうなんじゃないかと思っていたんだ。しかしす

ごいな、アリアちゃんは」

勇敢な子だね。と付け加えようとしていたらアリアは顔を伏せて両ふとももに左右のてをつけた。

「こんな、こんな奴・・・助けるんじゃなかったっ！！」

バキュウン！

なんだ？！この子撃ってきた。しかも2丁拳銃で・・・

「あ　た　し　は　高　２　だ　！！」

えっ・・・マジ？・・・見えねぇ・・・。橘先輩の嘘つき！裏切り者っ！逆じゃないっすか！！

バン、バン、バン！！

俺はアリアの至近距離から撃ってくる銃弾をギリギリかわす。普段の俺には変身しない限り不可能なことだが、ヒステリアモードの俺なら可能だ。

カチッ！

良かった、弾切れか。これでなんとか・・・

「・・・んっ・・・やぁ！！」

くるっ！

体をひねったかと思うと、アリアは体格の差などものともせず俺を投げ飛ばした。

「うっ！」

この子、徒手格闘もできるのか？しかもやたら巧い。

とりあえず受身を取った俺だったが、勢いを殺しきれずに体育倉庫の外に転がっていった。

「逃げられないわよ！あたしは逃走する犯人を逃がしたことは1度もないんだからっ！・・・あ、あれ？あれっ？」

アリアはスカートの中をわしゃわしゃとさぐる。再装填する弾倉を探してるんだろうな。

「ごめんよ」

俺はさっき投げ飛ばされた際に予備の弾倉をスリとっておいた。そしてそれをあさっての方角へ放り投げる。

「もう許さない！泣いて跪いて謝っても許さない！！」

アリアは拳銃をしまうとセーラー服の背中に手を突っ込んで2本の刀を出してきた。どうやってしまってやがる！4次元ポケットでも持ってんのか？

「うりゃ！」

「っと！」

俺はなんとか彼女の刀をよけると・・・

「っわっ！？きゃっ！？

見えない相手にバックドロップを喰らったかのように、盛大にぶっ倒れた。その足元にはアリアの弾倉から抜いておいた銃弾と数枚の銀色のメダルが散らばっている。さっき弾倉を放り投げた時にばら撒いておいた物だ。

「こ、この・・・みゃあ！？」

あっ、またこけた。なんか漫画みたいに勢いよくこけたな。今のは、怪我とかなかったか心配だな。まぁ・・・でもせっかくのチャンス

だし今のうちに逃げよう・・・。
俺はＦＢＩの捜査官からも逃げ切れる自信があるヒステリアモードに対し、アリアは怒りと羞恥心で取り乱している。逃げ切れないはずがない。
「この卑怯者おぉぉぉ！ぜぇぇったい！風穴！開けてやるんだからぁぁぁぁ！」

後ろからそんな声が聞こえたが、俺は気にもとめない。俺が今、気にするべきなのは先ほどヒステリアモードの俺がやってしまった行動・・・‘変身’だった。

平凡な日々を過ごしたい俺、遠山キンジはこの日・・・
後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を振るえ上がらせる少女・・・『神崎・Ｈ・アリアと出会ってしまった。

『仮面戦士科（ライダー）』・・・ライダーシステムを持つ生徒は、この科目を取ることを義務づける。基本は徒手格闘、剣術、銃術などの強襲科と同じような実習訓練と共に自動二輪の運転の基本、応用を行う。仮面戦士科の生徒は在学中に自動二輪の免許を取得することを義務づける。尚、仮面戦士となる者は以下の決まりを守ること。
1、仮面戦士は自身の欲望のためにその‘力’を使わない。
2、仮面戦士は生身の人間に、その‘力’を使ってはいけない。
3、強くあれ。鍛えぬけ。ただし、力に飲まれるな。
以上の三つは国際協定で決められたルールである。その三つを決して破ってはいけない。

変身（後書き）

今回である意味やっとプロローグが終了。次回からはオリキャラが本格的に参戦させます。まぁ、何気にもうすでに2人ほど名前だけ出していたりしますけどｗ

ヒステリアオーズ（前書き）

目標は『3日に1回は投稿する！』です。可能な限りこのペースを維持したいです。

ヒステリアオーズ

俺は使ってしまった。あの忌々しい力・・・ヒステリアモードとオーズの力を・・・。

ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

まぁ、俺はメンドイから『ヒステリアモード』って呼んでいる。その特性は簡単に言うと性的興奮によって一時的にだが、反射神経とか思考能力やらを飛躍的に上げてしまう。これだけだったらなかなかいいものと考えるだろう。けどやはりデメリットは存在する。それはこのモードになってしまうとどうしても女性を守りたくなってしまう。・・・この体質を知っちまった中学の時の同級生は、俺をさんざんパシリまくった。

つまり俺は『正義の味方』に仕立て上げられていたってことだ。これがヒステリアモードのデメリット・・・なんつぅものを遺伝させられちまったんだよ・・・。

この体質は代々〝遠山家〟に受け継がれているものでありながら俺にとって、・・・兄さんを殺した忌々しい禁忌だ。

そして現在俺が新しいクラスの教室『2年A組』に向かいながら悩んでいる〝力〟が・・・ヒステリアモードの俺が変身した姿。・・・『オーズ』の力だ。オーズというのはそもそも・・・

「ハッピッバースデイ!!ディア!2年A組!!」

っ!!?なんだ?なんかクラスからもの凄いボリュームをしたおっさんの声が聞こえたぞ!?

俺は急いでクラスに入る。そこには４０代後半っぽい水色の紳士服スーツのおっさんと、ケーキの箱らしき物を大量に台車に乗せて１人１人に配っている女性がいた。・・・なんだこのおっさん？

「おっと、君にも渡さないとね。里中君」

「はい。・・・どうぞ。・・・仮面ライダーオーズ」

女性は他の人には聞き取れなさそうなくらいの声で俺のことを‘オーズ’と呼んできた。

えっ、なんだと!?・・・なんでもうオーズの力を知っているんだ?いくらなんでもはやすぎだろ?・・・そう思いながらも俺はケーキの入っていると思われる箱を受け取って席に着く。そしてさらに追い討ちをかけるように右隣の席には・・・

「はい、これ。さっきのベルト」

神崎・H・アリアがいた。・・・もうわけわかんねえよ。

「では、行こうか里中君」

「はい、会長」

そしてよく分からない２人が帰っていった時、左隣の席の峰理子が余計なことをしてくれた。

「理子分かった!分かっちゃった!これはフラグがビンビンに立ってるよ!」

理子はガタンと席を立ちながらそう口走る。そしてさらに・・・

「きー君はベルトをしていない。つまりベルトを取るような何かをしたってこと!つまり２人は熱っ熱の恋愛真っ盛りってことだぁぁぁぁ!!」

理子は両手でうさぎみたいな耳のポーズをしながらビシッと俺を指差してくる。何だその推理は・・・それになんだよそのポーズは。・・・ここはバカの吹き溜まり武偵高。そんなくだらない話でも大盛り上がりになってしまう。

「キ、キンジがあんな可愛い子といつの間に!?」

「影の薄い奴だと思ってたのに!?」

「くっそぉぉぉぉ!!ジェラ嫉妬おぉぉぉぉぉ!!」

「女子どころか、他人にも興味なさそうなのに!?」

「実は顔は良いから狙ってたのに!!」

「それでも・・・嫌いじゃないわっ!!」

新学期なのに気が合いすぎじゃねお前ら?そしてさらに俺の後ろの席の奴が俺の背中を突付いてきたので振り向くと・・・

「相棒・・・光を求めるな。どうせ俺らは日陰の住人なんだ・・・」

このネガティブなことを喋るのは、俺の友人Aの矢車双(やぐるま、そう)。1年の頃の依頼で時折一緒に依頼を受けていたが高1の最後の試験をボイコットしてからこんな風につるむようになった。境遇も俺と似ていてけっこう気が合う奴だ。こいつも仮面戦士なんだが・・・今は語らない。まあ、後々な・・・。

「まったくだ。日陰の住人のほうが何も抱え・・・」

ズキュゥゥゥゥン

突然の銃声でクラスが静まり返る。その銃を撃ったのは・・・顔を赤くしていたアリアだった。

「れ、恋愛なんて・・・くっだらない！」
チリチリーン

空薬莢が地面に落ちる音でさすがのバカ理子も静まって席に着いた。珍しく空気を呼んだな。
「全員覚えておきなさいっ！こういうバカなことを言うやつには・・・風穴あけるわよっ！！」
ズキュゥゥゥゥン

・・・本日クラスで2度目の銃声が響き渡った。

そして夕方
クラスのバカどもからようやく解放された俺は、自室のソファーに体を沈めながら考え事をしていた。
「・・・おかしい。俺はたしかにオーズに変身しちまったのに・・・何も問い詰められていない」

たしかに俺はアリアの前で・・・それも校内で変身をした。たとえアリアがその報告を教師達に知らせていなくても監視カメラなどで俺の変身がバレているはずなんだが・・・・・。

ピンポーーーン。

それにあのケーキのおっさんと、その秘書っぽい人。あの人達は一体なんなんだ？オーズのことをどこまで知っている・・・。

ピンポンピンポーン。

それにあの渡されたケーキの上に乗っているのってどう考えても・

・・・。

俺は家に帰って開けたショートケーキの上を見る。その上に乗っているオレンジのメダルと黄緑色のメダルをチラリと見た。・・・どっからどう見ても『コアメダル』じゃないかよ!!
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポーン。

あーーーー!なんだよさっきからうっさいな!!
誰かがさっきから俺の部屋のチャイムを連打している。居留守を使おうとしたが、どうやらダメらしい。
「・・・・・誰だよ」

俺はしぶしぶドアを開けると・・・
「遅いっ!あたしがチャイムを押したら5秒以内には出ること!」

「か、神崎っ!!」

制服姿の神埼・H・アリアがいた。俺は漫画みたいに目をごしごし擦って見開いてみたが、やっぱり彼女だった。どうしてこいつがここに!?
「アリアでいいわよ」

言うが早いかアリアはケンケン混じりで靴を脱ぎ捨てると、とてとてと俺の部屋に入ってくる。
「待て!勝手に部屋に入ってくるな!」

「そのトランクを中に運んどきなさい」

・・・ちくしょう。こいつ俺の話に聞く耳もたねぇよ。それに・・・トランクってなんでだよ。

俺は仕方なくアリアのトランクを部屋に引きずり入れていると、アリアは辺りを見渡していた。
「あんた、1人暮らしなの？」

そしてリビングの方までアリアは侵入していく。
「まあ、いいわ」

何がいいんだよ。
クルっと。
アリアは体を夕陽で染め、俺のほうを振り返る。
「キンジ！あんた、あたしのドレイになりなさい！！」

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・ありえん。
ありえんだろコイツ。

ヒステリアオーズ（後書き）

今回でアニメの一話目の終わりぐらいまでが終了。今回は、あの兄貴とか、会長とか、その秘書とかがなんとか出せました。

この物語にもちゃんとグリードや、ヤミーも出します！・・・それに出せるのならドーパントも・・・

欲望（グリード）（前書き）

次回の前書きからカウンザメダルをやろうかなって考えています。

欲望（グリード）

「ほら！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！無礼なヤツね！」

アリアは俺がさっきまで座っていたソファーに座ると、飲み物を要求してきた。・・・おいおい、無礼なのはどっちだよ。

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」

なんだその魔法の呪文みたいなコーヒーは。

まぁ、簡単には帰ってくれなそうなのは、なんとなく分かったので、とりあえずインスタントコーヒーをアリアに出してやった。

「？」

アリアは両手でカップを持つと香りを確かめた。

「これホントにコーヒー？」

どうやらインスタントコーヒーを知らんらしいな。

「今はそれしかないんだ。我慢しろ」

「ずず・・・へんな味。ギリシャコーヒーに似てる。・・・けど、違う」

「味なんかどうでもいいだろ。それよりもだ」

俺もコーヒーを啜ってようやく本題の話を始めた。

「今朝俺を助けてくれたことには感謝してる。そしてお前に対しての怒らせるような発言にも謝る。・・・でも、だからって、なんで俺の部屋に押しかける？」

口をへの字に曲げながら言うと、アリアは赤い瞳だけを動かしてこっちを見た。

「わからないの？」

「わかるかよ」

「・・・あんたならとっくに分かってくれると思ったのに・・・。まぁ、いいわ。そのうち思い当たるでしょ。」

よくねえよ。・・・まあいい、次の質問だ。あの変身のことで、どうしたか聞かないといけないな。

「おなかすいた」

アリアはいきなり話題を変えつつ、ソファーに体をしなだれかけさせた。俺はその女っぽい仕草に少し顔を赤くしながら視線をそらす。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

昨日まではカップのスパゲッティがあったのに、３つ右の部屋に住んでいる橘柵矢先輩に・・・「これ、食ってもいいかな？」って言われて勝手に食われた。・・・まったくあの先輩は余計なことばかりしてくれる。

「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」

「昨日まであったけど先輩に全部食われたんだよ・・・仕方ない、下のコンビニに買いにいくか」

「こんびに?・・・ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、いきましょ」

「じゃあってなんだよ、じゃあって」

「バカね。食べ物を買いにいくのよ。もう夕食の時間でしょ」

ダメだ。会話が噛み合っていない。

って夕食まで食っていくつもりかよ。はやく帰れよ!

「ねぇ、松本屋の『ももまん』って知ってる?あたし、食べたいな」

・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

武偵には気をつけなければいけないものが3つある。闇、毒、そして・・・女だ。

その3つ目に当てはまるアリアはコンビニでももまんを7つも買った。ももまんってのは1、2年くらい前に流行った桃の形をしたあんまんだ。しかも部屋に帰ってテーブルに着いたらすぐに食べ始め・・・残りは2個となっている。・・・こいつのどこにこんなに入るんだ?

俺は適当にハンバーグ弁当を買って食べながら『はやく帰れ』と目で伝えてみる。だがアリアはそんなことなど気にも止めずにうっとりとしながら、ももまんを頬張っていた。・・・ももまんってそんなにうまかったか?

「・・・っていうかな、なんだよドレイって」

「あんたはなんでか知らないけど仮面戦士科への強制所属が一時的に免除されているの。だから強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

なんだと！仮面戦士科の所属免除だって！・・・でも一体なんで？

「なんで俺は免除されているんだ？」

「それは私から説明しようっ！！」

ドンっ！！

ビクっ！？俺とアリアがいきなりの声に驚くと学校でケーキを配っていたおっさんと女性がズケズケと部屋に入ってきた。

「ちょ、あんた達何よ！？」

アリアもこの人達のことは知らないらしい。こいつケーキのおっさんの話、聞き流していたな。まあ、あんなデカイ声を聞き流したほうがすごいけど・・・

「そういえば朝も自己紹介をしていなかったせいであいさつが遅れたね。私は鴻上光世。鴻上ファウンデーションの会長だ」

「「えっ！」」

鴻上ファウンデーション

それは世界最多のライダーシステムを作る『スマートブレイン』に次ぐ巨大企業で、そのトップの人物は紹介されたことはほとんどない。ＴＶでもよくて名前だけだ。本人が画面に映ったことは一度もない。・・・だからこそ、そのトップであると言うこのおっさんがここに来たことに驚きを隠せない。

「とりあえず、あまりここにいられる時間もないので本題を言わせてもらおう」

俺とアリアはあまりの驚きでただ頷くことしかできなかった。
「遠山キンジ君！君は今、何枚の『コアメダル』を持っているだね？」

「こあ・・・メダル？」

アリアは「なにそれ？」とでも言いたげな顔をする。まぁ、こいつには後々説明してやるとして俺はポケットにしまっていたコアメダルを3枚取り出す。朝の変身に使った3枚・・・『タカコアメダル』・『トラコアメダル』・『バッタコアメダル』の3枚だ。
「っと、こいつらもあったな・・・」

そして朝、この3枚のメダルと‘ベルト’・・・オーズドライバーを取り出した引き出しからさらに2枚のコアメダルを取り出す。灰色のコア『ゴリラコアメダル』と水色のコア『タココアメダル』の2枚だ。
「そして今日、ケーキと一緒にあげたのも含め7枚のコアメダルだね？」

「あぁ、そうだよ」

「では、なぜ遠山家に君の持っていた5枚とオーズドライバーがあったのかはしっているかね？」

俺の家系・・・遠山家は代々オーズドライバーと5枚のコアメダルを受け継いできた。それも８００年間も・・・オーズドライバーの方は知らんが、メダルの方は聞かされている。
「ベルトの方は知れないけど、メダルの方は欲望から作られた化け物『グリード』を完全復活させないためと聞かされている」

「正解だ！そして事は起こった！！世界各地で封印されたグリード達が完全ではないが蘇ったのだ！！」

う、嘘だろ！？いつかは復活するって聞かされてはいたけど、よりにもよって俺の代かよ！！

「ねぇ、さっきから何の話をしているの？キンジのあの姿のことも気になるけど、その『グリード』って一体なんなの？」

「そのことについては後で遠山君から聞きたまえ」

おいっ！！俺に丸投げかよ！！いきなり人の部屋に入って来るは、俺に説明丸投げするは、このおっさん何気に酷いな。

「ムムム！・・・キンジ！！後できちんと説明しなさいよっ！！でないと、風穴！！」

アリアは俺に2丁拳銃を向けながら睨みつけてくる。こいつ事あるごとに俺に銃を向けてくるな。・・・マジでやめてほしい。

「それらの事情もあり遠山君には名前だけ『仮面戦士科』に所属してもらうが、授業の方はどこの学科でもいいようにしていい」

「なるほどね。つまりキンジは常に自由履修でいいってことね！」

たしかに話だけを聞けばこっちがいい条件に聞こえる。だけどこの話の裏は分かってる。・・・つまり俺に仮面戦士としての仕事・・・『怪人退治』をしろってことだ。

怪人退治

それは非人間の化け物・・・いわゆる‘怪人’って奴らと戦うことだ。怪人って言ってもいろいろなタイプがいて、世間では‘ドー

パント，と，ファンガイア，が有名だな。
　ドーパントってのは地球の記憶の１つを１０ｃｍくらいのＵＳＢメモリのようなアイテム『ガイアメモリ』ってのに内蔵させて、それを人体に差し込むことによって人間を記憶の化け物となった奴らのことだ。しかもガイアメモリには特殊な毒素があって人体に有害な上に依存性まである。下手をしなくとも麻薬より危険な代物だ。
　そしてファンガイアってのは世に言う『吸血鬼』と似ているが人間の血ではなく『ライフエナジー』・・・いわゆる生命力を吸い取る怪物のことだ。こいつ等は種族的に繁栄していて、稀にその中のはぐれ者が人間を襲うらしい。
他にも古代種族グロンギや人間の進化系オルフェノクやらがいるらしいがそこら辺はよく分からない。
とにかく俺は「授業は免除してやるから、怪人と戦え！」と言われている状態ってわけだ。

・・・・・・
・・・・・・
　その頃、俺の知らない世界各地では欲望の魔人達が動き始めていた。
　エジプト
「ハッ！８００年の間に人間の欲望ってのはずいぶん変わったな。より深く、より貪欲に」

　タカのような頭に赤と緑を基調としたクジャクのような体の色。そして強靭な爪を備えたコンドルのような脚で、顔の右半分は紫色の内皮が露出している怪人は闇夜のエジプトの空を飛んでいた。

　オーストラリア
「ふーん。なんかいろいろと変わったんだね。おもしろそうだ！」

ライオンのような鬣と鋭い爪、トラを思わせる細身な体に下半身の鎧ようなものがない怪人は、チーターのようなスピードでその広大な大地を駆けていた。

アフリカ
「あーれえー？ここ、どこだあー？」

ゾウの牙と鼻、サイの角を備えた頭部と、ゴリラのような屈強な腕とゾウのような脚部をした肩が不完全の怪人は、辺りを見渡すとぼけーっとし始めた。

地中海、深海２０００メートル
「どうやらやっと復活できたようね」

シャチを模した頭部、ウナギのヒレやタコの足を模した装飾のついたマントの胴体が不完全となっている女声の怪人は、深海をすいすいと泳いでいた。

日本　富士の樹海
「足りない！俺のコアメダルが足りない！！」

クワガタムシの顎状の角、カマキリの鎌や複眼の下半身が不完全の怪人は、バッタの如きジャンプ力で跳び回りながら辺りを必死に探しまくっていた。

欲望（グリード）（後書き）

読者のみなさんは原作のキャラたちからヤミーを出すとしたら誰からどんなヤミーがいいと思いますか？

アリアはアンクのヤミーにしようとまでは考えているんですけど・・・何かいい案はありませんか？

ヤミー（前書き）

カウンザメダル！
現在、オーズの使えるメダルは
タカコア
トラコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア
？？？？コア

ヤミー

えー。突然だが俺は部屋を追い出されている。

あの後鴻上のおっさんが帰ってすぐにアリアが、

「そういうことらしいから、あんたはあたしと強襲科の授業を受けなさい！そしてさっきも言ったけど、あたしとパーティーを組むの！」

と言わえたので反論したら・・・

「出てけっ！！分からず屋はおしおきよ！しばらく帰ってくるな！」

と怒鳴られたので俺は現在、男子寮真下のコンビニにいる。・・・

なんつぅ理不尽だよ。

まぁ、すぐに帰ってもあぶないと思うので俺は適当に漫画を立ち読みしてる。

「おや？遠山くんじゃないか。こんな時間にどうしたんだ？」

「げっ！？名護先輩っ！」

俺に話しかけてきたこの先輩は、名護啓祐（なごけいすけ）先輩。めんどくさい先輩パート2だ。この人も仮面戦士科に所属していて、武偵ランクはSなんだが・・・

「夜道はどこから狙われるか分からない。買うものを買ってはやく帰りなさい」

優等生すぎてめんどくさいんだよな、この人。まあ、それでもこの先輩を慕う生徒はけっこういて「名護さんは最高です！！」なん

て言われている。
「・・・はあ、まあ、そうさせて頂きます」
漫画も読み終わった俺は、正直この先輩から逃げたくなったので、適当にオルナミンDとポッキーを買ってから部屋に戻った。
俺は泥棒のような手つきで部屋の扉をソーっと開ける。
ん?
アリアの・・・人の気配がしない。リビング・・・いない。キッチン・・・いない。
よかった。とうとう帰ってくれたのか!
ちゃぽん。
風呂場のほうから音がした。見れば曇りガラスのドアの向こうでバスルームの電気がついている。
なんだよ。風呂場にいたのかよ。・・・なるほど、俺を追い出したのは自分が風呂に入りたかったからだな。
ピン、ポーン
俺に追い討ちをかけるように、あの慎ましいチャイムが聞こえた。
この鳴らし方は・・・白雪!!
いかん。こんな状況をあいつに知られたらどうなるか・・・冷静を保てよ・・・俺。隙を見せたら明日はないぜ。
「うおっ!?」
ヤバイ!!テンぱってつまずいちまった。さっき冷静にいくって決意したばかりだろ!!
「き・・・キンちゃんどうしたの?大丈夫?」
「あ、ああ。だいじょぶだ」

とりあえず体制を立て直して、あくまで冷静に玄関を開ける。そこには緋袴の巫女装束姿の白雪が、なにやら包みを持ちながら立っていた。

「な、なんだよお前。そんな格好で」

「あ、あのね。私・・・授業が長引いちゃって・・・キンちゃんにお夕飯をすぐ作って届けたくって、着替えないで来ちゃたんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよっ!!」

「いや、別にいいよ」

授業ってのはS科の授業だろうな。

超能力捜査研究科・・・通称ＳＳＲ。超能力なんて信じられないと思うが、俺からすれば『仮面戦士』のほうが信じられない存在だと思うぞ。ちなみに白雪はそこの優等生だ。

「ねぇ、キンちゃん。もしかして今朝の自転車爆破事件って・・・・もしかしてキンちゃんのこと？」

「あぁ、たしかに俺だ」

「だ、大丈夫!？怪我とかなかった!？」

「怪我はない。・・・でもオーズに変身しちまったよ」

白雪は・・・星伽家は遠山家の縁の家で、俺がオーズになることを知っている。そして今までそのことを武偵高に隠していたことも知っている。だから白雪にはこのことが言えたんだ。

「ってことは・・・今日から正式に仮面戦士？」

「まぁ、な」

かなり不本意だけどな。

「それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！私ぜったい犯人をコンクリ・・・じゃない、逮捕するよぉ！」

おい、なんかコンクリって聞こえたぞ。犯人をどうするつもりだよ？

「い、いいからっ！武偵高ではドンパチなんていつものことだろ！この話はこれで終わり！」

「は、はい。・・・えっと、はい」

白雪はまだ何か言いたそうだったが、コクリとうなずいた。

「・・・でも・・・今夜のキンちゃん、なんか・・・ちょっと、へンだよ？」

「へ、へン？どこら辺が？」

「なんかいつもより冷たいような気が」

ぎく！まずい。さすがＳＳＲ、カンが鋭いぞ。

「ちょ、ちょっとオーズのことがバレて気が立ってんだ。そ、それより用事はなんだ？」

「あ、あのね。これ」

白雪はもじもじと手に持っていた包みを渡してくる。

「タケノコごはん、お夕飯に作ってきたの。今、旬だし・・・それに私、明日から今度は恐山に合宿で、キンちゃんのご飯、しばらく

作ってあげられないから・・・」

「あ、ありがとな！よ、よし用事は済んだな。さ、さあ帰ろう！」

俺は包みを受け取ると、白雪はぽわーと嬉しそうな顔をする。

「い、1日に2回もご飯を作っちゃうなんて、なんか私、まるでお嫁さんみたいだね・・・って、何言っちゃってるんだろ私ったら！・・・キンちゃんはどう思う？」

「わ、分かった！分かったからお引き取りください白雪さん！」

「『分かった』ってつまり・・・私キンちゃんのお嫁・・・」

お願いだ。玄関の前で固まらないで、とっとと帰ってくれ。

ちゃぱぁ

水の音がバスルームから聞こえた。

「？　中に誰かいるの？」

「中に誰もいませんよ」

俺は思わず敬語になりながらも玄関から白雪を追い出す。すると白雪は目から光を失いつつ、無表情でこちらを見てくる。・・・こえぇぇぇ。

「キンちゃん・・・なにか私に隠し事してない？」

「な、ないに決まってるじゃないですか、白雪さん」

「・・・そう、よかった」

バタン

なんとか白雪を追い返せた。扉を閉める最後の瞬間あいつの目が笑ってなかったのは気のせいだ。気のせいに決まってる。・・・そうであってほしい。

っと！アリアの凶暴性から考えて、銃と刀は回収しておかないと・・・

そう考えて洗濯かごの前にしゃがんだ瞬間・・・

がらり

「「・・・・・」」

風呂場のドアが開いてアリア様がこちらを見た。・・・はたから見たら下着泥棒のように見える現在のポーズの俺を・・・

「こっのぉド変態っ！！」

「ぐおっ！？」

アリアの膝蹴りは俺の顔面に直撃し、俺の意識は一時シャットダウンした。

・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

意識が覚醒してベッドへと向かうと、俺のベッドの隣の2段ベッドにアリアが寝ていて、その床に『ここから入ってきたら殺す』と書かれていた。・・・ほんと、迷惑なヤツだ。

仮面戦士科の授業の代わりに強襲科の授業を受けろだと・・・ふっざぁけんな！俺は平和に暮らしたいんだ。とくに将来やりたいことはないが、武偵と仮面戦士だけは・・・この二つだけはイヤなんだ。

そう思いながら、俺は落ち着かない気分で眠りについた。

・・・・・
・・・・・・
「バカキンジ！ほら起きる！」
がすっ！

朝からいきなりの腹パンで目覚め、
ブンっ！
「何すんだバカっ！！」

顔面に蹴りが飛んできたので両手でなんとか止めた。・・・なんだこの朝？
「朝ごはん！出しなさいよ！」

「昨日も言っただろ！ねぇよ！」

ちくしょう。こんなことなら橘先輩にスパゲッティとか食わせなきゃよかったぜ。
「お腹すくじゃない！！」

「すかせ！このバカ！！」

「言ったわね！キンジの分際で！」

分際ってなんだ分際って。なぜそんな扱いを受けなきゃならないんだ。
「お腹がへったへったへったあああ！」

なんだこの駄々っ子は？
とりあえずアリアの駄々っ子パンチを避けながら着替えた俺は時計

を見た。
7時54分

マズイ！まだバイクが戻ってきてないから58分のバスに乗らないといけないのに・・・
「アリアっ！」

俺は未だに駄々っ子パンチをしてくるアリアのおでこを手で押さえつける。
「みゃうー！」

なんかこいつをいなすコツをつかんだ気がするな。・・・おっと、そんなことより本題だ。
「仕方ない・・・このままじゃ2人とも遅刻だ。急ぐぞ、アリア！」

「にゃ！？」

俺はアリアの右手をつかみ急いでバス停へと向かってなんとかバスに間に合った。・・・この時のアリアはなんか顔が少し赤くなってオドオドしていたな。どうしたんだ？こいつらしくない。

この時はまだ気づいてなかった。欲望（グリード）はすぐそこまで迫っていたことに・・・全く持って・・・。

・・・・・
・・・・・
俺が知るよしもない話・・・東京のとある銀行にて・・・
「おい！とっとと袋の中に金を入れろ！！」

いわゆる典型的な強盗の男は職員にお金を要求していた。すると・・・

「ちょうどいい。その欲望・・・開放しろ」

「えっ？」

チャリーン

緑色の昆虫のようなグリード‘ウヴァ’はいつの間にやら強盗の後ろに立ち銀のメダル『セルメダル』を額に出現させた投入口に投げ入れた。

「ヴぉおおおお」

『うわぁぁぁぁあああぁぁ！！』

その瞬間セルメダルを入れられた男からミイラ男のような怪人が出てきて辺りの者たちが慌て出す。当然その強盗もだ。

「カ、カ・・・カネ・・・」

ミイラ男のような怪人・・・白ヤミーは職員が袋に入れたお金を食べるように取り込んでゆく。

「さあ、欲望は十分だろう」

「っ！！」

ウヴァの発言と共に白ヤミーの外装ははじけ飛び、その姿は蜘蛛を思わせる者へと変わっていた。・・・いま現代に、ヤミーが誕生した瞬間だった。

「俺のコアメダルを探せ」

「おまかせください」

ファーストヤミー・・・ライダーＶＳクモヤミー

ヤミー（後書き）

前書き伏せているコアメダルはケーキの中に入っていた2枚です。
それと気づいている人もいるかもしれませんが、キンジにはライドベンダー以外にも変身前専用バイクのようなものがあります。イメージ的にはドラドンナイトのドラグサイクルような車体にしようと考えていますが、何かいいバイクの名前はありませんか？

強襲！クモ怪人（前書き）

またもや思ったよりもはやく仕上がりました。今回の内容はもしかしたら人を選ぶかも・・・

カウンザメダル！現在、オーズが使えるメダルは
タカコア
トラコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア
？？？？コア

強襲！クモ怪人

マズい。

このままじゃマズい。・・・俺の平和な日常はピンクの侵略者、アリアに破壊されつつある。このままじゃ俺の目標『平凡な一般人』なんてなれなくなっちまう。

というわけで俺は自由履修で探偵科の依頼を受けてきた。

武偵高では1時間目から4時間目までは普通の学校と同じように通常授業を行い、5時間目以降はそれぞれの専門科目に別れて実習する仕組みになっている。つまり俺が依頼で外にいく間、アリアは強襲科の実習をしているから逃げられるって考えだ。さあ、いざ外へ・・・

「キーンジ」

探偵科の専門棟を出た途端、待ち伏せしていたアリアに出くわしてしまった。最悪だ・・・俺の平凡は何処へ・・・orz

「なんで・・・おまえがいるんだよ」

「あんたがここにいるからよ」

答えになってねぇよ。

「強襲科の授業をサボってもいいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えているもんね」

アリアはアッカンベーをこちらに向けてくる。そうか！単位を揃えちまえば楽をできるのか！・・・そういえば矢車もやさぐれる前に単位を揃えちまっているからサボってても問題ないって言ってた

な。よし、今から単位を・・・いや、俺なんかにはそんな高単位なんて今からじゃ無理か。
「で、あんた普段どんな依頼を受けているのよ」
「おまえには関係ない。ただのEランク武偵にお似合いの、簡単な依頼だ。とっとと帰れ」

武偵高の生徒には各種実績と試験の成績に基づいて『ランク付け』が行われる。入試のとき、俺は白雪のせいでヒステリアモードになってたせいでSランクの格付けにされたこともあった。
「あんた、いまEランクなの？」
「俺にとっちゃランクなんてどうでもいいんだよ」

まあ、ただの俺でもオーズになればAランク位にはなれるんだが・・・やっぱりイヤだからな・・平凡から遠くなるのは・・・。
「ま、たしかにランクなんてどうでもいいけど。それより今日受けた依頼を教えなさいよ！」
「おまえに教える義理はない」
「風穴開けられたいの？」

イラッとした表情のアリアが拳銃に手をかける。・・・ホントこいつ事あるごとに銃を握ってくるな。癖か？
「今日は・・・猫探しだ」
「猫探し？」
「青海に猫探しにいくんだよ！報酬は1万。0，1単位分の依頼だ」

俺は探偵科の掲示板に張り出されていた中で一番安くて地味な依頼を選んでいる。それを正直に言えばアリアも興味を失ってくれると思ったんだが・・・ダメなようだ。ふーん、なんて言いながら俺の後ろをついて来やがる。

「ついてくんな！」

「いいから、あんたの武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくんな」

「・・・そんなにあたしが嫌い？」

「大っキライだ。ついてくんな」

「もっぺん『ついてくんな』って言ったら風穴」

風穴を開けられるのも嫌だったし、何よりもう言い返すのも面倒になってきたので仕方なしにそのままモノレールへと向かう。ホントはバイクに乗って移動したいんだが、武装科（アムド）の平賀文さんが「もっとおもしろく改造したい！」と最悪なことを言い出したが「特別に今回は安くしてやるから」と言われてノコノコ立ち去った俺も俺だ。俺ってけっこう現金だったんだな。

そんなことを振り返っている間に青海についた。かつて倉庫街だった青海地区は再開発され、今はオシャレな町になっている。

「で、猫探しっていうけど、あんたどうゆう推理で探すのよ」

「別に。猫の行きそうな所をしらみつぶしに探すだけだ。おまえもついてくるならなんか案でもだせ。なんかあるんだろ」

「ないわ。推理は苦手。一番の特徴が遺伝しなかったみたい・・・」

その時のアリアの顔は悔しさや悲しみよりもどこか切なさを感じさせる表情だった。

「そんなことよりっ！」

「？」

アリアは話題を変えるようにファーストフード店を指さす。

「お腹減った！」

「さっき昼休みだっただろ。なんか食わなかったのかよ」

「食べたけど減ったの！」

燃費の悪いやつめ。そんな幼児体系で育ち盛り並に食べる気かよ。

「なんかおごって」

「そしていきなり足を引っ張る気かよ」

・・・まぁ、俺も朝と昼を食べれてないし、ついでに買ってやるか。・・・また銃向けられるのもイヤだし・・・。

俺が適当に自分の分とアリアにギガマックセットを買ってくると、アリアはスタイルのいいマネキンを見ていた。・・・まさかあんなスタイルに憧れているのか？・・・ウン、暖かい目で見守ってやろう。

「？・・・っ！！き、キンジ！！ち、違うのよ！！あたしはスレンダーなの！これはスレンダーって言うのよ！」

・・・アリアそれはただ自分を追い込んでるだけだぞ。

そんなこんなで俺たちは近くの公園のベンチに座り、ハンバーガーを食べ始める。
「はりは（アリア）。この公園ではもう少し離れといたほうがいいぞ」
「はんへよ（何でよ）」
「見りゃ分かるだろ」
俺は飲み差しのコーラをベンチに置いて、視線で周囲を示す。・・・この公園ではあちこちに若いカップルがいるんだよ。海も近いし、景色も綺麗ということでデートスポットとしては有名なんだ。・・・この場所ならさすがのアリアも離れてくれるはず・・・。
「・・・う、うぅぅ！」
アリアは腕を組みながら歩くカップルをみてからこちらを向き赤面すると、慌てて1人で腕を組んだ。間違っても俺と腕を組みたくないらしい。
「ほらな、もう帰ったほうが・・・」
この時、俺のポケットに入っていたコアメダルが一瞬ちらついた。
「見つけたぞ。メダルの持ち主・・・」
どこからかそんな声が聞こえた気がした。
次の瞬間、このカップルムードどころか平穏なムードは一瞬にして崩れた。
「！？　伏せろアリア！！」
異変に気づいた俺は咄嗟にアリアを庇うような体制になる。
「っ！！」
ドンドンドンドン！

どこからともなく無数に物凄い飛んできた‘何か’は周囲の噴水などを破壊した。
「怪我はないかアリア？」
「えぇ、平気」
幸い俺たちには当たっていないようだ。それにしてもこの飛んできたものは何だ？まるで蜘蛛の糸を束ねて、鋭くしたような・・・
「キンジ、今は辺りの人を非難させるのが先よ。２回目の攻撃が飛んでくる前にね」
辺りを見ると先ほどまでのムードは完全に崩れ逃げるのに必死な人々や、腰を抜かして動けなくなっている人々がいた。・・・どうやら奇跡的に負傷者は誰もいないようだ。
「くそ、どこまで俺は平凡に恵まれないんだ」
使いたくはないが・・・もしかしなくても、この蜘蛛の糸のような攻撃は人外によるもの、『怪人』の仕業だ。怪人には俺なんかの実力じゃ仮面戦士ならないかぎりでしか対処できないしな・・・
俺は人々を非難させ終わるとオーズドライバーを懐から取り出して腰に巻く。
「アリア、他に残っている人はいるか？」
「大丈夫。この公園にはもういないわ・・・っ！？キンジ！！２度目が来たわよ！」
またもやどこからともなく蜘蛛の糸のような攻撃が飛んでくる。
今度は前の攻撃よりも精度がいい。畜生、さっきの１回目の攻撃は警告で誰にも当てなかったってことかよ！

「くっ！」

「キャっ！？」

俺とアリアはなんとか攻撃を避け続ける。そんな時、俺の視界にあるものが映った。

「にゃー」

「ね、猫？」

猫、それも依頼で探していた猫だ。なんでこんな所にいやがる！

そう思った瞬間、その猫に蜘蛛の糸のような攻撃が迫った。

「猫がっ！」

アリアはもう助けられないと悟ったようで猫から目を瞑る。・・・俺も助けられない。まだ変身もしていないんだからどうにもできない。・・・それでも俺は走り出した。

「キンジ！何やってんのよ！」

「・・・手を伸ばせば助かるかもしれない命に手を伸ばさないなんて、後で死にたくなるほど後悔する・・・」

あの時、俺も船に乗れていたら・・・迷いなくオーズの力を使えたら・・・そんなかつての後悔がフラッシュバックしてくる。

「それがイヤだから俺は・・・俺は・・・」

ヒステリアの俺でも、今の俺でも、どっちの俺でもこの思いは変わらない。

「にゃー」

とどけ、とどけっ！

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺は変身しながらも走る。

「手を・・・伸ばすんだ」

回転受け身をしながら猫を左腕で抱えた俺は、空いている右手のトラクローで飛んできた攻撃を切り裂いた。

「・・・キンジ・・・」

驚いた表情のアリアは俺の抱えている猫を見てフッ！と笑った。

「反撃、いけるわね」

「・・・あぁ。ふざけた野郎に一発決めてやんないとな」

俺は猫をアリアにパスして両腕のトラクローを展開させ複眼を紅く輝かせた。

強襲！クモ怪人（後書き）

ノーマルキンジでも、ヒステリアキンジでも芯になるものは変わらない。そんな考えで作ったのがこのお話。

クモ系の怪人はあまり体術勝負をせず糸を飛ばしたりして戦うイメージがあったのでクモヤミーの前半戦はこうして見ました。後半戦はようやく直接対決！明日か明後日には更新できるようにがんばります。

・・・ノーマルキンジがそれなりにできる人だったり、クモヤミーの最初の攻撃がこんなんだったり・・・今回はやっぱり人を選ぶかも・・・

激闘！クモ怪人！（前書き）

なんとか更新できました！ノーマルキンジ＆アリアＶＳクモヤミ－後半戦！・・・やっぱり戦闘描写って難しいですね。

カウンザメダル！現在、オーズが使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア
？？？？コア

激闘！クモ怪人！

「・・・・・」

俺はタカヘッドの‘超視力’を発動させた紅い複眼で辺りを見渡す。この能力で見えない相手なんて・・・

「見つけたぞクモ野郎」

まず、いない。

近くのビルの屋上に怪人を見つけた俺はバッタレッグに力を込め、バッタを思わせる足‘バッタ脚’に変質させる。すると近くに猫を放してきたアリアは「自分も連れて行け」と言いたげな目でこちらを見ていた。

「・・・はぁ、跳ぶぞアリア」

「ええ！」

俺はアリアを背負うと怪人のいたビルへと跳んだ。人間ままではできない１００メートル越えジャンプも、この‘バッタ脚’なら可能なんだ。

「来たか、メダルの持ち主・・・お前の持っているコアメダルを寄越せ！」

怪人・・・この見た目からして蜘蛛だな。そしてメダルのことを言ってるってことはグリ・・・いや、ヤミーか。つまりクモヤミーってことだな。

「アリア、こいつが人間の欲望から生まれた怪人・・・ヤミーだ」

「・・・人間の・・・欲望から・・・」

アリアは複雑そうな顔をする。・・・コイツにもなにか思い浮かぶところがあるんだろうな。・・・そしてそれが俺をドレイと呼んでいる理由・・・なのか？なんかアリアだし違うかも知れない。

「俺の変身するオーズはそうゆう欲望の怪物を倒すもんなんだよっ！」

俺は数年前、オーズドライバーの封印を解いてしまった。先祖代々、誰も封印を解くことができなかったのに・・・この俺が・・・その時はかなり騒がれたな。

オーズはグリードを封印できる唯一の戦士とも記されている。けれどもオーズは欲望の怪人を倒すために欲望を纏った魔人とも記されてる。だから遠山と星伽の人達は俺を勇者のように称える人もいれば、俺を悪魔扱いする人もいた。

そんな扱いを受けるのがイヤで俺はこの力を隠し続けていたんだ。

「セヤっ！」

「グオッ！？」

それでも俺は・・・今、この使いたくない力を使う。・・・力を使うのを迷ってしまって兄さんを見殺しにしてしまった時のように、後悔しないために・・・。

「セヤァァァァ！！」

トラクローの鋭い爪で何度もクモヤミーを切りつけたことで辺りにはセルメダルが散らばる。セルメダルはヤミーを作り上げている全て。このまま攻めればヤミーを倒せる！

「おのれ、オーズ！・・・これならどうだっ！！」

バッシュッ！

クモヤミーは蜘蛛の巣のようなネットを飛ばしてきて俺はそれに捕らえられる。くそ、身動きできねぇ。

「何やってんのよバカキンジ！そんなもの切り裂いてとっとと出なさいよッ！」

バンバンバン

「くっ！？」

アリアはクモヤミーに威嚇射撃をして注意を惹きつけてくれた。ありがたいぜ。・・・そうだな・・・こんな邪魔なのはとっとと切り裂けばいいんだよな。

「・・・っと！」

俺は新たにおっさんから貰った黄緑色のコアメダルを取り出す。

「こっ、のぉ！！」

「人間ごときがヤミーに傷なんぞつけられんっ！」

「うっさい！あんたは蜘蛛らしく黙ってなさいよ！！」

・・・アリアはうまく注意を俺から逸らさせてくれたいるな。
その間に俺はオーズドライバーからトラのコアメダルを抜き取り、そのメダルが入っていた場所に黄緑のメダルを入れる。
「文字通り、切り裂いてやるよ！」
俺は変身のときと同じような動作で再度メダルをスキャンする。
『タカ！カマキリ！バッタ！』
「ハァァァァッ！！」
タカとトラとバッタのタトバからトラの換わりにカマキリに変わった姿・・・タカキリバへと変わった俺はカマキリアームを展開して、両腕の逆手に持った，カマキリソード，でネットを切り裂いた。
「ほら、出たんならとっとと戦いなさい！」
「・・・わかってるつーの」
俺はカマキリソードで何度もクモヤミーを斬り付ける。このまま決めてやるか。
「おのれ・・・おのれぇぇぇぇえええ！」
クモヤミーは後方に跳び下がるとまたもや蜘蛛の糸シュート（俺、命名）を飛ばしてくる。・・・こいつさっきから中距離か遠距離の攻撃ばっかしてくるな。そして近づいた攻撃は避けれてない。
「コアメダルを・・・コアメダルを寄越せぇぇぇぇぇ！！」
「っ！！」

俺は体を回転させながら蜘蛛の糸シュートを斬り裂く。それでもクモヤミーは近づいてこないってことは・・・。

「気づいているわよねキンジ」

「あぁ、あのヤミーは回避能力が高くない、だから接近戦をすればいいんだろ」

「わかってるじゃない。なら次で決めちゃいなさい！」

勝利を確信しているアリアの顔はどこか勝ち誇っている。・・・なんでおまえが勝ち誇るんだよ。

「・・・決めるぜ」

『スキャニングチャージ！！』

俺はオーズドライバーのメダルを再スキャンして、各部位に力を溜める。

「ハァァァァァッ！」

「グオッ！？」

タカヘッドで狙いを定めた俺は一気に近づいてカマキリソードで斬り上げをして上に飛ばす。

「っセイヤァァァァァァ！！」

そして上に飛ばしたクモヤミーへとスキャニングチャージで極限まで高めたバッタレッグの跳び蹴りを決めた。

「グ、グァァァ！！すみませんウヴァ様ァァァァ！！」

クモヤミーは最後の断末魔の後爆発し、セルメダルになって辺りに散らばった。

「やったじゃないキンジ！」

「あぁ、そうだな」

俺は変身を解いてアリアのいる所へと歩みよる。・・・そしてそこでようやく思い出した。・・・今回の目的を・・・

「なぁ、アリア・・・一つ、聞いていいか？」

「？・・・何よ」

それは今回の依頼・・・

「あの猫・・・どこ行った？」

「それならあの辺に・・・」

アリアはビルのフェンスに寄りかかりながら猫を放した辺りを指さしたので、俺はその辺りを見る。

「・・・いないぞ」

少なくとも‘今’の俺には見えない。・・・ヒステリアの俺や、オーズに変身しているおれなら見えると思うけどな・・・

「・・・と、とっとと探しなさいバカキンジっ！！」

・・・結局、３０分ほど俺が必死に辺りを駆け巡って猫を捕まえた。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「ふぅ、つかれたな」

「まあまあがんばったじゃない！褒めて上げる」

「にゃー」

俺はベンチに座って缶ジュースを飲んでいる。アリアは猫を膝の上に乗せてなでている。・・・褒めるときは猫じゃなくこっちをみろよ。それじゃ俺じゃなく猫が褒められているみたいだろ。

「・・・人の欲望って・・・どうしてできちゃうのかしらね・・・」

アリアはそう言いながらジュースを飲む。

「そんなんは人それぞれだろ。・・・それよりアリア・・・一つ言いたい」

「？」

「それは俺のコーラだ」

ぶふっぅ！

アリアは盛大にコーラを吹き出した。そしてさらに顔を赤くして・

・・
「こ、このヘンタイっ！！」
「ぐはっ！？」
いきなりぶん殴ってきて俺はベンチから吹っ飛ばされた。・・・・
さっきの猫といい、今のパンチといい・・・理不尽だろ。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・
俺が戦っている最中、俺の知らなかった話。
「っセイヤァァァァァァ！！」

俺がクモヤミーにとどめをさす瞬間を見ている者達がいた。

「へぇ、オーズがこの時代にもいたんだ。・・・どう思う？・・・・
アンク」

1体は黒い豹を思わせる姿の怪人‘カザリ’。
「・・・ハッ！知るかよ・・・」
バサッ

そしてたった今飛び去った真紅の不死鳥のような神々しい外観の怪人‘アンク’の2体は自分達の脅威になるかもしれない俺の戦いをしっかりと見ていた。

激闘！クモ怪人！（後書き）

クモヤミーがあっさりと退場。やっぱり戦闘描写って難しいですね。戦闘描写が下手な上短くてごめんなさい。

それでも立ち直って次回は平成ライダーといえば定番のたまり場となる店のお話。・・・仮面戦士も2，3人出します。

次回　クスクシエ

・・・もうちょっと内容が進んだら登場人物紹介でもかこうかな

クスクシエ（前書き）

今回は全体的に顔見せのような話。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは
タカコア
トラコア
カマキリコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア

クスクシエ

猫探しの依頼とクモヤミーの戦闘を終えた翌日。

「そんで今日はキンジはどの依頼を受けるの？」

「・・・どうするか・・・」

現在、俺は掲示板とにらめっこ・・・もとい、アリアから逃げられる依頼を探している。それも可能な限り、学外に出て行かない依頼を・・・

「とっとと決めちゃいなさいよ」

「ああ、分かってる」

正直なところ昨日がたまたま怪人に出会っただけと言いたいが・・・やっぱり可能なかぎり変身はしたくないしな・・・。

依頼一覧

・港区　連続ビル放火事件の調査　探偵科又は仮面戦士科　1，7単位　受注

・西通り地区　アイドル警護　強襲科　1単位

・西通り地区　銀行強盗事件　探偵科　1，2単位　解決済み

・港区　連続大量殺人仮面戦士の逮捕　仮面戦士科　3，2単位

・・・一番上の連続放火事件、情報科（インフォルマ）によると溶岩や炎を操るドーパントの犯行らしい。・・・すでに受注されてんな。・・・まぁ、ヤミーは怪人として割り切れるがドーパントは人間だと考えちまって戦いたくないけどな・・・。

・・・二番目、アイドル警護か・・・まぁ、これならやってもいいが・・・強襲科の依頼だし何があるか判んないからな・・・やめとこう。

・・・3番目、は解決済みだし論外だな。となると残ってんのは・・・連続殺人仮面戦士の依頼か。犯人の名前は‘朝倉　赳’（あさくらたけし）仮面戦士の力を悪用しているらしいが・・・やっぱり怪人はともかく人間と戦う気はないから受けたくはない。

「早く決めないと風穴」

アリアさん・・・いくら決めるのが遅いからって銃を向けないでくださいませんか？

「ちょっとそこのキンジくんとピンクのお譲ちゃん。よければ手を貸してぇぇぇ」

「「？」」

依頼に悩んでいるとどこからかそんな声が聞こえてきた。・・・俺とアリアが振り向くとそこには・・・

「うぅぅぅぅっ！？」

積み上げられたダンボール箱で顔が隠れてすっごい怪しくみえる誰かがいた。

「お願い・・・はや・・・く」

「は、はい」

「・・・しょうがないわね」

・・・これが俺とアリアが通い詰めることになるクスクシエのオー

ナー、白石千代子、（しらいしちよこ）さんとアリアの初顔見せだった。

・・・・・

・・・・・・

「いやぁぁ、ほんっとうに助かったわ！ありがとね、お2人とも」

「いえいえ」

俺とアリアは千代子さんの持っていたダンボールを持って第3食堂クスクシエまできていた。それにこれで時間も潰せて外の危険な依頼を受けなくていい雰囲気になっている。助かったのはこっちですよ千代子さん。

「キンジ・・・ここは？」

「アリアはここに来たことがないのか？」

「わ、悪い」

まぁ、別に悪くはないけど・・・強襲科のアリアなら入ったことがあると思っただけだ。

「ここは第三食堂『クスクシエ』強襲科と仮面戦士科の間にある食堂だ」

武偵高には第1から第3までの食堂がある。一つがＳＳＲと装備科の学科棟の間辺りにある第一食堂、和食料理『猛士』，２つ目が探偵科と情報科の学科棟の間の第二食堂、西洋料理『ＡＧＩＴΩ』，そしてここが強襲科と仮面戦士科の学科棟にある第三食堂、多国籍

料理『クスクシエ』，だ。他の食堂は和風洋風と分けられているが、ここは留学してきた生徒たちが故郷の料理を食べたいと言う強い要望で2，3年前に建てられた場所らしい。そのおかげもあってうちの生徒たちにはかなり人気なんだ。俺も去年強襲科にいた頃はよくここに来ていたな・・・安いし。

「けっこう人気なんだぞ。友達に聞いたことなかったのか？」

「と、友達なんていないわよっ！」

まぁ、お前は実力が他の奴らとかなり違うから話かけづらいしな。

「ここは多国籍料理で世界のいろいろな料理が食べれる場所だ。覚えていても損はないぜ」

「よかったらきてねアリアちゃん！」

「か、考えておくわ！」

アリアは，多国籍料理，という単語に反応したように見えた。・・・たぶん自分の故郷の料理かなんかを思い出したんだろうな。

・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

「理子」

クスクシエを出て2時間後、俺はアリアをなんとか撒いて女子寮の前の温室に来ていた。温室とはつまり大きいビニールハウスで、今の時間帯はちょうど人けがない。だから秘密の打ち合わせをするに

は便利な場所なんだ。
「キーくぅーん」
バラ園の奥で理子がくるっと振り返る。なんか今回の制服もいろいろついているな。
「あいかわらず過剰な改造制服だな。なんだその白いふわふわは」
「これはねー武偵高の制服を白ロリ風アレンジだよ！いいかげんキーくんロリータの種類ぐらい覚えようよー」
「断る。それよりもここでのことはアリアには秘密だぞ」
俺は鞄からアリアをなんとか撒いて買ってきたゲームを取り出す。
「うー！らじゃー！」
びしっ！
理子は気オツケの姿勢になり、両手で敬礼のようなポーズを取る。
そして俺がゲームの入った紙袋を差し出すと、理子は獣が獲物を喰らうかのように荒々しく袋を破いた。
「うっっっわー！『しろくろっ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよぉ！キターーぁぁぁ！」
この１５禁のゲームとその服装から分かる通り、理子はオタクだ。
しかし俺にこれらを買わせたのは、店員が彼女を身長で中学生と思ったので売ってもらうことができず、代わりに俺・・・ということになったのだ。・・・すっごい恥ずかしかったし、店員からは変な性癖の人のように見られて泣きたくなったぜ。
けれどこれもアリア対策のためだ。・・・最低限なんであいつは俺をドレイにしたがるのかぐらいは知っておかないとな・・・。

「あ、これとこれはいらない。理子はこうゆうのキライなの」

あれ？すべて理子の望みの物だと思ったんだけどな・・・

「『2』とか『3』とか付くものはキライなの！個々の作品に対する侮辱。嫌な呼び方」

ワケが分からない。

「まぁとにかく、それをやるから依頼した通り『神崎・H・アリア』について調べたことをしっかり話せよ？」

「イエス。ユア、ハイネス！」

理子は右腕を斜め上に掲げてそう叫んだ。・・・なんだその台詞とポーズ？

・・・・・・

・・・・・・・・

そのころ俺がもうすぐ嫌でも知ることになる話。

「・・・異常なし・・・だな」

西通り地区　アイドル警護の依頼を受けていた強襲科に所属する生徒‘後藤信太郎’（ごとうしんたろう）は右手に拳銃を構えながら辺りを見渡していた。そこにもう一人武偵高の生徒がやってきた。

「おーい！後藤ぉぉ！休憩しようぜ！」

「何を言っている鑑。休憩時間まであと5分もあるんだぞ」

こいつの名前は‘鑑　新’（かがみあらた）。仮面戦士科の生徒

だが周囲が個性的なせいでいまいちパッとしない生徒だ。今回は仮面戦士科の授業をサボって後藤についてきたようだ。
「いいじゃんか5分ぐらいはやくたって、別に問題ないだろ?」
「・・・お前は仕事をなんだと思っているんだ?」
2人がそんなことを言っている時、事件は起きた。
ドオォォォォン
「「っ!?」」
爆音とともに壁の一部が崩れると、そこから何者かが現れた。
「メズールぅ!カザリぃ!アンクぅ!どぉこだあぁぁぁぁ!あとわぁえぇと・・・ウヴァぁぁぁ!」
銀色の重量あふれる怪人、ガメル、は何かを求めて駄々をこねる子供のように暴れ始めた。
「おい、後藤!何なんだ?あの怪人は。ドーパントか?」
「いや・・・たぶん違うだろう。それでも暴れる異常は戦って止めないといけない」
「あぁ。援護は頼むぞ。・・・来い!ガタックゼクター!」
どこからともなくやってきたZECT開発の自立変身端末の、ガタックゼクター、は鑑の手の中に納まる。そして彼はそれをすぐさま腰に巻いている銀色のベルトにスライドさせるようにセットする。
「変身っ!!」

『ＨＥＮＳＩＮ』

「いくぞぉぉぉぉ！！」

鑑は青い重装甲の仮面戦士・・・仮面ライダーガタック　マスクドフォームに変身し、ガメルへと挑んだ。

・・・この事件がキッカケにより世界に新しく現れた怪人として『グリード』の名前が響き渡ることになった。

クスクシエ（後書き）

解決済みとなっていた銀行強盗は以前のヤミーの親が引き起こした事件です。

今回はクスクシエというサブタイながらもメインはあまりそこじゃなかったりする話です。次回からはそろそろバスジャック編へと突入できるようにしたいです。

・・・・・それにしてもようやく出せたな・・・後藤さん。

一件（前書き）

今回がようやくアリアのアニメでいう2話の終わりのお話。・・・
いくらオリジナルの話が混ざってるとはいえ微妙なペースだな・・

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
カマキリコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア

一件

マンションに帰ると、窓から見渡す『学園島』を夕日が金色に染めていた。
『太平洋上で発生した台風1号は、強い勢力を保ったまま沖縄上空を北上しています』
ニュースを垂れ流す液晶テレビが、この部屋の心地よさを際立たせる。ああ、いい部屋だよ。ここは。
今、ここに女子がいることを除けばな。

「遅い」

ぎろ、とソファーから頭を傾けてこっちを見てきたアリアは、暇つぶしに枝毛でも探していたのか鏡を持っていた。
「・・・さすがは貴族様。身だしなみにもお気を遣われていらっしゃるわけだ」
俺は洗面所に向かいながら、ちょっとイヤミな口調で言ってやった。

「・・・あたしのことを調べたわね？」

アリアはどこか嬉しそうに言ってくる。

「ああ。双剣双銃（カドラ）のアリアって2つ名があって、今まで1人も犯罪者を逃がしたことがないんだってな」

「へぇ、そんなことまで調べたんだ。・・・でもこのあいだ、1人

逃がしたわ。生まれて始めてね」

「へぇ。すごいヤツもいたものだな。誰を取り逃がしたんだ？」

あの情報好きの理子にも間違いがあったなんだな。と考えた俺はコップに水を汲み、うがいを始める。

「あんたよ」

ぶっ！

俺は盛大に水を噴き出した。お、俺？・・・って、ああ、あのチャリジャックの後のことかよ！

「あれは不可抗力だっつってんだろ！」

「うるさいうるさい！　とにかくっ！」

ビシッ！

アリアは顔を真っ赤にしながら俺を指さした。

「あんたなら、あたしのドレイになれるかもしれないの！強襲科に戻るか、仮面戦士科に行くかをして、この前の中途半端な戦い方じゃなく、あたしから逃げたあの実力をもう一度見せてみなさい！」

「あれは・・・あの時は・・・偶然、逃げられただけだ。それにあの・・・ヤミーとの戦い方が俺の全力だ。・・・俺はEランクの大したことない男だよ。残念だったな、帰ってくれ」

「ウソよ！あんたの入学試験の成績、Sランクだった！」

ぐ。そうきたか。あんときヒステリアモードだったしなぁ。

「つまりあれは偶然じゃなかったってことよ！それに中途半端だっ

たけどヤミーとの戦いはAランクはある実力はあったわよ！」

それは・・・あれだ。スペックだと思うぜアリアさん。

「と、とにかく・・・今はムリだ！出てけ！」

「今は？ってことは何か条件でもあるの？言ってみなさいよ。協力してあげるから」

俺はその言葉に思わず赤くなってしまう。もちろんアリアはヒステリアモードのことを知らずに言ったんだろうが・・・こっちからすれば爆弾発言なんだぞ！・・・要するに俺を『性的に興奮させる』って意味なんだからな！

「教えなさい！その方法！ドレイにあげる賄い代わりに、手伝ってあげるわ！」

い、言えねぇ！口が裂けても言えねぇ。

ずずぃ！

あと数センチという辺りまでアリアの顔が迫ってきた。

「うっ！」

ヒステリアの血を感じ始めた。・・・ちくしょう・・・オーズはしょうがないと考えられる。必要なときもあるからな・・・それでもあのモードだけは・・・あれにだけはなりたくないんだよ！

俺は無意識にアリアを押しのけた。・・・こうなったら仕方ない。

「・・・1回だけだ」

「一回だけ？」

「一回、一件だけ、お前と一緒に事件を解決してやる」

自身の手駒を欲しがっているアリアはヒステリアモードの俺と出会い、取り逃がしたことで『こいつならドレイとして使えるかもしれない』と思ったんだろうな。

・・・だったらヒステリアじゃない通常モードの大したことない俺の実力を見せ付けてやるよ。

「いいわ。あたしも時間がないし、その一件で見極めてあげる」

「・・・どんなに小さくても一件だぞ」

「OKよ!そのかわりどんなに大きくても一件よ」

「分かった」

こうなりゃやってやるしかない。

「手抜きなんかしたら風穴開けるわよ!」

「ああ。約束する。全力でやってやるよ。いざとなったら変身もする」

・・・通常モードの俺の全力でな。

こんな約束なんてしなければよかったのかもしれない。まさかその一件があんなにも大きいものになるなんて・・・

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「ウオォォォ！」
ドンドンドンドン

「う、うう」
俺がアリアと約束を交わしている時、ガタックはガメルに両肩のガタックバルカンと呼ばれる大口径火器からイオンビーム光弾を連射していた。

「このまま押し切ってやる！キャストオフ！」
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＳＴＡＧ　ＢＥＥＴＬＥ』

ガタックのマスクドアーマーが飛散すると頭部左右に倒れていた２本の角‘ガタックホーン’が側頭部の定位置に収まり、ガタックは‘戦いの神’の二つ名を持つ真の姿、ライダーフォームへと変わる。

「これで・・・どうだぁぁぁぁ！！」

ガタックはライダーフォーム専用の双剣‘ガタックダブルカリバー’を交互に連続で振るう。・・・しかし相手はグリードの中でも最も硬い身体の怪人『ガメル』だ。あまり効いているようには見えない。かといってまったく利いていないというわけでもなく・・・
「痛いなぁぁぁぁもうっ！」

逆鱗に触れてしまった。

「うわっ！？」

「っ何だこれは！？」

ガタックと後藤は突然宙に浮かび動揺してしまう。これが重量系グリードであるガメルの能力『重力制御』だ。

「お前ら！いいかげんに、しろっ！俺、みんな探してる。ジャマ、するなっ！」

ガタックと後藤は宙に浮かばされたままなため身動きが取れずにいると、勢いよく重力がガメルに向かって引き寄せられた。

「お前ら、つぶれろっ！」

ガメルは引き寄せた後藤を殴ろうとする。この勢いでは生身の人間は確実に死んでしまうだろう。

「後藤ぉぉぉぉぉ！！」

「！？」

ガタックはとっさに後藤を庇いガメルのパンチが直撃する。

「がはっ！・・・効いた・・・な。こ・・・れ」

「鑑っ！！」

ガタックはかなりのダメージを受けて変身が解けてしまう。いくら仮面ライダーが普通の人間よりも丈夫だからといっても今の攻撃はかなり効いているはずだ。そしてガメルの重力が消えると2人は地面に落とされる。

「邪魔したからだっ！もう、邪魔、すんなっ！」

ガメルはのしのしとその場を立ち去っていく。

「おい後藤・・・一体何なんだ・・・あの怪人・・・うっ！？」

鑑は上半身を起こして立ち上がろうとしたがすぐ崩れ落ちる。

「無理をするな鑑。・・・少なくとも俺たちの知っている怪人ではないな」

『知りたいかね？』

「「？」」

２人の後ろには鴻上の映像が映った液晶を持った里中と呼ばれていた女性がいた。

『あの怪人のことを知りたいのかね？』

画面越しの鴻上は２人に問い詰める。・・・２人に答えは１つしかない。

「「・・・」」

コクリ

２人は鴻上の言葉に頷いた。

『素晴らしいっ！！それが君たちの『知りたい』という欲望だぁぁ！』

画面の中の鴻上は両腕を盛大に広げながら叫ぶ。すると２人の近くに黒いリムジンが止まる。

『警備の時間は終了。さぁ、その車に乗りたまえ。君らの手当てをしてから、彼らのことを教えてあげよう』

「どうぞお乗りください」

こうして後藤たちはリムジンに乗り込み『グリード』の存在を知ることとなり、さらにそれが武偵高・・・世界というふうに知れ渡っていくこととなった。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「くそっ！おのれオーズ！」

学園島の開発中の工事現場・・・前回自分の差し向けたヤミーがこの時代のオーズにやられたウヴァは近くのコンクリートを切り裂くなどをして八つ当たりしていた。

「こうなれば俺が直接出向いてオーズからメダルを奪いとってやる！」

これが俺たちと欲望（グリード）を交差させる始まりの事件となった。

一件（後書き）

次回からはようやくアニメでいうアリア3話の話。そして次回はとうとうキンジのオリジナルバイクが登場します！

『普通』の・・・（前書き）

初登場！キンジ専用バイク！
けどその後の話を気に入らない人が出てくるかも・・・

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
カマキリコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア

『普通』の・・・

強襲科、通称『明日無き学科』生存率は９７，１パーセント。つまりこの学科の１００人に３人は生きてこの学科を卒業できない。

「はぁ・・・」

俺は装備品の点検のためにも強襲科に射撃訓練を受けに来たんだが・・・

「おーうキンジ！お前はここに帰って来るって信じていたぞ！」

「キンジぃぃぃ！やっと死にに帰ってきてくれたか！」

「間抜けなお前はとっとと死んでくれるよな！」

・・・バカどもに俺は捕まってしまっていた。どうやってこいつらを振り切ろうか・・・そういえば「振り切るぜっ！」ってのが口癖な仮面戦士科の２年がいるらしいな・・・あったことないから名前は知らないけど。

そんなことを考えながら強襲科の学科棟から出ると・・・

「キンジ！」

アリアが壁に寄り掛かっていた。

「じゃ、じゃあなキンジ！」

「とっとと死ねよ～」

俺の周りに集まっていた強襲科の連中はアリアを見かけるといそいそとこの場を離れていった。

「あんた、人気者なのね。少しびっくりしたわ」

「こんな奴らに好かれたくはない」

本音である。

「あんたって人好き合い悪いし、ちょっと根暗っぽいところもあるけど、強襲科のみんなはどこか・・・あんたに一目置いているところがあるのよね」

それは俺の入学試験を覚えているからだろうな。ヒステリアモードになっていた俺の戦闘試験のことを・・・

「あたしなんかここでは実力差がありすぎて誰も近づいてこないのよ」

「なるほど。名前通り『独奏曲』（アリア）ってことか。そんで俺と組んでデュエットにでもなるつもりか？」

アリアはくすくすと笑ったなぜかは分からないが・・・本当に嬉しそうに・・・

「あんたも面白いこと言えるじゃない」

「面白くないだろ」

「面白いわよ？」

俺はアリアの笑いのツボが分からないまま武装科のガレージへとやってきた。やっと俺のバイクの整備が終わったと聞いてきたからだ。

「平賀さーん。どこだぁぁぁぁ」

「ここなのだ～」

アリアよりも小さい武装科の天才少女・・・平賀文さんは近くの車の下から四つん這いで出てきた。

「頼んでいたバイク・・・『オーラインクロス』は？」

「それならあそこにあるのだ！」

えっへんと胸を張ったポーズだが、彼女ははっきり言って小3ぐらいの体格だからあまり偉そうに見えない。それにしてもあいかわらず特徴的なしゃべり方だな。

「こいつか？・・・・おお！」

俺はバイクにかかっていたブルーシートを捲るとそこには紅く輝く大型自動二輪がどっしりと置いてあった。

「キンジ、このバイクは？」

「俺の愛車『オーラインクロス』だ。２週間前に不調で整備してもらってたんだ」

そういえば改造したって言ってたけど・・・どんなふうに改造したんだろうな。ちょっときになってきた。

「で、改造って何をしたんだ？」

「えっとねえ、いろいろ弄って最高時速は仮面戦士の乗るバイクぐらいの３２０キロは出せるし、最高時速からのブレーキ時にはパラシュートが発射されて、減速できるようにしたのだ」

３２０キロって・・・そんなスピードめったに出さないぞ。普通は絶対に出さないけれど・・・。

「まぁ、いい。そんでいくらなんだ？」

「こんくらいなのだ！」

平賀さんは俺に請求書を見せてくる。・・・・・・なんだこのボッタクリ金額は・・・普通の学生じゃまず払えないぞ。つーかサラリーマンの年間ぐらいの整備代って・・・

「どうしたのキンジ？固まっちゃって」

そりゃこの金額を見れば大抵の学生は固まってしまいますよアリアさん。

「・・・平賀さん、まけてくれた？」

「それでも４割まで減らしてるのだ」

「・・・分割でお願いします」

こうして俺の通帳の大部分を等価交換の対価にバイク『オーラインクロス』が戻ってきた。・・・俺、こんな財産でどうやって生活すればいいんだ？

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「ねぇキンジ、これは何？」

「これはＵＦＯキャッチャーだろ」

俺とアリアは現在ゲームセンターに来ていた。本当は俺１人で行こうとオーラインクロスに乗ったんだが・・・エンジンをかけたすぐさま、アリアが鮮やかな身のこなしで飛び乗ってきた。降ろそうとしたら「風穴開けるわよ」と言われたので不本意ながらもコイツを連れてきたってわけだ。

「・・・・あー・・・・！」

べた。

アリアはＵＦＯキャッチャーの中のライオンっぽいヌイグルミをガラスに張り付きながら眺めていた。

「どうした？珍しいのか？」

「・・・かわいー・・・」

なんだコイツ・・・鬼神の如き強さを誇るアリアじゃないぞ・・・

「やってみるか？」

「やり方が分かんない」

「・・・教えてやろうか？」

こくこくこく

アリアはこっちを向いて首を縦に振った。・・・なんだこのアリアは・・・調子が狂うな・・・俺が「ボタンを押せばいい」とだいたいを言葉で教えてやるとアリアはさっそくＵＦＯキャッチャーに１００円を入れた。

ウィーン・・・ぼと

・・・狙いが浅かったようでクレーンからあっさりヌイグルミは落ちてしまう。

「い、今のは練習よっ！！」

ぼと！　ぼと！　ぼと！

その後も何回もアリアはチャレンジしたが失敗する。

「今度こそ本気本気本気ほーーーんーーーきーーー！」

とうとうアリアは３０００円も使ってもだめだった。・・・こいつには無理だ。・・・そろそろ助け舟を出してやるか。

「どけ」

俺はアリアを押しのけて１００円を入れる。

ウィーン

「・・・っ！」

ごくり

アリアの喉を鳴らす音が聞こえた。

「おっ！」

ヌイグルミのタグと尻尾が絡み、２つのヌイグルミが上がってき

た。どうだ・・・どうだ？
２つのヌイグルミが穴に落ちてくれた。
「やった！」

「っしゃぁ！」
パチっ！

嬉しさのあまり無意識のうちに俺とアリアはハイタッチをしてしまった。・・・なんでこんなやつと息が合っちまったんだ？

「ま、まあキンジにしては上出来ね！」

アリアはヌイグルミを鷲づかみにして取り出してきた。タグのところを覗くと『レポナン』と書かれていた。・・・なんだそりゃ。

「キンジ、１匹あげる。あんたの手柄だからご褒美よ」

「お、おう」

その時のアリアはあまりにも『普通』のかわいい女の子に見えた。

・・・
・・・・・
・・・・・・・
「なんで麻里は俺に振り向いてくれないんだ。・・・それにあの木場っていう男・・・邪魔なんだよ・・・俺を好きにならない人間は」

学園島のとある裏通り・・・スマートブレイン製のサイドカー‘

サイドバッシャー，にまたがっている仮面戦士科の生徒，草加　誠人，（くさかまさと）は不満を感じていた。
「ほう、ちょうどいい欲望だ。戦力として使わせてもらおう」
「うっ！？」
「アァアァア邪魔ぁジャマァァ」
ウヴァはたまたま見つけた彼の欲望を見逃さずに白ヤミーを作った。するとヤミーは手当たり次第に辺りの物を壊しまくる。
「なんだお前・・・」
『スタンディンバイ』
草加は自身の変身するライダーベルトを巻きつけるが・・・
「貴様の欲望、気に入った。こいつはお前自身の欲望だ。こいつはお前の欲望を解放してくれる」
「・・・・」
スッ
ウヴァの言葉にベルトを外す。
「俺を好きになってくれるヤツは大好きだ・・・」
「アアアァァァ！！」
草加の言葉で白ヤミーの外装が弾ける黄緑色のカマキリ虫のようなヤミー‘カマキリヤミー’となった。
「きみを倒すのはやめてみよう・・・きみは何なのかな？」

この瞬間、草加はグリード側に就いた。

・・・・・・

・・・・・・・

朝、俺は武偵高にオーラインクロスで向かっていた。・・・するといつもと違うあることに気がづいた。

「・・・今日はバスを見ないな。」

いつもならこの時間帯はここら辺を通るはずなのにな。

プルルルッ

俺の携帯電話が鳴った。

『キンジ今どこ!』

掛けてきたのはアリアだった。

「どうしたんだ?アリア」

「事件よ!すぐ来なさい!」

とうとう俺とアリアの約束の一件が始まってしまった。

『普通』の・・・（後書き）

草加ファンの人にはごめんなさい。けれど彼はウヴァ個人についたわけではありません。グリード自体を気にいったのです。ちなみに彼以外にもイ・ウー側やグリード側につくライダーはいますのでそのときもご勘弁を・・・

バスジャック　前編（前書き）

今回はいよいよバスジャック編！バスジャックは前編、後編にしようと思います。
カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
カマキリコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア

バスジャック　前編

「おいアリア！いったい何が起こったんだ？」

俺はアリアが来いと言ってきた女子寮へと急いでやってきた。するとすぐさまアリアは俺のバイクにまたがった。

「バスジャックよ。７時５８分にあんたのマンションに止まってた武偵高に向かうはずだったバスが」

な、なんだって！それって武藤や矢車が乗っているバスじゃんかよ！

俺はバイクを走らせながらも会話を続ける。

「犯人は車内にいるのか？」

「分からないけど、たぶんいないでしょうね。バスに爆弾が仕掛けられているわ」

爆弾・・・その単語を聞いて俺はチャリジャックを思い出す。

「キンジ、これは『武偵殺し』。あんたの自転車に爆弾を仕掛けたヤツと同一犯だわ」

『武偵殺し』だと！？それってこのあいだ白雪が話題にしていた・・・。

「そいつは逮捕されたんじゃなかったのか」

「それは真犯人じゃないわ」

「なんだって！それはどうゆうことだ？」

俺はバイクを加速させながらもアリアを問い詰める。

「武偵憲章1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』！それ以上の説明はないわ」

くそっ！よく分からんが時間がないことはよく分かった。

「ああ、やるよ！やりゃいいんだろ！」

俺がヤケクソ気味にバイクのアクセルを踏むと、アリアはかすかに笑った。

「キンジ、これが約束の事件ね」

「大事件だな。ツイてないぜ」

「約束は守りなさい。あんたが実力を出してくれるのを楽しみにしてるんだから」

「買い被るなよ。俺はしょせんEランクだからな」

「安心しなさい。もしもあんたがピンチになったら、あたしが助けてあげる」

俺は最大加速を出しているオーラインクロスに少しビビリながらも運転し、なんとかバスが見えてきた。

「キンジ！飛び移るわよ！変身しなさい！」

「ああ！変身っ！」
『タカ！トラ！バッタ！タッ！トッ！バッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』
バサッ

オーズへの変身とともにバイクに急ブレーキをする。すると小型のパラシュートが後ろから飛び出てしっかりと止まれそうな勢いとなった。・・・平賀さん、良い仕事をしてくれたな。
「アリア跳ぶぞ！」

「ええ！」

俺はアリアを片腕で担ぐと一気にバスの上へと跳ぶ。そしてこのままじゃバスの上にうまく着地できないのでバッタのコアメダルを外し、代わりにタコのコアメダルをセットする。
『タカ！トラ！タコ！』

俺の変身するオーズの足は柔軟性と移動範囲に優れる水色の足‘タコレッグ’に変わる。この足にはタコのような吸盤がついていて壁とか天井に張り付いたりすることができるから、バスから落ちることはない。
「よっと！」

「とりあえずは着地成功ね」

「オォォォォォォズゥゥゥゥゥ！！」

「「！？」」

バスに着地をするといきなり黄緑色の怪人がバスの上に飛び乗ってきて俺たちの前に立った。このカマキリのような怪人、おそらくヤミーだな。だけど何で？

「・・・アリア爆弾を頼む。俺はこいつを倒す」

「分かったわ。本気で戦りなさいよ！」

「分かっている」

俺はトラクローを展開して中国拳法のような構えを取る。するとカマキリヤミーはいきなり2本の短剣で斬りかかってきた。・・・しかも首元を狙って・・・

「あぶねっ！」

咄嗟に俺はしゃがんで避けるが今度は斬撃のような攻撃が飛んでくる。

「うわっ！？」

避けられなかった俺は転がってバスの上から落ちかけるが、なんとかタコレッグのおかげで踏みとどまった。そしてまたすぐにカマキリヤミーは俺に追い討ちをしてくる。

「ぐっ！？」

「きみの力はその程度・・・ということでいいのかな？」

俺はカマキリヤミーに首を掴まれて立たせられる。けっこうピンチなのについ「なんだこいつ？草加みたいなことを言ってくるヤミ

ーだな」と考えてしまう。

「ハッ！なら・・・とどめを刺していいということなのかな？」

「今、相棒を笑ったな？」

カマキリヤミーが俺にとどめを刺そうとした途端、俺の足元・・・バスの中からかすかにそんな声が聞こえた。すると・・・

「・・・はぁ、変身・・・」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

ドカァァァン

俺の足元のバスの天井が吹き飛び、１人の仮面戦士が跳び出てきた。

「俺も笑ってくれよ・・・」

仮面ライダーキックホッパー・・・俺の友人の矢車が変身する暗く輝く緑のアーマーに赤い複眼の飛蝗がモチーフになっている仮面戦士だ。・・・本来は弟の矢車駿‘やぐるましゅん’の変身するパンチホッパーとでダブルホッパーだったらしいんだが・・・とある事件の後、行方不明になったらしい。・・・・それから矢車はやさぐれたって武藤が前にいってたな。

「相棒を・・・放せ・・・」

ドカッ

「グフッ！？」

「っと！」

キックホッパーはすごい速度でカマキリヤミーを蹴り上げ、俺はカマキリヤミーの手から解放される。そしてすぐさま援護に来ていた武偵ヘリの扉が開き、狙撃科（スナイプ）のレキがライフルをバスに向けていることに気づいた。

レキとはアリアより頭半分ほど大きい少女でありSランクの武偵で去年俺が強襲科にいた頃に何度か組んだことのあるヤツだ。

「　私は1発の銃弾」

バン

ドォォォォン

バスの後ろの道路で何かが爆発、炎上した。

レキはどうやらバスの外側についている爆弾を銃弾で剥がしてくれているらしい。そしてバスが停止すると窓からアリアがひょっこりと頭を出してくる。

「キンジ！これでもう爆弾はなくなったわ！いい加減倒しちゃいなさい！！」

「ああ！」

『スキャニングチャージ！』

俺はアリアの言葉でオーメダルのパワーを全身に溜める。そしてキックホッパーも必殺技の構えを取ろうとしたその時だった。

「2対1は卑怯だろ」

「キンジっ！避けなさい！」

「え？なん・・・うわっ！？」

アリアの声にも反応しきれないまま、いきなり何者かに攻撃された俺は、バスの上から吹き飛ばされて変身が解けてしまった。そして俺の前に緑色の怪人がやってきた。

「オーズ！俺のコアメダルを寄越せ！！」

オーズのことを知っている。しかもコアメダルを求めている。なんだこの怪人・・・そういえば昔、実家に住んでいたころ聞いたことがある。たしかこいつは・・・昆虫系グリードの・・・

「・・・お前がグリードの『ウヴァ』ってヤツか」

「ああそうだっ！！」

「くっ！」

俺はウヴァの振りかざしてきた爪をギリギリ身体をひねって避ける。変身したいのは山々なんだが・・・さっきの攻撃でオーズドライバーがどこかに飛ばされちまった。

「相棒っ！！」

「きみの相手はこっちなんだけどな？」

「・・・邪魔するな！」

カマキリヤミーはキックホッパーを妨害するように攻撃している・・・くそ！大ピンチだぞ・・・

「コアメダルを・・・俺のコアメダルを寄越せぇぇぇ！！」

「バカキンジ！何やってんのよ！」

アリアはこっちにオーズドライバーを持って向かってくる。しかもどうやらベルトは中身は抜けずに取れただけだったようで・・・メダルが入ったまま・・・

「俺の、俺のコアメダルぅぅぅぅ！！」

ウヴァはベルトに自身のコアメダルがあると考えたようで、アリアに向かって駆け出して爪を振りかざした。

「アリアぁぁぁぁ！！」

俺は咄嗟にウヴァの前に立ちアリアを庇う体勢をとった。これでアリアは大丈夫だ。・・・そう思った。

「キンジっ！！」

『もしもあんたがピンチになったら、あたしが助けてあげる』・・・その言葉の通り、アリアは俺を助けてくれた。・・・自身がウヴァの攻撃を受ける形で・・・

バスジャック　前編（後書き）

カマキリヤミーの性格改変。ペットは飼い主に似るようにヤミーの性格も『親』に似る形にしてみたら・・・あの親切なカマキリさんはどこへ・・・

バスジャック　後編（前書き）

バスジャックの後編です。・・・戦闘はそれほど長くないです。

カウンザメダル！現在オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
カマキリコア
バッタコア
ゴリラコア
タココア
？？？？コア

バスジャック　後編

「アリア！アリアァァァ！」

アリアは俺をウヴァの攻撃から庇って倒れた。俺はその倒れたアリアを見て立ち尽くし放心状態になってしまっていた。おい・・・なんで俺なんかを庇うんだよ・・・何もできない俺なんかを・・・なんで・・・

「ふん！人間がグリードに勝てるはずないだろ！」

「・・・・・」

俺は何も考えないまま意識がないアリアの手からオーズドライバーを抜き取り、腰につけて3枚ともメダルを変えて変身していた。

『ライオン！ゴリラ！バッタ！』

おっさんからもらったオレンジ色のコアメダル『ライオンコアメダル』は黄金のアーマーに青い複眼の頭部‘ライオンヘッド’として・・・『ゴリラコアメダル』は腕力と強靭さに優れ、ガントレット状武器‘ゴリバゴーン’を纏った腕‘ゴリラアーム’として・・・さらにバッタレッグを俺は体に纏う。・・・オーズの亜種形態‘ラゴリバ’だ。

「おおおおおおお！！」

「ぶおっ！？」

気づけば俺はライオンヘッドを‘ライオネルフィッシャー’で輝かせながらウヴァを全力でぶん殴っていた。そしてようやく自分の身体がどうしてこんな行動をしたのかを理解した。

・・・俺の中ではアリアと出会い、変身して・・・ヤミーと戦って「こんな俺でも誰かのためになれる。誰かを助けることができる」・・・そう考えていた。でも実際は違った。誰のためにもなれてない。誰も助けられてない」・・・・そんな自分が許せなかったんだ。・・・あの時から俺の現実は何も変わっていないのかよ！

「はぁぁぁぁぁ！」
ドカ！ドカ！

「ぐはっ！？」

「うぁぁぁぁぁぁ！」
ドカ！ドカ！

「がはっ！？」
チャリン、チャリン

俺は光らせては殴る。光らせては殴る。強烈な光でウヴァの動きを封じながら殴る。そしてその行動を続けているとウヴァから3枚のコアメダルが落ちてきた。するとウヴァの胴体の鎧のような部分がセルメダルとなって散った。

「くそっ！このままではっ！・・・覚えていろ！！」

このままではあぶないと思ったウヴァは高く跳び上がってどこかへ去っていった。
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

俺を解くとその場に崩れてしまった。・・・何もできない自分がただ悔しくて・・・。

それを見たキックホッパーは・・・

「くっ！相棒！！いいかげん・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

高く跳び上がり・・・キックの体勢を取る。

「消えろっ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーがカマキリヤミーに放ったとび蹴り‘ライダーキック’は・・・

「困るんだよ・・・俺の欲望を止められちゃ・・・」

ババババババ！

「・・・ちっ・・・」

いつの間にかやってきていた金のラインに紫の複眼のライダーの乗る大型2足歩行メカの大量のミサイルに阻まれた。

「・・・草加・・・何のつもりだ？」

キックホッパーはそれなりにダメージを受けながらもなんとか着地して草加・・・仮面ライダーカイザを仮面の中で睨む。

「何のつもりもないかな？・・・強いていえば欲望に忠実になった・・・ただそれだけさ」

「お前・・・仮面戦士のルールを忘れたのか？」

『仮面戦士は自身の‘欲望’のために力を使ってはいけない』・・・キックホッパーはカイザにそのことを問い詰める。

「あんなのあってないようなルールだね。俺は俺の道をいく・・・よかったらきみもおいでよ」

「・・・・・」

カイザとカマキリヤミーがどこかへ去っていくのを・・・キックホッパーは追いかけることができずに立ち竦んでいた。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

武偵病院に入院したアリアの傷は・・・浅かった。運がよかったとしか言いようがない。アリアを襲ったウヴァの爪は、ただアリアの額をかすめただけで、重傷には至らなかったらしい。脳震盪を起こしたアリアはＭＲＩも撮ってもらったが、脳内出血もなく、外傷だけですんだようだった。

パッチン・・・パッチン

アリアのいると聞いた個室から妙な音が聞こえた。不審に思って覗いてみると、アリアが手鏡で額の傷を見ていた。医者が言うには一生消えない傷痕がついてしまったらしい。

パッチン・・・パッチン

アリアは涙目で手鏡を見ながら、何度も何度も髪留めを直していた。アリアは自分の額を気に入っていたから・・・辛いだろうな・・・。畜生、俺はまた・・・判断を誤ったんだ。・・・あの時のように・・・

「・・・アリア、入るぞ」
コンコン

俺は今来たフリをしつつ、ちょっとドアから離れてドアをノックする。
「あ、ちょ、ちょっと待ちなさい！」

部屋の中からガサガサ、と慌てた様子の物音が聞こえた。
「・・・いいわよ」

言われて俺が入ると、アリアは早業で包帯を頭に巻き直し、銃の整備をしていたフリをしようとしていた。

「お見舞い？」

アリアは露骨に嫌そうな顔をする。

「怪我人扱いしないでよ。こんなかすり傷で入院なんて、医者は大げさだわ」

「レッキとした怪我人だろ。その額の傷・・・」

「傷が何だっていうのよ」

「・・・それ、傷が残るんだろ」

「だから何?別に気にしてないわよ。あんたも気にしなくていい。」

アリアの表情は誰がどう見ても気にしている顔だった。

「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。あたしはそれに従っただけ。別にあんただから助けたんじゃないわ」

「武偵憲章なんて・・・そんなキレイ事なんてバカみたいに守るなよ」

「・・・あたしをバカですって。キンジの分際で。でも・・・そうね。あんたみたいなバカを助けたあたしは、バカだったかもね」

俺は・・・こんな雰囲気もアリアと話すのがイヤになったのでアリアのベッドに報告書を置いてやった。

「・・・今回の報告書だ。探偵科と鑑識科が徹夜で調べてくれた。結論から言うと・・・犯人に繋がりそうな証拠は一切見つからなかった」

「でしょうね。『武偵殺し』はケタ違いに狡猾なヤツよ。証拠なんて残す筈がないわ」

「・・・・」

「用がすんだ?なら帰って。一人にして」

「ああ、帰るよ!」

なぜかは分からんがアリアの一声、一声に腹が立った俺は病室を去ろうとする。

「何よ・・・・」

ドアノブに手をかけると後ろからそう聞こえた。

「あたしはあんたに期待していたのに・・・現場に連れて行けば、また、あの時みたいに、実力を見せてくれると思ったのに！」

ふざけんな！なんだよそれ！

「お前が勝手に期待したんだろ！俺にそんな実力はない！それに・・・俺はもう武偵をやめるんだよっ！なんでお前はそんなに勝手なんだ！」

つい、俺は声を上げて振り返ってしまう。

「勝手にもなるわよ！あたしにはもう時間がない！」

「なんだよそれ！意味わかんねーよ！」

「武偵なら自分で考えれば！？あたしに・・・あたしに比べればあんたの武偵をやめる理由なんかどうせ大したことないんだから！」

『大したことない』・・・俺はアリアの言葉に本気でキレそうになる。・・・それでもなんとか耐えた。・・・そしてようやく分かった。俺がこいつにイラつく理由を・・・。

コイツは俺に似てるんだ。

他人には言えないものを背負って、武偵という道を、真逆に突き進む形で・・・

「とにかく・・・俺は武偵をやめるんだ。学校も、来年からは一般の高校に移る」

「・・・・・」

「聞いてるのか？」

「分かった。分かったわよ・・・あたしが探していた人は・・・あんたじゃ、なかったんだわ」

こうしてバスジャック事件はそれぞれの思いが困惑する形で終わりを告げた。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
俺が病院を出て行く頃、俺の知らないところで欲望は渦巻いていた。
「お前がグリードって怪人だな？」

「えぇ、そうよ」

バスジャックの真犯人は水槽系グリード‘メズール’にコンタクトを取っていた。
「私の欲望でヤミーとか言う怪人を作れ・・・」

「あら？人間が自分からヤミーを作ってくれなんて初めてね。・・・

・おもしろいわ！作ってあげようじゃない」

メズールは犯人にセルメダルを投入した。

・・・この出来事が俺の運命をさらに変えていく出来事に繋がるとはその時の俺は考えていなかった。

そしてもう1つ俺の運命を変える出来事の前触れが起きようとしていた。

「遠山の者がオーズの力を・・・か。ハッ！おもしろい、俺の欲望のために利用させてもらおうか」

鳥の王‘アンク’は地面に足をつけると金髪の人間へと姿を変えて・・・俺の元に迫って来ていた。

バスジャック　後編（後書き）

今回でようやくアニメの3話の話が終了。そして物語の都合でなぜか生き残ってしまったカマキリさん。今回は伏線をいろいろと残した話にさせていただきました。

鳥の王（アンク）（前書き）

本日二回目の投稿。とうとうアンクが本格的に登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア
？？？？コア×２

結局アリアとは・・・ケンカ別れ・・・という形になってしまった。・・・これでよかったんだろうか？たしかにこれはかつて俺の望んだ結末だ。

「でもな・・・」

このモヤモヤした気持ちは何だ？俺は何もすることができなかったからか？・・・それもあるだろうが・・・たぶんそれだけじゃない。そんな気がする。

「ん？・・・あれは」

俺は適当に外をぶらついていると、昼過ぎにアリアを意外な所で見かけてしまった。・・・学園島の片隅にある美容院でだ。

「・・・・」

少し暗い感じのアリアは、ツインテールはそのままに前髪だけを変えていた。・・・額にできてしまった傷を隠すために・・・。

「にしても・・・」

今までアリアの服は制服だけしかみたことなかったから私服のアリアは新鮮だな。

アリアは薄いピンク色の柄が入った清楚なワンピースで、ファッション誌に載ってもよさそうなくらい似合っていた。・・・しかし

あんな格好をしてどこにいくんだ？

俺はよく分からないがアリアを尾け始めてしまっていた。

そして電車に乗り新宿で降りると西口から高層ビルの方へカツカツと進んでいく。そしてアリアの足は意外なところで止まった。

新宿警察署である。・・・いったいなんでアリアはこんな所に・・・

「下っ手な尾行。尻尾がにょろにょろ見えてるわよ」

なんだ、バレてたのかよ。

「気づいてたならなんで言わなかったんだよ？」

「迷ってたのよ。教えるべきかどうか。あんたも『武偵殺し』の被害者の１人だから」

「？」

「まあ、もう着いちゃったし。どうせ追い払ってもついてくるんでしょ」

アリアがはき捨てるようにいったその言葉にはいつものような覇気はなかった。

そして俺はアリアとともに留置人面会室にやってくると、２人の管理官が後ろに立ちながらもアクリルの板越しにアリアに優しく手を振る美人がいた。

「まぁ、アリア。この方・・・彼氏さん？」

「ち、違うわよママ」

え？ママだと？・・・わ、若い。どちらかと言うと年の離れたアリアの姉さんって言うほうがしっくりくる。

「じゃあ大切なお友達さんかしら？アリアもボーイフレンドを作るお年頃になったのねぇ。お友達を作ることさえ下手だったアリアが・・・うふふ」

「違うの。こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で・・・そうゆうのじゃないわ」

「・・・キンジさん、始めまして。私はアリアの母で神崎かなえと申します。娘がお世話になってるみたいですね」

「い、いえ」

こんな部屋にいるのにかなえさんは、場の空気を和ませてくれるような人だった。

「ママ。面会時間が3分しかないから、手短に話すけど・・・コイツはあの『武偵殺し』の3人目の被害者なのよ。先週自転車に仕掛けられたの」

「まぁ・・・」

かなえさんの表情が固くなった。

「さらに一昨日もバスジャック事件が起きているの。ヤツの行動は

急激に活発になっているから、もうすぐ尻尾も出すはずだわ。だから狙い通りまずは『武偵殺し』を捕まえる。そうすればママの懲役８６４年が一気に７４４年まで減刑されるわ。最高裁までの間に絶対になんとかするから」

アリアの言葉に俺は目を丸くした。・・・アリアは・・・この人ために・・・

「そしてママをスケープゴートにしたイ・ウーを絶対に捕まえてあげる」

「アリア・・・気持ちは嬉しいけど、イ・ウーに挑むにはまだ早いわ。まずは『パートナー』を見つけなさい」

パートナー？どうゆうことだ？

「神崎、時間だ」

管理官は時計を見ながら告げてきた。

「ママ、待ってて。公判までに真犯人を全員捕まえるから」

「アリア焦っては駄目よ。１人で先走っては危ないわ」

「やだ！あたしは早くママを助けたいの！」

「アリアちゃんとパートナーを見つけてから行動しなさい。額の傷はあなたが１人で対処しきれない危険に足を踏み入れてる証拠よ」

「やだやだやだ！」

「・・・アリア」

「ほら、行くぞ神崎」

管理官の2人掴み引きずるようにして出て行く。

「やめろっ！ママに乱暴するな！」

アリアはアクリル板を叩くが・・・その思いは届かず、かなえさんは連れて行かれてしまった。

・・・・・・

・・・・・・・

「・・・・アリア・・・・」

帰り道、アリアは道の真ん中で立ち止まった。すると地面に水滴がボタボタと落ちる。・・・アリアの涙だ。

「泣いてなんか・・・・」

「泣いてなんかないわぁぁぁぁぁぁ」

悔しそうに歯を食いしばるアリアの瞳からは大粒の涙が流れ落ちている。

ザアァァァァァ

さらに追い討ちをかけるように通り雨が降り始める。・・・俺は泣き続けるアリアをただ見続けることしかできない。・・・・自分がこんなにも無力だったとわな。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「あれ？」

俺は自室へと帰ってくると、部屋の鍵はなぜか開いていた。たしかに戸締りはちゃんとした。アリアはさっき別れたばかりだし、あんな状態でくるはずもない。

俺は念のために右手に拳銃を持ちながら、左手でドアを開ける。

ギィィィィィ

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

俺の部屋には見慣れない金髪の男がいた。

「・・・誰だ、お前」

俺は金髪に銃を構える。

「この姿じゃあ分からないか？・・・なら」

金髪は一瞬だけだったが紅い鳥怪人に変わってすぐ人間の姿に戻る。あの真紅の鳥のような見た目の怪人・・・まさかコイツ・・・。

「お前が鳥のグリード‘アンク’か？」

「やっと分かったか遠山の血族！ハッ！それにしても遠山はそれを

滅ぼす者だったのになぁ、まさかこの時代のオーズがその血の奴だとわな」

アンクは皮肉のような笑いを俺にしてくる。・・・たしかに話の内容も気になるが・・・今はそれよりも・・・

「アンク、目的はなんだ?コアメダルか?」

俺はアンクを睨みつつもオーズドライバーをつける。

「今回はその目的じゃない。・・・その前に・・・試させてもらう」

「どうゆうことだ?」

「そろそろ俺のヤミーが成長し終わった頃だろ。TVをつけてみろ」

「・・・・・」

言われるがままにTVをつけると・・・

『大変です!東京中の警察署が次々に怪人に襲撃を受け、犯人たちがどんどん脱獄していきます!』

な、なんだと!?

映像を見ると逃走する犯人たちを警察だけじゃなく武偵たちも追っていた。

「ハッ!さっきまでお前と一緒にいた女の欲望から生まれたヤミーだ。欲望は『檻の中から出したい』あたりだな。・・・巣になっている場所は・・・外ならどこでもいいみたいだな」

アンクは映像を見て笑いながらそう話している。・・・ちょっと

待て！さっきまで一緒にいたヤミーの『親』ってまさか！？
ドカッ

俺はアンクの着ている服の襟元を掴んで壁に叩きつける。
「お前・・・アリアからヤミーを・・・」

「いいから行け。とっとと行って倒さないと被害が増えるぞ」

「くそっ！」

「・・・・・ハッ！」

アンクに背を向けた俺は急いで外に出てオーラインクロスに跨って、ここから一番近くてまだ被害を受けていない警察署へと向かった。

「どこまで・・・俺に平穏はないんだ」
ザァァァァァ

悪天候の中・・・俺はアンクのヤミーを倒すためにバイクを加速させた。

・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・
先ほど来ていた新宿警察署　俺はようやくヤミーを見つけた。

「こいつは・・・・・」

「こんな、こんな、檻から・・・出してあげたい」

赤い鷹のような姿のヤミー、タカヤミー、は刑務所を襲おうとする真っ只中だった。俺はただ、このヤミーがアリアの欲望から生まれたことをアリアが知らないことを祈りながら・・・俺はオーズドライバーにコアメダルを入れながらタカヤミーに向かって走る。

「・・・変身」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「ハァァァァ！！」

オーズに変身した俺はトラクローを展開して、一人戦いに挑んだ。

鳥の王（アンク）（後書き）

アンクとのファーストコンタクトはこのような感じにしてみました。今回描写はしていませんが次回の最初は時間をやや遡りアリアへのメダル投入シーンからスタートです。

アリアの願い（前書き）

今回のアリアはけっこう可哀想です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア
？？？？コア×２

アリアの願い

「うっ、うっう・・・・」

アリアは俺と別れた後、半泣きのまま女子寮へと帰還しようとしていた。

「ママ・・・絶対にあんな檻から出してあげるから」

「ハッ！いい欲望だ！」

「えっ？」

チャリン

アリアが何者かの声に振り返ると彼女の額にセルメダルが投入される。その途端アリアから白ヤミーが何かを求めるように出てきた。

「こいつ、ヤミー・・・よね」

アリアは2丁拳銃を構えるが・・・

「あ、あれ？なんで撃てないのよ・・・あたし」

銃を白ヤミーに撃つことができずに固まってしまっていた。本能的に自分の欲望の怪人だと理解していたため、頭では撃たなければいけないと考えているが、身体は動かないからだ。

「ハッ！それはお前の欲望なんだからな。撃てないよな！」

「っ！！」

アリアは1つの銃を向けながらも、もう1つの銃を声の人物に向ける。そこに立っていたのは真紅の鳥の怪人・・・アンクだった。

「俺の計画には邪魔だな・・・寝てろ」

ドス

「っ！？・・・マ、ママ・・・」

アリアはアンクに首の後ろを叩かれ意識を失ってその場に倒れてしまった。そしてアンクは真紅の翼を広げて飛び上がる。

「さて・・・次は遠山の血族のところに行かないとな」

この時の俺は知っていなかった話だった。

・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

「うおっぉぉぉ！」

俺は正面にいるタカヤミーへとトラクローを突き刺すように振る。・・・どんな勝ち方でもいい。アリアがこのヤミーと出会う前に倒さないと！・・・幸い他の武偵が周りの人々を避難させてくれたおかげで派手に暴れられるしな。

「出さないといけないんだ。・・・ジャマ・・・しないでっ！！」

「くっ！」
タカヤミーはトラクローを左翼で弾くと空に飛び上がる。くそ！それならこの手だ！
俺はトラのコアメダルを抜き取り、ゴリラのコアメダルを入れる。
『タカ！ゴリラ！バッタ！』
この‘ゴリラアーム’の‘ゴリバゴーン’はガントレットとして使う以外にもロケットパンチのように発射することもできるんだよ！
「テリャアァァァ！」
ドン！
俺はタカヤミーにゴリバゴーンを発射するが・・・この大雨っていう悪天候だ。いくら‘タカヘッド’の超視力でもうまく狙えないな。
「下手くそ！どこ狙ってる！」
タカヤミーは俺にそんなことを言ってくる。・・・草加のときもそうだったがヤミーの性格は『親』の性格を真似られるのか？
「風穴開けてやる！！」
そんなことを一瞬考えていたらタカヤミーは両手から炎の弾を次々と俺に飛ばしてくる。
「くそっ！空から攻撃なんてセコイことしやがって」
アリアでもたぶんそこまではせこくないぞ！・・・それにしてもヤバイ。今はなんとか防げているが、たぶんこの攻撃力は今まで戦った怪人の中で・・・一番かもしれないな。気を抜くと今の俺だと確実に・・・死ぬ。
「ん？・・・」

タカヤミーの攻撃に備えようとメダルを変えようとする最中、俺の後ろに生えている大きな木の上にアンクがいたことに気づいた。

「思ったより手こずっているな。俺はお前の全力を見てみたいんだが・・・」

「ざけんなっ！だからってアリアの母親を助けたいって思う願いを利用しやがって！！」

俺は思わずタカヤミーから視線を外し、アンクの方を睨んでしまう。するとそこに・・・

「風穴！デストロイっ！！」

「うわっ！？」

空から急降下してきたタカヤミーは右手に炎を灯して俺を殴ってきた。・・・しかも・・・重い・・・。

「遠山！！これで全力になれんだろ！！」

バサっ

「っ！？」

俺が近くのビルに直撃する前に、俺の顔にアンクから投げ飛ばされた‘何か’が覆いかぶさった。その中身が見えて俺の血が騒ぎだす。こ、この肌色が多めの写真がついているこの本はまさか！・・・

・俺にとっての禁断のアイテム・・・え、エロぼ・・・

ドオォォォォォン

俺はビルの壁にぶつかり瓦礫に埋もれた。まぁ‘今の俺’にはこんなもの造作もないがな。
俺はこの前のウヴァとの戦いで手に入れたメダルを使う。
『クワガタ！ゴリラ！バッタ！』
俺の周りに出現したメダル状のエネルギーが俺の上にある瓦礫を吹き飛ばす。
「ハッ！ようやくお前の‘全力’を見られるか！」
「・・・あぁ、全力で戦ってやる。・・・この‘ヒステリア’の俺でな」
俺は緑色のクワガタムシを思わせるオレンジの複眼のヘッド‘クワガタヘッド’にさらに変えたオーズの亜種形態‘ガタゴリバ’に変わるとすぐさま・・・
ビュン
「え？消え・・・？」
タカヤミーすら反応できないような速さでジャンプをしてタカヤミーの正面にいく。今から使う技はこの大雨だから・・・地面では使えない技だからな。
「ハアァァァッァァ！！」
ババババババッ
「ビリビリ～するぅ～！？」
空中で至近距離からの‘クワガタヘッド’の‘クワガタホーン’からの電撃だ。それもこの大雨だけあってダメージは少なくないだ

ろう。
「ハアァァァ！！」
ドン

俺はゴリラアームの強力な腕力でタカヤミーを思い切り地面に向かって叩きつける。
「ごっ！？」
チャリンチャリン

タカヤミーは今の一撃でかなりのセルメダルを外に出した。・・・次の一撃で決めてやる。
『スキャニングチャージ！』

「はあァッァァァ！」

俺は地面に落下をしながら全身にコアメダルの力を溜める。
「はあっ！」

そして地面に着地するとすぐさま倒れているタカヤミーを背負い投げのようにして上に投げ飛ばし、
「セイヤァッァァ！！」
バババババッ

クワガタホーンの電撃を浴びせながらとび蹴りを決めた。

「・・・外に・・・出し・・・・て・・・・あ」
ドオォォォォォォォン

「・・・・・・すまない、アリア」

タカヤミーの最後の言葉は・・・アリアの願いそのもののような気がして・・・どこかやるせない気持ちにさせられた。
「・・・次はお前だ・・・アンク」
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』
『スキャニングチャージ！』

俺は基本のタトバに戻るとすぐさまコアメダルのエネルギーを再び全身に溜め込む。
「いいぞ。来てみろっ！」

アンクは俺を挑発するように両腕と翼を広げた。
「セイヤァァァァァ！！」

タカ、トラ、バッタそれぞれのコアのエネルギーを纏いながら放つ両足キック〝タトバキック〟を俺は・・・
「・・・どうゆうつもりだ？」
「・・・・・」

・・・わざと外した。

「・・・お前はたしかにアリアの母を外に出してあげたい願いをヤミーを作るための欲望として利用した。それは許せない。・・・でもお前を倒すことは俺にはできない。今回のヤミーの襲撃箇所はすべて・・・武偵高の生徒が近くにいるところで起きている」

ここに来る前に見ていたニュースの襲撃箇所にも、ここにも武偵

高の生徒がちゃんといた。

「・・・・で？」

「それにこんな派手な襲撃なのに怪我人の話を１度も聞いてない」

ＴＶでも怪我人の話は１度も聞いていない。それにここに来てからも１度もそのような言葉を聞いてはいない。

「お前はヤミーに何か人間を傷つけないようにする指示でも出したんじゃないのか？」

ヒステリアの俺となったことで思考が高まっている俺だからこそ、たどり着いた答え。それはこの「アンクには人間を傷つける気はない」という答えだった。・・俺はたとえ怪人でも・・・人間の心をもつヤツは倒したくはない。・・・だからアンクにキックを当てられなかった。

「人間は欲望を持つ餌だ。そんな餌がなくなるのは俺としても不愉快でな。それに・・・」

「それに？」

本来は数十分はなっていられるはずのヒステリアモードの血が薄れていくのを感じる。たぶんあんな無茶な戦いをしてたからだろうな。

「もし俺が誰かを殺していれば・・・お前は俺の計画の邪魔者になると思ってな」

「計画？」

俺がアンクから‘計画’を聞きだそうとすると・・・

「キンジ！」

「なっ！？アリア！！」

バサっ

アリアがやってきたことによりそちらに反応している間にアンクに逃げられてしまった。そしてアリアは地面に散らばったセルメダルを見つめる。

「・・・この銀のメダル・・・ヤミーよね」

「・・・ああ・・・」

俺はその言葉に頷く。ヒステリアじゃなくなった俺には・・・うまくこいつに対しての言葉が見つけられない。

「このヤミーの欲望の主って・・・あたしよね？」

「・・・・」

俺は黙り込んでしまう。・・・気づかれないようにと祈ってたんだが・・・やっぱり無理だったか。

「これがママの言ってた・・・一人で対処しきれないこと・・・よね・・」

「・・・アリア言っておくが悪いのはヤミーであってアリアに罪はない」

「・・・・・・」

アリアはかなえさんへの思いがこのようになってしまったのがかなり辛かったようで・・・この事件からしばらく何もしゃべらなかった。

アリアの願い（後書き）

今回も重い話になってしまいました。しかし重い話はストーリーの都合上、まだ続いてしまいます。

可能性事件（前書き）

今回はアリアが登場しません。しかしそれでも物語は加速します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
クワガタコア×２
ライオンコア
カマキリコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

可能性事件

東京に強風が吹き荒れた週明け。俺の右隣の席・・・アリアの席は空席だった。

「・・・どうした相棒？・・・気になるのか？」

後ろの席の矢車がそう話かけてくる。あいかわらずコイツは鋭いな。さすが‘元’Ｓランク武偵。

「・・・・別に・・・気にしてねぇよ」

「一度暗闇に堕ちた人間が光を求めると・・・痛いしっぺ返しをくらうぞ・・・俺のようにな」

「・・・そんなん・・・もう喰らった」

バスジャックといい、先週のアンクの件といい喰らいまくりだな。結局俺は何にも守れていない・・・あの時から・・・ずっと・・・

今思えば、アリアは『パートナー』を『ドレイ』と言い換えることで相手に求めるハードルを下げていたのかもしれない。そんなことを考えながら午前中の通常授業を終えて携帯の電源をＯＮにすると・・・理子からメールが来ていた。

『きーくん。授業が終わったら台場のクラブ・エステールに来て。大事な話があるの』

普段の俺なら行かないだろうな。でも今回は状況が特殊だ。朝か

ら理子がいなかったし、もしかしたらバスジャックのことで何か分かったのかもしれない。午後はサボって行ってみるか。

「なぁ、やぐる・・・ま?」

「・・・・・」

矢車は携帯の画面を見ながら険しそうな顔をしていた。

「すまん相棒・・・俺は用事が出来たんで外に出る・・・」

コイツがこんな行動をする時のだいたいは・・・仮面戦士絡みの出来事だ。コイツはそうゆうタイプの事件は誰にも言わずに解決しようとするんだよな。

「ああ、分かった」

こんな時の矢車は1人で行かせる。・・・コイツは仮面戦士絡みの事件で弟の駿が見つかるとどこか期待しているんだと思う。そんな矢車に着いていくのは野暮だからな。普段「光を求めるな」と言っているが・・・本当はコイツが一番求めているのかもしれない。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺は午後の授業をサボってオーラインクロスでクラブ・エステールへと向かった。ようやくたどり着いたその場所は高級カラオケボックスのような場所だった。

「き～く～ん～！」

店の中に入ると理子はバーラウンジ奥の方で手を振っていた。その服装は例のロリータ制服だ。

「お前なぁ、授業サボってこんなところで何やってんだよ？」

「くふ。この勝負服のお着付けをしてたの。ちゃんときーくんが来てくれて理子うれしー！」

「はぁ・・・いいからとっとと本題に入ってくれ」

「きーくんそっけな～い。こっからは理子ルートなんですよ～」

なんだそれ？意味が分からん。そう思った矢先に理子が腕を絡めてくると、意気揚々と店の奥へと進み出す。すると他にもサボってここに来ている武偵高の女子生徒のヒソヒソ話が聞こえてきた。

「キンジが今度は理子ちゃんと付き合ってる」

「キンジってチビ専なのかな？」

「星伽さんもいるからそれはないと思う」

「それでも・・・嫌いじゃないわっ！」

おいおい、はっきり聞こえているぞ。つーかこの前の嫌いじゃない発言をしていたのはお前かよ。俺は心の中で周りにツッコミをしていると理子に2人部屋の個室に押し込まれた。

「ところできーくんアリアと喧嘩したでしょ？」

「・・・そんなこと・・・お前に関係ないだろ」

「関係あるよ～。きーくんはアリアと仲良くしないといけないんだから」

「何でだよ」

「そうしなきゃ理子が楽しくないもん！」

はぁ、つまり俺とアリアを茶化したいってことか。

「きーくん。あ～んして」

理子はテーブルに置いてあったモンブランにフォークをザックリと刺して俺に突き出してくる。

「するかバカ！」

「『武偵殺し』」

「っ！？」

今、コイツはなんて言った？『武偵殺し』って言わなかったか・・・くそ。

俺は恥ずかしながらもモンブランを食べた。そして「さあ教えろ」という視線で理子を睨んだ。

「くふ。あのね。警視庁から調べたんだけどね・・・『武偵殺し』にやられた人ってバイクジャックとカージャックの２人だけじゃな

いかもしれないんだって」

「どうゆうことだ」

「『可能性事件』・・・隠蔽工作で『武偵殺し』の事件が事故になっちゃってるってことがあるんだよ」

「そんなものがあるのか？」

「そこにね。見つけちゃったんだ。そうじゃないかって思うもの」

理子はポケットから４つ折りのコピー紙を出して、俺に見せてくる。そこに書かれてあった内容は・・・

『２０１０年１２月２４日　浦賀沖海難事故　死亡　遠山金一武偵（１９）』

「この名前、お兄さんでしょ？これってシージャックだったんじゃないの？」

浦賀沖海難事故・・・それは俺の最大の後悔の事件。俺はその時、船が沈んだ場所の海からさほど遠くない場所にいた。助けに行こうと思えばオーズに変身して助けに行けたのに・・・力を使うのをためらってそれができなかった。・・・兄さんも仮面戦士だから何とかなるとも思っていた。・・・結果は兄さんだけが死ぬ結果となってしまった。

その事件が『武偵殺し』の仕業だと・・・・・

兄さんをなぜコロシタ・・・ナンデ？ナンデ？

「いい」

「っ！」

熱を含んだ理子の声で俺は気を取り戻した。

「いいよキンジ。キンジのそうゆう眼・・・ゾクっと来ちゃう。その眼のキンジに理子はひとめぼれしたんだぁ」

・・・たぶん入学試験の時のヒステリアのことを言っているんだろうな。コイツをあっさりと倒した時の俺のことを・・・

「キンジっ」

「っ！！」

理子はいきなり俺を長イスに押し倒してきた。

「理子！？」

「キンジってほんっとーラブに鈍感。まるでわざと鈍感になろうとしてるみたい。ねぇ・・・分かってる？・・・これはもうイベントシーンなんだよ？」

５センチほど前まででせまった理子の童顔。アリアとは違うタイプの甘ったるい香り。それらのことが俺の血の流れを加速させる。

「ねぇキンジぃせっかくの高い個室なんだし・・・ゲームみたいなこと・・・してもいいんだよ？」

熱く切ない台詞とともに理子は全身をすり寄せてきた。

「キンジぃ、このお部屋でのことは誰にもバレないよ。白雪はS研の合宿だし、アリアだってイギリスに帰っちゃうらしいしね。今夜7時のチャーター便で行くって話だから・・・今頃はもう羽田だよ、きっと。だから・・・理子といいことしよ。くふふ。」

俺は・・・気づいた時にはもう血を熱くさせていて・・・ヒステリアモードになってしまっていた。

そして瞬時に理子の言っていた過去の事件が・・・1つの線として繋がった。

「っ!!」

この線は・・・最悪のエンディングに繋がっている!

「お子様はそろそろお家でお寝んねの時間だろう?」

「あんっ!?」

俺は理子を抱え上げて長イスに横たわらせたる。そして俺はすぐさま部屋を飛び出していった。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「ようやく来たんだ。きみなら来てくれると思っていたよ」

「・・・・・・」

俺が部屋を飛び出してある場所に向かっている頃、学園島のどこかで草加と矢車は数メートル離れて向き合っていた。

「さぁ、きみも欲望に従おう」

「・・・・・」

草加はゆっくりと矢車に近づきながら手を差し出してくる。矢車はその手を・・・

「・・・一緒にすんなよ・・・」

「っ！？」

平手で弾いた。

「・・・・・何のつもりかな？これは？」

「お前・・・自分がいいことしてるって思ってんのか？俺に光を指し示してるつもりか？」

「そのつもり何だけど・・・どうして弾くのかな？」

『スタンディンバイ』

草加は矢車に不快さを感じ始めてカイザの変身ツール‘カイザギア’を腰に装着していつでも変身できるようにする。するとそこに草加の欲望が生み出したカマキリヤミーがやってきて草加の後ろに立った。

「俺は人としての道は踏み外すことになっても・・・完全調和『パーフェクトハーモニー』・・・弟と約束したことは守り抜くつもり

だ・・・・」

矢車の手の中にキックホッパーの変身ツール‘ホッパーゼクター’が収まる。それと同時にカマキリヤミーは矢車に向かって駆け出した。

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

「ジャマなんだよっ！！」

ガギン！

矢車が変身したキックホッパーはカマキリヤミーの２本のナイフのような武器を右脚で防いだ。

「だから俺は・・・その『パーフェクトハーモニー』のために・・・これ以上罪を重ねようとするお前を止める。・・・武偵として・・・仮面ライダーとしてな」

「くっ！？変身！」

『コンプリート』

キックホッパーの意外な行動に慌てた草加は慌ててカイザに変身をした。

・・・俺の知らないところでは・・・すでに戦いが始まっていた。

可能性事件（後書き）

最近矢車が準主人公っぽくなってきた感じのする今回のお話でした。・・・アリア編終了まで・・・あと少し・・・。

そういえば最近後藤さんが出せていない・・・。

4世（前書き）

前回の活躍でおそらくこの作品の矢車の人気が上がったんだろうと考えている自分がいる。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
クワガタコア×2
ライオンコア
カマキリコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア×2
タココア

4世

俺がオーラインクロスで羽田空港に到着する頃にはすでにヒステリアモードは解けて通常モードに戻っていた。ヒステリアになっていれたのは数十分だけだったが・・・ヒステリアの俺の推理が正しければ・・・アリア、お前はもうすぐ『武偵殺し』と対峙してしまう。

俺は空港のチェックインを武偵手帳についた徽章で通り抜けて飛行機の中へと急ぐ。

「武偵だ！離陸を中止しろ！」

ＡＮＡ６００便に乗り込んだ俺は小柄なフライトアテンダントに武偵徽章を突きつける。

「お客さま！？失礼ですがどういう・・・」

「説明してるヒマはない！いいからさっさと飛行機を止めるんだ！」

アテンダントはいそいそとコックピットの方へ向かっていった。・・・ふぅ、これでなんとか飛行機を止めることはできただろうな。そう思った矢先だった。

ぐらり

機体が揺れた。

「あ、あの、申し訳ありません！駄目でした！」

「なっ！？」

畜生・・・こうなったら作戦変更しかない。

俺はアリアの席、というか個室へと案内してもらった。

・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「キ、キンジ！？」

生花で飾り付けられたスイートルームで・・・アリアは俺を見た瞬間目を丸くした。よし、まずは合流できたな。

「さすがはリアル貴族様。このチケットって片道２０万はするんじゃないか？」

「断りもなく部屋に押しかけるなんて、失礼よ！！」

「お前にその言葉は言われたくないぞ。とりあえず離陸だ。席に着こう」

アリアは自分が俺の部屋に押しかけていたことを思い出したようで口ごもりながらも席に着いた。

「・・・何でついて来たのよ」

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」

「うるさい！答えないと風穴開けるわよ！！」

アリアは俺に拳銃を向けてくる。・・・どうやら帯銃はしてるようだな。安心したぜ。

「武偵憲章２条。依頼人との約束は絶対守れ」

「・・・・？」

「俺は一件だけお前と一緒に事件を解決する。そう約束した。・・・『武偵殺し』の一件はまだ解決してないだろ」

「な、なによ！あんたのおかげでよく分かったわ！あたしはずっとひとりでやっていくの！『武偵殺し』でも『ヤミー』でもあたし一人で・・・これからずっと１人で戦っていくって決め・・・」

ガガン、ガガーン！

「きゃ！？」

アリアが話を言い終える寸前にいきなり雷鳴が轟きアリアはそれに驚く。

「・・・もしかして・・・怖いのか？」

「そ、そんなわけないじゃない！！」

双剣双銃のアリア様にも怖いものはあるんだな。

「雷が苦手ならそこのベッドで震えてろよ」

ここのスイートルームにはベッドも置いてあったので、俺はから

かうようにそれを指差した。

「う、うるさいうるさい！」

ガガーン！

「ヒっ！？」

再び雷鳴が轟くとアリアは本当にベッドの中に入って震え始めた。

ヤバイ・・・こんな時なのに笑いが込み上げてくる。

ガガガーン！

「にゃ！？」

運が悪いのか機長が下手なのかこの飛行機はさっきから雷雲の近くを飛んでいる。アリアはすでにガクガク震えているな。

「キ～ンジ～～ぃ」

恐怖のあまりかアリアはとうとう俺の制服の裾を掴み始めた。この時のアリアは・・・本当に『普通』の女の子に見えた。

「落ち着けってアリア」

パートナーでもドレイでもない。普通のクラスメイトとして。友達として・・・怖がっている相手を慰めるために俺は震えるアリアの手に、手を添えた。

「キ・・・ンジ・・」

アリアは何秒か躊躇ってから俺の手を握り返そうとしたその時だ

った。

パン！パァン！

銃声が・・・響いてきた。そしてさらに・・・

『アテンションプリーズ！　でやがります。当機は現在　ハイ　ジャック　されました　でやがります。怪我をしたくなければ部屋から　出ないでください　でやがります。ただし武偵は別　でやがります。相手をしてやるから　一階の　バーまで　きやがれ　でやがります』

「くそっ！やっぱり武偵が乗ってやがったか！」

「やっぱり？・・・あんた『武偵殺し』が出ることが分かってたの？」

アリアの赤紫色の瞳が見開かれる。俺はヒステリアの時に閃いた推理を話すことにした。

「『武偵殺し』はバイクジャック、カージャックで事件を始めて・・・シージャックである武偵を仕留めた。そしてそれはたぶん直接対決だ」

俺とアリアは銃を構えながら1階のバーへと進みつつ会話を続ける。

「どうして？」

「その事件だけお前が知らないからだ。電波、傍受してなかっただ

ろ？」

「う、うん」

「おそらくそれは電波を受信しなくてもよかった直接対決だったんだろ。・・・ところがバイク、車、船と大きくなった乗り物が、ここで一回小さくなる。チャリ、バス・・・そして次が・・・」

「・・・この飛行機ってことね」

「つまりコイツは最初からメッセージだったんだよ。ヤツはかなえさんに罪を着せ、お前に宣戦布告をした。そして同じ三回目にお前と直接対決しようとしてるってことだ」

推理の苦手なアリアは、悔しさに歯を食いしばる。そして俺とアリアがバーに辿りつくとそこにはさっきのアテンダントがいた。

「「！！」」

俺たちは銃を構えながら、眉を寄せた。・・・アテンダントの服装は武偵高の制服。・・・それもヒラヒラなフリルのついた・・・理子の改造制服だ。

「今回も見事に引っ掛かってくれやがりましたねぇ」

そう言いながら彼女はべりべりと特殊メイクを自ら剥ぐ。中から出てきたのは・・・

「理子！？」

「ボンジュール」

制服の通りやっぱり理子だった。くそ、俺の運転するオーラインクロスよりも先に理子が空港にやってきて、アテンダントに変装してたってことかよ!!

「理子の本当の名前は理子・峰・リュパン４世・・・イギリスの大怪盗『アルセーヌ・リュパン』の子孫」

「だからってなんでこんなことをした!」

俺はそう叫んだ。いくら怪盗の子孫だからってこんなことをする理由が分からない。

「それはねぇ、理子が理子だから・・・家のみんなは私を『理子』なんて呼んでくれない。みんな、４世、４世、４世様ぁぁって呼ぶの・・・ひっどいよね～」

「そ、それがどうしたってのよ・・・４世の何が悪いってのよ!」

なぜかはっきりとそう言うアリアに、理子は目を大きく開けた。

「悪いに決まってんだろ!!あたしは数字か!?あたしはＤＮＡか!?違う!あたしは理子だ!」

突然キレた理子は・・・俺たちじゃない誰かに対して、そう叫んでいた。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「ハァァァァ！！」
ドカ！　ドカ！　ドカ！
「ぐぅ！？」

未だも戦闘を続けていたキックホッパーはカマキリヤミーとカイザに対して優勢だった。矢車の変身するキックホッパーはその名の通りキック・・・蹴り技が得意な仮面戦士だ。ここまでキックホッパーはカマキリヤミーと草加にずっと蹴りだけで戦っていたのだ。

「はぁ・・・はぁ・・・いいかげん諦めてやられてくれないかな？さすがに2時間も戦うのは飽きてきたんだけど？」

「飽きてきた？疲れたの間違いじゃないのか？」

キックホッパーはやや挑発的にそうカイザに告げる。

「・・・そんなわけないじゃないか」

「それにこんな長い時間お前の相手をしてやったのは・・・この前の緑の虫の怪人を誘うためだったんだが・・・どうやら接触して来ないな」

「ジャマなんだあぁぁぁぁぁよおぉぉぉぉ！！」

痺れを切らしたカマキリヤミーはキックホッパーへと最後の力で切り掛かる。それに対しキックホッパーはホッパーゼクターの脚部

を付け根部分まで動かす。
「はっ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

カマキリヤミーの攻撃が当たる直前に跳び上がってかわしたキックホッパーは、そのままキックの体勢となってカマキリヤミーに迫る。
「・・・草加・・・特別に見せてやるよ。俺と弟が，ある人，から教わったキックをな・・・ハアァァァァ！！」
ドン！

「ぎぃぃ！？」

キックホッパーはライダーキックをカマキリヤミーに命中させると、左脚側面に取り付けられている特殊兵装のアンカージャッキがキックの反動を利用して、再びキックホッパーを上に跳ばす。するとキックホッパーは空中で後ろに１回転をしてもう１度カマキリヤミーにライダーキックを決めた。
「ライダー・・・反転キック・・・」

「う、うわあぁぁぁぁぁ！！？」

その攻撃に耐え切れなくなったカマキリヤミーは爆発し、セルメダルとなって散った。

「よくも俺の欲望を倒してくれたな・・・本気でやってあげるよ」

カイザは専用マシン，サイドバッシャー，のバトルモードに乗っ

てキックホッパーの前に立った。

「・・・草加・・・ほんとお前って仮面ライダーに向いてねぇよ・・・」

俺の知らないところでの2人の戦いはまだ続いていた。

4世（後書き）

次回もキンジは都合上変身できません。それに対して矢車ＶＳ草加のバトルパートは次回でラストです。

『大嫌い』（前書き）

あと４話か５話でアリア編が終了します。その後に登場人物紹介を書こうと考えています。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
クワガタコア×２
ライオンコア
カマキリコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

『大嫌い』

「曾お爺さまを超えないと、あたしは一生あたしじゃない！『リュパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入ってこの力を得た！この力であたしはもぎ取るんだ！あたしを！」

何を言ってるのか分からない話を、アリアは真剣な面持ちで聞いていた。

「待て、待ってくれ。お前は何を言っているんだ・・・！？オルメスっていったいなんだ？イ・ウーっていったい何だ？『武偵殺し』は本当にお前の仕業なのかよ！？」

「『武偵殺し』？あんなのプロローグの遊びよ。本当の目的はオルメス４世・・・アリアお前だ」

その眼はすでに俺の知ってる理子の眼じゃなかった。獲物を狙う、獣の眼だ。

「１００年前曾お爺さま同士の戦いは引き分けだった。オルメス４世を倒せばあたしは曾お爺様を超えたことになる。キンジ・・・お前もしっかり役割を果たせよ」

獣の眼が今度は俺に向けられる。

「オルメスには代々パートナーが必要なんだ。初代オルメスには優秀なパートナーがいた。だからあたしはアリアとキンジをくっつけようとしたんだ」

「俺とアリアを・・・お前が？」

「そっ」

この表情は・・・いつもの理子だな。今まであの‘バカ理子’を演じていたってことかよ。

「キンジのチャリに爆弾をつけてわっかりやっす～い電波を出してあげたの」

「・・・何もかもお前の思い通りだったってわけかよ」

「そうでもないよ。バスジャックの後も2人がくっつかなかったのは計算外だったもん。理子がたったお兄さんの話を出すまで動かなかったのは予想してなかったし」

「兄さんを・・・お前がっ！」

俺の憧れであり、ヒーローだった兄さん・・・その兄さんを、コイツが。

頭に血が上るのが分かる。・・・兄さんのこととなると冷静でいられなくなるのは俺の弱点だ。

「キンジ、いいこと教えてあげる。キンジのお兄さんは今・・・あたしの恋人なの」

「いいかげんにしろ！！」

一瞬生身の人間である理子にオーズの力を使ってしまおうかと考えてしまう。

「キンジ、挑発よ！落ち着きなさい！」

「これが落ち着いていられるかよ！」

俺は右手に握る拳銃に力を入れた瞬間・・・

ぐらり

「っ！？」

飛行機が突然傾いて俺は銃を落としてその場に倒れてしまった。

そして理子はその状態の俺に銃を突きつけてきた。

「ノンノン、駄目だよキンジ。今のお前じゃ戦闘の役には立たない。最低限、オーズに変身しないと」

バン！

アリアは理子に詰め寄りながら襲撃をする。たしかにその弾丸は理子に直撃するが、武偵高の制服は防弾性となっているせいで一撃必殺の武器にはならない。たとえるなら打撃武器だ。

「く、この！」

バンバンバン！

「あは、あはははは！」

バンバンバン！

アリアと理子は至近距離での２丁拳銃同士の銃撃戦を始めた。ま

るで格闘技のように何度も2人の腕が交差する。
「キンジ！」

「そこまでだ！理子！」
ジャキッ

俺はアリアに言われるまでもなく理子にバタフライ・ナイフを突きつける。

「奇遇だよねアリア。理子とアリアはいろんな所が似てる。家柄、キュートな姿。・・・そして・・・二つ名」

「あたしも同じ二つ名を持ってるの『双剣双銃の理子』・・・でもね、アリアの『双剣双銃』は本物じゃない！！」

「なっ！？」

理子のツインテールがおそらく背中に隠し持っていただろうナイフを握り、アリアに切り掛かった。

「！・・・きゃ！？」

一撃目の攻撃は避けたアリアだったが、二撃目の攻撃は避けきれなかったようで側頭部から血がほとばしった。

「あは・・・あはは、１０８年もの歳月はこうも子孫に差をつけちゃうんだねぇ！コイツ、パートナーどころか自分の力さえうまく使えてない！勝てる、勝てるよお！理子は今日、理子になる！」
バン！

アリアの心臓付近に理子の放った銃弾が直撃する。そしてそのままアリアは地面へと倒れてしまった。

「アリア！アリアァァァ！！」

いけない、ここに入れば危険だ！・・・そう直感した俺はアリアを抱えて慌ててその場から離れる。

「こんな狭い飛行機の中どこへ行こうっていうの～！」

後ろからそんな声が聞こえても振り返らずに急いだ。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「はぁ、はぁ・・・おい、しっかりしろ！」

アリアを抱えて個室へと逃げ込んだ俺は、制服の内ポケットから『Ｒａｚｚｏ』と書かれた小型の注射器を取り出す。

「すまない、アリア」

そう言いながら俺は乱暴にブラウスのジッパーを引き下ろす。そしてすぐさまその注射器をアリアの心臓へと刺した。

「戻ってこい！アリア！」
ドクン

アリアが痙攣した。薬が効いているってことだ。そして・・・

「っ・・・はっ！？」

アリアはガバッと起き上がった。どうやら蘇生に成功したらしい。

「はっ！・・・き、キンジ！あたしに何しようとしたの！？なんで見たがるのよ！ちっちゃいからか！いつまで経っても成長しないからか！どうせ万年！身長１４２センチよ！」

「落ち着けアリア！お前は理子に・・・」

「理子おぉぉぉぉ！！」

アリアはベッドから起き上がると2丁拳銃を握りしめて部屋を出て行こうとする。・・・まずいな。『Ｒａｚｚｏ』と言う薬は復活剤であると同時に、興奮剤でもある。そのせいもあって今のアリアは正気じゃない。

「落ち着けアリア！お前1人じゃ勝てない！」

俺は出て行こうとするアリアの手を慌てて捕まえる。

「うるさいうるさい！あんた、あんたはあたしのことキライなんでしょ！あんた言ってたじゃない！青海に行くときに！『大嫌いだ』って言った！」

この手を離したらアリアはすぐさまこの部屋を出て行ってしまうだろう。・・・この状況をなんとかする方法は・・・・なくはない。しかしそれをしてしまえば俺は確実に、ヒステリアモードになってしまうだろうな。・・・仕方ない。

「あの時は普通な顔してたけど！ほんとはとっても悲しかった！だからいいのよ！あたしのこと嫌いなままで！あたしのこと嫌いなま・・・！？」

俺はアリアの口を塞いだ・・・俺の口で。そして俺は体の中心から熱くなるように・・・ヒステリアモードに変わった。

「アリア・・・許してくれ。こうするしかなかった」

「ば、バカキンジ！あ、あたし・・・ふぁ、ファーストキスだったのに・・・」

「安心してくれアリア。俺もだよ」

「き、キンジ・・・あんた、また・・・」

どうやらアリアは俺の声が低くなり、冷静になったことに気づいたらしい。

「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。・・・二人で『武偵殺し』を逮捕するぞ」

俺がアリアの耳元でそう言うと、アリアはゆっくりと頷いた。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「邪魔な人間は俺の前から消えてくれないかな？」
ドン！ドン！ドン！ドン！
「くっ！？」
カイザがサイドバッシャー・バトルモードから放ってくる攻撃をキックホッパーは走って避けていた。
「さっきまでの威勢はどうしたのかな？」
「・・・言ってろよ」
キックホッパーは1度立ち止まり、カイザの方を向いてしゃべる。
「そんな強気な台詞ももう言えなくしてあげるよ」
ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！
サイドバッシャーから放たれた大量のミサイルは全弾がキックホッパーへと向かう。それに対してキックホッパーは右腰のスイッチを叩いた。
「・・・・・」
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
ドカァァァァン！
「なっ！？」
なぜか自分の方に向かってくるミサイルをカイザはサイドバッシ

ャーから飛び降りて避けるとミサイルはサイドバッシャーに直撃しマシンは大破した。

「・・・なるほど・・・クロックアップか・・・」

「・・・ああ、そうだ」

クロックアップ・・・それは軍事結社ＺＥＣＴが開発した『マスクドライダーシステム』のみに搭載されている超高速移動の機能のことである。変身者に激しく負担が掛かるため、１度の変身に一回しか使用できない切り札なんだ。

キックホッパーはその切り札を使いミサイルをすべて蹴り返して、ミサイルを放つマシンを破壊したのだ。

「く、このっ！！」

ヒラリ

カイザは専用武器‘カイザブレイガン’を逆手に持って切り掛ってくるが・・・疲れと焦りのある彼の攻撃はキックホッパーには当たらなかった。

「いいかげんにしておけ・・・」

「っ！？」

キックホッパーはカイザのベルトをむしるように奪い取ると草加の変身は解除される。

「もう黙ってろ・・・」

ドス！

「な、なんで変身をと、解く？」

そして矢車も変身を解除し、草加の鳩尾を殴って意識を刈り取った。

「・・・生身の人間に仮面戦士の力は使わない・・・仮面ライダーなら当然だろ？」

こうして矢車と草加の戦いは決着がついた。

『大嫌い』（後書き）

最近、毎日投稿ができていましたが、明日は自分の事情で投稿できそうにありません。かわりに土、日のどちらかに2話投稿しようと思います。

コンボ（前書き）

やっと投稿できました！今回はいつもよりは長い話になりました。

カウンザメダル！現在オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

コンボ

「バットエンドのお時間ですよ～！くふふ！」

理子はナイフを握る髪を手のように扱って、部屋の扉を開けてくる。両手には拳銃が握られている。

「・・・・」

「あは！アリアとなんかしたんだあ！よくできたねぇ！こんな状況で！」

理子は俺の表情で俺がヒステリアモードになっていることに気づいた。・・・というかコイツ、ヒステリアのトリガーを知ってるのか。

「ところでアリアはどこいったのかなぁ？」

「・・・さあな」

「ああ、そういうキンジ、ステキ。ゾクッてきちゃう。勢い余って殺しちゃいそう！」

「っ！」

理子が銃を向けてきた瞬間に俺は酸素ボンベを盾にした。撃てば爆発するからさすがに撃てないだろうな。

「っはぁ！！」

理子の動きが一瞬止まる。その隙に俺は酸素ボンベを理子へと投げつけて、すぐさまバタフライ・ナイフを抜く。

「っ！・・・こっのぉ！」

バン！

理子の放った銃弾が俺に迫ってくるのが視える。俺はその銃弾を・・・

ガギィィン

真っ二つに切り裂いた。ヒステリアの俺だからこそできた技だ。そしてすぐさまアリアから借りた黒のガバメントを理子に向ける。

「動くな！」

「アリアを撃つよ！」

理子は体勢的に間に合わないと判断したのかシャワールームに銃を向ける。・・・残念だったな理子・・・そこはハズレだ。

ガタン！

「！！」

ガン！ガン！

天井の荷物入れに潜んでいたアリアは白銀のガバメントで理子の手から銃を撃ち落とし・・・

「やっ！！」

「うっ！？」

２本の日本刀を抜刀すると同時に理子のツインテールを切断した。
ここに来てようやく焦った様子になったな。・・・アリアは日本刀をしまい再び白銀のガバメントを理子に向ける。それに合わせて俺も黒のガバメントを理子に向ける。

「峰・理子・リュパン４世！」

「殺人未遂の現行犯で逮捕するわ！」

これで決まりだ、理子！・・・そう俺とアリアは思っていた。

「・・・ぶわぁぁぁぁか！」

「「！？」」

理子が髪を歪ませた瞬間、飛行機が揺れた。・・・この感覚は・・・急降下している！！

「ばいばいき～ん！」

「アリア！操縦を頼む！俺は理子を追う！」

「分かったわ！キンジ、これを持っときなさい！」

アリアは俺に小型の無線機をパスしてくる。俺はそれをキャッチすると、すぐさま理子を追った。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
　俺はさっきのバーにやってきて、そこの片隅の窓に背中を向ける理子にガバメントを向ける。
「こんな狭い飛行機の中、どこへ逃げようっていうんだい、子リスちゃん？」
「くふっ。キンジ、それ以上近づかない方がいいよ～？」
　壁際には理子を取り巻くようにして爆弾と思われる物が仕掛けられていた。
「ご存知の通り『武偵殺し』は爆弾使いですから」
　理子はスカートを少し持ち上げながらお辞儀をしてくる。
「ねぇキンジ。イ・ウーに来ない？キンジ1人なら連れていくことができるし・・・そこには‘お兄さん’もいるよ」
「理子、これ以上怒らせないでくれ。衝動的に俺は武偵法9条を破ってしまいそうだ」
　武偵法9条。武偵は如何なる状況においても、武偵活動中に人を殺害してはならない。・・・これ以上理子が兄さんのことを言ったら俺は・・・それを守れないかもしれない。
「それはこまるなー。キンジには武偵のままでいてもらわなきゃ」
ドオォォォン！

理子がその言葉を言い終えるとほぼ同時に理子の周りの爆弾が爆発した。そしてそこに穴が開くと理子はそこから飛び降りた。

「またねキンジ～！置き土産もあるから楽しんでね～！」

窓から見えた理子が最後にそう言い終えると黄緑色の人型の鳥のような怪人・・・おそらくドーパントに回収されてどこかへ行ってしまった。それにしても置き土産って・・・何を残して行きやがった。

ドォォォォン！

「っ！！？」

エンジンから爆音が聞こえた。俺は慌てて外を見ると・・・飛行機の左翼の裏からピラニアのような怪物が大量に出現していた。・・・最悪な置き土産だな。

「おい遠山！そこの穴を何とかしろよ！８００年ぶりの酒が台無しだろっ！！」

は？何だ？幻聴か？幻覚か？・・・正直そう思いたい。・・・・いったい何で、ここのバーにアンクがいるんだよっ！！しかもなんかワイン飲んでるし！！

「・・・どうしてお前が乗っている？」

「ん？ああ、さっきやってきたら、ちょうどそこに穴が開いていたから入ってきた。とりあえず穴をなんとかしろ」

「・・・無理に決まっているだろ」

あんな穴を塞ぐなんて無理だ。・・・って、いかん！今はコイツなんかを構っている暇はない。あのピラニア共を何とかしないと！

「変身っ！！」

『タカ！トラ！タコ！』

俺はオーズの亜種‘タカトラタ’にいきなり変身し、穴から外に出ようとする。するとアンクは引き止めるかのように話かけてきた。

「遠山・・・お前・・・‘コンボ’のことは知っているか？」

「知らないな・・・ハァァァ！！」

時間が惜しい俺はそう言ってきたアンクに振り向かずに外に出て行ってタコレッグの能力で飛行機に貼りつきながらピラニアにトラクローを振りかざした。

「・・・バカか？・・・いくらヒステリアのお前でもこの数は無理だぞ・・・今のお前の実力じゃ・・・絶対にな・・・」

アンクのつぶやきは・・・戦っている俺には聞こえなかった。

・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

その頃、武偵高ではというと・・・

「おいっ！アリアの乗った飛行機がハイジャックされたって本当か！？」

俺の友人その２　車輌（ロジ）科の武藤剛気は慌てて対策室となっていた俺らの教室に入ってきた。するとさらに別の生徒が教室に入ってくる。

「新情報だ！飛行機が飛ぶ前に、武偵高の生徒が一人入っていったらしいぞ！！」

「・・・まさか・・・遠山君？」

俺の友人その３　不知火亮は周りを見渡して俺がその場にいないことに気づきそう呟いた。

「なんだと！遠山が乗っているのか！？こうしちゃいられん！大切な後輩を助けにいかねば！！行くぞ剣崎！」

「はいっ！橘さん！」

『『ＴＵＲＮ　ＵＰ』』

『『ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ　ＦＵＳＩＯＮ　ＪＡＣＫ』』

橘先輩は赤い銃使いの仮面戦士，仮面ライダーギャレン，に変身するとすぐさま強化飛行フォームであるジャックフォームへと強化変身すると、俺の苦手なタイプの性格の剣崎（けんざき）一馬（かずま）も青い剣士の仮面戦士，仮面ライダーブレイド，に変身して橘先輩と同じくジャックフォームに強化変身した。

「今行くぞぉぉぉ！！」

「ウェェェイ！」

「落ち着けよ先輩！剣崎！その飛行機がどこを飛んでいるのかまだ分かってないだろ！」

窓から出て行こうとしたギャレンを武藤が前に出て止める。

「現在、通信科の中空知さん達が捜索中です」

『こちら情報科。聞こえますか？』

情報科の中空知から連絡が来る。

「ああ、聞こえてる！それより飛行機の場所は分かったのか？」

『はい。現在は浦賀水道上空だと思われます。・・・そしてさらに新たな情報としてピラニアのような怪物に飛行機が襲われているとの情報が入りました』

「なっ！？やばいじゃんか！？・・・仮面戦士科の生徒でそこにいける奴らは？」

『もうすでに秋山さんこと、仮面ライダーナイト。ハバタキさんこと、仮面ライダー羽撃鬼。レオさんこと、仮面ライダーサイガ。照井さんこと、仮面ライダーアクセルブースターの４名の仮面戦士が現場に向かっております』

「なんだと！？今、俺達もいくぞぉぉぉぉ！！」

ビュン！

ギャレンとブレイドはその話を聞くと、急いで窓から外へ出て、空へと飛び去っていった。

「あ～あ。あの先輩行っちまったよ。・・・大丈夫かよ？」

「あの先輩・・・自覚はないけど遠山君との相性はすごく悪いんだよね・・・」

「それに剣崎もキンジと仲悪いんだよな・・・」

基本的に橘先輩は‘騙され易い’・‘大食い’と、迷惑な行動をしてくれる。剣崎は・・・俺と違って仮面戦士の力を誇りに思っているから接しにくいんだよ。

「余計なことしなければいいんだけどね」

・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

『タカ！カマキリ！タコ！』

「ハアァァァ！！」

ザッシュ！ザッシュ！

オーズ‘タカキリタ’となった俺はピラニアの怪物・・・ピラニアヤミーをカマキリソードで切り捌いていくが・・・

「ハァ、はぁ・・・くっ！？キリがないな・・・」

「「「シャァァァァァ！！」」」

・・・正直全然減っているように見えないな。

『キンジ！！聞こえる？』

アリアからの無線だ。

「どうしたアリア？ちょっと今は忙しいんだが・・・」

『なんか突然やってきた金髪から事情は聞いているわ。コックピットの人たちはみんな気を失っていて、飛行機は燃料漏れをしているから自衛隊の支持で安全な海上に不時着させるわ！』

横を見ると自衛隊の戦闘機が飛行機の真横についているのに気づいた。バカか、アリア！海上に安全な場所なんてあるわけないだろ！

「それは止めておけ。・・・ここからだと・・・」

「ここからだと学園島の空き地島に着地するべきだぞ遠山！！」

「ＹＥＳ！！」

「思い切り振り切るぜっ！！」

「・・・・・」

「あれは！？」

いきなり空き地島に着地しろと言ってきたのは同じ2年の仮面ラ

イダーナイトこと，秋山煉，（あきやま　れん）。そしてその横でＹＥＳと叫んだのは同じく2年の生徒で留学生である仮面ライダーサイガこと，レオ・アレキサンドル，。そして一人無言だったのが3年の仮面ライダー羽撃鬼こと、ハバタキ先輩の3人がやってきてピラニアヤミーと戦ってくれていた。なんか「振り切るぜ」って言ってる仮面戦士は始めて見るな。・・・まぁ、人手不足だったからありがたい。

「アリア・・・そういうことだからアンクと一緒に飛行機を運転して空き地島に着陸させるようにしてくれ。地面についたらオーズの力で止めるようにする」

『分かったわ！ほら金髪！あんたも運転しなさい！』

『しかたねぇ。ちょっと待ってろ！5秒でこいつの動かし方を理解してやる』

ガッ！

何かを掴んだ音が無線から聞こえた。おそらく機長の記憶を探っているんだろうな。グリードにはそういうこともできるって聞いたこともあるし・・・

『だいたい分かった。・・・それよりも遠山・・・お前はたしかウヴァのコアメダルを5枚持っていたよな?』

「ああ、クワガタとバッタが2枚にカマキリが1枚だ」

「なら地面に着地すると同時に同じ属性の異なるコアメダルでコンボを発動しろ」

この後、俺は知ることになる。・・・オーズの真の力・・・コンボの力を・・・

コンボ（後書き）

次回はいよいよコンボが登場！今日中にもう一話更新します。

電撃分身（ガタキリバ）（前書き）

本日2回目の投稿。そしてようやく２０話にして緑のコンボが登場。

カウンザメダル！現在オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

電撃分身（ガタキリバ）

「コンボ？さっきもそんなことを言っていたが・・・いったいそれは何なんだ？」

コンボなんて遠山家の俺ですら聞いたことがないぞ。・・・いったいどんなもんなんだ？

「ハァッ！」

俺はアンクとアリアの２人と通信しながらも片手のカマキリソードでピラニアヤミーの一匹を倒し、セルメダルへと変える。・・・こいつら一匹、一匹は弱いが・・・数が異常なんだよな。見た感じ残り１０００はいそうだな。不幸中の幸いはヤミーが全部、俺を含む仮面戦士を狙っているってところだよな。もしこの数のヤミーが飛行機のほうを狙ったら大惨事だ。

『まぁ、ヘタすりゃ死ぬな』

『えっ！？』

アリアの驚いた声が聞こえた。・・・にしてもアンク・・・そんなことをサラッと言うなよ。

『その力を制御できれば間違いなくこのヤミー共を殲滅できるほどのとてつもない力だ。・・・どうする？』

『そんなのやめなさい！！リスクが高いわ！！』

「・・・そうだな」

確かにリスクは高い。でも・・・それでも俺は・・・目の前で消し去られそうな命があるのなら、この手で守りたい！だから俺は・・・

「アリア・・・俺は君を死なせたくはない。だから・・・コンボを使う」

そもそも武偵の仕事自体、命がけの仕事だしな。元からリスクが高いんだよ。

『・・・あんたは武偵を辞めるんでしょ？だったら武偵のまま死んだら負けよ。それにあたしもまだママを助けれてないから、死ぬつもりもないわ』

アリアのその約束は俺がここで死ぬことを許されない発言だった。・・・ヒステリアの俺は何が何でも女との約束を守ろうとするんだろ？だったら今回もその約束を守ってくれよ。

「ああ、分かってる」

絶対に失敗できないな。・・・よし、覚悟は決まった。

「神崎！それともう1人の操縦者！もうすぐ着陸だ！」

仮面ライダーナイトは空中で戦いながらも飛行機を誘導してくれている。するとそこに割り込んでくるかのように自衛隊からの通信が入ってくる。

『何をやっているんだ諸君!!我々の指示に従え!!』

「大丈夫かぁぁぁぁ!!遠山ぁぁぁぁぁぁ!!」

「ウェェェェェイ!」

『っ!?　なんだ君達は!?』

いきなり飛んできたギャレンとブレイドのジャックフォームは自衛隊の戦闘機スレスレを横切った。おかげで彼らの注意を引きつけてくれてるな。

「ありがとう御座います橘先輩・・・それと剣崎」

タカヘッドの超視力で暗くても見えている空き地島に飛行機は降りていく。アンクも鳥のグリードだから見えているんだろうな。この飛行機に必要な滑走距離は２０５０メートル。そして空き地島の長さは２０６１メートル・・・ギリギリだ。

『おい、着陸するぞ!こいつ等を死なせたくなかったらしっかり止めろよ!!』

「ああ・・・やってやるさ。少なくとも今の俺は・・・仮面ライダーオーズだからな」

飛行機のタイヤが地面に触れたタイミングで俺はタカとタコのコアを外してクワガタとバッタのコアメダルを入れる。そしてすぐさまオースキャナーでベルトの3枚のコアメダルをスキャンする。

『クワガタ!カマキリ!バッタ!ガ～タッ!ガッタガタッキリバガッタキリバッ!!』

カマキリアームはそのままにタカヘッドだった頭部はクワガタヘッドに、飛行機に張り付くためのタコレッグはバッタレッグへと変化する。

全身に物凄い力を感じる。この姿が緑のコアメダル３枚のコンボ・・・ガタキリバコンボか。

「おおぉぉぉぉぉ！！」
ヴォン

俺は叫びながら飛行機の上から飛び降りて飛行機の前に立つ。すると俺が・・・ガタキリバの俺が増殖するように分身した。・・・これがコンボの力なのか！？

『き、キンジが増えた！？』

『ハッ！成功のようだな！』

「「「「「おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」」」」
ギギギギギギ

５０人まで増えた俺は新体操のピラミッドのように集まり、飛行機を止めにかかる。一つ一つの力は小さいかもしれないけどな・・・重ねればこんな飛行機だって止められるんだよっ！！
ドゥン・・・シュー・・・

飛行機は空き地島から落ちるスレスレの所で止まった。・・・だけど勝負はここからだ！

俺はすぐさま俺の方に向かってくるピラニアヤミーに立ち向かう。

「「ハァァァ！！」」
斬る

「「セイッ！！」」
殴る

「「セイヤッ！！」」
蹴る

「「セイッ！！」」
踏み潰す

ガタキリバとなって５０人まで実体のある分身をしている俺はピラニアヤミー達に咬まれながらも、無理やり引き剥がしてカマキリソードでピラニアヤミーを斬る。バッタレッグで蹴るなどの戦いをする。

「なんていう力だ・・・」

「・・・ＷＯＮＤＥＲＦＵＬ！」

ナイトとサイガからそんなつぶやきが聞こえてきた。・・・こんなに分身してるんだ。同じ仮面戦士だって驚くのは当然だよな。

「「「シャァァァ！！」」」
ゾロゾロ

ピラニアヤミーは飛行機から離れて空中に集まると一箇所に集ま

って1つの巨大なピラニアの怪物になる。全部合体したわけではなく、集まって大きな生物に見せているだけだから良く見ると所々でゾロゾロと動いていて少し気持ち悪い。

『おい遠山！そろそろ決めちまえ！』

アンクとアリアが飛行機の操縦席の窓から見える。アリアは何処か不安そうな顔だ。・・・まあ、アンクの言うとおりそろそろ決めないとヒステリアが終わりそうだし、体力のほうも限界だな。

「これで決める！」
『スキャニングチャージ！』
『『スキャニングチャージ』』

俺がベルトのコアメダルを再スキャンすると、俺の分身も一斉にベルトをスキャンした。たぶん周りから見ると凄い光景なんだろうな・・・。

「シャァァァァ！！」

そんなことを一瞬考えていると巨大ピラニアヤミーは口からビームのようなものを放ってくる。

「セイヤァァァァ！」

「セイヤァァァァ！」

「「「セイヤァァァァ！」」」

総勢５０人ものオーズ　ガタキリバコンボが一斉に跳び上がりビ

ームを避けると、一斉に跳び蹴り‘ガタキリバキック’を巨大ピラニアに決めた。

「ギエェェェェェ！？」

巨大ピラニアヤミーは空中で爆発し、大量のセルメダルとなって地面に散らばる。そして俺も1人に戻って着地した。

「ハァ・・・ハァ・・・ヒステリアは・・・終わってんな・・・そ・・れで・・・も・・」

俺は・・・今度こそ手を伸ばせたようだ。

「キンジ～～！！」

「遠山！！」

「・・・・・おう」

俺の元に飛行機から降りたアリアとアンクが向かってくるのが見える。それを視界に捉えた途端、オーズの変身が勝手に解ける。・・・そろそろ俺の体力も限界だな。・・・そう言えばアンクから計画のこと聞けてないな。ちゃんとアイツを問い詰めないとな。

バタリ

俺の体力はそこで尽きて意識を失った。

電撃分身（ガタキリバ）（後書き）

以前あと4～5話でアリア編が終了と言っていましたが思ったよりも早く、次回でアリア編が終了です。

BGMくらいには（前書き）

今回でアリア編が終了。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

BGMくらいには

ハイジャック事件から数日が経ち、だいぶコンボの疲れなどが治って武偵病院から退院した俺はアリアに呼ばれてクスクシエに来ていた。アンクにも来てもらって‘計画’とやらを聞きたがったが・・・あいつはあの事件の後、すぐどこかへ行ったらしい。

「キンジ、あの金髪はいったいなんだったのよ？」

「まぁ、知り合いでは・・・あるな」

声には出さないがアリア、お前も一応あってるはずだぞ。・・・怪人体だろうけどな。

「ほんっと、死ぬかと思ったわ」

「まったくだな・・・」

今、振返っても自分のやったことにゾッとするぜ。ライダーシステムにも色々あって分身する仮面ライダーは他にもいるけど俺の変身するオーズの分身数はその中でも群を抜いて多い５０体分身だったもんな。しかもあれは負担がでか過ぎてアリアによると、俺は３日間も起きなかったらしい。・・・しばらくコンボは控えるか。

幸いなことに情報科の人達ががんばってくれたおかげでマスコミにオーズのことは騒がれなくてすんだが・・・俺が仮面ライダーって言うのは、この武偵高全学年に知れ渡っちまった。今まで、俺の知り合いの一部しか知らなかったのに・・・

「ま、まぁ、とりあえず元気だしなさいよ！あたし達、ちゃんと生きてるんだし！！」

「・・・・そうだな」

確かに俺達は生き残った。乗客も誰一人死なせずに・・・

「今回の件でママの『武偵殺し』が免罪って証明できたから・・・弁護士の話だと最高裁単位で公判が延びたわ」

「そうか」

おめでとう、と言う空気でもないので、一応そう返しておく。

「ねぇ、あんた、なんで・・・あの飛行機にあたしを助けにきたの？」

その答えは・・・決まっている。

「少し前にも言ったよな？・・・『手を伸ばせば助けられるのに手を伸ばさなければ、死ぬほど後悔する』って・・・」

「べ、別にあたし一人でも何とかできたわ！！」

「・・・ふーん・・・」

俺は素っ気なく返事をした。

「・・・ごめん、今のウソ・・・ほんとは理子もヤミーも飛行機も

1人じゃなんともならなかったわ。あんたがいなかったら・・・きっとあたし・・・」

アリアは珍しくモジモジとしたしゃべり方をする。

「だから今日はお別れを言いに来たの」

「お別れ？」

「やっぱりパートナーを探しにいくわ。ほんとはあんたならよかったんだけど・・・約束だしね」

「約束？」

何だっけな？・・・自分から言ったはずなのに忘れちまった。

「1回だけ、って約束でしょ」

「あ、ああ・・・」

そういえばそんな約束もしていたな。・・・一緒に依頼を受けるのは1回だけ。『武偵殺し』の事件が解決するまで・・・。

「武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ。・・・だから、もう追わない」

アリアはさらに言おうか、言うまいかを迷ってから、俺をまっすぐ見つめてきた。ついでに言うと何気に店の奥の厨房から千代子さんがニヤニヤしながら俺らのことを見ているし・・・

「キンジ・・・あんたは立派な武偵よ。・・・だから・・・もうドレイなんて呼ばない。だからもし気が変わったら・・・その、もう1度会いに来て。その時は今度こそ・・・あたしのパートナーに・・・」

まだ諦めきれてない様子のアリアの申し出を俺は・・・

「・・・悪い・・」

目を逸らしながら断った。・・・俺は武偵になる気はないんだ。・・・兄さんやオーズのこともあるしな。

「い、いいのよ。いま言ったことは忘れて」

アリアは何かを思い出したように時計を確認する。

「あっ、もうこんな時間?そろそろいかなきゃ!」

「約束でもあるのか?」

「うん。お迎えが来るのよ。あんなこともあったしロンドン武偵局からね。だから時間までに女子寮の屋上に行かなくちゃならないの」

ロンドン武偵局・・・そこはアリアが武偵として活躍していた場所だ。

「そうか・・・見つかるといいな。・・・パートナー」

「えぇ。絶対に見つけるわ!・・・じゃあね」

アリアはあっさりと店のドアを開き・・・外に出て行った。そし

てアリアは外に止まっていた車に乗って、女子寮へと向かって行った。

「・・・・・」

・・・これでいいんだ・・・これでいいはずなんだ。そう自分に言い聞かせていると厨房から千代子さんがこちらにやってきた。

「アリアちゃん・・・追いかけなくていいの？」

「・・・いいんですよ。・・・これで・・・」

これで俺は‘普通’を手に入れるんだ。あんな台風みたいな出来事なんて・・・とっとと忘れて・・・そう思っているとアリアからもらったレポナンの付いた携帯が視界に入った。

「・・・アリア・・・」

俺はレポナンを握り締めると千代子さんはすべて察してるように話しかけてくる。

「キンジ君の性格じゃ、アリアちゃんをこのまま独奏曲のままになんてできないでしょ？」

「・・・・・」

バッ！

俺は外に出てオーラインクロスに跨ると、すぐさまアリアの乗った車を追うように走り出した。

俺はこれまでの遠山一族のように、正義の味方、にはなれない。・・・それでも・・・アリアの味方にはなれるかもしれない！

・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・・
女子寮の屋上、アリアはロンドン武偵局のヘリの前で泣いていた。

「ヤダよ・・・いやよ・・・キンジ・・・あんたみたいな武偵・・・見つかりっこない・・・よ・・・」

「時間だぞ神崎。乗ってくれ」

「うぅ・・・わ、分かったわ」

アリアは黒服のロンドン武偵局の指示で、泣きながらもヘリに乗り込む。・・・そして飛行機が飛び始めたところに・・・

「アリアァァァァァ！！」

俺は間に合った。

俺はがむしゃらに叫ぶ。

「アリアァァァァァ！！」

「俺は駄目なヤツだからお前に合わせることなんてできないと思うっ！それでも俺はっ！お前のＢＧＭぐらいにはなってやる！！」

だから・・・だから・・・

「行くな！アリアァァァァァァ！！」

ガラッ

ヘリの扉の開く音が聞こえた。うつむいていた俺はその音に反応して上を見てみると・・・アリアが飛び降りてきた。

「来るのが遅いわよ！！バカキンジ！！」

「えっ！？お前っ！？・・・・えぇぇぇぇぇぇ！？」

・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・

「なっさけないわね～女の子一人受け止めただけでそのザマなんて」

「・・・うるせぇ・・・」

あの後、なんとか俺はアリアを受け止めて男子寮に戻ってきた。ロンドンの武偵を説得するのに時間がかかっちまって、もうだいぶ日が暮れてきている。

「そういえばアリア。理子がお前のことを‘オルメス’って呼んでいたが・・・あれっていったい・・・」

「あんたバカ？‘オルメス’はフランス語の読み方よ。あたしのほ

んとの名前は『神崎・ホームズ・アリア』・・・シャーロックホームズ４世よ」

「・・・・は？」

俺はアリアを全体的に見る。・・・ありえねぇだろ・・・こんなホームズ。・・・そんな考えを心の中で持ちつつも俺は部屋の鍵を開けようとした。

ガチャ

「あれ？開いてる・・・まさか・・・」

勝手に鍵を開けて入ってくるヤツなんて・・・きっとアイツだ・・・。俺は犯人の目星をつけながらも部屋の扉を開く。

「遅かったな！待ちくたびれたぞ！」

「あっ！あのときの金髪！」

やっぱりアンクがいたよ。つーかなんでアンロックスキルが高いんだよ？８００年前の怪人のはずだろ？

「遠山・・・いや、キンジ！お前、俺の計画・・・『コアメダルの総取り』を手伝え！！」

「は？」

あまりにもいきなりのことに一瞬、思考が停止した。

「計画の間は俺のタカメダルは貸してやる！ありがたく思え！」

「ちょ、何言ってんのよあんた！キンジのパートナーはあたしよ！依頼ならあたしにも許可を取りなさい！！」

アリアも状況が理解できていないようで少し焦っている様子だな。

・・・そこにさらに追い討ち攻撃がやってきた。

ドンドンドン

「キンちゃん！どうしてメールの返信をくれないの！？女の子と同棲してるってホントなの！？」

「うっ！？」

扉を叩く音と共に白雪の声がした。俺は慌てて携帯のメールを見ると・・・メールが４９件も来ていた。・・・それも全部白雪から。

「・・・入るよ・・・キンちゃん！！」

シャキン

ドォォォォォン

鋭い金属音とともに俺の部屋の扉は吹っ飛んだ。・・・アンクでも壊さないで入ってきたのに・・・。

「やっぱりいた～！神崎・Ｈ・アリア～！」

「えっ！？あんた誰よ？今、取り込んでるんだけど！！」

「いや、俺は後でいい。お前らで勝手にやってろ」

そうアリアに告げたアンクは俺の方へ歩いてきた。・・・アンク・

・・何でこんな時に空気を読むんだよ。

「そうさせてもらいますっ！・・・キンちゃんを汚した罪・・・死んで償え～！！」

・・・どうやら俺は・・・平穏からさらに遠退いたようだ。

ＢＧＭくらいには（後書き）

次回は以前から言っていたように登場人物紹介を書き、その次から白雪編を始めようと思います。

登場人物紹介（前書き）

増えたら更新します。原作キャラの説明はキンジ以外少ないです。
それと登場回数の少ないキャラも説明が少ないです。

登場人物紹介

東京武偵高

2年生

名前：遠山キンジ
　変身ライダー：仮面ライダーオーズ
　チーム：バスカービル　リーダー

本作の主人公。1年の2学期までは強襲科に所属していて入学当初はヒステリアで試験に臨んだためSランクだった。1年の3学期から探偵科に転科したが、アリアとの出会いをキッカケに仮面戦士科になってしまった。現在は仮面戦士科と探偵科の掛け持ち状態。
性的興奮によってヒステリアモードになること以外にもオーズの力を受け継いでいるが、どちらもあまり使いたくないと考えている。しかし激化していく戦いの中で2つの力は自分の周りの人を守るためには必要だと気づき、以前よりは積極的に力を使うようになった。オーズの力のことは遠山家にいた頃に大体は聞かされていて、それぞれのメダルの効果も知っているようだが、コンボについては聞かされてはいなかった。一人暮らしの時期があったおかげで家事は得意。原作よりも通常モードが強く剣崎曰く「書類上はEランクだが実際はAランクはある」とのこと。オーズの力の暴走を恐れて欲望を持つことを恐れている。しかしそのことが仇となり、その欲望の隙間に紫のコアメダルが身体に入ってしまう。

名前：神崎・H（ホームズ）・アリア
　チーム：バスカービル　副リーダー

本作のヒロイン。好物はももまん。性格は原作通りツンデレで設定もほとんど変わっていないが、『ママを自由にしたい』という欲望からタカヤミーが作られた。アンクがその時の怪人だということを知った時は驚いたが、幾らかの事件を通して信用に値する者だと認めた。キンジがもらったはずのトラカンに『トラくん』と名づけて自身のペットにしている。宣戦会議で殻金が抜き取られてからはキンジの紫のメダルと緋緋色金が共鳴するようになってしまった。

名前：アンク
チーム：バスカービル

復活したグリードの一人。鳥のグリードで復活時に身体を構成していたメダルは7枚。人間体は金髪の青年で『泉・A・信吾』という偽名を名乗る。キンジとのファーストコンタクトは最悪だったものの、人間を傷つける気がないと知られてからは自然につるむようになる。なぜかアンロックスキルが高く、キンジの部屋の鍵をよく勝手に開けて侵入していたが合鍵を貰ってからはそれは少なくなった。足りない2枚のうちの1枚はキンジの持っている物だが、もう1枚は金一が持っていた。最近は時折襲い掛かってくる白雪に恐怖する日々を送っている。好きな物はアイスとワインとカードゲーム。メダルを大量に奪われてからは一定以上のダメージを受けると一時的に右腕だけになってしまうようになってしまった。プロトバースに一度だけ変身したこともある。ココとの会話で８００年前にはクウガに変身していた‘リク’という青年と共に最凶の王と戦っていたことが判明した。自分のコアメダルを作った人物を軽々しく語られることを嫌う。基本的にメダジャリバーはアンクが管理していて、必要と判断したら自身のメダルも渡す。

名前：星伽白雪

チーム：バスカービル

キンジの幼馴染。キンジがオーズということを最初から知ってる数少ない人物。原作と変わらずのヤンデレっぷりを見せる。「キンジを自分だけのものにしたい」という欲望からクロヒョウヤミーが作られたこともある。キンジのルームメイトのアンクがグリードと知ってからは1日に1度はアンクに斬り掛かるのが日課になっている。

名前：峰・理子・リュパン4世
チーム：バスカービル

『武偵殺し』の真犯人。原作とほとんど変わったところはないが『自分が認められたい』という欲望でメズールにヤミーを作るように要求しピラニアヤミーの『親』となった。一時期姿を晦ますが、最近戻って来てキンジ達と共にブラドを倒した。

名前：レキ
チーム：バスカービル

2年の狙撃科所属の生徒。1年の時にキンジと何度か依頼で組んだことがある。「風」に命じられてキンジをウルスに引き入れようとしていたが後にアリアと和解した。風が聞こえなくなりどうすればいいのか分からなくなっていると、キンジからノブナガの形見であるカニギジメダルとエビギジメダルを預かることとなった。

名前：矢車双　（やぐるま　そう）
変身ライダー：仮面ライダーキックホッパー
チーム：バスカービル

キンジの親友A。仮面戦士科所属の‘元’Sランク武偵。弟が行方不明になってからやさぐれてしまい3学期の試験をボイコットした際にキンジと出会った。ネガティブで「光を求めるな」が口癖だが、キンジに「コイツが一番、光を求めている」と思われるほどに弟の再開を望み、正義感は強い。カマキリヤミーを倒し、自身の欲望に忠実になった草加を止めるなど、準主役といっていいほどの活躍をするときもある。やさぐれる前は初代ライダーの本郷から体術（主にキック技）を教わっていた時期もあった。弟の俊に命を狙われた時は心底絶望したが孤児の兄弟により俊との昔の思い出を思い出し俊を救い出した。俊の件が解決後は昔のような完全マジメ人間とまではいかないが、少しだけ明るくなった。

名前：後藤信太郎　（ごとう　しんたろう）
変身ライダー：仮面ライダーバース（2代目）
チーム：バスカービル

2年C組で強襲科所属でBランク。アイドル警護の依頼でガメルと対峙し、鴻上会長と出会った。真面目な性格で時間もきっちり守る。仮面戦士になりたいと考えている。最近、グリードのことを調べていたら単位が足りなくなってしまっている。伊達さんからバースの後継者として訓練を受けることになり、後にグランザイラス戦で継承した。携帯している武器はバースバスターとデザートイーグル。あだ名は『誤砲』。

名前：明智正太郎　（あけち　しょうたろう）
変身ライダー：仮面ライダージョーカー：仮面ライダーW　（ボディサイド）
チーム：テンペスト　リーダー

２年Ａ組所属。専門科目は仮面戦士科と強襲科を掛け持ちしておりランクはＳ。遠山家の分家で日本の名探偵として知られる明智小五郎の曾孫で「四代目・明智小五郎」とも呼ばれる。女性に優しいハードボイルド'を自称しているが、実際は'女性に甘いハーフボイルド'で口説こうとしては撃沈している（但し陽とコンビを組んでからはそれもなりを潜めている）本家のキンジよりは薄いがヒステリアモードになれる。その際は基本コーヒー飴でヒスる。両親はすでに他界し伯父夫婦に引き取られて育った。２歳年上の姉がいたが、都合により会うことは少ない。

名前：小林陽　（こばやし　あかり）
変身ライダー：仮面ライダーＷ　（ソウルサイド）
チーム：テンペスト　副リーダー

２年Ａ組所属。専門科目は情報科でランクはＡ。明智小五郎の助手である小林少年こと小林芳雄の孫娘。あだ名は‘ライト’。祖父からの才能（＝情報収集力、変装術など）を色濃く受け継いでいるものの女子であるという理由から祖父と母以外の親族からは落ちこぼれ扱いを受けていたが、正太郎と出会ってからはあまりそのことを考えなくなった。正太郎と仮面ライダーＷに変身するようになったが、変身が特殊なため仮面戦士科には所属してはいない。周りの女子が嫉妬してしまうほどスタイルがいい。祖母は天寿を全うし、父は武偵として任務中に炎の中で殉職した。母はミュージアムというライダー用のメモリを開発する会社の社長。

名前：城戸（きど）信司（しんじ）
変身ライダー：仮面ライダー龍騎
チーム：ミラーパラディン

２年Ｃ組の仮面戦士科と情報科の掛け持ちで新聞部ランクはＢ。

正義感の強い熱血漢だが、数少ない常識人の一人であるためか周りに振り回されがちで騙されやすい。尊敬と侮辱の意味でバカと呼ばれる。成績はキンジ曰く下の下、以下らしく国語以外は毎回赤点である。しかし国語、とくに文章力はかなり高い。煉の数少ない友人でいつも喧嘩ばかりだが、戦闘では抜群の連携を見せる。操られて一時的にリュウガにも変身した。

名前：乾　匠（いぬい　たくみ）
変身ライダー：仮面ライダーファイズ
チーム：パラダイスロスト

2年の仮面戦士科生徒。Sランクであるため武偵としては優秀なのだが、無愛想で口が悪く他人と距離を置いてしまうところがあるため、授業はサボりがち。しかし、根は優しく困っている人を放っておかない性格。実はオルフェノクである。キンジとはサボり仲間。出番は少ないが決める時は決めてくれる。

名前：剣崎（けんざき）一馬（かずま）
変身ライダー：仮面ライダーブレイド
チーム：エボリューション

2年B組所属の仮面戦士科で剣道部。明朗快活で信司に負けず劣らぬ熱血漢だが、頭に血が上りやすく周りが見えなくなってしまいがちなのがたまにキズ。仮面ライダーそして武偵であることに強い誇りを持っており、「何があっても決してあきらめない」という信念を持っている。面倒見もよく渉と戦徒を組んでいる。かつて橘と戦徒を組んでいたため、突っ走りがちな彼をフォローすることも多い。一時期、キンジとは仲が悪かったがヤブカヤミーの戦いを通して少し打ち解けた。しかしキンジとの相性はいまいちと言うことは変わらない。

名前：安立明日夢　（あだち　あすむ）
変身ライダー：仮面ライダー響鬼
チーム：牛鬼

２年の救護科の生徒でプラスバンド部所属。戦闘技術は以外と高く、師匠のヒビキには響鬼流を継いでほしいと思われていたが、装甲響鬼とグランザイラスの戦いで自分が何もできなかったのを悔いて、全てを投げ捨てそうになるが、伊達と後藤の説得で医師としても鬼としても人を救うことを決意する。響鬼に変身している時は基本的に紅の姿。

名前：天道総冶（てんどうそうじ）
変身ライダー：仮面ライダーカブト
チーム：ゴッドスピード　リーダー

２年Ｂ組の仮面戦士科でＳランク武偵。「天の道を往き総てを治める男」を自称し、傲岸不遜且つ勤勉無礼な俺様キャラだが、妹の事となると激しく取り乱すシスコン。自分とは正反対な鏡の事は気に入っており、何かと行動を共にする事が多い。料理に対して強いこだわりがあり、武偵高第１・第２・第３食堂に顔を出してはその腕を振るっている。ついこの間までパリの武偵高に短期留学をしていたが妹のために帰ってきた。

名前：照井隆　（てるい　りゅう）
変身ライダー：仮面ライダーアクセル
チーム：テンペスト

ハイジャックに駆けつけてくれた２年Ｄ組の生徒で仮面戦士科。

キンジとの面識が一切なく、名前が覚えられていない。「振り切るぜ」が口癖。正太郎と陽の友人。亜希子から好意を持たれていて、対応に困っている。

名前：那須野亜希子　（なすの　あきこ）
チーム：テンペスト

2年B組所の狙撃科で関西出身。女子テニス部の部長であり、照井からは「部長」と呼ばれている。普段は明るく場を盛り上げるムードメーカーであるが、武偵としての任務中は冷静沈着で的確に標的を狙うクールスナイパーへと変貌する。近接戦闘においてもある程度は対応できるらしくその際はなぜか防弾式のスリッパを使用する。

名前：ジャンヌダルク
チーム：テンペスト

2年の情報科。イ・ウーの使者で30代目ジャンヌダルクの少女。教務科に捕まっていたが司法取引で東京武偵高の2年としてやってきてからはキンジ達の仲間として行動する。

名前：中空知美咲
チーム：テンペスト

2年の通信科でBランクの少女。上がり症な性格で人前では挙動不審になる。ジャンヌと仲が良い。

名前：氷川真　（ひかわ　まこと）
変身ライダー：仮面ライダーG3－X
チーム：G3

２年Ｃ組の仮面戦士科で男子テニス部のエース。しかし基本的には物凄い不器用で箸で豆腐をつかめないため学食はフォークを使えるＡＧＩＴΩに通っている。殉職したと思われていたＧ４こと水樹に対して、仮面戦士としてではなく氷川真として勝負を挑んだ。

名前：小沢純子　（おざわすみこ）
チーム：Ｇ３

２年の装備科のＳランク武偵。帰国子女の超天才。大雑把で唯我独尊、自信家かつ勝気な性格。仮面戦士科が所持しているＧ３ユニットの開発・整備担当者。量産型機体のＧ３－ＭＩＬＤの製造計画にも関わっており、仮面戦士科の戦力増強に大きく貢献している。

名前：神城剣　（かみしろ　つるぎ）
変身ライダー：仮面ライダーサソード
チーム：不明

２年の仮面戦士科。ランクはＡランク。名門家ディスカビル家の長男でスポーツも成績も優秀だが常識がないため基本は信司とは違ったタイプのバカである。最近３年の三咲という女性と付き合っている。

名前：木場勇司　（きば　ゆうじ）
変身ライダー：仮面ライダーオーガ
チーム：パラダイスロスト

２年のＡランク武偵で吹奏楽部。温厚で物静かな性格で、好意を抱いた相手には面倒見よく平和的に接するが、敵と認識した相手は徹底的に攻撃するなど対人評価が不安定。その正体はオルフェノク

であり、Sランクを取れる程の戦闘能力を持つが対人評価がマイナスとなってAランク止まりとなっている。匠の数少ない友達。

名前：桜井悠途　（さくらい　ゆうと）
変身ライダー：仮面ライダーゼロノス
チーム：牛鬼

2年の仮面戦士科でランクはBランク。キンジとは面識がまったくない。クスクシエでバイトをしている亮太郎の姉の野上逢理に片思い中。戦い方はプロレス技が多い。

名前：秋山煉　（あきやま　れん）
変身ライダー：仮面ライダーナイト
チーム：ミラーパラディン　リーダー

2年D組で仮面戦士科。やや不器用だが何だかんだで仲間思いで優しい性格。一応は信司を相棒だと思っているらしい。アンクのカード仲間の1人でもある。

名前：北岡修一　（きたおか　しゅういち）
変身ライダー：仮面ライダーゾルダ
チーム：ミラーパラディン　副リーダー

2年の仮面戦士科でSランク武偵。朝倉とは何やら因縁があり逮捕するために追っている。本人は隠しているが重い病気にかかっていて余命は長くはない。

名前：由羅五郎（ゆら　ごろう）
チーム：ミラーパラディン

強襲科のAランク武偵。誰に対しても屋際しい誠実な性格だが、寡黙で不気味な雰囲気を漂わせているために周囲からは誤解されがち。徒手格闘の達人で、手誰数人を相手にしても負けない程。

名前：武藤剛気

原作より遅い登場となったキンジの友人A。暑苦しいがやるときはやる。モテたいがモテない。

名前：不知火亮

原作より遅い登場となったキンジの友人B。イケメンで強い。モテるが浮いた噂がないためホモ疑惑を持たれている。

名前：平賀文

原作よりかなり早い段階で登場したキャラ。キンジのオーラインクロスを遊び半分で魔改造してとんでもない金額を請求してきた。見た目が小3ぐらいの人。装備科としての腕はかなり高く、パーツさえあればゼクターなどのライダーシステムでも数十秒で修理してしまうほど。

名前：鑑　新　（かがみ　あらた）
変身ライダー：仮面ライダーガタック
チーム；ゴッドスピード　副リーダー

2年C組で仮面戦士科所属で野球部。周りの生徒のキャラが濃いせいでいまいちパッとしない。後藤と共にアイドル警護の依頼でガメルと対峙し、鴻上会長と出会った。天道の妹のひよりの彼氏でもある。

名前：三原修司　（みうら　しゅうじ）
変身ライダー：仮面ライダーデルタ
チーム：パラダイスロスト

2年B組で仮面戦士科所属の卓球部。鑑と同じく周りの生徒のキャラが濃いせいでいまいちパッとしない。橘のせいで銃ライダーは勝率が悪いという宿命を背負わされた。

名前：レオ・アレキサンドル
変身ライダー：仮面ライダーサイガ
チーム：不明

ハイジャックに駆けつけてくれた2年の留学生の仮面戦士。自称アレキサンドル大王の子孫。日本語が苦手。育ちは韓国であり英語も片言である。

名前：草加正人　（くさか　まさと）
変身ライダー：仮面ライダーカイザ（1代目）
チーム：パラダイスロスト

2年の仮面戦士だった。ウヴァとの出会いにより『ジャマなものを消す』という欲望を開放し、カマキリヤミーの『親』となったが、矢車に欲望を止められ武偵高の教師達にかなり怒られて真っ白になっていたが最近復活した。匠とは犬猿の仲。仮面戦士の資格を剥奪されてからは尋問科に転科した。

名前：海堂直哉　（かいどう　なおや）
変身ライダー：仮面ライダーカイザ（2代目）

チーム：パラダイスロスト

2年B組の元強襲科の生徒で吹奏楽部。草加のかわりにカイザになることになり仮面戦士科に転科した。割とお調子もの。特技はギター。匠の数少ない友人。

名前：須藤正志　（すどう　まさし）
変身ライダー：元・仮面ライダーシザース
チーム：不明

プロローグで語られていたバイクジャックの被害者。現在は武偵病院に入院中だったが抜け出して暴れた。『武偵殺しに復讐する』という欲望からカニヤミーが作られていた。しかし事件解決後にシザースデッキ没収をされて再度入院した。これでもAランクの武偵だったりする。仮面戦士の資格を剥奪されてからは真面目に生きようと探偵科に転科した。

1年生

名前：凍条悟　（とうじょう　さとる）
変身ライダー：仮面ライダータイガ

1年A組の仮面戦士科所属ランクはぎりぎりB。『英雄になりたい』という欲望がカザリに利用され白虎ヤミーの『親』となってしまった。寄生されていたとはいえ自分が人々を傷つけてしまったことに絶望するも、キンジの話を聞いて立ち直った。キンジの戦徒になりたいと思ってる・・・というか最近は自分はキンジの戦徒だと

思い込んでいる。１年生で最も出番に恵まれているキャラ。

名前：風魔陽菜

１年Ｃ組の諜報科の生徒でキンジの戦徒。最近はよく凍条と喧嘩をしているが何だかんだで連携は取れている。食べ物に釣られやすく、金銭面でも危うい。

名前：矢車俊　（やぐるま　しゅん）
変身ライダー：仮面ライダーパンチホッパー

矢車双の１つ年下の弟。半年前に行方不明になっていたが突如矢車の前にエヴィルの使者として現れて彼を殺しに掛かった。その理由は「兄を他の人間に殺されるよりなら自分が・・・」という思いからの行動であり本当は殺したくはなかった。エヴィルによって怪人にされたうえに体内に爆弾を埋め込まれるも矢車の必死の説得と努力により怪人の身体ということは変わらないが爆弾は破壊され、しばらくは武偵病院で爆弾を取り除く手術を終えて入院をしていたが退院後は武偵高に編入した。兄は本郷から体術を教わったのに対し、俊は一文字から格闘術を教えてもらった。財布の中身は兄よりはある。

名前：野上亮太郎　（のがみ　りょうたろう）
変身ライダー：仮面ライダー電王

１年の仮面戦士科でＥランク武偵（ただしイマジンが憑依した場合はＳランク並みの力を発揮する）。気弱且つ貧弱でその上有り得ないくらい運が悪く様々な不幸に巻き込まれることは日常茶飯事である。信司と戦徒を組んでいる。一時期はゴーストイマジンに憑依され、幽汽・スカルフォームにも変身していたがモモタロス達によ

って開放された。

名前：紅　渉　（くれない　わたる）
変身ライダー：仮面ライダーキバ

1年の仮面戦士科でAランク武偵。部活は吹奏楽部に所属。人間とファンガイアのハーフ。仮面戦士としての素質は高く優秀な仮面ライダーになれるくらいの実力を持っているのだが、内向的且つ自分に自信を持てない性格で常に幼馴染の静華にフォローしてもらっている。趣味はバイオリン。父親はファンガイアのキングでなかなか会えず、父の友人の光太郎に育てられた。間宮あかりに好意を抱いている。

名前：上条睦月　（かみじょう　むつき）
変身ライダー：仮面ライダーレンゲル

1年の仮面戦士科の生徒でバスケ部所属。普段は気が弱いが変身すると一転して強気になる。パペティアードーパントに操られてた。

3年生

名前：橘柵矢　（たちばな　さくや）
変身ライダー：仮面ライダーギャレン

3年の仮面戦士科のめんどくさい先輩1号。騙されやすい上に、大食いという武偵にとってマイナスなところが目立つ先輩。本人はキンジに頼られてると思っているが・・・別にそんなことはない。

佐代子（さよこ）という彼女がいる。辛党。

名前：名護啓祐　（なご　けいすけ）
変身ライダー：仮面ライダーイクサ

３年の仮面戦士のめんどくさい先輩２号。Ｓランクの優等生で真面目すぎる人間。ファンからは「名護さんは最高です！」と言われているらしい。ウワサでは捕まえた犯人からボタンを毟り取るらしい。最近はファンの人達とイクササイズを始めている。

名前：ハバタキ・・・羽田大輝　（はねだ　たいき）
変身ライダー：仮面ライダー羽撃鬼

ハイジャックに駆けつけてくれた３年の仮面戦士。数少ない飛行できる仮面戦士の一人なのに高い所が苦手。‘羽撃鬼’の名を貰ってから武偵高に入学したため本名は知れ渡ってない。

名前：一條馨　（いちじょうかおる）

３年の狙撃科のＳランク武偵だったが、特捜科へと転科した。射撃の名手であり、仮面戦士科の人間と組んで怪人相手の戦闘をした経験もある。狙撃の腕はレキには及ばないが、使いこなせる銃器の種類と弾丸の威力はレキ以上のものであり、彼女も実力を認めている。

名前：藍川始　（あいかわ　はじめ）
変身ライダー：仮面ライダーカリス

３年の仮面戦士科でＳランク。音矢の依頼でキンジ達の手助けをした。義妹の雨音を溺愛している。周りからロリコン疑惑を持たれ

ていることを少々気にしている。

教職員及び学校関係者

名前：ヒビキ・・・・・・日高仁史　（ひだか　ひさし）
　変身ライダー：仮面ライダー響鬼

　武偵高の教師で専門は仮面戦士科。普段は飄々としていて掴みどころがないが、生徒の悩みを見抜き相談に乗ったり、常に広い視野を持って行動する良き大人。生徒の指導をする一方で常に自身を鍛えることを怠っておらず、学園の教師の中でも最強の実力を持つとされる。大の機械オンチで携帯電話の使い方も未だに解らない。身体能力が変身しなくとも異常に高いためキンジの中では奇人のグループに入れられている。弟子の明日夢に音撃道響鬼流をいつか継いでほしいと考えていたが、彼の決意を聞いて修学旅行？前に継承する。

名前：ザンキ・・・財津原坐王丸　（ざいつはら　ざおうまる）
　変身ライダー：仮面ライダー斬鬼

　武偵高で数少ないまともな教師。専門は仮面戦士科。かつて数々の女を鬼のように愛したという自伝がある。学園で二番目に強い仮面戦士。音撃道斬鬼流の後継者は強襲科の戸田山がいいと考えている。

名前：イブキ・・・和宋伊織　（わそう　いおり）
　変身ライダー：仮面ライダー威吹鬼

天然ボケなところがあるが優しい性格の持ち主。正確には教師ではなく教育実習生の人なのでキンジの中では奇人変人の教師陣の中に含まれていない。

名前：サバキ・・・佐伯昌　（さえき　さかえ）
変身ライダー：仮面ライダー裁鬼

キンジ達が通う武偵高のリアル鬼教師。通称‘鉄人’。何故か変身すると負けることが多く、生徒からは「変身しないほうが強くない？」と言われている。

名前：伊達昭　（だてあきら）
変身ライダー：仮面ライダーバース（初代）

小夜鳴の後任としてやってきた保健医。筋骨隆々とした体格で大量のセルメダルを入れたミルク缶を持ち歩いている。外見通りの大雑把かつ大胆だが観察眼は鋭い。保健室でよくおでんを作っていて、たまに生徒にも食べさせる。キンジは奇人変人の多い武偵教師の中で1，2を争うほどまともな先生だと思っている。武偵高に来る前は戦場で医師をしていたがその際に銃弾を喰らってしまい今も頭部に銃弾があり危険な状態だったことが発覚した。修学旅行？終了後に手術をするため外国へ行ってしまった。

名前：津上昇一　（つがみ　しょういち）
変身ライダー：仮面ライダーアギト

東京武偵高のＯＢで第二食堂「ＡＧＩＴΩ」のオーナー兼シェフ、家庭科の授業も教えている。料理の腕は一流。常に明るく穏和で脳天気かつ少々天然ボケ気味。校内に家庭菜園を作っており、そこで取れた野菜や果物を料理に使っている。

名前：綴　梅子

原作とほとんど変わらないドSな先生。サバキと組めば無敵の拷問タイムの空間を作り上げる。

名前：白石千代子　（しらいし　ちよこ）

第3食堂『クスクシエ』のオーナー。おおらかな性格だけど言うときは言う。

横浜武偵高

2年生

銭形　玄太朗　（ぜにがた　げんたろう）

変身ライダー：仮面ライダーフォーゼ

横浜武偵高2年の一昔前の不良の格好をした少年。その悪そうな見た目に反して曲がったことを嫌う真っ直ぐな性格で武偵になったのも純粋な仮面ライダーへの憧れから。またとても社交的で「学校全員の生徒と友達になる」という目標を常に公言し、他人を引き付ける魅力の持ち主。しかし、その一方で気が短く喧嘩っ早いのがたまにキズ。江戸時代の名岡っ引きである銭形平次の子孫であるため銭投げが得意。

歌星　研吾　（うたぼし　けんご）

横浜武偵高2年の専門科目は装備科でランクはA。成績は優秀なのだが、授業はサボりがちで優希以外の他人と関係を持つことを拒み、何事もドライ且つ論理的に考える性格。父親の遺した設計図を

基にフォーゼドライバーとアストロスイッチを開発する。

レジェンドライダー

名前：本郷猛　（ほんごう　たけし）
変身ライダー：仮面ライダー1号

かつて秘密結社ショッカーと戦い、その後も幾つもの悪の組織と戦った伝説の仮面戦士の一人。現在は警視庁長官だがすでに65歳なためそろそろ定年なのが最近の悩み。矢車の徒手格闘の師でもある。

名前：一文字隼人　（いちもんじ　はやと）
変身ライダー：仮面ライダー2号

かつて本郷と共に幾つもの悪の組織と戦った伝説の仮面戦士の1人。現在は各地を転々として新たに出現したエヴィルの調査をしている。俊の格闘の師匠でもある。

名前：風見志郎　（かざみ　しろう）
変身ライダー：仮面ライダーV3

かつてライダーマンと共にデストロンと戦った伝説の仮面戦士1人。最近は一文字と同じく世界中を旅してエヴィルの調査をしている。正太郎に力と技の格闘術を教えた。

名前：結城丈二　（ゆうき　じょうじ）
変身ライダー：ライダーマン

かつてＶ３と共にデストロンと戦った伝説の仮面戦士の１人。最近までは風見とは別ルートで世界中を旅していた。

名前：神敬介　（じん　けいすけ）
変身ライダー：仮面ライダー？

かつてＧＯＤ機関と戦った伝説の仮面戦士の１人。最近は海の家を経営している。想像以上にタフだったメタルドーパントに驚かされた。

名前：山本大介　（やまもと　だいすけ）
変身ライダー：仮面ライダーアマゾン

かつてゲドンやガランダー帝国と戦った伝説の仮面戦士の１人。現在は世界を転々としてボランティアに励んでいる。

名前：城　茂　（じょう　しげる）
変身ライダー：仮面ライダーストロンガー

かつてブラックサタンやデルザー軍団と戦った伝説の仮面戦士の１人。現在は城南大学の講師をしている。

名前：筑波洋　（つくば　ひろし）
変身ライダー：スカイライダー

かつてネオショッカーと戦った伝説の仮面戦士の１人。最近まではディケイドを探すために世界中を飛び回っていた。

名前：村雨良　（むらさめ　りょう）

変身ライダー：仮面ライダーＺＸ

かつてバダンと戦った伝説の仮面戦士の１人。最近まではディケイドを探すために各地を転々としていた。

名前：沖　一也　（おき　かずや）
変身ライダー：仮面ライダースーパー１

かつてドグマ及びジンドグマと戦った伝説の仮面戦士の１人。現在は横浜武偵高の仮面ライダー部のコーチをしている。

名前：南光太郎　（みなみ　こうたろう）
変身ライダー：仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸ

かつて仮面ライダーＢＬＡＣＫとしてゴルゴムと仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸとしてクライシス帝国と戦った伝説の仮面ライダーの一人。渉の育ての親。現在は前線を引きステーキハウスを経営しており、剣崎や橘、名護と言った生徒たちも通っている。

名前：風祭真　（かぜまつり　しん）
変身ライダー：仮面ライダーシン

かつて財団と戦った戦士。現在は瀬川と麻生の２人と共に日本各地を転々としてエヴィルと戦っている。

名前：麻生勝　（あそう　まさる）
変身ライダー：仮面ライダーＺＯ

かつてネオ生命体と戦った戦士。現在は風祭と瀬川の２人と共に日本各地を転々としてエヴィルと戦っている。

名前：瀬川耕司　（せがわ　こうじ）
　変身ライダー：仮面ライダーＪ

　かつてフォッグと戦った戦士。現在は麻生と風祭と共に日本各地を転々としてエヴィルと戦っている。

イ・ウー

名前：シャーロックホームズ
　変身ライダー：仮面ライダーラス：仮面ライダーコーカサス

　伝説の名探偵にしてアリアの曽祖父。強力すぎて廃棄される予定だった2つのライダーシステムを完璧に使いこなせるほどの圧倒的な実力者。キンジを「最強の仮面戦士になれる」と絶賛したりもした。かつてコアメダルを作り出した錬金術師の1人の子孫。

名前：パトラ

　クレオパトラの子孫であり世界最強の魔女の1人。イ・ウー解散後は金一、成美と共に姿を消した。

名前：遠山金一
　変身ライダー：仮面ライダーファム　：仮面ライダーグレイブ：仮面ライダードレイク：仮面ライダーオニキス

　キンジの兄。女装して「カナ」になっている時にはファムに変身し、そうではない時にはそれ以外の仮面戦士に変身する。作中でも珍しいの複数のライダーシステムを所持する人物。少なくともキンジが知っている限り4つのライダーシステムは金一の手にある。

明智　成実　（あけち　なるみ）
　変身ライダー：仮面ライダーザビー
正太郎の姉。キンジの兄・金一同様高い実力を持つ有能な武偵で正太郎にとっては尊敬する一方でコンプレックスの対象であった人物。’罪を憎み、人を憎まず’を信条とするハードボイルドであり、「時に厳しく、時に優しく悪と戦う武偵」として知られていた。普段から常に白いスーツ姿をしており、端から見れば男性と間違われやすい。イ・ウーへの潜入捜査と世間に自分の死を批判させることで自分以上の素質を持つ弟に武偵への自覚と信念を持たせるべく「武偵殺し」による豪華客船沈没事故によって表向きは死んだことにしていた。スーツ以外の服を着ると性格が一転して、正太郎のトラウマを呼び覚ます存在になる。

ＮＥＶＥＲ

名前：大道・Ｍ（モリアーティ）・カツミ
　変身ライダー：仮面ライダーエターナル

イ・ウーのＮｏ．３であり、シャーロック・ホームズの宿敵ジェームズ・モリアーティ教授の曾孫にあたる人物。モリアーティ家には数学と犯罪コーディネイターの才能が代々受け継がれており、その才能を色濃く受け継いだだけではなく科学、薬学、物理学、犯罪心理学といった分野にも長けており、「モリアーティ家始まって以来の天才」と称されるほどの頭脳を持つ。また「人には遺伝子や生まれ持った才能を超えた可能性がある」と考えており、能力を超え

ることの出来たものに敬意を払い、それ故最も遺伝子至上主義を掲げるブラドの考え方には嫌悪していたため、その娘であるヒルダとも仲が悪い。
感情任せに怒ることはないがいかなる時も午後3時のティータイムは守っており、それを邪魔されたり破られたりすると暴れだすくらいキレてしまう。

泉　鏡水（いずみ　きょうすい）

カツミが戦役に備えて見出した構成員で参謀的存在。元は任侠を重んじる極道の一人であったが、その人脈の広さを買われスカウトされた。ゴツイ体格に反し心は乙女なオカマで常に体をくねらせている。鞭を使って戦う。

羽原　麗香（はねはら　れいか）

ＮＥＶＥＲの構成員。反政府テロ組織の一員で死刑囚であったが、脱走時にカツミ達に助けられた後、メンバーに加わる。クールな性格であるが、低体温体質であることを気にしている。足技を中心とした格闘戦が得意。

芦原　兼（あしはら　けん）

ＮＥＶＥＲの構成員。元々はフランスの外人傭兵部隊に所属しており、銃撃の腕とその戦闘力の高さを買われる。無口で寡黙だが、任務を確実にこなすプロフェッショナル。

堂本　剛蔵（どうもと　ごうぞう）

ＮＥＶＥＲの構成員。元々は環境保護運動活動を行っていたが、

地上げ屋に殺されかけたところをカツミに助けられる。以後その恩義から組織に参加するという義理堅い性格。鍛え上げた肉体美を誇りことあるごとに見せたがるナルシスト。棒術を駆使した格闘戦を得意とする。

ミーナ

ＮＥＶＥＲの構成員の一人。かつてエヴィルの怪人に両親を目の前で殺された上に組織の施設にて非人道的な超能力開発事件を受けていたことで心を閉ざし人間不信に陥っていたが、その施設を襲撃したＮＥＶＥＲに保護され、その際カツミの冷酷さの中にある優しさに触れ心を開き始める。実験施設にいたときの経験からか人見知りしがちであり、カツミ以外のメンバーでもカツミと共に自分を助け出してくれた鏡水、麗香、兼、剛蔵と保護者である井坂にしか心を開いていない。

井坂真紅朗

ＮＥＶＥＲに所属するドーパント専門の医師で普段は東京武偵高の「井坂内科医院」の院長をしている。ミーナの保護者。かつて伊達と共に戦場での支援活動をしていたが、そこで自分の限界を感じてしまい、「戦争そのものを無くすための力」を求めるようになってしまい、偶然目撃したガイアメモリの力に魅了され「イ・ウー」に参加し、その後カツミの誘いを受けＮＥＶＥＲに加わる。ドライバーについては否定的ではないが直挿しの方が強力であると考えており「如何にメモリの毒素を最小限に抑え、力を最大限に発揮するか」という事を前提とした方法を取っている。しかし、強力なメモリに出会うと舌を舐めずる癖と共に興奮してしまう一面があるため、メンバー内ではオカマの鏡水に次いでドン引きされている。

秘密結社エヴィル

名前：神崎士郎
　変身ライダー：仮面ライダーオーディン

　エヴィル8幹部の1人。オーズであるキンジをエヴィルに引き入れようとキンジの前に現れた。その正体はアリアの叔父でありライダーデッキを作った科学者の神崎士郎で、緋緋色金を宿すアリアがエヴィルや財団の目に止まらないように内部から行動していた。

名前：影月信彦　（かげつき　のぶひこ）

　エヴィル最初の改造人間でありエヴィルの？2。

名前：真木喜代斗　（まき　きよと）

　鴻上生体研究所の研究員で通称Ｄｒ真木。小さな人形『キヨちゃん』を常に携帯してる。エヴィルの科学者として働いていたが後にエヴィル幹部に昇格。

名前：白峰貴斗　（しらみね　たかと）
　変身ライダー：仮面ライダーレイ

　イ・ウーとは違う組織のエヴィルに所属する仮面戦士。パペティアードーパントにわざと操られてた。元々イギリス武偵だったが半年前に失踪してエヴィルの仲間になった。基本的にはカザリと行動を共にすることが多い。リロード編の終盤でキンジ達と正気に戻ったノブナガにより逮捕された。

名前：ダニエル・チョウ
変身ライダー：仮面ライダーアックス

白峰の後任でエヴィルの科学者助手となった人物。どういう訳か関西弁で話すのが特徴でアンクからは「エセ関西」と呼ばれていた。ふざけた様な言動だが意外と頭はいい。

名前：アルハート・チョウ
変身ライダー：仮面ライダースピアー

ダニエルの弟。ダニエルと同じく日本語は関西弁を話す。兄弟コンビで動くことが多い。

名前：グラント・ステウリー
変身ライダー：仮面ライダーキャモ

世紀末伝説に登場しそうなキャラ。自分を最強と言い張るがエヴィルの仮面戦士の中では最弱と言ってもいいレベルでデッキの力もほとんど使いこなしていなく、あっさりとファイズに撃退された。一応逮捕されてはいない。

名前：小夜鳴徹・・・ブラド
変身ライダー：仮面ライダーアーク

１２０年前にアークの鎧を盗み出して、まだ実力をつけていなかった音矢を振り切って今まで生きていた怪物。普段はもう一つの人格の小夜鳴の裏にいる。エターナルの攻撃で死に掛けたがアンデットと魔化魍の遺伝子で復活。その後はエヴィルの仲間になった。その後エヴィル支部で再登場するもWとエターナルに敗れた。アークに変身中はブラド自身の再生力は活動しない。

名前：鎌田俊樹　（かまだ　としき）
変身ライダー：仮面ライダーアビス

仮面戦士でありながらＫＩＭＩジャーナルの副編集長だったが、「武偵制度を廃止したい」という欲望からサメヤミーを作られ欲望を暴走させ、現在はカザリによってエヴィルに連れて行かれた。その後はトライアルＦとして矢車の前に立ちはだかるも１号と２号を相手にし、最後はエヴィルを誇りに思いながら自爆した。

名前：ジェームス・トレード二ア
変身ライダー：仮面ライダーストライク

２～３年前にアメリカを騒がせた天才ハッカー。通称ＪＴＣ。狂気じみた残虐な戦い方を好み、戦いを祭りのようなものとして楽しんでいる。ゼイビアックスの直属の部下。

その他

名前：五代祐輔　（ごだい　ゆうすけ）
変身ライダー：仮面ライダークウガ

世界を旅している冒険家。旅の先々でエヴィルの怪人と戦っていて、その実力はレジェンドライダーに引けを取らない。８００年前のことをしる人物達からは‘リク’と呼ばれるが、実際はアークルをその身に宿して記憶と力を受け継いだだけの別人と本人は言っている。しかし容姿も性格もリクとまったく変わらないのでアンクや玉藻などからはリクと呼ばれている。趣味はロッククライミングで

得意料理はカレーライス。キンジの料理の師匠であって格闘技は教えていない。

名前：鴻上光世　（こうがみ　こうせい）

鴻上ファウンデーションの会長。写真や映像は一切なかったため、キンジ達には最初は怪しがられていた。いきなり現れては物語を動かすことをする。キンジからは『おっさん』と呼ばれている。

名前：里中恵理香　（さとなか　えりか）

鴻上光世の秘書。ドライな性格で、仕事は仕事として割り切っている。

名前：先導時忠邦　（せんどうじ　ただくに）

鴻上ファウンデーション宣伝部門担当で痩せ型の３０代後半のおっさん。妻子持ち。ライドベンダーを武偵高に紹介した。

名前：紅音矢　（くれない　おとや）
変身ライダー：仮面ライダーダークキバ

２代目ファンガイアのキング。俺様キャラだが実力は作中でもトップクラスでありキングに相応しい器量の大きさもある。ファンガイアだけあって長生きで１９５歳。しかしこれでもファンガイアでは若い方である。１２０年前にブラドにアークの鎧を盗まれたことを長年根に持っていた。最近はエターナルにアークの鎧を破壊されたことで発生したレジェンドルガ族との外交問題に頭を抱えている。宣戦会議ではエヴィル首領に敗れて出席しなかった。

星伽粉雪

白雪の2歳下の義妹。男嫌いであるためキンジとアンクを毛嫌いするが、騒動の後にキンジとは和解。「お姉様と一緒に居たい」という欲望からカザリによって初の合成ヤミーであるタコジャガーヤミーが誕生した。

名前：星伽風雪

白雪の一歳下の妹。クールな性格で常に敬語を使う。キンジにウルスのことを伝え、外に放置されているアンクにアイスをあげた。

名前：ノブナガ
変身ライダー：仮面ライダーバース・プロトタイプ（数回変身）

エヴィルの研究所で真木が織田信長のミイラと大量のセルメダル、そしてサソリのギジメダルを使って作り上げた人造グリード。誕生当初は自分が何者かも思いだせずに明智光秀にまつわっていそうな人物を襲っていた。キンジ達と出会ったことで人だったことを思い出し、欲望を加速させていく。そして白峰によりカニとエビのギジメダルも投入されて暴走したがキンジの思いが通じて正気に戻る。しかし暴走した影響で長く身体を維持できない状況になってしまい最後は「大切なもの」を手に入れてこの世を去った。

名前：朝倉赳　（あさくら　たけし）
変身ライダー：仮面ライダー王蛇

最近、刑務所から脱走した男。仮面戦士の力を悪用する。「イライラする」が口癖。

名前：トオキ・・・沖田透　（おきた　とおる）
　変身ライダー：仮面ライダー凍鬼

　北海道で活動している３０後半の武偵。パペティアードーパントに操られていた。

名前：景山惣一　（かげやま　そういち）

　矢車が絶望していたときに出会った兄弟の兄。およそ１２歳で弟のシュンとホームレスのような生活をしていた。本編に名前は登場していない。

名前：景山シュン　（かげやま　しゅん）

　矢車が絶望していたときに出会った兄弟の弟。およそ１０歳で惣一とホームレスのような生活をおくっていた。

登場人物紹介（後書き）

アンクを除いたグリードの説明はもうしばらくストーリーが進んでから書く予定の登場怪人で記載しようと思います。

武装巫女（前書き）

今回から『魔剣編』こと白雪編がスタートです！

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

星伽白雪は大和撫子だ。炊事・洗濯が上手で、誰にも優しい・・・そんな人間なはずなんだ。・・・本来は。

「天誅ぅぅぅぅぅ!!」

とか叫んで日本刀をアリアに振りかざす人間ではない・・・はず・・。

「あれ?・・・疲れで幻覚が見えてんのかな?」

「ア、アリアを殺して、私も死にますぅぅぅ!!」

いやいや・・・そんなこと言うはずが・・・

「いいかげん現実を見ろ。目の前で起きてること・・・それが真実だ」

アンクは呆れた眼でアリアと白雪の戦いを見ながら俺にそう言ってきた。・・・なんだろうな・・・アンクに正論言われると凄く悔しい。

「キンジ、なんとかしなさいよ!あんたのせいで変なのが沸いたじゃない!!」

「俺のせいじゃねぇよ!」

「そう！キンちゃんは悪くない！悪いのはアリア！・・・アリアに決まってるぅぅぅぅ！！」
ブンッ
白雪はアリアの脳天目掛けて刀を振り下ろす。
「ふにゃ！？」
バシンっ
アリアは白雪の日本刀を左右の手で挟むように止めた。おお、真剣白羽取り！初めて生で見た！
「・・・いや、お前・・・驚く前に止めろよ」
「え？ああ、そうだな・・・おい2人ともいいかげん落ち着・・・」
またもやアンクに正論を言われつつも、俺は2人の間に割って入ろうとしたその時だった。
バキュン、バキュン！
「えっ？」
ヒュン！
「ん？」
ヒュン！
俺とアンクの耳元を銃弾が横切った。見るとアリアが二丁拳銃を握っている。
「キレた！も～～～キレた！風穴決定！！」

「・・・おいキンジ・・・あの桃色・・・何の冗談だ?」

「は、はは・・・」

できれば冗談でいてほしいな。

「喰らいなさい!」
バン!バン!バン!
ギンッ、ギンッ、ギンッ

アリアは弾倉がカラになるまで銃を撃ち続けるが、白雪はそれを当たり前のように全部弾く。アリア室内で銃はやめてくれ。弾かれた弾が俺とアンクに飛んできてるから・・・

「こっの~~!」
じゃきじゃき!ギィィィィン

今度は2本の小太刀で白雪の平突きと切り結んだ。

「キンちゃん!この女を後ろから刺して!そうすれば見なかったことにしてあげるよ!」

「キンジ!あたしに援護しなさい!あんた、あたしのパートナーでしょ!」

もう2人の状況のわけが分からなくなってきたので・・・俺は・・・

「勝手にやってろ。・・・それよりアンク・・・さっきの『コアメ

ダルの総取り』について、もう少し詳しく聞かせてくれ」

「ああ、分かった」

睨み合う2人から目を背けて俺とアンクはベランダに出て行った。なぜベランダなのかって？物置があるからさ。・・・防弾性のな。

「・・・それで？お前のコアメダルを総取りする目的は何なんだ？」

がしゃん、がしゃぁぁぁん

俺とアンクはロッカーのような物置に背中を預けながら話し合う。・・・部屋の中から色々と壊れる音が聞こえるが・・・考えないで置こう。

「その前に一つ聞かせろ。・・・もしかしてあの巫女・・・星伽の巫女か？」

俺はその言葉にコクンと頷く。星伽白雪は星伽神社に代々使える武装巫女の一族だ。武装巫女というのは長い歴史の中でどう間違えたかは知らんが名前の通り武装するようになった巫女のことだ。それにただ強いだけじゃなく、鬼道術、と呼ばれる超能力を使うことができる。

超能力なんて俺も信じたくないが、武偵高にもそうゆうのを育成するＳＳＲって学科もあるし・・・本当に・・・普通じゃないな。・・・俺の周り。

「・・・まあいい。俺の計画について語らせてもらうぞ。・・・理由は簡単だ。俺達はグリード（欲望）。なにかを『ほしい』と思う欲望だって当然ある。・・・俺は絶対に壊れない完璧な身体がほし

いんだ」

「完璧な・・・身体」

グリードはかつてオーズと，究極の闇，によって倒され、星伽の巫女にメダルを封印されたと聞かされている。・・・つまりこいつは今みたいな不完全な身体じゃなく、バラバラにされない完全な身体がほしいってことか。

「コアメダルをすべて取り込めば・・・きっとそれが手に入るはずなんだ。だからオーズであるお前となら最もそれの成功に近づけると思ってやってきた」

「・・・すべてのメダルを手に入れて・・・人々を傷つける気は？」

「人間は欲望を生み出す貴重な餌だ。そんなことはしねぇ」

「・・・もう少し・・・考えさせてくれ」

その計画に未だどこか不安な俺は答えを決められなかった。・・・こいつだってグリードだし、それに・・・俺を試すとはいえアリアからヤミーを作ったんだ。

「そうか。・・・それじゃ、俺は用事があるんで出かける。・・・答えは早めに決めてくれ」

バッ

アンクはベランダから飛び降りると人間体のまま真紅の翼を羽ばたかせて、夜の空を飛んで行った。つーか出かけるってここに帰って来る気かよ。

「そろそろいいか・・・」

戦争映画みたいな音がようやく部屋から聞こえなくなったので俺は中に入る。俺の部屋の家具はほとんど破片となって散っている。で、その問題の2人は髪をぼさぼさ、服は乱れ、汗やほこりにまみれていた。

「はぁ・・・はぁ・・・しぶとい・・・どろ、ぼう・・・ねこ」

「あ、あんたこそ・・・とっとと、くたばりなさいよ・・・はふぅ、はふぅ」

「で、決着はついたのか？みたところ引き分けっぽいんだが」

「キンちゃん！！」

白雪はいきなり泣きながら俺の襟首を締めてきた。

「ぐっ！？し、白ゆ・・・」

「私が悪いの、私に勇気がなかったから・・」

「それ以上勇敢にならないでも困るわよ」

そしてさらに憎まれ口のアリアに向かって・・・

「き、キンちゃんと恋仲になったからっていい気になるな～！」

じゃら！

袖に仕込んでいた鎖鎌をブン投げた。

「こ、恋仲!?」

じゃり

アリアが盾にした2本の小太刀に鎖鎌が絡みつく。そして2人は引っ張り合いを始めた。

「あああ、あ、あたしは恋愛なんか、どうでもいい!したことないし、する気もないわ!き、キンジは・・・そ、そう!ドレイ!ドレイよ!」

「ドッ!?ドっ!?ドレイ!?」

白雪は何を想像したのか顔を真っ赤にする。

「そ、そんなイケナイ遊びまでキンちゃんにさせるなんて・・・たしかに逆の立場ならイメージしたことはあるけど・・・」

えっ?なんか今、怪しい言葉が白雪から聞こえたような・・・。

ギロッ

いかん!アリアが睨んでる。いいかげん何とかしないと・・・。

「あのな白雪。俺とアリアは武偵同士、パートナーとして組んでるだけだ」

ガシャン

「そうなの?」

俺の言葉で白雪は鎖鎌を手放してくれた。

「俺の言うことが信用できないのか？」

白雪にギリギリまで俺は詰め寄る。するとなぜか白雪は再び顔を真っ赤にした。

「し、信じますっ！そ、そっか。じゃあキンちゃんとアリアはそうゆうことはしてないのね？」

「そうゆうこと？」

「キ、キスとか・・・」

キス・・・ああキスですか。・・・・俺とアリアは飛行機の中でのことを思い出して顔を赤くしてしまう。

「・・・し　た　の　ね！！」

白雪から表情は消えて・・・なんか言葉にできない、しちゃいけない顔となっていた。

「た、たしかにそうゆうことはしたけどっ！でもっ！大丈夫だったのよ！！」

アリアは顔が赤いまま話す。何が大丈夫なんだ？

「き、昨日分かったんだけど！　こ、子供はできてなかったからっ！！」

な、何だよ子供って・・・しかも何だよ、そのドヤ顔？
バタリ
白雪は身体から力が抜けたように倒れてしまう。
「おいアリアっ！何だよそれ！！」
「だ、だってキスしたら子供ができるって昔お父様が・・・」
「子供か！？」
そんな口論をしてる間に白雪はいつの間にかケムリのように消えていた。・・・どうなるんだろうな、俺。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「会長、ドクターから例の物が完成したとの報告がありました」
俺とアリアの口論が続く頃、鴻上ファウンデーションでは何やら動きがあったようだった。
「そうか。・・・それではそれをすぐさま工場のほうで大量生産させ、学園島中に配置するようにするように部下に指示したまえ」
里中さんは腕時計を確認する。
「すいません会長。私、もうあがりの時間なんで明日にさせてくだ

さい」

「・・・・そうか。欲望に忠実なのはいいことだ。・・・いいぞ」

「それじゃ、お先に失礼しま～す」

まさか明日・・・武偵高にあんな物が配置されてるなんて・・・

考えてなかったよ。

武装巫女（後書き）

今回は何気にいろんな伏線を残しました。今週は大丈夫ですが、来週からテスト期間なので来週の投稿は2～3回になりそうです。

仮面戦士の憧れ（前書き）

今回は‘アリア’としての内容は進んでいません。しかしこの物語のストーリーとしてはある意味すごい展開になってしまいました。・・・どうしてこうなった！？

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

「・・・何だ・・・これ？」

翌日、なんか校舎に入った俺は不思議なデザインの自動販売機を見かけた。売られているのは缶ジュースのようだがバリエーションが少ない・・・赤い缶と青い缶、そして緑の缶の三種類だけだ。

「メーカーは・・・鴻上ファウンデーション！？おっさんのヤツ何考えてんだ？こんなんじゃ商品買う人いないだろ」

「まったくだっちゅうの！しかもなんか小銭入れるところでかくね？」

「海堂・・・お前もそう思うか・・・」

俺の隣に立ってこの自動販売機の感想を言ったコイツは、海堂直哉（かいどう　なおや）。草加が仮面戦士の決まり事をやぶったため新しくカイザになることになった2年B組の生徒だ。

・・・それにしても本当にコインの入れる投入口が大きい。・・・まるでコアメダルとかセルメダルが入りそうなぐらい・・・

「遠山！そろそろ教室いかねえとホームルーム間に合わないぜ」

「そうだな・・・急ぐか・・・」

まさかこの自動販売機に、あんな機能、が備わっていたなんて・・

・この時の俺は知らなかった。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「遠山君。ここ、いいかな？」

昼休み、教室で昼食を食っている俺とアリアと矢車のところに目の覚めるようなイケメンがやってきた。俺の友人の不知火だ。

「ああ、俺はいいぞ。お前らもいいよな？」

「構わないわ」

「・・・好きにしろよ」

2人もいいようだったので不知火は「失礼するよ」と言いながら近くのイスに座った。そこにさらにツンツン頭・・・武藤がやってきた。

「聞いたぜキンジ！お前この前のハイジャック事件で仮面ライダーに変身して、すごい分身したらしいじゃんか！！今度見せろよ！」

やっぱり・・・俺が仮面戦士ってことはバレバレか・・・。武藤・・・コンボは本気でキツいんだ。ヒステリアだった俺でさえな。・・・だから気軽に使えないんだよ。

「・・・断る。気軽にあれは使えないんだよ」

「え?マジ?まぁ、いいや。それよりキンジはアドシアードってどうする?」

おい、俺の命がかかってることを「まあ、いいや」ですませるなよ!俺にとっては重要なんだぞ!・・・まぁ、あまりオーズのことを知られるわけにもいかないから口にはしないが・・・。

「俺は・・・日陰で適当にサボってる」

「俺もだ・・・」

正直あんなのまともに参加する気はない。それは矢車も同じなようだ。

「あたしはチアをやるわ。拳銃射撃(ガンシューティング)代表も辞退したし・・・」

「で、僕が神埼さんの代わりに拳銃射撃代表になったんだよ」

アドシアードってのは一般高で言うところの運動会みたいなものだ。まあ、会話で分かる通り競技が普通じゃないがな・・・。

「それにしても何で神埼さんは辞退するのかな?君なら確実に優勝を狙えるのに・・・優勝すれば武偵としての進路もかなり有利になるんだよ?」

「あたしには今、やらなきゃいけないことがあるの。そんなことよりも大切なことをね」

今、やらなきゃいけないこと・・・おそらくかなえさんを助けることだろうな。・・・それがアリアの願いなんだから。・・・ヤミーも作れてしまうほどの・・・な。

「とにかく今はキンジの調教のほうが先よ」

「調教って・・・お前ら変な遊びでもしてんのかよ」

「ちげぇよ。訓練のことだよ・・・一応な」

武藤は頬を引きつらせたので俺は誤解されないように訂正する。

「で、具体的には何をするんだ?」

「そうねぇ・・・まずは明日の朝2人で朝練しましょ!」

やや、不満は残っているがここは従っておこう。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

さて・・・俺の午後からの授業だが、おっさんのおかげで常に自由履修でどこの授業を受けていい俺だったが、今日は珍しく仮面戦士科の学科棟にいた。

・・・普段の授業は格闘技がメインの実戦訓練だが、今日はある人の講座と言うことで聞いているだけで良いものだったんで参加してみることにしたんだ。

「今日の講師は世界で始めて‘仮面ライダー’と呼ばれ、現在は警視庁総監の本郷猛先生だ。みんな、しっかり聞けよ」

仮面戦士科担当の教師にして仮面ライダー裁鬼の‘サバキ’先生が教室に入ってきていきなりそんなことを言ってきた。ふ～ん本郷先生ねぇ・・・って、え!?マジ!?

周りの生徒もそのことを聞いた途端にざわつき始める。

「‘本郷さん’と言ったら４０年前にショッカーとゲルショッカーを倒した伝説の仮面戦士の１人じゃんか!マジで来るのかよ!?」

俺の親戚の明智正太郎‘あけち　しょうたろう’は俺の隣でテンションが上がっている。まぁ、あの人は仮面戦士科の生徒・・・いや、仮面ライダーを志す人間にとって憧れの存在だからな。本当にすごい人だとは思う。・・・でも・・・

「・・・・・」

ガタ

「ん?どうしたんだキンジ?」

「・・・トイレ行ってくる」

生憎、俺は‘仮面ライダー’を志す人間じゃないんでな。・・・この授業はやっぱりサボることにしよう。・・・こんな考えのヤツがここにいちゃ駄目だろ?

「・・・おう!とっとと戻れよ」

たぶん正太郎は俺の心境が読めたから何も言わなかったんだろうな。・・・こうゆうヤツだよな。お前のよく食っているコーヒー飴くらい甘いヤツだよ。

「はぁ、どうせ俺なんか・・・」

俺は学科棟の外に出ながら前に出ると近くの木陰で矢車がの垂れかかっていた。

「・・・お前はあの人の講義に出ると思ってたぞ。・・・だってあの人ってたしか・・・お前に体術を教えた師匠じゃんか」

矢車はやさぐれる前は‘あの人’から体術を教わったことを誇りに思ってよく周りに自慢していたことがあった。やさぐれても‘あの人’の講義は聞きに行くと思っていたんだが・・・意外だな。

「今の俺は・・・あの人に会わせられる顔じゃねぇよ。・・・お前も似たようなカンジで出てきたんだろ？」

「まあ、間違いじゃねえな」

俺の場合はここに自分なんかがいるのは場違いだ。と思ったんだがな。

「ところで相棒・・・あの自販機は何だ？・・・形状が怪しすぎると思うんだが・・・」

矢車は朝の自販機と同じ物に視線を向ける。・・・ここにもあったのかよ。

「・・・この投入口・・・相棒のメダルを入れれるんじゃないか？」

「たしかに俺も今朝、そう思った。・・・・・」

い、いかん。ちょっと入れてみたくなってきた。

「セルメダルでも入れてみればいいんじゃねえか？」

「え？」

この声はまさか・・・振り返ると予想通り・・・

「ハッ！よう、キンジ！」

「アンクゥゥゥゥゥゥ！！」

アンクがいた。しかもなぜか片腕だけ赤い武偵高の制服を着ているし！？

「お前・・・誰だ・・・」

アンクと初対面の矢車は、少し警戒しながらアンクに質問する。

「通りすがりの転校生、泉・Ａ・信吾だ・・・覚えておけ！」

なんか偽名使ってるし・・・いったい何なんだよ！！

「今日からここに通うことにした・・・学科は強襲科、ランクはＡだ」

まさか昨日の用事って・・・こうゆうことだったのかよ。

・・・こうして俺の学園ライフをさらに荒らすことになる暴風が満を持してなくとも降臨した。あれ、おかしいな?目から汗が出てるぞ?

これからどうなるんだ?俺の学園生活は・・・。

・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「里中君。例のマシン『ライドベンダー』の学園島配置は順調かね?」

「はい。およそ８００台の配置は終了しました。今日の夜には予定通り１０００台を配置することは可能です」

「素晴らしいっ!!これで新しい戦闘スタイルを生み出す武偵が続出するだろう!!」

俺がアンクに驚かされている頃、鴻上ファウンデーションの会長室・・・おっさんはやたらテンションが高かった。

「後は武偵高の生徒にセルメダルを支給し、『ライドベンダー』の使用方法を説明するだけだ!!里中君!明日は頼むよ!!」

「すいません会長。明日は私はＯＦＦの日なんで別の社員に頼んで

ください」

会長室が一瞬にして静まり返った。

「そうか・・・では先導時君にでも頼もう」

「最初からそうしてください」

謎の自動販売機・・・『ライドベンダー』は翌日、武偵高の強襲科と仮面戦士科に大きな衝撃を与えることになった。

仮面戦士の憧れ（後書き）

今回は会話の中だけでしたが初代ライダーの本郷猛さんが登場しました。そしてようやくライドベンダーを出すことができました！！・・・自分でもすごい展開にしちゃったと思っています。

ライドベンダー（前書き）

今回もあまり‘アリア’本編は進みません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

翌日、結局アンクのせいで自動販売機の謎を突き止められなかった俺は学園島のハズレに位置する体育館裏、通称『看板裏』に来ていた。

「で、俺は何をするんだ?」

「ぉほん、」

チアガールの格好のアリア・・・チアリアは俺の特訓だけではなく自分の練習もする考えでそんな格好をしてるらしい。それは見て分かるので問題ない。・・・問題は・・・

「・・・・ハッ!」

ブンッ、ブンッ

アリアの少し後ろで笑いながらアリアの小太刀の1本を縦に振っているアンクだ。・・・なんだろう、すごく嫌な予感がするぞ。

「あんたはあたしの中でSランクに値する力を秘めてるわ。でもその力を自由には使えていない。だから必要なのはあんたを覚醒させる『鍵』だわ」

アリア教授は熱弁に語る。自分がその『鍵』ってことには気づかずに・・・

「ハイジャックの後、色々調べたんだけど・・・キンジ、あんたっ

て二重人格ってヤツよね？」

残念だったなアリア。その推理はハズレだ。俺のヒステリアモードは心因的な獲得体質じゃなく、神経性の遺伝体質だ。

「・・・クッ・・ク・・」

ほら、お前の後ろでアンクも笑っているぞ～。

「そんなわけだから、あんたを戦闘のストレスにさらしまくるわ！・・・アンク！！」

「やっと出番か」

ブンッ

へぇ、アリアがアンクのことを名前で言うようになったとはな・・・って、それどころじゃないぞ！？アンクが刀を向けてきやがった！！

「ア、アンク！？な、なんだよそれ！？」

「刀だ。見てわからねぇのかよ？」

「見て分かるって！だからなんで俺に向けてんだよ！？」

「「レッツ、ゴー白羽取り」」

アンクとアリアが声を揃えてそう言ってきた。いくら前に事件を一緒に解決したヤツで俺の知り合い同士だからって、昨日強襲科にアンクが入ってきたばっかなのに、なんでもうそんなにお前ら息ピ

ッタリなんだよ！？もうお前らで組めよ！

「これはバカキンジモードのあんたにストレスを与えて覚醒させて、覚醒後の反撃の流れを掴む訓練なの。アンク、頼んだわよ」

「ク・・・ククク。ああ、分かってる！」

こ、こいつ俺の状況を楽しんでやがる。そしてアリアは少し離れたところでチアの練習を始めるとアンクも笑うのをやめた。

「まあ、真実はどうあれ俺としてもオーズであるお前にもっと強くなって貰わないと困るんだよ」

どうやらアンクから言わせると俺の変身するオーズは未熟らしいな。・・・８００年前のオーズって、いったいどんなヤツだったんだ？

「しっかり止めろよ・・・オラッァ！！」

ブン

「あぶねっ！？」

アンクはいきなり刀を振り下ろしてきたので俺は咄嗟に避けた。・・・峰打ちにしようとしていたらしいが、当たると痛そうだしな。

「避けんな！止めろっ！！」

「いきなりは無理だ！第一こんな練習が役に立つのかよ！」

「だったらあっちの練習は何なんだよ！！」

アンクはグラウンドの方を指差すと、武偵高指定の体育着を着た名護さんと、その他の生徒十数人が何かをしていた。

「イクササ～イズ。俺は正しい。ついて、来なさ～い。腕振りなさ～い、振りなさい！速くしなさい、振りなさい！」

すごく怪しいが体操のような行動だ。・・・なんだ、あれ？

「あれは練習になっているって言えるのかよ？」

「・・・本人達はそう思ってるんじゃないか？」

よし、とりあえず白羽取りから話題がそれて・・・

「・・・どっちみち強くなって貰わないと困るから続けるぞ」

チャキ

「・・・あ～やっぱり？」

・・・なかったようだ。・・・俺は朝練の間ずっとアンクの刀を避け続けた。

・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「全校生徒は直ちに第一体育館に集合してください」

遅刻ギリギリで校舎の中に入り席に着こうとするといきなり放送が聞こえた。

「武藤、いったいどうしたんだ?」

「おうキンジ!なんかよ、鴻上ファウンデーションの開発したマシンの使用方法の紹介だってよ!」

へぇ、いきなりだな。まあ、1時間目のめんどくさい古典が潰れてくれてうれしいが・・・おっさんのところの物だぜ?怪しすぎんだろ。

「はぁ・・・行くか」

俺はやや足取りが重いまま体育館に向かった。そして体育館に入ると、生徒達はステージの上に置かれているある物を見て驚いていた。

「え~、鴻上ファウンデーション宣伝部門担当の先導時です。今回はこの『ライドベンダー』の使用方法について説明させて貰います」

それもそのはずだ。・・・だってあれはあの‘自動販売機’だったからな。

「こちらのライドベンダーはこれから皆さんに支給する『セルメダル』を投入することにより機能を発揮するマシンとなっております」

チャリン

『タカ・カン』

プシュ

先導時とかいう痩せ型の中年男性はセルメダルをライドベンダーに投入し一つの赤い缶を取り出すとプルタップを開けた。するといきなり赤い缶は鳥の形に変形した。

「「「ッ！！？」」」

生徒達はそれを見て驚いている。もちろん俺もだ。

「こちらはタカカンドロイド、追跡行動に優れた小型ガジェットとなっております。保管もカンドロイドのタイプは幾つかありますが、平均稼動時間はおよそ８０時間となっております」

まさかあの変な自動販売機の中にすごいメカが入ってたなんて・・・おっさんの企業を舐めていたぜ。

「そして極め付きの機能となっているのがこちらです」

チャリン
ブゥン！

先導時さんは再びセルメダルを入れて中央の黒いスイッチを押すと・・・自動販売機はバイクの形に変わった。

「「「ええ～～！？変わったぁぁぁぁぁぁぁ！！？」」」

リアンクションのいい生徒達は一斉にそう叫ぶ。俺ももちろん驚いているが叫んでないし、隣にいるアリアや矢車も驚いたような顔をしているけど叫んではいない。・・・まぁ、武藤と正太郎は叫ん

でいるけどな。

「こちらがライドベンダーのバイクモード。最大時速は６００キロまで出すことができます」

６００キロって・・・仮面ライダーに変身してないと耐えられないぐらいの風圧がかかるスピードじゃないか！？いったいなんでこんなスピードに・・・・いや、落ち着いて考えれば分かることだな。

「キンジ・・・もしかして会長からのコレはキンジのためなんじゃないの？」

いや、惜しいとは思うがおそらくは俺がグリードを倒す存在‘オーズ’ってことを前提にしてここに送られてきたんだろうな。学園・・・いや、世界で唯一のメダルを使う仮面戦士である俺にライドベンダーっていうメダルを使うマシンを使わせて・・・俺に手っ取り早くグリードを倒させるために・・・

やがてライドベンダーの説明が終わりいろんな所から「はやく使ってみたい」という声が聞こえてくるが・・・俺は世界に振り回されているような複雑な心境で体育館を出て行った。

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「このバイクをうまく使えれば・・・僕なんかでも英雄になれるのかな？」

休み時間、俺が不機嫌のままアリア達に絡まれている頃、校舎裏のライドベンダーの前で1年生の仮面戦士科の生徒・・・、凍条悟（とうじょう　さとる）は考えこんでいた。

「昨日の本郷さんのような・・・ヒーローに・・・本物の英雄になりたいな」

「面白い欲望だね！その欲望、開放しなよ！」

凍条の後ろには黄色い服を着て灰色の髪に帽子をかぶっていた男がいた。

「えっ？君だれ？」

チャリン

「うっ！？」

帽子をかぶっていた男は黒い猛獣のようなメダルの怪人・・・カザリへとその姿を変えると凍条に出てきた投入口にセルメダルを入れた。

「僕は、僕は英雄に・・・英雄になるんだ」

腕に包帯のようなものが張り付いているように見える凍条は、そう呟くとどこかへ走って行ってしまった。

「ふふ、いったい彼の欲望ではどんなヤミーになるのかな？・・・できればオーズから僕のコアを取り返してくれそうな強さになってほしいんだけど・・・」

俺の知らない所で起こった出来事。これが俺にとって二回目の・・・人の願いを聞き入れたヤミーを倒さなければいけない戦いに繋がっちまうなんてな。

ライドベンダー（後書き）

ライドベンダーのために考えたストーリーのせいで白雪編がなかなか進んでいません。申し訳ありません。しかしこれもストーリー的には必要なことなので、もうしばらくオリジナルストーリーにお付き合いください。

護衛（前書き）

今回は何気に草加がどうなったのか分かります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

護衛

『ゴホっ！？おえぇぇぇぇ。え～2年B組の星伽白雪ぃ、今すぐ教務科（マスターズ）のあたし・・・つうか担任の綴の所にくるよ～に』

放課後、成績優秀で生徒会長な上、いろいろな部活のキャプテンも両立させているはずの完璧超人のはずの白雪が呼び出されていた。

「アリア。お前この前のこと教務科にチクッたのか？」

「あたしは貴族よ。そんなことするはずがないじゃない。そんな卑怯なこと」

ほう、さすがは貴族様だな。少し見直したぞ。

「・・・でもこれはあの凶暴女の弱みを握るのにいいチャンスね」

おい、卑怯なことはしないんじゃなかったのかよ？

「弱みって・・・なんでだよ。白雪はここ数日来てないだろ」

「来てるじゃない！」

え？どうゆうことだ？

「最近、あたしが一人だと、あちこちでドアの前に気配がしたり、物影から見張られていたり・・・」

え？・・・・マジ？

「学校でも渡り廊下から水がかけられたり、どこからともなく吹き矢が飛んできたり、『泥棒猫』って書かれてナイフが刺さった手紙が靴箱の中に入っていたり・・・まあ、その程度だけならよかったんだけど・・・」

おい、まだあるのかよ。

「今朝、女子更衣室のロッカーを開けたらピアノ線を仕掛けられていたのよ！」

ワ～・・・笑い話にできねぇ。

「とにかく弱みを掴むためにも教務科に侵入するわよ」

・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

武偵高には危険な場所が４つある。強襲科、仮面戦士科、地下倉庫、そして教務科だ。ただ教師がいるだけの場所が何で危険なのかって？・・・危ない先生ばっかなんだよ。まともな先生なんて探偵科と通信科、それとザンキ先生ぐらいだと思う。

仮面戦士の決まりを破ってしまった草加でさえ、退学まではされなかったものの、教師陣にこっぴどく怒られたらしくて、最近真っ白に燃え尽きたようになっているしな。噂だと鉄人先生・・・もといサバキ先生の１００連続組み手をやられたとか・・・

まぁ、そんなわけで俺とアリアは現在・・・

「ほらキンジはやく来なさい！」

「はい、はい、分かりました」

本当に教務科に侵入してる。アンクも誘ったんだが、アイツはクスクシエでアイスを食うのに夢中になっていて来てくれなかった。・・・イザって時のアンクシールドができないじゃんかよ。

「いたわ。白雪よ」

そんなことを考えながらダクトを移動していたらようやくアリアが白雪を見つけた。白雪は小部屋のようなところで教師と1対1の状態だった。こんな状況、俺には耐えられそいにないな。

「お前最近、成績下がってるよな」

2年B組の担任にして尋問科（ダギュラ）の教諭の綴が白雪に問いかける。あの先生は精神的に草加を苦しめたらしい。あの草加をだ！それほどヤバイ先生なんだよ。

「まぁぶっちゃけ成績なんかどうでもいいんだが・・・」

教師がそんなこと言うなよ。だからこの学校の平均偏差値が５０以下になってんだよ。

「まあ、もうすぐアドシアードで外からの人も来るんだし、ボディガードぐらいはつけてくんないと困るわけ」

「で、でもボディガードなんて・・・その・・・キンちゃんと2人きりに・・・」

「お前は『魔剣』（デュランダル）に狙われる可能性が高いんだからボディガードを絶対につけろ。これ、命令」

『魔剣』の単語が出たその時、アリアが動いた。

ガシャン

「そのボディガード！あたしがするわ！」

アリアは通風口のカバーを蹴って外すと白雪と綴の間に割ってはいるように飛び降りた。・・・ついでにいうと俺はゆっくりと地面に着地した。

「ん？なぁんだこの間のハイジャックのカップルじゃん」

カップルいうな！！

「神崎・H・アリア。二つ名は『双剣双銃』で、欧州で活躍していた武偵。欠点は泳げ・・・」

「わぁ～～！！」

綴の喋ろうとした何かをアリアは騒いで聞こえないようにした。

「べ、別に浮き輪さえあれば泳げるもん！！」

ほう。アリアの欠点は泳げないことか。綴、グッジョブだ！

「で、あんたが遠山キンジ。性格は非社交的。しかし人脈は広く、ある種のカリスマ性の持ち主。事件解決は・・・青海の猫探し。『グリード』の一味と思われるクモ怪人の撃破。クスクシエの手伝い。タカ怪人の撃破。それとハイジャック事件とピラニア怪物の撃破・・・なんであんたやることの大小が激しいのさ?」

「・・・成り行きです」

「ほんで武装はサバイバルナイフが1本と違法改造のレベッカ・M92F」

ぎく

「さらに『鬼』でもないのに元から個人所有のライダーシステムを持っていた・・・と」

じゅっ!

あちっ!?この教師、生徒にたばこで根性焼きしてきやがった!?

「でぇ〜、ボディガードってどうゆうことだ?」

「言葉通りの意味よ。あたしが24時間体制の無料で護衛をしてあげるわっ!!」

なんでアリアは白雪の護衛を引き受けるんだ?むしろお前が襲う側のくせに・・・

「どうする星伽? Sランク武偵が無料でボディガードをしてくれるっていってるが?」

「い・・・いやです！アリアがいつも一緒なんて、汚らわしい」
ジャキ
えっ？なんか白雪の言葉にムスッとしたアリアが俺に銃を突きつけてきたんだけど・・・
「あたしにボディガードをやらせないと、こいつを撃つわよ？」
「き、キンちゃん！？」
アリアさ～ん。武偵法９条！武偵は人を殺してはいけない・・・覚えてるよね？
「ふ～ん。そうゆう人間関係ね。でぇ～、どうする星伽？」
そうじゃないだろ。教師なら止めろよ。
「じょ、条件があります！！」
両腕を真っ直ぐに伸ばした白雪は、涙目をぎゅっと閉じながら叫んだ。
「キンちゃんも２４時間体制で護衛して！私もキンちゃんと一緒に暮らすぅ～！」
俺の中から・・・何かが飛んでった気がした。
・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「まって～～」

学園島からそれほど遠くない場所の道路。１人の少年がサッカーボールを追いかけて道路に出て行くと少年にトラックが迫ってきた。

「あぶないっ！！」

「？」

その場に通りかかった凍条はすぐさま道路へと駆け出し、生身の人間には出せないような速さで少年を助け出した。

「「「お～～～！！」」」

周りから歓声が沸きあがる。そして凍条の元にその少年の母親らしき人物がやってくる。

「息子を助けていただきありがとうございます！！」

「ありがとヒーローのお兄ちゃん！」

「本当になんて言ったらいいのか・・・・あら？」

親子の前からすでに凍条は姿を消し、どこかの裏路地にいた。

「ふふ、僕はヒーローなんだ」

凍条がそう呟いた瞬間・・・体から白ヤミーが出てくる。

「ガアァァァァ」

バリンッ

猛獣を思わせる雄叫びと共に白ヤミーの姿は白い虎を思わせる姿となった。

・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

「泉・A・信吾君だったね。ちょっといいかな?」

「あ?誰だお前?」

俺が教務科でアリアに銃を突きつけられていた頃、アンクは中性的な顔立ちの少女に話しかけられた。

「僕は小林陽(こばやしあかり)。みんなからは‘アカリ’だから‘ライト’って呼ばれているよ」

「で・・・どうしたんだライト?俺に何か用か?」

アンクは怪しがるように陽を睨む。

「僕のパートナーの正太郎から聞いたんだ。・・・キンジ君が最近『グリード』の一味のような怪人とけっこう戦ってるってね。・・・

・最近よく一緒にいるらしいキミは『グリード』について何か知ってるんじゃないかな？」

「ハッ！・・・聞いて後悔すんなよ」

俺の気づかないうちに・・・俺の周りはどんどん動き出していた。

護衛（後書き）

ようやく、白雪編、が本格的に動き出しました。そしてこの物語としてもそれなりに動かせました。

白虎（前書き）

今日は都合により普段より投稿が遅れてしまいました。申し訳ありません。

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

「ふ、ふつかつか者ですが、よろしくお願いしますっ！」

帰宅後、白雪が俺の部屋にあがった途端に９０度ぐらいのお辞儀をしてきた。何を今更テンぱってるんだよ。

「落ち着け白雪・・・テンぱってるぞ」

「き、キンちゃんと一緒に住むとなったら緊張しちゃって」

緊張って・・・お前この前、この部屋で日本刀振り回してただろ。

「引越しついでにお片づけもするね。散らかしちゃったの・・・私だし」

ジロリ

・・・・見ていない。白雪が台所に監視カメラを設置してるアリアを睨んだのなんて見ていないぞ。

「そういえばこの前転校してきた同居人さんは？きちんと挨拶しておかないと・・・」

察しはついていると思うが、同居人とはアンクのことだ。そういえばまだアイツは学校から帰ってきてないな。・・・何してんだろうな？

「まだ帰ってないな・・・まぁ、もうしばらくすれば帰ってくるだろ」

「そう?なら、その人の分もお夕飯を作らないと」

白雪は台所へと笑顔で向かう。あ!・・・肝心なことを言わないと・・・

「白雪!鳥料理はやめてくれ」

「え?なんで?」

「・・・同居人が鶏肉を食えないんだ」

本当は違う。・・・だって鳥のグリードが鳥料理を食うって・・・共食いじゃんか。その光景を目の前で見ながらそれを食うなんて・・・気持ち悪くて食欲がなくなるだろ?

「分かった!じゃあ今日は中華にするね」

「ああ、そうしてくれ」

「・・・・・」

ギロリ

またもや白雪はアリアを睨んでいたが・・・もう気にしないことにしよう。・・・2人の戦いの間にいると、命がいくつあって足りないような気がするしな。

・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「なるほど。つまり君は『グリード』の1体でキンジ君こと『オーズ』と組んで他のグリードを倒してもらい、君が『コアメダル』を全て総取りしようとしてるってことだね？」

白雪が料理を作り始めた頃、ようやくアンクは陽に俺達の関係を説明し終わった。

「ああ、だいたい合ってる」

「まぁ、たとえ怪人でも人を襲ったり、悪事を働かないかぎり‘怪人討伐’の対象にならないし、武偵にもなれるからここにいても別にいいけどね」

陽の言ってる通り悪事を働いていない怪人は武偵になることはできる。武偵高の生徒でも‘オルフェノク’という類の生徒は学年に3～4人ぐらいはいるって聞いたこともあるしな。

「確認するけど、君達『グリード』は9枚で完全態となれて、たとえ1体だけの完全態でも1日で一つの国は滅ぼせる・・・だったよね？」

「そうだ・・・まぁ、８００年前には一撃で国一つ消せる黒い化け物が2人もいたがな」

アンクは遠い目をしながらかつての戦いを思い出す・・・遠山家や星伽家の人間ですら知らない出来事を・・・

「あ、あのアンク君？感傷にひたらないでくれない？」

「あ、ああ。そうだったな」

「ところでオーズのメダルの説明も聞いたけど・・・今、キンジ君・・・オーズの使えるメダルは？」

アンクは少し考え込む。

「被ってるのもあるが、俺の‘タカ’にカザリの‘ライオン’と‘トラ’。メズールの‘タコ’。ガメルの‘ゴリラ’・・・それと虫頭のコアが３種類だ」

「・・・そのメダルじゃあ、もしさっきの説明にあったカザリのヤミーが現れたときに闘い難いね」

「ああ。せめて‘チーター’のメダルがあればいいんだけどな」

俺はこの時まだ知らなかった。カザリのヤミーが人に寄生して行動するヤミーだったということを・・・。

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

白雪のボディーガードを始めてから数日が過ぎた。朝は俺とアリアが白雪と共に登校。授業中はアリアに任せ、昼はアンクも混ぜて

４人で昼食。そして今日の放課後はアリアもアンクも用事があるとのことで2人で下校をしていた。

「えっ！？またアリアと喧嘩をしたのか！？」

「だってアリアはキンちゃんに失礼な態度ばっかり言ってうるさいんだもん。男子はアリアのことをかわいいって言ってるけど・・・私は・・・キライ」

珍しいな。白雪が人の悪口を言うなんて。

「・・・ある意味では凄い子だと思うけど・・・アリアにキンちゃんを取られたくないの・・・いきなり私とキンちゃんの世界に割り込んできたアリアなんかには・・・」

あれ？俺と白雪の世界なんてあったか？

「・・・大丈夫だって。俺と白雪は幼馴染なんだからな」

「キンちゃん・・・」

白雪はうれしそうに頬を赤く染める。そしてふと何かを思い出したような反応をすると少し心配そうな顔になった。

「そういえばこの辺で変な事件がよくあるらしいよ」

「変な事件？」

「この辺の不良を退治する白虎の事件。不良を動けなくなるぐらい過剰すぎる暴力攻撃して無抵抗になっても意識を失うまでさらに攻

撃して、『ボクは英雄（ヒーロー）だ！』とかって言い残してどこかにいっちゃうらしいの」

動けなくなるぐらいの暴力をするヤツが『英雄』だと？・・・ふざけんな！本当のヒーローってのはそんなことはしない！兄さんがヒーローだったようにな・・・俺は頭の中でそう激怒していると・・・

「うわあぁぁぁぁぁぁ！？」

「「！？」」

近くの路地裏から悲鳴が聞こえてきた。

「キンちゃん！」

「あぁ、分かってる！」

俺と白雪は急いで声のした場所へと向かう。すると・・・

「君を退治すれば・・・英雄なんだ」

「くるなぁ！くるなぁぁぁ！？」

白い虎の怪人が不良を襲おうとしていた。

「やめろぉぉぉぉぉぉ！」

俺は虎の怪人を止めるように背中を捕まえる。

「おいっ！とっとと逃げろっ！！」

「あ、ああ！」

「なんでアイツを逃がすの？」

ドカ！

「うわっ！？」

「キンちゃん！？」

俺は虎の怪人に弾かれて地面に叩きつけられた。たしかに痛い。・・・だけどそんな痛みより、俺はヒーローという言葉を汚したこの怪人が・・・許せない気持ちの方が強かった。

「・・・変身」

『クワガタ！トラ！バッタ！』

即効でこんな怪人を倒すつもりで・・・コンボじゃないが可能な限り攻撃的なメダルの組み合わせをする。

「だれかと思えばオーズか。君も悪い奴なんだから君も懲らしめないとねっ！」

ビュウ！

虎の怪人は黄色く輝く強風を放ってきた。オーズのことを知っているってことは・・・見た目からして白虎ヤミーって言ったところだな。そう思いながら俺はクワガタホーンから電撃を放つ。

「ハァァァ！！」

バチ、バチ、バチ！

強風を電撃で相殺した俺は、バッタレッグのジャンプですぐさま距離を詰めながらトラクローを展開する。

「これで決めてやる！！」

これならこのヤミーを倒せる！俺はそう思った。

「このっ！バカやろう！！」
ドカッ

「ぐっ！？」

トラクローの先端を白虎ヤミーを突き刺す寸前、俺は何者かに殴り飛ばされた。俺は殴ってきた真紅の姿の怪人を仮面越しに睨みつける。

「何のつもりだよ・・・アンク」

「何のつもりはこっちのセリフだ！！武偵法9条を破る気かよ！何、人間ごと倒そうとしてやがる！！」

「「！！」」

俺と白雪はアンクの言葉に驚いた。・・・この時、俺はようやく知った。カザリのヤミーの本当に危ない特性である‘寄生’を・・・。

白虎（後書き）

この物語のアンクはSだけど人間は傷つけない良いキャラっていう感じにしていきたいと思っています。そして今回も少しこれからの伏線を残して見ました。・・・気づいてくれる人はいるかな？

英雄（ヒーロー）（前書き）

今日か明日中に登場人物を更新しようと思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

英雄（ヒーロー）

俺はアンクにブン殴られて冷静さを取り戻し始めてした。

「いいか、カザリのヤミーのタイプは人間に寄生したまま欲望を強制的に促進させて成長していくヤミーなんだ。だから下手に倒そうとすんな！！」

「なっ！？」

寄生するヤミーだと！・・・そんなヤツとどう戦えばいいんだよ。

「少なくとも今のお前の持っているコアメダルじゃあ中の人間を助けにくい」

・・・たしかにアンクの言う通りだ。タカのメダルは透視もできるほどの超視力だけど今の状況じゃあ意味が無い。ライオンはカザリの属性と同じだから‘ライオネルフィッシャー’は通用しないんだろうな。電撃攻撃のできるクワガタじゃ中の人間を傷つけかねない。トラやカマキリなんて持っての他だ。ゴリラならなんとかなるかもしれないが・・・あのパワーじゃ、器用なことはできないからな・・・。そしてバッタとタコは元からそうゆうのに向いてない。・・・完全に不利だな。

「じゃあどう戦えばいいんだよ？」

「お前は戦うな。ここはあいつらに任せろ」

ブゥゥゥゥン

アンクの視線の先に二人のライドベンダーに乗った武偵高の生徒がやってきた。その2人は俺の知っている人物だった。

「正太郎、君にはハードボイルダーっていうバイクがあるのになんで君もライドベンダーに乗ってくるのかな？」

「い、いやさぁ、あんな紹介されたんだから1回は乗ってみたいじゃんかよ」

正太郎と陽の2人だ。・・・なんで2人がこんなところに・・・

「カザリのヤミーに対してはアイツの戦い方のほうがいいと思ってな。連れてきた」

「ったく！総合格闘技（バーリ・トゥード）の代表で練習してたらいきなり陽に呼び出されて、
付いてきてみれば・・・大変なことになってんじゃんか」

ああ、そういえば正太郎は仮面戦士科の系列の総合格闘技の代表に選ばれてたんだったな。

「正太郎。そんなことは後でいいから」

「ああ、分かったよ」

ガリッ

正太郎はコーヒー飴を口の中に入れて噛み砕くと、L字型のライダーシステムのベルトを腰につけた。

『ＪＯＫＥＲ』

正太郎の変身に必要な‘ガイアメモリ’の起動音が響く。

「俺、変身」

『ＪＯＫＥＲ』

メモリをベルトにセットして挿した部分を傾けると2回目の起動音と共に正太郎の姿は漆黒の戦士へと変わる。あの姿が正太郎の変身する‘切り札’の仮面戦士・・・仮面ライダージョーカーだ。

「いいかキンジ。アイツの攻撃をセルメダルを剥ぎ取ったところで中の人間を引っ張り出せ」

なるほど。・・・そうゆうことか！

「分かった。やってやるよ」

『タカ！ゴリラ！タコ！』

俺は引っ張ることに調度良さそうな亜種‘タカゴリタ’へと姿を変える。

「正太郎、目撃証言からしてヤミーの『親』になっている可能性が高いのは1年の仮面戦士科の凍条悟くん。身長は１７１センチ。あのヤミーはおよそ２１３センチといったところだから、ヤミーの表面のメダルを5センチほど剥ぎ取ってくれ」

「おう、やってみる！」

「また僕のジャマをするやつが来ちゃったなぁ。困るんだけど」

ビュウ！

ジョーカーは白虎ヤミーに向かって駆け出すと白虎ヤミーは再び強風を放つ。まぁ、今の正太郎・・・いや、仮面ライダージョーカーには通用しないと思うがな・・・。

「ほっ！」

ジョーカーはまるで強風が来ることが分かっていたかのようにあっさり回避する。・・・当然だ。今のアイツはヒステリアモードになってるんだからな。

明智家は遠山家の分家で遠山の血がかすかに混じっている。そのため通常の３０倍の思考能力とまではいかないが、５倍から１０倍ほどの思考能力になることができる。しかも俺と違ってアイツのヒステリアは人が変わったような違いがないし、カフェインでヒスることができるんだ。・・・羨ましい。

「オラッァ！」

ジョーカーは白虎ヤミーの強風を回避しつつ距離を詰めると胴体を殴ってセルメダルを削る。

「・・・硬いな・・」

いくら必殺技じゃないって言っても生身の人間より遥かに強い仮面ライダーのパンチでメダルが数枚しか削れていないことにジョーカーは少し焦る。

「正太郎！マキシマムを使うんだ！」

「・・・ＯＫ。理解したぜ」

陽の作戦をだいたい理解したジョーカーはベルトのメモリを右腰のスロットにセットする。

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「ライダーパンチッ」

チャリン、チャリン！

ジョーカーの必殺技『ライダーパンチ』は白虎ヤミーの胸の表面をかすめ、そこから大量のセルメダルが散らばる。

「今だキンジ！」

「ああ、分かった！おぉぉぉぉぉ！！」

ガシッ！

俺はアンクの合図ですぐさま中の生徒・・・凍条をゴリラアームで掴む。そしてタコレッグの吸盤で地面に張り付きながら一気に引っ張り出した。

「やったねキンちゃん！」

引っ張り出した凍条を地面に下ろすと、白雪が安心した様子で駆け寄ってくる。

「あぁ。後はあのヤミーを倒すだけだな」

「そうゆうことだ・・・と言いたいが・・・」

アンクは人間の姿に戻ると鋭い目つきでヤミーを睨んだ。すると・・・

「ガアァァァァァ！！」

「な！？」

白虎ヤミーは自分を抑えていたものがもう無くなったかのように暴れ出し、大通りへと出て行った。

「マジかよ！？」

「正太郎！はやく追いかけて」

ジョーカーは驚きつつも陽に言われて白虎ヤミーを追いかける。

「アンク！白雪を頼む！」

俺もヤミーを追いかけようとすると・・・

「・・・僕は・・・いったい・・・」

凍条が意識を取り戻した。

「てめぇはカザリってグリードのヤミーに寄生されていたんだよ。」

アンクは大雑把に凍条に説明をすると白雪もやさしく話しかける。

「英雄になりたいって欲望に漬け込まれていたの。覚えてない？」

「・・・なんとなくだけど・・・覚えてます。・・・僕はあんなひどいことを・・・うっ、うっ、やっぱり僕なんかじゃ・・・英雄になれないのかな」

凍条はヤミーに寄生されていたとはいえ、人を襲ってしまった後悔と、自分では英雄になれないという絶望感で涙を流す。・・・こいつ・・・昔の俺・・・兄さんを失ったときの何もできなくて後悔したときの俺に似ている。そう思った俺は・・・絶望してしまっているこいつを・・・

「英雄は英雄になりたいと思っていたらなれないんだ。英雄になりたいんなら・・・自分を犠牲にしてでもみんなの手本になれるような人間になれよ」

・・・ほっとけなかった。

「・・・あなたは・・・英雄なんですか?」

「そんなわけねぇだろ。俺はそんなツラじゃない。・・・俺はこの世界を守るどころか、この街すら守れない人間だ。・・・でもな、目の前の人ぐらいは・・・守りたいんだよ」

『タカ!トラ!バッタ!タットッバッ!タトバ、タッ!トッ!バッ!』

俺は基本形態のタトバに変身するとジョーカーと白虎ヤミーが戦っている大通りの方向を見る。

「ヒーローは遅れてやってくるもんだぜ。・・・英雄になりたいんなら・・・お前も戦うんだ。お前自信の欲望とな・・・」

凍条に背を向けながら俺はそう語りかけると白虎ヤミーとジョーカーのところへと走っていった。

「キンちゃんはね・・・自分の中でヒーローだったお兄さんを目標にしてたの。でもお兄さんがいなくなったときにその目標も崩れちゃって・・・凍条くんには目標をなくしてほしくないんだと思うよ」

「なんですかそれ・・・それでも自分が戦ってるって・・・あの先輩は本当に・・・ヒーローなんじゃないんですか?」

「・・・キンちゃんは私にとっては最初っからヒーローだったよ。・・・花火大会のあの日から・・・ずっと・・・」

白雪は4~5歳の頃の花火大会を思い出す。

「・・・生徒会長・・・僕、戦います。自分の・・・欲望と・・・」

凍条は自身の変身するライダーシステム‘ライダーデッキ’を手に取ると腰のところに銀色のベルトが出現した。

「変身!」

凍条がデッキをベルトに入れると、2枚の虚像が凍条に重なりその姿が銀の鎧に水色のラインが入った虎を思わせる仮面戦士・・・仮面ライダータイガへと変わった。

「僕は・・・先輩みたいなヒーローになりたいっ!」

『ＳＴＲＩＫＥ　ＶＥＮＴ』

タイガは斧型の召還機‘デストバイザー’に一枚のカードを入れて巨大なクロー‘デストクローを装備すると、俺と正太郎が戦う大通りへと走り出した。

「・・・ところで・・・どうしてグリードがキンちゃんのルームメイトなの？」

チャキ！

白雪は無表情で黒いオーラを纏いながらアンクに日本刀を向ける。

「ちょ！？おい、いま説明するからま・・・」

「天誅ぅぅぅぅぅぅ！」

俺が戦ってるときの・・・気づけない出来事だった。

英雄（ヒーロー）（後書き）

今回は英雄っていうのは何なのかを凍条に説教をする話にしてみました。・・・そういえば2話連続でアリアが一言もしゃべっていない。

欲望を乗り越えて（前書き）

フォーゼって学園ストーリーの仮面ライダーらしいのでこの物語に出しやすそうですね。

カウンザメダル！現在オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

欲望を乗り越えて

「セイヤァ！」

「オラッァ！」

俺はトラクローを展開して突き立てて、正太郎ことジョーカーはパンチやキックなどの攻撃で白虎ヤミーを攻撃する。

「ガアァァァ！お前らを倒して英雄になるんだあぁぁぁぁぁ！！」

ブンッ

「うわっ！？」

「ぐっ！？」

白虎ヤミーは右に1回転して俺とジョーカーを爪で攻撃した。・・・やっぱり中から『親』を引っ張り出しても欲望は変わらないんだな。

「これで消えろオーズ！！」

白虎ヤミーは両手の鋭い爪をさっきの攻撃で倒れてる俺に振りかざす。・・・さすがにかわせそうにないな。

「キンジ、あぶねぇ！？」

「くっ！？・・・？」

俺は両手をクロスさせて防ごうとしたが・・・攻撃は当たらなかった。

「遅れてすいません！」

「凍条！！」

白虎ヤミーの爪は、凍条・・・仮面ライダータイガのデストクローに止められていた。

「助かったぜ凍条！」

「間に合ってよかったです！ハァァァ！！」

ガギン！

タイガは白虎ヤミーを振り払った。俺はすぐに立ち上がるとそしてすぐさまジョーカーが駆け寄ってきた。

「・・・っと、凍条だったな。やるじゃねえか！」

さて、と・・・正太郎も来たことだし・・・一応聞いとくか。

「・・・あの虎の怪人はお前自信の欲望・・・願いそのものだ。・・・本当に倒していいのか？」

「・・・先輩が言ったんじゃないですか。『ヒーローになりたいなら、お前自信の欲望と戦え』って。だから僕は・・・自分自身の欲望を乗り越えて本当の仮面ライダーになるために・・・あの怪人を倒します」

「そうか。なら・・・」
『クワガタ！トラ！バッタ！』
「「ハッァァァ！！」」
「ガアッ！？」
俺は再び‘ガタトラバ’に変身しなおすと、タイガのデストクローと同時にトラクローを白虎ヤミーに振るう。
「お前が乗り越えんのを手伝ってやるよ！」
『スキャニングチャージ！！』
俺はすぐさまメダルを再スキャンし全身に力を溜める。
「さぁ、決めようぜ」
『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
ジョーカーも右足に力を溜める。
『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』
「はぁぁぁぁぁ！！」
タイガはデストバイザーにデッキのマークと同じ絵柄のカードを入れて構えると、近くの鏡からミラーライダーに必要な契約モンスター‘デストワイルダー’が出てくる。・・・何となくだがデストワイルダーと白虎ヤミーって似てるな。顔以外の部分。
「ガッ！？」
ガリガリガリッ

デストワイルダーは白虎ヤミーを掴むとデストクローを構えるタイガの方向へ引きずる。

「ハァァァァァッ！！」

そして引きずられてきた白虎ヤミーにタイガはアッパーを決めるようにデストクローを突きたてる。

「ライダーキックッ！」

タイガが突きたてながら持ち上げているヤミーにジョーカーは必殺のとび蹴りを決める。・・・俺もやってみるか。昔、1度だけ見たことある伝説のキックってのを・・・

「ハアッ！」
バチバチバチッ

俺はクワガタホーンの電撃を自分の左脚に浴びせるとジャンプをして空中で1回転をしてとび蹴りの体勢になる。

「ライダー・・・稲妻キック！！」

「ガッ！？ガァァァァァ！？」
ドオォォォォォォン

俺のキックが決まると、白虎ヤミーは爆発した。

「さよなら・・・僕の欲望・・・」

変身を解いて散らばったセルメダルを見る凍条は・・・どこか吹っ切れたような顔をしていた。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「何やってんだあいつ等？」

俺達がメダルを回収して白雪達のところに戻ってくると・・・なぜかアンクが白雪の日本刀を白羽取りしていた。・・・アンクもそれ、できるんだな。

「グリードがキンちゃんと生活してるなんて危険なのぉぉぉ！」

「ぐおぉぉぉ！？き、キンジ！早くこの女を説得しろっ！」

「・・・正太郎も戻ってきたし僕達は学校に戻るね」

「じゃあなみんな！」

「あ、ああ」
ブゥゥゥゥン

正太郎と陽は我、関せずと言ったカンジに急ぎ足で学校に戻っていった。たぶんアドシアードの用事だろうな。あいつら真面目だし・・・

「いいからっ！とっとと助けろよ！」

「天誅ぅぅぅぅぅ」

白雪は全身の体重を刀に乗せるように力を入れる。・・・てかアンク、お前人間の姿だと筋力も人間ぐらいにでもなってんのか？

「先輩・・・あ、あのお願いがあるんですが・・・」

「ん？なんだよ？」

「無視すんな！」

俺と凍条は叫ぶアンクをスルーして会話を続ける。

「僕を先輩の舎弟にしてくださいっ！！」

「は？」

凍条が腰を９０度も曲げながら言ってきた言葉に俺は固まった。

「んなこといいからっ！とっとと・・・」

「えいっ！」

ザクッ

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

夜、シャワーから出てきた俺はズボンを履き、上半身裸のまま時計を見る。現在の時刻は午後の１０時・・・まだ、アリアは帰ってこない。たぶん『魔剣』について調べてるんだろうな。

あの後聞いたんだが凍条は俺の戦徒（アミコ）になりたくて舎弟になろうとしたらしい。戦徒ってのは先輩の生徒が後輩の生徒とコンビを組んで、１年を指導する制度のことだ。・・・俺はもうすでにそれがいたのでなんとか説得して保留という形に治めた。

そんなことを思い出しているとバタバタと廊下を走ってくるスリッパの音が聞こえた。なんだと思い脱衣所のカーテンの方を振り向くと・・・

「キンちゃん！！」
しゃあ

脱衣所のカーテンが白雪に全開にされてしまった。

「はっ、はあぁ！？」

俺は面を喰らって後ずさる。・・・俺はよく分からんが・・・こうゆうシチュエーションって普通男女逆じゃないのか！？

「な、なんだよいきなり！？」

「え、だってキンちゃんから『助けてくれ』って電話が・・・」

「シャワー浴びてたのに電話なんかかけられるか！」

「そ、そうだよね。・・・って、き、キンちゃん!?は、はだ、裸」

白雪は上半身裸の俺を見て顔を赤くする。そりゃ、服着てる途中だったもんな。

「ご、ごめんなさい!!」

白雪はいきなり土下座をする。

「キンちゃんがオフロだからっ!裸だからそれを想像してたのは事実です!鬼道術の練習をしてたのに、それが全然手につかなかったのも事実です!」

聞いてねぇよ!!・・・いかんこのままじゃそろそろ白雪が暴走してしまいそうだ。

「おあいこ!」

「えっ?」

「キンちゃんも私のお着替えを見れば公平になるんだもんっ!」

白雪はそう言いながら緋袴をほどき、一刻もはやく自分も裸にならないといった感じに巫女装束を脱ぎ始めた。やっぱり暴走したよコイツ!!

「ま、まて白雪!脱ぐな!」

「脱ぐ脱ぐ脱ぐぅぅぅ!」

俺は白雪が脱ごうとしてるのを取り押さえる。お前なんかが脱いだら俺は確実にヒステリアモードになっちまうだろ!!

「離してキンちゃん!!」

「おとなしくしろっ!!」

「ただいま～・・・・・」

アリア様が大変なタイミングで帰ってきてしまいました。第三者から見ると、俺が白雪を脱がしていると誤解されかねない状況で・・・

「こ、こ、このぉバカキンジぃぃぃぃぃ!!」

バン!バン!バン!

アリアは俺に発砲してきた。やばい!そう思って俺はベランダへと逃げる。

「ハッ!ざまあみろ!」

頭にでかい絆創膏を張ったアンクは俺にそう言ってくる。そういえばあのときギャグっぽく頭に刀が刺さってたな。

「てめぇ助けろよ!!」

「お前だって助けなかったじゃんか!!」

こ、こいつ根に持ってやがる。鳥のくせに・・・あとで焼き鳥にしてやる!!

「風穴祭り！！」
バン！バン！バン！
「やばっ」
俺はとっさにベランダから飛び降りワイヤーでぶら下がるが・・・
「頭冷やしてきなさい！」
バン！　ぶちっ
「あっ・・・・あぁぁぁぁぁ！？」
アリアにワイヤーを切られ・・・斜め下の東京湾に落っこちていった。

欲望を乗り越えて（後書き）

今回でようやくアニメ6話、小説2巻の3分の1を過ぎた辺りの内容が終了しました。キンジのあのキックは・・・どちらかというとブレイドのライトニングブラストのように自分で書いてて思います。・・・ところでみなさんはフォーゼの見た目をどう思います？

特濃葛根湯（前書き）

参考なまでに聞きますが、みなさんは昭和怪人の中で1番気に入っている怪人はなんですか?ちまみに自分はサタンスネークです！

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×2
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×2
タココア

特濃葛根湯

「ヘックシュン！」

突然だが俺は現在、風邪を引いてしまっている。まぁ、あんな冷たい東京湾に落とされたんだから当然だけどな・・・

「あー頭痛がする～」

白雪は看病するために自分も休むと言っていたが、さすがにそれは悪いのでなんとか登校させた。・・・こんな時は‘特濃葛根湯’っていう薬品を俺は飲むんだが・・・生憎、現在は切らしているし・・・つーかこの前のアリアと白雪の喧嘩で家具とかと一緒にビンが割られちまってなくなったんだけどな。

ガチャ

たぶん今は昼休みぐらいの時間帯だと思う頃、誰かが入ってきた気がした。・・・たぶん白雪だろうな。意識が朦朧としていて、声も出すのもダルかった俺は・・・そのまま寝に戻った。

・・・そして俺は1度目覚めたときにおそらく白雪が買ってきてくれたであろう特濃葛根湯を飲んで再度寝ることにした。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「大丈夫かな・・・キンちゃん」

午後４時過ぎ、白雪は一人で歩いていた。本来なら俺が護衛をする時間帯だが、生憎俺は風邪で寝込んでいたので護衛ができないためアリアに頼んでいた・・・はずだったんだが・・・アリアの姿は見えない。アンクは・・・まぁ、白雪に一人で近づくことはしようとしなくなったのでたぶん今頃はクスクシエだ。

「まったくアリアったら私がキンちゃんと二人きりになる時間をジャマして・・・まあ、睡眠薬をお弁当に混ぜてるから今頃寝てるんでしょうけど・・・」

そんなこんなで急いで俺の部屋に向かっている白雪を後ろから見ていた青年がいた。

「ふふ、星伽の一族にもあんな欲望を持つ人間がいたんだ」

猫系グリードのカザリの人間態だ。

「さてと・・・オーズの人質になってもらうついでに・・・ヤミーを作らせてもらおうかな」

ブンっ

「うっ！？・・・」

チャリン！

「・・・・・？」

白雪の後頭部に出現した投入口にセルメダルが入る。しかし白雪

はなにか首に違和感を感じたと思っただけで首をさすっただけの反応だった。

「さてと・・・星伽の一族の子の欲望は・・・どんなヤミーになってくれるのかな?」

そう言い残したカザリは怪人の姿に変わって物凄いスピードで何処かへ走り去っていった。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

さすが特濃葛根湯。次に目が覚めたときにはすっかり体調が良くなっていた。時刻はもう夕方で、おそらくちょうど帰ってきたであろう白雪と出くわした。

「あっキンちゃん。お体は大丈夫?」

「ああ、だいぶ熱も下がったし頭痛も取れた」

「よかったぁ、よかったよ・・・ぐす」

「だからすぐ泣くなって」

「はい」

白雪は涙を指で拭うと、嬉しさいっぱい、と言った感じの表情に

なる。

「お前の買ってきてくれた『特濃葛根湯』のおかげだ。ありがとな白雪！」

「えっ？」

白雪は一瞬だけ曇ったような顔をしたが・・・すぐにまた笑顔になった。

「どういたしまして！」

「っ！？」

・・・その笑顔に正直・・・俺はどこか悪寒を感じた。・・・俺はこのときにでも気づいてやるべきだったんだと思う。・・・白雪もカザリのヤミーに寄生されてしまっていたことを・・・

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

風邪が治った翌日。天気は見事な五月晴れ。暖かい陽射し。まさに絶好の昼寝日和だ。

「いい風が吹くなぁ」

そんなわけで俺は校舎の屋上で仰向けになっていた。・・・一応

言っておくが死にそうなわけじゃないぞ？

「何サボってるのよ！ちゃんと白雪のボディーガードをしなさいよ！」

「ん？」

いきなりの声に俺は薄目を開くとチアガール姿のアリアがいた。

「ア、アリアっ！？」

こんなところまで追ってきやがって！・・・俺は講義の視線を送りながら上半身を起こすと・・・。

「んっ！！」

ブンっ！

アリアは明らかにチアとは異なる動作で右脚を高く振り上げた。そしてすぐさま理解した。・・・アリアは俺に白羽取りをさせようとしていることを・・・それに気づいた俺はすぐさまキャッチする構えをとろうとするが・・・

ごすっ！

アリアのカカトが俺の脳天を直撃した。・・・反応が遅かったようだ。もう勘弁してくれよアリアさん。

「もうっ！一回ぐらいは成功させなさいよ！」

「あのなぁ・・」

俺は蹴られたところを片手で抑えながら立ち上がる。

「お前もパートナーなら相方のコンディションも少しは考えてくれよ。こっちは病み上がりなんだぞ。たまには休ませろよ」

と、嫌味をアリアに言ってやると・・・

「そ、それは分かってるわよ！あたしも、ちょっとはやりすぎたって思ってるから・・・」

「・・・まぁ、風邪のことはもういい。白雪の買ってきてくれた特濃葛根湯のおかげで治ったからな」

「え？」

俺の言葉にアリアはいきなり振り向いた。あれ？そこは驚くところじゃないはずだろ？

「あ、あれは・・・あたしが・・・・前に・・・調べたと・・・・・・んでる薬って言うから・・・」

アリアは何かごにょごにょと何か言っているがはっきりと聞こえない。

「・・・白雪がそう言ったの？」

「ん？ああ」

「・・・・・・」

おい、なんでそこで黙るんだよ。

「まぁ・・・いいわ。貴族は手柄を自慢しない。たとえ・・・」

「なんだよ?言いたいことがあるならはっきり言えよ。お前らしくないな」

「なによ!いいじゃない!いいたいことは言わなくていいの!」

アリアは俺に向かって、べ～、とやってくる。

「おいっ!なにいきなり切れてんだよ!」

「切れてなんてないわ!」

あ～～!!なんだかこういうアリアはすっごいイライラすんだよ!!!

「この際だからハッキリ言ってやるけどな、パートナーの方針で付き合ってやっていたけど真剣白羽取りの訓練なんてもうやめだ!あんなもん、達人技だろ!!」

なぜかアリアとアンクはできたけど!

「だめよっ!続けるわ!『魔剣』は鋼をも斬る剣を持っていてどんな盾でも防げないわ!白羽取りの訓練は今こそ重要な意味を持つのよ!」

「ここ数日見張ってたけど怪しいヤツなんて現れなかっただろ!敵

なんて、『魔剣』なんていないんだよっ！！」

「っ！！」

俺の言葉にアリアは紅い眼を見開いた。

「お前は一刻もはやくかなえさんを助け出したいのは分かってる。でもお前は『魔剣』の名前を聞いたときに、そんないるはずのない敵を『いてほしい』って思ったんじゃないのか！」

「ちがう！『魔剣』は絶対にいる！あたしのカンじゃ、もうすぐそこまで迫っているわ！」

「なら証拠をみせろよ！」

「！？」

アリアは一歩、二歩と後ろに引き下がる。アリアらしくない力強さで後ろに引き下がる。

「あたしにはわかるのよ！白雪に敵が迫っていることが！でもあたしは『曾お爺様』みたいに論理的に説明できないからみんなあたしを、ホームズ家の欠陥品って呼ぶ！なんでみんなあたしを信じてくれないの！？」

チアのポンポンを地面に投げつけたアリアは涙目だった。本来なら優しい言葉を言ってやるべきだったんだと思う。・・・でも口喧嘩中でイライラしていた俺は・・・

「ああ、わかんねぇよ。いもしない敵が迫ってるなんて信じられる

かっ！！白雪の護衛は俺一人でする！お前はどっかで頭冷やしてろっ！！」

と、追い撃ちをかけるような言葉を言ってしまった。

「このバカ、バカ、バカ、バカ！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！

アリアはとうとう完全にぶち切れて俺に二丁拳銃を発砲してきた。

「キンジのバカ、バカ、ノーベルどバカ賞っ！！」

銃弾は俺の周囲スレスレを通りすぎた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

あの後、自分の部屋に戻り少し冷静になり、俺はそれとなくアリアに謝ろうと思ったが・・・アンクはベランダでたそがれているのに夜になってもアリアは帰ってこなかった。一応状況を白雪に説明すると・・・

「えっ？じゃあこれからはキンちゃんが一人で護衛してくれるの？」

「ああ。そうゆうことになった。教務科とアリアが勝手に決めちまったことだけど・・・約束は約束だしな」

「キンちゃんが私を守ってくれる」

白雪は少し俯きながら「うれしい」と続けた。

「お前、不安じゃないのか?俺なんかのEランク武偵がボディーガードで・・・」

「不安なんてはじめっからないよ。・・・改めて私を守ってください」

「あ、ああ」

白雪はそう言いながら頭を下げてきたので俺は反射的にそう答えた。つーか、アンクはいいかげん白雪にびびってないで部屋に入ってこいよ。

・・・なんで俺もアンクも気づかなかったんだろうな。白雪の欲望がどんどん大きくなっていたことに。

特濃葛根湯（後書き）

アンクが白雪に対してチキンになってしまった。最初はいじり役だったのに・・・今ではいじられキャラになりつつありますね。

人口なぎさ（前書き）

今回は原作ともアニメともストーリーの進み方が少し違います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

アリアとの喧嘩の後、アリアは雲隠れしてしまっていたが・・・
まぁ、予想通りレキの部屋に仮住まいをしていた。それについては安心した。そしてB組である白雪は授業中である現在、レキに見張らせいるから問題ない。・・・アリアは単位が足りてたから授業をサボって見張ってたけどな・・・。

まぁ、ただこれは現実逃避をしたくて現状を振り返っているだけで・・・

「先輩！やきそばパン買ってきました！」

3時間目の休み時間。凍条はそう言いながら俺の教室に入ってくると焼きそばパンを俺に渡してきた。

「遠山君が後輩をパシッてる！」

「そんなことはしなさそうなタイプだと思っていたのに！？」

「でも、顔的にはしてそうな顔よ！」

「それでも・・・嫌いじゃないわ！！」

・・・なんだこの状況？

「相棒・・・なんだこの光に満ち溢れているヤツは？」

「・・・凍条悟。・・・何しにきたのかは知らん」

とりあえず矢車にも凍条を紹介する。・・・ほんと、何しにきたんだよ。さっきから悪い誤解が聞こえてくるぞ。

「先輩！英雄になるためにも、僕を鍛えてください！」

なるほど。焼きそばパンは献上品のつもりってことか・・・。まったくあれからコイツも何処かズレてるんだよな。・・・ズレてると言えば・・・ここ最近、白雪の様子が何か変な感じがするんだよな。なんていうか・・・一声一声が重いような・・・。

「どうしたんですか先輩？深刻な顔して・・・ま、まさか僕の練習メニューを考えてくれているんですね！！」

凍条・・・悪いが俺はそんないい人間じゃないぞ。

「凍条・・・頼みがあるんだが・・・・」

「はいっ！」

俺は凍条にある事を頼んだ。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「なあ、白雪。お前はゴールデンウィークはどうするつもりなんだ？」

白雪との下校中、明日からゴールデンウィークなので一応ボディーガードの俺は白雪にどう過ごすのかを質問した。

「私は・・・おうちでゆっくり勉強でもしてるよ」

「それじゃあヒキコモリじゃんか。もっとハネを伸ばさないと後で後悔するぞ?」

「で、でも・・・」

白雪は少しオドオドした反応をしたのを見て俺はピンときた。

「・・・星伽か?」

「・・・・・」

白雪は否定しなかった。星伽の人間は神社や学校から勝手に出ることを許されない。俺の頭の中に‘かごのとり’というフレーズが浮かんだ。はぁ、まったく・・・。

「ほらよ」

俺は学校で配られた一枚のチラシを白雪に見せる。

「東京ウォルトランド・花火大会・・・一足お先に浴衣でスターイリュージョンを見に行こう?」

一通り読み上げた白雪が「?」という感じで俺の方を見てくる。

「ああ。これを二人見に行こう」

「えっ！」

「そんなに驚くことじゃないだろ？」

「だ、だめだよ！こんなに人が多いところなんて私・・・」

「心配すんな。ウォルトランドに入らなくてもいい。少し遠くなるが、葛西臨海公園から見ればいいだろ。1日ぐらい、外出のトレーニングだと思って学校の外に出ようぜ？」

おかしな話だよな。外出をトレーニングだなんて・・・。でも白雪には‘かごのとり’であってほしくないんだよ。

「で・・・でも私・・・」

「俺ももちろん付いていってやるよ。俺はアドシアードが終わるまでお前のボディーガードだからな」

「き、キンちゃんが一緒に？」

「ああ。だから花火を見に行こうぜ？」

白雪はゆっくりコクンと頷くとまた怪しげな笑顔をした。・・・やっぱり何か違和感を感じるんだよな。

・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「・・・・・！！」

俺は白雪の着ていた浴衣に目を見張った。柄は、清楚な白地に撫子の花雪輪。鴇色の帯は長さも完璧で・・・見事に着こなしていた。さらに珍しく結った黒髪は花かんざしで留めていた。アリアを「かわいい」と表現するなら、白雪は「きれい」だ。

「き、キンちゃん。通販で買ったんだけど・・・どうかな？」

くるり

白雪はゆっくり1回転をして全体を見せてくる。

「あ、ああ。似合ってると思うぞ」

「ふふ、キンちゃんが似合ってるって言ってくれた」

「・・・・・」

やっぱり何かおかしい。普段の白雪ならそんな風に笑わないはずだ。本来なら照れるような仕草をするはず・・・アンクさえいれば俺のカンを確かめることができるんだが・・・あいつ昨日から帰ってきてないしな。ほんっとあのチキンはどこに行きやがった！

「・・・それじゃ、そろそろいくか！」

「はいっ！」

俺と白雪はモノレールに乗り、ゆりかもめ、りんかい線と乗り換えを続けて目的地の臨海公園駅へと到着した。

「き、キンちゃん・・・今、つまらなかったりしない？」

まだ見えない花火の音の中、俺と白雪は公園の道を歩いていると白雪がそんなことを言ってきた。

「別にそんなことねぇよ」

白雪はこんな性格上あまり男子と話をしたことがない。たぶんそのことで俺に話を合わせられないことを気にしてるんだな。

「ご、ごめんね・・・」

「そうすぐ謝んな。気を使いすぎなんだよ」

「ご、ごめんなさ・・・」

「ほら、また言ってるぞ」

「あっ、ごめ・・」

反射的に謝ってしまう白雪がおかしくて俺は小さく笑ってしまった。白雪は少し顔を赤くしながら俯いていたが、おかしそうに、うれしそうに、顔を緩めていた。そして白雪から・・・

「夢みたい」

と言う呟きが聞こえたような気がした。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「・・・終わっちまったな」

「・・・うん」

俺達がようやく人工なぎさに到着すると・・・ちょうど最後の花火が空に輝いた。

「悪い。俺がちゃんと時間を確認しなかったせいで・・・」

「ううん、いいよ。キンちゃんと二人なら花火がなくてもいいの。月夜の海でもいいの。おうちでもいいの」

白雪はそう言いながら星空で輝く海を背に振り返って俺を見てきた。

「キンちゃんと・・・2人なら・・」

その笑顔は俺を心から思っているような表情で・・・。

俺は武偵にもなれない。普通の高校生にもなれない。仮面ライダーにもなりきれない中途半端なヤツなんだぞ？なんでそんなに優しくしてくれるんだよ。

「白雪・・・寒くないか?寒いだろ?これを着て待っててくれ」

「え?」

何かをせずにはいられない気持ちにさせられた俺は上着を脱ぐと、有無を言わせず白雪の肩にそれをかけた。

「あったかいものを買ってくるから少し待ってろ」

俺はそう言って近くの目先に見えるコンビニへと走り出した。・・・俺はこの時・・・本当に油断したと思う。

「あ・・・いっちゃった」

『ppp』

そう言いつつも笑顔で俺の向かったコンビニの方を見ている白雪に突然メールが来た。

「?・・・きゃぁぁぁぁぁぁ!!?」

白雪は携帯を開きメールを見ると目を見開き・・・悲鳴と共に白雪はセルメダルに包まれて黒い豹のようなヤミーになってしまった。

「白雪!!」

俺は悲鳴を聞きつけて急いで白雪の元へ向かうと・・・

「やぁ!はじめまして。女の子と一緒に待たせてもらったよ。この時代のオーズ・・・いや、遠山の一族と呼んだほうがいいかな?」

クロヒョウヤミーの隣には猛獣のようなグリードがいた。

「僕はカザリ。もちろん遠山家なら知ってるよね？」

「あぁ、知ってるよ・・・猫系グリードだろ？・・・白雪にヤミーを寄生させたのはお前か？」

「ふっ、当たり前じゃないか！」

「っ！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はすぐさまオーズに変身するとトラクローを展開して駆け寄る。

「待ちなよ。このヤミーの中にいる星伽の娘がどうなってもいいのかな？」

「くっ！？」

カザリは白雪が中にいる自分のヤミーに虎のような鋭い爪を向けたので俺は動きを止めた。

「さすが遠山の一族。理解が早いね！・・・それじゃあまず、変身を解いてくれないかな？」

「・・・・・」

俺はしぶしぶ従って変身を解除する。

「そしたら僕のコアメダル・・・ライオンとトラを僕に返してよ」

「っ！！？」

カザリの身体のセルメンの部分を見る限りここで2枚をカザリに渡したら確実に完全体になっちまう。そうしたら俺や白雪どころかみんなが・・・

「何迷ってんだ？とっとと渡してやれよ」

ガシっ！

「えっ？」

いきなり現れたアンクに俺が握っていたトラのコアメダルが奪われた。

「おいアンク！何してんだよ！！」

「・・・いいから渡すぞ」

ブンっ！

アンクはカザリに向かって黄色いメダルを投げつけた。

人口なぎさ（後書き）

いよいよキンジとカザリが対面したストーリーになりました。・・・長かった。原作のオーズでは3話だったのに・・・

夜の猛獣（前書き）

今回も引き続きカザリ戦となります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア×２
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア×２
タココア

「ふふ、アンク・・・分かっているね」
パシっ！
「・・・・・」
カザリはアンクが投げつけた黄色いメダルをキャッチすると身体に取り込もうとする。
「ハッ！かかったな。出番だぞ凍条！！」
「はいっ！！」
「っ！？」
アンクの掛け声で水面からいきなりタイガに変身した凍条が現れ、カザリから白雪が中にいるクロヒョウヤミーを引き離した。
「凍条！アンクと合流できたんだな！」
「はい先輩！この怪人は僕に任せてください！」
タイガは俺とアンクにそう叫びながら平手で腹部を叩くように攻撃する。助かったぜ凍条！
俺は昨日、凍条にある事を頼んだ。白雪にヤミーが寄生されている可能性を考えて『アンクと合流してくれ』と頼んでおいたんだが・

・・ほんといいタイミングで来てくれたよ。

「今まで海の中に気配なんてなかったはずなのに・・・どうして・・・」

カザリは驚いた反応をしている。

「ハッ！残念だったなカザリ！この時代にはいろんなタイプの戦士がいるんだよ！たとえば‘鏡の世界’に入れるヤツとかな！」

ミラーライダー・・・神崎史郎が開発した特殊ライダーシステムで俺にはどういう原理かよく分からないが鏡の世界『ミラーワールド』にいけるシステムが搭載されているらしい。凍条は海を鏡の代わりにしていたようだな。

「・・・でもそっちも残念だったね。たしかに人質を失ったけど、僕はトラのコアメダルをもう取り込んだんだよ」

「くっ！？」

そうだ・・アンクの投げつけたメダルはたしかにカザリが取り込んだ。ライオンが俺の元にあるとはいえ、８枚でも十分な脅威だ。

「どうするんだアンク？」

「バカか？・・・俺が本物を渡すはずがないだろ」

チャリン

アンクの手にはさっき俺から取ったトラのコアメダルが握られていた。

「えっ？たしかに僕はメダルを取り込んだはず・・・その時も確かに力を感じたのに・・・」

「俺が投げたのは黄色に塗装したトラのマークのセルメダルだ・・・それもセルメダル２～３００枚の力を１枚に凝縮した特別なものでな」

カザリは「そんな・・・」と呟くと両腕の爪を伸ばして構えた。

「こうなったらオーズを倒して僕のメダルを取り戻させてもらうよ」

「キンジ・・・万が一のためにコンボとカザリのメダルを使うのは控えろ」

コンボはそんなに長い時間使えないし、もしそれで俺が倒れればあっさりとメダルが奪われる。カザリのメダルを使ったときも似たようなものだ。変身が解除されたら簡単に奪われる。

「ほら・・・受け取れ」

アンクは俺にトラのコアメダルを返してくる。・・・だけじゃなかった。

「ハッ！カザリには全力で戦えキンジ！」

バサっ

「っ！！？」

俺がオーズドライバーを腰につけた途端にアンクは‘また’ある

物を俺の顔面に投げつけてきた。それはこの前みたいな本じゃなく・・・おそらく白雪の『黒』のブラ・・・いかん・・・顔面に当てられちゃあ・・・ヒスるだろうが。

いや・・・時既に遅しだったようだ。

「アンク・・・後で覚えていろよ・・・変身！」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

ドン！！

「うっ！？」

ヒステリアモードにされてしまった俺はオーズ，タカゴリバ，に変身するとすぐさまゴリバゴーンをカザリに放って怯ませてすぐさまタイガとクロヒョウヤミーからカザリを遠ざけた。

「アンク！凍条！白雪を頼んだぞ！」

「了解しましたっ！」

「とっととあの猫追っ払え！」

俺はゴリラアームの強力なパワーでカザリを捕まえながらバッタレッグのジャンプ力で人口なぎさからすぐさま離れた。

「凍条・・・お前も寄生されたことはあるから戦い方は分かるよな？」

「分かっています。・・・まずは中にいる人を助けるんですよね。・・・なら・・・」

『ＡＤＶＥＮＴ』

「ガアァァァァ！」

デストワイルダーが先ほどのタイガと同じように飛び出てくるとクロヒョウヤミーを後ろから掴みこむ。

「はっ！！」

「っ！？」

タイガはすぐさまクロヒョウヤミーに手を突っ込むと力づくで白雪を引っ張り出した。

「上出来だ！後はとっととそいつを倒しちまえ！」

「分かりましたっ！・・・アンクさん、生徒会長をお願いします」

チャキ！

デストバイザーを構えたタイガはクロヒョウヤミーから助け出した白雪をアンクに頼むと再び戦いに戻った。

「くそ、おい凍条！！俺にこいつを近づけんな！！」

「？」

アンクの叫びで白雪は意識を取り戻した。

「はっ！？私はいったい？・・・あれ？キンちゃんは？」

「げっ！？目覚めやがった！！起きんなよ！寝てろよ！」

「アンク！！キンちゃんは、キンちゃんは何処なの！！」

白雪はアンクの首を掴みながら揺さぶる。

「は、離せ馬鹿・・・」

「いいから教えなさい！！」

白雪はさらに揺さぶるスピードを上げる。するとアンクは俺が跳び去ったほうを指さした。

「き、キンジならお前にヤミーを寄生させ・・・たカザリと・・・戦うためにこの場を離れていったぞ」

「キンちゃん！今、助けにいくから！！」

捨てるようにアンクを離した白雪は慌てて俺の向かったほうへと走り出した。

「ば、バカやろう！？人間がグリードに太刀打ちできるはずがねぇだろ！！」

アンクは慌てて白雪を追いかけようとするが・・・

「させねぇぜ！！」

ブンっ！

「っ！？」

何者かがいきなりアンクに大剣を振りかざしてきた。そいつの姿は右腕がマシンガンとなっていて、左手に折れた大剣を握る怪人だった。

「ある方からの依頼でなぁてめぇを始末しに来てやったぜ～」

「・・・お前・・・ドーパントか？」

「そうオレは蔵田剣児『アームズドーパント』だぁ！！」

「ドーパント・・・地球の記憶を宿す『ガイアメモリ』を使って人間が超人的な力を持つ化け物になったヤツ・・・だったな」

アンクはそう言いながら怪人としての姿へと変わる。

「本当は人間を傷つけたくはないんだが・・・いいぜ。格の違いってのを見せてやる！」

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

『クワガタ！カマキリ！タコ！』

「ハッァァァ！！」

バチ、バチ、バチ！

薄暗いトンネルの中に突入した俺はカザリを離し、おそらくこの環境で最も戦いやすい‘ガタキリタ’に変わるとトンネルの壁面に貼りつきながら電撃攻撃をする。

「そうゆうの・・・虫頭を思い出すからやめてくれないっ！！」
ビュウ！

カザリは強風で電撃を相殺すると、持ち前のスピードで壁面を駆けて鋭い爪で俺に攻撃をしてきた。つーかアンクも言っていたが『虫頭』ってウヴァのことだよな・・・グリードの中で嫌われてんのか？・・・・たしかに俺もアイツは嫌いだけど。

「っ！！」
ガギン！

俺は展開したカマキリソードでカザリの爪を防いだ。普段の俺が変身したオーズだったら対応しきれなかったと思うが・・・今の俺はヒステリア・オーズだから反応できる。

「へぇ・・・さすがは遠山の一族だ。判断能力が高いね・・・なら・・・これならどうだいっ！！」

カザリは残像が残るほどの速さで俺の周りを駆けて翻弄させてくる。・・・壁面で戦えば速さを半減させれると思っていたんだが・・・想像以上の速さだ。

「フッ！」

翻弄してからの後ろからの攻撃なら反応しきれないと考えたと思われるカザリはそこから一気に俺に爪を突き立てて仕掛けてくるが・・・このクワガタヘッドは３６０度の範囲が見えてるんだよ！！

「セイヤァァァァァ！！」

俺のカマキリソードがカザリに直撃すると同時に、カザリの鋭い爪が俺に直撃した。

「うわぁぁぁ！？」

予想以上の攻撃力のせいで俺は変身を解除されて地面に落下する。

「く、くそ・・・」

オーズドライバーにはタコ以外の2枚のコアメダルが入ってない。

「ふふ、僕の勝ちだね」

チャリン

カザリはクワガタとカマキリのコアメダルを俺にちらつかせてきた。・・・いや、俺の勝ちだぜカザリ！

「ぐっ！！？」

バキンっ！！

カザリの胴体の鎧が砕けるとセルメダルとなって散らばり胴体はセルメンとなった。

「お前のメダル・・・もらったぜ！」

チャリン

俺の手の中にはトラのコアが1枚とチーターのコアが2枚の合計3枚のコアメダルがあった。ヒステリアの俺が咄嗟に奪い取ったんだよ。

「・・・く、どうやらここは引いておいたほうがよさそうだね」

カザリは先ほどのような速さではないものの、それでも十分な速さでこの場を立ち去った。ふぅ、これでひとまず安心だな。

「キンちゃん！！」

「し、白雪！」

俺のところに白雪が駆け寄ってきた。どうやら凍条とアンクがうまくやってくれたようだな。

「大丈夫キンちゃん？はっ！怪我してるよキンちゃん！」

「いや、かすり傷と打撲だけだから平気だ」

「・・・ごめんねキンちゃん・・・私のせいでキンちゃんに怪我を・・・」

「お前のせいじゃない。気にすんな」

うつむいて涙を流す白雪をなだめようとしたその時だった。

「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

「凍条！！？」

タイガがトンネルの中まで吹き飛ばされてきて変身が解けた。

「大丈夫か凍条？」

「す、すいません先輩・・・あいつ、思った以上に強くて・・・・」

「ヴヴヴヴヴゥゥゥヴァウ！！」

クロヒョウヤミーは唸りながらこちらに近づいてくると・・・

「きゃ！？」

「白雪ぃぃぃぃぃぃ！！」

飛び掛るように再び白雪に寄生した。

夜の猛獣（後書き）

アニメなら数分で終わるはずの花火大会の夜が・・・長い夜になってしまっていますが次回も夜の話です。

トップスピード（前書き）

すいません。日に日に更新が遅くなってきてますね。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア×２
バッタコア×２
タココア

「ヴゥゥゥ！」

「くっ！？」

寄生された白雪は再びセルメダルに包まれてクロヒョウヤミーとなってしまった。くそ、ヒステリアの俺なのに油断していた。

「すいません先輩・・・僕がちゃんとあのヤミーを倒せていたら・・・」

「いや、お前のせいなんかじゃない。その怪我じゃつらいだろ・・・お前は下がってろ」

この場にはもうカザリもいない。あれだけダメージを与えたんだ。・・・今、また来る可能性はないだろうな。これなら安心してトラのコアを使える。

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺は凍条を下がらせて、オーズのタトバに変身をするとゆっくりとクロヒョウヤミーに近づく。

「白雪・・・今、助ける」

「ヴゥゥゥゥ！！」

クロヒョウヤミーは日本刀のような形の爪で切りかかってきた。タイガである凍条を追い詰めたほどの強さだけはあって、たしかに速いとは思うが・・・さっきのカザリほどじゃないな。

「セイっ！」
ガギン！

「はっぁぁ！！」
バシ、バシ！

「ヴゥ！？」

俺は展開していない状態のトラクローで爪を防ぐと2連続の蹴り上げを決めて怯ませる。

「このメダルなら・・・」

そしてつかさずカザリから奪ったチーターのコアメダルを取り出すと、バッタのコアをベルトから外してその場所にチーターのコアを入れてスキャンした。

『タカ！トラ！チーター！』

飛蝗の力を宿していた緑色の足，バッタレッグ，はチーターの力を宿した黄色の足，チーターレッグへと変わる。オーズの高速亜種形態，タカトラーター，だ。

「ハッァ！ハアァァァァァァ！！」

ダダダダダダッ！

速さには速さと言わんばかりに俺はクロヒョウヤミーの両肩を掴ようにして組み付いて素早い連続蹴りをして表面のセルメダルを削る。・・・だいぶセルメダルが溜まっているな。どんな白雪の欲望ってのなんだったんだ？

「き、キン・・・ちゃ・・」

「白雪っ！！」

ガシッ！

セルメダルの中から見えた白雪の手を掴むと俺は一気に引っ張り出してクロヒョウヤミーを蹴り飛ばした。

「ヴヴヴヴゥゥゥゥ！？」

大量のセルメダルと『親』を身体から出されたクロヒョウヤミーは悪あがきをするかのように俺に爪を突き立てながら走ってくる。

「白雪・・・君は欲望に捕らわれなくていい。だから・・・倒させてくれ。君の欲望であるあのヤミーを・・・」

「は・・・はい・・・」

俺の手からその場に降ろされた白雪は、意識が朦朧としていながらも俺の言葉に頷いてくれた。ヒステリアの俺は女子との約束は絶対に守るんだから・・・今回も守らないとな。

「これで決める！！」

『スキャニングチャージ！！』

ベルトのメダルを再スキャンした俺は全身にコアメダルの力を溜めるとタカヘッドでクロヒョウヤミーに狙いを定める。

「ハァァァァァァ、セイヤァァァァァ！！」

そしてチーターレッグの出せるトップスピードで走り出した俺はクロヒョウヤミーとのすれ違いざまに横に1回転をして展開されたトラクローで切り裂いた。

「キン・・・チャ・・ン・・」
ドオォォォォン！

クロヒョウヤミーはその言葉を最後に爆発してセルメダルとなった。

「・・・ふぅ・・・」

「やりましたね先輩！・・・？・・・先輩？」

「・・・・・はぁ・・」

アリアのヤミーを倒した頃から考え始めていたが・・・前までヤミーは人間の心を持たないから迷いなく倒せると思ってたのに・・・ヤミーは人の願いそのものだと考えてしまうせいで躊躇うようになってきたな。やっぱり人の願いを壊すのは・・・たとえどんな願いでもいい気分はしないな。

「まぁ、そんなことを考えてもキリがないな。凍条、アンクのところに戻るぞ」

「はい！」

俺は変身を解除すると意識を失っている白雪をお姫様だっこをする。・・・やっぱりコイツも軽いな。そう思った矢先だった。

ドオォォォォォォォォォォン！！

「「っ！！？」」

いきなりアンクのいるはずのところから空に向かって火柱が上がった。

「急ぐぞ凍条！」

「はいっ！」

俺と凍条は急いで火柱の上がった辺りの人口なぎさに向かうと・・・

「おい人間。とっとと俺を狙ったヤツの名前を吐け。さもないと次の焼き加減はミディアムだ」

「う、ううう・・・」

近くに砕けたガイアメモリが落ちている人間を睨みつけるアンクの怪人態がいた。

「アンク・・・何があったんだ？」

「キンジ・・・こいつはドーパントになった人間だ。それも俺・・・いや、俺たちを殺すように仕向けられた殺し屋のな」

「じゃあさっきの火柱は・・・」

「ドーパントに放った俺の攻撃だ」

最近人間らしい行動をしていたアンクだが・・・アンクだってグリードってことか。

「キンジ・・・炎が怖いか？」

「・・・たしかにあんなでかい炎は恐怖を感じるな」

「・・・そうか」

アンクは人間の姿に戻ると、どこか虚しそうな様子でその場を立ち去った。

「う、うう・・・」

ドーパントになっていたらしい男はたしかに軽く火傷はしているがそれほど酷そうには見えない。アンクはあんな攻撃でも可能なかぎり人間を殺さないように手加減をしてるらしいな。

「名前は分からんが・・・殺人未遂の罪で逮捕させてもらうぞ」

ガチャリ

「凍条、こいつを頼む」

「了解しました！」

ドーパントだった男を凍条にまかせたころには俺のヒステリアモードも終わっていた。やっぱりオーズの力を使うとヒステリアのなっていられる時間は短くなるな。

「き、キンちゃん・・・・・」

「白雪！大丈夫か？」

俺は再び意識を取り戻した白雪をゆっくり降ろす。

「また、助けてくれたね」

「気にすんなって」

「・・・やっぱり、キンちゃんはキンちゃんだね」

なんだそれ？

「この間、巫女占札でキンちゃんのことを占ったの・・・そしたら数年以内に今いる場所から『いなくなる』ってでたの」

「それは俺が武偵高から一般高に転校するからじゃないのか？」

来年の４月辺りの予定のな・・・。

「私・・・アリアがどこかに連れてっちゃうんじゃないかって思ったの・・・」

白雪はヤミーを倒してもどこか態度が囚われたように弱々しかった。

「アリアはキンちゃんを変えた。キンちゃんは昔のように明るくなった」

アリアは俺を変えた？・・・そう言われてみればそんな気もしなくはないな。そう思っていた矢先に白雪は俺に抱きついてきた。

「っ！？」

俺はとつぜんのことに思考を停止してしまう。

「キンちゃん・・・今だけでいいから・・・私だけを見て・・・キスして」

聞き間違い・・・じゃあないんだろうな。気づけば俺は無意識のうちに、本能のままに白雪の背にそっと触れそうになって・・・

どん！

「！！」

俺はどこかから聞こえた爆発音に咄嗟に白雪を守るように身構える。しかし・・・

「キンちゃん・・・あれ」

白雪の指差す先を見つめてみると・・・そこには若い男女のグループが花火を打ち上げていた。なんだよ・・・脅かすなよ。

「・・・ごめんね」

白雪は何かを諦めたような声でそう呟きながら花火を見つめていた。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

「やはり武偵制度というものは廃止すべきだ！」

夜の街中・・・仮面ライダーの記事を専門にしているＢＯＫＵジャーナルの副編集長の鎌田は不快な表情で歩いていた。

「あら？ならその欲望、開放してみない？」

「む？」
チャリン

鎌田が突然の声に振り向いた瞬間、メズールによってセルメダルが投入された。

トップスピード（後書き）

明日と土日は更新しようと思いますが、来週の月～木曜はできないかもしれません。

ケースD7（前書き）

そういえばジャリバーを出してないことを忘れてました。・・・
でもこの物語に登場させようかは迷っています。出してほしいですか？

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア×２
バッタコア×２
タココア

ケースD7

連休が終わりアドシアードが始まった。昨日の後、白雪は学園島の方へは戻らずに忘れ物があるからと言って元の女子寮に帰ってしまった。加えてアンクも昨日は部屋に帰ってきていない。アイツはもしかしたら・・・俺と同じように自分の力を嫌っているのかもしれないな。

「・・・にしても・・・ヒマだな」

現在進行形でアドシアードをサボっている俺は校舎の裏側にありながらも丁度いいぐらいに太陽の光が当たる木陰でボーっとしてた。本来なら白雪を護衛するべきなんだろうが・・・生徒会のメンバーと一緒にいるはずだから問題ないだろうな。

「ヒマなら俺と受付の仕事を代われよ」

時刻にして午後1時ぐらいだろうか・・・おそらく受付を飽きたので抜けてきたであろう武藤がやってきた。

「だが、断る」

「・・・はぁ、言うと思ったぜ」

武藤は適当に俺の近くに座った。

「で、結局チアに星伽さんは出ないのか?」

「白雪？出ないらしいぞ」

「そうかぁー」

武藤はやたら残念そうに語尾を伸ばす。

「・・・・で？・・・キンジ、お前はどっちなんだよ？」

「あ？何がだ？」

「星伽さんとアリア。どっちが本命なんだ？」

「は？」

いきなり何言ってんだコイツ？わけわかんねぇな。

「・・・・いや、なんでもない。忘れてくれ」

自分で話題を振ったくせにすぐさまやめんのかよ。・・・まぁ、この話を引っ張るのも嫌だし構わんが・・・。

「ところでキンジ。今朝ＢＯＫＵジャーナルの雑誌を買ったんだが・・・ほら、ここを見てみろよ！」

「何だ？カッコいいバイクでもついてたのか？」

俺は武藤の開いた雑誌のページを見てみると・・・

『武偵制度、廃止すべき！！』

というタイトルで長々と武偵を批判する記事が書かれていた。‘暴力解決’やら‘過剰な戦闘行為’やら・・・名護さんが見たら「これは酷い！」と言ってもおかしくないほどの中傷記事だ。

「この記事を書いたのがＢＯＫＵジャーナルの鎌田ってヤツで今まで時々武偵を批判するような記事を書いていたんだが・・・今回のものはいくらなんでもな・・」

「ああ、限度が過ぎているな」

武偵をやめるつもりの俺でさえこの記事を見ているとイライラしてくる。

「今、この記事について鉄人が講義しにいってるらしいぜ」

うわっ・・・鎌田とか言うおっさん終わったな。問答無用で真っ白になるぜ。・・・メンタルが。

「まぁ、話題は変わるけど・・・このバイクかっこ良くないか？」

武藤はまたもや話題の内容を代えてきたので・・・俺も時間潰しにしばらく話題に乗ってやった。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「おいキンジ！！」

「っ！？」

俺はうたた寝をしているといきなり武藤に起こされた。・・・先ほどの時と形相が違う・・・なにかあったな。

「どうしたんだ？」

「ケースD7だ！ケースD7が起きた！」

ケースD7ってのはアドシアード期間中の武偵高内での事件発生を意味する符丁だ。この場合は連絡は一部の人間だけで、極秘に調査することになる。

「星伽さんが失踪したらしい。昼過ぎから連絡が取れないようだ」

くそっ！また油断した！・・・そう思った俺は慌てて携帯の画面を開く。そこには白雪からのメールがあった。

『キンちゃん、ごめんね。さよなら』

この文章からして何かあったに違いない。・・・うかつだった。白雪はアリアの言うとおり本当に狙われていたんだ。

「畜生っ！！」

「キンジっ！？」

俺は急いで武偵高の外へと出て行った。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「白雪！白雪ぃいいい！！」
『p-』
俺は大量のタカカンドロイドを空へ飛ばすとベンダーのバイクモードに乗って辺りを探しまくっていた。白雪はあの時守ってくれと言ったのに・・・アリアは白雪に危機が迫っていることを直感してたのに・・・くそ、つくづく駄目な俺に腹が立つ。
『ppp』
「もしもし？」
電話がかかってきたのでむしり取るように出ると・・・
『キンジさん、レキです』
「レキ！お前も白雪を探すのを手伝って・・・」
バン！
「っ！」
俺が最後まで言い切る前に俺の足元のコンクリートに一発の銃弾がめり込んだ。

『キンジさん、落ち着いてください。冷静さを失えば人は能力を半減させてしまう』

・・・ああ、そうだったな。

『今のあなたがまさにそれです。・・・落ち着きましたか？』

「あ、ああ。おかげでな・・・レキ、白雪の目撃情報は？」

『車両科の倉庫周辺で目撃証言があります』

「その辺で何か異変は？」

『普段はあまり使われない第３備品倉庫の扉が開いてます』

第３備品倉庫だな。

「分かった。いってみる！」

ブゥゥゥゥン！

俺はベンダーをUターンさせて急いで備品倉庫に向かった。

「・・・ここだな・・・ん？あれは・・・」

備品倉庫に到着した俺は怪しげなエレベーターを発見したので生徒手帳でここの地図を確認する。

「地下倉庫だと！？」

その単語に冷や汗が出る。地下倉庫って言えば武偵高でも危ない

場所の上位にランク付けされる場所だぞ。・・・地下倉庫ってのは柔らかい言い方なだけでつまりは火薬庫だ。あのエレベーターはその場所に通じている。

「それでも・・・いくしかないな」

俺は念のために階段で足音を立てないように移動をする。最下層につくと電気の光はあるが薄暗く、「ＫＥＥＰ　ＯＵＴ」やら「ＤＡＮＧＥＲ」と書かれた警告があちこちにある。銃はこんなところで使えないな。

チャキ

バタフライナイフを構えた俺はゆっくりと奥へと進む。すると巫女装束の白雪がいた。

「ちゃんと1人で来たよ。これで約束は守ってくれるよね魔剣」

「ああ、武偵高の人間には危害を加えない」

まだ動くべきではないと判断した俺は物陰に隠れて様子を見る。

「どうして私なんかをほしがるの魔剣・・・たいした能力なんてない私を・・・」

「謙遜するな。お前は大粒の原石だ。それも守りの浅い原石に手が伸びるのは必然だろう?覚えているか『私が電話をしたのを・・・』」

魔剣は俺の声で白雪に語りかける。白雪があの時シャワールームにいきなり入ってきたのはそのせいか・・・。

「そしてお前や遠山は動き、あの厄介なホームズは離れた」

くそ、すべて作戦の内だったってことかよ！！

「私に続け（フォローミー）白雪。私がお前をふさわしい場所へ連れて行ってやる。イ・ウーへな」

魔剣は白雪手を差し伸べ、それに従わないといけない白雪はその手を掴もうとする。・・・いかせねぇ！！

「白雪！！」

俺はナイフを構えて魔剣に向かって走るが・・・

「駄目！キンちゃん！逃げて！」

ビュン！

「うわっ！？」

魔剣が俺の足元に投げつけてきた短剣は俺に刺さりはしなかったが、俺はそのせいで転がるようにこけてしまった。

「くっそっ・・・」

俺は起き上がろうとした瞬間、腕や足に違和感を感じた。

「凍ってる・・・だと」

俺の手足は凍ってしまっていて動かなかった。

「キンちゃん！！」

「終わりだ・・・」

ブンっ！

俺に駆け寄ろうとした白雪を掴んだ魔剣は俺に向かって短剣を投げつけてくる。・・・くそ、動けない！！

ガギン！

「だらしないわねキンジ！」

「ア、アリア・・・」

飛んできた短剣は突如としてこの場に現れたアリアの短刀によって弾かれていた。

ケースD7（後書き）

ようやくアニメの7話の話が終了。8話にあたる話はオリジナル展開が多い予定です。

魔剣（デュランダル）（前書き）

いよいよアニメ8話の内容がスタートしました。この物語はアニメに沿った内容になっていますが原作3巻以降の内容も書くつもりです。

カウンザメダル！　現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
トラコア×2
ゴリラコア
チーターコア×2
バッタコア×2
タココア

魔剣（デュランダル）

「あんたのやり方は調査済みよ魔剣！相手が複数いる場合、あんたはそれを1対1にして片付けようとする。だからあたしは白雪の護衛を外れたの・・・あんたをおびき寄せるためにね」

アリアは魔剣に短刀を向ける。・・・アリアはそこまで考えていたのか。

「武偵憲章2条。依頼人との約束は絶対守れ。あたしは任務を絶対に投げ出さない！」

『p一！』

パキンッ！

アリアのそのセリフと共に数体のタカカンは俺の周りの氷を砕いた。これなら動けるな。

「まあ、あの時あんたにムカついたのは事実だけどね」

「は、はは」

睨みつけてきたアリアに俺は苦笑するしかなかった。

「・・・それで勝ったつもりか？」

ザァァァ！

「「！！」」

魔剣が白雪を連れて闇の中へ消えていくと共にどこからともなく

水が溢れ始めた。・・・まずいな、急いで白雪を助けないと・・・。

「白雪！白雪ぃいいいい！！」

「キンジ！あそこ！」

俺とアリアは急いで白雪を探す。するとアリアが柱に鎖で繋がれている白雪を見つけた。

「ごめんなさいキンちゃん。だれにも内緒で来ないと、学園島を爆破してキンちゃんを殺すって言われて・・・」

「それ、何時のことだ？」

「花火大会のときの・・・ヤミーとの戦いの前に・・・メールで・・・」

くそ、あのタイミングでヤミーが現れたのもそのせいか！

「アリアもごめんね。私、あんなひどいことばっかしてたのに・・・」

「あ、あたしはあんたに依頼を受けたから守ってただけ！目的は魔剣よ！だから謝んなくていいわ」

カチャカチャ

アリアは鍵で固定されている鎖を外しにかかる。

「白雪、魔剣はどこに逃げた？」

「えっと縛られた後、天井のハッチが開くような音が聞こえたから・・・」

上を見るとたしかにハッチが開いていた。どうやら上のフロアに逃げたようだな。

「アリア。お前は先に魔剣を追いかけてくれ。お前泳げないだろ」

「違うわよ！浮き輪さえあれば・・・」

「こんなところに浮き輪なんてない！いいから行ってくれ！そしてヤツから鍵を奪ってきてくれ！」

「・・・・分かったわ」

アリアは急いで上のフロアへと向かった。俺も鍵をなんとかしようとアンロック用のキーを取り出して鍵穴に差し込んで外しにかかるが・・・水はもう白雪の肩の辺りまで届くほどの所まで来ているのに・・・三つある鍵のうちの一つも外せてなかった。

「・・・これで・・・どうだっ！」

ガチャ

ようやく一つの鍵が外れたが・・・俺の実力じゃあ時間がかかり過ぎてる。アンクのアンロックスキルを見習いたいな。

「くそっ、アンクさえいれば・・・」

「・・・もういって。私、キンちゃんをこれ以上危険な目に合わせたくない」

白雪はあきらめたような目をしながら俺に話しかけてきた。

「馬鹿いうな！何言って・・・」

「星伽の巫女は守り巫女。誰かのために身も心も捧げるのが定め・・・だから」

「何言ってんだ！！」

「いいの、きっと私が死んでもだれも泣かない・・・私が星伽だからチヤホヤされてるだけ・・・うっ！？」

やばい！とうとう白雪の口の辺りまで水が迫ってきやがった。

「諦めんな！ちゃんと息をしろ！ボディガードの言うことを聞け！」

「・・・依頼は取り消します。だからキンちゃん・・・生きて・・・」

ザアアアアア！！

「っ！！」

悲しげな瞳をしていた白雪の言葉と共に津波のように勢いよく流れてきた水に俺は流される。・・・ふざけんなよ。また俺は手を伸ばさないのかよ！手を伸ばせば・・・助られんだろ！！

俺は兄さんがいなくなってから初めて自分の意思でヒステリアモードになることを決めると、流れに逆らうように泳いで白雪のところまで戻る・・・

「っ！？」

あの時白雪にしてやることができなかったキスをしてやった。・・・この高鳴る鼓動・・・ヒステリアの感覚だ。

ガチャ！ガチャ！

先ほどまで苦戦していた鍵をあっさり開ける。今の俺には指先から感じる微かな感触から、鍵の内部構造が手に取るように分かるんだ。

「ぷはっ！」

水が天井につく前になんとか白雪を解放できた。

「白雪。さっき言ったな『依頼は取り消します』って」

「は、はい」

「依頼なんて関係ない。俺は白雪を守る。白雪だから助けたいんだ・・・いいだろ？」

「・・・うん」

「さあ、こっちだ」

俺は白雪をハシゴに誘導し上のフロアへと非難させようとすると・・・

ザァァァァ！

「きゃ！？」

「うわっ！？」

再び大きな波が来て白雪は上のフロアへと押し出されるように流されていったが俺はまったく別の方向へ流されそうになった。

「まったく・・・何やってんだキンジ！」

ガシっ

別の場所へ流されそうになった時、ハシゴの上のほうから俺を掴んだのは・・・

「助かったぜ・・・アンク」

俺の手を掴む右腕だけを怪人態にしていたアンクだった。

「ハッ！バカが・・・最近見張っていたヤミーが動き出した。とっととこの事件を解決してメダル回収にいくぞ」

「ああ、分かった」

さぁ、魔剣への反撃開始だ！

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「がんばれ～！」

「しっかり狙って～！」

「あたれ～！」

「ん～～？」

俺がアンクに助けられる十数分前、アドシアードの開催されていた会場では観客席の人々を見渡す長身の灰色の服装の男がいた。俺も後々知ることとなるがガメルの人間態だ。

「ここにも、メズール、いない」

バンっ！

「ん～？なんだ～？」

一人の狙撃科の生徒が目標に命中させた。

「さすが一條さん！すごい精度だ！」

「カッコいい～！」

ガメルはおもしろそうに周りを見渡す。そして次の選手がライフルを構えると・・・

「あ～た～れ～！」

ガメルも応援を始めた。しかしその応援も虚しく・・・
バン！
「「「あぁ～ぁ～」」」
その弾丸は的から外れてしまった。
「あ～・・・あたらなかった・・・もっとあたれ！」
チャリン
ガメルは自分の欲望を開放するため自分自身にメダルを入れて怪人態になるとガメルの身体から牛のような怪人が現れた。
「「「きゃ～～！！」」」
その瞬間会場はパニックに陥った。その頃さらにアドシアードの会場のゲートでは・・・
「あら？この感じ・・・ガメルかしら？」
「「「シャァァァァ！！」」」
「こら、落ち着きなさい」
メズールと共に数十体・・・下手をすると百は超えているかもしれない数のサメの怪人がゲートを通過した。
「はぁ。・・・まぁ、いいわ。あなた達の欲望通りここを滅茶苦茶にしちゃいなさい」
ドサっ

「く、くそ・・・」

鉄人・・・サバキ先生の変身した鬼，仮面ライダー裁鬼，はメズールによって捨てられるように投げられた。どうやらメズールやヤミーにやられたらしくだいぶボロボロだ。

「「「シャァァァァァ！！」」」

・・・武偵高に様々な欲望の怪人が集まった。

魔剣（デュランダル）（後書き）

なんか・・・最近矢車よりもアンクの方が動かしやすくなってきた感じがします。そのせいで少し矢車の出番が減ってしまっているような・・・なぜか凍条は増えてるけど・・・

星伽の巫女（前書き）

今回はいつもの倍ぐらいの文章量になってしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア×２
バッタコア×２
タココア

「・・・・これでまず水は問題ないだろ」

「急いでこの事件を解決しろよ。ヤミーは待ってくれないぞ」

俺とアンクは下のフロアに通じるハッチを塞ぎ白雪を探す。すると数メートル先に白雪を発見した。

「白雪！大丈夫か？」

「ごほっ、ごほっ。き、キンちゃん、お水飲んじゃって・・・」

俺は白雪に近づこうとすると・・・

「キンジ無事だったのね！！」

アリアが走ってくるのが見えた。・・・いや、見えたのはそれだけじゃない。

「待て！アリア！」

「っ？」

ピッ

俺はアリアを制止させるとアリアの前に見えたピアノ線をナイフで切断した。

「ピアノ線。正確にはツイストナノケブラーワイヤー・・・魔剣が

仕掛けた罠だ」

「よく気づいたわね」

「俺のことを心配してくれる優しい子に、怪我させるわけにはいかないからな」

「キンジ・・・あんたもしかして・・・」

さすがに3回目だとアリアも俺の異変に気づくか。

「なんだいアリア？」

「っ！！」

アリアはいきなり顔を真っ赤に染めた。なぜだ？

「無駄なことしてないでとっとと事件を解決させるぞ」

アンクは俺とアリアのやりとりなど気にもせずに白雪の元へ近づく。アリアはアンクを追い越して真っ先に白雪に話かける。

「白雪、大丈夫？」

「ありがとうアリア。キンちゃんもアンクも来てくれて・・・」

その時、一瞬白雪の下着が巫女装束の間から白い下着が見えてしまった。・・・なんだこの違和感。

「キンジ・・・コイツからは俺に対する殺気ってのが感じられない」

「・・・白雪。唇は大丈夫か？さっきの・・」

「・・・うん。大したことないよ」

やっぱりな。こいつは白雪じゃない！本物の白雪なら今、唇のことを聞かれて平然としてられるはずがない。

「離れろアリア！そいつは魔剣だ！！」

「えっ！？」

アリアは驚きつつも銃を構えるが・・・

「ふふふ・・・フゥゥ」

「うっ！？」

アリアの右手が凍らされてしまい握られていた銃もじめんに落ちると凍ってしまいた。

「こっの！」

アリアは左手の銃で魔剣を狙撃しようとするが・・・

「フゥゥゥ」

「うっ！？」

その左手と銃も同じように凍ってしまった。

「まさか魔剣が白雪に変装してたなんてね・・・」

「私をその名前で呼ぶな。人に付けられた名は、好きではない」

「うるさい！ママに着せられた冤罪の１０７年分はあんたの罪よ。絶対に償ってもらうんだから！」

「ふふ、リュパン４世の言ってた通りの威勢の良さだなアリア」

こいつ・・・理子とも繋がりがあるのか！

「お前は偉大なる我が祖先とも似ている。その姿がいとおしく、愛らしく、しかし心が勇敢。その名は・・・ジャンヌダルク」

「嘘よ！ジャンヌダルクは火刑で・・・十代で死んだはずよ！子孫なんて・・・」

「あれは影武者だ。我らは策士の一族。闇に紛れ、歴史を操り、知略と誇りを伝えてきた。私は・・・３０代目ジャンヌダルクだ」

「魔剣！私の仲間をこれ以上傷つけさせない！」

ガギン！

魔剣が本当の名前を名乗った瞬間、今度はおそらく本物の白雪が現れて魔剣に切りかかった。そしてアリアはすぐさま魔剣から離れる。・・・本物という証拠にアンクは俺の隣で震えてるしな。

「どう魔剣？これで４対１アンタの不利よ」

「フッ・・・」

カラン　シュゥゥゥ

魔剣は発煙筒を地面に転がし煙幕の中に消えていく。

「ふふふ、お前達は私の本来の姿を知らない。これは言わば前座の余興だ」

「御託はいいからさっさと出てきなさい！・・・うっ！？」

カラン、カラン

アリアは双剣を構えようとするが先ほどの凍結のせいでうまく握れないらしく刀を落としてしまった。

「アリア、ちょっと染みるよ」

「うっ！？・・・うう・・」

白雪は見えない神秘的な力でアリアを治療する。その治療に痛みが伴うらしくアリアは痛々しい声を殺していた。そして煙幕が晴れていくと共に魔剣の声が再び聞こえた。

「リュパン４世による動きにくい変装も終わりだ」

アリアの治療が終わり、天井が凍ると共に西洋の甲冑を纏った白い髪でサファイアの瞳の少女が歩いてくる。こいつが魔剣・・・ジャンヌダルクの本当の姿か。

「遠山・・・私の変装を見抜いたお前は普段のお前ではないのだろ

うな。・・・それに加えお前はオーズという仮面戦士でもあるのだろう？・・・なら」
ガチャ、ガチャ
「「「・・・・・・」」」
三人の仮面戦士が俺の前にやってきた。白熊のような強固な肉体の鬼‘仮面ライダー凍鬼’。ヒマラヤ山脈に住むと言われるイエティのようなライダー‘仮面ライダーレイ’。クラブのＡと蜘蛛の力を宿す戦士‘仮面ライダーレンゲル’の三人だ。でも何か変だな・・・。
「アンク・・・こいつら様子がおかしい・・・」
「ああ、おそらく何者かに操られているんだろうな。・・・キンジ俺はそいつをぶっ飛ばしてくるからその間の相手をしてろ」
「分かった。白雪、アリア、魔剣の方を頼む。俺はこいつらの相手をさせてもらう・・・変身！」
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』
アンクは怪人態に変わり、俺もオーズに変身する。
「えっ！アンクあんたあの時の怪人だったの！？」
「アリア・・・今はそれよりも魔剣だ」
アリアはアンクの怪人の姿に驚くのは無理もないが・・・今はそんな場合じゃない。

「キンジ！知ってたのね！後でいろいろ聞かせてもらうわよ！」

「ああ、分かってる」

アンクが飛び去っていくとアリアは俺を少しにらんだ。思ったよりも落ち着いているな。俺に掴みかかってくるかと思ったんだが・・・。

「・・・キンちゃん。ここからは・・・私を見ないで。・・・これから私、星伽に禁じられた技を使う。けどそれを見たら・・・キンちゃんはきっと私を怖くなる。ありえないって思う。キライになっちゃう」

白雪は今にも泣きそうな目をしながら少し俯く。

「白雪、ありえないことは1つしかない。俺がお前を嫌いになることだけだ」

あえて口にはしないが・・・ぶっちゃけ白雪がどんな力を使おうとオーズの力のほうがありえない思うぞ。

「・・・キンちゃん。・・・行ってくるね！」

白雪は白い髪留めを解きながら魔剣に向かって走る。

「ジャンヌ、もうあなたを逃がすことはできなくなった。星伽の巫女はその身に宿す禁制鬼道をみるからだよ。私達はこの始祖の力をずっと継いできた。・・・二千年もの時を・・・」

ボゥ

先ほどまでの雰囲気とはまるで違う白雪が刀を上に掲げた瞬間、刀の刀身が炎に包まれる。

「白雪という名は真の名前を隠す伏せ名。私の本当の名前は・・・『緋巫女』！！」

「くっ！？」

ガギン！

白雪の刀と魔剣・・・ジャンヌの大剣がぶつかると三人のライダーもそれぞれの武器を俺に構えてきた。

「・・・さぁ、相手になってやるよ」

俺はトラクローを展開して構える。・・・正直、人間とは戦いたくはないが・・・何も倒せってわけじゃない。俺の役目は時間を稼げばいいんだ。

「「「・・・・・・」」」

「セイヤッ！」

白雪&アリア対ジャンヌ、俺対氷結系ライダーの戦いが始まった。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

俺が3人の仮面戦士を相手にしてる頃、アドシアード会場では激戦となっていた。

『氷川君！G３－Xの性能をあいつらに見せてやりなさい！』

「はい、小沢さん！」

『カイジョシマス』

ガガガガガッ！！

「シャァァァァァ！」

メカメカしい仮面戦士、仮面ライダーG３―X’の装着員の氷川真(まこと)は装備のガトリング・・・ケルベロスをサメヤミーに乱射するが相手の動きが速いせいでうまく当たらない。

「俺が援護する。その間に・・・」

バンッ！

「シャ！？」

狙撃科の一條薫(いちじょうかおる)さんは対戦車ライフルでサメヤミーの肩を狙撃して一瞬だけサメヤミーは怯む。

「今だっ！！」

ガガガガガガガガガッ！

「シャァァァァ！？」

ドカァァァァン

サメヤミーはＧ３－Ｘのケルベロスの弾丸を大量に喰らい爆発してセルメダルとなり散らばった。

「一條さん。ありがとうございます！」

「別にお礼はいい。それよりもこいつ等だ」

「了解しました」

Ｇ３－Ｘと一條さんは次のヤミーへと向かった。さらに少し離れたところでは・・・

「振り切るぜっ！！」

俺の知らない赤いバイクのような仮面ライダーが重たそうな剣を振り回してサメヤミー数体を攻撃していた。

「「「シャァァァ！？」」」

サメヤミー達はこの場は逃げようと地面に潜ろうとするが・・・

「逃がさんっ！」

『ＴＲＩＡＬ』

「ハァァ！」

なにやら青くなって高速で移動し潜るのを妨害し、そのまま・・・

『ＥＮＧＩＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「ハァァァァ！！」

サメヤミー達を一気に斬り裂いた。

「絶望がお前達のゴールだ」

「「「シャァァァァ！？」」」

ドォォォォォン！

「よし、次の相手だな」

ヤミーが爆発したのを確認すると青くなったバイクの仮面戦士は次の相手に向かった。

「た、助けて～～」

「「「シャァァァァ！」」」

1年の仮面戦士科の生徒、野上亮太郎（のがみりょうたろう）はサメヤミー数体に追われていた。

「亮太郎っ！」

ザンッ！

イマジンと呼ばれる怪人の一体だが亮太郎の味方をする一体‘モモタロス’は自身の剣でサメヤミーを斬り付けると亮太郎の前に立った。

「亮太郎、変身するぞ！」

「うん！」

モモタロスは亮太郎の中に憑依すると亮太郎の髪の毛に赤いメッシュが入る。

「今から俺のカッコいい変身を見せてやるぜ！・・・変身！」

『ＳＷＯＲＤ　ＦＯＲＭ』

亮太郎はモモタロスと共に変身をしようとすると・・・何やら白く光る球体が亮太郎の中に入った。

『ＷＩＮＧ　ＦＯＲＭ』

「あれ？」

「降臨、満を持して」

モモタロスは亮太郎から追い出されると亮太郎の姿は白い白鳥のような姿，仮面ライダー電王・ウイングフォーム，に変身した。

「おい手羽先野郎！ここは俺の見せ場だろうが！！今すぐ俺に替われ！！」

「・・・仕方ない。ありがたく思え」

『ＳＷＯＲＤ　ＦＯＲＭ』

電王の中から白い怪人が抜け出て再びモモタロスが入ると、その姿は赤いアーマーに包まれて顔に付いた桃の仮面が割れると電王の基本形態、ソードフォームに変わった。

「俺、参上！」

電王は歌舞伎役者のような独特なポーズを取ると他にも3体ほどイマジンがやってきた。

「な～んだ。モモタロスに先越されてるんじゃん。くまちゃんがなかなか起きないからだよ！」

「すまんのぉリュウタ」

「まったくセンパイったら久々の戦いだからってあんなにテンションあげちゃって・・」

「クライマックスだぜぇぇぇぇぇ！！」

電王は剣を振り回してサメヤミーに戦い始めた。

「「「「シャァァァ！」」」」

「「「「きゃぁぁぁぁ！？」」」」

さらに別の場所では戦闘系の学科ではない生徒達がサメヤミーに囲まれていた。そこに・・・

「魑魅魍魎跋沽する、この地獄変。名護啓祐はここにいる！イクサ爆現！」

『フィ・ス・ト・オ・ン　ラ・イ・ジ・ン・グ』

白騎士のような仮面ライダー‘仮面ライダーイクサ・バーストモード’となった名護さんはさらにアーマーをパージするようにして青いイクサ・・・ライジングイクサへと強化変身をして専用武器のイクサカリバーでサメヤミー達を切り伏せた。

「跪きなさい」

「「「「シャァァァァ!?」」」」

サメヤミーは地面に飛び込み撤退しようとするが・・・

「待ちなさい!」

ガガガガッ!

イクサの熱源感知機能で探知してスコープ機能で狙いを定め狙撃され・・・

「その命、神に返しなさい」

『イ・ク・サ・カ・リ・バー・ラ・イ・ズ・アッ・プ』

「「「「シャァァァ!!?」」」」

イクサの必殺技‘イクサジャッジメント’で倒された。

「「「「名護さんは最高です!!」」」」

助けられた生徒達は一斉に同じ言葉を叫んだのは・・・気にしないで置こう。そこに・・・

「うわあぁぁぁぁぁ!?」

「橘！！」

橘さんの変身するギャレンが転がってきた。

「本当にここは仮面戦士とかいう戦士がいっぱいいるのねぇ。あなたもその赤い戦士のようにちょっと遊んであげるわ」

「気をつけろ名護！あいつのせいで俺の体はボロボロだ！」

「イクサが負けるはずがない！！ハァァァ！！」

ギャレンとライジングイクサはメズールと出会った。

「当～た～れ、あ～た～れ～！」
ガン、ガンッ

「アタレ～～！」
ガン、ガンッ

ガメルとそのヤミー・・・バイソンヤミーはアドシアードの競技場内で重力操作をしながらいろんなものをぶつけ合って遊んでいた。

「おっと、坊や達、そろそろやんちゃが過ぎてるぜ？」

「はやく戦いたまえ正太郎。これ以上ものを壊されてはアドシアードが完全に中止になってしまう」

「・・・分かったよ。いくぜ？」
ガリっ
『ＪＯＫＥＲ』

正太郎はコーヒー飴を噛み砕くとガイアメモリを起動する。

「俺、変身！」
『ＪＯＫＥＲ』

「オラッァ！」

正太郎・・・仮面ライダージョーカーはガメルとバイソンヤミーに殴りかかった。

「あいつとは1度戦ったことがある。援護しよう」
ガガガガガッ！

後藤はマシンガンを構えバイソンヤミーに撃ちまくるが・・・気にもされてない。

「君達以外にもあの灰色の怪人と戦った相手がいたらしく報告があった。・・・あのグリードは‘光’に弱い」

陽はメモリガジェットのバットショットを取り出すと黄色いメモリをセットする。
『ＬＵＮＡ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

バットショットはガメルとバイソンヤミーの近くにいくと何度も発光する。

「目が～、目が～」

「メガ～、メガ～？」

「どっかの大佐かよお前ら？」

「そんなことはいいから戦いたまえ正太郎！」

どこかの大佐と同じことをいう怪人二体にジョーカーは突っ込みを入れたが・・・陽に注意されてしまった。

「分かってるって！いくぜ」

「ははは、そうだ！武偵なんぞ無くなればいいのだ！！」

ジョーカー達もグリードと戦い始めた頃・・・仮面戦士科の学科棟の屋上では鮫のような仮面戦士，仮面ライダーアビス，に変身した鎌田が高みの見物をしていた。

「何笑ってんだ？・・・そんなに楽しいことでもあったのか？」

ブンっ！

「っ！？」

アビスはいきなりの後ろからの蹴りを咄嗟に避ける・・・そこには・・・

「お前がこの大群をここに呼んだんだろ？調べはついてんだよ・・・」

仮面ライダーキックホッパー・・・矢車がいた。

「ふん、私にたった一人で挑みにくるとは馬鹿な奴め・・・殺れ！！」

「「「シャァァァァ！！」」」

「・・・笑えねぇな・・・こんなんじゃ・・・」

２０体はいるサメヤミーは一斉にキックホッパーに襲い掛かった。

それぞれの戦いは・・・まだ始まったばかり・・・

星伽の巫女（後書き）

やりたいことが多すぎて普段よりも長くなってしまいました。・・・なんかまるで最終決戦のようになっていますが・・・べつに最終決戦ではありません。

接戦（前書き）

テスト勉強に飽きてしまったため更新してしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア×２
バッタコア×２
タココア

接戦

俺はレンゲル、凍鬼、レイの三人の仮面戦士を相手にしていた。

「ダッァ！セイヤッァ！」

ギィン、ガギン！

俺はトラクローでレンゲルの杖とレイの爪をガードするが・・・

「フンッ！！」

ドガッ！

「グハッ！？・・・」

凍鬼の金鎚のような大きな武器が直撃してしまう。・・・重いな・・・意識が飛びそうだ。

「キンジ！？」

「キンちゃん！？」

「フン、余所見をしてる場合か？」

ガギン！

白雪が俺に振り返った瞬間をジャンヌは狙うが・・・アリアが双剣で防ぐ。

「白雪！あっちはキンジを信じて！今はこっちよ！」

ナイスアシストをしているなアリア。・・・けどこっちはそんなにいい状況じゃない。

「・・・今は回避に専念しないとな」

『クワガタ！トラ！チーター！』

「仏に帰れ！！」

ブンっ

「ハッァ！」

俺は広い視野と高速移動の亜種‘ガタトラーター’に代わり回避に専念することにして凍鬼の金鎚を避けるが・・・

「華麗に激しくっ！」

ピキピキッ

「くっ！？」

レイによって足が凍り漬けにさせてしまった。・・・くそ、このままじゃ・・・。

「美しく散れ！」

「・・・間に合え！」

『クワガタ！ゴリラ！チーター！』

ガンッ！！

なんとかゴリラアームにしてガードは間に合ったが・・・動けな

いことに代わりはない。

「ハァァァッ！！」

「くっ！？」

ひとまず俺はレイをゴリラアームの腕力で強引に振り払う。でもそれも一時凌ぎでしかない。

「俺は・・・最強のライダーだ」

ザッシュッ！

「うわァァァァ！？」

チャリン！

レンゲルの攻撃で俺は足元の氷からは開放されたが丁度ベルトの部分に攻撃が当たったせいでメダルが吹き飛んで変身が解除されてしまった。・・・ヒステリアモードの俺が変身解除なんて初めてだぞ・・・まずい・・・どうすれば・・・。

「きゃぁ！？」

「これで終わらせよう・・・ハァァっ！！」

転倒してしまったアリアにジャンヌは大剣を振るのが見えた。ヒステリアモードの俺は女性を守ろうとする性質があるためアリアに向かって走り出す。

「アリアっ！！」

「・・させない」

俺はレンゲルが後ろをついて来ながら杖を振りかざしてもアリアの前に立ち・・・

パシッ！　パシッ！

「何っ！？」

右手の人差し指と中指でジャンヌの大剣を挟み、レンゲルの杖を左手で掴んで止めた。・・・こんなの普段の俺じゃあ絶対にできないな。

「なんて、やつだ・・・」

生身の俺に自分の剣を止められたのが悔しいらしくジャンヌの目から闘争心が消えてきてる。そこに白雪は・・・

「緋緋星伽神！！」

バキィィィン！

居合い切りのような構えから上に刀を振り払い天井まで届く炎とともにジャンヌの剣をへし折った。これでジャンヌのほうは問題ないな。

「「「ハァァァ！！」」」

「キンジ！！」

「キンちゃん！！」

・・・ドォォォン・・・

三人のライダーは一斉に俺に武器を振りかざす瞬間・・・どこからか爆発音が聞こえた気がした。

「・・・遅いぞアンク・・・」

ピタッ！

「「「・・・・・？」」」

三人の攻撃は俺に当たる寸前に止まり正気を取り戻した。するとそこに砕けたメモリの残骸を握っている一人の気を失っている男を掴んだアンクがやってきた。

「ハッ！どうやら間に合ったみたいだな」

「後、1秒遅れていたら死んでいたぞ・・・で、メモリは何だった？」

「P・・・パペティアーだったな。そんなに強くはなかったんで炎は使わずに済んだ」

つまり炎を使わない攻撃・・・肉弾戦だけで倒したってことかよ。まあ、こんな火薬が大量にある場所であんな馬鹿デカイ炎を出されても困るしな・・・。

「そんなことよりキンジ・・・次の相手だぞ」

「ああ、分かってる。・・・アリア、白雪、ジャンヌの身柄拘束とこの三人を念のため救護科に頼む」

「えっ？キンジ達はどこに行くの？」

「魔物退治だ・・・ついてこないでくれよ」

俺はアリア達に振り返りながらそう言って先ほど落としたメダルを拾おうとすると・・・

「悪いがそれはもらおう！！」

パシッ！

「何っ！！？」

レイに先ほど落としたチーターのメダルを奪われた。

「さらにもらうよ！」

パシッ！

「くっ！？」

パシッ！

俺は何とかゴリラのメダルは回収したが・・・レイにクワガタのコアメダルも奪われてしまった。

「お前・・・人間ごときがコアメダルを集めてどうゆうつもりだ？」

アンクは人間の姿に変わるとレイを睨みつける。

「はは、僕はカザリというグリードに頼まれたんだ。オーズからメダルを奪ってきてくれとね。僕もわざと操られてこの隙を待ってい

たんだよ」

くそ、操られていないから警戒心を解いていた！レイはただ操られてた仮面戦士じゃなくカザリに味方する仮面戦士だったのかよ！

「キンジ！！取り返せ！カザリに持ってかせるな！！」

「ああ！変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はバッタのジャンプで立ち去ろうとしたレイの前に立ち逃げ場を封鎖する。

「できれば戦いたくはない。そのメダルを返してくれ」

「分かった。戦いたくないんだね・・・なら・・・」

『ウェイクアップ！』

「ハァァァッ！！」

ガラガラガラッ！　カチン

レイは天井を砕き、外へと出て行くと天井を凍らせて塞いで行ってしまった。・・・これじゃあ追いかけようにも逃げた場所が分からないな。

「くそ、チーターはもう1枚あるがクワガタがなくなったのは大きいな・・・すまないアンク」

「・・・仕方ない。捕られたものは奪い返せばいい・・・とっとと

ヤミー退治にいくぞ」

「だいぶ時間が経ってるから急がないとな」

俺とアンクは急いで外に出ようとすると・・・

「ちゃんとセルメダルを稼いできなさいよキンジ！・・・戻ってきたら今まで黙ってた罰として風穴」

「がんばってねキンちゃん！・・・とっととキンちゃんから離れて死になさいアンク」

アリアと白雪は俺を応援してくれながらも不吉なことを言った気がした。・・・気のせいだったらいいな。

「キンジ！！急ぐぞ！！おぉぉぉぉっ！！」

「あ、ああ・・・」

アンクは逃げるように急いで走り出したので俺も走りだした。・・・アンクやっぱりお前ってチキンだな。まあ、俺も今の2人は怖いと思うが・・・。

俺とアンクはライドベンダーに乗ってヤミーのいる所に向かったんだが・・・まさかアドシアードの会場なんて思ってもなかったよ。しかもヤミーだけじゃなくグリードもいるなんてな。

・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』
「ハァアアア！！」
ドォオオオオン！！
タイガはサメヤミーを数体倒すと辺りを見渡した。
「あれ？こんなに仮面戦士がいるから減るのは当然なのに・・・何か変なような？」
タイガは辺りを見渡すとカイザやナイト、Ｇ３－Ｘなどが戦う様子は見えるが相手のサメヤミーも４～５体だ。それほどの数はいない。
「ここにヤミーが来たときはもっといたような気がするんだけど・・・」
「ぐあぁぁぁぁ！？」
別の場所、変身を解除された名護さんはメズールに踏まれていた。
「あなたも大したことはないわね」

「くっ、黙れ！イクサの力はこの程度ではない！」

「名護！！うおぉぉぉ！！」

バン、バン、バン！

名護さんを助けようとギャレンはギャレンラウザーの銃弾を連射するが・・・

「鬱陶しいわね・・・」

バシャァァァ！

「ウワァァァ！？」

メズールの水圧攻撃に吹き飛ばされ変身が解除されてしまった。

「Ｏｈ、ＮＯ！？・・・ッ！？」

たまたま近くにいたサイガもその攻撃に巻き込まれてしまい変身こそ解けないが名護さんの方に吹き飛ばされた。

「まずはここにいるガメルを探したいから邪魔しないでね坊や達。次は殺しちゃうかもしれないから」

「くっ、待ちなさい！！・・・」

バタッ

名護さんはメズールを追いかけようとするが、すぐさま倒れてしまい意識を失ってしまった。

「名護さん!?誰か、誰か衛生科か救護科の生徒は名護さんと橘さんを!!」

「明日夢!頼む!」

「はいっ!・・・一人では無理なんで誰か手伝ってください!」

「負けたのは・・・俺じゃ・・・ない・・・イクサ・・・だ」

「・・・サヨコ～・・・」

名護さんと橘さんは救護科に搬送されていった。2人は意識を失いながらも何かを呟くが・・・誰にも聞かれていなかったようだ。

「これならどうだ?」

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「ライダーキック!」

ドガッ!!

ジョーカーは必殺キックをガメルに直撃させるが・・・

「痛いな～もうっ!!」

ブンッ!

「うわっ!?」

それほど聞いてはおらずジョーカーは足を掴まれ投げ飛ばされた。

それを見た陽は慌ててジョーカーに駆け寄る。

「だめだよ正太郎！その怪人の身体はグリードの中でも一番硬い！迂闊に近づいたら返り討ちにあってしまう！」

「ならいったいどうすりゃいいんだ？ジョーカーの戦闘スタイルは肉弾戦だけだぞ？」

「・・・ハーフチェンジシステム・・・いや、Ｔのメモリ、か、Ｍのメモリ、さえ完成していれば・・・」

「・・・無いものねだりしても駄目ってことか・・・そうだっ！」

ジョーカーは再び拳を固めた瞬間何かを閃いた。

「陽、サイクロンのメモリはあるか？」

「あ、ああ。あるけど・・・」

ジョーカーは陽からサイクロンのメモリを受け取るとハードボイルダーに跨ると右腰のマキシマムスロットにそのメモリを入れた。

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「サイクロンアタックだ。ハアァァァ！！」

ブゥゥゥゥン！

風を纏ったハードボイルダーでジョーカーはガメルに突撃した。

「うあぁぁぁぁ！？痛いよ～～！メズール～～」

それでも倒せはしなかったものの・・・ガメルはこの場から立ち去っていった。

「まったく、無茶をしすぎだよ正太郎！」

「それでも・・・あいつはジョーカーのメモリの力だけじゃ倒せないぜ・・・」

「うん。やっぱり例の物を急いでもらうように母さんの会社に頼んでみるよ」

「そうしてくれ・・・よ」

バタッ

変身を解除した正太郎は、ヒステリアモード使用後にくる睡魔のせいで倒れるように眠ってしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

キックホッパーはたった一人で２０体はいたサメヤミーをなんとか片付けていた。しかしかなりの体力を消費したようでフラフラしてるように見える。

「ふふふ、たしかに君は‘伝説のライダー’のお弟子さんということはあってお強い。しかしもう限界の様子ですね」

『ＡＤＶＥＮＴ』

アビスは2体のサメ型の契約モンスター‘アビスラッシャー’と‘アビスハンマー’を召還する。

「トドメを刺してあげなさい」

「「シャァァァ！！」」

「・・・くそ・・・どうせ俺なんか・・・こんなところで死ぬのかよ・・・悪いなシュン・・・助けてやれそうにない」

2体が襲い掛かってきてキックホッパーもあきらめてしまったその時だった。

「まてぇぇぇぇい！！」

「「「っ！？」」」

突然の声にその場の全員が振り向くと・・・そこには2本の白いラインに真紅のマフラーの仮面ライダーがいた。

「・・・し、師匠・・・」

「がんばったな双君。後はまかせろ！」

「す、すいません・・・お願いします・・」

矢車はその場に膝をつくと変身が解かれてしまった。

「たとえ仮面ライダーと言えどもその力を悪の力に使うなど言語道断!!正義のライダーパワーを喰らえ!・・・いくぞぉ!!」

「くっ!?」

本郷猛・・・仮面ライダー1号は仮面戦士科の屋上で戦闘を始めた。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「あ、メズールぅぅ!」

「ガメル!ようやく会えたわね!一人で寂しかったでしょう?」

武偵高近くの川原を挟んでガメルとメズールは・・・とうとう再開してしまった。

「寂しかった~~。なんか、オーズみたいなのが，いっぱいいた!」

「仮面戦士・・・とかいう奴らね。どうしたのガメル?やられちゃったの?」

「うん!」

「それじゃあ・・・もう一度さっきの場所に乗り込んで仮面戦士たちを全部倒しちゃいましょうか！」

「そうしよう、メズール！」

メズールとガメルは再びアドシアードの会場に向かおうとしていたが・・・

「行かせるかよ」

「これ以上俺以外のみんなが楽しんでいたアドシアードをめちゃくちゃにはさせないぜ！」

俺とアンクはその場に到着した。

接戦（後書き）

キンジのオリジナルバイク『オーラインクロス』がありますが、ライドベンダーと差別かしたいのであってほしいという機能を募集したいと思います。思いついた機能があったた教えてください。

高速灼熱（ラトラーター）（前書き）

一応テストは終わったんでこれからも更新します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア

高速灼熱（ラトラーター）

それは俺とアンクがメズールとガメルに遭遇する２０分ほど前のことだった。

「ブモオォオォオォ！！」

「くっ！？」

バン、バン、バン！

アドシアード会場入り口、ジョーカーがガメルの相手をしていたため、後藤は一人で囮になりバイソンヤミーを離れさせていた。

「やはりただの拳銃ではだめか・・・っ！？」

後藤はバイソンヤミーの重力制御の能力で浮かばされてしまう。

「アタレ～～！！」

「ぐあぁっ！？」

バイソンヤミーの重力で勢いよく壁に叩きつけられそうになる寸前・・・

「トオッ！！」

パシッ！

「大丈夫かい？」

「は、はい・・・っ！！・・・あなたは！！」

黒いボディに真っ赤な複眼の左胸に独特のマークがついた仮面ライダーが背中を受け止めるようにして助けてくれた。そして後藤を少し下げると・・・その仮面戦士は独特のポーズを取る。

「俺は太陽の子！！　仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸ！！」

決めポーズを終えたＲＸ・・・南光太郎さんはバイソンヤミーを指差す。

「これ以上学園の生徒達が楽しんでいたアドシアードを壊すのは俺が許さん！！リボルケイン！」

ＲＸはベルトから剣状の光り輝く杖を出現させるとバイソンヤミーに立ち向かう。

「フンッ！」
ズバッ！

「ブモッ！？」
ズバッ！

リボルケインでバイソンヤミーの角を切断したＲＸはさらにもう１本の角も切り落とすとそのままバイソンヤミーの腹部をリボルケインで貫いた。

「ハァァァァッ！！」
バチ、バチ、バチッ！

「オオォォォォ！？」
ドオォォォォォン！！

RXがリボルケインを引き抜くとバイソンヤミーは爆発し、後藤に1枚のセルメダルが落ちてきた。

「・・・あなたは・・・ゴルゴムやクライシスと戦ったあの、南光太郎さんですよね！助けていただきありがとうございました」

「いや、お礼なんていいよ。仮面ライダーとして当然のことをしただけだ」

光太郎さんは変身を解くと辺りを見渡した。辺りのものは傷や欠けたところはあるが完全に壊れたものはない。

「あれほどの数の怪人がいたのにそれほど壊されてないな・・・安心したよ」

「これなら日を改めてアドシアードはできそうです」

「そうか、それはよかった！・・・できれば渉君・・・1年の、紅渉、（くれないわたる）君に伝言を伝えておいてくれないか？・・・アドシアードの日時が再度決まったら連絡してくれ、君のバイオリンを聴きにくる・・・と」

「は、はい。分かりました・・・」

後藤は少し意外な伝言に目を丸くしたがとりあえず頷いた。

「それでは俺は急ぐので失礼させてもらうよ」

ブゥゥゥゥン！

光太郎さんは青いバイク‘アクロバッター’に乗ると颯爽とその場を立ち去った。

「・・・たしか1年の紅は・・・父親がどこかのキングなため、かわりに南光太郎さんに育てられた仮面戦士科の生徒だったな。・・・・仮面戦士、俺もいつか・・・仮面ライダーになりたい」

後藤は拳を強く握ってその場に立ち尽くしていた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「とおっ！」

1号は物凄い勢いで飛び上がるとアビスハンマーにキックの構えを取ると身体を錐揉み状に回転させながらキックを決める。

「ライダァァァスクリューキィィク！！」

「シャァァァ！？」
ドオォォォォン！

「シャァァァァ！！」

1号のライダースクリューキックによってアビスの契約モンスタ

ーの一体のアビスハンマーは爆撒するともう1体の契約モンスターのアビスラッシャーが半身をやられて怒ったかのように1号に走ってきた。

「やってしまえ！！」

「シャァァァァ！！」

「ライダァァチョォォップ！！」

ドスッ！

アビスラッシャーの背筋にチョップをした1号はそのままアビスラッシャーを抱え上げろと・・・

「ライダァァきりもみシュゥゥト！！」

高速で錐揉み回転させて空高く投げ飛ばした。

「シャァァァァ！？」

ドサッ！　ドォォォォォォン！！

「何ぃぃ！？・・・くそっ役立たずどもめ！！」

受け身を取れずに地面に叩きつけられたアビスラッシャーは爆発し、アビスのボディの色は灰色となり、ブランクの姿になってしまった。

「もうこれでお前の力の大部分はなくなった！・・・そろそろ諦めて警察に投降するんだ」

「くっ！？・・・まだだ！まだ私には手段がある！・・・さあ、私

の欲望よ、集まるのだ！」

「「「「シャアアアアアア！！！」」」」

ザアアアアア！！

地面から突如現れたサメヤミーの大群はアビスの数メートル上空で一つに集まり、巨大なノコギリザメのような怪物になった。

『シャアアアアアア！！』

「どうだ！この大きさならさすがの1号も苦戦するだろう？」

「し、師匠・・・・」

矢車は不安そうに1号を見つめるが・・・1号はまったくと言っていいほど動揺していない。

「たしかに俺ではこの大きさは苦労する。・・・しかしここをどこだか忘れていないか？」

「何？」

「つまり俺達の出番だな？」

1号の後ろには三人の職員の仮面戦士が立っていた。

「ご苦労さまでした本郷さん。あとは僕達にお任せください」

「・・・ここは武偵高の仮面戦士科の学科棟だ。大物には専門の仮面ライダーだっているんだぞ」

アビスは悔しそうに後ろに後づさる。・・・それも仕方ないな。だってそこにいる三人は学園の教職員の中でもトップクラスの仮面戦士なんだからな。

「いくぞヒビキ、イブキ」
ギィィィィン

ザンキ先生は左腕のブレスレッドを展開してその中の弦を弾き鳴らし腕を上に掲げると雷が直撃した。

「はい、ザンキさん！」
ピュゥゥゥゥ

三人の中で一番若い男，イブキ，さんは三人の中では一番高齢のザンキ先生の言葉に頷くと笛のような物を鳴らし額にあてると風に包まれた。

「おしゃっ！・・・・」
キィィィィン

３０代前半の仮面戦士科の教師・・・，ヒビキ，さんは音叉を指で弾き、額に翳すと紫色の炎に包まれた。

「フンッ！」

「ハッ！」

「覇ァァ！！」

ザンキ先生は弦の鬼‘斬鬼’に、イブキさんは管の鬼‘威吹鬼’に、そしてヒビキさんは太鼓の鬼‘響鬼’に変身を遂げた。

「そんじゃ本郷さん！あのデカイ鮫は俺らで片しておくから、本郷さんはあの仮面戦士の逮捕を頼みますよ！」

響鬼は‘シュッ！’と決めながら1号にそう言うと斬鬼達と共にノコギリザメヤミーに立ち向かっていった。

「火炎連打の型っ！！」

「音撃射、疾風一閃！」

「音撃斬、雷電斬震っ！！」

響鬼達はそれぞれの必殺技をノコギリザメヤミーに浴びせ始めるのを見た1号は再びアビスの方を振り向いた。

「これでお前を守るものはいないな」

「くっ！？」

1号が少しずつ踏みよった途端、アビスは屋上から飛び降りて逃亡しようとした。

「待て！・・・うっ！？」

「落ち着くんだ、双。下にはすでに・・・」

「動くな！」

「・・・おのれ・・1号」

矢車が下を眺めると・・・アビスは複数のライオトルーパー達に囲まれていた。

「破ァァァ！！」

ドォォォォォン！

やがて鬼達の活躍でノコギリザメヤミーで倒され、この場の誰もが『事件は解決した』と思った。

「悪いね、彼は僕達の組織に必要なんだ」

「「「ぐあぁぁぁぁ！？」」」

いきなりのカザリの奇襲で、状況は一変した。

「とおっ！　ライダァァパァァンチ！」

「おっと！？・・・あぶない、あぶない」

1号のライダーパンチをカザリはアビスを掴みながらかわす。

「貴様もグリードなのか？」

「うん。僕の名前はカザリ！よろしくね1号さん！・・・それじゃあね！」

カザリは1号でも追いきれない速さでその場を立ち去っていった。

「・・・ショッカーはいなくなっても・・・悪は尽きないな」

本郷さんはそう呟きながら変身を解いた。

これが俺とアンクがヤミーを探して武偵高に到着する前に起きた出来事だった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

そして現在、武偵高近くの川原・・・俺とアンクは情報科の証言でこの場に到着し、メズールとガメルの前に立っていた。

「キンジ・・・さっき説明した通りだ。・・・例の作戦・・・いけるな？」

「ああ、やってやるよ。変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「はっ！」

バシャッ！

俺はオーズに変身すると川原に飛び込む。ここはそれほど深くはなくて、膝まで浸かる程度だな。

「さあ、かかってこいよ！のろまのガメルとメズール！」

まずは挑発。・・・アンクの話だとまずこれで・・・

「メズールを、馬鹿に、するなっ！」

ガメルは動き出す！

「ちょっとガメル！迂闊に動いたら・・・」

「かかった！」

『ライオン！トラ！バッタ！』

ピカッ！

俺はガメルが近づいて来た瞬間に頭部をライオンに変えて、ライオネルフィッシャーを放った。

「また、目がチカチカするぅ～」

アンクの言ってた通りガメルには光が効くんだな。・・・これでガメルはしばらく動けない、この間にメズールを！！

「ハアァァァ！！」

俺はトラクローを展開させながらメズールに仕掛けるが・・・

「あなた、グリードを舐めてない？」

バシャァァァ！

「うわぁっ！？」

メズールから放たれた水圧攻撃で俺は吹き飛ばされてしまった。

「その程度の実力じゃ、私とガメルを相手になんてできないわよ？」

「うぅ、そうだぞ～」

ガメルは目を擦りながらもメズールの隣に向かう。・・・まずい、予想よりも効いてない。まるですでに1度喰らって、まだ回復してなかったかのようだぞ。

「・・・こうなりゃ仕方ない。キンジ！！黄色のメダルのコンボだ！！」

「・・・それしかないようだな」

俺はチーターのコアメダルを取り出すと、バッタのコアメダルをベルトから外す。

「ふふ、あなたはコンボに耐えられる器かしら？」

「・・・さぁな。今に分かるだろ」

バッタのコアを外した場所にチーターのコアを入れた俺はベルトを再スキャンする。

『ライオン！トラ！チーター！ラッタッ！ラッタッ！ラトラ～タ～～！！』

「オォォォォォォォ！！」

ゴォォォォォ！

俺はライオン、トラ、チーターの黄色のコンボ，オーズ　ラトラーターコンボ，に変身した途端に、全身から川原の水を蒸発させてしまうぐらいの高熱を放った！

「うわっ、まぶしいしあつい～」

ガメルにはその程度のダメージしかなかったが・・・

「キャアァァァ！？」

チャリン　チャリン！

メズールはコアメダルを数枚取り出させるほどのダメージを与えた。・・・どうだ、耐えられる器だっただろ？

「こいつは儲けたな！」

アンクはすぐさま怪人態になるとそのメダルをキャッチした。さすがアンクだ、行動が早い。

「キンジ！メズールはこの場で仕留めろ！！」

「ああ、これで終わらせる！！」

『スキャニングチャージ！』

俺は全身にメダルのパワーを溜めて光を放ちながら高速でエネルギーのリングを潜りながらトラクローを展開してる両手を大きく広げる。

「くっ、・・・おいで」

「シャァァァ！」

「っ！？」

メズールの呟きとともにいきなり1体のサメヤミーが現れたが・・・止まる必要もない。このまま駆け抜ける！！

「セイヤッァァァァ！！」

ドオォォォォン！

俺はフルパワーのトラクローでサメヤミーを倒したが・・・その場には大きな穴だけが開いてガメルとメズールの姿はなかった。

「ちっ！また逃げられたか・・・」

「・・・うぅぅぅ・・・」

ヒステリアモードも終わり、俺はコンボによる疲労感などでその場に倒れてしまった。・・・ホント、コンボはキツイな・・・なんだか心臓が締め付けられるような感覚になる。

「しっかりしろキンジ！・・・・ったく、しょうがねぇな」

意識がもうすでに朦朧としているが・・・感覚的にアンクが俺を運んでるんだろうな・・・なんか飛んでる感じがするし・・・

俺達の決戦だらけの一日は・・・ようやく終わりを告げた。だけども・・・・・

「あれがオーズの力ですか。・・・たしかに鴻上会長の言う通り、全てのコアメダルを集めるための器の候補にはなりそうですね」

先ほどの戦いを見ていた黒服の男を・・・俺もアンクも気づいていなかった。まさかこの男が・・・俺達の運命をあんなにも狂わすことになるなんて・・・考えてもなかった。

高速灼熱（ラトラーター）（後書き）

一応今回で白雪編の戦闘パートは終了です。次回は白雪編のエピローグになります。

‘力’（前書き）

今回で白雪編がラストになります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

‘力’

俺はまたもやコンボからの脱力感でしばらく起きずに寝込んでいて・・・目覚めたときにはアドシアードの戦いから4日が過ぎていた。そして今日は丁度やれなかった分のアドシアードを行う日にちだったらしく武偵病院の退院の手続きを済ませて会場へむかった。

『只今より、第5回国際アドシアード競技大会、閉会式を始めます』

どうやら丁度、閉会式が始まったところらしいな。・・・って、ことは吹奏楽部のコンサートも終わったってことか。

「素晴らしい演奏だったよ渉君！」

えっ？・・・3メートルぐらい先の席に座って拍手してる人って・・・光太郎さんじゃね？20年ぐらい前まで仮面ライダーとして悪の組織と戦ってて・・・今はステーキハウスを経営してる伝説のヒーローの一人。・・・そんな大物まで見に来てんのかよ。

「南光太郎さんですよね！できればサインをください！」

凍条は色紙を持って光太郎さんに駆け寄っていくのが見えた。ここでサインを貰おうとするってことは、あいつ知らないのか？・・・東京都、黒田区であの人がステーキハウスをやってること。

「あ、ああ！」

・・・さすが光太郎さんだ。凍条にちゃんとサインを書いてくれ

てる。

「ありがとうございますっ！！」

凍条は光太郎さんに礼をすると俺の方にやってきた。

「先輩！！見てください！伝説の英雄の一人の光太郎さんからサインをもらいました～～！」

「そ、そうか。よかったな・・・」

とりあえず・・・せっかくサインでテンションが上がってるんだし、みんなその気になればサインは貰いにいけることは黙っておいてやろう・・。

「「「おぉぉぉ！！」」」

周りが一斉に騒ぎ出した。どうやらチアが始まったらしいな。・・・モデルスタイルである陽に、正太郎と陽の友人の・・・たしか那須野亜希子とかいうヤツ。その隣にはそれなりにチアの衣装を着こなすアリアに・・・体格的に無理を感じる平賀さん。そして・・・

「星伽さ～～ん！！」

緊張しながらも頑張って踊っている白雪の姿が見えた。

「お～、さすが陽だ。練習なんてしてなかったのに、あいかわらずやろうと思えば何でもできるんだな」

いつの間のか隣にいた正太郎は相棒である陽を絶賛しているが・・

・最初はこんな関係じゃなかったんだよな・・・まぁ、今はそんな重くなる話はいいか。

「「「ゴー！ゴー！レッツゴー！レッツゴー武偵！！」」」

ドクン

いかん！？白雪のむ、胸が予想以上に揺れていて・・・このまま見ているとまたヒスっちまう。落ち着け、落ち着くんだ俺！！

「「「ワァァァ！！」」」

バン、バン、バン！

何とかヒスるのを耐え抜いた俺は再びアリアと白雪を見る。チアの女子達がポンポンを上に上げると銃で打ち抜き紙吹雪のように散らしている中、アリアと白雪が銃で撃ちながらも笑いあってる光景が見えた。・・・あの二人ならもう分かり合えるだろうな。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「あ～、帰りたくねぇ～～」

「・・・・・・」

なんとなく小腹がすいたのでクスクシエに向かうと・・・俯きながらアイスを食べているアンクを見つけた。あの様子だとここ数日帰ってないな・・・。

「あ、キンジ。やっと目が覚めたのか」

アンクが俺に気づいたため、俺はとりあえずアンクの向かいに座った。

「ああ、やっぱりコンボはキツイな。・・・あ、千代子さん。俺、爆竜カレー」

「は～い！」

とりあえずここからの話は聞かれないようにしたかったため、俺は１０分ぐらいかかるメニューを注文して千代子さんを下げた。

「アリアと白雪の事件とかを経験して分かった。やっぱりあいつらを守るにはヒステリアの血も、オーズの力も必要だってな」

「・・・・・・」

アンクの視線が鋭く変わった。

「でもその二つの力だけでも俺なんかじゃ力不足だ・・・あいつらを守るためには・・・目の前の人達に手を伸ばすにはまだ・・・だからアンク・・・お前が前に言っていたメダルの総取り・・・俺が手伝ってやる！」

チャリン！

俺はタトバに変身するためのコアメダルをテーブルの上に置く。

「だからお前も・・・俺の周りを助けるのを手伝え！」

ガタッ！

思わず席から立ち上がりながらも俺はアンクに右拳を突きつける。

「・・・ハッ！お前ならそう答えてくれると思ってたぜ！」

ガタッ！

アンクも立ち上がると俺の拳に左拳を軽くぶつけて来た。

「キンジ・・・‘力’ってのは自分の欲望のために使うもんなんじゃねぇ。自分の信念を貫くためにあるんだ。・・・・守りたいもんがあるんなら覚えておけ」

「ああ、貫いてやるよ。俺の信念をな・・・」

俺とアンクのやりとりを聞こえないながらも見ていた千代子さんは「友情ね～」と言いながらデカ盛りのカレーを運んできた。・・・しまった忘れてた。

「・・・アンク手伝ってくれ。さっき適当に注文したメニューって・・・激辛デカ盛りメニューだったの忘れてた」

「ハァッ！？ふざけんじゃねえぞ！俺は甘党なんだ！辛いのは駄目なんだよ！」

アンクは慌てて逃げようとするが・・・逃がしてたまるかよ。

「逃げる気かよチキンやろう！」

「誰がチキンだ！上等だ！喰ってやろうじゃんか！！」

俺とアンクは激辛に悶絶しながらも・・・1時間ほどかけて爆竜カレーを完食した。俺はそれほどでもなかったが、アンクは半泣きしてたことが印象的だったな。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「チアのメンツに欠員が出てね、あたしが白雪を説得したの！生徒会長ならなんとかしなさいって！」

「・・・なるほどな」

俺とアンクが部屋に帰ってくるとすぐにアリアと白雪も帰ってきた。俺は‘あの’話題を振られる前にチアの話題を振った。そんで聞いたんだがジャンヌはあの後、教務科に連行されたらしい。これで平和だと思いたいが・・・もし‘あの’話題を進められたら・・・俺とアンクはきっとやられる。・・・ほら、隣でアンクも冷静な顔をしながらも足が震えている。

「あの・・・私からも言わなきゃいけないことがあるの。・・・アリアとキンちゃんに・・・」

「ん？何だよ？」

「この間キンちゃんが風邪をひいてた時、私・・・嘘ついてました。あの時買ってきたお薬、私が買ってきたんじゃないの。あれは・・・

アリアなんでしょ？」

えっ！？あれはアリアだったのかよ。・・・俺は驚きながらもアリアの方を向くと、アリアは照れくさそうに明後日の方を向いた。

「やな女だよね私。けど・・・やな女のままでいたくないから・・・ごめんなさい！」

「っ！？」

白雪はアリアに頭を下げて謝った。

「も、もういいわよ。この話は終了！そんなことより白雪！それとアンク！あんた達もあたしのドレイになりなさい！」

「「えっ？」」

俺達はアリアの意外な言葉に驚いてしまった。

「今回の事件で分かったわ。今までのあたしは自分とパートナーさえいれば何とかなるって思っていたわ。でも今回は・・・４人の力があったから倒せたんだわ。だから・・・あんた達も私の・・・仲間になりなさい！！」

へぇ、あのアリアが〝仲間〟にね。

「・・・俺はお前の欲望からヤミーを作ったグリードだぞ。・・・それでもいいのか？」

「いいわ、許してあげる。今回の事件で分かったもの。・・・あん

たはあたしが思ってたほど悪い奴じゃないんだって」

よかった。自身の願いからヤミーを作られたアリアがアンクを嫌わなくてくれて・・・

「白雪、アンク。これ、キンジの部屋の合鍵ね。今後好きに入っていいわ！」

「ありがとうアリア！ありがとうございますキンちゃん様！！」

「ハッ！これでいちいち面倒なことをしなくてすむな！」

あ～なるほど合鍵ね～。それは便利だな～～。って、違う！！

「なんでお前がそれを持ってんだよ！」

「別にいいじゃない」

「よくねえよ！！」

アンクはともかくお前がそれを持っている謎と、白雪に渡す理由が分からん！！

「ただし、この前みたいな・・・その・・・やらしいことは禁止っ！！ああゆうのはチームの士気を・・・」

アリアの言葉とともに・・・白雪は黒いオーラを纏いながら立ち上がった。

「アリア・・・抜け駆けするつもりね・・・」

「え？」

「言っておきますけどねぇ・・・私だって・・・私だって・・・キンちゃんとキッス！したんだから～～！！」

チャキ！

白雪は大胆発言とともに刀を抜き、アリアに斬り掛かった。

「引き分け！だから引き分け～！そこから私が一歩リードすればいいの～～！」

「キンジ！どうゆうことよ！説明しなさいよ！」

「・・・アンク・・・デュエルしようぜ」

ガラッ！

「・・・ああ、そうするか」

俺とアンクはカード握りながらベランダに出ると・・・現実逃避のために防弾の物置の裏に隠れてカードゲームを始めた。・・・まあ、すぐに巻き添えを喰らっちまってそれどころじゃなくなっちまったがな。

一難去ってまた一難って言葉があるが・・・俺はそれを座右の銘にできそうなきがするぜ。

・・・・・・

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「おのれ！！おのれ『武偵殺し』め！！絶対、絶対に復讐してやりますよ！！」
「「「「ギィィィィィ！！」」」」
俺がアンクとカードゲームをやってた頃、武偵病院の一室では同じ2年であり仮面戦士科の須藤が数体の蟹の怪人とともに遠くの外を見つけていた。
「・・・・どうやらヤミーの育ちは順調のようですね。そろそろ実験を第二段階に移しましょうか」
扉の間から須藤の一部始終を見ていた黒服の男は、不思議な形の剣と黄色いカンを握っていた。

‘力’（後書き）

次回の物語から理子編こと『ブラド編』を始めます。登場キャラの更新は土曜日にしようと思います。

Wの風／再臨の少女（前書き）

今回から理子編のスタートです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

本来なら自分の部屋ってのは安らぎの場所のはずだ。だが今の俺の部屋はあいかわらず住み付いているアリアと、合鍵を貰ってから堂々と夕飯を作りに来るようになってしまった白雪のせいで安らぎなんてなく落ち着くことなんてできない。

「ボルシャックでシールドを攻撃！」

「ハッ！スクラッパー！」

だから俺は最近・・・できるだけ時間を潰せるように自習室でカードゲームの自習をしている。ここにいる面子は俺とアンク、矢車にサボり仲間の乾匠（いぬいたくみ）と武藤と不知火だ。・・・俺とアンクはともかく・・・こいつら暇人なのか？

「・・・ロストソウルだ・・」

「ちっ、手札も何もかも失っちまった・・・どうせ俺なんか・・・」

矢車はタクミに押され気味で悔しそうだな。俺はもうアンクに負けてしまったので矢車とタクミの勝負を見ていると・・・

『ｐｐｐｐ』

「あ、悪い・・・」

俺の携帯が鳴った。・・・知らない番号だな。一体誰だ？

『キンジ、今すぐ女子寮に来て！』

電話をしてきたのはアリアのようだな。アリアは俺のアドレスを知ってるはずのにワザワザ別の携帯から掛けているってことは何かあったのか？

「・・・分かった！すぐに行く、場所は？」

『１０１１号室よ』

「分かった！・・・悪いお前ら、俺は抜けるわ！」

俺は急いで自習室を出て指示された女子寮の部屋へ向かった。

「・・・ここだな・・・」

ギィィィィ

俺はゆっくりと扉を開けると・・・

「もうっ！遅いわよキンジ！でも許してあげる」

ガシッ！

「っ！？」

アリアがいきなり俺を掴んで部屋に引き入れた。桃色に照らされた部屋には大量の衣服が足の踏み場もないほどにあった。

「キンジ、どれがいい？」

「は？」

「だから～、どれを着てほしいかって言っているのっ！」
ゲシッ！
「っ！？」
足技でベッドに倒されてしまった俺に・・・
「キンジ～～！！」
アリアは胸の部分を俺の顔にすり当てるように抱きついてきた。・・・間直に感じる女の子の香りと感触で俺は一瞬にして・・・ヒステリアモードになってしまったが・・・ようやく理解したぞ。
「・・・なんのつもりだ理子」
「ふふ、やった～！クララが立った～！」
理子はアリアの変装メイクを剥ぎ取った。
「その通り！理子りんで～す！ただいまキ～くん！」
「どうして戻ってきたんだ？」
俺は冷静に俺に跨る理子に質問するが・・・
「きーくん。理子を助けて」
いかん！？今の俺は女子を絶対に助けようとしてしまうヒステリアモードだ！理子は明らかにそのことを分かっているな。

「てゆうかそもそも～、せっかく武偵高とイ・ウーのダブルスクールをしてたのにアリアとキーくんのせいでイ・ウーを退学になっちゃったんだよ～。プンプン！」

何？・・・イ・ウーを退学だと？・・・どうゆうことだ？

「今から理子は～男の子が絶対に言う事を聞いてくれる魔法の言葉を使っちゃいま～す！」

理子はそう言いながら自身の顔を俺の顔のスレスレに近づけると・・・誘惑するように耳元で告げてきた。

「き～くん、えっちいこと、しよっ！」

どうする俺！どうやってこのピンチを乗り切る！。

「きーくん。好き、好き、だ～い好き！・・・だからきーくんも理子の好きを受け止めて」

それは無理だな理子。『武偵殺し』として幾つもの事件を引き起こし、かなえさんに罪を擦り付けた・・・そして何より俺の兄さんを手に懸けたお前の言葉をそう簡単に信じるわけないだろ。

「冗談がうまくなったな理子」

「え～、き～くんヒド～い。ただ、理子は泥棒さんだからアリアからきーくんを奪おうとしただけなのに～」

「・・・君は俺から兄さんも盗んだ」

俺はそう言いながら理子に鋭い視線を送るが・・・意外な答えが返ってきた。

「まだ殺したと思ってる?」

「・・・どうゆう意味だ?」

「言葉通りの意味。理子がきーくんラブになる前の理子の恋人さんだし。あ、でも安心して。こんなことはしてないから!理子は穢れない乙女なのです~」

だろうな・・・。兄さんはこんなことをできる人間じゃない。

「証拠はあるのか?」

「それはもうすぐ・・・」

「違う。兄さんが生きているっていう証拠だ」

「H・S・S」

何っ!?なんで理子がそのことを知っている!!・・・まさか・・・本当に兄さんは・・・

「『武偵殺し』なんて間違いだよ~。理子は一人も殺してないもん。正確には『武偵攫い』かな~」

・・・たしかに須藤以外の『武偵殺し』の被害者は全員死体のようなものは発見させてはいない。もしかしたら本当に・・・

「は～い！ここでくんに選択肢で～す！もしここで理子の‘好き’を受け入れてくれるならお兄さんのことをい～っぱい話してあげる。・・・どうするキンジ？」

くそ・・・理子は俺が兄さんを尊敬してるってことを知っている上でこんな選択肢を出してるな。・・・俺がその選択に悩んでいるその時だった。

「あたしのドレイを盗むなっ！！」

ガシャァァァン！

アリアはＳＷＡＴのごとく窓ガラスを蹴り割って突入してきた。

「アリア～。イベントシーンに別のヒロインが乱入してくるなんて駄目でしょ～」

理子はそう言いながら腕時計を外してこちらに投げつけると・・・それは強烈な光を放った。

「閃光手榴弾か！？」

「きゃっ！・・・あれ、理子は？」

俺とアリアはその光で目を閉じてしまった間に・・・理子はすでにこの部屋から姿を消していた。

「ドアを開ける音はしなかったぞ」

「ってことは・・・」

俺とアリアはベランダに出て辺りを見渡すと、上に伸びる動力つきのワイヤーで屋上に向かっている理子を発見した。

「屋上よ！いくわよキンジ！」

「ああ！」

俺とアリアは屋上へと向かうと月明かりに照らされた理子がこちらを向いて笑った。

「今日はきれいな夜。オトコもいて硝煙の臭いもする。理子、どっちも好き」

「・・・峰・理子・リュパン４世！今度こそ逮捕してやる！」

「やれるもんならやってみなライム女（ライミー）！！」

「言ったわねカエル女（フロッキー）！！」

・・・こうして２１世紀のホームズとリュパンの子孫による英仏戦争が開幕した。横からで悪いが日本も参戦させてもらうぞ。・・・俺は拳銃を構えようとしたその時だった。

「ギィィィィィ！！」

「「「っ！？」」」

俺達のいる屋上に１体の蟹の怪人が現れた。

「キンジ！」

「ああ、変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身してトラクローで切りかかろうとすると・・・

「待てよキンジ。そいつは‘俺達’が相手をするぜ」

仮面ライダージョーカーのようだが何やら違う仮面戦士が俺と蟹の怪人の間に割って入ってきた。

「・・・緑の仮面戦士？」

アリアは右側からその仮面戦士を見て、そんな言葉を呟く。

「・・・黒の仮面戦士？」

アリアの反対側からその仮面戦士を見た理子はそう呟いた。

「黒？・・・緑でしょ？」

「どっちもだ」

右側が緑色、左側が黒の仮面戦士は二人の言葉を肯定した。・・・この声、やっぱり正太郎か。

「「俺達（僕達）は‘仮面ライダーW’」」

何やら二人分の声が聞こえる仮面戦士・・・仮面ライダーWの台詞とともに、ダブルを中心に強い風が巻き起こる。

「「さぁ、お前の罪を数えろ！」」

ダブルは蟹の怪人をゆっくりと指差すと・・・そんな台詞を告げた。

俺はこの日始めて・・・正太郎と陽・・・二人で一人の仮面ライダーを目撃した。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺が新たな仮面戦士‘仮面ライダーW’と出くわしている最中、アンクはどうしてたかと言うと・・・

「泉！後はお前を倒せば俺がこのメンバーで一番強いってことだ！・・・精霊王でトドメだぁぁぁ！」

「ハッ！テメェなんかにやられねぇよ！A・デイ！！」

「な、なにぃぃぃぃ！？」

・・・未だに武藤達とカードゲームを続けていた。

Wの風／再臨の少女（後書き）

今回は唐突にWを出してみました。・・・そして今回のカードネタ・・・自分の高校では再びブームが来たのでつい・・・。

Wの風／無限罪（前書き）

今回はギャグ要素少なめのどちらかというとシリアス回。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

「「さぁ、お前の罪を数えろ！」」
ドカッ！

そう言い放ったWは蟹の怪人に駆け寄ると風を纏った跳び回し蹴りを真っ先に決めた。

「ギィィ！？」
チャリン

その一撃で蟹の怪人から何枚かセルメダルが散らばる。・・・やっぱりあの怪人はヤミーか。・・・いや、今はそんなことが問題じゃない。問題なのは正太郎が変身しているあの2色の仮面戦士‘仮面ライダーW’の方だ。

「「ハッァ！！」」
ビュウウウウ

「ギィ！？」

右側から発生しているあの風・・・ベルトのメモリを見る限りサイクロンメモリの能力だろうな。そして左側のジョーカーの身体強化との組み合わせでキレのある素早い攻撃をしているようだな。

「ギィィィッ！！」
バババババッ！

「おっと!?」

カニヤミーはダブルから一度距離を取ると無数の泡をダブルに放った。するとその泡は何か物体に触れた途端に次々と爆発した。

ドォォン！　ドォォン！

「正太郎、どうやらあの泡は物体に触れると爆発してしまうらしくでの爆発はやっかいだ。・・・僕のメモリを変えよう」

「ああ、お熱いのを咬ましてやろうぜ！」

『ＨＥＡＴ』

ダブルは一人で二つの声を出しながらサイクロンメモリを外すと別の赤いメモリを起動した。

『ＨＥＡＴ　ＪＯＫＥＲ』

独特のメロディとともにダブルの右側は緑から赤へと変わり、マフラーも消えた。

「赤くなっちゃった・・・何なのあの半分こ・・・」

「・・・キカイダーみたい・・・」

アリアはダブルのチェンジを見ながらそんなことを呟く。・・・理子・・・たしかにテレビで入っているヒーローに似ているがそれは言っちゃ駄目だ。それにもし言うとしてもせめて０１だ。

「・・・分からない・・・でも、俺の知り合いが変身してることは

確かだな」

あの2つの声・・・正太郎は確実としてもう1人の声は・・・陽だろうな。しかし二人で変身する仮面戦士なんて聞いたことないぞ。

「ギィィィィ！！」
ババババババッ！

「正太郎、周りの物に触れる前に・・・分かってるね？」

「ああ、分かってるぜ・・・おらっぁ！！」
ジュゥゥゥゥゥ

「とりゃぁぁぁっ！！」
ジュゥゥゥゥ

ダブルは炎が灯るほどに熱くした右拳で次々と泡を蒸発させる。・・・たしかにあれなら爆発はしないな。ヒート・・・熱の力か。・・・ヒートメモリの熱の力とジョーカーメモリの格闘能力だからこそできる方法だな。

「さぁて・・・そろそろ蟹との戯れは終わろうぜ？」

「ああ、せっかくだしさっき名前を決めた技で倒そう」

「おっ！いいな！・・・なら・・・」
『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

ダブルは再び右側を緑色の姿に変えるとすぐさまベルトからジョーカーのメモリを外して、右腰のマキシマムスロットにメモリをセ

ットした。

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
ビュウウウウウウ！

ダブルは緑色の竜巻を発生させると、その力で宙に舞い上がった。
「「ジョーカーエクストリーム！！」」

「っ！？」

「「割れたぁ！？」」

ダブルは正中から分割されながらカニヤミーに向かってキックを決めにいく。・・・幾らなんでも半分に割れるのはないだろ・・・予想外すぎる・・・アリアと理子なんて声を出して驚いているし・・・。

「「ハァァァァッ！！」」
ドン！　ドン！

「ギィィィィ！？」
ドォォォォォン！

時間差で放たれた二発のキックが直撃したカニヤミーは爆発し辺りにセルメダルが散らばった。

「よし、とりあえず蟹は倒したし・・・」

ダブルはW型に開いたベルトを閉じて変身を解除すると・・・そこには正太郎一人だった。・・・どうゆうことだ？てっきり二人の

声がしてたから二人で変身していたと思っていたんだが・・・。

「いったい今の仮面戦士・・・仮面ライダーWって何なんだ?お前と陽の声が聞こえたがどうゆうことだ?」

「まぁ・・・このことは説明が長くなるし明日にさせてくれキンジ」

「あ、ああ」

俺は正太郎の言葉に頷きつつもオーズの変身を解除した。

「しっかし、ヤミーを倒した後のメダル回収ってメンドイよな~。なんかこう・・・ガ~~って回収できるのってないのかよ?」

「さぁな。・・・・アリア、理子、場所を変えるぞ・・・」

一人セルメダルを集める正太郎をその場に残して俺達は先ほどの１０１１号室に移動した。・・・正太郎は理子が『武偵殺し』であることを知らない。・・・可能な限り武偵高の生徒にそのことを知ってほしくはないしな。

「・・・アリア・・・一応言っておくが理子と戦っては駄目だ」

「何でよっ!?」

銃を握っていたアリアに俺はそう告げる。

「おそらく理子は司法取引をしている。武偵高に戻って来られたのもそれでだろ」

「あったり～！さっすがき～くん！理子のこと分かってる～～！」

「嘘よ！そんな手にあたしが引っ掛かるわけ・・・」

「だが事実なら・・・正当な理由なく理子に危害を加えることはただの犯罪だ」

ん？・・・よく考えてみれば俺って・・・正当な理由なくアリアから危害を受けてないか？・・・まあ、今はそんなことは気にしないでおこう。

「もし俺達が逮捕されればかなえさんを助けることができなくなるぞ」

「う、ううう。で、でも、ママに濡れ衣を着せたのは別件よ！最高裁で証言しなさい！」

「いいよ～」

「いやってんなら力づくでも・・・・え？」

理子の意外な言葉にアリアは固まった。

「証言してあげる」

「ほ、ほんと！！」

アリアは笑顔で理子に詰め寄った。

「アリアもお母様が大好きなんだね。理子もお母様が大好きだから

分かるよ・・・ごめんねアリア・・・う・・・うう」

「ちょ!?泣かないでよもう!!」

泣き始めた理子にアリアはどうすればいいのか分からなそうな表情をする。だがその一瞬、理子がにやけたことに気づいた俺は演技だと確信した。

「しかもアリア達に負けたからってブラドに理子の大切な物まで奪われて・・・」

矢車ほどではないが俺も人の心の闇があるかないかが何となく分かる。この悔しそうな表情・・・おそらくそれは本当のことだろうな。

「ブラドってまさか『無限罪のブラド』のこと!?」

「そうだよ。だから理子はブラドから宝物を取り返したいの。・・・だから理子を助けて!」

「助けてって言ったって・・・いったい何をすればいいんだ?」

正直ブラドというのもどんな奴なのかも分からないが・・・見捨てることはできそうにないな。

「きーくん、アリア。理子と一緒に泥棒やろうよ!」

ベランダに向かいそう言ってから振り返った理子は・・・まるでいつものおバカモードの理子だった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「で、あんたはやるの？泥棒の手伝い」

「まあな・・・少し気がかりなこともあるしな」

俺とアリアは部屋に帰ると一応アンクにもそのことを話した。アンクは「お前がやるって言うなら手を貸してやる」と言ってくれた。・・・あいつは無駄にアンロックスキルが高いからきっと役に立つだろうな。

「気がかりなこと？」

「お前には関係ないだろ・・・」

できれば兄さんのことは・・・アリアには言いたくない。

「・・・まぁいいわ。あたしもやってあげる。・・・あたしのドレイを好き勝手使われるのも嫌だしね」

「助かる。・・・にしても・・・」

俺はベランダのほうを見るとアンクは深刻な表情で夜の外を見ていた。

「いったいどうしたんだアンク？カードゲームをやってたときとは

感じが違うぞ？」

「あ、ああ。・・・・何か嫌な感じがするんだよ。・・・８００年前にも経験した黒い化け物の力をな・・・」

「・・・・なんだそれ？」

「・・・もしアイツがこの時代にもいるっていうなら・・・最低でもガメルのコンボは手に入れておきたいな」

この時の俺には・・・‘黒い化け物’の意味は全く分からなかった。・・・まさかあんな化け物と戦わないといけなくなるとは思っていなかったもんな。

Wの風／無限罪（後書き）

今回も伏線を残しました。ちなみに白雪編のメインライダーはオーズを除くとタイガでしたが、理子編はWがメインです。

ビギンズナイト（前書き）

今回は仮面ライダーの方の物語を進める都合上やらなくてはならないと思った過去編です。ですから今回はまったくアリア本編のストーリーは進みません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

「で？・・・あの変身・・・Wはいったい何なんだ？」

理子が帰って翌日の午後、俺とアリアは正太郎と陽から話を聞くためクスクシエに来ていた。ちなみにアンクは今日は学校をサボっている。・・・何でも「あの力の出所を探ってくる」とか言ってライドベンダーでどこかに行っちまった。

「・・・まぁ、俺と陽が変身すんのは分かってるだろ？」

「ああ、昨日の戦いを見ていて気づいた」

俺は正太郎の言葉に頷くと、アリアは陽のほうを向いた。

「えっ？そうなのライト？」

「気づかなかったのアリア？」

俺もアリアなら気づいていたと思っていたんだが・・・てか、アリアと陽って面識あるのかよ。・・・ちゃっかりあだ名で呼んでるし・・・。

「仮面ライダーW・・・ミュージアムの開発したガイアドライバーG・・・通称ロストドライバーの後継機にあたるガイアドライバー2G・・・ダブルドライバーを使い‘僕達’が変身した仮面戦士だよ」

「俺がベルトをつけると特殊なプログラムで陽の腰にも同じベルト

が出現するんだ。そんで陽がそれにメモリをセットすると陽の意識がメモリと共に転送されてきて・・・2人で1人の仮面戦士・・・仮面ライダーWに変身するってわけだ」

「いったいどうしてそんなシステムを持ってるの？・・・そもそもなんで二人で変身する必要性があるのよ？」

アリアは席を立ち上がりながら正太郎達を問い詰める。

・・・そういえばアリアはあの事件のことを知らないんだったな・・・正太郎と陽の出会いと相棒になるきっかけの連続爆破事件『爆弾蜘蛛事件（スパイダー・ボマー）』のことを・・・

・・・

モニー』が大切なんだぞ。2人ともチームの士気を下げるんじゃない」

その日はまだやさぐれていない矢車と俺、そして正太郎の3人で猫探しをしていた。

「で？・・・矢車、今回の猫の名前は何だったっけ？」

「『ミック』・・・ミュージアムの社長さんの家の飼い猫らしい。品種はブリティシュショートヘア・・・と聞かされている」

「・・・仕方ねぇな。こんな依頼とっとと終わらせたいし・・・こうなったら俺のとっておきだ」

ポキ　ポキ

「にゃ～ご！」

正太郎は骨を鳴らしながら近くの広場の中心に立つと怪しげな踊りを始めた。

「・・・お前・・・ふざけているのか？」

「ま、待て矢車！！たぶんあいつなりに真面目に・・・」

矢車は正太郎に殴りかかろうとするのを俺は抑える。

「あれの何処が真面目に探していると言えるんだ！！」

「にゃ～ご！」

「・・・・・・・」

み、見えねぇ～～！！悪い正太郎！庇うことは無理そうだ。・・・そう思った時だった。

「にゃ～～」

一匹の猫が正太郎に近づいてきた。しかも俺たちが依頼で探していたはずの猫・・・『ミック』が・・・

「どうだ～～！俺の猫ダンスは！！」

「し、信じられん！まさかあんな行動で・・・」

「すっげえ無駄なスキルだな・・・そんなことより・・・依頼人に猫を届けに行こうぜ」

自慢してくる正太郎に驚く矢車の隣でツッコミを入れ、俺達は依頼人の家へと向かった。

「3人で押しかけるのも何だよな・・・正太郎。見つけたお前一人で行って来いよ！」

「それはいい。はやく行け明智。ミッションは素早く遂行するんだ」

「はい、はい。分かったって。行ってくればいいんだろ？」

ピンポ～ン！

門の前に立った正太郎はインターホンのスイッチを押す。

「どうも。東京武偵高の生徒ですが依頼された猫をお届けに上がりました」

「はい。今、出ます！」

ガチャッ！

玄関から出てきたのは黄緑のワンピースを着た少女だった。

それが正太郎と陽のファーストコンタクトだった。・・・そしてそれから1月が過ぎた頃だ。

「え～それじゃあ転校生を紹介しま～す！」

担任と副担任が橘先輩の訓練ミスで怪我をして入院したため第一食堂のオーナーでありながら通常授業の家庭科をたまに教える講師でもある‘‘津上昇一（つがみしょういち）さんが代わりに来てくれて転校生の紹介をし始めようとする。すると教室に入ってきたのは・・・中性的な顔立ちをした男子生徒だった。

「小林・・・明（あきら）・・・よろしく」

なんか大人しそうな奴が転校してきたな・・・。

「・・・なんだアイツ・・・どっかで見たような・・・」

この時の正太郎でも・・・明が陽であることには気づいていなかった。そして昼休み。

「なぁ、一緒に学食にいこうぜ！」

「え？・・・ぼ、僕も？」

どこか近寄り難い雰囲気を放つ明を正太郎は学食に誘っていた。

「行くんならクスクシエにいこうぜ」

「なんだキンジ！また財布がピンチなのか？」

「うるせぇ。同情すんなら金をくれよ！」

俺は冗談交じりに正太郎にそう告げると・・・・

「・・・はい」

ドサッ

「はっ？」

明はバックから１００万はある札束を取り出し俺に渡してきた。

「「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」」」」

俺や正太郎を含む、丁度この教室にいた生徒は全員その行動に驚いた。・・・当たり前だ。普通こんな簡単に１００万って渡してくるか？

「い、いやいや明！冗談！冗談だからな！」

「そうなんだ・・・じゃあ僕が奢るよ・・・行こう」

明はスタスタとこの教室から一番近いＡＧＩＴΩに向かう。いか

ん、なんかこのままだと高い物を奢ってくれそうだが気まずいぞ。

「・・・あの声・・・小林・・・あの大金・・・・もしかして!?」

「しょ、正太郎・・・」

正太郎はいつの間にかコーヒー飴を舐めてヒステリアモードになっていた。どうやら何か分かったようだな。

「明の正体が分かった!急いで明を引き止めてクスクシエに移動しよう!」

「は?正体?どういうことだ?」

「いいから行くぞ!」

俺と正太郎は急いで明を引き止めて気軽に話しやすい雰囲気のクスクシエに向かった。

「・・・単刀直入に言うが・・・明・・・お前は女だろ・・」

「えっ?」

俺は正太郎の言葉に驚いてしまった。

「しかもただの女子じゃない。ミュージアムの社長さんの娘さんだろ」

「・・・・どうして分かったんだい?」

明は反論もせずに正太郎に真相を聞いてきた。

「まずはさっきの大金だ。・・・あんな大金を簡単に渡す時点でどっかの社長の子供ってことは分かった。そして小林っていう苗字でミュージアムの社長の子まで分かった」

「・・・しかしそれでは僕が女と分かるものはないよ?まさかカンってやつかな?」

「いや、俺とお前はあったことがあるだろ・・・『ミック』の飼い主さん」

ああ、そうゆうことか。正太郎は自称ハードボイルドだが、はたから見れば女子の前でいい格好をしようとしてる半熟の‘ハーフボイルドだ。だから一月前の猫探しで出会った娘さんを覚えていたってことだな。

「・・・まさかあの時ひさびさに女の子の格好をしていたのが仇になるとわね・・・」

「一つ聞かせてくれ。・・・なんで男装なんてしてるんだ?」

「・・・僕があの『小林芳雄』の孫娘だからさ」

は?どうゆうことだ?

「『小林芳雄』って・・・確か・・・」

「ああ、俺の曾じいちゃん・明智小五郎の助手で『小林少年』って呼ばれていた人のことだ。けど・・・どうしてそれが関係してくるんだ?」

「祖父と母以外は僕が男じゃなかったから僕を一族の落ちこぼれ扱いをした。だから僕は『三代目小林少年』になるために男装をして育ってきたんだ・・・そして今日・・・武偵高に入学したと思ったら・・・こんなに早く正体がばれちゃうなんてね」

・・・たしかにそれは悪いことをしたような気がするな。・・・でも・・・そんな生き方は虚しいだろ。・・・そう思っていると正太郎は口を開いた。

「お前はお前だろ・・・周りに決められた生き方じゃなく自分らしく生きてみろよ」

「っ！！・・・そんな言葉・・・おじいちゃんとお母さん以外に言われたのは初めてだよ・・・」

明は正太郎の言葉に感動したらしく涙を流していた。

「・・・僕の本当の名前は小林陽・・・よければ覚えておいて」

俺と正太郎はその言葉にゆっくりと頷いた。それが俺達が‘小林陽’に本当の意味で出会った瞬間だった。

しかしこの1週間後・・・正太郎が探偵科から仮面戦士になることとなったとある事件が起きた。

ビギンズナイト（後書き）

次回で過去編を終わらせようと思います。・・・過去編でキンジと正太郎と矢車がおバカトリオのような関係にしてしまったのは・・・なんとなくです。

パートナー（前書き）

暑さにやられて倒れてしまい更新が遅れてしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

パートナー

「聞いたか遠山？・・・どうやら最近謎の爆破事件が多発しているらしい」

「ん？・・・何だそれ？・・・詳しく聞かせてくれ矢車」

明・・・陽の正体が判明してから1週間後・・・俺達はあいつの秘密を誰にもバラさずにいつも通り過ごしていた日のことだった。

「建設物、人間問わずいきなり爆発してしまう事件だ。・・・それも不思議なことにその現場からは火薬のような物は発見されていない」

火薬のようなものがないだと？・・・ってことは可能性としてはドーパントが色濃いな。

「もしかしたらドーパントの可能性が高いんじゃないのか？」

「ああ、その可能性が高い。だから念のために明智も誘って仮面戦士科の俺と強襲科の遠山、そして探偵科の明智の3人で周辺の探索に向かおうと思う」

「分かった。正太郎を呼んでくるからクスクシエで待っていてくれ」

「了解した。・・・一応事件の資料を幾らか持っていこう」

俺は正太郎を探しに探偵科の学科棟へと向かった。

「明智？・・・あれ？今日は来ていないな？」

「そうか・・・悪いな！」

学科棟には正太郎はいなかった。・・・しかも誰も今日は正太郎を見ていないらしい。依頼を受けてもいないらしいし・・・いったいどこにいったんだ？

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ここが・・・おばあちゃんのお墓なんだ」

「・・・そうか。・・・でも何で俺も連れてきたんだ？」

俺が正太郎を探している頃、正太郎と陽は学園島から少し離れた墓場にいた。

「僕を僕らしくとおじいちゃんとお母さん以外に始めて言ってくれた人なんだ。物心つく前に死んだおばあちゃんも同じことを言っていたらしいし・・・連れてきて当然だよ」

「そ、そうか！」

正太郎は少し照れくさそうにしながら後ろを向いた。

「あ！そういえば・・・最近謎の連続爆破事件が起こってるらしい

から注意しとかないとな」

「たしかに原因不明の爆破事件の情報が何件も確認されているね・・・あの事件はもしかしてドーパントかもしれないね」

「ドーパントか・・・そういえばドーパントはここ数年に出現し始めたガイアメモリってものを使って人間が変わる怪人だろ?どうしていきなり出現したんだろうな?」

正太郎は軽いノリで陽に話題を振ったつもりだったが・・・陽は深刻な顔をした。

「出回っているガイアメモリっていうのはね・・・僕のお母さんの会社で製作されていたライダーシステムのデータが何者かに盗まれてしまいより凶暴にされて出回ってしまっている物なんだ・・・」

「えっ?」

陽の言葉に正太郎は固まってしまった。

「だから・・・ドーパントは責任を持って僕が片付けないといけないんだ」

「はは、残念だったな!それをやる前にお前たちは死ぬぞ!!」

「っ!?あぶねえぇぇぇ!」

ドォォォォン!

正太郎は地面を動く蜘蛛のような何かに気づくと陽を抱えて瞬時にその場を離れて、正太郎達が先ほどまで立っていたはずの場所は

いきなり爆発で吹き飛んだ。爆煙が晴れてくると2人の十数メートル先には蜘蛛の怪人がいた。

「・・・ほう、まさか俺様のメモリの能力の蜘蛛爆弾に気づくとは・・・ただの人間ではないな。貴様は何者だ?」

「明智正太郎・・・武偵高の生徒だよ・・・ん?」

「お墓が・・・おばあちゃんの・・・お墓が」

正太郎は先ほどの爆発でお墓がめちゃくちゃになり取り乱している陽に気づいた。

「はっはっ!たかが死人の埋まる場所なんてどうなってもいいだろう!」

「許さないっ!」

『ＪＯＫＥＲ』

陽は腰にＬ字型のベルトをつけると一本の黒いメモリを起動する。

「ガイアメモリ!?・・・いったいなんで陽が持ってんだ?」

「僕のお母さんの会社はガイアメモリを使ったライダーシステムを作っているんだ。僕は念のため護身用にこれを持たされてるんだ・・・変身!」

『ＪＯＫ・・・ＥＲ』

バンッ!

「うわっ!?」

ベルトにメモリをセットし、変身しようとした陽だったが・・・
なにやら変身しそうになった瞬間にメモリがベルトから吹き飛んだ。
「やっぱり僕じゃこのメモリの相性は良くないか・・・」
「どうゆうことだ?」
陽は吹き飛んだメモリを急いで回収した。
「ガイアメモリは相性がいい人に使われようとする意思みたいなのがあるんだ・・・僕では駄目だったようだ」
「だったら俺に変身させてくれよ。もしかしたら俺なら・・・」
「駄目だ!ドーパントは僕が倒さないと・・・」
「・・・話し合いは終わったか?」
「ちくしょうっ!!陽!!」
2人の足元にゆっくりと近づいてきた正太郎は陽の右手を握り急いでその場を離れた。
「はっはっ!!蜘蛛の糸に絡まった者が逃げ切れると思うなよ」
2人は近くの廃工場の中に逃げ込んだ。
「僕が・・・僕がお母さんのためにもドーパントは倒さないと・・・」

「・・・一人で抱え込む必要はないだろ・・・もしお前が最悪な道を辿るんだとしても・・・俺がついて行ってやるから」

正太郎は再び変身をしてみようとしてる陽の手を抑えた。

「・・・無理だよ・・・どうせ僕は落ちこぼれなんだ・・・誰も僕と一緒には・・・」

「んな訳あるかっ！俺は絶対にお前を見捨てない！お前のためなら俺は悪魔と契約したっていい！」

後先考えず今を守ろうとする。・・・それが俺の知っている正太郎だ。

「・・・そうか。・・・なら・・・悪魔と相乗りしてくれるかい・・・正太郎？」

「ああ、やってやる。たとえどんなピンチでも・・・いつでも俺は切り札を掴み取ってやる！」

『ＪＯＫＥＲ』

その瞬間陽の手に握られているガイアメモリの音が響きながら紫色に輝いた。

「・・・どうやら切り札は・・・いつでも俺の手に来るらしいぜ」

ガリっ

正太郎は陽の手からベルトとメモリを受け取ると・・・ベルトを腰につけメモリをセットするとコーヒー飴を口に入れて噛み砕いた。

「変身！」
『ＪＯＫＥＲ』

正太郎はこの瞬間から・・・仮面戦士になった。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ハハハ！これならどうだ！」
ドオォォォォン！！

「ったく目撃証言があったから急いで来てみれば・・・なんつう野郎だよ・・・」

俺と矢車は携帯を持っていなかった正太郎を探すのを諦め町を探索していると蜘蛛の怪人が暴れているとの証言があったので駆けつけたんだが・・・変な蜘蛛を爆発させるなんて面倒なことをしてくれるな。

「遠山！俺がライダーキックを決める。援護してくれ！」

「了解っ！」
バン！バン！

俺は拳銃でスパイダードーパントの注意を引き付ける。その間に矢車の変身するキックホッパーはジャンプをしてキックの体勢を取

っていた。

「ライダァァァキィィク！」

「喰らってたまるか！！」

ドォォォォン！

「ぐわッ！？」

スパイダードーパントはライダーキックがあたる寸前にキックホッパーに蜘蛛爆弾を投げつけて妨害した。

「大丈夫か矢車？」

「ああ、大丈夫だ・・・もう一度隙を作ってくれ・・・そしたらクロックアップからのライダーキックを決める」

キックホッパーはさっきの爆発で予想以上にダメージを受けながらもふらふらしながら立ち上がる。

「・・・いけるのか？」

「ミッションはしっかりこなす・・・それがパーフェクトハーモニーだ」

「そんなふらふらじゃあ必殺技は無理だろ。俺が・・・いや、俺たちが決める」

俺たちの前には陽・・・いや、矢車もいるし明と呼んでおこう。・・・明をお姫様抱っこで運んできた黒い仮面戦士がいた。

「その声・・・正太郎か？」

「ああ、でも今の俺は・・・仮面ライダージョーカーだ」

この時初めて俺は正太郎の変身する・・・仮面ライダージョーカーの姿をみた。

「正太郎・・・相手はおそらく君が近づいた瞬間に先ほどのキックホッパーのように爆弾を投げつけてくるだろう。キックホッパー・・・その攻撃を蹴り返せるかい？」

「当然だ・・・俺を誰の弟子だと思っている。伝説の仮面ライダー1号・・・本郷さんの弟子だぞ」

・・・さすが明と言ったところか、的確な指示だ。

「ならいくぜ？・・・ライダーキックだ！」

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

ジョーカーは腰のスロットにベルトから外したメモリをセットして右脚に力を溜めて跳び上がる。

「いい加減に死ねぇぇぇぇ！！」

ブンッ！

「フンッ！」

キックホッパーは蜘蛛爆弾を蹴って空に上げると数十メートル空でそれは爆発した。

「な、なんだと～～！！」

「おぉぉらぁぁ！！」

「う、うわぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォォン！

防ぐ手段のなくなったスパイダードーパントにジョーカーのライダーキックが決まり、こうして連続爆破事件が解決した。明の家族の墓も修理されることが決まり、すべて解決したと思っていた。・・・しかし３０人も爆死させた男は警察に引き渡す前に謎の言葉を残した。

「ふん、俺様を倒してしまったことを後悔するんだな。・・・いよいよ動くぞ・・・イ・ウーが！！」

その時は大して気にしていなかったけど・・・その一月後・・・俺たちの運命を変えることになったシージャック事件が起こってしまった。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「ジョーカーに変身しているロストドライバーは試作品なんだ。それに本来、ジョーカーのメモリは二人で一人の仮面戦士のために設計されたメモリなんだよアリア」

「俺と陽が二人で一人なのは・・・あの時からずっとなんだからな」

「・・・・・・」

正太郎はシージャック事件で姉さんを失った。・・・それでも正太郎は誰もいなかった俺や矢車と違って陽がいたから武偵であり続けようと決めたらしい。陽も自分の覚悟を正太郎に見せるために女であることをみんなにばらしたおかげだ。

・・・矢車は弟が死んでない可能性を信じていて助けるまでは絶対に武偵をやめないことを誓った。

だけど俺は・・・兄さんの死亡が確実だった上にマスコミにシージャック事件を防げなかったのは兄さんのせいだと散々言われ「武偵は報われない」と言うことを悟って目標を完全に失った。・・・そんな俺に目的を与えたのが・・・

「何ボーっとしてるのよキンジ？」

・・・何だかんだでアリアなんだよな。・・・たしかに俺は武偵を辞めるつもりだ。この意思は変わらない。・・・でも・・・転校予定の四月までは・・・

「パートナーとしてお前と相乗りしてやるよ」

「な、何よいきなり!?変なものでも食べたの？」

「いや、別に・・・」

パートナーとしてコイツを絶対に守っていこうと思う。

・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

「まったく・・・あの化け物の気配を辿っていたら・・・まさかヤミーを発見しちまうとはな」

「「「「ギィィィィ！！」」」」

俺が正太郎達の関係を思い出して再度決意を固めている頃アンクは大量のカニヤミーが学園島に迫ってきてるのを発見していた。

パートナー（後書き）

一応は今回で大まかな過去編は終了です。次回はそろそろカニが動きます。

実験（前書き）

今回はようやくあれが登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

「・・・正太郎・・・言わなくちゃいけないことがある」

「ん？なんだよ？」

Wの説明も聞き終わり寮に帰ろうとしている正太郎を俺は呼び止めた。・・・正太郎と矢車には・・・あのこと話したほうがいいと思ったからだ。

「シージャック事件の・・・犯人だ」

「っ！？　何か分かったのか？」

「まあ、この前のハイジャック事件の時に1度取り逃がしたがな・・・」

「いったい誰なんだ！教えてくれ！」

正太郎もやはり未だに気にしているらしく先ほどのやや軽いノリとは打って変わって強く問い詰めてきた。

・・・あの時のシージャック事件は俺の兄さんと正太郎の姉さんが仕事のための移動中、矢車の弟が武偵高の見学を終えて帰るために乗った船だった。・・・兄さんと正太郎の姉さんは私物の残骸が発見されたから死亡の可能性が高いが矢車の弟の私物は一切なく何者かに拉致されたと目撃証言もあった。・・・だから矢車は希望を捨ててないんだ。俺ら三人の中ではまだ生きている可能性が高いからな。

・・・もしあいつも諦めていたら・・・・たぶん陽に支えられた正太郎ですら立ち直らなかっただろうな。

「・・・その犯人ってのが・・・」

俺は正太郎に『武偵殺し』の事件とその犯人である理子のことを話そうとしたそのときだった。

『ｐｐｐ』

「ん？」

足元に緑のバッタの機械がやってきた。・・・なんだこれ？

「それはバッタカンドロイドだな。通信機の機能が搭載されているカンドロイドだが・・・携帯を持っていない誰かからのお前への通信じゃないか？」

「通信機・・・か」

携帯を持っていなさそうな知り合いと考えると・・・アンクだろうな。

『おいキンジ！ヤミーだ！場所は学園島周辺の海岸、数は５０体はいる！』

やっぱりアンクだったか。しかしまたそんな数のヤミーがここを狙ってくるなんて・・・本当にここって嫌われてるな。

「キンジ、そのヤミーは俺達に任せてお前達はヤミーの『親』を捜してくれ。そうしないとヤミーが増え続ける」

『そうだな。キンジ！俺達はヤミーの発生している巣と『親』を捜すぞ！とりあえずそれらしい気配がする武偵病院で合流だ』

「分かった。すぐ向かう」

この辺にライドベンダーはなかったので俺はここから近いオーラインクロスを置いている駐車場へと急ごうとした。

「待ちなさいキンジ！あたしも行くわ」

「・・・相手は怪人だ。危険なことはすんなよ！」

ついて来るなとも言おうと思ったが・・・アリアは絶対についてくるような眼をしていたので俺はアリアと駐車場へと走った。それを確認した正太郎はゆっくりとＷドライバーを腰につける。

「・・・さて・・・話は聞いていたよな陽？」

「もちろんだよ正太郎」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

正太郎の後ろの物陰からゆっくりと出てきた陽はサイクロンメモリを起動した。

「それじゃ・・・いくぜ？」

ガリっ

『ＪＯＫＥＲ』

コーヒー飴を噛み砕いた正太郎は自分のメモリを起動すると・・・

「「変身！」」
『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

正太郎と陽は腕でＷの文字を描くかのようなポーズを取ってベルトにメモリを差し込んで、陽がその場に倒れると正太郎がベルトを開きＷに変身した。

「正太郎、できればちゃんと僕の身体を受け止めてほしかったんだけど・・・」

「あ、悪い！まだいまいち慣れてなくて・・・」

「まあいい。とりあえず急ごう！」

Ｗはハードボイルダーに乗ってカニヤミーの大群がいる場所へと向かった。

「えっ？ライトちゃんが倒れてる！？私、聞いてない！？」

Ｗがカニヤミーのところに向かってからたまたま通りかかった亜希子は陽がクスクシエの前で倒れていることに驚いていた。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「ここからそれらしい気配がする」

「・・・それじゃあ突入するわよキンジ。いつでも変身できるようにしておいてね」
チャキ
「・・・まさかあの須藤がヤミーの『親』だとはな」
俺とアリアは武偵病院でアンクと合流するとヤミーの『親』の気配がするらしい‘須藤’と表札のある病室の前でアンクは右腕だけを怪人にして、アリアは二丁拳銃を、そして俺はベルトをつけた状態で構えていた。
・・・はっきり言って須藤にはあまり良い噂はない。自分の単位のためなら平気で人を騙してしまうような奴だ。・・・俺も1年の時に騙されて俺の解決した依頼の単位の半分以上はあいつの物にされた。
「・・・・行くわよ」
ガラッ!
「ん?・・・誰もいない・・・」
病室に入ったがヤミーはおろか須藤さえもいなかった。
「ちっ!・・・どうやらここがヤミーの巣だったらしいが全部のヤミーが孵化しちまったらしいな」
「それでいないってことはヤミーと一緒に何処かに行った可能性があるわね・・・いそぎましょう!」
アリアがそう言って急いで外に出ようとしたその時だった。

『ビィィィィィィ！』
ガシャン、ガシャン！
「「「っ！？」」」
警報の音が鳴り響くとともに病院のシャッターがいきなり閉まり始めた。
『現在、地下フロア1階に正体不明の怪人が数体出現したのが確認しました。患者の皆様は危ないのでその場から動かないでください』
「キンジ・・・このパターンって・・・」
「ああ、たぶん外に怪人を出さないようにするための上の命令だろうな」
ハイジャック事件のときのように被害を最小限に留めるつもりだろうな。ったく、面倒なことをしてくれるぜ。
「いえ、違いますよ。・・・これは実験です」
「「「っ？」」」
俺達は廊下の方から聞こえてきた男の声に反応してすぐさま廊下に出ると・・・そこには左腕に不気味な人形を乗せた怪しげな男が立っていた。
「てめぇ・・・何もんだ？」

「私の名前は真木喜代斗（まききよと）・・・鴻上研究所の研究員です」

「・・・その実験ってのはどうゆうことよ？」

「言葉通りの意味ですよ。ヤミーの成長の観察、及びその欲望の促進について実験していたのです。・・・その中で命を落とすものも入れば・・・それもまたその人の終末。人はその瞬間完成したことになるのです」

「あんたねぇ！」

アリアもその非情な言葉に怒りを感じていたらしく殴り掛かろうとしていたが・・・俺は止めた。

「キンジ！離しなさい！」

「アリア！今は抑えろ！！」

「・・・遠山君・・・これをお受け取りください」

真木博士は俺とアリアの口論を軽く流し・・・俺に不思議な形をした剣と黄色いカンを渡してきた。

「その剣はメダジャリバー・・・セルメダルを投入することによりその威力を上げる我々が開発した剣です。・・・そしてそちらのカンドロイドはトラカン。ベンダーに装着させることにより、その力を発揮します。・・・ぜひ使ってみてください・・・実験は終了したのでもうヤミーは倒しても構いません。」

「・・・ありがたく使わせてもらう・・・だがな・・・」

ドガッ！

俺はそれらをアンクに渡すと真木博士を掴み上げ顔面スレスレで壁を殴った。

「終わって完成するんじゃない。・・・人は完成することがないから何かを完成させようとするんだ！！・・・だから簡単に終わっていい命なんてないんだよ！！」

ぼと！

「わぁぁぁあぁぁぁ！？」

真木博士は人形を落としてしまい取り乱すと、その人形を慌てて回収しその場を立ち去った。

「・・・キンジ・・・」

「・・・・・・ハッ！」

後ろを振り返るとアリアは俺を以外そうな眼で見ていた。アンクは・・・どうやら俺なら言ってくれると思っていたと言いたげに少し笑っていた。

「まずはとっとと地下の怪人を片付ける・・・」

「でも、ここの壁や、ガラス・・・シャッターは防弾性でかなりの強度よ。どうするの？」

「今回は緊急事態だから仕方ないってことで・・・許してもらえるだろ？」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

「セヤッ！」

ドガンッ！

俺はオーズの‘タカゴリバ’に変身すると病室のシャッターで閉じられた窓を殴って破壊した。ここは４階で下手に足元や壁とかの建物の中を壊すと危ないしな。

「これ以上誰かが傷つくのは見たくない。・・・俺はこの手が届く限り・・・絶対にこの手で守ってやる！アンク！！」

「・・・ハッ！・・・だいぶリクに似てきたな。もしかしたらお前なら・・・・・・・かもな」

「なんか言ったかアンク？」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺は丁度タトバの音声とアンクの声が重なって何を言っているのか聞き取れなかった。

「なんでもねぇよ。・・・さぁ、その覚悟・・・見せてみろよ！」

俺はアンクからジャリバーを受け取ると壊した場所から飛び降りて地下フロアへと急いだ。

実験（後書き）

次回は再びそれぞれのライダーバトル展開にしたいと思います。

トライ・トライド（前書き）

明後日からは夏休みなんですが就職予定の職場見学などもあるので毎日更新は難しくなるかもしれません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

トライ・トライド

「セヤッァァァ！」
ザッシュ！

「「「ギィィィィ！？」」」

俺は地下フロアで数体のカニヤミーと戦っていた。・・・この剣思ったより使いやすいな。でもそれほど強そうな感じはしない。・・・そういえばさっきメダルを入れれば良いとかって言ってたな。・・・それじゃ試しに一枚入れてみるか・・・。

チャリン！

「セイヤッ！」
ザッシュ！

入れたはいいが・・・どうすればいいんだ？あんま切れ味が変わったように感じないんだが・・・。とりあえずスキャンしてみるか。

「ギィィィィ！」

「これで！」
『シングル　スキャニングチャージ！』

「セイヤッァァァァ！！」

俺はセルメダル1枚を投入しスキャンしたジャリバーでカニヤミー

を一気に斬った。

「「「ギィィ！？」」」

ドドォォォォン！

その威力は俺の思っていた以上に高く、一撃で数体のカニヤミーを倒し、セルメダルへと変えた。

「たぶんトラ爪よりも使いやすいな」

たしかにトラクローは奇襲攻撃には便利だがゴリラほどの破壊力もないし、カマキリほど攻撃範囲も広くない。この剣はセルメダルのブンだけ切れ味が上がるらしいし・・・攻撃範囲も双剣のカマキリほどはないがリーチはある。

「「「ギィィィィィ！！」」」

病院のヤミーはさっき倒しただけじゃなかったらしくさらに十数体のカニヤミーが現れた。・・・正太郎達があっちで５０体も引き受けてくれているんだ。ここで足止めされているわけにはいかないな。

「退けぇぇぇ！カニどもぉぉ！！」

『ダブル　スキャニングチャージ！』

俺は今度はセルメダルを2枚投入し、再びスキャンをした。

「セイヤァァァァァァァ！！」

「「「ギィィィィィィ！？」」」

ドオォォォォ！

「・・・・これで・・・とりあえずもうここにはいなさそうだな」

周りを見る限りではあのカニのヤミーは見当たらない。・・・それじゃ正太郎達のところに移動するか・・・ここら辺にベンダーは・・・っと。

「キンジ！」

「・・・とりあえずヤミーの気配はないようだな」

「アリア・・・アンク・・・」

俺がライドベンダーに跨り正太郎達のところに向かおうと地下フロアから出ると、丁度シャッターが開いたらしく、外に出てきたアリアとアンクに出会った。

「キンジ！せっかくだからこのトラくんも使ってあげなさいよ！」

『ガォ！』

アリアの手のひらには背中・・・というよりも腰の辺りがやけに大きくなっているデザインのトラのカンドロイドがいた。・・・なんだろう・・・アリアがこれを手に乗せているとなんか絵になる。・・・つーかトラくんって・・・。

「でも・・・ベンダーに装着って・・・どうやって・・・」

『ガォ！』

「あっ！トラくん！？」

トラカンはアリアの手から飛び上がりライドベンダーの上に乗ると、カンの形態に変わり前輪の前に落ちた。するとベンダーの前輪は左右に展開し、後輪と一体化して三輪で後輪を構成すると、トラカンが巨大化してスペースの空いたフロント部に合体して前輪になった。

「トラくんが・・・おっきい虎になっちゃった」

アリアの言ってる通り、分割したフロントカウルの間に巨大化する前はトラの前足だった部分がはめ込まれて虎の顔を模したような形になった。

『ガァァァァオォッォォ！！』
ドカ！

トラカンの合体したライドベンダー・・・トライドベンダーはまるで暴れる猛獣のように壁を破壊して外へと出て行った。

「キンジ！ボサッとすんな！とっとと追え！」

「あ、ああ・・・」
『タカ！トラ！チーター！』

俺は逃げ出したトライドベンダーを追いかけ始めた。

「そういえばアンク。さっきキンジが誰かに似てきたって言ってたけど・・・リクって誰なの？」

「・・・８００年前の・・・仲間だ。・・・今のアイツみたいに誰

かを守ろうとして戦っていた奴だったな・・・」

「ふ～ん。あんたにもいい仲間ってのがいたのね」

「まあ・・・な」

アンクの言う‘リク’という人が・・・まさかあの人のことだなんてこの頃の俺は思っていなかった。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

「おらっぁ！！」

俺がトライドベンダーを必死になって追いかけている頃Ｗは熱と闘士の力を宿した赤と銀色の姿。仮面ライダーＷ　ヒートメタルに変身して棍棒型の武器‘メタルシャフト’を振るってカニヤミー達と戦っていた。・・・それにすでにヤミーに気づいているのはＷだけではないようでそれなりに仮面戦士が集まっていた。

『カイジョシマス』

「ハァァァァッ！」

ガガガガガガッ！

ケルベロスをカニヤミーに連射するＧ３－Ｘこと氷川もすでにいたり・・・。

「・・・俺はカニを斬る事においても頂点に立つ男だ」

ザッシュッ！

貴族らしいが基本はバカの神城剣（かみしろつるぎ）こと仮面ライダーサソード・ライダーフォームも剣を振るい・・・。

「俺はか～な～りっ強いっ！」

ドカッ

「ギィィ！？」

緑色の俺の知らない仮面戦士がカニヤミーにラリアットを決めたりしていた。

「君達・・・ジャマしないでくれませんか？・・・この奥には武偵殺しの犯人がいるので復讐しに行きたいんですが・・・変身！！」

カニヤミーの『親』の蟹戦士・・・須藤は不快な顔をしながら仮面ライダーシザースに変身するとゆっくりＷ達に近づいてきた。

「何言ってんだ須藤・・・武偵ってのは罪を憎んで人を憎まず・・・だぜ？・・・憎しみからは憎しみしか生まれないんだからここで止まれよ。・・・今ならまだ仮面戦士の力の剥奪だってないと思うぜ？」

「そうだよ須藤君。ここで止まるんだ」

Wの正太郎と陽はシザースを説得しようとするが・・・

「黙れ！貴様らに武偵としてのプライドをズタボロにされた私の気持ちなんぞ分かるまい！やれえぇぇぇぇ！！」

「「「ギィィィィ！！」」」

『ギィィィ！』

カニヤミー達とともにシザースの契約モンスターである黄色い蟹‘ボルキャンサー’が一斉に戦っている仮面戦士達のもとに攻め込んできた。

「陽！どうする？・・・あんな数が一斉に攻め込まれるとさすがにヒートメタルでもつらいぞ？」

「・・・大丈夫だよ正太郎・・・ほら！」

「・・・・・・邪魔だぞお前ら・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「「「「ギィィィィ！？」」」」

W達にせまって来た十数体のカニヤミーが宙を舞っていた。・・・その中心にはキックホッパーが下を向いてそう呟いていた。

「助かったぜ矢車！」

「・・・いいからとっととふざけた蟹の目を覚まさせろ・・・」

「ああ、分かったぜ！・・・いくぜ陽！」

Wはベルトから銀色のメモリを抜き取るとメタルシャフトにメモリを差し込んだ。

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「メタルブランティング！！」」

『ギィィィィ！？』

炎を灯したメタルシャフトでWはボルキャンサーを力いっぱい叩き、シザースの元へと打った。

「これは・・・ホームランだな」

「グハッ！？」

どさっ

Wに打たれて飛ばされてきたボルキャンサーが顔面から直撃したシザースは・・・丁度
頭がその口の中にスッポリとはまったまま気を失った。

「正太郎。最近ではあのような状態を‘マミった’というらしい」

「陽・・・何言ってんだ？」

「理子から教わったんだ。信憑性があると思わないかい？」

「・・・なんつうか・・・悪意を感じるぜ。・・・まぁとりあえず後はヤミーを退治するだけだな」

須藤もG３－Xが取り押さえ後は親が意識を失って取り乱している様子のカニヤミー達を倒すだけだとその場の仮面戦士達は思っていた。・・・しかし・・・

「「「「ギィィィィィィ！！」」」」

「「「っ！？」」」

カニヤミー達は一斉に集まると8メートルはあるタラバガニのようなヤミーになった。

「・・・おい！デカイ怪物に対抗できる仮面戦士・・・音撃戦士はいないか！！」

「正太郎・・・どうやらこの場に一人いる・・・しかし・・・」

「どうしたんだ陽！そいつは何処に・・・あっ」

W（正太郎）はW（陽）のサイドが指差してその仮面戦士に気づいた。

『ギィィィィィィ！！』

「・・・・・・・」

タラバガニヤミーの口には・・・頭から噛み付かれて動かない裁鬼がいた。

「サバキ先せぇぇぇぇぇい！？」

「・・・あれこそ本当に・・・、マミった、と言えないかい？」

「んなこと言ってる場合じゃねえよ！はやくサバキ先生を助けないと・・・」

『ギィィィィィィィ！！』

タラバガニヤミーは裁鬼を加えたままその図体からは想像できないほどの速さで武偵高へと向かっていった。

「やばい！はやく追いかけねぇと・・・」

Wがハードボイルダーに跨りタラバガニヤミーを追いかけようとすると・・・

『ガオォォォォォォォ！』

「待てよトラァァッァァァ！！」

トライドベンダーを追いかける俺とすれ違った。

トライ・トライド（後書き）

次回は蟹戦を決着させようと思います。・・・ところで質問ですが・・・これはぜひとも悪役で登場させてほしいというまだ登場していないライダーは何かいませんか？

獣の咆哮（前書き）

カニ編は今回で終わります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

獣の咆哮

「待てよトラァァッァァァァ！！」

「キンジ！？」

「正太郎！陽！・・・悪い！先行く！」

俺はWとすれ違ったが・・・今はあの暴れているトライドベンダーを追うことの方が重要だと考えてそのまま追い抜いていった。

「どうやらキンジ君はあの暴走するマシンを追いかけているようだね」

「しっかしなんだあのマシン・・・ライドベンダーに似てた感じがするな」

後ろからそんなことを言うWの会話が聞こえてきた。そりゃこれがベンダーだから当然だろうな。

「何だあれ？」

『ギィィィィィィィ！！』

トライドベンダーの走っている先には・・・おそらくはヤミーだと思うが、やたらデカイ蟹の怪物がいた。・・・もしかしてトラはあのヤミーに反応してここに来たのかもしれないが・・・いくらなんでもあのトラは暴れすぎだ。

「いい加減おとなしくしろっ！！」

俺はトライドベンダーに跳び乗っておとなしくさせようとするが・・・。

『ガオォォォォォォ！！』

「うわぁぁぁぁぁ！？」

すぐにトライドベンダーの馬力に耐えられずに振り下ろされてしまった。

「なんつうパワーだよ・・・あんなのどうやって使えっていうんだよ・・・」

ホントあのトラどうすればいいんだ？落ち着く気配なんてないぞ？・・・そんなことを考えているといつの間にか後ろに立っていた真木博士が話しかけてきた。

「コンボを使ってみたらどうでしょう？」

「コンボはかなり俺の身体に響くんだよ・・・そう易々と使ってたまるか」

「それなら大丈夫です。トライドベンダーは余分なエネルギーを吸収してくれますから」

「・・・・・・」

かなり怪しいが・・・試してみるか・・・。

「セヤッ！」
『ライオン！トラ！チーター！ラッタッ！ラッタッ！ラトラ～タ～～！』

俺はトライドベンダーに再び跳び乗るとすぐさまラトラーターコンボに変身した。・・・たしかに真木博士の言うとおりコンボの時に感じる負担がこの前より少ない感じがする。それに先ほどまであんなに暴れていたトライドベンダーはラトラーターコンボになった瞬間だいぶ落ち着いた。

「さて・・・これであのタラバガニを倒せばいいってことだな・・・いくぞ、トラ！」

『ガオッ！』

トライドベンダーに乗った俺はタラバガニヤミーを追いかける。・・・見た目よりはすばしっこいカニだけど・・・トライドベンダーの方が速かったらしく追い越して向かい合う形になった。

『ギィィィィィィ！！』
ババババババ！

タラバガニヤミーは以前カニヤミーが放った泡爆弾のようなものを放ってきたため攻撃をかわすと・・・

ドオォォォォォン！

「おっと！？」

近くに停車されていた車に泡の一つが当たると・・・まるでダイナマイト十発分ほどの爆発を起こした。・・・なんつう威力だよ・・・。

「だけどお前ならあんなものなんとかできるよな？」

『ガァオォォォォ！』

ババババッ！

『ギィィィィィ！？』

トライドベンダーの前輪から放たれた円状のエネルギー弾はタラバガニヤミーの放った泡爆弾を物に触れる前に撃ち落とした。

「正太郎！僕達も援護するよ！」

「ああ、分かってるって！」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

幻想と銃撃手の記憶を宿した金色と青の姿のＷ・・・仮面ライダーＷ・ルナトリガーとなったＷはすぐさまメモリを青い銃，トリガーマグナム，にセットする。

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「サバキ先生は狙わないようにしろよ陽」

「当然だね・・・」

「「トリガーフルバースト！！」」

ダダダダダダダッ！

『ギィィィィィ！？』

Wは大量の金と青の不規則に動く光弾で泡を撃ち落すと、さらにサバキ先生が咬まれているタラバガニヤミーの口の周りを狙い撃ち、サバキ先生を救出した。・・・それにしてもサバキ先生って生身ではめちゃくちゃ強いのに変身すると運が悪くなるのか必ず負けてるよな。・・・まあ、どんなことがあっても死なないから‘鉄人’ってあだ名がついたんだけど・・・。

「ＧＸランチャー、発射！！」

「これでどうだっ！！」

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

ドォォォォン！

『ギィィィィ！？』

Ｇ３－Ｘは赤いロケット弾頭を、緑色の仮面戦士はボウガンのような武器からエメラルドに輝く弾丸を放ち、タラバカニヤミーの右側の脚のほとんどをセルメダルにして動きを制限した。

「ライダースラッシュ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＳＬＡＳＨ』

「ハァッ！」

サソードは紫色の毒々しい斬撃でさらに左側の数本の脚をセルメダルへと変えた。

「決めるぜトラ！！」

『ガアァァァオォォ！！』

トライドベンダーの咆哮はタラバガニヤミーをひっくり返す。・・・それじゃトドメはジャリバーのセルメダル三枚バージョンでいくか。

『トリプル・スキャニングチャージ！』

「ハァァァァ、セイヤァァァァァッ！！」

ザンッ！

『ギィィィィィィ！？』

セルメダルを三枚投入したメダジャリバーの威力は凄まじく、空間もろともタラバガニヤミーを一刀両断した。

『ぎ、ギイィィィィィィ！？』

ドオォォォォォォォン！！

タラバガニヤミーの爆発とともに時間が逆行するかのように空間が元に戻った。・・・何だよこの剣・・・凄すぎだろ。

『ガオォォォォォォ！！』

チャリン、チャリン

トライドベンダーは雨のように降り注ぐセルメダルに興奮するかのように吠えていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「正太郎、さっきは言えなかったが『武偵殺し』の正体は・・・理子なんだ」

戦闘も終わり正太郎と陽、そして矢車を俺の部屋に呼んだ俺は『武偵殺し』の引き起こした事件の真相を伝えた。・・・正太郎と陽は少し驚いたような反応を見せたが・・・矢車は表情を一切変えずに聞いていた。

「・・・正太郎・・・理子の行ったことを許してくれ・・・とは言わない。・・・でもせめて周りには言わないでおいてやってくれないか？」

「・・・どうするんだい正太郎？・・・僕は君の判断に合わせるよ」

「はぁ・・・俺の答えは決まってんだろ。・・・罪を憎んで人を憎まず・・・憎しみからは憎しみしか生まれないんだから俺はそんな悪循環を作ることはやんないぜ・・・今までどおりの接し方でいてやるよ」

よかった。正太郎は気にしないらしいな。・・・正太郎の隣に座っている陽も少し安心したような様子だな。

「・・・矢車は・・・」

「・・・元からシュンの事件はシージャックと関係ないから俺はそ

んなこと気にしていない。むしろ一番気にしてるのは相棒のほうなんじゃないか？」

「・・・何でだ？」

「理子のヤツを気にしている言動を話しているが・・・どこかそれは自分から理子を遠ざけるための口実にも聞こえる」

「・・・・・・」

やっぱこいつにはバレやすいか。・・・正直俺は理子の「兄さんは生きている」という発言が信じ切れていない。・・・またハイジャック事件のときのように俺とアリアに仕掛けてくるんじゃないかと警戒もしている。・・・はっきり言ってしまえばびびってるんだ。

「・・・やっぱ矢車は人の心を読み取るのがうまいよな」

「・・・俺らの仲だからな・・・」

・・・ったく。矢車には敵いそうにないな。・・・そして話題を変えてしばらく雑談をした後矢車達が帰っていくと今までキッチンでアイスを食べていたアンクは俺に話しかけてきた。

「そっちの話は終わったかキンジ？」

「あぁ、あいつらも帰った」

「そうか・・・この前言っていた・・・気配の正体が分かった」

少し重苦しい雰囲気で話しかけてきたアンクは。

「・・・８００年前・・・世界を支配しようとしたとある種族の封印された王の鎧が・・・何者かに盗まれたことが分かった」

「なによそれ？」

『ガォ！』

アリアは元のサイズに戻ったトラカンを撫でながら会話に参加してきた。・・・アリアやっぱりお前そのトラカン気に入っただろ？それにだいぶトラカンにも懐かれてるし・・・。

「レジェンドルガのキングの鎧・・・アークの鎧だ。もしあの力を悪用されれば・・・まずいことになるかもしれない」

「どんな風にまずいの？」

「さあな・・・俺にもどうなるか分からない」

俺はこの日・・・遠山家にも星伽家にも語られてなかった歴史の影にいた王の存在を始めて知った。

・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「こいつがお前の欲望から生まれたヤミーだ。せいぜい欲望を開放するんだな」

「・・・・・・」

「チ、血がホシイ！」

俺がアンクからレジェンドルガの鎧のことを聞かされている最中、とある屋敷でウヴァは謎の人物からヤミーを作っていた。

「血がほしい・・・珍しい欲望だな。せいぜい強いヤミーになることを期待しているぞ」

ここでもまた欲望は動き出していた。

獣の咆哮（後書き）

次回はようやくアリア本編のストーリーが進みます。

バカと最悪と既成事実（前書き）

今回はなんとなく初めてオーズのようなサブタイにしてみました。

カウンザメダル！現在、オーズが使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

バカと最悪と既成事実

「では・・・まもなく始めますよ」

「・・・・・・」

須藤のバカが騒ぎを起こした翌日、仮面戦士科といっても探偵科が名残り惜しくまだ在籍してしているためそちらの単位も取るために俺は自由参加の生物のテストを受けに来ていた。・・・テストはビデオを見ながらテストの問題を解くという形式であり、これに参加するだけで0，1単位も貰えるんだから出ないはずはない。

「キンジ、お前も生物の単位が足りてないから来たのかよ?仲間だな!」

「一緒にすんな。別に信司ほど俺はバカじゃねぇよ」

「うっわっ!その言い方は酷いだろ!国語はお前より上だぞ!」

「国語だけな・・・」

生物の授業の単位が足りてないという理由でここに来て俺の前の席に座っているのは城戸信司(きどしんじ)。良く言うならば熱血漢、悪く言えばただのバカな去年数回組んだことのある奴だ。俺の成績が中の中だとするとこいつの成績は下の下・・・以下だな。しかし国語・・・特に文章力だけは高く、この学校の新聞部だったりする。

「男子は俺とお前だけか?」

「いや、前の席のほうに明日夢がいるぞ」

まあ、明日夢は衛生科の生徒だしこのテストをただ受けに来ていても当たり前か。

「「「きゃ～～小夜鳴せんせ～い！！」」」

「・・・それでは始めますよ。みなさん席についてくださいね」

歩くモテ要素とも呼ばれる救護科の非常勤講師の小夜鳴は自分を取り囲む女子を席につかせていた。あの先生も大変だよな。

「えへへ、き～くん！」

「げっ！？理子！なんで！！」

俺はいつの間にかいた理子に驚かされた。・・・さすが怪盗の子孫。・・・気配を殺して人に近づくのは造作もないか。

「理子だって探偵科だよ～。テストくらい受けるよ～」

「じゃなくて、なんで俺の隣に・・・」

その瞬間、ビデオが始まるために辺りが暗くなった。・・・いかん、今はテストに集中しないとな。

『遺伝、親の特徴が子に伝えられる。～～～～～～こと』

「・・・さっぱりわかんねぇ・・・・」

映像が始まって数分・・・前の席の信司からそんな声が聞こえたのは・・・気のせいじゃないんだろうな。

「ねぇきーくん・・・さわって」

「何言ってんだ。テ、テスト中だぞ」

「そのスリルがいいんじゃない。言ったでしょ・・・理子は悪い子だって」

理子は俺の膝を枕にするように寝そべった。・・・マジでやばいぞ・・・こんなとこ誰かに見られたら間違いなく誤解を生む。

「きーくん。なでなでして～」

「するかバカっ！」

「ん？・・・バカ？」

信司！お前じゃねぇよ！バカって言葉に敏感に反応すんな！

「してくれないときーくんに変なことされたって悲鳴あげちゃうよ～」

「・・・くそっ・・・」

今は理子をはやく満足させておとなしくさせるしかないな。・・・俺は仕方なく理子の頭をなで始めた。

「もうちょっと優しく～ぅ」

俺はしぶしぶ理子の言うとおりにしながらもテストを書こうとした。・・・あれ？シャーペンがないな。

「くふふ、シャーペンは理子が預かっておりま～す」

「っ！？」

俺のシャーペンは・・・理子の胸の谷間に挟められていた。

「取りたければ取っていいけど・・・今、理子ノーブラなんだぁ」

「余計なこと言うな！・・・これか？」

俺は目を瞑り意識しないようにシャーペンを取ろうとする・・・

「あんっ・・・きーくんってば意外と大胆、理子びっくりしちゃった」

「・・・ちっ！・・・」

なんで俺はこんなことをしなければならないんだと思いながらももう一度シャーペンを取ろうとした途端・・・テスト時間が終わったらしく電気がついた。

「・・・・・・」

そして俺のすぐ横には小夜鳴が黙って立っていた。

「先生！私は全問解きました！」

バッ！

理子はいつの間に解いたのか分からない空欄なしのテスト用紙をすぐさま起き上がり小夜鳴に渡すと逃げ去っていった。

「・・・遠山君・・・ＴＰＯって知っていますか？」

・・・どうやら俺は追試、説教、残念な視線という最悪コンボを発動させられたようだ。このコンボもつらいな・・・心にダメージだぜ・・・・。

「やばい・・・一問もわかんねぇ・・・」

「・・・城戸君・・・君も一緒に追試ですね」

「えっ！？」

俺と信司は放課後に追試を受けることになった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「も～、そんなに怒らないでよき～く～ん」

「別に怒ってねぇよ」

放課後・・・追試と説教を終えた俺は帰ろうとすると雨が降って

いたのでバイクの置いてある駐車場まで憎き理子の傘に入れてもらっていた。

「明日は『大泥棒大作戦』の作戦会議なんだからプンプンしちゃやだぞ？」

「はぁ・・・会議ねぇ」

本当に兄さんは生きているのか？・・・生きてるんだったら何処にいるんだ？・・・そんな疑問をいますぐ理子に聞きたいが・・・理子は盗みが成功するまで言うつもりはないんだろうな。

「きーくんと相合い傘だ～あっめ雨っ、ふっれふれ！もっとふれ～～！」

今すぐに止んで頂きたい！・・・こんな状況をアリアなんかに見られたら・・・風穴攻撃が飛んで来るんだろうな。・・・・俺は忘れていた。この状況を一番見られてはいけない人物を・・・。

「くふ、きーくんってふだん女子から距離を置いているけど、二人きりになると優しく接してくれるんだよね～。・・・で、誰だお前？」

「っ！？」

突如男口調になった理子は傘を上に放り投げるといきなり俺を屈ませる。

ヒュゴッ！

頭の上を日本刀が通過した。・・・屈まなかったら俺の首が飛ん

でいたな。

「キンちゃん！離れて！」

セーラー服姿で緋色の傘・・・ああ、やっぱり白雪か。・・・いやな予感がするぜ。

「理子ときーくんの甘～い時間をジャマするなんてだあれ～？」

「私はっ！ＳＳＲの星伽白雪！神聖な学び舎で相合い傘なんて・・・なんてうらやま・・・ハレンチなっ！・・・キンちゃんが嫌がってるのが分からないんですか！」

「き、キンジ・・・助けてくれ・・・」

白雪の後ろでいつもよりボロボロになっていたアンクを発見した。・・・アンクもしかしてお前八つ当たりされたのか？

「なんでぇ～。きーくんと理子は彼氏彼女なんだよ。相合い傘くらいあったり前じゃ～ん」

「・・・彼氏彼女ぉ？あははは、この季節はホント変な子がわくねぇキンちゃん！」

ドカッ！

「うっ！？」

白雪はアンクに向かって刀の峰を思い切り振り下ろした。・・・今の音はすっげぇいたそうだ。

「・・・峰さん。取り消すなら今のうちだよ？」

「頼む・・・取り消してくれ・・・そうしないとマジで俺が・・・」

チャリン　チャリン

「アンク！しっかりしろ！」

やばい！とうとうアンクからセルメダルが漏れ始めた。お前人間態のときの防御力、マジ人間並みまで下がってんのかよ！？

「私とキンちゃんは・・・キッス！だってしたことあるんだからっ」

「へ～キス止まりぃ。理子はもうBまでいったよ」

「び、Bぃぃぃぃぃぃ！？」

ドカドカッ！

「グワァァァァァ！？」

白雪は驚きのあまりとうとう連続でアンクを叩き始めた。

「待て！早まるな白雪！それ以上はアンクが！？」

「この二匹目の泥棒猫！キンちゃんは渡さない！」

「来なよ。りっこりこにしてやんよ！」

白雪は傘を上に投げるとすぐさま理子へとかけた。

「くふ！」

バン！

「っ！？」

それを見た理子は傘を盾にするように白雪へと向けると先端の仕込み銃の部分から一発の弾丸を白雪の足元に放つと・・・

「えいっ！」

「きゃ、きゃぁぁぁぁぁぁぁ！？」

白雪のスカートを捲りやがった。

「あ～！雪ちゃん黒なんだ～。『白雪』なのに矛盾してるよ～」

ヒュウゥゥゥ・・・グサッ！

「ガハッ！？」

「アンクぅぅぅぅぅぅぅ」

白雪が思わず投げ飛ばしてしまった刀は・・・アンクの頭に刺さってしまった。

「じゃ～ねきーくん！明日のデートのことは後でメールするから～」

「おい、理子！？」

理子はスキップをしながら一人ですぐさま帰っていってしまった。

・・・逃げ足の速いやつめ。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ん？先生いないぞ？他をあたるか？」

俺はアンクを正太郎たちに任せると白雪を救護科棟の応急処置室に運んできた。・・・さっきのがショックだったのか腰を抜かしてしまったらしい。

「う、うん」

白雪は俺におんぶされたままドアノブを妙に強く握った。

「あれ。開かないよ。出られないね。困っちゃったね」

なんか棒読みっぽく言って白雪は俺の背中から降りた。・・・お前、立てんじゃん。

「仕方ない・・・装備科の誰かでも呼んで出してもらうか」

「ごめんなさい！」

バシっ！

俺は携帯を取り出した直後、白雪にそれを奪ってカーテンのしまったベッドに入っていった。

「おい白雪！携帯返せ！」

ガラッ

カーテンを開けると、ベッドの上で白雪は正座をしながら震えていた。

「おい、どうしたんだ?」

「しょうがなかったんだもん。だってキンちゃんさまが・・・またあんな愛人を・・・だから今だけでも監禁して・・・私だけのキンちゃんに・・・」

なんかぶつぶつ言っているがはっきり聞こえないな。・・・いや、聞きたくないな。

「そして星伽に帰るまえに既成事実を作っちゃうの。あの二人にも負けない凄いのを・・・。既成事実、既成事実、既成事実」

白雪・・・お前またヤミーに寄生されて欲望を解放してんのか?・・・そうなんだよな?そうと言ってくれ。そうじゃないと・・・本気でお前が怖い。

「それよりも白雪っ!」

「は、はい!」

「携帯返せ!」

白雪を揺さぶって正気に戻すと・・・とりあえず携帯を要求した。そうしないとここから出られないしな。

「それよりもキンちゃん！言わないといけないことが２つあるの！」

「・・・分かった。聞いてやるからその後携帯返せよ？」

「はいっ！一つは私、キンちゃんのことを調べ・・・占いました！」

調べることもしたんじゃないのか？

「キンちゃんは『狼と鬼と幽霊に出会う』って出たの！それも近いうちに・・・」

は？何だそれ？・・・狼？・・・もしかして狼の怪人になるタクミか？・・・だとしたらすでに出会ってるし・・・。鬼？・・・この仮面戦士の教師はほとんど鬼だぞ？・・・幽霊は・・・イマジンとかいう１年の教室をうろうろしてる怪人４体のことか？・・・だとしたらもう出会ってるぞ。

「そして二つ目は・・・私、今夜から１月ほど星伽に帰ることになります。『魔剣』絡みで禁を破ったし・・・向こうでもグリードのことでいろいろあったらしいから・・・」

「・・・そうか。ゆっくり里帰りしてこい」

俺は心の中でガッツポーズをした。

「私からのお話は以上です。そ、それにしても。今日は冷えるねぇ。キンちゃん。あ、ヒーターが壊れてる」

何で見ただけで壊れているのが分かるんだ。・・・そう思ってヒーターを見てみると・・・ヒーターには刀で斬られたような跡があ

った。

「助けがくるまで寒さで体力が奪われないようにしないといけませんね」

「だったらはやく携帯を・・・なっ！？」

白雪は毛布を頭から被ると次々と制服を毛布の中から排出していた。

「何脱いでんだ！」

すると白雪はいきなり俺の手を掴むと引っ張り始めた。この力・・・お前、星伽の術を使っているだろ！

「巫女でなくなる覚悟はできてます。星伽がなんだぁぁぁ！」

「お前がなんだぁぁぁぁ！！」

「キンちゃんさま！どうかお情けをください！既成事実、既成事実、既成事実ぅ！！」

くそっ！こうなったら・・・

「ライダーチョップ！」

「はうっ！？」

俺は白雪の首筋にチョップをして意識を刈り取ると携帯を回収して窓からワイヤーを使って出て行った。

「・・・はっ！！キンちゃん！この続きは私が星伽から帰ってきた時にね～～！」

・・・なんて速さで復活してんだあいつ？・・・やっぱりヤミーにまた寄生されてんのか？

ひとまず俺は白雪の魔の手から何とか逃れることができた。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「理子が指定してきた場所はここね？」
『ガゥ！』

「ああ、そのようだ」

翌日、肩にトラカンを乗せたアリアと俺は理子の指定してきた店の前に立っていた。・・・アンクは現在、白雪が1ヶ月帰ってこないといったら凄く喜んでいて俺の部屋で酒を大量に飲んでいるため連れてこれなかった。

「それじゃ・・・突入するわよ！」
『ガォ！』

「ああ！」

俺とアリアは店の中に入ると・・・

「「「おかえりなさいませご主人様、お嬢様！」」」

「「・・・・え？・・・・」」

『ガゥ？』

あまりの予想外の光景に絶句してしまった。

バカと最悪と既成事実（後書き）

アニメ版9話がようやく終了。・・・原作3巻の内容は1冊約20話だったんですがこれまで以上に長くなりそうです。

泥棒大作戦会議（前書き）

今回は久々にアンクが登場しない話になりました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

泥棒大作戦会議

「「「おかえりなさいませご主人様！お嬢様！」」」

「「・・・・・・」」

理子が作戦会議に誘った店はいわゆる・・・メイド喫茶って所だった。

「じ、実家と同じ挨拶だわ・・・まさか日本で聞くことになるなんて・・・・」

「・・・・・・」

正直犯罪組織のアジトよりも居づらいぞ。・・・うん、俺はがんばった。よくこの中に入ることができた。頑張ったんだから・・・もう帰ってもいいよな？

「ごっめ～ん2人とも～！ちょっと遅れちゃった～！」

俺が無言で店を出ようとすると・・・このタイミングで理子が入ってきた。

「理子さま～おかえりなさいませ～！」

「きゃ～ひさしぶり～！」

「理子さまのデザインしてくれたメイド服、お客さまにも大人気なんですよ～！」

残念ながら理子と合流してしまった俺とアリアは仕方なく案内された席に座った。・・・理子・・・お前ここのＶＩＰなんだな。

「それでは～泥棒大作戦会議を始めま～す！」

「いいのか？そんな大声で・・・」

「大丈夫だ。問題ない」

たぶん・・・あると思うぞ？・・・店の奥に武偵高の生徒らしい制服の奴らが見えるし・・・

「まったく。今日の仕事も疲れたよね五郎ちゃん」

「そうですね。しかしまた朝倉に逃げられてしまいましたね」

「まぁ、仕方ないって！次もがんばろう」

あれは・・・たしか隣のクラスのＳランク武偵の北岡修一（きたおかしゅういち）とその相棒の由羅五郎（ゆらごろう）だよな。あいつらがこんな所に来るなんて・・・少し意外だな。

「あ～、あの２人ねぇ～。あの２人は大丈夫だよ。理子と同じで常連だし・・・そんで～ダーゲットの場所だけどぉ、ここ！横浜郊外にある『紅鳴館』！」

理子は１枚の豪華な屋敷の写真を俺たちに見せてきた。

「これが無限罪のブラドの屋敷・・・」

「まぁ、別荘だけどね！ここの地下金庫に理子のお宝があるみたいなの！」

「そこまで分かっているなら自分で忍び込めばいいじゃないか」

「それも考えたんだけど～、これがただの洋館に見えて、実は鉄壁の要塞でねぇ、肝心の地下部分の情報が手に入らなかったんだよ」

なるほどな。自分ひとりじゃ動きにくいから俺たちも・・・ってわけか。

「で、どうする？」

「アリアときーくんが二人で内側から中を調べてぇ、んでもって盗んできて！」

「はぁ！？」

「内側？」

『ガゥ？』

俺とアリアは思わず首を傾げてしまう。

「きーくんとアリアには、紅鳴館の執事くんとメイドちゃんになってもらいま～す！」

「「えぇぇぇぇぇ～～」」

不本意すぎるぞ。すっげぇやりたくねぇ～。・・・まぁたしかに

武偵にとって潜入調査なんて珍しい仕事ではないが・・・しかしなぁ。

「・・・一つ確認しておくけど、もし潜入中にブラドを見つけたら逮捕していいのよね？ブラドもママに罪を擦り付けたカタキの１人だし」

「あ～。それ無理」

「はぁっ！？なんでよ！」

どんっ！

アリアは立ち上がりテーブルを思い切り叩いた。しかし理子はそれに動じないで話を続ける。

「ブラドは何十年も帰って来てなくて、いるのは一部の使用人とハウスキーパーだけなので～す。諦めて！」

「じゃあわざわざあたしが潜入する必要ないじゃない！あんたが自分でやりなさいよ」

『ガゥ、ガゥ』

ムスッとした様子のアリアは腕を組みながら再びイスに座るとトラカンも理子に向かって吠えていた。・・・にしてもトラカンがすごくアリアに合わせた行動をしてるな。

「ふ～ん。じゃあ理子がきーくんと潜入していいんだ～。二人っきりで、どうしよ～理子ぉいけないメイドさんになっちゃうかも・・・」

いろいろとツッコミたいところはあるがこれだけは言わせてくれ。・・・アンクの存在を忘れんな！あいつも一緒に来てくれるんだぞ！

「分かったわよ！あたしもやるわよ！ドレイに手を出されたら堪んないもの！だけどあの約束はちゃんと守りなさいよ！ママの裁判での証言！」

「もっちろん。理子は泥棒だけど嘘つきじゃないもん」

アリアと理子は暫くにらみ合った。・・・そういえばまだ肝心なことを聞いてなかったな。

「で、何を盗み出せばいいんだ？まだ聞かされてないぞ」

「ああ、そうだったね。・・・盗んできてほしいのはね・・・十字架なの。理子のお母様が・・・５歳の誕生日にくれた・・・」

理子の話の途中、再びアリアは勢いよく立ち上がった。

「あんたってホントどうゆう神経してるの！！あたしのママには罪を着せておいて、自分のママのプレゼントは取り返せ？ふざけんじゃないわよ！！」

『ガゥ、ガゥガゥゥゥゥ！』

「アリア・・・ちょっと落ち着けよ」

「落ち着けないわよ！あんたのせいであたしはママと会いたいときに会えないし、会えてもアクリルの壁越しなのよ！」

「・・・アリアが羨ましいよ。アリアのお母さんはまだ生きてるん

だから・・・理子にはお父様もお母様も・・・もういない」

「っ！？」

『ガゥゥ？』

アリアは理子の言葉で落ち着きイスに座った。

「理子のお母様は・・・理子が８つの時に死んじゃったの。・・・十字架はお母様の形見。命の次ぐらいに大切なもの。・・・なのにブラドのヤツ・・・それを知ってて奪いやがったんだ・・・ちくしょう、ちくしょう」

「ちょっと・・・泣かないでよ。化粧が崩れたキモ顔なんて見たくないんだから・・・」

アリアにハンカチを差し出された理子は自分の涙をそれで拭くといつもの明るい笑顔を作った。・・・理子はもしかして弱い自分を隠すために強気になったり、おバカなキャラになったりしているのかもしれないな。

「とりあえずアリア～。メイドの練習をしよっか！」

「えっ！？」

理子によるアリアのメイド特訓が始まりを告げた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「おかえりなさいませご主人様、ご用件なんですかご主人様・・・」

『・・・・・・』

「そうゆうわけで～今日の昼休みまで恥ずかしくてご主人様を言えなかったアリアを特訓してみました！」

「・・・うわぁ・・・」

翌日の放課後・・・アリアは自分の席で死んだ魚の目でお経のようにぶつぶつといい続けていた。心なしかトラカンも機能を停止したように動かないぞ？・・・いや、あれマジで機能を停止したんじゃね？あれの稼働時間って１０８時間らしいし・・・そろそろ機能を停止してもおかしくはない。

『・・・ガゥ・・』

あ、よかった。まだなんとか稼動できるようだな。

「次はきーくんの特訓だよ～。１５分後に救護科の第7保健室に来て。でも保健室にいくのは誰にも見られないようにね」

「それ・・・いったい何の特訓だよ？」

「ふふ、くれば分かりま～す！じゃあ、また後でね！」

理子はそのまま小走りでどこかに走っていってしまった。

「・・・適当にぶらついて暇を潰すか」

俺は15分ほど経つまで辺りをぶらつこうと思って音楽室の前を通りかかるとピアノの音色が聞こえてきた。俺は気になって音楽室を覗いてみると・・・

「・・・っ！・・・ジャンヌ・・・」

「お前か？・・・・遠山」

武偵高の制服を着たジャンヌがピアノを弾いていた。俺は反射的に銃を握るが・・・

「警戒しなくていい。見張りはついているぞオーズ」

「お前は？」

いつの間にか横に立っていた見知らない生徒に止められた。

「俺の名は天道総冶（てんどうそうじ）・・・天の道を行き総てを治める男だ」

「・・・・」

うさんくせぇ・・・すっげぇ怪しいぞお前。・・・てか俺をオーズって呼ぶってことは・・・こいつも仮面戦士ってことか。

「又の名を・・・仮面ライダーカブトだ」

ふ～ん。やっぱり仮面戦士か。

「それで？・・・ジャンヌも司法取引か？」

「条件が1つで・・・やむ終えずここに通うことになった。・・・
今の私はパリ武偵高
から来た留学生。情報科2年のジャンヌだ」

「見張り・・・という名目で妹の顔を見るため留学先から帰ってきた俺は2年仮面戦士科だ。よろしく頼む」

ああ、なんとなくこいつが分かった。つまりこいつはシスコンか。

「そういえば遠山、ブラドの屋敷に侵入するのだろ?」

「っ?・・・なぜそれを!?」

「リュパン4世・・・理子が望んでいると知っているからだ。・・・
自由をな」

ジャンヌは窓側へ移動すると外の雨を眺め始めた。

「理子は幼い頃に両親を亡くし親戚を名乗るものに引き取られ・・・
長い間監禁されて育ったのだ」

「えっ?」

「何年間にも渡ってロクな食事も与えられずに牢獄の中でぼろ布を
纏って過ごしたという話だ」

嘘だろ?あの理子がか・・・・信じらんねえ。

「その理子を監禁した者こそ・・・イ・ウーのナンバー2‘無限罪
のブラド’だ。そして理子はある条件で一時釈放された。その条件

こそ・・・初代リュパンを超える・・・だったらしい」

「っ！？」

なんとなくそれで合点がいった。どうして理子が『武偵殺し』としてアリアを狙ったのかが・・・。だが1つ分からない。

「どうして俺にそこまで話す？お前にとって俺たちは敵だろ？」

「もう、お前達を敵だとは思っていない。それにブラドは我が一族の敵でもあるからな。およそ１２０年前、三代前の双子のジャンヌダルクが初代リュパンと2代目‘闇のキバ’と組みブラド・・・アークの鎧を盗み出し使用した者と戦い・・・そして引き分けた。」

なっ！？・・・アークの鎧ってまさかアンクの言っていた黒い化け物のことか！まさか１２０年前に盗まれていたなんて・・・つーか‘闇のキバ’ってなんだ？

「ってことは理子はブラドの子孫に監禁されていたってことか？」

「いや、ブラド本人だ。ヤツは人間ではない」

つまりそれほど長生きするってことはファンガイア辺りの怪人ってことか。

「日本語でなんと言えばいいのか分からんが・・・アークの姿は悪魔で、ブラド本来の姿は・・・鬼だな」

「鬼？」

ファンガイアじゃないのか?

「あの化け物のことは言葉では説明できん・・・」

ジャンヌはそう言うとバックの中からノートのページを切り取るとペンを取り出して絵を描き始めた。

「・・・一応言っておくが・・・あいつの絵はあてにするな」

天道はジャンヌには聞こえないぐらいの声で俺に伝えてきた。・・・そんなに駄目なのか?

「・・・できた!持っておけ遠山!」

「・・・・・えっ?」

ジャンヌは2枚の絵・・・おそらくはアークとブラドの姿なのだろうが・・・小学生・・・下手をすると幼稚園児のほうがまだうまいかもしれないほどの絵心のない絵を俺に渡してきた。予想以上に下手な絵だな。

「ブラド本来の姿はバチカンから送り込まれたパラディンに一生落ちない紋様を4つ付けられた。そこがブラドの弱点だ。絵にも描いているだろ?そこを破壊しなければブラドは倒せないぞ」

「「・・・・・・・」」

俺と天道は複雑な顔をする。・・・それほど絵が下手なんだよコイツは・・・。

「まぁせいぜい頑張るんだな！」

ジャンヌはこの役に立ちそうもない絵を残して音楽室を出て行った。そして時計を見るともうすぐ理子の指定した時間だった。

「やばっ！そろそろいかないと・・・」

「遠山！・・・一つ聞きたい」

俺が急いで保健室に向かおうとすると天道は俺を呼び止めた。

「・・・何だ？」

「・・・1年の探偵科にいる俺の妹・・・天道ひよりに彼氏ができたという噂は本当か？」

「俺が知るかっ！！」

こいつ本当にシスコンだな！！もしかしてその噂を確認するためだけに日本に戻って来たんじゃないのか？・・・そんなことを考えながらも俺は急いで保健室に向かった。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「次は貴様の血を貰おう」

「う、うわぁぁぁぁぁぁ!?」

俺がジャンヌ達と話している頃、武偵高近くの裏路地・・・橘先輩は藪蚊のような怪人に襲われそうになっていた。

「橘さん!!・・・ウェェェイ!」

ガギン!!

剣崎・・・ブレイドは自身の仮面戦士の剣、ブレイラウザーで藪蚊の怪人に斬りかかるが・・・レイピアのような武器に止められてその隙に橘先輩の血が吸われてしまった。

「ふん、今までの中で一番不味い血だったな」

「・・・ふ、ふざけるな・・・剣崎・・・俺の代わりに奴を・・・」

「ウッェェェェェイ!!」

「貴様の血・・・は止めておこう・・・その者と同じ気配がする」

そう言うと藪蚊のような怪人・・・ヤブカヤミーはブレイドの剣を避けると空に飛び去っていった。

「大丈夫ですか橘さん?」

「・・・前回の傷も癒えてないから・・・だいぶボドボドだ・・・」

剣崎は変身を解除するとすぐさま橘先輩に駆け寄り肩を貸した。・・・その光景を近くの建物の屋上から見ていたウヴァは・・・

「まだ成長する可能性があるヤミーをオーズや謎の戦士達と戦わされて足止めを喰らうのは厄介だな。・・・こいつらを使ってやるか・・・」

ウヴァは半分に割れたセルメダルを何枚か手に持っていたものを周辺にばら撒くと・・・割れたセルメダルは白ヤミーに似た怪人にそれぞれ姿を変えた。

また俺の知らないところで・・・さらに欲望は動き出していた。

泥棒大作戦会議（後書き）

今回で１０話の前半が一気に終了してしまいました。だいぶ平成主役ライダーが出揃ってきましたがクウガだけ登場はまだ先になります。

狼とレキ（前書き）

今朝のオーズ・・・まさかウヴァさんがあんな復活の仕方をしてくれるなんて思ってもいませんでした。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×２
ゴリラコア
チーターコア
バッタコア×２
タココア
？？？コア
？？？コア×２

「・・・お～い理子～・・・あれ？誰もいない・・・」

俺は理子に言われた時間通りに保健室にやってきたが先生すらいなかった。

「第７保健室でいいんだっけ～？」

「っ！？」

女子がここに向かってくる声が聞こえたので俺は咄嗟にデカいロッカーの中に隠れた。すると女子は中に入ってくると制服を脱ぎ始めた。・・・くそ、理子にはめられた。

「・・・で、なんでお前がいるんだ信司？」

「え？・・・そりゃ女子の再検査だから新聞部として女子の成長を確かめに来たんだよ」

バカだ。こいつ本物のバカだ。

「ついでに隣にあるもう一つのロッカーには武藤と草加が俺たちと同じで覗きに来てるぞ」

「・・・・・」

いかん。このままでは俺も変態仲間扱いだ。信司は・・・バカだからおそらく部員に騙されて写真を撮ってくるようにでも言われて

きたんだろうが・・・こいつも見たかったんだろうな。草加は園田（そのだ）麻里（まり）とか言う女子のストーカーみたいなもんだからいろいろとアウトだ。武藤は・・・まぁ、そんな人間か。

「キンジも見たくてここに来たんだろ？」

「この状況で説得力は皆無だと思うが一応言っておく。俺は違う！！」

「お～～。みんなすごいな～」

無視かよ！！・・・俺は信司に心の中でツッコムと携帯が鳴った。どうやら誰かからメールが来たようだ。

「っと！？」

俺はここにいることがバレないためにも急いで携帯をポケットから取り出しメールを確認すると・・・理子からメールが来ていた。内容は・・・

『きーくんいい眺めでしょ？理子以外にヒスれそうな女の子がいた？』

理子のやつ！特訓ってこうゆうことかよ！！

『念のためきーくんがちゃんと見てるか確認。１０秒以内に理子の下着の色を返信せよ！できなかったらロッカー大解放！！』

やばい！！開けられちまったら完璧変態扱いだ・・・。

「大丈夫ですか橘さん」

「だ、大丈夫だ・・・・」

ガラっ

「「「・・・・・・・・」」」

橘先輩と剣崎がいきなり保健室に入ってきた。そして女子達は一瞬無言になると・・・

「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁ!?」」」

「「「う、うわあぁぁぁぁぁぁ!?」」」

橘先輩と剣崎は一斉に女子達に攻撃された。そして1分もしないうちに二人はぼろ雑巾のようになっていた。

「うぅ、オンドゥルラギッタンディスカ～～」

「オデノカラダハボドボドダ～～」

もうなんて言っているのかわかんねぇ。・・・とりあえずあんな風にはなりたくない。

「退け信司!!」

俺は慌てて理子を探す。・・・いた!ハニーゴールドだな!・・・・

俺は急いで理子にメールを送った。

「くふ」

ふう、なんとか間に合ったようだな。

「アリア～～遅いよ～！せっかくアリアのサイズを測ろうと思っていたのに～～」

「べ、別にいいじゃない！」

アリアは理子に脱がされそうになったが・・・それを振り切って一人で脱ぎ始める。

ドクンっ！

「っ！！」

・・・なんてこった。まさか下着姿のアリアを見ただけでヒステリアモードになっちまうなんて。すると保健室に小夜鳴が入ってきた。

「おやおや、血液検査だけですから制服は着たままでよかったんですよ」

「「「えぇぇぇぇぇぇぇ！？」」」

「先生。もう脱いじゃったしこのまま採血しちゃってください」

一人の女子生徒が小夜鳴にそう言った。そう言えば再検査のメンツ・・・平賀源内の子孫とも言われてる平賀さんに、俺の戦徒で最近よく凍条と言い争いをしているらしい風魔は高名な忍者の末裔。陽は小林少年の孫で、レキは知らないがアリアと理子はシャーロックとリュパンの子孫。他の女子も優秀な血統の奴らだ。・・・何かおか

しい。

「ちっ！余計なことを言いやがるぜ」

「麻里の下着姿をジャマするヤツは嫌いなんだよ！」

ガタガタっ

隣のロッカーが揺れる音が聞こえた。草加ぁぁぁぁぁお前かぁぁぁ！！

「っ！」

「「「「・・・・・・・」」」」

するとその物音に気づいてしまったレキは俺たちの入ったロッカーを勢いよく開けてしまった。

「「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁ！！？」」」」

やばい・・・ヒステリアの俺なのに冷や汗が止まらない。

「悪いキンジ・・・変身・・・」

信司は赤い竜騎士のような鉄火面戦士の仮面ライダー龍騎に変身すると近くの鏡の中に飛び込んで逃げていった。・・・あいつ自分だけ鏡の中に入れるからって・・・。

「麻里ぃぃぃぃぃぃ！！」

「草加君の変態！」

「なっ！？」

草加は開き直って麻里とか言う女子生徒に向かっていくが・・・
すぐに撃墜されたようだ。・・・残るは俺と武藤だけか・・・。

「ガウウウウウ！！」
ガシャァァァン

「「っ！！」」

「ぐっ！？」
バダァァン

何かがいきなり保健室に入ってくるとそいつはロッカーを奇襲してきた。俺はなんとか回避できたが、武藤はロッカーの下敷きになってしまった。

「狼・・・だと・・・」

草加はいつの間にか復活してそう呟いた。しかし唯の狼じゃない。銀色の毛並みの大きな狼・・・絶滅危惧種のコーカサスハクギンオオカミだ。

「ガォォォォォ！」

「あぶねぇぇぇぇ！」
ガッ

龍騎は鏡の中から出てくると俺に体当たりをしようとしてた狼を

捕まえる。

「助かった信司！」

「いいから変身しとけって！こいつかなり・・・うわっ！？」

「くっ！」

狼は一瞬油断した龍騎を振り払い外に出ようとする。すると小夜鳴はそれを止めるかのように前に出た。・・・あの馬鹿講師！仮面戦士ですら振り払うほどのヤツを生身で止めに掛かるなんて無謀だぞ！

「ぐわっ！？」

「ガウウウウウウ！」

当然なように狼の体当たりを喰らった小夜鳴は後ろ倒れこむと狼は外に逃げていった。

「キンジ！追いなさい！小夜鳴先生の手当ては私達でしておくから！」

「分かった！」

俺は狼を追うために窓から外に出ると、おそらく武藤が逃亡用のために控えていたライドベンダーのバイクモードに跨るとレキが後ろに飛び乗った。

「・・・あなたは狼に対しても変身しないつもりでしょう。だった

ら今のあなたには狼を追いきれません。私もついて行きます」

「・・・助かる・・・しかしせめてこれぐらいは着てくれ」

「はい」

レキにブレザーを渡した俺はベンダーのアクセルを踏み狼を追った。

「・・・・きーくんヒスってた。・・・もしかして・・・」

俺がレキと狼を追ったのを窓から見ていた理子は・・・アリアを一瞬細目で見ていた。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「レキ、狼はどこに行った?」

「南端の工事現場の八階に狼の足跡が見えます」

「あそこか・・・ん?」

「くそ、邪魔しやがって・・・」

俺とレキは開発工事中のビルに向かう途中、人間態で何かと戦っ

ているアンクを見つけた。・・・何だあの怪人たち?・・・白ヤミーに似ているが・・・何処か違う。

「「「ウゥゥゥゥゥ!」」」

「アンク!そいつらは何だ?」

俺はベンダーを一度止めるとアンクに駆け寄る。

「・・・あいつらは屑ヤミー・・・こうゆうのを作るのは・・・虫頭のウヴァだけだ。この先にヤミーがいるんだがこいつ等に妨害されちまってな・・・俺も力を使えばこいつ等なんて倒せるが・・・場所が場所だ」

ここは工事現場のビルの一階だ。アンクみたいな強力の力を使えばたしかに崩れかねないな。

「・・・そうか。とりあえずとっとと倒して狼とヤミーを何とかしないとな・・変し」

「ここは任せてキンジは狼を追え!」

ザンッ!

俺が変身しようとしたタイミングでベンダーに乗ってやってきた龍騎は青龍刀のような剣で屑ヤミーを斬った。

「しゃぁ!」

そういえば・・・こいつはバカだからこそ人を守るために戦える奴なんだよな。仮面戦士も人間も守るために仮面戦士になったって・・

・前に言っていたな。

「いくぞアンク、レキ！」

「はい」

「ああ！」

アンクは龍騎の乗ってきたベンダーに跨ると、俺たちはビルの八階へと向かった。

「あ！俺の交通手段！えっとあいつの名前。たしか・・・アンコぉぉぉちゃんと返せよぉぉぉぉそのバイクぅぅぅぅ」

龍騎は一人で7体の屑ヤミーと戦いつつもアンクにそう叫んでいた。・・・にしてもアンコって・・・。

「俺はアンクだっつうの」

俺はアンクの発言に吹きそうになったが何とか耐えて八階にたどり着き足跡のほうを向いたが・・・

「ガァァァウ！」

「っ！？」

・・・足跡は罠だったようで後ろからバックミラーには狼が映っていた。

「くっ！」

殺すのは好まないが・・・仕方ない。・・・俺は飛び掛ってくる狼に銃を向けた瞬間だった。

「私は一発の銃弾」
ドンッ！

「キャウンっ！？」

俺の後ろでライフルを構えていたレキは狼に発砲したが・・・その弾丸は狼の背を掠めただけだった。レキが命中させないなんて始めてみたぞ。・・・もしかしてコイツ・・・わざと外したのか？

「・・・少しうれしいよ」

「何がです？」

「外したからさ。レキも人間だったんだな」

「私は元から人間です。それに外してません」

「えっ？」

俺とアンクはベンダーから降りてレキと共に狼の逃げた先に向かうと・・・グッタリと倒れている狼を発見した。

「脊椎と胸椎、その間を銃弾で掠めて瞬間的に圧迫し、体を麻痺させました」

レキは・・・俺達ではなく狼に語りかける。

「5分ほどで動けるようになります。逃げたければ逃げなさい。ただし・・・次は何処に逃げようとも私の矢があなたを射抜く」

感情を交えないで話しかけるレキを狼は言葉の意味が分かるように見つめている。

「主を変えなさい。今から・・・私に・・・」

「・・・くぅぅぅぅん」

すげぇ・・・狼を一発で服従させた。

「どうすんだ?その狼?」

ヒステリアモードが終わってしまった俺はふと気になったことをレキに質問した。

「飼います。そのつもりで追いましたから」

「そ、そうか。でも寮はペット禁止じゃ・・・」

「武偵犬ということで許可を貰います」

武偵犬って・・・無理があるんじゃないのか?

「お手」

「わぅ」

狼は素直にレキにお手をした。・・・無理じゃないかもしれない。

「それよりキンジさん。ヤミーのほうはいいんですか？」

「そうだった！アンク、ヤミーは？」

「・・・ちょうどお出ましだ」

アンクの言葉で後ろを振り向くと・・・後ろにはすでに藪蚊のようなヤミーがいた。

「オーズ、それにその後ろの女・・・貴様らの血も貰おう」

「レキ・・・下がってろ。お前じゃヤミーと戦いにくいだろ・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身するとトラクローを展開して構えようとすると・・・

「「「うぅぅぅぅぅ！」」」

「何っ！？」

いきなり十数体の屑ヤミー達が俺を押さえつけてきた。・・・こいつら信司が戦ってたんじゃ・・・

「ちっ！どうやら他にもいたらしいな。すまんキンジ！ヤミーじゃないから気配が分からなかった」

「くそっ！セヤッ！」

俺は一体の屑ヤミーを殴りつけるが・・・

「痛ってぇ・・・なんだコイツ？硬いぞ」

「キンジ！ウナギだ！雑魚払いには丁度いい！」

アンク、簡単に言わないでくれ。・・・さすがにこの数に押さえつけられたら・・・メダルなんて変えれないぞ。俺が数に苦戦するそんな時だった。

『ＴＨＵＮＤＥＲ』

「ウェェェェェイ！」

ドォォォォン！

電撃を纏ったブレイラウザーでブレイドは俺に纏わりつく屑ヤミーを数体撃破した。

「剣崎！？」

「・・・俺も狼を追いかけようとしたらヤミーがこっちに飛んできてたのが見えたんでな。・・・あのヤミーは橘さんを襲った奴だ。俺も戦わせてもらうぞ」

「そうかよっ！」

俺は残りの屑ヤミーを振り払うとすぐさまトラのメダルを変える。

『タカ！ウナギ！バッタ！』

トラアームからこの前手に入れたウナギコアでウナギアームに変えた俺は・・・

「セイヤァァァ！」

ドォォォォン！

電気を纏った鞭、電気ウナギウィップで残りの屑ヤミーを撃破した。

「アンク！ジャリバー！」

「ほらよっ！」

俺は自分で持っているのには面倒なジャリバーをアンクから受け取ると突き出すように構えるとブレイドが話しかけてきた。

「お前・・・前から思ってたが仮面戦士を嫌ってるのに仮面戦士っぽい性格してるよな」

「は？俺がか？・・・俺はそんな性格じゃねぇよ。いいからとっとことこのヤミーを倒すぞ！」

「ああ、いくぞ！」

俺とブレイドは同時に剣をヤブカヤミーに振りかざした。

狼とレキ（後書き）

ＰＶが１０万を超えていたことにようやく気づきました。みなさん見てくれてありがとうございます！これからもがんばります！

潜入作戦（前書き）

残念ですが8月の3~6日は更新できません。そのぶん土日は2話更新をできるようにがんばります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
トラコア×2
ゴリラコア
ウナギコア×2
チーターコア
バッタコア×2
タココア
???コア

潜入作戦

俺とブレイドは同時に剣をヤブカヤミーに振りかざした。

「セイヤッァ！」

「ウェェェイ！」

ガギンッ！

しかし俺の剣はヤブカヤミーの持つレイピアに止められ、ブレイドの剣はヤミーの羽に防がれてしまっていた。

「「なっ！？」」

こいつ・・・思ってた以上に俊敏な動きをしやがる。

「どうした？この程度か？ならこちらからいくぞ！」

ビュン！

「ハァアァァ！！」

ドォォン！ドォォン！

ヤブカヤミーは空中に飛び上がると高速で振動する羽で衝撃波で俺達を攻撃してきた。

「くっ！？キンジ！！このままじゃ足場が崩れるぞ！」

「遠山！とりあえず俺が奴を引き付けるからレキを・・・」

「いや、ここは・・・アンク！レキを頼む！」

「ああ、分かったよ！」

バサッ！

アンクは人間の姿で真紅の翼を広げるとレキと狼を掴んで飛んでいった。その時にはもう俺たちの視界にヤミーはいなくなっていたが・・・まだ近くにいるだろうな。

「・・・あいつ・・・怪人なのか？」

「まあな。別に味方だからいいだろ・・・そんなことより俺達はあのヤミーだ」

相手は近距離ではレイピア、中距離では衝撃波、その上空を飛べるって奴だ。しかも建設中のビルだけあって足場が悪い。下手に攻撃すると崩れてしまうかもしれないな。加えて何処から奇襲してくるか分からない・・・やっかいな相手だ。

「だいぶ暗くなってきたな」

「くそ、これじゃどこにいるのか分かりにくいぞ！」

相手は怪人とはいえ藪蚊だ。おそらく暗闇にも強いはずだ。・・・暗闇でもあいつの居場所を捕らえることのできるメダルは・・・こいつだな。

『シャチ！ウナギ！バッタ！』

俺は超視力のタカヘッドから反響定位のできるシャチヘッドにメダルを変えた。

「剣崎、ジャックになっておいてくれ。俺じゃあ飛ぶことはできないからな」

「分かった」

『ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ　ＦＵＳＩＯＮ　ＪＡＣＫ』

ブレイドは飛行形態のジャックフォームに変身するとその翼を広げる。

「さて・・・どこに・・・」

俺はシャチヘッドの黄色の複眼を輝かせて羽音を探す。するとブレイドの後ろにヤミーの形の反響を見つけた。

「剣崎！後ろだ！」

「分かった！」

ヤブカヤミーの背後からの奇襲をブレイドは飛んでかわすとそのままヤミーを斬ろうとしたが・・・

「遅いっ！」

ギィィィン

「ウェっ！？」

衝撃波を喰らい吹き飛ばされてしまった。そしてヤブカヤミーは

再び暗闇の中に消えていった。

「剣崎！？」

「・・・なんて奴だよ・・・あれが蚊かよ？」

とりあえず大丈夫そうだな。けどあの衝撃波・・・あれをなんとかするには羽を切り裂くしかないな。・・・シャチは居場所は特定できるがその分時間が掛かってしまう。だとすると暗い場所もはっきり見えるライオン・・・ラトラーターコンボを使うか？・・・いや、あんな強力な力をこんな場所で使うなんて危険すぎる。

「どうすんだ遠山？・・・俺は作戦なんて考えんのは苦手だから突っ込むことぐらいしかできないからそうゆうのはお前に任せるぞ」

「・・・・一か八かだな」

ヒステリアモードじゃない俺は今の状態で思いついた1つの作戦を剣崎に話した。

「うまくいくのか？」

「やるしかないだろ？・・・それに作戦考えないお前がうまくいかないなんて考えんな。お前らしくないな」

「・・・そうだな。そうゆう賭けで闘ってみるのが仮面戦士だよな！・・・ホント、お前は仮面戦士みたいな性格だな」

「うっせぇ。・・・やるぞ・・・」

ブレイドは頷くと翼を広げて指示した場所に飛んでいった。それを確認した俺はバッタカンでアンクに連絡を取った。

「ほう、あの青い剣士は逃げたのにお前は逃げないとはなオーズ！」

「うるせぇ蚊だな。いい加減黙らないと潰すぞ？」

数分後、アンクに作戦を伝えた俺はその場所から動かずにヤブカヤミーがここに来るのを待っていた。おそらく奇襲攻撃が多いコイツのことだからグリードであるアンクが近くにいるレキよりも先に俺を狙うと予想していたが・・・あたったとうだな。

「ふんっ！潰せるものなら潰してみろぉぉぉぉ！！」

最初の一撃はレイピアで斬り付ける・・・予想通りだ。

「セヤッ！」
パシッ！

俺はウナギウィップを上の鉄柱に巻きつけて攻撃を回避するとそのままヤブカヤミーにターザンキックを決める。

「おのれっ！！」
ギィィィィン

ヤブカヤミーは衝撃波を放とうと羽を超速振動させる。・・・今だっ！

「私は・・・一発の銃弾」
バンッ！
アンクに掴まれながら飛んでいるレキはビルの外の空中からヤブカヤミーの羽を狙撃して振動を妨害する。
「くっ！？おのれ人間風情が！！」
ヤブカヤミーは攻撃の妨害をしたレキにレイピアを向けて飛んでいく。・・・掛かってくれた！
「・・・お願いします剣崎さん」
「了解っ！ウェェェェイ！！」
ズバッ！
「グワァァァァ！？」
ドサっ！
虫ってのは羽を広げている時が一番千切れやすい。だから俺は振動を妨害したタイミングで羽を斬るようにブレイドに言ったんだが・・・成功なようだ。
「お、おのれぇ」
コンクリートの足場に叩きつけられたヤブカヤミーは自身の溜まったセルメダルで切られた羽を再生しようとしているが・・・そんなことさせないぜ。
「決めるぞ剣崎！」

『スキャニングチャージ！』

「ああ、ダブルキックだ！」

『ＴＨＵＮＤＥＲ　ＫＩＣＫ　ＬＩＧＨＴＮＩＮＧＢＬＡＳＴ』

「ウッェェェイ！！」

「セイヤァァァァ！！」

「ぐあっ！？」

俺は電気ウナギウィップでヤブカヤミーの両手を捕らえて引き寄せるとブレイドは電撃を纏った右足でキックを決める。それに続くように俺もメダルの力を溜めたバッタレッグの右足でヤミーにキックを決めた。

「お、おのれオーズ・・・覚えてろ！！」

「待てっ！・・・くっ、逃げられたか」

しかしヤブカヤミーはそのキックを耐えたようで俺が倒したと思って電気ウナギウィップを緩めた隙に逃げ去っていった。ブレイドが追いかけようとしたが・・・追いきれなさそうなので諦めた。

「なんてタフさだよ・・・」

「まぁ、ウヴァのヤミーだからな」

俺は変身を解いて愚痴をぼやくと、空から戻ってきたアンクも呆れたように呟いて、俺たちはベンダーを走らせて帰っていった。・・

・そういえば誰か忘れてる気がする。

「いつになったらアンコはベンダーを返しに来るんだろうな」

信司にアンクがベンダーを返すという口約束を・・・俺たちはすっかり忘れていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「遅いな、理子のヤツ」

「まったく、はやく来なさいよね！」

『ガゥ！』

翌日、昨日のノゾキのことでアリアに風穴を開けられそうになったのを耐え抜いて今日という日を迎えられた俺は、よく自分が生きているなと思いつつも待ち合わせ場所で理子を待っていた。

『ガゥゥ！』

「・・・はぁ・・」

ついでに言うとアリア専用になりつつあるトラカンこと，トラくん，は平賀さんの3分魔改造により巨大化機能を失った代わりに太陽の光を吸収して半永久的に動けるようにされてしまった。・・・もうあのトラカンはトライドにできなくなっちまっていた。

「改造してもらうなら俺にも相談しろよ・・・一応俺のなんだし・・・」

「何言ってんの？トラくんはあたしのペットじゃない。それにあんたの物はあたしの物、あたしの物はあたしの物よ」

『ガゥ！』

何そのジャイアン原理？・・・そんなことを考えているとアンクは真顔で話しかけてきた。

「そんなことよりキンジ。分かってんだろうな・・・もしブラドと戦闘になったときの危険さを・・・」

「・・・ああ、分かってる」

昨日アンクにはブラドが１２０年前にアークの鎧を盗み、変身したことを伝えると血相を変えていた。・・・それほど危険な相手なんだろうな。

「力には力で・・・ガメルのコンボを使うしか生き残る手段はない。・・・だが今のお前にはサイとゾウのコアメダルがない。・・・たしかにラトラーターとシャウタは揃っているがパワー不足だ」

「だから戦うことになったら逃げるしかない・・・って言いたいんだろ？」

「ああ、そうだ。たとえコンボを使っても倒すことは無理だ。せいぜい今のお前じゃ撃退が限界だろ」

アンクは本気で俺達をブラド・・・いや、アークと戦わせないつもりだが・・・俺は悪いが逃げるつもりはない。アンクの言う通りそんなに強い奴ならなおさらだ。アンクが焦るほどの化け物を野放しにはできない。・・・理子に自由を取り戻させるためにもな・・・。

「ほらっ！とっとと進んでくれ正太郎！」

「えっ？マジで俺も行くの？・・・俺潜入は・・・」

俺が考え事をしていると・・・なにやら言い争いをしながらもこちらにやってくる二人が視界に入った。

「・・・ん？正太郎？」

「ライト？・・・どうしてここに？」

正太郎と陽だ。・・・なにしに来たんだ？

「正太郎と僕もこれからいく潜入に参加させてくれないかい？」

「「えっ？」」

「はぁ、潜入捜査は好きじゃないが・・・ブラドってやつはライダーの力を悪用するヤツなんだろ？・・・万が一ってこともあるからな・・・陽と俺も一緒にいくぜ」

俺的には助かる。・・・もしアークとの戦闘になったら一人じゃどうにもならないかもしれないからな。

「・・・でも理子に聞かないと・・・」

「別に理子はかまわないよ～～」

いきなり理子の声が後ろから声が聞こえ振り返ると・・・そこには・・・

「っ！？」

「ちょい～～すっ！」

カナの姿をした理子がいた。

潜入作戦（後書き）

ようやくアニメ１１話に突入。理子編には関係ありませんが以前オーラインクロスの機能追加でどのようにするかをお聞きしましたが一応鈴神さんのメッセージで頂いた案で決定しました。

違和感（前書き）

3年にネタキャラの仮面戦士が多いので3年の仮面戦士を募集します。思いついたら教えてください。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア×2
ゴリラコア
ウナギコア×2
チーターコア
バッタコア×2
タココア

違和感

「あんたまさか理子？」

「えっへ～、理子～ブラドに顔が割れてるからさ～」

理子の顔はカナの顔をしていた。「だからってなんでその顔なんだよ？」

・・・正直言ってこの顔だけはやめてほしい。

「きーくんの一番好きな人の顔で応援しようと思ったの！カナちゃんの顔でね！」

「おい理子！冗談が過ぎ・・・」

「餓鬼の悪戯に腹を立ててもしょうがない、行くぞ！」

正太郎が俺の代わりに理子を怒ろうとしてくれたが・・・俺はひとまず正太郎を止めた。

「ねぇキンジ！何の話？理子が化けて来たのって誰の顔よ？ねぇ！」

『ガゥ！』

「・・・・・・」

アリアは俺にカナのことを聞いてきたが・・・今はそんなことを話せる気分でもなかったので黙っていた。

「・・・キンジ・・・ったく・・・・」

「止めるんだ正太郎・・・あれはキンジ君自身が解決しないといけない」

後ろで正太郎は俺の代わりに理子を怒ろうとしていたが陽に止められた声が聞こえた。正太郎も俺が怒る理由が分かるからな。・・・だってカナは・・・・俺の・・・・だからな。

「・・・で、今回はどんな風に潜入するんだ?・・・・鍵開けか?」

アンクはアンロック用のキーを何本も出して目を輝かせていた。・・・こいつ、そう言えば特訓の時にいなかったもんな。

「2週間、ハウスキーパーとしてお手伝いさんの仕事をするんだよ」

「・・・マジかよ、俺は何しにいくんだよ?そんなことするつもりねぇぞ」

まぁ、アンクはそんな仕事ができない・・・いや、しないだろうと思っていたが・・・まさか鍵を開けて進入だなんて古典的な考えをしてたなんて思わなかった。

「いいから行くぞ」

俺はスタスタと歩いて目的の場所へと向かった。・・・そしてモノレールに乗ったりして何とかたどり着いたその場所は・・・写真で見た感じよりも大きな屋敷だった。・・・本当にここが横浜市内か?

「始めまして。人材派遣会社よりハウスキーパー5名を連れてきました」

理子はインターホンを押すとカナの声で話すが・・・俺達はアンク以外、顔を引きつった。

「あぁ、お待ちしておりましたよ」

・・・なんで小夜鳴が出迎えてくるんだよ？

「いやぁ、意外なことになりましたねぇ。ハウスキーパーさんが休暇を取る2週間の間ですから誰でもいいとは言いましたが・・・まさか武偵高の生徒さんが来るなんて・・・」

俺達は小夜鳴に案内されてホールのソファーに座った。だけど俺らもびっくりだよ。どうしてあんたがこんな所に住んでいるんだ。

「私も驚きました。まさか同じ武偵高の先生と生徒さんだったなんて！」

「はは、自己紹介の手間が省けましたね。仮面戦士が2名でその内の1人がSランク。それにもう1人Sランクもいるとなれば安心して地下で研究に没頭できますね」

「こちらのお屋敷のご主人が帰ってきたら話の種になりますね」

理子は何かを探るように小夜鳴に話しかける。

「いえ、彼は今・・・とても遠い所にいましてね。しばらく帰ってこないみたいなんですよ」

「お忙しいんですか?」

「どうなんでしょう?詳しくは知らないんです。なにぶん、直接話をしたことがないもので・・・」

なんだ?メル友ってことか?・・・いや、そんな軽い関係じゃないんだろうが・・・小夜鳴には何かある。・・・そんな気がしてならない。

「それでは私は失礼します。みなさん、しっかりお勤め願いますね」

そう言って理子は屋敷を出て行くと俺達は小夜鳴にそれぞれの部屋に案内された。

「小夜鳴先生、こんな大きな屋敷に住んでいたんですね。びっくりしちゃいました」

陽はとりあえず話題を作った。たしかにそれは俺も気になっていた。

「他人の家ですけどね。ここの研究施設をちょくちょくお借りしていたらいつの間にか管理人のような立場になっただけですよ。こちらが小林さんと神埼さん、そちらが遠山君と泉君、少し離れますが

あちらを明智君がお使いください」

俺とアンクは小夜鳴から左の部屋、アリアと陽は右の部屋、そして正太郎は俺たち側だが一つ部屋が離れた部屋を指示された。

「え？・・・なんで俺だけ？」

「申し訳ありません。部屋は二人までなので・・・。部屋は好きに使ってください。それと制服はサイズが合うのと適当に選んでください」

「分かりました」

俺とアンクは部屋に入ると、ロッカーにかかっているちょうど良さそうなのを選んで着てみた。・・・哀しいほどに違和感がないな、俺の執事姿。・・・人を使う仕事じゃなくて、人に使われる仕事のほうが似合うなんて・・・きっとアリアのせいだ。

「ハッ！どうだキンジ！」

「・・・いや、お前には激しく違和感を感じるぞ」

金髪の独特の髪型で普段学校の制服のＹシャツのボタンをしてないようなヤツがいきなり執事の服を着てみろよ？・・・笑えてくる。

「・・・まあいい。とっとと残りのメンツを呼んで来い。俺は先にキッチンにいく」

「・・・つまみ食いはすんなよ」

「っ！？・・・俺がすると思うか？」

じゃあ今の焦ったような感じはなんだったんだよ。

「はぁ・・・分かった。呼んでくる」

俺は部屋を出るとちょうど正太郎も部屋から出てきた。こいつの執事姿は・・・違和感が無いといえば嘘になるが口に出すほど違和感があるわけではない。

「キンジ・・・お前，違和感ないな～～」

「言うな。気にしてるんだ。それよりアリア達だ」

「そうだな。お～い陽！」

トントン

「・・・・・」

部屋からはアリア達の声はしなかった。

「入ってみるぞ」

ガチャ

「え？マジで？」

正太郎がアリア達の部屋の扉を開けてみると・・・

「まぁ、たまには平民の服も悪くないわね」

「・・・メイド服・・・初めてだ」

鏡でメイド服姿の自分達を見る二人がいた。

「「あ・・・・」」

二人はこちらに気づくと瞬時に顔を赤くする。

「正太郎のバカ～～！！」

ドカっ！

「ぐはっ！？」

陽は一瞬で正太郎の腰を掴みそのままジャーマンスープレックスを決めた。当然なように正太郎の意識は飛んでいる。・・・ああ、つまり次は俺がこうなるのか。

「ご用件は何ですかご主人様！！」

アリアは鬼のような形相でこちらにのしのしと歩いてくる。

「・・・特にないが・・・できれば殺さないでほしい」

「次、勝手に入ってきたら風穴！！」

ビュン！

「がはっ！？」

アリアは足で俺の頭をロックするとそのまま身体を横に逸らした。

・・・1時間後に目が覚めた時に正太郎に聞いたんだが・・・その

技はプロレスの‘フランケンシュタイナー’という技らしい。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

1週間ほどここで仕事をしてみて気づいたんだが・・・どうやら俺は見た目だけではなく執事の才能もあるらしい。一人暮らしであの事件が起こるまではコンビニ弁当ではなく自分で料理もしていただけあって家事もそれなりにできる。・・・はっきり言ってしまえばこのメンツの中で一番できている。

アリアや陽は家柄のせいかそういうのができていない。正太郎は・・・コーヒーを入れるのと掃除ぐらいの仕事はできるが料理はいまいちだ。アンクは酒好きなところが以外にも役に立ちソムリエのようなことで役に立っている。

「・・・こういう時にお前の生活スキルが高いって思い知らされるんだよな。俺にできるのはコーヒーと掃除だけだぜ?」

「うるせえ。愚痴言ってないで仕事しろ。俺は今、ステーキで手が離せないんだ」

ステーキの肉は肉たたきで全体を叩いて肉を均等にほぐすのがコツなんだからな。

「でも掃除も終わっちまったし・・・」

「アンクのところ行ってワインでも選んでろ!・・・俺はステーキ

を焼く！」

俺は正太郎の話を軽く流してステーキに軽く塩とブラックペパーを振りかける。

「・・・お前・・・最近はそうじゃなくなったと思ったがやっぱり料理はすごく真面目だよな。もし武偵を辞めた場合は料理人にでもなるのか？」

「もし・・・じゃなく絶対に辞める。・・・まぁ、料理人っていう考えも有りかもな」

料理人っていう進路も考えておこう。

「ところでキンジ・・・どれぐらい監視カメラの場所は分かったんだ？」

「・・・屋敷の中に３０箇所はあったな。外は数えたんだろ？」

「ああ、屋敷の外側の壁に１２箇所。中庭に５箇所はあったな」

外でもそんなにあるのか。・・・俺は基本的に厨房や部屋の掃除とかの室内だったから外にはあまり出なかったから確認してなかったんだよな。

「あ、正太郎！ちょっと外のベンダーでひとっ走りしてオリーブオイルを買ってきてくれ。もうなくなりそうなんだ」

「え？なんで俺が？」

「仕事はコーヒーだけか？・・・それじゃこの前見たドラマのように死に際の医者にコーヒーを運ぶ程度の仕事しかできないぞ」

「・・・分かったよ・・・」

そういえばあの医者を演じていた人も仮面戦士らしいが・・・誰だったけな？・・・まあいいか。

「ついでにタマネギと唐辛子・・・それとアイスも頼む」

「・・・行ってくるからベンダーのためのセルメダルをくれ。俺は今、切らしてんだ」

「しょうがないな。ほらよ！」

チャリン！

「センキュっ！」

正太郎は買い物に行っていなくなった。そういえばアンクがワインを選びに行ってから戻ってこないな。・・・何してんだ？

「おい、アンク・・・」

俺はアンクを探してみると・・・アンクは大量の本が置かれた部屋にいた。

「何してんだアンク？」

「・・・ブラドについての記録がないか探していたんだが・・・やっぱり何にもないな」

まぁ、こんな人目がつくかもしれない所にそんなのがあるはずがないよな。・・・あるとしたら地下だよな。でも地下に掃除に入った時はおそらく理子のだと思う十字架と不思議なデザインの蝙蝠の置物以外は研究のものしかなかったしな。

この時の俺は・・・あの蝙蝠の置物だと思っていた物があんなにも危険な物だなんて・・・まったく考えていなかった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

「オ～ズぅ、どこだぁ～？」

俺がアンクを探していた頃、ガメルは横浜の繁華街を長身の人間の姿で歩いていた。

「絶対に、メズ～ルのメダルを取り返すぞぉ」
チャリン！

「うおぉぉぉぉぉ！！」

「「「きゃぁぁぁぁぁぁっ！？」」」

ガメルは自分にセルメダルを投入してゴリラのようなヤミーを作り出し、周辺の人々は突然の怪人の出現に驚き、騒ぎ出した。

「ほら、おまえも、オ～ズ、探すぞ！」

「うほっぉ！！」

ドガァァァン！

ガメルも怪人の姿になると、ゴリラヤミーと共に周辺を壊しながら歩き始めた。

違和感（後書き）

今回で原作小説3巻の半分を過ぎた辺りまで終了しました。以前、話数が今までよりも多いかもしれないと書いていましたが最近、1話、1話が長くなってきたので逆に早く終わるかもしれません。

最終日（前書き）

今回は物語の進みがやや早くなっています。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア×２
ゴリラコア
ウナギコア×２
チーターコア
バッタコア×２
タココア

最終日

「オ～ズぅ！！」

「ヴォォォズゥ！」

俺がアンクとの話を終えて再びステーキの調理をし始めた頃、ガメルとゴリラヤミーは街を壊しながら歩いていた。

『おい、渉！あの怪人たちを何とかしねぇとやべぇぞ！？』

「うん。いくよキバット！」

『よっしゃぁ！キバっていくぜ！ガブッ！』

たまたま通りかかった1年の渉はなんかよく分からない蝙蝠を赤いベルトに逆さに吊るすと銀色の鎧のような物に包まれた矢先にその銀色が弾け飛び、吸血鬼を思わせるような赤い仮面戦士、仮面ライダーキバ、に変身した。

「ハァァァッ！！」

キバは両腕を広げながらガメル達に駆け寄るとゴリラヤミーを連続で殴った。するとガメルはゴリラヤミーとキバの間に割って入った。

「俺の、ヤミー、いじめんな！！」

ブンっ！

「うわっ！？」

『大丈夫か渉！？』

「これでも、喰らえっ！！」

ガメルはキバを殴り飛ばすと重力波をキバに放とうとしたその時だった。

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

「ハッァ！！」

ヴォンッ！

「うわぁ！？」

巨大な金色に輝くフォトンブラッドの刃がガメルにぶつかった。

「大丈夫かい紅君？」

「木場さん！！」

金色のラインが全身にある黒い騎士のような，Ω，の仮面戦士，仮面ライダーオーガ，こと木場勇司（きば ゆうじ）はキバの下へ駆け寄った。

「あれは？」

「おそらくグリードとそのヤミーですね。どうしましょう？」

「・・・とりあえずこれ以上周辺を破壊されては厄介だね。この場から遠ざけよう」

「何なら俺達も手伝うぜ」

「「っ？」」

オーガとキバが声の方向を振り向くと、W・サイクロンジョーカーが立っていた。

「まったく、買い物にやってきたらこんな面倒なことになってるなんてな。今日はついてないぜ」

「正太郎、そんなことを言っていないであの怪人達をなんとかしよう」

「ああ、あいつは硬いからヒートメタルで行こうぜ？」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

Wはヒートメタルに変わるとメタルシャフトを構えた。

『渉！力には力だ！』

「うん！」

『ドッガハンマー！』

キバは紫色の笛を蝙蝠に吹かせると、どこからともなく紫色のハンマーが飛んできてそれを握ると、その姿は頑丈そうな紫の鎧を纏ったような姿に変身した。

「僕はフォームチェンジはないんだよね・・・」

オーガは小さくそう呟くと自身の剣を構えた。

『お前ら！いっくぞぉ！』

「・・・そこはキバット君がいうのかい？」

「そんなこと気にしてないでいくぞ陽！」

Wはガメルに向かって炎を灯したメタルシャフトを振りかざす。

「なんだおまえ？この前みたやつに似ているけど、なんか違う？」

「この前はジョーカー・・・そんで今回はWだよっ！」

ドカッ！

「い、痛い～～！」

メタルシャフトで叩かれたガメルは怯んで1歩後ろに下がると・・・

『待ってたぜ！』

「フンッ！」

ドガッ！！

キバの持つハンマーで叩きつけられて数枚のメダルと1枚のコアメダルが落ちた。

『あれ？なんか1枚だけ違うメダルが落ちてきたな？・・・レアなのか？シークレットか！？』

「う～～～っ！痛いぃ」

ガメルは後ろに倒れると少し離れたところで戦うゴリラヤミーと

戦うオーガがW達のほうを振り向いた。

「・・・できればこっちにも加勢してほしいんだけど・・・」

「うほっ！！」

ガギン！

「ハァッ！」

ドカッ！

オーガはゴリラヤミーの拳を右手に握る剣で軽く流すと左手でぶん殴った。

「いや、そっちは木場だけでなんとかなるんじゃないか？」

W（正太郎）がそう呟いていると、ガメルは立ち上がる。

「痛い・・・でもメズールのメダル、取り返さないと・・・」

「うっほっ！」

ドドン！

ゴリラヤミーがドラミングをすると、W達は宙に浮かび上がり身動きがうまく取れなくされた。

「おい、こいつらオーズじゃない、いくぞ！」

「うっほっ！」

ガメルとゴリラヤミーはその隙にスタスタと何処かに立ち去って

いった。その2体が見えなくなった途端、重力制御から開放されたW達は地面に落下して変身が解除された。

「・・・やっぱWでもグリードは撃退止まりか・・・どうすりゃいいんだ。このままグリードをキンジだけに任せるわけにもいかねぇし・・・」

その数十分後、結局頼んだ物を何も買ってこなかった正太郎から俺はガメルから出てきたゾウのコアメダルを渡され、その戦闘のことを聞かされた

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「まさかここでビリアードを楽しむことになるとはな・・・」

「いいじゃない。仕事のないときは勝手に遊んでいいって言われたんだから」

夕食を終えてから1時間ほどが経って俺とアリアはビリヤードをしていた。正太郎と陽も誘おうとしたが・・・ミュージアムとのメモリの相談の電話をしていたので止めておいた。アンクももうしばらく資料を探してみると言っていたので来てくれなかった。

「えいっ！」

アリアがキューで球を突く瞬間、メイド服のサイズのせいでアリアの胸が見えそうになってしまったので俺は後ろに回ると・・・こちらにいてもスカートに問題があることに気づいた。・・・これほどまでにメイド服が危険なものだとは・・・

「っ！」

俺は座っていたイスを立ち上がると・・・ジャンヌから貰った役に立ちそうもない絵がポケットから落ちてしまった。

「何か落ちたわよ・・・ふふっ何この絵！あんた絵、下手ねぇ」

アリアは折りたたんでいた絵を開くと含み笑いをした。

「俺が描いたんじゃない！」

俺はジャンヌから聞かされたことをアリアに説明した。

「じゃあブラドはアークっていう怪物に変身もできるってわけね？」

「ああ、アンクの話じゃあ確実に今の俺じゃ倒せないらしい」

アンクの話じゃガメルのコンボを使わないと何ともならないらしいが・・・正太郎達のおかげであと1枚・・・サイのメダルでコンボのメダルが揃うんだ。そしてガメルは俺の持つメズールのコアを探しているってことは・・・うまくいけば勝機があるかもしれないな。

「その顔、何か考えがあるのね。話してみなさ・・・」

ガガァァァン！

突如雷が鳴り響くと電気が消えてしまいアリアは涙目で振るえ始めた。・・・まったくこいつは・・・。

「大丈夫だって。俺がそばにいてやるから・・・」

「う、ううう・・・」

さて・・・アリアをリラックスさせるには・・・アイツだな。

「トラくん！出番だ！」

『ガゥ！』

俺の掛け声でアリアのポケットからトラカンが出てくると勝手に変形してアリアの肩に乗った。

「トラくん・・・」

『ガゥ、ガゥ！』

アリアの涙が少しずつ収まってきた。・・・グッジョブだぞトラくん！

「あ、また電気がついた」

正太郎がなんとかしてくれたんだろうな。それに雷も止んでるし・・・アリアのほうも心配ないだろ。

そしてそれからさらに時間が経ち俺らはバッタカンの通信機能を使って理子に中間報告をしてから作戦を考え・・・そして作戦実行前日となった。

「本日は山形牛の串焼き、ゆず胡椒添えです」

「いやぁ、今日もおいしそうだ」

そういえばこの人は毎日肉だけでいいなんてずいぶん偏った食事をしているよな。肉だけでいいっていう注文だったから作っているが・・・栄養バランスは大丈夫なのか？・・・そんなことも考えるが聞いてみようとは思わない。あくまで執事ですから。

「・・・・・・・」

アンクは「どうぞ」とかを言うのが嫌なようで無言でワインをグラスに注ぐ。・・・まぁ、見慣れた光景だ。

「～～～～」

小夜鳴は何だかよく分からない言葉でしゃべった。

「あら、ルーマニア語ですね」

「そうです。よく分かりましたね神崎さん。語学も得意なんですか

？」

「昔、ヨーロッパで武偵をやってまして・・・先生こそどうして？」

「この屋敷のご主人がルーマニアのご出身でして・・・そのやりとりでね」

ブラドはルーマニアの出身か。・・・ルーマニアと言えば・・・渉の父親は今そこで仕事をしているって聞いたな。・・・まぁ、関係ないか。

「神崎さんは何ヶ国語できるんです？」

「えっと・・・17です」

17ヶ国語も話せるのか。俺なんて日本語以外に学校で習った程度の英語しかできないぞ。

「すばらしい！ぴったり同じです！・・・あの美しいバラと・・・」

庭には赤いバラがたくさん咲いていた。

「あれは私が品種改良したもので17種類のバラの長所を集めたものなんです。まだ名前をつけていなかったのですが・・・アリアと名づけるのはどうでしょう？」

「まぁ・・・」

アリアは少しうれしそうな顔をするのを見て・・・俺は居心地の悪さと共に、どうして衛生科の臨時講師が品種の研究をしているの

か疑問を感じた。そして深夜、再び作戦の会議を始めた。

『それじゃ一番小夜鳴先生と仲良くなっているのは誰なの?』

「アリアだな」

小夜鳴のバラに自分の名前をつけてもらっていたし・・・

『そんじゃアリアは小夜鳴先生を引き付ける役ね!そんできーくんとアンクは潜入をしてしょーくんとライトは怪しまれないようにいつもの仕事をしていてね!』

『でも小夜鳴先生は研究熱心だから10分も引き付けられるか分からないわよ?』

『そこをなんとか15分ぐらい・・・・』

「俺が怪人の姿になれば人間の作った物なんかには感知されない。10分で十分だ」

なるほど・・・だから武偵高に入学していなくて生徒じゃなかった時にお前はアポ無しで寮に簡単に侵入できたんだなお前・・・。

『りょ〜か〜い!じゃあ、最終日の午後にね〜〜!』

理子が通信を切ると、正太郎と陽、アリアも通信を切った。

「どうしたキンジ?不機嫌な顔だぞ?」

「別に・・・どうもしねぇよ」

口にするつもりはないが・・・ただ少し・・・アリアに距離感を感じただけだ。

「まぁいい。俺はグリードの姿になって十字架を盗めばいいんだろ？」

「ああ、まかせたぞ」

そして翌日の午後5時、奪還作戦が始まった。・・・俺達のハウスキーパー勤務は午後6時まで。それまでは仕事をしていないといけないために正太郎は外の掃除、陽には中の掃除をしてもらっている。・・・そしてアリアが小夜鳴を中庭の散歩に誘っているうちに・・・

「・・・・・盗ったぞ」

「ほんと、すんなり盗りやがったな」

怪人態のアンクがあっさりと十字架を盗み出していた。・・・物凄く厳重に張り巡らされた赤外線の中を堂々と歩いて・・・。コイツってたまにすごく便利だな。

「え～、こちら鳥・・・十字架を回収した」

『美しいでしょう。有良種だけを残し、そうでない物を排除する。その繰り返しがこうした素晴らしいものを生み出すのです』

『なるほど～すごいですね』

俺は理子に通信をすると・・・アリアのほうの通信も聞こえてきた。

『人間も同じです。優秀な人間は優秀な家系からしか生まれない。そう思いませんか?』

『・・・は、はあ・・・』

少なくとも俺や正太郎は絶対に「そう思わない」というぜ。・・・ここ2週間この屋敷に居てみたが・・・やっぱり小夜鳴はどこか怪しい。・・・裏に何か隠しているような気がするな。

「そういえばアンク?あの蚊のヤミーの『親』ってだれなんだ?」

あんな強いヤミーを作るほど「血がほしい」って思う人間はおそらくどっかの病院の患者なんだろうな。

「・・・どこにも気配がないんだよ・・・今は」

「は?・・・どうゆうことだ?」

ヤミーの親には独特の気配があってアンクはグリードだからその親が分かるんじゃないのか?

「・・・この屋敷に侵入する前はたまに夜に感じていたんだが・・・俺達がここに来てからはまったく気配がないんだ」

この屋敷に来てから血を集めるヤミーの親の気配は無くなった。小夜鳴は遺伝子の研究をしてる。・・・まさか・・・な。・・・俺は一瞬頭によぎった考えを捨てた。

こうして俺たちの潜入は成功したのだったが・・・俺達はこの後、
あんな激闘が待っているなんて考えもしてなかった。

最終日（後書き）

できれば日曜日までに理子編を終わらせようと思います。・・・
それと悪役ライダー達の集まる組織にも名前をつけようと思ったのですがいい名前が浮かびません。ですから悪役ライダーの組織名にいいかもしれないと思ったら教えてください。

ブラド（前書き）

今回の後半は・・・原作の面影がほとんどないです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア×２
ゴリラコア
ウナギコア×２
チーターコア
バッタコア×２
ゾウコア
タココア

「・・・・これだろ?望みの物は」

「わ～!それだよ!理子の十字架は～～!!」

俺とアリアとアンク、そして正太郎と陽はバイクで横浜ランドマークタワーに来ていた。みなとみらい２１の中核を成すこのオフィスビルに、理子はアジトを置いているからだ。そしてその屋上に俺たちは到着するして理子に十字架を渡した。

「理子、あんたも約束を守りなさいよね!」

「くふ、アリアは理子のこと分かってな～い」

理子はそう言いながら俺にゆっくり近づいてくる。

「ねぇ、きーくん。お礼をしたいからぁ、プレゼントのリボンを解いてください」

俺はテキトーに理子のリボンを解いた瞬間だった。

ちゅっ!

「「「「っ!!」」」」

何が起きたのか、わからなかった。・・・完全に不意打ちだった。いきなり理子がキスをしてきたのだ。

「・・・悪い子だ・・・理子」

「りりりりり理子!?あんた何やって!?」

俺は一瞬にしてヒステリアモードになってしまった。そしてすぐさま理子の考えを理解した。

「ごめんねみんなぁ。理子ぉきーくんの言うとおり悪い子なの。これさえ戻ってくれれば、理子的にはほしいカードは全部揃っちゃったんだよね」

理子はそう言いながら首に掲げた十字架を俺達にちらつかせる。

「理子のシナリオには無駄はないの。きーくん達を使って十字架を取り戻して・・・そのまま二人を倒す。きーくんも頑張ってね。せっかく理子が始めてのキスまで使ってお膳立てをしてあげたんだから!!」

俺はゆっくりと理子から離れると正太郎達が銃を抜こうとしたのを止めた。

「正太郎、陽、それとアンクも下がっていてくれ。・・・どうやら理子は俺とアリアだけに相手をしてもらいたいらしい」

「・・・分かった」

正太郎と陽が下がるとアンクも下がってくれた。

「風穴開ける前に教えなさいよ。何でそんな十字架をほしがっていたの?ママの形見って理由だけじゃないわよね?」

アリアは理子に銃を向けながら質問をする。

「・・・アリア、腐った服と泥水しか与えられない狭い檻の中で暮らしたことってある？・・・ふざけんな！！あたしはただの遺伝子かよ！！数字かよ！！あたしは数字の４かよ！！あたしは理子だ！！峰・理子・リュパン４世だ！！５世を生むための機械なんかじゃない！！」

アリアは理子の気迫に驚いたらしく少し後ろに下がった。

「この十字架はリュパン一族の秘宝・・・だからブラドに捕まってた間もこれだけは絶対に盗られないように口の中に隠していたんだ」

理子の髪の毛がゆらやらと蛇のように動かし始めた。

「ある夜あたしは気づいた。この十字架は・・・この金属は理子に力をくれる。そして理子はある夜、檻を抜け出したんだよ・・・この力で・・・」

ジャキ！

理子の左右のテールが隠し持っていた大振りのナイフを握った。そして両手には銃・・・アリアとは違った意味の双剣双銃の姿だ。

「理子はお前達を倒して・・・理子は今日・・・曾御爺様を越える！！それを証明して・・・自由になるんだ！！」

バチバチッ！

理子がそう叫んだ瞬間、小さな雷鳴の音が聞こえた。

「なんで・・・お前が・・・・」
ドサッ
理子はのめりこむように前に倒れると・・・暗闇の中から一人の男がゆっくりと歩いてきた。
「小夜鳴・・・先生？」
ガチャン
アリアに名前を呼ばれた小夜鳴は足元にスタンガンのようなものを捨てた。
「動かないほうがいいですよ。みなさんが余計なことをすると襲い掛かるように仕込んでいます」
「「ガルルルル」」
俺達を取り囲むようにコーカサスハクギンオオカミが数匹やってきた。・・・この前の保健室の襲撃も小夜鳴の仕業だったってことか。
「まったくレキさんの優秀さには驚きましたよ。やはり強引にでも血を貰っておくべきでしたね」
血を貰う？・・・どうゆうことなんだ？
「保健室のこともお前の演技だったってことか」
「みなさんの学芸会よりは良かったと思いますよ？」

最初からバレバレだったってことか・・・。

「それに比べてリュパン４世・・・君は相変わらずですねぇ。・・・遺伝子とは気まぐれなものです。父と母の長所が遺伝すれば有能な子、短所が遺伝すれば無能な子になります。この子はその後者の見本ですね」

ゲシッ！

「うっ！？」

小夜鳴は理子の腹部を足で踏みつけた。

「１０年前・・・私はブラドに頼まれてこの子の遺伝子を調べましたが・・・」

「い、言うなっ！！」

「この子にはリュパンの優秀な遺伝子が引き継がれていない。この子は遺伝学的にはまったくの無能だったんですよ！」

理子がその言葉のせいで泣き始めると・・・小夜鳴は理子の髪の毛を掴んで俺達がすり替えておいた偽者の十字架を取り出した。

「またしても無能ということを証明してくれましたね。４世さん！！」

ドサッ！　ブチッ

小夜鳴は理子を仰向けにすると十字架を理子から奪い取った。

「人間は遺伝子で決まる。優秀な遺伝子を持たない者は、どんなに

努力をしても無駄なのですよ。今のあなたのようにね！！」

「～～～～～！！？」

小夜鳴は偽者の十字架を理子の口の中に無理矢理入れる。・・・ふざけやがって・・・どうしてそこまで理子を罵る。

「あなたにはこっちのガラクタのほうがお似合いなんですよ！」

小夜鳴はさらに理子の顔面を何度も踏みつける。

「もう我慢なんねぇ！！」

「正太郎！気持ちは分かるが今、動いては駄目だ！！」

「・・・くそっ！」

正太郎は小夜鳴に殴りかかろうとするが・・・狼がいるため陽は正太郎を止めた。

「うまくいったと思いましたか？わざと一度盗ませてあげたんですよ！あなたを絶望させるためにね！」

「・・・もう・・・許して・・・」

「いいかげんにしなさいよ！！理子をイジメてなんの意味があるのよ！！」

アリアは甲高い声を上げて叫んだ。

「絶望が必要なんですよ。・・・ブラドを呼ぶためにはね・・・ああ！いい感じになってきましたねぇ！！」

眼鏡の奥の小夜鳴の眼が細まった。

「遠山君・・・それと明智君・・・よく見ておいてくださいよ。私は人間に見られているほうが掛かりがいいものでしてね！」

あの切り替わる感じを俺達は知っている。・・・あれはまるで・・・ヒステリアに切り替わるみたいじゃないか。

「そうですよ遠山君！これがヒステリア・サヴァン・シンドローム！」

言いやがった。よりにもよってアリアの前で・・・でもアリアはその意味が分からず首を傾げているから大丈夫そうだが・・・。

「ふふ、ハハハハハハッ！！」

小夜鳴の身体は・・・どんどん人間のものとは思えない姿にと変わっていく。

「まさか・・・あんたがブラド！！」

「少し違いますねぇ。私はブラドの中の大量の遺伝子によって作られた外側の人格なのですよ。人間に擬態するための人格・・・さあ彼が　きたぞ！」

バァァァァァン！

轟く雷鳴と共に小夜鳴の姿は完全に人間の面影をなくした。・・・・
その姿はまるで・・・

「狼男かよ・・・」

正太郎の言うとおり全長2メートルは軽く超えている狼男となった。・・・あのジャンヌの描いた絵・・・下手だが嘘じゃなかったな。

「キンジ！あいつがヤミーの親だ！どうやら擬態して気配を消していたらしい！！」

「ヴヴヴヴヴゥゥゥ」

「キンジ！援護して！」
ドンドンドン

アリアはブラドに向かって銃を連射するが・・・すぐに銃弾は抜け落ち傷が回復していた。

「・・・まずはあの狼を何とかしよう」
ドン！ドン！ドン！

俺は拳銃を取り出すと狼たちの背中に銃弾をかすめて神経を麻痺させた。・・・まぁ、レキの真似事だけどな。

「ブラド！ママに着せられた９９年分はあんたの罪を絶対に逮捕して証言台に引きずりだしてあげるんだから！！」
ドン、ドン、ドン！

「俺を逮捕するだと？・・・おもしろいことを言うじゃねぇかホームズ家の娘。せっかくだ、お前の血も貰おうか？」

アリアは再び銃を連射してみるも・・・やはりすぐに回復されてしまう。そしてゆっくりとブラドはこちらに歩いてきた。

「ブラド・・・ルーマニア・・・吸血・・・そうゆうことだったのね。あんたの正体はドラキュラ伯爵！！」

ドラキュラだと！？・・・空想上の化け物だと言いたいが・・・いろんな怪人がいるんだからいたっておかしくはないな。

「・・・初めまして・・・だな、日本語ではよぉ。ひさびさに暴れさせてもらうぜ・・・変身！」

ブラドが上を向くと置物だと思っていた変なデザインの蝙蝠が飛んできた。

「あれは！？キンジ！！急いであの蝙蝠の動きを止めろ！！」

『もう遅いよどろろ～ん！へんし～～ん！』

白いタレ目の蝙蝠はブラドの腰に出現したベルトに逆さに止まった。するとブラドの前に魔方陣のようなものが出現しゆっくりとブラドを通過すると・・・ブラドはまるでバフォメットと呼ばれる悪魔のような角をした3，2メートルほどの姿に変わった。

「ひさびさの変身だぁ。ちょっとは足掻いてみろよお前ら」

ブラドが変身してしまったアークは理子の頭を摘み上げる。

「ちっ！最悪な展開だぞ・・・キンジ！急いで変身しろ！！」

アンクは怪人態に変わると変身するように言ってきた。

「正太郎、陽・・・Wに変身してくれ。・・・俺一人じゃどうにもならない」

「ああ、いくぜ陽！」

ガリっ

『ＪＯＫＥＲ』

「・・・まるで仮面戦士のような姿をしているね」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

正太郎はコーヒー飴を噛み砕きダブルドライバーを腰につけると2人はメモリを起動する。

「「変身！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

二人はWに変身するとすぐさま倒れる陽の身体を受け止める。

「今回はちゃんと受け止めれたね」

「当然だろ・・・いくぜ？」

Wは変身してアークに向かっていこうとしたその時だった。

「ハァァァッ！」

バチン！

「うわっ！？」

Wは突如奇襲してきたヤブカヤミーのレイピアを喰らってしまった。

「くそっ！この前の蚊か！！・・・変身っ！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はすぐさまオーズに変身して展開したトラクローを振るうが・・・ヤブカヤミーはあっさりと避けた。

「血を持ってきたぞ」

ヤブカヤミーは集めた幾つかの血をそれぞれ結晶化したものをアークに渡すとアークはそれを胸に押し当てるように吸収した。

「・・・一つあまり優秀じゃねぇのが混ざってんぞ！！虫けらが！！」

ブンッ！

「うおっ！？」

ドオォォォォォン！

アークはその巨大な拳をヤブカヤミーに振り下ろして1撃でヤミーを倒してしまった。・・・うそだろ？・・・俺と剣崎があんなに苦戦したんだぞ・・・。

「きーくん・・・アリア・・・助けて・・・・」

アークに掴まれたままの理子が・・・俺達に向かってそう言った。

「キンジ・・・俺達があいつを引き付ける。・・・理子を助けたら陽の身体と理子を安全な場所に頼む」

「分かった・・・アンク！！」

「ほらよ！！」

パシッ！

俺はアンクからジャリバーを受け取るとすぐにセルメダルを1枚入れる。

『シングル・スキャニングチャージ！』

「セイヤッァァァ！！」

ガギンッ！

アークの右腕にジャリバーを振り下ろしてみたが・・・その鎧には1枚程度のセルメダルの力では傷一つつけられなかった。

「こいつでどうだ？」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

Wはルナトリガーに変わるとすぐさまトリガーマグナムにトリガーメモリをセットする。

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「トリガーフルバースト！」」
ドドドドドドッ！

「きかねぇな・・・かゆいくらいだぜ？ゲララ！」
Wの大量の光弾すらも耐え凌いだアークには余裕すら感じられる。

「この女がほしいのか？こんな失敗が欲しいならくれてやるよ」
ブンッ！

「理子っ！！」
理子はアークによって空に放り投げられた。あんな高さから生身でここに落ちれば確実に死ぬぞ！

「くっ！？」
俺はバッタレッグのジャンプ力で跳び上がり理子を受け止めて着地すると、すぐに陽の身体も抱えて隣のビルの屋上に跳んだ。

「餓鬼ども・・・遊び方ってものを教えてやるよ」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』
Wはメタルシャフトでアークのパンチを何とか防ぎ、アリアは銃で攻撃、アンクも空中からある程度加減している様子の火弾を放っている。アンクは俺たちが近くにいたら細大火力を出せない。・・・俺もすぐに戻らないとな。

「理子・・・ここにいろ」

俺はゆっくりと理子達を降ろして戦いに向かおうとすると・・・
俺の左腕が理子に掴まれた。

「キンジ・・・今すぐアリア達を引かせて。・・・ブラドは強い・・
・強すぎる。今のキンジだって勝てない。過去にそれは証明されて・
・・」

「・・・理子、伝説は塗り変えるものだよ」

俺は昔、師匠・・・みたいな人からの教えを理子に伝えると十字
架を理子の手に置く。

「取り戻しておいた。さっき理子を助けたときにね」

「キンジ・・・・！」

理子はこれまでには見たことのない表情で微笑んだ。・・・ジャ
ンプしたときにさり気なく落ちていた偽者とすり替えてやったんだ。
・・・ホントよくできたな。・・・ヒステリア・オーズの俺。

「あんな怪物を放っておくわけにもいかない。・・・理子、自由が
ほしいんだろ？」

「うん。・・・でも・・・あいつに勝てるはず・・・」

「お前は泥棒だろ？自分の自由が奪われたままでいいのか？」

「そんなの嫌に決まって・・・！！」

「だったら俺達がアイツを倒してお前の自由を取り戻す！！」
『ライオン！トラ！バッタ！』

俺はオーズ・ラトラバに変わると再び戦いの場に戻っていった。
目の前で助けを求める命がいたら・・・どんなに勝ち目がなくても、
たとえヒステリアじゃない俺でも助けに行く。・・・二度と後悔し
ないためにな。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「俺のヤミーの気配が消えた？・・・あの上に向かった瞬間にだと
？」

ウヴァはヤブカヤミーの気配が一瞬で消えたことが気になりW達
がアークと戦っている屋上にやって来るとその戦闘を眺めていた。

「・・・なるほど・・・アークの巻き添えを喰らったということか・
・・それならば納得だ。・・・近くにオーズもいるな。・・・せい
ぜい潰しあって貰おうか」

そこに　さらに・・・

「あれぇ？アークだぁ。それにウヴァもいるぅ。ウヴァも、メズー
ルのメダル、取り戻しに来たのかぁ？」

「うっほっ？」

ガメルとゴリラヤミーもやって来てしまった。

ブラド（後書き）

悪役ライダーの組織名も、４巻の内容に入るまでもうしばらく募集します。２つ目のアイデアも出していいので思いついたら教えてください。ちなみに悪役ライダー、先輩ライダーは常に募集中です。

自由を掴み取れ（前書き）

今回は原作要素がだいぶ少ないです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア×２
ゴリラコア
ウナギコア×２
チーターコア
バッタコア×２
ゾウコア
タココア

自由を掴み取れ

『トリプル・スキャニングチャージ！』
ピカッ！

「セイヤァァァァ！」
ザンッ！

俺はW達の所に戻るとライオネルフィッシャーでアークの視界を制限しながらメダル3枚のジャリバーの次元斬で斬りかかろうとしたが・・・

「おっと！？・・・こいつはあたるとあぶなかったかもな・・・」

あの図体でしゃがんで避けられた。・・・何であの大きさであんな動きができるんだよ？

「キンジ！逃げるぞ！ラトラーターで熱線を放射して怯ませろ！」

・・・悪いなアンク。俺は逃げるつもりなんてない。ここでブラド・・・アークを倒すつもりだ。

「いや、コンボはもうしばらく温存する！次は・・・」
『タカ！ウナギ！ゾウ！』

「セイヤッ！」
ドンッ！

俺はオーズ・タカウゾに変わるとアークの両肩に電気ウナギウィップを巻きつけて跳び上がりゾウレッグで両脚蹴りをした。

「ぬるいなぁ・・・蹴りってのは・・・こうやるんだよッ！！」

ドカッ！

「ぐふっ！？」

アークのかかと落としをまともに喰らってしまった俺は意識が飛びそうになったが何とか堪えた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「おいおい、こんなんで終わりか？」

こんなところで終わってたまるか！・・・そうは思っているが・・・さっきの一撃のせいで立っているのがやっとだ。

「じゃあこいつでどうだ？」

ブンッ！

「キンジ！？」

アリアが俺に向かって叫ぶと共にアークが拳を振り下ろしてくるが・・・今の俺じゃかわせないな。・・・今の俺じゃあだけどな。

ドォォォォォン！

「死んだか？ゲララッ！」

アークの拳が地面にめり込んだ。・・・まぁ、俺にはあたってな

いけどな・・・

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「無事か相棒？」

「ふぅ、助かったぜ矢車」

俺はキックホッパー・・・矢車の高速移動に助けられた。・・・

このビルに来る前に念のために呼んでおいて助かったぜ。

「・・・お前、今相棒を笑ってたよな・・・俺も笑ってくれよ」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

「ライダー・・・反転キック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ドカッ！

キックホッパーはアークに反転キックを決めるが・・・

「ぬるいぜ？」

「・・・何？」

ガシッ！　ブンッ！

それほどダメージはなかったようで左脚を掴まれて振り回される。

ドンッ！！

「ぐはっ！？」

「矢車！！」

キックホッパーは凄い勢いでアークの足元に叩きつけられてしまった。

「まぁ、今のは少し効いたな。・・・まぁ、ジャブ程度だがな！ゲララ！」

「くそっ！俺らの力じゃどうにもならねぇのかよ！？」

正太郎にも焦りが見え始めた。・・・いったいどうすればコイツを倒せる？・・・考えろ！考えるんだヒステリアの俺！

「作戦とかはそれっぽっちか？じゃあ、次は誰の番だ？・・・ヴヴヴオヴォォォォォ！！」

アークはまるで狼の遠吠えのようにいきなり吠えた。・・・そしてその遠吠えにより、辺りの空気を震わせるほどの〝音〟が俺達を襲った。

「キャァァァァァ！？」

「アリア！！」

『タカ！ウナギ！タコ！』

俺はタカウタに変わり、タコレッグで足元に張り付きながら吹き飛ばされそうになったアリアの手を掴む。・・・この怪物の咆哮はおそらく数百メートルは響いているんだろうな。

「ドラキュラが吠えるなんて聞いてないわよ！！」

「オォォォォォズゥゥゥゥゥ！！」

「なっ！？・・・ぐはっ！？」

咆哮が鳴り止んだと思った矢先にどこからともなくガメルが俺に体当たりをして来た。そして俺はウナギのメダルが吹き飛んでしまったせいで変身が解除された。

「やったよ、メズールぅ。俺、メダル、取り返した！」

「うっほほっ！」

ガメルはウナギのコアメダルを拾うと喜んでいるような反応をしていた。

「・・・相棒！？・・・貴様らも今俺の相棒を笑ったなぁ！！」

キックホッパーは再び戦いの場に戻ってくるとゴリラヤミーに跳び蹴りをして、ガメルに回し蹴りを決める。

「ゲララ！よくわかんねぇ奴らも来ちまったけどおもしれぇ！それよりどうだヒステリアの血を持つ血族！おもしろいことになってんだろ？」

「「っ！！」」

アークの言葉で俺と正太郎は身体に気づいた。・・・この感覚はまさか・・・ヒステリアモードが解除されている！？

「くっそぉ！」
『ＨＥＡＴ　ＴＲＩＧＧＥＲ』
「正太郎！？落ち着くんだ！正太郎！」
Ｗはヒートトリガーに変わると高威力の火弾をアークに浴びせる。
・・・正太郎もおそらく俺と同じことに気づいているからあせっているんだろうな。
『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
「ぐおっ！？」
Ｗはトリガーマグナムからコンクリートが溶けてしまうほどの熱の火炎放射をアークに浴びせる。アークにもさすがダメージはあるようだが・・・決定打には至らない。
正太郎も分かっているはずだ。あいつはヒステリアの原理を理解して変わることができるのなら解除することも可能だったっていうことに・・・ましてやそんなピンチにグリードまでやってきたんだ。正太郎も取り乱す気持ちも分かる。
「くっ！！」
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』
「キンジ！？」
俺はＷの放った火炎放射が終了した直後にトラクローで攻撃を仕

掛けに行こうとしたが・・・

「ゲラララッ！」
ドカッ！

「ぐっ！？」

アークはどこからともなく出現させた三叉槍で俺を弾き飛ばした。

「ちっ！・・・キンジ！！」

「おっと！お前はいかせるかよ！」

アンクは俺を助けようと翼を広げたがアークに妨害されたのが見えた。・・・そして俺はメダルがベルトから弾け飛び変身が解除された状態でワイヤーを引っ掛けるヒマもなく２９７メートルのビルの上から俺は地上へと落下する。

「いい加減しつこいぞ虫けらが」

「「うわぁぁぁぁ！？」」

正太郎と陽の悲鳴と共にダブルドライバーが落ちてくるのが見えた。・・・あいつ等も変身解除されちまったか。

「くっ！？」
ガシッ

俺はビルの壁を掴もうとしてみるが・・・やっぱり勢いが強すぎて掴めない。・・・諦めかけたその時、隣のビルから飛び降りてき

た人影が見えた。

「うぅぅぅ！」

ばさっ

理子は俺の手を掴むと制服をパラシュートのように広げて蛇のように動く髪の毛でその動きを操作し始める。

「助かったよ、理子」

「このまま逃げよう、きーくん！勝てるはずがないんだよ・・・ブラドには絶対に勝てない・・・だから・・・」

理子、悪いけどやっぱりそれはできない。

「そのブラドと戦っているあいつ等はどうする・・・俺は最後まで諦めない。アイツを倒して理子の自由も取り戻して、アリアの母さん・・・かなえさんの罪を軽くする！」

「そんなの・・・欲張りすぎだよ・・・できるはずがないよ・・・」

「ああ、そりゃ欲張るぜ・・・人間だからな。だから理子、お前も欲しいものに手を伸ばせ！その手で自由を掴み取れ！お前は数字じゃないだろ！峰・理子だろ！！お前の信念を貫けよ！！」

アンク・・・今ならクスクシエで言っていた意味、はっきりと分かるぜ。

「・・・きーくん、私の名前を呼んで・・・」

「・・・・理子」

「もう1度呼んで！」

理子は俺に抱きつきながらさらに呼ぶように言ってくる。・・・・何度でも呼んでやるさ。理子は理子だからな。

「理子！」

「呼んでっ！！」

「理子おぉぉぉぉぉぉぉ！！」

俺は上で戦っているアリア達にも聞こえそうなぐらいの大声で理子の名前を叫んだ。

「そうよ・・・私は理子よ。・・・峰・理子よっ！！」

ビュウゥゥゥゥゥゥ

理子が自分の名前を叫んだ瞬間、突如として発生した上昇気流に乗ってパラシュートがビルの上まで上がった。・・・その瞬間・・・弓のような武器を持った黒い仮面戦士が俺達の真下に見えたような気がした。

「・・・頼まれたことはやった。・・・そろそろ俺は帰るぞ・・・天音ちゃんが待っているからな」

「ああ、わざわざご苦労。・・・さて、そろそろアークの鎧を盗み出したおバカな子犬君のしつけをしにいくか」

『ありがたく思え』

俺は気づかなかったが・・・その黒い仮面戦士の隣には水色のスーツを来た茶髪の男と黒と紅色をした怪しげな蝙蝠が飛んでいた。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「さぁて・・・この状況をどうするかだな」

「オォォォォォズぅぅぅ！」

「ヴォォォォズ！！」

ダブルドライバーが吹き飛ばされてしまった正太郎はひとまずジョーカーに変身してガメルと戦っていた。そのすぐ近くではキックホッパーがゴリラヤミーと戦っている。

「くそ、キンジのバカ・・・だから逃げないとやばいって言ってたんだよ！」

「何言ってんのよ！ブラドを捕まえないとママの冤罪を証明できないでしょ！！」

ドン、ドン、ドン！

アリアとアンクは炎や銃でアークを攻撃するが大したダメージは

ない。

「あのバカ、俺のメダルを落としやがって・・・」

アンクの右手には俺がさっき吹き飛ばされたときに落としてしまったタカのコアメダルが握られていた。

「とっとと後の2枚を回収しないとな・・・・」

「そらぁっ！！」

ブンッ

「おっとっ！？」

ドガッ！

アンクはブラドの持つ三叉槍を飛んで回避すると残りのトラとバッタのコアも掴もうとした。・・・しかし・・・

「・・・こいつは頂いていくぞ」

パシッ！

「なっ！？」

突如現れたウヴァにその2枚を横取りされてしまった。

「もう一枚のコアメダルも取り戻したいが・・・この場所に長居することは完全態ではない俺では得策でないのでな・・・じゃあなアンク」

「待ちやがれウヴァ！！」

バチィィィィィ！

「・・・・チッ！」

アンクはウヴァを追いかけようとするがウヴァの放った雷を防いだ後にはその場から立ち去って行こうとした。

「させるかぁぁぁぁ！！」

ゲシッ！

「なっ！？」

そこに俺は理子のパラシュートから飛び降りるとドロップキックをウヴァの頭に決めてやった。

「キンジ！無事だったのね！」

「・・・死ぬかと思ったが理子が助けてくれたんだよ」

「そんなことはいいから戦えキンジ！！」

チャリン！

アンクは俺に向かって先ほどのタカのコアメダルを投げつけてきたので俺はそれをキャッチする。すると理子もパラシュートを手放して俺達のところに着地をした。

「理子・・・お前のプライドの重さ・・・ブラドに見せ付けてやろうぜ？」

「当然だよきーくん！」

「変身！」
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』
俺はオーズに再び変身をするとタカヘッドの複眼を紅く輝かせる。
・・・狙いは決まっている。
「ハッ！なるほどなぁ！虫頭！お前はいい加減ジャマなんだよ！！」
「うおっ！？・・・覚えてろ！！」
アンクの炎の攻撃が直撃したウヴァは身体からかなりの数のセルメダルを出しながらも逃亡していった。
「コアメダルが減るのは悔しいが・・・今は生き残らないとな。命がなくなったら元も子もねぇ」
たしかにアンクの言うとおり死んだら何にもならない。・・・たしかにアークやグリード・・・いや、怪人達と戦うのに「死ぬかもしれない」なんてことはいっつも思うことがだが・・・こんな奴らのせいで誰かが死んでしまったりして誰かの涙なんてみたくない。逃げ出したら、その分誰かが傷つくから・・・そうなったら俺は絶対後悔してしまう。そうさせないためにも俺に必要な力が欲しい。だから・・・
「オォォォォォォズぅぅぅぅぅ！！」
ドカッ！
「・・・俺も欲しいもの・・・掴み取ってやるよ」

俺は体当たりしてきたガメルの攻撃をあえて避けずに喰らいながら・・・ガメルの中にあるサイのコアメダルを掴み取った。

自由を掴み取れ（後書き）

次回はブラド・アーク戦、クライマックスです。一応理子編の戦闘シーンは終わらせようとは思っています。

豪腕重力（サゴーゾ）（前書き）

申し訳ありません。４日から６まで更新ができない分、土日は２話更新したかったんですけど・・・うまくできそうにありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

豪腕重力（サゴーゾ）

「セヤッ！！」
チャリン、チャリン！

「う、ううメダルが・・・」

俺はガメルからサイのコアメダルを引き抜くとガメルは肩だけセルメン状態だったのが上半身すべての鎧がセルメダルとなり散らばった。

「これでガメルの3枚・・・コンボのメダルが揃ったぞ」

「ハッ！上出来だ！とっととコンボを使ってこの状況をなんとかしろ！！」

言われなくてもそうするぞ。・・・俺はタトバのメダルを抜き取るとガメルの3枚のメダルをベルトに入れてスキャンをした。

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーゾ・・・サッゴォォゾォ！！』

「フンッ！」

俺の姿は頭部が赤い複眼のサイヘッドに、腕がゴリラアームに、足がゾウレッグに変わり重量感溢れる灰色の戦士になった。オーズ・サゴーゾコンボだ。

「ウオォォォォォォォォォォ！！」
ドォン！　ドォン！　ドォン！

サゴーゾコンボに変身した俺はゴリラのドラミングのように胸部を叩く。

「ゲララ！何をやってんだ。そんなんじゃ俺はた・・・うおっ！？」

「えっ？何？地震！？」

俺のコンボの力で大地が揺れる。そしてコンクリートが割れるとその一部が宙に浮かんだ。・・・なんとなく分かったぞ。このコンボの能力は衝撃波で重力を操るのか。

「うわぁ、おい、お前も逃げ・・・」

ガメルはゴリラヤミーとこの場を離れようとしてるけど・・・悪いがそんなことさないぜ。あいつ等がな。

「させるかよ・・・」

「ライダーキックだ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「うほっ！？」

ドオォォォォォン！

ゴリラヤミーはジョーカーとキックホッパーのダブルキックで爆

発した。

「あぁ、俺のヤミーぃ！うぅ、メズゥゥウルゥウ」

自分のヤミーがやられたのを見たガメルは慌てて立ち去っていった。

「ウオォォォォォォ！！」

「何っ！？」

あの図体のアークでさえ重力には逆らえずに宙に浮かんだ。

「あんなデカいのまであんなに浮かばせるのかよ・・・・オーズの力ってのは・・・」

「・・・さすがだな相棒」

ジョーカーとキックホッパーもその光景に驚いている様子だ。

「貴様！虫けらの分際でぇぇぇ！！」

ブンッ！

アークは浮かびながらも俺に向かって拳を振り下ろしてくる。けれど今の俺なら・・・

「フンッ！」

ガギン！

「なっ！？・・・俺の拳を止めるだと！？・・・ぐはっ！？」

俺はアークの拳を拳をぶつけて相殺すると重力操作を1度やめてアークを地面に落下させた。

「キンジ！そのまま決めちまえ！」

「分かってる！」

『スキャニングチャージ！』

「ハァッ！！」

ドォン！

俺は垂直に跳び上がり着地の衝撃と共に灰色の3つのリングでアークをコンクリートの足元に捕縛する。

「何だこりゃ！？くそ！動けねぇ！」

捕縛されたアークは身動きが取れない状態で俺の手元に引き寄せられてくる。

「やっちゃいなさいキンジ！」

「決めちゃえきーくん！」

アリアと理子も俺を信じてくれているんだ。・・・絶対にこの一撃を決めてやる。

「セイヤァァァァァ！！」

「ぐあぁっぁぁぁ！？」

ドオォォォォォン！

俺はサイヘッドによる頭突きとゴリラアームによる両腕のフックパンチをアークに叩き込んだ。

「はぁ・・・はぁ・・・くっ！？」

うつ伏せのアークを確認した俺はコンボの反動で変身が解除されてその場に膝をつけてしまった。

「まったく・・・無茶をしたな」

「・・・何とかなったんだからいいだろ？」

アンクの差し伸べてきた手を掴んで立ち上がった俺はアリア達のところに戻ろうとした瞬間だった。

「ヴアァァァァァ！！」

「なっ！？こいつまだ動けるのかよ！？」

アークは勢いよく立ち上がると腰の蝙蝠が黒い笛を加えていた。・・・サゴーゾコンボの必殺技まで決めてやったのにまだ立てるのかよコイツ！

「ヴァァァァァ！！」

『ウェイクアップ！』

胸部の鎖が弾け飛んだアークは月に浮かび上がった怪しげな眼を身体に取り込み始めると蔦状の物体が所どころから炎が吹き出る翼に変わる。そしてさらに蔦状の物体が巨大な腕になった。・・・も

う完全に化け物だ。

「ぐおぉぉぉぉぉ！！」

アークは辺りに火球を連続で放ってきた。その攻撃は明らかに俺たちを狙っていない。・・・まさか暴走しているのか？

「ちっ！あの野郎、力を制御できていない！昔の王みたいな破壊力はないが暴走してる分厄介だぞ！・・・チッ！レジェンドルガ族じゃない奴がアークの鎧を使うからそうなるんだぞ！！」

「どうすりゃいいんだ！」

駆け寄ってきたジョーカーはアンクを問い詰める。しかしアンクもどうすればいいのか分からない表情をしたその時だった。

「ヴァァァァ！！」

「「っ！？」」

俺たちに巨大な火球が飛んできた。・・・あんな大きいのはかわせそうにない。だから俺はコンボで疲労した身体を無理やり動かしてベルトにこの状況で最善の組み合わせを入れる。

『シャチ！ゴリラ！タコ！』

「ハァァァァ！！」

俺はシャチヘッドの水流噴射で火球の威力を軽減しながらゴリラアームで防ぎ、タコレッグで堪える。

「お前らはとっとと離れろ！アンク！アリアと理子を安全なところへ・・・」

「でもそうしたらキンジ達が・・・」

「・・・はっきり言ってこの状況で安全な場所なんてないぞ」

確かにアンクの言うとおり安全の場所は・・・ないな。俺にはもうコンボを使う体力なんて残っていないが・・・無理やりにでもコンボを使うしかなさそうだ。・・・そう思った俺はゴリラのコアメダルを抜いてウナギのコアを入れようとした時だった。

～～～～♪

「・・・バイオリンの音色？」

何処からかバイオリンの音色が聞こえてきた。・・・その瞬間・・・信じがたいことが起こった。

「月が・・・紅く・・・」

「どうゆうことよ？」

夜空がさらに暗くなると・・・月が紅く染まった。すると俺達のところに渉の変身するキバに似ているような黒い仮面戦士がゆっくりと歩いてきた。

「お前達、よくこの俺が来るまで持ち堪えられたな！」

『褒めてやろう』

「あんた・・・いったい？」

ジョーカーは突然現れたキバ？に質問をする。

「俺の名は紅音矢！２代目ファンガイアのキングにしてダークキバの鎧を継承するえっら～い人だ！」

『キバットバット２世だ』

音矢と名乗った黒いキバ・・・ダークキバはその後に「いずれ全世界全ての教科書に載る男だ」と付け足した。・・・なんかめんどくさそうな人が来たな。

「さて・・・１２０年前、未熟だった俺からアークの鎧を盗み出した盗人の子犬君よ・・・今、ここで絶滅せよ」

『ありがたく思え。絶滅タイムだ』

ふざけた雰囲気が一瞬にして辺りに恐怖を振舞う雰囲気に変わったと思えば、ダークキバは怪しげな煙から禍々しいオーラを放つ一振りの剣を取り出した。

「キングであるこの俺が直々に葬ってやる。ありがたいと思え」

チャキ

「ヴォォォォ！？」

ダークキバがアークに剣を向けた瞬間、無数の剣がアークを取り囲んだ。

「えっ！？ちょ、これ、どうなってんのよ！」

「アンク！何が起きてんだ！」

俺とアリアはおそらくは知っているだろうアンクに聞く。

「あの技は知らないが・・・あの剣はザンバットソード。ファンガイア族の王家に伝わる宝剣だ・・・そのことから考えると、おそらくあの技はその宝剣を触媒にして魔族の持つ‘魔皇力’で作り上げた魔法の剣・・・と言ったところだ」

なるほど・・・さすが８００年前に存在してたグリードだ。いろいろ知っているな。意味はさっぱり分からんが・・・そもそも魔皇力ってなんだ？

「・・・それにしてもあいつ・・・二代目だと・・・そういうことはアイツの息子なのか？・・・性格がまるで違うぞ」

アンクは何やらぶつぶつと呟いている。

「・・・どうしたんだアンク？」

「ん？・・・ああ、何でもない」

どうやらアンクの知っているダークキバとあの人は違うらしいな。

・・・アンクの知っているアイツはどんなヤツなんだ？

「ぐわぁぁあぁぁぁぁぁぁ！？」

「「「！？」」」

アークの叫びに俺達は振り向くと無数の剣が次々とアークに突き刺さっていく。・・・そして俺達があれほどまでに苦戦したアークの鎧は僅か数秒でヒビだらけになった。

「グルルルルッ!!」

「どうする2世?このまま鎧は破壊するか?俺は壊したいのだが・・・」

『いや、壊してしまえばレジェンドルガ族との関係に亀裂が走るだろう・・・壊さないほうがいい』

「ガァァァァァ!!」

ダークキバがふと判断に迷った瞬間、アークは空を羽ばたいて飛び去ろうとした。

「まずい!キンジ!追え!」

「ああ!・・・・ぐっ・・・」

俺はアンクに言われアークを追いかけようとするが・・・身体がとっくに限界を超えていたせいでその場に倒れてしまった。

「キンジ!?」

「きーくん!?」

あぁ・・・いつものコンボの後の脱力感だ。・・・もう・・・意識を保てそうに・・・な・・・い。

「くそ・・・コンボの反動か。おい、明智！それと矢車！あの化け物を追うぞ！」

「ああ！分かった！」

「・・・相棒を笑ったぶんは・・・蹴ってやる」

俺が意識を失うとアンクと正太郎と矢車は飛び去ったアークを追いかけた。するとダークキバは変身を解除すると理子の前に立った。

「・・・さて・・・リュパン家の娘。・・・たしか・・・峰・理子とか言ったな」

「・・・それがどうした？」

理子は男口調で音矢を睨みつける。

「よかったな。・・・これでお前は初代を超えたことが証明されたぞ」

「・・・え？」

音矢の突然の言葉に理子は一瞬思考を停止してしまう。

「お前達はアークは倒しきれてないにしろブラドの意識を失わせた。これはつまり、お前達はブラドに勝ったということだ。かつて俺達は逃げられてしまったが・・・峰・理子。お前は初代を超えた・・・これは事実だ」

『よかったな』

「・・・それは・・・あたしは何もしていない。やったのはほとんどキンジ・・・」

「・・・その俺がここから落ちた時に助けてくれたのは理子だろ？」

俺は意地で意識を覚醒させて起き上がると理子のほうに歩く。

「どんな形でも・・・俺達はブラドと戦った。・・・そして・・・ブラドには勝った。・・・つまり理子はアイツから自由を取り戻したんだよ」

「・・・おい2世・・・俺のセリフが捕られたぞ？」

『ほう、さすがオーズだな。キングからセリフを奪うとは』

あれ？・・・もしかして俺・・・タイミング悪かった？ファンガイアのキングに喧嘩売った？

「初代キングをも倒したオーズの力・・・ぜひとも試してみたいが・・・お前も限界だろうから今回は帰らせてもらおう。・・・アークの鎧は後日回収させてもらおう」

『キャッスルドラン・・・来い』

「ギャオォォォォォ！」

「「「っ！？」」」

突如としてやってきた城のようなドラゴンに俺達は驚くと・・・音矢とキバット2世とかいう蝙蝠はその城の中に入っていく。

「それじゃあまた会おう！息子達によろしく伝えておいてくれ！」

「「「・・・・・・」」」

こうして俺達の戦いは終わった。・・・俺、アークの鎧が暴走してからは何もできなかったな。・・・今の俺じゃコンボを一回使うだけで限界だ。・・・強く・・・ならないとな。・・・そう思いながら俺は再び意識を失った。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺が再び意識を失いかけている頃、ブラドを追いかけたアンク達の方はアークを追い詰めていた。

「正太郎！遅れてすまない！もう1度変身だ！」

「ああ！」

ジョーカーの変身を解除した正太郎は陽が拾ってきたダブルドライバーを受け取り腰につける。

「「変身！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

「よしっ！いくぜ！」

「今のアークは完全に我を失っている。意識がある時よりは攻撃があたらないからいいが・・・それでも十分に危険だぞ」

アンクはWとキックホッパーにその危険を伝える。それでもキックホッパーとWはアンクの前に立つ。

「もうブラドとかそうゆうの関係なしにコイツを倒さないと人々が危ないんだろ?だったら戦ってやるよ!」

「人々を守るために戦う。それが仮面ライダーというものだからね」

「「うおぉぉぉぉぉ!!」」

Wがアークに向かって走り出したそのときだった。

『ＵＮＩＣＯＲＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「ガァァァァァ!?」

ドォォォォォッォン!

黒いマントを纏った白い仮面戦士のスクリューパンチの一撃を喰らったアークは爆発してアークの鎧が辺りに散らばる。・・・Wの足元には真っ二つになった白い蝙蝠が転がってきた。

「・・・お前?・・・何者だ?」

「少なくとも武偵高に登録されている仮面戦士じゃないね?」

Wは突如現れた白い仮面戦士に構える。

「仮面ライダーW、キックホッパー・・・そしてここにはいないオーズ。お前達の可能性を見せた戦いに敬意を評そう。・・・なのでブラドを、一度、殺すという俺からのささやかな贈り物をしてやった。どうだ？気に入ったか？」

「・・・何だか知らない奴だがゲスなことしやがって・・・お前が殺したかっただけなんじゃないのか！」

W（正太郎）は白い仮面戦士に向かってそう叫ぶとその仮面戦士は後ろを振り向く。

「まぁ、たしかにブラドは気に食わなかったから殺そうかなと思っていたな。・・・さて、そろそろ次の予定の時間だ。・・・次に会ったときは殺し合おう。その時はお前達という作品の完成をみせてくれ」

「・・・君は何者なんだ？」

「仮面ライダー・・・エターナル！」
『ＢＩＲＤ　ＭＡＸＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

白い仮面戦士は‘エターナル’と名乗ると共に鳥のメモリをマキシマムスロットに差し込むと黒いマントを緑の翼に変化させどこかに飛び去っていった。

「あのアークの鎧をあいつ等以外に破壊できる者がいたとはな・・・」

アンクはエターナルが見えなくなるまで睨み続けていた。

俺達のブラドとの戦いは・・・俺達の納得のいかない形で終わりを告げた。

豪腕重力（サゴーゾ）（後書き）

今回はサゴーゾが初登場でしたが・・・相手が相手なのでそれほど目立った活躍はありませんでした。サゴーゾの活躍を期待した皆様、申し訳ありません。とりあえず次回は理子編のラストです。その次は登場人物の後書きにあった登場怪人を書こうと思います。

幽霊（前書き）

今回で理子編は終了です。そしてフライングである人が登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

幽霊

正太郎達が‘仮面ライダーエターナル’と出会って数時間後・・・その戦闘があった近くの川原から1人の男が上がってきた。

「まったく・・・間違いなく普通ならブラドは‘1度’死んでいましたね。アンデットと魔化魍の遺伝子を取り込んでなかったらどうなっていたことやら・・・おや?」

ブラドの擬態・・・小夜鳴は岸に上がるとそこには一人の仮面戦士・・・仮面ライダーレイが腕を組んで立っていた。

「無限罪のブラド・・・いや、今は小夜鳴と言う名前でしたよね?」

「仮面ライダーレイ・・・あの組織の使者ですか。・・・今回はどのようなご意見で?」

「あなたを我々の組織に勧誘しに来ました。・・・あなたがお望みならアークの鎧は我々が修復します」

「・・・ふふ、ハハハ!」

小夜鳴はレイの言葉で一瞬目を丸くすると声を上げて笑った。

「なるほど!たしかにあなた達の組織ならできそうだ!了解しました。私もぜひあなた達の組織に連れていってください」

俺の知らないところで・・・小夜鳴はイ・ウーとは違う第3勢力

と手を組んだ。これから俺達が対立することとなる仮面戦士の力を悪用する組織に・・・。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「今度は一週間だったか」

ブラドからの戦闘から1週間が立った。今回はあんな無茶な戦いをした後にコンボを使った上に無理をして変身をしたせいで1週間も目が覚めなかったらしい。・・・そろそろコンボに身体をならしていかないと1ヶ月目覚めないなんてことも有り得そうだ。

「そんでアリア・・・結局ブラドはどうなったんだ?」

エターナルとか名乗った謎の仮面戦士にアークがやられたってことは正太郎達から聞かされたが、その周辺にはブラドの遺体らしいものは無かったらしい。つまりブラドは生きている可能性が極めて高いってことだ。

「ブラドのことは永久に他言無用それはライト達から聞かされたわよね?」

「ああ、だいたいの内容はな・・・」

今回の泥棒のことを教務科に知らせると神奈川県警やら警視庁などから大量に書類が届いたらしい。とりあえず簡単にまとめると、

今回の窃盗については不問にするかわりに誰にもこのことを言うなってことらしい。・・・加えて俺達の戦闘はＴＶでも報道されずに落雷事故という扱いにされたらしい。・・・この国でブラドのことがどれだけタブーなことなのか思い知らされた気分だよ。

「ブラド・・・正確には小夜鳴先生の目撃証言があったわ。・・・どうやら白峰と歩いていたらしいの」

「白峰って・・・たしかこの前の・・・・」

白峰貴斗（しらみねたかと）・・・仮面ライダーレイとしてドーパントに操られいると思っていたら実際はカザリとグルで、俺の隙を突いてクワガタとチーターのメダルを奪っていった仮面戦士だ。・・・本来はイギリス武偵だったらしいのだが、半年前に行方を晦ませていたらしい。

「まぁ、分かったのはそれだけね。・・・とりあえずそろそろ学校にいきましょ？」

「ああ、そうだな」

俺はオーラインクロスに跨りアリアを後ろに乗せて武偵高に向かい教室に入ると、理子が俺達の後ろにいきなりやってきた。

「たっだいまぁ～！理子りん！月の都から帰って参りましたぁ～！」

まるで何事もなかったかのような感じの理子に一部の男子生徒や女子生徒が集まった。

「「「理子り～ん！」」」

「3週間もどこに行ってたの理子ちゃん？」

「寂しかったよ～」

「あはは、ごめんねぇ～」

ほんと・・・理子は相変わらず学校では表の理子でみんなに接しているよな。アリアも頬杖を立てているが怒っているようには見えない。とりあえず理子に話しかけてみようかとも思ったのだが俺なんかがついていけない話題になっているな。

「どうやって理子に兄さんのことを聞けばいいと思う・・・矢車・・・」

「・・・・・・・」

矢車は携帯を見つめたまま無反応だった。

「おい、矢車？」

「ん？・・・ああ、すまん」

どうやらまた仮面戦士に関係するメールでも届いたんだろうな。矢車は1人で仮面戦士絡みの事件に首を突っ込むことが多いし・・・・

「みなさん席についてくださ～い。小夜鳴先生が転勤したかわりに新しく衛生科の先生になった先生を紹介しますよ～」

「伊達昭（だてあきら）。こんだけ稼ぐために勤務することなったからよろしく！」

「「「・・・・・・」」」

「あれ？ちょっとキザだったか？」

新しい衛生科の先生は・・・人差し指を立てながらそう言ってきた。・・・なんか豪快そうな人だけど悪い人ではなさそうだな。

そして授業が終わり放課後。俺は理子に誘われたので一緒に帰ることになった。アリアはとっくに先に帰ったらしく一緒ではない。アンクは・・・授業が終わってからは見ていないな。どうしたんだ？

「もうすぐ梅雨明けだな」

「・・・そ、そうだね・・・あ」

俺が横を向いた瞬間、理子がこちらの顔を窺がおうとしてたらしく目が合ってしまった。すると理子はまるで緊張したように赤くなりながら顔を背けた。・・・どうしたっていうんだ？・・・俺も少し気まずくなりレインボーブリッチのほうを向いた。

「か、勘違いは無しだよ！理子は別にそっちの味方になったわけじ

ゃないんだから！」

「あ、ああ、そりゃ分かっているが・・・」

今はまだ・・・理子とどう接していいのか分からないな。

「でも・・・帰ったらＰＣのメールはチェックしておいて」

「は？・・・ＰＣのメール？」

「送っといた。お兄さんのこと。・・・理子は・・・約束を守る」

兄さんのことだと！？・・・俺は再び理子のほうを振り向くが、そこにはすでに誰もいなかった。・・・校舎と校舎の間に・・・派手好きな理子が描いたような虹が空に見えた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

部屋に帰るとアリアはなにやら外出の準備をしていた。

「キンジ！」

するとアリアは指ピストルで俺を撃つようなポーズをしながらウインクしてきた。なんだいきなり？何かあったのか？

「あたしも昨日理子からメールが来た時は疑ってたんだけどね！今、

理子がママの弁護士に会っているんだって！さっき連絡が来たの！」

アリアは制服を着替えずに狭い玄関で俺と押し合うようにして靴を履く。

「理子の証言を使えば差戻審は確実になるんだって！」

差戻審は証拠に問題があれば、最高裁から高等裁判所にもう1度裁判をやり直しさせれる制度だ。理子が証言してくれるおかげでそれができるようになったらしい。・・・どうやら理子は本当に約束を守ったらしいな。

「やったなアリア！」

「やった。やったわ！」

ぽふっ

アリアはその子供のような体格で俺に抱きついてきた。・・・そしてすぐさま自分のしていることを理解したアリアの顔は赤くなり、同じく顔を赤くしている俺からすぐに離れた。

「そ、それじゃ、あたしも弁護士のところに行ってくるね！」

「あ、ああ。気をつけてな」

バタン

2人して噛み噛みの会話をすると、アリアは何度かこちらをちらちら見ながら出て行った。

「・・・とりあえず・・・一息つけるな。・・・メールを確認して

みるか」

俺はＰＣを起動させてメールをチェックすると確かにメールが来ていた。なにやらデカいＦＬＡＳＨファイルも添付されたメールは・・・

『キーくんは大変なものを盗んでいきました』

というタイトルになっていて本文はなかった。しかし添付のＦＬＡＳＨファイルを見てみると音楽にのせて俺を追い掛け回す理子のアニメーションが画面に映った。

「ったく・・・回りくどいことをしてくれる」

動画の背景には時間と場所を示す文字が見え隠れしている。・・・つまりこれは招待状ってことだ。そしてアニメの最後にはカナのようなキャラクターが理子のキャラに向かって語っていた。

『キンジは大変なものを盗んで行きました。・・・あなたの心です』

・・・無駄に凝っているな。・・・ほんと。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

たしかにこれは『幽霊』だな。・・・俺は指定された場所、レインボーブリッチと学園島の間の人口浮島で目の前の人を見てそう思

った。

『狼と鬼と幽霊に会う』

それが白雪の言っていた占いだった。レキの手懐けた『狼』にブラドという吸血鬼という『鬼』・・・そして出たよ・・・『幽霊』が・・・・

『キィィィィ！』

ロングスカートのワンピースを着たカナの後ろには・・・白鳥のような契約モンスター『ブランウイング』が飛んでいる。・・・最初は理子の変装かと思っていたがそうではなかったらしいな。・・・間違いない。どうやら本物のカナのようだ。

ヒステリアモードのトリガーは性的興奮。俺達のご先祖様である遠山の金さんはやわ肌をさらすことで性的興奮ができた人だったらしい。つまり彼は自分の意思でヒステリアモードになれたんだ。・・・そして兄さんも、いつでもヒステリアモードになれる方法を見つけた。・・・ご先祖様のように異性を使わずにヒステリアになる方法、しかしご先祖様とは違う方法。・・・・それは絶世の美人に化けること。

「キンジ・・・ごめんね。・・・イ・ウーは遠かったわ」

驚きは・・・思ったよりも少なかった。心の中では信じていたのかもしれない。遠山家でも最強と言われた兄さんが理子なんかに殺されるはずがないからな。それからふつふつと俺はカナに対しての怒りを感じた。

「どういうことなんだ!教えてくれ、カナ!・・・いや・・・兄さん!」

俺の質問にカナ・・・兄さんは答えない。かわりに唐突な質問をしてきた。

「キンジ、神崎・H・アリアとは仲良しなの?」

俺はその質問に眉を細めた。

「・・・好きなの?」

「そ、そんなこと今は関係ないだろ!!」

先ほどのこともあったせいで俺は顔を赤くしながらも答える。

「キンジが肯定したら1人でやろうと思っていたんだけどな。しなかったわね」

カナ・・・兄さんは一瞬で白鳥のような仮面戦士、仮面ライダーファム、に変身すると信じられない言葉を告げた。

「これから一緒にアリアを殺しましょう」

『キィィィィィィ!』

俺達の周りには・・・ブランウイングの白い羽が散らばった。

・・・・・・・・

・・・

幽霊（後書き）

次回は登場怪人紹介にして、その次からはカナ編のスタートです。

登場怪人（前書き）

グリードはこの物語のオリジナル設定が増えたら追加します。他の怪人は増えたら定期的に更新しようと思います。

登場怪人

登場グリード

ウヴァ

復活したグリードの1体。昆虫系のグリードで人間体は黒髪のオールバックで緑のジャケットを来た男。性格は直情的かつ激情家だがやや計画的。それになかなか強い欲望を見つけることも多い。他のグリードが何処かの組織などに属しているがウヴァだけは何処にも所属せずにいる。復活当初はコアメダルが7枚だった。

カザリ

復活したグリードの1体。猫系のグリードで人間体は灰色の髪に帽子を被った黄色い服の青年。性格は腹黒い策略家。武偵でもイ・ウーでもない謎の第3勢力に所属する。白峰はその仲間の一人らしい。復活当初のコアメダルは7枚。

ガメル

復活したグリードの1体。重量系グリードでメズールのメダルを自分のメダルすべてと共に捧げてメダルに戻った。人間体は短髪の長身男性。性格は純粋で幼児に近い。メズールとともにイ・ウーに所属している。復活当初のコアメダルは8枚。

メズール

復活したグリードの1体。水槽系グリードで真木博士の策略により大量にメダルを取り込んでいたガメルを吸収して暴走グリードとなった。

人間体は青い服の少女だが現在未登場。性格は面倒見がいいがプライド高い。復活してすぐにイ・ウーと出会い所属をしたが、基本的

に独断で動く。その際にたまたまガメルと再開した。復活当初のメダルは８枚。

暴走グリード

メズールが大量のメダルを取り込んで暴走してしまったために暴走した形態。巨大なタコに首長竜の首を生やしたような怪物。最後は数人の仮面戦士の協力のすえにガタキリバキックに散った。

登場ヤミー

クモヤミー

強盗犯の「金が欲しい」という欲望から誕生した昆虫系ヤミー。人格は主人に忠実。蜘蛛の糸を高速で放って攻撃したり、網状にして相手の動きを止めるという戦い方をするが接近戦は不得意でオーズ・タカキリバにやられた。

タカヤミー

アリアの「ママを檻の中から出したい」という欲望から誕生した鳥系ヤミー。人格としゃべり方がアリアに似ていた。強力な火力と打撃でオーズを追い詰めるもヒステリアモードとなったオーズに敗北。アンクの命令で人間を一人も傷つけなかったヤミー。

カマキリヤミー

草加の「俺を好きにならない奴は邪魔」という欲望から誕生した昆虫系ヤミー。人格としゃべり方が草加に似ていた。ナイフのような武器での白兵戦を得意としていたがキックホッパーの‘ライダー反転キック’によって倒される。

ピラニアヤミー

理子の「自分が認められたい」という欲望から誕生した水槽系ヤ

ミー。厳密に言えば怪人ではなく怪物。1体1体は強くはないが千体を超える数でオーズを含む数人の仮面戦士を苦しめた。オーズ・ガタキリバコンボに追い詰められて1つに集まり巨大ピラニアヤミーとなった。

巨大ピラニアヤミー

5～600体のピラニアヤミーが集合して自分達を大きく見せた姿。オーズ・ガタキリバコンボのガタキリバキックによって倒された。

白虎ヤミー

凍条の「英雄になりたい」という欲望から誕生した猫系ヤミー。硬い身体の高い防御力に鋭い爪、強風といった戦い方をした。初の寄生タイプのヤミーでオーズを苦戦させるも援軍にきたジョーカーと共に凍条を取り出されてしまい、最後はオーズ、ジョーカー、タイガの必殺技に破れた。

クロヒョウヤミー

白雪の「キンジを自分だけのものにしたい」という欲望から誕生した猫系ヤミー。カザリがキンジに対して人質にするために作られたヤミーだが、素早い動きと日本刀のような爪でタイガを追い詰めるなど戦闘力は高い部類に入る。オーズ・タカトラーターによって倒された。

サメヤミー

鎌田の「武偵制度を廃止したい」という欲望から誕生した水槽系ヤミー。アビスとともに武偵高を襲撃してくるも仮面戦士科や強襲科のメンバーによって倒された。

ノコギリザメヤミー

地面に潜んでいた数十体のサメヤミーが集まって合体変化したヤミー。ノコギリのようになっている先端はウォーターカッターのように凄い勢いの水を放つことができる。仮面戦士科の教師のヒビキ達によって倒された。

バイソンヤミー

ガメルによって生み出された重量系ヤミー。強靭な角を生かした体当たりを得意とする。アドシアードでガメルと共に暴れるも援軍に来たブラックＲＸによって倒される。

カニヤミー

須藤の「武偵殺しに復讐したい」という欲望から誕生した水槽系ヤミー。硬い殻に包まれており、防御欲に優れる。両手のハサミと口から吐き出す爆弾泡を武器として戦う。この爆弾泡は、武偵殺しへの意趣返しの意味を伴って付加された能力である。

タラバガニヤミー

須藤が意識不明の重体で倒れると同時に、カニヤミーが合体して巨大化した暴走形態。身体を包む殻の強度がアップしている上、車体を軽々持ち上げるほどの巨体と怪力を持ち合わせる。爆弾泡も一発あたりの破壊力が車一つ吹き飛ばせるほどの威力となっている。数名の仮面戦士の協力のもとオーズバッシュによって倒される。

ヤブカヤミー

ブラドの「優秀な血が欲しい」という欲望から誕生した昆虫系ヤミー。右腕の針を人間の皮膚に突き立てる事で血を吸引する。武器はあらゆるものを貫くレイピアの様な右腕の針と、背中の羽から放つ衝撃波。その羽の強度はブレイラウザーを防げるほど。飛行能力を有している上、非常に素早いため攻撃を加えるのは非常に困難だったがオーズ達の奇策で一度撃退される。その後アークに変身した

ブラドに集めた血を届けに行くも優秀じゃない血（橘の血）が混ざってたせいでブラドの怒りを買ってしまい倒された。

ゴリラヤミー

ガメルによって生み出された2体目の重量系ヤミー。多少は重力操作ができるものも状況とメンツの関係で実力を発揮せずに散ってしまったヤミー。岩にように硬い拳での格闘を得意とする。ジョーカーとキックホッパーのダブルキックに敗れた。

リクガメヤミー

ガメルによって生み出された3体目の重量系ヤミー。鉄球を使っての攻撃や、頭や両手両足をしまって高速回転からの体当たり。さらにしまった場所から火球を放ったりもしたがメダジャリバーの空間をも切断する攻撃に敗れ去った。

アリジゴクヤミー

ウヴァがパトラから要求されて作り出した昆虫系ヤミー。パトラの、『世界征服をするための最強になれる力が欲しい』という欲望から作り出されたヤミー。性格はパトラとは正反対の大人しいタイプでまるでパトラの召し使いのような行動をしていた。周辺の砂を集めることにより巨大な身体を持つヤミーになりその能力は身体をドリルのように回転させて放つ衝撃波で周囲の物体を粒子状まで粉々に分解する。しかしオーズ・シャウタコンボに海に突き落とされ水分を吸ったところを攻撃されて巨大な砂の身体は砕けてそのまま倒された。

タコジャガーヤミー

カザリの生み出した合成ヤミー第1号。ジャガーのような身体だが、顔の下に蛸の触手があり、右手が蛸の触手のソードになっていた怪人。タコ墨爆弾を放ったり無駄に強い剣術で戦う。しかし何よ

りも厄介だったのは異常なまでのタフさを持っていたこと。性格はどこかの召喚獣ラノベに出てくるドリル髪のようなお姉様主義。

登場ドーパント

アームズドーパント
　アームズのメモリを使って蔵田が変わった怪人。身体中の武器を使って戦うのだが、アンクの強力な炎によってメモリブレイクされた。何者かに雇われたらしいが・・・

パペティアードーパント
　パペティアーのメモリを使ってイ・ウーの戦闘員の1人が変わっていた怪人。凍鬼、レンゲル、レイを操りオーズを苦しめるもアンクの肉弾戦に破れる。

スパイダードーパント
　7～8ヶ月前にスパイダーのメモリを使って爆発に快楽を覚える男が変わっていた怪人。この事件がきっかけで正太郎と陽がコンビとなった。ジョーカーのライダーキックに敗れる。

ルナドーパント
　幻想の記憶を宿す怪人。伸縮自在の両腕を鞭のように扱って戦う。必殺技は「フライング2丁目固め」という関節技。

ヒートドーパント
　熱の記憶を宿す怪人。火炎弾と足技で戦う。アマゾンライダーと戦った際は防戦一方だったものの野生的な攻撃をすべて回避した。

トリガードーパント
　銃撃手の記憶を宿す怪人。顔面にスコープがついていて右腕が銃

になっている。青いエネルギー弾を発射する。

メタルドーパント
　闘士の記憶を宿す怪人。頑丈な肉体でロッドを用いた格闘戦を行う。スピードこそ劣るがパワーと防御力だけでXライダーと互角に戦った。

登場エヴィル怪人

シオマネキング
　ショッカーの残留データを下にエヴィルが誘拐した犯罪者を改造した怪人。矢車俊がエヴィルを裏切ったために処刑しに来た。主な攻撃は左腕の電磁バサミと物体に触れると炎上する泡による攻撃。矢車に自首をするように言われたがそれをあっさりと断り、最後はWホッパーの必殺技を喰らって散った。

ショオカキング
　かつてジンドグマの組織の怪人を下にエヴィルが一般人を改造した怪人。エヴィルの死郎と呼ばれる人物の部下らしく彼の命令で正太郎と陽を抹殺しに来たがWとザビーの連携攻撃に敗れた。武器は口のマグナムガンと左腕の溶解ガスだが溶解ガスを使う前に倒された。

サタンホーク
　女性怪人見た目はフラミンゴのような怪人でピンク色、飛行能力と爪を使った鷹爪拳の使い手。アンクに空中であっさりと倒された。

ヘビンダー
　口から蛇を吐き右腕が蛇状になっているのが武器で蛇拳の使い手地獄拳法分身の術を使う。分身でアンクを翻弄しようとするも自分

はおろか分身すら包み込むほどの火球を喰らい倒された。

クレイジータイガー

虎拳の使い手、武器は長槍を使うが槍をアンクに奪われアッサリ倒された。

ストロングベアー

怪力で空いてをねじ伏せる熊拳の使い手。左手が鉄丸になっていて、胸には三日月型ブーメランを装備する。しかしそのブーメランはアンクに奪われヘビンガーの腕を切り裂かれた後に自分のブーメランで突き刺されて倒された。

ゾゾンガー

象拳の使い手だが自分記憶にはバーズカを放とうとするも邪魔扱いをされて倒された。

スカイ魔

最も数の多い怪魔妖族で黒いローブに顔はドクロそして武器は鎌と死神を彷彿とさせる怪人でバイクに乗ったりもして以外と器用だった。

鋼鉄参謀

原作と比べて最も性格が変わったと思われる怪人一号。初登場時はWを圧倒するほどの戦闘力を持っていたが暴走するファングジョーカーの戦闘力には撤退せざるを得なく、一度は引くものの再度Wの前に立ちふさがる。しかし力を制御できるようになったW・ファングジョーカーとの決闘に敗れて戦士としてこの世を去っていった。

鎧武者怪人　（ノブナガ）

人造グリードであるノブナガが怪人化した姿。見た目は原作と変

わらないが原作にはなかった電磁力操作の能力でオーズ・タジャドルコンボを圧倒した。実質はグリードではないためエヴィルの怪人としてまとめられる。

登場怪人（後書き）

ミラーモンスターに関しては紹介はしません。ブラドは怪人っぽいですが登場人物の方に加えます。

絶望（前書き）

今回からはアニメでは入らなかった４巻の内容に入るので読んでないけどこれから読む人はネタバレ注意をお知らせします。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

絶望

「これから一緒に・・・アリアを殺しましょう」

ファム・・・兄さんはたしかにそう言った。

「何を・・・何を言っているんだよ・・・兄さん!?」

俺は冷や汗を垂らしながら兄さんに近づく。

「？」

人口浮島「空き地島」に海風が吹く中・・・兄さんは首を傾げた。

・・・そうだった。兄さんはカナになりきっている時は『兄さん』と呼ばれても自分だと分からなくなるんだった。

「半年ぶりに会えたと思ったら・・・アリアを殺すだって?・・・タチの悪いおふざけはやめてくれよ」

何かの間違いだ。・・・兄さんは力弱き人のことを第一に考えて、貧しい人からは報酬をロクに取らない・・・気持ちだけ受け取る。・・・そんなヒーローだったはずだ。アリアを殺すなんて言うはずがない。

「ふざけてないわ。私は今夜、アリアを殺すわ。神崎・H・アリア・・・あの少女は巨凶の因由。巨悪を討つのは『儀』に生きる遠山家の天命」

『儀』・・・すなわち『正義』・・・その言葉を口にしたカナが目的を成し遂げなかったことはない。

「出エジプト記３２章２７・・・汝ら各々、劔を帯びて門より門と営の中を彼処此処に行き巡り、その兄弟を殺し、愛しき者を殺し、隣人を殺すべし・・・ついてきなさい、キンジ」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

ファムはレイピア型の召喚機の‘ブランバイザー’にカードを入れて薙刀のような武器‘ウイングスラッシャー’を右手に握った。

「アリアはまだ幼い。パートナーさえいなければ、きっと簡単に仕留められる相手だわ」

「そんなこと・・・させるかよ!!」

『タカ!トラ!バッタ!タットッバッ!タトバ、タッ!トッ!バッ!』

兄さんがアリアを狙う理由は分からない。・・・だけど今、兄さんを行かせたら確実にアリア殺されてしまう。・・・そう思った俺はオーズに変身してファムに向かって走り出した。

「あんた・・・半年も失踪しといて、いきなり何だよそれ!・・・今日もで俺がどんな思いでいたか分かるか!?・・・それに帰ってきたと思えばアリアを殺すだと・・・ふざけんな!!」

俺が食い止めれば分かってくれるかもしれない。・・・そう思いながらも兄さんを許せない感情は口から出てしまう。

「昔は躊躇っていたオーズの変身をこうもあっさりと・・・どうやらそれなりに修羅場を潜り抜けたようね」

いろいろと信じられないことは多いが今はカナを止める。・・・それしかない。

「それらを乗り越えて強くなったのね。変身前の目を見れば分かるわ。イ・ウーは外でも人を育てる」

イ・ウーだと!?・・・・じゃあまさか・・・

「カナ・・・カナはイ・ウーにいたのかよ・・・」

「・・・・・・」

俺の言葉にファムは答えない。・・・なんでカナがあんな組織にいたんだよ。

「イ・ウーの話はできないわ。あなたを危険に晒したくない。キンジ。今は何も聞かずに私に協力してほしいの」

俺の中で・・・激怒でも絶望でもない黒い感情が沸いてきたのを感じた。

「あなたが私の言うことを聞かなかったことなんて・・・・なかったよね?」

今まで兄さんを信じてきたのに・・・なのに・・・どうして・・・。

「兄さん・・・やっぱり俺、無理だ。・・・・アリアは殺せない・・・いや、殺させない!!」

俺は武偵高に背を向けながらトラクローを展開すると・・・ファムは俺の行動が意外だったらしく動きが止まった。

「まさかキンジが私に構えることができるなんて・・・変わったのね」

ビュン！

「っ！？」

チャリン

俺はファムのトンボのような端末のついたゼクターで狙撃されてベルトのトラのメダルが吹き飛ばされて変身が解けた。・・・油断した。・・・兄さんは複数のライダーシステムを持っていたんだった。

「ドレイクゼクター・・・カナの時に使うのは初めて見た・・・」

兄さんの技の一つ『不可視の弾丸（インヴィジビレ）』・・・そのドレイクゼクター版。その名の通りの技で生身の俺だったらいつ撃ったのかすら分からなかっただろうが・・・タカヘッドの超視力で見ることだけはできた。・・・防ぐまでの反応が間に合わなかったがな。

「私とキンジの戦力差は大人と子供・・・いえ、それ以上あるわ。分かっているわよね？・・・なのにどうして私に立ち向かったの？」

ああ、痛いほど分かっている。少なくとも兄さんのライダーシステムは3個はあるんだからな。・・・でも俺にだってコンボがある。・・・俺は兄さんの動きを止めるためにサゴーゾコンボにコンボチェンジをしようとしたが・・・。

『キィィィィッ！』

「うわっ！？」

バチャァァァン！

ブランウイングに体当たりをされてレインボーブリッジから水の中へと落ちていき・・・意識が暗闇に消えていった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「ライダーパンチッ！」

「シュン・・・どうしてだ・・・どうして・・・」

俺が水の中に落ちた頃、矢車は驚きのあまりパンチホッパーのライダーパンチを避けようともしていなかった。

「矢車！！」

ドンッ！ドンッ！

「くっ！？」

パンチホッパーのライダーパンチは矢車のもとに駆けつけてきた後藤の射撃で妨害された。

「・・・後藤・・・何故お前がここにいる？」

「・・・最近グリードのことを調べていたら・・・その・・・単位が足りなくなってしまい、緊急任務でここの警備をしていたんだ。・・・そんなことより矢車！変身しろ！」

矢車はホッパーゼクターをベルトにセットしようとしたが・・・・寸前でその手が止まった。

「・・・悪い・・・弟と戦うなんて俺には無理だ・・・」

「弟！？あの仮面戦士がか！？・・・仕方ない・・・ここは撤退するぞ！」

ピン！　ピカッ！

後藤はパンチホッパーに向かって閃光弾を投げつけて怯ませている間に矢車を連れてその場を離れていった。

「逃がさないよ・・・兄貴・・・？」

パンチホッパーは走っていく矢車達を追いかけようとするも・・・・

『ＵＮＡＧＩ～～』

何処と無く蛇のような形をしているがウナギのカンドロイド・・・電気ウナギカンドロイド数体に電気を放たれながら巻きつけられていた。

「・・・まぁ、今日は逃がしてもいいか。・・・期限はあと１週間もあるし・・・兄貴も俺と同じように地獄を見ればいいよ」

『UNA・・・』
バキッ！

パンチホッパーは巻きついていたカンドロイドを握りつぶすと暗い夜の向こうに姿を消していった。

東京ウォルトランドからやや離れた場所へと逃げた矢車と後藤は近くにあったライドベンダーから数体のタカタンドロイドを空に飛ばした。

「これで見張りは大丈夫だろ・・・それより矢車・・・お前・・・あの仮面戦士が弟だと言うのは本当なのか？」

「・・・嘘ついてどうする・・・畜生・・・弟が生きていると信じて・・・また会えると信じて戦ってきた結果がこれとはな。・・・・・笑えよ・・・」

矢車は全てに絶望したような眼で俯くと後藤は矢車の胸ぐらを掴み上げた。

「・・・お前が諦めたら誰がお前の弟を止めるんだ！仮面戦士に対抗できるのは同じ仮面戦士か怪人だけだ！仮面戦士の力を悪用する者は怪人討伐と同じ扱いで殺されることだってあるんだぞ！！お前はそれでもいいのか！」

「・・・・・・」

「俺だって止めてやりたいとは思う。遠山も止めてやりたいとは思うだろう！だが止められるのはお前しかいないんだぞ！兄弟であるお前しか止められないはずだ！！」

後藤は矢車に向かって叫ぶ。それでも矢車は俯いたままだ。

「・・・俺はあいつに殺されそうになったんだぞ？・・・俺なんかに止められるはずないだろ・・・再開したときは光に手が届いたと思ったんだが・・・やっぱりしっぺ返し喰らっちまった・・・もう仮面戦士も武偵もやってられるか・・・」

「っ！！」

ドカッ！

その言葉に・・・後藤は切れて矢車を殴り飛ばした。

「何すんだよ・・・・」

「しっぺ返しが何だ！何もできないよりはマシだろ！俺は仮面戦士じゃないから怪人とまともに戦えない。・・・それでもやれることはやっているつもりだ！・・・なのにお前は何だ？・・・お前が守った人々の思いまでここで無にする気か？」

「人々の思いだと？」

「そうだ！人々の思いだ！仮面ライダーに守られた人々はその仮面ライダーを信じているんだぞ！決して逃げずに最後まで戦い・・・そして勝利してくれると！！・・・命ある限り戦う・・・それが仮面ライダーだろ？・・・俺には仮面戦士の力がない。だからこそお

前は・・・自分の信じるものだけじゃなく自分を信じてくれている人達のためにも戦え！！」

後藤は殴り飛ばした矢車に手を差し伸べようとすると平手で弾かれた。

「・・・そんなの・・・・今更分かるかよ・・・何もかも失った俺なんかに・・・」

ガシャン

矢車はその場にベルトを捨てて何処かに行ってしまった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「ハッ！？」

朝日の光と共に俺の目が覚める。・・・・俺はＰＣの前で椅子に座りながら眠っていたようだ。・・・・アレは全部夢だったのか？

チャリン！

俺は念のためにあの時、落としたと思っていたトラのコアメダルとサゴーゾコンボのためのコアメダルがあるかどうかをポケットから出して確認すると・・・ちゃんとあった。あれは夢だったのか？

「そうだ！アリア！！」

夢の中ではファムは『今夜、アリアを殺す』って言っていた。・・・俺は慌てて立ち上がるとアリアの寝ているはずの寝室の2段ベッドの上を確かめると・・・・

すぴー、すぴー

「・・・・・・・」

見てるこっちが脱力してしまうぐらいの幸せそうな顔で寝ていた。・・・やっぱりあれは夢だったのか?・・・そう考えているとベランダからアンクが部屋の中に入っていた。

「キンジ!ようやく目が覚めたか」

「アンク・・・今までどこに行ってたんだ?」

「まぁ・・・この前あったファンガイアのキングに色々聞いてきた・・・ルーマニアまで飛んでな。・・・そんで、2時間ぐらい前に帰ってきたらお前がそこに寝ていたんで暇つぶしに朝飯買ってきてやった」

アンクはそう言いながらコンビニの袋を俺に渡してきた。

「まさかリクがまだ・・・・だとはな・・・」

「ん?・・・何か言ったか?」

「何でもない。・・・それよりも朝飯だ。・・・アリアを起こして来い」

「・・・・分かった」

俺の周辺が動き出していたことに・・・・どうして俺は気づかなかったんだろうな。

絶望（後書き）

今回はほとんどシリアスな話になってしまいました。・・・とりあえず話は変わりますが悪役ライダーが集まる第3勢力の組織名が決定しました。組織名はクリームチーズさんが考えてくださった「エヴィル（闇に堕ちし者達）」にさせていただきました。クリームチーズさんも考えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

単位不足者（前書き）

４巻の内容は原作の流れをだいぶ変更して進めていこうと思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

単位不足者

朝食を食べ終わった俺はやはり昨日のことが気になったので歯を磨いているアリアにさりげなく昨日のことを聞いてみた。

「昨日の夜?はんは（あんた）は、あらひ（あたし）が帰ってきたらパショコン（パソコン）の前で寝てたわよ?」

大丈夫だ・・・アリアは生きている。・・・そうは思いながらも昨日のことを捨て切れていない俺がいた。

「・・・・アリア」

「学校。一緒に行くぞ」

俺はメダルをポケットにしまいながら始めて自分からアリアを登校に誘った。

「・・・何よっ。いつもは一緒に行くのは迷惑そうにしてるくせに・・・」

一緒にここから出て学校に行くのは誤解されてしまうので当然だ。俺がそう思うなか、アリアは皮肉を言いつつも軽やかな手つきで自分の通学カバンを持った。

「ちゃんと帯銃はしたか?」

「へ〜。キンジにしては高い警戒心ね。武装確認はいい習慣よ!・・・

・あっ！そういえば渡そうと思ったものがあるんだったわ」

アリアはカバンを開きガサゴソと何かを探すと・・・ノートぐらいの大きさの黒いケースを取り出してきた。

「ポケットにしまっていたら不便でしょ？売店でセルメダルを入れるために売られていたメダルホルダーだけど・・・あんたにあげるわ」

あのアリアが・・・俺に何かをくれるとは・・・

「ありがとなアリア！」

俺はアリアからメダルホルダーを受け取り早速開いてみると・・・横3枚、縦4枚の12枚×2の量のメダルを収納できる内部だった。・・・いっつもポケットの中がコアメダルでいっぱいだったからこれは本当に助かるな。

「防弾性で怪人に攻撃されても壊れないくらいの強度はあるから安心して使いなさい」

「そうか・・・さっそくメダルを入れさせてもらうぞ」

俺はポケットにしまったコアメダルを取り出すと次々とメダルをしまう。コアメダル以外の場所にもセルメダルを詰める。・・・久々にポケットがいっぱいじゃないから不思議な感じがするぞ。

「それよりキンジ！そろそろ行かないと学校に遅刻するわよ！」

「ん？・・・もうすぐ8時か。・・・そんじゃあ行くか！」

俺はアリアを後ろに乗せてオーラインクロスを走らせた。未だにカナの台詞が心配な俺は普段とは違う道を走ると・・・今日のアリアはなにやらテンションが高く、無意味に足をブラブラ揺らしていた。・・・危ないし、運転しにくいからやめてほしい。

「待っていたぞ遠山」

バイクを駐車場に止めて教務科の前を差し掛かると・・・連絡掲示板の前に幅広の松葉杖をついたジャンヌが立っていた。

「あんたが武偵高の預かりになったのは知っていたけど・・・似合うじゃない、制服」

アリアはいきなり身長差を感じさせないでかい態度でジャンヌにイヤミを垂らすとジャンヌはそっぽを向いた。

「私は遠山を呼んだのだ。神崎・H・アリア、お前に用はない」

「こっちはあるの。・・・ママの裁判、あんたもちゃんと出るのよ」

「分かっている。それも司法取引の条件の一つだからな」

イ・ウーと呼ばれる組織に冤罪の罪を被せられたアリアの母親の

かなえさんは現在、東京拘置所での最高裁での裁判を待っている状態だ。彼女は2審までに終身刑を言い渡されていたのだが・・・理子やジャンヌに無罪を証言してくれる約束されているアリアはニンマリと笑った。

「ま、ケガをしてるみたいだし、イジメるのは今度にしてあげる」

「私は今でも一向に構わんぞ?足の一本くらいちょうどいいハンデだ。それにこの杖には聖剣デュランダルを作り変えて鎧貫剣にしたものを仕込んであるぞ」

無駄にプライドの高い二人は睨み合う。・・・まったく・・・こいつ等はめんどくさい性格をしているな。

「まったく・・・朝っぱらから喧嘩すんなよ。・・・それよりジャンヌ。その足はどうしたんだ?」

どうでもいいが聖剣のくせにひどい扱いをされているな。松葉杖の中に仕込まれてるなんて・・・もう少し大切に扱ってやろうぜ?

「・・・虫が、な」

「虫?」

「道を歩いていたら虫が膝に張り付いてきて驚いてしまい・・・道の側溝に挟まったと思ったら・・・そこをバスに轢かれて・・・・全治2週間だそうだ」

こいつ・・・以外にドジだな~~。俺の横ではアリアがくすくすと笑っているし・・・。まぁ、それでも全治2週間で済んだジャン

ヌがさすがと言わざる得ないがな。

「それより遠山・・・お前の名前がここにあったぞ」

俺はジャンヌの指さした『単位不足者一覧表』の名前を見てみると・・・後藤の下に俺の名前があった。

『2年A組　遠山キンジ　探偵科　1，9単位不足』

確かにそう書かれていた。いかん・・・仮面戦士科の単位は全然足りているようだが探偵科の単位が足りてないなんて心当たりは・・・色んなことに振り回されたせいでいっぱいあるな。・・・たとえば横にいるちっこいピンクとか・・・

「えっと・・・緊急任務はどこだ?・・・これだな」

緊急任務。武偵高では単位不足なんてよくあることなので、休み中に解決したりするために割引価格でたくさん請けてくれるのだ。一般高でいう補習授業みたいなものだな。

「てっとり早く単位が欲しいし・・・これにするか」

俺は『輸送車両の警備任務　1，9単位　報酬100万　指定科目無し』にすることにした。必要生徒数は・・・6名か。・・・緊急任務の癖にやたら報酬が多いのが気になるが、とりあえず俺は大急ぎで日程を確認し、携帯で登録希望のメールを送ろうとして・・・その手を止めた。・・・『アリアを殺しましょう』・・・このフレーズが頭をよぎったからだ。・・・俺がこの仕事を受ければ・・・この間はアリアを1人にしてしまう。・・・バカげてる。あんな夢に怯えるなんて・・・。

「アリア・・・お前もこの仕事、一緒にやれよ」

「何で？あたしは別に単位は足りてるわよ？」

「パートナーだろ？」

アリアはその言葉に一瞬、ポカンとした顔になると・・・少し嬉しそうな顔をした。

「あんたから仕事に誘うなんて珍しいじゃない。どういう風の吹き回し？・・・まぁ、最低６人って書かれているしやってあげてもいいわ」

これでひとまずは安心できるな。・・・さて、後４人を・・・

「俺もその仕事に参加するぞ」

俺達の後ろにはいつの間にかアンクが立っていた。

「アンク・・・そう言えばお前も単位不足者の欄に書かれていたな。・・・一番上で・・・」

『泉・Ａ・信吾・・・強襲科　２単位不足』って書かれていた。・・・２単位ってことは単位を一切取っていないってことだ。

「お前・・・俺達と事件解決してたのになんで１単位もないんだよ？」

「・・・授業態度が悪いって減点されたんだよ・・・チッ！」

あ～～。そういえばアンクは基本的に何でもできるから授業中はサボってどこかに行ったり、来てても寝ているんだった。・・・それでも授業にいるときに当てられたら正解しているのがイラッってくるが・・・。

「とりあえず・・・後3人だな」

矢車あたりでも誘ってみるか・・・。そう思って教室に向かうと・・・後藤に昨日の事件のことを聞かされた。

「まさか・・・あのシュンが矢車を殺そうとしてたなんてな」

「信じられないだろうが事実だ。・・・たしかに矢車はその仮面戦士のことを‘弟’と言っていたしな・・・」

3時間目の体育・・・俺達はプールで水泳の時間だったが体育教師も兼任している強襲科の蘭豹が「拳銃でも使いながら水球でもやれ」と言って帰っていったので、ほとんどの生徒がフケてしまった。ほんと、普通じゃない学校だ。・・・さすがにプールは男女別に別れているがな。・・・少数がこの室内プールにいる中、俺と後藤と正太郎はプールサイドで矢車の事件のことを話していた。ちなみにアンクは毎回体育の授業には出席していない。

「・・・矢車は・・・・絶対に帰ってくる。・・・俺はそう信じてる」

「俺もだ。・・・あいつはこんなところで折れちまうようなタマじゃねぇ・・・」

「お前達は本当に矢車を信じているんだな」

後藤は安心したような顔をすると男子更衣室に戻っていった。

「・・・夢かもしれないが・・・昨日、俺も兄さんにあった。・・・途中で意識を失ったと思ったらＰＣの前で寝ていたがな・・・もしかしたら・・・お前の姉さん・・・成美さんも・・・・」

「・・・そんなはずはねぇ。姉貴は死んだ・・・そうとしか考えられない」

「・・・そうか。・・・ん?」

正太郎はそう言って更衣室に向かうと、俺達のいる場所の反対側で何人かの生徒が黒い物体をプールに運びいれるのを見かけた。・・・メンツの中に1人、水着の女子もいたが・・・平賀さんだったのでヒステリアになる心配はない。あの人は女子っていうより『こども』って感じだからな。

「あれは・・・ラジコンの潜水艦だよな」

まったく、そんなもの屋外プールで浮かばせろ。・・・そんなことを考えていると不知火がこちらに歩いてきた。

「あは、プールを追い出されちゃったよ・・・ちょっといいかな遠山君？」

「ああ、いいぞ」

不知火はさっきまで正太郎が座っていた場所に座る。

「そういえばもうすぐ緋川の夏祭りだったね。神崎さんを誘ってみたらどう？うん、そうしよう！あそこは縁結びの神社ってことでポピュラーだし。ねぇ武藤君」

「そいつはいいアイデアだ！お誘いメールは俺が書いてやるよ！」

不知火は俺から携帯を奪うと武藤は待ってましたと言わんばかりに投げられた携帯をキャッチした。・・・こいつ等事前に打ち合わせしてやがったな。

「『親愛なるアリアへ。今度一緒に七夕祭りに行かないか？7日の7時、上野ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣を着て来いよ？』っと。こんなもんでいいですかね、遠山先生？」

「いいわけねぇだろ！」

俺は武藤から携帯を奪い返すが・・・画面にはすでに‘送信しました’と写っていた。どうすればいいんだろうな・・・ほんとに色々と・・・。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「あぁぁぁぁぁ!!また揃わなかった!!」

俺がプールに武藤を蹴り落とした頃、港区のカジノでは1人の男がルーレットに失敗して叫んでいた。

「畜生!!俺はもっと稼ぎたいのによぉ!!」

「その欲望・・・開放しなよ」

「あぁ!?」

チャリン!

男はカザリによって額に出現した投入口にセルメダルを入れられた。そしてその場にはたまたま・・・・・

「あれ?蘭豹ちゃん・・・なんかあの男の人、おでこにメダルが入んなかった?」

「んなはずねぇだろ!!ハッハッ!」

休みだったのでカジノでバイトをしていた伊達さんと・・・本来なら俺たちの授業にいるべきはずなのにテーブルゲームを楽しむ蘭豹がいた。

「ふふ、とりあえずこれで囮の準備はできたね」

「・・・こんな所に連れてきて何なの？・・・まだ俺は兄貴を始末できてないんだけど？」

「まぁ、そう言わずに付いて来てよ。ドクターの作戦もおもしろくなりそうなんだから・・・」

「まさかアンタが俺らの組織に入った時から鴻上研究所の人形研究員も・・・組織の仲間になっていたなんてね・・・・」

カジノの奥ではカザリと矢車の弟の俊が怪しげな会話をしていた。

・・・そしてカジノの外には一台の古そうな車が止まっていた。

「はたしてあのような組織に世界の終わり・・・終末が可能なのでしょうか？」

カジノの外の真木博士は人形に話しかけるように独り言をしゃべっていた。

単位不足者（後書き）

もうお気づきかもしれませんが・・・カナ編のメインとなるキャラは矢車、後藤です。

白鳥と蜂（前書き）

突然ですが敵として登場してほしいラスボス・幹部ではない怪人を募集します。昭和、平成は問いません。人気が高かった怪人はいずれ物語に登場させようと思います。

白鳥と蜂

「ハァァァッ！！」

「ウェイ！」

5時間目・・・メールのことを忘れられない俺は専門科目の仮面戦士科の授業で剣崎と生身での格闘訓練をしていた。俺は一昨日から仮面戦士科でこうして訓練をするようにしているからだ。・・・少しでもコンボを使いこなせるようにしておかないと、ただでさえサゴーゾコンボを使っても倒しきれなかったアークみたいな強さの敵が出たときにあっさりと負けちまうかもしれないからな。

「ハァッ！」

俺は右腕をトラクローを振りかざすように振り下ろす。

「ウェェェイ！」

それに対して剣崎はタックルをするかのように突進をしようとしてきた。・・・甘いな。

「・・・セイッ！」

ブンッ！

「なっ！？」

俺は振り下ろした右腕を剣崎の肩に当てて、剣崎の上を一回転すると左脚を顔にあてる寸前で止めた。

「お前・・・Eランクって書類上はなっているくせにAランクはあるだろ？」

「ランクなんか俺にはどうでもいいんだよ」

来年になったら武偵高なんて辞めるつもりだしな・・・。

「せっかく仮面戦士の力もそれを扱う実力もあるのに、武偵にならないのは・・・俺は納得いかないな」

「・・・そうかよ」

「はい、タオル！」

「ああ、センキュ・・・って、理子！？」

こいつもアリアと同じようなことを言うとはな。・・・そんなことを考えていると本来なら探偵科で授業を受けているはずの理子が俺にタオルを渡してきた。

「なんでここにいるんだよ！探偵科の授業はどうした！？つーかここによく入ってきたな！！」

ここは基本的に仮面戦士科以外は入っちゃいけないはずだぞ？

「きーくん質問多いよ～。せっかきーくんが訓練してるって聞いたから応援しに来てあげたのにもう終わってたんだもん。理子がっかり～。・・・ちなみにここはヒビキさんが普通に入れてくれたよ」

そうか・・・ヒビキさんか。・・・あの人の性格だと確かに「きーくんを応援しに来ました～」って軽いノリで仮面戦士に変身してない時の訓練ならすんなり通してくれそうだ。

「はい、きーくん、コーラ！・・・それとケンくんにも・・・はい、タコカン！」

理子は俺にコーラを、ケンくんこと剣崎にはタコカンドロイドを渡した。

「おう、ありがとな！」

「ちょっと待て！？これは飲み物じゃないぞ！？」

「あっはは！ジョークだよ～」

剣崎は理子にタコカンを突き返すと、今度は普通のジュースを渡した。

「てゆうか理子・・・その格好は暑くないのか？」

「めっちゃくちゃ暑い」

だったらそのゴスなんとかって言う改造制服をやめて普通の夏服にしろよ。いや・・・防弾性で普通じゃないか。

「せっかくシャーロックホームズ卿の授業まで抜け出してきたのに～。もう少し長引かせることをしてよね」

「・・・シャーロックか」

シャーロックホームズ卿・・・アリアの曽祖父で歴史に残る名探偵だ。拳銃、格闘技の天才でもあり、武偵の原点ともなった偉大な人物なんだが・・・その曾孫がアリアっていうのが変な感じだよな。

「あ！もうすぐ授業が終わる！そんじゃば～いび～！」

時計を見てもうすぐ休み時間だと気づいた様子の理子は陽気な顔で仮面戦士科の学科棟を後にした。

「遠山・・・お前は何のために戦うんだ？」

「は？いきなり何だよ？」

剣崎はいきなり変な質問をしてきた。

「俺は・・・戦えない人の代わりに俺が戦おうと思ったからだ。・・・そう考えているから仮面戦士の力を誇りに思っている。・・・でもお前はどうして仮面戦士の力を持つことを嫌っているんだ？お前ほどの仮面戦士に相応しい人間が・・・武偵を辞めるなんてやっぱり納得いかない！！」

「・・・俺が戦う理由は後悔しないためだ。手を伸ばせば助けられるのに手を伸ばさなかったら死にたくなるほど後悔するからな」

「だったら！！」

「・・・でも、それでも俺は3年になる前に武偵を辞める。・・・・力で解決するものほど空しいものはないからな」

ヤミーは人々の欲望を形にしたもの。いわば‘思い’の塊だ。ヤミーを倒すたびに罪悪感が湧いてくる。それにこの前は仕方が無かったが・・・ブラドとの戦いで俺は始めて仮面戦士と戦った。・・・いくら中身が怪物とはいえ、サゴ―ゾの必殺を使ったときはいい気分はしなかった。・・・こんな俺が仮面戦士に向いているわけがない。・・・・戦いを嫌う俺なんかが・・・怪人と戦い続けるなんて無理に決まってる。

「キンジ！」

「理子？」

先ほど立ち去ったはずの理子が戻ってきた。・・・それも先ほどまでのふざけた表情の理子ではなくケモノのような鋭い目つきの『武偵殺し』の時の表情で・・・

「アリアとアンクが強襲科の前でカナと戦っている！それに正太郎と陽も成美と！」

「何だと！？」

ダッ！

「遠山！！くっ！」

俺は強襲科に向かって走り出す。・・・『アリアを殺しましょう』・・・この言葉が頭の中で浮かび上がる。・・・やっぱりあの夢は現実だったのかよ！！

「「うわぁぁぁぁ！？」」

「っ！？」

強襲科の前に着いた途端、俺の近くにWが転がってきた。そして転がってきた先には・・・蜂のような姿をしたマスクドライダー‘仮面ライダーザビー’に変身している正太郎の姉・・・明智成美（あけちなるみ）がボクシングポーズで構えていた。

「どうした正太郎、もう終わりか？」

「・・・姉貴が・・・嘘だ。あいつが姉貴のはずがないんだ。姉貴が攻撃してくるなんてありえない。ましてやカナと一緒に神崎を殺しに来るなんてありえない！！」

「落ち着きたまえ正太郎！あれは本物の君の姉・・・明智成美だ！・・・それでも今は戦わないといけない！！」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

Ｗ（陽）はルナトリガーに変身させてトリガーマグナムをザビーへと向けるが・・・

「くっ！正太郎！攻撃しないとこちらがやられるんだよ！」

「・・・本物でも偽者でも・・・姉貴を攻撃できるわけがないだろ！！」

「相変わらず甘いな・・・未だに半熟から何も進歩がない」

Ｗの正太郎と陽はそれぞれの意気はバラバラでまともに戦えなさそうな状態だった。そしてその近くでは・・・

「あんたは一体何なのよ！！」
バン！バン！

「おいで神崎・H・アリア・・・あなたの実力をもうちょっと見せてごらん」
『キィィッィィィ！』

「くっ！？鬱陶しい鳥だな！」

ファムとアリア、アンク怪人態とブランウイングが戦っていた。・・・急いで止めないと本当にアリアが殺させちまう。

「変身！」
『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーゾ・・・サッゴォォゾォ！！』

「ハァッ！！」
ドンッ！

俺はすぐさまオーズ・サゴーゾコンボに変身すると重力操作でアリアとWをそれぞれの相手から離れさせて俺の後ろに下げた。

「キンジ・・・どきなさい」

アリアは俺の足を掴みながら立ち上がるとファムに銃を向けた。

「無理だアリア。仮面戦士に生身で勝てるはずがない・・・とくにカナにはな」

「ならどうすればいいってのよ！！」

だいぶ気が立っているな。・・・まぁ、俺も冷静な状態ってわけではないんだが・・・。

「キンジ・・・どきなさい」

ファムはブランバイザーを構えながらアリアと同じセリフを言ってこちらに近づいてくる。

「あなたのような素人は動きが不規則なぶん、あぶないわ」

「そんなことは分かっている、あんたに言われなくても・・・アンク！」

「ほらよっ！」

パシッ！

俺はサゴーゾコンボの状態でアンクからメダジャリバーを受け取り、そして構えた。

「ならどうして？何のために危険をさらすの？あなたが私に勝てる確立なんて万に一つも・・・」

「そんなことは分かっているんだよ！！」

おそらくコンボでもヒステリアじゃない俺じゃどうにかなるか分からない。それでも・・・やるしかない。

「アンク・・・アリアとWを連れて下がってくれ。あの二人の仮面戦士は俺が相手をする」

「・・・無理はすんなよ」
バサッ！
アンクはアリアとWを抱えると強襲科の屋上へと飛び去っていった。
「キンジ君・・・おまえ1人でどうにかなる相手じゃないのは分かっているな？」
ザビーはそう言いながら拳をこちらに向ける。それでも俺は逃げずにジャリバーを片手に握りながら反対の腕のゴリバゴーンをいつでも放てるように構える。
「キンジ・・・あなた・・・本当に変わったのね」
『キィィィィ！』
ガッ！
ファムの呟きとともにブランウイングがこちらに突っ込んでくると・・・ブランウイングは金色の竜を思わせる仮面戦士に止められた。・・・あの仮面戦士は・・・津上さんの変身する‘仮面ライダーアギト’だ。
「この辺にしてください。でないと俺らも本気で戦いますよ？」
いつもの天然のような雰囲気が一切ない津上さんことアギトの後ろには、いつでも変身できるように構えるヒビキさんとザンキさん。そしてイブキさんがいた。
「それは無理だ。私は邪魔なWとオーズを倒し、神崎・Hアリアを始末しないといけないのでな・・・ぐっ！？」

ザビーはクロックアップをしようとした瞬間、高速で動く1人の仮面戦士に妨害された。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「・・・・・・」

すると赤いカブトムシのような仮面戦士が俺の前に立つと・・・右手の人差し指で天を指差した。

「おばあちゃんが言っていた。人と言う字は人と人とが支えあってなるものだとな・・・」

赤いカブトムシの声は・・・天道だった。・・・ってことはその仮面戦士が、仮面ライダーカブト，か。

「遠山！大丈夫か！」

そして俺の後ろに剣崎が変身したブレイドがやってくる。

「これであなた達は二人・・・こちらは7人です。・・・続けます？」

「・・・んっ・・・」

ふわっ

そんな状況のなかで・・・ファムは緊張感も無くアクビをした。・・・おそらく『あの時期』が近づいているんだろうな。

「成美・・・そろそろ帰りましょ。確かにこの数じゃ分が悪いし・・・眠いわ」

「・・・分かった・・・」
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

ファムを掴んだザビーはクロックアップを使って高速で立ち去っていった。・・・これでカナ・・・兄さんが生きていると共に、正太郎の姉さんの成美さんもイ・ウーとして生きていることが分かってしまった。

「・・・少しだけコンボにも慣れてきたな」

俺は変身を解除すると少し足取りをフラフラさせながらもアンクやアリア達のいる強襲科の屋上に向かった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「何のようだカザリ」

「ふふ、せっかくだから良い話を持ってきてあげたよ」

俺が強襲科の屋上に急ぐ頃、港区の俺の知らない何処か。それぞれ人間の姿をしたウヴァとカザリは数メートル離れて向かい合っていた。

「今から5日後・・・セルメダルが５０００枚詰まれた車が通るん

だ。せっかくだからグリードみんなで襲撃をしようよ。もうメズールとガメルは参加するって言ってるよ」

「ほう、５０００枚か・・・・いいだろう。俺もその計画に参加しよう」

「そう、よかった。あと・・・この前君のコアメダルをオーズから奪い取ったんだけど・・・君も僕のメダルを持っているよね？交換しようよ！」

「フン！いいだろう」

ウヴァとカザリは怪人の姿に変わると・・・ウヴァはトラのコアメダルをカザリに投げつけ、カザリもウヴァにクワガタのコアメダルを投げつけた。

チャリン！チャリン！

クワガタのコアメダルを取り込んだウヴァは上半身に再び緑の鎧を纏い、カザリも再び胴体のセルメンにメダルの鎧を纏った。

「・・・君の残りのメダルは実験に使わせてもらうよ・・・」

「何か言ったかカザリ？」

ウヴァはカザリが何かを言った気がして振り向いた。

「いや、何も。・・・空耳じゃない？」

「そうか。ならいい」

「それじゃ、僕は帰るね」

カザリはそう言いながら人間の姿になりその場を離れると・・・古い車に乗った。

「作戦通りに行きそうですか？」

「うん。・・・これは予定よりも面白いことになるかもね」

車内で真木博士と話していたカザリは怪しげな笑みを浮かべていた。

・・・

矢車が少年達のほうを見ると、1人の少年は睨まれたと思って怯えた。

「大丈夫だ峻！俺がついてる！」

「・・・シュン・・・か」

矢車はたまたま・・・弟の方が自分の弟と名前が似ている孤児の兄弟に出会っていた。

白鳥と蜂（後書き）

明日から7日まで更新を停止します。申し訳ありません。

睡眠と祭りとマーボー豆腐（前書き）

おまたせ致しました。今日から更新を再開します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

睡眠と祭りとマーボー豆腐

「どうして止めたのよ・・・あんたがジャマしなければ・・・いくらでも勝つ手段はあったわ」

戦いからしばらく経ち・・・アリアは保健室で明日夢に傷の手当てをしてもらってから帰宅途中にそんなことを呟いた。

「嘘つくな。カナとお前の力量差は誰から見ても明らかだったぞ」

生身の人間が仮面戦士には勝てない。・・・それは周知の事実だ。

「アリア・・・たしかにお前は強い。それはよく分かっている。でも世の中にはお前よりも強い奴がたくさんいるんだ」

俺はそう言いながらアリアの肩に右手をポンと置いてやった。

「だから負けを受け入れる強さを持て。あいつを相手にしたら・・・次は殺されるぞ。お前はカナと戦うな・・・分かったか?」

俺の言葉にアリアはコクンと頷いた。・・・カナと戦って傷つくのは・・・俺1人で十分だ。W・・・正太郎も戦える状態じゃないぐらい落ち込んでいる。けれどきっと陽がいるから何とかなるだろ。・・・あいつ等は2人で1人の仮面ライダーだからな。

「キンジ・・・あたし、ちょっとももまんを買ってくるから・・・」

「ああ、念のためアンクもついて行ってくれ」

アンクは「しょうがないな」と呟きながらも男子寮の真下にあるコンビニに向かった。とりあえずこれで1人になったわけだが・・・正直、カナとかの件をどうすればいいのか未だに悩んでいる。・・・できれば戦かわずに解決したいしな・・・。

「はぁ・・・こんな時・・・あの人はどうするんだろうな？」
ガチャ

俺は頭の中で今もどこかで冒険しているだろうある人を思い出しながら部屋のドアを開けると・・・

「・・・っ！！」

緋色に燃える夕焼けを背景にソファーでカナが昼寝をしていた。・・・カナは一度眠ると信じられないくらい眠り続ける習性がある。・・・それは神経系、特に脳髄に負担をかけるヒステリアモードを長時間使用しているせいだ。数十分しか使えない上にオーズに変身するとさらにタイムが短くなる俺のヒステリアでも終わった後はなんだか眠くなる。しかし兄さんのヒステリアはカナになっている間は継続されているため、長時間睡眠で一気に回復をする仕組みになっているらしい。カナはそろそろ１０日前後の『睡眠期』に入ると思っていたが・・・まさか俺の部屋で寝ているとはな。

「ん・・・キンジ？」

カナはドアを開けた音で起きてしまった。

「何しに来たんだ・・・」

俺は警戒しながらも少しづつカナに近寄る。・・・俺の知っている兄さんは人を傷つけるよりも傷を治療する方が得意だ。怪我人や病人を放っておけない人だ。・・・そもそも兄さんが美女に化けてヒステリアモードになれることに気づいたのも・・・子供のころ、母さんが亡くなって泣き続ける俺をあやすために母さんのフリをしたからだ。・・・そんな兄さんがアリアを狙う理由が分からない。・・・その理由を聞かなければならない。・・・だけど聞くことが怖い。・・・聞いてしまえば・・・俺の中の兄さんが壊れてしまいそうで・・・聞くことができない。

「気をつけなさいキンジ。あなたたちには敵が迫っているわ。・・・それも・・・強大なのが2つも・・・」

「・・・それはどうゆうことだよ?」

カナにアリアのことを聞くことができないまま部屋の雰囲気がピリッとしたものに変わると、一瞬にして龍騎にそっくりな黒いベンタラ型ライダーシステムの‘仮面ライダーオニキス’に変身して窓ガラスからミラーワールドとはまた違う世界のベンタラに入っていった。そんな矢先に・・・・

「ただいま~」

「く、くるなアリア!!」

ひどいタイミングでアリアとアンクが帰ってきやがった。

「どうかしたのかキンジ?」

「・・・いいから入って来るな」

今、アリアが入るとオニキスに殺されてしまう可能性が高い。・・・そう判断した俺は玄関の前のアリアに入らないように説得しようとした。

「・・・怪しいわね。入るわよ」

まずいっ!!入って来やがった!・・・俺が1人焦る中・・・ベンタラにいるオニキスはそのまま話を続ける。

「それとアリアちゃんだけど・・・『第2の可能性』がある限り殺さないわ」

『第2の可能性』・・・なんだそれ?

「覚えておきなさいキンジ。アリアは危険な子。誰かが導いてあげないといけない子。・・・その『誰か』があなたなら誇らしいのだけど・・・」

「おい待てっカナ!!・・・くそっ!」

オニキスは俺の目の前の窓ガラスの中から見えなくなり・・・カナを追いかけることも不可能だった。

「・・・どうゆうこと?・・・今、カナって聞こえたけど・・・」

「・・・どうもしない」

「どうもしないわけ無いでしょ!!あんたもしかしてカナと組むつもりなんでしょ!」

「なっ！？」

そんなことはしない。・・・できるはずもない。兄さんと俺が組むなんて不釣り合いにもほどがある。

「そもそもカナってあんたの何よ！あんたの元カノ？」

「そんなはずないだろ！」

「じゃあどういう関係なのよ？」

「・・・・・・・」

あんな姿をしているけど俺の兄さんだ。・・・なんて言える訳もなく・・・俺は黙り込んでしまう。

「・・・キンジの・・・キンジのバカァァァァ！！」

アリアはそう俺に向かって叫ぶと・・・部屋を出て何処かに行ってしまった。

「何やったんだお前？」

「・・・さぁな」

アリアと入れ違いで部屋に入ってきたアンクはアイスを食べながら俺に冷たい視線を送っていた。

・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

あれから2日が経った。アリアはあれから部屋に帰って来ていないし、教室でも口を聞いてもらえない。さらに今日は終業式で、正太郎は昨日は学校を休んでいたが今日は来ている。・・・それでもショックは大きいようでかなり元気がないように見える。・・・この様子・・・半年前の姉の死にショックを受けていた時と同じだ。

「よお、キンジ・・・」

「正太郎・・・確かに認めたくない気持ちは分かるが・・・周りが心配しているから元気を出せ」

「・・・そんなことできたらこうなってねぇよ・・・」

「・・・・・・・」

たぶんこの様子じゃ・・・俺がいくら言っても無理だな。

「・・・陽・・・後は任せる」

「・・・ああ、きっと正太郎を復活させるよ。僕の大切なパートナーだからね」

正太郎も陽が入ればきっと立ち直ってくれるだろうな。・・・とりあえず2人は警備に誘うのはやめておこう。

「アンク・・・結局あの警備に行くのは俺達以外に決まっていないんだよな？」

「ああ。単位不足者は少なくないんだが・・・その依頼で輸送される物は怪人が狙ってくるほどの代物が運ばれるから危険だとか言う噂が立ってて受ける人が出てこないらしいぞ」

そんなやばそうな噂が立つ依頼を俺はなんとなくで受けちまったのかよ。急に嫌になってきちまったよ。そんなことを考えていると後藤がこっちの方に歩いてきた。

「遠山・・・お前も警備に参加するんだよな？」

「ん？ああ、そうだけど・・・」

「ならば俺も参加させてくれないか？・・・単位のこともあるが・・・やはり噂のほうも気になる」

おお！なんかいきなり頼もしい人物がやってきたぞ！！

「ああ！参加してくれ！噂を聞いて少し不安だったんだ」

「それじゃあよろしく頼む」

とりあえずこれで４人集まってくれて・・・あと２人か。できれば狙撃科で感覚が鋭いレキを誘って置きたいな。・・・正直・・・今回の依頼・・・なんか嫌な予感がする。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

「遅いわよバカキンジ！」

「あ、ああ・・・」

翌日、7日の午後7時・・・あれからアリアは帰ってこなかったため、もしかしたら祭りに来ないと思いながらも何となく足が進み緋川の神社にやってくるとアリアが約束通りにやって来ていた。アリアの格好はピンクと赤を基調とした浴衣で、所々に金魚の絵がついていて・・・かなりアリアに似合っている。

「あたしを30分も待たせるんじゃないわよ！次にこんなに待たせたら風穴ヴォルケイノ！」

え？・・・俺は5分前には着くようにしていたのに・・・それよりもアリアは30分も早くここに来ていたってことか。

「とりあえず・・・警備に行くか」

俺は一緒に周るかと言うのも恥ずかしかったために少し遠まわしに伝えると・・・

「そ、そうね！あくまで警備に、警備に」

アリアも理解したようで恥ずかしそうについてきた。それにして

も・・・なんで2回も言ったんだ?

「・・・その・・・ごめんね」

「ん?・・・いきなりなんだよ?」

アリアに綿飴や金魚すくいなどを教えながら中間ぐらいまで進んでいくと・・・アリアがいきなり謝ってきた。

「あたし・・・カナに勝てなかったせいでムシャクシャしていた。それでカナと一緒にいたキンジにあたっちゃったから・・・・」

ああ・・・そうゆうことか。

「別にそんなこと気にすんなよ」

「カナってやっぱりキンジの元カノなの?」

「この前も言ったけど違うって・・・」

「かと言ってキンジとカナが他人だとは思えないの・・・なんとなくだけど・・・」

やっぱりアリアはシャーロックホームズの子孫なんだな。俺と兄さんの関係を鋭い洞察力でほぼ言い当てやがった。

「キンジはカナと組みたいの?」

「いや、そんなつもりはない。レベルの差があり過ぎる。それに俺はそもそも4月には武偵を辞めるつもりなんだぞ」

「・・・・・・」

俺の言葉にアリアは黙り込む。・・・おそらく剣崎と同じで腑に落ちない気持ちがあるんだろうな。

「まぁ、それでも・・・もう俺はイ・ウーの3人も倒したんだ。俺もイ・ウーに狙われていると考えるのが自然だな。『武偵憲章8条　任務は裏の裏まで完遂すべし』・・・だから少なくともイ・ウーの件を解決するまでは何があってもお前とパートナーだから心配すんな」

「キンジ・・・う、うう・・・」

アリアはあからさまに嬉しそうな顔をしたと思うと・・・うれし泣きで涙を流し始めた。そうゆうの・・・どうすればいいのか困るんだけどなぁ・・・。

「おい、アリア・・・泣くなって・・・」

俺は泣き始めてしまったアリアを泣き止ませようとトラくんとは違うトラカンを取り出したその時だった。

「ウェ!?」

ん?・・・・ウェ?

「ウェェェェェイ!」

アリアは剣崎が戦闘中に言い放つ掛け声?のような奇声を上げな

がら暴れ始めた。

「服の中に、む、む、む、虫がぁぁぁぁぁ！？」

「おい！落ち着けアリア！」

仕方がないから慌ててるアリアのかわりに浴衣を緩めてやると・・・コガネムシのような虫が背中のほうから出てきた。・・・よく見るとコガネムシとは違う虫だな。

「まったく・・・何なのよあの虫は・・・」

アリアはその場にへた～、と膝をつけると・・・足元にアリアの武偵手帳が落ちた。そしてその武偵手帳は中途半端に開いて２０代ぐらいの若い男性の写真が見えた。その写真を見た瞬間俺は不知火がだいぶ前に言っていた「ライバルがいるかもしれないよ」という言葉を思い出す。

「アリア・・・その人は？」

俺は理由の分からない不安を感じながらアリアに写真のことを聞いてみる。この写真の人・・・・どこかで見たことがあるような・・・教科書でそっくりな人がいたような気がする。

「この人は・・・あたしの憧れの人・・・・そしてもうこの世にはいない人。・・・曾御爺様・・・シャーロックホームズ１世」

「シャーロックホームズ・・・１世・・・」

アリアの言葉に「この写真の人物が若い頃のシャーロックホーム

ズ1世か」という驚きと、よく分からない安心感を感じていた。

「尊敬してるんだな」

「ええ、心から・・・・この写真はお父様から頂いて、いつも持ち歩いているの」

「そんな大事なものを俺なんかが見てよかったのか？」

「キンジじゃなきゃ見せないわよ・・・キンジはあたしのたった一人のパートナーなんだから」

俺はアリアの優しい表情と一緒に放たれた言葉に反応に困りながらも連なる屋台の先へと進んで行くと・・・

「「いらっしゃいませ～！」」

右側の一番奥の屋台でマーボー豆腐の屋台をやっている2人の少年達と共に・・・

「・・・・・・よう、相棒」

「や・・・矢車？」

「・・・・・笑えよ・・・」

矢車がどういうわけかマーボー豆腐を作っていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「もっと・・・もっと稼ぐ・・・・」

俺が矢車と偶然出会った頃・・・カジノでは数日前にカザリにセルメダルを入れられた男はここ数日ずっと帰らずに稼ぎ続けていた。その金額はおそらく3億は超えていそうな感じだ。

「もっと・・・もっとだぁぁぁぁぁぁ！！」

チャリン、チャリン！

男はセルメダルに包まれると・・・ハイエナのようなヤミーに変わってしまった。

「これで準備は整ったね・・・」

男がハイエナヤミーとなる光景を見物していたカザリはクスクスと笑いながらカジノの外に出て行った。

睡眠と祭りとマーボー豆腐（後書き）

先輩ライダー、悪役ライダー、出して欲しい怪人は常に募集中です。

邪悪な風（前書き）

申し訳ありません。だいぶ遅くなってしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

「・・・・笑えよ・・・・」

連なる屋台の奥・・・ライダーベルトを捨てて何処かに行ってしまったはずの矢車が2人の少年と一緒に麻婆豆腐の屋台を開いていた。・・・・つーか、麻婆豆腐の屋台なんて始めてみたぞ。

「矢車・・・・何で麻婆豆腐の屋台なんてやっているんだ?」

「・・・聞きたいのか?」

正直・・・どうしてお前が屋台をやっているのか凄く気になる。隣にいるアリアも「何であんたがそんなことしてんの?」と言いたげな表情をしている。

「矢車のアニキは身寄りのない俺達のためにお金を稼いでくれているんだ!」

あ~。矢車は他人の兄弟に対しても優しいからな。こいつ等身寄りがないって言っているし・・・見過ごせなかったんだな。・・・矢車らしい。

「矢車の兄さんは身寄りのない僕達を追っていた怪しい人達を蹴り倒したんだ」

「怪しい人達?」

「黒スーツに骨みたいな線の付いた覆面を被ったような人達だった

ぞ！」

黒スーツに骨みたいな線の付いた覆面・・・それってもしかして量産型の簡易ガイアメモリで変わる‘マスカレイドドーパント’じゃないんか？・・・たしかに矢車は2年の仮面戦士科・・・いや、2年全体の中でもトップクラスの実力があるから生身でもマスカレイドぐらいの怪人は倒せると思うが・・・だとしたらどうしてマスカレイド達はこの兄弟を狙ったんだ？

「・・・お前ら少し店番してろ・・・相棒・・・ちょっとついて来てくれ」

「ああ、分かった」

俺と矢車は神社の裏の林に移動をしてから話を続ける。

「・・・俺の勘だが・・・」

矢車は深刻な顔をしながら屋台の方を眺める。

「たぶん身寄りがないコイツらを人身売買か実験の材料にでもしようとしてた連中だと思う」

まぁ・・・たしかにそれには納得だが・・・それにしても・・・

「矢車・・・だいぶ立ち直ったな」

「・・・あいつ等といたら・・・・昔の俺達を思い出した・・・両親が死んで俺とシュンが師匠・・・本郷さんに引き取られて・・・一緒に鍛えてもらって・・・マスクドライダーシステムを本郷さん

から貰って・・・そんな思い出をな・・・」

「だったら・・・その思い出を守りたいんなら弟を止めてやれよ。・・・こいつで・・・・」

俺は後藤から預かっていたライダーベルトを矢車に突き出す。ベルトを握った矢車は少し複雑そうな顔をしていた。

「・・・今はまだ決めなくていい。けれど俺達はお前が戻ってくると信じてるぞ」

俺はそう言い残してアリアと合流すると神社を後にした。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「おいキンジ・・・どうしてこんな状況になっちまったんだ?」

「・・・俺に聞くなよ」

俺は部屋に帰ってきて当たり前のようについて来たアリアを部屋に入れる。・・・そこまではよかったはずだ。

「くたばれ神崎・H・アリア!これは天誅!天誅なのです!あはっ!アハハハハハッ!」
ガガガガガガガッ!

俺とアンクの目の前ではＭ６０マシンガンという戦争用の機関銃をアリアに向かって乱射して俺の部屋をどんどん破壊する白雪がいた。どうして白雪がＭ６０を乱射するのか理由は分からないが・・・アリアの浴衣の結び目が絡まってしまったため解くのを手伝ってやるとアリアはベーコマのように回転した。すると星伽から戻ってきた白雪が突如部屋に入ってきて、俺とアリアの光景を目撃した白雪は「イケナイ遊び」と何度も呟いて・・・現在の状況に至る。

「キンちゃんとそうゆうことをするのは私ぃいいいい！」

ガガガガガガッ！

白雪のＭ６０の銃口は何故か突如アンクに向けられた。

「えっ？何で俺に向かってそれを向け・・・ぎゃぁぁぁぁぁぁ！？」

「アンクぅぅぅぅぅぅ！！」

どうゆう訳か白雪の乱射する銃弾はアンクだけに直撃し、俺はアンクの隣にいるはずなのに一発も飛んでこなかった。

「ん？」

窓から見えた女子寮のほうから一瞬だけ何かが輝いたものが見えた。・・・たぶんアイツだろうな。

・・・

「キンジさんは輸送車の警備の任務に参加する予定ですよね?」

「ああ、そのつもりだ。・・・メンツがまだ足りていないけどな」

「でしたら私も警備の依頼に参加させてください」

誘いたいとは思っていたがレキのほうから参加したいと言ってくるとは予想外だった。

「その申し出は嬉しいが・・・いったいどうしたんだ?」

単位も余裕で足りているはずのレキが自分から参加したいって言ってきたってことは・・・もしかしたら何かあるかもしれない。

「風を感じたのです。・・・熱く、乾いた・・・邪悪な風を・・・」

「・・・・・」

言葉の意味はよく分からなかったが・・・俺はレキの言葉で不吉な予言を聞いた気分になった。

俺は部屋に帰って来ると・・・あんなに散らかっていた部屋は片

付いていて、白雪は誰かと電話をしていた。

「うん。東京のほうは任せなさい。敵は蟲術を使います。霧雪と粉雪はちゃんと持ち場について星伽を守りなさい」

どうやら妹達と電話しているらしいな。・・・白雪の姉妹は実・義理を合わせ7人もいて白雪はその長女だ。

「妹達は元気か?」

俺は電話を終えたのを見計らって白雪に話しかけた。

「あ!キンちゃんお帰りなさい!みんな元気だよ!・・・ところで・・・お部屋をごめんなさい」

「気にしなくていい。だいぶ部屋を片付けてくれたみたいだし・・・それよりさっき電話で聞こえた敵って何なんだ?星伽は宗教戦争でもする気なのか?」

「そのことなんだけどね・・・・」

白雪はオドオドした様子になった。

「恥ずかしい話だけど・・・イロカネアヤメと星伽に封印されていたコアメダルが盗まれちゃったの」

「え?あのいつも持っている刀とあのオレンジ色の3枚がか!?」

イロカネアヤメは星伽の名刀だ。それにあのメダルも盗まれるってことは・・・そうとうヤバイことになりそうだな。

「それでね・・・星伽で悪い虫が見つかったの・・・こんなの・・・」

白雪はコガネムシのような絵をを俺に見せてきた。・・・それはまるで写真で撮ったかのようにうまい。

「これは使い魔・・・日本でいう式神なの。キンちゃんは最近こんな虫を見かけなかった？」

「見た。・・・今日・・・アリアと祭りに行ってきたときに・・・」

「アリアと・・・祭りぃ？」

その瞬間、白雪の中の何かのスイッチがオンになり黒いオーラが出始めた。・・・なんていうか・・・もうお前白雪じゃなく黒雪だろ。

「そういえばキンちゃんはアリア達と輸送車の警備をするんだよね」

「あ、ああ。そうだが・・・」

ホント、こいつは俺のことを何でも知っているな。・・・俺に人権ってあるのか不安になってきた。

「だったら私も警備に参加するよっ！人数も足りていないみたいだし・・・」

「まぁ、それは助かるけど・・・・」

アンクはどういう反応をしてしまうんだろうな。まぁ、これでと

りあえず人数は揃ったな。・・・俺はこんなにいいメンバーがいれば何とかなると・・・心の何処かで思い込んでしまっていた。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺が白雪と話しているのと同時刻・・・橋の真下の車の上に座っていた矢車のもとに俊がやってきた。

「やぁ兄貴。今度こそ殺させてもらうよ。・・・ついでにその車の中にいる兄弟は生きたまま連れて行くよ。組織の実験のためにね・・・」

俊はどこか空しそうな顔をしながら歩いてくる。

「シュン・・・お前はどうして俺を殺そうとするんだ?」

「・・・それが俺のいる組織・・・エヴィルの決断だからさ。・・・あの組織に俺は逆らえない。逆らっちゃいけないんだ」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＰＵＮＣＨ　ＨＯＰＰＥＲ』

俊はパンチホッパーに変身するとゆっくりと矢車に近づいていく。

「悪いが俺は殺される訳にはいかない。俺を信じてくれる相棒やこいつ等の思いを守るためにも・・・そしてお前に人殺しっていう罪を背負わせないためにもな・・・」

矢車は車の中で寝ている兄弟を1度見ると何処からともなくやってきたホッパーゼクターを掴んだ。
「お前を地獄から引っぱり出してやる。・・・・変身・・・・」
『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

矢車はキックホッパーに変身するとは橋の上に跳び上がる。そしてそれを追うようにパンチホッパーも跳び上がると・・・・

「ハァァァァッ！」

「・・・ハァッ！！」
ドガッ！

キックホッパーの左脚とパンチホッパーの右拳がぶつかり・・・火花が飛び散った。

「兄貴には分からないよ・・・俺の悲しみが・・・絶望がっ！！」
ドカッ！

「うっ！？」

パンチホッパーはキックホッパーの腹部を殴りつけながら叫ぶ。

「ああ！わかんねぇよ！・・・お前の味わったことなんて何1つ・・・だからしゃべってみろよ！！」
ドカッ、ドカッ！

キックホッパーは左脚でパンチホッパーの脚を払い転倒させるとかかと落としを決め込む。

「お前は俺のたった一人の兄弟なんだ・・・お前の苦しむのは・・・俺だって辛い。だから何があったのか言ってくれ。・・・・頼む・・・」

パンチホッパーの肩を掴んだキックホッパーの声はまるで仮面の中で涙を流しているように震えていた。

「・・・これを知ると・・・兄貴みたいな人は絶望するよ・・・・それでもいいの？」

パンチホッパーの言葉に・・・キックホッパーはゆっくりと頷いた。

「・・・あ～あ。兄貴を殺さないといけないのに・・・やっぱり俺には無理そうだ」

俊はパンチホッパーの変身を解除すると・・・その姿は緑色の昆虫のような怪人の姿に変わってしまった。

「シュン・・・その姿は・・・いったい？」

「・・・これが俺の味わった絶望・・・エヴィルは人間を無理やり改造して怪人にしたりするんだ。・・・俺も怪人にされちゃったんだよ。・・・時限爆弾を埋め込まれてしまって、もう長くない身体にね・・・」

「っ！？」

キックホッパーは驚きと悲しみの余り言葉を失った。

邪悪な風（後書き）

今回は募集した怪人がどのように登場させるのかの方法を明かさせてもらいました。

兄弟（前書き）

今回はかつてないほど矢車メインな話です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

兄弟

俺と白雪の話が終わり、寝室で寝ようとしているときも矢車兄弟の地獄は続いていた。

「・・・これで分かったよね兄貴・・・もう俺はこの地獄から抜け出せないんだ」

緑色の昆虫怪人となった俊はゆっくりとキックホッパーから離れる。

「たしかに怪人になっても武偵としてはやっていける。・・・だから1度はエヴィルから逃げ出そうとしたんだ。・・・だけど歌舞鬼やダークカブトとかに捕まって・・・爆弾のことを教えられて・・・逆らうことができなくなったんだ」

「シュン・・・・」

「そしてエヴィルの幹部は兄貴を危険分子と判断した。・・・・兄貴を殺す命令をしたんだ。・・・だから他の奴らに兄貴を殺されるよりだったら・・・・せめて俺の手で殺そうと思ったんだ」

俊は1度人間の姿に戻り後ろを向くと涙を流した。

「・・・お前が怪人になったから何だ。爆弾が埋め込まれているからって何だ。・・・お前が俺の弟・・・矢車俊っていう事実は変わらない。・・・俺は絶対にお前を地獄から引っ張り出す！」

「・・・兄貴・・・でもどうやって・・・・俺の中には爆弾が・・・・」

「怪人の姿になっていろ・・・・ポイントキックで、爆弾の部分だけを破壊する」

『ＤＥＮ　ＤＥＮ』

キックホッパーはミュージアム開発のギジメモリを使ったセンサーによる探索機能を兼ね備えたメモリガジェット‘デンデンセンサー’で爆弾の位置を探す。・・・するとデンデンセンサーから放たれている赤い光は左わき腹に反応した。

「・・・・そこか・・・・少し痛いが我慢しろ・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

中腰に構えたキックホッパーはライダージャンプで空中に跳び上がると、俊も怪人の姿に変わった。

「・・・・兄貴・・・信じてみて・・・・いいのかな?」

「・・・信じている奴の期待を裏切るような・・・・そんなことはもうしない。・・・絶対に成功させる」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「ライダー・・・・ポイントキック・・・・」

ドガッ！

「うっ！?」

エネルギーを一点に集中させたキックホッパーのキックは怪人態

の俊の左わき腹に直撃すると・・・・俊は後ろに倒れながら人間の姿に戻った。

「シュン!?」

「はは、大丈夫・・・・生きているよ・・・兄貴」

キックホッパーは急いで俊に近づいていったその時だった。

「裏切り者は粛正する!」

ブンッ!

「えっ!?」

「シュゥゥゥウン!!」

ドカッ!

キックホッパーは突然現れた何者かの襲撃から俊を庇って変身を解除された。矢車に攻撃を当てた相手はシオマネキを思わせる青い怪人がいた。・・・その怪人は仮面戦士科の教科書にも写真が載せられているほどの強敵だったショッカー怪人・・・シオマネキングだった。

「兄貴!大丈夫?」

「ああ、平気だ・・・・それよりアイツは・・・・シオマネキングだよな?」

シオマネキング・・・それはかつて本郷さんと一文字さん達が戦っていたショッカーが生み出した強力な怪人で左腕に電磁バサミを

持っていて、さらに炎上する可燃性の泡を噴射をして、かつてダブルライダーを苦戦させた。・・・ショッカーの中でも実力者だった怪人だ。

「・・・それをモデルにしたエヴィルの改良版だけどね。・・・兄貴・・・立てる？」

「・・・当然だ」

俊は矢車に手を差し伸べると・・・矢車はその手をしっかりと掴んだ。

「シュン・・・・エヴィルと戦ってみる気はないか？」

立ち上がった矢車はシオマネキングの方を向きながら俊にそう伝える。

「・・・・1度戦うと・・・エヴィルにずっと狙われ続けると思う。・・・・けれど俺達には一緒に戦ってくれる仲間がいる。・・・・武偵高の・・・・信じられる奴らが」

「地獄を抜け出したと思ったら・・・今度はまた違う地獄ってことか。・・・・それでも俺達にも掴める光があるんだね」

「・・・・一緒に行こうぜシュン・・・俺達にも掴める光を求めて・・・」

「兄貴となら・・・何処までも・・・」

二人は同時にホッパーゼクターを掴み取るとシオマネキングに向

かって走り出す。

「「変身っ！！」」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＰＵＮＣＨ　ＨＯＰＰＥＲ』

矢車と俊はそれぞれキックホッパーとパンチホッパーに変身するとシオマネキングにキックとパンチを決め込む。

「ぐっ！？・・・ヤグルマシュン！貴様！エヴィルを裏切るのか！！」

「ああ、ずっとあの組織には嫌気を差していたんでね・・・」

キックホッパーとパンチホッパーはそのまま力を込めてシオマネキングを吹き飛ばす。

「おのれ！こうなったら・・・」

シオマネキングは橋の下に降りると車の中にいる兄弟に向かって走り出す。・・・たぶん人質にする気なんだろうな。

「・・・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

ドカッ！

それを見たキックホッパーはクロックアップで瞬時に先回りをしてシオマネキングを蹴り飛ばした。

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「・・・こいつ等に手出しはさせないぞ・・・・ナメクジ・・・」

「アビー!!俺はシオマネキ怪人だ!!これでも喰らえ!!」

ブシャァァァ!

シオマネキングはキックホッパーに向かって可燃性の泡を噴射すると・・・その泡はキックホッパーを包みこんだ。

「アビー!アビ、アビー!」

「何笑ってんだナメクジ?」

「アビ?」

ドカッ!

シオマネキングはいつの間にか後ろにいたキックホッパーに蹴り飛ばされる。・・・どうやら泡に完全に包まれる前にパンチホッパーがクロックアップで助けたようだ。

「おいナメクジ・・・お前も改造されたとはいえ人間なんだろ?・・・自首する気はないのか?・・・そうしてくれれば・・・お前を倒さずに済むんだが・・・・」

「それはない!こんな素晴らしい力を手に入れたのに使わないなんてつまらない!!もっともっと人を殺して楽しみたい!!」

「・・・そうか。残念だ・・・・いくぞシュン・・・」

キックホッパーは少し悔しそうな声でそう言うとパンチホッパー

もゆっくり頷いた。

「「ライダージャンプ」」

『『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』』

キックホッパーとパンチホッパーは同時に高く跳び上がるとそれぞれの必殺技のためにエネルギーを溜める。

「ライダーキック！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ドカッ！

「ライダーパンチッ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

ドカッ！

「アビぃぃぃぃ！？」

キックホッパーのライダーキックとパンチホッパーのライダーパンチが直撃したシオマネキングは身体中から火花を飛び散らしながらも立ち上がる。

「これで・・・お前達はエヴィルを敵に回したぞ・・・・エヴィルは執念深い・・・せいぜい戦い抜いてみせ・・・る・・・」

ドオォォォォォォン！！

ダブルホッパーの必殺技を喰らったシオマネキングは最後までしゃべり終わる前に爆発した。

「・・・お前も・・・人の心を失わなければ・・・やり直せたか

もしれないのにな・・・」

「・・・兄貴・・・」

矢車達は変身を解除すると橋の下に降りて車の中にいる兄弟を見る。

「・・・こいつ等がいなかったら・・・俺は立ち直ることができなかったな・・・」

屋台で稼いだお金を兄弟の手に握らせた矢車は・・・教務科に連絡を取り保護をしてもらうように頼み、引き取ってもらうと置手紙を残して立ち去った。

「お別れを言わなくてよかったの兄貴?」

「そんなことを言うと・・・別れがつらいだろ・・・」

矢車達の後ろ姿は・・・まるでこれまでの2人の悲しみや絶望を払いのけるかのような月の光に照らされて輝いていた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

警備当日、俺達は黒い輸送車の後ろでライドベンダーを運転しながら警備をしていた。ちなみに安全（主にアンクの）ことを考えて俺の運転するベンダーの後ろに白雪、アンクの運転するベンダーに

アリア、後藤の運転するベンダーにレキを乗せている。

「アンク、今のところヤミーっぽい気配はあるか？」

「今のところは・・・・ないな」

「警戒しておくに越したことはないわ。だって輸送車で運ばれているのは・・・・」

「分かっている」

今回の輸送車の中に積まれている荷物・・・それはセルメダル５０００枚というグリードに狙われてもおかしくない代物だった。・・・おっさんの野郎・・・今まで言わなかったせいで不安要素たっぷりだぞ。

「キンジ・・・もし俺に何かあったら・・・迷わず俺のメダルでコンボを使え」

「何言ってんだアンク。・・・縁起でもない」

普段は自信たっぷりのお前がそんなことを言うなんて・・・・白雪にボコられ過ぎてさらにチキンになったのか？

「お前がやられる訳ないだろ？お前はグリードの中でも総合能力が一番高いんだから・・・」

「・・・どうしてか分からないが・・・今回はすごく嫌な予感を感じるんだ。・・・アークの時とは別の・・・・感じたことのない独特の殺気をな・・・・」

アンクの言葉の意味は・・・いまいち理解しにくかったが・・・・ブラドに匹敵かそれ以上の殺気をアンクが感じたってことは分かった。

「キンジさん。・・・警戒してください。よくない風を感じました」

「え？」

レキの発言を頭で理解するよりも早く、奴らは現れた。

「おっと・・・そこで止まってもらおうか！」

「その車の中のセルメダルを全て置いていきなさい」

「遠山！グリードだ！」

くそっ本当にアンクやレキの嫌な予感の通りグリードが現れやがった。・・・しかもウヴァ、メズール、ガメルの3体が同時にとはな。

「アリア、白雪、レキ、後藤、援護を頼む」

4人は頷くとそれぞれ銃や札を構える。そしてアンクは右腕だけを怪人態にした。

「行くぞアンク！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はアンクからメダジャリバーを受け取るとグリードに向かって走り出した。・・・・これがメダル争奪戦の序章に過ぎないことに・・・・この時の俺は気づいていなかった。

兄弟（後書き）

怪人募集は永続です。人気が高かった怪人は昭和怪人を優先しますが平成の怪人も出せるようにもします。

メダル争奪戦・序（前書き）

今回の物語はアリア原作とは掛け離れていますが時折、原作の内容も含んでいます。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
ゴリラコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

メダル争奪戦・序

オーズに変身した俺はアンクからメダジャリバーを受け取り走り出すと・・・ウヴァは角から電撃を放ってきた。

「あぶねっ！？」

俺はその電撃をかわしながらウヴァの目の前まで近づく。

「セイヤッ！」
ガギン

そしてウヴァに向かってメダジャリバーを振りかざすが・・・右腕の爪に止められてしまった。

「私は・・・一発の銃弾・・・」
ドン！

「うっ！？」

レキの撃った弾丸でウヴァが一瞬だけ怯んだ。・・・今だな。

「セイッ！」
ブンッ！

「きゃ！？」

俺はジャリバーをメズールに向かって投げつけて一瞬だけメズー

ルを怯ませる。

「ハァッ！」

ズシャッ！

そしてすぐさま両腕のトラクローを展開してウヴァをアッパーのような動作で切りつけた。

「ぐわっ！？」

「何やってるのよウヴァ！・・・オーズの坊やジャマをしないでくれるかしら？」

「そうゆうわけにもいかないだろ」

「そうか・・・じゃあ死ね！！」

バチバチッ！

ウヴァは角から電撃を放ちながら俺に爪を振りかざしてきたのを回避すると・・・今度はメズールの足技に蹴り飛ばされた。

「くっ！？」

こういう数の多いときは・・・このメダルだな。

『タカ！ウナギ！チーター』

俺はオーズ・タカウーターに変わると高速で移動してウヴァとメズールから距離を取って電気ウナギウィップを振るう。

「アリア！後藤！今のうちに輸送車を・・・」

「メダルうううう！！」

俺がウヴァとメズールを足止めしていると・・・ガメルは輸送車に向かって体当たりを仕掛けようとしていたのが見えた。くそっ！ガメルがいつの間にかウヴァ達といなかったから油断していた。

「バカキンジ！ちゃんと周りを見てなさいよ！！」

バンバンッ！

「させるかっ！」

バンバンッ！

アリアと後藤はガメルに銃を連射するが・・・まったく怯まずに突撃してくる。

「ちっ！！」

アンクは右腕に炎を灯してガメルに殴り掛かろうとしたその時だった。

「おっと・・・邪魔をされちゃあ困ります」

「なっ！？うわぁぁぁぁぁ！？」

突如割り込んできた仮面ライダーレイの奇襲を喰らったアンクは腕だけの怪人態だったせいでかなり吹き飛ばされてしまい、十数メートル先の川に落ちていった。その光景に少し驚いたガメルはレイの少し手前で止まった。

「ん～ん？なんだあ？おまえぇ？」

「カザリの使いですよ。ガメル君・・・でしたね。襲撃に手伝ってあげましょう」

「ほんとぉかぁ？」

レイはゆっくりと頷くと後藤はレイに向かって銃を向けた。

「貴様・・・仮面戦士の力を悪用して何をする気か？」

「悪用だなんてとんでもない。・・・私は人間が人間を超えるための・・・進化の過程を作るキッカケのお手伝いをしようとしてるだけですよ」

「それはどうゆうことだ？・・・答えろっ！！」

後藤は大声でレイに向かって叫ぶと・・・待ちきれなくなったガメルは再び走り出して輸送車に体当たりをしようとした。

「もう待てないぃぃぃ」

ドガっ！！

対怪人用に設計されているはずの輸送車の荷台の扉が吹き飛んでしまった。

「ふふふ。・・・ガメル君はお子様のようですね」

「くっ！？」

「油断大敵よ。オーズの坊や」
ブシャァァァァ！

「うわぁぁぁぁぁ！？」

レイはこの展開を先読みしていたかのようにクスクスと笑うのに気を取られてしまった俺は、ウヴァ達への警戒心が緩んでしまいメズールの高圧水流により変身が解除されてしまった。

「キンちゃん！？・・・伍法緋焔札」

何事かを呟いた白雪は御札を撒くと・・・札は白雪の前方で横一列に滞空し、一斉に燃え上がった。

「キンちゃん！伏せて！」
パチン！

両手の甲を合わせた白雪に呼応して火球と化した札が照明弾のようにウヴァ達に迫ると5方に分かれて火炎放射のような攻撃を放った。

「やってくれるじゃない星伽のお譲ちゃん！」
バシャァァァァ

メズールは川の水を操り札の炎を消火するとウヴァが真っ先に白雪に走り出す。

「火遊びする奴はおしおきだぁぁぁぁぁ！！」

「させるかっ！」

ブンッ！

「うおっ！？」

ドカッ！

俺はとっさに懐に忍ばせていたタカカンを缶モードでウヴァの足元に投げつけると、ウヴァはそれを踏んで足を滑らせ転倒した。

「・・・この隙にもう一度変身を・・・」

メダルホルダーからコアメダルを取り出そうとした次の瞬間だった。

「貰うよ・・・メダル！」

ドカッ

「うわっ！？」

突然のカザリの奇襲を喰らった俺はメダルホルダーを手放してしまい、その中のメダルが数枚辺りに散らばり、そのメダルの何枚かをカザリに奪われてしまった。・・・そして残りのコアメダルが入ったメダルホルダーは川に落としてしまい、俺はオーズへの変身が不可能になってしまった。

「キンジ！大丈夫？」

「ああ、何とかな・・・・」

「ウヴァ・・・メダルを」

「ああ！」

人間態に姿を変えたウヴァは輸送車の運転席の人を引きずり降ろし、自分が運転席に座って車を動かした。

「待ってぇぇぇウヴァぁぁぁ俺も乗るぅぅぅぅ」

ガメルは輸送車の荷台に飛び乗ると、そのまま輸送車は進み始めた。

「くっ!?待てっ!」

「・・・お供します」

後藤はレイから離れてベンダーに跨るとレキを後ろに乗せて輸送車を追いかけた。

「アリア!白雪!お前達も輸送車を・・・」

「何言ってんのキンジ!たとえあんたでもこの状況を1人で何とかできるはずがないでしょ!!」

アリアはそう言いながらカザリに銃を構えると、白雪も札を取り出した。

「そんなもので僕達を倒せると思っているの?」

「ちっ!・・・アリア、白雪!跳ぶぞ!」

「「えっ?」」

俺は二人を抱えると橋の上からアンクの落ちていった２０メートルほど下の川に向かって跳び降りた。・・・正直いってマジでこの高さから跳び降りるのは本当に怖い。

バシャァァァァン

「・・・まぁ、オーズは逃がしちゃったけど、とりあえずは目標達成だね」

「・・・カザリ・・・あなた・・・突然私達を集めたと思ったらセルメダルの強奪だなんてどういうつもり？・・・あなたの性格なら１人締めするはずでしょ？」

「別に・・・ただ・・・目的と言えば・・・・」

俺達が川に跳びこんだ後、メズールはカザリに向かって不振なことを告げるとカザリは特に動揺もせずにメズールに近づき・・・

ドスッ！

「こういうことかな？」

カザリはメズールに右腕を突き刺し・・・メズールのこアメダルを１枚残して奪い取った。

「カザリ・・・あなたいったい何を？」

コアメダルがほとんど奪われたメズールは怪人の姿を維持できなくなり青い服を着た中学生ぐらいの少女の姿に変わる。・・・その光景を見ていたレイはカザリのもとにゆっくりと近づいてきた。

「カザリ・・・必要なメダルは？」

「うん。メズールからはもういいよ。コアメダルが1枚だけのグリードなんてヤミー1体分にも満たないし・・・」

「そうですか。それでは次の作戦に移りましょう」

「そうだね」

変身を解いた白峰と怪人態のままのカザリはゆっくりと次の作戦の場所に向かって歩きだした。

・・・

先ほどのアリアらしい声がはっきり聞こえたと思ったら・・・俺の腹部にかかと落としを喰らったような激痛に飛び起きた。

「やっと目覚めたわね」

「アリア・・・よかった。無事だったのか」

アリアの後ろに見える岸にはまだ意識を覚醒させてはいない白雪が見えた。・・・見た感じ2人とも外傷がないように見える。・・・俺はそのことに安心していると・・・こちらに向かってずぶ濡れのアンクが歩いてきた。その手にはメダルホルダーとジャリバーが握られている。

「・・・まったく落し物をしてんじゃねえよ」

「すまないアンク・・・だいぶ盗られた」

俺はアンクからメダルホルダーを受け取って中を確認すると・・・サゴーゾコンボの3枚とライオンとバッタ、そしてタコの6枚しか入っていなかった。・・・アンクのタカのコアメダルまで盗られちまうなんてな。

「アンク・・・お前のタカのコアメダルも持っていかれた」

「チッ！大切に扱えって言ってただろ！・・・まあいい。メダルは取り戻せば済むことだからな。・・・まず今は・・・この状況を何とかするぞ」

「何とかって何だよ？・・・・っ！？」

俺達の周りには異様としか言えない男達がいた。・・・・全身を黒いペンキで塗ったかのようなそいつ等は上半身が裸で腰に茶色の布を巻きつけているようなだけのような奴らだった。だが一番異様なのは頭部だ。・・・・その男達の頭部はジャッカルというイヌ科動物になっている。

「さしずめ・・・イヌ怪人のジャッカル男ってところか」

さらに付け加えるならばジャッカル男達は全員半月型の斧を持っていてヤバイ感じが滲み出ている。

「気をつけろキンジ・・・こいつ等は‘蟲人形’っていうクグツとかシキガミって言われる部類のやつ等だが生身で触れると呪われるぞ」

呪いか・・・胡散臭いが・・・・アンクが言うってことは嘘じゃあないな。

「生身で戦わなければいいんでしょ。だったら・・・」

チャキ　バンッ！

アリアは銃を構えた途端にジャッカル男の1体の頭を撃ちぬいた。・・・・これはさすがにグロイだろ。・・・・そう思ったがすぐに土になって崩れたので少し安心した。

「こら、バカキンジ！ぼさっとしていないであんたも戦いなさい！」

「分かったよ！！」

バンッ！

俺は近づいてきたジャッカル男の1体を銃で撃ちぬくと腰にオーズドライバーをつける。

「変身！」

『ライオン！ゴリラ！バッタ！』

いつものタトバに変身できない俺はとりあえずオーズ・ラゴリバに変身してジャッカル男に戦いを挑み始めた。・・・・たしかに人の形をしているが、こいつ等はただの人形だったので倒した時の罪悪感は少なかった。

メダル争奪戦・序（後書き）

次回はメダル争奪戦の後半を予定しています。もしかしたら明日は更新できないかもしれませんが・・・とりあえずがんばってみます。

メダル争奪戦・終（前書き）

今回もコアメダル争奪戦です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

ライオンコア
サイコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア
タココア

メダル争奪戦・終

俺は最後のジャッカル男に向かってジャリバーを振りかざす。

「セイヤァァァッ！」

ズシャ！

最後の1体を倒した俺は変身を解除して回りを見渡してみるが・・・・とりあえずそれらしい奴らは見えないな。俺は気を失っている白雪を守っていたアリアの方を向く。

「アリア、そっちは大丈夫か？」

「ええ、白雪も大丈夫よ」

「そうか。よかった・・・・っ！！？」

俺はこのタイミングでアリアの夏服が・・・・水に濡れて透けていることに気づいてしまった。そしてこのタイミングであのモードに俺は変わってしまった。

ドクンッ！

「・・・キンジ・・・どうしてこのタイミング何だよ。なるなら戦っているときにはなっていろよ」

「仕方ないだろ・・・簡単になれるものではないんだから・・・」

まさかアリアの塗れて透けている制服を見ただけでヒステリアモ

ードになっちまうなんてな。・・・そういえば最近アリアでヒステリアモードになりやすいな。・・・いったいどうしたんだ俺？

「アリア、白雪を任せるよ。俺とアンクは輸送車を追うことにする」

俺はスタッグフォン（俺バージョンのレッドカラー）を取り出すと、正太郎達のマシンを呼び出すパスワードを押す。・・・まぁ、一応借りてもいい約束をしているし使わせてもらうぜ。

「・・・とりあえずレキ達に合流しなさいね」

「分かっているよ・・・さて・・・」

ビュウウウウウン

ハードボイルダーの後方部の換装ユニットを飛行用のタービュラーユニットに変えた、ハードタービュラーに飛び乗った俺とアンクは輸送車を探すために空に飛んだ。

「アンク、輸送車が何処を動いているか分かるか？」

「いや、ウヴァ達の気配はない。たぶん奴らも今は人間の姿をしているな。・・・念のためにタカを飛ばしておいて正解だった」

『ＰＩＩ！』

アンクの呟きとともにタカカンがこちらに飛んできて俺達を誘導し始めた。・・・後藤達も心配だし・・・少し急ぐか。

「アンク、少しスピードを上げるぞ」

「しゃべってる暇があったら急げ！」

俺は生身で耐え切れるギリギリのレベルでスピードを上げた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

後藤とレキを振り切ったウヴァは近くの廃工場に輸送車を止めると近くの壁によりかかった。

「メズール、まだかなぁ」

ガメルは近くの倒れている鉄柱に座ろうとすると・・・ダメージでふらふらになったような動きでカザリがやってきた。

「ウヴァ・・・・」

「カザリ・・・どうした？」

ふらふらとしているカザリにウヴァは近づく。

「やられた・・・・メズールも・・・」

「えぇ！？・・・メズール、メズ～～ル～～！！」

カザリの話を聞いたガメルは慌てて外に向かって走り出すと、カザリは輸送車に寄りかかった。

「もうそこまでオーズが・・・」

「クッソォォォォ！オーズゥ！！」

「ふふ・・・」

ウヴァは騙されているのにも気づかずに激怒すると、カザリはその隙に爪を立ててウヴァを切り付けようとした。

「っ！？・・・」

ガギン！

「うわっ！？」

その動作に気づいたウヴァはすぐさま怪人の姿に変わりガードするも不意を突かれてしまったせいでダメージを受けてしまい身体から数枚のセルメダルが散らばりながらその場に倒れた。

「カザリぃ！貴様ぁ！」

「あ～あ、失敗か」

「まさか・・・メズールも・・・」

ウヴァは起き上がりながらカザリに構える。しかしカザリは構えもせずにゆっくりとウヴァに近づく。

「ねぇ、ウヴァ。ただメダルを集めて完全体になって・・・それで世界を食べるだけじゃつまらないと思わない？」

「何ぃ？」

「もっと進化するべきなんだよ・・・僕達グリードもね」

「貴様ぁ！・・・ぐっ！？・・・・この恨み・・・いつか晴らしてやる・・・」

ウヴァはそういい残すとセルメダルが漏れているわき腹を押さえながらその場から急いで離れていった。

「虫頭の君にはできないでしょ。・・・まあいいや。・・・・後はガメルを連れて帰ってドクターの実験を・・・」

「動くなっ！！」

チャキッ！

そしてウヴァの出て行った反対側の扉からやって来た後藤とレキはカザリを見つけると真っ先に銃を向けた。

「後藤さん、私の残弾は残り４発しかありません。キンジさんが到着するまでグリード相手に持ちこたえられるかは難しいです」

「・・・ライフルで４発か。生憎俺は拳銃で３発だ。・・・迂闊にあいつを撃つのは得策じゃないな」

「ではどうします？」

「こうするっ！！」

バンッ！　ガシャァァン！

後藤は天井にぶら下がっているチェーンを撃つと、それに吊るされていた鉄柱などがカザリに向かって落ちた。

「今の隙に輸送車を・・・」

「おっと！・・・そうはさせませんよ」

輸送車の運転席に乗ろうとした後藤だったが、後藤の前に白峰が現れた。

「くっ！？」

「カザリ・・・そろそろサボってないで出てきたらどうです？」

ビュウゥゥゥゥゥ！

白峰はカザリの埋まった鉄柱に向かって話しかけると、突如強風が巻き起こり鉄柱を吹き飛ばした。

「白峰。少しぐらい休憩しようよ。どうせもう彼らには何もできないでしょ？」

「くっ！？・・・万事休すか・・・」

俺は後藤とレキは完全に詰んでしまって判断に迷う状況を・・・ようやく視界に捉えた。

「そんなことはないぞ・・・変身・・・」
『サッゴーゾ・・・サッゴォォゾォ！！』
ドンッ！

俺はいきなりオーズ・サゴーゾコンボに変身して戦場となっている廃工場のド真ん中にハードタービュラーを着地させた。

「アンク！」

「・・・今度は落とすなよ」

俺はアンクからメダジャリバーを受け取るとバッタやタコよりは遅いが生身よりは速いゾウレッグでカザリ達に向かって走り出した。

「まったく・・・気を抜くから妨害が入るんですよ」
『変身！　ウェイク　アップ！！』

白峰は変身と同時にウェイクアップをして巨大な爪を構える。

「別にいいじゃん。計画に狂いはないんだから・・・」

カザリも両腕の爪を伸ばしてこちらに向けてきた。・・・正直、いくらヒステリア・オーズでサゴーゾコンボになっていても相手はグリードのカザリと元・武偵の仮面戦士であるレイだから・・・勝てるかと言われたら難しい。

「さぁ、華麗に激しく！」

「セイッ！」
ガギン！

俺はレイの爪をゴリラアームで防ぐが・・・爪を止めたところがかすかに凍った。それに気づいた俺はレイから距離を取ろうとすると・・・

「フンッ！」
ビュウウウウウ！

カザリは強風を俺に飛ばしてきた。

「くっ！？」
チャリン
『シングル・スキャニングチャージ！』

「セイヤァァァッ！！」

俺はとっさにジャリバーにセルメダルを入れて剣道の突きの動作で強風を相殺するが・・・

「ハァッ！」
ドカッ！

「ぐっ！？」

機動力があるカザリとそれがないサゴーゾコンボでは分が悪くて俺は押され気味
になった。そんな状況の俺にさらに追い討ちをかけるようにガメルがやってきた。

「あ！・・・オーズだぁ」

「ガメル！オーズを倒せばメズールが喜ぶ！」

「メズールがぁ？・・・じゃあやるぅ！！」

チャリン！

ガメルは自分にセルメダルを入れて怪人の姿に変わると、黒く大きな鉄球を持ったリクガメのようなヤミーがガメルの身体から出てきた。

「いくぞぉ！」

ドカッ！

「おっぉぉぉぉぉ」

ドカッ！　ドガッ！

「くっ！？」

ガメルとリクガメヤミーは同時に俺を殴りつけると、リクガメヤミーはさらに追い討ちとして鉄球を俺にぶつけてきた。・・・3体の怪人と1人の仮面戦士か。この前の仮面戦士3人を食い止める時よりも辛いな。

「キンジ！サゴーゾじゃ動きが鈍いから頭をライオンに変えろ！」

「だがそれだけじゃ速さが足りない・・・どうすれば・・・」

「だったらこれを使え！」

俺はサゴーゾの防御力で何とか凌いでいるのが精一杯なのにな・・

・そう思っていると後藤が俺に向かって黄色いメダルを投げてきた。
・・・トラのコアだ。

「メダルが奪われそうな時に何とかそれだけは掴めた！」

「助かったぜ後藤！」
『ライオン！トラ！ゾウ！』
ピカッ！

俺は後藤の投げて来たトラのコアメダルをキャッチするとすぐさまライオネルフィッシャーでレイとガメル、リクガメヤミーの動きを封じてゾウレッグのかかと落としを決めようとするが・・・

「残念だったね！」
ドカッ！

「うわっ！？」
チャリィィン！

ライオネルフィッシャーが効かなかったカザリの攻撃を喰らいゴリラとゾウのコアメダルが空中に弾かれた。

パシッ！
「はい、コンボは終了。これで詰んだねオーズ」

空中に飛んだ2枚をキャッチしたカザリは勝ち誇ったようなしゃべり方でトドメを刺そうとしてきたが・・・まだコンボはできる。
・・・さっきぶつかった時に掠め獲ったメダルがあるからな・・・。

「そうでもないぞ？」

「ぐっ！？・・・まさか・・・」

カザリはようやく自分の身体の違和感に気づいたらしく腹部を押さえる。

「そうゆうことだ！！」

『ライオン！トラ！チーター！ラッタッ！ラッタッ！ラトラ～タ～～！！』

「オオォォォォォォォォォ！！」

俺はラトラーターコンボに変身すると全身から高熱を放って僅かながらもカザリを怯ませる。

「くっ！？・・・白峰、ここはガメルを連れて退くよ！」

「そうした方がよさそうですね。・・・ガメル君、乗ってください！」

「わかったぁぁぁ！」

レイは変身を解いて輸送車の運転席に乗り込むと、カザリとガメルも乗せて立ち去ろうとした。

「キンジ！追え！」

「ああ！」

俺はチーターレッグのスピードで輸送車を追いかけようとすると・・・

「ガァァァ！！」
ドン！　ドン！　ドン！
「なっ！？」
リクガメヤミーは頭や両手両足をしまって高速回転して俺を追い越すと、俺に向かって火球を無数に飛ばして来た。
「くっ！？・・・後藤！ベンダーを借りるぞ！」
『トラカン』
ブンッ！
『ガアァァァァァオォォォ！！』
俺は携帯していたトラカンを後藤の乗っていたライドベンダーに投げつけてトライドベンダーにするとすぐさまそれに跳び乗った。
「行くぞ、トライド！」
『ガアァァァァァオォ！！』
トライドは高速回転しているリクガメヤミーに向かって飛び上がると動きを止めるように噛み付いた。
「グオォォォ！？」
『ガアァァァァァ！！』
トライドはその強力な馬力でリクガメヤミーの回転を止めると、

思い切り地面に叩きつけた。

「これで決め・・・うっ！？」

俺はスキャニングチャージをしようとトライドから降りた途端、2回もコンボを使用した反動でその場に倒れてしまった。

「ガァァァァ！」

ドンッ！

リクガメヤミーは背中の甲羅のせいで起き上がれないながらも高速で回転してこっちに体当たりをしようすると・・・タイミングよく銃弾が頭をしまっている穴に撃ち込まれた。

「ガッ！？」

「・・・キンジさん、これをお使いください」

レキはリクガメヤミーを射撃するとこちらに向かって赤いコアメダル・・・アンクのタカのコアメダルを俺に向かって投げつけてきた。

「先ほどキンジさんがグリードのカザリを攻撃したときにこれも落としていたので拾っておきました」

「・・・助かった。ありがとうレキ」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

『トリプル・スキャニングチャージ！！』

「セイヤァァァァァ！！」

俺はレキからタカのコアメダルを受け取るとすぐにタトバに変わり、ジャリバーに3枚のセルメダルを入れてスキャンをして・・・リクガメヤミーを斬った。

「ガァァァァァ！？」

ドオォォォォン！

リクガメヤミーの爆発の中から飛んできたセルメダル1枚をキャッチした俺は・・・そろそろコンボの反動に耐えるのに限界が来て変身が強制解除され、その場に倒れてしまった。

「キンジ！」

「キンちゃん！」

うっすらとした意識で俺はこちらに向かってくるアリアと白雪の姿を見た。・・・二人とも無事らしいな。よかった・・・。まだヒステリアの血の流れで今回の警備を振り返ってみると、失敗に終わったと言えばたしかにそうだが・・・そもそもこの警備の依頼自体に違和感を感じるな。・・・そう考えながら俺は意識を失った。

メダル争奪戦・終（後書き）

次回は暴走編・・・と行きたい所ですが、正太郎復活編を先にしようと思います。・・・それはそれとして近いうちに人気投票をやってみたいと思います。くわしい詳細はまた後日。

君の戦う理由（前書き）

今回、キンジは何もしません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
トラコア
チーターコア
バッタコア
タココア

君の戦う理由

俺が輸送車の警備の際にコンボを使用して武偵病院に運ばれたその夜、正太郎と陽が見舞いにやってきていた。

「キンジ・・・お前はすごいな。・・・自分の兄さんが人殺しをしにくるような道に変わっていたのに・・・それに戸惑っていても人を守るために戦えるってのがよぉ・・・」

正太郎は苦笑いをしながらニット帽で顔を隠す。

「正太郎、キンジ君が戦う理由は分かっているよね？」

「ああ、分かってる。・・・助けられるかもしれない命に手を伸ばすため・・・だろ」

「それじゃあ君は何のために戦うんだい？・・・武偵だから・・・仮面戦士だからじゃなく・・・君自身としての答えだ」

「俺の・・・答え・・・そうだったな。俺の答えは・・・・・」

すべてを失ったような表情をしていた正太郎の眼に・・・光が見え始めた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

俺達が輸送車の警備を終えて3日が過ぎた。・・・いくらコンボに少しずつ慣れてきた俺の身体だが、さすがにコンボ2回はきつかったようで俺は武偵病院で眠り続けていた。そして俺の病室ではアリアと陽が何やら重苦しい雰囲気で話していた。

「そうか。・・・だいたいのことは後藤くんから聞かされていたけど今回の警備でそんなことがあったんだね」

「ええ。カザリとかいうグリードと白峰の動きには警戒しておいた方がいいわ」

どうやらアリアは陽に警備で起きた襲撃のことを説明していたらしく、イ・ウーとは違う第3勢力の存在に感づき始めていた。

「ところでライト・・・さっきから気になっていたんだけど・・・その子・・・いったい何なの?」

『ギャァァォ!』

アリアが指を指したテーブルの上には白い恐竜のような小型ロボットが俺に向かって吠えていた。

「これかい?・・・これはファングメモリ・・・W第7のメモリとして設計されたメモリなんだけど・・・正太郎がまだあの状況だから1回も使用できていないんだよね」

「メモリ?・・・メモリガジェットみたいなその子が・・・」

『ガゥ!』

アリアは関心したような顔でファングに近づこうとすると・・・それを不快に思ったのかトラくんがアリアのポケットから勝手に飛

び出て変形し、ファングと向き合った。

『ガゥ！ガゥ、ガゥ！！』

『ギャオォォォォォ！！』

『ガゥ！？』

ファングの咆哮に驚いた様子のトラくんは慌てて俺の病室から出て行った。

「トラくん！？ちょ、どこ行くの！」

「あ～あ。嫉妬かな・・・ん？」

『ｐｐｐ』

アリアがトラくんを追いかけていくと、陽の携帯に１通のメールが届いた。

「・・・正太郎からだ・・・え！？」

陽はメールの内容を確認すると・・・メールには予想外の内容が書かれていた。

『姉貴と会ってくる』

その一言だけが書かれていたメールを見た陽は急いで正太郎を探しに出て行った。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

時間帯的に人がいないラークン台場。正太郎と成美さんが変身するザビー・ライダーフォームは数メートル離れて向き合っていた。

「正太郎・・・もう武偵を辞めるのだと思っていたぞ」

「んなことしねぇよ。いつまでもへこたれてるのはキャラじゃないんでな。・・・陽やキンジにこれ以上迷惑はかけられねぇし・・・」

「姉貴、どうして俺達やアリアを狙ってたんだよ?」

「・・・・・・」

「言うつもりはない・・・か」

ガリッ!

正太郎はコーヒー飴を噛み砕きヒステリアになると、腰にロストドライバーをつける。

「俺には姉貴の考えが分からない。だから俺なりに考えてみた。姉貴は『罪を憎んで人を憎まず』って信念を持っていた人で、たとえ犯罪者でも人を傷つけない主義だったはずだ。・・・そんな姉貴が人を殺しに来るっていうなら・・・俺が命がけであんたの教えを守る。それがここ数日落ち込んだり悩んだりして出した俺の結論だ」

『ＪＯＫＥＲ』

「俺、変身」
『ＪＯＫＥＲ』

ジョーカーに変身した正太郎はゆっくりとザビーに向かって歩き出す。

「見せてみろ正太郎・・・お前の実力を・・・」

「いくぜ？・・・オラァァッ！！」
ドカッ！

ジョーカーは右手を顔の近くでスナップさせるとザビーの顔に拳をぶつけた。

「たしかにいいパンチだが・・・まだ軽いっ！」
ドカッ！

「ぐっ！？」

「・・・ライダースティング」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

ザビーのアッパーカットで怯んだジョーカーはさらにライダースティングという追い打ちを喰らい近くの噴水にぶつかる。

「まだまだぁ！！」

「遅いっ！」
ドカッ！

ザビーに向かって再び走り出したジョーカーだったが・・・あっさりとストレートを喰らい膝をつく。

「ぐっ!?・・・・まだだ!」

ドカッ!

「まだ・・・戦える・・・」

ジョーカーは何度やられても立ち上がりボロボロになりながらも戦いに挑もうとする。

「正太郎・・・お前に足りないものが何だか分かるか?・・・その答えが分かっていないと今のお前に私は倒せない」

ザビーはまるでジョーカー・・・正太郎のすべてを見通しているかのように語りかけると、ジョーカーは両手の拳から力を抜いた。

「あんたに言われなくても・・・そんな答えは分かっている・・・分かっているからこそ・・・今は1人であんたをぶん殴りたかったんだよ。俺の戦う理由を確かめたかったからな・・・」

ブゥゥゥゥン

ジョーカーのメモリをロストドライバーから外して変身を解いた正太郎の後ろに1台のライドベンダーが止まった。

「やぁ、待たせたね正太郎」

「いや、別にそれほど待ってはいねぇよ」

ベンダーに乗ってやってきた陽は正太郎の隣に並ぶ。

「正太郎・・・君の戦う理由・・・もう一度聞かせてくれ」

「・・・キンジは助けられる命のために、矢車は自分の信じるもののために戦っている。それなのに俺は今まで戦うことを当たり前・・・と思っていた。だけどそれは違った。俺の本当の答えはそんなんじゃない。俺は2人と違って単純な答えだ。・・・俺は信じてくれる奴らがいるから・・・そいつ等を守るために戦う。それだけだ」

『ＪＯＫＥＲ』

そう告げた正太郎は腰からロストドライバーを外すとダブルドライバーをつけてメモリを起動した。

「正太郎・・・もう1度確認しておきたい。・・・悪魔と相乗りする勇気はあるかい？」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

陽の突然の質問に正太郎は少し驚いたような顔をしたが・・・すぐに少し笑っているような表情になった。

「フッ・・・当然あるに決まってんだろ」

「そう答えてくれると思っていたよ。ならいけるよね?僕たちの・・・」

「ああ。俺達2人の・・・」

「「変身!!」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

陽がその場に倒れると共に、正太郎に意識とメモリが転送され、正太郎は2人で1人の仮面戦士、仮面ライダーWに変身した。

「姉貴・・・いや、仮面ライダーザビー明智成美！」

Wはザビーを指差すとあの台詞を告げる。

「「さぁ、お前の罪を数えろ」」

「良いだろう・・・・・今度はお前達の力を見せてもらうぞW！」

「「ハァッ！」」

Wはザビーに向かって走り出すとすぐさま回し蹴りをするが、防がれてしまう。

「フンッ！」

「「ハァッ！」」

Wはザビーの拳をギリギリでかわすとカウンターでパンチを決めた。

「ギィ！」

そんな真剣勝負に水を刺す1体の怪人が近づいていた。

「もっと・・・もっとだぁぁぁぁぁ！！」

ハイエナヤミーだ。・・・ハイエナヤミーはその顎を広げ2人の仮面戦士に突撃しようとすると・・・

チャリン！　チャリン！　ドン！　ドン！

「ギィ！？」

突如として飛んできた金色に輝くメダルのような弾丸に阻まれた。・・・その弾丸の飛んできた先には・・・ミルク缶を背負いながら緑と黒の色をした独特の銃を持った伊達さんがいた。

「いけないねぇタヌキちゃん。彼らの戦いに割り込むのは野暮ってもんでしょ？・・・かわりに俺が相手になってあげるよ・・・変身！」

チャリーン！　カポーン

伊達さんは真ん中にカプセルのようなものがついたベルトを腰に巻きつけると1枚のセルメダルを指で弾き上に飛ばすと、すぐさまそれをキャッチしてベルトに入れ、黄色いレバーを1回転させると、黄緑色の光とともに10個のカプセルに身体を包まれ・・・銀と黄緑が目立つ仮面戦士に変身した。・・・どうでもいいがそのヤミーはどう見てもタヌキじゃなくハイエナだ。

「さてとタヌキちゃん。仮面ライダーバースの性能を見せてあげるぞ」

Wとザビーが戦うすぐ近くで・・・伊達さんの変身する仮面戦士‘仮面ライダーバース’の戦いが始まった。

君の戦う理由（後書き）

１話で正太郎復活編を終了させようとも思ったんですが、それだと今日中に仕上がりそうになかったので次回に続けます。それと人気投票ですが、期間は８０話までの間で、それぞれ違う人物なら１人３回まで投票できるようにします。・・・もし、メインキャラじゃない人物にそれなりに票が入っていたらそのキャラの登場回数をがんばって増やしてみたいと思います。

優しさは弱さじゃない（前書き）

そろそろオーズとしての話にもオリジナルの展開をしてみようと思います。それと前回からスタートした人気投票は８０話までの間、それぞれ違うキャラなら１人３票までＯＫです。

優しさは弱さじゃない

Wとザビーの戦いはWの方がやや優勢だった。

「「ハァッ！」」

ドカッ！

「くっ！？・・・これがWの本当の実力か・・・ならば！」

ババババッ！

Wの跳び回し蹴りを喰らって近くの壁に叩きつけられたザビーはザビーゼクターの針芯から針を発射してきた。

「正太郎、メモリチェンジだ」

「ああ、これだな」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

ガギン！　ガギン！

ヒートメタルに変わったWはメタルシャフトで針を叩き落としてザビーの攻撃を防ぐ。

「今度はこちらから攻めよう」

「ああ、お次はこれだ」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

ダダダダッ！

さらにルナトリガーに変わったWはトリガーマグナムから不規則

に動く光弾を発射してザビーに着々とダメージを与える。

「くっ！？・・・思っていた以上の戦闘力だ」

「まだまだいくぜ？」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

再びサイクロンジョーカーに変わったＷはすぐさま距離を詰めつつ腰のマキシマムスロットにメモリを差し込む。

「「サイクロン、ジョーカーキック！」」

Ｗはサイクロンのマキシマムで風を纏った跳び蹴りをザビーに決めて吹き飛ばすが・・・ザビーは何事もなかったように立ち上がる。

「キックがあたる寸前に腕だけをプットオンして受け身をされたね。やはり一筋縄ではいかないようだ」

「・・・これだけできれば・・・これからも問題ないだろうな」

ザビーはそう言うとそれまでボクシングの構えをしていた両腕をだらんを下ろした。

「正太郎・・・お前の足りないものは何だか聞かせてみろ」

「・・・俺の足りないもの・・・それは自分の意思だ。周りに流されるようにしてるだけじゃなく自分で決断しないといけないことだ。自分で決断しないと誰も守れないからな・・・」

「・・・それでいいんだ正太郎。その答えをお前の口から聞きたか

った」

ザビーの変身を解除した成美さんは・・・Wに向かって微笑んでいた。・・・そこでようやくWは成美さんの真意を理解した。

「姉貴・・・あんた最初から俺達を試すために・・・」

「・・・それはどうかな?・・・あと、お前達はまだ変身を解くな」

Wはベルトからメモリを抜き変身を解除しようとすると成美はそれを止めて近くの物陰のほうを振り向いた。

「・・・そこにいるのは分かっている。・・・そろそろ出てきたらどうだ?」

「・・・やはりザビーの変身者は気づいていたか」

すると物陰からは赤い身体をした消火器を思わせる怪人がでてきた。

「あの怪人は!?」

「ショオカキング・・・か。そんな怪人までエヴィルは作るようになったのか」

ショオカキング・・・かつて仮面ライダースーパー1が戦った組織‘ジンドグマ’の怪人の1体で武器は口腔のマグナムガンと左腕からの溶解ガスを使用していた怪人だと・・・仮面戦士科の教科書には記載されている。

「姉貴・・・エヴィルっていったい？」

「エヴィルは私ですらほとんどの情報が掴めていない仮面戦士の力を悪用する輩が集まった秘密結社だ。・・・分かっていることは・・・人間を改造してかつて仮面ライダー達が戦った怪人にする。・・・それ以外の情報は知っていない。人員がどれほどいるのかもな」

そんなエヴィルの非情とも言える行動に・・・W（正太郎）は怒りを抑えていられるはずもなく・・・

「人間を・・・改造だと？・・・そんなことが許されていいはずないだろ！」

「それを平気で行うのがエヴィルだ・・・そしてエヴィルに従う怪人達は改心なんてしない。・・・1人例外はいたがあれは特例だ。・・・正太郎・・・非情になれとは言わない。だが改造されてしまった人々を解放してやるためにもエヴィルの怪人を倒す勇気を持て」

『ＨＥＮＳＩＮ』

『ＣＡＳＴ　ＯＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＷＡＳＰ』

成美さんはザビー・マスクドフォームに変身するとすぐにキャストオフをしてライダーフォームに変わる。

「かつての名探偵、明智小五郎の子孫である仮面ライダーWの左側、明智正太郎とその姉、明智成美。お前達にはエヴィルの幹部である死郎様より抹殺命令が出ている。ここで死んでもらうぞ」

「ずいぶんおしゃべりな怪人だな。おかげで今まで掴めなかった幹部の1人の名前がわれたぞ」

ザビーは挑発気味にショオカキングに語りかけるが・・・ショオカキングはそれを鼻で笑った。

「名前がわれたところでどうなる。お前達はここで死ぬのだ!!」

「貴様にそれができると思うか？」

ザビーはライダースティングをする構えをすると、Wもザビーの隣に立った。

「姉貴・・・俺らも戦うぜ。・・・怪人にされてしまった人を解放してやるためにもな」

「そうか。・・・あの怪人の溶解ガスは厄介だ。それを使われる前に倒すぞ」

「ああ、やってやるぜ!」

「これでも喰らえぇ!!」

ドンッ！ドンッ！

ショオカキングはマグナムガンをWとザビーに発射するが・・・その狙いを呼んでいるかのようにWとザビーはその攻撃をかわして距離を詰める。

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

「ライダースティング!」

ショオカキングはザビーのライダースティングを腹部に喰らい吹き飛ばされるとと・・・

「「ジョーカーエクストリーム！」」

「げっ！？」

ドオォォォォン！

そこにWのジョーカーエクストリームが直撃して爆発した。

「・・・すまねぇな。・・・こんな方法でしかあんたを解放できなくて・・・」

正太郎は変身を解除するとニット帽で顔を隠す。

「正太郎。優しさは弱さじゃない。それさえ覚えていればお前はもっと強くなれる。・・・それと・・・小林陽だったね。・・・こんなバカな弟だがこれからもよろしく頼む」

「貴女が言うまでもなくそのつもりさ」

「最後にキンジ君が目覚めたら伝えてくれないか。カナ・・・・・・金一は私と違って「第二の可能性」が潰えれば本気で神崎・H・アリアを殺しに来る。そうでなかったとしても彼女が狙われていることに変わりはないと・・・・・・」

「姉貴、それってどういう・・・・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「あっ!?・・・・行っちゃった」

ゆっくりとニット帽をかぶり直した正太郎は僅かに目を赤くしながらも武偵高に向かって歩き出した。

「姉貴ならまた何処かで会えるだろ。・・・さぁて!腹も減ったしクスクシエにでも行くかぁ!!」

「たまには正太郎が奢ってくれ。最近毎回僕が奢っているじゃないか」

「いやぁ・・・この前、平賀さんに換装ユニットを作ってもらったせいで金欠なんだって。だから今日も奢ってくれよ。頼むっ!」

「まったく・・・しょうがないねぇ」

正太郎と陽を照らす夕焼けは・・・2人を導くような光の道を描いていた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

正太郎達が成美さんと共闘してショオカキングを倒す数分前・・・伊達さんが変身した仮面ライダーバースとハイエナヤミーの戦いは終わりを告げようとしていた。

「ギ、ギィ」
チャリン　チャリン

バースは性能を見せてやると言いながら変身してからずっとバースの装備なんて使わずに格闘技だけでセルメダルを削っていた。

「いや、悪いね。マニュアルは読まないタイプなんで使い方が分かんないんだわ。・・・でもパラパラめくったページに書かれていたな。・・・タヌキちゃんみたいなヤミーは人に寄生しているから抜き取れって・・・・」
チャリン！
『ショベルアーム』

ベルトにセルメダルを入れ、再びレバーを回転させたバースの左手にはショベルのようなアーマーが装着された。

「俺の場合はちょっと荒っぽいから・・・我慢してね？・・・おりゃぁ！！」
ドカッ！

「ギィィ！？」
チャリン　チャリン

バースはショベルアームで思い切りハイエナヤミーを叩くと・・・その衝撃で取り込まれていた男が飛び出てきた。

「あっ！・・・この前のバイトのときに見かけたギャンブラーじゃないの？・・・さっすがギャンブラーだけあってヤミーを作れるほど欲望まみれだねぇ。・・・まぁ欲望まみれなのは俺もだけど」

「ギィィィィ」

ハイエナヤミーはだいぶセルメダルを身体から出してフラフラしながらもバースに向かって噛み付こうと走り出す。

「おっ！素早いねぇタヌキちゃん。・・・だけど・・・」

チャリン！　チャリン！

『キャタピラレッグ』

『ドリルアーム』

ショベルアームの装備が消えたバースは戦車のようなキャタピラのついたアーマーを両脚に装備して、さらに右手にドリルのような装備を装着してハイエナヤミーに突撃した。

「おぉぉぉぉ！！」

チャリン　チャリン

「ギィィィィ！？」

バースのドリルがハイエナヤミーにぶつかると・・・ハイエナヤミーを構成するセルメダルが次々とドリルに張り付いた。

「おらっ！・・・大量、大量！」

ハイエナヤミーを蹴り飛ばしたバースはドリルに張り付いたセルメダルを持ってきたミルク缶に向かって投げ飛ばすと・・・近くで控えていたゴリラ型のカンドロイドがドンドンミルク缶の中にセルメダルをしまってくれた。

「さぁて・・・そろそろ決めますか」

チャリン！
『ブレストキャノン』

バースは再びセルメダルを1枚ベルトに入れると・・・今度は大砲のような装備が胴体に装着され、さらに2枚のセルメダルを入れた。
チャリン！　チャリン！
『セル、バースト』

「ブレストキャノンシュート！」
ドォォォォォ！！

「ギッ！？ぎぃぃぃぃぃ！？」
ドオォォォォォン！

バースの大砲のような装備から発射されたエネルギー砲はハイエナヤミーを包み込んで爆発させ、セルメダルに変換した。

「おっ！・・・あっちもそろそろか？」

そのころにはWとザビーが必殺技を放とうとしているところだった。

「さてと・・・用事も終わったしメダルを回収してあいつ等に気づかれないうちに帰るとしますか」
チャリン！
『クレーンアーム』

右腕にクレーンのような装備を装着したバースは散らばったセルメダルをそれを使って一気に回収すると変身を解除してすたすたと去っていった。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

そして輸送車の件から5日が過ぎて目覚めた俺は・・・正太郎から成美さんのこととエヴィルのことを聞かされた。

「なるほどな。・・・成美さんは正太郎を試しに来ていたってことか。・・・それに人間を改造して怪人にするエヴィルか。・・・できれば戦いたくない相手だな。・・・とりあえずそのことは大体分かったんだが・・・あの状況は何だ?」

『ガゥゥゥゥ・・・』

「こら!トラくん!怯えてないで勇気を持って立ち向かってみなさい!」

なんかアリアが震えているトラくんにＧｏサインを出していた。

「まぁ・・・いろいろあったんだよ。気にしないでキンジ君」

矢車も正太郎も立ち直った。・・・自分の姉弟と向き合った。・・・俺もそろそろ兄さんと向き合わなきゃな。・・・そう思いながら俺は携帯が鳴ったので出てみると・・・平賀さんからだった。

「もしもし・・・オーラインクロスの改造が終わった?・・・ああ、分かった。明日取りに行く」

姉さんが武偵高に来た後に頼んでおいたオーラインクロスの改造・・・思ったよりも早く終わったな。こんなにはやく終わらせてくれたってことは・・・今度はいくら金を持っていかれるんだろうな。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ガメル。このメダルを取り込むんだ」

どこかにあるエヴィルの基地。カザリはガメルにメズールのコアメダルを7枚差し出していた。

「これ、メズールの」

「メズールがそうしてくれだってさ」

「メズールが？じゃあやる！！」

チャリン　チャリン

ガメルはカザリに言われるがままにメズールのコアを取り込んでいく。するとそこに真木博士が何かを持ってやってきた。

「せっかくでしたらこちらもぜひ取り込んでみてください」

「ドクター。それはいったい何なの？コアメダルに似ているけど違

うよね？」

真木博士の持ってきたメダルはセルメダルでもないがコアメダルでもないパンダとカンガルーのメダルだった。

「これは先日ベルデに変身する高見沢さんが盗み出してくれた爬虫類のコアメダルを研究して錬金術ではなく科学的に作り出した擬似メダルです。どのような効果を発揮してくれるかは分かりませんが・・・暴走をさせるにはちょうどいいでしょう」

「まぁ、それはそれでおもしろそうだね」

チャリン　チャリン

カザリは2枚の擬似メダルを掴むとガメルの額にある投入口にそれを投げ入れた。

優しさは弱さじゃない（後書き）

今回はオーズ本編には登場しないメダルをオリジナル設定で登場させてみました。次回は暴走グリードの話をがんばってみたいと思います。

暴走（前書き）

カンガルーとパンダのメダルが思った以上に好評だったことに安心しました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
トラコア
チーターコア
バッタコア
タココア

暴走

「あれぇ？・・・俺の身体・・・なんかいつもと変だぁ」

「ふふ、そうだろうね。さぁ、仕上げだ」

カザリは俺から奪ったゴリラとゾウのコアメダルをさらにガメルに取り込まさせると・・・ガメルは全身が強固な鎧に包まれたような姿に変わった。しかし所々がメズールのコアメダルの影響か水色になっている。

「さぁガメル。その姿をメズールに見せてあげに行ってきなよ」

「うん。分かった。メズールに見せてくる」

ガメルは人間態に姿を変えると、エヴィルの研究室を出てメズールを探しに行った。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

俺が目を覚ました翌日、俺とアンクは鴻上ファウンデーションに足を運んでいた。

「非情に残念だ。メダル輸送車が襲われたのはカザリというグリードの仕業らしいね。やり方もとても狡猾だ。狙いはグリード同士の

潰し合い。そしてコアメダルの総取りだろう」

「おっさん。あんたが裏で手を貸した可能性は低いが・・・メダルの輸送を頼んできた真木博士は怪しいんだよ」

カザリと白峰があのタイミングで仕掛けてくるなんて出来すぎている。・・・可能性的にもっとも高いのは・・・真木博士とカザリがつるんでいる可能性だ。

「たしかに彼なら可能だ。だが、ドクター真木なら責める気はないよ」

「何だと?・・・ざけてんのかジジイ!人の命が掛かってんだぞ!!」

「やめろアンク!落ち着けって!」

俺はおっさんに掴み掛かろうとしたアンクを抑えた。

「離せキンジ!あのジジイをぶん殴る!」

「気持ちは分かるが今は抑えろ!」

そんな俺らの行動を気にしないようにおっさんはゆっくり窓際に移動する。

「ドクターの目的は純粋にして1つ!!欲望を叶えるための実験だ!・・・いいかね。欲望を止めてはいけない。欲望は・・・世界を救う。ハッハッハ!」

「チッ！ざけやがって！」

アンクはそう呟くと会長室を出て行った。

「ところで遠山君。君はグリードがどうやって作られたか興味はないかい？」

「・・・・・・」

そう言えば遠山家の人たちにグリードがどうして誕生したのかはほとんど聞かされたことはなかったな。知っていることと言えば・・・８００年前にコアメダルが作られた・・・ぐらいだな。

「どういうことだおっさん？」

「まぁ座りたまえ」

おっさんは自分と俺の分のコーヒーを入れるとイスに座ったので俺もイスに座った。

「８００年前、錬金術師と呼ばれるもの達が人口の命を作ろうとしていた。さまざまな生き物の力をコアメダルに凝縮してね。始めに作られたそれらは何の意思もなかった。しかしそれぞれ持っていた１０枚のコアメダルから１枚を抜き取り９と言う欠けた数字にした途端、それを満たしたいと言う欲望が生まれた。その欲望がすさまじい進化を生み、やがて意思を持たせた」

「それでグリードの誕生したってわけか」

俺の言葉に頷いたおっさんは再び話し始める。

「やがてグリードは自身の欲望の通りに活動し人々を襲い出し始めた。それに賛同して世界を破壊しようとしたのが当時のレジェンドルガの王と初代ファンガイアキングだ」

そのことは俺も始めて聞かされるな。・・・まぁ正直言ってそんな恐ろしいことは聞きたくなかったとも思っているがな。

「だがグリードであるにも関わらずアンク君は・・・ある男に出会ってその欲望が少し変わってしまったらしい」

そういえば前にアンクがそれっぽい名前を言っていたな。

「たしか・・・‘リク’とか言う人だったな」

「ああ、リクと呼ばれる人物こそが‘究極の闇’とも言われつつも人々のためにグリード達と戦った古代戦士・・・クウガだよ」

今まで‘究極の闇’という単語は遠山家で聞かれていたが・・・その本当の名前が‘クウガ’ということは初めて知った。・・・・しかし俺は・・・『クウガ』という単語をどこかで聞いたことがあるような気がしてならなかった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺がおっさんにグリードついて聞かされている頃、メズールはふ

らふらしながらもウヴァのいる潰れた酒場に足を運んでいた。

「・・・進化・・・か。俺も・・・」

「はぁ、はぁ・・・ウ、ウヴァ・・・」

ドサッ

メズールはその場に倒れるとさらにセルメダルを身体から出してしまった。

「・・・カザリにやられたんだな」

「なんとか・・・コア1枚だけは守れたわ。・・・でもこの姿を維持しているのがやっと」

「そうか・・・それなら・・・」

ウヴァは怪人の姿に変わるとメズールに向かってゆっくりと歩き出す。

「お前のコア・・・もらってもいいか?」

「くっ!?」

バシャァァァァ!

メズールは右腕から水を噴射してウヴァを妨害し、その隙に逃げていった。ウヴァはメズールを追いかけようとすると・・・1人の女性がウヴァの前にやってきた。

「主がグリード・・・とかいう化け物ぢゃな」

「何だ・・・お前は？」

「主にわらわの欲望からヤミーとやらを作らせてやる。・・・ただでとは言わん。主が先ほど追いかけようとした者をわらわのしもべにかわりとして追わせよう。ありがたく思うのぢゃ」

「何やら腑に落ちないが・・・まあいい。その欲望、開放しろ」

チャリン！

ウヴァは怪しげな人物にセルメダルを入れてヤミーを作っていた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「キンジ！」

『ガゥ！』

「ん？・・・アリアか」

鴻上ファウンデーションからの帰り道、俺は『クウガ』をどこで聞いたのかを思い出そうとしながら歩いていると頭にトラくんを乗せて歩いていたアリアと出くわした。

「何処に行ってたのキンジ？」

「ああ、おっさんの所で輸送車の件について相談してきた。・・・

あれを仕込んだ犯人にも心辺りがあったからな」

「えっ？それっていったい・・・っ！？キンジ！！あそこ！」

アリアは突然左を指差すと、そこにはこの前現れたジャッカル男が水色の服を着た少女に襲い掛かろうとしていた。

「そこのあんた！はやく逃げなさい！」

バン！バン！

アリアは少女に触れそうになっていたジャッカル男を狙撃して土に戻すと少女はどこかに走っていった。

「キンジ！」

「分かっている！変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「セイヤッ！」

俺はすぐさまオーズに変身してトラクローを展開して金色に輝く斬撃を飛ばして残りのジャッカル男達を倒した。

「さっきの奴・・・なんでこいつ等に狙われていたんだろうな」

「何となくなんだけど・・・さっきの子はただの人じゃないと思うの。なんてゆうか・・・アンクに近いってゆうか・・・」

アンク近い？ってことはグリードだったってことか？・・・アリ

アの直感は説明不足すぎるがなんか信憑性があるんだよな。

「もし仮にさっきの奴がグリードだとする。そうだとして目的はなんだと思う？」

「やっぱりコアメダルじゃないの？・・・そもそもグリードに関してはあんたの方が詳しいでしょ」

正直言ってこの答えに関してはヒステリアモードにならなくても簡単に分かる。・・・どう考えても自分の、他のメダルを問わないコアメダルの奪い合いが始まっている。・・・俺はこれから何が起こるのか少し不安になりながらもアリアとともに部屋に帰っていった。

・・・

を超えたところもあるらしい。クスクシエは節電を心がけてエアコンは止められているが場所の関係で日陰になっているのでそれほど暑くない。

「あっちぃ～焼き鳥になっちまう～」

「まったく！どうしてキンジの部屋のエアコンが壊れているのよ！」

『ガゥ～』

それはアリアと白雪が争って部屋をめちゃくちゃにしたせいだろ？刃物で斬られた後とか銃弾の後とかがあったじゃんか。

「はい。持ってきたわよ～」

俺達の頼んだものを千代子さんが運んできてくれると・・・長身で短髪の男が店に入ってきた。・・・どう見ても一般の人だよな。どうして武偵高の中に入ってきているんだ？

「メズールぅ。どこだぁ？」

「メズールだと？・・・お前、何もんだ？」

アンクは長身の男に掴みかかろうとすると・・・

「アンクだ。アンク！メズール！何処やった！！」

「お前、まさかガメ・・・・うわっ！？」

長身だった男はほぼ完全体のように見えるグリードのガメルの姿に変わってアンクを殴り飛ばした。

「アンク！大丈夫か！？」

「メズーーールゥゥゥゥ！！」

ドドドドドッ！

「くっ！？」

俺はアンクに駆け寄ろうとすると、ガメルは重力を操りクスクシエの中をめちゃくちゃにするとドアを破壊してどこかに立ち去って行った。

「追うわよキンジ！アンク！」

「ああ！」

俺はオーラインクロスに跨りアリアを後ろに乗せて、アンクはライドベンダーに乗ってガメルを追いかけると・・・空き地島へとやってきた。・・・そこには昨日の少女が立っていてふらふらしながらもガメルに近づいてきた。

「メズール！どこ行っていた！俺、メズール探した！」

ガメルもおそらくメズールの人間態と思われる少女にゆっくりと歩きだすと・・・メズールは両手を広げた。

「ガメル、いい子ね。こっちへいらっしゃい。・・・あなたが全部ほしいのよ！」

「うん」

ガメルはただその言葉だけ言いながら頷くと全身をメダル化して流れるようにメズールに吸収されていく。するとメズールは怪人態の姿に変わり苦しそうにしながら両手で胸を押さえた。

「ガメル。バカな子ねぇ。グリードのくせに欲がないなんて・・・だけどあなただけは裏切らない・・・好きよ・・・ガメル」

ザアァァァァ！！

「きゃぁぁぁぁぁぁ！？・・・・ガァァァァ！！」

メズールの言葉と共に、大量のセルメダルが津波のようにメズールを包み込み、メズールの姿は巨大なタコに首長竜の首が生えたような化け物に変化した。

「な、なんだよこれ！？」

「おそらくはメダルの力の暴走だろうな。・・・キンジ！あんなのに暴れられたらここら辺がやばい。とっとと片付けるぞ」

アンクはひさびさに全身を怪人の姿に変えて俺にメダジャリバーを渡してくる。

「ああ。こんな化け物が暴れたらどうなるか分からないしな・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身してアンクからジャリバーを受け取ると、アンクの乗っていたライドベンダーに跨り暴走グリードに向かって飛び

掛かった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

メズールが暴走グリードとなる1~2分ほど前。真木博士は空き地島の端のところからメズールとガメルのやり取りを観察していた。

「これはうれしい誤算ですね。メズール君がガメル君を吸収することにより1つのグリードの身体に2体分のグリードの力を宿し、暴走の可能性が上がりましたね。・・・それではそろそろこちらを使いますか」
ガチャ

真木博士はトラックの荷台の扉を開くと・・・その中に入っていた5000枚のセルメダルは一斉にメズールへと向かっていった。

「こちらも使ってみますか」
チャリン

さらに真木博士はクワガタとカマキリのコアメダルをセルメダルの流れに乗せて流した。・・・真木博士のその行動がメズールを暴走グリードにしたことに、その時の俺達は気づいていなかった。

暴走（後書き）

次回は暴走グリードの後編になります。それと引き続き人気投票は８０話までの間、それぞれ違うキャラなら１人３票までＯＫです。

悪夢（前書き）

今回は暴走グリード後半。さらに今回はそれだけではないので賛否があるかもしれません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
トラコア
チーターコア
バッタコア
タココア

悪夢

「セイヤァァァァ！！」
ガギン！
「なっ！？」

俺はライドベンダーで飛び上がり暴走グリードに向かってメダジャリバーを振りかざしたが思っていた以上に硬い身体に弾かれてしまった。

「ならこれでどうだっ！」
『シングル・スキャニングチャージ！』

ベンダーで暴走グリードの上を走りながら突き刺すように構えたジャリバーで暴走グリードの長い首に突っ込もうとするが・・・

「ギャォォォォォ！」
ドカッ！
「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

巨大なタコのような足に弾かれて地面に落下してしまった。その際に俺の乗ったライドベンダーは大破した。

「ちっ！何やってやがるキンジ！」
ドドドドドッ！
「ギャォォォ！？」

アンクは火球を放ち暴走グリードを1度怯ませるが大してダメージがあるようには見えない。・・・やっぱり重量系のコアメダルを吸収してるだけあって防御力は高いようだ。

「どうするアンク？・・・やっぱりここはコンボか？」

「いや、使えるコンボはラトラーターだけだろ。ラトラーターはこんな大型の相手には戦いにくい。この場合は本来ガタキリバがいいんだが・・・」

「・・・クワガタとカマキリがないからな」

おそらくライオンのライオネルじゃ怯まない。サイは頭突きが強力になるが・・・こんなデカい相手に頭突きはしない。腕はトラしかないから変えられないし、チーターは回避には役に立つがジャンプ力が足りなくなる。・・・こうなったら奴の上に跳び上がってタコレッグで張り付くか。

「ハァッ！」

俺はバッタレッグのジャンプ力でもう1度暴走グリードの上に跳び乗ろうとしたが・・・

「ギャァァァァァ！！」

ガブッ！

「うわっ！？ぐわぁぁぁぁぁ！？」

跳び乗る寸前で噛み付かれてしまい身動きが取れなくなってしま

った。

「キンジ！こっの！キンジを離しなさい！」

バン！　バン！　バン！

アリアは暴走グリードを狙撃するが・・・怯むどころか振り向きもされていない。

「くそっ！全力の火力で攻撃すれば倒せるが・・・こんな場所では使えない。・・・それ以前にキンジが危ないから迂闊に攻撃できないな」

アンクは火球を放つのを止めて判断に迷っていると・・・・2人の仮面戦士がやってきた。

「いくよ。正太郎」

「ああ、仲間のピンチを見過ごす訳ないだろ」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

正太郎と陽・・・仮面ライダーWはサイクロントリガーに変わり暴走グリードの首元を狙撃する。

「・・・相棒を放してもらおうか。ライダー・・・スクリューキック」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ドカッ！

「ギャオオオオオオ！？」

チャリン　チャリン

矢車・・・仮面ライダーキックホッパーは身体を錐揉み状に回転させながら暴走グリードの首元に跳び蹴りをして怯ませた。・・・そして俺はその攻撃で暴走グリードが怯んだおかげで地上に落下すると・・・

「痛てぇ・・・・っ!?」

ドクン!

アリアの手前に落下して倒れてしまい・・・その時にアリアのスカートの中を見てしまい、一瞬でヒステリアモードになってしまった。

「ちょ!?あんたどこ見てんのよ!はやく起きないと風穴開けるわよ!」

「それはすまなかったねアリア」

ヒステリアモードとなった俺はこの状況を打破するための作戦を考え始めると・・・さらに銀と黄緑が目立つ仮面戦士がミルク缶を背負ってこちらに走ってくるのが見えた。

「さぁて・・・生徒達ががんばっているところを悪いけど・・・さすがにこんな化け物を生徒だけに任せるわけにも行かないんでね。助太刀させてもらうよ」

「その声・・・まさか伊達さん!?あんたも仮面戦士だったのかよ!?しかもその姿は!?」

「落ち着きたまえ正太郎。すぐにテンションを上げてしまうのは君の悪い所だよ」

「これ？この姿は仮面ライダーバース。・・・ちょっとした理由で俺が一時的に変身することになった仮面戦士だ。まぁ、詳しい説明は後で。今はこのイカちゃんを何とかしないとね」

チャリン！

伊達さんの変身しているバースはミルク缶から1枚のセルメダルを取り出してベルトに入れてレバーを回した。

「あ！ちょっと時間稼いどいて」

『ブレストキャノン』

『セルバースト』

『セルバースト』

『セルバースト』

胴体に大砲みたいな装備を装着したバースは2枚のセルメダルを入れてはレバーを回すという行動を繰り返す。その間、俺達は暴走グリードのタコ足を回避しながらもWとアンクが攻撃していたりしていた。

「よっしゃ！充電完了！ブレストキャノン、シュート！！」

ドドドドドドッ！

バースの放ったエネルギー砲は暴走グリードの胴体に直撃してセルメダルが１００枚ほど削り落とした。

「ほっ！・・・これって！？・・・キンジ！受け取りなさい！」

その落ちてきたメダルの中で2枚だけ緑色だったメダルをアリアがキャッチするとその2枚を俺に投げつけてきた。

「これは・・・クワガタとカマキリのコア！？」

「それでガタガタ・・・ガタキリバでしょ！」

「ああ！使わせてもらうよ！」

俺はタカとトラのコアメダルを外すとアリアから受け取ったクワガタとカマキリのコアメダルをベルトに入れてスキャンした。

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガ～タッ！ガッタガタッキリッバガタキリバッ！！』

「ギャオォォォォォォォ！！」

ドン！

「おぉぉぉぉぉぉぉ！！」

オーズ・ガタキリバコンボに変身した俺は暴走グリードが振るってきた長い首をかわすとすぐさま５０人に分身する。・・・これ以上この戦いを長引かせる気はない。このまま決めてやる。

『スキャニングチャージ！』

『『スキャニングチャージ！』』

「「「「セイヤァァァァァァ！！」」」」

ドドドドドドドドッ！

「ギャオォォォォォォ！？」
ドオォォォォォォン！！

ガタキリバ５０人のライダーキックを決めて１人に戻り変身を解除した俺は空中で爆発した暴走グリードを見つめた。・・・ガメルやメズールもあんなに人間に近い感情を持っているのに・・・どうしてアンクのように人間と和解することができないんだろうな。

「っ！？・・・ぼさっとしてんなキンジ！！」
パシッ！　パシッ！　パシッ！

アンクはいきなり飛び上がるとそこにカザリとウヴァがどこからともなく現れ、暴走グリードとなっていたガメルとメズールのコアメダルを捕りあった。

「ちっ！・・・シャチとウナギのコアだけか」

「悪いけど僕達が実験で使っていたコアメダルなんだ。今は君達に譲るけど・・・いずれ回収させてもらうよ」

カザリはそう言い残してどこかに立ち去っていった。

「何だこのメダルは？・・・偽物か？・・・こんな物はいらん」
チャリン　チャリン

ウヴァは拾った何枚かのメダルうちの２枚を適当に放り投げてどこかに立ち去ると、その２枚をＷとキックホッパーがそれぞれ回収した。

「何だこのメダル？」

「このデザイン・・・おそらくパンダだろうね」

「・・・こっちはカンガルーだろうな。・・・相棒・・・一応持っておけ」

2人からメダルを受け取った俺は・・・・その時完全に油断してしまっていた。

ドォォォォン

「っ？」

どこからともなく銃声が聞こえた。

「キンジ・・・第2射に注意しなさい・・・・」

どさっ

するとアリアはそう言いながら俺に寄りかかってきた。

「撃たれた・・・らしいわ」

「なっ！？」

後ろを振り返ってみるとアリアの背中には赤い花のような鮮血が散っていた。・・・くそっ！ヒステリアモードの俺だったのに完全に油断していた！俺達の敵はグリードだけじゃなかったのに暴走グリードを倒して安心した瞬間を狙われた。・・・どうして気づけなかったんだ！

「アリア!?しっかりするんだ!!」

「キンジ!あぶねぇ!」

「なっ!?」

ドカッ!

W（正太郎）の警告で後ろを振り返ろうとすると・・・・俺は蟻地獄のような昆虫の怪人にぶん殴られた。

「コイツは預かった」

突如として現れたアリジゴクヤミーはアリアを掴みあげると海に浮かんでいた異様な船に跳び乗った。・・・その船は明らかに現代の船じゃない。金銀で飾られた船体は細長く、L字に湾曲した船首と船尾は柱のように天を差している。その船の上には何人ものジャッカル男の中心には裸と見まごうほどに過激な衣装を着たおかっぱの美人がWA2000狙撃銃を俺の頭を狙うかのように構えていた。・・・下手に動いたら撃たれるな。俺は狙撃銃で狙われて動けないのに船はゆっくり動き出す。

「これはこれは面白い状況ですね」

そんな中、どこからともなく仮面ライダーレイがやってきた。

「せっかくなのでさらに面白くするために我々のメンバーも参加させてもらいますよ」

「お久しぶりですね矢車君」

レイの合図と共に真っ先にやってきたのはアンデットと呼ばれる怪人にそっくりなように見える怪人だった。

「お前・・・まさか鎌田か？」

「覚えていてくれて嬉しいですよ。・・・私を侮辱したあなたを殺すためにパラドキサアンデットの細胞を身体に埋め込んでもらいトライアルＦとしてこちらに足を運ばせて頂きました」

トライアルＦと名乗る怪人の後ろにはさらに2体の怪人がいた。・・・1体はかつて仮面ライダーストロンガーが戦ったデルザー軍団の改造魔人であり、体が鋼鉄でできていて防御力と攻撃力に優れた鉄球を持った怪人の鋼鉄参謀。さらにもう1体はＶ3とライダーマンが倒したデストロンの怪人で、両肩に大砲が付いた牛の怪人の大砲バッファローだった。・・・まさか矢車と因縁がありそうな怪人の他に、2体同時に仮面戦士科の教科書に載るほどの怪人が現れちまうなんてな。

「キンジ・・・怪人達は俺達に任せておけ」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

「君はアリアを連れ戻したまえ」

Ｗ、キックホッパーそしてバースはそれぞれ怪人達と対峙するように前に出た。

「・・・鎌田とのケリをつけたら俺も追いかける。・・・行け・・・相棒」

「あ～あ。今日は残業かぁ。このあとパチンコでバイトなのに・・・

どう思う牛ちゃん？」

「どうもこうもない。貴様らはここで死ぬんだからな」

「あれ、お前そうゆう返しをしてくる？・・・まぁとりあえず・・・うちの生徒の妨害はさせないぜ」

『ドリルアーム』

バースは右手にドリルのような装備を装着して大砲バッファローと戦い始めた。

「・・・どうやら行くしかないようだなキンジ」

「当然だ。アリアはさっき撃たれたばっかなんだからまだ助かる！早く助けて病院に連れていくぞ！」

こんな悪夢・・・はやく覚めてほしい。そう思いながら俺はオーラインクロスに跨りアンクも紅い翼を羽ばたかせて船を追いかけると・・・・俺にとって最も見たくない悪夢がその船の船室から出てきた。

「に、兄さん・・・」

休眠から覚めたらしい兄さんは・・・カナの姿ではなく男の姿で立っていた。兄さんは黒いコートを羽織っていてまるで死神のような服装をしている。

「・・・夢を見た。深い眠りの中で『第２の可能性』が実現させるのをな。・・・だが・・・」

兄さんは長い髪を海風になびかせながら俺を睨む。

「キンジ・・・残念だ。・・・パトラごときに不覚を取られるようでは『第2の可能性』はない。・・・夢は所詮夏の夜の夢でしかなかったな」

「兄さん!『第2の可能性』って何だよ!!パトラって誰だ!どうして兄さんがアリアを撃った奴の船に乗っているんだよ!!」

「この船は『太陽の船』・・・当事海辺にあったファラオの棺をピラミッドまで運ぶのに用いた船を模したものだ。・・・それでアリアを迎えようと計らったんだろ。・・・パトラ」

兄さんは海に向かって語りかけると・・・先ほどまで俺を狙撃銃で狙っていた女が土になって崩れ、海の中から棺が出てきた。それもただの棺ではなく古代エジプトの王族を埋葬するための聖棺だ。・・・1トンはありそうな黄金の蓋を軽々持ち上げて出てきた人物は先ほどの土人形が化けていた過激な服装の女性そのものだった。

「気安くわらわの名を呼ぶでないトオヤマキンイチ」

当たり前のように水面の上に立つ女は手の甲を頬にあてて笑い始めた。

「わらわに呪われたものは必ず滅ぶ。イ・ウーの玉座を狙っていたブラドもわらわに呪われ1度滅び、メズールとか申すグリードも滅んだのぢゃ。くっくっくっ」

俺はヒステリアの頭でこれまでの状況を振り返る。・・・最近はなぜか砂が盗まれるという事件が多発していた。・・・ジャッカル

男達は倒すと土になる。・・・間違いない。あいつは砂を操る能力を持っている。それに兄さんの方もだ。たしかに成美さんからの警告もあったのに・・・どうして気づけなかったんだ俺は！

「そういえばまだ1人も殺しておらぬ。祝いの贄がないのはちと寂しい。・・・ついでじゃ、お主らは滅びよ」

「フンッ！」

ザァァァァッ！　ブンッ！

アリジゴクヤミーは先ほどまで女の姿になっていた砂を操り槍のような武器を作ると俺とアンクに向かって投げつけてきた。

悪夢（後書き）

ようやくアリア本編の方を進めて行こうと思います。それと人気投票は継続中です。

第2の可能性（前書き）

今回も急展開の連続で賛否があるかもしれません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

第2の可能性

「パトラ・・・それはルール違反だ」
ズバッ！

アリジゴクヤミーが俺に投げ飛ばした槍を・・・兄さんがいつの間にか変身した金色の仮面戦士，仮面ライダーグレイブ，が専用武器のグレイブラウザーで斬り裂いていた。

「なんぢゃキンイチ。わらわを『退学』にしておいていまさら，るーる，などを持ち出すか」

「イ・ウーに戻りたいなら守れ」

「・・・気に入らんのう」

兄さんは変身を解除して真横まで近づいた兄さんに女の周りにいるジャッカル男達は一斉に船を漕ぐ櫂を向ける。・・・よく見るとその櫂の先端は槍のように尖っているように見える。・・・しかし兄さんはそれに対して動じる素振りも見せない。

「『アリアに仕掛けてもいいが，無用の殺しはするな』・・・それがお前に伝えた『教授』の言葉，忘れてはいないな」

「・・・・・」

言われた女・・・パトラは口ごもる。

「パトラ，お前がイ・ウーの頂点に立ちたいことは知っている。し

かし今はまだ『教授』が頂点だ。リーダーの座を継承したいのなら、今はまだイ・ウーに従わなければならない」

「いやぢゃ！わらわは殺したいときに殺す！贅がなくとは面白うない！」

パトラはまるで駄々をこねる子供のように両腕を振るとしゃんしゃん！と金の腕輪を鳴らす。

「だから『退学』になったのだ。まだ学ばないのか」

「わ、わらわを侮辱するのか！今のお前なんぞ一捻りぢゃぞ！」

パトラはわがままそうな目を吊り上げ、空き地島からだいぶ移動したため見えてきた台場のカジノ・ピラミディオンを手で示した。

「・・・そうだな。ピラミッドの近くでお前と戦うのは賢明とはいえないな」

「そうぢゃ！神殿型の建築物が近くにある限りわらわの力は無限大ぢゃ！だから殺させろ！さもないとお主を棺送りにするぞ！それでもいいというのか？」

激高しながらも何故か仕掛けてこないパトラに兄さんはスッと詰め寄ると・・・パトラの顎を右手の人差し指で上げて・・・・

「・・・・・」

「っ！」

いきなりキスをした。・・・最初は抵抗しようとしていたパトラだったが・・・やめて、全身から力を抜いた。

「これで赦せ。あいつは俺の弟だ」

今の兄さんは先ほどまでとはまた違う殺気を漂わせている。おそらく先ほどのパトラへの動作でＨＳＳ・・・ヒステリアモードになったんだろうな。女性を傷つける形でＨＳＳにならない。それが兄さんの不文律だったはずなのにどうして？・・・いっぽうのパトラは遠めでも分かるぐらい顔を真っ赤にして兄さんから後ずさった。

「トオヤマ、キンイチ！お主、わらわを使ったな」

「悲しいことを言うなパトラ。それに俺は打算でこんなことができるほど器用じゃない」

真っ直ぐと見つめてきた兄さんにパトラは胸を抑えるような動作をすると自分を落ち着かせるためか深呼吸をすると・・・

「な、なんれにせよ、そのお前とは戦いとうない。勝てるには勝てるが、わらわも無傷では済まんぢゃろうからな。今は『教授』になる大事な時ぢゃ。手傷は負いとうない」

と言い、ぽいと兄さんに何かを投げ渡すと逃げるように海に飛び込んでしまった。そして後を追うかのようにジャッカル男達はアリアを黄金棺に入れて海に飛び込んだ。

「さて・・・私も・・・」

ザァァァァァ！

アリジゴクヤミーは大量の砂で作った球体の中に入ると数人のジャッカル男に担がれて海の中に入っていった。

「待てっ！！」

俺は水面下に浮かんだ棺を追いかけようとしたが・・・

「止まれっ！」

兄さんに一喝されて動きを停止してしまった。・・・本能とは恐ろしい。こんなにもアリアを助けたいと思うのに・・・動いたらすぐさま頭を銃弾で撃ちぬかれてしまいそうだ。

「アンク・・・あいつを追っててくれ」

「・・・分かった。とっとと来いよ」

バサッ！

アンクが棺を追いかけてくれたのを確認すると・・・俺は兄さんを睨む。

「『緋弾のアリア』・・・はかない夢だったな」

「緋弾の・・・アリア？」

何だそれは？分からないが・・・・アリアを殺そうとしたあんたがアリアの名前を呼ぶな！！

「兄さん・・・俺を騙したな！アリアは殺さないってあんたは言っただろ！！」

「俺は殺していない。ただ看過しただけだ」

「同じだろ!!あんたが助けていればアリアは撃たれずに済んだのに・・・・」

「まだだ!」

俺がそう言うと兄さんは先ほどパトラから渡されたガラス細工を取り出した。

「まだ死なない。あれはパトラによる呪弾。今から24時間は生きている。パトラはその間にイ・ウーのリーダーと交渉するつもりだろう。それまではアリアは生かしておくだろうが・・・それまでだ。パトラの交渉がどうなろうともう『第2の可能性』はない。ないならアリアは死ぬべきだ」

「兄さんはアリアを見捨てるのかよ!イ・ウーの無法者の超人達に何をされたんだよあんたは!!」

「無法・・・か。そうだ。イ・ウーには真に無法。世界のありとあらゆる法律を無意味とし、内部にも法規となるものはない。つまりイ・ウーのメンバーである限り自由なのだ。イ・ウーのメンバーは好きなだけ強くなり、自らの目的を好きな形で実行しても構わない。そして他者がその障碍や材料となるのならその者を殺しても構わないのだ」

そんな・・・イ・ウーが誰を殺してもいいだなんて・・・そんなめちゃくちゃな組織、すぐに内部抗争で崩壊しちまうにはず・・・。

「イ・ウーのリーダーである『教授』は長年その組織を束ねてきた。過ぎてしまったことをも変えてしまうほどの圧倒的な力でな。『しかしその教授』の命ももうすぐ尽きる。病でも傷でもなく寿命でな」

兄さんは「ここから先は心して聞け」とでも言うように俺を睨んだ。

「キンジ、イ・ウーはただの超人育成機関ではない。世界中の軍事組織も手出しできないほどの超能力を備えた戦闘軍団だ。その中には主戦派(イグナティス)・・・世界侵略を本気で目論むものもいる。・・・最近その1人のカツミがイ・ウーを抜けて独立した組織を作ったが・・・それは今、関係ない。そのような者達が世界各地を襲撃すると・・・世界はエヴィルとイ・ウーで2分する可能性もあるだろう」

カツミっていうのは誰かは分からないが・・・エヴィルってのは人間を怪人に改造するショッカーみたいな組織だったな。イ・ウーはそれと2分するぐらいの戦力があるってことかよ。

「だがイ・ウーの中にもそれを良しとしない者もいる。『教授』の気質を継ぎ、ただ己の力を高めようとする者。それが研鑽(ダイオ)派だ。彼らは『教授』の死期を知ってから、その後継者となる人物を探し始めた。そして見つかったのが・・・アリアだ」

「なっ!?」

アリアが・・・自分が追っていたイ・ウーの組織のリーダーに選ばれただと!?何を言っているんだ兄さん。

「・・・たとえそうだとしても・・・アリアがイ・ウーに従うはずはない」

「従う。『教授』の前に立てば・・・必ずな」

深い確信をしたような兄さんに俺は言い返せない。すると兄さんは悲しそうな表情になった。

「キンジ・・・すまなかった。何も言えずにいて・・・俺と成美はイ・ウーを内部から殲滅するために表の世界から消え、イ・ウーの眷属となったのだ」

なっ!?・・・内部から!?

「イ・ウーを内部分裂させるにはリーダーはいてはならない。そして俺はリーダー不在の可能性を作り上げるために2つの可能性を見出した。『第1の可能性』が教授の死と同時期にアリアを抹殺すること。そして『第2の可能性』が今代のリーダーである教授を暗殺・・・」

兄さんが言っていた『第2の可能性』って言うのはイ・ウーを崩壊させる可能性のことだったのか。・・・リーダーを殺すってやり方で・・・

「俺はお前達ならもしや・・・と思っていたが・・・パトラに不覚を取ってしまうようでは『第2の可能性』はない。『第1の可能性』を実行するだけだ」

『第1の可能性』・・・すなわちアリアの抹殺だ。・・・・そんなことをさせていいはずがない。

「兄さん・・・あんたは武偵なのに人を殺す気かよ?」

「俺は武偵である以前に遠山の男だ。遠山一族は‘儀’のために巨悪を討つためなら人の死を看過することを厭ってはならない。覚えておけ」

パトラの力が遠ざかったのか兄さんの乗っていたパトラの船は砂となって崩れ始める。それに気づいた兄さんは船から跳び下りて近くに置いてあったライドベンダーにセルメダルを入れてバイクモードにして跨った。

「帰れキンジ。イ・ウーはお前の手に負える組織ではない。死ぬのはアリアだけで十分だ」

その言葉に・・・俺の中の何かが切れた。

「・・・そんなこと・・・できるかよ。ここで引いたら兄さんはアリアを殺すだろ?そんなこと心のどこかで間違ってるって気づいてんだろ?」

「・・・キンジ。世の中には時として犠牲が必要な時があるんだ。・・・仕方ない。お前を眠らせるついでにお前のヒステリアとオーズの力を試してやる」

『ＯＰＥＮ　ＵＰ』

兄さんはベンダーに跨りながら再びグレイブに変身する。・・・グレイブは兄さんが持つライダーシステムの中で最も相性の良い変身で、兄さんが変身した時の戦闘能力は・・・スペックが高い鬼系統の仮面戦士が集団で掛かって来ても無傷で勝てるほどの強さだ。

「・・・・・・」

「・・・どうした?変身しないのか?」

「俺のこの力は兄さんと戦うための力じゃない。・・・そう思っていた。だけど兄さんがアリアを殺すっていうんなら・・・俺は兄さんのライダーシステムを全部破壊してでも兄さんを止める!!」

『ライオン!トラ!チーター!ラッタッ!ラッタッ!ラトラ~タ~~!!』

俺はオーラインクロスに乗りながらオーズ・ラトラーターコンボに変身してアンクに渡しそびれていたメダジャリバーを構える。

「遠山家とか武偵とかは関係ない。・・・俺は俺として・・・アリアに手を伸ばす。・・・だから兄さん・・・いや、元・武偵庁特命武偵、遠山金一!俺はあんたを殺人未遂の容疑で逮捕する!」

「できるのか?・・・お前ごときに?」

『トラカン』

ブゥゥゥン

『ガオォォォォォォォ!!ッ!?・・・・・・』

グレイブは本来ならラトラーターコンボにしか扱えないはずのトライドベンダーを殺気だけで無理やり服従させる。・・・そんなものにいちいち驚いてはられないな。

「あんたがそう来るんなら・・・俺にも考えがある。・・・こいつは恐ろしく燃費が悪いから使いたくはなかったがな」

『トラカン』

俺はトラカンと取り出しオーラインクロスの上に置くと・・・・オーラインクロスはまるでトライドベンダーに代わるときのベンダ

ーのように変形して巨大化したトラカンと合体した。

「オーラインクロスの極地戦闘用形態・・・オーラインワイルド。・・・トライドと違ってこいつは余分なエネルギーを吸収するどころか俺にどんどんエネルギーを消耗させるんでな。・・・3分・・・いや、1分でケリをつける！」

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！』

「お前に俺を倒せるわけがないだろ」

『ガァァァァァァァァ！！』

ガガガガガガガッ！

俺の乗るオーラインワイルドの前輪と、グレイブの乗るトライドベンダーの前輪がぶつかり合い辺りに火花が散った。

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺と兄さんがバイクに乗って戦い始めた頃、矢車の変身するキックホッパーはトライアルＦに押され気味だった。

「ぐぁっ！？」

「ふふ、どうやら今の私には手も足もでないようですね。・・・ああ！あなたの攻撃はキック技だけで元から手は出さない方でしたね。訂正しましょう。・・・ハァッ！」

ドッ！

「がはっ！？」

トライアルＦは手から衝撃波のようなものを放ち、それが見えないためどうすることもできないキックホッパーはただ喰らうだけの状態だった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

キックホッパーはボロボロにされながらも右腰を叩いてクロックアップをしようとするが、クラリと倒れそうになり膝をついてしまう。

「そこまで痛めつければクロックアップをしても身体のほうが耐え切れないで強制クロックオーバーがオチですよ？・・・いい加減諦めて死んでください」

「武偵憲章・・・１０・・・条。・・・『諦めるな。・・・武偵は・・・決して諦めるな』・・・俺は・・・１度諦めたばっかなんだ。・・・これ以上諦めて溜まるかよ・・・」

ドサッ

キックホッパーはまだ戦えると言わんばかりに立ち上がろうとするが・・・立ち上がるどころかその場に倒れて変身が解除されてしまう。

「やはりもう限界でしたか。さあ、そろそろジ・エンドです」

トライアルＦは倒れる矢車にトドメを刺そうとパラドキサ・・・

カマキリの怪人らしく鎌のような武器を振り下ろそうとしたその時だった。

「「まてぇぇぇぇぇい！！」」

「この声！！ま、まさか！？」

トライアルFは突然の声で後ろに振り返ると・・・そこには赤いマフラーをした似ているが身体のラインの本数と手袋とブーツの色が異なる仮面ライダーが風車の上に2人いた。

「あれは・・・本郷さんに・・・・一文字さん・・・」

「「トオッ！」」

仮面ライダー1号の本郷さんと仮面ライダー2号の一文字さんこと一文字隼人さんは風車から跳び下りると矢車とトライアルFとの間に割って入った。

「大丈夫かい双くん。・・・ここは我々に任せて君は休みたまえ」

「本郷さん・・・・・」

「エヴィルという組織はショッカー並みに凶悪な組織だとは分かっていたんだが・・・なかなか動きがないため来るのが遅くなってしまった。さぁ、エヴィルの怪人よ！お見せしよう。仮面ライダーの力を！！」

「一文字さん・・・・・」

「「トオッ！！」」
ドカッ！

1号と2号のお二人はそれぞれの変身ポーズをすると・・・同時にトライアルFにパンチを決めた。

第2の可能性（後書き）

今回からまたそれぞれの戦いを展開させようと思います。・・・もしかしたらパトラ編では昭和ライダーがあと2～3人出るかもしれません。それと人気投票は継続中です。

綺麗事（前書き）

今回は内容を考えるのにかなり時間をかけてしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

綺麗事

バチィィィィン

俺の乗ったオーラインワイルドとグレイブの乗ったトライドベンダーの前輪がぶつかり合い火花が散る。

「セイッ！」
『ＧＡＡＡＡＡＡＡ！！』

「ハァッ！！」
『ガアァァァァァァ！！』

火花が散りながらもトライドがオーラインワイルドに噛み付いてなぎ払って数メートルとばされた。

「所詮オーズのコンボというのでもこんなものか。やはりお前では教授には勝てないな」

「この程度？・・・そんなはずないだろ」
『ＧＡＡＡＡＡＡＡＯ！！』

オー・ワイルドは咆哮とともにラトラーターコンボのときに放たれる高熱を熱線としてトライドに放った。

「なっ！？」
『ガァァァァ！？』

その攻撃をかわしきれなかったトライドの後輪のタイヤはドロド

ロに溶ける。・・・・『ディアスシュート』俺のラトラーターコンボのエネルギーを吸収したオーラインワイルドがそのエネルギーを一気に開放してぶっ放す大技だ。・・・ちなみにこの技名を考えたのは正太郎だったりする。

「・・・たしかに強力な技だな。だが今のでかなりお前も疲労したんじゃないのか？」

「・・・・・・」

オーラインワイルドは強力な戦闘能力を秘めているぶんコンボの反動を2倍ほどにしてくれる。・・・前に練習したときもこんなに疲れたが・・・・今回はその前に暴走グリードを倒すためにガタキリバコンボにまでなっているからなおさらだ。

「もうそろそろ限界なんじゃないのか？」

「・・・だからとっとと決めるって言ったんだよ！！」

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

たぶん俺がオーズに変身していられるのは長くて残り３０秒ぐらい・・・だったら次の1撃に残りの力を出し切って兄さんを止める。

「おおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！』

オーラインワイルドは全体に高熱を纏いながらトライドに向かって激走する。その通ったタイヤの後はあまりの速度に炎上してしまっている。

「浅はかな・・・」
『ガァァァァァァァ！！』

グレイブは後輪が溶けて走りにくそうなトライドを無理やり走らせてこちらに向かってくる。・・・本来はトライドベンダーの時速は８４０キロだが後輪があの状態なので今はせいぜい４００キロが出てるか出てないかだ。・・・これなら最高時速がクロックアップに匹敵するほどの速さを出せるこっちのほうが有利だ。

「セイヤァァァァァァァァッ！！」
「ハァァァァァァァァッ！！」
『ガァァァァァァァ！？』
ドォォォォォォォォン！！

オーラインワイルドの突進でグレイブの乗ったトライドは大破してグレイブは海に吹き飛ばされて行った。しかしそのぶつかりの際にオーラインワイルドのトラカンの部分にグレイブラウザーを突き刺されていた。

『ＧＡ・・・ＡＡ・・・Ｏ・・Ｏ』

「畜生・・・相打ちかよ・・・」
ドォォォォォォォン！！

オーラインワイルドのトラカンの部分が爆発して、俺も海に向かって吹き飛ばされた。泳げばすぐに岸に上がれる距離なのに・・・・コンボの反動がきつすぎて指１本すら動かない。

ゴポ　ゴポ　ゴポッ

「・・・・・・・」

兄さん・・・ごめんな。俺の方こそ分かっていたんだ。・・・・兄さんは間違ったことは言ってはいない。世の中には綺麗事だけじゃ解決できないことがあるんだってことも分かっているつもりだ。・・・だけど・・・綺麗事だからこそ、それを現実にしたいんだ。それにあいつのためなら・・・兄さんと道を違えてもいいと思えるんだ。

・・・俺は兄さんと決別して・・・完全に目標を失っちまったな。・・・・アリアの目的を手伝う。そんな目的はあるのに自分の目標がない。あぁ、びっくりするほど何もないんだな俺。これじゃ無欲みたいなもんじゃないかよ。

・・・・薄れゆく意識の中・・・自分はどうして手を伸ばしたいのかの本当の理由を見つめ直そうとしながら暗い海の中に沈んでいった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺の意識が暗い海の底に沈んでいく中・・・矢車のもとに駆けつけた1号と2号はトライアルFと激戦を繰り広げていた。

「ハァッ！」

トライアルFの放つ見えない衝撃波を1号と2号は直感だけで回避をしながら少しずつ距離を詰める。

「さすがはかつてショッカーを2人だけで壊滅させただけのことはありますね」

「我らは2人だけでショッカーを倒したのではない！たくさんの人に支えられたおかげでショッカーとの戦いに勝ち抜いてきたのだ！！」

ドカッ！　ドカッ！

「そんなことも分からん貴様の攻撃なんぞ我々には当たらん！！」

ドカッ！

「ぐあぁぁっぁ！？」

1号は左手でトライアルFを掴むと右拳で2～3回殴る。そこに2号が力強いキックを決めてトライアルFはかなり吹き飛ばされた。

「・・・やっぱり本郷さん達は・・・本当に強いな・・・」

倒れながらもその戦いを見ていた矢車はそう呟く。すると矢車の近くにインディアンな仮面をかぶった1人の怪しい男が歩いてきた。

「あの人達の本当に強いところ・・・何だと思う？」

「・・・どんな状況でも決して諦めない心・・・か？」

矢車はその男の独特の雰囲気に不思議と警戒心を緩ませて彼の質問に答えた。

「そう！君も諦めないで一生懸命頑張っていればきっと強くなれるよ！」

男は矢車に右手でサムズアップをすると矢車に肩を貸した。

「・・・おまえ・・・いったい何者なんだ？」

「２０００の技を持つ男で、夢を追い求める男で、世界を旅する冒険家かな？・・・それともキンジくんの料理の師匠って言ったほうが分かりやすい？」

「・・・何だか余計分からなくなったが・・・１つ分かった。おまえが相棒の知り合いってことはな・・・」

「・・・このぐらい離れれば大丈夫だよね」

男は１号と２号がそれなりに離れた風車の近くに矢車を寄りかからせるとインディアンな仮面を外してヘルメットを被ると黒いオフロードタイプのバイクに跨った。

「詳しいことは今度教えてあげるよ。・・・近いうちにまた武偵高の壁を登ってほしいって壁がアピールしているし。・・・でも今日は忙しくなりそうだから・・・ここでごめん」

ブゥゥゥゥゥゥゥン

黒いオフロードバイクで疾走していく男の姿は・・・その途中でクワガタを思わせる赤い戦士の姿に変わったような気がした。

「・・・何なんだあの人？・・・そ、それよりも本郷さん達は・・・」

矢車は再び1号と2号が戦っている方向を振り向くと・・・・その戦いはもうすぐ終わりそうな雰囲気だった。

「さぁ、お前達のボスと幹部を教えるんだ。そうしてくれれば司法取引で懲役5年ぐらいにできて、お前も倒さずに済む」

「言いませんよ。たとえあなた達に敗れ去ることになったとしても・・・私はエヴィルの下に生きていることを誇りに思っています。・・・それでは・・・」

ドカァァァァァァン！！

トライアルFは最後にそう言い残すと自らの意思で自爆をしてしまった。

「・・・いったいエヴィルには何があるというんだ？」

「一文字。俺はもうしばらく警視庁でそれらしい事件を探してみる」

「なら俺もナオキやミツルから新しい情報がないかを聞き込みに行ってくる」

変身を解除した一文字さんは新サイクロン号に跨るとどこかに走

り去っていった。そして本郷さんも変身を解くと矢車のところに歩いてきた。

「本郷さん・・・すいません。・・・・また助けてもらって・・・」

「そんなことは気にするな。君は俺のできなかったこともやってくれ。君はまだ若いんだからきっといつか俺の力を超えられる」

その言葉を聞いた矢車はそこで気力が尽きてしまい意識を失った。そして本郷さんは衛生科の武偵高生徒が駆けつけるまでずっと矢車の前に立っていた。・・・・まるで息子を守ろうとする父親のように・・・

トライアルFの戦いが終わった頃・・・バースはややタイホウバッファローに押され気味だった。

「ハハハ!死ねぇ!!」

ドン!　ドン!　ドン!

「ちょ!?・・・牛ちゃん何でタマ切れにならないの?」

バースは本来ならタイホウバッファローが連続して放つことできないはずの大砲を連射しているので近づくことが困難になっていた。

「バカめ！エヴィルの科学力さえあれば大砲の筒の中で無尽蔵に弾薬を製造することも可能に決まっている！！」

「え？何そのせこさ！こっちなんてすぐタマ切れになっちゃうのに・・・うわぁぁぁぁぁ！？」

ドォォォォォン！

ついつい油断してしまったバースは大砲を喰らって吹き飛ばされると持っていた銃のような武器を手放してしまった。

「あっちゃぁぁ！？バースバスターがあんな遠くに・・・」

バースはバースバスターとか言う銃のような武器を回収しようと走り出すが・・・

「させてたまるか！！」

ドン！　ドン！　ドン！

「ちょ！？メイン武器を取らせてよ！！」

「誰が取らせるか！！」

ドン！　ドン！　ドン！

タイホウバッファローは大砲を次々と放ちバースバスターを取らせまいとした。・・・そんな中、１人の武偵高の生徒がライドベンダーで爆煙の中を駆け抜けてバースバスターをチャッチした奴がいた。

「伊達さん！！使ってください！！」

「おっ！誰だか知らないけどナイスフォロー！」

パシッ！

『セルバースト』

ドカァァン！

その生徒からバースバスターを受け取ったバースはセルメダルを貯蓄していたポッドを銃口に装着して強力なエネルギー弾を放ち大砲を破壊した。

「何だとっ！？」

「おっしゃ！！・・・そんじゃこのまま決めさせてもらうわ」

チャリン！

『ブレストキャノン』

チャリン！　チャリン！

『セルバースト』

「ぐわぁぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォン！！

バースは大砲が破壊されて慌てているタイホウバッファローにブレストキャノンを撃ち込んで倒した。

「ふぅ。なんとかお前のおかげで倒せたけど・・・あんな無茶はしちゃいけない。・・・これ、医者としての忠告ね」

「申し訳ありませんでした」

ベンダーから降りてヘルメットを外してバースに謝った武偵生徒は・・・後藤だった。

「ん?もしかして君が後藤ちゃん?」

「え?はい。自分が後藤ですが・・・・」

バースの変身を解いた伊達さんは後藤の肩をポンと叩いた。

「後藤ちゃん。会長さんに頼まれて君が正式なバースの装着者になれるようにこれからみっちり鍛えてあげるから・・・・そこんとこ、よろしくぅ!!」

「・・・はい?」

これが後に後藤が仮面戦士になるためのスタートラインだった。

綺麗事（後書き）

バイク描写ってやっぱり難しいですね。明日は検定があるので更新が今日のように遅れるか、更新できないかもしれません。それと人気投票は継続中です。中間発表をさせていただくと・・・

1位は矢車双

2位は白雪

だったりします。3位は同着が多いので発表はまだできません。

牙と呪いと俺の欲（前書き）

何とか今日中には間に合いました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

牙と呪いと俺の欲

俺が海に沈んで、バースがタイホウバッファローを倒した頃、Wと鋼鉄参謀の戦いはWがかなり押されていた。

「「ハァッ！」」

ガギン！

Wは回し蹴りで鋼鉄参謀を蹴るが見た目通りの硬い肉体にあっさりはじき返される。

「硬ってぇ！？」

「正太郎、この怪人は全身が強固な鋼鉄に包まれている。・・・ここはヒートメタルでいこう」

「分かった！」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

「おらぁっ！！」

ドカッ！

Wはヒートメタルへと変わりメタルシャフトで鋼鉄参謀を叩こうとするも・・・相手の鉄球を喰らい吹き飛ばされてしまう。

「ぐあぁぁぁ！？」

「くっ！？やっぱりヒートメタルじゃあ機動力が足りない」

体勢を立て直すために鋼鉄参謀から離れたWは物陰に隠れた。

「だけどサイクロンジョーカーじゃスピードはあってもさっきみたいに弾かれちまうぞ？」

「ここはヒートトリガーで攻めるか・・・ファングを使うかだね・・・」

サイクロンやルナのメモリではパワー不足と判断したW（陽）はハーフチェンジの中で最も威力の高いヒートメタルかW、第7のメモリであるファングを使おうと進言した。

「・・・ヒートトリガーだとトリガーマグナムが連続攻撃ができないから近づかれたらやられまうな。・・・仕方ねぇ。・・・ファングを使ってみるか」

「・・・ファングは地球に存在しているすべての『牙』の記憶が記録されている。サイクロンやヒートなんかとは違って単純な記憶じゃないから暴走してしまうかもしれないんだけど・・・それでもやってみるかい？」

「・・・・・・」

正太郎はWの変身を解除すると再びジョーカーのメモリを握る。そして近くで倒れていた陽が歩いてくる。

「怪人との戦いなんてどうなるかなんて分かんないだろ。・・・・大切なのは思いの強さだと思うぜ？」

「・・・まったく、感情論だけで論理とはほど遠いね。そんなんだからいつまでもハーフボイルドなんだよ君は・・・・でも・・・君となら何とかなるかもしれないね」

陽のところにやってきたファングメモリは陽の手に乗っかるとメモリモードに変形させられる。

「さぁ、いくよ相棒！」
『ＦＡＮＧ』

「ああ！」
『ＪＯＫＥＲ』

「「変身！！」」
『ＦＡＮＧ　ＪＯＫＥＲ』

正太郎はジョーカーメモリをベルトに差し込むと、普段とは違い陽の方のベルトに正太郎の意識とメモリが転送された。そしてそれを確認した陽はファングメモリをベルトの右側に差し込んでバックル上部にはみ出したメモリの余剰部分を横倒しにすると、恐竜の頭部のようなデザインとなる。それとともに陽の身体は白と黒・・・普段の派手なカラーとは違いモノクロカラーだが細部が棘棘しくなったＷ。・・・仮面ライダーＷ・ファングジョーカーへと変わった。

「・・・何だあの姿は？・・・あんな姿・・・報告書には載っていなかったぞ」
ブンッ！

それを見ていた鋼鉄参謀は鉄球をＷにぶつけようとするが・・・・

「ガァウゥ！！」
ドカッ
「っ！？」
獰猛な獣のようになったWは片手でその攻撃を止めた。そしてWは恐竜の頭部のような鼻先の角を1回弾いた。
『ＡＲＭ　ＦＡＮＧ』
「ガァウ！！」
ズバッ！
Wは右上腕に刃を纏うとそれで鋼鉄参謀の鉄球を真っ二つに切り裂いた。
「・・・この俺の鉄球まで切り裂くとは・・・さすがデリート対象となっている仮面戦士だけはあるな」
鋼鉄参謀は切られてしまった鉄球を繋いでいたチェーンを右腕に巻きつけてやや古典的な戦い方でWに攻撃をしようとしたが・・・
『ＳＨＯＵＬＤＥＲ　ＦＡＮＧ』
「ガァァァァァァ！！」
ブンッ！
「くっ！？」
ズバッ！　ズバッ！

Wがブーメランのように投げつけた刃に妨害された。

「・・・これはもう仮面ライダーというよりもただの獣だな。・・・情報を持ち帰るためにも、ここは1度引くとするか」

「ガァァァァウ!!」

鋼鉄参謀は勝ち目がないと悟り、この場は1度引こうとするもWはそれを追いかけようとする。

「・・・陽、そろそろいいんじゃないか?・・・負けを認めて逃げる相手は追わないのが俺達だろ?」

まるで獣のようになっていたW（陽）をファングメモリを外すことにより変身解除させて止めたのはW（正太郎）だった。

「・・・さすがだね。・・・僕がメモリに意識が飲み込まれている間・・・正太郎がファングジョーカーの暴走をある程度押さえ込んでくれていたんだろう」

陽は変身解除により意識を取り戻した正太郎のところに歩いてくる。

「まったく・・・予想以上にやばいメモリで本気で焦ったぜ」

「とりあえずファングのデータを記録されてしまったのは残念だったけど、撃退はできたしいいとしようか」

「とりあえずあっちに衛生科の車があるし、矢車や伊達さんの戦いも終わったかもしれないから行ってみるか」

ボロボロの正太郎と陽は衛生科の車が止まっている場所に走って向かっていった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「兄・・・さん・・・」

そう呟いて俺は目を覚ました。どうやら俺はベッドに横になっているようだ。・・・ここは・・・車輌科の休憩室か。・・・どうして俺はこんなところにいるんだ。

「キンちゃん?」

白雪の声がしたので半身を起こすと、俺の傍らには林檎をうさぎ型に切っている白雪がいた。

「・・・白雪?」

「キンちゃん、キンちゃん!桟橋に倒れていたときは本当に心配したんだよぉぉぉぉ!目が覚めて本当によかったぁぁぁぁぁ!」

俺は兄さんと相打ちになって海に吹き飛ばされたはずなのに・・・
・まさか兄さんが助けてくれたのか?

「キンちゃん！まずは栄養を取らないと！食べて、食べて！」

白雪は俺の口に次々をうさぎの大群となった林檎を詰め込んでくる。

「うっぷっぇ！？」

うさぎ達のせいで呼吸ができない。・・・やばい・・・・死ぬかも・・・。そんな時、俺は外が明るくなっていることに気づき慌てて時計を確認すると・・・現在は午前7時だった。・・・アリアが撃たれたのは昨日の午後6時。兄さんの話が本当ならアリアのタイムリミットまで後、11時間しかないじゃんかよ！・・・こうしちゃいられない！急いでアリアを助けにいかないと・・・・

「何処に行く気だ・・・相棒」

俺が慌てて休憩室を出て行こうとすると・・・・体中包帯だらけの矢車がドアの近くに寄りかかっていた。

「そこをどいてくれ矢車。・・・俺はアリアを助けにいく」

「何処にいるのかも分からないのにか？」

「・・・・・・」

たしかに現在、何処にアリアがいるのかは分からない。・・・・・だけどこんな所で立ち止まってたらアリアが・・・

「・・・海・・・」

俺の後ろに立っていた白雪が呟いた。

「・・・海？」

「北緯４３度１９分、東経１５５度０３分。太平洋、ウルップ島沖の公海。理子がアリアにこっそりつけていたＧＰＳも同じこと言ってるよ。きーくん」

その声に振り向くと・・・もう一つの扉の方に理子がポケットＰＣを振りながら立っていた。ヒラヒラとしたナース服を着て、左目にはハート型の眼帯をしている。

「目が覚めたか。遠山。・・・よかった」

扉からはさらに松葉杖をついたジャンヌが入ってくる。

「２人から聞いたよ。アリアはイ・ウーのパトラって超能力者にさらわれたんだよね」

深刻な表情の白雪に頷いた俺はジャンヌ達の方を見る。

「カナから私達に連絡があったのだ。ついて来い。遠山」

片足を怪我してるジャンヌに合わせつつ俺は車輌科の階下へと降りてゆく。

「カナは私達の直接の上役だったのだ。私達はカナを敬愛している。カナの言うことなら何でも従う。・・・そう伝えたのだが、カナは３つのことしか話してくれなかった。アリアがパトラに攫われたこと。遠山にイ・ウーのことを話したことと、その内容。そして私もにわかには信じられないが・・・お前に自分が負けたこと」

兄さん・・・あれはどう考えても引き分けなのに・・・

「私と理子はまだ明確に脱離、敵対したわけではないので細かいことは伝えられないが・・・お前はイ・ウーのことを知ってしまい、さほど時間もないようなのでパトラの呪いについては教えてやる」

「呪い？」

「これもそうだよ」

ジャンヌの隣にいた理子は自分の眼帯を指差す。

「理子は今、右目が見えない。パトラのスカラベに呪いをかけられ眼疾を患ったのだ。完治まで1週間は掛かるだろう。私の脚も今にして思えばパトラのスカラベのせいだった」

スカラベ・・・聞いたことがあるぞ。

「スカラベっていうのはこの前キンちゃんに描いて見せた虫。パトラの使い魔。直接呪うよりは弱いんだけど・・・パトラの魔力を運んで、接触した人を不幸にするの」

白雪の言葉に・・・俺は舌打ちをする。・・・あの七夕祭りのときにアリアはスカラベに接触されちまっていた。だから暴走グリードがあのタイミングで現れてアリアが狙われやすくなっちまってたってことかよ。

「ジャンヌ・・・もしかしてパトラは・・・」

「ああ。察しの通りパトラはその名の通りクレオパトラの子孫だ。古代エジプトの思想にかぶれた本人はクレオパトラ7世の『生まれ変わり』を称してるがな」

クレオパトラ・・・古代エジプト・プトレマイオス王朝を、美貌と知略でローマの侵略から守ろうとした女王。リュパン、ジャンヌダルク、ドラキュラ伯爵ときてクレオパトラなんて言われても、もう驚かないぞ。・・・驚く余裕もないし・・・。

「パトラはイ・ウーの厄介者だったのだ」

エレベーターに乗って地下2階のボタンを押しつつジャンヌは眉を寄せる。・・・地下2階ってたしか・・・車輌科のドックだったな。

「パトラはイ・ウーの仲間じゃなかったのか？」

「元々はそうだったんだよ。パトラはブラドより上のナンバー2だった。だけど素行が悪すぎてイ・ウーを退学になったの」

自分も退学になったと言っていた理子が教えてくれる。

「パトラは寛大妄想のケがあって、自分は生まれながらの覇王だって思いこんでるの。『教授』が死んだら自分がイ・ウーのリーダーになって自分の王国を作るために戦争をするつもりなんだよ」

戦争だと？・・・そんなことさせてたまるかよ！！

「遠山。私と理子はパトラをイ・ウーのリーダーに据えたくないの

だ」

「でも・・・なっちゃうかもしれないの。『教授』とアリアが死んじゃったら」

ジャンヌと理子が言い、エレベーターは車輌科のドックで停止する。エレベーターホールには伏せて休む銀狼と黒いアタッシュケースを抱えたレキ、さらに陽もいた。

「キンジさん。キンジさんはアリアさんを救出にいくのですね」

その場の全員が俺を見た。・・・どうやら俺の意思を確認するつもりらしいな。・・・俺はレキの言葉に頷いた。

「仲間をやられてだまっていられるかよ」

・・・アリアを助け出す・・・少なくともそれが無欲同然の俺が思う今の俺の欲望だ。・・・

「では、これを・・・」

黒いアタッシュケースの中には強襲科時代に俺が使っていたB装備とベレッタ、それと兄さんから貰ったバタフライナイフときちんと磨かれて収められていた。

「それとキンジさんの上着のポケットに入っていました」

レキはさらにパトラが兄さんに渡していたはずのガラスの砂時計を渡してきた。球状のガラスの中で砂はもう半分以上、下に落ちてしまっている。・・・おそらくこれがアリアのタイムリミットなん

だろうな。

兄さんはこれを俺に託したんだ。・・・やってみろ。・・・そうゆうことだよな。兄さん。

「ハードスプラッシャーを貸すよ。キンジ君はそれに乗ってアリアの救出に行ってきて。・・・僕もアリアの救出に行きたいけど・・・正太郎も戦えるような状態じゃないんでね。・・・僕らにはこの程度しかできなくてごめん」

「・・・これを十分だ」

俺はハードボイルダーの水上用換装ユニットを装着したハードスプラッシャーに跨ると・・・俺の後ろに白雪が乗った。・・・おそらくこのイ・ウーを知ってるメンツでまともに動けるのはこいつぐらいだからだろうな。

「相棒・・・すまないが俺もまともに戦えそうにない。・・・足手まといになりたくないからな。・・・だからせめてこれを持っていってくれ」

矢車は俺にバッタカンを1つ渡してきた。

「・・・この場にいない武藤や不知火もお前の様子を心配していた。何かあったら連絡をくれ。応援を送る」

「それでは・・・武運を祈る。それと・・・これを持って行け」

ジャンヌは松葉杖に仕込んでいた聖剣デュランダルを抜くと白雪に渡してくる。

「ジャンヌ・・・この剣あなたの大切な・・・いいの？」

「パトラは私の敵でもある。敵の敵は味方と言うからな・・・」

「ありがとうジャンヌ。あなた本当はいい人だったんだね」

素直にお礼を言われたジャンヌは少し照れた様子に見える。

「わ、私は魔女だ！・・・ほ、本当は怖いんだぞっ！・・・武運を祈る」

ジャンヌのその言葉を聞いた俺と白雪は・・・ハードスプラッシャーで目的の場所へと向かった。

牙と呪いと俺の欲（後書き）

人気投票はまだ継続中です。次回ももしかしたらこのような時間になってしまうかもしれません。

無限魔力（前書き）

最近、更新する時間が遅くなってしまい申し訳ありません。もしかしたらこれからずっとこの時間になってしまうかもしれません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

無限魔力

「キンちゃん。ジャンヌから聞いたんだけどね、パトラのGは推定25・・・世界最強の魔女の一人なんだって」

俺の後ろに乗る白雪はバッタカンを持ちながら俺にそう伝えてくる。

「しかもピラミッド型の建築物が近くにあると無尽蔵に魔力を使えるんだよ。パトラはピラミッドを『無限魔力』の立体魔方陣として使っている。『無限魔力』は日本でも大昔に古墳とかを造って研究されたんだけど、あまりにも強力すぎて禁止されてしまった術なの」

「そういえばパトラもそんなことを言ってたな。・・・たしかピラミッドさえあれば自分の魔力を無限大とか・・・」

「うん。たとえて言えば、私やジャンヌは普通の鉄砲だとすると・・・パトラの魔力は砲弾の尽きない戦車。そうゆう存在なの」

砲弾の尽きない戦車か。・・・それにパトラにはおそらくヤツ自身の欲望から作られたアリジゴクのようなヤミーがいた。・・・見た感じ砂を操る様子だったことを考えると・・・あのヤミーの力を使ってさらに砂を操る魔法を強力にしているに違いない。

「そんなヤツから取り戻せるのかよ・・・・アリアを・・・」

「キンちゃんは・・・・アリアが心配なんだね」

白雪は俺から顔を逸らしながらそう呟いた。

「・・・・・」

「でもキンちゃん・・・アリアのことだけじゃなく、自分のことも心配もちゃんとした方がいいよ。普段はコンボを使ったらあんなに寝込んでいるのに、今回は2回もコンボをやったのにほとんど寝ていないんだから・・・」

昨日は短時間にガタキリバコンボとラトラーターコンボを使った。しかもラトラーターコンボのときにはオーラインワイルドを使ってさらに反動を大きくした。・・・本当はすごく眠いが・・・アリアを助けるためにも我慢しないとな。

「時間が惜しい。・・・スピードを上げるぞ白雪」

「う、うん」

俺はハードスプラッシャーをさらに加速させた。

それから１０時間ほどが経った。おそらくアリアのタイムリミットまでもう１時間ほどしかない。アリアのいるはずの海域に到着すると、海面でシオナガスクジラの群れが潮吹きをしていた。

「キンジ！遅いぞっ！！」

「アンク！無事だったのか！」

そのクジラの潮吹きをかわしながら進んでいくと、怪人態で海上を飛んでいるアンクと合流した。

「アンク。アリアの居場所は分かるか？」

「ああ、あの船の中だ」

「っ！！・・・・」

俺はアンクの指差した船を見て言葉を失った。・・・見間違えるはずない。あれは豪華客船・アンベリール号だ。去年の１２月、浦賀沖で沈没して、兄さん達が失踪した豪華客船が・・・・サルベージされて幽霊船のように浮かんでいた。それもかなり改装されていて、喫水線は沈んでしまいそうなほど低く、タンカーのように見えるその甲板には・・・舌打ちしたくなるほどのピラミッドが増築されている。

「ここにもまた『無限魔力』だ。・・・人間はどうしてこんなアホなことを思いつくんだ？自分の力を超える力は身を滅ぼすだけだっていうのに・・・」

「・・・やっぱり８００年前にもそれは使われてたのか？」

もしかしたらアンクは『無限魔力』に対する対策を知っているかもしれないと少し期待して聞いてみると・・・

「・・・昔の王が・・・な。あれにも手を出していたんだよ。・・・・ホントに気に喰わないヤツだった」

昔の王？・・・どんなヤツだったかは分からんが、アンクはそいつを嫌っていたことは分かった。

「・・・キンジ。あのピラミッドには欲望による攻撃・・・つまり俺みたいな存在の攻撃が無効化される術式がどうゆう風にか分からないが組み込まれてる。・・・おそらくはヤミーの攻撃が間違えてこれに当たってしまうのを警戒してのことなんだろうが・・・」

アンクの攻撃が通じないか。・・・本当に最悪な相手だな。さらに近づいてみるとアンベリール号の前方には砂でできた陸のような部分を増築されていた。・・・これはもう船じゃないと思う。上陸したその砂浜には、１０メートルはあろうかというパトラの石像が左右に２体づつの計４体が置かれていた。

「これ・・・かなりアレンジされているけど、古代エジプトのアブシンベル神殿を模しているよ。凄い・・・これ全部、魔力で作られている。クジラ達も魔力で呼び寄せてるみたい。たぶん魚雷か何かの盾にするために集めたんだと思うよ」

「これも俺は壊せないな。また変な術式がかかっている。・・・・こんな術式を考えるなんてあんな小娘にできるとは思えない。・・・・誰かが教えたのか？」

俺達はピラミッドの入り口らしきトンネルから内部に入っていこうとすると、紫色の蛇のような仮面戦士がいた。

「さすが、グリードのお一人のアンク！なかなかの洞察力だ！」

「・・・てめぇ、何者だ？」

「これは申し遅れた。俺の名前はジェームス・トレードニア。周りにはＪＴＣと呼ばれている」

ＪＴＣ・・・聞いたことがあるぞ。２～３年前にアメリカを騒がせた天才ハッカー。１年ほど前に姿を晦ましたと聞いたが・・・まさか仮面戦士の力も持っていたとはな。

「そしてこの姿は仮面ライダーストライク。・・・日本の‘王蛇’という仮面戦士のデータをベースにベンタラのシステムでエヴィルが製作したライダーシステムだ」

こいつもエヴィルか。・・・・もしかして・・・・・

「エヴィルがこの術式をパトラに与えたのか？」

「ご名答！・・・さぁ、祭りを始めようか」

『ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ』

ストライクと名乗る仮面戦士は独特の形をした剣を握ってこちらに近づいてくると、アンクが俺と白雪の前に立った。

「お前らはとっとと進んでろ。こんな雑魚、俺１人で十分だ」

「雑魚・・・か。なかなか言ってくれるじゃないか。この光景を見て同じことが言えるのか？」

暗闇の中からさらに４～５体の怪人が出てくる。・・・この位置

からじゃ見えにくいが黒いフードを被っている怪人だ。

「ハッ！雑魚が集まっても無駄なんだよ！」

「ほう、これでも大口を叩けるか。・・・お前達、道を開けてやれ。あのグリード以外をこの先に行かせる」

ザッ！

怪人達はそれぞれ道の脇によって通路を通りやすくする。

「キンジ。たぶんあいつの目的は俺だけだ。・・・先に進め」

「・・・早めに合流しろよ」

「アンク・・・キンちゃんに無理をさせてる分、痛めつけたいから生きててね」

白雪・・・お前、アンクにトドメを刺す気か？・・・そう心の中で思いながらも俺は白雪と共に先へと進んでいった。

「アンク、お前のメダルを我らが首領が欲しがっている。この場で消えてもらうぞ」

「誰が渡してたまるかよ。・・・悪いがお前達をボコボコにしてエヴィルの組織のことを洗いざらい吐いてもらうぞ」

アンクとストライク率いるエヴィルの精鋭の戦いが始まった。・・・この戦いがアンクにあんな事をもたらすなんてアリアのところに向かっている俺は考えてもいなかった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

アンクと別れた俺達は象形文字も読むことのできる白雪によると『王の間』と書かれた部屋に来ていた。そこは何もかもが黄金でできた空間だった。豪華な絨毯も、部屋を取り囲む石柱も、奥に据えられたスフィンクス像もすべて黄金だった。そして素早く辺りを視認すると・・・アリアを収めた黄金棺をスフィンクスの足元に発見した。

「何ゆえ聖なる『王の間』に入れてやったか分かるか？極東の愚民ども」

アリジゴクヤミーを横に控えていて、黄金の玉座に座っているパトラはこちらを睨む。

「けちをつけられたくないからぢゃ。わらわはイ・ウーの連中に妬まれておるでの。ブラドはわらわの呪いで倒したとゆうに、連中はアリア達が倒したと言う。・・・ともあれ、わらわがアリアを仲間ごと倒してしまえば・・・奴らの溜飲も下がろう」

ガシャン！

パトラの投げた水晶玉がアリアの収まっている黄金棺にぶつかって割れる。

「イ・ウーの次の王はアリアではない！わらわぢゃ！『教授』もわ

らわがアリアの一味を倒し、アリアの命も握って話せば王位を渡すに違いないぢゃろ！！」

玉座を立ち上がったパトラは前方にある黄金の階段を下りてくる。

「わらわは、常に先を見て動く。今回もイ・ウーの女王になった後のことも考えて動いておる。わらわは・・・男が嫌いじゃ。ヘンな気分になる。女王になったら側近は女で固めたい。ぢゃから後で使う予定の女は殺さずに呪って封じておいたのぢゃ。戦えば相性の悪そうな銀氷の魔女を最初に呪い、リュパンの子孫も呪ったが殺しはせん」

つま先からつむじまでをコブラのように這ったパトラの視線に、白雪は眉を寄せる。

「日本の魔女。お前も容姿が優れておるでの。力次第ではわらわの戦士に加えてやってもよい。トオヤマキンイチ・・・あの男もわらわに仕えさせたら一生、カナのままにしておく。トオヤマキンジ、お前も嫌いぢゃ。お前はトオヤマキンイチの面影がある」

兄弟なんだから仕方ないだろ。・・・心の中でそうツッコんだ俺にパトラは憎憎しい、憎悪のような視線で睨んでくる。

「ぢゃからトオヤマキンイチ。お前はここで殺す」

「ハァッ！！」

「くっ！？」

アリジゴクヤミーが殴りかかってきたのを俺はギリギリのところ

でかわす。

「キンちゃん！5分しか持たない。その間にヤミーを倒してアリアを救出して！」

白雪は袖の中から無数の折り紙の鶴が飛び出す。その折り紙は石つぶてのようにパトラに向かって飛んでいくと空中で炎の鳥に化けた。

「緋火星鶴幕」

ダダダダダダッ！

炎の鳥たちは一斉にパトラに向かって体当たりして爆発した。炎の渦が巻き起こり、パトラの姿が見えなくなるほどの煙が上がる。

ぱぁぁぁぁぁぁっ！

「っ！？」

煙の後に舞い上がったのは砂金。・・・それも『王の間』にあった黄金が変化したものだった。・・・それに気づいた白雪はデュランダルを抜いて斬りかかる。・・・時間がない。俺もとっととヤミーを倒させてもらう。

「主を王にする。邪魔をするでない。オーズ」

「そんな訳にはいかないだろ。・・・まずはお前をぶっ倒して・・・アリアを助けさせてもらう」

俺はメダルホルダーから青いメダルを3枚取り出す。

「悪いがお前の相手をしていられる時間はない。最初っからコンボで行かせてもらう。・・・変身！」
『シャチ！ウナギ！タコ！シャッ！シャッ！シャウ～タ～！シャッ！シャッ！シャウ～タ～！』
「セイヤッ！」

シャチヘッドの頭部、ウナギアームの胴体、そしてタコレッグの足の水槽系3枚でのコンボのオーズ・シャウタコンボに変身した俺は電気ウナギウィップでアリジゴクヤミーを捕まえて、天井を突き破り外に出た。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺がシャウタコンボに変身してアリジゴクヤミーと戦い始めたころ、正太郎は自身の病室で赤ジャンの生徒と話していた。

「なるほど。詳しくは言えないが遠山は現在、遠くまで神崎を助けに出向いていて、万が一があるかもしれないから援護に行ってくれ。・・・と言うことだな」
「あぁ、頼めるか照井？」
「ふん、俺に質問するな。援護に行ってやるに決まっているだろ」

正太郎に照井と呼ばれた生徒が病室を後にしようとすると、2人の男が黒いジャケットを着て立っていた。

「おっ！イズミンと葦原じゃんか！お見舞いに来てくれたのか？」

その1人はゴツイ体格だが乙女な性格でよく俺に「嫌いじゃないわ！」とか叫んでいたオカマの泉鏡水（いずみきょうすい）。もう一人は教室でも無口な狙撃科の生徒の芦原兼（あしはらけん）だった。

「半年間のスパイごっこは終わりっ！そろそろ私達も動くわっ！」

『ＬＵＮＡ』

「ゲーム・・・スタート」

『ＴＲＩＧＧＥＲ』

鏡水はWに使われるルナメモリと似たようなメモリをおでこに刺すとやたら腕が長い金色と黒の怪人‘ルナドーパント’に変わり、芦原もトリガーメモリのようなメモリを右の手のひらに差し込み、顔面にスコープがついていて、右腕が銃になっている怪人‘トリガードーパント’に変わった。

「カツミちゃんの計画のためにショウちゃんとライトちゃんを連れて行かせてもらうわっ！」

「・・・まったく・・・前々から何処か俺達を見ている気がしてたが・・・そんな理由だったとはな。・・・俺はそっちのケがないからそれはそれで安心したが・・・」

正太郎はジョーカーメモリを取り出そうとしたが照井がその手を

掴んで止める。

「お前は戦うな。まだ怪我が治っていないだろ。・・・ここは俺が相手をさせてもらう」

『ＡＣＣＥＬ』

照井はバイクのハンドルを思わせるベルトを腰につけると赤いメモリを取り出して起動する。

「変っ身っ！！」

『ＡＣＣＥＬ』

そしてそれをベルトに差し込んだ照井は赤いバイクのような仮面戦士に変身した。

「仮面ライダーアクセル！バイクっぽいけど、嫌いじゃないわっ！」

「・・・場所を変えるぞ。・・・ここではお互い戦いにくい」

「・・・分かった」

照井の変身した仮面ライダーアクセルと2体のドーパントは窓から飛び降りて外で戦いを始めた。

無限魔力（後書き）

今回は海のコンボをフライングで登場させてみました。人気投票はあと、1週間で締め切ります。

液体変化（シャウタ）（前書き）

やっぱり今日もこんな時間になってしまいました。明日はもう少し早く更新できるようにしてみます。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

液体変化（シャウタ）

オーズ・シャウタコンボとなった俺は電気ウナギウィップをアリジゴクヤミーに連続で振るう。

「ハァッ！セヤッ！」

「くっ！？世界を支配するのは主の願い！！貴殿に邪魔をされては困るのだ！」

ザァァァァァ　ブン！

アリジゴクヤミーは砂金で作った2メートルはあるランスを俺に突き立ててくる。・・・どう避けようとも直撃コースだ。・・・・普通はな。

バシャァァァァッ！

「何とっ！？」

俺はシャウタコンボの能力で身体を光太郎さんの変身するＲＸ・バイオライダーのように液状化してランスをかわすと、そのままアリジゴクヤミーに近づく。

「セイッ！」

ドカッ！

そしてアリジゴクヤミーの手前で元の姿に戻り、回し蹴りを決める。

「セイヤッ！」
バシン　バシン！
さらに電気ウナギウィップで攻撃すると、アリジゴクヤミーは砂浜の方に移動した。
「ぐっ！？こうなれば致し方ない。・・・主の力・・・さらにもらい受ける！！」
ザァァァァァァァァッ！
アリジゴクヤミーは砂浜の砂や辺りに散らばる砂金を集めて、巨大なアリジゴクの怪物になった。・・・またこのパターンか。
「ギィィィィィィィィィィィ！！」
ドンッ！
ジャンボアリジゴクヤミーは船の帆に触れると砂に変えてさらにそれを吸収して大きくなる。・・・このままじゃ船をすべて砂に変えられちまうかもな。
「お前にはもう時間なんて与えねぇ！！」
バシャァァァァァッ！！
俺は下半身だけを液状化させ飛び上がると、そのままジャンボアリジゴクヤミーに体当たりをしてそのまま海に跳び込んだ。
「ギィィィィィィ！？」
砂でできていた身体は水分を吸収して泥のような状態になって崩れ始める。・・・チャンスだな。・・・俺は液状化を解除すると、

タコレッグの中央の黒い脚2本とは別に水色の装甲を6本の触腕状に分裂・変化させる。

「アバババババババッ！」

ダダダダダダダッ！

水中に沈むジャンボアリジゴクヤミーを俺は分裂したタコレッグで蹴りまくる。・・・ただでさえ水分を吸収して固まっているヤミーを包む砂の身体はいとも簡単に崩れていく。

「ぐあぁぁぁぁぁぁ！？」

やがて砂でできていたアリ地獄の怪物が完全に崩れて本来の姿のアリジゴクヤミーが出てきた。

「セイヤァッ！」

ベシンッ！

「グオッ！？」

それを電気ウナギウィップで弾き飛ばし、再び船の上に乗せた俺はオースキャナーを手に取りベルトを再スキャンする。

『スキャニングチャージ！』

「ハァァァァァァッ！！」

俺は下半身を再び液状化して空に跳び上がると電気ウナギウィップでアリジゴクヤミーの両手を縛り付けて引き寄せながら再びタコレッグを触腕状態にする。

「セイヤァァァァァァァッ！！」

そしてそのまま触腕状のタコレッグをドリルのように回転させながら俺の方に引き寄せたアリジゴクヤミーにそのままドリル状のキックを決めた。

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？主よ！申し訳ない！王に導くことはままならなかったぁぁぁぁぁ！！」

ドオォォォォォン！！

アリジゴクヤミーはシャウタコンボのキックを喰らい爆発すると、ヤミーだったセルメダル３００枚は船のプールのような場所に落下した。

「あと3分もないな。・・・・急がないと・・・」

俺は変身を解除せずに再び先ほど空けた穴から『王の間』に戻ると、アリアを収めた黄金棺を足元に置いた黄金のスフィンクスが動き出していた。・・・それだけじゃない。パトラは1本の刀を持っている。

「これで終わりぢゃ」

ブンっ！

パトラは星伽から盗まれたはずのイロカネアヤメを白雪に向かって投げつけた。するとその刃は白雪の胸を貫いた。

「白雪っ！」

「ううう、う」
ずぶっ　ブンっ！

白雪はデュランダルを後ろに投げると胸に刺さったイロカネアヤメも引っこ抜き後ろに投げた。すると白雪が幻のように消えた。・・・そこには人型に切られた和紙が空中を漂った。

パシシッ！

「キンちゃん！そのままアリアのところに走って！！・・・星伽候天流、奥儀。緋火星伽神・二重流神！」

柱の影から出てきた白雪は飛んできたイロカネアヤメとデュランダルをキャッチすると1刀1剣でX字に真紅の刃を放ちスフィンクスを破壊した。

「ハァァァァァッ！」
バシャァァァァァァァァッ！

俺は再び全身を液状化して一気にアリアのところまで向かおうとした時・・・異変は起きた。

「今すぐヘンシンを解除するのぢゃ遠山。さもなくばこの女をミイラにするぞ」

「何っ？・・・うっ！？」
シュゥゥゥゥゥ！

液状化している身体が何故か蒸発を始めていたので俺は慌てて液状化を解除した。それと同時に白雪が力を使い果たしたように倒れ

ると、その身体から水蒸気のような煙が上がり始めていた。

「人体とは水袋のようなもの。わらわはその水を抜き取る聖秘術を持っているのぢゃ」

「何だとっ!?・・・ぐっ!?」

にやりと笑うパトラと共に、ほとんど身体が水分みたいなシャウタコンボの俺と倒れる白雪からさらに水蒸気の勢いが増していく。・・・まるで俺の身体がすべて蒸発してしまうような感覚にさらされる。・・・くそ、ラトラーターなら熱を放出するからこれにも耐えられるかもしれないが・・・コンボチェンジもままならない。・・・万事休すか。

「無限に有限は勝てぬ。それが道理ぢゃ。お前達がやろうとしたことは道理に逆らうとゆうこと。無理なことなのぢゃよ」

ガンッ!

その音はピラミッドの外から聞こえてきた。するとその人物は突如としてやってきた。

「なら・・・もう少し・・・無理をしてみようかしら」

『キィィィィィィ!』

「カナ・・・いや、トオヤマキンイチ!」

まるで盗聴でもしていたのか、これまでの会話をすべて聞いていた声の主にパトラは顔を赤くする。・・・俺が先ほど開けた天井の穴から降りてきたのはブランウイングの背中に乗った仮面ライダーファム。・・・カナだった。・・・そしてパトラはその登場により集中力が切れてしまったのか俺と白雪から上がっていた煙が止まっ

た。

「キンジ。私のあげた緋色のバタフライ・ナイフはまだ持っているわよね」

ファムの言葉に俺は頷く。

「そのナイフを持ちながらアリアに口づけをしなさい」

口づけって・・・瀕死のアリアにどうしてそんなことをしないといけないんだよ?・・・俺にそう告げたファムはブランウイングの背中から降りてゆらりとパトラに近づく。

「パトラ。今の私は女にも容赦しないわよ」

「カナ。トオヤマキンイチ。寄るでない。わ、わらわはお前とは戦いとうない」

「パトラ。あなたは獰猛に見えて実は頭のいい子。左右の手で別々の文字を書くように、幾つものものを思念動で別々に動かせる。でもその集中力にも限界がある」

「ち、近づくでない。わらわはお前のことなど好きで・・・・にできるのぢゃぞ!」

パトラは台詞を咬みながらも周囲にある大きな皿を自分の前に浮かばせる。・・・おそらく盾のつもりなんだろうが・・・仮面戦士相手にそんなものは意味がない。・・・しかしあれだけ攻撃的だったパトラがなぜか防御だけになったな。

『キィィィィィィィ！』
バキィィィン
「くっ！？」
ブランウイングは体当たりでパトラの前にある皿をすべて砕く。
「わ、わらわは覇王ぢゃぞ。お前ごときに、お前ごときに・・・」
焦った様子のパトラは砂金で作った鷹や虎、象をファムに向かってけしかけるが、ファムはそれを次々とブランバイザーで斬り裁く。
「んっ？」
『ガゥ！ガゥゥゥゥ！！』
そんな中、突如俺の左肩に乗ってきたトラくんが俺の顔の横で吠えた。・・・そうだよな。黙って見てないでアリアを助けないとな。
「行くぞトラくん！」
『ガゥ！』
俺は左肩にトラくんを乗せたままアリアの収まっている黄金棺に向かって走り出す。
「と、止まるのぢゃ！」
「よそ見はいけないわパトラ。今は私だけを見ていなさい。まっすぐ、まっすぐに」

変身を解除したカナは武偵高の制服でパトラに催眠術をかけるように囁く。・・・そのおかげもあってパトラはカナに釘づけになっている。・・・俺はそのままアリアの収まる黄金棺の前まで到達すると変身を解除した。

「アリア！俺だ！目を覚ませ！」
『ガゥ！』

俺は棺の蓋をずらして眠るようにしてたおれるアリアの顔を確認する。

ズズズ

「なっ！？」

気づけば黄金棺は傾き、俺は足元まで砂金に埋もれていた。・・・流砂。誰かが近づくとアリ地獄のようにその重みで沈むようにできているものだ。・・・パトラの魔術云々じゃなくこれは落とし穴だ。・・・くそ、こんな初歩的なミスをするなんて・・・。俺はとっさに棺の蓋の上に登った。
ガクン

「くっ！？」

流れ落ちる砂金の中に棺は斜めになり、大きくずれた蓋の上で足を踏み外した俺は棺の中に転げ落ちてしまう。・・・その時に俺はメダルホルダーを流砂に落としてしまった。

「うっ！？」
『ガゥゥ』

今度は俺の重みのせいか、棺が反対側に傾いて蓋がしまってしまう。俺の頭の上に移動したトラくんは不安そうな鳴き声をあげる。・・・くそっ!?変身を解除する前にアリアを棺から出していればこんなことには・・・・。などと思っていた俺の体は宙に浮くように不安定になる。・・・おそらく下に棺が落ちていっているんだろうな。俺は真っ暗な棺の中でとにかくアリアを守るように抱き寄せた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺がアリアと共に棺の中に収まって下へと落下をしてしまった頃、ピラミッドの外ではアンクはストライクと5体の怪人を相手にしていた。その5体はかつてスーパー1が戦ったドグマの怪人・・・地獄谷5人衆だった。

「さぁ、死になさい!」

「ちっ!」

アンクに爪を振るってきた女性怪人はサタンホーク。仮面戦士科の教科書の説明にはフラミンゴのような怪人で色はピンク色。飛行能力と爪を使った鷹爪拳の使い手とある怪人だ。

「「「「メダルをよこせぇぇぇぇ!!」」」」

サタンホークがアンクに攻撃しつつ襲い掛かってきたの怪人は蛇拳の使い手のヘビンダー。虎拳の使い手のクレイジータイガー。熊拳の使い手のストロングベアー。象拳の使い手のゾゾンガーだった。

・・・仮面戦士科の教科書にはサタンホークの下にその程度しか書かれていないため俺は詳しいことは知らない。・・・かなり小さく書かれているっていうことはけっこうあっさりやられたんだろうな。

「邪魔だっ！」
ドカッ！

「・・・安らかに眠れ」
ドンッ！

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ドオォォォォォン！！

アンクはサタンホークの顔面を殴り、転倒させるとバズーカを撃とうとしていたゾゾンガーに火球を放ち倒すと、ストロングベアーを睨みつける。

「これ寄越せ！！」
ガッ！

「おらぁっ！！」
ヒュン！

ストロングベアーの胸についていた三日月型のブーメランを奪い取ったアンクはそれに炎を灯してヘビンダーに向かって投げつける。

「なっ！？」

ズバッ！

「ぐおっ！？」

右腕をブーメランで切断されたヘビンダーはそれでも地獄拳法分身の術で3体に分身した。

「んなことしなくていいから潔く眠れっ！！・・・南無三！」

ゴオォォォォォォ！

「ぐぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォォォン！！

アンクは分身したヘビンガーを一気に包んでしまうほどの大きさの火球を放ち、次はクレイジータイガーを睨んだ。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

「このっ！」

パシっ！

クレイジータイガーは長槍でアンクを突き刺そうとするが、アンクはその長槍を回避すると力ずくで奪い取る。

「・・・エイメン」

グサッ！

「がぁぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォォン！！

アンクは奪い取った長槍でクレイジータイガーを突き刺して倒すとそのままストロングベアーを殴りつける。

「神に帰れ！！」
グサっ！

先ほど投げて戻ってきたブーメランをキャッチしたアンクはそのままブーメランをストロングベアーに突き刺した。

「こ、これがグリードの力か。・・・まさか俺達が束になっても敵わないとは・・・」
ドオォォォォォン！

「お前も・・・・そろそろ眠れ」

ストロングベアーを倒したアンクは起き上がっていたサタンホークに火球を放つが空を飛んで回避される。

「おのれグリード！」

サタンホークは恐怖と憎悪が混ざったような目つきでアンクを睨んだ。

「・・・そんな目で見られんのは慣れてんだよ」
バサッ！

「・・・・フンっ！」
ドカッ！

翼を広げて飛び上がったアンクは右手に炎を灯しサタンホークを

殴り飛ばした。

「ぐぁぁあぁっぁぁ！？・・・ストライク様！！どうか！どうかカタキをぉぉぉぉ！！」

ドオォォォォォォォォン！！

アンクはサタンホークも倒して船に再び降りるとストライクを睨んだ。

「・・・エヴィルってのは人間を改造して怪人にするんだったよな？」

「ああ。たしかにそうだ。俺の直接の上官であるゼイビアックス様も改造手術を自分の意思で受けておられる」

「そうか。・・・やっぱりとっととぶっ潰さないといけないな。・・お前らの基地を教えろ。・・・全部倒して悲しみの連鎖を断ち切ってやる」

ガギン！

アンクは右腕に炎を灯してストライクに殴りかかると、ストライクはその手に持っている剣でその拳を止めた。

「・・・おもしろい。地獄谷５人衆をこうもあっさり倒すほどの戦闘力にその頭脳！これでこそわざわざこんな船にまで俺が乗ったかいがあった！さぁ、祭りをもっと楽しもうじゃないか！！」

アンクとストライクの戦いはまだ始まったばかりだった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

さらにアンクがドグマ５人衆と戦っているのと同時刻。アクセルはルナドーパントとトリガードーパントに押されていた。

「どうしたの？あなたはその程度の力なの？」

「そんなはず・・・あるかぁぁぁぁぁ！！」

ドンッ！

「ぐぁぁぁぁぁぁ！？」

アクセルは独特の剣を構えてルナドーパントに斬りかかろうとするがトリガードーパントの銃弾で吹き飛ばされてしまった。

「トドメよ！フライング２丁目固め！」

「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「照井！・・・くそ、やっぱり俺も助けに・・・」

正太郎はアクセルがピンチなのを病室から見て変身しようとしたがまたもや誰かに止められた。

「ここは俺達に任せろ！」

『ＴＵＲＮ　ＵＰ』

「君は休んでいなさい」
『フィ・ス・ト・オ・ン』

いつの間にか正太郎の病室に入っていた橘先輩と名護先輩は変身しながら窓から飛び出ていくと、さらにG3－Xと黒いボディに白いラインの三原修司（みうらしゅうじ）が変身する仮面戦士の‘仮面ライダーデルタ’がやってきた。

「さぁ、メモリをおとなしく渡して投降しなさい」

「・・・ギャレンにイクサにG3－Xにデルタ！みんな嫌いじゃないわ！！・・・でもたしかに戦力不足ね。いらっしゃい！私の子分達！」
ヴォン　ヴォン

ルナドーパントが大きく両手を振るうと2～30人はいるマスカレイドドーパント達が出現した。

「これはいったい・・・」
『氷川君。落ち着いて！あいつらはあのドーパントに作られた分身のようなものよ。構わず倒しなさい』

「了解しました。小沢さん。どうやらあれは分身らしいですよ。みなさん」

G3－Xは小沢さんからの内容を3人の仮面戦士にも伝えるとそれぞれ自分の武器を握った。

「ならばこの俺が黄色い方の相手をする。橘はアクセルと共に青い方を頼む。君達2人はマスカレイドの相手をしていてくれ」

「分かった！うおぉぉぉぉぉ！！」

それぞれの戦いはさらに加速し始めた。

液体変化（シャウタ）（後書き）

夏休み中にパトラ戦を終わらせる予定でしたが・・・明日で夏休みが終わってしまうので無理そうです。それと人気投票はまだ続いています。

緋弾の覚醒（前書き）

夏休みが終わってしまったので次回からまた少し文字数を減らします。申し訳ございません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

緋弾の覚醒

流砂に流されるような感覚はがつんっ！と、どこかに柩が衝突した音と共に止まった。アリアの頭を抱きしめていた俺はそのせいもあって頭をぶつけてしまったが・・・そんなことはどうでもいい。

「ぐおぉぉぉぉ！！・・・出られないな」

『ガゥ　ガゥ』

柩の蓋は砂金が上にかぶさり重量になっているせいで動かない。・・・これはこれでピンチだが、今はそんなことよりもアリアだ。・・・アリアのタイムリミットは残り数十秒しかないんだからな。俺は狭い柩の中でＢ装備の右肩についているフラッシュライトを照らすと・・・

「・・・・・・！」

アリアはパトラと同じような黄金でできた過激な衣装を着せられていた。その姿で眠るアリアはまるで・・・眠れる森の・・・美少女。・・・そのエジプト版だった。

『ガゥ！』

「おっと！？はやくアリアを助けないとな」

アリアの呪いを解くには・・・キスだったな。・・・・どうしてそんなことをしないといけないのかは分からないが・・・やるしかない。

「許してくれ。アリア」

砂時計の中の残りわずかな砂がどんどん落ちていく。腕時計を確認すると・・・残り２０秒ぐらいだろうな。・・・アリアを助けたい。最初は同情か、真っ直ぐに生きているアリアへの尊敬からだった。・・・だけどいつの間にか変わっていた。それは俺の欲望になっていた。お前とは生き方も違う。現代では珍しいが、身分も違う。だからいつかは離れ離れになる日が来ることは分かっている。・・・俺はオーズだからこそ、欲望を解放したら俺という人間が壊れてしまいそうだから欲望に忠実に生きる気はない。前に初めてグリードのウヴァと戦ったとき‘オーズ’という存在に飲み込まれかけたこともあったしな。だけど今だけは・・・この瞬間だけは欲望に忠実にさせてもらう。

どうも俺は不器用だな。ガキすぎるのかな。こうゆうところ。・・・考えるよりも先に俺の口はアリアの口に触れていた。砂時計の中で砂金が落ちきり、俺はアリアの頭を強く抱き寄せた。

「・・・・・・！」

ぎゅっ

死ぬな。死なないでくれアリア。・・・・・その時、不思議なことが起こった。

「・・・・・っ！」

『ガゥ？』

俺の周囲が緋色の光に包まれた。・・・フラッシュライトの電源

を切ってみると、その光は兄さんからもらったバタフライ・ナイフからだった。俺はそれをポケットから取り出して柄鞘を開くと・・・

「うっ・・・・・」

『ガゥ!?』

目が痛むほど、赤く・・・緋色に輝いていた。赤熱化しているようにも見えるが熱くはない。何だ・・・これは!?

「キ・・・ンジ?」

小さく響いたアリアの声。俺は慌ててバタフライ・ナイフを閉じるとアリアは赤紫色の瞳をゆっくりと開いた。

「あれ?ここ、どこ?・・・・何よ、ここ?あたし、たしか撃たれて・・・」

「そうだ。お前は狙撃されて・・・色々あって今は太平洋でイ・ウーの厄介者のパトラと戦闘中さ」

性的興奮をトリガーにするヒステリアモード。俺のもう一つの力・・・だけど何かいつもと少し違う気がする。

「い、いろいろありすぎよそれっ!!えっ?あ、なにこれ!?」

狭い柩の中自分の服装に恥らうアリアを見て・・・俺は安心のあまり涙を流しそうになった。

ズズン

遠雷のような音が柩の外から聞こえてきて・・・洋上のピラミ

ッド全体が揺れた。

「な、なにっ？」

アリアと共に周りを見渡してみるが・・・柩の中から外が見えるはずもない。・・・おそらくはパトラが兄さんに勝てないと悟って自沈させるつもりなんだろうな。・・・俺は柩全体が斜めに傾いたのを見計らい、角度を計算しながらその蓋の一片に背をつけた。・・・今ここで押し付ければ・・・おそらく。

「キンジ！」

『ガゥ！』

事態を把握しきれていないアリアも共に蓋を押し付けてくれる。・・・ついでに言うとあまり役に立っているように見えないがトラくんもだ。

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「うあぁぁぁぁぁ！」

ガラララララッ

押し上げた蓋が音を上げながら滑り落ちていく。・・・外に出てみるとそこは1つの大広間だった。

「何よ・・・ここ？」

唖然とするアリアの前にはジャッカル、タカ、猫などの顔に人間の体をした古代エジプトの神々の巨大な座像が俺達を見下している。・・・それを見ていたとき、後ろから殺気を感じた。・・・振り返

ると坂道みたいな床の上のほうにパトラが立っていた。

「トオヤマキンジ・・・わらわは、のう・・・今回ばかりは引いてやる。だがそれは返せ」

「パトラ・・・いけないよ。女性をモノ呼ばわりなんて」

「そうか、ＨＳＳか。・・・お前はトオヤマキンイチの弟ぢゃからの。お前もなれるのは道理といえよう。ぢゃがお前といえどもヘンシンしてなければ水に沈めば死ぬ。ここは海。船が沈めば生き残るのはわらわだけよ。わらわは水中でも長らえる術を持っておる。わらわの都はかつて、海辺にあったのでの」

チャキ

パトラは携えていた長銃を構えた。・・・砂漠迷彩が施されたそれは、暴走グリードとの戦いのすぐ後にアリアを撃ったＷＡ２０００狙撃銃だった。・・・それに増設されたレーザーサイトはアリアを完全に捉えていた。

「くっ！」

パトラたしかにお前は頭がいい。兄さんが認めることだけはある。・・・あれだけ魔力、魔力と来て最後は科学の力。・・・完全に盲点だったよ。

「結果的に後ろからではしくじったからの。今度は前からぢゃ。その命、わらわに捧げい」

俺はパトラが引き金を引く瞬間にアリアを守ろうと前に出ると・・・その銃の先が俺の頭を向き・・・敗北を悟った。・・・パトラは

最初からアリアじゃなく俺を狙っていた。

「さらばぢゃ。トオヤマキンジ」

「キンジっ！」

ダァァァァン！

金切り声を上げてるアリアを背中で押し飛ばすようにして俺は後ろに倒れた。

「キンジ！キンジ！」

『ガゥゥ！ガゥ！』

頭部を撃たれた。・・・それだけは分かる。顔面に血の感覚もある。しかし俺はここで違和感に気づいた。

「キンジ！キンジ！」

『ガゥ！』

アリアの声がぼやけて聞こえる。・・・たしかに聞こえているのだ。つまり・・・少なくとも俺は死んでない。視界は歪んでいるもののうっすら開けた目は見えている。俺の顔を覆ってかばうようにするアリアが両目をきつく閉じて顔をぶんぶん振ってるのも見える。・・・どうやら肉体に通常の３０倍のスペックを与えるヒステリアモードが無意識のうちに何かをやってくれたらしいな。・・・それでも脳震盪を引き起こしているせいで、話すことはまだ無理なようだ。

「キンジぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

アリアの絶叫が広間に響いた後、静寂が訪れた。その不気味なほどの静寂の中、俺は少しづつ身体が動くようになってきて口の中の熱さに気づいて・・・

「ぺっ・・・・」

銃弾を吐き出した。・・・どうやらヒステリアの俺は無意識に奥の銀歯で銃弾を噛んで止めていたらしい。そしてこの血の感覚は銃弾を止めたときにその運動エネルギーに耐えられずにぶっ倒れながら鼻血を出したということらしい。

「・・・・・」

血にまみれた顔面を手で拭いながら上半身を起こすと・・・パトラは青ざめた顔で斜面を登るようにいして後ずさっていた。・・・何に怯えているんだ？

がしゃん！

やがて壁を壊してやってきたファムと白雪も愕然としながら俺でもパトラでもない何かを見ていた。・・・俺は立ち上がって周囲を見渡すと・・・アリアがいつの間にか立ち上がってパトラを見つめていた。・・・いや・・・違う。・・・気配はある。だが違う。誰だお前は！

「・・・・・」

無言のまま、黄金のサンダルで斜めの床を渡るアリアは・・・俺を見ることすらしなかった。・・・そしてその瞳は何かの動物のように緋色の光を放っている。・・・俺もそのムードに一瞬飲まれてしまう。・・・やがて立ち止まったアリアは右手を前に出したかと

思うと・・・その人差し指はパトラを指した。

「な、なぜわらわが震えておるのぢゃ！？」

パトラの手が、膝が震えている。そしてその恐怖心を表すかのように黄金の床がせりあがるようにパトラの盾になった。

「・・・・・・」

それを指差すアリアの指が・・・緋色に輝き始め、直径１メートルほどにまで広がっていく。

「・・・・緋弾・・・」

後ずさりながらの白雪の声が広間に響いた。・・・緋弾・・・。兄さんが言っていた『緋弾のアリア』の単語の一部を白雪も口にした。・・・アリアの指先の緋色の光はさらに輝きを増している。・・・あれが『緋弾』なのか。・・・だがアリアは超能力者でも怪人でもない。どうしてあんな光を・・・。

パァァァァァァ！

「避けなさいパトラ！」

緋弾の光がアリアの指先から放たれるとファムが叫んだ。その言葉で正気を取り戻したパトラは間一髪でその光を避けると・・・まるでビックバンのように弾けて、緋色の光が室内に降り注いだ。

バシュウウウウウウウウ！

爆発とも銃声とも異なる音が聞こえる。

「・・・・・っ！」

やがて緋色に塗りつぶされた世界は・・・一瞬にして青空に変わった。・・・今のアリアの放った一撃がピラミッドの天井を消滅させていたらしい。・・・ピラミッドを破壊されたパトラは『無限魔力』を失い、身に着けた黄金の衣装が砂金に戻ってしまう。

「うっ・・・・・！」

パトラはいつもピラミッドに頼っていたうちに、とっさに自分自身で魔法を使うことができなくなったらしい。頭に載せてた冠さえも砂金に戻ってしまった。・・・とうとう薄い水着姿になってしまったパトラは両手で自分の身体を隠した。

「っ！？」

ドォォォォォォン！

やがて周囲の神々の像さえも次々と倒れて砂金に戻っていく。・・・こうなったら俺達もだまって見てるだけには行かないな。

「あれは・・・・」

パシッ！

砂金と共に上から落ちてきたメダルホルダーを俺はキャッチする。おそらくは神々の像のどこかに挟まっていたんだろうな。

「・・・・・」

くらっ

「アリア！」

無表情のまま倒れたアリアを俺はとっさに抱きとめた。・・・ヒステリアの俺よ。とっさでもお姫様抱っこなんだな。

「・・・アリア」

アリアは再び目を閉じて気を失っていた。俺は崩れ落ちるピラミッドの破片を回避しながらブランウイングと共にブランスラッシャーで白雪を守っていたファムと合流した。するとそれだけは本物の様子の黄金柩をブランスラッシャーでアイスホッケーのように叩くと、この場から逃げようとしていたパトラの背を掠めてた。

「うあっ！？」

ピラミッドが破壊されてただの人間になったパトラは黄金柩にひっくり返って落っこちた。

「んっ！」

室内を滑り落ちてきた柩の蓋の下に白雪はイロカネアヤメを滑り込ませて梃子みたいにはね上げた。

「ピラミッドっていうのは元々王様のお墓なんだろう？・・・変身！」

『タカ！ウナギ！バッタ！』

バシン！

「こ、こら！何をしておるか！わらわはファラ・・・」

バクンっ！

白雪が跳ね上げた蓋をオーズ・タカウバに変身した俺は片手でアリアを抱いたまま電気ウナギウィップで弾いてうまく重ねてやった。

「・・・お墓では静かにするものだよパトラ」

魔力封じのお札を貼っている白雪に振りそそぐピラミッドの破片を俺が電気ウナギウィップで弾く間、柩の中のパトラは「出せ出せ！出さぬか！愚か者！」と喚きジタバタしていたが・・・

「パトラ、おやすみ。ご先祖様と同じ柩の中で・・・ね」

「・・・・・・・」

変身を解除したカナにそのように言われておとなしくなった。・・・何だか兄さんの言うことは結果的によく聞いているよなパトラは・・・どうしてだろう？・・・なんとなく分かるけど、兄さんには言わないでおいてあげるよ。・・・今の俺は女性に優しいヒステリアモードだからね。・・・そんな風にひとまず安心と思っていると・・・

ヒュウウウウウウ　ドサッ！

「なっ！？・・・アンク！どうしたんだアンク！！」

上の方から人間体のアンクがいきなり落ちてきた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺がパトラの銃弾を歯で止めるも脳震盪で倒れてしまっていた頃、アンクはストライクに火球を放ったり、殴ったりをして戦っていた。

「いいぞ！いいぞ！最高だぁ！こんな戦いは久しぶりだからゾクゾクすろぞぉ！」
ガギン！

「ちっ！・・・ふざけやがって・・・力に飲まれるとロクなことにならないぞヘビ野郎！」
『シャァァァァァァァっ！！』
ガブッ！

「何っ！？」

アンクは右腕でストライクの剣を防ぎながら左手で炎を放とうとするも突如後ろから紫のコブラのような怪物に左腕を噛み付かれた。

「ふふ、そいつはベノスネーカー。俺の契約モンスターだ。呼んでないのにこいつも遊びたくてやってきてしまったようだな。ついでに・・・そいつは酸性の毒も出すぞ」

「おぉぉぉぉぉぉぉ！！」
ボォォォォォォッ！

『シャァァァァァァ！？』

翼を広げたアンクは燃え盛る大量の羽をベノスネーカーに放ち怯

ませると空中に飛び上がり左腕のセルメダルが漏れている場所を押さえた。

「ちっ！まずはそのデカイ蛇の化け物を倒さないとな・・・」

ボンッ！

「させると思っているのか！」

サァァァァァ

ストライクは近くにあったピラミッドにベノスネーカーを移動させるとアンクの放った火球はピラミッドに打ち消された。

「ちっ！・・・欲望の攻撃を打ち消されたか」

「いや・・・それだけではないぞ！！」

『シャァァァァァァッ！』

ドカッ！

「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

ドサァッ！

アンクはベノスネーカーの尻尾に叩き落されるとストライクに頭を掴まれた。

「これに耐えられるか？」

ドカッ！

「ぐぁあぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

チャリン　チャリン

ストライクはアンクの頭を掴んで持ち上げるとピラミッドに叩きつけた。するとアンクの身体に電流のようなものが走り、身体からセルメダルがボロボロと落ち始めた。

「これは欲望による攻撃を無効化する術式を施したものではない。正確には触れた欲望を分解する術式だ。・・・わざわざ首領様が貴様のメダルを奪うために考案してくださったのだ。どうだ?うれしいだろ?」

「ハッ!・・・・最悪だなっ!!」
シュウウウウウ

「・・・・ちっ!・・・ほんと・・・最悪だ」

アンクは火球を放とうとするもピラミッドの術式に触れているせいで放つ前に消えてしまう。

「さぁ!メダルを貰おうか!」
ドスッ!

「ぐはっ!?」
チャリン　チャリン

ストライクはアンクの腹部に右手を突っ込みコアメダル5枚を握って抜き獲った。

「さて・・・残りも貰うぞ」

「くそっ・・・・・」

アンクはかなりの数のコアメダルを奪われて怪人態を維持できなくなり人間体へと変わってしまう。そしてもう1度ストライクがアンクの身体に右手を入れようとした瞬間、足元が緋色に輝いた。

「この光は・・・・おらっ!!」

アンクは右腕だけを怪人の姿にして緋色の光に気を取られ油断していたストライクを殴り飛ばすと緋色に輝く足元から離れるとストライクも危険を察知したのか海の水からベンタラへと入っていった。

・・・そして緋色に輝いていた足元と、その上にあった先ほどのピラミッドはゴッソリと消滅してしまった。

「何が起きたかは知らないが・・・このメダルは頂いていくぞ」

「ハァ・・・ハァ・・・くそ、コアメダルだけじゃなく・・・セルメダルも足りないのかよ」

チャリン　チャリン

アンクはセルメダルが腹部から漏れながらも緋色に消えた足元を見た。

「・・・『緋弾』か。・・・つくづく最近は・・・王が関わったものをよく見るな。・・・キンジの奴・・・どうやらアリアを助けられたらしいな。・・・とりあえず安心したぞ」

ドサッ!

その穴を覗いたアンクは下に俺達がいるのを見てニヤリと笑いながら倒れると、その穴から俺達のいる場所に落下した。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺の元にアンクが落下した頃、アクセル達は数に押され気味だった。

「それムッチ！」
ベシンッ！

「・・・・・・」
ドンッ！

「「「ぐあぁぁぁぁぁぁ！？」」」

イクサとギャレン、そしてアクセルは2体のドーパントの見事なまでの連携に吹き飛ばされる。

「「ぐぁ！？」」

その衝撃でイクサとギャレンの変身は解除されてしまいそれぞれのベルトも火花を散らしていた。

「名護さん！橘さん！」

デルタは変身を解除された二人に駆け寄ろうとしたが・・・

「三原さん！後ろです！」

「えっ！？」

「うおぉぉぉぉ！！」

ドン！　ドン！　ドン！

デルタに飛んできた銃弾をＧ３－Ｘが庇ってメットが割れてしまいながら倒れた。

「氷川さん！氷川さん！」

「くっ！？・・・どうすれば・・・」

「君達は３人を連れて下がるんだ。後は俺が戦おう」

アクセルは倒れている３人の前に立ちどうすればいいのか考えていると、いきなり彼らの前にかつてデストロンと戦った緑のボディに赤い仮面で勝利の意味を込めた‘Ｖ’を名前に持つ戦士が現れた。

「あれは・・・仮面ライダーＶ３・・・まさか風見さん！？」

窓から戦いを見ていた正太郎はいきなりのＶ３の登場に驚きの声を上げた。

緋弾の覚醒（後書き）

次回で原作四巻の内容は終了です。・・・まさか４巻の内容で夏休みを使い切ってしまうとは思ってもいませんでした。それと人気投票は継続中です。

イ・ウーの教授（前書き）

今回で原作４巻の内容は終了です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

イ・ウーの教授

「キ・・・ンジ？」

アリアとアンクを抱えてピラミッドを出ると、アンベリール号の舳先に寝かせていたアリアの声に俺と白雪とカナは振り向いた。

「アリアッ！」

「キ・・・キンジ！？・・・なんで生きてるの！？使途再生！？」

別に俺はまだ死んでいないからオルフェノクにはなっていないぞ。

・・・そんなことを一瞬思っていてもまだヒステリアモードの俺は・・・

「アリアッ！」

感極まってアリアを抱きしめてしまった。

「え？ちょ・・・えぇ！？」

パトラの着ていたような水着っぽい服装だったらもう少し躊躇するはずだろうが、今は白雪が武偵高の制服を着せているから迷いなく抱きしめた。・・・何故か後ろから殺気を感じるが・・・後ろを振り返るのは止めておこう。

「アリア！無事でよかったよ！」

がばっ！

殺気のようなものが消えると今度は白雪もアリアに抱きついた。
先ほどのことを覚えていない様子のアリアは、ぐいぐいと俺を押し退けようとする。・・・後ろでその様子を見ているカナは三つ編みを直しながら、くすくすと笑っている。

「ちっ！・・・今回は大損害だ・・・」

「アンク・・・いったい何があったんだ？・・・お前がやられるなんて・・・」

上半身を起こしたアンクに俺は手を差し出して立たせるとアンクは腹部を抑えた。

「・・・俺のコアが5枚持ってかれた。・・・悪いがしばらくはまともに戦えそうにない」

「・・・すまないアンク。お前1人に任せなければ・・・」

「謝るな。別にお前が悪い訳じゃない。・・・油断していた俺のミスだ」

「なら・・・せめてこれを取り込んだらどうだ？」

俺はメダルホルダーからタカのコアメダルを取り出してアンクに差し出すが・・・

「バカか？お前がグリードと戦うから俺はそのコアメダルを貸しているんだぞ？・・・そいつはグリードと戦わなくてよくなったら返せ。・・・お前に死なれたら俺の欲望は今度こそ達成できなくなっちまう」

「アンク・・・分かった。ありがたく借りておく」

タカのコアメダルをメダルホルダーにしまった俺は今回の事件を振り返ってみた。メダル輸送車の依頼から始まって、暴走グリードとの戦い。そしてパトラにアリアが攫われたりもして色々とあったがとりあえず事件解決だな。・・・ハードスプラッシャーじゃさすがに4人乗りはできない。武藤達の助けを待つしかないし・・・とりあえず助けが来るまで寝るとしよう。もうコンボの疲労が洒落にならない。・・・俺は一眠りしようとしたその時・・・

「っ！」

カナがいきなり海の方を振り向いた。・・・その横顔は青ざめている。・・・初めてみたぞ。兄さんがこんなに動揺してるなんて。

「キンジ！逃げなさい！」

『ＨＥＮＳＩＮ』

『ＣＡＳＴ　ＯＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＤＲＡＧＯＮＦＬＹ』

カナはいきなりトンボの仮面戦士‘仮面ライダードレイク’のライダーフォームに変身すると海にドレイクゼクターの銃口を向けた。

「逃げるのよキンジ！はやく撤退しなさい！」

ドレイクは俺達が全員乗れる乗り物が無いということを分からなくなってしまうほど混乱している。

「キンちゃん・・・」

その次に異変に気づいたのは白雪だった。

「な、何か来る。・・・こ、こわい」

白雪は自分で自分を抱きしめるようにしてガクガクと震えながらその場に膝をついた。

「ちっ！・・・最近感じていた訳の分からない気配はこの気配か。・・・キンジ。警戒しておけ」

アンクはふらふらしながらも俺の隣までやってきて・・・俺もようやく異変に気づいた。先ほどまで2～30匹は集まっていたクジラ達が1匹もいなくなっている。それだけじゃなく鳥や魚もだ。

ずずず・・・ずずずずず

アンベリール号が揺れた。・・・いやこの辺り一帯の海全体が揺れている。

「あそこよキンジ！」

緊急事態にこそ勇敢さを発揮するアリアが舳先ギリギリを駆けて海面を指差した。俺もアリアの傍らまで駆けると・・・アンベリール号の前方数百メートルが盛り上がっていた。その波がアンベリール号を揺らし、俺達は手すりなどに掴まって耐えていると・・・巨大な人工物が出てきた。・・・『伊・U』・・・その文字が一瞬見えてまだギリギリでヒステリアモードの俺は瞬時に言葉の意味を理解した。・・・『伊』・・・それはかつて日本で使われていた潜水艦の暗号名。・・・『U』・・・これもまたかつてドイツで使われていたコードネームだ。・・・つまりイ・ウーの正体は潜水艦だっ

たということだ。

「・・・・・・」

アンベリール号に横側を見せた全長３０００メートルはある潜水艦・・・この形・・・どこかで見たことがあるぞ。・・・しかも最近・・・。

「・・・ボストーク号」

そういえば夏休み前のプールで武藤達が遊んでいたのを思い出す。史上最大の原子力潜水艦だが出航直後に行方不明になった悲劇の原潜だったな。

「・・・これはかつてボストーク号と呼ばれていた戦略ミサイル搭載型原子力潜水艦。ボストーク号は沈んだのではないわ。・・・盗まれたのよ。史上最高の頭脳を持つ『教授』にね」

ドレイクが俺達にそう告げると、潜水艦の上に黄金に光る物影が見えた。

「『教授』やめてください！・・・この子たちと戦わないで！」

俺達の前に立ったドレイクは俺達を守るように両手を広げた。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

ドサッ

・・・気がついたら変身を解除されたカナが血まみれで俺に倒れこんでいた。

「カナ！」

本当に一瞬すぎて何が起こったのか分からない。・・・分からないが・・・兄さんはこのわずかな一瞬でこれほど傷ついた。・・・ヒステリアモードになっているはずの兄さんはクロックアップにも反応程度はできるはずなのにだ。・・・それはすなわちクロックアップよりも圧倒的に速い速度で動いたということ。・・・そんな動きに耐えられる人間がこの世にいるのか？・・・・カナを隠すように抱いた俺が驚愕に上を見上げると・・・そこでは金色のカブトムシのような仮面戦士が丁度変身を解除していた。

「・・・・・・」

その男の体格はひょろ長い、やせた身体。鷲鼻に角ばっている顎。・・・あの写真や探偵科の教科書に載っていた絵でかぶっていたようなハンチング帽はないが・・・この期に及んでホログラムや他人の空似などと見間違えるはずはない。どうゆう訳が２０歳ぐらいに見えるその人物を・・・アリアが声にならないかすかな声でその男を呼ぶ。

「曾・・・おじい様！？」

その姿はまさしく・・・アリアの曽祖父のシャーロックホームズ１世だった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

俺達がシャーロックホームズ1世と出くわしてしまっていた頃、
V3は次々とマスカレイドを倒しながらもルナドーパントのムチのような攻撃やトリガードーパントの攻撃をかわして戦っていた。

「ライダァァパンチ！」
ドカッ

「きゃぁぁ！？・・・ぶったわね！？カツミちゃんにもぶたれたことないのに！？」

ルナドーパントはV3のライダーパンチを喰らい鏡水の身体からメモリが抜き出るもメモリが砕けてはいなかった。

「T2ガイアメモリ・・・噂には聞いていたがすでに完成していたのか」
ドン！　ドン！　ドン！

「っ！？」

トリガードーパントはV3に狙撃をして一瞬怯ませ、鏡水を掴んで撤退しようとすると・・・

『ACCEL　MAXIMUM　DRIVE』

『EXCEED　CHARGE』

「「ハァァァッ！」」

「・・・ゲーム・・・オーバー・・・・」
ドオォォォォォン!!

アクセルとデルタのダブルキックを喰らいこちらも葦原の姿に戻るがメモリは砕けてはいなかった。

「・・・なんという丈夫なメモリだ」

「・・・壊せないメモリがあるなんて・・・」

照井と三原は壊れないメモリに驚きつつも変身を解除して鏡水と葦原に手錠を掛けようとしたその時だった。

「2人とも!下がれ!」

V3の大声で2人はとっさに後ろに下がると・・・突如白い仮面戦士が空から降りてくるように現れた。

「まさかこの2人を相手にしてほとんどダメージがないとは・・・さすがだな。風見志郎・・・」

「・・・お前は何者だ?」

「俺は仮面ライダーエターナル・・・いや・・・この場では本名を名乗らせて貰おう」

エターナルはベルトの白いメモリを抜き取ると変身が解除されて黒いジャケットを着た男の姿になった。

「大道・M・カツミだ。・・・・悪いがこの2人は連れて行かせて

もらうぞ」

「そんなことをさせると思って・・・」

照井は大道・M・カツミと名乗る男に詰め寄ろうとするがV3がそれを止めた。

「迂闊に動くのはよくない。ここは条件に従うぞ」

「・・・懸命な判断だ。さすがのV3もこの数から彼らを守るのは不可能だろうからな」

V3達の左右には20体を超えるドーパントが彼らを取り囲んでいた。

「赤いジャケットの仮面戦士・・・2人から離れろ」

「・・・了解した」

鏡水と葦原から離れて大道に2人を渡した照井は悔しそうな顔をしていた。

「それでは・・・俺達はここで退散させてもらおう」

『ETERNAL』

大道は再び仮面ライダーエターナルに変身すると右腰のマキシマムスロットにさらにメモリを入れた。

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

『ＢＩＲＤ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

一瞬にして鏡水や葦原と共に大量のドーパント達がその場から消えると、またさらにマキシマムスロットに別のメモリを入れると、黒いマントが黄緑色の翼に変化して空を飛んでいってしまった。

「・・・大道・Ｍ・カツミか。エヴィルとはまた別に動いている様子だな」

そう呟いて変身を解除した風見さん達のところに正太郎がやってきた。

「お久しぶりです風見さん」

「あぁ、久しぶりだな正太郎君。最後に会ったのは君がまだ中３ぐらいだったな」

「えっ？・・・明智は風見志郎さんと知り合いなのか？」

正太郎と風見さんの間に三原は割って入り質問した。

「前に格闘術を教わっていたんだぜ俺。・・・そんなことよりも風見さん！俺も狙われたってことは陽や矢車も狙われて・・・」

「落ち着くんだ正太郎君！・・・安心するんだ。・・・君の友達のところにも俺以外のライダーが向かっている」

・・・・・・・・

・・・

初めてXライダーの戦いを生で見て興奮していた陽に千代子さんはやや呆れ気味にツッコミを入れていた。

・・・

「・・・ありがとうございますアマゾンさん。・・・ライダーベルトをメンテに出していて変身できなかったので助かりました」

「いや・・・別にいい。・・・ソレヨリ・・・メシをおごってくれ。できればヒサビサの日本だからワショックがいい」

ぐうぅぅぅぅぅ

「・・・・は、はい。・・・分かりました」

仮面戦士科の教科書に載っている野性的な服装とは違い、スーツを着ていた山本さんは大きな腹の音を鳴らしていた。

イ・ウーの教授（後書き）

次回からは原作では「キンジ編」こと「教授編」の5巻ですが・・・この物語ではある意味「アンク編」ともしてがんばっていこうと思います。それと、あと4日で人気投票は締め切りにさせて頂きます。

奪われたパートナー（前書き）

今回から5巻の内容の前半『教授編』こと「キンジ&アンク編」になります。『パトラ編』がこれまでで一番長かったですが今回の『教授編』はだいぶ短くなると思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

奪われたパートナー

「カナ！カナッ！」

俺の腕の中でカナの力が失われていくのが分かる。・・・先ほどから出ているこの血の量はあきらかに致死量だ。

「キンジ・・・これを・・・」

震える男性声でヒステリアモードが切れたらしいカナ・・・いや、兄さんがアリアの白銀と漆黒のガバメントと弾倉を渡してくる。・・・おそらくパトラが隠していたのを見つけたものだろうな。それを受け取った俺が振り向くと、アリアはアンベリール号の舳先で呆然と立ち尽くしていた。

「アリア！下がれ！そんな所にいたら標的にされるぞ！」

俺はカナを抱えたまま、アリアの腕を引っ張ろうとしたが・・・アリアはその場にぺたんと座りこんでしまった。

「・・・・・・」

アリアの目線はシャーロックの方を向いてはいるが・・・驚愕のあまり焦点が合っていなく、ほとんど放心状態だ。・・・仕方がないと思う。今まで「完璧な人」として敬愛していた曾祖父であるシャーロックホームズ1世が俺の兄さんを一瞬で瀕死にまで追い込んだんだからな。

「っ！！」

俺は確かにそれを視界に捉えた。しかしそれを視界のに捉えた時には遅かった。イ・ウーからアンベリール号に目掛けて魚雷らしきものが向かってきている。・・・あの潜水艦は原子力潜水艦だからたしかに魚雷があるのは不自然ではないな。

ドォオォオォン！

「くっ！？」

アンベリール号に魚雷が直撃してしまい飛沫の豪雨がデッキに降り注ぐ。

「きゃぁぁぁぁ！？」

「白雪っ！」

背後で白雪の悲鳴が聞こえ振り返るとパトラの収められた黄金柩にしがみつく形でバランスを保っていた。

「き、キンちゃん。今のは？」

「はっきりとは見えなかったがおそらくＭｋ－６０対艦魚雷だ。イ・ウーが撃ってきた」

まだギリギリでヒステリアモードが続いていた俺は辺りを見渡して被害状況を確認する。・・・パトラが自沈させようと船底を中途半端に爆発させられたアンベリール号は、今まで辛うじて浮いていたのに先ほどの一撃で目に見えて沈没し始めている。さらに下層デッキからは火災と黒煙が上がっている。・・・この船は完全に駄目だな。はやく避難しないと。

「白雪！ハードスプラッシャーと救命ボートで脱出するぞ！ボートを下ろしてくれ！」

「う、うん！」

ガツン！

白雪は救命ボートを下ろしにデッキの後部へ駆けていくと黄金柩の蓋を蹴り飛ばしたパトラが兄さんに飛びついた。

「キンイチ、あぁ、キンイチ」

涙目のパトラは俺を押しのけて兄さんの傷口を押さえると、その手が青白く光り始める。直感的に分かったが、どうやら兄さんの傷を治しているらしい。

ごすんっ！

低い物音と共に海面下でイ・ウーと接舷したらしいアンベリール号が再び大きく揺れる。どういうつもりだ・・・シャーロックホームズ。真っ正面からこっちに向かってくるつもりか？・・・たしかに生身の人間では舳先の火災に焼かれてしまうだろうが、あいつもライダーシステムを持っている。・・・そんな俺の予想とは裏腹にシャーロックは予想外の方法でこちらに乗り移ってきた。

「・・・・・っ！？」

シャーロックはキラキラと氷霞を纏いながら炎の中を歩いてきた。

・・・あれはまさかジャンヌの使っていた魔術の氷か？・・・おそらくシャーロックがそこからやってきたと思われる海に浮かぶ氷の道からは、舳先に向けて砂金の階段が架けられている。・・・そう

いうことか。・・・イ・ウーとは、天賦の才を持つ超人達が自分達の能力をコピーしあう場所だ。・・・当然その中には全てをマスターした完全体が存在しているはずだ。そしてその『完全体』は一番強いに決まっている。・・・つまりそれが目の前にいるイ・ウーのリーダー・・・シャーロックホームズなんだろうな。

「もう逢える頃だと推理していたよ」

「っ！」

シャーロックの一言に・・・俺の全細胞が硬直したような感覚になった。・・・この男の前には誰もがひれ伏してしまいそうな・・・そんな格の違いが伝わってきた。

「超越した推理は予知に近づいていく。僕はそれを『条理予知』と呼んでいるがね。つまり僕はこのことも予め知っていたのだ。だからカナ君・・・いや、遠山金一君。君の胸の内も推理できていた」

「・・・・ガフッ」

試験の答え合わせをするような態度でシャーロックは瀕死の兄さんにそう告げる。・・・兄さんは声にならない声で何かを言うと喀血してしまった。

「さて、遠山キンジ君。君も僕のことは知っているだろうが・・・紳士としてきちんと挨拶はさせてくれ。・・・初めまして、僕はシャーロックホームズだ」

そうだろうな。・・・偽者やホログラムじゃ、そんな威圧感は出せるはずもないしな。

「アリア君！」

自分の名前を呼んだシャーロックに呆然としてたアリアはビクッと背筋を伸ばした。そして血族同士の眼が合い、それだけで情報がやりとりされたようなムードになった。

「時代は移り変わってゆくけれど、君はいつまでも同じだ。ホームズ家の淑女に伝わる髪型を、君はきちんと守ってくれているんだね。それは初め、君の曾お婆さんに命じたのだ。君がいつか現れることを推理していたからね」

アリアのツインテールを見ていたシャーロックは金色のカードデッキを持ちながらこちらにゆっくりと歩いてくる。・・・俺はそれに対してオーズドライバーを腰につけて何時でも変身できるようにオースキャナーを右手に持った。

「アリア君、君は美しい。そして強い。ホームズ家で最も優れた才能を秘めた天与の少女。それが君なんだ。しかし君はホームズ家の人間に落ちこぼれ扱いを受けて・・・才能を認められない日々はさぞかしつらいことだったろうね。だが、僕は君の名誉を回復させることができる。君を僕の後継者として迎えにきた」

「あ・・・・」

完全に言葉を失っていたアリアは小さな声を上げた。・・・完全に抗う様子はない。

「おいでアリア君。そうすれば君の母親は助かる」

アリアは今の一言で心が傾き、シャーロックの方へ向かっていく。するとシャーロックは金色の光に包まれると、先ほどのカブトムシとは違う金色の仮面戦士に変身した。・・・シャーロックが変身した不死鳥を思わせる仮面戦士はダンスのような手つきでアリアを抱き寄せると、そのままお姫様抱っこをした。

「さぁ行こう。君のイ・ウーだ」

『ビィィィィィィ！！』

突如現れた不死鳥のような巨大な鳥は翼から吹き飛ばされそうなほどの強風を放ち火災を一瞬で消化すると、その巨大な鳥の背中にアリアを背負った黄金の仮面戦士は跳び乗った。

「アリア君。君達はまだ学生だったね。ではこれから『復習』といこう」

アリアが・・・アリアが連れ去られようとしている。・・・パトラの時も攫われたアリアだが、今回のこれはそれとは意味が違う。・・・抱き上げられた時、逃げようと思えば逃げられたはずなのにそうはしなかった。心の底から敬愛されているシャーロックに賞賛され、後継者にすると言われ、そしてかなえさんを助けると言われて、逆らう理由を失ってしまったんだ。・・・だが行くなアリア。俺には分かる。何となくだが・・・分かる。あいつは、シャーロックは危険だ！

「アリア！」

黄金の仮面戦士が遠ざかり、金縛りのようなものからようやく開放された俺は、沈没まであと僅かのアンベリール号の舳先から叫ぶ。・・・そして叫んだとこで状況を再認識した俺は歯軋りをする。・・

・俺は仲間を・・・パートナーを奪われたのだ。・・・目の前で。

「アリアァァァァァ！！」

もう一度全力で叫んだ瞬間、身体の中心、中央に灼けつくような感覚を感じた。・・・この感覚はヒステリアモード？・・・いや、俺はすでにヒステリアモードだったはずだ。違う・・・何かが違う。今回のこれは・・・何かが。

「シャー・・・ロック・・・馬鹿め。この程度で・・・儀を制したつもり・・・か」

背後から聞こえてきた兄さんの声に俺は振り返ると、そこには先ほどまで着ていた服を切り裂くように脱ぎ捨て、暗殺者のような漆黒の防弾アンダーウェアを着ていた兄さんが立ち上がろうとしていた。・・・身体中の血は収まってきているものの、完全に治ったわけではなくボタボタと血が垂れる。

「た、立つなキンイチ！まだ傷は癒えておらんのぢゃ！」

「これでいい。・・・これ以上治すな」

「っ！？」

兄さんの目つきを見て気づいた。・・・兄さんはどういう訳か再びヒステリアモードになっている。カナになっている訳でもなく、性的興奮のトリガーがあるわけでもないこの環境でどうやって？

「キンジ・・・覚えておけ。ヒステリアモードには幾つかの派生系がある。今の俺はヒステリア・アゴニザンテ」

ヒステリアモードの派生系?・・・そんなものがあったのか!

「別名、死に際(ダイニング)ヒステリア。瀕死の重傷を負った男は、死ぬ寸前に子孫を残そうとする本能がある。これはその本能を利用して発動するヒステリアモードなのだ」

そんな裏技があったのか。・・・だけど兄さん。それは命と引き換えのヒステリアモードってことじゃないか!

「兄さん!やめろ!そんな身体で戦うな!」

「止めるなキンジ!これは好機なのだ!この船は日本船籍。この船では日本の法律が適用される。ヤツはここで未成年略奪の罪を犯した。これはシャーロックを合法的に現行犯逮捕できる、唯一無二の好機なのだ!」

「・・・ちっ!・・・・８００年経っても相変わらず遠山の血族は自分の命を軽くみてやがる」

アンクはふらふらしながらも近づいてきて兄さんを睨むと・・・兄さんはアンクを睨み返した。

「好機の一瞬は・・・無為な一生にも勝る」

兄さんはそう言いながら腰にグレイブバックルをつける。・・・兄さんそんなになってでもあんたは『義』のために立ち向かうのか。

「聞けキンジ。先ほどの叫び声・・・あれで俺は確信した。今のお前のヒステリアモードも、もはや通常のものではない。通常のヒス

テリアモードはヒステリア・ノルマーレ。女を守るヒステリアモードだ。しかし今のお前はヒステリア・ベルセ。女を奪うヒステリアモードに変化しつつある。目の前で・・・女をヒステリアモードに奪われたことによってな」

「・・・そのヒステリアは憎悪、嫉妬とかの人間の黒い感情が加わって発動している。それに思考が攻撃一辺倒になる。・・・つまりオーズの力に飲み込まれてしまう可能性が高い。今のお前がオーズに変身するのはやめておいた方がいい。・・・まぁ、そう言ってもお前は変身するんだろうがな」

アンクは少し諦め気味にため息をつくと、俺にメダジャリバーを渡してきた。

「キンジ。シャーロックは俺1人では倒せない。お前1人でも無理だ。だが2人なら・・・ヒステリアモードの俺達なら可能性がある」

「・・・兄さん・・・」

武偵と武偵が組むには双方の同意が必要だ。・・・兄さんは初めて俺を信頼して、共に戦う同意の意思を明言してくれてる。・・・その信頼に報わないとな。

「・・・仕方ないな。お前ら兄弟だけを行かせたら危なっかしいから俺も付いていってやる」

アンクは先ほど「まともに戦えそうもない」と言っていたはずなのに右腕だけを怪人の姿にした。・・・おそらく怪人の姿になれるのは、その右腕だけなんだろうな。

「行くぞキンジ！それとアンク！まずはアリアを救助し、シャーロックホームズを逮捕する！！」

兄さんの掛け声と共に、俺と兄さんはベルトに手を掛ける。

「「変身！！」」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

『ＯＰＵＮ　ＵＰ』

俺はオーズ・タトバコンボに変身し、兄さんはグレイブに変身すると、半透明な翼で羽ばたくアンクと共に仮面戦士の超脚力で一気に跳び上がってイ・ウーの甲板上に着地をした。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

俺が兄さんとアンクと共にイ・ウーへと乗り込んだ頃、それぞれの戦いを終えた風見さん達は陽や矢車も連れて正太郎の病室に集まっていた。・・・ちなみに名護先輩と橘先輩、それと氷川と三原には席を外して貰っている様子で、その部屋にはいなかった。

「風見さん。・・・・さすがにこの部屋にこの人数はつらいです」

「・・・たしかに熱いが・・・話はそれほど長くないから我慢してくれ。・・・今回の問題は突如動き出した。大道・Ｍ・カツミ率い

る第４勢力のことだ」

「２０体ものドーパントを従えていた。・・・少なくとも１つの軍並の兵がいてもおかしくはない」

照井は見たままのことを陽や陽や矢車達に伝えた。

「その内の１体のドーパントは途中で撤退していったが俺のＸキックを受け止めるほどの実力があった」

「・・・アマゾンさんは今、『猛士』で食事をしているからいませんが・・・おそらくヒートのメモリを使っていた女はアマゾンさんに焦っていたが１度も攻撃を喰らっていなかったんです」

「・・・ってことは精鋭揃いってことか。・・・どう思います風見さん？」

正太郎は風見さんの方を振り向くと、風見さんは深刻そうな顔をしていた。

「・・・とりあえずこの件も俺達に任せておいてくれ」

「・・・はい」

正太郎は少しやりきれない表情で風見さんの言葉に頷いていた。

奪われたパートナー（後書き）

一応今回でＮＥＶＥＲ戦の方は一区切りつけさせて頂きます。次回からはキンジサイドだけでしばらく話を進めます。ついでに・・・人気投票の締め切りまで後３話です。

兄の任務（前書き）

一日一話はやっぱり大変ですね。それでも9月までには「教授編」は終わらせたいです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

兄の任務

俺達が甲板上へと到着すると、アリアを抱えた黄金の仮面戦士は甲板から突き出た建物のような艦橋へと歩いていた。

「シャーロック！！」

グレイブはグレイブライザーを右手に持つと黄金の仮面戦士に向かって鬼神のごとき勢いで斬りかかる。

『キィィィィィィ！』
ドカッ！

「くっ！？」

グレイブラウザーの剣先が黄金の仮面戦士に届く寸前、先ほどの不死鳥のようなモンスターがグレイブに体当たりをしてそれを妨害した。

「兄さんっ！」

「くっ・・・ゴルトフェニックスか」

ゴルトフェニックス・・・それがあの巨大な鳥の名前か。少なくとも契約モンスターとデッキからしてミラーライダーか、ベンタラのライダーのどちらかだな。

「・・・キンジ。シャーロックのライダーシステムは２つある。一

つは先ほど変身していたカブトムシのような仮面戦士，仮面ライダーコーカサス，に変身するマスクドライダーシステム。もう一つは現在、変身している不死鳥のような仮面戦士，仮面ライダーラス，というベンタラのライダーシステムだ。どちらも本来は強力すぎるために使いこなせる者がおらず、廃棄されるはずだったが・・・２年ほど前に何者かに盗まれてしまった物だ」

廃棄されるはずだったライダーシステムか。・・・最近ではＧ４システムとか言うライダーシステムが廃棄されたらしいが、基本的にライダーシステムが廃棄される理由は２つ。あまりに強力すぎて使いこなせる人間がいないという理由と、使用者の人体に悪影響を与えてしまう作りのどちらかだ。・・・どうやらシャーロックの変身する仮面戦士はどちらも前者の方らしいが・・・使いこなせる人物がいなかった２つを当たり前のように使いこなしているあいつはやっぱりビックリ人間だな。

「ハァァァッ！」

「・・・・・・・・」

ガギン！

俺はメダジャリバーでラスに斬りかかるが・・・・ラスはアリアを片手で抱えながら後ろを振り向かずに黄金の剣でジャリバーを止めていた。

「キンジ！」

「分かってる！」

俺はすぐさましゃがむと今度はゴルトフェニックスを振り切った

グレイブがラスに斬りかかろうとする。・・・これなら防ぐことはできないだろ。

「・・・・・・・」

「っ！？」

グレイブの剣先が届いたと思った瞬間、アリアを抱えたラスはその場所から消えていた。・・・その場所にあったのは宙を舞う黄金の羽だけ。・・・１０メートルほど先には何事もなかったようにスタスタと歩いている。・・・瞬間移動でもしたって言うのか？

「・・・最悪なことにその通りだキンジ。・・・あの仮面戦士は瞬間移動ですら可能にしてしまう。そんな常識外れのライダーシステムをシャーロックは使いこなすのだ」

「・・・こっちも常識外れの仮面戦士だ！！」

俺はメダルホルダーから青の３枚を取り出し、再びシャウタコンボに変身しようとするといきなり目の前に現れたラスに青の３枚のメダルを奪われた。

「申し訳ないが君のメダルを貸してくれないか？・・・アリア君が僕の後継者となったら君の元に届くように手配する」

「ふざけるな！！・・・っ！？」

気がついた時にはメダルホルダーもラスの手元にあった。・・・おそらくは兄さんの『不可視の銃弾』とラスの瞬間移動を組み合わせて応用した方法で３枚のメダルを奪うのとほぼ同時に俺の手元か

ら奪われたんだろうな。

「まだまだぁ！！」

「セイヤァァァッ！！」

俺とグレイブは同時い剣を振りかざそうとすると・・・すぐさまその剣を止めた。・・・こちらを向いたラスの腕にはこっち向きにアリアが抱かれている。・・・このタイミングで剣を振り下ろしてしまえばアリアを傷つけてしまうため俺とグレイブは後ろに下がると、ラスはアリアの耳を塞いだ。・・・そして後ろに飛んでいるゴルトフェニックスの胸部が風船のように膨らんだのを見てすぐさま何をしようとしているかを理解した。あれはドラキュラ・ブラドが横浜で見せた『ワラキアの魔笛』・・・通称『ヒステリア破り』だ！

『キィィィィィィ！！』

「くぅぅぅぅぅっ！？」

俺はオーズの仮面だが耳の辺りを押さえてヒステリアを解除されまいと耐える。

「いい加減・・・黙れぇぇぇぇ！！」

ドカッ！

『キィィィィィ！？』

耳を押さえるのをやめたアンクは半透明な翼を羽ばたかせて、ゴルトフェニックスを怪人の腕で殴り飛ばして咆哮を中断させた。・・・おかげで俺はヒステリアを解除されずにすんだ。

「ハァ・・・ハァ・・・」
チャリン　チャリン
「アンク!!・・・・・っ!?」
未だに身体からセルメダルを落とすアンクに俺は駆け寄ろうとすると・・・そこでいつの間にか変身を解除されていることに気づいた。・・・後ろを振り返るとラスがタトバの3枚を持っている。
「チッ!・・・何やってんだキンジ。・・・油断・・・しやがっ・・・て」
アンクはそう言って膝をつくと、俺の隣に立っていたグレイブが耳を塞がずに呆然と立ち尽くしていた。グレイブ・・・兄さんは『ワラキアの魔笛』を喰らったことがなかった。だからこの不意を突かれた一撃に兄さんは最後のヒステリアモードが解除されてしまった。さらにその身体はパトラによって少しは治っている傷口が開いたのか赤い血がスーツににじみ出ている。
「兄さん!!」
俺は立ち尽くしているグレイブに振り向いた瞬間・・・
「キ・・・キンジ!避けろ!!」
「っ!?」
『キィィィィィ!!』
ドカッ!

「ぐはっ！？」

俺に向かって体当たりをしてきたゴルドフェニックスの体当たりを・・・グレイブが庇って変身が解除された。

「・・・・・・！？」

ぶつかるように倒れてきた兄さんを俺は必死に支えた。兄さんは予測していたんだ。兄さんの傷に気を取られた俺が倒されてしまうことを・・・。だから兄さんは俺を庇ったんだ。・・・オーズの変身が解かれてしまった俺を・・・。

「・・・キンジ・・・追え・・・！奴は・・・艦内に・・・・・逃がすなッ！」

俺に肩を貸されながらの兄さんが俺に命令してくる。

「兄さん！あんたを置いてなんか・・・・」

兄さんは俺の言葉を遮るように・・・笑った。

「俺がお前ごときに心配されるなど・・・・俺にもヤキが回ったな」

ポケットに手を入れた兄さんは・・・俺に1枚の赤いコアメダルを渡してくる。・・・これは・・・アンクのクジャクコア！！

「キンジ！・・・行けっ！攻めろ！！俺達はここまで来た。来て・・・しまったのだ！！」

ゴホッ！？

兄さんは血を吐きながら俺の袖を掴む。

「俺はお前に初めて理屈で通らんことを言っているのかもしれん。・・・おそらく仮面戦士の中でも最強クラスの男に変身を封じられているお前を行かせるなどと・・・。だがキンジ、人生には理屈では通らない戦いをしないといけない時がある。・・・今がその時だ！！」

兄さんは半ば無理やり俺を艦橋へ反対させた。それでも振り返る俺に活を入れるように・・・

「振り返るなっ！」
がすんっ！

先祖代々石頭の遠山家が最後に使う隠し技・・・頭突きで活を入れてきた。

「キンジ・・・もう振り返るな・・・とっとと行け！」

兄さん・・・分かった。・・・兄さんの任務、俺が達成する。

「アンク・・・この使えないバカを支えてやってくれ・・・」

「・・・おい金一。一応言っておくが・・・コイツは使えないバカじゃない。・・・使えるバカだ。兄なら弟のことをもっと理解しろ」

アンクはふらふらしながらも立ち上がる。

「・・・それと・・・俺に無断で俺のクジャクのコアメダルを持っていたのは許せないな。・・・こんな場所で死なれると後でぶん殴

れないから生きてろよ」

「・・・ふん。お前の方こそな」

兄さんはアンクの言葉に拍子抜けしたような顔をすると微かに笑った。

「兄さん！こんなところで死んだりしたらあんたの弟をやめるからな！！」

俺は振り返らずにそう告げると走り出した。

「だったらキンジ・・・お前はこれからも・・・俺の弟だ」

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「何だここは？」

「・・・・・・・・」

俺とアンクはイ・ウーの玄関先ともいえる広大なホールに目を奪われた。おそらく最下層から最上階までをぶち抜いて作ったと思われる高い天井から、磨き上げられた天然石の床を大きなシャンデリアが照らしている。

「太古の翼竜プテラノドン。・・・角竜トリケラトプスに暴君竜ティラノサウルスか」

天然石の床にはそれらの恐竜の全体骨格標本が聳えている。さらに周囲を見渡すと鷹や孔雀やコンドルの鳥類。ライオン、虎、チーターの猫科動物。鍬形、螳螂、飛蝗の昆虫。コブラ、亀、ワニの爬虫類。さらにはサイ、ゴリラ、象といった重い動物や鯱、鰻、タコといった水の中で生きる生物などが剥製として展示されていた。・・・何だこれ？

「まるでクガ王の城みたいだな」

「クガ王？どんな奴だったんだ？」

俺は剥製を見ながら不快な顔をしていたアンクに聞いてみた。

「・・・世界を全て自分のものにしようとした最低な王だ。・・・自分の欲望のためなら平気で他人を殺せるほどのな・・・」

「・・・・・・・」

アンクの拳がぎりぎりと音が聞こえるほど強く握られていることに気づき・・・俺はそれ以上追及するのをやめた。

その後、アリアを探すために幾つもの部屋を当たって見て分かったが・・・イ・ウーは初め戦争のために作られたことが分かった。・・・超人兵士を育成し、敵軍に勝つために。その証拠におそらく艦長のための墓地と思われる場所には何人もの軍人の肖像画と石碑などが掲げられた部屋を先ほど発見した。そして右側に行くにつれて新しいものになっていたのだが・・・一番右側にあった肖像画はシ

ャーロック本人だった。

「おそらくイ・ウーは戦後、潜水艦という特徴を生かして逃亡したんだろうな」

「・・・そして独自の価値観に基づいて秘密結社を作り上げ・・・艦長という言葉を『教授』という言葉に置き換えた」

俺達は直感的に感じた気配を辿って隠し通路を駆け抜けると・・・・そこには教会があった。そこには何かの儀式の準備のためか、壁際や側廊には生花を生けた白磁器壷が飾られていて、まさに神聖なムードと言ったところだ。そして奥のほうのステンドガラスのすぐ下に・・・・

「アリア・・・」

アリアはこちらに背を向けて膝をついていた。・・・懺悔の祈りを捧げるような姿勢をしていたアリアは、俺の声に振り返って立ち上がった。

「キンジ！」

ピンクブロンドのツインテールをなびかせたアリアに俺は駆け寄る。・・・アンクは空気を呼んだつもりか入り口手前のイスに腕を組んで座った。

「アリア！」

俺はすぐさまアリアを抱き寄せる。・・・どうやら傷つけられてはいないようだ。

「どうして来たのキンジ？」

「理由がいるのか？」

周囲を見渡すと・・・シャーロックらしい人影はない。

「シャーロックは紳士ぶってるつもりなのか？人質をこんなところに離すなんてな。だが、おかげで好都合だ。・・・一旦移動して体勢を・・・」

と言いかけた俺からアリアは一歩引いた。

「どうしたんだ、アリア？」

「・・・キンジ・・・帰って。あたしはここで曾お爺さまと暮らすから」

アリアのその言葉に・・・俺はヒステリアになっているにも関わらず、一瞬思考を停止させた。

兄の任務（後書き）

申し訳ありませんが9月になったら就職試験が終わるまで土日だけの更新にしようと思います。・・・それと人気投票締め切りまであと2話です。

仲間を信じ、仲間を助けよ（前書き）

今日もだいぶ更新が遅くなりました。申し訳ありません。・・・
今回はキンジは変身しないです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

クジャクコア

「どうゆうことだよ？」

俺がアリアの方に詰め寄ろうとすると、アリアはさらに一歩引いた。

「あんたには分からないでしょうね。・・・今のあたしの気持ちなんか。・・・あたし、あんたにホームズ家でのこと話したことなかったわね。あのねキンジ、貴族には一族果たさなければならない役割を正しく果たすことが求められるの。そうでなければ存在することが許されない。いないように扱われるの」

アリアが少し壊れ気味の薄笑いを浮かべた。

「あたしは超越した推理力を持つホームズ家でたった1人、その力を持っていなかった。だから欠陥品って呼ばれて・・・バカにされて、ママ以外のみんなから無視されてきたのよ。・・・あんたもうすうすは気づいていたんでしょ？・・・あたしはホームズ家の人間にいないものとして扱われてきたのよ！子供の頃から！！」

アリアの甲高い声に・・・俺は以前アリアを調べてもらった時に理子が言っていた言葉を思い出す。・・・「アリアは『H』家の人たちとはうまくいっていないらしい」・・・あれはそうゆうことだったのか。

「あたしにとって曾お爺さまは神様のような人よ。信仰の対象と言っても構わないわ。その彼が生きていて・・・あたしの前に現れた。その気持ちが分かる？その曾お爺さまがあたしを認めてくれた。あ

たしを後継者とまで呼んでくれた！あんたに・・・あたしの気持ちが分かる？・・・分かるはずもないわ！！」

さっきシャーロックに囚われた辺りからもしかしたらと思っていたが・・・やはりシャーロックはアリアにとってのカリスマ的存在らしい。・・・俺にとっての兄さんのようにな。

「アリア、冷静に考えろ。かなえさんに無実の罪を着せたのはイ・ウーなんだぞ。そしてシャーロックはそのリーダーだった」

「ママのことも・・・もうすぐ解決する。曾お爺さまはあたしにイ・ウーを下さると言った。ここにはママの冤罪を晴らすたくさんの証拠が揃っているわ。イ・ウーがママを陥れた理由も探せばあるはずだわ。・・・その理由を知るためにもあたしはここに残るわ」

「それじゃあ本末転倒だろ！イ・ウーはお前の敵だぞ！その一員にお前がなるなんて・・・」

「じゃあ何！！」

金切り声を上げて犬歯をむき出しにするアリアはイ・ウー全体を示すように両腕を広げた。

「じゃああんたはこのイ・ウーを東京までしょっぴけると思っているの！そんなの不可能よ！曾お爺さまがリーダーだった時点で！・・・この際だからはっきりと言っておくけどね。シャーロックホームスを舐めちゃだめよ。彼は強いの！歴史上最も強い人間なのよ！たとえ裏のキンジでも・・・彼に勝てるはずがないわ」

シャーロックは絶対的な存在。・・・本気でそう思い込んで、そ

んな事を言っているんなら・・・俺も思っていることを全部言ってやるよ。

「・・・それならアリア。俺もはっきり言ってやる。イ・ウーなんざただの海賊だ！お前の曾爺さんは長生きのし過ぎでボケて、こんなもんのリーダーなんかをやってんだよ！！」

「・・・曾お爺さまを侮辱しないでっ！」

「俺は見逃さないぞ。・・・武偵として・・・仮面戦士として」

「今更武偵ぶらないで！・・・あんたはあたしと出会った頃、さんざん武偵を辞めたがってたくせに！もうとっとと帰って辞めちゃいなさいよ！あたしの背中に傷痕があったのを見たでしょ？あれは撃たれたのよ！１３歳の時に何者かに突然！・・・その銃弾は手術でも摘出できない所に埋まっちゃって今もあたしの体内にあるわ！そうゆう危険な目に家族や子供までが逢う。そんな危険な仕事なのよ・・・武偵は！・・・だからキンジ。・・・もう帰って。・・・あたしのことなんて忘れてっ。・・・あたしはこれでいいの・・・」

その眼から熱い涙を流し始めたアリアを・・・俺はただまっすぐ見つめると右手に握っていたメダジャリバーを強く握った。

「・・・お前の言う通り・・・武偵なんざ辞めたいさ。・・・だが不本意とはいえまだ武偵だ。俺とお前は武偵と武偵。そしてパートナー同士だ。武偵にとってパートナーの失策は自分の失策でもある。・・・お前が敵に寝返ったから、ハイそうですか。・・・なんて言って帰る訳にはいかないんだよ」

アンクは人間の黒い感情のヒステリアとか言っていたな。・・・

たしかにいつものヒステリアとまるで言動が違う。こんな泣いているアリアをさらに追い詰めることは普段のヒステリアの俺は言わないだろうな。

「お前のパートナーは俺だ。力ずくでも奪い返す」

「こうなる予感・・・少ししてたわ。・・・だから口で説得しようと思った。あんたを傷つけたくなかった」

「ハッ！冗談はよせ、アリア。俺がお前に負ける前提かよ。その辺、教育が必要だな・・・おちびさん。・・・イ・ウーで超人になるお前の前によ」

ため息をつくフリをしながら俺はベルセの血流が真芯に集まらないように制御を試みた。・・・アリアを傷つけてしまわないように。

「い、言ったわね。・・・もう取り消せないわよ」

「取り消さないぜ」

普通の高校なら口喧嘩で解決するが・・・武偵高では拳銃が出ちまう。・・・ほんと・・・うんざりしてくる。そのことは俺とアリアも例外じゃない。・・・最近は仲間と認識していたが・・・初めて出会った時もこんな感じだったな。アリアに犯罪容疑を掛けられて・・・いきなり撃ちかかってきたな。・・・はぁ、皮肉な話だ。

「2回目ね。あんたと戦るのは」

「あの時は逃げたけど、今度は逃げないぜ」

武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ・・・か。これも皮肉な話だがアリアと戦うことになってようやく分かった気がする。・・・仲間ってのは相手の言うことを聞いているだけの関係じゃ成り立たない。仲間が道を踏み外しそうな時はぶん殴ってでも止めるのが必要だろうな。そしてその時、その分殴り返されてやることも。

「先に抜けよ、アリア」

守るためにも・・・倒す。・・・そうゆう守り方もあるんだ。

「レディーファーストだ。抜け」

ガガンッ！

アリアは遠慮なしにスカートを翻し、目にも止まらぬ速さで発砲してきた。その手に握られているのは、さっきアンベリール号で渡した白銀と漆黒のガバメントだ。

「ッ！！」

ガギン！

俺はその銃弾をジャリバーで真っ二つにすると、後ろの花に当たったらしく花びらが散る。さらにその銃弾は跳弾し、辺りの花びらも宙を舞った。

「・・・っ！」

アリアは花びらが宙を舞う中、こちらに向かって駆けてくる。

ガガガガガガッ！

「セイヤッ！」

ガギンッ！ガギン！ガギン！

俺はアリアが次々と放ってくる銃弾を、右手で逆手に持ったジャリバーと左手で突き立てるように握られているバタフライ・ナイフで次々と切り裂く。・・・普段の俺じゃ絶対にできるはずもないが・・・ヒステリアの俺だから可能にしている戦術だ。

「くっ？」

アリアは苦しそうな顔を浮かべる。・・・そもそもヒステリアの俺といってもマトモに戦っていたらあんな数の銃弾を斬り裁くことなんてできない。・・・アリアのツインテールの動きが、まるで新体操のリボンのようにちょこまかと動くアリアを追ってくれているおかげで運動パターンが読みやすくなっているからだ。ステンドガラスを背にしたアリアはとうとう走るのをやめると、俺もレベッタを抜いて銃撃戦を始めた。・・・俺の銃弾は防戦一方になり動き回るアリアの後ろのステンドガラスを一部、また一部を割っていく。

「惜しかったわね、キンジ」

大理石の後ろに隠れたアリアがそう言って・・・ようやく気づいた。・・・周囲が赤く、緋色になっていることに・・・。俺の銃弾に赤い部分を残して割らさせたんだ。

「チッ！？」

「・・・・・・っ！」

俺が舌打ちをした次の瞬間、アリアは祭壇の陰から右に飛び出した。・・・しかしアリアのツインテールに注目しても緋色の光のせ

いで保護色になっているためうまく追いきれない。・・・するとアリアはこれまで曲線的に動いていたが、突如Ｌ字にターンし、一直線に飛び掛った。アリア・・・たしかにお前はＳランク武偵だな。戦いながら自分に有利な環境を作って相手を混乱させ、最後は自分の得意な接近戦か。・・・だがな、仮面戦士である以上接近戦は俺も得意なんだよ！

「セヤッ！」
ギンッ！

「っ！？」

俺はジャリバーで片手に握られていたガバメントを弾くと、アリアの掌底が俺のベレッタを叩き落す。

「くっ！？」

さらに回し蹴りを回避されたかと思うと、アリアの銃弾がジャリバーを持つ俺の防弾制服の袖に直撃し、それすらも落としてしまう。

「キンジ！どうして！」
ガスッ！

片脚バック宙をしたアリアが、俺の顎に蹴りかかった。それを鼻先に掠めながらもギリギリでかわすと、アリアは回転を活かしてさらに２連続で蹴ってくる。

「ぐっ！？」

「どうしてあたしをバカにするの！？」

着地と同時に飛び掛ってきたアリアは俺の右肩を小さな右手をぶつけながら両脚を振り子のようにして俺の後ろに回り込んだ。・・・銃をアリアに向けるまではできる。だが・・・その後が無理だ。・・・だがなんとかしないと・・・

ガチッ！

アリアは・・・撃ってこない。・・・撃てないんだ。俺のベレッタの銃口がアリアのガバメントの銃口に重ねられているせいで・・・。どちらかが撃ったら暴発してしまう、まさに『千日手』のような状態だ。

「どうしてバカにするのキンジ。・・・あんたの攻撃は全部あたしの拳銃を狙っていた」

人間の黒い感情でもあるヒステリア・ベルセを制御し、口調は悪いが概ね通常のヒステリアモードだった俺は・・・女性を傷つけることなんてできない。・・・結局のところ誰かを傷つけることが嫌なんだよ。・・・俺という人間は。

「・・・・・」

アンクはアリアを睨みつけるような表情をしながらも無言で俺達の戦いの行方を見ている。・・・それに気づいた俺はベレッカを持つ手から力を抜いて下に降ろした。

「撃てよ。・・・俺はお前を話し合いでも、無理やり奪い返すことも敵わなかった。もう打つ手がない。お前は無法者になって『武偵　神崎・H・アリア』はいなくなる。そして『武偵憲章1条　仲間を信じ、仲間を助けよ』・・・俺もそれを守れなかった。・・・

つまりおれには武偵としての資格がない。結局俺の手は届かなかった。・・・俺達のチームはアンクを残してたった今、全滅したんだ」

女のために何もかもを投げ打つ、ヒステリアの俺が命じた、行き過ぎた優しさだ。・・・だけどこれでいいんだ。

「撃てよアリア。まったく知らない奴に殺られちまうよりだったらお前にやられた方がいい」

「こ、殺さないわ。・・・そうよ。あなた達も私達と一緒に・・・」

「それ以上言うなアリア。俺は犯罪者の組織に加担するつもりはない。・・・あの世で先祖代々『正義の味方』をやっていたご先祖様達にボコられたくはないからな。構うことはない・・・撃て」

「・・・俺もこんな水の中に潜る乗り物なんかに乗っている気はないぞ。・・・水は苦手だからな」

俺の言葉に・・・奥の方にいるアンクも続ける。

「だから撃て。・・・俺を倒して、後は好きにしてくれ。・・・そしていつか思い出してくれ。全身全霊を持ってお前を連れ戻そうとした武偵がいたことを・・・そして、帰れ。無法者の世界から・・・日常の世界へ」

俺がそう告げるとアリアは再び熱い涙を浮かべる。・・・そんなことをされると決心がにぶるからやめてくれ。

「どうして・・・どうしてできないことを言うの?・・・曾お爺さまに銃を向けることはできない。・・・キンジに・・・パートナー

に銃を向けることもできないわよ」

肉親とパートナーで両挟みになり、どうすれば分からなくなったアリアはとうとう泣き声をあげて飛び込んできた。・・・俺はそれをゆっくりと抱きしめる。

「アリア・・・一つ告白させてくれ。・・・俺はお前を『殺せ』と命じられていたんだ・・・カナに」

「っ！？」

「イ・ウーを殲滅するためにな。・・・俺の隣に立っていた金色の仮面戦士を見ただろ？あれがカナの正体・・・俺の兄さんが変身した姿だ。・・・兄さんは俺のたった1人の肉親だったから俺も葛藤した。・・・今のお前のようにな」

「キンジは血の繋がった肉親よりあたしを選んでくれたの？」

アリアの表情から先ほどまでの拒絶の意思は消え・・・普段のアリアに戻っていく。

「わ、悪いかよ！」

「あたしは裏切り者よ？あんたに銃も向けたのよ？」

「いつも向けられてる」

「俺も・・・そのとばっちりを喰らってるから気にするな」

俺達がそう告げると・・・アリアは何か言葉を待つように黙った。

・・・何だよ。言わせるつもりかよ。

「・・・戻って来いアリア。・・・俺はお前を信じてる。・・・あとはお前しだいだ。少なくともさっきまでのお前は自分で自分を信じきれていなかった。・・・だから止めたんだ」

「あたしが・・・あたしを?」

「さっきのお前はこれで解決だなんて言っていたが違う、お前はただ安易な道に逃げようとしていただけだ。・・・逃げないで立ち向かってみろよ。・・・お前が望むなら・・・俺は全力でイ・ウーを潰す。だけどそのためにはお前の力が必要なんだ。・・・協力してくれ・・・俺にはお前が必要なんだ!」

俺のその言葉に・・・アリアはぎこちなく頷いた。

「・・・いつの時代も・・・戦わないと気づけないことが多いってのは複雑な気分だな。俺も・・・感情を理解する時にリクと殴り合ったな。・・・その時にアイツが涙を流してたのを見て・・・俺も人間を理解しようと思ったんだったな・・・ぐわっ!?」

ドカァァァァン!!

アンクが俺達を見ながらそう呟いた瞬間、教会の扉が吹き飛びアンクは俺達のところに転がってきた。

「アンク!大丈夫か!?」

「あぁ・・・問題ない・・・そんなことよりも・・・あいつだ」

「・・・曾・・・お爺さま」

教会の入り口があった場所は吹き飛び、散らばる瓦礫の上をシャーロック・・・仮面ライダーラスが歩いてきた。

「キンジ・・・オーズに変身しろ」

「何言ってんだアンク。俺には今、クジャクのメダルしかないのにどうやって変身しろっていうんだよ?」

「・・・・バカか?・・・コアメダルなら・・・ここにあるだろ」

アンクはそういいながら右腕だけを怪人態にして左手でその腕を指刺した。

仲間を信じ、仲間を助けよ（後書き）

何だかんだで次回で８０話目ですか。・・・長いようで短かった気がします。次回、人気投票締め切り。

天空業火（タジャドル）（前書き）

この物語の龍騎ライダーとドラゴンナイトのライダーの違いは龍騎ライダーの場合は『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』といった感じに１文字開けていますがドラゴンナイトのライダーは『ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ』といった感じに開けてはいません。・・・とりあえず今の所の書き方の違いはそのようになっています。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

クジャクコア

天空業火（タジャドル）

「メダルなら・・・ここにあるだろ？」

「アンク！何をふざけたことを言っているんだ！！」

俺はアンクの手を払ってジャリバーとベレッタを構える。

「・・・お前だって俺の仲間だ。武偵としてアリアとパートナーのように、アンクとは仮面戦士としてパートナーだと思ってる！だからそんなことができるかよ！」

俺がアンクにそう告げた時、ブツブツと雑音混じりの音楽が聞こえてきた。音量が上がっていくとそれがオペラ・・・モーツァルトの『魔笛』だと気づいた。

「音楽の世界には和やかな調和と甘美な陶酔がある。それは僕らの戦いという混沌と、美しい対照を描くものだよ。・・・そしてこのレコードが終わるころには・・・戦いの方も終わっているだろうね」

ラスは俺達に数歩近づく。

「はは。いよいよ完結編、という顔を1人以外しているね。・・・だけど僕は1つの記号『序曲の終止線』でしかないよ」

「序曲だと？」

「そうだ。この戦いは君達の戦いの『序曲』に過ぎない。この僕の発言の意味はじきに分かるあろう。ところで・・・『同士討ち』・・・

・カナ君が仕向けようとした罠の味はいかがだったかな？」

どうやら先ほどの戦いの仕掛け人はシャーロックだったらしい。・・・まぁ、なんとなく分かっていたが何が狙いだったんだ？・・・オーズに変身するメダルがまともにない今、たしかに銃弾を減らすという目的だったのならしてやられたとも言えるが・・・相手は仮面戦士。銃弾が効かないんだからそんなんじゃないだろ。

「・・・曾お爺さま」

アリアは勇気を振り絞るような足つきで俺の一歩手前に出る。

「あ、あたしは・・・曾お爺さまを尊敬しています。・・・だから銃を向けることなんてできません。あなたに命令でもされないかぎり」

丁寧な言葉使いで話すアリアは足元に銃を置いた。

「あたしは・・・あなたの思惑通り、あなたに立ち向かおうとするパートナーをこの銃で追い返そうとしました。でも止めることはできなかった。・・・彼はあたしがやっと見つけ出した、世界でたった一人のパートナーなんです。曾お爺さま、どうかお許しください。あたしは彼に協力しようと思います。それは・・・あなたに敵対する行動をするという意味なんです。・・・どうかお許しください」

「いいんだよアリア」

ラスの変身を解除したシャーロックはなぜか満足げな笑みを浮かべた。

「君は今、僕と言う存在を心の中で乗り越えた。キンジ君という男性を理由に、僕と敵対することさえ決意した。それはきみの中で、僕よりもキンジ君の存在が大きくなったという意味なのだ。・・・まだ愛の量は僅差のようだがね」

シャーロックは不得意そうなもの言いで俺達にそう告げるとどこからともなく飛んできた黄金のカブトムシのゼクター・・・コーカサスゼクターを左手首のブレスレットにつけて仮面ライダーコーカサスに変身した。

「より速いクロックアップをするためのハイパーゼクターは気まぐれなのでね。・・・どうやら今回は使えないようだ。しかしそれを使えなくても充分だ。僕はここで『緋色の研究』に終止符を打つつもりで・・・ハイパーゼクターはその時こそ重要なのでね」

「・・・使わなくても充分とは言ってくれるじゃんかよっ!!」

『緋色の研究』が何なのかは分からんが・・・俺はコーカサスに向かって駆け出しながらベレッタで狙撃する。・・・仮面戦士のスーツに銃弾なんかが聞くはずがないことは分かっているが・・・一瞬でも隙を作ってメダルホルダーを取り戻さないとな。

「・・・そんな攻撃で隙を作ることは無理だよ」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「ガハッ!?」

その音声でコーカサスが目の前から消えたかと思うと・・・俺はいつの間にか壁に叩きつけられていた。・・・右足に違和感を感じ

る。・・・骨折したか？

「キンジッ！」

壁に叩きつけられた俺にアンクは駆け寄ってくると、アンクは俺の襟を掴んだ。

「とっとと俺のメダルを使え！そうしないとお前が死ぬだろっ！！」

「それはお前がメダルに戻るってことなんだぞ！お前はあれだけ人の命を大切にしてるのに自分は命を捨てる気なのか！！」

「・・・俺はメダルの化け物だ。・・・メダルに戻ったからって死ぬわけじゃない」

アンクは自分の右腕を少し空しそうな眼で見つめると俺の襟を掴んできた。

「・・・それに俺は前に言っただろ。力は信念を貫くためにあるってな。・・・ここまで来てアリアを助けにきたんだろ！自分の信念を貫くためにここまで来たんだろ！！だったらこんな所で負けるな！！」

「・・・アンク・・・そうだったな。こんな所で負けられないな」

ドスッ！

ジャリバーを足元に刺し立てた俺はアンクに左拳を向ける。

「俺に力を貸してくれ。・・・いや、俺と一緒に戦ってくれアンク」

「ハッ！・・・俺のメダルを使わせてやるんだからとっとと倒せよ」
コツンッ！　チャリン　チャリン

俺の左拳に怪人態となっていた右拳をぶつけたアンクは・・・俺に2枚のコアメダルを握らせるとセルメダルに変わって崩れてしまった。

「・・・アンク・・・」

アリアは少し数メートル離れた所でアンクだったセルメダルを眺めながら悲しそうな目をしていた。

「グリードである彼が自らの意思で自分をメダルに変えるとは・・・少し推理を間違えたね」

「・・・よく見てろよシャーロック。これが俺とアンクの変身だ」

俺は兄さんから貰ったクジャクのコアメダルをベルトの真ん中にセットするとアンクを構成していたタカのコアメダルとコンドルのコアメダルをセットする。

「・・・変身！！」
『タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～～！！』

俺は両手を翼を広げるように広げた瞬間、真紅の炎に包まれる。普段はやや丸みを帯びて黄緑色の複眼だったタカヘッドは・・・まるでアポロガイストを思わせる形状に変化し、複眼も赤く染まる。クジャクアームの胴体はオーズにしては両手装備がない珍しい形態になる。そして足のコンドルレッグは爪先と踵に強靭な爪・ストライカーネイルとラプタードエッジを付加している。・・・胴体のマ

ークであるオーラングサークルは普段はバラバラな構図なはずだがこの姿では不死鳥を描く構図になっている。・・・これがアンクのメダルを使って変身した炎のコンボ・・・オーズ・タジャドルコンボか。

「ハァァァァッ！」

ボォ！

緋色の光で照らされる教会の中、俺はクジャクのようなタジャドルコンボの羽を広げた。

「・・・きれい」

「・・・僕は６０年前から盲目のために君達が見えていないが・・・アリア君の言動から察するに今のキンジ君はさぞかし神々しい姿をしているのだろうね」

シャーロックは盲目だったのか。だけど目が見えなくてもあんなに動ける相手に手加減はいらないだろ。

「この桜吹雪・・・散らせるものなら散らしてみやがれ」

ダダダダダダダッ！

俺は広げたクジャクの羽を手裏剣のようにコーカサスに放つ。その羽はコーカサスを包み込むように囲んでいるので避けようはない。

ドォォォォォン！

「やったの？」

アリアは憧れだったシャーロックが倒されているのも見たくないような複雑そうな顔をしながら爆煙を見つめると・・・コーカサスゼクターが火花を散らしながら変身を解除した無傷のシャーロックがいた。

「ここまでが『復習』だよキンジ君」

煙を払いのけて出てきたシャーロックは・・・間違いなくヒステリアモードになっている。その瞬間俺は兄さんの言葉を思い出した。『ヒステリア・アゴニザンテ』・・・死に際のヒステリアだ。・・・シャーロックはその見た目からは考えられなかったが寿命が近づいていた。最初から死に際だったんだ。・・・そしてトドメを刺すような羽手裏剣で、完全に目覚めさせたんだ。俺たち遠山家の男に伝わるヒステリアモードの派生系を・・・。

「なかなかの戦闘力だ。オーズの力を完全に使いこなしているね。君なら世界最強の仮面戦士になれるかもしれないね。・・・ＫＡＭＥＮＲＩＤＥＲ！」

『ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ』

シャーロックは再びラスに変身をすると両手に黄金の剣を持つ。

「・・・そんなのになる気はねぇよ」

俺もそれに対し、足元に刺していたジャリバーを引っこ抜いて構えると左腕に円状のクジャクアーム専用の特殊武器〝タジャスピナー〟を装備した。

「セャァァァァッ！」

「フンッ！」
ガギン！　ガギン！
ジャリバーでの攻撃をラスの片方の剣に受け止められると、俺もタジャスピナーでラスが振り下ろしてきたもう片方の剣をガードした。
「なかなかいい剣術と反応速度だ。君にはやはり最強の仮面戦士になりゆる才能がある。僕が保障しよう」
「・・・あんたも適当な男だな。実は」
先ほどの羽手裏剣でさらにステンドガラスを砕かれた室内は次第に明るさを増してゆく。するとＢＧＭとなっていた『魔笛』が終盤に差し掛かっていたことに俺達は気づいた。
「そろそろ時間だ。・・・次の一撃で終わらせよう」
「気が合うな。俺もそう思っていた」
一旦離れて距離を取った俺はジャリバーを投げ捨てると右手にオースキャナーを握りベルトを再スキャンする。その動きと同時にラスも黄金の杖にデッキと同じマークが描かれたカードを入れた。
『スキャニングチャージ！』
『ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ』
俺は赤い翼を広げて空へ羽ばたくと、ラスもゴルトフェニックスを自身の背中と一体化させて空に飛び上がった。

ドガッ！

「きゃっ！？」

俺とラスは天井を突き破り外へと飛び出す。・・・そしてラスが黄金の光を纏いながら体当たりしてくるのに対し、俺も1回転をしてコンドルレッグの膝から下を展開して脚部そのものを巨大なクローに変形させる。

「セイヤァァァァァァッ！！」

「ハァァッ！！」

ガガガガガッ！！

炎を纏ったドロップキックとラスの黄金の光を纏った体当たりが空中でぶつかる。・・・たしかにこのコンボは総合的に考えると俺の知っているオーズのコンボの中でも最強クラスのコンボなはずだ。そのキックをラスにぶつけているのに・・・俺が押されていた。

「ウオォォォォォォォォ！！」

「・・・自分の仮面戦士の方がスペックが劣っているのも分かっているはずなのに諦めないのだね。・・・君は・・・」

「諦めて溜まるかよ！！今の俺は1人で変身している仮面戦士じゃない！アンクと変身している仮面戦士なんだ！・・・こんな所で諦めたらアンクに合わせる顔がないんだよ！！」

アンク・・・俺の信念を貫くためにも・・・この一撃にお前も全

力を出してくれ！！

「・・・やってやるよ」

ゴオォォォォォ！！

ベルトのタカのコアメダルからそんな声が聞こえたかと思うと・・・コンドルレッグが纏った炎がさらにその勢いを増した。

「っ！？・・・まだこんな力が！？」

突如として炎の勢いが増した俺に驚いたラスは一瞬、攻撃の勢いを緩めた。・・・このチャンスを見逃すわけにはいかないな。

「セイヤァァァァァッ！！」

「くっ！？」

ドオォォォォォォン！！

俺はそのまま急降下すると、先ほどの教会の祭壇にラスを叩き付けた。

天空業火（タジャドル）（後書き）

おそらく次回かその次で「キンジ&アンク編」こと「教授編」が終了です。それと今回で投票を締め切らせて頂きます。次回の後書きで結果発表をさせていただきます。

特別なことが起こるプロローグ（前書き）

今回で『教授編』こと『キンジ&アンク編』が終了です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
クジャクコア
コンドルコア

特別なことが起こるプロローグ

「このオペラが独奏曲変わる頃には君を沈黙させるつもりだったのだがね。君は僕が推理した時間よりも長く戦い抜いた。・・・おそらくＨＳＳの上を行く反応速度で。それが僕の推理、『条理予知』さえも狂わせているのだよ」

俺に祭壇に叩きつけられたせいで変身を解除されたシャーロックは立ち上がると俺にそう言ってきた。・・・どうやらシャーロックはヒステリア・ノルマーレとヒステリア・アゴニザンテのことは知っていてもヒステリア・ベルセのことは知らなかったらしいな。

「それにグリードである彼と君の友情・・・僕はそれを計り損じた。つまり僕は生まれて初めて推理をし損じたのだ。君は賞賛に値する人間だよ」

「俺はあんたに認められるほどの人間じゃないさ。・・・ただの高校生だよ。偏差値低めで、ちょっと荒っぽい学校のな」

俺はそう言いながらオーズの変身を解除するとアンクのコアメダル３枚をベルトから外して右手で強く握った。・・・もう少し待っていてくれアンク。ここにはお前が復活できそうなぐらいセルメダルがないからな。

「なぜ変身を解除するのかね？」

「生身の人間に仮面戦士の力は使わない。・・・現代の常識だ。それに俺とアンクが変身する時・・・お前は攻撃してこなかっただろ。

・・・これで貸し借り無しだ」

あんたが俺を倒すタイミングなんて・・・たくさんあったはずだ。でもあんたは攻撃してこなかった。冷静に考えればこんなことができる立場じゃないんだが・・・今はベルセだけあって強気なこともあるし、敵に借りを作りたくないってのも本音だ。俺が腰から外したベルトを懐にしまうと、シャーロックは少し恥ずかしそうに赤くなった。・・・あれ?どこかで見たことがあるなあの表情。・・・そうか。俺にからかわれた時のアリアに似ているんだ。

「否定されたがもう一度言わせてくれ。君は本当に大した快男児だよ。僕がこんな気分になったのは、ライヘンバッハ以来のことだ」

「バッハじゃなくてモーツァルトだろ、これは」

俺がそのように答えると、シャーロックは小さく吹き出した。何かおもしろいこと言ったか、俺?言ってないだろ。

「キンジ君。あの戦いの後で言うのは不適切かもしれないが・・・僕は君が気に入った。君のフェアプレー精神に敬意を表して、今度は素手でボクシングでもしてみたいところだが・・・申し訳ない。この独奏曲は、最後の講義『緋色の研究』についての講義を始める時報なのだよ。紳士たるもの時間にルーズであってはいなければいけないからね」

緋色の研究?・・・俺は再び出されたその言葉に眉を寄せると・・・奴の身体が光り始めた。シャーロックが何かの能力を開放しようとしている。・・・その光はさらに輝きを増すと緋色に変色した。

「僕がイ・ウーを統率できたのは・・・この力があったからだ」

あの光・・・見たことある。パトラ戦でアリアが見せた緋色の発光だ。これは・・・あれとまったく同じ現象だ。

「だが僕はこの力を不用意に使わなかった。『緋色の研究』・・・緋弾の研究がまだ未完成だったからね」

語りながらシャーロックが出してきた銃はアダムズ・１８７２・マーク?。かつての大英帝国陸軍が使用した４５口径の拳銃だ。

「お前も『緋弾』が撃てるのか?」

「君が言っているのはおそらく違う現象のことだろう。アリア君が撃った光弾は緋弾ではない。あれは古の言葉で『緋天・緋陽門』という。緋弾を用いた一つの現象にすぎない。そして・・・これが緋弾だ」

シャーロックは弾倉の中に入っていた薔薇のように赤い弾頭を見せてくる。

「この弾丸が緋弾なのだよ。・・・いや、形は何でも構わない。日本では『緋々色金』とも言われていて・・・製作者達や資格者達は気づいていないがマスクドライダーシステムのシステムにもかすかにそれが混ざった合金が組み込まれている。・・・要は金属だ。峰・理子・リュパン４世の十字架もイロカネ合金だ。イロカネとはあらゆる超能力がまるで児戯に思えるような、偉大なる超常を人間に与えてくれる物質。・・・クロックアップがいい例だ。いわば『超常世界の核物質』なのだ」

なるほどな。・・・クロックアップなんて動きを科学の力だけで作り上げるなんてできないもんな。・・・つまりマスクドライダー

システムは偶然の産物ってことか。

「そしてグリードの身体を構成したり、オーズに変身したりするためのコアメダルは純粋なイロカネと言ってもいい代物なのだよ。・・・僕の先祖の錬金術師の資料を見る限りではね」

まぁ、５０人に分身したり、重力操ったり、バイオライダーみたいになったりしたんだ。コアメダルがそんな代物から作られているって聞いても今更驚かない。・・・むしろ納得できるな。・・・もしかしたら光太郎さんのキングストーンもイロカネの一種だったりするのか？

「ひとまずこの銃弾を見せるのは後にして・・・もう一つお見せしよう。君が見た現象はこれだろう？」

ポゥ

シャーロックを覆っていた光が、指先に集まっていく。まさかあの艦砲射撃みたいな技をアイツも撃てるのか？・・・焦りでごくりと唾を飲んだ俺の背後からもう１つ同じ光が発せられ始めた。

「アリア・・・！」

俺の目前でその光はアリアの指先へと集まると・・・シャーロックのそれよりは小さいが同じく太陽のように輝いた。

「なに・・・これ？」

アリアは自分の指先の光を見て驚いた表情を見せる。

「アリア君。それは『共鳴現象』だ。質量の多いイロカネ同士は、

片方が覚醒すると共鳴する音叉のように、もう片方も目を覚ます性質がある。・・・コアメダルもたしかに質量が多いが・・・これは錬金術によって加工されたものだから反応はしないようだね」

シャーロックは俺から奪ったメダルホルダーを開くが反応はしてない様子だった。

「アリア君。僕はこの光弾『緋天』を君達に向かって撃つ。僕が知る限りそれを止める方法は同じ『緋天』を衝突させることのみだ。実際にやってみたことはないが・・・日本の古文書によると、それによって緋天同士は停止し『暦鏡』なるものが発生するとある。・・・さっき君は命令されない限り僕を撃たないと言ったね。ならば、命令しよう。僕を撃ちなさい。その光で」

「・・・・・・」

俺は数秒間黙って考えた。・・・俺はコンボの反動のせいで、おそらく『緋天』をかわすことは難しいだろうな。かといってシャーロックがアリアを殺すとは考えられないが・・・状況でいうなら絶対絶命ってやつか。

「分かりたくもないが・・・お前は俺達に王手をかけてきた。だけど俺達にできるのはあと一手残ってる。・・・そうゆうことだろ」

「ご名答だキンジ君。これからもその優れたＨＳＳとオーズの力でアリア君を助けてやってくれ」

「キンジ・・・・」

アリアは不安そうな目でこちらを見ていたので、俺はシャーロッ

クに向けようろしているが震えて向けられないアリアの手を掴んでその指先をシャーロックに向けてやった。

「大丈夫だアリア。お前はパトラとの戦いのときに・・・無意識にこの力を1度使っているんだ。・・・何の助けにならないかもしれないが・・・俺とアンクが傍にいてやる。どうなろうと最後までな」

そう言うとアリアの震えはしだいに収まり、光もシャーロックの光と同じぐらいになった。

「良きパートナーを見つけたね。アリア君。僕にもかつてワトソン君という相棒がいたように、ホームズ家の人間には相棒が必要なんだ。・・・人生の最後に・・・2人が支えあう象徴を見れて僕は・・・幸せだよ」

パァァァァ！

アリアとシャーロックは光を放ち、それが衝突し静止して重なり合った。

「僕には死期が推理できた。・・・どんなに引き伸ばしても、僕の命は今日この瞬間までしか保てないと・・・だからそれまでに緋弾を子孫の誰かに継承する必要があったのだ。しかし誰でもいいという訳ではなく、３つの難しい条件があった。１つは緋弾を覚醒させる人間に限りがあること。情熱家でプライドが高く・・・僕自身はそうは思わないが子供っぽいところがある性格をしてなければならない。２つ目は・・・2人の今後を考えて詳細は伏せるが・・・アリア君が女性として心理的に成長する必要があったのだ。そして３つ目・・・継承者は最低でも3年もの間、緋弾と共になければならなかった」

シャーロックがどこからともなく飛んできたゼクターらしきもの・・・おそらくはハイパーゼクターと呼ばれていたものを掴むと、シャーロックの前の光は透明になり・・・まるでレンズのようになった。

「アリア君。君は3年前に背中を銃で撃たれたことがあったよね？」

「・・・はい。たしかに撃たれました。でもそれが何か？」

「撃ったのは僕だ」

俺の腕の中のアリアの全身が震えるのが伝わった。

「正確にはこれから撃つのだがね。緋弾を持ってすれば過去への扉を開くことができる。後は・・・」

ブゥゥゥゥンッ

ハイパーゼクターがシャーロックの手から離れ透明なレンズの中に突入すると・・・その光の中にはアリアらしい人影が見えてきた。

「・・・アリア君。いくら君でも自分が撃たれる姿を見るのは酷だろう。・・・少し寝てなさい」

ドスッ

シャーロックはまるで風に飛ばされて来たかのようにいつの間にかアリアの後ろに立ってアリアの首の後ろにチョップをして意識を刈り取った。

「キンジ君。・・・これが『暦鏡』・・・時空のレンズだ。僕も見るのは初めてだ。・・・それと今は眠っているアリア君に断ってお

くが緋弾には成長を遅くしてしまうのと、瞳と髪の色を緋色にしてしまう副作用がある。・・・僕の代わりに誤っておいてくれないか」

チャキ

そう俺に告げたシャーロックは・・・レンズに映るアリアに先ほどの銃を構えた。・・・あれをアリアに撃たれてはいけない。俺は無駄だと思ったが叫ばずにはいられなかった。

「避けろ！アリア！」」

レンズの向こうのアリアがそれに気づいたのかこちらに振り向こうとした時・・・

バァァァァン！

「っ！？」

銃弾がレンズの向こうのアリアの背中に当たった。

「『緋色の研究』は君達に引き継ぐ。・・・マスクドライダーシステムに使われているイロカネは別だが・・・イロカネ保持者の戦いは世界各地で起こっている。・・・キンジ君のグリードとの戦いもその1つだ。どうか悪意あるものから緋弾を守ってくれ。・・・世界のために」

「ふざけんな！お前はそんな戦いにアリアを巻き込むつもりなのか！メダルに関しては俺は当事者みたいなものだから何も言うつもりはないが・・・どうして曾孫をそんな戦いに巻き込もうとするんだ！」

「・・・これは世界の選択だ。・・・これはもういらない。君に返

そう」
パシッ！

力を使い切ったのか・・・今はもう教科書に載っている３５歳ぐらいになったシャーロックは俺にメダルホルダーをパスしてきたので、俺はそれをキャッチした。

「世界が何だ！アリアは高校生だろ！あんたがこんな事をしなければアリアは・・・アリアは・・・」

アリアは武偵にならずに平和に生きていたかもしれないのに・・・

「どんな理由があろうと・・・お前はアリアを撃った。自分の曾孫を背後からな」

「・・・許さなくてもいいさ。僕を嫌ってくれてもいい。・・・だけどアリア君は嫌いにならないでくれ。君が付いていてくれ」

「・・・曾・・・お爺さま」

すでに６０代前半ほどになったシャーロックに意識を取り戻したアリアは少し躊躇った表情をしながらも近づいていく。

「曾お爺さま・・・いえ、あえてこう呼ばせていただきます。・・・シャーロックホームズ」
ガシャン

アリアはシャーロックに手錠をかけた。

「・・・あなたを逮捕します」

これで・・・長かった戦いが終わったんだな。・・・そう思った途端、目の前のシャーロックが砂金になって崩れた。

「はは、素敵なプレゼントをありがとう。お返しにラスとコーカサスのライダーシステムを渡そう。それぞれの管理課に返せばそれなりの報酬は貰えるだろう」

「「っ!?」」

頭上からかけられた声に、俺とアリアは慌てて上を見上げた。そこにはとうとう白髪となってしまったシャーロックがどこかに向かおうとしてたので俺達も後を追って行くとおそらくはＩＣＢＭを改造したロケットに跳び乗ろうとしていた。

「どこに行く気だシャーロック。お前は今日までしか生きられないはずだろ?」

「どこにも行かないよ。昔から言うだろう?『老兵は死なず、ただ消え去るみ』と。・・・アリア君。短い時間だったがあえて楽しかったよ。その２つ以外に僕があげられるものはない・・・だから君に名前をあげよう。僕は緋弾という言葉の２つ名を持っている。『緋弾のシャーロック』・・・その名を君に・・・」

「名前?」

「さよなら『緋弾のアリア』・・・それと『ＯＶＥＲ∞』」

シャーロックはハッチを開きその中に入ると・・・それが飛び立とうとする。

「いや！いかないで曾お爺さま！」

アリアは発射寸前のロケットに張り付いて上り始めると・・・とうとうそれが宙に浮かび始めた。

「アリア！離れろ！」

「嫌よ！曾お爺さまがどこかに行っちゃう」

「くそっ！」

俺は右脚の痛みに耐えながらもジャリバーとバタフライ・ナイフをロケットに突き刺しながらアリアのところまで登ろうとする。・・・あのバカを絶対に連れ戻さないとな。

ゴォォォォォ！！

「くっ！？」

チャリン

ロケットはジェットコースターよりも速いスピードで空へと飛んでいく。・・・俺はその時に右手に握っていた3枚のアンクのコアメダルをアンベリール号のプールがあった場所の辺りに落としてしまった。

「・・・すまんアンク。後で必ず見つける」

下を向きながらそう呟くと・・・イ・ウーからさらにロケットが7つほど飛び去っていった。おそらくはイ・ウーの残党だろうな。

「・・・あっ！？」

その光景に気を取られてしまった俺は刺していたジャリバーとナイフを刺すのをミスってしまいロケットから投げ出された。ほんの数秒ほどでロケットが星のように遠ざかっていく。・・・その星からアリアが降ってくるのが見えた。

空から女の子が降ってくると思うか？

「ガハッ！？・・・くっ！？」

俺はここ数日で大量のコンボを使った反動で吐血しながらもアリアに手を伸ばす。あと５０センチ・・・あと３０センチ。

それは不思議で特別なことが起こるプロローグ。

「キ・・・ンジ！」

「アリ・・・・ア！」

届いてくれ。あの猫に手を伸ばしたときのように・・・もう1度届いてくれ！！・・・心の中でそう叫んだ瞬間、俺とアリアの手は繋がった。

現実のそれはとても危険で面倒なことが起きるに決まっているんだ。・・・だけど俺は手を伸ばす。あとで後悔しないためにも・・・。

「武偵憲章１０条。諦めるな。武偵は決して諦めるな。・・・正直あたしは何度も何度も諦めかけた。・・・だけどあんたがいたから・・・あんたが前を向かせてくれたからあたしは生きているの。・・・曾お爺さまはたぶんこの瞬間を推理していたんだわ。だからホームズ家の淑女に代々こんな髪型をさせたんだわ。・・・理子にもできたんだから・・・あたしにも・・・きっと・・・」

アリアのツインテールが・・・風圧ではなく・・・大きく・・・大きく・・・翼のように広がっていく。

「っ！」

降下速度が緩やかになった。・・・アリアは理子のやった技を見様見真似のぶっつけ本番でやっているのだ。

「アリア・・・」

すごい。・・・この能力じゃなく・・・いきなりこれをやってみ

るアリアの勝負強さが。

「あんまり見ないで・・・そんなに見られると集中できな・・・あっ！？」

海面まで７０メートルほどの所でアリアの集中力が途切れてしまい俺達は水面に向かって落下していく。

「まったく・・・世話が焼けるな」

バシャァァァァン

そんな時・・・アンベリール号があった場所から半透明の赤い翼を羽ばたかせたアンクが飛び出てきた。

「「アンクっ！？」」

「ハッ！・・・『武偵憲章１条　仲間を信じ、仲間を助けよ』だったな。・・・信じてたぜ。お前達を・・・」

アンクは俺とアリアを掴むと陽達が乗っている救助船へとゆっくり降下していく。・・・おそらくアンクは俺の落とした３枚のメダルとアリジゴクヤミーのセルメダルで復活したんだろうな。・・・俺はそんな推理をしながらそこで意識を失った。

俺達はシャーロックが言っていた言葉をもうすぐ開幕する戦いで思い知ることになる。・・・ここまではまだ『緋弾のアリア』の序曲に過ぎなかったことを・・・。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

それは俺が知るはずもない物語。・・・エヴィルの研究所で真木博士と白峰、それとカザリは緑色の培養液の中に入った1人の男を見ていた。

「完成です。・・・かつて日本で最も巨大な欲望を持っていた男・・・織田信長のミイラを使うことにより、とうとうギジメダルで人造グリードを作りだすことに成功しました」

「へぇ。おもしろいことをしたねドクター」

「果たしてノブナガは・・・世界に終末をもたらすことの器に成りえるのでしょうか。・・・しばらく外に放して様子を見てみましょう。・・・白峰君」

「はい。ドクター」

『ヘンシンッ！』

白峰はレイに変身すると大きな試験管のようなものを叩き割り、中の人物を引きずり出した。

特別なことが起こるプロローグ（後書き）

人気投票の結果は・・・

1位　アンク　　星伽白雪　　5票
2位　矢車双　　3票
3位　遠山キンジ　小林陽　峰理子　2票

と言った感じになりました。4位である1票の方々は以下の通りです。

神崎・H・アリア　ガメル　矢車俊　ウヴァさん　明智正太郎
ジャンヌダルク　城戸信司　剣崎一馬　後藤信太郎　遠山金一　草加正人　インディアン仮面

投票してくださった皆様、ありがとうございました。次回からは『再装填編』こと『ノブナガ編』を始めようと思います。

リロード1・ノブナガ（前書き）

オーズ最終回。・・・自分の中ではWの最終回の感動を越えました。とりあえず今回から「再装填編」こと『ノブナガ編』がスタートです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

リロード1・ノブナガ

チュン　チュン

「んっ・・・・・・あぁ」

窓から聞こえた雀の声に、俺は武偵病院のいつものベッドで目を覚ます。・・・あれほどの戦いの連続で、俺も使えるコンボは全て使った状態で一月ほど寝込んでいてもおかしくはないと思っていたのに１０日ほどで目が覚めることができた。

しかし主治医を担当してくれた伊達さんによるとコンボであんなに激しい戦いをしたせいで内臓が壊死しそうなぐらいやばかったらしい。・・・肉体を変質させる仮面戦士だけあって普通の人よりは治りが早いといってもさすがに骨折を１０日で治すことは無理だったが入院してから１５日ほどで一応ギブスは取れた。そんなこんなで今日は８月１０日。・・・夏休み終了まであと２０日になってしまった。

「・・・今日で・・・退院か」

寝ぼけた頭でニュースを見ながらここ数日のことを思い出す。・・・コンボの反動で気を失った俺は武藤達に助けられてそのまま武偵病院に入院させられたと聞かされた。イ・ウーがどうなったかは・・・知らないし、知りたくない。まぁ、リーダーを失って組織としては終わっただろうから・・・もう考えなくていいか。３日前に俺の病室に政府関係者を名乗る黒服の男達が鉄人先生を含む数人の武偵高教師とやってくるとイ・ウーの話を根掘り葉掘り聞いてきた。・・・

・その時に回収したラスのデッキとコーカサスゼクターは・・・まぁ普通の一般人なら１０人は一生遊んで暮らせるぐらいのお金をもらった。そして「事後処理は我々が行うから今回のことは永久に他言無用」言い残されて去っていった。

それと兄さんとパトラは・・・予想していた通り東京から姿を消した。・・・正太郎の姉さんは最後に「ＮＥＶＥＲを追う」と言い残してどこかに行ったらしい。おそらくは３人で正太郎達を攫おうとしたＮＥＶＥＲを追う気なんだろうな。

「ようやく起きたか。・・・飲むか？」

「ああ、１本貰う」

そう振り返っていると、病室にアンクが２本の缶コーヒーを持って入ってきた。・・・どうやら現在のコアメダルは３枚らしいが・・・本人曰く怪人態には部分的にしかなれなくなっているらしい。

「そんで・・・今日アリアは？」

「今日も帰ってきてなかった」

「・・・そうか」

ここ最近アリアはイ・ウー関連で出ずっぱりになっているとアンクから聞かされている。冤罪で囚われている母親の裁判に向けて証拠集めや弁護士との打ち合わせがあって忙しい。とはいえ俺の意識が戻ってから１度も見舞いに来ないのはいかがなものか。・・・少し冷たいんじゃないか？

「まぁ・・・あれだ。とっとと退院の手続きを済ませてこいよ」

「そうだな・・・」

俺は退院の手続きを済ませて病院のロビーを出て行くと・・・・

「キンちゃん！退院おめでとうございます！」

白雪がいた。・・・白雪は俺の入院中、俺の意識がない間も付きっ切りで看病してくれていたらしい。特製の漢方薬を作ってくれたり、宿題を手伝ってくれたりしてくれたのだ。まぁ・・・ウェストや脚の長さを計らせた覚えがないのに俺の体型と1ミリの狂いもない制服を新調してたり、俺のスタッグフォンからアリアのアドレスが削除されていたり、アンクが俺の病室を出て白雪の声がしたかと思うと・・・窓から見えた帰るアンクが怪人態の右腕だけになっていたりすることもあったが・・・問い詰めないでおこう。・・・なんか怖いし。

「・・・そういえば白雪。この前、漢方薬の材料を持ってきたときの袋が小香港の紙袋に入っていたな。1人で台場まで買いに行ったのかよ？」

星伽神社の箱入り娘の白雪は学校と神社以外の外出を禁じられている。昔は武偵高から出るモノレールに躊躇っていたが・・・最近は成長したんだな。

「うん！最初はちょっと不安だったけどちゃんとお買い物できたよ！」

俺達はそんな話をしながら武偵高の教務科へと向かおうとすると・

・・どこからともなく悲鳴が聞こえた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

バン！　バン！

「「「っ！？」」」

悲鳴の後に銃声が響いたので俺達は悲鳴の聞こえた体育館裏に向かってみると・・・そこには顔が白ヤミーのような鎧武者の怪人が十字架に見えなくもない剣を武偵高の生徒の喉に突きつけてた。

「俺を殺したのはお前か？」

「な、何の話だ！？」

「・・・天誅」

鎧武者怪人は生徒に向かって剣を振り下ろす。

「やめろぉぉぉぉぉ！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

ガギンッ！

俺はオーズに変身すると展開したトラクローで鎧武者怪人の剣を防いだ。

「早く逃げろっ！！」

「は、はいっ！」

「セヤッ！」
ドカッ！
生徒はその場から逃げたのを確認すると押し返すように蹴り飛ばす。
「何だあの怪人？・・・メダルの気配はするが・・・グリードでもヤミーでもないぞ」
「どうゆうことだアンク！」
俺はアンクからジャリバーを受け取りながら聞いてみるが・・・
「んなこと知るか！！」
・・・どうやらアンクにも分からないらしい。
「・・・とりあえず戦えってことか」
「・・・・フンッ！」
ガギンッ！
俺と鎧武者怪人の剣と剣がぶつかり合い火花が散る。・・・いったいどんな力を持っているか分からないからコンボはまだ使わない方がいいな。・・・正直に言うとまだ内蔵が完治したわけじゃないんでコンボは控えたいってのが本音だが。
「キンジ！あのメダルを試してみろ！」

「あのメダルって・・・まさかあれか！？」

俺はジャリバーを横に振り払って鎧武者怪人と距離を取るとパンダが描かれたメダルを取り出す。

「・・・本当に使えるのかこれ？」

「俺の勘が正しければ問題ない！やってみろ！」

「・・・分かった」

『タカ！パンダ！バッタ！』

俺はトラのコアメダルを外して変わりにパンダのメダルを入れてスキャンすると・・・黄色かったはずのトラアームは・・・白く変わった。・・・見た目状の変化は色と胴体のマークぐらいだ。

「・・・あれ？あんま形が変わってない」

「・・・フンッ！」

ブンッ！

「うおっ！？」

ガギン

鎧武者怪人が再び剣を振るってきたので俺はとっさに白いトラアーム・・・パンダアームで防ぐと・・・

「・・・くっ！？」

先ほどは両腕のトラクローを使って止めた剣を片手で防ぎきれて

いた。・・・なるほど。パンダはパワータイプのメダルってことか。

「これなら・・・セヤッ！！」

ドォン！

「ぐっ！？」

俺はパンダアームの全力で殴り数メートルほど飛ばすと・・・鎧武者怪人は少しふらふらしながら立ち去っていった。

「追え！キンジ！」

「ああ！」

チャリン

俺は近くにあったライドベンダーをバイクモードにしてまだ遠くに行っていないはずの鎧武者怪人を追いかけるために道路に出ると・・・

「う・・・うぅ」

ドサっ

「うおっ！？」

いきなり俺の運転するベンダーの前に1人の男が倒れてきた。

「おい！しっかりしろ！おい！」

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
「う・・・うぅ？」

「おっ！気が付いたか？」

俺はアンク達と合流してとりあえず謎の男をクスクシエに運び入れた。

「は～い。チャーハンできたわよ～」

「ありがとうございます千代子さん」

千代子さんからチャーハンを受け取った俺は男にチャーハンを差し出す。

「まぁ、とりあえず喰えよ」

「・・・・・・」

ガッ！

男は俺からチャーハンの皿を奪い取ると手ですくうようにしてガツガツとチャーハンを食べ始めた。・・・そんなに腹が減ってたのか？・・・おっと！まずは名前を聞いておかないとな。

「・・・俺は遠山キンジ。そんで後ろの２人が・・・」

「泉・A・信吾だ。・・・覚えておけ」

「星伽白雪だよ。よろしくね！」

「お前の名前はなんて言うんだ？」

次の瞬間・・・男は日本の歴史で有名な人物の名前を口にした。

「ノ・・・ノブナガ・・・」

「ノブナガって・・・あの織田信長？・・・まさか・・・」

さすがの白雪もこの男のノブナガという名前には少し驚いた様子だった。・・・でも俺的にはこの学校は偉人の子孫、もしくはそうじゃないかと言われる奴らが知り合いでそれなりにいるからあまり気にならないな。

「そんで？苗字は？」

「・・・分か・・・らない。ここは・・・どこだ？・・・俺は・・・何をしている？」

俺と白雪はその言葉に衝撃が走った。・・・こいつまさか！？

「キンちゃん・・・もしかして・・・」

「たぶん・・・記憶喪失だろうな」

こうして俺達は記憶喪失の青年・・・ノブナガと出会った。

「先輩！退院なさってここに来たって聞いたんで参りましたぁ！・・・・ってあれ？」

「凍条殿！そこを避けないと拙者が入れないでござる。・・・師匠！ご無事で何よりでござる！・・・む？・・・何やら不穏な気配が・・・」

凍条と風魔が入ってきてもクスクシエの沈黙は続く。

これが夏休みに起こった新たな物語のプロローグ。・・・そして・・・エヴィルとの戦いが本当の意味で始まりを告げる合図だった。

リロード1・ノブナガ（後書き）

今回はノブナガ編のプロローグのような内容にしてみました。

リロード2・図書館と単位（前書き）

「再装填編」こと『ノブナガ編』は8～9話を予定していましたがもしかしたら15話ぐらいになるかもしれません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

リロード2・図書館と単位

あれから数時間後、とりあえず俺は教務科に連絡を取ってしばらくノブナガを俺の部屋に住まわせることにして部屋に帰ったら・・・いきなり面倒なことが起きた。

「おいノブナガ!?それは帽子じゃない俺のパンツだ!!」

「キンちゃんのパンツを被るなんてうらやま・・・いけないことだよ!」

ドカっ！　ドカッ！

「てめぇ事ある事に俺を叩くの・・・いえ、なんでもないです。すいませんした」

とりあえず簡単に状況を説明すると・・・1つ、部屋に入った途端洗濯かごに入っていた俺のパンツをノブナガが被る。2つ、それを見た白雪がどういう訳かアンクを叩き始める。そして3つ、アンクは白雪に日頃の恨みを晴らそうとしたが物凄い形相で睨まれたので土下座をする。・・・なんていう状況だ。・・・頼む。誰か何とかしてくれ。

「・・・・・」

ピッ！

俺がこの状況に焦っている時、ノブナガはテレビのリモコンのスイッチを押してテレビの電源がついた。

「・・・・？」

「ああ、それはテレビだ。やっぱりこれも分からないのか？」

「・・・・・・」

ノブナガは無言でテレビを眺め始める。・・・とりあえずこれで大人しくなったな。・・・後ろの２人もおとなしくなったな。

「・・・・メダルが・・・セルメダルが・・・」

「・・・しぶといね。まるでＧみたい」

後ろを振り返るとアンクが右腕だけになり台所に出現するＧを捕まえるためのホイホイに貼り付けられていた。

「白雪。セルメダルがもったいないからアンクを痛めつけるのはやめてくれないか？」

「ご、ごめんなさいキンちゃん！そうだよね！キンちゃんのメダルがもったいないよね。アンク！これに懲りたらそんなことはしちゃ駄目だよ！」

「・・・俺が何をしたっていうんだよ」

夕飯を一緒に食べた白雪が帰ったのを確認した俺は２～３０分掛かって何とかアンクをＧホイホイから剥がしてタンスにしまって置いたセルメダルでアンクを回復させた。・・・しかしその間もずっとノブナガがテレビを黙ってずっと見ていたのが何となく気になった。

チュン　チュン

翌朝、雀の鳴き声で目は覚めるがいまいち起きたくないと思っていると・・・

「起きるのだキンジ」

ゲシッ！

「ぶるぁっ！？」

いきなり何者かに腹を踏まれたのですぐさま飛び起きた。・・・ったくアンクの奴、俺はまだ内臓の調子があまり良くないのに。・・・俺を踏んだのはアンクだと思っていたが、その予想は外れていた。

「白雪嬢が朝食を作り終えている。お前もはやく起きて来い」

「え？・・・ノブナガ？」

昨日まで言葉という言葉を話せていなかったはずのノブナガが・・・信じられない事にぺらぺらと日本語を話していた。・・・何があったんだ？・・・そう思っていると左手に箸を持ち右手にお椀を持ったアンクがやってきた。

「どうやらソイツはあれからずっとテレビを見ていただけで日本語を覚えたらしいぜ」

「は?そんなことができるのかよ?」

「そうじゃなかったらこいつがどうしてこんなにしゃべってんだよ。俺が起きた時もずっとテレビの前にいたんだぞ」

マジかよ。・・・だとしたらノブナガはどれだけ物覚えがいいんだよ。・・・そう思いつつも白雪の作った朝食を食べ終わると・・・ノブナガは俺の私服を適当にあさってそれに着替えた。

「キンジ。現代の世の中を知っておきたい。書籍が置いてある場所を教えてくれ」

「あ・・・ああ」

記憶喪失の奴が現代を知りたいと言い出したことに違和感を少し覚えたつつも、俺達はとりあえずノブナガを一般にも開放してくれる武偵図書館に案内してやった。

「・・・ご苦労。あとは問題ない。夕食の時間には戻るようにする」

そういい残すとノブナガはすたすたと図書館の中へと入っていった。

「いいのキンちゃん?・・・ノブナガ君を1人で行かせて?」

「正直驚いているが・・・あの様子だと1人でも大丈夫なんじゃないのか?」

『ＰＰＰ』

少しノブナガが心配だと思いながらもひとまず帰ろうとすると・・・スタッグフォンではなく普通の携帯のほうにメールが来た。

「ん？・・・教務科からだな」

「なんて書かれているのキンちゃん？」

「『遠山キンジ　探偵科　１単位不足』・・・えっ？」

何でだ！？あんな激闘までやってがんばったのに！！・・・そう思って下の方も呼んでみると・・・『輸送車輌の警備は怪人とはいえ襲撃犯に車輌ごと盗まれてしまったので評価を減点する』とあった。・・・マジかよ。だとするとアンクもやばいんじゃないのか？

「き、きききキンちゃん！た、たた、単位が！たたたた」

俺以上にパニックってる様子の白雪はしばらくオロオロアタフタすると武偵手帳を開いた。そして血相を変えて小さな筆ペンで何やら書き込み始めた。

「・・・・・」

あまりに必死に書き込んでいるので、ちょっと不安になり覗いて見ると・・・

絶対必須⇒単位を取る⇒一緒に進級⇒一緒に進学（ここでアンクとお別れ）⇒一緒に武偵企業に就職⇒寿⇒赤ちゃんを７～８人産む⇒全員キンちゃん様にソックリ

などと空恐ろしい人生計画がビッシリと書かれていたのが一瞬見えたような気もしたが、字が達筆すぎて読めなかった。・・・読めなかったことにする！俺は何も見てないぞ！

「キンちゃん！夏休みはまだ１９日あるよ！１単位、何とかしよう！」

「そ、そうだな！・・・アンク！俺とお前の単位が危ない！急いで教務科に行くぞ！」
チャリン
チャリン

「くそっ！？なんて散々な目に合う夏休みだ！！」

俺とアンクは慌てて近くのライドベンダーをバイクモードにして跨ると俺の方のベンダーに白雪も乗ってきた。

「待ってキンちゃん！私も行くよ」

「あ、ああ！」

俺達が教務科に到着すると・・・掲示板には俺達以外にも数人立っていた。

「信司と・・・後藤、それに明日夢と天道か」

さらに近づいてみると・・・３人は振り向いたのに信司だけは俺に振り向かずにただ掲示板を見て唖然としていた。

「あ・・・あ・・・・」

「どうしたんだ信司・・・っ！？」

信司の単位を見て・・・本当にびっくりさせられた。

『城戸信司　情報科　３単位不足』

３単位って・・・マイナス１単位じゃんかよ。どんだけお前はバカなんだよ。

「城戸・・・お前はバカだと思っていたが違った。・・・お前は大馬鹿だったようだ」

「う、うるさい！ただ１学期は国語以外全教科赤点だったり毎日遅刻してただけだ！・・・それに天道だって単位が足りてないじゃんか！」

「・・・おばあちゃんが言っていた。仕事よりも大切なものは家族だと。・・・俺はただひよりの彼氏という人物が誰なのか２４時間体制で監視して探っていたら単位を少しとっていなかっただけだ。・・・大馬鹿のお前とは違う」

２４時間って・・・お前それストーカーより酷いじゃんか。・・・信じたくないほどのシスコンだな。ある意味信司よりも酷いぞ。・・・『天道総治　仮面戦士科　０，４単位不足』か。割とはやく天道は済みそうだな。

「後藤も俺と同じで１単位不足か」

「ああ、やはり輸送車の警護を失敗したことは大きいな」

ガチャリ

後藤は何やら変わったデザインの銃を持っていた。見たことない銃だな。どこのモデルだ?

「後藤・・・その銃はいったい?」

「この銃はバースバスターといって仮面ライダーバースのメイン武器だ。伊達さんは俺がバースを受け継げるほどの実力をつけろとこの銃を俺にくれたんだ。わざわざメイン武器を俺にくれたんだ。期待に沿えるように強くなり・・・いつかお前や矢車達と肩を並べてみせる」

ここ最近見ていなかった間に以前よりも後藤は筋肉がついていた。・・・こんな短期間でこんなに筋肉をつけるなんてどんな鍛え方をしているんだ?・・・後で練習を見に行ってみよう。

「アンクの単位は・・・・どうなんだ?」

「アンクは・・・『泉・A・信吾　強襲科　1，5単位不足』と記されている」

1，5単位か。まだまだ足りないが・・・信司よりは希望がある単位だな。

「・・・・・・・チッ!」

アンクは少し離れた所で空を睨みつけるように見ながら舌打ちをしていたた。・・・さすがにアンクも1，5単位には危機感を感じているようだな。

「まぁ、とりあえずアンク。あと19日で単位を何とかしようぜ」

「変身しろキンジ・・・」

「は？」

俺はあまりにも以外なアンクの返しに気の抜けた返事をしてしまう。

「いいからとっとと変身しろって言ってんだよ！！」

「そうだ。変身して貰わなければこちらとしてもつまらん」

どこからともなく声がしたかと思うと・・・俺達の目の前の空間が歪む。そこからは仮面ライダー1号、2号に似ているがグローブやマフラー、そしてブーツの色が違う6人の戦士達が俺達の前に出現した。

「あれはまさか・・・ショッカーライダー！？」

ショッカーライダー・・・それはバカの信司でも知っているほどの有名な相手。かつて本郷さんと一文字さんが何度も激闘を繰り広げた偽ライダー達だ。スペックや能力も1号、2号と同じで本郷さん達も苦戦したが・・・思いの強さで戦って何とか勝利した。と仮面戦士科の教科書には記されている。

「我々はエヴィルの首領様が直々に作り上げてくださったショッカーライダー。・・・遠山キンジ。及びグリードながらも人間に加担するアンク。・・・貴様らを倒しコアメダルを首領様に謙譲させて

もらう」

くそっ！？・・・またエヴィルかよ。・・・俺はエヴィルの怪人とは絶対に戦いたくないと思っていたのに・・・。

「くそ・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「「変身！」」

『ＨＥＮＳＩＮ』

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』

俺がオーズに変身すると・・・信司も龍騎に変身し、天道もカブト・ライダーフォームに変身して俺の隣に立った。

「しゃぁっ！・・・何だかよく分かんないけど・・・とりあえずヤバイってことは何となく分かった」

「ショッカーライダーか。・・・俺が最強ということを見せてやるには丁度いい相手だ」

コンボがまともに使えなさそうな俺にとって二人の参戦はだいぶ助かる。

「白雪！後藤！援護を頼む！」

「うん。分かったよキンちゃん！」

「了解した」

ガチャ

白雪は数枚のお札を懐から取り出すと、後藤もバースバスターを構えた。すると右腕を怪人態にしたアンクはショッカーライダー達とは真逆の方を振り向く。

「・・・キンジ。ここはこいつ等に任せておけ。・・・俺達はアイツの相手だ」

「あれ?気づいてたんだ?・・・さすがはアンクだね」

「カザリ・・・・」

アンクが向いている先には・・・裁鬼に変身した鉄人先生・・・もとといサバキ先生の足を引っ張りながらこちらに歩いてくるカザリがいた。

リロード2・図書館と単位（後書き）

明日か明後日のどちらかは進路の都合で残念ながら更新できないかもしれません。

リロード3・進化（前書き）

昨日は更新できなくて申し訳ありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
チーターコア
バッタコア
タココア

パンダギジ
カンガルーギジ

リロード3・進化

「アンク！ジャリバー！」

「ほらよっ！」

パシッ！

俺はアンクからジャリバーを受け取るとメダジャリバーを突き出すように構える。・・・そしてアンクも右腕に炎を溜めてカザリに向けた。

「フフ・・・」

ドサッ

「うぅ・・・・・」

カザリは裁鬼をまるでゴミのように近くに捨てた。・・・どうしてだろうな。最近この人が負けるところをよく見るな。

「オーズ。それにアンク。・・・今日の僕が今までの僕だと思わないでね」

「っ？」

何を言っているんだ？確かにショッカーライダーが6体もやって来てはいるがカザリのコアメダルは俺の手元に3枚あるからパワーアップはされていないはずだ。・・・ハッタリか？

「セヤッ！」

「おらっ！」
ドンッ！

「ふふ！」
ガギンッ！

俺はジャリバーでカザリを斬りつけ、アンクも火球をカザリに放つが・・・グリードの中で最もスピードの速いカザリは俺達の攻撃をあっさり止められてしまう。

「キンジ！トラじゃパワー不足だ！パンダにしとけ！」

「分かった！」
『タカ！パンダ！バッタ！』
ブンッ！

オーズ・タカパンバに変わった俺はトラアームよりも腕力の強いパンダアームでジャリバーをカザリに振るう。

「ほっ！」
ドカッ！

「うわっ！？」

どうやらパンダアームはトラアームよりもやや動きが遅かったようでカザリは俺のジャリバーをあっさりとかわして俺に重たい一撃を入れてきた。・・・何だこのパワーは？このパンチ力はまるでガメルだぞ？
ドサッ！

「くっ!?なら・・・」
『タカ!パンダ!チーター!』
「ハァァァァァッ!」
カザリがどうしてあんなパワーを持っているのかは分からないが・・・このままカザリのスピードからあんなパンチを喰らうのはまずいな。・・・そう思いながら地面に叩きつけられた俺は足をチーターレッグに変えて高速からのパンダの重たい一撃を決めようとすると・・・
「残念だったね。・・・そんなんじゃ僕に攻撃はおろか、触れることすらできないよ」
「なっ!?」
俺は突如として宙に浮かび始めてまともに動くことができなくなる。・・・この能力といいパワーといい間違いない。・・・カザリはガメルのメダルを吸収している。
「・・・アンク・・・気づいているか?」
「ああ、あの攻撃力と重力操作は間違いなくガメルの力だ。・・・おそらくこの前の暴走グリードを倒した時のメダルだろうな」
「さすがアンク。よく分かったね。・・・でも、それだけじゃないよ」
バシャァァァァッ!
「うわっ!?」

カザリはさらに高圧水流を放って俺を吹き飛ばした。・・・さっきのガメルの能力を見てからもしやとは思っていたがやっぱり取り込んでやがった。

「キンジ！チーターじゃ凌ぐことはできない！タコのコアメダルを使え！」

「分かった！やってみる！」

「させないよ！」
ドカッ！

「なっ！？」

俺はチーターのコアをベルトから外してタコのコアを入れようとした途端、カザリの攻撃を喰らいチーターとタコのコアメダル、さらにパンダのメダルをカザリに奪われてしまった。

「これで僕のメダルはこれで7枚か。・・・残りの2枚も頂戴よ。渡してくれるんなら苦しまないように殺してあげるよ？」

「誰がお前なんかに渡して溜まるかよ！」

メダルが奪われて変身が解除されてしまった俺はトラとバッタのコアをベルトに入れて再度変身をしようと立ち上がる。

「チッ！・・・キンジはコンボが使えないのに今のカザリとどう戦わせればいいんだ？」

「うわぁぁっ！？」

「ぐっ！？」

アンクは俺が苦戦している俺を見て焦ったような表情を見せる。・・・龍騎やカブト達もさすがに1号、2号の能力をマネたショッカーライダーを6体も相手にするのはさすがにきついようで押され気味に見える。

「さてと・・・トドメだよ」

ブンッ！

「くっ！？」

カザリは俺が変身するよりも速く攻撃を仕掛けてきたので俺は咄嗟にジャリバーで防ごうとするが間に合いそうにない。・・・駄目か！？

ドカッ！　ドカッ！

「うわっ！？」

『『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』』

カザリがいきなり数メートル吹き飛ばされたかと思うと・・・俺の前にはキックホッパーとパンチホッパーが立っていた。

「・・・気づくのが遅くなって悪かったな相棒」

「いや、助かったぜ矢車・・・」

「兄貴の相棒さんはまだ身体の調子が悪いだろうから休んでいてくれ。ここは俺達が何とかするから」

周りを見渡してみるとそれぞれの闘っている所にもそれぞれ助っ人が来ていた。

「おい3単位足りていない馬鹿。・・・とっとと立て」

「煉！助けに来てくれたのか！！」

「お前1人では頼りないから・・・仕方なくだ」

龍騎の所には秋山の変身する仮面ライダーナイトが剣型の召喚機のダークバイザーを構えて紫色のマフラーのショッカーライダーにやられている龍騎の前に立っていた。・・・秋山は信司とよく喧嘩はするけど何だかんだ言ってあいつ等はコンビらしくお互いのピンチを助け合っているな。

「ライダーキック！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ガタック・ライダーフォームは跳び回し蹴りのライダーキックで青色のショッカーライダーを蹴り飛ばすと膝をついているカブトに駆け寄った。

「大丈夫か天道？」

「・・・鑑か。・・・自分から囮になるとは良い心がけだな。褒めてやるぞ」

「だぁぁぁぁっ!?俺は囮になるために来たんじゃない!助けに来てやったんだよ!!第一なんでお前はこんなピンチでも上から目線なんだよ!!」

「フッ!俺は天の道を生きる男だからな。お前より上なのは当然だ」

ガタック・・・鑑はどうやら天道の友人らしくピンチに晒されていたカブトを助けにきたようだが・・・仮面戦士科では限りなく珍しい普通な性格のせいでせっかく助けにきたのに弄られていた。

『セルバースト』
ドォォォォォン!

「っ!?」

最近少し聴き慣れた音声に振り向いて見ると・・・後藤の方には仮面ライダーバースがバースバスターで緑のマフラーのショッカーライダーを吹き飛ばした。

「助けに来たよ後藤ちゃん!」

「伊達さん!」

どうやら伊達さんも援護に来てくれたようで後藤の方も助かったようだ。・・・白雪は大丈夫なのか?

「先輩っ!こいつは僕に任せといてください!」
ドカッ!

「凍条殿だけ師匠の前でいい姿はさせないでござる!」

シュッ！

白雪の方を振り向くと・・・凍条が変身する仮面ライダータイガが桃色のマフラーのショッカーライダーと徒手格闘で戦いながらも風魔が的確なタイミングで手裏剣を投げていた。・・・なんか喧嘩ばっかしているたしいけど何だかんだで仲が良いのかもしれないな。

「相棒・・・俺達は本郷さん達の姿を真似ているアイツらが気に食わないんであっちに向かっていいか？」

矢車兄弟の師匠は本郷さんと一文字さん・・・仮面ライダー1号と2号だ。その姿と似たような姿で俺達を襲ってきたショッカーライダーに敵対心を燃やすのはこいつ等にとっては当然か。

「ああ、こっちは心配しないでくれ。・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺が再びオーズに変身するとキックホッパーは龍騎達の所にいた黄色いマフラーのショッカーライダーに蹴りかかり、パンチホッパーは白いマフラーのショッカーライダーに殴りかかった。

「それじゃあ俺達はオーズに参戦させてもらうぜ？」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

いつの間にか後ろに立っていた正太郎と陽が2人で変身する仮面ライダーWはルナトリガーへと変わりトリガーマグナムをカザリに向けた。

「ハッ！形勢逆転だなカザリ！！」

「・・・たしかにアンクの言うとおりこれはまともに戦うには分が悪いね。・・・まぁ、メダルも3枚手に入れたし・・・・みんな！帰るよ！」

「「「「・・・・・・・」」」」

バッ！

カザリの合図により6人のショッカーライダーが集まると・・・先ほどのように空間が歪みその中にカザリ達が入っていく。・・・おそらくあれはワープ装置みたいな物なんだろうな。・・・何処でもドアみたいだな。・・・俺はそんな解釈をしているとW（正太郎）が俺に聞いてきた。

「キンジ追わないのか？」

「・・・相手がどれだけ戦力がいるか分からないからな。・・・迂闊に追いかけるのは危険だろ」

「それもそうだね・・・」

俺が変身を解除するとWやキックホッパー達も一斉に変身を解除した。

「先輩！戦徒は僕ですよねっ！そうですよね！！」

「何を言っているでござる凍条殿！師匠の戦徒は拙者でござる！」

「いや！先輩は仮面戦士なんだから仮面戦士の僕が戦徒なのが自然

なんだ！」

「何を言っているでござる！先に師匠の戦徒になったのは拙者でござる！」

「はぁ・・・まったく・・・・・っ！？」

凍条と風魔はそのまま子供のような喧嘩を始めたので止めようとすると・・・どこかから怪しい視線を感じた。・・・しかし周りを見渡してもどこにも怪しい影はなかった。・・・何だったんだ今のは？

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

俺達が戦っている頃、教務科近くの物陰ではウヴァがコソコソとしながら俺達の戦いを見ていた。

「まさかカザリがガメルとメズールのコアメダルを吸収するとは・・・あれがあいつの言っていた『進化』か」

俺達の戦いを最後まで見ていたウヴァは人間態へと変わり後ろを振り返る。

「・・・俺はそんな方法を使わずに・・・・俺なりに進化してやる。・・・それにしてもカザリと一緒にいた6人は何者だ？ヤミーでもないのにカザリに仕えているなど・・・」

ウヴァはそういい残すと逃げるようにその場から走り去っていった。・・・俺は知るよしもなかったが、この出来事がウヴァがのちに記憶の力を使うキッカケになった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ようやく帰ってきたかキンジ」
カタカタ！

あの戦いで始末書を書かされて遅くなり午後６時過ぎ、俺達が部屋に入るとノブナガが俺のパソコンで何かをやっていた。・・・つーか昨日まで記憶喪失だったのにもうキーボードをそんな速さで打てるのかよ。

「ノブナガ君、すごい速さでキーボードを打っているね。・・・あのスピード・・・情報科でも滅多にいないと思うよ」

マジか！？・・・そんなに素早くキーボードを打っているノブナガは何をやっているんだ？

「・・・ノブナガ。俺のパソコンで何をやっているんだ？」

「・・・株だ。・・・現代の世の有り様さえ分かればこの程度は容易い」

「株っ！？」

株ってマジかよ。・・・そんなん俺でもやったことはないぞ。破産しそうで怖いし・・・。

「現在はスマートブレインの株を5割と鴻上ファウンデーションの株を3割買い取った。もう3時間ほどでスマートブレインを完全に買い取ることができるはずだ」

おいおい、世界で最も強大な企業のスマートブレインをこんな短時間で買い取ろうとしているなんてどんなことをしたんだよ。

「ノブナガ・・・とりあえずその辺で止めてくれないか？・・・スマートブレインを倒産させたりしたら世界から睨まれる」

「・・・たしかに世の中全てを同時に敵に回すのは得策とは言えないな。・・・この辺で止めておこう」

ノブナガは俺の説得を理解してくれたようでとりあえず株を買うのを止めてくれた。

「まったく・・・ほっといたらこんなに色んな知識を覚えてやがって・・・・」

「キンちゃん。とりあえず夕食にしよう！」

「ん？ああ、そうだな」

この時の俺は・・・ノブナガの物覚えを深く気にしていなかった。

リロード3・進化（後書き）

今回の話を見てお気づきかもしれませんが・・・カザリとウヴァは原作とはやや違う進化を遂げる予定です。

・・・それはさておき明日と明後日の更新ももしかしたら進路のことでできないかもしれません。・・・とりあえず可能な限りは更新を頑張ってみます。

リロード４・粉雪と初花（前書き）

物語の都合上、もうしばらくアリアに出番はありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード４・粉雪と初花

カザリとの戦闘があってから翌日のこと、ノブナガは株で稼いだお金で「織田信長が使っていた茶入れを買う」と言ってどこかに出かけてしまったがとりあえず心配ないだろうと思い、俺とアンクと白雪は単位を稼ぐために掲示板を確認してみるが・・・

「依頼が・・・一通もない」

「なん・・・だと・・・？」

武偵高が斡旋する緊急依頼はすべて売り切れで単位が本当に大ピンチだった。

「キンジ！情報科だ！民間の仕事を探してみるぞ！」

「あ、ああ！そうだな！」

夜遅くまで情報科にこもって依頼を探してみるが俺達の単位になりそうな依頼のだいたいはプロの武偵が請け負い済みだった。

「まずいな・・・本格的に」

俺達は引き続き自室のパソコンで検索してみようということで男子寮に戻った。・・・そこで更なる問題が待ち受けているとも知らずに・・・。

「・・・・？」

蛍光灯の下、部屋の前で俺達を向かえた後ろ姿は五芒星の家紋が入った風呂敷包みを背負い赤い唐傘を日傘にした黒髪セミロングの白雪が・・・もう1人？・・・いや、白雪を小型化したような巫女装束の少女がそこにいたのだ。

「・・・キンジ・・・アイツは何者だ？・・・限りなく嫌な予感がする」

アンクは小刻みにガクガクと震えていた。・・・この反応は白雪にしかしないはずなのにどうしたんだ？

「やはり私の悪い予感は当たっていたのですね」

くるり

振り返った少女はいきなり俺とアンクを睨みつけてきた。パッツン前髪も白雪と一緒だが、その下の目つきはややキツメだな。・・・・何か俺達のことを知っているみたいだが・・・誰だっけこの子？

「粉雪！？」

俺の隣に立っていた白雪が驚きの声を上げる。

「こな・・・ゆき?・・・ああ!」

あの粉雪ちゃんか!星伽神社にいた白雪の妹の!俺は記憶を頼りに白雪の妹達を思い出す。霧雪、華雪、風雪・・・白雪の妹はみんな白雪にそっくりなので年かさで分けるぐらいしかできなかったが、粉雪だけは義理の妹で顔つきや行動パターンが違った。・・・たしか物凄いお姉ちゃんっ子でいつも白雪に付いてきていたな。

「粉雪か!たしか俺達とは2歳下だから今は中3か!」

「・・・・・」

スタスタ

「・・・あれ?」

俺は親戚の叔父さんみたいなノリで粉雪に話しかけると・・・見事にスルーされた。そして粉雪は白雪の右腕をぐぐいと抱いた。

「やっぱりお姉様は私が『托』で予見した通り、悪しき学校で魔性の武偵にして、欲望の王でもある遠山様に誑かされているのです!」

『托』・・・それはたしか内容が知りたいこととは限らない不便な術で、十代前半ぐらいが使う術って前に白雪が言っていたな。・・・俺がそのことを思い出していると粉雪は再び俺を睨みつけてくる。

「こんな夜遅くまで男性と共に行動するなんて、お姉様は不衛生です!あ、あんなに清廉で星伽の鏡とまで言われていたお姉様が・・・よりにもよって男性方と・・・夜遅くに!」

夜遅くにって・・・まだ夜の9時だぞ?

「キンジ・・・このさらに凶暴っぽい星伽の巫女らしくない星伽の巫女は誰だ?」

「あぁ、この子は星伽粉雪。白雪の妹の一人だ」

俺がアンクに粉雪のことを説明してやると・・・粉雪は次にアンクを睨んだ。

「金髪にだらしない服装・・・不衛生です!!」

「ハァ!?何だコイツ?」

まぁ・・・たしかに星伽の巫女から見たら日本人のような見た目で金髪だったら不衛生だよな。

「星伽の門限は午後5時です!そして就寝は午後8時です!それが星伽の決まりです!」

午後5時って・・・今頃は小学生でも帰らない時間だぞ。

「ささ、お姉様。こんな者達の妄言に聞く耳を立ててはなりません。早くお部屋に入りましょう」

「ちょ、ちょっと粉雪?」

まどつくまかりの白雪を部屋に押し込んだ粉雪はベロを出すと引きまくりの俺達の方を振り返った。

「丑の刻参りにしてあげますわ」
ドン！　ガチャン

「「えっ？」」

そう言い残した粉雪は取っ手が曲がってしまいそうな勢いでドアを閉めると・・・内側から鍵までかけられる。

「あ、ここ・・・俺達の部屋なんだが・・・」

「・・・嫌な予感が当たっちまった」

こうして本来その部屋に住んでいるはずの俺達は・・・その場に取り残されてしまった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺達が部屋を追い出されてしまっている頃、ノブナガは鴻上ファウンデーションが経営している会場のオークションに参加していた。

「では、かつて織田信長が所有していた茶入『銘初花』・・・では５億から！」

「・・・２０億」

「２０億・・・ですか?」

数々の手が上がる中、ノブナガはいきなりとんでもない金額をいきなり上げてきたため、会場の人々どころか司会者ですら驚いた表情をみせる。そこにさらに鴻上のおっさんがさらにとんでもない金額を出した。

「３０億・・・３０億」

「・・・５５億」

ノブナガも負けじと金額を上げたため周囲の人々はこれ以上は出せないと諦める。するとおっさんはさらにとんでもない金額を出してきた。

「１００億」

「・・・・・初花は元々俺の物だ。貴様には渡さん。・・・その代わり・・・貴様の株の十数パーセントと俺の持ち株の全て・・・貴様にくれてやる」

「ほう!」

おっさんは立ち上がりながらそう言ってきたノブナガの近くまでやってくると・・・

「素晴らしいぃ!!初花のためなら持ち株を捧げる欲望!!気に入った!!」

「・・・・・・」

こうしてノブナガは初花を手に入れた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

本来はカードキーを使って部屋に入れるのだが・・・何やら2人で風呂に入るとか言っていたので俺とアンクは信司と秋山の部屋でカードゲームをやっていた。

「俺のターン!ドロー!ブルーアイズを召喚だ!」

「ちっ!?・・・このタイミングで引き当てるなんて・・・インチキでもしやがったか!」

「そんなことする訳ないだろ。・・・実力だ」

「・・・いくら部屋から追い出されたからって・・・俺達の部屋に押しかけてくんなよ。・・・サイクロンだ!」

「・・・城戸・・・お前も何だかんだでやってんじゃないか」

そんな風に俺達は1時間ほど潰して・・・俺とアンクはそろそろ良いかと思って部屋に戻ってみると・・・

「・・・邪魔するぜ」

「・・・・・っ！」

ギロッ！

いきなり粉雪に睨まれた。

「どうぞお入りください。ただし入室を許可するのは特別ですからね」

「・・・いや、ここは俺達の部屋なんだが・・・・」

「それと金髪。あなたは不衛生すぎるので入室はいけません」

「ふざけんな！！誰がお前の言うことなんて・・・・はい、分かりました。出て行きます」

何故か白雪と粉雪と同時に睨まれたアンクは素直に部屋を出て行った。・・・後で正太郎の所にアンクを泊めてやってくれってメールを送らないとな。

「遠山様はお姉様のご指示ですから特別に入れるのです」

「いやだから、ここは・・・」

「『男女、７歳にして部屋を同じくすべからず』です」

粉雪はそう言いながら顔をぷいっと背けると、白雪は手を合わせながら「ごめんね」とやってきた。・・・そういえば思い出したが・・・星伽神社はかなり徹底した男子禁制の神社だった。なので遠山

家だけあって特別に許可をされている俺と兄さんが初めて訪れた時はみんな恐々と接していたことも何となく覚えている。・・・しかしみんな子供同士なのですぐに打ち解けたが・・・粉雪だけは最後まで俺達を物陰からビクビクと見ていて笑顔を見せることなんて１度もなかったな。・・・簡単にいえば男嫌いなんだろうな。ヒステリアのこともあって女嫌いな俺と魔逆で・・・。

「それでねキンちゃん！半日で０，３単位もらえるお仕事が見つかったよ」

「本当か？」

笑顔で白雪がそう言ってくると・・・俺は粉雪に睨まれながらも返事をした。

「うん！教務科に確認したらどの科目でも単位として認めるんだって」

それは嬉しいことだな。

「それで？・・・それはどんな仕事なんだ？」

「入学希望者の依頼を受けた形にして・・・粉雪に武偵高を案内するの」

粉雪に武偵高案内だと！？

「粉雪。お前まさか武偵高に進学するのか？」

「違います！武偵なんか大っ嫌いです。ここはお姉様が星伽を出る

原因になったばしょですから」

粉雪はそういうとテレビのデパートの買い物シーンに釘付けになった。・・・すると白雪は粉雪に聞こえないようにコソコソと俺の耳元で話しかけてくる。

「キンちゃん。あのね、粉雪は星伽からの伝言を届けに来たんだけど、できそうならば私を星伽に連れ帰そうとしているの。だから武偵高ってどんな所なのか・・・少なくとも悪いところじゃないってあの子にも理解させた方が・・・ごめんね。私の事情も絡めちゃって」

ふむ、つまりこの話。白雪の役にも立てるってことか。・・・入院中お世話になったし、借りを返せるから一石二鳥だな。

「じゃあやらせてもらうぞ粉雪。明日の午前中、付き合ってもらえるな」

「はい。これはお姉様のご命令ですから。私はお姉様のご命令とあればどんなことでも・・・」

まさかこの依頼があんなにめんどくさいとは思ってもいなかった。・・・という訳でもなくこの時点でなんとなく分かっていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「まさかドクター真木が造ったといっていた人造グリードである君が我が鴻上ファウンデーションの乗っ取りをしようとしていたとはね。・・・・いやぁ、あぶなかった」

「・・・いずれ手に入れる。・・・俺が欲しいのはこの世にある全ての物・・・・天下だ」

「ふっふっふっ！まさにブラボゥだな。・・・君のそんな欲望に経緯を評し、プレゼントをあげよう」

「こちらです」

おっさんの合図でやや大きな箱を運んできた里中さんはノブナガの前でその蓋を開けた。・・・その中には伊達さんの持っているバースのベルトと同じ物が入っていた。

「これは？」

「仮面ライダーバース・プロトタイプ。・・・通称、プロトバースのベルトの『バースドライバー』だ。・・・いわば現代の鎧といったところだ。・・・巨大な欲望の塊である君がその欲望の力をどのように使うか・・・私に見せてくれ」

こうしてノブナガは仮面戦士の力を持つ事となった。

リロード４・粉雪と初花（後書き）

粉雪のストーリーはもう2話ぐらい続きます。・・・一応怪人も登場しますが・・・映画のように恐竜ヤミーが登場するわけではありません。

リロード5・武偵高案内（前書き）

昨日はまたもや更新できなくて申し訳ございません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード5・武偵高案内

俺が粉雪に武偵高の見学をしてやることが決まった頃、アンクは正太郎の部屋に転がり込んで単位になりそうな仕事を探してもらっていた。

「アンク！あったぞ！単位になりそうな仕事！」

「どんな依頼だ？」

アンクが正太郎のパソコンの画面を覗き込むと、画面には俺達がこの前見た鎧武者怪人の写真が写っていた。

「これは・・・あの時の顔無しだな」

「女子寮にいる陽に情報を集めてもらったんだが・・・この怪人はここ数日、いきなり現れては『俺を殺したのはお前か？』とか言って襲い掛かってくるらしいんだ。それもかなりの強さらしくて探偵科や情報科の戦闘力じゃ辛いらしいから強襲科や仮面戦士科の生徒にも調査を手伝ってほしいって依頼だ。・・・本来は明日掲示板に貼り出されるらしいんだが・・・陽と同室のジャンヌも頑張ってくれた」

「・・・助かる。後で俺がアイスを奢ってやるとライトとジャンヌに伝えとけ。おいリュウ！勝負だ！」

「ふん、いいだろう。相手になってやる」

とりあえず一安心した様子のアンクはソファーに座ると同室の照井を呼んでカードゲームを始めた。

「アイスって・・・キンジの話じゃ、お前の財布の中身は空っぽだろ?・・・アイスとかカードの買い過ぎで・・・」

「・・・キンジの金でアイスを奢る」

「アンク・・・お前にはヒモの才能があると思う」

そんなこんなで・・・俺も単位稼ぎの仕事を見つけたようにアンクも自分の仕事を見つけていた。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

武偵高の施設は何気に充実している。着工時は羽田空港の増設滑走路にする予定だった人口浮島はとにかく広く、武偵庁や武偵企業、それに鴻上ファウンデーションなどからかなりの投資がある。さらには各科目には様々な特典のようなものがあって、車輌科では１５歳で普通自動車の免許を取ることができるし、情報科や通信科では最新型のパソコンや携帯を支給される。最近ではライドベンダーやセルメダルも学校に提供されていたしな。・・・だからこそ武偵高の見学をした中学校の生徒は、そこを気に入ってくれるはずなんだが・・・

「・・・・・」

翌朝、さっそく『武偵高案内』を粉雪にしてみるも・・・ずっと不機嫌な様子だった。超能力研究科（ＳＳＨ）だけは白雪が所属しているだけあって少しだけ興味を抱いてくれたが、他の学科ではムッツリしたままだった。・・・そもそも俺＝男と歩くこと自体が嫌そうだがな。そもそも俺だって仕事じゃなきゃ女の子と歩くのはいやだぞ。・・・ヒステリアの問題もあるし、あらぬウワサを立てられそうだし。

「ここが多国籍料理をやっている第3食堂のクスクシエだ」

ガチャ

俺がクスクシエの扉を開くと・・・この店では珍しいピリピリとしたムードが漂っていた。奥を見ると天道と鑑の座る向かいに天道が自分の妹だと写真を見せてきた1年の通信科の生徒の‘天道ひより’が座っていた。・・・緊迫した雰囲気に呑まれてしまった俺と粉雪はその状況をその場で黙って見ていた。

「お兄ちゃん。・・・前から言おうと思っていたのに言えなかったから・・・今、言わせてもらう。・・・実はボク・・・彼氏ができたんだ」

「なっ!?・・・前々からウワサに聞いていてもしやと思っていたが・・・とうとうこの日が来たか。・・・どこのどいつだ!!どんな奴だ!!ええい面倒だ!今すぐここにつれて来いっ!!」

「・・・お前の隣にいるぞ」

天道は「何？」と呟くと鑑とは反対側を見る。・・・天道の隣といったら明らかに鑑なのに認めようとしないなんて・・・アイツほんとシスコンだよな。

「おいおいひより。幾らお兄ちゃんでもエア彼氏はどうかとどうかと思うぞ？」

「そんな訳あるか！鑑先輩だ！」

「なっ！？・・・うわぁぁぁぁぁっぁ！？信じてたまるかぁぁぁぁぁ！！」

天道はひよりの言葉に絶叫すると・・・もう普段のあいつはどんなのか忘れてしまいそうなほどの暴走状態で店を出て行った。

「・・・つ、次に行くぞ」

「は、はい・・・」

見なかったことにしよう。・・・うん。そうしよう。

とりあえずどんどんとリアクションをしてくれない粉雪に紹介し、残すはあと2箇所となった。

「・・・後は強襲科と仮面戦士科だな」

あの2つは一層の警戒が必要だな。・・・特に仮面戦士科は異常なほどの男子率・・・というか男子しかいないし。・・・俺はとりあえず先に強襲科に粉雪を案内した。

「粉雪。ここでは足元に気をつけろよ。慣れれば蹴散らして進めるようになるが、ここにはいつも空薬莢が散らかっているせいで見学に来た中学生はよく転ぶんだ」

俺はそう言いつつ黒い体育館みたいな場所の扉を開くと・・・

「死ねぇ！」

「それはお前だぁ！！」

5人ぐらいの1年の生徒が軽装のA装備で殴り合っていた。・・・残念ながらこれが強襲科の日常だ。

「うわぁ～・・・・・」

隣の粉雪を見ると案の定その男子生徒を見て眉を寄せていた。心底汚らわしいものを見たような顔だ。

「あれは・・・訓練の一環だ」

とりあえず苦しい言い訳を粉雪に告げると、俺は扉を閉めて仮面戦士科に向かった。・・・まぁ、あそこならここよりは大丈夫なはず・・・

「ここが俺の所属している仮面戦士科だ」

ガチャ！

「イクササ～イズ！俺は正しい。ついてきなさ～い！」

「・・・・・」

バタン

俺は静かに開きかけた扉を閉めた。・・・何だろうか。・・・今、明らかに何か怪しい声が聞こえてきたような気がするぞ。

「どうかなさいましたか遠山様？」

「い、いや！？何でもないぞ！」

さっきのは幻聴。・・・そう、幻聴なんだ。・・・そう信じて扉を開けてみると・・・

「巻きなさ～い。巻きなさ～い。変身ベルトを巻きなさい」

「・・・やっぱりか」

先ほどのは、やはり幻聴ではなったようで名護先輩が何人かの生徒と共に怪しげなストレッチを行っていた。

「何ですかあれは？」

粉雪の哀れな視線に気づいた俺は咄嗟に・・・

「準備体操だ！」

と言ってしまった。・・・仕方ないじゃんか。あんなのをどうや

って説明すればいいんだよ。・・・・そんなこんなで俺達は一応各科目の学科を周り終えた。

「・・・以上で見学は終了だ。どこか他に見ておきたい場所はあるか?」

「いえ、結構です。武偵高がいかに乱暴でふざけた場所なのかよく分かりましたから」

「えっ?探偵科とか情報科はまともな場所だっただろ?」

「いいえ。彼らも同じ穴のムジナです。そもそも金銭のために武力を用いる行為がそもそも卑しいものです。清廉たるお姉様がこのような場所にいるなんて・・・私には耐え難いことです」

「・・・・・・」

武偵はこういう偏見を持たれ易いのは分かっている。・・・分かってはいるが・・・ここで頑張っている奴らのことを考えるとどこか腑に落ちない。

「金銭目的でやっている奴らも少なからずいるが・・・ほとんどがみんなの命を守るために武偵をやっているんだ。・・・さっきの言葉は取り消してくれないか?」

俺が少し反論すると・・・粉雪はただでさえつり目気味な眼をさらに吊り上げる。

「いいえ!取り消しません!聞くところによると、ここ最近では武偵高の生徒からの欲望でヤミーが作られたいいます!そんな欲望渦

巻くところにお姉様をいさせたくありません！」

たしかに粉雪の言う通りだ。ここ最近は草加を始まりにして武偵高生徒の欲望で数々のヤミーが誕生してしまっている。・・・粉雪には言い難いが・・・残念ながら白雪もその1人だった。

「みんな好きで自分の欲望をヤミーにしている訳じゃないんだぞ？」

「そんなことはどうでもいいのですっ！！とにかく私は・・・武偵が、武偵が大っ嫌いなのです！武偵高のせいでお姉様は星伽を出て行ってしまい・・・私には分かります。武偵の遠山様に誑かされたせいで、帰ってこなくなってしまったのですから！」

粉雪の子供っぽい理屈を聞き、俺はようやく粉雪の真意を理解した。・・・粉雪はただ八つ当たりをしているだけなんだ。憧れの姉さんである白雪が星伽を出て行ってしまい、そのことで白雪を怒る訳にもいかなかったので、怒りの矛先を武偵高や武偵に向けていたんだな。

「・・・粉雪の言いたいことはだいたい分かった。・・・たしかに武偵高はドロドロの欲望まみれだ。でもな・・・どんな奴にも欲望ってものは必ずあるもんなんだ。・・・と言ったところで・・・帰るぞ。忘れ物はないな？」

粉雪は「さすがは欲望の王。・・・欲望についての説得は流石ですね」と明らかに俺に聞こえるように言うとスタスタと去ろうとしたが、その途中で何かを思い出したかにように振り返った。

「遠山様。そう言えばお伝えすることがありました」

「なんだよ?」

「実は昨日、遠山様についての『托』が降りました。星伽の巫女の義務で一昼夜の内にお伝えしなければいけないので・・・唐突ですが、今お伝えします」

不機嫌そうな粉雪に、俺は振り返った。

「『托』・・・占いのことだよな。・・・どんなことだ?怖いことなら聞きたくはないんだが・・・」

「いえ、吉兆の一つです」

何か恥ずかしい話なのか、粉雪は俺を視線から外しながら告げてきた。

「遠山様は求婚されます。・・・今月中に」

きゅ・・・求婚?・・・プロポーズのことか?・・・本当にいきなりだな。

「だ、誰にだよ?」

俺はそんなことをしてきそうな人物を2~3人思い浮かべる。

「それは分かりませんが少なくともお姉様でないことは確かです」

脳内で浮かんでいた1人の顔が消えた。

「分からないって無責任だな。・・・それ以前に日本の法律では男

性は１８歳以上じゃないと結婚できないんだぞ。その『托』はハズレだ」

「そんなはずはありません！私の『托』はお姉様の『占』ほどではありませんが的中するのです！それをせっかく教えてあげたのに疑う事、罷りなりませんよ！」

粉雪はそう言いながら俺に詰め寄ってくる。しかも手つきから分かるが服の下に短刀を隠しているっぽいぞ。・・・すると仮面戦士科の誰かが落としたセルメダルを踏んでしまい・・・

「きゃあ！？」

こっちに倒れこんで来た。

「あぶねぇ！！」

俺は咄嗟にその短刀でケガをしないようにと、出しかけていた短刀を右手で押さえると・・・

どたんっ！

２人で身をよじるようにして倒れてしまった。

「・・・・っ！？」

短刀は掴んで止めたので問題なかったが・・・俺の手が粉雪のサマーセーターとブラウスを短刀でたくし上げてしまっていた。眼下には意外にも今時の下着が丸見えになってしまっている。

「っ！」

俺は慌てて粉雪から離れる。・・・いかん。・・・中学生の下着でヒステリアになってしまったら粉雪に一生モノのトラウマを与えかねないぞ。・・・俺は何度か深呼吸して自分を落ち着かせる。・・・どうやらヒステリアの血流は大丈夫らしい。たぶん平賀さんでヒスりにくいのと同じ原理だろうな。

「と、遠山様は最低です！最低に不衛生です！これで心の底から分かりました！遠山様に乱暴されて分かりました！やはりこんな場所にお姉様は一刻もはやく帰すよう、星伽にご進言しますっ！」

すぐさま俺から２０メートルほど離れた粉雪は先ほどの短刀をブンブン振りながら叫んでくる。・・・すまん白雪。・・・もしかしたらお前は本当に星伽に連れ帰されるかもしれない。そう思いながらも俺は今回の見学のレポートを書かないといけないので粉雪を先に帰らせた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

俺がレポートを書き始めた頃、男子生徒が何人も乗っているバスに乗るのが嫌そうだった粉雪は徒歩で俺の部屋に向かっていた。

「まったく！遠山様はやはり欲望の王ですっ！」

その帰り道、粉雪はずっと俺の悪口を呟いている様子だった。

「お姉様を絶対に星伽に連れ戻さないと・・・」

「なら・・・その欲望を開放しなよ」

「えっ？」

チャリン

突如聞こえた何者かの声に粉雪が振り返ると、怪人態のカザリが1枚のセルメダルを粉雪の額に出現した投入口に投げ入れた。

「まさか・・・グリードのカザ・・・うっ！？」

「・・・連れ戻す・・・お姉さまをぉぉぉ」」

粉雪から出てきた白ヤミーはそのように叫ぶと何処かに走っていった。

「さぁて・・・あのヤミーはどんな風に育ってくれるのかな？」

「お、おのれグリード！」

チャキ！

粉雪は短刀を抜いてカザリに向けるも微かに短刀を握る手が震えていた。

「それにしてもあれだね。現代の星伽の巫女は欲望も大きくなっているから潰しやすそうだね」

「黙れ！！星伽を侮辱するなぁぁ！！」

「ふふ、殺しはしないよ。・・・殺したらヤミーが成長しないからね」

ドスッ

そう呟いたカザリは粉雪の短刀をスッと避けると腹にパンチを決めて粉雪の意識を刈り取った。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

粉雪がカザリと接触してから３０分後。・・・粉雪の欲望から作られた白ヤミーは武偵高の入り口の前までやって来ていた。

「姉さまぁ・・・姉さまぁ」

「・・・お前がヤミーと呼ばれる怪人か？」

そしてその場にはバースのベルトを持ったノブナガが立っていた。

「金で雇った傭兵を町中に配置して見張らせるのは正解だったな。・・・では・・・出陣させて貰おう」

ノブナガはベルトを腰に巻くとセルメダルを1枚取り出す。

「変身！」

チャリーン！　カポーン

セルメダルをベルトに入れて黄緑の光に包まれたノブナガは、伊達さんの変身する‘仮面ライダーバース’にそっくりだが所々に赤いラインがついている仮面戦士に変わった。

「仮面ライダーバース・プロトタイプ。・・・参る」

ガチャ！

ノブナガの変身したプロトバースはバースバスターを持ちながらゆっくり白ヤミーに近づき始めた。

リロード5・武偵高案内（後書き）

次回は初の合成ヤミーの登場させたいと思います。

リロード6・汚れた欲望（前書き）

予想以上にフォーゼが面白くてよかったと思います！ああいうバカな熱血漢タイプの主人公は久々だから結構好感を持てました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

「うっ？・・・ここは？」

「・・・気がついたんだ」

俺がレポートを書き終えてそろそろ帰ろうとしている頃、粉雪はカザリによってどこかの倉庫に閉じ込められて鎖で鉄柱に縛られていた。

「さっきも言ってたけど・・・現代の星伽は本当に欲望に忠実だね」

「そ、そんなことありません！！・・・私はたしかに未熟ですが・・・私以外の星伽がヤミーを作り出してしまうような欲望があるはずありません！！」

粉雪の言葉でカザリはある事に気づいてしまった。

「あれ？・・・君はもしかして知らないのかな？」

「・・・なにをですか？」

「あの武偵高に通っている星伽も欲望に呑まれてヤミーを作ったことだよ」

カザリは言ってしまった。・・・俺が粉雪に最も伝えたくなかった事実を・・・。

「えっ！？・・・そ、そんなはずはありません！お姉様が・・・そ

んなまさか！・・・・グリードめ。私を惑わそうとしてもそうはいきません！」

「事実だよ。だからさっきから星伽のことを話しているんじゃないか」

「嘘です！嘘です！嘘です！そんなこと・・・・信じません！お姉様は優秀なお方なんです！！そんなことになるのは武偵高のせい・・・そうだ。・・・お姉様を早く連れ帰さないと・・・」

カザリの話術によって・・・粉雪の欲望はさらに加速し始めた。

・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

粉雪がカザリの話術に誑かせ始めた頃、プロトバースと粉雪の欲望から生まれた白ヤミーの戦いがいよいよ始まった。

「・・・フンッ！」
バンッ！　ドカッ

「・・・・ヴォ！？」

プロトバースは右手に持つバースバスターでゼロ距離射撃をするとすぐさま左手で殴りつける。

「うう、お姉さまぁ・・・」

白ヤミーの異変に気づいたプロトバースは一旦距離を取ると・・・
白ヤミーの姿は全体的にはジャガーの怪人だが、ジャガーの顔の下に蛸の触手があり、右手が蛸の触手のソードになっているヤミーに変わった。

「・・・さしずめタコジャガーヤミー・・・と言ったところか。・・・まあいい。構わず倒すだけだ」
ババババババッ！

プロトバースは走って近づきながらバースバスターを連射すると、タコジャガーヤミーの手前でジャンプをする。

「ハァッ！」
ドカッ！

「アウッ！？」

そのままプロトバースはタコジャガーヤミーに跳び蹴りを決めるが・・・ダメージを受けたような反応はするが倒せるほどのダメージはなかった。

「・・・やはり人の身のように柔な身体ではないか。・・・ならば・・・」
チャリン！
『クレーンアーム』

バースバスターを左に持ち替えてクレーンアームを装着したプロトバースはその先端をタコジャガーヤミーに向かって放つ。

「なんのぉ！」
ガギンッ！
タコジャガーヤミーは右手の触手ソードでそれを弾くが・・・プロトバースはそれを狙っていたようで・・・
「フンッ！」
ロープのように伸びたクレーンアームの先端でタコジャガーヤミーを巻きつけた。
「こんなことをしている場合では・・・お姉さまぁぁぁ！？」
ぐいっ！
両腕を使えない状態のタコジャガーヤミーはそれでも欲望の通りに動こうと力ずくで動き出してプロトバースは引きずられ始めた。
「何っ！？」
「お姉さまぁぁぁぁぁ！？お姉さまぁぁぁぁぁぁ！？」
「くっ！？」
ガチャ！
タコジャガーヤミーのあまりの強引なパワーで引きずられ始めたプロトバースはバースバスターを構えるも引きずられているせいで標準が定まらなかった。
「・・・仕方ない」

プロトバースはクレーンアームの武装を解除してタコジャガーヤミーから離れると・・・タコジャガーヤミーはそのまま何処かに走り去ってしまった。

『タカカン』
『タコカン』

「追え・・・」

変身を解除したノブナガはタカカンとタコカンにタコジャガーヤミーの追跡をさせた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

午後7時を廻った頃、ようやく俺はレポートを終えて自室へ帰って来た。

「ただいま～」

「おかえりなさいキンちゃん！・・・あれ？粉雪は一緒じゃないの？」

「粉雪？先に帰したはずだぞ？」

粉雪に限って迷子になったり寄り道をして帰るなんてことは無さそうだし・・・念のため探してくるか。

「・・・白雪。俺、ちょっと探してくる」

「あ、待って。私も行くよ」

俺と白雪は門限は午後5時と言っていたのになかなか帰ってこない粉雪を探しに行った。

俺達は手分けして寮から学校までのルートを探してみたが・・・粉雪の姿はどこにも見当たらなかった。

「キンちゃん。いた？」

「いや・・・カンドロイドも何体か飛ばしているけど未だに見つかっていない」

白雪は不安そうな表情で俯いてしまった。・・・何か見つける手がかりか何かさえあればいいんだが・・・。そんな時、上空に1体のタカカンが通りすがった。

『P～！』

「あれは・・・」

「やっと見つけましたお姉さまぁぁぁっ！！」

「「えっ？」」

怪しげな声がしたのでその方向を振り向いてみると、タコとジャガーが交じり合ったような怪人が目の前に立っていた。特徴からして・・・カザリのヤミーにメズールのヤミーが混ざったような怪人だな。だとすると見た目から判断してタコジャガーヤミーだな。

「白雪・・・下がってろ」

俺は腰にベルトをつけてタトバのメダルを入れて変身しようとしていると・・・タコジャガーヤミーはおかしなことを言い始めた。

「お姉さま！一緒に帰りましょう！」

え？何言ってんのこの怪人？・・・白雪をお姉さまって・・・。

「えっ？私には怪人の妹なんていません！」

ブンッ！

「アウッ！」

白雪は問答無用と言った感じに近づいて来たタコジャガーヤミーに刀を振りかざすと・・・タコジャガーヤミーはその攻撃を避けることも止めることもせずに普通に喰らった。

「お姉さまの剣術・・・やっぱり素晴らしいです！」

本当に何なんだろうこの怪人。・・・鏡水並みに気持ち悪いぞ。

「さぁ、武偵高なんかじゃなくて星伽に帰りましょう！」

「っ！？」

俺はタコジャガーヤミーの一言でようやくこいつの目的とヤミーの『親』が分かった。・・・こいつの『親』はおそらく粉雪だ。粉雪の‘白雪を星伽に連れ戻したい’っていう想いが欲望にされたんだ。・・・隣を見ると白雪もそのことに気づいた様子だ。

「キンちゃん。・・・やっぱり私は星伽に帰ったほうがいいのかな？」

「・・・別に帰らなくてもいいと思うぞ白雪。たしかにそれが粉雪のためになるとも言えるが・・・それが本当にお前のしたいことのか？」

少なくとも・・・今の白雪の表情を見るとそうは思えない。

「お前が本当にここにいたいって言うんなら・・・きっと粉雪も分かってくれると思うぞ」

「キンちゃん・・・・」

「さてと・・・このヤミーを倒して粉雪を探さないとな」

「なんだ？人捜しをしているのか？」

「「っ？」」

声に反応して振り返ると・・・後ろにはバースのベルトをつけてバースバスターを持ったノブナガが立っていた。

「・・・ならばここは俺に任せて捜しに行って来い。・・・変身！」

カポーン

ノブナガはバースの所々に赤いラインが入った仮面戦士に変身した。

「ノブナガ・・・その姿は何なんだ?」

「仮面ライダーバース・プロトタイプ。通称プロトバース。・・・装備は本来のバースよりも少ないらしいが・・・身体能力は同じらしい。・・・鴻上から譲り受けた」

おっさんがノブナガにくれたのか。・・・なんか裏がありそうだけど今は助かるな。

「俺の放った鷹のカラクリがヤミーの親らしき人物を発見した。ここから南西に１０キロほど行った工場だ。グリードに捕らえられているので注意しろ」

「分かった。いくぞ白雪！」

「うん！」

チャリン！

俺は近くのライドベンダーをバイクモードにすると後ろに白雪を乗せてノブナガから聞いた工場へと急いだ。

「待ってくださいお姉さまぁぁぁぁ！」

「・・・先ほどは逃がしてしまったが・・・今度は逃がさん」

チャリン！

『クレーンアーム』

ガシッ！

「ほげっ！？」

俺達を追いかけようとしたタコジャガーヤミーはプロトバースのクレーンアームに右脚を掴まれて勢いよく転倒する。

「邪魔しないでくださいっ！」

ドドドドドッ！

「フンッ！」

バンッ！　バンッ！

タコジャガーヤミーはタコ墨を爆弾にしたような攻撃を口から放つがプロトバースはすべてバースバスターで撃ち落した。

「天下を取るためには・・・お前らのようなヤミーは障害になるのでな。このまま決めさせてもらおう」

チャリン！

『ブレストキャノン』

クレーンアームでタコジャガーヤミーを掴んだままのプロトバースは近くにバースバスターを投げ捨てるとブレストキャノンを装備した。

チャリン！チャリン！
『セルバースト』

「滅しろ」
ゴオォォォォォォォォ！！

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ドオォォォォォン！！

プロトバースはクレーンアームで捕まえられて動けないタコジャガーヤミーにブレストキャノンの光線を浴びせた。

「やったか？」

クレーンアームとブレストキャノンの装備を解除したプロトバースは爆煙にゆっくり近づいてみると・・・・

「・・・・お姉さまぁぁ」

「・・・しぶとい奴め」

タコジャガーヤミーはセルメダルをボロボロこぼしながらも工場のほうを目指そうとしていた。

「見苦しい。・・・いい加減消えろ」
『セルバースト』

そのしぶとさを不快に思ったプロトバースはバースバスターのポッドを銃口にセットして強力なエネルギー弾を放とうとした瞬間・・

・・

「まださせないわよ」
ドカッ！

「何ッ！？」

チェーンソーを持った黒い革ジャンのような衣装をしたトカゲような顔の女性怪人に妨害させられた。

「お姉さまぁぁぁぁぁ！！」
ビュゥゥゥゥン！

その隙にその場から逃げ出したタコジャガーヤミーは俺達の後を追いかけるようにして工場へと音速で走っていった。

「貴様のせいで2度もあのヤミーを取り逃がしてしまった。・・・貴様は何者だ？」

「チェーンソーリザードよ。よろしくお願いねノブナガ様！」

「うつけ者め。・・・俺を小馬鹿にして無傷で帰れると思うなよ」

プロトバースの変身を解除したノブナガは禍々しいオーラを放ちながらその姿を怪人の姿へと変えた。

・・・・・・・

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「粉雪っ！！」

「ん？あぁ、思ったより早かったねオーズ」

俺と白雪はノブナガから聞いた工場に辿り着くと・・・そこには予想通りカザリが壁に寄りかかっていた。

「へぇ星伽の巫女も一緒なんだ。これはちょうどいいや。この子はヤミーの『親』以外にも使い道ができたよ」

「・・・カザリ。粉雪を開放しろ」

「別にいいよ。・・・ただし・・・君の持っている僕のコアメダル2枚と交換しよう」

カザリは粉雪と引き換えに俺の持つライオンとトラのコアメダルを要求してきた。

「・・・お姉様を連れ帰さないと・・・お姉様を連れ帰さないと・・・」

「粉雪・・・」

俺達がやってきたことに気づいていない様子で何度も同じ言葉を繰り返す粉雪を見た白雪は重苦しい表情で彼女を見つめた。・・・ヒステリアじゃない俺にどこまで粉雪を説得できるかは分からないけど・・・とりあえずやってみるか。

「粉雪！！」

「っ！？・・・遠山様・・・それにお姉様・・・」

俺が大声で叫んだことによって粉雪はようやく俺達の存在に気づいた。

「お姉様・・・こんな場所にいてはお姉様もいつか欲望に呑まれてしまいます！星伽に帰りましょう！」

涙目の粉雪は白雪に向かってそう叫ぶ。

「・・・粉雪。・・・それは白雪がそうした言っていったのか？」

「えっ？」

どうやら俺の質問が意外だった様子の粉雪はゆっくりとその目線を白雪から俺へと移した。

「たしかに白雪が星伽に帰ってきてほしいのはお前の願いだ。それに関してはゴチャゴチャと言うつもりはない。・・・だけどその願いのこと考えている内に白雪の気持ちを無視していたんじゃないか？」

「お姉様の・・・気持ち？」

俺が白雪の方を向くと、白雪は頷いて一歩前に出た。

「粉雪。私はこっちに残りたい。こっちに残って・・・武偵として

1人でも多くの人を助けてあげたいの」

「お姉様・・・・分かりました。お姉様がそのように仰るなら」

粉雪は納得した表情をするとカザリもゆっくりと前に出てきた。

「・・・そろそろどっちにするか決めた？」

「ああ！・・・俺の答えはこうだ！変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身するとトラクローを展開してカザリに構える。

「・・・そう。せっかく見逃してあげようと思っていたのに残念だったね！」

ブンッ！

「緋火星鶴幕！」

バッ！

カザリが爪を粉雪に振り下ろそうとした瞬間、白雪は燃える折り紙の鶴を数体放ち一瞬だけ注意を引き付ける。・・・その間に俺はトラクローで粉雪を縛っていた鎖を切った。

「粉雪は白雪と下がってろ！・・・後は俺がやる」

「わ、分かりました」

バシャァァァァッ！！

「あ～あ。せっかくの人質が獲られちゃやる気がなくなっちゃった。・・・僕はもう帰るから合成ヤミーと遊んでみてね」

「お姉さまぁぁぁぁぁ！！」

ドカァァン！

白雪と粉雪を下がらせたタイミングでカザリもメズールの能力で高圧水流で鶴を消化すると人間態に姿を変えて外に出て行った。そしてカザリとすれ違いで扉をぶち壊してタコジャガーヤミーが入ってきた。

「あれが私の欲望から誕生したヤミー・・・」

自分の欲望から誕生したヤミーを見た粉雪はどこか辛そうな表情を見せた。・・・仕方ないよな。あんなにヤミーを嫌っていたのに自分の願いからヤミーが作られちまったんだから・・・。

「粉雪・・・欲望ってのは何も汚れたものばっかじゃない。純粋な願いだって言い様によっちゃ欲望なんだ。・・・お前は白雪が大好きだから帰ってきてほしいって思ったんだろ?俺はその願いを汚れた欲望だとは思わないぜ」

そう粉雪に伝えた俺はタコジャガーヤミーに向かって駆け出すとトラクローを振りかざした。

リロード６・汚れた欲望（後書き）

フォーゼはＴＶの方が１０話ぐらい進んでキャラを掴んだらこの物語にも登場させたいと思います。

リロード7・ひとひらの粉雪（前書き）

そろそろ物語もだいぶ進んできたので、怪人募集・幹部怪人版を行いたいと思います。応募された中の6体を幹部怪人としていずれ登場させたいと思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード7・ひとひらの粉雪

俺が鎖を切り裂いて粉雪を助け出した頃、以前出会った鎧武者怪人は何故かチェーンソーリザードと戦っていた。

「ハァァァァッ！」
ギィィィィン！

「・・・フンッ！」
ガギンッ！

「ハァッ！」
ズバッ！

鎧武者怪人はチェーンソーリザードの振りかざしてきたチェーンソーを刀で真っ二つにするとそのまま刀を振り上げるようにしてチェーンソーリザードを両断した。

「・・・さすがはかつて天下を取ろうとしただけあってお強いですね。・・・とりあえずあなた様をここに引き止めることは成功しま・・・し・・・た」
ドォォォォォォン！！

チェーンソーリザードが爆発すると・・・ちょうどそこにライドベンダーのバイクモードを運転して通りすがったアンクがやってきた。

「お前はこの前の・・・お前はいったい何者だっ！！」

「・・・・・・」

アンクが右腕を怪人態にして指をさすと、鎧武者怪人は無言で立ち去ろうとした。

「待ちやがれ！」

鎧武者怪人が曲がり角を曲がったのでアンクも追いかけてその場所を曲がると・・・

「・・・どうしたのだアンク？」

「・・・ノブナガ・・・どうしてお前がここにいるんだ？」

バースのベルトとバースバスターを持ったノブナガと出くわした。

「先ほどまでプロトバースの力を使い、ヤミーと戦っていた。・・・最も・・・先ほど取り逃がしてしまったがな」

「・・・そうか。・・・ところでこっちに鎧武者の姿をした顔無しの怪人が行ったはずなんだが・・・見かけなかったか？」

「・・・暗くてよく分からなかったが・・・それらしい影があちらに向かって行ったのは見えたぞ」

「・・・分かった！」

ノブナガは細い路地の方向を向くと・・・アンクは一瞬だけノブナガを怪しそうに睨みつけてから、細い路地へと走っていった。

「・・・嘘をついてすまないなアンク。・・・今、正体をお前達に知られてしまうと動きづらいのだ」

アンクが向かっていった細い路地を見つめていたノブナガは・・・何かを悔いるように小さな声で謝罪をしていた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「ハァァァッ！」
ガギンッ！

俺はトラクローをタコジャガーヤミーに切り掛かるが右手の触手のソードに止められた。

「お姉さまを連れ帰しますぅぅぅぅ！！」

「うわっ！？」

タコジャガーヤミーの想像以上のパワーに吹き飛ばされた俺はメダルホルダーを確認してこのヤミーに効きそうなメダルを考える。・・・その時に俺はカンガルーのメダルを視界に捉えた。・・・そういえばパンダのメダルはコアメダルじゃないはずなのにコアメダルのような使い方で使えたな。

「・・・どうなるのか分からないが・・・使ってみる価値はあるな」

俺はメダルホルダーからカンガルーのメダルを取り出すとトラのコアメダルをベルトから外してベルトをスキャンした。

『タカ！カンガルー！バッタ！』

黄色かったトラアームは茶色に近いカラーに変わって両手はボクシングのグローブのような物を装備した姿に変える。・・・なるほど。カンガルーのメダルを使ったらオーズはこうなるのか。

「さぁ、やってやるぜ！・・・セイッ！」

ドカッ！

「あうっ！？」

俺はカンガルーアームでチーターレッグとまではいかないが、かなりの速度でカマキリソードで攻撃した時並に強力なストレートを決めてやった。そしてさらに俺は追い討ちをかけるように連続で殴りつける。

「まだまだいくぜ！・・・オラララララッ！」

ドカッ！　ドカッ！　ドカッ！

「あべっ！？」

「これで・・・どうだっ！！」

ドカッ！

カンガルーアームの拳でタコジャガーヤミーにラッシュを決めた俺はトドメと言わんばかりにアッパーを決めて外に弾き飛ばす。

「うぅ・・・お姉さまぁぁぁぁ」

外でもがいているタコジャガーヤミーはあれほどのダメージを与えたはずなのにまだ立ち上がってくる。・・・粉雪はそんなに白雪を連れ戻したかったのかよ。・・・そう思った俺は後ろを振り返って白雪達の方を見る。

「粉雪・・・お前の願いから誕生したヤミー。このまま倒させてもらうぞ」

「はい。・・・他の人の気持ちを考えていなかった時の私の欲望。どうか退治してください遠山様」

「分かった。すぐに倒してやるからもう少し待っていてくれ」

とは言ってみたものの・・・今の俺じゃ正直言って亜種形態であのタフなヤミーを倒せそうにないな。・・・少し無理をしてみるか。

「堪えてくれよ・・・俺の身体」

俺はメダルホルダーから緑色の2枚のコアメダルを取り出すとタカのコアメダルとカンガルーのメダルをベルトから抜き取ってその2枚をセットしてオースキャナーでスキャンした。

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガ～タッ！ガッタガタッキリバガッタキリバッ！！』

「喰らいなさい虫けら！」

工場の外に出てからオーズ・ガタキリバコンボに変身するとタコジャガーヤミーが俺に向かってタコ墨みたいな爆弾を複数放ってきた。

「「「セヤッ！」」」
ドォォォン！

その爆弾を3人に分身した俺はカマキリソードで斬り裂き、工場のほうにあたらないようにする。そしてすぐさま俺はさらに分身をした。

「これで決める！」
『スキャニングチャージ！』

『『『スキャニングチャージ！』』』

最大人数の５０人に分身するのはさすがに負担なので、３０人で分身をやめておいた俺はこれ以上コンボで戦っているのもつらいのでそろそろ決めようとメダルを再スキャンする。

「セイヤァァァァァッ！！」

「「「セイヤッァァァァァ！！」」」
ドドドドドドッ！

「わぁぁぁぁあ！？お姉さまぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ドオォォォォォォォン！！

３０人のガタキリバキックを喰らったタコジャガーヤミーはさすがに耐え切れずに爆発してセルメダルとなり散らばった。

「ハァ・・・ハァ・・・やっぱり完治した訳じゃないからコンボはかなり・・・つらいな」

「キンちゃん！」

「遠山様！」

キックと同時に１人に戻って変身を解除した俺はふらふらしながらもこちらに駆け寄ってくる白雪と粉雪の方に歩いていった。・・・もしヒステリアモードで合成ヤミーと戦っていたのならコンボを使わなくても何とかなったかもしれないが・・・通常モードの俺じゃあコンボを使わないと勝てないかもな。・・・平賀さんにオーライインクロスに使うコンボ専用カンドロイドを早く完成させてもらった方がいいな。・・・そんなことを考えながら俺は白雪と共にせっかく星伽から来た粉雪に近くのデパートやカフェなどに案内してあげた。その時の粉雪の緊張したような顔は印象的だった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

翌日、俺の部屋に星伽の運転手を名乗る美人のお姉さんがやってきた。寮の車寄せを見下ろしてみると、そこにはテレビでしか見た

ことがない長いリムジンが停車していた。・・・さすが星伽。お金あるなぁ。

「粉雪。準備はいいのか？」

「はい、大丈夫です」

帰る準備をすっかり済ませた様子の粉雪は、おみやげなどで来たときよりも大きくなった風呂敷包みを運転手に渡すと玄関先で俺と白雪に折り目正しく三つ指をついた。

「逗留中、何から何までお世話になりました。遠山様、お姉様、ごきげんよう」

「あ、あぁ。粉雪も元気でな」

そうは言ってみたものの、このままではどこか収まりが悪いので結局車まで見送ることにした。そしてエレベーターを降りると、粉雪は微妙に速度を変えて俺に寄ってきた。

「遠山様。・・・このたびの私はお姉様が帰って来てほしいとばかり考えていて、遠山様に教えられるまではそのことに気づけませんでした。ありがとうございました」

粉雪はこっちを直視せずに少し赤くなりながら話しかけてきたので、俺も少し反応に困って「気にするな」の一言だけを言ってやった。

「それともう一つ。・・・お謝りすることがあります」

「謝る？」

「はい。私は武偵高と武偵を侮辱するようなことを言ってしまいました」

「あ、あぁ」

何だ。そのことか。・・・たしかにあの時は少しだけイラッときたけど・・・武偵高自体、誤解されてもおかしくないんだから気にしなくてよかったんだけどな。

「でも昨夜、私は認識を改めました。・・・まだ好きという気持ちにはなれませんが・・・今の世の中には、この仕事も必要になっているのだと・・・」

「そうか。まあ気が向いたらまた見学にでも来いよ」

できればそれでまた‘０，３単位’を稼がせてくれ。

「はい。また来ます。次は本当の『学園見学』に」

「本当の？」

「・・・お姉様は星伽に帰らないと仰るので、逆に考えたのです。それなら私がこちらにくればお姉様と一緒にいられるのではないかと」

俺は粉雪の言葉に顔を引きつらせていると、以外にもアンクも何やら小さな紙袋を持って粉雪の見送りにやってきていた。

「松川屋の焼き鳥だ。うまいから持っていけ」

「金髪・・・あなたを不衛生と思っていましたが、それは思い違いだったようですね」

どうやらアンクの誤解も解けたようで何よりだ。・・・お前が鶏肉渡すのは気にするけど。

「そう言えばまだあなたのお名前をお聞きしていませんでしたね。・・・あなたの名は？」

「・・・アンクだ。星伽なら知っているだろ」

その名前を聞いた粉雪は「えっ！？」と驚きの声を上げるとすぐさまアンクから遠ざかった。

「あ～。粉雪？・・・こいつは人間を襲うようなグリードじゃなくてだな・・・・」

「・・・・まぁ・・・遠山様がぞう仰るのならとりあえずは信じます。しかしアンク。もしあなたがお姉様にケガをさせるようなことをした場合・・・・どうなるか分かっていますよね」

「・・・・・・」

粉雪の恐ろしい形相に睨まれたアンクはすっごく引きつった顔をしながら冷や汗をボタボタと垂らしていた。

「とりあえず遠山様。今後とも何とぞよろしくお願いしますね！」

粉雪がこちらに視線を移したときに初めて、粉雪が初めて俺に笑

顔を向けてくれた。その笑顔はまるで・・・空から舞い降りてきたひとひらの粉雪のように、可憐で、愛らしい表情だった。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺が粉雪を見送っている頃、エヴィルの研究所では真木博士が2枚の黒いギジメダルを持ちながら人間態のカザリと話していた。

「どうでしたカザリ君。合成ヤミーと人造グリードの様子は・・・」

「うん。今回の合成ヤミーはいまいちだったけど、人造グリードの方はだいぶ順調だと思うよ。今月の終わりぐらいに残りの2枚のメダルを入れれば・・・ドクターの計画通り世界に終末を与えられるような怪物になるかもね」

俺がノブナガの事実を知ってしまうまで・・・あと15日の出来事だった。

リロード7・ひとひらの粉雪（後書き）

来週は更新を完全に停止しようと思うので今週はできる限り更新しようと思います。

リロード8・理子と野球とオフの姉貴（前書き）

幹部怪人候補は来週まで募集を続けてみます。最終的に決まるのは6体だけですが決まらなかった怪人も可能な限りは普通の怪人のように登場させようと思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード8・理子と野球とオフの姉貴

粉雪が星伽に帰った翌日。白雪が永田町の日枝神社に行くといって出かけたので現在は依頼が特にない俺とアンクはパソコンを起動して依頼を探そうとしていると・・・

ピンポーン

「っ？」

チャイムが鳴ったので玄関の方に向かった。・・・白雪か？

「どうした白雪、忘れ物か何かか？」

「荒ぶる理子のポーズ！」

玄関を開けてみると・・・両手を鶴のように上げて片膝を高くあげた理子が立っていた。

「・・・・・」

もうハートの眼帯はしてないな。呪いもちゃんと解けているようだ。・・・しかし俺は理子のこの行動にどのように反応してやればいいんだ？

「・・・教務科の掲示板を見たよ！きーくん大変だ！落ちこぼれは留年の危機だ！」

スルリと俺の脇を潜り抜けて理子が部屋に侵入すると、アンクは外

に出て行った。

「ん？どうしたんだアンク？」

「あぁ、ライトから『襲われている生徒の法則制が分かった』って連絡が来たんでちょっと出かけてくる」

ああ。そう言えばアンクは鎧武者怪人の追跡が仕事だったな。

「分かった。気をつけろよ」

「ああ、それじゃ・・・行ってくる」

アンクが陽の所へ向かって行ったので俺も理子の方に行ってみると・・・理子は冷蔵庫をあさっていた。

「あ～！トッポはっけ～ん！いっただきぃ！」

「・・・そんで何でお前はここに来たんだ？」

俺は呆れまじりのため息をした後に理子が俺の部屋にやってきた理由を聞いてみる。・・・さすがにお菓子を食いに来ただけじゃないだろ。

「うん。今日はねぇ、きーくんに依頼を持ってきてあげたんだ！」

理子はポッキーをボリボリ食べながら鞄の中からポスターを取り出すと俺に見せてきた。・・・そのポスターはどう見ても野球の絵。しかも何やら地区大会のポスターのようだ。

「野球？・・・何でだ？」

「あのねぇ。野球部の人達が遊びで手榴弾をバットで打ったら仮面戦士科の補習をしていた変身中のサバキ先生の顔面にヒットしてドーンっていったの。そしたら野球部は部活動2週間停止になっちゃってね。かわりに今度の大会に出場してくれる生徒を募集するってことになったの！」

あ～。なんて言う武偵高らしい理由だよ。・・・つーか変身した時のサバキ先生はどんだけ不幸なんだよ。すると理子は携帯を開いて新しく武偵高のサイトに表示された依頼を見せてきた。

「ここ見て！代理で出場して勝ったら1，2単位。負けても0，6単位だって！」

「おお！！」

たしかにそのサイトにはこの依頼の内容がついていた。俺の単位不足は0，7単位。勝てば一気にクリアできる。それにいずれ普通の生活に戻る予定の俺にとって今回の依頼はいいリハビリになりそうだ。

「よし！やってやるか！」

「きーくん！せっかく教えてあげたんだから何かご褒美をちょうだい！」

理子はソファーの上でドタバタと駄々っ子のように何かをねだって来た。

「何かって・・・何がほしいんだ？」

俺はラスとコーカサスのライダーシステムのおかげで少しだけ裕福になっている財布の中身を確認する。・・・できればオーラインクロスの改造のこともあって節約しときたいし高い物じゃなければいいな。

「そんじゃあ・・・理子といい事しよっ！」

「却下」

ブラドの件が終わった後の理子はやたらと俺に擦り寄るようになってきたする。・・・まぁヒステリア的なことでめんどくさいから深く考えたくはないが・・・。

「え～～！？今はアリアもゆきちゃんもいないんだから、理子をいっぱい可愛がって～。責任を取ってとかいわないから～。昨日の夜みたいに優しくぅ」

俺は昨日お前に何もしていないぞ。・・・それ以前に会ってもいない。そんなことを思ってると・・・後ろから殺気を感じたので振り返ってみると・・・・

「へぇ、しばらく放し飼いにしている隙にすぐこれなのね？このバカドレイは！」

「ア、アリア・・・・！？」

制服姿のアリアが仁王立ちで立っていた。しかもなんか物凄く顔を真っ赤にして歯ぎしりをしている。

「い、いつ帰って来たんだアリア・・・・って痛い!?耳がちぎれるだろ!?」

「さっき理子が駄々っ子をしていた頃からよ!ふ～ん昨日の夜ねぇ。あたしの目がないところでそんなことをしているのね～」

「お～!アリアが独占欲むき出しだ～!またそんなんじゃグリードにヤミーを作らされちゃうぞ!」

耳を引っ張りながら俺を睨みつけていたアリアを見た理子は嬉しそうに手を叩いて笑っていた。

「どどど、独占じゃないわよ!これはただしつけのなっていないドレイにお仕置きをしているだけ!」

「くふ。アリアはきーくんのことが好きなんだねぇ!」

「な、なんでそうなるのよ!!」

「だって～、好きな人にってイジワルしたくなるっていうじゃ～ん」

理子にそう言われたアリアはさらに赤面させたことでようやく気づいた。先ほど理子はアリアが室内に入ってきたことに気づくと、わざと駄々っ子のフリをして俺の注意を引きつけてイチャついたフリをしてアリアを怒らせたんだ。・・・本当にこいつ等仲が悪すぎだろ。

「この・・・バカ理子ぉぉぉぉ!!」

そして真実に気づいた時にはもう手遅れで・・・・アリアと理子の銃を使った喧嘩が俺の部屋で始まってしまっていた。・・・・節約しようとしてた矢先にこれかよ。本当に勘弁してください!!・・・・俺は心の中でそう叫んでいた。

そんなアリアと理子の問題を何とか（トラくんと一緒に）静めた俺は野球のメンバーを探しに運動神経が良い仮面戦士科に向かう途中、3年の仮面戦士科の藍川始（あいかわはじめ）さんに出会った。

「あれ?藍川さん?」

「・・・遠山か。今日はどうしたんだ?」

「はい。俺は野球部の代わりに試合に出ることになったんで参加してくれそうな奴を集めに来たんですよ。藍川さんはこれからどこに?」

見たところ運動着を詰め込んだ様子のバッグを持っているが・・・・どうしたんだろうな?

「依頼でインターンの女子バスケ部のコーチを3日間やってくれと依頼があってな。・・・女バスには天音ちゃんがいるんだ。俺が行かないで誰が行く!」

「えっ?でもそんな依頼を藍川さんが受けたら唯でさえ噂されているロリコン疑惑がさらに酷くなりますよ!?」

「・・・次にそんなことを言ってみろ。俺は貴様をムッコロス！・・・待ってろ天音ちゃん」

藍川さんは言葉では説明しにくい凄い顔で俺を怒鳴るとインターンの方へと走っていった。・・・どうか藍川さんがロリコン扱いされないことを祈っとこう。

「っと！・・・そんなことより野球のメンバーを集めないとな」

今回の野球の試合は正規の物なのでアリアや理子などの女子生徒は誘うことはできない。・・・あいつ等なら戦力になってくれそうだったんだがな。

「「ん？」」

そんなことを考えながら仮面戦士科の学科棟の前でうろうろしていると・・・何やら焦った様子の信司と出くわした。

「ちょうどよかったぜキンジ！一緒に野球しようぜ！お前もまだ単位が足りてないんだろ？」

「お前に単位不足のことを言われるのは何か嫌な気分になるが・・・・たしかに単位不足だし、それにこっちも野球をしようと思ってたしチームになってやる」

「しゃぁ！そうこなくっちゃな！」

ガッツポーズをした信司は誰かを当たるつもりなのか勢いよく仮面戦士科の学科棟の扉を開いて中に入っていく。

「誰にあたるつもりなんだ？」

「見てろよ！俺の素晴らしい人脈ですぐに残りのメンバーを集めてやる！」

そう言った信司は剣術の練習をしている秋山のところに向かっていく。

「煉！野球やろうぜ！」

「断る」

「そうだろ！煉ならそう言ってくれると・・・・ってえぇ！？」

信司は「そんなまさか！？」って顔をしながら固まってしまったので、俺はその辺に落ちていた‘バカ信司用’と書かれたハリセンで信司を叩いてやった。

「えっ？ちょっ！何でなんだよ煉！」

「・・・お前・・・俺がこの後１週間ほど実家に戻ると言っていたことを忘れたのか？」

「あ！・・・あ～。そんなことも言っていたな」

信司・・・お前ルームシェアの予定ぐらいちゃんと覚えておけよ。

「そういう訳だから遠山。こいつの世話を任せていいか？」

「ああ。しばらくこのバカの子守りを休んでゆっくりしてこいよ」

そう言う訳で秋山を誘うことは無理なのは分かった。

「そんで・・・お前が他に誘えそうな奴は誰なんだ？」

「・・・・いない」

「ハァ！？お前さっきまであんなに威勢よく人脈ですぐ集めるって言ってたじゃんか！」

「そう言えば俺の戦徒の亮太郎は姉さんと旅行って言って赤鬼達と沖縄に行ったし、天道はロンドンに豆腐を買いに行っちまったし・・・他の友達も実家に帰ったんだった」

そこまで来るとこいつの人脈はある意味さすがだな。

「まぁ・・・俺達の他に単位が足りないアンクと後藤も誘うと考えても最低あと5人は必要だな」

残りのメンバーはどうするかな？

「なら遠山！俺達も手伝うぞ！」

突然後ろからそんな声がしたので振り返ってみると・・・・

「剣崎！手伝ってくれるのか！」

剣崎が頷くと・・・さらに後ろに3人の人影がこちらにやってきた。

「水臭いじゃないですか先輩！僕も先輩のために手伝いますよ！」

「相棒・・・俺達を忘れていないか？」

「兄貴の相棒さんのためなら・・・あまり得意じゃない野球だってやるよ」

そしてさらに凍条と矢車兄弟が加わって一気に8人まで揃った。

「・・・お前の人脈すごいな。俺は1人も集めていないのにもう集めたじゃんかよ」

「まぁ・・・気にすんな」

俺は少しいじけてしまった信司の肩をかるくポンと叩きながらも試合の日時を確認する。・・・どうやら試合は1週間後らしいな。正太郎辺りを誘ってみるかな。

・・・

「そしてもう一つ分かったことは・・・・その家紋がすべて『明智光秀』の家紋にそっくりっていうことなんだ」

「なるほど・・・ん？」

アンクが2人から鎧武者怪人の話を聞いていると・・・どこかで見たような顔の女性がアンク達の方に歩いてきた。そしてその女性が近くにやってくると・・・正太郎と陽が驚きの表情をする。

「ちょっと夏休みってことで金一達に頼んで1人だけオフってことで帰ってきたわ」

「なんであんな意味深な手紙を残してこんなあっさり帰って来てんだよ・・・姉貴」

どういう訳かは分からないが・・・・正太郎の姉さんの成美さんがアンク達の前にやってきた。

リロード8・理子と野球とオフの姉貴（後書き）

時期的にはサッカーをやったほうがいいのかと思いましたが自分が甲子園の映像にあてられて野球になりました。今回は久しぶりにメインヒロインであるアリアを登場させることができました。その代わり今回はノブナガの出番がなかったですが次回は・・・

リロード9・野球の試合　前編（前書き）

前回は7人といっていた人数ですがキンジを数に入れていなく正しくは8人でした。大変申し訳ありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード9・野球の試合　前編

俺が信司を立ち直らせようとしている頃、突然の成美さんの登場にアンク達は固まってしまっていた。

「正太郎・・・1つ聞きたい。こいつはあの時の蜂の仮面戦士だよな？」

「ああ、たしかにそうだ。姉貴は仕事用の白いスーツを着ていない時はキャラが変わっちまうんだ」

「僕も正太郎から話は聞いていたけど・・・予想以上だね・・・」

「・・・・・・」

正太郎の姉さんの成美さんは仕事服を着ている時はきっちりとした人だが、その服装以外の時ではどういう訳かおしとやかを超えて歩いていたら何もない所でこけてしまうようなドジになってしまう。・・・おそらくはメンタル的な問題だとは思うが・・・ヒステリアモード並の変化だと思う。

「そんで？姉貴はどういう理由で帰ってきたんだ？ＮＥＶＥＲについてなんか分かったのか？」

「ふふふ。そんなのさっぱり分かるはずがないでしょ！」

「・・・ホントにコイツがあの時のヤツなのか？・・・信じられないぞ」

さすがのアンクも成美さんのキャラの違いにはついていけなかったようで頭を抱える。

「・・・・そんで姉貴。いつぐらいまでこっちにいるつもりなんだ？」

「えっとね。だいたい1週間ぐらいかな～」

「1週間か。・・・・ん？」

『ｐｐｐ』

そんな会話をしている途中で俺は正太郎に電話をしてしまった。・・・この時の俺はこの些細な出来事があんなことに繋がるなんて思ってもいなかった。

・・・・

一応代理キャプテンとなっている俺は伊達さんにあいさつするとさっそくみんなで練習を始めた。

・・・どうやら矢車は本郷さんに鍛えてもらっただけあって総合的に主戦力になりそうだが、後藤は変なところに飛ばしやすいなどという1人1人のことも踏まえて伊達さんと相談して打席とポジションを考えてみた。

「そんな訳でこんな感じになった」

1番ファースト　照井
2番レフト　明智
3番ピッチャー　泉・A
4番サード　矢車双
5番キャッチャー　遠山
6番ショート　城戸
7番セカンド　剣崎
8番センター　後藤
9番ライト　凍条

そして控えに矢車俊とノブナガと書いている。俊はかなりでかい手術を少し前にしたばかりとあって心配なので可能な限り動かしたくはないし、ノブナガは武偵高生徒ではないので常に登場させる訳にはいかないからだ。みんなも「まぁ、こんな感じでいいと思う」と言って納得してくれた。そのポジションで6日間練習をして・・・とうとう試合当日になった。

「「「よろしくお願いします！！」」」

挨拶を済ませると・・・俺達は後攻なのでまずは守備につく。アンクはチームの中で一番コントロールがうまく、球も速いのでピッ

チャーに選んだ。そしてアンクとパートナー関係のような俺がこのチームで一番相性が良さそうということでキャッチャーをやることになっている。

「・・・・・・」

ビュン！

「うわっ！？」

「ストライク！！」

やっぱりアンクの球はやはりなかなか速いようで次々とストライクを取り、結局一回表は相手チームは誰一人としてヒットすることはせずに終了した。

「さぁ、振り切るぜ！」

「頑張って隆く～ん！」

一回裏の攻撃。１番打者である照井が打席に立つと観客席の方から誰かの声がした。この位置からでは確認できないが、この声はおそらく那須野だろうな。いつも防弾スリッパを持ち歩いているＣ組の・・・。

「・・・・・・」

「・・・ど、どうしたんだ正太郎？」

隣を見ると・・・何やら正太郎が何やらドンヨリしたような雰囲気を出していた。

「姉貴が・・・姉貴が観客席にいた」

「えっ!?マジかよ!?」

「~♪~♪」

俺は少しグランドの方に出て観客席の方を覗いてみると・・・確かに成美さんはアリア達の近くの席に座っていた。・・・・それもなぜかチアガール姿で。

「あ~。お前苦手だもんな。あのテンションの成美さん」

正太郎は昔から仕事モードじゃない成美さんにめちゃくちゃ弄られていたらしい。目覚まし時計の時間をずらされたり、誕生日のケーキの苺を全部食われたり、ジャーマンスープレックスの練習台にさせられたりとされていたらしい。・・・・仕事モードを覚えた成美さんはそんなことは少なくなったらしいが・・・・あくまで仕事モードの時だけだったらしく。・・・・ようするに正太郎にとってプライベートモードの成美さんはトラウマということだ。

「この前は陽が近くにいたから強がってみせたけど・・・・無理無理!姉貴が見てるのに野球をやるなんて無理だ!」

カキーン!

「セーフ!」

正太郎が怯えている中、照井はヒットを打ち、難なく一塁で止まった。

「きゃ～～隆くんカッコい～～！！」

「・・・・・・・」

「・・・残念ながら2番は正太郎だ。行ってきてくれ」

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

明らかにメンタルが不安定な様子の正太郎を行かせたが・・・結果はある意味当然のごとく・・・

「三振！バッターアウト！」

そんな結果になった。・・・まさかただ観客席にいるだけでここまで正太郎を追い込むなんて・・・成美さんハンパないな。

「・・・そんじゃ次は俺だな」

「頑張れよアンク！」

3番のアンクは初球からいきなりバントをして照井を進ませると自分はアウトになり戻ってきた。

「・・・送りバントか。たしかにそれも戦法としてはいいが・・・こんなはやくから捨て身の戦法だなんて俺は好きじゃないな」

「・・・ハッ！」

伊達さんがアンクを注意する中、矢車がヒットを打って2アウト2・3塁となり、そこで俺の出番が来てしまった。

「セヤッ！」
カキーン！パシっ！
「あっちゃぁ・・・」
俺も何とかレフトよりに打つも・・・あっさりとレフトに捕られて一回が終わってしまった。

お互い無得点のまま試合は進んでいたが七回表、ついにアンクの球に慣れてきた相手チームが次々と打ち、ここに来て４点も捕られてしまった。
「まぁ、仕方ないから気にすんなよアン・・・ク？」

ベンチに戻ると・・・どういう訳かアンクはベンチにはいなかった。すると通路の方から声がしたので怪しいと思い覗いてみると・・・

「何やっているのアンク！これでもしキンちゃん達が負けたらどうするの！！」
ドカ！　ドカ！
「痛っ！？痛っ！・・・ぼ、暴力反対！」

チアガール姿の白雪が刀でアンクを何度も叩いていた。しかもこの短時間ながらもかなりのダメージを受けたらしく、すでにもう怪人の右腕だけの姿になっていた。

「ちょ！？白雪ストップ！」

「気にしないでキンちゃん！」

「気にするよ！！」

白雪は小走りで観客席に戻っていくと、通路の先の方でアリアがこっちに来てと合図をしていたので向かってみた。

「どうしたんだアリア？」

「はい。キンジこれあげる！」

「あ、ああ。ありがとな」

チアガール姿のアリアは俺にオルナミンを渡してきたのでとりあえず素直にそれを受け取った。

「元気出してキンジ。もう負けたような顔をしないの」

「正直、キツイだろ。アンクも次からは出られなそうだし・・・」

「最後まで諦めちゃだめよ。勝負はどうなるのか分からないからみんな頑張るんだよ」

なんか今日のアリアは良い事を言っているな。なんかやる気が出

てきた。

「それにしても今日のみんなは普通の高校生らしいわね」

「・・・たしかにそうだな」

最近は変身して怪人達と戦いまくっていた俺らだったが・・・今日はそんなドンパチなんて一切なく普通にスポーツができているな。

「ところでキンジ。・・・理子のことはどう思う？」

「理子？なんで今、その話なんだよ？」

「いいから答えて！」

なんだかよく分からないが・・・答えなければいけない雰囲気だったので俺は素直に答えてやることにした。

「・・・こう言うとお前が機嫌を損ねるかもしれないが・・・いろんな態度で惑わす時があるが理子は悪い奴じゃないと思うぞ。たしかに銃を向けあった時もあったが、ブラドのときは助け合ったからこそ勝てた。今回の野球も理子が教えてくれたから出れたんだ。たしかにまた理子と対立することもあると思うが・・・今は休戦中なんだから、根に持つなよ」

「・・・キンジは優しいね」

そう言ってアリアは「？」といった顔をしている俺に短いキスをしてきた。

「っ！？」

「よし！これであとは何とかなるでしょ！」

そう言い残してアリアが観客席へ戻っていくと、ちょうど自販機でジュースを買っていた制服姿のアリアを見かけた。・・・たしかにアリアは観客席の方にいったはずなのにどうして？

ドクン！

「・・・そういうことか。・・・いたずら好きな子猫め」

ヒステリアモードになってしまった俺はことの真相にようやく気づいた。そしてヒステリアとなった俺がベンチに戻ってくるとすでに信司、剣崎、後藤の三人が連続でアウトになり俺達の守備になってしまった。

「どうするんだキンジ？」

ピッチャーであるアンクが右腕だけになってしまった今、誰かを代わりのピッチャーにするしかない。・・・そろそろあいつの出番だな。俺はみんなにアンクの代わりのピッチャーを伝えろと、全員不安そうな表情になった。

「相棒・・・本当にそれでいくのか？」

「ああ、だいぶ賭けだけだが・・・これでいく」

ヒステリアとなった俺が自信有り気にみんなに告げた後、アナウンスが流れて変更が伝えられる。

『ピッチャー泉君に代わりましてノブナガ君』

最後の手段。それは控えとしてベンチに呼んでいたノブナガだ。・・・あくまでここまでは武偵高の生徒じゃないということで登場のタイミングに迷っていたが・・・実はノブナガはアンクの次にコントロールがいいんだ。

「・・・・本当に俺で問題ないのかキンジ？」

「ああ。伊達さんも賛成してくれているし何も問題ない。こっからはお前がヒーローになってこいよ」

俺はそう言いながらノブナガにボールを渡した。

リロード9・野球の試合　前編（後書き）

日曜日までに野球の後編を更新したら一週間ほど休みます。

リロード１０・野球の試合　後編（前書き）

野球を表現するのはやっぱり難しいですね。予定よりも内容を考えるのに時間がかかってしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード１０・野球の試合　後編

「・・・フンッ！」

「ストライク！バッターアウト！」

八回表、ノブナガはアンクほどではないがかなりの速度でボールを投げて相手チームの１人をすぐに三振させた。「記憶を失う前はプロ野球の選手だったんじゃないのか？」・・・信司の言っていたそんな冗談が俺達は本当なんじゃないかと疑いそうになる。それも仕方ないはずだ・・・

「・・・・・」

カクンっ！

ノブナガはカーブもできるようになっているからだ。

「なっ！？」

ブンッ！

ここまでノブナガはストレート勝負だったのでタイミングの合わせてきた相手は予想外だったらしく驚いた表情でからぶった。

「ストライク！バッターアウト！」

そしてストレートやカーブ、さらにはフォークボールで相手を翻弄して相手を塁に出さずにチェンジすると・・・

「おりゃっ！」

カキーン！

俺達のチームの逆転が始まった。

「セーフ！」

凍条はレフトよりに打ってくれたことにより塁に出ると、続く照井も打ってくれてノーアウト1・2塁という状況で正太郎の出番が来た。

「・・・あぁ・・・」

「・・・・・・」

この様子から察するに未だ成美さんのことを引きずってるな。・・・仕方ない。代打で俊にするか。

「伊達さん。正太郎の代わりに代打で俊を・・・・」

「まぁ待て。・・・このまま行かせてやれ。こいつは乗り越えるべき壁なんだ。あいつの眼をよく見てみろ。さっきまでは蛇に睨まれた蛙みたいなカンジだったのが・・・少しずつ闘志を取り戻してきてる。・・・今のこいつならきっとやってくれるぞ」

「・・・・・はい」

伊達さんのどことなく魂の篭った台詞に熱いものを感じた俺は正太郎を見守ることにした。

「・・・・・姉貴。俺はもうあんたに怯えるような俺じゃない。だ

から絶対に塁に出てやる」

正太郎はバットを構えていつでも打ってみせるといったような表情をみせる。・・・あの表情。今のあいつならきっと打って・・・

ドカッ！

「あぐっ！？」

「デッドボール！」

くれなかった。・・・まぁ、一応宣言通り塁に出たし結果オーライか？

「まったく・・・今日の正太郎は何をしてるんだか・・・」

「しっかりしなさい正太郎く～ん」

「そうね～。せっかくお姉ちゃんが応援に来てあげてるっていうのに～」

観客席からは僅かに陽と那須野と成美さんの哀れみの声が聞こえた。というか成美さん・・・原因のアンタがそれ言うか？・・・まぁ、それはともかくこれでノーアウト満塁。かなりのチャンスだ。

「頼んだぜノブナガ」

「・・・やってやろう」

ノブナガは俺からバットを受け取ると右側のバッターボックスに

立ちバットを構えた。さぁ・・・かっとばしてくれよノブナガ。・・・そんな中、照井のリードが広いことに気づいた相手ピッチャーセカンドに向かって投げてきた。

「っ！？」

「アウト！！」

「くっ！？・・・やってしまったか」

せっかくのノーアウト満塁が照井がアウトになったことによりいっきに４点を入れるチャンスは無くなった。

「すまない。・・・振り切ることだけを意識しすぎていた」

「ミスは誰にでもあるんだ。それにまだ１アウト・・・気にすることはない。今はそれよりもあっちだ」

悔しそうな表情の照井を慰めた伊達さんはノブナガの立つバッターボックスを眺めた。４点を狙うことはできなくなったがここでノブナガがホームランを決めたら３点が入って追いつくチャンスになる。

「ハァッ！」

カキーン！

ノブナガは俺達の期待通りにホームランを打ってくれて俺達のチームに３点が入った。その後、試合は矢車と俺がヒットを打って塁に出ると信司が空振り３振でアウトになりさらに剣崎がアウトになって八回裏は終了してしまったが３対４まで追いついた。

「・・・フンッ！」
ビュン！

「ストライク！バッターアウト！スリーアウト！チェンジ！」

そしてノブナガは優れた変化球でランナーを1人も出さずに守りきると、俺達の最後の攻めが始まった。

「先ほどまでは何もできていなかったが・・・ここでその汚名も返上するっ！！」
カキーン！

後藤は先ほどまでの空振りをなかったことにするかのように打つと・・・なかなかいい当たりで2塁までいっきに辿り着いた。しかし・・・

「えいっ！」

「ストライク！バッターアウト！」

「振り切る・・・・！！」

「アウト！」

凍条は3振でアウトになってしまい、照井は打ったのは良かったがあたりがいまいちでサードにチャッチされてしまった。

「・・・キンジ。今度は自分の力で塁に出てやるよ」
カキーン！

正太郎は宣言通りに何とか打つと2アウト1・3塁の状況で再びノブナガに打席が周ってきた。

「頑張れノブナガ～～～～！！」

「「「かっとばせノブナガ～～～！！」」」

俺が大声で叫ぶと・・・チームのメンバーも一斉に声をあげてノブナガを応援する。そしてピッチャーの投げた球にノブナガは全力でバットを振った。

「・・・フンッ！」

カキーン！

ノブナガの打った球は・・・そのまま場外へと飛んでいった。

試合後、防弾制服に着替えた俺はなぜか誰もいなくなったグラウンドに戻ってきてしまっていた。

「・・・・・っ！」

ビュン！　ドカッ！

そして何となく球を壁に向かって投げつける。・・・普通の高校生か。・・・俺がなりたいと思っている普通の高校生。挨拶代わりに銃を向け合うような武偵高よりはいいはずの普通の高校生活。・・・それが本当に俺に相応しいかは分からないが・・・少なくとも今日の武偵高なんて肩書きがなかった野球は楽しかった。おそらく俺はそんな一時の楽しさを未練がましく思って今もここで球を投げてるんだろうな。

「・・・・そろそろ帰るか」

「きーくん。はい、タオル」

俺が球場を出ると出口付近で理子がタオルを渡してきた。

「そういえば・・・まだお前にお礼を言っていなかったな」

「お礼？」

「単位のことだよ。この試合・・・というより任務はお前のおかげで請け負えたしな。ありがとう理子。今日は楽しかったよ。スポーツってのもたまには悪くないな」

「・・・勘違いするな。お前達と馴れ合うつもりはこれっぽっちもない」

理子の口調が急に鋭くなった理子は俺からタオルを奪い取ると赤いランドセルに押し込んだ。

「スポーツ？ふざけるな。そんなくだらないことなんかどうでもい

い。

このムード。理子の本質ともいえる裏の方の理子か。

「この任務はくだらない理由でお前とアリアがパートナーを解散しないようにするために用意してやったんだ。いいか?忘れるなよ。お前達はあたしの獲物だ」

そう言ってくる理子を・・・俺は黙って見つめ返す。・・・あぁ、分かっているぞ理子。今回はあくまで俺たちにとって休憩時間。俺達の戦いはあくまで休戦中なんだよな。

「でも・・・今日のきーくんのキャッチャーはカッコ良かったよ」

表と裏の狭間のような心境の理子はそんなことを言いながら俺とは反対方向を向いた。

「それと・・・・廊下でのこと・・・・ありがと」

やっぱり廊下で理子のことを聞いてきたアリアは理子の変装だったか。・・・・ややこしい上に、気恥ずかしいことしやがって。

「あ~う~。なんだかモヤモヤするぅ」

表と裏がクルクルと入れ替わっているかのような理子は俺から球を奪い取ると俺から数メートル離れた。

「きーくん!受け止めて!」

少しだけキレ気味だがいつもの理子は俺に向かって投げようと振

りかぶる。

「きーくんが好き！」

ビュン！

「えっ！？お前は何を言って・・・！？」

パシッ！

あまりに突然なことに一瞬流れたヒステリアの血液を感じるヒマもないまま俺は素手でその球を掴みとってしまった。・・・やっぱり素手で野球のボールを掴むのはけっこう痛いな。そんな痛がっている俺を見ていた理子は夕日を背後にして離れたところからただ一言・・・

「うっそだよ～～」

そういい残して走り去っていった。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺が理子と語っていた頃、正太郎は成美さんと陽、それと復活したアンクと共に帰り道を歩いていた。

「それにしても正太郎は最後以外はほとんど何もしなかったね」

「まったく後でキャッチボールから教えてあげる必要があるわね」

「・・・・お願いだから姉貴が教えるのだけはやめてくれ」

そんなことを話しながら正太郎達が歩いていると曲がり角辺りで立ち止まっていたノブナガに出会った。

「ノブナガ?どうしたんだ?そんなところで立ち止まって?」

「正太郎。・・・・今一度お前の口から確認したい。・・・・お前は『明智』で間違いないな?」

「ん?ああ。俺も俺の姉貴もたしかに明智だが?それがどうかしたのか?」

ノブナガは小さく「残念だ」と呟くとその姿を鎧武者の怪人に変えた。

「なっ!?お前が鎧武者の怪人だったのかよ!?」

「せっかく知り合ったが残念だ。・・・・お前が俺を殺した子孫である以上・・・俺はお前を殺す」

「本気で言っているのかお前?」

アンクは右腕を怪人の姿に変えると鎧武者怪人となったノブナガを睨みつける。

「ああ本気で言っている。俺がこの身体となり欲望が誕生したことですべての記憶を取り戻したのだからな。・・・俺の人間だった頃の名前は織田信長。・・・お前達も知っているだろう」

「・・・織田信長だと!?・・・なるほど。それなら家紋のこととかも納得いくな。だがお前を信じているキンジのためにもここでお前に殺られる訳にはいかないんだよ」

『ＪＯＫＥＲ』

正太郎はジョーカーに変身すると一歩前に出る。

「陽・・・今の姉貴はとても戦えるような状態じゃない。それにＷに変身すると陽もこの辺に倒れちまう。・・・だからこの場から離れてくれ。正直守りながらこいつと戦うのは無理そうだ」

「・・・俺にこいつ等を運べとか言わないってことは俺も戦えってことかよ。・・・まあいい。やってやる」

「アンクには危害を与えたくなかったが・・・致し方ない」

ジョーカーとアンクはとうとう鎧武者怪人の正体だったノブナガと戦い始めてしまった。

リロード１０・野球の試合　後編（後書き）

試験勉強に専念したいと思いますので１７日まで更新ができません。申し訳ありません。

リロード11・最後の地（前書き）

しばらく更新できなくて申し訳ありません。本日から再開します！

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード11・最後の地

午後7時を過ぎた頃、グラウンドで理子との会話を終わらせてきた俺はようやく部屋に帰ってきた。

「ただいま・・・・」

「おかえりキンジ！」

「おかえりなさいキンちゃん」

「・・・・あれ？・・・・アンクは？」

しかし部屋に入るとアリアと白雪はいたがアンクとノブナガはいなかった。

「そういえば帰ってきてないわね。・・・どうしたのかしら？」

すると外の廊下の方からドタドタと走ってくる物音が聞こえるといきなりドアが開いて誰かが入ってきた。

「大変だキンジ君！！」

「陽？・・・いったいどうしたんだ？」

突如として俺の部屋に入ってきたのは慌てた様子の陽だった。

「鎧武者怪人だったノブ君が正太郎を殺そうとして・・・正太郎と

アンクが彼をとめるために戦っているんだ！」

「何だと！？」

ノブナガが鎧武者怪人だと！？・・・・そんな・・・。

「どういうことだよ？」

「話は後だ！はやく君も来てくれ！」

「あ、ああ・・・・」

俺達は陽に案内されて正太郎達が戦っている場所に急いだ。そしてその場所に向かっている最中に俺は陽から鎧武者怪人の正体がノブナガだということを聞かされた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

俺達が陽に案内されて正太郎達の元に向かっている頃、ジョーカーとアンクはやや押され気味だった。

「オラァッ！」

「フンッ！」
ガギンッ！
ジョーカーは鎧武者怪人となったノブナガに殴りかかるがあっさりと剣に弾かれてしまった。
「このっ！」
ドンッ！
「・・・・・・」
バンッ！
アンクは右腕から火球を放つがノブナガはその攻撃を手甲で防いだ。
「いい加減にしやがれ！ノブナガ！・・・・でないとマジでお前を倒さないといけなくなるんだぞ？」
「アンク・・・お前にそれができるのか？コアメダルが3枚で怪人の姿にすらまともになれないグリードが」
「・・・そこまで知ってやがったとはな。・・・だが戦う手段ってのは他にも色々とあるんだぜ。たとえば・・・・コレとかな」
アンクの左手にはノブナガがプロトバースに変身するためのバースドライバーがにぎられていた。
「お前・・・いつの間にそれを！？」
「正太郎がお前に殴りかかったときに掠め取ったんだよ。お前が防

御に集中してくれてたおかげで助かったぜ」

そう言ったアンクはバースドライバーを腰に巻きつけようとしたその瞬間・・・

「させませんよ！」

ガギンッ！

「くっ！？」

突如襲撃してきたレイによってベルトが弾かれてしまった。

「邪魔が入ったな。・・・この勝負はひとまず預けた。・・・アンク、キンジに伝えておけ。最後の地にてお前を待っていると」

アンクにそう告げたノブナガは怪人の姿から普段の人間の姿に戻ると何処かに立ち去っていった。

「おい！待ちやがれっ！！」

「待てアンク・・・今はこっちの相手が先だ」

気がつくとアンクとジョーカーは数体の怪人達に囲まれていた。

「どういうことだ？・・・・どうしてエヴィルがこのタイミングでやってくる」

「ふふふ、どうやらあの人造グリードのことを何も知らないようですね」

「人造グリードだと!?それはどういうことだ!!」
ブゥゥゥゥン!!

ジョーカーはレイに向かって叫ぶと黒いフードを被った怪人がバイクに乗って体当たりをしてきた。

「くっ!?・・・スカル魔か」

スカル魔・・・光太郎さんが戦ったクライシス帝国の怪人で最も数の多い怪魔妖族らしく黒いローブに顔はドクロそして武器は鎌と死神を彷彿とさせる怪人で複数でRXに挑んだリーダーはスカル魔スターといい2本の角と金色のドクロが特徴角からだすビームでブラックを変身不能にしたバイクに乗ったり以外と器用だった。・・・・と仮面戦士科の教科書に書かれている。

「・・・アンク。お前は先にノブナガを追ってくれ。ここは俺が何とかする」

「お前1人であの白爪野郎と黒子っぽい奴らを相手にできんのかよ?」

「なら俺達が黒子ちゃん達の相手をしてやるよ。・・・いくよ後藤ちゃん!」

「はい、伊達さん!」

ジョーカーが声の方向に振り向くとバースに変身した伊達さんとバースバスターを構えていた後藤がいた。

「おやおや・・・今回も邪魔が入ってしまいましたね。・・・そ

れでは私は他にも用事があるので失礼します。・・・・それとWの片割れ君。君は彼が相手をしてくれるようですよ」

レイがそう言うとその後ろの空間が突如として歪み、その中にレイが入って行くと入れ違いで以前W・ファングジョーカーが撃退した鋼鉄参謀がやってきた。

「久々だな明智正太郎。今度こそお前を倒させてもらうぞ」

「鋼鉄参謀・・・・こんな時にかよ。・・・・アンク、とっととノブナガを追ってくれ」

「・・・・任せたぞ」

アンクは先ほどレイに弾き飛ばされてしまったバースドライバーを掴むとノブナガが向かっていった方向に走り出した。

「・・・・明智正太郎。ファングジョーカーに変身しろ」

「・・・・何だと？」

「ファングジョーカーに変身しろと言っているんだ。あの姿のWを倒せば俺はエヴィルの幹部になれるかもしれないのでな」

鉄球をジョーカーに向けた鋼鉄参謀はゆっくりと近づいてくる。

「お前・・・俺が今、その姿になれないことを知っていてワザと言ってるだろ？」

「ああ。その通りだ」

「畜生！舐めやがって！！」
『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
ジョーカーはマキシマムスロットにメモリをセットして右拳に力を溜める。
「ライダーパンチ！！」
「ハァッ！」
ガギィィィィン！！
ジョーカーのライダーパンチと鋼鉄参謀の鉄球がぶつかり合い火花が飛び散った。しかしスペックがＷの半分ほどしかないジョーカーではＷの力でも敵わなかった鋼鉄参謀に敵うはずもなく・・・・
「ぐあっ！？」
ドォォォォン！
数メートルほど吹き飛ばされてしまった。
「・・・所詮Ｗの片割れだけのジョーカーはこの程度か。これではさすがに倒し甲斐がなくてつまらないな」
「・・・ちっ！たしかにＷじゃないがな・・・切り札の記憶のジョーカーを見くびっていると痛い目みるぞこの鋼鉄マッチョ！」
再び立ち上がったジョーカーは再度鋼鉄参謀に殴りかかった。

・・・

たしかに陽からノブナガがあの織田信長だってことは聞かされてはいるが・・・最期の地だと？・・・もしかすると・・・

「キンちゃん。もしかして本能寺なんじゃないの？」

「本能寺か。・・・たしかにそこの可能性が高いな」

かつて織田信長が最後を迎えた場所、本能寺。今はその場所はコンビニになっているらしいがその近くでは本能寺が再建されている。・・・いるとするとそこだろうな。

「トドメだ！ブレストキャノン！シュート！」

『セルバースト』

「「「っ！？」」」

ドォォォォン！！

「遠山！お前も来たのか！？」

すると近くでスカル魔3体と戦っていたバースと後藤が勝利してこちらにやってきた。

「迷っている暇はないぞ遠山。アンクはたった1人でノブナガを追っている。そしてこの一連の事件の背後にはエヴィルも動いている様子だからあいつ1人では危険だ」

「キンジ！急いでアンクを追いかけましょ！」

アリアは近くのライドベンダーをバイクモードにして俺に急げと

合図を送ってくるが・・・・俺は別のベンダーに跨った。

「・・・すまないアリア。悪いが白雪と一緒にここで待っていてくれ」

「・・・何言ってんのキンジ？」

「ノブナガのことは・・・俺が何とかする。絶対にノブナガを止めてみせる」

ノブナガは鎧武者怪人の姿でたしかに被害者を重傷にこそしているが、これまで誰一人として死者は出ていない。・・・まだあいつはやり直すことができるんだ。・・・こんな所であいつを失ったらせっかくできた友達が減っちまうだろ。

「俺は友達が少ないんだ。・・・だからこそ友達は大切にしないとな」

「はぁ・・・分かったわ。そこまで言うならキンジ！絶対にアンクとノブナガも連れて3人無事で帰ってきなさい！」

「ああ！分かった！！約束する！」

ブゥゥゥゥン

俺はベンダーを走らせて本能寺へと向かった。

「そう言えば陽。姉貴はどうしたんだ？」

「何を言っているんだい正太郎？成美さんなら僕の後ろに・・・・・あれ？」

陽は成美さんを指差そうと後ろを振り返ったが・・・そこには誰もいなかった。

「あれ？アリアちゃん、星伽さん。成美さんってさっきまでいたはずだよね？」

「え？あんたが部屋に押しかけてきた時にはとっくにいなかったわよ」

「うん。私も小林さんしか見ていないよ」

「え！？えぇぇぇ～～～！？」

今まで自分の後ろにいたと思っていた陽は成美さんがいなかったことに驚きの声をあげた。

「・・・はぁ、まあいいか。あのバカ状態の姉貴だけどもうすぐ２０歳なんだからさすがに迷子にはならないと信じていたんだが・・・姉貴はやっぱり姉貴だった・・・」

「ごめんね正太郎！僕がキンジ君にノブナガのことを伝えようと急いでいて気づかなかったよ・・・」

「いや、別に姉貴のことはそんなに気にしなくていいって。・・・・姉貴が近くにいたら俺が戦いにくいから遠ざけてもらっただけだし・・・そんなことよりも陽・・・」

正太郎はロストドライバーを腰から外すとダブルドライバーを腰につけてジョーカーメモリを握る。

「ようやくWの右側も揃ったな！ならばファングジョーカーとなって俺と戦え！！」

「・・・そんな訳だ。俺もボロボロだしファングジョーカーに変身するぞ」

「分かった。あれから訓練を繰り返して制御できるようになったファングの力を鋼鉄参謀に見せてやろう！・・・来い！ファング！」

『ギャァァァァォ！』

陽はファングメモリを右手に乗せるとそのままメモリモードに変形させる。

「行くよ・・・正太郎」

『ＦＡＮＧ』

「ああ・・・」

『ＪＯＫＥＲ』

「「変身！！」」

『ＦＡＮＧ　ＪＯＫＥＲ』

ジョーカーのメモリと共に正太郎の意識が陽のベルトに転送され、ファングメモリをベルトにセットした陽はＷ・ファングジョーカーに変身した。

「・・・さぁ・・・鋼鉄参謀」

「・・・以前は暴走していたけど今回は違うよ」

「「さぁ、お前の罪を数えろ」」

W・ファングジョーカーとなった2人は声を揃えて鋼鉄参謀にそう告げた。

・・・

出す。

「このエビメダルとカニメダルをノブナガの中に投入させていただきます」

この2枚のメダルがノブナガの運命を狂わせることなど、その時の俺は知るよしもなかった。

リロード11・最後の地（後書き）

再装填編はあと2～3話で終了させようと思います。

リロード12・本能寺の変（前書き）

ホッピングよりもランチャーの方が使いにくそうだと思うのは自分だけでしょうか？

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

リロード12・本能寺の変

ライドベンダーで本能寺に到着した俺はその異変に驚かざるを得なかった。

「なんだこれは・・・・？」

本能寺の周辺には黒い霧のようなものが発生していて本能寺が見えなくなっている。これじゃノブナガを探すどころか壁のように空間が閉ざされていて本能寺の中に入ることもままならないぞ。

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身してタカヘッドの複眼を紅く輝かせて霧の奥を透視しようとしてみるも・・・・

「・・・あれ？見えないだと？」

霧の中が何も見えなかった。タカヘッドの能力を持ってしてもノブナガはおろか本能寺すら見えなかった。

「当然だ。これはエヴィルの首領様が作り上げた特殊な次元だからな」

「っ！？」

突然後ろから声がしたので振り返ってみると・・・・そこには誰もいなかった。

「今の声はいったい？」

「何処を見ている。・・・こっちだ」

俺は辺りを見渡してみるがあるのは黒い霧に包まれた本能寺と路地のミラーだけ・・・鏡・・・そうか！鏡の世界か！

「お前もエヴィルの一味なんだろ！！だったら鏡の中から出て来い！！」

「・・・何を熱くなっている。・・・まあいいだろう」

「なっ！？その姿は！？」

鏡の中から出てきた声の人物は一月ほど前にタジャドルコンボで接戦を繰り広げたあの仮面戦士とそっくりの黄金の鎧に包まれた不死鳥の仮面戦士だった。

「仮面ライダーラス・・・・だと！？」

仮面ライダーラス・・・アリアの曽祖父であり、イ・ウーのボスであるシャーロックホームズが変身していたベンタラの仮面戦士だ。・・・それと同じ姿の仮面戦士が俺の目の前に立っていた。

「ラスか。・・・たしかに姿だけ見れば間違うのも無理はないな。・・・我が名はオーディン。仮面ライダーオーディン。エヴィルの幹部の１人だ」

「エヴィルの・・・・幹部だと!?」

俺は咄嗟にトラクローを展開して構えるが・・・・オーディンはいつまで経っても仕掛けてこない。そしてオーディンが告げてきた言葉はあまりにも予想外なことだった。

「今回は戦いに来た訳ではない。・・・・遠山キンジ。またの名を仮面ライダーオーズ。・・・・お前もエヴィルに来い。お前に我が隊の副官の席をやろう」

・・・・エヴィルは俺を引き釣り込もうとしてきた。

「・・・・どういうことだ?」

「お前はオーディンのライダーシステムとほぼ同一のラスを倒した。つまりお前は今の段階でもエヴィルの幹部クラスの実力はあると言うことだ。それにオーズの力は本来そのように使うことだろう?」

何を言っているんだ?・・・・オーズが本来滅ぼす側だと?

「・・・・どうやら８００年前の戦いを何も知らないようだな。・・・まぁどちらにしろ今のお前では野心が足りないな。・・・・フンッ!」

オーディンが黒い霧に手をかざすと一部だけ霧が晴れる。

「さぁ・・・戦えオーズ。内に秘めた欲望を開放してみせろ」

「ふざけんな!!誰がお前なんかの言うことなんて聞いて堪るか!

！」

ブンッ！

俺はトラクローから金色に輝く斬撃を放つもラスの時と同様に瞬間移動で避けられてしまった。

「今はまだその時ではないが・・・・オーズの力を持っている以上、その力に飲み込まれることは絶対。・・・・いずれまた会おう」

「待ちやがれ！！・・・・くそっ！」

オーディンは最後にそう言い残すとミラーワールドの中に消えていった。すると黒い霧にオーディンの開けた穴は少しづつ閉じ始めていた。

「くっ！？今はあいつなんかよりもノブナガだな！」

俺は黒い霧の中に入っていくと・・・

「オラァッ！」

ドカッ！

アンクが右腕だけを怪人態にして数体のショッカーライダーと戦っていた。

「アンク大丈夫か！！」

ドカッ！

ショッカーライダーを蹴り飛ばした俺はアンクの下に駆け寄るとアンクの足元にバースのベルトが落ちていた。

「これって・・・・ノブナガの・・・・」

「ああ、そうだ。これでようやくコイツを使えるチャンスができた。・・・・キンジ。ノブナガは奥の部屋にいる。お前はノブナガのところへ急げ！そしてアイツを正気に戻して来い！その間俺はこいつ等を引き受けておいてやる！変身！」

カポーーン！

アンクはバースドライバーを拾い上げ腰に巻きつけてプロトバースに変身すると右手を俺に突き出して2枚のコアメダルを渡してきた。

「クジャクとコンドル・・・おい！これを渡したらお前のコアメダルは1枚だろ！！」

「ここに来る前にリュウとか凍条あたりからセルメダルを巻き上げてきたから人間の姿は維持できる。・・・・だからこれに変身している分には問題ない。だからとっとと行け！」

身体を構築するために必要なコアメダルを2枚も渡してくれたんだ。ここまでされたんだから絶対にノブナガを連れ戻さないとな。

「負けんなよアンク！」

「そっちもしくじるんじゃねぇぞ！！」

俺はアンクの変身するプロトバースを信じて本能寺の奥へと走り出した。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

俺がアンクの変身したプロトバースにショッカーライダー数体を任せて本能寺の奥を目指している頃、W・ファングジョーカーと鋼鉄参謀の戦いは終わりを告げようとしていた。

「こいつでどうだ？」
『ＡＲＭ　ＦＡＮＧ』

Wは右上腕に刃を装備すると鋼鉄参謀との距離を一気に詰める。
「ヴァウッ！」
ズシャッ！

「ぐおっ！？」

そしてWはそのまま恐竜の牙のように鋭い刃で鋼鉄参謀の胴体の鎧を切り裂いた。

「くっ！？以前は獣のように我を忘れての動きで動きを読みにくかったが・・・今回は意志があるゆえに行動がまったく読めん！？」

「どんどんいくぜ！」
『ＳＨＯＵＬＤＥＲ　ＦＡＮＧ』

「ガァウ！！」
ブンッ！

右上腕に装備された刃が消えると今度は肩に刃が装備されWはそれをブーメランのようにして鋼鉄参謀に投げつけた。

「一度喰らった技は喰らわん！！」

ブンッ！　ズバッ！

鋼鉄参謀は鉄球でその刃を弾こうとするも、その鉄球は４等分になるように切り裂かれた。

「何だと！？ぐあぁぁぁぁぁっ！？」

ズシャッ！　スバッ！

ブーメランのように飛んでいる刃はそのまま鋼鉄参謀を２～３度切り裂くとWの所に戻っていった。

「・・・この辺で終わろうぜ鋼鉄マッチョ。俺はまだアンタがまだやり直せると思うんだ。・・・完全に人の心を失っている訳じゃないんだろ？だったら・・・・」

「バカを言うな左側。人ですらない改造人間の俺に人の心など有りはしない。俺にあるのはこの鋼鉄の肉体とエヴィルに忠誠を誓う魂だけだ。・・・・それと俺の名前は鋼鉄参謀だ」

鋼鉄参謀は切り裂かれた鉄球の一部を右手で掴み上げた。

「・・・・正太郎。どうやら彼も・・・・・」

「ああ。分かってる。いくぜ相棒」

『ＦＡＮＧ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

Wは右脚に刃を装備するとやや中腰に構える。
「うおぉぉぉぉぉぉ！！」

「「ファングストライザー！！」」

鋼鉄参謀が鉄球の一部を掴み上げながら体当たりをしてくるのに対してWは跳び回し蹴りで鋼鉄参謀を切り裂いた。すると恐竜の頭部のようなオーラと共にメモリに描かれている「F」の文字が浮かび上がった。
「・・・エヴィルには・・・俺程度の力では傷はおろか触れることすらままならない相手がごろごろといる。・・・あの世で会わないことを・・・祈ってやろう」
ドオォォォォォォン！！

「・・・じゃあな。・・・鋼鉄マッチョ」

鋼鉄参謀が爆発するとWは変身を解除して正太郎の意識が戻る。そして変身が解けた陽のところにアリアが駆け寄ってきた。

「とりあえずこれで片付いたのねライト！」

「うん。こっちの方はね。でも問題はまだ終わってないよ」

「ノブナガの・・・キンジ達が向かった相手よね」

アリアの言葉に正太郎と陽はゆっくりと頷くとアリアは複雑そうな表情をする。

「・・・あたしはあまり面識はなかったけどノブナガはあたしが

いなかった間、キンジ達と仲間として過ごしていたのよね？」

「仲間として・・・というよりも友達として・・・だね。だからこそキンジ君達はノブナガを助けようとしているんだ」

「・・・あたしの時もそうだったけどあんなに戦いを嫌うキンジが今回も自分の思いを戦いによって伝えているのよね。・・・どうして運命は残酷なのかしら？」

アリアのその一言に対しその場の全員が複雑そうな顔を浮かべてしまい誰も答えることはできなかった。

・・・

俺の方を振り向いたノブナガはどこか苦しそうな表情だった。

「・・・・そうか。もうすでにここまでエヴィルの手が進んでいるのか」

「進んでいるどころか結界みたいなのでここが閉ざされていたぞ」

「なるほど。・・・・ここで決着をつけようというのか」

「どういうことだ?」

俺がそう言うとノブナガは立ち上がり鎧武者怪人へと姿を変えた。

「この身体はエヴィルによって製作された擬似的コアメダル・・・ギジメダルの1枚と大量のセルメダルで成り立っている。しかしまだこの身体は完全なものではない。だからこそエヴィルは完成させるために残りの2枚のギジメダルを投入しようとしている」

ノブナガが・・・・エヴィルによって作られただと!?そんな話陽からも聞いてないぞ!?

「記憶が曖昧だった当初は無意識の内にこの姿となりながらも『明智』に所縁のありそうな人物を手当たりしだいに襲っていた。しかし天下統一の欲望を思い出した際に人間だった頃の記憶を取り戻し様々なものを手に入れてきた。少なからず満たされたつもりだ。だが一月もの間お前達と日々を過ごすうちに・・・・何処か俺を殺した明智に復讐するという感情が薄れていった。・・・・いや、虚しくなった。だからこそあの場で正太郎に天誅を下すことができなかった」

「そう思うのなら戻って来いよ。・・・・そしてお前も武偵高に入れよ。・・・・俺は来年の４月で辞めちまうが・・・きっと俺以外にも仲間はできるぞ」

「それはそれで素晴らしいと思うがそれは無理だ」

「どうしてだよ！？」

「・・・・残りの２枚が近づいているのを感じる。・・・・俺が日々を過ごすことによって欲望の結晶であるセルメダルが身体に蓄積され・・・・自分の力が自分でも抑えられなくなり始めている。おそらく残りの２枚を取り込んでしまうと俺の意識は完全に無くなってしまうだろうな。そうなる前に・・・お前の手で俺を倒してくれ」

ノブナガからの頼みを俺は・・・・

「・・・・そんなのお断りだ！俺はお前を助けるために止めに来たんだ！」

断った。・・・この答えはアンクや面識の少ないアリアだって同じように答えるはずだ。それにアリア達と約束したしな。『アンクとノブナガを連れて帰る』ってな。

「いい台詞ですね。だけど残念でした」

「なっ！？レイ！？」

気がつくと後ろにはレイが立っていて振り返って攻撃しようとするも・・・・どういう訳か捕まっていた成美さんを楯にされて俺は

動きを止めてしまった。

「成美さん！？」

「さぁノブナガ！完全な姿になってください！」

チャリン！チャリン！

「ぐ、ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

俺が成美さんが捕まっていることに驚いてしまっていたせいでレイによってノブナガに残りの2枚らしい黒いメダルが投入されてしまい・・・のっぺらぼうのような頭部だった怪人姿のノブナガの頭部は何処となく蠍を思わせる鎧兜を纏い、黒いマントを羽織った。

「これが人造グリード‘ノブナガ’の完全体ですか。・・・その力、拝見させて頂きますよ」

「ガアァァァァァァァ！！」

完全体になってしまった怪人態のノブナガは我を失った様子で辺りを剣で切り裂く。その一撃一撃が物凄く強力な剣圧で本能寺が崩れ始めてしまった。

「・・・ノブナガ・・・・お前が何者かなんて俺達は誰もそんなこと気にするつもりはない。だから絶対に連れ戻す」

そう約束したんだよ。アリアとな・・・。だからこそ俺はアンクに託されたこの2枚のコアメダルをもう一度使う。・・・俺はトラとバッタのコアメダルを抜き取りクジャクとコンドルのコアメダルをベルトにセットしてオースキャナーでスキャンした。

『タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～～！』

「ハァッ！」

そしてオーズ・タジャドルコンボに変身した俺はノブナガにタジャスピナーを構えた。

リロード12・本能寺の変（後書き）

次回かその次でノブナガ編は終了です。・・・・当初の予定よりもかなり伸びてしまいました。そしてノブナガ編が終わり次第、遅くなりましたが世界設定を投稿します。

リロード13・キズナ（前書き）

この物語のノブナガはオリジナル設定が多めでオリジナルの能力があります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
クジャクコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア
コンドルコア

カンガルーギジ

リロード13・キズナ

「セイッ！」
ボゥ！

オーズ・タジャドルコンボに変身した俺はノブナガに向かってタジャスピナーから火球を放った。

「ガァァァァ！！」

しかしノブナガはその火球を剣で切り裂くと俺に剣を振りかざしてきた。

ガギンッ！
「くっ！？・・・・ノブナガ・・・」

「ガァァァァァ！！」
ブンッ！　ブンッ！

俺は咄嗟にタジャスピナーを盾にして剣を防ぐも、ノブナガはさらに連続で剣を振りかざしてきた。

「くっ！？」
バッ！

翼を広げた俺は天井を突き破って一旦空に飛ぼうとすると・・・・

「ヴァァァァァァ！！」

グイッ

「なっ！？」

ドカッ！

まるで磁石に引き付けられるかのように地面に叩き落されてしまった。

「ぐあっ！？・・・・いったい何が・・・・」

重力操作か？・・・いや、あの能力はガメルの能力だからノブナガはおそらく使えないはずだ。それに今の感覚・・・無重力にされたような感覚じゃなく地面にくっつけられるような感覚だったぞ。

「くっ！？空中戦がお断りなら中距離戦だ！」

バババババババッ！

立ち上がった俺はノブナガから距離を取ると羽手裏剣を放とうとするものの・・・

「ガァァァァァッ！！」

バババババッ！

羽手裏剣はノブナガにあたる寸前に止まったかと思うと俺の方に向かってきた。

「・・・マジかよ・・・・ぐあぁぁぁぁ！？」

ドガァァン

跳ね返されてしまった羽手裏剣を喰らってしまった俺は壁を突き

破って外まで飛ばされてしまった。

「ふふふ、さすがにイ・ウーのボスを倒した姿と言っても人造グリードには苦戦していますね。・・・あの人造グリードの能力は、電磁力操作、たとえ金属でない物体。たとえば人間などの生命体ですら引き寄せたり遠ざけたりすることができるのですよ」

電磁力操作だと!?・・・だから地面に引き寄せられたり、羽手裏剣が俺の方に飛んできたりしたのか。・・・ウヴァの電撃とガメルの重力操作を足して2で割った能力・・・いや、自然現象みたいな能力じゃなく科学によって発生する能力って感じだな。

「くっ!?・・・なるほどな。少なくともお前に小細工は通用しないってことかよ」

そもそも俺はノブナガを倒すために戦っているんじゃない。ノブナガを連れ戻すために俺はここに来たんだ。だったら・・・・

「暴走の原因のメダルをノブナガの身体から取り出せば正気に戻るかもしれないってことだろ?」

「たしかに暴走は止まってしまうかもしれませんが人格が戻るかどうかは分かりませんよ?」

「・・・たしかにそうかもな」

ドンッ!

俺はノブナガに火球を放って一瞬だけ視界を遮ると空高く飛んだ。

「・・・それでも・・・俺はノブナガが戻ってくるのを信じる

ぜ」

ベルトから3枚のコアメダルを抜き取った俺はそれをタジャスピナーの中に入れた。そしてさらにオースキャナーでそれをスキャンした。

『タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！』

「セイヤァァァァァァ！！」

不死鳥を模した炎を纏った俺はノブナガに向かって急降下する。

ギガスキャン。・・・クジャクアームのときにだけ使える専用武器のタジャスピナーに7枚のメダルを入れて発動する特別な技だ。

「がぁぁぁぁぁぁ！？」

ノブナガは電磁力を操って俺を寄せ付けないようにして攻撃を防ぐ。・・・だけどこんなのに負けてはいられないんだよ。アリアとの約束を守るためにも・・・・お前を連れ戻すためにもな。

「オリャァァァ！！」」

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

ドォォン！

俺は根性で電磁力に逆らってノブナガにギガスキャンの一撃を決めた。・・・だけどこの一撃を持ってしても・・・・

「はぁ・・・はぁ・・・・メダルを奪うことは・・・・できなかったか」

ノブナガからメダルを取り出すことはできなかった。

「さすが身体の丈夫なサソリ、カニ、エビのメダルで構築された強固な肉体をお持ちですね。さぁ、オーズにトドメを刺しなさい」

「・・・・・」

レイは無言で立ち尽くすノブナガに近づいていくと・・・・

「・・・・この俺に命令をするな」

ブンッ！

「何っ！？ぐあっ！？」

「きゃっ！？」

ノブナガは成美さんを掴んでいるレイの左腕を攻撃して成美さんを解放した。

「俺は天下人だ。お前達の配下に下った覚えは一度もない」

「くっ！？まさか先ほどのオーズの一撃で再び意識が戻ったとでも言うのですか。・・・まさかそんなことがありえるはず・・・・」

「現にそうだからお前に攻撃しているのが分からないのか、たわけ者。・・・・キンジ。助かったぞ。この恩は必ず返す」

「そんなの返さなくていいぜ。俺達は友達だろ？」

「・・・友か。久々に言われたが・・・悪くない気分だ」

俺はタジャスピナーをレイに向けるとノブナガも剣をレイに向けた。するとアンクの変身してショッカーライダー達と戦っていたはずのプロトバースがあいつ等を何とかしたのか俺達のところに駆けつけた。

「大丈夫かキンジ！！・・・・ハッ！・・・どうやらノブナガはすでに何とかしたみたいだな」

「お前にも世話をかけたなアンク」

「・・・そう思ってんならあとでアイス奢れよ」

プロトバースの呟きにノブナガは「フッ！」と笑う。・・・・この様子ならもう暴走することはないだろうな。

「さぁ、観念して降参するんだな。仮面ライダーレイ」

「エヴィルのことを洗いざらい吐いてもらうぜ」

『ブレストキャノン』

「・・・これは私の負けのようですね」

そしてプロトバースもブレストキャノンを装備してレイに突きつけるとレイは両手を挙げて変身を解除した。

「これでひとまずは事件解決だな」

「ああ、これで俺の単位も大丈夫だろ。・・・・それはそれとして・・・お前何か隠してないか」

プロトバースの変身を解除したアンクはベルトをノブナガに返しながら鋭い視線で睨みつける。

「・・・・俺が何を隠しているというんだ?」

「・・・・チッ!・・・・分かったよ。黙っておいてやる」

アンクは人間の姿に戻ったノブナガにそう告げていたが、このときの俺はいつも通りの様子のノブナガだと思っていた。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

それから2時間後、白峰を京都武偵に引き渡した俺達は報告も含めて武偵高へと向かうとクスクシエに明かりがついているのに気づいたので入ってみると・・・・

「待っていたわよキンジ!」

「話は聞いているぞ相棒。・・・・大変だったな」

「先輩！お疲れです！」

みんなが俺達を迎え入れてくれた。

「・・・キンジ。・・・俺がここにいていいのか？」

「何言ってんだノブナガ。ここにいるのはお前が戻ってきてくれるって信じていた奴らだぞ。お前がいないと駄目だろうが」

何処か複雑そうな表情を浮かべたノブナガに俺はそう告げるとみんなはノブナガに向かって微笑んだ。・・・ここには誰もノブナガを拒絶する奴なんかいない。一度は命を狙われていた正太郎ですら先ほどから成美さんに怯えてこそいるがノブナガに敵意を見せていないんだからな。

「・・・いくら天下を取ったとしても・・・これは手に入れることはできないだろうな」

「こういう人と人との繋がりを絆っていうんだぜ」

「・・・キズナか。初めて聞いた言葉だが・・・どこか満たされた気分になる言葉だな。覚えておこう」

そんな会話をしているとさりげなく近づいてきた伊達さんが俺とノブナガの肩に腕を乗せてきた。

「はらほら！若い奴らがそんな辛気臭い会話してんじゃないって！ほら！お前らも飲めよ！」

「伊達さん。それはお酒です。俺達は飲むことはできません」

「後藤ちゃんは厳しいね～。別に酒ぐらい・・・ちょっと待って
後藤ちゃん耳を引っ張るのはやめてくれない？・・・ねぇ・・・
謝るから。ほらごめんなさいクロプス。・・・ちょ！？痛いって
後藤ちゃん！！後藤ちゃ～～～ん！！」

俺達さんは後藤に耳を引っ張られて部屋の片隅に運ばれていくと
教師が生徒に正座をさせられていた。

「・・・まあいいか。それより俺達も食べようぜ？」

「すまないがキンジ。俺は少し夜風を浴びてくる」

そう言ったノブナガは外に出て行った。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺達がクスクシエで騒いでいる頃、ノブナガは教務科の掲示板に
寄りかかっているとアンクがその場にやってきた。

「・・・お前・・・もうそろそろなんだろ？」

「・・・さすがにオリジナルのグリードには気づかれてしまうか。
・・・この身体はたしかに限りなくグリードに近い構造をしている

がコアメダルに宿る意識で動いているんじゃない。生前の欲望が宿った大量のセルメダルと擬似的メダルで身体を構築されているだけだ。そして完全な姿となってこの欲望は失われてしまった。・・・今の俺はかすかな残留思念。・・・言わば亡霊だな」

「ほう！それは好都合だな！」

「「っ！？」」

突如その場に声が聞こえたかと思うと空間が歪みショッカーライダー達が数体現れた。

「チッ！あの時逃げられた色違いマフラー達か」

「・・・我々はエヴィルを裏切った人造グリードを排除しにきた。そして排除を終了させ次第ギジメダルを回収しろと首領様からの命令だ。大人しく消えてもらうぞ人造グリード！」

「チッ！・・・今、キンジ達を・・・」

アンクはバッタカンを取り出して俺達を呼ぼうとしたがいつの間にか怪人態となっていたノブナガがその行動を止めた。

「可能なかぎりこの姿をあの者達に見せたくはない。呼ばないでくれ」

「・・・分かった」

そしてその数分後。・・・3～4回ほど教務科のほうから次々と爆音が響いた。

「おい！どうしたんだアンク！！」

「キンジ！あそこ！」

爆音に気づいた俺とアンクが教務科の前まで駆けつけるとアリアは身体からセルメダルを次々と落とす人間の姿のノブナガを発見した。

「アンク！！いったい何があったんだ！！」

俺とアリアはノブナガのところに駆け寄ってアンクに何があったかを聞いてみると・・・・アンクはやるせなさそうな表情で口を開いた。

「・・・ノブナガは暴走したせいでセルメダルに宿っていた過去の欲望が失われていた。今のノブナガは人間でいう魂でメダルを繋ぎ合わせていたんだ。そしてそれすらももうすぐ身体から離れてしまう。そんな身体でノブナガはショッカーライダー達と戦ったんだ」

「なん・・・・だと？」

それはつまり・・・・ノブナガは・・・・

「キンジ。つまりどういうことなの？」

「・・・・ノブナガは・・・・もうすぐ身体がメダルに変わっちまう」

俺がアリアにそう説明するとアリアはバッグからあるだけのセルメダルを取り出した。

「それならこれでアンクのようにセルメダルを集めて復活・・・・」

「・・・・それができないんだよ。・・・・ノブナガには」

ノブナガはコアメダルに意思が宿っている構造ではなく身体を構築するセルメダルに意識が宿っていた。その欲望が消えたということはセルメダルが核となるものを失ったことになって・・・・意思のないメダルになるってことだ。

「・・・すまないキンジ。お前達が俺を歓迎してくれたことは嬉しいが・・・俺はそろそろ本来いるべき場所に帰らせてもらう」

「ふざけんな!!なに言ってんだよノブナガ!せっかく・・・・せっかくみんなが・・・・」

「キンジ・・・・」

俺はボタボタと目から涙を流すと・・・・アリアはその光景を見てられないと思った様子で顔を背けた。

「クスクシエの者達には謝っておいてくれ。・・・・それとキンジ。・・・これを受け取ってくれ」

「・・・・・・？」

ノブナガは俺の右手に3枚のメダルを握らせた。・・・・このメダルは・・・・ノブナガのメダル！？

「何やってんだよバカ！これじゃお前は・・・・」

「・・・・これでいい。お前がそれを持っていてくれるかぎり・・・・俺達のキズナは消えることはない。・・・・さらばだ・・・友よ・・・」

チャリン　チャリン

ノブナガは俺に黒いメダルを3枚託すと最後にそう言い残してセルメダルとなって崩れ去ってしまった。

「こんなのって・・・・こんなの絶対おかしいだろ？・・・・どうしてノブナガは消えないといけないんだよ！！ノブナガはたしかに生きて・・・・」

「・・・・それは違うぞキンジ。・・・・ノブナガは最初から死んでいたんだよ。エヴィルはその死をメダルの化け物にして冒涜したんだ」

「・・・・アンク。エヴィルはこれからも生きている人の心も・・・・死んでいる人の心も弄ぶのか？」

「・・・・たぶん。・・・・そうなんだろうな」

「だったら俺がエヴィルを潰す。これ以上・・・・あんな奴らのせいで誰かを泣かせないためにも・・・」

俺はこの日この瞬間・・・・エヴィルを倒す決意を固めた。

リロード13・キズナ（後書き）

次回で再装填編は終了です。そして久しぶりに原作の内容を進めます。

ラストリロード・ＮＥＷ　ＳＴＡＲＴ（前書き）

昨日は更新できなくてすいません。しかしこれからは平日は二日に一回の更新になると思います。それでも可能なかぎりは毎日更新します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

ラストリロード・NEW　START

俺の目の前でノブナガがメダルとなってこの世から消えてから数時間後、エヴィルの研究室では真木博士とカザリがモニターで俺とノブナガの戦闘の一部始終を見ていた。

「・・・世界に良き終末を与えるために作り出したはずのノブナガ君が逆に終末を迎えてしまいましたか」

「残念だったねドクター。それはそれとして・・・白峰も捕まっちゃったし、彼の代わりがほしいんだけど?」

「・・・分かりました。影月様の方に掛け合ってみましょう」

「その必要はないぞドクター真木。すでにこちらに1人手配している。だがその者は現在仕事中なので2~3日後にやってくるだろうな」

真木博士とカザリが部屋の扉を振り返ると・・・灰色のスーツを着た30代前半ぐらいの男が立っていた。

「・・・これは影月様。どうかなさいましたか?」

「8月の最終日・・・エヴィル本部にて幹部全員が集まっての会議がある。・・・新幹部であるお前も出席してもらうぞ」

「了解しました。・・・もしやとは思いますが・・・いよいよ首領様の宿願を果たすのですね?」

影月と呼ばれた男は真木博士の言葉に頷くと無言で研究所を後にした。

「ドクター・・・あの男は何者なの？」

「・・・そう言えばカザリ君には説明していませんでしたね。・・・彼は影月信彦（かげつきのぶひこ）。エヴィル最初の改造人間にしてエヴィルの？２ですよ」

「あの男がここで２番目に強い奴なんだ。思っていた以上に殺気が強くてびっくりだよ」

カザリの頬にはかすかに冷や汗が流れていた。

「あんなのが２番目ならここのリーダーはどんな奴なのさ？」

「・・・一言で言うならば・・・『破壊者』ですかね。おそらく完全体となった君でも傷はつけることは難しいでしょう」

真木博士の言葉をカザリは「まさかぁ！」と冗談だと思って聞いていた。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

8月31日、夏休みの最終日。俺は現在・・・・

「まったく・・・どうして俺まで・・・・」

「仕方ないだろ!俺の単位が0，1単位が足りなかったんだから!!」

探偵科の学科棟の掃除をしていた。・・・・簡単に説明すると俺や後藤はあの時の野球の試合で単位を何とかしたが・・・・アンクと信司は単位が足りていなかったので・・・・お情け依頼の掃除で単位を稼いでいるのだ。ついでに言うとアンクは不足が0，1単位だったので探偵科の掃除だけだが、残り1，2単位だった信司は武偵高の学科棟をすべてと言われて外を走りまくっている。

「信司の奴・・・大変そうだな」

しかし探偵科だけでもそれなりに広いため誰かに手伝ってもらおうと電話をしてみたんだが矢車は俊の病院に付いていくといって断られ、正太郎と陽は成美さんに振り回されたらしく疲れきっていたので声がかけにくかった。後藤は訓練中らしく連絡が取れないし、凍条はこんなときに限って風魔と喧嘩の真っ最中だったらしく連絡が途切れちまった。平賀さんにはオーラインクロスの改造を頼んでいるんで邪魔したくはないし、武藤は「モテる奴の手伝いなんてするか!」と電話越しに叫ばれ・・・不知火は「他に頼む人、いるんじゃないかな～」と笑い混じりに電話を切られた。白雪は近くの神社で祭事があるので不在で理子は同人誌の即売会とやらにジャンヌを連れていってしまっている。

「久しぶりだな。・・・こんな静かなのは・・・・」

最近は俺の周りに必ず何人かが集まっていた。・・・・だけど今日はアンクだけ。俺は久しぶりに寂しいと思ってしまった。

「剣崎は亮太郎と渉と一緒に信司を手伝っているし・・・・あとは・・・・」

俺はアンクと別れて別の教室を掃除していると・・・・

「うっわ。しけた顔してるわね～。いつものことだけど」

アリアがやってきた。先ほど「あとで何か奢ってやるから掃除を手伝え」とメールをおくったが本当に来てくれるとは・・・・。

「あらあら寂しかったの？顔にそう書いてあるわよ。・・・・会いたかった？」

「まぁ・・・・ちょっとな」

いじめっ子の顔で笑いかけてくるアリアに俺は少しムッとなりながら返事をすると、何故かは知らないがデレデレとした表情をみせた。

「うんうん。正直なキンジはいいキンジよ！このアリア様も手伝ってあげる！」

「助かる。俺とアンクだけじゃ深夜までかかりそうだったからな」

俺達は強襲科の鬼教官である蘭豹が最近婚活に勤しんでる噂話やハピナスが強すぎるなどとくだらない会話をしながら掃除を続けた。

そして夕方となりようやく掃除を終わらせた俺とアリアは屋上の西側のフェンスに並んで立っていた。・・・・アンクも誘おうとしたが「そんなことよりも労働の後のアイスだ！」と言い残して1人だけとっとと帰ってしまった。

「キンジ・・・・ノブナガのことはもう本当に大丈夫なの？」

「・・・ああ。平気だって言ったら嘘になるが・・・・このメダルがある限り俺達とノブナガの絆は消えることはないんだ。悲しんでばっかじゃいられねぇよ」

そう言って俺が内ポケットから黒いメダルを3枚取り出して握ると・・・・沈みかけの夕日がさらに強く輝いた。

「・・・強いのねキンジは。・・・それにしてもすごい夕日。吸い込まれそうね」

「俺の袖にでも捕まっておけ。吸い込まれそうならな」

詩的なことを言ったアリアに適当に答えてみると・・・・アリアは本当に袖を掴んできた。

「今日掃除を手伝いにきたのは・・・・アンクの単位の手伝いもあったけどそれ以外に2つあるの」

「2つ、理由？」

「うん。1つは時間が欲しかった。あたしはあんたにもっと話すことがあったはずなのに・・・・勇気がでなくてくだらない話ばっかしていたわ」

話す事っていうのはおそらく緋弾のこととかだろうな。

「あの後はどうだ？あの光の球を撃ったり、理子みたいに自由に操れたりできるようになったのか？」

「いいえ。実は試してみたけどあれからできないのよ。条件でもあるのかしら？」

肩をすくめていったアリアに俺は少し安心していた。アリアの体内にある『イロカネ』は白雪やジャンヌが持っているような不思議な力を発動させることができるらしい。普通はそんなものが自分の身体の中に入っていたとなると自分が怖くなったりもするはずだが・・・さすがと言うべきか、アリアは今の口調から察するに少なくともその力を恐れてはいないようだ。それが正しいことなのか、危険なことなのか、俺には判断できないがな。

「あのね、曾お爺様はあの場で言っていた通り本当に消えたわ。あの後、どこの国にも何の情報もないの。でも曾お爺様は自分を『死んだ』と思わせておいて、唐突に現れるのが悪い癖なのよ。香港、ニューヨーク、バチカン・・・過去に何度もね」

「つまり・・・まだ生きている」

俺がそう続けると、アリアはコクリと強く頷いた。

「イ・ウーは組織としては崩壊したらしいわ。リーダーが不在になって『緋弾』が部外者の手に渡った場合は解散することを前もって決めていたみたい。まぁ奴らは元々、バラバラの目的を持って集まっていた組織みたいだしね」

今思うとイ・ウーの最後はあっけなかった。あっけなさ過ぎて違和感を感じた。・・・・まぁ、いまさら気にすることでもないと思うが・・・・。

「それでね。イ・ウーの証拠が充分集まったらママの裁判が始まるの。・・・・早ければ9月中に高裁判決が出るの。それで無罪になって検察が上訴すればママは釈放されるの」

「そうか。よかったなアリア」

「本当にありがとうキンジ。ここまで来れたのはあんたとアンクのおかげよ」

振り向いたアリアの笑顔に照れた俺は顔を背ける。

「別に改まって礼を言わなくてもいい。俺はただ武偵憲章第1条を守っただけだ」

つまり『仲間を助けた』だけ。そういうことにさせてもらおう。

「ママの裁判が終わったらあたしね・・・・・ロンドンに帰ろうと思うの」

その言葉に俺は・・・・驚きはしなかった。いつか・・・この時

がくると分かっていたからな。

「もう学校にもあまりこないかもしれない。裁判で忙しくなるから、あんたと会えるのも・・・もしかしたら今日が最後かもしれないの。元々あんたとの契約は『武偵殺し』の件を解決するまでだった。だから本当は理子の証言が取れることが決まった6月に満了していたのよね。でも・・・あたしはズルズルとあんたを引っ張っちゃっていた。そのせいであんたが単位不足になった」

お前・・・本当はズルズルと俺を引っ張っていたことを気にしていたんだな。・・・するとアリアは小さく頭をふせてフェンスにおでこをつけた。

「でも7月の祭りのときにあんたが『イ・ウーの一件が片付くまでは付き合ってやる』って言ってくれたとき・・・涙がでるほどうれしかった。キンジはなんて優しい人なんだって思った。・・・・イ・ウーでもバカなあたしのために命がけで戦ってくれて・・・・・あたし・・・やっぱり最良のパートナーはキンジだって思った。でも・・・だからこそあなたに迷惑をかけたくないの」

頭を上げたアリアは再び東京に視線を戻しながら続けた。

「だから・・・この0，1単位の小さな仕事が最後の依頼だったのね。まぁそれもあたし達らしくていいのかもしれないけど。・・・・そういえば最初の猫探しの依頼も0，1単位だったわね」

「ああ、そうだったな」

「ほ、ほら！元気出して笑いなさいよ！これはハッピーエンドなんだから笑顔で見送ること！」

アリアは俺の頬をつねって引っ張りあげて笑顔を作らせる。

「あはっ、ひどい顔！」

俺の顔がよっぽど面白かったのかアリアは声を出して笑った。俺もつられて笑うと、それで気が済んだのか手を離してくれた。

「ねぇ、キンジは来年の3月で武偵を辞めるのよね。その思いは変わらないの？」

その言葉に俺は小さく頷いた。

「でもキンジ。ちょっとした提案があるわ。来年の3月までロンドン武偵高に来るの。イギリス武偵局とかSASで研修もできるし、英語はあたしが付きっきりで教えてあげる」

それはもう「ちょっとした提案」じゃないだろ。・・・悪いが俺は行くことができない。エヴィルは全世界で活動している様子だがグリードは日本だけ・・・少なくとも俺はオーズとしてグリードやヤミーを何とかしないといけないからな。・・・そんな俺の内心を悟ったのかアリアは・・・

「・・・なんちゃって」

苦笑いして顔を伏せた。実は少し期待していたのか、その表情はどこか残念そうだ。

「あとね、もう1つの理由は・・・思い出が欲しかったの。今まであたしのパートナーになれた武偵は・・・キンジ。あんただけ

だったわ。もう・・・あんた以上の人は一生見つからないかもしれない。だからキンジのことは忘れないよ。そしてできればキンジにもあたしの事・・・忘れて欲しくない。だから今のうちに少しでも一緒に過ごして思い出を・・・・」

そしてためらいがちにモジモジとしたアリアは照れくさそうに俺に命令してきた。

「あ、あっち向いてて！」

「っ？」

俺は仕方ないと思いながら視線を横に逸らすと・・・しばらく無言の時が流れた。すると頬を赤くしているアリアは『空き地島』のほうに何かを伝えたいような視線を送りながら口を開いた。

「キ、キンジ、ごめんね。変なことを言っちゃって」

「・・・・・・」

アリア・・・お前は何が言いたいんだよ。どういう意味なんだよ。思い出ってなんだよ。・・・・いや、本当は分かっている。・・・だが俺にはそれはできないんだ。ヒステリアモードのこともあるがオーズのこともあって欲望を持っちゃいけないんだ。・・・・俺はそんなことを思っていると黙り込んでしまっていた。

「・・・何か恥ずかしいわね。こういう空気・・・」

「・・・・そうだな」

そう答えた後に俺は自分でアリアを傷つけてしまったことに気づいた。これじゃアリアの気持ちを無視したような形じゃないか。せめて理由ぐらいは説明してやらないと無責任だよな。

「アリア・・・これから話す事を驚かないで聞いてくれ」

俺はヒステリアモードのこととオーズの暴走の可能性をアリアに話そうと思ったその時、近くの気配に気づいた。

「っ！」

気配のした東側のフェンスの上を振り向くと・・・・そこには戦場の運用を理念に作られた実戦的な狙撃銃ドラグヌフを肩に掛けている狙撃科のSランク武偵のレキがいた。

「レキ・・・」

あんなところで何をしてたんだ？・・・それ以前にいつからいたんだ？いたことにまったく気づかなかったぞ。同じSランクであるアリアでさえ・・・。

「え、えっとね！？これは・・・その！・・・ただ一緒に仕事をしていたから・・・その！」

さらに顔を赤くしたアリアは俺から少し離れる。どうやら一緒にいたのを見られて恥ずかしかったらしい。

「オルナミンG！！・・・そうよ！勝負に負けたから買ってこなきゃね！」

一刻もこの恥ずかしい空気から逃れたかった様子のアリアは何度かこちらを振り返りながらツインテールをなびかせて早足で階段を下りていった。・・・ついでに言うとオルナミンはGなんてない。・・・あるのはCだ。

「・・・お邪魔でしたか？」

アリアの背中を見送ったレキはこちらの方にやってきてようやくしゃべった。

「・・・何をしていたんだよ？」

「読んでいました」

「何をだ？」

見たところどこにも本を持っていないぞ？

「風を・・・」

レキはただその一言をいったかと思うといつの間にか俺の後ろに立っていた。

「・・・風が狂い始めてる・・・」

「なんだって？」

俺は何となく背筋に寒いものを感じた。・・・レキの目がどこか虚空を見ているようなムードだったからだ。なんというか・・・こいつもどこか電波系だよな。

「キンジさん」

「何だよ・・・っ！？」

俺が少したじろいだその時・・・レキは前触れも無くいきなり背伸びをしてキスをしてきた。

ガチャン！

「あっ！・・・・・」

ガラスの割れる音に、俺はレキの両肩を掴んで放しながら振り向くと・・・ドリンクのビンを2本とも落として割ってしまいながら立ちすくんでいたアリアがいた。

「そ、そうだったのねキンジ。ごめん、あたし・・・そういうこと分かんないから。あっ、別にキンジが悪いとかじゃないの。だって・・・高校生だもんね。好きな人ぐらい・・・だ、だからさっきあんたは、ああだったのね。ごめん！本当にごめんねキンジ！」

アリアはそう言い捨てると脱兎のごとく走り去っていった。

「アリア・・・・」

俺はそれを追いかけようとした途端、後ろでちゃきという音がした。見ればそこでは予想した通りレキが獣を肩から下ろしてグリップを握っていた。

「キンジさん。あなたはアリアさんと結ばれてはならない」

「なっ！？」

いきなり何を言っているんだレキ！？

「これからは私がキンジさんのパートナーになります」

「お、おい・・・」

ドクンッ！

先ほどのキスのせいで嫌な鼓動の感覚を感じた俺はレキから数歩引き下がる。

「あなた達は強くなった。・・・イ・ウー程度の相手ならそれで充分だったでしょう。実際、今のキンジさんと私が素手で戦えば十中八九キンジさんが勝つ」

こいつ・・・イ・ウーのことも俺のことも知っているのか！？

「・・・いえ、普段のキンジさんでもおそらく私が勝つことはできないでしょう。でもこれからの戦いはそんな力比べでは倒せない。だからあなたはやり方次第ではあなた達を簡単に殺せる人達がいることを知るべきです。狙撃手、仮面戦士、怪人。・・・今から私がそれを教えて差し上げます」

流れるような手つきで弾倉に装甲貫通弾を込めた前で・・・俺は完全にヒステリアモードになってしまう。

「そろそろ頃合いのようですね」

弾倉を再び銃にセットしたレキを見て・・・俺は自分の間抜け

さを自分で毒ついていた。俺の人生は事件を解決し終えて油断した頃に新しいトラブルがやってくるんだったな。白雪のときも理子のときもそうだったのに気を抜いていたよ。

「キンジさん」

「何だ？」

「私と結婚してください」

余りにも意外な言葉に・・・俺は「はっ！？」と声にならない声をもらした。

「レキ・・・聞き間違いだとは思うが・・・今、何を？」

「プロポーズしたのです。あなたに」

「・・・・・・」

粉雪・・・あの時は疑って悪かった。お前の占いは正しかったよ。今月中に求婚される。・・・たしかに今日は８月３１日だよ。

「ま、待ってくれレキ！いきなりすぎる。少し前置きをして欲しかったところだよ」

「前置きはしたつもりです。『私がパートナーになります』と」

「・・・光栄な話だが・・・それは人に銃を向けて話すことじゃないと思うよ？」

ヒステリアモードの俺はできるだけ穏やかに対応して後ろに下がろうとするが・・・・

「逃げられませんよ」

レキはドラグヌフを向け直してきた。意外と情熱的なタイプなんだな。

「もし断るというのなら・・・・・」

この日、この時から始まってしまった大事件の新たな幕開けを告げられることとなった。

「風穴を開けますよ」

アリアのお株を奪う・・・この台詞で。

ラストリロード・ＮＥＷ　ＳＴＡＲＴ（後書き）

今回でようやく原作５巻の内容が終了。
※注意・今回会話の中にでてきた『破壊者』は平成１０番目のマゼンタのライダーではありません。

破壊者についてはもうしばらく正体は明かさないつもりです。次回は今更ですが世界観設定を書こうと思います。その次からはようやく原作６巻の内容に入ります。

『緋弾の世界』世界観（前書き）

この物語の世界観です。ちょっと大雑把な感じですが時折少しずつ改良します。

『緋弾の世界』世界観

この世界には様々な仮面ライダー(ライダー)が存在し、その者達は仮面戦士とも呼ばれる。

仮面戦士科(ライダー)

この物語に登場する武偵高のオリジナル学科。ライダーシステムを持つ生徒はこの科目を取ることが義務づけられている。基本は徒手格闘、剣術、棒術などの強襲科と同じような実習訓練と自動2輪の運転の基本、応用を行う。仮面戦士科の生徒は在学中に自動2輪の免許を取得することを義務づける。この科目を所属する者のみ複数の科目を選択することが許されている。尚、仮面戦士となる者は以下の決まりを守らなければならない。

1、仮面戦士は自身の欲望のためにその‘力’を使ってはいけない。
2、仮面戦士は生身の人間に、その‘力’を使ってはいけない。
3、強くあれ。鍛えぬけ。ただし、力に飲まれるな。

以上の3つは国際協定で決められたルールなので守らなければならない。

仮面戦士科の教科書

格闘術やバイクの技術などが記載されている実践伝と、これまでに出現した怪人達の説明が記載されている記録伝の2冊で一つの仮面戦士科の教科書。キンジは暇なときに何となく記録伝の方に目を通してたので大体を覚えている。

特捜科(レンジャー)

仮面ライダーの支援及び怪人対策を専門とする学科。昭和の初代仮面ライダーの協力組織である仮面ライダー隊をもとに作られてい

る。怪人と言う、人外相手の危険な戦闘をするため、他学科のＡランク以上の武偵によって構成されており、武装も怪人対策用の極めて強力なものを使用する。この学科を担当する教務科の人間は、元少年ライダー隊のメンバーを中心に構成されている。レンジャーという呼び名は、集団戦闘を専門とする事と、仮面戦士科と対をなという事の意味を持つ。

和食料理『猛士』
　ＳＳＲと装備科の学科棟の間辺りにある第一食堂。和風のまったりできる雰囲気から人気が高い。オーナーは立花市郎。

西洋料理『ＡＧＩＴΩ』
　探偵科と情報科の学科棟の間の第二食堂。独創的な料理が出ることで有名。オーナーはこの武偵高のＯＢの津上昇一。

多国籍料理『クスクシエ』
　強襲科と仮面戦士科の学科棟にある第三食堂他の食堂は和風洋風と分けられているが、ここは留学してきた生徒たちが故郷の料理を食べたいと言う強い要望で2，3年前に建てられた場所。オーナーは白石千代子。

敵対組織

ＮＥＶＥＲ
　イ・ウーから離脱した大道・Ｍ・カツミが作り上げた集団。人員は３０人弱と小規模な組織だがカツミは仮面ライダーに変身し、それ以外のメンバー全員がドーパントに変わるため戦力は決して低く

は無い。エヴィル首領によって1度壊滅したが・・・。

エヴィル

　世界征服を企む悪の秘密結社。世界各地で有名だった仮面戦士が集まっている他にも攫った人々などをかつてレジェンドライダー達が戦った怪人などに改造するほどの技術力もある。各国はエヴィルの存在を認知してこそいるがあまりの強大すぎる組織なため対抗策をレジェンドライダー達に任せている。オールライダーが激闘の末に打ち破った。

財団？

　素性がまったく分からない謎の組織。エヴィルと何やら関わりがあったようだが詳しいことは不明。

武偵に関わる企業

鴻上ファウンデーション

　オーズである遠山キンジを支援する世界で2番目の巨大企業。基本的には洋菓子の会社として有名だが、最近ではライドベンダーやカンドロイドを製造して世界各地に配置している。会長はＴＶなどに顔を出さないため鴻上が会長ということを社員以外で知る人物はごく僅か。東京武偵高のサポーターとして年間１００億ほど投資している。

ミュージアム

　Ｗやアクセルなどが変身するガイアメモリを作り上げている組織。現在のトップは陽の母親の小林文音（こばやしふみね）社長。元々は地球の記憶から仮面ライダーを生み出すためにＴ１ガイアメモリ（ドーパント達に使

用されるメモリ）の設計図を完成させるが、ある日何者かにその設計図を盗まれてしまった。世界で始めて装着型の仮面戦士‘仮面ライダースカル’のスカルメモリとロストドライバーを作り上げたことでも有名。

素晴らしき青空の会

イクサシステムを作り上げることに成功したスポーツ製品の会社。３０年前からファンガイア族に対抗するためにイクサシステムの計画していたが、２０年前に和解後キバの鎧の戦闘データを下にイクサシステムを完成させた。世界的に流通しているのは第一世代のイクサだが名誉会員である名護の持つイクサシステムだけは『ｖｅｒＸ』となっていて様々なウェポンや上位形態がある。

ＺＥＣＴ

軍事目的でマスクドライダーシステムを作り上げた組織。世界的なライダーシステムの中で唯一、超高速特殊移動・・・通称‘クロックアップ’という技術を作り上げた。通常のライダーシステムは自分と相性が良いと判断されて手に入れることができるが、マスクドライダーシステムだけはゼクターが変身者を選ぶために有名となっている。

ＢＯＡＲＤ

人類基盤史研究所という医学的に有名な施設がある企業。生物の始祖たちであるアンデットと呼ばれる怪人達を封印したラウズカードが組み込まれているため量産型のライダーシステムは製造していないが、装着者の思いによって戦闘能力に繋がる融合係数は上昇も低下もするラウズシステムを作り上げる。ライダーシステムを作り上げる企業としては製作したシステムが少ないため有名ではない。しかし上記の理由で医学的には有名。

スマートブレイン
　世界で一番巨大な企業にして、世界で最もライダーシステムを作り上げていることで有名な企業。特別な金属から発せられるエネルギー‘フォトンブラッド’を動力に作り上げられたライダーシステムはライオトルーパーだけで１００万体を超えている。ライダーシステムだけではなく家電製品を販売することでも有名。

ＭＩＲＲＯＲ　ＷＯＲＬＤ
　天才科学者兼、超能力者として有名な神崎士郎によって立ち上げられた団体。世界で初の魔力を宿した科学的ライダーシステムを製作したことで有名。１３体の鏡の戦士‘ミラーライダー’を製作後に神崎士郎は表舞台から姿を消した。・・・蟹のカードデッキを持つ者はかませのように勝てないという都市伝説がある。

ＢＥＮＴＡＲＡ
　格闘家でありながら科学者として有名なユーブロンがチームを組んで製作したライダーシステム。ミラーワールドとは違う異世界‘ベンタラ’を発見したことによりその空間を利用することが決まり、日本のミラーライダーのデータを元に‘ＫＡＭＥＮＲＩＤＥＲ’の設計図を完成させた。しかしその半分がゼイビアックスと呼ばれる研究員の１人に盗まれてしまったため７つしかライダーシステムは作り上げていない。

ギジメダル
パンダメダル
　真木博士がオレンジの爬虫類コアメダルを参考にして作り上げた

メダルの1枚目。オーズが使用した場合はトラアームのホワイトカラーverのようになる。そのパワーはゴリラアームに匹敵するがスピードはトラアームよりも格段に落ちる。

カンガルーメダル

真木博士がオレンジの爬虫類コアメダルを参考にして作り上げたメダルの2枚目。オーズが使用した場合はボクシングのグローブのようなものが装備されたアームとなる。足に使用することも可能で使用した場合はフットワークが素早くなる。

サソリメダル

人造グリードであるノブナガの身体を構築していたメダル。地中における振動探知能力に長ける。頭頂部に付いたサソリテイルは、自在に伸びて敵を突き刺すほか、ロープの様に締め上げる事もできる。ノブナガ誕生当初から身体の中に入っていたがこのメダルにノブナガの意思が入っていた訳ではない。

カニメダル

人造グリードであるノブナガが暴走する原因になったメダルの1枚。オーズ使用時はカニアームとして両肩に鋭い刃が装着され二刀流の白兵戦を得意とする。また、これを交叉させる事で鋼鉄をも切り裂くカニシザーにもなる。

エビメダル

人造グリードであるノブナガが暴走する原因になったメダルの1枚。オーズ使用時は足先から磁力を発する能力を持ち、これを利用して空中での二段ジャンプや地面からの垂直浮遊を可能とする。しかしジャンプ力はバッタレッグの半分程度。

オリジナルカンドロイド

エビカンドロイド
エビ型のカンドロイド。巨大化し、オーラインクロスに合体する事でサカエコンボのみが操れる浮遊形態・オーラインマグレブへと変形させる。

オリジナルコンボ

サカエコンボ　固有能力：磁力操作
サソリ・カニ・エビの組み合わせで変身する鋼鉄系コンボ。基本カラーは黒。変身時は全身から金属光沢の光が放たれる。サゴーゾコンボと同等の防御力を持ちながら、高い敏捷性を誇る。熱探知能力を持ち、両手のカニブレードと頭部のサソリテイル、カニブレードを交叉させてハサミにしたカニシザーを武器として戦う。カニブレードはブレード同士が引き合う武器であり、この特性を利用してブーメランのように使う事も出来る。エビレッグは両足を揃えると扇状の尾を伴ったエビの様に変化し、尾から放つ磁力を大気中の金属元素や地球の磁力と反発する形で放出する事で、空中を水中同様に泳ぐ事が出来る。
必殺技：マグネダイブ
サソリテイルの針を相手の身体に突き立てて体内に磁力を流し込み、磁力の影響で浮遊状態で身動きの取れない敵目掛けてカニシザーを構えて突撃し、衝突と共に切り裂く。敵の身体に注入した磁力に誘導による追尾能力を持つ上、カニシザーの刃同士が強力な磁力で引き合う事で威力を上げている。

オリジナルバイク

オーラインクロス
　キンジ専用のオリジナルバイク。モデルはスズキ・カタナ。最高時速は３５０キロも出すことができ、最高時速から停止する時は後方部からパラシュートが発射される。トラカンドロイドと合体するとオーラインワイルドになる他、平賀の製作したオリジナルカンドロイドと合体することにより様々な形態になるらしい。

オーラインワイルド
　トラカンドロイドと合体して変化したオーラインクロスの極地戦闘用形態。余分なエネルギーを吸収するトライドベンダーと違って消耗するエネルギーは2倍になる。しかしその分戦闘力は高く最高時速はクロックアップに匹敵し、ラトラーターコンボのライオディアスを熱線のように放つ‘ディアスシュート’という技が使える。ちなみに技名を考えたのは正太郎。

オーラインマグレブ
　サカエコンボの超磁力を増幅する事で発生させる反発力と吸引力を利用し、地面から浮遊した状態でリニアモーターカー並のスピードで動く事が出来る。磁力を利用して、メダルで構成されているヤミーやグリードに猛スピードでの追尾突撃を仕掛ける事も出来る。

『緋弾の世界』世界観（後書き）

もちろん増えたら更新します。

絶対半径（前書き）

今回から原作6巻の内容がスタートします。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

「ま、待て！待ってくれ！」

実戦用のスナイパーライフルであるドラグヌフの銃口が俺の方を向いている。向けているのは狙撃科の麒麟児のレキだ。

「何が気に入らないんだ・・・・レキ」

「あなたとアリアさんは結ばれてはならないからです」

「結ばれてっ！？」

妙なことを言われた俺は少し赤くなって口ごもる。たしかにさっきの俺とアリアは見方によっては親密な男女が語り合っているようにも見える。だけどそれで俺がレキに銃を突きつけられる理由が分からないぞ！！

「バ、バカなことを言わないでくれ。俺とアリアはそういう関係なんかじゃない。それにさっきのは・・・これから離ればなれになる話をしていたんだ」

「別れ話ですか。それならむしろ好都合です。キンジさんが、これで心おきなく私の主人になれますので」

そうだ。今一番分からないところはそこなんだ。・・・どうしてお前はアリアを追っ払って、俺に銃を突きつけてプロポーズなんかをしてきやがったんだ！

「レキ・・・どうして『結婚』なんだ?」

そもそも俺はヒステリアモードという病気を抱えている上にオーズという爆弾まで抱えているんだぞ。・・・こんな俺が人並みの幸せを掴める訳がないのにどうして俺にそんなことを言ってくるんだ?

「・・・そうすればキンジさんもウルスになれますから」

「ウルス?何だそれは?」

「『家族』という意味です」

家族だと!?・・・駄目だ。ますますレキの考えが分からなくなってきた。

「それは、まぁ、結婚した男女はたしかに家族になるだろうが・・・俺には兄さんがいるし、それで充分なんだ。・・・それに家族が欲しいなら養子縁組にでもしてもらったらどうだ?」

「風はあなただと言っている。あなたでなければならないと言っている」

何か、強い確信のこもった口ぶりでレキの瞳は俺を射抜くように見据えていた。・・・このレキはいつものレキとは違う。こいつのあだ名は『ロボット・レキ』。無口で無表情を決め込んでいる奴だったはずなのに・・・今のこいつからは強い目的意識のようなものが感じられる。・・・まるで命令か何かを受信したように。

「き、聞いてくれレキ!君の行為は矛盾している。俺と家族になり

たいのなら、なんで俺に銃を向けるんだ?まずはそれを下ろしてくれ。話し合おう。・・・な?」

「お断りします。異性とは話し合いで手に入れるものではなく力ずくで手に入れるものですから」

それがレキの男女観だっていうなら間違ってはいないと思うが・・・やり方を間違えていると思うぞ。・・・そう心の中で突っ込んだ俺の後ろには・・・掃除のために脱いでいた制服のジャケットをくわえて持ってきた白銀の狼がいた。レキの飼っているコーカサスハクギンオオカミのハイマキだ。

「っ!」

俺は少しでもドラグヌフへの気休めになるようにと慌ててハイマキからそれを奪い取って袖を通した。

「キンジさん。私も、すぐにあなたに婚約して頂けるとは思っていません。ですので今から7分間、あなたに猶予を与えようと思います。・・・私はこれから7回、あなたを襲います。あなたが変身しないで一度でも1分以上逃げ切ることができたのなら、求婚は撤回します。・・・どこへ逃げても構いませんよ。ただ事前にお伝えしておきますが・・・私の『絶対半径』は２０５１メートルです」

絶対半径・・・それは狙撃手による狙撃が可能な範囲の呼び方の一つだ。・・・そしてそれはつまり、その狙撃手が絶対に仕留められる距離のことだ。

「２０５１メートル四方どこへ逃げても、私の銃はあなたを射ることができる。この銃は私を決して裏切りませんから・・・・」

どうやらどう足掻いても話し合いでは解決しないようだな。・・・・こうなったら付き合ってやるよ。・・・このゲームにな。

「・・・では、7回までに私と婚約してくださいね」

そういえばどうして『7回』なんだ?・・・・そんなことを考える暇もなく・・・・

バッ!

「っ!?」

ハイマキが俺に襲い掛かってきた。俺はそれを避けると急いで階段を駆け下りる。あんな狭い場所にいても狙われるだけだしな。・・・俺は探偵科の教室に隠れようかとも考えたがハイマキが追ってきているためそれはできない。そして探偵科の外に出た俺はそこで・・・

ダンッ!

「っ!?」

右腕に痺れが走った。・・・どうやら撃たれたらしい。慌てて右腕を確認してみれば・・・袖のカフスボタンだけが掠め取られていた。

「くっ!?」

俺は去年強襲科でならったように狙撃手が狙えない曲がり角へと移動する。・・・狙撃銃は真っ直ぐしか狙えないからだ。

「ここなら・・・・何とか・・・・・」

しかしレキ相手にそんな考えでは甘かった。

ダンッ！

「なっ！？」

気がつくと右腕のカフスボタンまでも掠め取られてしまった。・・・・どうやらレキは電柱の柱を利用して兆弾狙撃をしたらしい。簡単に言うと柱を狙撃して跳ね返った弾丸で相手を撃つ技だ。・・・・レキはそんなことまでできるのか。

「そんなのありかよっ！？」

俺は近くのライドベンダーをバイクモードにしてここから離れようとするが・・・・

バンッ！

「しまった！？」

レキの装甲貫通弾でベンダーのタイヤが撃ちぬかれてしまい動かすことができなくなってしまった。・・・くそっ！まさかここまで何もできないなんてな。

「ちっ！」

こんなところで立ち尽くす訳にはいけないと思った俺は防弾使用になっている車輌科の倉庫に立て篭もった。・・・・その中に入って少しだけ余裕を感じた俺は冷静になってレキの狙撃を振り返る。

「・・・どうやら制服のボタンを狙っているらしいな」

制服のカフスボタンは全部で6個ある。レキはそれを1発づつ撃っているんだ。・・・『7回目までに私と婚約をしてくださいね』・・・レキ、6個のボタンがすべて無くなってしまった時、お前はどうするつもりなんだ?・・・そんなことを考えながら・・・俺は今、本当に何もできていないことに気づく。

「最近・・・どこかオーズの力に頼りきっていたかもな」

仮面戦士は強襲科のようにある程度は生身でも戦えないとならない。・・・あまり言い気分ではないが俺もそれなりに生身でも戦闘はできる自身があった。だから本当にたまにしか訓練はしていなかったが・・・思ってた以上にダメだな。

バンッ！　バンッ！バンッ！

「っ！?」

そんなことを考えていると、防弾ガラスの窓に射撃があたっていることに気づいた。・・・しかもその弾丸はすべて寸分の狂いもなく同じ場所にあたっている。・・・そしてレキは板に金槌を打ち込む要領でついに・・・・

ガシャァァァァァン！！

「っ！?」

防弾ガラスを撃ち破ってしまった。

ダンッ！　ダンッ！　バンッ！

「くっ！？・・・・」

そして窓が割られたかと思ったのもつかの間・・・・次々と俺のカフスボタンが撃たれてしまった。

「参った！分かったから、もう撃つな！」

頼みの綱のヒステリアモードが切れた俺は６個すべてのボタンが掠め取られた状態で、両手を上げてレキの前へと出て行く。・・・・ああ、分かったよ！散々思い知らされた！たしかにお前はヒステリアの俺なんかよりも強いってことがな。

「婚約でも何でもする。だからもう撃つな」

もしかしたらレキは７発目で俺を本当に殺していたかもしれない。・・・本当にレキは何を考えているか分からないからな。

「・・・それではキンジさん。今から私はあなたのものです。契りの詔は私が現代の日本語に翻訳したものなので・・・・ぎこちないかもしれませんが許してください」

ヘッドフォンを外してドラグヌフを足元に置いたレキは俺の前ま

で歩いてくるとその場にひざまずいた。

「私はこれからキンジさんに仕えます。あなたは私の銃を武力として、自由にお使いください。私の身体をあなたの所有物としてお使いください。花嫁は主人の言うことになら何でも従います。主人に仇為す者には一発の銃弾となり、必ずや滅びを与えんことを誓います」

お前は何を言っているんだ。・・・さっきまでオオカミとけしかけて、俺を撃ちまくってたくせに・・・。

「ウルスは一にして全、全にして一。これからは私達ウルスの４７女、いつでも、いつまでも、あなたの力になりましょう」

決められた文章を暗唱するようなレキに・・・俺はただただ唖然としていた。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「ハァッ！」

ブンッ！

俺がレキの狙撃に追い回されている頃、鹿児島のどこかの樹海ではヒビキさんと明日夢が修行をしていた。

「・・・よし、少し休め少年」

「ハァ・・・ハァ・・・は、はい・・・・」

2本の音撃棒をキャンプ用のテーブルに置いた明日夢はクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出してイスに座っているヒビキさんへと持っていく。

「ヒビキさん、どうぞ！」

「おう！サンキュー！」

ヒビキさんはそれをゴクゴクと飲むと自分の腰についている音叉をテーブルに置くと少し困ったような表情をする。

「・・・なぁ、少年。前にも言ったけどさぁ音撃道響鬼流を継いでくれないか？」

「・・・・・・」

音撃道響鬼流・・・そもそも音撃道というのは全国に４７つもあり、それぞれの師範が弟子にそれを継承することによって受け継がれていくものだ。その中でも響鬼流はトップクラスの戦闘力を誇り、滅多に継承できる人がいない。・・・って言うのを斬鬼流を継ぐ予定の戸田山から聞かされた。

「・・・すいません。僕・・・未だに迷っています。自分は鬼として人助けをするか、医者になって人の命を助けるのか・・・」

「まぁ・・・お前になら響鬼流を託してもいいと思っているが無理

にとは言わない。・・・まだ若いんだから色んな道もあるものな！」

ヒビキさんは少しだけ笑いながら残りのスポーツドリンクを飲み乾すと立ち上がった。

「さぁ、こっから駅まで１０キロを5分で走るぞ！そうしないと電車の時間に間に合わないで明日の始業式に間に合わないぞ！」

「なんでそんなギリギリになるまで言わないんですか・・・・はぁ、分かりましたよ」

荷物をまとめたヒビキさんと明日夢は山を駆け下りようとして走り始めたその時・・・・ヒビキさん目の前の空間が歪み、そこから出てきたのはあまりにも強力な怪人だった。

「・・・・お前が音撃道響鬼流２１代目当主だな」

「なっ！？・・・・グランザイラスだと！？」

ヒビキさんが驚くのも無理は無い。・・・・グランザイラスは仮面戦士科・・・いや、全仮面戦士の中で最も有名な怪人なのだから・・・。

「俺様の名前はグランザイラス・・・まぁ、言わなくても分かるだろ？」

グランザイラス・・・それはかつてクライシス皇帝の最終破壊兵器として地球にやってきたクライシス最強の怪人で、大気圏突入やそのまま落下してもビクともしないしリボルケンすら通さない装甲、右腕にはビルやジェット機すら破壊する破壊弾を発射する、巨大な

火の玉にもなれるといった能力がある怪人。１１人ライダーが束になってもかなわず、もし破れてもその体は周囲を吹き飛ばす爆弾にもなっているので爆死と同時に壊滅的な被害をもたらすと仮面戦士科の教科書に記されているほどの強力な怪人だ。

「はぁぁぁぁぁぁ破っぁ！！」

ヒビキさんはすぐさま音撃戦士・響鬼へと変身すると音撃棒を構える。

「響鬼流・・・俺様たちの組織には障害になると首領は判断したんでな。・・・潰すぜ。後継者もろともな」

「そんなことはさせないぞ・・・・ハァッ！」

バシンッ！

響鬼は音撃棒を2本同時にグランザイラスに振り下ろしたが・・・・あっさりと受け止められてしまった。

「遅いな・・・」

ドカッ！

「うおっ！？」

「ヒビキさん！？」

グランザイラスに蹴り飛ばされた響鬼に明日夢が駆け寄ろうとすると・・・・

「来るなっ！！」

響鬼は大声で叫んで止めた。

「少年は急いで山を降りろ。・・・・そのくらいの時間は稼いでやる」

『キィィィィ』

どこからともなく飛んできたアカネタカと呼ばれる一種のガジェットは響鬼に1本の剣を渡した。・・・音撃戦士・響鬼の最強の武器にして強化アイテムでもある武器、アームドセイバー、だ。

「響鬼、装甲！」

『ピィィィィィィ！』

突如赤く燃え上がった響鬼に様々なディスクアニマルが集まって来たかと思うと、それらが鎧へと変化して装着されていく。・・・そしてそこには鎧を纏ったかのような姿をした最強の鬼、装甲響鬼（アームドヒビキ）、が立っていた。

「少年・・・とっとと行け」

「で、でも!?」

「いいからとっとと行けえぇぇぇぇ！！」

「っ!?・・・うぅ・・・」

装甲響鬼の大声を聞いた明日夢は「すいません」と何度も呟きながら山を降りていった。

「ハァァッ！！」
ガギンッ！

明日夢を逃がした装甲響鬼はアームドセイバーをグランザイラスに振りかざすも・・・・その身体には傷一つついていない。

「・・・弱い。こんな者達がエヴィルの障害になるとは到底思えないな」

「それは俺を倒してから言うんだな・・・鬼神覚声！ハァァァァッ！」

「フンッ！」

装甲響鬼の剣から放たれた斬撃とグランザイラスの破壊弾がぶつかり合い、山は一瞬にして炎に包まれた。

絶対半径（後書き）

今回からスタートした「レキ編」ですが、今回のキンジ以外の主役は明日夢と後藤にして「継承編」をやっていこうと思います。

防弾制服・黒（ディヴィーザ・ネロ）（前書き）

次の日曜日までは学校祭の準備で忙しいので2～3日に一度の更新になると思います。申し訳ありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

防弾制服・黒（ディヴィーザ・ネロ）

9月1日、日本では始業式では、世界初の武偵高・ローマ武偵高の制服を模した『防弾制服・黒』と呼ばれるマフィアっぽい黒ずくめのスーツのような制服を着るのが国際的な慣例だ。

「・・・・眠い・・・・」

そして俺はあの後『リマ症候群（リマシンドローム）』という時間を掛けて人間関係を作り、それから改めて開放してもらえるように説得する手段を使うためにもレキに言われるがままにレキの部屋に泊まった。・・・・しかしだ。人間関係とは人間と作るものであって、非人間的なレキとは作れそうに無い。シャワーの時に俺の前で服を脱がれた時は本当に焦ったぞ。しかも本人があまりそのことを意識してないからなおさら困った。

「・・・・まずはレキに人間らしくしないとな」

リマ症候群を狙うには遠回りとなるが、レキに人間らしい感情を持たせないといけない。狙撃拘禁から逃れようとするも・・・戦国時代、一部の侍は襲撃に備えて武器を抱えて座って眠るようにレキは狙撃銃を杖のように抱えて体育座りで寝ていたから隙がなくてにげられなかった。・・・・そんな息苦しい空間にいたせいでまったく眠れなかったって訳だ。

「・・・明日夢は・・・・いないか」

ヤクザの葬式のようにパイプ椅子に座る生徒達を見渡すが・・・・

どこにも明日夢の姿が見えなかった。まぁ2学期の始業式では出欠を取られないからアリアや理子のような優秀な生徒は仕事かなんかでサボるらしいしな。あいつもそうなんだろ。・・・・ついでに言うとレキは始業式後のセレモニーで銃をバトンがわりにするマーチング・バンドに出る当番とのことで講堂の控え室にいる。・・・・まぁ、ドラグノフの2キロからは逃げられないと思うからどうにもできないし、俺の足元には見張りのハイマキがいるから完全に詰んでいる状態なんだよ。

「遠山君、隣いいかな？」

「何とかダブらねーで済んだみてーだな」

そんなことを考えていると俺のところに真面目な不知火とヒマな武藤がやってきた。

「聞いてくれよキンジ。昨日、乱射があったみたいでよぉ、俺の四駆がボロボロになっていたんだ。また保健会社に連絡しなきゃならなくなっちまったぜ」

昨日逃げ込んだ場所には武藤の車があったのか。・・・・まぁ、シラを切っておこう。撃ったのはレキだし。それに武藤には昔喧嘩したときにジャイロキャノビーで轢かれた恨みもあるしな。

「そんなことより遠山君。君、また女性関係でトラブルを起こした？」

乱射事件を『そんな事』で流した不知火はさらに別の話題を俺に振ってきた。つーか女性関係のトラブルって・・・・何でだよ。

「何だと!?チクショー!何でキンジだけモテるんだよ!」

「大声出すな武藤。始業式中だぞ。てゆうか不知火、どうしてそんなこと知ってるんだ?」

「知ってるというか、予想。さっき強襲科で朝練あったんだけど・・・神崎さんが大荒れだったんだよね。だから遠山君関係だろうなーと思ってさ」

神埼・・・・アリアが大荒れか。恐ろしそうで想像したくないな。ちなみに朝練とは一般高でいう早朝クラブ練習ではなく武偵高のは早朝戦闘訓練のことだ。

「もう一部ではポピュラーな話だよ。今朝・・・遠山君、狙撃科のレキさんと女子寮から登校したって」

「なんだと!今度はレキかよ!?・・・あーでも何となく分かる気がするぞ。ネクラと無口で何となくウマが合ったんだろ?しかしキンジ、またあぶないのに手を出したな。レキは隠れファンが多いからよぉ。お前これから四方八方から狙われるぜ?」

ただでさえ狙撃銃に狙われてるのに銃口がさらに増えるのかよ。最悪だな。

「・・・これもポピュラーな話だけど、神崎さん、レキさんと仲が良かったからね。神崎さん、友達と恋人をいっぺんに失ったから、ちょっと鬱入っちゃってたよ。暴れた後」

友達＝レキは分かるが恋人って俺のことか?

「あのなぁ、俺とアリアはそういう関係じゃ・・・」

「このシーズンは『修学旅行？』もあってそういうトラブルも多いんだよねぇ」

修学旅行？・・・武偵高では2年生の間に2回の修学旅行がある。その一回目がその『修学旅行？』だ。これは名目上では普通の修学旅行ということになっているが、実際には生徒間でのチーム編成の最終調整をするための行事でもあるんだ。・・・というのも、武偵高の生徒は2年になると、9月末までに2～8人のチームを組んで学校に登録しなければならないからだ。このチーム制度は意外と重要で、登録したチームは国際武偵連盟にも登録され、通常はそのチームで将来も活動するが・・・仮に進路が分かれても、チームの協力関係は組織の枠を超えて最優先して良い。・・・と、国際武偵法でも定められている。

「夏休みで男女関係がこじれてチーム編成に影響するケースは、割とポピュラーだからね。遠山君は、そうなっちゃった訳だ」

「その点オレはもうだいたい組むヤツが決まっているぜ！車輌科と装備科から何人かずつ集めた兵站系のチームだ。女子もいるぞ。・・・とは言っても平賀文だから色気はねぇけど」

厳密な決まりはないがチームには強襲系・兵站系・通信系・混成系などと様々な種類があり、それぞれのチームが連携し合う。軍隊で言えば、小隊が集まって中隊になるイメージだ。だから仲良しで集まって組めばいいと言う訳ではなく戦略を考えた編成をしなければならない。つまり一言でいうと頭を使う行為なんだ。チーム編成ってのは。

「遠山君はやっぱり強襲系？それとも仮面戦士らしく混成系？」

「まだ何も決めてない。単位取得で忙しかったから後回しにしてたんだ」

「あーあ。大変だ。遠山君、これを次に着る時にはどうなっているのかなぁ」

次に着る時、というのは、チーム登録時の写真撮影を言ってるんだろうな。チームは登録時、メンバーが横並びになって写真を取る決まりがあり、その撮影には再びこの『防弾制服・黒』を着る規則がある。なんでも万一犯罪者に写真を見られたときにどこの国のどこの武偵高出身かを知られないようにするためらしい。

「まぁ冗談はこれくらいにして・・・そんなことよりも話題になっていることがあるんだ。遠山君・・・教師陣をみて何か気づかない？」

「・・・教師達を見て？」

俺は教師達を見て・・・ようやく気づいた。

「そう言えば・・・どこにもヒビキさんがいないな」

「・・・あのヒビキさんが怪人に負けて重体なんだ。・・・幸い近くの武偵病院で手術をしてもらって一命は取り留めたらしいんだけど・・・まだ意識が戻ってはいないらしいよ」

日本にいる仮面戦士の中でも大差で上位に入るほどのヒビキさんが・・・怪人に負けただと！？そんな馬鹿な！？

「マジかよ。・・・相手の数は？」

「・・・それが・・・・・たった1体なんだ。僕は仮面戦士科じゃないからよく分からないけど・・・その怪人の名前は『グランザイラス』だって。現場にいた安立君から報告があったらしいよ」

「なっ！？」

グランザイラスだと！？・・・・そんな化け物が現れたってことはエヴィルが作り出したってことか。それにしてもヒビキさんを戦闘不能にできるほどの怪人を作り出すエヴィルはどれほどの戦力なんだ？

「それと気になる報告がもう1つ。・・・・安立君が逃げた後にヒビキさんがやられたらしいんだけど、まだ息があったヒビキさんを近くの民家まで連れてきた仮面戦士がいたらしいんだ。・・・・だけど目撃証言から情報科がその仮面戦士を特定しようとしたらしいけど、そんな仮面戦士は、国際の仮面戦士に登録されていなかったんだ」

登録されてない仮面戦士は大きく分けて2種類いる。1つは俺のように力を使いたくなくて隠していたが事件のためやむ終えず使う者達、2つ目はその場で偶然力を手に入れた者達だ。エヴィルに所属する仮面戦士に変身する人物を特定するまではできないが、一応国際で存在している仮面戦士の名前だけは記録されているらしい。

「それで？・・・その仮面戦士の特徴は？」

「目撃証言によると赤い身体に金色の角をした仮面戦士だったらし

いよ。それとその仮面戦士の後ろには黒光りしたやけに大きいクワガタがいたらしいよ」

ヒビキさんを助けてくれたんだから悪い人だとは思わないが・・・・その仮面戦士は何者なんだろうな。・・・それにそのクワガタも。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

始業式が終わると講堂前の道路ではリトル・エヴァの名曲に乗せてC組の女子達がマーチングバンドを始めていた。羽根付きの帽子とマーチ衣装を着た女子達は短いプリーツスカートをひらめかせながら突撃銃や狙撃銃をバトンのように回しながら次々と俺の前を過ぎていく。・・・あの衣装・・・見てるの嫌なんだよなぁ。ヒステリア的な意味で。・・・そんなことを考えていると無表情でドラグノフを回すレキが俺の前を通り過ぎた。その後ろにはご丁寧にハイマキを連れて。

「はぁ・・・今日は水投げの日だし・・・色々とやってられないな」

水投げ・・・それは元々、校長の母校で行われていた「始業式の日には誰に水をかけてもいい」という一風変わった喧嘩祭りだ。・・・・ただ水をかけあうだけだったんなら良かったんだけど武偵高では「徒手格闘でなら誰が誰に喧嘩をぶっかけてもいい」というルールになってしまっている本当の喧嘩祭り状態なんだ。

「・・・ここにいると水投げの被害にあうかもな」

仕方ない。裏路地を通ってここから抜け出るか。・・・・そう思ってこの場所から離れて裏路地を歩いていると・・・・

「っ？」

無数のしゃぼん玉が辺りに漂っていた。そして俺の前でシャボン玉が3発はじける。

「今、お前3回死んダネ！」

その直後、頭上から妙に訛りのある女の子の声が聞こえた。上を見上げてみると建物のパイプに足を引っ掛けて中吊りになっているちびっ子がいた。・・・・なんだこいつ？

「日本の武偵、大したことないネ。お前も無防備すぎヨ」

その女の子は中国の妖怪、キョンシーを思わせる清朝中国民族衣装をアレンジしたような服を着ている。おそらく香港武偵高からの留学生だろうな。この時期そうゆうの多いし。

「・・・何か用か？」

「くひっ」

瓢箪から何かを飲むそいつを俺が睨みつけると・・・そいつはサーカスみたいな身軽さで甲高い笑い声を上げて路地に降りてきた。

「私、名前、ココいうネ。お前も名乗るネ」

「・・・遠山キンジだ」

名乗られた手前、俺も名乗っておく。日本人は無礼者と俺のせいで思われたくもないしな。

「おい・・・お前、さっきから酒臭いぞ。ガキがそんなものを飲むな」

「ガキじゃないネ。ココは昨日でもう１４ネ！」

ココと名乗る少女は酒臭い息を吐いて俺に怒鳴ってくる。・・・これはかなり酔っているな。中国では酒に年齢制限がないのか？

「しょうがないネ。ちょっとお試しするネ。姫から離れたら、すぐ、イタイことあるネ」

ココはふらりふらりと千鳥足でこちらに近づいてくるといきなり側転をすると・・・

「・・・っ！？」

長い黒髪のツインテールを俺の首に巻きつけてきた。

「きひっ」

耳元で笑ったココは、さらに俺の首を強く締め付ける。柔道でいう裸絞めだ。・・・裸絞めっていうのは一度決めると素手では絶対に外せない徒手格闘の一つだ。・・・しかもこいつは変則技で綾取りのように複雑に絡ませていやがる。

「きひっ。ほら、何もできないか?何もできない男はいらない男ネ。いらない男は殺スネ」

「殺・・・す?」

俺は締め付けられながらも何とか声を出す。・・・冗談で殺すと言われることはよくあることだが・・・今回はそんな冗談じゃなさそうだ。

ドクン!

その時、俺の体内にいつものヒステリアとは違う感覚を感じた。これはおそらくイ・ウーとの決戦で兄さんがなった死に際のヒステリア・・・ヒステリア・アゴニザンテだろうな。

「ちっ!・・・いい加減にしろっ!!」

ドカッ!

「はぅ!?ちょっ!?女の子に頭突きをするなんてお前最低ネ!!」

このままだと首の骨を外されることに気づいた俺は頭を後ろに思い切り振ってココの顔面に頭突きを決めた。・・・しかし首に髪が絡まっているのは変わらないから本格的にやばいぞ。

「ぐるるるる!!」

バッ!

俺の意識が飛んでしまう寸前、ハイマキがココに飛び掛ってきた。

「ほっ！」

ココは髪を解くと身軽にバック宙をして路地へと引いていく。

「駄目だと思っていたけど思ったよりはやるネ。まぁさっき襲った男のほうはたしかに凄かったネ。シャボン玉を全部割らずに蹴って上に飛ばすんだから・・・。私は『万武』のココ。・・・『万能の武人』ね。キンチ特別に7点あげるネ。だけどそんな点数じゃ追試。追試は後でまた採点するね。再見！」

俺はココをただ呆然と見送るしかできなかった。それにしても昨日はレキに狙われて負けて、今日は変な留学生の通り魔に負けて・・・2連敗じゃんかよ俺。

・・・

道だとしてもヒビキさんの応急処置ぐらいしかできなくて・・・・本当にすいません」

明日夢は銀色のレプリカの音叉をテーブルに置くと腰につけていたディスクアニマルも外して置く。

「僕ではやっぱりあなたの流派を・・・・響鬼流を受け継ぐことなんてできません。・・・・武偵高も・・・・もう辞めます。こんな僕なんかじゃ誰も守ることなんかできない。できるはずが無いんですから・・・」

「・・・・明日・・・・夢・・・・」

泣きながら病室を出て行った明日夢は・・・・ヒビキさんが微かに意識を取り戻して名前を呼んでいたことを気づいていなかった。

防弾制服・黒（ディヴィーザ・ネロ）（後書き）

最近更新が不安定になってきて申し訳ありません。

水投げ（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

水投げ

生徒同士が普通に銃やナイフを振り回す武偵高では、殺人未遂程度のことなんて軽く流されてしまうのが現実だ。しかも先生に「留学生の年下の女子にやられました」なんて言えるはずがない。・・・そんな訳で俺は誰にも言わずなかったことにしようと思っていると・・・

「どうしたんだ相棒？少し悔しそうだな」

矢車がやってきた。・・・なんだろう。矢車が黒いスーツを着ているとなんかあまりいいイメージが沸かない。

「・・・いや、別に何でもねぇよ」

「・・・首に絞め跡があるな。もしかして黒いツインテールの留学生にやられたのか？」

「っ！？」

なんで分かったんだ！？さすが元Ｓランク。

「俺もさっき襲撃を喰らいそうになった。・・・まぁそうなる前にシャボン玉を蹴ったがな。しかし俺の前に後藤が被害に会ってて・・・同じ絞め跡があったからな」

「・・・・・」

何だ・・・俺以外にも被害者がいるんだな。・・・つーかまさか後藤も被害者になっちまうなんてな。

「後藤だけじゃなく他に何人も被害にあっているらしいぞ。須藤や城戸も被害にあったらしいからな」

やられ役の須藤はともかく、バカとはいえ仮面戦士科の信司ですら被害に会うなんて、どうやらココの格闘センスは並みの仮面戦士科の生徒以上ってことだな。・・・そういえば中国は強襲型武偵育成カリキュラムが日本とまったく違うって聞いたことがある。個人に何らかの素質を見出したのなら、武偵高ではそれだけを叩き込む。たとえば拳銃なら拳銃。ナイフならナイフ。剣術なら剣術。おそらくココは格闘技だけを幼い頃から学んだんだろうな。・・・そんなこと考えながらも矢車と別れてレキと合流した俺は、こいつもそんな感じだったのかと考えた。

「さて・・・どこで昼を食べようか」

現在、俺達は台場の街をブラブラ歩いていた。・・・今日は始業式だけで終わり、どこかで昼食を取ってから帰ろうと思ったんだが、武偵高の食堂ではレキの信者達が俺を張っていて水投げのルールに乗っ取って俺を揉みくちゃにしようとしてきたから昼飯を食べることができなかったからだ。せっかくなら光太郎さんのステーキ屋にも行こうかとも思ったが、あそこも見張られているかもしれないから止めておこう。

「レキ、お前何か食べたいものはあるか？」

適当なデパートのフードコートにたどり着いた俺はペットを預かるコーナーに預けてきたハイマキを少し心配しながらもレキに食べ

たいものを聞いた。・・・どうせ『何でもいいです』っていいそうだがな。

「何でもいいです」

やっぱりな。まぁ、ここまでは想定内だ。

「じゃあラーメンを食うぞ。ここの新都城って店がうまいらしいからな」

ここの兄貴味噌ってラーメンがうまいってさっき矢車から聞いたし言ってみるか。会社・仲間・交友を意味する『Ｃｏｍｐａｎｙ』という英語の語源が『共にパンを食う』であるように、一緒に何かを食べることは人間関係を深めるらしいからな。そんな考えで俺はレキと一緒に新都城に向かった。

小さいテーブルにレキと向かい合うようにして座った俺は、まずご機嫌をとろうと思って・・・

「今日はおごる」

と、前置きをしてやってきたウェイトレスに・・・

「俺は兄貴味噌。こいつには一番高いメニューを出してやってください」

と言った。まぁ・・・例のものを平賀さんに頼んだせいでせっか

くのあんなにあったお金のほとんどが無くなっちまったが今日の財布には三千円は入っているから大丈夫だろうな。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

俺とレキは無言で食事が来るのを待つ。武偵活動中に女子と組まされた時は・・・俺は性格上、無言になることがある。そういう沈黙には気疲れする。しかし今、俺の前にいるのは女子は女子でもレキだ。カカシを置いているようなものだから気を使わないで済む。そういう意味では俺にとってレキは希少な女子かもしれないな。

「お待たせしたでござる」

聞き覚えのある声に振り向いてみると、エプロン付きのウェイトレス姿の風魔がいた。こいつ始業式サボってここでバイトしてやがったな。

「師匠、ご注文の品をお届けに参ったでござるよ。ささ、どうぞ」

俺の頼んだはずの兄貴味噌のチャーシューはどういう訳か手裏剣の形に切られていて明らかに普通のチャーシューより面積が少なくなっている。風魔は「師匠、褒めてくだされ」とでも言いたげな表情でこちらを見ているが・・・これは褒めるところじゃなく怒るところだぞ。普通の客はな。・・・まぁ、今回は許してやるが反応はしないことにしよう。

「・・・なんだ・・・これ？」

割り箸を割った途端、風魔は俺達のテーブルに大きな壺に入ったラーメン?を置いてきた。

「こちらはレキ殿がご所望なされた、当店でもっとも高い超壺麺でござる」

マジかよ。・・・てか、人間が食べれるレベルじゃないぞこんなの。

「こんなのメニューに載ってなかったぞ?」

「今月からの新メニューでござる」

風魔が開いたメニューには『新メニュー、超壺麺!５０００円。ただし３０分以内に食べ切れたらタダ』・・・と書かれていた。こんなの３０分で食べきれるはずないだろ。・・・どうしよう俺の財布は残り３０００円しかないのに。

「待て!俺は手持ちが三千・・・」

「それでは計測開始!スタートでござる!」

こいつ!?問答無用で始めやがった!?

「・・・・・・」

「・・・・・・」

パチン

俺は壺に顔が隠れてしまっているレキを振り向くと・・・箸を割

って次々と麺を食べ始めた。しかも麺を食べてから次の麺を食べるまでの間断を無しにだ。

「・・・・・・！」

ラーメンってこんな無駄のない動きで食べられるんだな。・・・そんなことを考えるうちにレキは麺を全て食べ終わってしまった。たった5分で。・・・そしてものの１０分ほどで麺や具をなくしてしまう。そして壺を持つことに苦戦していたので俺が壺を持つのを手伝ってあげると・・・僅か数十秒で空になった。

「私の感覚ですが、風魔さんが計測を始めてから１０分４７秒です」

「夢でござる。これは悪い夢でござる・・・」

このビックリ人間の光景は刺激が強すぎた様子の風魔はやや壊れ気味になっている。まぁ無理もないが・・・世の中にはもっとたくさんのビックリ人間がいるんだ。覚えておいたほうがいいぞ。

そんなこんなで昼食を食べ終えた俺達は再びハイマキを連れて歩いていると・・・いきなりレキが立ち止まった。その視線は今、俺達が降りている階段の踊り場に上がってきつつある何者に向けられていた。

「っ！」

俺はいきなりのレキの停止にでぶつかりそうになったので踏む留まろうとすると・・・ハイマキが俺の膝にぶつかって転倒しそうになってしまった。俺は咄嗟にそのせいで階段から落ちてしまいそうになったレキの手を掴んで引き寄せると・・・近くで何かを踊り場の床に落とす音が聞こえた。視線を音源に向けてみると・・・そこにはクレープが落ちている。それもただのクレープではなく小さな桃型の饅頭・・・おそらくはももまんだと思われるものが入ったクレープだ。こんなものを好き好んで食べそうな人物を俺は知っているぞ。

「・・・・・・」

ももまんクレープを食べながら・・・ある意味石化をしてしまったアリアが立っていた。

「でもさでもさ、アリアと拳銃戦で互角に戦えるＪＣなんてホントにいるの～！」

そしてさらに口の周りにクレープのクリームを付けまくりの理子までやってきてしまい・・・

「うをををもぐもぐもぐ！」

俺達の光景を目撃してしまった理子は驚きながらも食べていたクレープを口の中に押し込んだ。・・・食い意地が張っているな、こいつは。

「やるじゃんきーくん！レキュは2週目からじゃないとルートに入れない超無理ゲーキャラなのに！もうそこまで！」

理子にそう言われて改めて自分とレキの状態を確認すると・・・俺はレキを抱き寄せる形で静止していた。そして理子が騒ぎながら「どーん！」といってアリアにぶつかってしまい2人とも倒れると・・・アリアの石化は解除されてまるで鬼瓦のような形相で起き上がった。・・・こえぇぇぇぇぇ！！

「アリ・・・・」

「あんたはいい！」

アリアに弁解しようとした途端、犬歯をむき出しにしたアリアの怒鳴り声で俺の台詞が中断されてしまった。

「あ、ああ、あんたはいい！バカキンジはそういうやつだって分かっていたから！そうよそうよね！あんたはそういうおとなしい美人がだぁい好きだもんね！し、白雪とか！！」

どうしてここで白雪の名前が出て来るんだよ？

「そんな奴・・・そんな奴を・・・・あんたは悪くない悪いのはあたし・・・」

アリアは何かを呟いているがはっきりとは聞こえない。そしてアリアはギロリとこちらを睨んできた。

「そんなことよりもレキ！あんた・・・やってくれたわね。校内ネットで見たわよ。あんた、あたしに断りなく、キンジと2人チーム

申請をするなんて・・・それは『パートナー横取り』！風穴モノのルール違反よ！」

武偵高におけるチーム登録は通常9月下旬・・・修学旅行？の後に申請する決まりだが、実際のところは生徒間でなんとなくチームが出来ているものだ。なので俺とアリア、ついでにアンクのように組んで戦っていた生徒達については勝手に誰かがチームのメンバーとして登録されているのは暗黙の禁則とされているのだが・・・どうやらレキはそれをやったらしい。

「あたしは・・・キンジとレキの恋愛なんかホントにどうでもいい！ほんとにほんとにどうでもいいんだからね！けれどパートナーの横取りだけは許さない！キンジはあたしが調教したのよ！」

調教って言うなよ。お前の後ろにいる理子の目が輝いているだろ。

「アリアさんは・・・・キンジさんの何なのですか？」

レキは突然『宣戦布告』という雰囲気を放ちながらアリアにそう言った。

「なっなっなっなっ！？何って・・・これは、その・・・」

今のレキの一言をどう捉えたかは知らないが、アリアは慌てた様子で俺を指差してきた。

「別にこれとは、その・・・・パートナーでバカよ！」

「私は婚約者です」

「なっ！？」

レキの『婚約者』の一言に理子は「うおおぉぉぉ！」とテンションを上げて、アリアはこども雑誌のおまけの工作でよくある谷折りのように腰を曲げてしまった。・・・身体、凄くやわらかいんだな。

「こ、・・・高校生同士の婚約なんて・・・しょ、所詮ごっこ遊びよ！」

含みのある目つきでそっぽを向きながら上半身を起こしたアリアは・・・何だか無理に頑張ってる感じだった。

「ごっこ遊びではありません。本気です。アリアさん、あなたは今後、キンジさんに近づかないようにしてください。キンジさんには・・・これからも昨夜のように私の部屋に泊まってもらい、昼もできるだけ私のそばで過ごし、夜も一緒に寝てもらいます」

レキの明らかに誤解をされてしまいそうな言葉の連打にアリアはあわあわとしながら顔を赤くする。

「アリアさんとキンジさんが信頼しあっていることは知っています。・・・しかし恋してはならない」

「こ、こ、こっ！？」

さらにレキの放った追い打ちとも言える言葉にアリアはニワトリの鳴き声のような反応をする。

「キ、キンジ！あんたはどうなの！？レキと・・・組むの！？そのつもりなの！？」

「俺は・・・・・」

俺はアリアに「そのつもりはない」と言おうとしたそのタイミングで・・・・

「ウオォォォォォォォォ！！」

「「「っ！？」」」

踊り場の方でティラノサウルスのような顔がやたら大きい怪人が暴れながら叫んでいた。あの見た目から察するにおそらくはドーパント。・・・Tレックスドーパントだろうな。

「悪いな。俺はあっちの相手をしないといけないようだ。・・・変身！」

『タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身をすると階段の手すりから踊り場へと飛び降りていった。するとレキは俺が戦いに行くのを見送るとアリアの方を振り向く。

「・・・つまりそういうことですアリアさん。キンジさんがあなたの質問に答えずに戦いに出向いたのが答えです」

「・・・キンジ・・・もう、何もかもどうでもいいわ。・・・レキ・・・今日が『水投げ』の日でよかったわね。拳銃戦で戦ってあげる。それにさっき、通り魔の留学生に掟破りの拳銃戦を挑まれて・・・結局負けちゃってイライラしていたところだしね」

そう呟いたアリアは俺がタトバの時に構えているような威嚇する

トラのような構えをすると鋭い目つきでレキを狙っていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

「アンク・・・変な気配ってのはここら辺か？」

「あぁ。たしかにこの辺りの何処かで怪しい気配を感じたんだ」

俺がTレックスドーパントと戦っている頃、アンクはタクミを連れて空き地島周辺を歩いていた。すると突如アンク達から数メートル前の空間が歪んでそこから凍条の変身するタイガと同じ姿だが放つ殺気がまるで違う仮面戦士が出てきた。

「これ以上この辺を探られんのは勘弁してや。あんま探られるとワイ等が困んねん」

「お前は何者だ？」

「ワイ？ワイはダニエル・チョウ。エヴィルの研究所の副主任で仮面ライダーアックスや」

ダニエルと名乗ったタイガとそっくりな仮面戦士・・・仮面ライダーアックスはデストバイザーをアンク達に向けると歪んだ空間から、さらに2～3体の怪人が出現した。

「ちっ！・・・せっかくのバースドライバーは鴻上の野郎のところに回収されちまったしまともに戦うことはできないが・・・仕方ない」

「だったら下がってろ！・・・変身！」

『ＣＯＭＰＩＥＴＥ』

「オラァッ！」

タクミは赤いラインが入ったギリシャ文字の‘Φ’をイメージさせる仮面戦士‘仮面ライダーファイズに変身すると右手をスナップさせてアックスに殴りかかった。

水投げ（後書き）

次の更新はどんなに頑張っても日曜日になりそうです。

友との絶交（前書き）

お待たせしてしまいました。紹介を含めると１００話目。含めないと実質９７話の欲望の交差の更新です。

友との絶交

「おい！いい加減暴れんのはのはやめてこっちにメモリを渡せ！」

可能な限り人間とは戦いたくない俺はTレックスドーパントにメモリを渡すように要求する。

「私は許さない！私がこけちゃって超壺麺用のお皿をほとんど割っちゃっただけでクビにしたこの場所を壊して復讐する！！」

まぁ、俺の要求が無視されんのは分かっていたけど・・・・それは自分のせいだろ。つーかお前、さっきの店で働いていたのかよ。

「はぁ・・・仕方ない。メモリブレイクさせてもらうぞ」

「ガァァァァァッ！！」

右手のトラクローだけを展開して構えた途端にTレックスドーパントはこっちに向かって体当たりをしてきた。

「セヤッ！」

「ぐっ！？」

それに対して俺はトラクローを展開していない左手で正面を殴りつけた。しかし殴りつけた頭部は俺の想像以上に硬く、一瞬だけ怯ませただけで大したダメージがない。

「硬さには硬さだ！」
『サイ！トラ！バッタ！』

「セヤァッ！」
ドカッ！

俺はタカヘッドから現在持っているメダルの中で最も強度のあるサイヘッドに変えると思いっきりTレックスドーパントに向かって頭を振り下ろして頭突きを決める。

「ぐっぅ！？・・・こんな程度で・・・私の復讐は終わる訳にはいかないのよ」

どちらかと言うとお前の復讐の復讐の理由の方がそんな程度で・・・って思うぞ。まぁ、怒る理由は人それぞれだな。

「復讐なんてしても、お前のように復讐に走る人々が増えるだけだ。そんなものを使って復讐しても後で後悔するのはお前だぞ。・・・・そうなる前にメモリをこっちに渡して再就職先を探せ。・・・これが最後の警告だぞ」

復讐からは悲しみしか生まれない。・・・ノブナガの時もそうだったしな。だからこそそんな悲しみを見るのが嫌だから俺はそんな奴らを止めるぞ。

「オォォォォォォォォ！！」

「っ！？」

Tレックスドーパントは突然吠えると近くの金属を長く伸びる尻

尾に集めてティラノザウルスのような姿へと変貌した。そしてその姿となったTレックスドーパントはメモリの毒素に呑まれてしまった様子で暴れ始めた。

「まったく・・・どうして俺は巨大になっちまう怪人と戦うことが多いんだ?」

こういうデカくなる怪人にはいつもコンボを使っているが・・・今回はヤミーじゃなくドーパント・・・つまり人間だ。そんな相手にコンボを使うのはドーパントになった人間があぶないかもしれない。かと言ってメダジャリバーはアンクが持っているから使えないし・・・仕方ない。実戦では使ったことはない‘あれ’で言ってみるか。

『サイ!トラ!カンガルー!』

俺はカンガルーメダルを足のメダルとして使用してオーズ・サトラガルに変わるとカンガルーレッグのフットワークを生かして暴れまくるTレックスドーパントに近づいていく。

「セヤッ!」
ドカッ!

「ガァァァァ!?」

Tレックスドーパントは俺が思いきり脚に頭突きを叩き込むとバランスを崩してその場に倒れた。

「さぁ、悪いがこれで決めさせてもらうぜ」
『スキャニングチャージ!』

俺はトラクローを両方展開させるとカンガルーレッグのフットワークを再び活かして複雑にTレックスドーパントの周囲を移動する。
「ハァァァァッ！」

その移動をしながらトラクローで切りつけてダメージを与えると上に跳び上がって空中で一回転をしてサイヘッドの頭部を真下へと向けた俺は転倒しているTレックスドーパントへと降下する。

「っセイヤァァァァァ！！」

そしてそのままエネルギーを溜め込んだサイヘッドで突っ込んだ。

「ぐ、ぐぐ、うわぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ドオォォォォォォン！！

「メモリブレイク成功っと・・・・」

Tレックスドーパントが爆発してメモリが砕けたのを確認した俺は変身を解除してアリア達のところに戻るために急いで階段を駆け上った。

「・・・あいつが東京武偵高2年の遠山キンジ・・・・またの名を仮面ライダーオーズか。状況に応じた姿を使い分けるあの判断能力とそれを使いこなす実力。・・・・素晴らしい。エヴィルとの決戦の前にぜひともＮＥＶＥＲにほしいところだ」

さっきの戦いの一部始終がエヴィルとは違う組織に観察されていたことに俺は気づいていなかった。

・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・

俺がTレックスドーパントと戦っている頃、ファイズとアンクはエヴィルの仮面戦士アックスとそいつが率いる数体の怪人たちと戦っていた。

「フンッ！」

「っぐ！？」

しかしさすがのファイズでもスカル魔を3体とアックスを1人で相手にするのは厳しいらしく、押され気味だった。

「ったく・・・・鬱陶しいな。いい加減にしろよ」

『ＣＯＭＰＩＥＴＥ』

ファイズは左腕についているリストウォッチ型の強化アイテム‘ファイズアクセル’のミッションメモリーを腰のファイズギアのメモリと交換してセットすると胸の装甲が展開させると、その姿は黒が印象的な超音速形態である‘ファイズ・アクセルフォーム’へと変わった。

「・・・・いくぜ」

ブゥウン

「「「っ！？」」」

ドオォォォォン！！

『３、２、１、ＴＩＭＥ　ＯＵＴ』

『ＲＥＦＯＲＭＡＴＩＯＮ』

ファイズ・アクセルフォームは目にも止まらないスピードで移動をすると連続でファイズの必殺キック‘クリムゾンスマッシュ’を決めてわずか数秒でスカル魔達を倒すと通常フォームへと戻った。

「・・・最後はお前だけだぞ。おとなしく降参したらどうだ」

「お～！あのスカル魔をこうも一瞬で蹴散らしおった。思った以上に強いのぅ。でも降参する気はないで」

アックスはファイズにデストバイザーを構えるとすぐさま走り出して振りかざす。

「ったく・・・面倒だな」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

「オラァッ！」

ドカッ！

それを綺麗に回避したファイズはデジタルカメラ型のパンチングユニットである‘ファイズショット’を右手に装着するとベルトのファイズフォンのＥＮＴＥＲを押してフォトンを充電するとそのままアックスの腹部にカウンターを決め込んだ。

「ぐおっ!?・・・・や、やるやんか・・・」

それを喰らったアックスはふらふらしながら後退し、膝をつく。

「ほら、これで懲りただろ?いい加減に・・・・」

ファイズは膝をついたアックスにゆっくりと近づいた次の瞬間・・・

「残念やったな・・・」

「ヒャッハァァァァ!」

「ぐぁぁぁぁっ!?・・・・な、何だ・・・と?」

気が付くと後ろに立っていたドリルのような武器を持った茶色の仮面戦士とカメレオンのような黄緑色の仮面戦士に攻撃された。

「なっ!?・・・お前伏兵がいたのか!」

アンクは驚きつつも、メダジャリバーを取り出して逆手に構える。

「せやで。誰もここに来た仮面戦士がワイ1人だなんて言ってなかったやんか。・・・・紹介したるわ。こっちのドリル持ってるのがワイの弟のアルハート・チョウ」

「この姿は仮面ライダースピアーや。兄ちゃんが世話になったのう」

ギィィィン!

「ぐっ！？」

スピアーと名乗る仮面戦士は持っていたドリルのような武器で倒れているファイズにさらに追い討ちをかける。

「そしてそっちの世紀末みたいな掛け声を出してたんが使えない部下のグラント・ステウリーでその姿は仮面ライダーキャモや」

「俺は最強の仮面戦士だぁぁぁぁぁぁぁ！」

「うっさいから黙っててや。・・・まぁ、状況はこんな感じ。つまり不利な状況なのはお前さん達ってことや」

倒れているファイズはスピアーに攻撃されていて、アンクはアックスとキャモに挟まれている状況に立たされてしまったアンクは・・・

「ハッ！」

勝ち誇ったような表情をした。

「・・・どうしてこの状況でそんな表情ができるんや？」

「・・・お前こそ後ろを警戒しろよエセ関西。こっちも2人だけじゃないんだよ」

『ＦＡＮＧ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「「ぐわぁぁぁぁぁっぁ！？」」

「なっ！？」

いきなりの悲鳴にアックスが振り返ると、スピアーとキャモはどさりとその場に倒れる。そこにはW・ファングジョーカーとバックのような物を持ったキックホッパーがいた。

「・・・乾・・・忘れ物だ」

パシッ

「サンキュー。助かったぜ」

キックホッパーから強化アイテムである‘ファイズブラスター’を受け取ったファイズはベルトのファイズフォンをそのアイテムにセットすると変身コードである‘5、5、5’のボタンを押してＥＮＴＥＲを押す。

「・・・ライトによると俺のダチ達が世話になっている組織らしいからな。捕まえてもう少し話を聞かせてもらうぜ」

『ＡＷＡＫＥＮＩＮＧ』

全身にフォトンブラッドが駆け巡ったファイズのスーツは赤く染まり、背部にはフォトン・フィールド・フローターと呼ばれるマルチユニットを装着したファイズの形態‘ファイズ・ブラスターフォーム’へと姿を変えた。

「そんな姿が何だぁぁぁぁぁ最強は俺だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ちょ！？止まるんやアホ！」

アックスの静止も聞かずにブラスターファイズに殴りかかるキャモは・・・・

「・・・どけ」

『ＦＡＩＺ　ＢＲＡＳＴＡＲ　ＤＩＳＣＨＡＲＧＥ』

ドォン！

「ぐおぉぉぉぉっ！？」

ブラスターファイズの両肩に展開したフォトン・フィールド・フローターから発射された光弾に吹き飛ばされた。

「兄ちゃん。ここは引いといた方がいいんちゃう？」

「せやな。・・・ミッションは終了したんやし・・・こんな結滞な奴らの相手なんてしたらグラントの二の舞になるしな」

そう言ったアックスとスピアーは再び現れた空間の歪みの中に消えていくと、入れ違いで1体のショッカーライダーが現れた。

「・・・逃げられたか。乾・・・とっととそいつを倒せ。そいつは本郷さんの偽者といっても戦闘力は本物だから持久戦は不利だぞ」

「言われなくても分かっている」

『ＢＬＡＤＥ　ＭＯＤＥ』

ファイズブラスターをブレードモードにしたブラスターファイズはその剣に大量のフォトンエネルギーを溜めると・・・・

「ハァァァァァっ！！」

「っ！？」
ドオォォォォォォン！！
ライダーキックをしてきたショッカーライダーを空中で一閃して倒した。
「それにしても・・・・こいつ等は何をしようとしてきたんだ？」
Wの変身を解除して意識が戻った正太郎は陽の隣に立つと先ほどまで歪んでいた空間を見つめた。
「分からないけど・・・・少なくとも彼らの行動はおそらく時間稼ぎだろうね。もしかしたら近くに何かあるかもしれないから手分けして探してみよう」
「ちっ！・・・たぶん仕掛けをしたのはここだけじゃないぜ。この場所だけじゃなく、この武偵高の周りに変な気配を感じる。アイツ等が空間を歪ませる時に感じるのと同じ気配をな」
「・・・・つまり近いうちにこの武偵高に何かが起きるかもしれないってことだな」
矢車の呟きにその場の全員が深刻な表情を浮かべる。
「俺には詳しいことは分からないが・・・・簡単にまとめると何時攻めてくるか分からないってことだろ？・・・・だったら俺達はそいつ等を迎え撃てばいいだけだろ」
タクミの一言でアンク達はエヴィルに対しての警戒心をさらに強

くした。・・・しかしその警戒心すらも無駄になるほどに圧倒的な戦力がエヴィルにはあったことを・・・このときの俺達は知るよしもなかった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「どうなってるんだ?」

俺がアリア達が待っているはずの場所へと戻ると・・・仰向けに倒れているレキのマウントになったアリアが拳を震わせていた。

「ほれほれ~!」

『ガゥゥゥ』

ついでに言うとその近くで理子は倒れてるハイマキの上にのしかかりながら起き上がれないようにしていた。・・・若干じゃれあっているようにも見えなくもないがハイマキの耳をトラくんが噛んでいるからたぶん喧嘩・・・水投げだろうな。

「・・・・・」

レキはアリアが殴ろうとしているのにも関わらず無抵抗だった。おそらくレキは遠距離射撃専門の狙撃科だからこそ徒手格闘の構えができない・・・いや、構えを知らないんだろうな。そもそも狙撃

手は遠距離から相手を狙うからこそ格闘をする必要がない。だからそんなことは教わらないんだ。

「う、ううぅ・・・・・・！」

そんなレキのマウントにいるアリアは・・・拳を震わせるだけで殴らない。相手が無抵抗だからという理由だけではなく、数少ない友だからこそ殴れないんだと思う。

「アリ・・・・」

その状況に俺が割り込んでそろそろお互いを落ち着かせようとしたその時だった。

「・・・・・」
シュッ

レキの銃剣の一突きがアリアの髪を掠めた。レキが銃剣を抜いたのだ。・・・この徒手格闘だけが無制限に開放される水投げの日に・・・。

「レキ・・・・」

咄嗟に離れたアリアは水投げのルールを無視して銃剣を使ってきたレキに驚きに表情をみせる。そしてアリアも武器を手にしようとした途端にレキは華麗な銃剣さばきで喉や心臓などの人体の急所である部位を必要以上に狙ってアリアを壁まで追い詰めた。

「やめろ！レキ！」

「・・・・・・」
ピタッ
アリアにトドメを刺そうとしたギリギリのタイミングでレキは俺の声で制止をした。そして無言でレキはこちらに振り返ると・・・・
「レキ！あんたとなんかもう絶交よッ！絶交！もう2度と顔なんか見たくないわ！」
そう言い残して走り去っていった。その後理子もアリアを追って立ち去り、停止命令を出されてロボットみたいに黙り込んだレキを連れて慌ててその場を移動し、人気のない公園にやってきた。
「お前、さっきのはアリアを殺す気だっただろ？」
「はい」
俺の質問に対してレキはしれっと答える。
「はい。ってなんでだよ？」
「『風』が命じたからです。アリアさんとキンジさんを近づけてはならない。と」
また『風』か。そう言えば屋上のときも言っていたよな。
「『風』ってなんだ？ヘッドフォンで聞いているなんかのことか？」
「違います。これは故郷の風の音を録音して聞いているだけです」

「故郷の風の音？」

「風と共に育った頃を忘れぬように聞いています」

ますます分からなくなってきたな。あれか？テレパシーみたいな能力とかか？

「はぁ、とりあえずもういい。こんなことを言うのも何だがな。人を殺すな」

「何でですか？」

『何でですか』・・・で返してきたか。普通の武偵は人を殺してはいけないはずなんだがな。

「何でですかって・・・駄目なもんは駄目なんだよ」

「それは命令ですか？」

「命令だ。武偵法でもそう決められている」

怪人は例外なんだがな。

「分かりました。殺さないようにします」

何だかまるで人を何人も殺してきたような言い回しにも聞こえるな。こんな感情がまるでないようなロボット娘にリマ症候群を狙えるのか？・・・少なくとも1人でどうこうできそうにはなさそうだ。アンクには別行動はもうしばらく続けることを連絡しとかないとな。・・・そう思った俺は近くの鳩をぼんやりと見つめるレキを見て

深いため息をついた。

友との絶交（後書き）

とりあえず学校祭も終了し、企業から無事に内定をもらったので、まだ指は痛いですが平日は少なくとも2日に一度は更新します。

風の音と魂の音（前書き）

記念すべき１０１話目なので後書きでちょっとした重大発表があります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

風の音と魂の音

装備科棟は地上1階、地下3階と地下の方が広い作りになっている。まぁ、地下と言っても学園島は人工浮島なので微妙なところだが・・・。俺とレキ、ついでにハイマキは『ひらがあや』と平仮名で書かれたＢ２０１作業室をノックすると・・・・

「はーい！開いてますのだ！」

中から子供みたいな平賀さんの声が聞こえてきた。

「平賀さん！俺だ。遠山だ」

俺は物置のようなごちゃごちゃした部屋を身体を横向きにして進んでいくと、奥の作業台にはテレビとＤＶＤが載っていて女児向けのアニメが流れていた。そしてその脇でナ何かを溶接していた平賀さんが振り返った。

「おおっ！とーやまくんがレキさんを連れているのだ！これはデキているのだ！」

「これは・・・できているんじゃなく勝手についてくるんだ。それよりもできているか？」

「デキているのだ！お似合いの２人なのだ！」

そう言った平賀さんは左右の手で俺とレキを指差す。

「いや、そうじゃなくて・・・」

「あはっ！デキてるのだ！」

・・・・ゲンコツくれてやろうか？

「デキてない。そんなことよりも頼んだ物はできているのか、って聞いているんだよ」

「あはっ！ご注文の品もできているのだ！できているのだ！」

もう一度尋ねると平賀さんは頭の上に見えない豆電球を灯したような表情をするとゴミゴミした道具棚に頭から上半身を突っ込んでもぞもぞと探り始めた。

「ぬお～！もうちょっとで届くのだ～！」

ていうか、よくこんなに物があるのに何処に何があるのかを把握できているよな。まぁ、平賀さんはアメリカの武器メーカーやスマートブレインとかのライダーシステムを作る企業からのスカウトもあるくらいの天才少女だし、普通の人の頭の構造とはどっか違うんだろうな。・・・そんなことを考えていると平賀さんは緑、灰色、水色、真紅といった４つのカンを持って出てきた。

「これがクワガタカンドロイドのクワ君で～。こっちがゾウカンドロイドのう～蔵さん、この子がシャチカンドロイドのシャッちゃん、そしてこの真っ赤な鳥さんがコンドルカンドロイドのレッドコンドルなのだ」

最後のコンドルカンの名前・・・何かおかしくなかったか？何だか少しだけトレンディな感じがするぞ。コンドルの代わりにファ

ルコンにするとか、レッドの代わりにブラックとかにすると・・・なおさらな。

「・・・もう少し名前は何とかならなかったのか？」

「じゃあクワガタカンの名前はクワガライ・・・・」

「悪い。やっぱりそのままでいい」

危なかった。雷の忍びっぽい名前をつけさせないぞ。・・・このままじゃ他のカンドロイドも変な名前にされてしまいそうだったな。

「まぁ・・・金はもう渡しているし、たしかにもらっていく」

そういった俺は４つのカンドロイドをしまうと平賀さんはレキの方を向く。

「レキさんもまた貫通弾の部品を買ってくださいなのだ。硬化タングスタン、カーバイド。素敵な弾頭を用意しておくのだ！いつもまいどありですのだ！」

どうやらレキは平賀さんの常連客らしいな。俺にカンドロイドを売り、レキにも武器を売る。つまり俺達が戦うほど平賀さんは儲かるわけか。羨ましい商売だよな、武器商人ってのは。

・・・・・・・・

・・・

「まったく！女心が分かっていないねぇ遠山くんは！」

ジャンヌが少し恥ずかしそうに口ごもると、後ろから那須野がジャンヌに抱き付いてきた。

「な、いきなり何をするんだ亜希子！？」

「ふっふっふっ！、部活を抜け出して男子と会話だなんて青春してるじゃないかね！もしかしてＬＯＶＥとＬＯＶＥの関係？」

「そ！？そんな訳ないだろ！？」

那須野は弄り口調でからかうとジャンヌは顔を赤くしながらそれを否定する。平賀さんのときもそうだったが、どうして女子はこういう話に持っていこうとするんだろうか？

「まぁ、簡単にジャンヌちゃんの気持ちを説明すると・・・・『自分は汗をかいたけど、遠山くんが急げといったので濡れたタオルで身体を拭いて香水で誤魔化しただけだからあまり近づかないでほしい』ってことだよ遠山くん！」

「おっ！？おい！どうして亜希子がそのことを知っている！」

「女子テニス部部長を舐めちゃあいけないよ。そんな乙女の感情を読み取ることなんて歴代部長から受け継いだ女子力を使えばたやすいのさ」

無駄にすごいんだな、歴代の女子テニス部部長。

「汗のにおいなんてしないし、してもそんなの別に気にするつもり

はない。とりあえず話しながら歩くぞ」

ふわり、と風が吹くと確かに若草のようないい香りがした。全然汗臭くなんかないぞ。・・・そういえば昔兄さん・・・というかカナに聞いたことがある。香水とはそれだけでは不完全なもので、女性本体の香りと組み合わさることにより最もいい香りになるみたいなことを言っていたな。

「頑張ってねぇぇぇ！」

那須野はどういう訳かそんなことを言いながらジャンヌに手を振るのを尻目に俺達はその場を移動して情報科の学科棟の方に移動する。

「お前がアリアと別れてレキと組んだこと、情報科でもちょっとしたニュースになっているぞ」

「何でだよ？俺なんか話す価値もないだろ？」

「自分では知らないかもしれないがな、遠山。お前は武偵高、特に仮面戦士科でも矢車の次に戦闘能力において卓越した才能を持っていると見なされ、ひそかに一目おかれているのだぞ。お前が嫌がると思ってかあまり公にはされていないがな。私もその評判を聞いて少し見直したぞ」

マジかよ。別に俺にそんなに才能なんてないぞ。

「教務科のデータにも書かれていたぞ。探偵科としての才能はあまり良いものではないが、強襲科や仮面戦士科としての能力は高く、本人の性格に難があるが人望も高い。次期リーダー格の最有力候補。

とな」

本人の性格に難がある、は余計だ。どっちみちリーダーなんかになるつもりはないけどな。

「ま、まぁ、俺のことはどうでもいい。それよりもレキについて何か分かったか？」

武偵同士の対決は情報をより多く持っている方が有利になる。とはいえ自分で動いてしまうとバレるので第三者に依頼するのが定石だ。なので今回はイ・ウーで理子に情報処理のイロハを教えたらしいジャンヌに依頼をした。理子のだと余計な冷やかしが多いしな。

「一流の狙撃手は自分の情報を隠すものだ。レキにもその傾向がある。なので手に入れた情報は極々限られたものだった」

それからジャンヌからレキの話を聞いてあいつの仕事のパターンは３つだけだということが分かった。１つは教師に命令された仕事だ。優秀な生徒には稀に教務科から指名で直接に依頼される。どうやらレキはその１人らしい。そして２つ目はＬＤスコア９００以上の任務だ。ＬＤスコアとは任務の難易度を表すものだが、スコア９００とは一流の武偵企業でもトップクラスの人でしかできない依頼だ。そのスコアの依頼を受ける仮面戦士達は最低でも幹部怪人と対等以上に戦えるレベルじゃないといけないほどだぞ。最後の３つ目が‘鷹の目’・・・別にタカヘッドと関係あるわけじゃないが、あながち外れている訳でもない。というのも鷹の目とは狙撃手の高い視力を活かして遠隔から対象を見張る仕事だからだ。そして驚いたことにレキの‘鷹の目’は俺の周囲の人間を見張っていたらしいと聞いたときは驚かされた。

「私の手に入れた情報はこんなところだ。それで・・・お前は何か持ってきたのか?」

「持ってきた。・・・・音をな」

「音だと?」

俺は軽く頷くとスタッグフォンを取り出した。

「レキはいつもヘッドフォンで故郷の風の音を聞いているらしいんだ。昨日あいつがシャワーを浴びているときにMP3プレーヤーを拝借してこいつに録音した」

「シャワーだと?お前達はどんな生活をしているのだ?」

何かを疑うような視線でジャンヌは言ってきたが・・・とりあえずは無視だ。スタッグフォンにイヤホンをつけた俺はその片方をジャンヌの耳につけた。

「・・・これで何か分かるか?」

「む・・・・」

俺達は片耳ずつイヤホンをつけてその音を聞く。コードが短いので少し頭を寄せる形で聞いているとジャンヌからさっきのいい香りがした。この距離でこんな香りを嗅いでしまうとヒステリアになってしまいそうだが・・・何とか我慢しないとな。

「ここだ。ここで風の音とは違う雑音が小さい音で入る」

「ふむ・・・」

ジャンヌは目を閉じて真剣な表情で音に集中したので、俺はそのコメントを待つ。・・・こうして見てみるとこいつも結構美人だよな。全体的にクールな印象で魔女っていうより女優みたいな感じだ。

「私には分からない。だがこれを手がかりに・・・な、何だ遠山？なぜ私を見る？」

「い、いや、お前が何か言うのを待っていただけだ」

コードがつっぱったのでイヤホンを耳から取った俺はスタッグフォンから今の音声ファイルが入ったマイクロＳＤカードをジャンヌに渡しつつ、ジャンヌの言葉を待つ。そしてなぜか顔を少し赤くしていたジャンヌはおほん、と咳払いしてから・・・

「これは手がかりになるぞ。相談相手に心当たりがある」

と、腕組みをして人差し指と中指で挟んだマイクロＳＤカードを示していた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺がジャンヌに連れられて通信科の音響学講義室に移動している

頃、あれから一度も武偵高に来ていない明日夢は・・・あの日、ヒビキさんが敗れてしまいほとんどの木が焼けてなくなってしまった修行の山に来ていた。

「・・・どうして僕はここに戻ってきたんだろ。・・・僕は武偵を辞めるって・・・鬼になることを辞めるって決めたはずなのに・・・どうして・・・」

「それはお前にまだ戦う意思があるからじゃないのか?」

「っ!?」

明日夢はいきなり聞こえてきた声に後ろを振り返ってみると・・・

「伊達さん。・・・それに後藤君・・・」

おみやげ袋を大量に抱えた伊達さんと、ミルク缶を担いでいる後藤が立っていた。

「後藤ちゃんがバースになるためのトレーニングとしてこの辺りで特訓をしようとしていたら、最近休んでいる救護科の優等生の後ろ姿を尾行させてもらったんだよ」

「・・・本当は伊達さんがおいしいおでん屋があるから特訓という名目で学校をサボってここにやってきた。そしたらその帰り道に安立を見かけただけですけどね」

「ちょ、後藤ちゃん。・・・そこは嘘でも特訓ってしゃべろうよ。相変わらず真面目だねぇ~。・・・まぁ、そんなことはともかく・・・お前が鬼になろうと医者になろうと俺達がどうこう言うつも

りはない。それは日向も同じだと思う。・・・・だがな、自分の道を全て投げ捨てて何もしないのは日向もきっと許さないと思うぞ」

先ほどまでちょっとふざけたような雰囲気とは打って変わって真剣な表情をする伊達さんはヒビキさんをめったに使われない実名で呼びながら明日夢に語りかける。

「たとえ鬼になっても、医者になるとしても・・・・どっちも人を助けることができるからこそ、お前はどうするか悩んでいたんだろ。その気持ちを捨てるな。自分の魂の音を奏でてみろ。・・・・これが昨日意識が覚醒した日向からの伝言だ。・・・・会いに行けよ。もうあれからずっと病院にいっていないらしいじゃないか」

「・・・・魂の音・・・・っ！！」

何かに気づいた様子の明日夢は山を降りてヒビキさんが入院している武偵病院へと走り出した。

「・・・・受け継ぐってことはその流派やその物を受け継ぐってことじゃない。その魂を受け継ぐってことだ。・・・・後藤ちゃんも覚えておきなよ」

「はい、分かりました」

真剣な表情で頷いた後藤を見て少しだけ笑った伊達さんは・・・・

「うっ！？」

「伊達さん！？」

いきなり頭を片手で押さえてその場に膝をついた。

「あ、あ～あ。・・・せっかくのおでんを落としちゃったねぇ。・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「おでんなんてどうでもいいです!!そんなことよりもいきなりどうしたんですか?大丈夫なんですか!?」

「あ、うん。平気平気。ただちょっと立ち眩みがしただけだから・・・それよりも天道屋のおでんが痛まないうちに早く帰ろうか」

「・・・で、でも一応病院に・・・・」

後藤は伊達さんを病院に連れて行こうとするが伊達さんは首を横に振る。

「いいって。俺は救護科の講師でもあるんだよ。自分の身体の調子ぐらい分かってるって・・・。大丈夫、何ともないから・・・今のはね」

この時の伊達さんの言葉の意味を後藤が理解することになるのは・・・もうしばらくしてからのことだった。

風の音と魂の音（後書き）

『緋弾のアリア　欲望の交差』の外伝バージョン。『緋弾のアリアＡＡ　欲望の欠片』を１１月から始めることを決定しました。主役が間宮あかりであることは変わりませんが彼女視線で仮面戦士達の戦いを書いたり、本編では出番の少ない渉や亮太郎を登場させたりしていこうと思います。

始まる旅路（前書き）

オリジナルカンドロイドの登場が自然に受け入れてもらえて安心しました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

ジャンヌがアイスブルーの携帯で心当たりのあるらしいある人物と連絡を取りながら、俺を案内した場所は情報科の隣の通信科の学科棟だった。

「私は通信科の中空知と仲がいい」

その人物の名前に俺はピンとくる。中空知美咲・・・・通信科の2年で別のクラスなので顔は思い浮かばないが・・・声は知っている。というのも、彼女は強襲作戦時のオペレーターをよくやってくれる生徒だからだ。アナウンサーような美声な上に、状況を的確に教えてくれるのだがそれでBランク程度ってのはおかしいだろ。・・・そんなことを考えながら歩いていると俺達はラジオ局のような設備をした音響学講義室にやってきた。

「・・・ジャンヌさん?」

とたとた、と様々な種類のヘッドフォンを抱えてきた女子が・・・あまりにヘッドフォンを抱えすぎて前が見えなかったらしく・・・・

「お、おい!」

「はわぁ!?」

俺にぶつかってしまい床に尻餅をついてしまった。そして彼女の眼鏡が宙を舞い、俺がそれをキャッチする中、ヘッドフォンは辺りに散らばってしまった。

「大丈夫か中空知？」

俺の横に立っていたジャンヌは彼女に声をかける。・・・。えっ！？この人が中空知さん？・・・だいぶイメージが違うな。オペレーターをやってくれていた時は、もっとシャキッとした人だと思っていたのに。中空知さんは四つんばいになって「めがめめがね」と手探りで辺りを探し始めた。制服姿で這っているから何となく分かってしまったが・・・胸、白雪級だぞ。雰囲気はともかく見た目は注意しておいた方がいいな。話しかけるのもなんか忍びないので俺はさっきキャッチした眼鏡を差し出し、それを受け取った彼女は・・・

「えっと・・・どちらさまですか・・・」

眉を寄せながら目を細めて、俺の顔を覗き込んできた。それでも見えないらしい彼女は息がかかる距離まで近づいてくる。・・・まずい、ちょっとヒステリアの血の流れを感じるぞ。落ち着けよ俺。

「っ！？」
ドカッ

そしてようやく俺の顔が認識できた彼女はカサカサと後ずさり防音壁に背中をぶつけてしまった。

「あ、おっ！？おと・・・おとっ、おとこ！い、いやいいんです！す、すす・・・」

わたわたとして何を言っているのか分からない上に、尋常じゃない慌て方をしている中空知さんはアリア並の赤面速度で顔を真っ赤

にした。

「め、めがね、あ、ありありが、ございます」

ありがとうございます、すら言えていない。滑舌の悪さが剣崎以上だぞ。本当にあのオペレーターの中空知さんなのか？

「人違いだろ、この人」

「中空知は中空知だ。お前は私の人選に文句をつけるのか」

ジャンヌに睨まれたので、俺はもう一度中空知さん・・・らしい人物の方を振り向く。

「す、すみません、すみませんっ！すみ、すみませんっ！」

「い、いや、俺はまだ何も・・・」

「わ、わわ、私、ジャンヌさんが、1人で来ると思っていて、お、おとこっ、じゃくて男子が来るとは思っていなかったので、心の準備ができていなくてっ！興奮してしまって！あっ、興奮と言っても性的興奮ではなくてですねっ」

中空知さんは両手を上下左右にジタバタさせる。

「く、くるなんて、カッコいい、しかも、思っていなかったから、インカム映像で見ていた遠山君が、が、がが・・・」

何だか『この英文を正しい順序に並べよ』みたいな状態だな。・・・まぁ、話の内容は訳が分からないが・・・この声はたしかに中空

知だな。・・・・残念なことに。

「遠山、中空知はお前と同じで性格に少々難がある。そっちの壁際にいってろ」

俺は同じってなんだよ、と思いながらも壁際まで行くと、中空知はポケットから携帯を取り出して、ジャンヌから何かを教わるとクロックアップのような速度で電話番号を入力した。・・・・人間の指ってあんなにはやく動くんだな。そんなことを思っていると俺の携帯から着信音が流れた。

「・・・はい」

「初めまして。・・・と申し上げるのも奇妙なんですが、お会いするのは初めてですよね。中空知美咲です。先ほどは失礼しました」

電話の向こうからはアナウンサーのような美声が聞こえてきた。え?・・・本当にさっきと同一人物なのか?・・・俺は中空知さんの方を向こうとしてみるが、ジャンヌが通せんぼのポーズで彼女を隠す。

「私は少々上がり症なところがありますので・・・・失礼ながら、このように通信機を介してご対応させて頂きますがよろしいでしょうか?」

「ああ、構わないぞ」

よく分からないがさっきの滑舌の悪かった中空知さんは通信機さえあればいつものオペレーターである中空知に変わるらしいな。俺が言うのもあれだが、変わった人だ。・・・・その後、俺は中空知

からレキがプールの授業を終えるまでに風の音から分かったいくつかの情報を聞かされた。１つはその風の音はモンゴル北部から東部シベリアのどこかだということ。正直そんな地方なんかよりもあの音を聞いただけでそこまで分かる中空知に驚かされた。もう１つはロシア語交じりの日本語と古いモンゴル語を混ぜたような声が聞こえたらしいことだ。・・・正直謎は深まるばかりだが時間がないのでマイクロＳＤを中空知に預けて、後で聞き取れた内容をまとめてメールで送ってもらうように頼んだ。そしてその去り際に俺はジャンヌからレキが『記録に残らない仕事』・・・つまり殺し屋の仕事をしていたことを聞かされたが・・・今回は聞かなかったことにしておこう。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ヒビキさん!!」

俺が慌ててレキのところに向かっている頃、明日夢はヒビキさんの病室へと駆け足でやってくると・・・・

「おう少年!俺が寝ている間もちゃんと鍛えていたか?」

いつもの和やかな雰囲気のヒビキさんがおでんを食べていた。

「・・・鍛える鍛えないの話じゃないですよ。・・・あの時何もできなかった僕は・・・あれから鬼になるのを辞めようかと考えたり、武偵も辞めてしまおうかとも考えたんですよ」

「・・・そんで？・・・その答えは決まったのか？」

ヒビキさんは和やかな雰囲気から一転して真剣な表情をすると自身の音叉を取り出しながら立ち上がる。

「・・・僕、鬼にもなりますが医者になることも諦めません。鬼として戦いながら人の命を守って、医者として人の命を救えるような人になりたいです。誰も命を落としてほしくない。誰1人魂の音を止めさせない。・・・そんなふうに僕はなりたいんです！」

「・・・自分の道をはっきり決めたんだな。だったらもうその目標を諦めるなよ。たとえ今日と言う日が曇っていてもいつかは空は晴れる。・・・人の気持ちも似たようなものでどんなに悲しいことがあっても、きっといいことがあるんだ。俺の流派・・・音撃道響鬼流の魂を受け継ぐなら諦めない強さを常に持っていろよ」

そう告げたヒビキさんは明日夢に音叉を差し出す。

「・・・はい」

明日夢はその音叉を受け取るとヒビキさんは再び先ほどまでの和やかな表情に戻った。

「さぁて！一旦帰って明後日の修学旅行？の準備をしてこい明日夢！俺も引率するけど医者から退院は明後日って言われているから俺はまだ帰れないんでな！」

「はい！」

やる気に満ちた表情の明日夢は急いで病室を出て近くの駅の方へと向かった。

「・・・これからが大変になるぞ明日夢。仮面戦士と怪人の戦いは命がけ、実力や経験も大事だが、何よりも必要なのは自分を貫こうとする意志の強さだ。それが弱いと戦いっていうのは簡単に負けちまう。・・・今の俺じゃあのグランザイラスに勝てないと思うが、お前が仲間と一緒に戦えばきっと何とかなる。・・・お前の旅路は始まったばっかりなんだから頑張れよ」

ヒビキさんは走っていく明日夢の後ろ姿を見ながらそう呟いていた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

9月14日、修学旅行と言う名目のチーム編成の調整旅行が始まった。実際のところは修学旅行ではないのでいわゆる『旅のしおり』にも・・・『場所、京阪神（現地集合、現地解散）。1日目、京都にて社寺見学（最低3箇所見学し、後にレポート提出）。2日目・3日目、自由行動』としか書かれておらず、引率の先生もいないのだ。どうやら後藤は伊達さんとの特訓の都合で2日目である明日から合流するらしいが、それまで引率の先生がいないって教育委員会

に見つかったら訴えられると思うぞ。

「・・・はぁ、ただ面倒なだけだろ教師達・・・」

そう言いながらしおりを丸めて投げ捨てた俺は東海道新幹線のぞみ１０１号から、京都駅に降り立った。道中ほとんど寝ていたから実感はなかったが思った以上に新幹線が早かったな。品川を出たのが7時頃だったのに、まだ9時過ぎだぞ。・・・そんなことを思っている俺の後ろをレキとハイマキも新幹線から降りてくる。

「・・・・・・」

あくまで俺から離れないつもりのレキとハイマキを俺は苦々しい表情で見ていると、同じ新幹線を降りてきた武偵高の生徒達がこちらを見ながらヒソヒソ話を始めた。女子生徒達のほうはこちらを向きながらキャー！とか言ってテンションを上げているが男子生徒達は逆に下がっている。

「また遠山が我らが聖なる泉であるレキ様と一緒にいるぞ」

「ジェラ嫉妬ぉぉぉぉぉぉ！！」

「実に・・・不愉快っ！」

「「「・・・・・・」」」

「・・・鏡水がいなくなってから少し寂しくなったな俺達・・・」

はっきり言って内容は筒抜けだが、物凄くダークなオーラを感じた気がしたので聞かなかったことにしておこう。ああ、こんな浮か

ない気分の修学旅行は初めてだよ。唯一の救いはアリアがかなえさんの裁判関連で欠席しているのと京都にも星伽神社があるとはいえ、白雪も街に出てくる可能性は低いってことだな。だって出くわしたら絶対にレキと戦争を始めて京都の人に迷惑をかけちまうじゃんか。・・・それともう一つだけ救いだったのが・・・・

「最初は清水寺がいいと思うよ」

昨日ぎりぎりで帰ってきて旅行に参加した明日夢も俺達と一緒に行動してくれているところだ。今まで戻ってこなかった理由は聞くつもりはないが・・・この様子だと、もう大丈夫だろうな。とりあえずこいつが一緒に行動してくれるおかげで少しはカップル行動から仲良しグループの班に見えるはずだ。

「清水か。俺達だけじゃ適当に近くの場所に行って終了しそうだったから助かったぜ明日夢！」

「別に大したことはしていないよ。第一僕がいなかったら修学旅行は駅から近い所を適当に見て終わっちゃうなんて行動をしようとしてたの？」

すげぇバレバレだ。

「・・・良く分かったな。たしかにそのつもりだったぞ」

「はぁ・・・だったら清水寺と金閣寺、銀閣寺のメジャーなところにいったあとに、銀閣寺近くの茶屋で時間を潰そうよ。そっちのほうが思い出に残ると思うよ？」

「そうだな！そうするか。・・・レキもそれでいいよな？」

俺の質問にレキはコクリと頷く。・・・決まりだな。

「それじゃあ行くか！」

こうして俺達の修学旅行？は始まりを告げた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「ようやく決断したみたいね」

「・・・・・フンッ」

俺達の修学旅行？が始まりを告げた頃、大阪城の屋根の上には人間体となっているウヴァと黒い服を着た謎の少女が立っていた。

「約束通り俺の持っているメズールのコアとガメルのコアメダルをお前に渡そう。お前も例の物を渡せ」

怪人の姿となったウヴァはメズールのコアメダルを1枚とガメルのコアメダルを3枚相手に渡す。

「受け取りなさい。グリードであるあなたがこんな物に頼るなんて・・・お父様が知ったら大笑いするでしょうけどね」

「・・・勝手に言ってろ」

ウヴァはその少女がわざと落としたそのアイテムをいそいそと拾い上げると、そのアイテムの起動ボタンを押す。

『ＭＡＣＨＩＮＥ』

マシーンメモリ・・・機械の記憶を宿したメモリを手に入れたウヴァは最近は息を潜めていたが再び動き始めた。

エヴィルとグリード・・・２つの敵と戦うことになる修学旅行？はまだ始まったばかりだった。

始まる旅路（後書き）

やっぱりこの物語を始めた当初と比べると1話の文字数が増えたので内容を考える大変なこともあり毎日更新がきつくなってきました。なので11月からは火曜、木曜、土曜をこの物語を更新する形にして日曜日をAA更新という形にしようと思います。

闇夜に迫る機械音（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。事実上第１０３話、紹介などを除くと１００話目の更新です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

闇夜に迫る機械音

「尾行者がいます」

「「えっ？」」

金閣寺などの社寺の見学を終えて制服しか服は持っていないらしいレキのためにノースリーブの白いワンピースを買ってやって店から出ようとした途端、レキがいきなり告げてきた。

「視線を不自然に動かさないでください。誰かは分かりませんが、おそらくはSランク級のプロです。始めは攻撃的ではなかったのですが、今ハッキリと敵対的になりました。店外・・・入り口付近から監視されています」

「い、いつから？」

「キンジさん、さっき店外に出ましたか？」

「あ、ああ」

さっき俺はレキが試着室に籠っている時に外に出て、露天商でちょっと買い物をしている。

「その時からだと思います。私が試着室から出た時には、すでに視線を感じていました。この街に来たとき、すでに追跡されている感覚はあったのですが・・・その後、撒いたつもりでした」

俺達に尾行？・・・最初は敵対的ではなかった時点でエヴィル

ではないことは確実だが一体誰が・・・何のために?そう思った俺は服の置いている棚へと移動すると、さりげなくバッタカンを取り出して偵察に行かせる。するとスタッグフォンに写った映像には燕尾色のスカートにピンク色のツインテールの人物が写っていた。

「っ!」

驚いて振り返ってしまった俺は、入り口からこっそり覗いていたアリアと目が合ってしまった。

「・・・・っ!」

そしてなぜか俺とレキの方を見てこの世の終わりのような表情をしたアリアは脱兎のごとく逃げ出した。

「待てよアリア!!」

俺はレキと明日夢をその場に残してアリアを追いかける。若者達でごった返す道は走りづらかったらしく俺はすぐにアリアに追いついた。

「〜〜〜〜〜〜!!」

何とかして俺が掴んだ手を振り払おうとするアリアは、声も出ないぐらいに興奮している。・・・たぶん誤解をされているから何とかして誤解を解かないとな。

「あ、あんたはいい!あたしもはっきり言ってなかったから!でも、あたし、レキにはちゃんと話していたのに!あの子は知っているはずなのに!レキ!・・・レキなんか!・・・・あんたもいい加減離

しなさいよ！あたしは忙しいの！呉に行く前に、ちょっと大阪武偵高に寄っただけなんだから！呉に理子と武藤を待たせているだから！」

アリアが興奮状態せいで前半はよく分からなかったが・・・たぶん呉っていうのは広島だと考えるとかなえさんの裁判関連か？俺はそう問いかけようとした時・・・・

「あたしが忙しい間！」

アリアは平拳で俺の眉間を叩き・・・

「レキとアベックで！」

さらに足払いをかけて・・・・

「お幸せにね！！」

トドメに倒れている俺の顔面を踏みつけて走り去ってしまった。・・・俺、まだ何もやってないのに。

「おい！俺の話を・・・・！」

俺が叫んでアリアを呼び止めようとすると、ようやくハイマキが追いついてきた。アリアが素早く退散したのはこいつが来たからか。・・・いや、それだけじゃないな。何となく感じたが、近くでレキがこちらを見ているな。あのドラグヌフの殺気でまたもやアリアを追っ払ってしまったんだ。ああ、修学旅行？はチームを作るためのはずのものなのにアリアとレキ、そしてその間に挟まれている俺は逆に険悪になっちまったな。・・・・そう思った俺は深いため息を

つきながらレキや明日夢と合流するために先ほどの店へと戻った。

「・・・・アンク、俺達が相棒達の仲介人にならなくていいのか？」

「・・・・いや、俺達がキンジ達の間に入っても逆に溝が深まっちまうだけだ。ああいうのは当事者達で解決させたほうが綺麗に纏まるんだよ。下手に第3者が介入すると、その時だけは解決したような感じになるが内側では何も解決しないからな。・・・・俺達はこのままアイツ等と別行動で動くぞ。京都に出現したらしい青い怪人の情報を集めるんだ。・・・・最悪な展開にならない前にな」

「・・・分かった」

俺は気づいていなかったが・・・アンクと矢車は俺達の様子を確認して何処かに立ち去っていった。

・・・・

にのぅ、宇宙飛行士のような白い見た目で右腕にロケットをつけた仮面戦士が突っ込んできたせいでボロボロになってしまったんよ。当然部屋代は安くしたるから一部屋にしてくれんか？せっかくやから彼女さんと相部屋って感じで」

どうやら予約していた部屋が一つ駄目になったらしい。・・・・ロケット野郎、見つけたらカンガルーアームでゲンコツしてやるからな。・・・おっと！？今はレキが彼女であることを否定しないとな。

「いや、これは彼女とかじゃないんでっ！」

「彼女ですよ」

レキめ。何余計なことを口ずさんでいるんだ。

「民宿の方が発言が主体で、それ以外でここにいる女性は私だけです。従って、三人称は彼女ですから」

先生みたいな口調でズレたことを言っているレキに俺は反論しようとすると・・・・

「んもぉ～！若い子は初々しくてええわぁ～。沙織あてられちゃいますわ～」

「あ、いえ、こいつは少しアレな子でして・・・」

妙に乙女チックな動作でいやんいやんと動く女将さん・・・沙織さんに俺はレキの誤解を解こうとするが・・・

「今日は他のお客さんがおらんさかい、ええ部屋を使ってくださいな」

沙織さんはこっちに背を向けて完全に接客モードになってしまうのだった。・・・つーか人がいないならどっかの部屋に変更させろよ。・・・もしかしてだけど俺・・・はめられたのか？いや、あの様子を見ると確実にはめられたんだろうな。

案内された『西陣の間』は畳も真新しい豪華な場所だった。部屋名の通り、壁には色彩豊かな西陣織の反物が飾られていて、絹布の前には人が入れそうなくらいの大きな壺があり、部屋の高級感を高めていた。そして食事を終えて温泉に入ったんだが『男湯』や『女湯』の表示すらなく危ないと思っていたのでレキに「絶対ついてくるなよ」と言ったのにレキ曰く「危険を感じた」と言われて入ってきた時は本気でヒスるんじゃないかと心配した。そして部屋に戻ってくると、とても大きな布団が一つだけしかしかれていなかった。そしてそこには枕が2つ仲良く並べられている状態だ。さすがにいくらそういうのに疎い俺でもこの意味は分かってしまい気が気でならなくなってしまう。・・・沙織さん・・・人がいないからって俺達で遊んでいないか？

「そ、そういえばハイマキはどうしたんだ？」

このまま考えているだけでもヒスってしまいそうな俺は考えをそらすためにも先ほどから見かけないハイマキの話題を出す。その一方、レキはマイペースで狙撃銃を抱えると、壁際に移動して体育座

りをした。

「室内にいます」

「室内？」

いないから聞いたのに。まぁ・・・いいか。レキが布団から離れてくれたおかげで、色々と心配する必要はなくなったんだし。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

き、気まずい。気まず過ぎるぞ。これじゃまるで逆に布団を意識してるみたいじゃないかよ。

「レ、レキ・・・お前は・・・・ここでも銃を抱えて、座って寝るのか？」

沈黙に耐えかねて自分から切り出した俺は・・・・いきなり切り出し方を間違えたことに気づいた。今の台詞は逆に俺から誘っているようにも聞き取れるぞ。・・・しかし俺のそんな心配は取り越し苦労だったらしく・・・・

「はい。常に備えよと・・・・風が命じていますから」

レキは斜め下の畳を見ながらそう答えた。と、いうことは座って寝るんだな。寝ないんだったらこっちが気分悪いから安心したぞ。

「風の命令か。・・・完遂してくれよ、それも」

「はい。ただ・・・風は他に2つのことを命じています。私はその1つを実行できていません」

「何だそれ？」

俺が眉を寄せるとレキは音も無く立ち上がった。

「風を守る、ウルスの子孫を作ることです」

「ウルスの子孫・・・・？」

「キンジさんと私の子供です」

「っ！」

せっかく考えないようにしていたことを蒸し返されかけた時、大きな壺が倒れたかと思うとハイマキがその中から出てきた。・・・お前、そこに隠れていたのか。そして部屋の電気を消したレキは・・・

「それと・・・もう1つ命じられています」

急に声を潜めて屈んできた。

「キンジさんを守れ・・・と」

そう俺に告げたレキは普段のこいつとは思えないほどの力で俺を押し倒した。

「っ！？」

あまりに突然のことに俺は真っ赤になった途端・・・事件は起こった。

ピュン！　ガシャァン！

何かが風を裂く音が聞こえたかと思うと、廊下側の方から窓ガラスが割れる音が聞こえた。

ビッシュッ！　ガシャァァン！　ガシャァァン！

そして次々と窓ガラスが割られた音が聞こえたかと思うと・・・俺達の部屋のＴＶの上に置いていた俺とレキの携帯が精密に狙撃された。そして部屋の装飾は次々と破壊されていく。

「狙撃です・・・レミントンＭ７００。距離は２１８０メートル。山岳方面から撃ってきました」

発砲音から銃の形式や距離を見抜いたらしいレキが淡々と告げる。東京武偵高でも最も長大な射撃距離を持っているＳランク武偵のレキが絶対半径は２０５１メートルもあるのに、相手はそれをさらに上回っているだと！？・・・しかもレミントンＭ７００は世界で最も信頼度の高い狙撃銃、つまり俺達を狙う相手は超一流だってことだ。

「ここは危険です。敵から私たちの場所が分かりすぎている。野外に移動しましょう」

「敵って誰だよっ！」

おそらく狙撃銃を使っている時点で敵はエヴィルの連中ではないことはたしかだ。だとするとやっぱりイ・ウーの残党か？・・・・俺達は警察に連絡している沙織さんを背に勝手口から外へと出た途端、どこからともなく・・・・

「遠山キンジ　レキ　２人とも投降しやがれ　です」

「・・・・・」

ダァァン！

ネットで話題なボーカロイドのような人工音声が聞こえてきた。そしてそれに気づく俺の横でレキはドラグノフを上に構え空に発砲した。そして漆黒の夜空にちいさな花火のようなものが弾けたかと思うと、黒く着色されたラジコンのヘリが墜落していくのが見えた。だがレキの発砲に応戦するかのように、次の瞬間、何発もの銃弾が俺達に降り注いだ。

「ちっ！？まだいるのかよ！・・・沙織さん！外に出ちゃ駄目だ！」

「えっ！？」

携帯を片手に外に出てきた沙織さんを、俺は慌てて中に押し戻す。外からの銃撃は精度が悪い上に、音を抑えるためか軽量のラジコンを使っているだめ狙いが定まりにくいので何とか俺達は当たらずに済んだ。しかし「下手な鉄砲数撃ちゃあたる」ということわざがあるように、地面からの兆弾だってこれだけ乱射されたら危険だ。そしてただでさえそんな危険な状況なのに・・・・

「オマエタチ、覚悟スルネ！」

身体の各部にＴＶなどのリモコンのようなものが張り付いているトンボのような怪人が空から降りてきた。

「・・・何だこの怪人は！？」

エヴィルは過去にレジェンドライダー達が戦った怪人を作り出す傾向にある。だけどこんな怪人は仮面戦士科の教科書でも見たことがないぞ。・・・となると可能性があるのはドーパントかヤミーだよな。だけどドーパントは１つの記憶から怪人を作り上げるから、こんな合成怪人なんてありえないし、ヤミーにしたって無機質と昆虫が混ざった怪人なんて無理なはずだ。

「サァ、邪魔者ハ死ンデモラウネ！」

リモコントンボが羽根を振動させた途端、どこからともなく大型トラックが俺達・・・いや、沙織さんを狙って突進してきた。

「まずいッ！？変身ッ！」

『タカ！カンガルー！バッタ！』

「セイヤッ！」

ドオォォォォォン！！

俺は咄嗟にオーズ・タカガルバに変身してカンガルーアームでトラックをアッパーで空中に飛ばすと、トラックは他のラジコンを巻き込んで爆発する。

「チッ！失敗シタネ！ダケド次、外サナイ！」

リモコントンボが再び羽根を振動させた途端、先ほどのサブマシ

ンガン付きのラジコンが再び大量に集まってきた。

「逃げると　そこと沙織さんを　破壊す・・・・」

「私は一発の銃弾」

ダァァン！

レキはこちらに語りかけようとしていたラジコンを狙撃して次々と破壊する。・・・この手口、忘れもしないぞ。４月に俺を狙った『武偵殺し』・・・理子と同じような手口だ。そんな相手が俺達を狙っているのにリモコンとトンボが混ざったような怪人に狙われることになるなんてな。

「・・・まったく・・・どうすりゃいいんだよっ！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はそうキレ気味に告げながらタトバへと姿を変えて展開したトラクローをリモコントンボに振りかざした。

・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺が謎のリモコントンボと戦い始めた頃、マシーンのメモリを左手で握っているウヴァがその戦いを見ていた。

「あれが俺の新たな力で誕生したヤミーか。・・・・フン！人間の作った力に頼るのは癪だが・・・背に腹は変えられんからな。そのブンの働きは見せてもらうぞ」

『ＭＡＣＨＩＮＥ』

この時の俺はリモコントンボがまさかガイアメモリを使った無機質合成ヤミーであることなど知るよしもなかった。

闇夜に迫る機械音（後書き）

無機質合成ヤミーは気づいた人もいるかもしれませんが、Ｖ３に登場したデストロンの機械合成怪人がモデルです。パワーアップしたウヴァ自身の能力は・・・いずれ登場します。

感情（前書き）

冬のＭＯＶＩＥ大戦にＷが本人で登場すると聞いてびっくりしました。すっごく楽しみです！

タカコア
ライオンコア
クワガタコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

感情

「ハァァァッ！」

「ハイヤッ！」

ガギンッ！

俺の振り下ろしたトラクローはリモコントンボの右腕のリモコンに止められてしまった。この強度・・・リモコンのくせに鋼みたいに硬いなんておかしいだろ。

「セイヤッ！」

ひとまずリモコントンボから離れた俺はメダルホルダーからクワガタのコアメダルを取り出す。

「くっ！？・・・だったら電撃で機械をショートさせてやる！」

『クワガタ！トラ！バッタ！』

「ハァァァァッ！」

オーズ・ガタトラバに変わった俺はクワガタヘッドから電撃を放つがどういう訳か機械の怪人のはずなのにあまり効いていない。

「ちっ！・・・頑丈にもほどがあるだろ」

やっぱりコンボを使うか？だけど今できるのは一番体力の消費が激しいガタキリバコンボと‘あのコンボ’だけだ。・・・そもそ

もここでコンボを使えばレキや沙織さんなどの旅館の人を巻き込んじまう可能性だってあるし、コンボを使った後の反動で動けなくなったら狙撃手の餌食だ。

「・・・しばらくは亜種で凌ぐか」

そういえば前にヒビキさんの授業で聞いたことがあるな。・・・「戦闘で最も難しい戦い方は守りながらの戦い」って。守りながらの戦いで一瞬でも隙を見せたりしたら自分だけじゃなく守っている人達にも被害が及ぶ。もしそんな戦闘になった場合優先するのは・・・

「おおおおぉぉぉぉぉぉ!!」

ガシっ

「掴マレタ!?セクハラネ!」

相手と守っている人を引き離すことだ。・・・そう判断した俺はリモコントンボに突進してこの場所から力ずくで戦っている環境を変更させた。

「セイヤッァ!」

駐車場を駆け抜け森の中に移動するとすぐさま回し蹴りでわずかに気を逸らすと、その隙に電撃を目くらましにして暗闇の中に目を潜める。・・・クワガタヘッドはタカヘッドの超視力もなければライオンヘッドの暗視もある訳ではないので生身よりは見えるがオーズの変身の中では見えにくい。かといってメダルを変えようにも変身の際の発光によって狙撃手に気づかれる可能性もあるので下手にメダルを変えることはできない。

「レキ、もう少し・・・」

もう少し明るいところに移動しよう、と言おうとするとレキはジェスチャーで「静かに」とやってくる。

「声を潜めてください。敵の狙撃手は集音機を持っていると思われます。さっきキンジさんが旅館の女性を名前で呼んで警告した直後・・・敵も名前を呼んでいました」

そういえば・・・リモコントンボの方にだいぶ気を取られていて聞き流す感じだったがたしかに沙織さんがボーカロイドの声に名前を呼ばれていたな。

「キンジさん。私を使ってＨＳＳ・・・ヒステリアモードになってください」

な、何だって？・・・ヒステリアにだと？

「この戦いの結果がどうであれ、今のあなたではこの森から逃げられない」

「だ、だけどヒステリアになるためには・・・・・」

あまりに突拍子のない作戦を告げられた俺は言葉を詰まらせる。アンクがいた場合は俺の血流を加速させる本とかと投げつけてくるが・・・ここにはアンクはいない。目の前にいる人はレキだけだ。

「私なら何をされても構いません。あなたなら・・・・時間はあまりないですけどできますか？」

「時間？」

「私はこれから狙撃手と撃ち合います。私が即死あるいは負傷したりしたら、その場に放置していってください。その際、この銃からスコープを外して持っていってください。このスコープにはカメラが内臓されていて、狙撃の瞬間、私が見ていた画像を記録できるようになっていますから・・・敵の姿を確認できます」

「お、おい」

自分が死ぬようなことを事務的に告げてくるレキに俺は戸惑いを隠せない。

「キンジさん、はやくＨＳＳ・・・ヒステリアになってください」

「そんなこと、この状況で・・・」

「無理ニ決マッテルネ！」

声の聞こえた方向を振り返ってみると・・・先ほど振り切ったつもりだったリモコントンボがすでに数メートル後ろに立っていた。

「・・・キンジさんはそちらの怪人の相手をお願いします。その間に私は狙撃手と撃ち合います」

「ああ、分かった。・・・ハアァァァッ！！」

ガギィィン！

俺は両腕のトラクローを展開してリモコントンボに切りかかるが

先ほどのようにあっさり止められる。

「こっのぉ！」

その反動を利用してリモコントンボの上を一回転した俺は後ろから右腕のトラクローを振りかざす。・・・これなら避けることはできないだろ！

「甘イネ！」
ガギィン！

「なっ！？」

リモコントンボの背中の外装は想像以上に硬くトラクローはあっさりと弾かれてしまった。リモコン以外の部分でもこんなに硬いのかよ！？

「ハイヤッ！」
ドカッ！

「ぐあっ！？」
チャリィィン

まるでこの前襲ってきた留学生のような体術で俺を地面に張り倒すと、その反動でクワガタのコアメダルがベルトから吹き飛び変身が解除されてしまった。俺はすぐさま吹き飛んだクワガタを回収しようと立ち上がるが・・・・

「よくやったぞ！」
パシッ！

「なっ！？ウヴァだと！？」

そこに突如ウヴァが現れクワガタのコアメダルが奪われてしまった。

「オオ、ウヴァ様ネ！サッキマデコソコソシテイタノニ何デ出テキタネ？正直言ッテ邪魔ネ」

「・・・口は悪いが戦闘力は確かなようだな。・・・どうだオーズ！これが俺が新たな力を使って作り出したヤミーだ！」

ウヴァはクワガタのコアメダルを吸収する時、左手には何かが握られているのが見えた。メモリのイニシャルは『Ｍ』・・・Ｍのイニシャルでリモコン？・・・そうか！機械の記憶！『ＭＡＣＨＩＮＥ』のＭか！

「さぁ・・・残りの俺のメダルも貰っていくぞ」

そう言いながら俺がさっき落としてしまったメダルホルダーを拾いあげたウヴァはそれを開こうとした途端・・・・

ダァァン！

「っ！？」

ところどころを負傷しているレキがウヴァの手からメダルホルダーを弾いた。俺はすぐさまメダルホルダーを回収した途端、ウヴァはレキの方を睨みつける。

「人間ごときが・・・まあいい。オーズとともに、ここで死んでも

らう」
ガギィィン
　ウヴァがボロボロのレキにトドメを刺そうとしたその時、その攻撃をキックホッパーの右脚が止めていた。
「・・・・久しぶりだなミドリムシ。・・・いつぞやのお返しをさせてもらうぞ」
「・・・ふん。あの時の飛蝗の戦士か。・・・・いいだろう。オーズにトドメを刺す前に相手になってやる」
　キックホッパーとウヴァは暗い森の中に走り去っていくと機械の記憶を使って強化されたヤミーだと分かったリモコントンボヤミーは「アチャ～。ウヴァ様行ッテシマッタネ」と呟きながらボケッとしていたので、俺はその隙にレキのところへと駆け寄る。
「レキ！」
「・・・キンジさん。これを・・・・」
　ぽた、ぽた、と膝や額から血を流しながらもレキは俺にドラグヌフと銃剣を渡してくる。それとともに辺りから２～３０匹はいる犬の遠吠えが聞こえた。
「残念ですが・・・私は負傷してしまいました。おそらくは狙撃手のと思われる猟犬を追い払いつつも、あなたを庇う力はもうありません。あなただけでも逃げてください。先ほど少しだけダメージを与えましたが、敵はきっとすぐに体勢を立て直し・・・私にトドメを刺しにきます」

「何言ってんだ！それならなおさらお前を丸腰にできるかよ！」

「まだ炸裂弾があります。・・・これは銃がなくても起爆できる」

こいつ・・・自爆するつもりかよ！

「馬鹿をいうな！・・・こんなところで・・・訳の分からない奴を相手に死ぬなんて・・・お前、それじゃ犬死にじゃないか！！『風』の言うことばっかり聞いて、いっぺん笑ったことも泣いたこともなく・・・何の感情も持たないまま死ぬなんてあんまりだろ！！」

俺がそのように告げると・・・レキは首を横に振った。

「キンジさん・・・私は先日『感情を抱いたことがない』とあなたにいいましたね。でも本当は・・・なぜか、あの時、あなたに言えなかった。・・・私は・・・一度だけ明確に感情を持ったことがあるのです。・・・私は『風』に男性を、強い男性をウルスに入れることを命じられていました。・・・そして『風』が・・・キンジさんのものになれ・・・と告げたとき・・・私は初めて、自分自身の思いが生じたのです。・・・『相手がキンジさんで良かった』と・・・」

レキは・・・仕草や態度で表現できないながらも、心の中に自分自身の思いを芽生えさせていたのか。

「だからキンジさん、私は感情を持たないまま死ぬ訳ではありません。・・・あなたが気に病むこともないのです。・・・ウルスを永続させるための使命は私の姉妹の誰かが改めて負うことになるでし

ょう。・・・私は・・・もういいのです。私に初めて想いを生じさせてくれた人。一緒に食事をしたり服も買ってくれた。僅かな時間でしたが、その時も私は感情を表現することができなませんでしたが・・・きっと感情・・・私は嬉しかったのです。あなたと過ごした日々・・・楽しかったです」

この時・・・今、初めてレキの表情が笑顔になっていた。そのぎこちない笑顔を見た時、俺はようやく気づいた。・・・レキは感情が無い訳じゃない。感情を知らないだけだったんだ。

「話ハ終ワッタ？ナラ、ソロソロ死ンデモラウネ！」

今まで黙って立っていたリモコントンボヤミーはゆっくりとこちらに近づいてくる。

「キンジさん・・・行ってください・・・」

「レキ・・・確かに2人死ぬよりも1人生き残るほうがいいだろうな。・・・だけど俺は目の前で消えそうな命を見過ごせない人間なんだよ」

俺は内ポケットから黒い3枚のメダルを取り出す。

「・・・こんな状況で馬鹿な答えかもしれないが・・・2人とも生き残る方がいいに決まっているだろ！」

その3枚のメダルをベルトに入れた俺は目を瞑って思い出す。・・・俺にこの黒いメダルを託してくれた。・・・夏休みに出会い・・・救いきれずに去って行った友達を・・・。

「・・・ノブナガ、お前の力・・・俺に貸してくれ・・・・・・変身ッ!!」

『サソリ!カニ!エビ!サッカッエッ!サッカッエッ!サッカエ～～ロ～!!』

オースキャナーでベルトをスキャンした途端、俺は金属光沢に近い銀色の光に包まれる。そして俺の頭部は剣の変身するサソードにも似た黒い形に、銀色の複眼へと変わり、胴体は漆黒のクジャクアームの両肩にそれぞれ大きさの違う刀を装備させたものに、足はオーガのような布みたいなアーマーがついたライトブラックのバッタレッグへと変わった。

「・・・そのような姿は報告にはありませんし、『風』すらそのメダルの存在を知りません。・・・その姿はいったい?」

「・・・最終的に一番大切なものを手に入れた・・・かつて天下人でもあった奴から受け取ったメダルが起こした天下の姿。・・・‘オーズ・サカエコンボ’だ。初陣させてもらうぞ!」

チャキッ

右肩から長刀を抜いた俺はそれを両手で握ってリモコントンボヤミーに中段の構えを取った。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

俺がサカエコンボに変身してリモコントンボヤミーに長刀を構えた頃、アンクは俺達が泊まっていた旅館の玄関の前に立ってスタッグフォンの画面を見ていた。

「キンジはアイツのメダルを使ってウヴァのヤミーと交戦中、矢車もウヴァと戦闘中らしいな。・・・・さてと、俺も少しは手伝ってやるか。・・・オラァッ！」

ドカッ！

アンクは右腕を怪人の姿に変えると旅館に向かってくる猟犬達を次々と殴り飛ばす。そこに1人の少女がやってきた。・・・・あの時俺を襲った留学生のココだ。

「へぇ、お前なかなかやるネ！８０点やるネ！名前を言うネ！」

「アンクだ。・・・・言動から察するに・・・・お前が今回の事件を起こした犯人か。探す手間が省けたな。・・・・他の犯行メンバーの居場所を教えてもらうぞ」

「・・・アンク、覚えたネ！お前も貰って帰るヨ！」

「貰う？何のことだ？」

ココを睨み付けたアンクはスタッグフォンをしまう。

「これから超能力者、みんな滅びる。お前らみたいな『ただの人間だけど強い駒』早く手に入れておくの、良いネ！」

「・・・俺は人間じゃなく怪人だぞ。その証拠に・・・」

アンクは自分の右腕をココへと見せるが、ココは「何言っているの？」と言いたげな表情をする。

「お前、怪人のようにも見えるけど、怪人達が放っている気力がないネ。お前は特別、確かに『ただの人間』ではないけど怪人でも超能力者でもないネ！お前のような怪人、聞いたことあるネ！たしか『アミ・・・・・』」

ドンッ！

ココが何かを言おうとした途端、アンクは右腕から火球を顔面あたってしまうスレスレへと放つ。

「・・・軽々しくそのことを口にするな。次は当てるぞ」

アンクは鷹が獲物を狙うかのような雰囲気でココを鋭く睨み付けた。

感情（後書き）

今回はようやくオリジナルのコンボが登場しましたが戦闘は次回です。

磁力天下（前書き）

今回はオリジナルコンボであるサカエコンボの初戦闘回。そして原作6巻の内容が終了です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

カンガルーギジ

磁力天下

「ソ、ソンナ姿ナンテ見カケ倒シネ！！」

「セイヤッァ！」

ガギィィン！

リモコントンボヤミーの拳を長刀で受け止めた俺はそのままその攻撃を逸らして左腕のリモコンを斬りつける。

「マ、マサカッ！？」

そのリモコンは真っ二つにこそできなかったものの、トラクローではできなかった傷がついていた。力こそサゴーゾコンボ以下だが切れ味はトラクローやカマキリソード以上って感じだな。

「ナラ、コレデドウネ！！」

リモコントンボヤミーが羽根を振動させた途端、俺に向かって数台の車が迫ってきた。・・・何となくあのヤミーの能力が分かってきたぞ。あいつは羽根から特殊な電波を受信して周囲の機械を操るのか。

「・・・だけどこの姿に機械を特攻させるのはミスったな」

俺は左肩の短刀も抜くと左右の刀をぶつけ合わせる。そうした途端、数台の車は磁石がくっつくみたいに１つに集まってぶつかった。

「ナ、何ヲシタネ、オ前！？」

「別に・・・ただ車を1つだけ磁石にしただけだ」

電磁力操作・・・これは暴走したノブナガが使っていた能力で物体に電気を注ぎ込んで電磁石にして、くっつけたり離したりすることのできる力だ。ノブナガの時は地面とタジャドルコンボの俺をS極とN極の関係にして地面に叩きつけたり、その逆に羽根手裏剣を自身と同種の磁極にして俺に跳ね返すって技をやられたな。

「ナラ、直接攻撃ネ！」
ブンッ！

リモコントンボヤミーは空中に飛び上がると急降下して拳を振りかざしてきた。

「セイッ！」
バシィィン！

その攻撃に対して俺はエビレッグの両足を揃えてエビの尾のようにさせると尾から放たれる磁力と空気中の金属元素と反発させて浮かび上がりリモコントンボヤミーを弾き飛ばした。

「クッ！？ココハ、引カセテモラウネ！！」

「逃がすか！」

俺は逃げようとするリモコントンボヤミーに短刀をブーメランのように投げつけてダメージを与えると長刀との引き合う力で短刀を回収する。

「逃ガシテクレナイナラ、ヤッパリコノ場所デ倒スネ！ハイィィ！」

「ハッァ！」
ガギィィン！

それに激怒したリモコントンボヤミーはかかと落としをしてきたので俺は両手の刀をクロスするようにして受け止める。

「セイヤッ！」
ズバッ！

「アウッ！？」

そして横に身体を逸らしながらその攻撃をはらうと長刀と短刀で十字にリモコントンボヤミーを斬って怯ませるとオースキャナーを手に取る。

「そろそろ決めさせてもらうぞ」
『スキャニングチャージ！』

「ハァァァァッ！」
ザクッ

ベルトを再スチャンしてエネルギーを溜め込んだ俺はサソリヘッドの先端の‘サソリテイル’を伸ばしてリモコントンボヤミーに磁力を流し込む。・・・ノブナガと違って俺のこのコンボは無機物以外は直接電磁力を流し込まないと流しこまないといけないんだ。もしかしたら直接じゃなくても出来るかもしれないが・・・少なくともこのコンボになれていない今の俺にはできない。

「クッ!?何ナノネ!?身動キが取レナイネ!?」

「ハァァァッ!」

ガギィン!

そしてその磁力の影響で浮遊状態となったリモコントンボヤミーに俺は長刀と短刀を合体させて蟹のようなハサミ・・・'カニシザー'を構えて走り出す。

「っセイヤァァァァァァァッ!!」

ズバッ!

「唖ァァァァァァ!?」

ドオォォォォォン!!

そして身動きの取れない状態のリモコントンボヤミーを俺はカニシザーで一閃すると、鋼のような強度を持っていたリモコントンボヤミーの外殻は割れるように砕けてそのまま爆発してセルメダルへとなった。

「はぁ・・・はぁ・・・・レキ、こんなところで・・・・死んじゃいけない。お前はさっき、確かに笑ったんだ」

その笑顔が最後であっていいわけないだろ。・・・お前はようやく成長し始めたんだ。そんな最初の一歩を踏んだばっかりなんだ。風のドレイじゃなくて、人間としての新しい人生はまだ始まったばっかりなんだ。・・・だから死ぬな。

「とりあえず今は逃げようぜ。ヤミーは倒しても、まだ狙撃手からは逃れられていないんだろ?」

変身を解除した俺は予想以上に身体に負担が掛かったサカエコンボの疲労でふらふらしながらもレキを抱えて森の中をがむしゃらに走りだした。

「はぁ・・・・はぁ・・・・」

しかしコンボの疲労がこんなにあっちゃそれほど遠くまでは走れない。・・・・かといって止まってしまうと狙撃手や猟犬の餌食になってしまうことは間違いないから止まることはできない。俺は少し冷静に自分達の置かれている状況を再認識しているとこちらに一台の高級車がやってきた。・・・・するとその車からは俺の知っている人物が降りてきた。

「キンちゃん！何があったの！？」

ホトギアゲハを指に乗せた白雪だ。

「白雪・・・助かったぞ。・・・・よく気づいてくれたな」

「こっちの方で何度も爆発音が聞こえたから悪い予感がして・・・・蟲術で辺りを調べていたの。それと、キンちゃんに電話したら繋がらなかったから・・・・私、私、ふえぇぇぇ」

涙目でやってきた白雪は、俺の無事を確かめるように抱きついてくる。そしてすぐにボロボロの状態のレキに気づいて「大変・・・・！」と傍らに立った。

「レキは遠くの狙撃手にやられたんだ。はやく手当てを・・・・」

と言う俺と両手で口を押さえて目を見張る白雪の横に・・・・

「蕾姫？」

小声で呟きながら車を降りてきたもう1人の少女がこちらにやってきた。スラッとした美人に成長していて一瞬分からなかったが・・・1歳下の白雪の妹の風雪だ。この子は昔からレキ並みにクールだったが相変わらずだな。そして無表情の彼女が白雪に耳打ちすると・・・・

「そ、そんな。間違いないのですか？」

白雪は慌てて振り向く。そしてこくりと頷いた風雪は・・・・できれば知りたくなかったレキの正体を告げてくる。

「この御方は源義経様・・・・チンギス・ハン様の末裔。大陸の姫君です」

レキが・・・・源義経、チンギス・ハンの子孫だと!?・・・・いや、今はそんなことを気にしている暇なんてない。はやく手当てを・・・・

「白雪、お前、レキを治療する術か何かは使えないか？」

俺の問いに白雪は首を横に振る。

「普段なら、少しは出来るんだけど・・・・いま、私の力は不安定なの」

「不安定？」

眉を寄せた俺に風雪が横から解説してくれる。

「最近、日本中・・・・いえ世界中であらゆる超能力が弱まり、成功率が下がる原因不明の現象が起きているのです。星伽でも、特に人を癒す巫術は使わないようにしています。あれは失敗すると人を殺める可能性がありますから」

俺はそっち関係のことはよく分からないが・・・・簡単に解釈するとゲームの回復魔法のように単純のものじゃないってことだな。

「体温も下がってきてる。はやく病院に・・・・」

「病院は駄目だ。狙撃手に狙われる可能性がある」

今、こっちには狙撃手がいない。もし街にある病院を襲撃されてしまえば手も足もでないぞ。

「それでは星伽神社にレキ様をお連れしましょう。そこに医師を呼びましょう」

「頼む！」

俺は白雪達が乗ってきた車にレキを乗せて星伽神社へと向かった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺達が星伽神社へと向かっている頃、アンクは辺りを散策していた。

「チッ！・・・逃げられたか」

アンクがココを取り逃がしてしまい辺りを見渡していると何か大きなものに足を引っ掛けてしまう。

「何だ？・・・コイツは・・・」

そこには猟犬に噛まれたり爪で引き裂かれたりして血だらけになったハイマキが倒れていた。

「・・・確かレキの武偵犬のハイマキ・・・だったな。まだ息はある。仕方ない・・・運んでやるか」

ガサッ

アンクは怪人態の右腕でハイマキを担いだ途端、後ろから物音が聞こえたので振り返る。そしてそこから出てきたのは・・・・

「・・・ようアンク・・・・」

ところどころの装甲が砕けて火花が出ているキックホッパーだった。

「・・・お前、何があったんだ？お前の実力なら完全体じゃないウヴァならトドメはさせないながらも、そこまでダメージを受けるはずがないだろ？」

「・・・俺はグリードやヤミーに詳しくないから完全体の戦闘力はよく分からないがこれだけは言える。・・・・あのミドリムシはガイアメモリを使うことで・・・ぐっ！？」

アンクの予想以上にダメージを負っていたキックホッパーはその場に倒れるとそのまま意識を失ってしまい変身が解除されてしまった。

「・・・ガイアメモリはヤミーだけじゃなくあの虫頭も強化したってことか。・・・・矢車をここまで追い詰めるってことは少なくとも戦闘力はメズール達のメダルを取り込んだカザリ並はあるってことか。・・・・やばくなってきたな」

ハイマキの上に矢車を乗せたアンクはそのまま病院に向かおうとしていたが、その途中で足を止める。

「・・・・たしかキンジ達は狙撃手に狙われているんだったな。・・・・さっきの戦闘もあることだし俺たちも狙われている可能性があるな。・・・・仕方ない。ここから一番近い星伽神社にコイツらを置いてくるか」

アンクは進む方向を変えるとため息をつきながら再び歩き始める。

「・・・・それにしても何でアイツが俺のコアメダルを作った・・・を知っていたんだ？８００年前でもそのことを知る人間は１０人といなかったはずだ。・・・・まあいい。どっちみち次はとっ捕まえて尋問科に突き出してやる」

俺はこれからさほど遠くないうちに知ることになる。８００年前アンクのメダルを誕生させた‘真紅の錬金術師’と呼ばれた人物を・

・・・。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

俺やアンクが別行動ながらも同じ場所を目指している時、森の中ではココが何者か達と合流していた。

「逃げられちゃったネ。それに緑色の変な怪人が作った怪人がやられちゃったネ！」

「今回は仕方なかったネ。・・・それにまだこっちにはその怪人はいるんだし・・・・」

「「・・・・・・・」」

そう言った謎の人物達の後ろには両手に拳銃のような武器を持ったリモコントンボヤミーと左腕が狙撃銃になっているリモコントンボヤミーが立っていた。

磁力天下（後書き）

今回で原作6巻の内容が終了し7巻の内容に僅かながら入りました。次回からは本格的に7巻の内容に入ろうと思います。

一発の銃弾（前書き）

仮面ライダーアビスと仮面ライダーポセイドンの肩がどこか似ていると思うのは自分だけでしょうか？

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

サソリギジ
カニギジ
カンガルーギジ
エビギジ

一発の銃弾

有力な神社には会社のように本社と支社がある。その支社にあたる神社のことを分社という。星伽神社も京都に大きな分社を構えていて、俺達がそこについた頃・・・白みつつある朝明け方からは生暖かい雨が降り始めていた。そしてレキが担架で運ばれていくと俺と白雪、そして先ほど情報を聞くために連絡を取ったジャンヌも駆けつけ、俺達は星伽神社の救護殿という和風の診療所へと向かった。

「おーおー、やられたなぁ」

フチ無し眼鏡をかけ直しつつレキを迎えた女医は拳銃を携えていた。どうやら星伽に呼び出されたプロの衛生武偵らしい。

「血算、血液型判定・交差適合試験、生化をチェック・・・・大至急輸血を開始や」

すぐさまレキの容態をチェックしてすぐさまナース達に指示を飛ばした女医は・・・・

「ぼん、ここはウチに任せてお前も休め。死体みたいな顔をしてるで」

流し目で俺の事を見て、そう告げる。

「助かるんですか？レキ・・・彼女は？」

「大丈夫だよキンちゃん。この方は星伽の嘱託医さんなの。京都で

も一番の名医さんなんだよ。たまにちょっと変わったことを仰るけど・・・」

「聞こえとるぞ～白雪ぃ」

レキの治療をする女医の手つきは恐ろしく手馴れてる。きっと日常的に負傷した武偵を治療しているんだろうな。とりあえずは大丈夫そうだ。・・・そう思った瞬間、緊張の糸が切れたような感覚と共に・・・・

「うっ・・・」

視界がぐらりと歪んだ。

「キンちゃん!?」

「遠山!?」

白雪とジャンヌの声がやけに遠く聞こえる。その時の俺にはさっきまで立っていた床板が・・・目の前にあるように見えた。

風の音が聞こえる。俺は広大な草原と遠い山脈が見ている。これはたぶん夢だろうな。夢であるころが自覚できる夢、明晰夢って奴

だ。乾いた草原には何頭かの馬が見える。その馬達には色鮮やかな民族衣装を着た凛々しい女性達が狙撃銃を背負って乗っている。その先頭には他の女性よりも絢爛な髪飾りを頭に載せた少女がいる。あの横顔・・・・間違いない。

「レキ！」

「・・・・・」

ジャキン！

俺がレキに向かって走り出した途端、黄色い爪が俺の前に立ち塞がった。この虎のように鋭利な黄色い爪を俺は知っている。

「・・・・・・」

ブンッ！

「くっ！？」

今の回し蹴りをしてきた飛蝗のような緑色の足を知っている。・・・あの黄緑色の複眼をした鷹のような赤い頭部の戦士を俺は知っている。・・・・だけど、知らない。こんな毒々しい殺気を放つ仮面戦士を知らない。

「何なんだ、お前は？」

「・・・・・・」

これが夢だと言うのは分かる。分かっているつもりだ。だけど目の前の仮面戦士の殺気に飲み込まれてしまいそうだ。

「・・・欲望を抑えるな・・・」
ドクンッ
「っ！？」
ようやくしゃべった仮面戦士の一言によって・・・俺の中にあるヒステリア以外の何かが表に出てくるような感覚になる。
「欲望の王の力を持つものなら、全てを求めろ。世界を支配しろ。鷹の目で世界を見渡し、飛蝗の足で障害を跳び越え、虎の爪で邪魔者を切り殺せ。・・・そのための力が貴様にはあるのだろう？」
やめろ。それ以上しゃべるな。・・・俺がそう思った瞬間、広大な草原の風景は一転して紫色の不思議な空間に変化した。
「欲望こそ力の源、世界の糧となるエネルギー！！その力を押さえるな！・・・このようにな」
ブンッ！
虎の爪から放たれた斬撃は紫色の空間の奥に立っている人物へと飛んでいく。
「レキィィィィィ！！」
その瞬間、その世界は真っ黒に染まった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
「っ！？」

冷や汗をかきながら俺の目が覚めた。風じゃなく雨の音が聞こえる。世界もちゃんとした世界だ。どうやら俺はあの後、予想以上に反動がきたコンボの疲労で倒れてしまったらしいな。それにしてもなんだったんださっきの夢は？・・・・いつの間にか練絹色の寝間着に着替えさせられていた俺は、枕元に綺麗にたたまれていた洗濯済みの制服に着替え、障子を開けて部屋の外に出た。鶯張りの廊下では俺を警護していてくれた様子の帯刀した白雪が正座して座っていた。

「キンちゃん、キンちゃん、急に倒れちゃったから私、心臓が止まるかと思った・・・・」

「ああ、おかげさまでもう大丈夫だ。俺は少し疲れていただけだからな。それよりもレキはどうなった？」

ぴょんと正座体勢から立ち上がって飛びついてきた白雪を微妙に押しのけつつ尋ねると・・・・

「レキさんは一命を取り留めたよ。でも絶対安静にしていないと駄目みたいなの。まだ意識がないみたいだし・・・・これ以上無理したら本当に命が危ない状態だったみたい。キンちゃんもまだ無理はしないで。お布団で休んでいて。・・・何かちょっと鳥居の辺りから変な気配がするの」

とレキの容態を告げて俺を守るように鳥居の方を向いた。すると神社の階段を上がって鳥居にやってきたのは・・・・

「そう警戒するなよ。俺だ」

怪人態の右手でハイマキと矢車を抱えてやってきたアンクだった。そしてその横には少し警戒するような視線をアンクに送る風雪が立っている。

「白雪！ハイマキ・・・この狼と矢車も手当てしてもらえるように頼んでくれないか？」

「うん、分かった」

そして風雪の合図ですぐさまレキを運んだ幼い巫女達がハイマキと矢車を担架に乗せえて運んでいく。・・・しかし謎が残った。

「・・・ハイマキは猟犬と戦ってくれていたからこの傷は分かるが・・・矢車はどうしてこんなに傷を負っているんだ？矢車ならウヴァにここまでダメージを受けないはずだろ？」

「ウヴァのヤミーがガイアメモリの力で強化されたのは知っているだろ。どうやらガイアメモリの力はヤミーだけじゃなくウヴァ自身も強化していたらしい」

マジかよ！？だとしてもウヴァ単体が東京武偵高の生徒で最も戦闘能力が高い矢車をここまでダメージを与えるなんて信じられないぞ。

「・・・それよりも・・・・」

「「っ？」」

俺とアンクは会話の中に割って入ってきた白雪の方を振り向くと・・・白雪は持っていた刀を抜いていた。

「神聖な私とキンちゃんの愛の神社に入ってこないでぇぇぇぇぇ！！」

ブンッ

「うおっ！？あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「アンクぅぅぅぅぅぅ！？」

そして白雪の刀をギリギリのところで回避したアンクは・・・運悪く階段の段差を踏み外してしまいそこから転げ落ちていってしまった。この状況であんまり気にすることでもないと思うが別にここは俺と白雪の愛の神社なんかじゃないぞ。

「・・・お姉様、あの御方を放置していいのですか？」

「気にしなくていいよ！」

風雪の質問に答えたときの白雪の笑顔に・・・俺は内心では恐怖を感じていた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

豪華な食事を出された俺は早々に食べ終えて救護殿へと向かうと、そこでは布団で寝ているレキを籠巫女達が見守っていた。そしてそこで俺はジャンヌからウルスがロシアとモンゴルの国境付近、バイカル湖南方高原に隠れ住む少数民族のウルス族で、祖先が弓と矢でアジアを席巻した蒙古の帝王チンギス・ハンの戦闘技術を受け継いだ部族だと聞かされた。そして以前レキが言っていた『ウルス４７女』というのが生き残っているのが４７人の女性しかいないって意味だったことも分かった。

「最後に1つ聞いておくが・・・レキが負傷してお前たちが追い詰められた時に、レキは非常識な行動を取らなかったか？」

「非常識？」

こいつはある意味いつも非常識だぞ。

「たとえば銃で自分を撃とうとしたりだ」

「よく・・・分かったな。そうだ。レキは負傷して追い詰められた時、たしかに自爆しようとしていた。自分は逃げる力がないから置いていけ、なんて言ってな」

「やはりな」

そう言うとジャンヌは、俺が布の上に並べていた銃弾に目を移す。

「ウルスはサムライの切腹と同じ文化がある。『最後の銃弾』・・・・銃弾が残り一発になって、それでも活路が見出せないほどに追い詰められた時・・・あるいは自分が主人の足手まといになったと判断した時、その弾で自決するのだ」

「・・・・っ！・・・・」

「サムライは短刀で腹を切るが、ウルス族は自分を撃つ。それを主人に殉した名誉ある死としているからだ。彼女らは一発の銃弾のように、目的に向かって一途に生きる。そして戦い続けるのだ。・・・最後の銃弾で、その人生を閉じるまで。刀に殉じた古のサムライ達と同じようにな。遠山、レキはそうゆう女なのだ。気をつけておけ」

そう言い残すとジャンヌは縁側から星伽の運転手が待つ渡り廊下へと歩いていった。俺も遠山家の末裔・・・・一応だが侍の子孫だけどな。最後の銃弾だと？・・・ふざけんなよ。レキがいっつも口走っている言葉・・・『私は一発の銃弾』・・・あれだっておかしいだろ。

「お前は銃弾なんかじゃない。お前は人間なんだ。・・・・お前がそういうの・・・苦手だってことは分かっている。だから今すぐに人間らしく自由に振舞えなんて言わない。だけど自分を銃弾なんていうのはやめろ」

お前の中の『風』がどんなに偉いかは知らないけどな、本当に偉いのは自分の道を自分で考えていける奴なんだ。そうやって『風』にすべてを任せるより、自分で考えるほうが難しいかもしれない。・・・お前は機械じゃなくて人間なんだから。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺が救護殿でジャンヌとウルスの話をしている頃、後藤はホテルの一室でノートパソコンを開き何かを調べていた。

「・・・これが伊達さんのカルテか。・・・なっ!?これは真実なのか?」

「よう後藤ちゃん!ゲームしようぜ!ティガ狩りにいこうぜ!」

後藤がその画面に書かれていたことに驚いていると部屋の扉が開くとPSPを持ったテンションの高い伊達さんが入ってきた。

「・・・伊達さん。どうして今まで黙っていたんですか?」

「えっ?何のこと?もしかしてハンターランクが後藤ちゃんよりも高いこと?」

「とぼけないでください!!・・・この前、伊達さんが頭痛のような様子で倒れかけたので病院のデータベースから伊達さんのカルテを調べさせてもらいました!そしたら・・・こんなものを発見しました」

「っ!?」

後藤がノートパソコンの画面を伊達さんの方に向けると・・・・伊達さんは焦ったような表情をする。

「どうして伊達さんのレントゲンの左後頭部に銃弾が写っているんですか!!」

「・・・あ～あ。とうとうばれちゃったかぁ。いいよ、説明してあげるよ」

こうして後藤は伊達さんの真実を知ることになった。

一発の銃弾（後書き）

今回から本格的に原作7巻の内容に入りました。この巻の内容はノルマとなっている怪人が数体いるのでおそらく中盤は連戦になりそうです。

加速爆弾（前書き）

レッツゴー仮面ライダーのＤＶＤの発売が待ち遠しいです。はやく自宅でタマシーコンボの勇姿を見たいです！・・・・まぁ、それはそれとしてだいぶ原作のストックが減ってきたので、どこかのタイミングでまたノブナガ編のようなオリジナル編を書きたいと思います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

サソリギジ
カニギジ
カンガルーギジ
エビギジ

加速爆弾

俺が意識のないレキに「銃弾なんて言うのをやめろ」と告げている頃、後藤はノートパソコンの画面に写っているレントゲンを伊達さんに見せていた。

「・・・そんじゃ説明してあげるけど・・・・他のみんな・・・特に遠山辺りには内緒にしておいてよ」

「・・・・どうしてですか？」

「遠山・・・そしてアンコは命に関わることに敏感すぎるんだよ。あいつ等が俺のコイツのことを知っちまったらあいつ等は絶対に俺が戦うことを止めるだろうからな」

自分の頭を指でコツンと叩きながら後藤にそう告げた伊達さんはレントゲンに写る弾丸を指差す。

「・・・俺は東京武偵高で教師をする前は戦争地域で医者として働いていたんだよ。・・・・そんな時に流れ弾が頭にドスンとな。一命は取り留めたんだが結構深いところに弾丸が埋まっちまって・・・・」

「それじゃまさかずっとその状態で戦っていたんですか！？」

「・・・・そんじゃそこらの医者じゃどうにもならないんだ。だから俺は1億を手っ取り早く稼ぐために鴻上会長の紹介でやってきたんだ」

「伊達さん・・・くそっ！」
ドカッ！
後藤は拳を強く握ると思い切り壁をぶん殴る。
「・・・すいません伊達さん。そんな状態だったのにも気づかずに今まで戦わせてしまっていて・・・だからもう戦わないでください」
「・・・そうじゃないだろ・・・」
「えっ？」
伊達さんは悔しそうにイスから立ち上がると後藤に背を向ける。
「後藤ちゃんが出すべき答えは・・・本当はもう分かっているはずだよね。だけど後藤ちゃんはその事実を否定したくて言えず終いなんじゃない？・・・自分を信じてみなよ後藤ちゃん。それが本当の答えだから」
「えっ？それはどうゆう？」
バタン
伊達さんはそのまま後藤に振り向かないで部屋を出て行った。
「俺を・・・自分を信じる？・・・・・」
後藤はその時はまだ伊達さんの言葉の意味に気づいていなかった。

・・・

いたが、白雪は夜通しでずっとレキや俺の番をしていたしな。

「ふふふ・・・かわいいねぇ・・・」

白雪はやけに幸せそうな寝顔の白雪はなにやら寝言をしゃべり始める。

「目元はキンちゃんにそっくり・・・あっ、でも鼻は私似だね。うふふ・・・ちょっとアンク、あなたはこの子に近づいちゃ駄目！・・・・アンクが悪いんだからね・・・」

白雪の夢の中で何が起きているのかというのは、白雪の夢の中の世界の話であって、その夢の中の俺が何をやらかしたのか？・・・・それは考えるだけで恐ろしいことだな。するとそのことが聞こえていたらしい俺の前の席に座るアンクはこちらを見ずに告げてくる。

「・・・夢の中でも俺はコイツにボコられるんだな」

「どうやらそうらしいな・・・」

俺とアンクはお互いのためにもこれ以上深く白雪の夢を考えないことにした。そして寝起きでボンヤリしている俺は白雪に背を向けて顔を洗うために洗面台に向かい扉を開けようとするが・・・・

「あれ？」

ガチャ！　ガチャ！

扉が溶接したみたいに動かなかった。トイレではないので小窓から中が見えるんだが・・・中には誰もいない。たぶん扉が壊れているんだろうな。となると後ろの車輌にある洗面所を使うしかない

ので俺は１５号車に歩いていった。１５車輌はそんなに込んでいないがサラリーマンから芸能人などの様々な人が座っていた。そして後ろの方でイビキをかいた大男がいると思ったら・・・同じ武偵高として恥ずかしいことに武藤だった。

「・・・・・・」

俺は他人のフリをしながら進んでいくと、１６号車の最後部では、なぜか２人掛けの席をターンさせて、こっちに背を向けているシートがあった。そのシートの先端には赤い角のような髪飾りが見える。ピンク色のツインテールをそれで結び、こちらに背を向けているのは・・・間違いなくアリアだ。それに、その隣にいるのは理子の頭だし・・・。そういえばアリアは修学旅行中、呉で理子や武藤達と落ち合うようなことを言っていたな。３人してこの新幹線で東京に帰るところだったのか。

「アリ・・・」

すぐにアリアにレキのことを伝えようとすると・・・誰かが俺の腕をぐいっと引っ張って空席に座らせた。・・・強襲科の不知火だ。不知火は口に人差し指を当てて『静かに』というジェスチャーをすると左右の目をパチパチさせてマバタキ信号を送ってきた。解読すると『面白い話をしている　聞こう』・・・俺は無視して通ろうとすると不知火に腕を組まれてしまった。・・・お前、ただでさえ女子との浮いた話がないせいで周りからそっち系の疑惑を持たれているんだからやめろよ。通路の向こうに座っている女子達が顔を赤くしながらテンション上げてるぞ！

『分かった。５分間ここで大人しくしてやるから手を離せ』

と伝えて不知火から離してもらうと・・・・アリアが理子に友達の恋愛相談をし始めた。なにやらKさんはAさんと行動していたが、別のRさんに近づかれた。KさんがそんなんだからAさんは大喧嘩をしてしまい、結果KさんはRさんと行動するようになってしまったらしい。そしてAさんはもうすぐ転校するが、その直前に誕生日が来るらしい。・・・・そんな会話をしていた。そんな話に俺はなぜかデジャヴを感じている時、新幹線が前に引っ張られるように前に揺れた。

「っ？」

まるで僅かに急加速したような揺れだったので窓から外を見てみると・・・・名古屋のホームの景色が流れていった。・・・・おかしいぞ。この新幹線は名古屋に停まることになっていたはずだぞ？・・・・周りもそのことに違和感を覚えざわつき始めた時・・・・

『お客様にお知らせします』

車内アナウンスが流れた。

『当列車は名古屋に停車する予定でしたが、不慮の事故により停車致しません。名古屋でお降りの予定だったお客様は、事故の解決次第・・・・最寄り駅の臨時列車でお送りいたします。大変申し訳ありませんが、事件の詳細については現在調査中となっております』

車掌と思われるその声は僅かに震えている。・・・・何があったんだ？事故で駅を飛ばすなんて聞いたことないぞ。普通は停車するだろ。しかもそれだけじゃなく、この列車は名古屋を通過してから減速すらしていない。・・・・むしろ加速している感じだ。

「おいふざけんなァ！俺はァ名古屋で降りなきゃなんねぇんだよ！

もうドームに客がはいってんだぞ！名古屋に戻せ！」

たまたま乗っていたらしいタレントが大声で怒鳴りたてる。・・・無茶なことを言うよな。もう過ぎちまったのに。だがそれよりも問題なのは・・・興奮は伝染することだ。誰かが妙なことを口走ったりして他の乗客がパニックにでもなったら収集がつかなくなる。・・・はやくあの人を大人しくさせないと。

『なお、付近に不審な荷物、不審物がありましたら、乗務員までお知らせください』

そう告げられたアナウンスに早くもキレたらしいさっきのタレントは前の座席を蹴った。

「不振物って何だ！爆弾でも仕掛けられているのか！ええッ！？」

畜生！さっそく言いやがったか。その一言のせいで常客達の騒ぎが大きくなり、何人かは運転席の方へ歩き始めたので俺や不知火、さっきの女子達で宥めるが・・・どんどん被害は大きくなる一方だ。

「席に座ってください。危険ですから」

お腹を押さえて立ち上がった妊婦さんに不知火がそう言った時・・・ガクンと足元が揺れる。一斉に後方によろめいた常客達が悲鳴を上げた。新幹線がまた加速したのだ。窓を見た景色の流れる速度から判断するに変化した速度は僅かなんだろうな。だが突然すぎた。まるでギリギリまで堪えてからやむを得ず急加速したような感じだ。車両の自動ドアにある電光掲示板には【只今の時速　１３０ｋｍ】と言う文字が右から左へと流れている。

「畜生！畜生！」
がん！がん！
今の加速でさらに不安になった常客達が喚きながら運転席の方へ殺到する中、先ほどのタレントは高そうなライターで壁際に埋め込まれたドアコックを叩いていた。あのバカ！まさか手動でドアを開けるつもりか！
「やめろ！」
俺はタレントに目掛けて通路を一直線にかけた。・・・・走行中はロックがかかっているはずだが、今の状況でこの新幹線の機能が正常に働いているのかはわからないんだぞ！
「キンジ！？」
「キンちゃん？」
俺に気づいたアリアの声と騒ぎで目を覚ましたらしい白雪の声を聞きながら俺はタレントに飛びついて羽交い絞めにする。
「落ち着け！この速度で降りられるわけないだろ！」
「放せ！放せよォ！俺は名古屋に行くんだァ！」
そう言いながら殴りかかってきたタレントに腕を極め、ベルトのワイヤーで後ろ手に縛り上げると・・・再びアナウンスが聞こえた。
『乗客の皆様に　お伝えしやがります』

それもとんでもない内容が・・・・あの時のボーカロイドの声でだ。

『この列車は　どの駅にも停まりません　東京まで　ノン　ストップで　参りやがります　アハハ　ハハハハ　列車は　３分おきに１０キロずつ加速しないといけません　さもないと　ドカーン！　大爆発　しやがります　アハハ　ハハハハハハ』

そのボカロの声に乗客達は悲鳴を上げる。・・・・アンクから俺達を狙っていた犯人はココだってことは聞かされているし、スコープの映像もそれっぽかったし間違いないだろうな。泣きそうな顔でその場に座り込んだタレントから離れて再び電光掲示板を見上げると【只今の時速　１４０ｋｍ】と表示させている。・・・間違いなく加速しているな。たぶん運転士と車掌は京都を発車した後で犯人から脅迫を受けたんだろうな。さっきは検札かと思ったが、あの汗だくの車掌は爆弾を探していたのか。

「相棒！」

「遠山！」

車両後方、先ほどまで起きているのか寝ていたのかよく分からない状態で寝ていた矢車と、アリア達のようにたまたま同じ新幹線に乗っていた後藤と合流した俺は、さらに不知火と武藤に合流する。

「キンジ！いま不知火と計算したんだがな、今のアナウンスがマジなら・・・１９時２２分までだぜ？」

「・・・・１９時２２分？」

「どこの駅にも停まらず、このペースで加速していったら、そこで東京に着くんだよ」

武藤と不知火の言葉に俺は眉を寄せる。・・・・東京に着く。その先には線路はない。つまりそこでジ・エンドってことだ。腕時計を見れば現在の時刻は１８時２分。

「・・・・タイムリミットまで・・・８０分ぐらいか」

「もっとはやいかもしれないぜ矢車。さっきのアナウンスでは加速し続けろっていってたしな。この新幹線はＮ７００系、東海道区間の営業最高時速は２７０キロだ。４０分後にはそれを超える」

「超えたらどうなるんだ？」

「安全運転はできねぇぞ。車体やレールにムリがかかるし、カーブで脱線の可能性もある。危険運転の設定限界速度は３５０～６０ぐらいって言われているけど、ＪＲでも公表してねぇんだ」

と言う武藤の横で、不知火が携帯の計算機能を使って速度と速さの計算をする。

「スピード不足だよ。１９時過ぎには３５０キロ、最後には４１０キロになる」

「ウワサじゃ試験車両で３９７キロ出したって聞いたことあるが・・・・４１０キロは未知数だぜ」

４０分後には危険走行、１時間後には設定限界速度、そして最後

は未知の領域か。東京に帰れないでドカンって可能性も大きいな。

「・・・とりあえず列車に乗っている武偵高の生徒を集めて爆弾を探そう。減速なしで爆弾を探して解除するんだ」

それぞれバラバラに探すことにしたので矢車達と別れると、俺は16号車の最後尾に座っていた理子とアリアのところに歩み寄った。

「・・・っ」

大阪でレキと一緒にいた俺に殴る蹴るの暴行をしたアリアは、俺を避けるように顔を背ける。色々と言いたいことはあるが・・・今はそれどころじゃない。

「理子、俺が言いたいのは分かるな。お前と同じ手口だぞ」

俺は他の乗客に聞かれない程度の大きさで問い詰めるように言う。すると理子は先ほどまでの女の子らしい表情を一転させ・・・

「やられた」

鋭い目つきで呟いた。・・・4月。俺とアリアが出会うキッカケとなった『武偵殺し』の事件はこの事件と似たような手口だった。減速すると爆発してしまう爆弾だ。・・・しかし今回の爆弾はそれよりも悪質で加速し続けないと爆発してしまうなんてふざけた設定だ。

「ツァオ・ツァオ・・・もう動き出していたのか。あの守銭奴ぉ」

歯ぎしりした理子は、座っているシートの中をゴソゴソと探り始

めた。

「ツァオ・・・？」

眉を寄せて問いかけたアリアに理子は『武偵殺し』モードの目を向ける。

「ツァオ・ツァオは子供のくせに悪魔染みた発想力を持ったイ・ウーの天才技師だ。莫大な金と引き換えに魚雷やＩＣＢＭを乗り物に改造したり・・・キンジ、お前のチャリについた『減速爆弾』の作り方あたしに教えたのもツァオ・ツァオだ。これはその改良版の『加速爆弾』・・・！」

ぽたりと額から汗を垂らした理子に・・・

「イ・ウーの爆弾講師ってとこね。理子、あんた生徒ならこの爆弾の基本構造は分かっているんでしょ。とっとと起爆装置を探し出して解除するのよ」

アリアは俺の方を見ないまま理子の手を引く。しかし理子は席を立たず首を振った。

「駄目だ。あたしは動けない。・・・この座席が威圧スイッチになっている。迂闊だった。気がつかなかった。あたしが立つとどこかに仕掛けられた爆弾が爆発するぞ」

「「っ！？」」

俺とアリアは絶句して理子のシートを見下ろす。・・・・よりにもよって人間スイッチかよ。敵は爆弾を解除できる可能性のある理子を真っ先に潰してきた。あらかじめ俺達の動きを調べて座席に罠

を仕掛けて置いたんだ。ここまで来ると笑えてくるな。自分達の警戒心の無さを・・・。

「因果応報だな『武偵殺し』さんよ。・・・理子、ツァオツァオは中国人の女、お前より年下の女の子だな。徒手空拳をお前に教えたのもそいつだろ？」

「何で知っているんだキンジ？」

「俺も襲われたんだよ。昨日、このボーカロイドを使う女にな」

しかし徒手格闘、拳銃戦、狙撃もできた上に天才技師だって？ありえないだろそんなの。そういえばアンクは敵は複数いるって言っていたな。・・・もしかしてこの事件・・・いや、その可能性はないか。

「アリア、落ち着いて聞いてくれ。この新幹線ジャックの犯人はお前を銃撃戦で襲った奴だ。名前はココ。レキはそいつと狙撃戦で戦って・・・重傷を負った」

「・・・レキが！？・・・」

先日の喧嘩はさておき、あのレキが負けたという事実にアリアは瞳をまんまるに見開く。

「心配するな。一命は取り留めた。一時は出血多量でやばかったがな」

「な、何ではやく連絡しなかったのよ！」

「携帯が破壊されて、スタッグフォンもヤミーとの戦いの時に壊さ

れていたんだ。ベンダーも辺りになかったんでバッタカンも手に入んなかったし・・・連絡できたときはすでに圏外だった。俺とアリアが連絡を途絶えていたのも痛いが・・・他にも情報は寸断されていたみたいだな」

「情報？」

「お前も理子に詳しくは話していなかったんだろ。『水投げ』の日、拳銃戦で引き分けた相手の外見とか、特徴を」

そう言うとアリアはうぐぅ、と喉の奥を鳴らした。どうやら図星らしい。アリアが自分が年下に負けたって事実を隠すことまでココは作戦に入れていたんだろうな。俺とレキを襲撃したときも真っ先に通信手段を破壊してきて、偽名まで使って俺達の間に詳細な情報を行き渡らないようにしたんだ。

「キンジ、アリア。聞け。『減速爆弾』や『加速爆弾』の速度爆弾は無線でスタートさせる。たいてい、もう手で触れられない場所に仕掛けているからな。でも無線ってやつは確実性に乏しい。特に新幹線みたいに高速で無線機が山盛りに積んでいるこの場所ではな。あたしはやつに習った。そうゆう時には退路を確保した上で自分も乗り込めって。そしてターゲット達が乗車したのを見定めて、車内で確実に起動するんだ。つまり・・・乗っているぞ、敵は」

その言葉に俺とアリアが顔を見合わせたその時・・・

ガン！ガン！ガギィン！

何回かの金属音に続いて、運転室近くに集まっていた常客達が悲鳴を上げながら車両を駆けてきた。人払いをするような威嚇が運転室

の内側から扉を叩き割って出てきたのは・・・・

「ココ！」

やっぱり乗っていたココだった。

「ニーハオ、キンチ。ここで立直（リーチ）ネ」

ドシャァァン！

清の民族衣装を纏ったココが青竜刀を振り上げた途端、どうゆう訳か昨日倒したはずのリモコントンボヤミーが新幹線の天井を突き破って中に入ってきた。しかもそれは1体じゃない。・・・2体もだ。

「この場所を貴様の墓場にしてやるぞオーズ」

俺達以外にたった1人だけこの車両に残っていた緑の服を着た男は・・・昆虫グリードであるウヴァに姿を変えて立ち上がった。・・・・幾らなんでも最悪な状況すぎるだろ。

加速爆弾（後書き）

木曜日からテストなので火曜日まで不定期更新になりそうです。
申し訳ありません。

最凶の王と機械の記憶（前書き）

今回はいよいよ虫頭のウヴァが・・・・。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

サソリギジ
カニギジ
カンガルーギジ
エビギジ

「１０分だけ遊んでやるヨ。ココはデートの約束あるネ！」

そう言ってきたココの肩越しから見えた運転席には女性運転士が半べそで振り返っていて助手席には誰もいなかった。ココは運転助手を追い出して乗り込んだらしいな。「うえぇぇぇん」と鳴き声が聞こえたので振り返ると１６号車中央付近でまだ逃げ切れていない妊婦さんに子供達が泣きついていた。１６号車に残っている乗客は彼女達だけだ。見れば妊婦さんは大きなお腹を押さえて脂汗をかいている。たぶんこのパニックの中で体調を崩したんだろうな。

「白雪！彼女と子供を救助して！」

そう叫んだアリアは２本の刀を抜刀してココに飛び込んだ。身を屈めて走ってきた白雪はすれ違いざまにアリアを目撃し・・・・

「・・・・っ！・・」

重ねた両手を踏み台にさせてアリアを斜め前にジャンプさせた。そして人並み外れた身体能力で座席を飛び石のように飛び越えていくと・・・・

「来来、シャーロック４世ッ！」

ガギィィン！

大きなハサミのように構えたアリアの日本刀とココの青竜刀がぶつかり合った。

「謀ったわね卑怯者！初対面のときに『ココ』って名乗っておいて偽名とはね！ツァオ・ツァオ！」

「それは欧米人の間違った呼び方ネ。イ・ウーではシャーロック様がそう呼んでいたヨ、だからココはみんなにそう呼ばせていたネ！曹操。これ、正しい発音ネ！」

そうゆう事か。前に理子がホームズを「オルメス」とフランス語読みしていたように、言語が変わると発音も変わる。よくよく考えてみれば曹操ってのも日本語読みだしな。まったく、グローバルな戦いに巻き込まれると、まず名前から苦労するし。

「白雪・・・この女性を任せる。後藤が乗っていたってことはどっかに伊達さんいるはずだから探してくれ。俺は・・・秋の虫達と戯れることにするぜ」

妊婦を支えた白雪にそう告げた俺はベルトをつけてタトバのメダルを入れながら１６号車に戻った。

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「・・・よう虫頭、俺の仲間でだいぶ遊んでくれたらしいじゃんか。・・・俺も遊んでもらおうか？」

オーズに変身した俺はウヴァ達の前に立つ。すると次の瞬間、その近くでココのつま先蹴りを顎に喰らってアリアがこっち側に後退してきた。

「アリア！？」

「・・・他の心配をしてる場合か？」

「っ！？」

ガギィィン！

俺は後ろのアリアに当たらないように咄嗟にウヴァの爪を防ぐ。

「くっ！？・・・セヤッ！」

ウヴァの爪を弾いて後ろに下がって距離を取ると状況を確認する。

・・・アリアは近くでココと戦っているし、俺は昨日1体だけでも苦戦したリモコントンボヤミーを2体相手にしているのにグリードであるウヴァとまで戦わないといけないとなると・・・こんな狭い場所じゃやっぱり戦いにくいぞ。・・・少なくともこんな狭い車内じゃまともにメダルの力を使えないな。・・・やっぱり加勢がほしいぜ。だけど車内に乗っている仮面戦士は俺以外には矢車とたぶん乗っている伊達さんだけだ。しかも矢車はウヴァとの戦いでゼクターに少なからずダメージがあるせいで修理されるまでは変身できない。・・・どっちみちしばらくは1人か。

「キンジ！受け取れ！」

「っ！」

パシッ！

ようやくこちらにやってきたアンクからメダジャリバーを受け取った俺は、可能な限り車内を荒らさないようにジャリバーをレイピアのように構える。

「セイッ！」
ガンッ！
「なっ！？」
俺はそれでウヴァを突きをしようとするが・・・・数メートル離れたところから拳銃を構えたリモコントンボヤミーが銃弾で俺の剣先をそらした。・・・おいおい、こんな狭い場所で銃を使うなよ。兆弾したり爆弾にあたったりしたらどうすんだよ。
「フンッ！」
「セヤッ！」
ドカッ！
攻撃を回避してすぐさまウヴァを蹴り飛ばした俺はこちらに走ってきた存在に気づく。
「遠山！」
「伊達さん！！」
ミルク缶とバースドライバーを持った伊達さんだ。
「さぁ、お仕事開始だ」
伊達さんがベルトを腰に巻いて変身しようとした途端・・・・
「やめてください！」

どういう訳か後藤がセルメダルを握った手を押さえて変身を妨害した。

「ちょっ!?後藤ちゃん離してよ!」

「離しません!伊達さんを戦わせませんよっ!」

伊達さんのベルトを奪い取った後藤は、伊達さんとベルトの取り合いをする。後藤はどうして変身を妨害しているんだ?

「後藤ちゃんはまだ本当の意味で力を受け継ぐことを理解していないんだよ!それが分かるまで後藤ちゃんにバースは渡すわけにはいかないんだよ!」

「・・・本当の意味?・・・っ!」

後藤が油断した隙にバースドライバーを再び腰に巻きつけた伊達さんは・・・・

「悪いね後藤ちゃん」

ドスッ!

「うっ・・・・・!?」

鳩尾を殴りつけて後藤の意識を刈り取った。

「変身!」

カポーン!

「待たせたな遠山！」

バースに変身した伊達さんはこちらに走ってくるとボクサーのような構えを取る。

「・・・伊達さん。この場所じゃ狭すぎて戦いにくいです。・・・・上に移動しましょう。あいつ等をまとめて抑えてください」

「おしっ！いいぜ！」

『クレーンアーム』

クレーンアームを装備したバースは2体のリモコントンボヤミーをワイヤーで巻きつけると、先ほどそいつ等がやってきた天井の穴から外に出る。

「アリア！そいつは任せるぞ！」

『タカ！ウナギ！バッタ！』

「ええ！とっとと倒しちゃいなさい！」

オーズ・タカウバに変わった俺もウナギウィップでウヴァを縛り付けて天井の穴から外へと出て行った。その途端、ココは袖から小型のロケッド弾のようなものを発射すると、アリアのすぐ横を通過して周囲をぐるぐる回って、アリアをワイヤーで動けなくした。

「ふぅ～ん。これがアリアあるネ。写真を見たときたしかにココに似てて可愛かったけど、実際あってみるとココの方が可愛いネ。きひっ」

「ココぉ！その髪型こないだ、やめなさいっていったでしょ！あた

しとキャラが被ってんのよ！この妖怪キャラ被り！」

手も足も出なくなったのにアリアは闘争心をむき出しにしてジタバタとする。

「聞いたことないアル。藍幇も、イ・ウーの主戦派も、仮想アリアの子をほしがるネ。この髪型けっこう稼ぎになるネ」

「主戦派？・・・・イ・ウーの残党ってわけね！」

「不是！ココは最初から藍幇の一員だたネ！イ・ウーに居たのはビジネスのためね。ていうか、お前、口の聞き方に気をつけるネ！ココは世が世ならお姫様ネ！」

「・・・お前みたいなお姫様はいないと思うけどな。・・・もちろん悪い意味で言っているぞ」

右腕を怪人の姿に変えたアンクはワイヤーを切ってやろうとアリアに近づくと・・・・

「緋弾のアリア！」

ココはイ・ウーでアリアがシャーロックから継承した名前を口にした。

「何もかもお前のせいネ。イ・ウー崩壊した。世界中の結社のバランス、ギリギリ取れてたのに、あのエヴィルが頂点に立ったネ！世界に乱世が始めるネ！」

アンクとアリアはその言葉に驚きの表情をみせる。・・・・世界

中の結社の頂点に立ったのがエヴィルだっていうことは本当に最悪な事態だ。・・・本郷さんや光太郎さんが戦った組織のどんな怪人も改造人間としていくらでも現代に復活させるほどの組織が世界の頂点に立つってことは・・・・本当に世界侵略がされちまいそうなんだからな。

「お前、緋緋色金を喜ばせた。これも乱の始まりある。緋緋色金と瑠璃色金、仲悪いネ。緋緋が調子づいて瑠璃は百年ぶりに怒たヨ。怒って見えない粒子撒いて、世界中の超能力者、力、不安定なた。これからの超能力者、役立たずなるヨ。そうなた場合、仮面戦士や銃使いの価値増すネ」

「キンチ、世界の歴史の裏に隠された‘最凶の王’の力を持ったレアものネ！主戦派も研鑽派もウルスも・・・・それにエヴィルやＮＥＶＥＲだって、みんなキンチ欲しがってるネ！」

「最凶の王？・・・アンク・・・それってどういうこと？」

ココの言った言葉に動揺したアリアは、おそらくこの場で一番そのことに詳しいアンクの方を向く。するとアンクは「バレてしまった」とでも言いたげな表情で嫌そうに語りだす。

「オーズは元々・・・・８００年前にグリードから人々を守るために作られた力じゃない。その力も全て自分のものにして世界を支配しようとしていた王が、世界中の名のある錬金術師を集めて作り出した・・・悪魔の力なんだよ」

「８００年前のオーズ、クガ王は世界を支配するためにアンコ以外のコアメダルを作り出したネ！それがグリードとして覚醒して、暴れて、それに便乗したレジェンドルガやファンガイアたくさんの被

害出したネ。そして力を手にしたクガ王、そいつ等を1人で殲滅して世界の頂点に立とうとした。そこに現れたのが‘究極の闇’とアンコだったらしいネ。王との戦い、三日三晩続いたネ。そして欲望に溺れて暴走したオーズと‘究極の闇’は相打ちで倒れたネ」

「・・・・・・」

俺でも知らないオーズの真実を聞かされたアリアは、どういう反応をすればいいのかすら分からない様子で黙りこむ。

「アンコ、その戦いで双子の錬金術師の妹を庇ってメダルになったネ。その双子の長女の方、名前が『アミ・・・・』」

ガギン！

ココが何かを語りかけた時、アンクはココに殴りかかって話を中断させた。

「・・・おしゃべりはここまでだ。商業人が語りすぎなんだよ。それ以上は有料だ」

「うるさい鳥ネ。一度メダルに変えてから貰っていくことにするネ」

アンクの右拳を青竜刀で受け止めたココは、後ろに下がるとごま粒みたいなサイズのしゃぼん玉のような何かをアンクの腹部目掛けて飛ばした。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

ココがアリア達に８００年前のことを語っている頃、俺がウヴァの相手をして、バーズが2体のリモコントンボヤミーを相手にしていた。

「ハァァァァッ！」

「ぐおっ！？」

左のウナギウィップでウヴァの両腕を押さえた俺は右手に持ったジャリバーで斬りつける。・・・今のところは矢車が苦戦したウヴァの変化はないようだな。

「どんどん行くぜメガネウラ！」
『ショベルアーム』
『キャラピラレッグ』

「亜ァァァァァァ！？」

後ろの方で拳銃を持ったリモコントンボヤミーと戦っているバースはショベルアームで拳銃を持っている両手を掴みつつ、キャタピラレッグで蹴ってセルメダルを剥ぎ取る。・・・バースの装備はセルメダル専門だから、身体がセルメダルで構成されているヤミーは硬さなんて気にしないでセルメダルを奪ってダメージを与えることができるのか。・・・俺はあのヤミーにあんなに苦戦したのにな。・・・って、あれ？ライフルを持ったリモコントンボヤミー

はどこに行ったんだ？

ドンッ！

「ぐっ！？」

しかし俺がそのことに気づいた時にはすでに手遅れだったようで、俺は遥か上空を飛んでいるリモコントンボヤミーの銃弾が直撃してしまう。

「油断したなオーズ。・・・・さて、そろそろ貴様にも俺の新たな力を見せてやろう」

『ＭＡＣＨＩＮＥ』

「なっ！？」

マシーンメモリをクワガタのような２本の角の間に挿入したウヴァの身体は、カブト虫やクワガタを思わせる黒い外殻が銀色に変わり、右腕のカマキリの鎌ような爪はチェーンソーへと変化する。反対の左腕は・・・・どういう訳かアイロンに変わり、２本の角はスタンガンの先端のような形に変貌した。

「・・・・それが矢車をボロボロにした姿か」

「わざわざ俺の持っていたガメル達のメダルを半分犠牲にして手に入れた力だ。・・・・この力で俺は貴様とカザリを倒して完全体になってやる」

これがマシーンメモリを使用して強化されたウヴァ・・・・マシーン・ウヴァとの最初の戦いの始まりだった。

最凶の王と機械の記憶（後書き）

7巻は後藤さん回のはずなのに安定して後藤さんが目立てない。・・・それもウヴァって奴のせいなんだ。それはそれとして次回はＶＳマシーン・ウヴァ戦。なるべくはやめに更新したいです。

機械昆虫（前書き）

今回のウヴァはギャグ要員なんかじゃありません！

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
サイコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ウナギコア
バッタコア

サソリギジ
カニギジ
カンガルーギジ
エビギジ

機械昆虫

「フンッ！」
ギュィィィン！
「くっ！」

マシーン・ウヴァのチェーンソーをジャリバーで防いだ俺は後ろに跳んで下がる。

「セイヤッ！」
バシンッ！　バシンッ！

そして俺はマシーン・ウヴァにウナギウィップを連続で振るうが・・・・

「フンッ！そんなもの効かないな」
ブンッ！
「なっ！？うわっ！？」

マシーンウヴァの鋼の外装にウナギウィップは通じずにその先端を掴まれて勢いよく投げ飛ばされてしまった。

「くっ！？」

ただでさえ足場が悪い新幹線の上で投げ飛ばされて振り落とされそうな俺は、慌ててウナギウィップを使って落とされてしまわないように堪える。

「遠山っ！くっ！？」

バースは左腕のショベルアームでリモコントンボヤミーを掴みながらも右手に持ったバースバスターでマシーンウヴァを狙撃するが・・・それすらも通じない。

「・・・どうした？痛くも痒くもないぞ？」

そう言ったマシーンウヴァの左腕に大量のセルメダルが集まるとアイロンだった左腕はバースのショベルアームよりも建設現場のショベルに近い大きなバックホーへと変わった。

「お～。・・・いい趣味してんじゃん・・・・」

「虫けらが・・・」

ブォン！

「ぐあっ！？」

バックホーで叩かれたバースはその衝撃でリモコントンボヤミーを放してしまい状況はさらに俺達が不利になってしまった。

「伊達さん！？」

『サイ！ウナギ！バッタ！』

「セヤッ！」

ドカッ！

ようやく新幹線の上に再び足をつけた俺はオーズ・サウバへと変

わると拳銃を持つリモコントンボヤミーの両腕をウナギウィップで押さえてバッタレッグの脚力で一気に距離を詰めながらサイヘッドで頭突きを決める。・・・本当はコンボで戦うのが一番いいんだが・・・今、コンボになれるのは電磁力のサカエコンボだけだ。だけど戦っている場所が新幹線の上だから下手に電磁力を使うと運転席の無線や爆弾の無線とかを壊して大惨事になりそうだからサカエコンボは使えない。

「伊達さん、大丈夫ですか?」

「ああ、だけどこの状況・・・やっぱりきっついわ」

ショベルとキャタピラの装備を解除したバースの隣に立った俺はこの状況を逆転する方法を考える。せめてもう1人仮面戦士が入ればいいんだが・・・世の中そんなに甘くないってことか。

「まずは1体ずつ倒しましょう」

「そうだなっ!」

まずは拳銃のリモコントンボヤミーに狙いを定めた俺とバースはそいつに向かって走り出したが・・・

「・・・うっ・・・」

バースはリモコントンボヤミーを殴りつける寸前で頭を抱えながら膝をついてしまった。

「伊達さん!?」

「い、いいからメガネウラを倒せ！・・・・・」

「は、はい！」

『スキャニングチャージ！』

突然倒れてしまったバースに動揺しながらもベルトのメダルを再スキャンして再びリモコントンボヤミーにウナギウィップを巻きつけた俺はバッタレッグで足元を強く蹴って急接近する。

「セイヤァァァァァッ！！」

「亜ァァァァァッ！？・・・・ハイヤァァァ！！」

ブゥゥゥン！

「っ！？」

しかしその攻撃を鋼のように硬いリモコントンボヤミーは耐え抜くと、まるで痛みで我を失ったかのように羽を振動させて新幹線全体を揺らした。・・・まずいぞ。このままじゃ脱線するかもしれない。

「させるかぁぁぁっぁ！！」

『ダブル・スキャニングチャージ！』

「セイヤァァァっ！！」

ザクリッ！

セルメダルをジャリバーに2枚入れた俺は後ろに下がりもせずに剣先をリモコントンボヤミーにねじ込む。

「唖ァァ！？」
ドオォォォォォォン！！

「ハァ・・・ハァ・・・」

亜種であるサウバのスキャニングからのジャリバーの突きで拳銃のリモコントンボヤミーを倒すと剣をそのままマシーンウヴァに向ける。

「・・・これで2対2だ。・・・そのメモリも砕いてお前を倒すぜ」

「フンッ。ヤミーに苦戦する貴様らに俺を倒すなんぞできるはずがないだろう」

マシーンウヴァの右腕がチェーンソーから懐中電灯のような形に変化させると、ウヴァ本来の電撃能力が加わり、いわゆるビームサーベルのようなものになる。・・・おいおい、どこのモビルスーツだよ？

「俺のメダルをよこせぇぇぇぇ！！」

「くっ！？」
バチンッ！

「づぁぁぁぁぁぁぁ！？」

そのビームサーベルを俺はジャリバーでガードするが・・・その刀身は簡単に言うと電気を集束させたものだ。物理的には止められても電撃が俺に伝わってくる。

「さぁ・・・貴様に取っておきを見せてやろう」
ジジジジッ

マシーンウヴァは頭部のスタンガンに電撃を収束し始める。・・・まずい、こんな場所こんな電撃を撃たれたら確実に新幹線の運転室の機能、いやそれどころか新幹線全体がやばいぞ！

「喰らえ！」
ドオォォォォン！

「うおおぉぉぉぉ！！」
『スキャニングチャージ！』

俺は3度目のスキャニングで突進をして何とかマシーン・ウヴァのレールガンともいえる電撃破の軌道を空へと逸らすが・・・俺はそれを回避しきれずに変身を解除されて先ほどのマシーンウヴァのバックホーの攻撃で開いた穴から新幹線の中へと落ちていった。

「・・・落ちたか。まぁいい、この中では逃げ場なんぞないだろうからな」

レールガンの衝撃で空中に吹き飛んだサイとウナギ、そしてトラとバッタのコアメダルをキャッチしたマシーン・ウヴァはメモリを身体から取り出して通常のウヴァに戻った途端にぐらりとふらついていたが本人はあまり気にしていなかった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

「・・・っ！・・・伊達さん！！」

「今のうちに行くネ！」

ようやく意識を取り戻した後藤は頭を抱えて倒れている伊達さんに駆け寄る。そしてこれをチャンスだと思ったココは先ほどのミサイルをアンクに放って縛ると先ほどワイヤーで縛ったアリアを引きずって１６号車の前方、その自動ドアの奥へといってしまった。

「無茶をしすぎです！これ以上戦ったら本当に死んでしまいますよ！！」

「・・・ハハ、そうかもな。・・・だけど後藤ちゃんの答えを見つけるまではもう少し戦うぜ」

伊達さんは苦笑しながらも根性で再び立ち上がる。

「後藤ちゃん・・・心の中では自分に自信がないんだろ？俺のサポートをしていて２ヶ月くらいになるけど・・・仮面戦士にならなくても俺のサポートで充分って納得しちゃったんじゃないの？俺のピンチは・・・後藤ちゃんのチャンスなんだから自分を信じろ。自分を信じればきっと答えが分かるぞ。・・・あと、これ、借りてくから・・・」

カポーン！

伊達さんは後藤の持っていたバースバスターを掴むと再びバースに変身した。

「さぁて、最後のお仕事開始だ！後藤ちゃんはまずアンコの拘束を解いてから神埼の救出を頼むよ！」

「・・・了解しました。・・・だけど最後の仕事にはしないでくださいね」

「早くほどきやがれ！！」

後藤がアンクのワイヤーを解き始めると・・・・バースは再びウヴァの元へ向かった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

「うわぁぁぁぁっ！？」

ドサっ

俺が変身を解除されて１６号車の前方へと落ちたが・・・どういう訳か不思議とあまり痛くはなかった。・・・・心なしか少しいい匂いがするぞ。

「あれ？それになんか柔らかい感触が・・・・」

「う、う～～！」

下の方から何やら声がしたので振り向いてみると・・・・そこにはワイヤーで縛られたアリアがいた。

「ア、アリア!?どうしてここに!?」

「どうしてじゃないわよ!?ココにワイヤーで縛られて運ばれかけているのよ!とりあえずそこを退きなさい!」

中空知さんの3倍の速さで赤面するアリアの上にいる現在の俺の体勢は・・・簡単に説明するとワイヤーで縛られたアリアに覆いかぶさっているような感じで・・・他の人がこの状況を見ると勘違いしそうな上、ヒステリア的にもヤバイ感じだった。しかも落下の衝撃でワイヤーが俺にも絡まってしまい退いてやろうにも動けない。

「か、顔近い!近い近い!」

「お、落ち着け!」

アリアが自分の頭を押し付けて俺の頭を人間の首が動かないところまで動かそうとしたので抵抗すると・・・またもや新幹線の速度が上がってしまい車内が揺れる。するともう一押ししようとしていたアリアの唇が俺の頬にあたった。

「っ!」

俺の脳は今のを『ぶつかった』と認識してヒステリア的な意味では大丈夫だったんだが・・・アリアは『キスしちゃった』と認識してしまったらしい。

「なななななな!?ぷぇ¥!?うまぁ!?」

もう何を言っているのか分からないアリアはまるでウナギのようにくねくねと動き始めて少しずつだがワイヤーから抜け出し始めた。・・・災い転じて福となすってこういうことだと思うぜ。・・・・だけどそれは俺にもう1つの問題を与えた。

「うおっ!?」

密着したアリアが上へ上へとずれていくので俺の口や鼻が・・・・アリアの首や肩、鎖骨などが押し当てられてしまった。しかもそれはどんどん下へと向かっていて・・・。

「おい!アリア!ストップだ!」

「んっ!う~!」

アリアが俺の警告を聞かないせいで・・・俺はとうとうアリアの胸に埋めさせられてしまった。

「っ!!みゃあぁぁぁぁぁぁ!?」

とうやく2人の姿勢が大変なことに気づいたアリアはヤマネコみたいな声を上げてワイヤーから開放されるが・・・俺の方はすでに・・・な。

「・・・・・・」

「キンジ!アリア!」

ようやく開放された俺とアリアのところにアンクが駆けつけてきた。すると俺は先ほど開けることができなかった洗面室に目線を送

る。

「アンク・・・あの洗面室・・・密閉されているんだがどう思う？」

「ハッ！どうやら変わったらしいな。・・・たぶんそこにあるのは爆弾だろうな。それも密閉されているってことは・・・おそらくは俺がさっき喰らった気体爆弾だ」

気体爆弾か。それはまた厄介なものを。

「遠山！」

「後藤・・・どうした？」

人間の姿でもそれなりに足のはやいアンクから少し遅れて後藤がやってくる。その手にはいつものバースバスターではなくデザートイーグルが握られている。さらに反対側の手には見たことない弾が３つほど握られていた。

「伊達さんが１人で怪人と戦っている。手伝いに行ってくれ！」

「伊達さんが！？・・・分かった！行ってくる！アリア、アンク！ココ達の方は任せたぞ！」

俺の推理が正しければ・・・アンクの言ったとおりこの事件はココは１人の犯行じゃない。アリアは少し「どういう事？」と言いたげな表情をしていると、アンクは無言で頷いて怪人態の右腕から何かを取り出した。

「キンジ！これを使え！」

パシッ

俺がベルトを腰につけるとアンクはコンドルのコアメダルを渡してくる。足になるメダルがフットワークのカンガルーか単体ではあまり意味がないエビレッグだけだったから助かるぜ！

「変身！」

『タカ！カンガルー！コンドル！』

オーズ・タカガルドルに変身した俺は先ほど落ちてきた穴から再び新幹線の外へと出て行った。

「伊達さん・・・どこまでできるかは分かりませんが・・・俺も戦いますよ」

後藤はそう小さく呟くと出入り口近くの簡易梯子を昇っていき怪人達のいる戦場へ出て行った。

「アンク・・・あいつを止めなくて良かったの？」

「・・・さぁな。少なくとも今の後藤を止めたら、アイツの決めた決意の妨害になっちまうだろ。アイツは自分の殻を破って変わろうとしてるんだ。それを止めるのは野暮ってもんだろ」

こうして新幹線で俺達の第2ラウンドが始まった。

機械昆虫（後書き）

今回ウヴァの腕が色々と変化しましたが・・・元ネタはバースの装備ではなくボウケンジャーのマシンだったりします。

最後のDバース（前書き）

本日のフォーゼ。放送時間中は大文字さんが外道すぎだと思っていましたが、今考えて見ると、ある意味厄介ごとに巻き込まれたくないという一般人だなぁと思いました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
ライオンコア
シャチコア
カマキリコア
ウナギコア
コンドルコア

サソリギジ
カニギジ
カンガルーギジ
エビギジ

最後のDバース

俺がアリアの巻きつけられたワイヤーに絡まってしまいもがいている頃、バースに変身した伊達さんは両手にバースバスターを持ちながら数メートル離れてウヴァと向かい合っていた。

「セルメダルの戦士・・・・また来たのか」

「おうよ。・・・悪いがお前はこの新幹線から降りてもらうぜ」

「何度やっても同じことだ」

『ＭＡＣＨＩＮＥ』

ウヴァは再び額にメモリを挿入してマシーン・ウヴァへと変わると右腕を戦争用の武器であるＭ６０マシンガンに変化させてバースに向けて放つ。

「さぁ・・・いくぜ虫野郎おぉぉぉぉぉ！！」

マシーン・ウヴァの攻撃を喰らいつつもバースは両手に持ったバースバスターで可能な限り銃弾を打ち落としながら突っ込んでいく。

「うおらぁぁぁぁ！！」

『『セルバースト』』

そして2つのバースバスターの銃口をマシーン・ウヴァの腹部へと押し当てると0距離から強力な光弾を放った。

「ぐっ！？」

しかしマシーン・ウヴァの異常なまでの強度を持つ外装にはそれほど大きなダメージを与えてはいなく、少し怯んだだけだった。

「所詮セルメダルの力ではその程度だな」

ドカッ！

「うわぁぁぁぁ！？」

マシーン・ウヴァの左腕がまたもやバックホーに変化すると・・・そのバックホーはバースを3号車の辺りまで吹き飛ばした。

「まだまだぁ！！」

ガシャンッ

2つのバースバスターを投げ捨てたバースはセルメダルを2枚ベルトに入れてレバーを回転させる。

『ドリルアーム』

『クレーンアーム』

「おらぁぁぁぁぁ！！」

ギュィィィン！

バースはクレーンアームの先端にドリルアームを組み合わせた装備でクレーンアームのワイヤーを伸ばし、再びマシーン・ウヴァの腹部を狙う。

「フンッ！そんなものが俺に効くとでも思っているのか？」

「やってみないとわかんねぇだろうが！！」
ガリガリッ
「なにっ！？」
クレーンアームの先端についたドリルアームはマシーン・ウヴァの腹部の鉄板を少しずつだが削り始めた。
「くっ！？それ以上やらせるか！」
ガガガガガッ
「くっ！？おおおぉぉぉぉ！！」
バースはマシーン・ウヴァのＭ６０の弾丸を喰らいながらもドリルアームで鉄板を削るのをやめない。
「セル・・・メダルの力の分際でぇぇぇぇ！」
右手を懐中電灯のようなものに変化させたマシーン・ウヴァはビームサーベルのようなものでドリルアームを弾くと・・・・
「フンっ！」
「ぐわぁぁぁぁ！？」
そのままバースに駆け寄って斬りつけた。
「これで終わりだ！」

「さぁな。そう簡単に終わらないぜ」
『ブレストキャノン』
マシーン・ウヴァの振り上げた右腕を掴んだバースはクレーンアームとドリルアームを解除してブレストキャノンを装備する。
「さすがにこの距離じゃお前の装甲でも無理だろ？」
「貴様、正気か！？」
「もちのろんだ！ブレストキャノン、シュゥゥゥゥト！！」
ドォォォォォォン！
この一撃の直後、新幹線のスピードがさらに加速した。
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
「伊達さん！」
オーズ・タカガルドルに変身した俺は穴から新幹線の上に上がっていくと・・・そのには腹部の鉄板に亀裂が入っているマシーン・ウヴァと変身が解除されて倒れている伊達さんがいた。
「大丈夫ですか伊達さん」

「ああ、あばらの2～3本はいってると思うけど大丈夫、大丈夫」

そんなに大丈夫ではないよな。・・・その怪我。

「・・・伊達さんは少し休んでいてください」

「オーズ。ようやく来たか。残りのメダルも貰うぞ」

「セイッ！セヤッ！ハァァッ！」

俺はマシーン・ウヴァに駆け寄ってカンガルーアームの連続パンチをするが・・・外装が硬すぎて通用しているように見えない。

「セヤァァァッ！」

コンドルレッグの回し蹴りを決めるも・・・やはり大したダメージにはならない。

「今の俺にそのような攻撃は効かないぞ」

ギュィィィン！

「うわっ！？」

マシーン・ウヴァのチェーンソーに吹き飛ばされた俺は変身が解除されてしまい、カンガルーメダルまで奪われてしまった。

「・・・以前、俺が捨てたメダルか。・・・コアメダルには及ばないながらもセルメダル以上の力はあるようだな。貰っておいてやる」

カンガルーのメダルまで奪われてしまった俺はヒステリアの頭脳でどのように戦えばいいのかと考えていると、伊達さんは1つのバースバスターを拾いあげて俺に渡してくる。

「・・・次のデカイ一撃であの鉄板を完全に砕く。それと同時に遠山はあいつからメダルを奪い取れ。・・・それまで上のメガネウラの足止めを頼むよ」

「・・・了解しました」

伊達さんの言葉に頷いた俺は内ポケットからカニのメダルを取り出してベルトにセットするとオースキャナーでスキャンする。それと同時に伊達さんもベルトにセルメダルをセットしてレバーを回す。

「「変身!」」
『タカ!カニ!コンドル!』
カポーン!

俺はオーズ・タカカニドルに変身してバースバスターを上空にいるリモコントンボヤミーに向けると、伊達さんも再度バースに変身してマシーン・ウヴァに向かって走り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

俺とバースがそれぞれ怪人と戦っている頃、アンクとアリアは新幹線の外に出てココと向き合っていた。

「やっぱり、そういうことか」

しかもアンクの目の前のココは1人ではなく・・・・

「炮娘！餡子来了！」

青竜刀を持ったココと・・・・

「猛妹！抓住！」

サブマシンガンを持ったココがいた。

「こいつ等・・・姉妹だったのね」

「まったく・・・俺はアンコじゃなくてアンクだ。いい加減、その呼び方をやめてもらおうか」

アリアが両手に拳銃を持つと、アンクは近くに落ちていたバースバスターを拾い上げる。

「アンク、あたしが拳銃の方を相手にするから、あんたは青竜刀を持った方の相手をしなさい」

「言われなくてもそのつもりだ。・・・アイツがどうして８００年前のことを色々知っているのか聞き出してやる」

カチッ

「っ？」

アンクは猛妹と呼ばれていた方のココに向けてバースバスターの銃口を向けて引き金を引くも・・・・どうやら弾切れのようで何も出なかった。

「・・・まぁ・・・これで叩いたら痛いだろ。・・・うおらぁ！」

ブンッ

「ハイヤッ！」

ガギィン！

猛妹に駆け寄ったアンクはバースバスターを本来の使い方とはまったく違う方法で攻撃をしようとするも、猛妹はすぐさま青竜刀でそれを防ぐ。

「舐めてもらっちゃ困るネ！」

ギィィン！

後ろに下がって体勢を立て直した猛妹はアンクに青竜刀を振り下ろせるように構える。

「これで終わりネ！」

ドンッ！

猛妹の袖からは先ほどアリアを縛ったようなワイヤー付きの小型ミサイルが放たれるが・・・・

「・・・・楽しそうだな。・・・・俺も混ぜろよ」
バキィィン！
「なっ！？」
突如やってきた矢車が靴についているスパイクの部分の部分を利用して、小型ロケットをかかと落としで破壊した。
「な、何突然現れているネ！とっとと帰レ！帰レ！」
「・・・はぁ、登場早々帰れコールかよ。・・・どうせ俺なんて・・・」
「隙アリネ！」
矢車が落ち込んでいる隙に猛妹は青竜刀を振り下ろすが・・・・
「・・・はぁ・・・」
ガギィン！
俯いている矢車はため息をつきながら回し蹴りでその攻撃を弾いた。
「おいおい、この中にいたときの威勢はどうしたぁ！」
ドォン！
「っ！？」
バキィィン
アンクは怪人態の右腕から火球を放ち・・・猛妹は青竜刀で防

ぐと・・・青竜刀はそのまま砕けてしまい、その反動で猛妹は新幹線から転げ落ちそうになる。

「おっと！・・・まだお前には聞きたいことがいくつもあるんだよ」

『『『ＵＮＡＧＩ～！』』』

「くっ・・・」

猛妹を捕まえたアンクはウナギカンを３つほど取り出し、それで猛妹を縛り上げた。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「アンク達も外で戦いを始めたか」

アンクが青竜刀を持ったココと、アリアがサブマシンガンを持ったココと抗戦したのを視界に捉えた俺は再び空に視線を送る。

「・・・さぁて・・・」

そしてタカヘッドの複眼を紅く光らせるとリモコントンボヤミーの羽根・・・その付け根を狙う。

ダンッ！　ダンッ！

「くっ。外したか」

しかし2キロは離れている相手をいくら視界に捉えても始めて使うバースバスターではうまく狙撃することはできなかった。・・・・・こういう時、レキの狙撃の援護があればいいんだけどな。・・・・・そう思った矢先のことだった。

タァァン！

「亜ゥ！？」

遠い発砲音と共に、リモコントンボヤミーの一枚の羽根の付け根に銃弾があたり、バランスを崩してしまったリモコントンボヤミーは近くの茂みへと墜落した。・・・さっきの音・・・・忘れもしないぞ。何度も何度も神経に刻まれるように聞かされた音・・・ドラグノフの狙撃音だ。飛んで動いている怪人を名銃とはいえ旧式のドラグヌフで狙い撃つことができる人物を俺は1人しか知らない。

「・・・レキ・・・」

新幹線を追尾してきたヘリコプターはＯＨ－１。星伽神社のガレージにあった川崎重工の高速ヘリだ。そのハッチには身体のあちこちに包帯を巻いたままのレキが身を乗り出して狙撃銃を構えていた。撃ち落されたリモコントンボヤミーに警戒していると・・・・俺の足元にバッタカンがやってくる。

『キンちゃん！あ、あのもしもし、作戦中ごめんね！』

「白雪か。どうした？」

何やら慌てた様子の白雪だ。

『星伽の蒔江田さん・・・・運転手からキンちゃんにお電話ですっ！』

お電話？・・・するとバッタカンからは白雪の携帯がケーブルでバッタカンと繋げられたような音が聞こえた。

『遠山様、申し訳ありません。星伽の蒔江田です。今・・・のぞみ２４６号の後部を飛んでおります』

この声・・・俺達を星伽に送ってくれた運転手の声か。あの高速ヘリから白雪を経由して話しているのか。

『これは私共の失態です。テレビで報道されていた新幹線を見た幼い籠巫女達が騒ぎ立て、それをお聞きになったレキ様が銃を取り、このヘリで白雪様の救護に向かおうとしていた風雪様を降ろし、自分を乗せて飛ぶように命令したのです』

後方車両を見れば・・・ヘリはすでに新幹線に接触してしまいそうなところまで近づいている。そのハッチから半身を出したレキは・・・ショートカットに髪を風に暴れさせながら列車の最後尾を見下ろしている。そして何やら操縦席に何かを命令し・・・・

『なりませんレキ様、もう超過禁止速度を超えております。これ以上は機体が持ちません！』

蒔江田さんがレキに言い返したような声が聞こえ・・・それでもレキが蒔江田さんにドラグノフを向けてさらに指示するのが見えた。そしてヘリは加速をしながら、さらに降下してくる。まさか乗り移ってくる気なのか？・・・駄目だ、お前は傷ついているんだから戦

うな！

「キンジ！ヘリを退避させるのよ！前にトンネルが！！」

星伽の運転手と俺の会話を聞いていたらしいアリアは、５号車の辺りで拳銃を持ったココと戦いながらも俺に叫んでくる。進行方向を振り返れば、車両は緩やかなカーブを描きながらトンネルへと向かっていた。トンネルの上は山だ。このままだとヘリが斜面にぶつかってしまうぞ。

『キンジ！あと１０秒で加速だ！３００キロを超えるぞッ！』

さらに別のバッタカンを使って武藤がさらに事態に追い討ちを掛けてくる。次の瞬間、もう耐えられなくなったヘリが山を避けようと機首を上げた途端・・・それを感じたレキが空中でヘリから飛び降りて新幹線の最後尾に銃剣を突き立てた。・・・そしてトンネルの中に突入し、外から爆発音はしなかったのでヘリが平気だったことに安心していると、再び白雪と通信が繋がる。

『キンちゃん！大丈夫！？』

「ああ、俺は大丈夫だ。それよりもレキがヘリから飛び移ってきた。・・・あいつは瀕死の重傷だ。戦わせちゃ駄目だ」

『レキさんが電車に！？』

新幹線がトンネルから飛び出してレキの方を振り向くと・・・レキはもう最後尾の車両から渡ってきていた。・・・仕方ない。止まれといっても聞かないしな。最後の手段を使うか。

「白雪、レキを戦わせないためにも、乗客を救うためにも頼みがある」

『私に頼み？』

「俺達が戦っている１６号車と１５号車を切り離してくれ。お前の手で。実はそのために、お前にそこに立ってもらっていたんだ。気体爆弾は先頭車両、この１６号車にある。乗客は１４号車以降に集めているから、被害は最小限に食い止められる」

『でもキンちゃん。敵と爆弾と残るなんて・・・アンクは別にどうなってもいいけど』

俺の身を案じる白雪は、すぐには新幹線を切ってくれなそうな雰囲気だ。仕方ない。あまりやりたくなかったが、ヒステリアの技を使わせてもらおう。

「白雪、聞こえてるかい。白雪」

俺は少し低い声で、白雪の潜り込むように語り始める。これは遠山家に伝わる『呼蕩』・・・ある種の催眠術だ。人は独特の声色や息遣いを交えた異性に弱い。ヒステリアモードを持つ遠山家は代々この技を伝えているんだ。・・・そして数十秒後、完全にその虜になった白雪は・・・

「星伽候天流、緋緋星伽神・斬環！」

抜刀音以外が聞こえないほど素早く、接続部分を切り離した。

「っ！」

お見事・・・としか言い様がないな。・・・すると切り離された１４号車からレキが風を掻き分けるようにしてこっちへ駆けてきた。

「レキ！止まれ！」

レキは切り離された１４号車を駆けながら、胸ポケットから何かを取り出した。武偵弾、それもあの着色は炸裂弾。爆発を引き起こす、超小型の燃料気化爆弾だぞ。レキ、お前は何をするつもりだ！？

「源義経・・・八艘跳び・・・」

１５号車の方でウナギカンに動きを封じられているココが青ざめて何かを口走った時、レキはその場で一回転をしながら空中、自分の背後に武偵弾を放ち・・・その爆風を利用してこちらに移ってきた。

「レキ！」

その身体の包帯には、今の衝撃で傷口が開いたようで血がにじみ出ている。

「どうして駆けつけたんだ！こんな場所へ！」

俺は車両の中央から叫ぶ。

「駆けつけた理由ですか？・・・キンジさんも駆けてくれましたから。・・・コンボで疲労した身体で無理をしながら・・・。それに私は誓いました。『主人に仇為す者には一発の銃弾となり、必ずや滅びを与えん事を誓います』と・・・」

焦げた靴と靴下を脱ぎ捨てたレキは抑揚のないしゃべり方でそう応える。・・・あの時、レキは意識を失っていると思っていたが意識があったのか。

「オーズ!覚悟スルネ!」

するといきなり森の中から飛び出てきたリモコントンボヤミーは・・・

ドンッ!

「亜ゥ!?」

何やら通常の弾丸とは違う特殊弾丸の‘武偵弾’と思われる弾丸に狙撃されて羽根が一枚千切れて俺の前に墜落した。

「・・・鴻上ファウンデーション製、磁力断裂弾・・・・バースのセルメダルを引き付ける力とは逆に、セルメダルを引き離す特殊な磁力を放つ弾丸だ。試作段階のを3発ほど貰っていたんだが・・・ようやく役に立ったな」

「後藤・・・ナイスアシスト」

後ろでデザートイーグルを構えていた後藤は次にバースと戦っているマシーン・ウヴァに銃口を向ける。

「後藤ちゃん!?来ちゃったの!?」

「ええ、来ちゃいましたよっ！」
ドンッ！
「ぐおっ！？」
後藤のデザートイーグルから放たれた磁力断裂弾はマシーン・ウヴァの腹部のヒビに直撃すると・・・・
バキィィィン
それまでの蓄積していたダメージもありマシーン・ウヴァの腹部の鉄板は砕け散った。
「伊達さん！今です！」
「オッシャァ！もう一度喰らえぇぇぇ！！」
『ドリルアーム』
『クレーンアーム』
ギュィィィン！
「ぐおぉぉぉぉぉお！？」
クレーンアームの先端についたドリルアームは鉄板のなくなった腹部からセルメダルを奪い取り、そこにコアメダルが数枚見えた。
「貰ったぞウヴァ！！」
そこに颯爽と走ってきたアンクはウヴァの腹部に手を突っ込んでコアメダルを5枚ほど奪い取った。

「キンジ！受け取れ！」

「っ！」

アンクから投げ渡されたメダルはトラとバッタ、そしてサゴーゾ1式のメダルだった。これでサカエ以外のコンボができるな。

「オノレ、オ前タチ皆殺シテヤルネ！！」

「・・・それは無理だぜ・・・」

『サッゴーゾッ！サッゴォォゾォ！』

オーズ・サゴーゾコンボに変身した俺は再び立ち上がったリモコントンボヤミーの前に立って・・・・

『スキャニングチャージ！』

「セイヤァァァ！！」

「亜ァァァァ！？」

ドオォォォン！！

下が新幹線なので地面に拘束もせずそのまま両拳と頭突きを同時に決めて撃破した。するとバースのドリルアームを振り払ったマシーン・ウヴァは俺とアンクの方を睨みつける。

「くっ！？おのれオーズ！！・・・だが鉄板なんぞ、メダルさえあれば・・・ぐっ！？」

その途端、マシーン・ウヴァの銀色に輝いていた鋼の部分は赤く錆付いた色に変わり始めた。

「な、俺の身体に何が起きているというんだ!?」

「ハッ!バカが!・・・・機械の記憶のガイアメモリを使った反動でお前の中のセルメダルが急速に減っているに決まってんだろ」

「くっ!?・・・こ、今回はこれぐらいにして置いてやる!覚えてろっ!」

ガイアメモリを取り出して通常のウヴァは、ふらふらしながら新幹線から飛び降りて何処かにいってしまった。

「うっ!?」

「伊達さん!?」

変身を解除した伊達さんはこれで役目を終えたかのようにその場に倒れる。その表情は何かに苦しみながらも笑顔を作っているような感じだ。後藤はそんな様子の伊達さんに真っ先に駆け寄る。

「・・・後藤ちゃん。・・・・受け継ぐって意味・・・分かった?」

「はい。・・・・本当に受け継がないといけないのは力じゃなく魂だったんですね。ただ単純に力を受け継いだだけでは間違った使い方をしてしまう可能性も・・・」

「もういいよ後藤ちゃん。・・・・そんだけ分かってれば充分・・・後は任せたよ・・・」

バースドライバーを右手に握らせた伊達さんは静かに目を閉じると・・・・・

「伊達さん!?伊達さあぁぁぁぁぁぁん!!」

全身から力が抜けてしまったようにベルトから手を離していた。

最後のDバース（後書き）

やっぱりウヴァは・・・何だか残念だからこそウヴァだと思います（※個人の感想です）それはともかく次回は新幹線バトルもラスト。そして影に隠れていたあの怪人もいよいよ動く予定です。

解決と絶望と新たな戦士（前書き）

今回はいよいよあいつが再登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
ウナギコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

解決と絶望と新たな戦士

「伊達・・・さん？」

伊達さんが倒れた。・・・ケガをして救護科に行くと治療をした後、いっつも給湯室で作ったおでんを生徒達に食べさせているマニュアル嫌いの伊達さんがだぞ。信じられねぇよ。

「・・・伊達さんは・・・頭に銃弾が埋まっている状態で戦い続けていたんだ」

「どういうことだ？」

「伊達さんは武偵高に来る前は戦場で医師をしていたらしい。・・・その時に銃弾を喰らってしまったらしい。・・・このことをお前たち・・・特に遠山とアンクに伝えることを禁じられていたんだ。お前たちに伝えると戦いに支障が出ると言ってな」

伊達さん・・・そりゃ確かに俺達がそのことを知ったら止めていたが・・・。

「・・・とりあえずまだ息はある。ここはあぶないから室内に運ぶぞ」

「あ、ああ」

まだオーズ・サゴーゾコンボの変身を解除していない俺は伊達さんを抱えると穴から車内に入って静かに座席に下ろす。

「後藤もここにいてくれ。俺はまだアリア達が戦っているから上に戻る」

「す、すまない」

「別に謝る必要なんかねぇよ。俺達は仲間だろ」

俺は後藤にそう言い残して新幹線の上に出て行くと・・・

「アリアさん。車内に戻ってください。キンジさんに近づかないようにと言ったはずです」

「・・・っ！怪我人こそ、病院に戻りなさいよ」

アリアとレキがお互いに背を向けたまま言いあっていた。

「アリアさんが退がるべきです」

「あんたでしょ！」

こ、こらっ。二人とも、こんな所で喧嘩すんなよ。しかし今、２人が現場に居合わせているのは現実だ。だが共闘するならするで協力しないと大変なことになるぞ。武偵と武偵はうまく連携すると１＋１が３にも４にもなる。しかし仲違いするようでは１＋１が１にもならないことだってある。過去、白雪や理子は・・・アリアと対立してもイザとなれば連携して戦えていた。非常時まで意地を張る奴らじゃなかったからだ。だがレキは駄目そうだ。・・・背中越しに敵が１人増えたような殺気を出しているし。

「お前等・・・伊達さんのことを少しは心配しろよ・・・」

「心配する必要はないと思います」

「だってあの人死にそうにないじゃない。なんとなくだけど・・・」

どうしてだろう。・・・何故か説得力があるな。つーか何でそこはかみ合っているんだよ。

ざあっ

俺が変身を解除した途端、新幹線は再びトンネルの中に入る。だがそのトンネルは短く、数秒ほどで外に出た。トンネルを抜けた先では・・・眩いばかりの光が車両に降り注いでいる。

「・・・相棒・・・報道のヘリの光だ」

矢車の言葉で俺は空を見上げると、そこには何機もの報道のヘリが上空を舞っていた。どうやらこののぞみ２４５号をここで待っていたらしいな。この明るさはヘリ達から照射されるサーチライトの光が集中したものだった。マスコミめ・・・爆発の被害を受けない距離から高みの見物かよ。

「ココ、もうおしまいだ。武器を捨てて手を挙げろ」

サーチライトの直線光の中、俺はバースバスターをサブマシンガンのココ・・・炮娘に向ける。矢車も何時でも蹴りこめるような雰囲気だ。しかしそれでも炮娘の目には未だに闘志は失われていない。ウナギカンに縛られている猛妹も同様だ。

「・・・・・」

なぜだ?どうして白旗を上げない?・・・・そういえば恐らくはココ達の欲望から作られたと思われるヤミーは同種個体だが3体いた。・・・・そういうことか!・・・・ヒステリアの頭脳がその理由に気づくと同時に響き渡る報道ヘリの音が僅かに変化する。

「っアリア、レキ!敵機だ!」

叫ぶ寸前、俺はヒステリアモードの目でその操縦者の姿を捉えていた。そこにいたのは狙撃銃を背負った3人目のココだった。

「やっぱり3つ子だったか」

これはある種の人海戦術だな。倒しても追い詰めても、また次のココが現れやがる。

「あっ」

「・・・・っ」

ヘリの作る下降気流に会わせてアリアとレキは俺のそばまで後退してくる。アリアもレキもそのヘリに銃を向けるが発砲はしない。ヘリを狙撃すれば中のココを殺すことになるし、新幹線に衝突する可能性があるからだ。レキも『人を殺すな』の命令を守っているのか狙撃しない。しかし2人を嘲笑うかのように、ヘリは新幹線を後ろから前に舐めるように飛んだ。

「・・・鬱陶しい風だな・・・」

ドカッ

矢車はヘリの風をまるで気にしないで駆け出すと、生身で数メー

トルほど跳び上がってヘリにキックを決めた。・・・アリアも数メートルジャンプなどをやったことがあったが、Sランクの武偵達はどういう身体の構造をしているんだ?蹴られた衝撃でヘリは多少揺れたが、操縦席の上空で併走し始めた。そして本来は救助係だったらしいそのヘリから新幹線の先端に3人目のココが飛び降りてきた。

「炮娘、待たせたネ。猛妹の所へ行くよい」

「是、狙姐」

新手のココ・・・狙姐は炮娘に命令をすると、炮娘は車両の右側面にダイブをしながら民族衣装をパラシュートのように開いて着地すると折れた青竜刀を回収してレキにそれを向ける。・・・銃剣がないと接近戦ができないレキに近接戦をする気か。そしてその反対側には狙姐がM700狙撃銃をアリアに向けている。その距離はおよそ20メートルはあり、拳銃の精度では狙うことは難しい。そう考えても狙撃銃の方が有利だ。

「・・・相棒・・・どうする?仕掛けるか?」

「何なら殴りかかるぞ?」

矢車なら接近戦の方は何とかなるかもしれないが・・・戦いの最中に狙撃銃で狙われる可能性が高い。かといってアンクは人間体でそれほど強いわけではないから接近戦は向かない。・・・・だとすると・・・答えは1つだ。

「アリア、レキ。・・・俺は信じる。2人が心の奥では、お互いを信じているを信じる」

狙姐が引き金を絞り、炮娘が斬り込んできた瞬間・・・・

「さぁ、仲直りの握手だ」

俺はジャリバーとバースバスターを空中に放り投げた。そしてそれらが滞空している間にアリアとレキの腕を背後から掴み、半ば強引にその腕と腕をガッチリと組ませた。

「っ！？」

「？」

そしてさらに俺は右腕と左腕をアリアとレキの腰に回すと、まるでコマのように俺を軸に半回転する。『キャスニングターン』２駒を一手で入れ替えるチェスの特殊手のように。いい子だ２人とも。アリアは俺を信じて動くもレキを信じた。レキも俺を信じて動くアリアを信じた。敵が攻撃のターンとなり、防御や回避がなくなったタイミングで２人は俺を中継にして信じあい、チームワークを働かせてくれたのだ。そして俺の思惑通りにレキＶＳ狙姐。アリアＶＳ炮娘といった対戦カードになってくれた。

「っ！」

ダァン！

「おっと！」

ドンッ！

「・・・・」

タァァン！

咄嗟に発砲をキャンセルできなかった狙姐の弾丸はアンクが火球を放って防いでくれた。そしてレキは反撃のドラグノフで狙撃手のココ、狙姐の足元を撃った。

「阿っ！？」

足払いを喰らった狙姐は新幹線の前面へと滑り落ちていく。

「ココ！」

ガガガガッ！

車両後方ではアリアが両手のガバメントを連射しながら炮娘目掛けて駆け寄った。しかし炮娘は青竜刀で銃弾を防ぐとアリアをそのまま斬りつけようとしてきた。

「・・・はぁ・・・・」

ブンっ

「阿ぅ！？」

するとため息をついた矢車は有名な下駄を飛ばす妖怪のように自分の靴を炮娘に向かって飛ばして青竜刀を弾いた。そして丸腰どころかパラシュートとなった民族衣装もどこかへ飛んでいってしまって下着姿の炮娘に・・・・

「逮捕よっ！」

『ガゥ！』

アリアは遠慮なく飛び掛って取り押さえた。いつの間にか飛び出ていたトラくんも炮娘の髪の毛に噛み付いている。先ほどの矢車の

靴が痛かったのかほとんど抵抗もできずにあっさりと捕まったな。
ひとまずこれで猛妹と炮娘のので車両の前方の方を振り向くと・・・・・

「・・・・・」

新幹線の先端に続く斜面のフチにレキが無言でしゃがんでいた。

「炮娘！猛妹！救命！滑滑！我倒下！」

「少しうるさいですよ。あなたも姫ならわきまえなさい」

レキがドラグノフを担ぐように構え、その銃を見るともなく上空のヘリに向けた。

「うぐぅ・・・」

それを撃ち落されては堪らないと思ったのか、それっきり狙姐は黙り込む。・・・ひとまずこれで3人とも戦闘不能にできたな。

「お前ら、まだいたりするのか？」

ウナギカンに縛られたココ3姉妹にアンクが右腕を向けると・・・
3姉妹は揃って首を横に振る。そして銃を収めて上を向いたアリアと立ち上がったレキが同時に振り向く。

「・・・かっ、勘違いしないでよねレキ！さ、さっきのは身体が勝手に動いただけよ！」

「・・・私も身体が勝手に動いただけです」

２人ともまだ意地を張るようなことを言っていたが・・・２人が交わした視線はさっきまでの敵対の目とは違った。お互いを認め合った武偵と武偵の目だった。

・・・

のに平賀さんはやたら上機嫌で機材を組み立てていく。

「気体爆弾は酸素と混ざると爆発するって理子ちゃんから聞いたのだ。だから窒素で膨らますシリコンの風船を隅々まで広げて、気体爆弾をこっちの真空ボンベに移すのだ！」

そして数分後・・・すでに４００キロ以上の速度となった時、気体爆弾は完全に真空ボンベに移った。

「いよっし！完了なのだ！」

「ブレーキだ武藤！」

「うっしゃぁ！ブレーキ・・・あれ？」

運転席の武藤はレバーを捻ってブレーキをかけようとするが・・・どこか様子が変だ。

「大変だキンジ！さっきの戦闘でブレーキをかけるストッパーが壊されちまって止められねぇ！」

「なっ！？」

それじゃ結果的に事故になっちまう可能性があるじゃんかよ！？・・しかしそんなピンチでも平賀さんからは笑顔が失われていなかった。

「大丈夫なのだ！こんなこともあろうかと秘密兵器を準備あったのだ！」

秘密兵器だと？

「キンジ！あそこっ！」

運転席の武藤が正面を指差していたのでそちらを振り向いてみると・・・そこには真紅の姿をした鬼の仮面戦士・・・・仮面ライダー響鬼・紅が立っていた。

「あだちくんなのだ！」

「えっ！？あれが明日夢か！？」

武藤は響鬼・紅に変身した明日夢に驚きつつも、彼の「下がって」という合図で俺達のところまで下がってくる。すると響鬼・紅はまるで相撲の力比べのように新幹線を両腕で受け止めた。

ギィィィィィィ！！

一瞬、車輪が空転するような音に続いて・・・耳に響く急ブレーキ音。そして今までで最も激しい衝撃が新幹線を襲った。

「おおおおおぉぉぉ！！」

響鬼・紅は雄叫びを挙げながらブレーキをかけようとする。そしてブレーキをかけて１キロ以上走り・・・

ギィィィィ・・・・ギィィ・・・

東京駅のホームでようやくストップした。

「やったわねキンジ！」

アリアは安心のあまり少し足を震えさせながらも笑顔でこちらにやってくる。

「ああ、これで一段落・・・・」

ドオォォォォォン！

「「「っ！？」」」

俺が「一段落着いた」と言い終える直前・・・東京駅に爆音が響き渡った。俺達が慌てて新幹線を降りると・・・ホームの方からは銃声や爆音が今も続いていた。

「後藤と武藤と不知火は伊達さんを運んでくれ！アンク！」

「ああ、分かってる！」

「・・・俺も行くぜ相棒・・・平賀、ゼクターの修理を頼む」

「ぼ、僕も・・・」

爆発音が響いた場所に俺とアンク、そして平賀さんにゼクターを預けた矢車と響鬼・紅が駆けつけると・・・そこでは教員であるサバキさんの変身した裁鬼と橘さんのギャレンや名護さんのイクサ、藍川さんの変身するカリスといった3年の仮面戦士科の何人かが青い怪人と戦っていた。

「・・・グランザイラス」

響鬼・紅は悔しそうにその名を呟く。・・・そう、そこで仮面戦士達が戦っているのは、東京武偵高で最強だったヒビキさんを倒したグランザイラスだった。

「はぁぁぁっ！！」
バキッ！

「どけろ屑っ！」

裁鬼は黒い音撃弦をグランザイラスに振り下ろすが・・・あっさりと折られて頭を掴まれて投げ飛ばされてしまい、頭が壁に突き刺さる。

「うおぉっ！！」

「その命、神に返しなさい！」

「てめぇらも邪魔だ！」
ドォン！

ギャレンやイクサもグランザイラスの破壊弾で吹き飛ばされて変身が解除されてしまう。

「これ以上ここで暴れさせないぞ。・・・天音ちゃんが通っていた小学校の生徒達が学校に通うための電車を破壊されないためにもな」

カリスはそんなことを呟くと鎌のような弓の武器、醒弓カリスアロー，でグランザイラスに切りかかるも・・・・

「フンっ！」
ガギィン
「っ！？」
その強度な身体にその刃は弾かれてしまった。
「まだまだ！」
『ＣＨＯＰ』
ドカッ
「なんだそれは？」
ベルトにラウズカードをスラッシュしてチョップをするも、あまりダメージがあるように見えない。
「すっこんでろ！」
「うおっ！？」
ガシャァァン！
グランザイラスに掴まれたカリスは天井を突き破ってしまうほど、思いっきり投げ飛ばされて何処かに行ってしまった。
「オーズにグリードのアンク、ついでに響鬼か。・・・オーズは生かしたまま連れて来いって命令されているからそれ以外は殺すぞ」
「・・・アンク、アリアとレキを下がらせてくれ。行くぞ明日夢・・・変身！」
『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ

！』

「・・・うん。あいつにはヒビキさんをやられた借りがあるしね・・・」

俺はオーズに変身するとアンクからメダジャリバーを受け取って構え、響鬼・紅も2本の音撃棒を構えた。

「やぐるまさん！バッタさんが直ったのだ！」

「・・・・・・」

遠くから聞こえた平賀さんの声と共にホッパーゼクターが矢車のところにやってくると、矢車はすぐさまベルトを腰につけてゼクターを掴む。

「はぁ・・・変身・・・」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

そしてキックホッパーに変身した矢車は俺達のところに並び立った。

「たった3人の仮面ライダーで俺様に勝てると思っているのか？」

「くっ？」

悔しいが・・・たしかにグランザイラスの言うとおりだ。１１人ライダーでも敵わなかった相手に俺達3人で勝てるとは思えないぞ。

「・・・・3人だけじゃないぞ」

「っ！」

突然聞こえた声に俺達は改札の方を振り返ると・・・そこにはバースドライバーを持った後藤がいた。そしてゆっくりと歩きながらバースドライバーを腰に巻きつけた後藤は、セルメダルをベルトに入れてレバーを握る。

「伊達さん・・・・一緒に戦ってください。・・・変身っ」

カポーン！

レバーを回した後藤は黄緑色の光に包まれるとこれまで伊達さんが変身していたバースに変身した。

「黙って見ているだけでは伊達さんに怒られてしまうと思ってな。・・・俺も戦わせてもらうぞ」

こうしてグランザイラスの前には・・・・俺が変身するオーズ。明日夢が変身する響鬼。矢車が変身するキックホッパー。そして後藤が変身するバースが並び立った。

解決と絶望と新たな戦士（後書き）

最近は2日に一度ぐらいですいません。たぶんこれからもこんな感じになると思います。次回は４ライダーＶＳグランザイラス。なるべくはやめに更新したいです。

反撃への最終コーナー（前書き）

今回はグランザイラスとの決戦です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

反撃への最終コーナー

俺達４人が変身して並んだ頃、アリアとレキは俺達の方に走って向かっていた。

「どうしてレキも来るのよ！たぶん怪人相手よ！下がりなさい！」

「むしろその場合アリアさんこそ下がるべきですよ」

先ほどの協力のおかげでお互いに敵意を向けることはなくなっているのに、張り合ってしまっているアリアとレキの２人は改札を出て俺達を視界に捉えた途端・・・・

「！」

「「っ！？」」

２人の死角となっていた右の曲がり角から片手で剣を握った仮面戦士は現れた。その仮面戦士は亮太郎が変身する電王のソードフォームに似ているが、赤く輝いているはずのアーマーは禍々しい紫色になっている。

「強い殺気ですね」

「・・・雰囲気からして味方って訳ではなさそうね。・・・あんた、何者？」

「俺か？俺様の名前はネガタロス。エヴィル８幹部の１人にして最強のイマジンだ。・・・・そしてこの姿は‘ネガ電王’だ」

ネガ電王と名乗った仮面戦士はアリアとレキに向けて剣を向ける。

「お前たちには恨みなんてないが・・・生かしておく意味もない。世界最悪の秘密結社が生み出したグランザイラスがゲームをしているからな。邪魔になる前にお前たちを殺すことにするぜ」

「レキっ！」

「・・・分かってます」

アリアとレキはネガ電王に銃口を向ける。

「そんなんで俺様に勝てると思ってるのか？滑稽だな」

「言ってなさい！風穴を開けてあげる！」

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

ネガ電王に向かってアリアはガバメントで銃弾を嵐のように連射するが・・・仮面戦士の姿であるネガ電王はそんな攻撃には動じない。

「言っておくが・・・俺様の強さは別格だぞ」

ネガ電王は銃弾を避けることもせずに駆け出すと、アリアに向かって剣を振り下ろす。

「お前ら！何してやがる！」

チャリィィン

「アンク！？」

その刃がアリアの首筋に触れてしまう寸前、丁度平賀さんや理子を避難させ終えたアンクはネガ電王の刃を怪人態にしている右腕で受け止めた。しかし止めた右腕からは強力な攻撃のあまりに１０枚ほどセルメダルが落ちていた。

「お前らも早くこの場所から離れろ！矢車の話だとあの怪人は倒しても大爆発を引き起こすらしい！ここにいたら被害を喰らうぞ！」

「安心しろ。お前たちは爆発の被害は喰らわない。・・・お前たちはここで死ぬからな」

ガギィィィン

「ぐあっ！？」

ネガ電王が剣を振り払ってアンクを弾くと・・・アンクはそのまま改札口に叩きつけられてしまう。

「アンク！？・・・っ！」

「アンクさん・・・・」

アリアとレキはアンクの避難指示を無視してネガ電王に再び銃口を向ける。すると２人の銃口は後ろからやってきた人物にゆっくりと降ろされた。

「君達は下がっていていいよ。ここからは俺が相手をするから」

「あんた・・・誰？」

2人の後ろに立っていた人物は・・・どういう訳かインディアンな仮面を被っていた。アンクやアリア達に素顔を隠している人物はアンクにサムズアップをするとネガ電王に殴りかかる。

「みんなの笑顔を守りたい冒険家だよ！」

ドカっ！

仮面の男がネガ電王を殴りつけた途端、仮面の男の右腕は赤い鎧を纏ったような姿に変わる。そしてインディアンな仮面を投げ捨てて連続で殴ると、その姿は赤いクワガタのような仮面戦士に変わった。

「なっ？・・・クウガだと！？」

「うおりゃぁぁぁ！」

アンクに‘クウガ’と呼ばれた仮面戦士はネガ電王の剣を回避しながらパンチやキックを繰り出す。

「お前・・・まさかリクなのか？」

「・・・・・」

アンクのその質問に・・・クウガは答えない。

「アンク！はやくその2人を・・・」

「お前！やっぱりリクだろ！」

自分の名前を知っていたクウガを８００年前の仲間のリクだと確信したアンクは彼を呼び止めようとするが・・・・

「ぐおっ！？なかなかやるな！最近は骨がない者ばかり相手だったから面白いぞ！」

「こっちは全然楽しくないよ。悪いけど早くライダーシステムを置いて帰ってくれない？」

クウガとネガ電王は戦いながら外へと出て行ってしまった。

「・・・リク・・・・」

「アンク！８００年前の人が生きている訳ないでしょ！あの口の悪い紫はあの仮面戦士に任せましょう！私達はキンジ達のところに向かうわよ！」

「おい！だから避難しろって・・・・」

アンクとアリア、そしてレキは俺達が戦っている場所へと走り出した。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「・・・・はぁ・・・・」
ドカッ！

真っ先に先陣を切ったのはキックホッパーこと矢車だった。グランザイラスの懐に誰よりも先に跳び込んだキックホッパーは頭部に蹴りを入れると・・・・

「・・・後藤・・・・・」

「ああっ！」
『ドリルアーム』
『キャタピラレッグ』

バースがドリルアームとキャタピラレッグを装備をして突っ込んだ。

「フンっ！」
ドガッ！

「・・・・ぐはっ！？」

左手でキックホッパーの右脚を払いのけて地面に叩きつけたグランザイラスはその勢いで西口から外まで押されながらもバースのドリルアームを左手で受け止める。

「さぁて・・・まずはこの腕をもらうぜ」
ミシッ

「くっ！？」

グランザイラスは右手に握ったドリルアームを砕こうとする。まずいっ!?あのままじゃドリルどころか後藤の腕まで壊されるぞ!

「ごと・・・・」

「灼熱真紅の型っ!」

ドドンッ!

俺が叫ぼうとした途端に・・・・響鬼・紅はすぐさま、音撃打、灼熱真紅の型、を叩き込んでその手を払いのける。

「ぐおっ!?・・・ちょっと効いたぞ。少しは相手になるな」

「お前ら!下がれ!」

『トリプル・スキャニングチャージ!』

セルメダルを3枚入れたジャリバーをスキャンする。そして響鬼・紅の音撃に怯んだグランザイラスに向かってそれを振りかざした。

「セイヤァァァァッ!」

「フンっ!」

ドオォォォォォン!

ジャリバーの次元斬とグランザイラスの破壊弾がぶつかり合って辺りには激しい土煙と強い風が舞う。

「やったの?」

どういう訳かこちらにやってきてしまったアリアはそう呟く。し

かしその瞬間、一瞬にしてその土煙は吹き飛んで、グランザイラスは響鬼・紅に襲い掛かった。

「うわっ！？」

グランザイラスの突然の奇襲を喰らった響鬼・紅は2本の音撃棒を弾き飛ばされてしまう。

「まずはお前からトドメだっ！」

「くっ！？鳴刀・・・音叉剣っ！」

ガギィィン

トドメを刺そうとしたグランザイラスの攻撃を響鬼・紅は咄嗟に音叉を刀のような武器に変化させて受け止める。

「っ鬼火！」

ボォォッ

そしてその至近距離から響鬼・紅はマスク部分から炎を放って目くらましをすると、音撃棒を回収して距離を取る。

「ならこれだっ！」

『サソリ！エビ！カニ！サッカッエ！サッカッエ！サッカエ～～ロ～！』

オーズ・サカエコンボに変身した俺は右手に長刀、左手に短刀を持ってグランザイラスに斬り込むが・・・・・

「フンッ！」

ガギィィィン

やはりその刃もグランザイラスの身体には傷をつけられなかった。

・・・俺達の攻撃がまるで通用していないぞ？・・・俺はグランザイラスの攻撃を2本の刀で受け止めるも壁まで吹き飛ばされてしまう。

「ぐはっ！？・・・・・」

このままじゃ本当に負けちまう。いや、それどころか本当に殺させちまうぞ。必勝法を考えろ。ヒステリアモードの俺の頭脳・・・・ここまでの戦闘を振り返るんだ。あいつの外装の強度はマシーン・ウヴァ以上で俺達の攻撃はまるで効かない。かつて本郷さんや光太郎さんが戦った時はどうやって倒した？

「そういえば・・・バイオライダーになった光太郎さんが内側から攻撃したんだったな」

バイオライダー・・・ってことはシャウタコンボで内側に潜り込めればよかったかもしれないが・・・生憎水槽系メダルはシャチの1枚だけだから無理だ。

「くっ？・・・やっぱりヒビキさんでも倒せなかった怪人だから僕たちが束になっても無理ってことか」

そういえばヒビキさんはグランザイラスにやられて大怪我したんだったな。たしか鬼系仮面戦士、通称‘音撃戦士’の特徴は清めの音である音撃を奏でて相手を浄化するんだったな。・・・俺はその時、響鬼・紅の灼熱真紅を喰らったグランザイラスが「ちょっと効いた」と言っていたことを思い出す。

「っ！？」

そうか！・・・見えたぞ。勝利への道が・・・。

「明日夢、お前もヒビキさんのように装甲に変身できるのか？」

「えっ？う、うん。試したことはないけど、できると思うよ」

「おそらくだが・・・以前ヒビキさんがグランザイラスとの戦闘・・・ヒビキさんは確実にダメージを与えている。そしてその部分を突くことができるのは・・・・明日夢。お前だけだ」

この戦いの勝利への最終コーナーを導くのは他でもないヒビキさんの弟子の明日夢だ。

「アンク！タジャドルで行く！」

アリア達と戻ってきたアンクに俺はタジャドルの変身を要求すると、アンクは苦しそうな表情をしながらも自身の右腕から2枚のコアメダルを取り出す。

「仕方ないな。・・・受け取れっ！」

パシッ

「ありがとなアンク！」

俺はアンクが飛ばしてきた2枚の赤いコアメダルをチャッチすると黒いメダルをベルトから外して鳥系の赤いコアメダルを3枚ベルトに入れてスキャンする。

「さぁ、派手にいかせてもらうぜ！」
『タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～～！！』

オーズ・タジャドルコンボに変身した俺はジャリバーを右手に持って中段に構える。すると隣ではアカネタカが持ってきたアームドセイバーで響鬼・紅がディスクアニマル達を纏って装甲響鬼に強化変身した。

「何だ、何だ？フォームチェンジをしただけで俺様に勝てると思ってんのか？」

「あぁ、思ってるさ」

「俺達は諦めが悪いからな。倒れても何度でも立ち上がるぞ」
『カッターウイング』

バースは背中に飛行機の翼のようなユニットを装備すると低空飛行をしながらグランザイラスに突っ込んでいく。

「っ！」

グランザイラスはバースの体当たりを回避すると・・・その隙を狙って今度はキックホッパーが駆けた。

「ライダー・・・反転キック」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
ドカッ！！ドカッ！

キックホッパーの反転キックでグランザイラスが少し引き下がると・・・その後ろからはカッターウイングで飛行しているバースが

さらにショベルアームとキャタピラレッグを装備して突撃してきた。

「フンっ！」
ドォン！

グランザイラスは破壊弾を低空飛行しているバースに向かって放つ。それに対してバースはベルトにさらにセルメダルを入れてレバーを回した。

『ドリルアーム』
『クレーンアーム』
『ブレストキャノン』

「うおぉぉぉぉぉ！！」
ドカァァァァン！

ドリル・クレーンアームとブレストキャノンをさらに装着して、バースユニットをフル装備したバースは右腕のドリル・クレーンアームで破壊弾を貫いた。そしてそのままグランザイラスに突進するとクレーンアームのワイヤーで動きを封じた。

「今だ！明日夢！」

「うん！爆裂真紅の型！」
ドン！　ドン！ドン！

装甲響鬼はアームドセイバーを腰の後ろに納めるとベルトの音撃鼓をグランザイラスに埋め込み、それから発せられた炎で模られた音撃鼓を2本の音撃棒で叩く。

「そんな音なんかでこの俺様が・・・ぐおっ！？」
ドン！　ドン！ドン！

グランザイラスの予想とは裏腹に、装甲響鬼の奏でる音撃はたしかにその身体に効いていた。

「な、なぜこの最強の身体がダメージを受けるんだ！？この身体は１１人ライダーでも傷をつけることができないほどの最強の身体のはずだぞ！！」

「・・・お前は知らなかったんだよ。様々な仮面戦士・・・僕やヒビキさん達の変身する音撃戦士の特徴をね」

音撃の最大の特徴は‘音撃’・・・それは清めの音で相手を内側から清めることだ。そもそも‘音’っていうのは空気に振動して辺りに響き、振動が人にぶつかることで‘音’がしたと認識される。音撃は音の攻撃であって外装などを気にせずに内側からダメージを与えるんだ。だからこそ外側が強固な身体なら内側からダメージを与えればいい話。ヒビキさんの最後の攻撃も証言によると音撃という話。ヒビキさんは気づいてたか、気づいていないかは分からないが・・・ヒビキさんの攻撃は確かにグランザイラスに効いていたんだ。

「ぐあぁぁぁ！？」
ドン！　ドン！ドン！

どんなに硬くて外側から攻撃が通じなくても、内側から外側へと響く攻撃を防ぐ手段はない。それにヒビキさんの音撃による蓄積ダメージもあるはずだからダメージは相当なはずだ。

「相棒・・・あの怪人は倒したとしても大爆発を起こすんだぞ？」

「ああ、だからドドメは・・・・」

キックホッパーに質問された俺はだいぶ日が暮れて、月明かりが輝く夜空を見上げる。

「空で決める！・・・後藤！」

翼を広げた俺はグランザイラスに体当たりをすると、そのまま空へと飛び上がる。するとクレーンアームのワイヤーでグランザイラスを押さえていたフル装備のバースも、空へと飛び上がった。

「あれだけ音撃を喰らったんだ。さすがに次の技は耐え切れないだろ？」

『サソリ！カニ！エビ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！』

俺はグランザイラスから離れるとタジャスピナーにサソリ、カニ、エビのメダルをセットしてオースキャナーでスキャンする。

「伊達さん・・・あなたの魂、俺が受け継ぎます！」

『セルバースト』

クレーンアームのワイヤーを解いたフル装備のバースはブレストキャノンにエネルギーを溜めるとその狙いをグランザイラスに定める。

「ヒビキさん・・・僕はもう諦めませんよ。・・・・鬼神覚声！ハァァァァ・・・」

装甲響鬼はアームドセイバーで自身の声を音撃として空へと放つ

ように構える。

「・・・相棒、俺も俺なりにできることをやるぜ」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

キックホッパーが高くジャンプをした直後、俺達は一斉に動いた。

「っセイヤァァァァァ！！」

「ブレストキャノン！シュゥゥゥゥゥト！！」

「覇ぁぁぁぁっ！！」

「ライダー・・・キック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

俺はタジャスピナーで上空から黒く輝くメダル状のエネルギー弾を放つと、同じく上空にいるバースも特大のエネルギー砲をブレストキャノンから放つ。そして地上の装甲響鬼は鬼神覚声による炎の斬撃を放つと、キックホッパーはその炎を蹴り飛ばしてさらに威力を増幅させる。そして上と下からの攻撃は完全にグランザイラスを挟んだ。

「ま、まさか最強の身体を持つはずの、この俺様がぁぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォォォン！！

空からの必殺と地上からの必殺が直撃したグランザイラスは・・・・おそらくは東京ドームをまるごと１つの飲み込んでしまうような爆発をした。

反撃への最終コーナー（後書き）

これからは自動車学校にも行かないといけなくなるのでこれからの平日の更新は2～3日に1回になってしまいます。申し訳ありません。

不発弾（前書き）

レッツゴー仮面ライダーのＤＶＤを購入しました。映画館にも見に行ったんですが仮面ライダーに想いを伝えるシーンは２回目だと言うのに涙してしまいました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
クジャクコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
コンドルコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

不発弾

俺達がグランザイラスと激闘を繰り広げていた頃、アンクに、クウガ、と呼ばれた仮面戦士はネガ電王といまだ戦闘中だった。

「これでどうだ？」

ブンッ！

ネガ電王の振り下ろした剣を横に回転して避けたクウガは近くの木の棒を手にした。

「超変身！」

そう叫んだクウガの姿は赤から青の姿へと変わる。そして手に握った木の棒も独特のデザインの青いロッドへと変化した。

「・・・なるほど。物質を変化させて自分の武器にすることができるのか」

「ああ、そうだよっ！」

ガギィィン！

クウガとネガ電王の武器がぶつかり合い火花が散る。そしてすぐさま一歩引いて跳び上がったクウガは・・・・

「オリャァァァァッ！！」

ドカッ！

ロッドの先端を全力でネガ電王にぶつけた。

「ぐおっ!?・・・・はぁ・・・はぁ・・・なかなかやるじゃないか。今回は引くとしよう。しかし次はお前もろともあいつ等を殺す」

クウガの攻撃を耐え抜いたネガ電王はダメージに耐えながらも次元の歪みのようなものを出現させる。

「覚えておけ。俺様達はエヴィル!世界最悪の組織だ!」

そう言い残したネガ電王はスーツから火花を散らしながらも歪みの中に潜っていき、その姿を消した。

「・・・君達が悪い組織ぐらい・・・俺も知っているよ。でなきゃ世界中飛び回ってエヴィル怪人と戦ってないよ」

自身の拳の震えを反対の手で押さえたクウガは静かに変身を解除する。

「・・・そういえば今の俺がアンクに会うのは初めてだったなぁ。ちゃんと挨拶しておけばよかった~。今度会ったときはアイスランドのおみやげでも渡そうかな?」

ヘルメットを被りながらそう呟いた謎の男はバイクに跨ると何処かへと行ってしまった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

「ふぅ・・・・やったな後藤」

「・・・・あぁ、そうだな」

地上へと戻って変身を解除した俺と後藤はアリア達がいるホームへと足を進める。

「伊達さん・・・・俺、バースに変身しましたよ」

「う、うぅ・・・」

後藤が倒れている伊達さんに話しかけた途端、伊達さんの右手がピクリと動きその目が開いた。

「伊達さん!!」

「あぁ・・・言い忘れてた。・・・・退職金。俺の講座に振り込んどいて」

上半身を起こした伊達さんは満面の笑みで後藤にサムズアップをすると・・・・俺達は一斉に脱力してしまった。

「アリア達の言う通り・・・この人は死にそうにないな」

「あはっ!作業料としてこれは貰っていくのだー!あややがイタダキなのだっ!」

すると気体爆弾の入ったボンベを無邪気に背負っていた平賀さんはそう言い残してこの場を立ち去っていった。・・・火遊びはほど

ほどにな。

「あんたたち、お姉ちゃんに投降を促すってんなら電話を貸すわよ？」

×字に重ねられた2人のココ姉妹は・・・近づいたら噛み付きそうな表情でこちらを見渡すも、アリアはそんなことも気にせずに、勝ち誇った表情で2人の上に座る。

「こいつらのヘリは神奈川県警が抑えたらしいぜ。車輌科だからいう訳じゃねぇんだが、どんな人間だろうと何もできないさ。いずれ捕まんだろ」

俺達がグランザイラスと戦っている間に新幹線の上から逃げたらしい狙姐もさほど遠くに行けてないってことか。

「武藤・・・お疲れ様。ありがとう」

「礼には及ばねぇよ。武偵憲章1条、仲間をナントカって言うだろ。・・・っておい。人が誰もいないせいで駅弁が買えねぇじゃんかよ！せっかく龍陽軒のジェット焼売とゴールド寿司を買おうと思ってたのによぉ。キンジ、そいつ等は任せたぜ。尋問科にでも頼んで尋問でもしてもらえ」

駅弁マニアの武藤は俺に残りの仕事を任せて駅を出て行った。

「それじゃあ・・・僕は伊達さんを病院に連れて行くよ」

「後藤ちゃんは事故処理を頼んだよ」

「了解しました。お気をつけて」

そして伊達さんに肩を貸した明日夢も出て行ったのを見送った俺は、改めてココ達の元に片膝をつく。見れば猛妹の袖の中から鈎爪やナイフなどの様々な武器を取り出しているが・・・何に使うのか分からないのもたくさんあるな。

「妹達、撤退ヨ。香港に戻るネ」

ホームの端からココの声がして、俺達は一斉に振り返る。そこには足を引きずりながらＭ７００を構えている狙姐の姿があった。・・・しまった。戦いに集中していて気がつかなかった。狙姐は新幹線から飛び降りて逃げずに、東京駅まで新幹線の側面にへばりついていたんだ。１００メートルほど離れている狙姐の銃口は俺に向いている。

「レキ！動く駄目ネ！」

ドラグノフを持ち上げようとしたレキにココが叫ぶ。レキは俺が狙われていることに気付いたんだろう銃を構えない。ただ狙姐の方を見ている。

「他も動いちゃ駄目ネ」

「痛っ！？」

目だけでアリアの方を見ると、アリアはココ姉妹に足だけしがみつかれていた。ココ達は死に物狂いでアリアの髪やスカートに噛み付いている。後藤と矢車も、そしてアンクも・・・俺が狙われているせいで下手に動いてはいけないと判断して動かない。

「風、レキをよく躾けた。人間の心、失わせてる。この戦いでよぉーく分かったヨ。お前使えない女ネ。だからもうお前、いらない。レキ・・・お前、まだ弾を持っているはずネ。それで死ね。今、ここで」

狙姐は痛むらしい足を震わせながらレキに命じる。俺の額を狙うM700はボルトアクション式のライフルで連射ができない。そのため俺を撃ってしまうと次弾を装填するまでの間にレキの狙撃や足のはやい矢車に反撃されてしまう。その隙を作りたくないだろうから狙姐はレキに『自分を撃て』と命令しているんだろうな。

「お前死ねばキンチは殺さないネ。キンチは最凶の王様ネ。こんなに使える駒は滅多にないネ。ココも殺したくない」

「ココ。あなたが言うとおり、私はもう1発、銃弾を持っています。私が自分を撃てば、キンジさんを殺さないのですか?」

確認するようにいったレキに・・・俺は慌てて星伽神社でのことを思い出す。・・・『最後の銃弾』それはウルス族が追い詰められた時、自分が仲間の足手まといとなった時、かつて日本の侍がそのようにしたように自決するための銃弾だ。

「よせレキ!どうせあいつは俺を・・・」

「キンチ喋るな!レキ、今の話は曹操の名に賭けて誓ってやるネ。待つ、ココに不利ネ。レキ、今すぐ自分を撃つネ。待たせたらココ、キンチ撃つ。レキ、その後でココ撃てばいいネ。他にキンチ取られるより、ココは相打ちを選ぶヨ」

「・・・ココ蘭幇の姫。・・・ウルスの蕾姫が問います。今の誓い・・・キンジさんを殺さない事、守れますか？」

ドラグノフのストックを足元に置いたレキは狙姐に質問する。

「バカにする良くないネ。ココは誇り高い魏の姫ヨ」

「誓いを破ればウルスの４６女が全員であなたを滅ぼす。かつて世界を席巻したその総身を以って、あなたの命を確実に狙う。分かりましたね」

背を伸ばしたレキが自身の顎の下に銃口をつける。

「レキ・・・よせ！」

「キンジさん。ウルスの女は銃弾に等しい。しかし私は・・・失敗作の不発弾だったようです。不発弾は・・・無意味な鉄くずなのです」

「チッ！自分から死ぬなんて馬鹿げたマネ・・・」

「アンコも動いちゃ駄目ネ！」

アンクはレキを止めるために足を一歩前に出すも・・・狙姐は俺に向いている狙撃銃の引き金に指をあてたため動きを止める。

「やめなさいレキ！あんた騙されてるわよ！」

「キンジさん。あなたは人を殺すなと私に命令しましたが、私は今、主人を守るために・・・私自身を撃ちます。ですが、これは造反

にならない事を理解してください。なぜなら・・・・私は一発の銃弾・・・」

レキは靴を失った足の指をドラグノフの引き金に掛ける。

「お前は銃弾なんかじゃない！！」

俺の叫びも虚しく・・・レキは顔色1つ変えず足の指でその引き金を引いた。

ガチンッ

「・・・・・！」

レキの目が再び見開かれた。その瞳は驚きに満ちている。・・・銃弾が出なかったからだ。

「・・・不発弾」

アリアも後藤も信じられないといった表情だ。アンクは安心したような表情で矢車は表情1つ変えていないが冷や汗をかいていた。・・・現代の銃弾において不発弾が発生する可能性は低い。しかもレキは不発弾対策のために銃弾を自ら作成すらしていた。そのため不発弾の可能性は1億分の1、いや1兆分の1と言ってもいいだろう。それが今、起きたのだ。レキ・・・お前はさっき、自分を不発弾だと言ったが・・・不発弾にも意味はあるんだ。その理由を考えろ。

「・・・・キンチ！」

狙姐は一瞬で状況の変化を理解していた。レキは自分を殺せなかった。しかし弾は不発弾しかもうない。となると次に危険となるの

は・・・格闘戦もできる俺達だ。奴は迷っている。俺をここで殺して逃走するか、殺さず逃走して、体勢を立て直してから再び襲いに来るか。その間に俺は、レキが呆然と握っていたドラグノフから弾倉を掠め取り、目の前で弾倉から最後の銃弾を取り出して握り締めた。

「レキ。2度と自分を撃つな。これは命令だ。お前、俺の命令は聞くって言ってただろ？」

「・・・・・」

レキは俺の鋭い視線を見返すと・・・コクリと頷いた。それを確かめた俺はレキに銃弾を晒し・・・・

「さぁ、生まれ変わるぞ」

銃弾を弾倉に戻して、ドラグノフに挿し直した。

「レキ。撃つべき相手は、あの敵だ。もう一度俺を信じろ」

俺は振り返りつつ、レキを守るような位置に立ちはだかった。向こうは銃を構えている。唖然と銃を抱えているレキよりも早く撃てるだろうな。・・・・俺は懐に右手を入れる。

「キンチ！」
ダァン！

銃声と共に狙姐はＭ７００から銃弾を放つ。俺はそれよりも先に・・・・オレンジ色のカンドロイドを取り出した。

『ＫＵＪＡＫＵ～～』
ザッシュッ

クジャクのような形に変形したカンドロイド、クジャクカンドロイド、はプロペラのようになっている翼を回転させて銃弾を弾く・・・・どころか細切れにした。新幹線に乗る前に興味本位で買った新発売のカンドロイドを咄嗟の思いつきで使ってみたが何とかなったな。つーか、このクジャクカンの翼、たぶん下手に名刀を名乗る刀とかよりも切れ味があるぞ。取り扱いには気をつけないとな。

「ここは暗闇の中・・・一筋の光がある・・・光の外には何も見えず、何もない」

レキの声に振り返ってみれば・・・・レキは目を閉じて再びドラグノフを構えていた。それは今までのレキからは考えられない、非合理的な行動だった。さっきの不発弾が撃てると信じているのだ。さっきの・・・俺の言葉で。・・・・狙撃の詩を変えたレキは再びその目を開くと・・・・

「私は・・・光の中を駆ける者」
ダァン！

引き金を引いた。
「っ！」

今度は発砲されたドラグノフの弾丸は・・・・銃弾を再装填していた狙姐の頭部を掠めて命中しなかった。

「きひっ！」

冷や汗をかいた狙姐は笑ってＭ７００を持ち上げる。アリアと後藤、そして矢車は、百発百中のレキがここで痛恨のミス・・・と思ったような表情をしているが・・・俺とアンクはあの狙撃術を見た事があるので動じない。

「・・・・！」

ダァン！

レキと同レベルの実力を持つハズの狙姐は・・・・銃弾を明後日の方向へ発砲した。

「・・・・？、？・・・」

どさっ

そしてよたとたと足元をふらつかせた狙姐は、自分に何が起きたのか分からないと言う表情でその場にこてんと倒れた。あれは６月頃にコーカサスハクギンオオカミ・・・今のハイマキが武偵高に侵入した際にレキが使った狙撃技。通常弾で相手の身体の一部、神経系を圧迫するように掠めて、相手の身体を麻痺させる精密射撃だ。あの技・・・人間にも使えたんだな。

「くぅぅ・・・」

脳震盪を起こした足取りの狙姐はＭ７００を杖にして立ち上がったので、矢車と後藤が逮捕しようと動き出すと・・・・

「えいっ！」

近くに隠れていた理子が飛び出してきて、狙姐の背中にへばりついた。

「ツァオ・ツァオー！あれもツァオ。これもツァオ。３人もいたんだねぇ。くふっ」

おんぶお化けみたいに狙姐の背中にへばりついた理子は両手両足で手足を封じながら、文字通りヘビのように動くツーサイドアップのテールで首を絞める。

「自分の技で眠りなツァオ・ツァオ！あたしに教えたのがアダになったな！」

「っ！！」

狙姐はそれでも理子の顔面に手を伸ばして、理子に反撃しようとしたが・・・唖然としていた猛妹と炮娘の隙をついて逃れたアリアが狙姐へと駆け出した。

「ココ！往生際が悪いわよ！」

「ちょ、アリア！？タンマタンマ！？」

ドカッ！

アリアは慌てる理子をガン無視で全力走行からのドロップキックを叩き込んだ。・・・それも理子ごと。

「～～っ・・・」

真後ろに吹っ飛んだ狙姐は・・・とうとう理子ごとノビた。そして俺はアンクから渡されたウナギカンで３人目のココを縛るアリアに苦笑しつつ、これにて一件落着と背を向けた。一方、レキは力尽

きたのか、正座をするように崩れこんでいた。俺がその傍らに跪くと・・・その目から一雫の涙がこぼれ落ちた。

「もう・・・聞こえないのです」

その肩は小さく震えている。

「・・・何がだ?」

「風の声が・・・もう聞こえない。風はもう何も言わないのです」

レキは・・・今まで自分の意思で行動することがなかった。ただ『風』に命じられるまま、それこそロボットのように生きてきた。だがその命令がなくなった。それは恐らく、誰かに植え付けられた妄想が解けたということなんだろうな。探偵科で習ったが、そういったマインドコントロールってのは解けることがあるらしい。レキは絶対に裏切らないと信頼していたドラグノフに裏切られたショックで解けたんだろうな。

「風はもう何も言わない・・・か。それは『自分で考えろ』ってことじゃないのか?」

「私には分かりません。これからどうすればいいのか・・・1人で・・・」

「いいさ、風は気ままに吹くもんだろ?それに少なくとも1人じゃない。俺が一緒だ。何たってお前が学校にチーム登録を提出したからな。この間、勝手に」

そう言って微笑みつつ俺は立ち上がると・・・ホームに吹き込ん

できた風にレキはすっと顔を上げた。

「ａｎｕ　ｕｒｕｓ　ｗｅｎｕｉａ永遠」

レキが・・・歌い始めた。その詩はどこの国の言葉か分からない。しかし所々に日本語が混じってる。とても不思議な歌詞だ。その旋律が続くと共にホームに吹き込む風も強くなってくる。あぁ、これはたぶん・・・風とレキの別れの歌なんだろうな。

ビュゥウゥウッ

突如突風のように強まった風が無数の花びらを運んでくると・・・その色とりどりの花びらの中、レキはホームを歩いていった。そしてさらに強い風が吹いたので俺達は目を閉じた時、最後に見たレキの顔は・・・ほんの少しだが微笑んでいたように見えた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

突風で目を閉じている間にレキがどこかに行ってしまい、俺がようやく自分の意思で歩き始めたんだな、と思っている頃、鴻上ファウンデーションの会長室では鴻上のおっさんがケーキを作っていた。

「会長、今日は社員で誕生日の人はいませんよ？」

里中さんは社員リストをチェックしながらおっさんに伝えると・・・おっさんはクリームを塗ったケーキの上にゆっくりと苺を置く。

「里中くん。人が新たな道を歩み出すことも、第2の誕生日だと思わないかね?」

「まぁ、確かに思いますけど・・・・」

ケーキの横に置いてあるモニターにはレキが何処かを歩いている映像が映っている。

「ハッピィ!バースディ!レキ君。今日が君の第2の人生の始まりだ!!」

そのケーキの上には後藤が使用していた磁力断裂弾と同様の弾丸が蝋燭のように飾られていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

レキが失踪した後、迎えの武偵車に俺達は2人ぐらいづつ乗せられて武偵高へと向かわせられていた。

「キーくんお疲れ!」

「あぁ、今回の戦いもハードだったな」

たった1日で3回もコンボを使っちまったんだ。当然脱力感も激しいぞ。それにしてもタフになったなぁ、俺の身体。4月頃はコンボを1回使うだけで3日とか寝込んでいたのに。最近じゃコンボを使っても寝込まなくなってきたな。しかし疲れのあまり少しウトウトしてきた俺の隣で理子は・・・・

「キンジ。お前インチキしたな」

いきなり裏理子の口調で喋り出した。

「何の話だ？」

「これだ。あたしの目は誤魔化せないぞ。ここ、ナイフの傷跡がある」

そう言って理子がスカートのポケットから取り出したのは・・・狙撃銃の弾の薬莢だった。それはあの時レキが撃とうとして失敗した後、ココに撃った空薬莢だ。

「・・・目ざといな理子。さすがだ」

一般的な銃弾には雷管という点火装置がついている。そしてその雷管がなければ発射されることはない。つまり不発に終わるんだ。・・・俺はジャンヌから『最後の銃弾』の話を聞かされた後、寝ているレキの傍らで簡易整備をしてやった際に弾倉から抜き出した銃弾の最後から雷管を外しておいたんだ。案の定レキは最後の銃弾を使おうとし、不発に終わった。俺はその後、弾倉から銃弾を抜き取ってポケットにしまっていた雷管を握るフリをしながら付け直した。

「キンジは・・・あの流れを予想していたのか？」

「まぁ、半分はな。ていうか、もうそんなことはどうでもいいじゃんか。みんな助かった。・・・・それでいいだろ？」

理子が感心するような表情でこちらを見たので、俺は車の外の景色を眺める。するとそこにはもうすぐ公開予定の３Ｄ映画の『オズの魔法使い』の大きな看板が見えた。たしかあの話は心を持たないブリキの木こりも、最後には人間の心を手に入れる話だったな。童話のようにすぐに・・・というのはないと思う。だからレキは一歩一歩でいいから新しい自分に近づいていけばいいと思う。

「キーくん何笑っているの？理子の隣でそんなに嬉しい？」

普段のふざけた様子に戻った理子が擦り寄ってきたのを押し返しながらも、俺は自分が苦笑していることに気付いていた。レキに狙っていたリマ症候群。その逆にはストックホルム症候群というものがある。それは拘禁された人間が、犯人に共感して・・・すっかり味方になってしまう現象だ。これはたぶん、それだな。ハメるつもりがすっかりハメられたってわけだ。あっちも意識してはいないと思うが・・・あの無口、無表情で、何処か寂しげな少女・・・レキにな。

不発弾（後書き）

これでようやく原作7巻の内容の事件は終了しました。次回はいよいよチーム結成の話です。

チーム・バスカービル（前書き）

今日のフォーゼ・・・本当にパワーダイザーと大文字さんがカッコよかったと思いました。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

チーム・バスカービル

夜、武偵高に帰ると重傷者がいないことを確認した教務科はすぐさま俺達を学科ごとに分けて調書を取りやがった。ひどいな。少しは休ませてくれよ。・・・・俺、３回もコンボを使って凄く眠いのに。一応、カツ丼は食わせてもらったけど・・・あれって有料だしな。しかも良いところの出前だから１８００円もしたし・・・・せめて奢ってくれよ。

「それにしても・・・ちょっと以外だったな」

新幹線をぶった切ったり、その上で散々暴れたりもしたので怒られるかと思っていたが、その辺は犯人逮捕の功績や怪人との戦闘もあったので差し引きされてお咎め無しだった。それどころか、事件解決に導いた功績者達・・・ということになるらしい。公的にはな。ココ達が新幹線に乗っ取ったのは、日本政府を脅迫して現金をせしめようとしたせい・・・という事に『大人の事情』でするらしい。外務省の官僚が口止め料として大金を出してきたが・・・とりあえずカツ丼の代金分だけを貰って、それ以上は断った。男子寮の自室に久々に帰ると・・・

「遅かったな」

そこにはアンク１人しかいなかった。歩道ですれ違った鉄人・・・もといサバキ先生によるとアリアは虎ノ門に向かったらしい。おそらくは弁護士の事務所だろうな。あの事件の後なのにタフな奴だ。

「お前がいない間に電話がなっていたぞ」

「・・・・・」

アンクの指差す方向を見ると、滅多に使わない固定電話のランプが点滅して留守電をしらせていた。アンクの肩が震えているので誰からの電話かは予想はついていたが、とりあえず再生してみると・・・

『キンちゃん。ご無事ですか？』

やっぱり白雪だった。あいつ何かあると執拗にメールや電話をしてくる癖があるんだよな。まぁ俺の携帯は壊れちまっているし、俺専用のスタッグフォンは通話用じゃないんでアドレスは教えてないから仕方ないか。

『この電話に気づいたら、お手数ですけど・・・お電話くださいっ。キンちゃんなら大丈夫だと信じてるけど・・・青い怪人との戦闘が途中まで生放送だったんで心配で・・・ぐすっ』

あの戦いも報道されていたのかよ。ジャーナリストって本当に命知らずだよな。そして留守電は1度切れて、また次の留守電が再生される。

『うう・・・えぐっ、ふぇ・・・・キンちゃん・・・うぅ・・うぅ・・・』

「「怖っ！？」」

電話から聞こえる鳴き声だけの録音に俺とアンクは同時に反応してしまう。やめてくれよ、こうゆうの。後半、幽霊ぽかったぞ。俺は恐る恐る次の録音を再生する。

『武偵高から連絡が来ました！犯人も逮捕したし、青い怪人も倒したんだよね！やっぱりキンちゃんは本当に凄いです。ほんとに凄いです。あぁ・・・キンちゃんは凄い御方』

なぜ繰り返す？

『私達もみんな無事です。東海道線で帰るね。キンちゃんの方につくのは遅くなっちゃいそうだけど、帰ったらアンクを始末するついでにご馳走を作るね。新鮮なカニも買ったんだよ！』

「・・・さらっと俺の処刑宣告が聞こえたんだが・・・」

「気にしない方がいいと思うぞ」

それにしてもカニかぁ・・・あんまりいい思い出がないな。数ヶ月前の須藤のこともあるし・・・うっ！？・・・まだ録音がありやがる。

『キンちゃん、あのね、あのね、新幹線に乗っていた妊婦さん、静岡の病院でちゃんと赤ちゃんを出産できたんだって！よかったぁ～！写真をメールで貰ったんだけどとってもかわいい女の子だったよ！と、ところでキンちゃんって赤ちゃんって好きですか？私はね、とっても大好きだよ。可愛くて、見てるだけで幸せになれて・・・だ、だから私もいつかキンちゃ・・・』

ピッ

俺は背筋に良くないものを感じたので、そこで停止ボタンを押して残りの録音も削除した。そしてその後、一応心配してくれたので白雪に大丈夫だったことを連絡してようやくベッドに横になった。・

・・・ココ3姉妹は草加の尋問の後に、追加で綴にとんでもない尋問をされて、鉄人に真っ白に燃え尽きるまで組み手をやらされるんだろうな。お前らが悪いけどちょっとだけ同情するぜ。・・・・さて、今度こそご先祖様の口癖を呟いてもいいよな?

「これにて・・・一件落着だな」

だけどこの言葉・・・今更思うが安心しきれない響きがあるんだよな。・・・一件落着ってことは他にも2件、3件もあるんじゃないか?・・・などと警戒しても何も起こらないので、俺は修学旅行?の後にきた連休を休養にあてることができた。・・・その連休中、別の場所で正太郎達に事件が起きていたことを知ることになったのはもう少し先だ。

翌日の昼過ぎに目が覚めた休暇は色々と酷かった。白雪の作った蟹チャーハンに理子が湧いて出たり、理子が俺にベタベタしてくるせいでアンクが白雪に散々ボコられたり、銃撃戦でアンクが理子の楯にされたり・・・・。俺は無傷だったが、俺の部屋とアンクが無残な光景になったりもした。後藤から宅配便で１０ホールもケーキが届いたことにもびっくりさせられたが・・・そんな感じにいつも通りのドタバタを繰り返している内に9月下旬がやってきた。

先送りしていた『チーム編成』の登録を嫌でもしなければいけない時期がな。通常、チーム編成は代表が『申請』を行って、修学旅

行直後に教務科から来る確認の電話に応答して『承認』を受け、最後に『登録』の写真撮影をするのが流れだ。しかし教務科の電話にレキは応答せず、レキと俺のチームは否認されていた。つまり俺はどこのチームにもなっていないってことだ。

・・・実は修学旅行？の後に『やっぱり組まない』という結論をするチームは良くある。いっつも行動が一緒に思える橘さんと名護さんも実際はチームじゃないのも、お互いがリーダーになろうとする意地のせいで、そんな結論に至ったからしい。とりあえず救済措置の『直前申請』をすれば何とかなるんだが・・・その締め切りも明日に迫っている。さすがにあせりを感じた俺がアリアにその辺のことを一応電話しておくと・・・・

『チーム編成のことはちょっと待ちなさい』

待機の指示をくらった。直前まで秘密にしたいらしい。矢車や後藤にも連絡をしてみたが・・・みんな留守で出てくれない。アンクに聞こうと思っても、いつも白雪にボコられて意識がほとんど回復しないので聞くことができなかった。そんな訳で俺は締め切り日になっても無所属のままでいる。

「俺余ってるだろ・・・」

直前申請すらもしなかった生徒は教務科が決めたチームに組まされることになるんだが・・・最悪それでもいいか。どうせ武偵は辞めるつもりなんだし。・・・と、半ば腹をくくってリビングで仮面戦士科の教科書を読んでいると・・・・

「キンちゃんごめんね。ギリギリまで何も言えなくて・・・」

昼飯前に黒服を着た白雪が風呂敷包みを持ってやってきた。

「キー、キー、キーくんこい！こっちの水はあ～まいぞ！」

などとよく分からない歌を歌いながらやってきた理子も黒服だ。

「・・・相棒・・・準備だ」

「遠山も黒服に着替えろ」

理子とやってきた矢車と後藤も黒服を着ている。

「あのね、言いづらかったんだけど・・・私、自分の先行きを占ったらキンちゃんと部隊を組めるって出てたから・・・誰ともチーム申請をしていなかったの。そしたら修学旅行？の後でアリアからみんなでチームを組む話をもらってね」

白雪の話を聞きながら渡された風呂敷包みを開くと・・・その中には俺とアンクの分の黒服、防弾制服・黒が入っていた。

「理子りんとアリアも2人でチーム申請をしてたんだけど『確認』の時に解散させたんだよ。アリアが改めて構成した、理想のチームをキーくん達と組むためにね」

そう言った理子はチーム申請の用紙を俺に見せてくる。そこには・・・

チーム名『バスカービル』

◎　遠山キンジ　（仮面戦士科・探偵科）

○　神埼・H・アリア　（強襲科）

泉・A・信吾　（強襲科）

星伽白雪　（超能力捜査研究科）

峰理子　（探偵科）
レキ　（狙撃科）
矢車双　（仮面戦士科）
後藤信太郎　（強襲科・仮面戦士科）

と、８人の名前が書いてあった。これがアリアの構成したチームか。俺にリーダーマークの二重丸がついて、アリアに副リーダーのマークがついているのはさておき、レキは東京駅の時から失踪したままだぞ。

「レキさんとは連絡がつかなかったら、名前をキャンセルする事になるけど・・・でも、キンちゃんはレキさんと組んで武偵活動をしたかったんでしょ？」

今更、レキに狙撃拘禁をされていたことを伝えるのもなんだな。肯定も否定もせずに話を聞こう。

「だからアリアはレキさんをチームに加えることに拘っていたの。『キンジも入れるんなら、レキも入れる。そうじゃないとキンジの意思に背いたチームになるから』って」

アリアの奴、そういう所だけは繊細に考えやがって。

「それでアリア、『キンジに期待させて当てが外れたら悪いから、チームのことはレキが入れる話がつくまで黙ってなさい』って言ってきてさ～。まぁ、アリアがキーくんに気を使うのはいい事だからね、みんな黙っていたんだよ」

「・・・まぁ、俺と矢車は連絡がつかない状態だったんだがな」

「・・・後で明智達に聞いてみろ。・・・そっちのほうがあいつ等にとって良さそうだ」

連絡がつかなかった？・・・こいつ等が言う気は無さそうだし登録が終わったら連絡してみるか。

「結局レキさんとは電話が繋がらなかったみたい。アリアは一応、直前申請の集合場所と時刻をメールしたって言ってたけど・・・お返事がなかったんだって」

しょんぼりとして言う白雪に俺は内心「それはそうだろう」と思っていた。だってレキの携帯は旅館で破壊されたんだからな。

「アリアはもう撮影会場にいるってさ。朝一からレキュを待ってたみたいだけど、締め切りは今日の正午だからあと３０分なんだよねぇ～。もう行くしかないよ～」

マジかよ！？・・・俺とアンクは慌てて黒服に着替えると撮影会場へと急いだ。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

今年の撮影会場は探偵科の屋上だった。周りを見渡せば俺達の他にも直前申請をしにきた３０人以上はいるっぽいな。タクミ達の面子もいるし、信司や煉のチームもいるな。

「お互いの命を預かり合うんだ。そう易々と決めるもんじゃないだろ。むしろ遅れて当然だ」

「・・・・そうだな」

アンクの言葉に軽く返事をした俺は近くでアリアが周囲を見渡していたことに気付いた。

「アリア！」

俺はアリアのところに向かうと・・・アリアは何処か後ろめたいような顔をしていた。

「・・・キンジ、あんたが来てくれたってことは・・・いいの？あたし達と・・・その、チームを組む事」

「良いも何も、お前が勝手に申請したんだろ？しかも俺なんかをリーダーで」

「あ、あたしは・・・レキとあたしの事であんたがどこのチームにも入れなくなる事は避けたかったのよ。別にレキから取り返し、返したとかじゃ・・・ないから」

強引に話を進めたのを恥じているのか、アリアは口ごもる。俺は黙って周囲を見渡すがレキはいないな。まぁ、アリアのことだからギリギリまで待つんだろ。俺もそのつもりだしな。

「そういえばチーム名。・・・あの乗り物みたいな名前・・・どういう意味の言葉なんだ？」

「ああ、あれはあたしの持っている土地の名前よ。デヴォン州のダートムアにあるわ。もっとも、ホームズ家の戦勝地を継承しただけだけどね。あたしが努力して手に入れた土地じゃないわ」

その台詞で思い出したが・・・たしかバスカービルというのは探偵科の教科書にも載ってたな。初代シャーロックホームズが解決した事件の中にそういう名前があった。後年、その事件があった土地をホームズ家が買収してバスカービルと名づけたとか。最近は忘れかけていたが・・・そういえばこいつも貴族様だったな。・・・そんなことを考えながら首を横に振る動作をした時、俺の視界には白い尻尾のような何かが見えた。

「っ！」

「キンジ！？」

俺は駆け出す。後ろで聞こえたアリアの声を無視して・・・。そして角を曲がるようにして空調設備の横に出ると、そこにはやはり銀狼・・・ハイマキがいた。そして・・・男子っぽい黒服を着たその飼い主も。

「レキ・・・」

「・・・・・」

視界を上げたままのレキは・・・もう額に包帯を巻いていなかった。他の傷具合も気になるが、普通に立っている限りは大丈夫そうだな。

「レキさん！よかった、間に合ったんだね！みんなすっごく探してたんだよ？どこに行って何をしていたの？もう・・・・」

理子と共にやってきた白雪が年下を問い質すようなムードでレキに尋ねる。

「ハイマキと合流しに京都へ行ってました」

「えっ？」

白雪の驚いた顔を見る限り、どうやら星伽神社にレキは顔を出した訳じゃなかったんだな。・・・まぁ、ヘリを奪ったこともあるし、仕方ないか。

「まぁいいか。それよりも・・・俺達がここにいるってよく分かったな」

「さっき携帯を買い直した時、すぐにアリアさんからメールがありましたから」

レキが1人でドコモショップに行くのはシュールだと思うが・・・何にせよ『風』じゃなく自分の意思でここに来たんだ。歓迎するぞ、レキ。・・・俺がそんなことを考えている後ろでアリアは黙っていた。なにモジモジしてるんだよ。まぁ、大喧嘩した後にチームを組むんだから気持ちは分かるけどさ。

「レキ。お前、このチームでいいんだな？アリアが勝手に作っちまったチームだけど・・・」

俺がアリアの代わりに聞いてやると・・・レキは無言で頷いた。

「じゃあほら、アリアも言いたいことがあるなら言えよ」

新幹線でのターンを思い出しながらアリアの背中を押してやると・・・アリアは一度俺のことを睨みつけてからレキに歩み寄って抱き締めた。

「レキ・・・心配したのよ！急にいなくなっちゃったから・・・・」

涙ぐむアリアと無表情のレキを・・・理子はニヤニヤしながら、白雪は2人の妹を前にしたお姉さんのように見つめている。後藤と矢車も少し離れたところからほっとしたような表情をしているが・・・・俺の隣に立っているアンクはどこか懐かしいような表情をしていた。

「アリアさん・・・新幹線でのあの時・・・・手を繋いで下さって、ありがとうございました」

目の前にいるアリアを覗き込むように見ながら、レキは初めて感謝の言葉を告げた。「ありがとう」・・・俺が知る限り、レキがその言葉を誰かに言ったことはない。

「レキ、あたしもありがとう。あの時のこと。そして・・・来てくれてありがとう。もう絶交は取り消しよ。また・・・復交？再交？・・・また交わりましょ！」

その変な言葉に俺が苦笑した時・・・・

「ほらほらお前ら！俺が離任する前の最後の仕事なんだからとっとと来いよ！後、１５秒だぞ！」

人ごみの向こうでカメラを握っている伊達さんが俺達を呼んだ。
伊達さんは今日、この仕事を持って臨時講師としての仕事を終える。
手術に専念するために外国に行ってしまうらしい。ついでに１億稼ぐと言っていたのもその治療費だ。

「チーム・バスカービル！神崎・Ｈ・アリアが直前申請します！」

所定位置の中央に立ったアリアが片手に腰をあてつつ伊達さんの方を向いてそう叫ぶ。アリアの右後ろに立ったレキはドラグノフを鮮明に撮らせないためか、肩掛けのバンドを少し引いて背中で隠した。アリアの左後ろでは腕組みをした理子が横を向き、目だけをカメラに向ける。白雪も指定位置の左側に立つと・・・俺達男衆は枠内の右端に立った。俺は両手をポケットにしまって右端の一番前に、矢車は・・・ブレイク限界みたいなポーズで自分の顔を指で少し隠しながら、後藤は特にポーズを決めていないせいでクジャクカンに顔を写るのを妨害されながら、そしてアンクは髪の色をその瞬間だけ金色から黒に変えた。

「９月２３日１１時５９分！チーム・バスカービル！承認・登録・・・へっくしゅ！？」

伊達さんはシャッターを押す瞬間にくしゃみをしてしまい、俺達の写真はめちゃくちゃ斜めに写った。まぁ・・・俺達らしいっていえば俺達らしいんだがな。

チーム・バスカービル（後書き）

次回はこの続き・・・ではなくて少し時間を戻して連休中の正太郎達の話です。

Eの勧誘／今、輝きをこの手に（前書き）

今回は久しぶりに正太郎達の登場です。・・・・そしてキンジ達がまったく登場しません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

仮面ライダーW！今回の依頼は・・・

Eの勧誘／今、輝きをこの手に

修学旅行？が終わってすぐにきた連休最初の日、俺達が相変わらずのドタバタをしている頃、正太郎は・・・・

「「ハァッ！！」」

陽と共にWに変身して俺の知らないタイプのカメレオンの怪人と戦っていた。

「正太郎、そろそろ決めよう」

「ああ、マキシマムだな」

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

ベルトからジョーカーメモリを外したWは腰のマキシマムスロットにメモリをセットして浮かび上がると・・・そのまま右半身と左半身に分かれてキックをする。

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

「ぐおおぉぉぉぉぉ！？」

ドオォォォォン！！

Wに倒された怪人の爆発からは黒いスイッチのような物が出てきた。

「正太郎。これが横浜武偵高の仮面ライダー部から報告のあった‘スイッチ’と呼ばれる物だ」

「そんで？これはどうすりゃいいんだ？」

「こうするのさ」

カチッ

W（正太郎）はそのキャッチしたスイッチをどうすればいいのか
W（陽）に聞いてみると、何の前触れなくスイッチを押した。

「えっ！？ちょ！？いいのかよ！？」

「いいんだよ。・・・ほら」

右手に乗っていたスイッチは小さなブラックホールのようなもの
に包まれて消え去ってしまった。

「これで先ほど倒れた青年も意識を取り戻すはずだ」

「さっきのスイッチって代物・・・ガイアメモリに似てなくもな
いよな」

変身を解除した正太郎は起き上がった陽のところに向かいながら
スイッチがガイアメモリにどこか似ているようなことを言う。

「仕方ないよ。ドーパントも‘ゾディアーツ’も・・・どちらも
人間を変質させるからね」

「正太郎く～～ん！ライトちゃ～～ん～！」

怪人のことを話し合っている2人のところに亜希子が走ってきた。
その後ろには照井とジャンヌの姿もある。

「今回の依頼もこれで完了だね！」

「まったく・・・最近は怪人がやたら頻繁に出やがるせいで大変だぜ」

「それじゃあ近くの喫茶店で休憩してから帰ろうよ！あそこのケーキ！おいしそうじゃん！」

亜希子は表路地へと走り出すと、喫茶店の前の看板に貼られていたケーキの写真を指差す。

「さすが部長。食い意地を張っているな」

「隆く～ん。ケーキ食べようよ～～」

照井の右腕を掴んだ亜希子は、喫茶店に照井を引っ張り始める。

「・・・どうする明智、ライト？」

「ん～？・・・まぁ、丁度小腹が減ったしちょっと食べていくか。いいよな陽、それにジャンヌも・・・」

「僕もいいと思うよ」

「私も構わない」

そう言って正太郎達は喫茶店の中へと入って、店内の奥の方に座ってそれぞれメニューを見始めた。

「さぁて・・・俺は何を注文・・・っ!?」

正太郎がメニューを広げた途端、その後ろから常人が放つとはとは思えないほどの殺気を感じた。

「お前は!?」

ジャンヌはその人物の姿を見て顔色を変える。

「しばらく見ない間に随分武偵高の雰囲気に馴染んでるようだな・・・ジャンヌ」

正太郎達もその人物が何者かに気づき表情を厳しくする。

「何をしに来た!?」

「元気そうで何よりだが、今日はお前に用があるわけじゃない・・・お前が仮面ライダーWの左側・・・明智正太郎で間違いないな?以前一度会っているが改めて名乗らせてもらおう。俺は大道・M・カツミ。NEVERのリーダーだ。・・・・」

「・・・ああ、間違いないぜ。・・・俺達に何の用だ?」

NEVERのリーダーであるカツミと正太郎はイスに座り、お互いに背を向けながらも会話を続ける。

「単刀直入に言おう。・・・明智正太郎、そして小林陽。俺達NEVERの一員になれ」

「断ればどうなる?」

「・・・店内の人々の命は無いと思え」
ガシャァァァァン！！

カツミが右手を少し上に上げた途端、窓ガラスを破って十数体のドーパントが店内へと押し寄せてきた。
「・・・大道の奴め、何をする気だ？・・・明智どうする？」

「亜希子とジャンヌは店内の人々を安全な場所へ頼む！陽！！」
『ＪＯＫＥＲ』

「ああ、分かってる！ここはファングジョーカーでいこう！」
『ＦＡＮＧ』

「「変身！」」
『ＦＡＮＧ　ＪＯＫＥＲ』

Ｗ・ファングジョーカーへと変身した正太郎と陽は近くにいたマスカレイドドーパントを押し出しながら店外へと出る。

「変・・・身ッ！！」
『ＡＣＣＥＬ』

照井もアクセルへと変身すると店外へと出て行った。

「やはり先ほどのよく当たる占い師の言うとおり・・・勧誘に失敗か。・・・変身ッ」
『ＥＴＥＲＮＡＬ』

白いボディの黒いマントの仮面戦士・・・仮面ライダーエターナルに変身したカツミはＷを追って外へと出て行く。

「明智！ライト！こいつ等は俺に任せて、お前たちは白い仮面戦士を倒せ！・・・さぁ、振り切るぜ！！」

アクセルはWにそう叫ぶと、何処からか取り出した赤い大剣でドーパント達を斬りつける。

「ああ！そっちは任せたぜ照井！」

「ガァァウ！！」

「・・・フンッ！」

バチィン！

Wは爪を突きたてながらエターナルへと攻撃しようとすると・・・電撃の鞭のようなものがその攻撃を妨害した。

「ぐぁっ！？」

「いくらリーダーでも独断で動き回っては困ります。・・・とあれほど言ったのをもうお忘れですか大道君」

その声の先には、まるで日本の羽織を着た白い侍のような怪人が立っていた。

「・・・ドクター井坂か。・・・紹介しよう。彼は井坂真紅朗（いさかしんくろう）。そしてあの姿は天候の記憶を宿したウェザードーパントだ」

「天候のメモリか・・・正太郎。ファングジョーカーでは分が悪い。それに先ほどの一撃がかなりファングにダメージを与えている」

陽が変身を解除するとライブモードになったファングメモリはぐったりとしてしまう。それをゆっくりと地面に下ろした陽はサイクロンメモリを取り出す。

「・・・今度は正太郎の方で変身だ」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

「分かった！」

『ＪＯＫＥＲ』

「「変身！！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

意識が身体のほうに戻って店内から出てきた正太郎は、今度は陽の意識が転送されてＷ・サイクロンジョーカーに変身する。

「「ハァッ！」」

ドカッ！

ウェザードーパントに蹴りこんだＷはすぐさまメモリを変える。

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

「オラァッ！」

「ぐおっ！？」

そしてヒートメタルへと変わったＷはそのままメタルシャフトでウェザードーパントを地面に叩きつけると再びエターナルへと駆け

出す。

「・・・・・」

『ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

ビュンッ

「「ぐぁぁぁぁ！？」」

腰のマキシマムスロットに照井の変身するアクセルと同様のアクセルメモリをセットしたエターナルは高速でＷを攻撃した。

「う・・・がはっ！？・・・」

「正太郎！この場は一端引こう！！」

『ＵＮＡＧＩ～』

『ＫＵＪＡＫＵ～』

「あ、ああ・・・」

『ＵＮＡＧＩ～』

変身を解除されてしまった正太郎と陽はエターナルとウェザーパントにカンドロイドを数機放って目くらましをしている間にその場を離れる。

「逃げたか。・・・まあいい。俺の計画の邪魔をすると言うのなら・・・抹殺するだけだ」

『ＫＥＹ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

エターナルは自分に纏わりつくカンドロイドを叩き落とすと、鍵の記憶を宿すキーメモリを腰のマキシマムスロットにセットして複

眼を水色に光らせながら辺りを見渡す。

「大道君。たしかにキーメモリは探索機能のあるメモリですが・・・・生身の彼ら程度にそれを使わなくてもいいと思いますよ?唯でさえマキシマムはかなりの体力を消耗してしまうのですから・・・・」

「・・・ドクター井坂。人間には限りない可能性がある。俺はそれに敬意を払うのを信条にしているんだ。だからこそ彼らの探索にも全力で探すのは礼儀だと思わないか?」

「たしかにあなたはそんな人間でしたね。軽薄なことを言ってしまい申し訳ない」

ウェザードーパントは身体からメモリを取り出して、黒い紳士服を着た４０歳後半の男性に戻ると、帽子を右手で持ちエターナルに頭を下げた。

「気にするな。たしかにここで体力を消耗してしまうのは得策ではないからな。・・・・これから俺達が行うミッションのためにも・・・・」

そのミッションというのを俺達が知ることになるのは・・・もうしばらく先の話だ。

「ところで・・・あそこで戦っている赤い仮面戦士は倒さなくてもいいのですか?」

「・・・・今回の目的はあいつではない。・・・・あそこで戦う連中には撤退させろ。無駄な戦闘は可能な限り避けろ」

「了解しました」

井坂が手に持っていたステッキを地面にカツンと当てると・・・・アクセルを取り囲んでいたドーパント達は一斉に撤退し始めた。

「・・・・さて、俺達はWの二人を追うぞ」

「・・・・はい」

変身を解除したカツミと井坂は先ほどキーメモリで探知した場所へと歩き始めた。

・・・・

「・・・・1つだけあるよ」

そう呟いた陽は自身のスタッグフォンを開いて鳥のような形をしたガイアメモリの設計図を見せる。

「正太郎の身体で変身しているWのハーフチェンジは正太郎が５０%、僕も５０%の共鳴率なんだ。つまり2人で１００%の戦闘力を引き出していることになる」

「ちゃんと１００%の力を引き出しているってことじゃないかよ」

「いや、当初の設計では2人で２００%の性能を発揮できるはずだったんだ」

「なっ!?」

陽のその一言に正太郎は一瞬固まってしまう。

「そして僕の身体をベースにするファングジョーカーは特殊能力無しの戦闘力特化型だから共鳴しやすくなっていて正太郎が７０%で、僕が８０%・・・・つまり2人で１５０%のWなんだ」

「ってことはWはまだ強くなれるって事なのか?」

「そういう事だよ。そして僕達の共鳴率を２００%まで引き出すことの可能なメモリが・・・・エクストリームメモリというわけさ」

「エクストリームは地球の記憶をメモリに宿すことのできる‘ガイアサーバー’と直接リンクして、そのデータから相手の行動を先読みしたりもできる高性能メモリなはずなんだけど・・・・」

エクストリームメモリの説明中、陽の表情が少し曇り始めた。

「どうしたんだよ?そんなメモリがあるんならきっとあいつにも勝てるんじゃないのか?」

「いや・・・それが・・・・エクストリームメモリにもファングメモリのように自立移動機能が備わっていて・・・・母さんの会社から逃げちゃったんだ」

正太郎は「嘘だろ?」と呟きながら後ろの木に寄りかかってしゃがみ込む。

「おや?逃げるのは止めたのですか?」

「それじゃあ・・・・地獄を楽しみな」

『ＧＥＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

グサッ

そのにやってきたエターナルは遺伝子の記憶を宿したジーンメモリをメモリスロットのついているコンバットナイフにセットすると、近くの樹木にそれを刺した。するとその樹木の形が棘だらけの壁に変貌してしまい、正太郎と陽はその壁に４方を囲まれて逃げ場を失ってしまった。

「どうする陽?・・・エターナルとウェザーの２体だぞ?」

「ファングはさっきの戦闘でダメージが大きくて使えない。かといって通常のＷでは長期戦が不利になる。・・・覚悟はいいかい?」

陽がサイクロンメモリを取り出すと・・・正太郎もジョーカーメモリを取り出して腰にベルトをつける。

「戦う覚悟ならとっくにあるぜ。さぁ・・・いくぜ相棒」

「・・・うん」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

『ＪＯＫＥＲ』

「「変身！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

Ｗ・サイクロンジョーカーに変身した正太郎と陽は右手を軽くスナップさせてエターナルへと走り出した。

「「ハァッ！」」

Ｗはエターナルに回し蹴りをするもあっさりと止められてしまう。

「仮面ライダーＷ・・・２人で１人の仮面戦士に変身することによりメモリの使用できる可能性を広げ、状況に応じて７つものメモリで１０種類の姿に変わる仮面戦士。・・・もう一度聞こう。俺達に協力する気はないか？」

「断るぜ。仮面ライダーってのは、悪い奴らから人々を守る正義の味方なんだ。そんな力を悪用するような奴に協力してたまるかよ！！」

「正太郎の言うとおりだ！僕達は君には協力しない！」

そう叫んだWは後ろに跳び下がるとベルトを閉じてメモリをチェンジしようとするが・・・・

「残念だ。やはりお前達は殺さなければならないようだな」

『ＵＮＩＣＯＲＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

腰のスロットにユニコーンメモリをセットしたエターナルは右腕に螺旋状のオーラを纏ってWへと殴りかかる。

「陽！ヒートメタルだ！」

「だ、駄目だ！もう間に合わない！？」

メモリチェンジも回避も手遅れと判断したWは両腕を交差して防ごうとしたが・・・・

「あれ？」

その攻撃はWに届いていなかった。そしてそこには・・・・

『ＣＹＵＵＵＵ！！』

Wとエターナルの間には鳥の形をした何かが黄緑色のエネルギー派のようなもので シールドのようなものを展開してエターナルのコークスクリューを止めていた。

「何だこれは？」

エターナルがそのように呟いた途端、なぞの鳥型メカは倒れている陽の身体を粒子化して吸収し始める。

「おい！？陽の身体が吸収されているぞ！？」

「・・・いや、大丈夫だよ正太郎。あの鳥型のメカがさっき言っていたメモリ・・・エクストリームメモリさ」

エクストリームメモリは陽の身体を吸収し終えるとWの手元へとやってくる。

「正太郎・・・これを使う前にもう一度確認させてくれ。・・・悪魔と相乗りする勇気はあるかい？」

「陽・・・俺は災いを呼ぶ悪魔と相乗りなんかしないぜ。俺はパートナーであるお前と相乗りするんだ」

Wが両手でエクストリームメモリを掴んだ瞬間、ベルトが勝手に閉じて、セットされているサイクロンとジョーカーのメモリがそれぞれ発光する。

「さぁ、勝利の女神を引き寄せてやろうぜ」

『『ＸＴＥＲＥＭＥ』』

エクストリームメモリをベルトにセットしたWは勢いよくそれをXの字のように開くと、W中央の銀色のラインが広がり始めた。

「くっ！？」

「・・・それがお前達の可能性か」

ウェザードーパントがWから放たれる光に怯むと・・・エターナルはWにナイフを構える。

「「・・・・・・」」

Wの姿は緑と黒の間にクリスタルが大きく広がったデザインに変化し、頭部もXが印象的なものへと変化し、手足のリングもW型へと形を変えている。

「正太郎・・・これが最大限の性能を発揮できるWの最強形態・・・仮面ライダーW・サイクロンジョーカーエクストリームだ」

「NEVERのリーダー、大道・M・カツミ。それと隣のウェザーのおっさん・・・」

「「さぁ、お前達の罪を数えろ」」

エクストリームメモリの力で本当の意味で2人で1人の仮面ライダーに変身したWは・・・ゆっくりとエターナルとウェザードーパントへと歩き出した。

Eの勧誘／今、輝きをこの手に（後書き）

あくまでこの物語はオーズの物語なのでWは少し急ぎ足な内容になってしまいました。どうしてエクストリームメモリがこの場に現れたのかは次回以降に判明させようと思います。

Rの心／空虚な器（前書き）

今回は前半はWサイドの続きで、中盤からキンジサイドに戻り本来の時間です。

仮面ライダーW、今回の依頼は・・・・

&

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

Rの心／空虚な器

２人で１人の仮面戦士の最強形態、Ｗ・サイクロンジョーカーエクストリームに変身した正太郎と陽はゆっくりとエターナルへと歩き出す。

「・・・ドクター井坂。メモリを俺に渡して下がれ。・・・あの仮面戦士はアンタが太刀打ちできる相手じゃない」

「・・・・了解しました」

ドーパントから人間の姿に戻った井坂はウェザーのメモリをエターナルに渡すと後ろへと下がる。

「・・・・メモリを通して地球の記憶とリンク。及びこの姿での戦闘方法を閲覧した」

「「プリズムビッカー！」」

Ｗ・ＣＪＸは中央のクリスタル部分から光を放ち、両刃剣を収めたメモリスロットが４つある盾を構成する。

『ＰＲＩＳＭ』

チャキッ

何処からともなく取り出したプリズムの記憶を宿すプリズムメモリを剣の柄部分にセットしたＷ・ＣＪＸは盾から剣を抜いて構える。

「「ハァァッ！」」

エターナルのナイフを盾で受け止めたW・CJXは剣でエターナルを斬りつける。

「ぐっ！・・・なかなかやるな。・・・しかし、これはどうだ？」

『UNICORN　MAXIMUM　DRIVE』

ナイフのマキシマムスロットにユニコーンメモリをセットしたエターナルは、螺旋状のオーラを纏ったナイフをW・CJXに突き立てる。するとW・CJXは剣のスイッチを押してマキシマムを発動させた。

『PRISM　MAXIMUM　DRIVE』

「「プリズムブレイク・・・ハァァッ！」」

「フンっ！」

ガギィィン！

W・CJXの剣とエターナルのナイフがぶつかり合い激しい火花が散る。そしてエターナルを退けたW・CJXは剣を盾に収めてメモリを次々とセットしていく。

『CYCLONE　MAXIMUM　DRIVE』

『LUNA　MAXIMUM　DRIVE』

『HEAT　MAXIMUM　DRIVE』

『JOKER　MAIMUM　DRIVE』

合計4本ものメモリを同時に発動させたW・CJXは盾から剣を抜いて、刀身にマキシマムのエネルギーを集束した。

「「ビッカーチャージブレイク！」」

「くっ！？・・・・」

『ＷＥＡＴＨＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「ぐあぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォォン！

Ｗ・ＣＪＸの黄緑色に輝く剣での必殺技〝ビッカーチャージブレイク〟が直撃したエターナルはしばらくベルトが火花を散らした後に爆発した。

「やったのか明智、小林？」

どういう訳か突如駆け寄ってきたバースにＷ・ＣＪＸは首を横に振る。

「いや、さっきの爆発したのは幻覚だ。・・・・たしかに攻撃はあたりはしたが・・・・ダメージは浅い」

「どういうことだ？」

「攻撃をする瞬間に幻覚を発動されてしまったせいで反応が間に遭わなかったんだよ。ほら・・・・」

Ｗ・ＣＪＸが剣を盾に収めると爆発の煙がどんどん晴れてくる。

そしてそこには変身を解除されたカツミどころか、ベルトの欠片すら落ちていなかった。バースは「そうか」と呟くとベルトを外して変身を解除する。

「・・・それにしても・・・さすがに２００％の力を引き出しているだけあって、だいぶ疲れるな」

ベルトをゆっくりと閉じたＷ・ＣＪＸは変身が解除されて正太郎と陽の２人に戻る。

「なっ？２人で変身していたのか！？」

「・・・元からＷは２人で変身していたんだが？」

「いや、後藤が言いたいのは変身を解除したら俺だけじゃなく陽のほうも出てきたからじゃないのか？」

後藤は目を丸くしながら正太郎の言葉に頷く。

「先ほどの姿はＷの最強形態・・・サイクロンジョーカーエクストリームといってだねぇ・・・・」

陽は後藤にエクストリームメモリのことを説明した。それを聞かされた後藤は終始驚いた表情をしていたらしい。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「なるほどな。正太郎達の事情はだいたい分かった」

チーム・バスカービルの登録を終えてから２時間後、クスクシエで正太郎達から連休中のことを聞いた俺はいくつかの疑問が沸いた。

「だけど・・・どうしてエクストリームメモリはいきなりその場にやってきたんだ？」

「・・・それは俺の推測だが・・・・2人のライダーパワーが共鳴率を極限にまで高め、それに反応してエクストリームは飛んできたんだと思う」

イスに座らずに壁に寄りかかる矢車は仮面ライダーに変身する者が宿す内なる力、ライダーパワー、が2人の共鳴率を上げたと解釈した。

「たしかにそれならエクストリームメモリがあの場所にやってきたことにも納得がいくね。ライダーパワーは化学でも超能力でも説明できない未知の力・・・・共鳴率を上げても不思議じゃない」

「ライダーパワーか。・・・俺達にもちゃんと宿っていたんだな」

正太郎は自身も風見さん達のようにライダーパワーを宿していたことに喜びの表情を浮かべた。

「それともう1つ。・・・どうしてその場所に後藤がやってきたんだ？」

「・・・・・・」

俺がそう言って後藤の方を振り向くと・・・・後藤は後ろめたそうな表情になる。

「それが・・・そのな。・・・・俺と矢車は調書を終えた後、ミュ

ージアムの社長から小林を通して『エクストリームメモリを探してくれ』という依頼を受けていたんだ。そして俺がようやく見つけたと思って走り出したら・・・・丁度Wとエターナルが戦闘中だった」

「そして・・・戦闘が終えた後・・・後藤と合流した俺は、またどこかに飛び去ったエクストリームを追いかけていたら・・・・北海道まで向かい、途中で電話の充電も切れてしまったので通信手段がなくなったという訳だ」

「・・・最終的に矢車がクロックアップをしてエクストリームメモリを取り押さえたんだが・・・・チームのことを知ったのが前日だった。まぁ・・・そんなところだ」

矢車と後藤は「もう探したくはない」とでも言いたげな表情をする。それで連絡がつかなかったんだな。・・・・たしかに陽と知り合った時のことを振り返ると陽の母親であるミュージアムの社長から依頼を頼まれることもたまにあったからな。今回もそんな感じに依頼したんだろ。

「何はともあれ・・・・これでチーム・テンペストは登録もされたんだし一段落って感じだな」

『チーム・テンペスト』・・・・それは正太郎、陽、照井、亜希子、ジャンヌ、そして依頼の都合でその戦闘にはいなかった中空知も加えた6人編成のチームだ。全体的には直接戦闘向きではなく戦闘支援型となっているが、前線でもしっかりと戦えるバランスのいいチームだと俺は思っている。

「信司には聞くのを忘れたが・・・匠も木場達と組んで『チーム・パラダイスロスト』って混合型チームを作ったらしいし、明日夢も

昔ヒビキさんの元で修行を一緒にしていた桜井や情報科の持田とかがメンバーがいる戦闘支援型の『牛鬼』ってチームに入ったらしいぜ」

薄々は気づいていたが・・・・仮面戦士は純粋な戦闘特化型のチーム編成ではなく混合型か戦闘支援型のチーム編成をする傾向にある。・・・それはかつて「仮面ライダーは孤独のヒーロー」と言われることはあっても決して自分達だけで乗り越えた訳ではなかったことにも繋がることで・・・・仮面ライダーというのは決して万能ではないんだ。誰かを助けるように、自分達も支えてもらっているからこそ戦えていた。・・・・そして仮面戦士の戦闘は基本的に最前線。後ろには手が回らないことも多い。つまりこのチーム編成も自分達に足りないところを補えるチームになっているんだ。まぁ、簡単にまとめると背中を任せられる仲間達が必要ってことだな。

・・・・

「・・・・・」

レキはその傍らでしゃがみ、ハイマキの背中を撫でてやってる。

「そういえばアリアの奴、戦闘配置まで勝手に申請してやがったぞ。知ってたか？」

俺が話しかけると、レキはしゃがんだまま首を横に振った。

「前衛が俺とアリアと矢車。アリアと矢車が先駆けで、俺が隊長だ。そして支援が白雪と後藤とお前で、後尾がアンクと理子だ。戦闘時にはアリアと矢車・・・そして俺が接近戦で押して、お前達が中・遠距離攻撃で支援をする陣形だな。アンクは参謀として文字通り鷹の目で戦況の確認をして対策を考えて、理子が逃げる時の殿・・・追撃阻止係ってところだな」

アリア、色んな偶然が重なってチームになった8人をよくここまでバランスよく配置できたな。推理力はからっきしなくせに、戦闘がらみのことになると天賦の才がありやがる。

「なんていうか・・・本当にいいんだよな？またアリアと組んでも・・・」

「・・・はい」

事後ではあるが、一応改めて確認すると・・・・レキは静かに立ち上がり俺の方を向いた。

「私は今まで人の『気持ち』というものを考えた事がありませんでした。ですが今回の経験から私なりに考えてみたのです。アリアさ

んの・・・気持ちを」

「アリアの・・・気持ち？」

「山岳での狙撃戦で負傷した時、私は風に命じられるまま戦死を決意しました。そして、あなたに離ればなれになるように言いましたが・・・・あれはきっと強がりだったと思います。あの時の私はまだ・・・風とあなたの間で揺れていたから・・・」

「・・・・・・」

強がり・・・あの時のレキはそんな感情も芽生えていたのか。

「今だから言いますが、あの時、私の中には『死にたくない』という思いがあったのです。・・・・そしてその思いを抱かせたのは・・・キンジさん。あなたです」

「俺？」

「あなたは私の大切な人ですから、離れたくなかった。あなたは私に感情というものを芽生えさせてくれた。死んでしまえば・・・・そのあなたと・・・・大切な人と離ればなれになってしまう。そうなりたくないと思ったのです」

感情を持つことの初心者のレキは・・・俺にストレートな気持ちを伝えてきた。

「今回、アリアさんの気持ちを考えて・・・・アリアさんからキンジさんを引き離すことは、それと同じ行為だと気づいたのです。彼女にとってもアリアさんは大切な人ですから」

俺に合わせたのか、海の方を向いたレキの目は・・・・少しだけ寂しそうに見えた。

「ですから、チームに参加して、あなた達を見守りますが、もう引き離そうとはしません。その果てに・・・どんな事が起きようとも」

自分でも分かっている。欲望の王の力を持つ俺には・・・・決して望ましい未来がこないことを。

「だからアリアさんとあなたは一緒にいていいのです。・・・・・でも、これもきっと強がり」

珍しく躊躇うような間をおいたレキは、そう呟く。

「強がり？」

「はい。私はもう1つ、矛盾した思いを持っていますから。私は・・・・ウルスに必要な男性としてだけではなく・・・・私に感情というものを抱かせてくれたキンジさんを・・・・あなたを・・・・アリアさんに取られたくない」

まるで、改めて対立を宣言したようなレキだが・・・この間の喧嘩のように一方的な感じはしないな。

「・・・・逆にキンジさんはいいのですか？こんな私とチームを組むことになってしまって。もう『風』が何も言わなくなったので、私は自分でもよく分からない、自分の『心』というものを不確かな道しるべにしているのです。その心はこうして矛盾を抱えているし、風からの使命も与えられていない私は・・・・もう、自分が何者かなども分からないのに」

「レキ、自分が何者かなんて、誰にも分からないんだ。レキはレキ。

それで充分だろ。俺もそのままのレキでいいから心配すんな」

そう言ってやると、レキは僅かに頬を朱色を浮かべたように見えた。

「でも、私にはこれから何をすればいいのか分からないのです」

「それなら、これから見つけていけばいいだろ。やることなんか、それを見つけるために学校とか、チームってもんがあるんだよ。それでも・・・見つかりそうにないっていうなら・・・・」

俺は内ポケットから3枚の黒いメダルを取り出す。・・・ノブナガから託された3枚のメダルだ。

「・・・こいつは俺の友達が残してくれた大切なメダルだ。俺が持っていても不安だから、レキがこのエビとカニのメダルを預かっておいてくれ」

ぎゅっ

エビとカニのメダルをレキに握らせた俺はノブナガとの思い出を振り返る。・・・ノブナガも生前は武士・・・つまり侍だった。ウルス族・・・源義経の子孫であるレキに預けてもノブナガなら許してくれるはずだ。

「・・・守ります。・・・この命に代え・・・」

「おっと、『命に代えても絶対に』・・・ってのはやめてくれよ。命は大切だからな」

自分の考えを読まれて面を喰らった様子のレキは・・・まるで親

か何かに悟られたような目になっていた。そして遠い波の音と共に・・・・

「やはり・・・あなたは風に似ている」

どこか独り言のように、そう呟いた。

「キンジさんは器の広い人です。私の空虚さを知っていても変わらない」

「・・・‘器’が広いか・・・」

あんまり考えたことはなかったが・・・もしかしたら俺が遠山家で唯一オーズになれたことにも心の器ってのが関係してんのかもな。

「空虚・・・空っぽってのも悪くないと思うぞ。それはこれから色んなものを入れていけるってことなんだからな。だから一般常識ぐらいは教えてやるよ。これからも・・・」

「はい。教えてください」

レキの態度に何かピュアなものを感じられたので、俺は少し気恥ずかしくなってしまった。何だか理子的ゲームでいうところの『レキルート』に入ってしまった気がするな。このせいで性格は全然違うが、1年の風魔や凍条みたいに色々と残念な俺を尊敬するようになったらレキが可哀想だ。そう思った俺は・・・・

「なんたってお前は『バスカビール』の中でも一番の非常識だからな」

好感度を下げるようなことを言ってやった。するとミリ単位で口を動かしたように見えたレキは・・・・

「・・・・」

俺の二の腕を弱く叩いた。・・・これは怒りの表現か？レキとコミュニケーションをするには観察力がいるな。叩かれたので俺も小さく、甘く、叩き返すと・・・今度は少し嬉しそうな感じに2回叩いてきた。レキにも自分の感情表現の仕方がよく分からないんだな。・・・・足元を見ると箱買いしたはずの魚肉ソーセージがすでになくなり、夕日もだいぶ沈んだので、寮へと足を進めようとすると・・・

「キンジさん」

レキは俺のジャケットの裾を背後から小さく掴んできた。

「ウルスの忠誠は永遠。私は風が何も言わなくても、あなたを守ります。・・・・ずっと」

その幸せを噛み締めるような声色に俺が振り返ると・・・・まだうまくはないものの、間違いなくレキは笑顔だった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

日本の何処か、Wとの戦いから帰ってきたカツミはハンドガンや、コンバットナイフなどを次々と装備する。

「・・・全員に戦闘準備をしろと伝えろ。・・・・今夜は地獄を楽しむことになるぞ」

「カツミちゃん。いよいよ攻めるのね？」
『ＬＵＮＡ』

「ああ、Wの2人を誘えなかったのは大きいが・・・・これ以上この計画を長引かせるわけにはいかない」
『ＥＴＥＲＮＡＬ』

鏡水がルナドーパントに姿を変えると、後ろに控えるカツミの仲間達は一斉にルナドーパントのほうを振り向く。

「みんな～～！いよいよ祭りよ～～～～！！」

「「「「「・・・・・・」」」」」
『ＴＲＩＧＧＥＲ』
『ＨＥＡＴ』
『ＭＥＴＡＬ』
『ＣＹＣＬＯＮＥ』
『ＷＥＡＴＨＥＲ』

ルナドーパントの声を聞いた仲間達は次々とドーパントの姿に変

わると・・・エターナルは階段を登り、全員を見渡せる位置まで上がると、後ろにそびえ立つドーパント達に振り返る。

「これより我々ＮＥＶＥＲは、人類の可能性の妨げとなっているエヴィルの総本部へと攻め込む！不可能だと思う者は直ちにこの場を去れ！可能性を信じる者は俺について来い！」

「「「オオォォォォ！！」」」

ドーパント達は幹部クラスの一部を除いて一斉に叫ぶ。それに幹部達もどうやらついて行く様子だ。

「ターゲットはエヴィルの首領である‘破壊者’の抹殺。相手の戦力は未知数だが俺たちは人間だ！可能性が無限にある！人間を改造し、可能性を奪い取るエヴィルに制裁を与えるぞ！」

この日・・・この世界から‘ＮＥＶＥＲ’という組織が消えたことを俺が知ったのは・・・もう少し先の話だ。

Rの心／空虚な器（後書き）

次回で7巻の内容を終了させようと思います。それにしても・・・いくら原作が2冊分とはいえ、レキ編が長く続いてしまってアリアよりもレキの方がヒロインっぽくなってしまいましたね（苦笑）

宣戦会議（前書き）

今回はいよいよ謎の男が・・・・。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ

宣戦会議

レキを寮に送ってから数時間経ち、夜の１１時過ぎ・・・現代文の課題図書を読んでいた俺は白雪が持ってきてくれた蟹で蟹グラタンを作り、アンクと共に食事をしていると・・・アリアの弁護士から、かなえさんの裁判に向けた準備・・・準備日間整理手続が完了したという連絡が来た。ここからの証拠の追加は原則的にできない。つまりアリアにもしばらく時間が空くってことだ。

「・・・・あと３０分か」

俺は腕時計で時間を確認すると壁際のキャビネットから、あるものを取り出してポケットに入れる。

「アンク・・・ちょっと出かけてくる」

「今からか？・・・まぁ、別に構わんが・・・・帰りにコンビニでアイスを買ってきてくれ」

冷凍庫の中にアイスが入っていないことを確認した俺は「しょうがないな」と答えながら玄関を開けて外に出た。・・・最近のアリアは裁判の準備もあり、息をつく暇もなかった。それに加えてレキの騒動や、ココ3姉妹の事件とかもあった。きっと相当ストレスを溜め込んだんだろうな。その八つ当たりが俺の方に向いてしまう前に、俺はアリアのご機嫌を取る必要があった。先日ジャンヌから『女子は服とかアクセサリーとか、身に着けるものを男性から貰えば機嫌が直る』と聞いたので俺はレキにもそうしたようにプレゼントをあげることにした。かといっていきなりそれをやっても怪しまれるだけなので・・・今日、９月２３日。あと３０分ぐらいしか時

間はないがアリアの誕生日にプレゼントをすることにした。

「さてと・・・・」

深夜だけあって騒音を出すバイクに乗って向かうのは気が引けた俺は道路のガードレールに腰をかけてアリアに電話した。

『・・・なっ、何？キンジ・・・』

なんか声がキョドってるな。・・・まあいいか。

「お前、今どこだ？」

『あ、え、ここ？ここは女子寮。今ちょうど弁護士のところから帰ってきた。・・・けど、な、何よキンジ。まさか部屋に来るとか言うんじゃないでしょうね？』

そんな危険地帯に行きたくはねぇよ。

「じゃあ女子寮の温室に来い。俺も・・・そうだな、１０分ぐらいしたら行くから。分かったか？」

『はい』

はい。って・・・アリアの口から俺に対する敬語に類する言葉を初めて聞いたぞ。大丈夫なのか？疲れてるんじゃないのか？・・・・俺はそんな心配をしながら温室へと向かった。

温室に到着すると・・・・一番奥の満開の薔薇園の場所にアリアは立っていた。そして俺が片手を振りつつアリアの元へ向かうと・・・アリアは片手を胸の前で握り、焦るような表情をした。

「こ、こんな所に呼び出して・・・な、によ？」

「アリア・・・お前調子でも悪いのか？『何よ？』ぐらいちゃんと言えよ」

「で、用事は何？こんな夜遅くにレディーを呼び出すからにはそれなりのご用件でしょうね？」

そう言われた俺は温室中央の樹木に掛けられている時計を指す。

「１１時４５分。これもかなりギリギリセーフだったな」

「だから・な・ん・で・す・か」

アリアはワクワクしているのを表に出すまいと必死に堪えている珍妙な表情をしていた。・・・・駄目だ、今笑ったら風穴だ。

「・・・今日、誕生日なんだろ」

あんまり勿体つけるのもアレなので早めにそう言うと・・・・アリアは目をまんまるに見開いて何度も頷いた。

「俺がスルーすると思ってただろ」

そして今度は一旦頷きかけてから否定の首振りをした。本当はスルーすると思われてたんだなぁ。信用ないなぁ俺。

「手、出せ。プレゼントやるから」

俺がそう言うと、アリアは両手をプルプルと震わせながら、胸の前で水を掬うように合わせた。

「あ、いや、片手だけでいいぞ」

適当にアリアの左手に掴んだ俺は・・・・ポケットの中に純銀の指輪を持ってきている。アリアが銃を握っても邪魔にならないような宝石のついてないリングをな。・・・・これは大阪でレキが試着室に入っていた時に、アリアの手に合うように小さいのを外の露店で買ったんだが・・・迂闊だった。どの指に合うサイズかまでは考えてなかった。

「も、貰ってあげるから・・・は、早く渡しなさいよ・・・！」

「何で固くなってんだよ。別に変なものは渡さないから指を見せろ」

「ゆ、指!?な、何で!?」

目を見開いたアリアの手を俺は観察する。・・・・親指、人差し指、中指は駄目そうだな。入らないっぽい。小指は・・・ズリ落ち

そうだな。となると薬指か。

「ほら、誕生日おめでとう」

「～～～～！！」

何だかアリアがビクビクしていて自分ではつけられなそうだったので、俺は仕方なしに左手の薬指に指輪を填めてやると、今まで蒼白だったアリアは1秒もしないうちに顔色を赤くしていた。

「言っておくが・・・そんなに高いもんじゃないぞ」

「い、いいよっ！で、でも、貰っちゃうわよ！ホントに貰っちゃうからね！」

「だからあげるって。あと、しばらく気軽に俺を撃つなよ」

「はい！」

また出たよ。アリアの「はい」が・・・ここまで過剰に反応されると逆に薄気味悪いな。これ・・・ただのアクセサリーを貰った反応じゃないぞ。もしかして今の一連の行動に俺の知らない意味があったんじゃないのか？

まず1つ、誕生日の夜、温室に電話で呼び出した。

2つ、指輪をプレゼントしてアリアの左手薬指に填めてやった。

そして3つ、今後しばらく気軽に撃つなと頼んだ。

これのどれに行為以上のことがあるのかさっぱり分からんぞ？自慢じゃないが俺はヒステリアになるのを避けるために男女のやりとりの常識などはほとんど知らないんだからな。

「キンジ、これ・・・嬉しい。・・・凄く嬉しいけど・・・ちょっと早いよ。そ、その・・・意味っていうか・・・・どういう意味なの？」

まぁ・・・ここで「お前には八つ当たりで撃たれるのを抑止するため」なんて答えたら本当に風穴を開けられてしまいそうなので・・・

「武偵憲章６条『自ら考え、自ら行動ぜよ』。武偵なら自分で考えるんだな」

と、ごまかしてやった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

それから数日の間は、嘘みたいな平穏な日々が続いた。学校を休みがちだったアリアも普通に通学し、戦徒という武偵高の制度に基づいて一年の？間宮あかり‘という女子を指導しているらしい。怪人達も動きがないおかげでしばらくは羽を伸ばせたんだが・・・・アンクは？戦姉妹（アミカ）’と聞くたびに表情を歪ませていた。・・・何となくだが・・・その名前にアンクは思い入れがあるような感じに見えた。

「そういえば新学科の導入が今月からだったな・・・・ん？」

外にある仮面戦士科の学科棟でオーラインクロス＋ゾウカンを剣崎相手に試してきた俺は、仮面戦士のサポートを目的とした新学科が今月から導入させることを思い出しながら教室に戻ろうと下駄箱を開けると、俺の靴の上に手紙が置いてあった。手紙は純白の封筒の中に入っていて、映画とかで外国人のお金持ちとかが使う赤い蝋みたいなので封がされている。筆記体の署名は・・・ジャンヌか。

「おいおいっ！そんなの妹の持ってる漫画でしか見たことねーぞ」

ちょうど車輌科の実習から帰ってきた武藤は右からいきなり俺の頭を掴んできた。

「あちゃー・・・！最近はアリアさんとうまくいってるかと思ったら、もうこれかぁ」

左側ではどこからともなくやってきた不知火が苦笑いしてる。

「・・・『そんなの』とか『これ』って何だよ？ジャンヌが手紙を入れただけだろ。しかし古風な奴だな。今日日、手紙って。メールでもいいのにな」

「あのなぁメールじゃロマンスがねぇから手紙なんだろ。それはラブレターっていうんだよ。武士の情けだ。黙っててやるから見せろ！」

「神崎さん。星伽さん。峰さん。レキさんと来て今度はジャンヌさんかぁ。美人ぞろいだね、遠山君の女性遍歴。ラブレター、ちょっ

と見せてよ」

そう言うと武藤と不知火はラブレターと決めつけた手紙を左右から奪い取ろうとしてきた。内容が何であれ、人からの手紙を他人に見せちゃ駄目だろ。・・・そう思った俺は武藤をライダーチョップで昏倒させ、不知火がその手当てをしてる間にその場を離れた。そして教室のバッグを回収してすぐさまオーラインクロスで近くの公園まで走り、ベンチに座って手紙を開けると・・・字は綺麗なのにフランス語で何が書いているか分からなかった。よく見ると文末に日本語が書いてあった。

『どうせお前には読めないと思うから、裏に日本語でも書いておく』

なんかイラッと来た。だったら最初から日本語で書けよ。

『遠山キンジ殿　１０月１日　０時　空き地島南端　曲がり風車の下で待つ　武装の上　アンクだけと共に来るように　ジャンヌダルク』

なんだこれ？時刻は明日、というか今日だ。不審に思ってジャンヌに電話をしてみると・・・・

『遠山か、読んだようだな』

「ジャンヌ、どうしてわざわざ手紙なんだよ？おかげで武藤にライダーチョップを決めることになったんだぞ」

『あれは正式な書状。・・・・招待状だからだ。お前も男ならちゃんと来い』

そう言ってジャンヌは電話を切ってしまった。何一つ詳細を語らずに・・・。もう一度電話してみるが出てくれない。何と言うか・・・ちゃんと語ると俺が来ないとでも思っているな。ますます怪しくなってきたぜ。

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

あまり気乗りはしなかったが・・・ジャンヌの態度に引っ掛かるものを感じた俺はアンクと共に空き地島の南端へとやってきた。暗いうえに濃い霧に覆われ、不明瞭な視界の左右には東西に並ぶ風車の柱が続いている。なんだか不気味な光景だな。

「突っ立ってないで行くぞ」

「あ、ああ・・・・」

その霧を掻き分けるようにして俺とアンクは，曲がり風車，とアダ名されてしまった、４月に飛行機がぶつかってしまい曲がった風車へと足を進める。・・・それにしてもこの霧、自然発生したように見えないな。

「遠山、アンク・・・こっちだ」

声の聞こえた方向に振り向くと・・・白銀の鎧を着て魔剣・デュ

ランダルの剣先を地面に突き刺して杖のように立てていたジャンヌがいた。

「何だ？こんな夜遅くに呼び出して？」

少し前にアリアに言われたような事を言いながらジャンヌに近づくと・・・ジャンヌの西洋甲冑はかつて地下倉庫で戦ったときよりも重装だった。

「まるでどっかの騎士王だな」

「・・・・？」

アンクは何かを呟くとジャンヌは少し不思議そうな顔をする。・・・俺もそれは知らないが、何となくアウトなのは理解した。

「まもなく0時です」

頭上から聞き慣れた声がしたので、顔を上げると・・・動かない風車のプロペラに制服姿のレキが腰を掛けていた。見れば、普段は背中で抱えているドラグノフを身体の前で抱えている。

「キンジ・・・気を抜くなよ」

アンクもいつの間にか右腕を怪人態にしていたので、俺も眉を寄せた時・・・曲がり風車を大きな円形で囲むように複数のライトで照らされた。

「なっ！？」

光に照らされた霧には俺達以外にも幾つも人影がある。・・・その姿のほとんどが普通じゃない。怪人とまではいかないが、人間とも言い難い異形の集団だった。

「先日は蘭幇の曹操姉妹が、飛んだご迷惑を掛けてしまったようで、陳謝致します」

俺達の方にお辞儀をしてきたのは、糸のように細い目をし、色鮮やかな民族衣装を着た男だった。そいつから離れた地面では・・・なにやら黒い影がうずうずと蠢いている。

「お前がリュパン４世と共にお父様に打ち勝った‘王様’？・・・信じがたいわね」

理子の甘ロリとは違う白と黒基調とした不吉なゴシック＆ロリータ衣装に全身を包んだ金髪ツインテールは夜なのに黒い日傘を持っていて、背中に蝙蝠のような形の大きな翼を生やしていた。

「仕掛けるでないぞ、遠山の。今宵はまだじゃ。儂もこのような大戦は８６年ぶりで気は立つがの」

なぜか俺のことを知っているような口ぶりで話しかけてきたのは・・・和服を着たアリアより小柄な少女だった。切れ長の目は日本人っぽいが、長い髪は金髪・・・というよりも狐色だ。しかもこいつの頭にはキツネのような耳がピンと立っていた。しかも本物っぽいし。

「久しいのぅアンク」

「・・・あぁ、久しぶりだな玉藻」

どうやらアンクとこの玉藻と呼ばれた狐少女は知り合いらしいが・・・どうなんだろうな？

「・・・・・・・！」

そして何やら赤と黒が印象的な服を着たいつもと雰囲気が違う渉も金色の蝙蝠がついたような剣を腰に納めてやってきていた。そしてその奥からは砂礫の魔女パトラとドレイクゼクターを持っていつでも変身ができる状態のカナ・・・兄さんがいた。

「・・・・・・・」

そんな様々な者達が集まる中、俺が何よりも気になったのは・・・

「皆さん。そんな険悪ムードにならないで。ほら、笑顔、笑顔！」

「・・・五代さん」

俺に料理などの様々な技術を教えてくれた人物、五代祐輔（ごだいゆうすけ）さんがいたってことだ。どうして五代さんがここにいるのかも分からないが、あの人についてもう1つ気になるのが・・・・

「リク・・・嘘だろ？」

アンクが五代さんのことを、リク、と呼んでいたことだった。

「・・・では始めようか。各地の機関や結社、組織の大使達よ。宣戦会議・・・・イ・ウー崩壊後、求めるものを巡り、戦い、奪い合

う我らの世が次へ進むために」

そしてこの瞬間、俺たちの次の戦いは始まりの合図がなった。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

俺が宣戦会議に参加してしまっている頃、エヴィルの幹部達は本部である場所に全員集まっていた。

「・・・・8幹部の皆様。お集まり頂きありがとうございます。これより首領様が今回のミッションを発表します。皆様はそれを速やかに実行に移してください」

「・・・・・・」

エヴィル？2である影月は幹部達の中央に立つと・・・その奥からはショッカーマークがついたマントを羽織った茶髪の青年が出てきた。

「これはこれは・・・首領様が会議に直接出席なさるとは珍しいで

すね」

「無礼だぞドクター、口を慎め」

真木博士は青年に視線を送ると、影月は瞬時に銀色の戦士に姿を変えて赤い刀身の剣を真木博士に向けた。

「気にするな影月。そんなことよりこいつ等にもだいたい分かるように話を進めろ」

首領は玉座に座ると真木博士以外の幹部達は一斉に姿を変えた。

「「「「・・・・・・」」」」

金色の不死鳥のような仮面戦士に、紫色の電王、宇宙人のような怪人やケルベロスのような怪人に、幽霊海賊のような仮面戦士、さらにはマフラーの黒いショッカーライダーまでいる。

「先日はＮＥＶＥＲと名乗る人間達が本部を襲撃してきましたが・・・首領様が『遊び』と称して半数を破壊し、幹部である数名を『暇だからまた来てくれ』と言ってワザと逃がしてしまいました。そのリーダーである仮面戦士は、世界を崩壊へ導くための生贄として支部の地下牢に捕らえております。加えては・・・・」

「報告はもういい。仕事のことだけ告げろ」

首領が銀色の戦士にそのように告げると・・・銀色の戦士は中央のモニターに東京武偵高の仮面戦士科の学科棟を映し出した。

「この組織の基礎を作り上げたショッカー首領様の形見・・・・シ

ョッカーコアメダルが東京武偵高に封印されていることが判明しました。これより皆さんはそこを襲撃して、コアメダルを回収してください」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

見知らぬ場所・・・世界を破壊する悪はいよいよ本格的に動き始めていた。

宣戦会議（後書き）

今回で原作7巻も終了しました。・・・今回の話でも語っていましたが・・・武偵高に新学科を追加しようと思います。どんな学科かは・・・宣戦会議終了後に明かそうと思います。

『師団』と『眷属』（前書き）

今日のフォーゼ。思ったよりもファイヤーステイツがあっさり出てきてたり、色々と驚くところが多かったですが・・・クッションを持った大文字さんで癒されました。・・・・まぁゴーカイジャーの方が突っ込みどころは多かったですが・・・。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ

『師団』と『眷属』

「『宣戦会議』に集いし組織・機関・結社の大使達よ。まずはイ・ウー研鑽派残党のジャンヌ・ダルクが敬意を持って奉迎する」

霧の中に照らし出された異形の集団に、甲冑姿のジャンヌが語りかける。歓迎するとは言っているが・・・ここに集う一同からは一触即発のムードだぞ。正体不明の武装集団と出くわしたケースでは、まず敵戦力の把握がセオリーだ。しかし今の俺にはそれができない。誰が敵で誰が味方かも分からないからだ。

「・・・・・・」

アンク、ジャンヌ、レキ、渉、そしてさっき話しかけてきた狐少女・・・玉藻とかいう奴は大丈夫だろうな。

「・・・リク・・・どうして」

たぶん味方だろうが・・・正体不明なのが五代さんだ。リクと言う人物は８００年前の人間だから生きているはずはない。だからといって‘人間’という前提じゃなければありえない話でもない。たとえばファンガイアとかも長生きだしな。

「初顔の者もいるので、序言しておこう。かつての我々は諸国の闇に自分達を秘しつつ、各々の武術・知略を伝承し、求めるものを巡り、奪い合ってきた。イ・ウーの降盛と共にその争いは休止されたが・・・・イ・ウーの崩壊と共に今また、砲火を開こうとしてる」

イ・ウー・・・・忘れもしない戦いだったな。アリアの曽祖父で

あるシャーロック・ホームズが変身した仮面ライダーラスとの戦って・・・その結果あの組織は壊滅したはずだった。

「皆さん。あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか？」

青く潤んだ瞳の泣きボクロが印象的なシスターのような服装の女性は一歩前に出てくる。その手には冗談みたいにデカイ剣が握られている。

「バチカンはイ・ウーを必要悪として許容しておりました。高い戦力を有するイ・ウーがどの組織と同盟するか最後まで沈黙を守り続けた事で、誰もが『イ・ウーの加勢を恐れた敵』を恐れてお互い手出しができず・・・あのエヴィルですら長きに渡る休戦を実現できたのです。その尊い平和を、保ちたいとは思いませんか？」

シスターは手を合わせて十字架を握り締める。だれだか知らんがあんたいいこと言ってるぜ。こっちとしても敵はエヴィルとグリードだけで充分なんだからな。余計な争いはしたくない。

「私はバチカンが戦乱を望まない事を伝えに、今夜、ここに参ったのです。平和の体験に学び、皆さんの英知を以て和平を成し、無益な争いを避けることは・・・・」

「できるワケねぇだろ、メーヤ、この偽善者がっ！！」

彼女の斜め後ろから口を挟んだのは・・・最初からメーヤというシスターを睨んでいた黒いローブの魔女だった。小柄な身体を真っ黒なローブに包み、黒のとんがり帽子もかぶり、ご丁寧に大きなカラスまで肩に乗せている。これで魔女じゃなかったら訴えるぞ。

「お前等ちっとも休戦してなかっただろーが。デュッセルドルフじゃ、あたしの使い魔を襲いやがったくせに何が平和だぁ？どの口でほざいてやがる」

「黙りなさいカツェ＝グラッセ。この汚らわしい不快害虫。お前たち魔性の者どもは別です。存在そのものが地上の害悪。殲滅し、絶滅させることに何の躊躇いもありません。ここ数百年のファンガイア族は貴方とは違い害悪ではありませんが、初代の王は滅びるべき絶対悪でした。しかしもう彼らは神の許しを得ている。だがあなたはどうです？生存させておく理由が旧約・新約・外典も含めてまったく見当たりません。しかるべき祭日に聖火で黒焼きにし、屍を八つに折り、それを別々の川に流す予定を立てているのですから！ほら、言いなさい！ありがとうと、ありがとうと！！」

先ほどの穏やかなムードとは打って変わって、魔女の首を絞めて叫ぶメーヤは・・・異常な感じだった。・・・・ぜ、前言撤回だ。全然いい人そうじゃない。・・・・ていうか相当タチの悪い二重人格だ。

「ぎゃはははは！おぅよ戦争だ！待ちに待ったお前らとの戦争だぜ！こんな絶好のチャンス逃せるかってんだ！なぁヒルダ！」

首を絞められながらもゲラゲラと笑う魔女は別の人物へと話しかける。それは先ほど俺を『王様』と呼んでいた蝙蝠の翼を生やす金髪のツインテールの少女だった。

「そうねぇ。私も戦争、大好きよ。いい血が飲み放題だし」

「気軽に戦争が好きなんて言うもんじゃないよ。争うことで残るのは・・・・虚しさだけだ」

そのヒルダと呼ばれてた金髪蝙蝠に口を開いたのは・・・五代さんだった。

「これはこれは‘究極の闇’やはりそれは自分より強い存在がいないからという虚しさですか？」

「命ってのは平等に大切なんだ。それを奪い合うことを気軽にはやらせたくないだけだよ。俺としては和平で収めて欲しいんだけど・・・」

五代さんは争うことはやめろと、この場の全員に告げるが・・・

「リク様は口を出さないでください。たしかに貴方様はあのクガ王を倒した英雄ですが、やはり不快害虫は滅びるできなのです！」

メーヤはヒルダと魔女を睨みつけた。

「・・・今の俺はリクじゃないし、そもそも英雄でも何でもないよ。・・・そもそも俺はあくまで‘リク’の記憶と力があるだけの別人だし」

「それでも‘リク’があなたと同化して、その力を持っている以上はあなたが‘究極の闇’じゃない」

五代さんが・・・リクと同化？

「アンク・・・たしかリクっていうのは・・・・」

「あぁ、俺の仲間だったヤツで・・・・戦士クウガとして戦ってい

た。オトヤからクウガの目撃証言を聞いていてもしかしたらと思っていたが・・・」

どういう訳かは知らないが五代さんと同化してクガ王から世界を救った英雄として周りに認知されているってことか。

「和平・・・と仰りましたが・・・それは非現実的というものでしょう。元々われわれには長江のように長きに渡り、黄河のように入り込んだ因縁や同盟のよしみがあったのですから。ねぇ」

のんきな感じで声を挟んできたのは細めの民族衣装の男だった。細め男はそこまで言うと、風力発電機の翼でドラグノフを抱えているレキを見上げた。

「私も・・・できれば戦いたくない。しかし、いつかこうなる事は前から分かっていたことだ。シャーロックの薨去と共にイ・ウーが崩壊し、我々が再び乱戦に陥ることはな。だからこの『宣戦会議』の開催も彼の存命中から決められていた。大使達よ。我々は戦いを避けられない。我々はそういう風にできているのだ」

今にして思えば・・・シャーロックって存在は本当に世界にとって大きな存在だったんだなと思う。あのエヴィルですら大きな動きを可能な限り控えて行動してたらしいんだからな。・・・だけど俺達がそれを倒して瓶の蓋が開いちまったってことか。

「では古の作法に則り、まず三つの協定を復唱する。第一項。いつ何時、誰が誰に挑戦することも許される。戦いは決闘に準するものとするが、不意打ち、闇討ち、密偵、奇術の使用、侮辱は許される。第二項。際限なき戦いを避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる。これは第一項より優先される」

時代がかかった台詞だが・・・分からなくはないぞ。この2つはセットで考えるべきルールだろうな。組織同士で戦うが総力戦にはしない。それぞれの組織がゲームみたいに代表を決めて戦うってことか。少なくとも皆殺しにはしないようで少しは安心したぜ。・・・それでも争うことは気に入らないがな。

「第三項。戦いは主に『師団』と『眷属』の双方の連盟に別れて行う。この往古も盟名は、歴代の烈士達に敬うため、永代、改めぬものとする。それぞれの組織がどちらに所属するかはこの場での宣言によって定めるが、黙秘・無所属も許される。宣言後の鞍替えは禁じないが、誇り高き各位によりそれに応じた扱いをされることを心得よ。続いて宣言をするが、まず私たちイ・ウー研鑽派残党は『師団』となることを宣言させてもらう。バチカンの聖女メーヤは『師団』。魔女連隊のカツェ＝グラッセ、それとドラキュラのヒルダは『眷属』。よもや鞍替えはないな？」

ルールを言い終えたらしいジャンヌが先ほどの3人の女を名指しする。

「ああ・・・神様。再び剣を取る私をお許しください。・・・・はい。バチカンは元よりこの、汚らわしい眷属共を討つ『師団』。殲滅師団の始祖です」

メーヤは白いレースの長手袋をした手で魔女と吸血鬼を指差した。

「ああ、アタシも当然『眷属』だ。メーヤと仲間になんてなれるかよ」

そう答えた魔女の向こうからは・・・

「聞くまでもないでしょうジャンヌ。私は生まれながらにして闇の眷属・・・『眷属』よ。玉藻、あなたもそうでしょう？」

今度は金髪蝙蝠のヒルダが俺の隣にいる狐少女の玉藻の方を向いた。

「すまんのぅヒルダ。儂は今回は『師団』じゃ。未だ仄聞のみじゃが、今日の星伽は基督との盟約があるようじゃからの。それに今回はリク兄様がおるのじゃからな」

おい待て狐っ！？お前、アンクだけじゃなく五代さん・・・いや、リクとまで面識があるのかよ！

「だから俺・・・リクじゃないって。今は五代祐輔だって」

「姿や性格まで完全に同じなのじゃ。そして同化したとはいえ、記憶があるのじゃから兄様であるに変わりないのじゃ」

その理論は・・・たしかに間違ってないかもしれないが・・・どうなんだろ？

「・・・父さんがエヴィルの何者かの襲撃を受けて深手を負ったので息子である僕、紅渉がキング・紅音矢の代わりに宣言します。我々ファンガイア族は『師団』として行動させてもらいます」

渉も『師団』として宣言した。・・・いや、そんなことよりも、あれだけ圧倒的な強さを見せた音矢さんが深手を負っただと！？

「どういう事だ？」

８００年前はオーズ、ダークキバ、アーク、そしてクウガの４強だったと聞いたことがある。そしてあのアーク戦のときにアークの力を嫌と言えるほど味わった。そして意識が飛びかけていたんではっきり見た訳じゃないが、ダークキバの力も目撃した。たしかに圧倒的だった。その力を持つ音矢さんが深手を負うなんて信じられないぞ。

「・・・・・・・」

その後、パトラ含むイ・ウー主戦派は『眷属』。カナ・・・・兄さんは『無所属』と宣言した。

「ジャンヌ。リバティー・メイソンも『無所属』だ。しばらく様子を見る」

霧の奥にいた美少年っぽい奴も『無所属』と宣言したが・・・それよりも気になるのが・・・

「ＬＯＯ・・・」

３メートルを超えるシルエットの鋼鉄ヤロウだ。なんつうか・・・二本足の戦車って感じの何かだ。

「ＬＯＯよ。お前がアメリカから来るのは知っていたが、私はお前をよく知らない。意思疎通の方法が分からないままであれば、どちらの連盟につくかは『黙秘』したものと見なすが・・・・いいな？」

「・・・ＬＯＯ・・・」

鋼鉄ヤロウは頷くように少し姿勢を変えた。どうやら自立兵器じ

ゃなくて、中に人が乗っている人型白兵戦機のようだな。
「『眷属』になる！」

本人よりも大きな斧を背負った十歳ぐらいに見える少女は、３００キロはありそうなその斧を片手で振り回す。・・・そんな斧、仮面戦士でも持ちそうにないぞ。
「ハビ！『眷属』！」

真上を向いて、ちょっとクセのある声で繰り返したのは・・・・その少女のバサバサの髪、その前髪の下に見えた２本の角だった。・・・なるほど、あいつもこっち系ってことか。

「遠山。『バスカビール』はどっちにつくのだ？」

「・・・・？」

いきなりジャンヌが俺に話題を振ってきたので・・・俺は思考が追いつかなかった。

「な、なんで俺に振るんだよ！？」

「お前はシャーロックを倒した張本人だろう。それにこの『宣戦会議』にはお前の一味・・・最近『バスカービル』という組織名ができた訳だが・・・そのリーダーの連盟が不可欠だ。お前はイ・ウーを壊滅させ、私たちを再び戦わせる口火を切ったのだからな。・・・いや、それ以前にお前は‘最凶の王’オーズの力を持つのだから、こうなる事は必然だったのかもな。・・・・『師団』と『眷属』生き残れそうな方につけ」

「・・・お・・いっ・・・」

有無を言わせないような口調のジャンヌに、俺は言葉を言い返せない。・・・俺には関係ない。と言ってこの場を去りたい気持ちもあるが、周りの視線がこちらに集まっていてそんなことは言えない。

「新人は皆、そう無様に慌てるものよねぇ。ジャンヌ、あんまりいじめちゃ可哀想よ。聞くまでもないでしょう。遠山キンジ、お前たちは『師団』それしかありえないわ。お前は『眷属』の偉大なる古豪、ドラキュラ・ブラド・・・お父様のカタキなのだから。・・・・まぁ、あなたが真の‘王様’なら話は別だったけどね」

あいつ、同じ種族だろうなとは思っていたが、あのブラドの娘だったのか。つーかいい加減俺を「王様」って呼ぶのはやめて欲しい。俺はかつての王じゃないんだからな。

「それでは、ウルスが『師団』に付くことを、代理宣言させてもらいます。私個人は『バスカービル』の一員ですが、同じ『師団』になるのですから問題ないでしょう。私が大使代理になることは、すでにウルスの承諾を得てます」

「蘭幇の大使、諸葛静幻が宣言しましょう。私たちは『眷属』。ウルスの蕾姫には、先日ビジネスを妨害された借りがありますからねぇ。・・・さて、残りは貴方だけですが？」

参戦するとも言っていないのに、俺の件はもう済んだかのような流れで細め男は霧の奥のピエロみたいに派手な格好の男に話しかけた。

「ケッ！バカバカしいぜっ！強ぇやつが集まったと思って来て見りゃ、何だこりゃ？使いっぱしりの集いってワケかよ。どいつもこい

つも取るに足りねぇ無駄足だったぜ」

どうやらこいつも『帰りたい派』だったらしいな。・・・・俺とは正反対の理由だけど。

「G？、このまま帰れば『無所属』となるぞ。それでもいいのか？」

「構わねぇな。最近てめぇらに強い奴らが出てきたみたいだから様子見に来ただけだ。次は一番強い奴を連れて来い。それを皆殺しにしてやる」

G？と呼ばれていた男は透明になり消えてしまった。

「・・・アンク、見えるか？」

「見えてるに決まってんだろ。まぁ、追いかけるなよ。めんどくさいぞ」

タカの目を持つアンクにはどうやら透明になったG？が見えているらしいが・・・追いかけるなと言ってきた。・・・まぁ、元より追う気はないけどな。

「下賤な男、殺す気も失せるわ。・・・でも、これで全員用事が済んだみたいね。そうよね、ジャンヌ？」

「・・・その通りだ。最後にこの闘争は宣戦会議の地域名を名づける習慣に従い『極東戦役』・・・・ＦＥＷと呼ぶことを定める。各位の参加に感謝と、武運の祈りを・・・・」

「それじゃあ・・・いいのね？」

「もう・・・か？」

「いいでしょ別に、もう始まったんだもの折角だし・・・ちょっとね・・・」

ジャンヌとヒルダは2人してこちらを見てくる。・・・何だか嫌な予感がするぞ。

「血を見なかった宣戦会議なんて・・・過去なかったというしねぇ・・・」

にやりと笑って牙を見せたヒルダに、ジャンヌは慌てた表情でマバタキ信号『逃げろ』を送ってくる。ここからは誰が誰と戦ってもいいってことかよ。

「アンク、ジャリバー！」

「・・・ほらよっ！」

俺はアンクからジャリバーを受け取った途端、ヒルダは自分の影に潜り込んで行く。・・・これじゃあジャリバーを当てることができないな。

「遠山先輩・・・。３０・・・いや、２０秒・・・あ、いえ、１５秒は凌ぎます」

いつの間にか後ろに立っていた涉は金色の剣を抜いて・・・構える。てか、時間がどんどん減っているぞ。もう少し自分に自信を持てよ。

「くそっ・・・・」

いくら人外とはいえ、見た目が人間だと変身するのも気が引ける。

・・・俺は変身せずに何とかする方法を考えているとこの場の異形達は学園島の方を振り向いていた。モーターボートで走ってくるあれは・・・！

「ＳＳＲに網を張らせといて正解だったわね！そこにいるんでしょ。パトラ！ヒルダ！」

空き地島にやってきたのは・・・・アリアだった。

「アリア！？・・・まずい！今、ここには・・・・！？」

自分のことはさておき、俺はアリアが火に油を注がないように叫ぼうとした途端・・・・

「オーズ！死ねい！」

ライオンとクラゲが混ざったような怪人が現れた。

「っ！？・・・変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺は後ろに跳び下がりながら変身をするとジャリバーを構える。

「チッ！カザリの合成ヤミーか。中には中身はいないらしいな。・・・・気を抜くなよキンジ！！」

「ああ、分かってる。アンクは金髪蝙蝠を何とかしててくれよ！」

「ガオッ！」
ガギィィィン！

カザリのヤミー・・・ライオンクラゲヤミーの爪を右手のジャリバーで受け止めた俺は、左のトラクローで切りつける。

「ガァっ！？」

「セイヤッ！」
ドカッ！

俺がライオンクラゲヤミーをキックで蹴り飛ばすと・・・アリアが俺の傍までかけてきた。

「キンジ！・・・ジャンヌもいるの！？どういうこと！？」

「アリア！説明は後だ！ここは撤退するぞ！」

周りを見渡すと・・・『師団』と『眷属』がそれぞれ戦っていた。
玉藻は・・・姿が見えないがアンクの足元に絹手毬が落ちている。
しかも狐の尻尾のようなものが生えたのが。

「・・・・バカか？」

「・・・・・」
シュッ

アンクの視線に気づいた手毬は尻尾を内側に引っ込めた。・・・防御モードなのか？

「・・・結局こうなっちゃうのか」

戦いに参加していない・・・というよりも『師団』からも『眷属』からも避けられている五代さんは悔しそうに俯いて拳を握っていた。

「なぜ来た！アリア！・・・・気をつけろ、ヒルダはまだいる。それも近くに・・・・！？逃げるぞ！ヤツはイ・ウーから『緋弾の研究』を盗んでいる！」

そう言ったジャンヌは氷の結晶を空気中に漂わせて俺達の姿を隠そうとする。しかしその時・・・・・

「・・・・！」

アリア自身の影から、プールの水面から上がってくるように半笑いのヒルダが出てきて、アリアの首を掴んだ。

「愚かな武偵娘にお仕置きよ」

がぶっ！

「っ！？」

ヒルダは真っ赤な口を開くと、先端に緋色の金属を被せた牙がアリアの首元に噛みついた。

「嬉しい誤算だわ！私は第一形態のまま、もう殻を外せるなんて。おほほっ。おーっほっほっほ！！」

「アリア！！」

「ガァァァァ！！」

ヒルダが離れて膝をついたアリアに俺は駆け寄ろうとすると再びライオンクラゲヤミーが襲い掛かってくる。

「邪魔だから退いてろ！」

『シャチ！カマキリ！バッタ！』

バシャァァァァッ

「ガアッ！？」

ライオンクラゲヤミーに効くはずのない水を噴射して目くらましをした俺は、２本のカマキリソードで攻撃して退けるとアリアのもとへ走ろうとした途端・・・・

「な、なんだ！？」

いきなり紫のメダルが3枚俺のところに飛んできた。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺が宣戦会議に参加し始めた頃、エヴィルの研究所に戻ってきた真木博士は恐竜や幻獣が彫られている円型の石版を眺めていた。

「・・・驚きだよねぇ・・・まさか人間がグリードになっちゃうなんて」

「これも首領がファンガイアのキングの城に乗り込んで手に入れてくださった戦利品のおかげですね。・・・そんなことよりもカザリ君。まもなく予定の時間です。そろそろ私達も出向きますよ」

「「せやな」」

真木博士は両目を紫色に輝かせると、カザリとチョウ兄弟は研究室を出ようとする。その瞬間だった。

「おや？」

石版がカタカタと揺れたかと思うと・・・中に入っていた紫色のコアメダルが3枚、どこかに飛んでいってしまった。

「マッキー。いいんか？あのメダル、どこかへ飛んでいったで？」

「その呼び方は止めてください・・・良いわけがありません。・・・しかし、何かと共鳴してしまったみたいですし、仕方ないでしょう。それにすぐに取り戻せばいいだけの話ですから」

「まったく・・・せっかくワイの欲望から作ったヤミーをさっくりやられるようなことは勘弁な。ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥＲ！！」

「・・・・・・」

真木博士はアックスに変身したダニエルに言葉を返さない。

「・・・あの、何か返事してや。それじゃワイのヤミーが『絶対負ける』って宣言されたようなもんやで？」

「・・・・・・」

真木博士はまたもや返事をしない。

「返事せいっ！」

ガッ！

その態度にイライラしたアックスは真木博士の肩に乗っていた人形を奪い取った。

「アァァァァア！？」

「ハッハッハッ！シカトしてるからや！」

アックスはそのまま真木博士の人形を持ったまま目的地へ向かった。・・・その後ろには奇声を発して走る怪しいおじさんがいたらしい。

『師団』と『眷属』（後書き）

来週の日曜日からは前々から予定していた「緋弾のアリアＡＡ欲望の欠片」を更新したいと思います。

襲撃！仮面戦士科！　前編（前書き）

今回の話は前半はキンジサイド、後半からはエヴィルの襲撃を受ける仮面戦士達サイドになっています。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
シャチコア
トラコア
カマキリコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

サソリギジ

襲撃！仮面戦士科！　前編

「くっ！？」

一体あのメダルが何だか分からないが・・・俺はとりあえず、紫のメダルを避けてアリアのところに走る。

「アリア！・・・くっ・・・・毒か！？」

「マズいぞ、遠山の。毒よりマズいことになりそうじゃ」

アリアの元に駆け寄ると、誰も触れていないのに転がってきた手毬が足元からは話しかけてきた。・・・どういうことだ？と、アリアを見るうちにその理由が分かった。

「・・・・っ！？」

ぼんやりとだが、アリアの身体が緋色に発光し始めた。・・・俺はこれを過去に2回見たことがある。

「おお！」

そこで驚く声をあげているパトラと戦った時と、シャーロックとの戦いで・・・アリアはこの状態になった。だけど、今回はあの時とは違う。まるで光が内側に籠って、それが漏れて出ているような感じだ。

「アリア！大丈夫か！？」

俺は両手でアリアの肩を掴んで揺らすと・・・・

「・・・・・」

アリアは苦しそうに2度3度マバタキをしてから、まるで「誰？」とでも言うように無言で俺を見上げた。

「ヒルダめ。お主『殻金七星』破りまで識っておったのか」

「光栄に思いなさい。史上初よ！殻分裂を人類を目にするのは・・・！」

俺の足元の手毬はヒルダを言葉を交わすと・・・・

「遠山の。アリアが来てしまったのが運の尽きじゃ。1つは儂が戻すから、怖れるでない。アリアを動かさぬようにしろ。メーヤ！お主も1つ戻せ！」

などと言ってから玉藻の姿に戻ると、巫女が持つような御幣を棒術のように握って構えた。

「・・・・っ！？」

緋色の光がさらに強まったので、俺はアリアを掴んだまま言葉を失う。すると光はそのままアリアの身体から弾けるようにあちこちに飛び散った。

「よーし、よしよし。良い子じゃ。・・・戻れ戻れッ」

玉藻は光の中心に語りかけるようにしながら御幣で受け止めた光

の1つをアリアの左胸に跳ね返した。

「・・・・っん！」

メーヤも光を剣でラクロスのパスのように受け止めると、光を跳ね返す。しかしそのコースは少し外れている。

「っ！」

駆けたジャンヌがラケットのように振るった剣で光を弾いて軌道修正をして・・・それもアリアへと返ってくる。しかし残りの光は先ほど『眷属』を宣言していた5人の手に渡ってしまった。5人の手つきを見るに、みるみるうちに弱まっていく光は、何やら極々小さな宝石のような固体になって安定しているようだ。

「その殻、みんなにもあげるわ！『眷属』についたご褒美よ！それにこれ、お父様のカタキへの嫌がらせだから、1人で持つより、いやらしくていいでしょう？」

ヒルダはルビーの宝石のような光を胸元に収めると、再び牙を見せる。・・・こいつ、まだ何かする気か？

「・・・もしこれ以上続けるのなら・・・俺も本気で戦わせてもらうよ」

「「「「っ！？」」」」

五代さんは黒い霧のようなものを纏いながら周囲に電撃を散りばめて、ヒルダの方向を見る。その姿を見た誰もが、伝説の凄さ、なんかよりも、圧倒的恐怖、を感じてしまっていた。

「・・・い、いくら私だって、究極の闇、と戦うなんて無謀なことはしないわ。いいわ、この場は引き下がらせてもらうわ」

微かに肩を震わせているヒルダが、そう告げると共に・・・『眷属』と宣言した奴らは霧の中に消えていく。

「待ちやがれ！」

「ガァァァァ！！」

俺はゆっくりとアリアを地面に降ろしてヒルダを追いかけようとすると・・・再びライオンクラゲヤミーが俺に襲い掛かってきた。

「くそっ！」

『スキャニングチャージ！』

アリアがやられたことで我を失いかけていた俺はオーキャナーでベルトをスキャンしてメダルの力を身体に収束した。・・・その瞬間だった。

「キンジ！後ろだ！！」

「ん？・・・ぐっ！？」

ドクンッ！

アンクの声に振り返った時にはすでに手遅れで・・・スキャニングに反応するかのように紫のメダルは俺の身体に入ってきた。な、何だこれは！？・・・まるで激しい力が俺の全身で暴れているような感覚だ！

「ぐぁ・・・うぅ・・・」

本来は黄色であるはずのシャチヘッドの複眼は・・・紫色に数回点滅をする。そして黒い霧になってしまうようにオーズの変身が解かれてしまったかと思うと・・・ベルトからシャチとカマキリ、そしてバッタのコアメダルが吹き飛んでしまった。

「ガオオォォォォ!!」

俺が苦しんでいるのを狙ってライオンクラゲヤミーは爪で引き裂こうとしてくる。

「っ!!・・・超変身!!」

アリアが落とした銀色のガバメントを拾い上げた五代さんは緑色の仮面戦士・・・目撃証言とは違うがクウガの1つのフォームっぽい姿に変身すると、銀色のガバメントは独特の形のボウガンに変わった。

「・・・・・・」

ドンッ!

「ガァ!!・・・・ガァァァァ!?」

ドオォォォォォン!

ライオンクラゲヤミーの爪が俺を切り裂く前に、風で作られたの矢のような弾丸がその爪ごとライオンクラゲヤミーの胴体を貫く。その攻撃を喰らったライオンクラゲヤミーは数秒我慢した素振りを見せながら後ろに後退すると爆発してセルメダルとなった。

「・・・ぐっ・・・はっ・・・」

俺はその光景を最後に意識を失ってしまった。

「・・・チッ！」

敵らしき奴らがいなくなったのを確認したアンクは意識を失って倒れている俺に駆け足で駆けつけてくる。

「・・・アリア・・・」

アンクが声に振り向くと、ジャンヌがデュランダルを鞘に収めてアリアのもとに駆け寄ってきた。

「ジャンヌ、お主を責めはせぬ。多少の小競り合いになるのは読めてはいたが、この小娘が来た事、ヒルダが『殻金七星』破りまで使いおった事、どちらも予想外過ぎたでな」

「彼女が・・・『緋弾のアリア』・・・なのですね」

悔しそうに俯くジャンヌの元に、メーヤも歩いてきた。

「どう見る、メーヤ。アリアの容態を」

「気を失っているだけ・・・のように見えます。命に別状はありません。・・・しかし、分からないのは・・・」

メーヤはアリアから倒れている俺に目を移す。

「・・・さすがの儂にもコアメダルが人間の体内に入るという事例は８００年間、一度も聞いたことがない。それにアンクも・・・リク兄様もあの紫色のメダルのことは知らないようじゃしの。ジャンヌ、お主も奴らを追え。蕾姫はもう行ったぞ。儂の耳によれば全員、一目散に四方八方に散っておるが・・・あわよくば、１つぐらい首級を預けられるかもしれん。ただし、深追いするでないぞ。儂は『鬼払結界』守りを固める」

「・・・・はい」

ジャンヌは一度、俺に視線を寄せると、玉藻に礼儀正しく頷くと空き地島の東の方へと走っていった。すると走っていくジャンヌから俺の方にアンクは視線を移す。

「・・・キンジ・・・っ!?」

何かに気づいた様子のアンクは急いでバッタのコアメダルを拾い、シャチとカマキリのコアメダル拾おうとするが・・・・

「・・・何だか色々と予想外だけど・・・せっかくだからこれは貰っていくよ」

何の前触れなくやってきたカザリにシャチとカマキリのコアメダルが奪われてしまった。

「カザリ!てめぇ!」

アンクはコアメダルを奪って走り出したカザリを追いかけようとするが・・・・

「アンク！今の君じゃあ、駄目だ！」

緑から赤に変わったクウガに止められた。

「・・・きっと2人とも大丈夫だ。だから落ち着こう・・・」

「・・・・チッ！・・・・」

舌打ちをしたアンクは悔しそうに俯くと意識のない俺とアリアに目を移す。するとアンクの足元にバッタカンがやってきた。

『アンク！大変だ！仮面戦士科が・・・武偵高が襲撃を受けてる！今すぐ遠山と駆けつけてくれ！・・・ぐぁ！？・・・』

後藤の声での通信はそこでバッタカンが破壊された音がして途切れてしまった。

「っ！？・・・おい、後藤！！それはどういうことだ！おい！・・・・チッ！」

「アンク！？・・・玉藻！キンジ君とアリアちゃんを頼んだよ！」

アンクはすぐさま武偵高へと走り出した。そしてそれを追うようにして五代さんも武偵高へと急いだ。

・・・・・・・・

・・・

綴に連絡を取った。すると仮面戦士科の学科棟の屋上から赤い仮面戦士が飛び降りてきた。

「・・・・おばあちゃんは言っていた。暗い霧が立ち込める夜には、悪党が集まる。とな」

仮面ライダーカブト・ライダーフォーム。・・・つまり天道だ。

「天道くん!?・・・はやくない!?」

「・・・学科棟でひよりの誕生日プレゼントに悩んでいたら・・・・こんな時間になっていた。・・・そんなことよりも・・・今はこの怪人達だろう?・・・ライダーキック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「っ!?」

ドオォォォォン!!

カブトは目の前にやっていた黄色いマフラーのショッカーライダーを回し蹴りで蹴り飛ばす。

「さっすが天道くん!・・・・っ!?天道くん!!後ろだ!!」

「っ?」

ビュゥウウン

「ぐあぁぁぁぁぁ!?」

どさっ

アギトの声に反応したカブトは後ろから飛んできたミサイルを身

体を少しだけ逸らして避ける。・・・そのミサイルは仮面戦士科の学科棟に直撃する前に、文字通り裁鬼が身体を張って防いだ。・・・ミサイルの飛んできた先には４つのミサイルがセットされているランチャーを担いだ黒い機械のような仮面戦士が立っていた。

「・・・黒い・・・Ｇ３―Ｘだと？」

「・・・・・・」

カブト達の前でランチャーを向けているのはＧ３－Ｘにそっくりな仮面戦士だった。そしてその黒い仮面戦士は無言で再びランチャーを構える。

「させるかぁぁぁぁ！！」

ガッ

「・・・っ！？」

そこに掴みかかったのは氷川・・・Ｇ３－Ｘだった。そしてＧ３―Ｘは黒い仮面戦士を両手で挟むように掴んだまま強襲科の方に走り始める。

「先生！それと天道さんは、こいつを俺に任せて戦っていてください！！」

「氷川くん！？・・・分かった。それじゃあ、任せるよ！・・・ハァッ！」

Ｇ３―Ｘに黒い仮面戦士を任せると発言したアギトは・・・光とともに、マグマを思わせるような筋肉質に見える赤い仮面戦士に変

わった。・・・・アギト・バーニングフォームだ。

「はぁぁぁぁぁ・・・フンッ！」

「ぎゃっ！？」

ドオォォォォン！

アギトは真っ赤に燃える拳で近くに寄ってきたスカル魔を殴り飛ばして倒した。

「・・・それにしても・・・この数が一気に侵入してくるなんてどういうことなんだ？」

大量のエヴィル怪人に囲まれたアギトは拳を構えながら、そう呟いていた。

強襲科の学科棟まで黒い仮面戦士を誘導したＧ３－Ｘは折りたたまれているＧＸ－０５の暗証番号を押す。

『カイジョシマス』

「ハァァァァァ！」
ダダダダダダダッ！
G3―XはGX―05を乱射して黒い仮面戦士を攻撃するも・・・
・ほとんど当たらない上に、当たっても大したダメージがない。
「・・・あれほど銃の命中率を上げろと言っただろ氷川」
「っ！？」
黒いG3－Xに似た仮面戦士の声に・・・G3－Xは驚いたような反応をする。
「その声！？・・・ま、まさか、水樹先生！？」
『水樹？・・・もしかして、去年まで仮面戦士科の先生をしていたあの水樹志郎（みずきしろう）さん？・・・まさか、あの人はすでに爆破事件に巻き込まれて・・・・』
「・・・あぁ、たしかに死んだ。・・・人間としてな。今の俺はエヴィル8幹部の1人、機械戦士、仮面ライダーG4のパーツの一部だ」
そう言った黒い仮面戦士・・・仮面ライダーG4は4発のミサイルがセットされているランチャーをG3－Xに向ける。
「水樹先生が・・・・最近出現し始めたエヴィルという組織の幹部？・・・そんな・・・嘘ですよね？」
ガシャンッ

Ｇ３―Ｘは動揺のあまりにＧＸ－０５を落とし、武器も何も持たないままＧ４に歩み寄る。・・・しかしＧ４はランチャーを構えたままだ。

『氷川君！正気に戻りなさい！氷川君！』

「・・・・・・・」

ドォォン！

小沢さんの説得にも耳を貸さないＧ３－Ｘに・・・Ｇ４のミサイルは発射された。

「何をやってるんですか氷川さん！」

Ｇ３―Ｘにミサイルが直撃する寸前、昔テレビに入っていた特撮である宇宙刑事ギャバンのようなパワードスーツがＧ３－Ｘに体当たりをしてミサイルの軌道上から外した。

「っ！？・・・北條さん！？」

『そのアーマー・・・Ｖ１システムね！勝手に持ち出さないでよ！』

パワードスーツ・・・Ｖ１システムの装着者となっていたのは強襲科の２年である北條通（ほうじょうとおる）だった。

「・・・今はそんなことを言っている場合ではないですよ小沢さん」

「・・・・・・」

Ｖ１は隣を見ると・・・Ｇ３－Ｘは放心状態のような感じになっ

てしまっていて、とても戦えそうな状態ではなかった。

『・・・そうね、北條君。氷川君を連れて撤退をお願い！』

「・・・了解しました！」

「・・・・・・・・・」

Ｇ３－Ｘに肩を貸したＶ１はその場から走り始める。そんな何時でも狙ったら倒せそうな状態であるＧ３－Ｘ達をＧ４は何故か狙うことはしないで、何処に立ち去っていった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

Ｇ３－ＸとＶ１がＧ４から撤退をした頃、駆けつけた信司こと龍騎、秋山ことナイト、そして凍条ことタイガはオーディンと戦っていた。

「くらえぇぇぇぇ！！」

「フンッ！」

「セヤァァァ！！」

龍騎はドラグセイバーを、ナイトはウイングランサーを、そしてタイガはデストバイザーを同時にオーディンに振るうが・・・・オーディンは瞬間移動のような動きで龍騎達の攻撃をあっさりと回避する。

「おいっ!ちょこまか避けんなよ!」

「・・・このままでは埒が開かないな」

「どうするんですか?秋山先輩・・・それと・・・えと、お馬鹿な先輩!」

どうやらタイガ・・・凍条は城戸の名前を覚えていなかったらしく、第一印象で城戸を呼んだ。

「名前分かんないならせめて先輩だけにして!!」

「ふざけてるんじゃない城戸!来るぞ!」

「うわっ!?」

龍騎達はオーディンの双剣を回避しながらも攻撃をしようとするが・・・やはり回避されてしまう。

「・・・ハァ・・・ハァ・・・このままではこちらの消耗が激しい。・・・何とかしないとな」

「だったら煉!サバイブのカードを使おうぜ!」

ベルトから炎に包まれた黄金の翼の絵柄のカードを取り出した龍騎は・・・銃のようなデザインに変化したバイザーにカードをセットしようとすると・・・・

「・・・お前！丁度いいぞ！」

「うわっ！？」

オーディンに首を掴まれてサバイブのカードを地面に落としてしまった。

「・・・一見単純に感じられる動きだが、直感的な行動力で戦闘を自分のペースに持ち込もうとする戦闘スタイルか。面白い・・・・気に入ったぞ！」

そう言ったオーディンが龍騎のベルトに触れると・・・・龍騎のデッキはベルトから吹き飛び、突如鏡の中から出てきた黒いデッキがベルトにセットされる。

「お前をエヴィルの仮面戦士・・・リュウガにすることにする」

「う、うわあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「城戸おぉぉぉぉぉぉ！？」

変身が解除された信司は・・・・それと同時に出現した2枚の黒い虚像に挟まれた途端、黒い龍騎に変身させられてしまった。

「・・・・・・・」

「き、城戸？」

サバイブのカードと龍騎のデッキを急いで拾ったナイトは、リュウガ、に変身してしまった信司に近づこうとするも・・・・

「・・・・・」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

ブンッ！

リュウガはナイトに黒いドラグセイバーを振り下ろしてきた。

「っ！？」

ガギィィィン！

ナイトはウイングランサーでリュウガのドラグセイバーを受け止めるも・・・・力勝負で押され気味になってしまう。

「おい！正気に戻れ城戸！！」

「・・・・・・・」

リュウガとナイト・・・信司と秋山の戦いが、誰にも望まれない形で始まってしまった。

「先輩を正気に戻せぇぇぇぇ！！」

ブンッ！

「・・・・ふんっ」

タイガはデストバイザーをオーディンに向かって振るうが・・・・

右手の中指と人差し指で止められてしまう。

「・・・凍条・・・とか言ったな。・・・お前もエヴィルに入らないか?そうすればきっとお前の望んでいた‘英雄’になることができるぞ?」

「・・・・・・・」

仮面戦士科が襲撃された夜は・・・まだ始まったばかり。

襲撃！仮面戦士科！　前編（後書き）

今週の金曜と土曜は諸事情で更新できそうにありません。ですから今週の「欲望の交差」の更新は木曜日からお休みです。申し訳ありません。

襲撃！仮面戦士科！　後編（前書き）

今回は前回の襲撃の続きで、所どころの戦いです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア
？？？コア
？？？コア
？？？？コア

サソリギジ

襲撃！仮面戦士科！　後編

「いくぜ！いくぜ！いくぜぇぇぇぇ！」

モモタロスが入った亮太郎が変身した電王・・・電王・ソードフォームは剣を振り回して次々とスカル魔達を切り倒す。

「君たち、僕に釣られてみる？・・・ハァッ！」

「ダイナミックチョップ・・・生！」

「お前たち、倒すけどいいよね？・・・答えは聞いてない！」

電王が次々とスカル魔などの戦闘員を倒す中、その後ろでは青い亀を思わせルイマジンの‘ウラタロス’と金色のゴツイイマジンの‘キンタロス’紫でポップなイマジンの‘リュウタロス’がそれぞれの武器で戦っていた。

「まったく・・・私には似ても似つかぬ戦いであったか」

白い白鳥のようなイマジン‘ジーク’は仮面戦士科の学科棟の上から白い羽を散らして怪人達を攻撃する。・・・そうしてスカル魔などの戦闘員が倒れてく中、１体の幽霊海賊のような仮面戦士が駆け寄ってきた。

「うおっ！？」

ガギィィィン！

電王は咄嗟に幽霊海賊が振り下ろしてきた剣を受け止める。

「・・・エヴィル8幹部の1人、天草死朗（あまくさしろう）・・・・仮面ライダー幽汽だ。仮面ライダー電王、手合わせ願おうか？」

「上等だこの野郎っ！・・・亀！クマ！小僧！」

幽汽の剣を弾いて、距離を取った電王は赤い携帯のようなものをベルトに装着する。

「ＯＫ！」

「いっちょやったるでぇ！」

「わーい！てんこ盛りぃ！」

『ＣＬＩＭＡＸ　ＦＯＲＭ』

ウラタロス達はそれぞれ光とともに仮面に変化すると、電王のアーマーもレールが各箇所についた装備に変化する。そしてそれらの仮面が電王の各箇所に装着されて・・・・

「俺達、参上！」

電王・ソードフォームはクライマックスフォームへと変身した。

「いくぜ海賊野郎っ！！」

クライマックスフォームとなった電王は幽汽に剣を振るうも・・・・

「遅いな」

ガギィィィン

電王の剣は幽汽の剣に受け流されてしまい・・・・

「フンッ！」

「「「ぐわぁぁぁぁぁ！？」」」

そのまま電王は斬りつけられてしまった。

『このままじゃまずいよモモタロス』

「仕方ねぇ。・・・俺達の必殺技で一気に仕留めようぜ」

『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＵＰ』

パスをベルトにセタッチしてフリーエネルギーを刀身に溜めた電王は走り出す。

「必殺・・・俺達の必殺技！！クライマックスバージョン！！」

「・・・その程度で俺が倒せるとでも？」

幽汽は剣を腰に収めて、鞭と駒を取り出すと・・・鞭で駒を弾いて電王に放った。

「なっ！？飛び道具だとっ！？・・・うわぁぁぁぁぁ！？」

ドオォォォン

駒は電王のアーマーにぶつかると爆発し、電王は吹き飛ばされてベルトが吹き飛んでしまう。

「うわぁぁぁぁっ！？」

変身を解除された亮太郎は骸骨を思わせるイマジンに首を掴まれる。

「ヒッヒ・・・この身体、貰っていいか？」

「・・・勝手にしろ。敗者がどうなろうと、知ったことか」

「それじゃあ遠慮なく・・・」

幽汽はそう言って立ち去っていくと・・・骸骨を思わせるイマジン・・・スカルイマジンは亮太郎の身体に憑依した。

「お～！さすが仮面ライダーに変身する人間の身体だぁ！ひょろく見えるが割と鍛えられてやがる」

スカルイマジンに憑依されて白い髪になった亮太郎は近くに落ちていたベルトとパスを拾って、ベルトを腰に巻きつける。するとベルトは独特のデザインに変わってしまう。

「せっかくだ！・・・変身っ！！」

『ＳＫＵＬＬ　ＦＯＲＭ』

亮太郎は・・・もう1人の幽汽。・・・仮面ライダー幽汽・スカルフォームに変身してしまった。

「てめぇ！亮太郎から離れやがれ！」

モモタロスはスカル幽汽に殴りかかろうとするが・・・・

「・・・くっ！」

途中で拳を止めてしまう。憑依されてしまっているとはいえ、仲間だから・・・・亮太郎だからモモタロスは攻撃できなかった。

「どうした？攻撃しないのか？」

スカル幽汽はスカルイマジンの時の剣を握り締めるとモモタロスに向かって剣を振り下ろす。

「ぐあぁぁぁぁぁっ！？」

その剣撃を喰らってしまったモモタロスは斬られた場所から砂を流しながらその場に倒れる。

「先輩！？」

「モモの字！？」

「モモタロスっ！？」

ウラタロス達は倒れるモモタロスに駆け寄ろうとするがスカル魔達に阻まれてしまう。

「トドメを刺してやる」

「く・・・畜生。・・・亮・・・太郎・・・」

モモタロスは残っている力で必死にスカル幽汽にしがみつくが・・・蹴り剥がされて、トドメの剣を振り下ろされる。

「何をしておるお供その1っ！」

バサッァ

「ちっ！・・・まだいたのかよっ！？」

学科棟の屋上から飛び降りたジークは無数の白い羽根を周囲にばら撒いて、スカル幽汽の視界を阻むとモモタロスを掴んで下がる。

「者ども・・・我が友を見捨てるのは心苦しいが、この場は引くぞ！」

ジークはモモタロスをキンタロスに渡すと敵に背を向ける。

「・・・そうするしかないようだね」

「・・・亮太郎は操られて・・・モモの字は負傷・・・完全にわいらの負けや」

「亮太郎！必ず助けるからね！」

イマジン達はスカル幽汽が羽根を振り払っている間にその場を離れた。

・・・

タイガは拳を握るとオーディンに殴りかかる。

「・・・見込みがある者は生かしてやろうと思っていたが・・・・
仮面ライダータイガは駄目らしいな」

「うおぉぉぉぉ！！」

タイガの拳を瞬間移動で避けたオーディンは、後ろから剣を振り下ろす。

「こっのぉぉぉ！！」
ドカッ！

「ぐっ！？」

その剣が自分に当たる前に、タイガはオーディンを蹴り飛ばす。

「・・・まさかこの私に一撃を入れる仮面戦士がいるとはな。・・・
いいだろう。本気で戦ってやろう！」

「・・・・・」

オーディンは2本の黄金の剣を構えながら全てをひれ伏すような殺気を放つ。・・・しかしタイガはそれに怯まずに拳を構える。

「・・・僕の実力じゃあお前に勝てない。・・・・力の差ぐらい分かってるさ。だけどここで引く訳にはいかないんだ。ここで逃げるようじゃ先輩に顔向けできないからね。・・・・ハァァッ！！」
ガギィィン！　ドカッ！

オーディンの左の剣を右拳で弾いたタイガは、左拳でオーディンを殴る。

「フンッ！」

タイガの拳にまったく怯まなかったオーディンは、タイガを右の剣で斬りつける。

「ぐわっ！？」

その剣を喰らったタイガは仮面の半分が割れ、胴体には斜めに大きな傷跡がつく。

「まだまだぁ！」
ガギィン！

それでもタイガは前転してデストバイザーを握り、そのままそれを横に振って片方の剣を弾き飛ばす。

「はぁ・・・はぁ・・・僕の力じゃ・・・ここまで・・・か」
ドサっ

タイガはそこで力尽きて倒れてしまった。

「・・・トドメだ」

オーディンは倒れて意識を失い、変身が解除された凍条に剣を振り下ろそうとすると・・・・

「おっと・・・させないよ」

ドンッ！

突如その場にやってきた緑色の機械的な仮面戦士・・・仮面ライダーゾルダは銃型召喚機，マグナバイザー，の銃弾で剣の軌道を逸らした。

「・・・英雄はねぇ・・・英雄になろうとしたら失格なのさ。それに誰かを英雄に仕立て上げても・・・所詮そんなのは紛い物。本当の英雄ってのはみんなに感謝される人じゃなくちゃね。・・・・そんなわけでさぁ・・・大人しく投降してくれない？」

「・・・・・・」

オーディンの周りはすでにギャレンにイクサ、デルタにシザースといった仮面戦士達に囲まれていた。

「・・・仕方ない。この場は引くとしよう」

瞬間移動で仮面戦士達の包囲網を抜け出したオーディンは・・・・ナイトと戦闘中だったリュウガを掴んだ。

「・・・時間はそれなりに稼いだ。まもなくミッションも成功するだろう」

「ミッション？それはどういう・・・」

ゾルダはオーディンを問い詰めようとするも・・・・オーディンはリュウガを掴んだまま瞬間移動をして何処かに去っていってしまった。

「城戸！城戸ぉぉぉぉぉ！！」

そしてその場には・・・敵の幹部の操り人形にされてしまった仲間の名を叫び続ける黒き騎士と、勇敢に戦い気を失った後輩。そんな2人を取り囲んでいる何人かの仮面戦士がその場に取り残された。

・・・

ても生命力と回復力が高いアンデット細胞を取り込んで作られた身体は、すぐに再生してしまっているからだ。

「途中で途切れてしまったが、アンク達にも連絡を取った。もうすぐ遠山達も援護に来てくれるはずだ。それまでは持ちこたえ・・・・」

「・・・後藤・・・お前はスカル魔達の相手を頼む。・・・こいつは俺1人でいい」

キックホッパーはバースがケルベロスアンデットに攻撃しようとするのを止める。

「何を言っている！2人がかりでもこんなに苦戦している相手だぞっ！！」

「・・・こいつはシュンを改造した張本人だ。・・・・これ以上シュンのような被害者を増やさないためにも・・・ここで倒す。・・・俺の脚で・・・」

そう言ったキックホッパーにバースは・・・

「・・・・ふざけるなっ！」

ガンッ

バースバスターで頭を叩いた。

「だったらなおさら協力して倒すべきだ。辛さや悲しみも共有してこその仲間だろ！お前はもっと仲間に頼れ！自分1人ですべてを背負おうとするな！」

『カッターウイング・ショベルアーム・キャタピラレッグ・クレー

ンアーム・ドリルアーム・ブレストキャノン』

バースはフル装備形態のバース・ディになるとドリルアームのついたクレーンアームをケルベロスアンデットに向けて構える。

「・・・まったく・・・最近はうまくいかないことばっかりだ。・・・いくぞ、後藤」

「ああ・・・」

キックホッパーとバースはケルベロスアンデットに構える。そして・・・一瞬の静寂となる。

「ハァァァァッ！」

先に動いたのはバース・ディ。バース・ディはキャタピラレッグで加速をしてからカッターウイングで低空飛行をしてケルベロスアンデットに体当たりをする。

「フンっ！その程度の攻撃では私を倒すことはできぬわっ！」

「ぐあっ！？」

攻撃されたと同時に回復したケルベロスアンデットはバース・ディの足を掴んで地面に叩き落とす。

「ライダーキック！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーはそこにライダーキックを決め込むも・・・

「ぬるいっ！」

マスクドライダーシステムは他のライダーシステムに比べるとパワー不足なので弾かれてしまう。

「・・・・くっ！？」

「矢車避けろ！ブレストキャノン、シュゥゥゥウト！！」

いつの間にか距離を取っていたバース・ディはブレストキャノンからエネルギー砲を放ち、ケルベロスアンデットにダメージを与える。

「今だっ！決めろ矢車！」

「・・・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

そのダメージが回復してしまう前にキックホッパーはケルベロスアンデットにもう一度駆け出す。

「電光ライダー・・・反転キック」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーは電光のように輝く左脚で一度キックを決める技‘電光ライダーキック’をケルベロスアンデットに決めると、学科棟の壁を蹴ってもう一度電光ライダーキックをケルベロスアンデットに決めた。

「ま、まさかこの私が・・・エヴィル8幹部である・・・この私が敗れるなんぞ・・・ぐわあぁぁぁぁぁ!?」
ドオォォォォン!!

ケルベロスアンデットは電撃まじりの爆発で爆散すると・・・・
バース・ディはバースに戻る。
「・・・戦闘向きじゃない科学者が前線で戦おうとするからだ」

「ハァ・・・ハァ・・・やったな矢車」

「・・・シュン。お前を改造した奴は倒し・・・」

キックホッパーとバースは幹部の1人であるケルベロスアンデットを倒したのもつかの間・・・・

ドオォォォォォン!!

「「っ!?」」

仮面戦士科の学科棟は爆発して、半壊してしまった。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

キックホッパーとバースがケルベロスアンデットと戦っている頃、

エヴィル?2の月影は銀色の戦士に姿を変えて仮面戦士科の学科棟内にいる仮面戦士達を次々と切り伏せていた。

「・・・まったく・・・潔く負けを認めてこの場所を開け渡していれば怪我をせずに済んだものを・・・戦略というのもがまるでなっていませんね」

「おっと、これ以上は進ませないぜ」

銀色の戦士が奥へと進む途中、正太郎と陽が変身したWはその前に立った。

「・・・正太郎・・・あの姿はまさか・・・」

「ああ、間違いないぜ。20年前に光太郎さんが戦った戦士・・・世紀王シャドームーンだ」

「はい、確かにこの姿はシャドームーンですが、ゴルゴムに改造された‘テルヒコ’のシャドームーンとは別固体です。しかし戦闘力では・・・私の方が高いと思っているつもりです」

銀色の戦士・・・シャドームーンは赤く輝く剣の刀身をWに向ける。

「陽・・・出し惜しみはしてられねぇ。エクストリームだ」

「分かってる」

『CHUUUUU!』

Wの手元にエクストリームメモリが飛んでくると・・・Wはそれ

をベルトにセットして、それを開く。

『『ＸＴＥＲＥＭＥ』』

「「プリズムビッカー！」」

『ＰＲＩＳＭ』

Ｗ・サイクロンジョーカーエクストリームとなったＷはプリズムビッカーを左手に持つとプリズムメモリを柄にセットして剣を抜く。

「・・・新しい変身ですね。まぁいいでしょう。１分だけ相手になってあげます」

ビュンッ！

「「っ！？」」

ガギィィン！

一瞬にして距離を詰めてきたシャドームーンの剣をＷＣＪＸは咄嗟にプリズムシールドで防ぐ。

「なんていう素早さだ！クロックアップほどではないが、超検索で行動を読むことが間に合わないなんて・・・」

「だったら一撃で勝負を決めるぜ！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＨＩＡＴ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＬＵＮＡ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「ビッカーチャージブレイク！」」

ＷＣＪＸは４本のメモリの力を収束した剣でシャドームーンに斬りかかるが・・・・

「・・・無駄なことを」

ザンッ！

その攻撃を喰らう前にシャドームーンはＷＣＪＸを斬った。

「「うわぁぁぁぁぁっ！？」」

その攻撃を喰らい変身を解除された正太郎と陽はその場に倒れてしまう。

「ここで殺しはしませんよ。・・・・どうせまもなく散りゆく命ですからね」

正太郎と陽から目を逸らしたシャドームーンはドンドン学科棟の奥・・・地下室へと進んでいく。

「・・・ここですね」

ドカァァァン

‘ＫＲ’と刻まれた扉を破壊したシャドームーンは厳重な警備を一太刀で破壊し、そこに封印されていたショッカーマークのメダル‘ショッカーコア’を引っ張り出した。

「ふふふ、手に入れましたよ。ショッカーメダル！！」

この日・・・一夜にして東京武偵高の仮面戦士科は壊滅してし

まった。

襲撃！仮面戦士科！　後編（後書き）

原作8巻、9巻・・・そして10巻との間でしばらくやる予定のオリジナル話は『エヴィル決戦編』にしたいと思います。日曜日からは「欲望の欠片」を始めるので、次回の更新は来週になります。

壊れる氷像（前書き）

前回の更新から三日以上日が空いてしまって申し訳ありません。
今回はいよいよキンジが・・・・。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア
？？？コア
？？？コア
？？？？コア

サソリギジ

壊れる氷像

エヴィル本部、影月は仮面戦士科の学科棟から奪ったショッカーコアを首領に届けようとしていた。

「首領様、お望みのショッカーコアメダルを持って参りました」

「ああ、ご苦労。けっこう暇だったから今度は‘アドベントマスター’って呼ばれてる奴を破壊しに行こうかと考えていたんだぞ。・・・ほら。とっとと渡せ」

「はっ！」

影月は前に出て首領にショッカーコアを渡すと再び後ろに下がる。

「・・・今回の戦闘で天王寺・・・ケルベロスアンデットが敗退し、改造人間を作り出すことができなくなってしまいましたが・・・いかが致しましょう？」

「ん？あいつがやられたのか？・・・別に気にすることはない。コイツが要ればな・・・」

チャリィン

首領はショッカーコアを自身の隣に山済みにされているセルメダルの上に落とす。・・・するとショッカーコアはそのセルメダルを引き付け始めた。・・・集まったメダルはショッカーの紋章である鷲に酷似した姿となり、鷲の顔の下にヤミーと思われるガスマスクの様な顔面をした眼や肩部に蛇が突き出ていて、ゲルショッカーの紋章である「蛇が絡み付いた鷲」にも見える怪人の姿へと変化し始

めた。

「ショォォォォッカァァァァ！！」

「・・・ショッカーグリード。８００年前に錬金術師としてコアメダルを作っていたショッカー首領が最後に作り出した破壊の象徴。こいつが壊せないものなんてない」

「それは頼もしいですね」

「それにマキが紫のメダルの力で面白そうなヤミーを作ったらしいじゃないか。・・・量より質だ。無能の人間を改造して雑魚を増やすより、有能なものを増やす方がいいだろ。だから実力の判断も兼ねてマキのヤミーを東京の武偵高近くに向かわせろ」

「かしこまりました。それではドクターに報告しておきます」

俺が知るよしもないところで・・・どうやら闇は止まらずに動き続けていた。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

宣戦会議での戦闘から1週間が経過した。俺はその間、まるで半年前ぐらいのコンボ慣れしてなかった時ぐらいに寝込んでいたらしい。そして寝覚めた俺はその間に起こったこと・・・仮面戦士科の学科が半壊して、ほぼ壊滅状態だということを正太郎から聞いた。

「・・・信司と亮太郎が・・・・操られてエヴィルに・・・か」

怪我人は大勢いるものの、幸い死者は0人だったらしい。と、ここまでは安心できる内容だが・・・信司と亮太郎がエヴィルに操られて行方不明となっているらしい。

「俺達はそれほど怪我はなかったが・・・半分以上の仮面戦士が戦える状態じゃなくなってる。特に3年は名護さんと橘さん、そして相川さん以外は全滅だ。1年はほとんど後方支援で前線には可能な限り立たせなかったんだが・・・最前線で戦った数名・・・・特にエヴィル幹部と戦った凍条が重傷だ」

「凍条・・・・」

先ほど俺の病室にやってきた凍条は立って歩くほどピンピンしていたのだが・・・・はっきり言って誰が見ても我慢しているようにしか見えない。明日夢が言うには1月は絶対安静らしい。

「・・・こっちの事情は話したぜ。そっちもどうして入院することになったのか説明してくれよ」

正太郎はどうして俺が入院しているのかを聞いてくるが・・・・俺も目が覚めたらこの病室にいたからよく分からない。・・・たしか宣戦会議の後にヒルダにアリアの殻金七星とかいうのが奪われて、そのアリアに近づこうとしたら、妨害したライオンクラゲヤミーを倒そうとした直後に紫のメダルが俺の身体に入ってきて・・・っ！？・・・そうだった。俺の身体の中に紫色のメダルが入ってきたんだった。

「アリア!!アリアはどうした!?」

「っ!?・・・アリアならお前よりもだいぶ前に目覚めて普通に学校に通ってるぞ。毎日この時間に来ているから、そろそろ見舞いに来るんじゃないか?1週間前の夜に何があったか記憶になくて、お前がコンボで無茶をして寝込んでると思ってるらしいが・・・お前の方も何かあったんだな?」

「あぁ・・・アリアが・・・」

「おっ邪魔しま~す!」

俺がアリアのことと、俺自身に起こった出来事を語ろうとした途端、病室の窓からインディアンの仮面を被った男が入ってきた。

「えっ?お前誰だよ!?」

「え?俺?・・・あぁ、お構いなく」

「構うわっ!!」

あのノリ・・・あの仮面・・・そして武偵病院の5階までの壁を登ってくる人物。間違いなくあの人だ。

「五代さん・・・何やってんですか?」

「あ~。やっぱりバレてた?」

五代さんは仮面を外すと辺りを見渡す。

「アンクは・・・いないか。・・・ああ、俺は五代祐輔！趣味はロッククライミングで得意料理はカレー！よろしくね！」

「え？あぁ、はい。俺は明智正太郎です」

「・・・正太郎くん。すまないけど少し席を外してくれないかな？」

先ほどの笑顔とは裏腹に少し深刻な表情をした五代さんの顔を見た正太郎は、少しだけ理解したような表情になる。

「・・・ワケアリってことか。・・・分かった。言える時になったらちゃんと説明しろよ」

正太郎がしぶしぶ病室を出て行くと入れ違いで玉藻が入ってきた。

「アリアが心配か、遠山の？」

「当たり前だろ」

「案ずるでない、まだ緋緋神にはならぬ」

ヒヒガミ？何だそれ？・・・と思いながら俺は眉を寄せると・・・・玉藻は俺が何も分かっていない事を理解したようで説明し始めた。

「・・・遠山家で何一つ引き継がれておらんようじゃから儂が教えるしかないようじゃの。緋緋神が出現したのは７００年前・・・アンクが封印され、リク兄様が一度命を落として、この世に存在していなかった時代じゃからの。・・・儂は玉藻。白面金毛の天狐・・・お前たちでいう妖怪じゃ」

妖怪かぁ。・・・色んなものを見てきたから今更驚かないが、本当にいるんだな。

「母も玉藻、祖母も玉藻・・・儂の一族は昔から人間と色金の間を見張り悪用を防いできた。その幾星霜で世界中に和合、敵対の関係もでき、今に至る。その色金じゃが・・・ここから先はアリアに言うでないぞ。・・・その心臓にも埋められておるのじゃ。それも世界でも稀に見る緋緋色金がの」

「あ、ああ、そこは一応、俺もアリアも知っている」

シャーロック戦の時に・・・シャーロック本人がしゃべっていたからな。

「色金と人は繋がることができる。その繋がりには2種類あってな。『法結び』お主らでいう超能力のような繋がりと『心結び』・・・感情の繋がりじゃ。質量の多い色金は法も心も、人の感情に繋がってしまう。特に『心結び』、つまり色金が人の心と繋がりすぎると、人と色金は混ざり、しまいには取り憑かれてしまうのじゃ」

そういえば前に白雪と風雪が言っていたな。「色金は人の心と通じる金属」だって。

「色金に憑かれるといったいどうなるんだ?」

「緋緋神になる。なったら殺せ」

なっ!?アリアを殺せだと!?

「殺せって、おい!?」

「安心せい、すぐにはならん。とはいえ、なったら躊躇わず殺せ。あの時の様子を見る限り小娘はお主を信用しているようじゃからの。まぁやれるじゃろ。お前がやらなくとも誰かが殺す。儂でも良い」

「やめろよっ！殺すだの殺さないだの・・・そんな話・・・」

俺がそう言うと、五代さんも複雑そうな顔をする。

「この世に戦が起こってもよいのか？」

戦？・・・どういうことだ？

「緋緋色金は戦と恋を好む厄介な色金でのぅ。それに憑かれたもの・・・緋緋神はその闘争心と恋心を激しく荒ぶかす祟り神となるのじゃ。７００年ほど昔、なった人間もおる。その者は帝を惑わし、戦を起こし・・・ついには遠山侍と星伽の巫女、そして7人の戦鬼によって打ち殺されたのじゃ」

なっ！？・・・嘘だろ！？ってことはアリアもそんな風になっちまうのかよ！？

「案ずるでないと言ったじゃろ。アリアはすぐにはそうならぬ。・・・その悲劇を繰り返さないために星伽の巫女が編み出したのが『殻金』じゃ。アリアの緋緋色金にもしっかりと被せられておった。殻金は緋緋色金にメッキのように被せて『法結び』だけを結ばせ、『心結び』は絶縁する。そういう都合の良いものを作り上げたのじゃ。殻は七枚あれば『心結び』を絶縁できることが分かったので『殻金七星』とも言うがの。殻があれば法結びは緩やかに・・・３年ほどで結ばれて、心結びは完全に絶たれる」

3年という言葉に俺はイ・ウーでシャーロックが言っていた事を思い出す。・・・たしか緋弾の継承者は能力を覚醒させるのに3年かかると言っていた。それは玉藻の言う『法結び』の完成のことだったんだろうな。

「それで・・・ヒルダのせいで殻金は2枚しか残っていないんだが・・・2枚だとどうなるんだ？」

「おそらく・・・緩やかに色金に取り憑かれていく。いずれ緋緋神にもなるじゃろうな」

「っ！」

「一々慌てるでない。しばらくは大丈夫じゃ。その間に殻金を『眷属』の者共から取り戻せばよい。どうせ戦う相手じゃ。後で7枚集めて戻せば心結びは絶たれ、元に戻る」

「じゃあ・・・その殻金2つで抑えられる期間はどれぐらいなんだ？」

「分からぬ。そんなこと、試した者がおらんからな。ただ儂の見立てでは・・・山勘じゃが数年は持つじゃろ。今日明日にそうなるという訳ではない」

「むしろ今日明日に暴走しそうなのは・・・キンジ、お前なんだよ」

病室に入ってきたアンクは俺が寝込んでいる間預かっていたらしいメダルホルダーを投げ渡してくると、自販機で買ったらしいアイスを食べ始める。

「レントゲンにあのコアメダルは写っていなかった。・・・・それはつまりお前の身体自体にじゃなく、お前の欲望の隙間に入ったか、もっと直接的な・・・人間でいう‘心’に直接入り込んでいるのかもな」

紫のメダルが・・・俺の心に直接？・・・そういえばシャーロックは「コアメダルは純粋な色金」って言ってたな。

「緋緋ではないにしろ・・・・お前の身体にも純度の高い色金で作られたコアメダルが入ってるんだぞ。・・・それもグリードである俺ですら知らないコアがな」

「・・・人間の体内にコアメダルが入るなんぞ８００年もの間で１度もあり得なかったことじゃ。アリアの体内に入っておる『緋緋色金』が恋や戦などの行動的なものに関係してるとすれば・・・・お主のコアメダルはそれよりも直接的・・・お主の欲望そのものに関係してくるかもしれん」

俺の・・・欲望そのもの？

「つまりは・・・暴走のタイミングが全く分からないってことだよ。昔のリクがそうなってしまったようにね・・・」

五代さんはまるでかつて暴走したことがあるように腹部の辺りに右手を添えながら俺にそう告げてくる。・・・・暴走か。たしかにオーズの力に飲まれかけて暴走しかけたことは無くはないが・・・その確立が前よりも上がったって感じってことか。

「そろそろアリアちゃんが来る時間帯らしいから俺と玉藻は帰ると

するよ」

「またの遠山の、それにアンク」

俺達にそう告げた五代さんは玉藻をおんぶすると、先ほど窓から上がってきたのとは逆に窓から飛び降りて立ち去ってしまった。・・・あの人は普通に出入りするって考えがないのか？正直いって不法侵入だぞ。五代さん達が窓から見えない場所まで走り去ってしまったところで・・・・

「キンジ！」

病室の扉からアリアが入ってきた。

「あんたは一体何と戦ってコンボでまた倒れたのよ！最近のあんたが2～3回程度のコンボで倒れるなんてありえないわよ！１０回ぐらい使ったんじゃないの！」

そんなに俺の手元にコンボはねぇよ。アンクのタジャドルとレキに預けてるメダルを合わせても、せいぜい今使えるのは４コンボぐらいだぞ。・・・タトバはコンボかどうか怪しいレベルだが・・・。

「・・・別にコンボを使って倒れたんじゃねぇよ」

「それじゃあ何なの！？外傷がほとんどないのに寝込み続けるなんて・・・・・」

アリアは自分なりに俺のことを心配してくれているのは分かるんだが・・・やっぱり俺のメダルのことや緋緋色金のことを話したほうがいいんだろうか？・・・そう考えた俺はアンクに目を向けるが・

・・アンクは首を横に振っていた。どうやら余計な心配を与えないためにも、まだアリアには言わない方がいいらしい。

「それがだな・・・その・・・・ん？」

俺がどんな言い訳をしようかと考えていると・・・俺の足元にバッタカンがやってきた。

『ぐあっ！？』

その通信の向こうからは・・・いきなり後藤が何者かに攻撃をされているかのような声が聞こえた。

『くっ！？・・・・遠山！病み上がりで悪いが強力な怪人が２体現れた！今は俺と矢車で交戦中だが、俺たちだけではキツい！ほとんどの仮面戦士が動けない状態だから横浜遊園地に来てくれ！！・・・・うわぁぁぁ！？』

ブツン

そこで後藤の通信は途絶えてしまった。

「くっ！？いくぞアンク！」

「あたしも行くわ！」

通信の後、すぐさま病院の外に出た俺とアンクはベンダーをバイクモードにして跨ると、俺のベンダーの後ろにアリアを乗せて遊園地へと急いだ。

遊園地に到着すると何やら観覧車の方から爆発音が聞こえたので俺とアリアはその場所へ走った。

「うわっ！？」

「ぐっ！？」

観覧車の辺りまでやってくると、すでにキックホッパーとバースが2体のプテラノドンのような怪人と戦っていた。・・・・特徴を見る限りはヤミーなんだが・・・・グリードに恐竜を作り出す奴なんていなかったはずだぞ？

「そんなことを気にしてる場合じゃないな・・・変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

「ハァッ！」

ドカッ！

オーズに変身した俺はプテラヤミーに殴りかかるも・・・・

「聞かぬっ！」

「うわっ！？」

まるで効いていなく右腕の翼にはらわれてしまった。

「まだまだっ！」

俺はトラクローを展開して切り掛かろうとするが・・・・

「我々は、消し去る者，メダルの力もまた欲望！、」

バチィィィィン

「ぐあぁぁぁぁぁっ！？」

謎の光を浴びてしまった俺はそれほどダメージがある訳でもないのに強制的に変身が解除させてしまう。

「何なんだこいつ？」

少なくとも・・・オーズの力を無効化するのは確かだな。

「うぇ～～ん！ママ～ぁ！」

どうやって戦うかを考えていると・・・俺は親とはぐれてしまった様子の１０歳ぐらいの少女が、後ろの木陰に隠れていることに気づく。

「全てを無に！！」

２体のプテラヤミーは俺を狙って黒い霧のような攻撃を放ってきた。・・・俺が避けたらこの子にあたるな。

「くそっ！！」

俺は少女を抱えて避けようとするも・・・・避けきれなさそうだ。

「キンジ！？」

「行くな！お前も巻き添えを食らうぞ！」

アンクは駆け寄ろうとしたアリアを慌てて止める。

「アリア！こいつを頼む！」

俺は抱えていた少女をアリアに投げると・・・俺は黒い霧に包まれてしまった。・・・俺の意識はそこで途切れてしまった。

「キンジっ！？キンジィィィ！！」

アリアがそう叫んだ途端、俺の身体から禍々しくも冷たい冷気が放たれて、その黒い霧を払いのける。

「・・・・・・」

黒い霧を払いのけた俺の身体は、無言のままその場に倒れてしまった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

星の光がまるで見えない夜、俺は城の前に立っていた。作りは西洋風でたくさんのレンガからできている。俺はすぐに分かった。・・・これはレキの時に見たような夢だと。

「・・・・・・」

周りを見渡すと離れたところには、アリアや、アンク、白雪といったバスカービルの面々が氷で象られている。・・・自分の夢ながらよくできたもんだな。

「・・・それらがお前の配下か？」

城の階段を降りてきたのはレキの時の夢にも出てきた、知っている姿の知らない戦士、だ。

「・・・配下なんかじゃねぇよ。仲間だ」

「・・・仲間か。他人と組まなければ何もできない弱者の言う言葉だな」

「っ！」

俺が、戦士、に「ふざけるな」と言うよりも先に・・・・

「なっ！？」

世界が‘黒’に染まった。

「お前は自分の欲望を認めろ。そしてその欲望を開放しろ。コアメダルはそのために存在しているのだぞ？」

バキィィィン

「っ！？」

次の瞬間その‘戦士’は俺の近くにあったアンクの氷像をトラクローの斬撃で破壊した。・・・あれがアンクじゃないのは分かっている。しかし俺はその光景に喪失感と怒りを感じている。

「『憎悪』・・・それも立派な欲望だ。どうだ？我に憎悪を抱いているか？」

「・・・・・」

駄目だ。あいつのペースに引き込まれちゃいけない。

「・・・この程度では駄目か。ならば・・・」

バキィィィン

‘戦士’はさらに矢車と後藤の氷像をトラクローで破壊すると、レキの氷像をバッタレッグで蹴り砕いた。

「っ！？」

「くっくっくっ。未だに黙秘を続けるか。いいぞ『強情』も立派な欲望だからな」

バキィィィン

そしてさらに白雪と理子の氷像までも砕かれてしまい、残るはアリアの氷像だけとなってしまった。

「これで最後の1つだ」

「やめろぉぉぉぉぉ！！」

絶えられなくなった俺は‘戦士’を止めようとアリアの氷像の前に走り出す。・・・しかしそれすらも虚しく・・・・

「ふんっ」

バキィィィィン

「っ！？」

アリアの氷像すらも破壊されてしまった。その瞬間、俺は後ろから迫ってきた‘何か’に飲み込まれてしまった。

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「「すべてを無にっ！！」」

「くっ！？・・・なんて言う相手だ。攻撃するどころか、攻撃を防ぐだけで精一杯だぞ！？」

「・・・クロックアップする隙もない。・・・厄介な奴だ」

キックホッパーとバースがそれぞれプテラヤミーに苦戦する中、瞳を紫色に光らせた『俺』は起き上がった。

「・・・・・」

「キンジ！良かった、平気だったのね！・・・・っ？キンジ？」

少女を逃がした後、こちらに戻ってきたアリアは『俺』を見てどこか様子がおかしいことに気づき少し後ずさる。すると俺の身体から3枚の紫色のメダルが飛び出て、勝手にベルトにセットされた。

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プットッティラ～ノザウル～ス！』

そして勝手に動いたオースキャナーが紫のメダルが入ったベルトをスキャンすると・・・『俺』の姿はプテラノドンを思わせる紫の頭部に緑色の複眼、トリケラトプスのような強固な角を肩に纏う腕と胴体、ティラノザウルスのような強靭な足を持つ姿へと変貌した。

「ガアァァァァァっ！」

「キン・・・ジ？」

紫のコアメダルの力に支配されてしまった『俺』は・・・・自分では止めることのできない暴走形態、オーズ・プトティラコンボ、に変身してしまった。

壊れる氷像（後書き）

これからも自動車学校やボランティア活動もあるので更新がさらに不定期になりそうですが、平日に2回は頑張れるようにしたいです。

暴竜零度（前書き）

何とか平日中に更新できました。・・・今回はプトティラ戦闘回・・・というよりも暴走回です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

暴竜零度

「ガアァァァァッ！！」
ピキピキッ

オーズ・プトティラコンボに変貌してしまった『俺』は周囲が凍結してしまうほどの冷気を放つ。

「この力は同類！」

「同類にして・・・敵っ！」

2体のプテラヤミーは『俺』を敵と判断して襲い掛かろうとしてきたが・・・・

「ガァァァァッ！！」
バサァッ！

「「うおっ！？」」

背部の翼状の装甲が大きく広がり、その風圧でプテラヤミーを吹き飛ばす。

「くっ！？ならば・・・・」

このままでは勝ち目はないと思った様子の2体のプテラヤミーは空へと羽ばたく。

「ヴゥゥゥゥゥッ！！」
バサァァッ
「ガァァァァッ！！」
バアァァン！

そんなプテラヤミー達を逃がさないように『俺』もその翼を羽ばたかせてタジャドルコンボの音速飛行に匹敵する速さで飛び上がると・・・腰の装甲を恐竜の尻尾のようにまとめて、その尻尾で２体のプテラヤミーを叩き落とした。

「なんていう戦闘だ・・・」

その光景を見たバースは『俺』が変貌したオーズに驚きの反応をする。・・・その姿になっている『俺』の戦闘スタイルは矢車のような正統派の戦い方ではなく、まるで獣が獲物を狙うような戦いだからだ。

「ヴゥゥゥゥッ」
『スキャニングチャージ！』

地面に着地した『俺』はオースキャナーを手に取ってベルトをスキャンする。すると奇怪な鳴き声と共に両肩の角がプテラヤミーへと伸びた。

「・・・・・」
グサッ！
「ぐおっ！？」

肩から猛スピードで伸びたトリケラトプスのような角は1体のプテラヤミーの身体を貫くと、緑色の複眼は一瞬紫に点滅し、頭部から冷気が放たれる。その冷気を喰らったプテラヤミーは一瞬にして氷漬けになってしまった。

「ヴゥゥゥゥゥッ！」
ブゥゥン！

「・・・・・」
バキィィィィン

その氷漬けのプテラヤミーを『俺』は尻尾を振り回して粉々に粉砕した。そして砕けた氷から飛ばされてきた1枚のセルメダルを握った『俺』は攻撃対象をもう1体のプテラヤミーに移す。

「ガァァゥ！！」
ドガァッ！

地面に向かって無造作に手を突っ込んだ『俺』は地面から恐竜の頭部を意匠した大型の斧を手に取ると、先ほど倒したプテラヤミーのセルメダルをその斧にセットすると銃のように変形させる。

『ゴックンッ！プットッティラ～ノヒッサ～ツ！！』

「ぐおぉぉぉぉぉっ！？」
ドオォォォォォン！！

その銃から放たれた禍々しく紫色に輝くエネルギー砲は、圧倒的な力で逃げ去ろうとしていたプテラヤミーをねじ伏せるように倒した。

「やったな遠山！」

「・・・・・」

これで一安心といった様子のバースは小走りで『俺』のところにやってくる。・・・銃を斧に戻すと、本能で動いている『俺』は次の標的を・・・・

「ガァァウ！」

ブンッ

バースやキックホッパーに変えて斧を振り払った。

「っ！？相棒！何やっている！」

「ガアァァァ！！」

キックホッパーは『俺』を止めようと押さえようとするが・・・『俺』はそのことを気にも止めず斧を振り下ろす。

「矢車！今のキンジは紫のメダルのせいで暴走している！ひとまず下がれ！」

「くっ！？それすらも難しそうだぞ。・・・仕方ない・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

振りかざされた斧に回し蹴りのようにライダーキックをぶつけたキックホッパーは、その衝撃の反動で後ろに跳び下がる。

「・・・・何だあの斧は・・・・一撃でアンカージャッキが壊れたぞ」

キックホッパーの左脚側面のアンカージャッキは先ほどの一撃を受け止めただけで中破してしまい、必殺技が使えなくなってしまった。

「ならば・・・これだ！」

『クレーンアーム』

『ショベルアーム』

クレーンアームとショベルアームを装備したバースは両腕の装備で『俺』を取り押さえようとするも・・・・

「ガアァァァァッ」

ブンッ

「うおっ！？」

それすらも振り払ってしまった。

「くっ！？・・・なんていうパワーだ。俺たちではまるで手に負えないぞ」

地面に叩きつけられてしまったバースはクレーンアームとショベルアームの装備が解除されてしまいながらも『俺』から距離を取る。

「・・・こうなったらクロックアップでベルトを奪って・・・強制的に変身を解除させてみる。・・・後藤、援護を頼むぞ」

バースはキックホッパーのその言葉に頷くとバースバスターを構

える。

「・・・クロックアップ」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

「ハァァァッ！」

ダダダダッ

キックホッパーがクロックアップをするとほぼ同時に、バースはバースバスターからエネルギー弾を連射すると『俺』は再び周囲に強烈な冷気を放つ。

「・・・くっ！？」

ベルトに手を伸ばそうとしたキックホッパーは、その冷気によって両足が凍らされてしまい、身動きができない状態にされてしまった。

「くそっ！？何だあのコアメダルの力は・・・・」

「キンジ・・・」

アンクが『俺』の暴走に焦っていると・・・少し涙目のアリアはゆっくりと前に歩き出す。

「神崎！危険だからこっちへ来るな！」

「・・・・・」

バースの静止も聞かずにアリアは『俺』に近づいてくる。

「キンジ！あんたはあたしのパートナーでしょ！あたしのパートナーがその程度で暴走してどうするの！！」

「ガァァァウ！！」

『俺』はアリアに斧を向けながらゆっくりと歩み寄り始める。・・・それでもアリアは『俺』に恐怖した様子を見せずに近づく。

「あんたは誰よりも仮面戦士の力で人を傷つけることを嫌がってたでしょ！！こんな・・・こんなところで、そんなものに完全に飲まれたらパートナー失格よ！！」

「ヴォォォォッ！！」

ブンッ！

こちらに近づいてくるアリアに向かって走り出した『俺』は、その斧をアリアに向かって振り下ろすと・・・

「・・・・・」

ピタッ！

アリアにあたる寸前で止まった。

「・・・ヴゥ・・・ガァァァッ！！」

その咆哮とともに斧を地面に落とした『俺』は紫のメダルがベルトから外れて俺の身体に戻ると、その変身が解除されて俺の意識が戻る。

「・・・ハァ・・・ハァ・・・お前ら・・・済まない・・」

「・・・気にするな相棒。・・・別にお前が悪いんじゃないんだからな」

変身を解除した矢車は故障してしまったホッパーゼクターを懐にしまう。

「遠山・・・あの姿は何なんだ?お前の身体から出てきたぞ?」

「悪い・・・俺もあのメダルについてはほとんど・・・うっ・・・」

ベルトを外して変身を解除した後藤はさっきの紫のメダルのことを聞いてきて、俺はそのことに知っている限りは答えようとした途端・・・コンボの疲労らしき脱力感でふらついてしまう。

「っ!?キンジ!?」

俺が倒れそうになると、アリアは俺の横に立って肩を支えてくれた。

「キンジ!あんたに何が起きてんのか分からないけど人を助けるだけじゃなく、自分のことも守りなさい!」

「・・・ああ、可能な限りそうするよ。・・・ありがとな・・・アリア」

「・・・バカ・・」

コンボの疲労で薄れていく意識の中、アリアは少し頬を染めなが

らそう呟いたのを見ると・・・俺は再び意識を失ってしまった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺がプテラヤミーを倒して暴れている頃、エヴィル本部にはすでにプテラヤミーが倒されたことが伝わっていた。

「マキの作ったヤミーがオーズに倒されたのか。・・・それもこの前飛んでいったらしい紫のコアメダルを使ったコンボにねぇ・・・」

「いかが致しますか？」

月影が首領にどうするかを尋ねると・・・首領は黒いバックルと青い複眼のバーコードのような黒い仮面戦士の描かれたカードを取り出す。

「俺が出向いて破壊したいのも山々だが・・・どうせお前止めるんだろ？」

「当然です。首領様は組織のトップなのに勝手に自分から動きすぎなのです。組織のトップが不在となると、部下はパニックを起こす可能性があるんですよ？」

「実際、俺が居ないときの指示はお前が出しているからパニックなんてないだろ。・・・そんなことよりも・・・・面白いことを思いついたんだよ。・・・カンザキ！」

「・・・こちらに・・」

首領が名前を叫ぶと・・・月影の近くに飾られていた鏡からオーディンが出てきた。そして‘カンザキ’と呼ばれた男はオーディンの変身を解除すると首領の前に跪く。

「暇つぶしにちょっとしたショーを見せてくれよ！・・・やってもらうことは・・・これだ！」

中央のモニターには全てが反転した世界・・・ミラーワールドの光景が映し出され、その下には龍騎を除いたミラーライダー達が映し出された。そしてドイツ語で書かれていた説明を読んだカンザキはポケットから取り出した1枚の紫のコアメダルを握り締める。

「・・・俺のやってほしいこと・・・だいたい分かったか？」

「・・・なるほど・・・了解しました。私自身の力だけでは不可能に近い計画でしたが・・・絶滅種、空想上の生物を示す‘恐竜系コアメダル’があれば実現できます」

「伊達に‘赤の錬金術師’の子孫を名乗っているわけじゃないな。そこら辺のグリードとかよりもコアメダルを知り尽くしてやがるぜ。・・・それじゃあ計画実行は三日後、それまでに準備を整えておけよ」

「了解しました」

再びオーディンに変身したカンザキは鏡の中に入っていくと・・・
・月影も首領に一礼してその部屋を出て行く。

「・・・ところで・・・何時までそこで立ち聞きをしているのですか?・・・ショッカー」

「・・・さすがに気づかれてたか」

月影が睨みつけた曲がり角からは黒いマフラーをしたショッカーライダーのような仮面戦士が出てきた。

「エヴィル改造人間2号・・・‘仮面ライダーショッカー’。壊滅したショッカーの秘密基地に隠されていた設計図通りに改造したあなたは、行動データをインプットするよりも早く独特の自我を確立し、長年エヴィルに貢献しましたね。・・・しかし私はどうもあなたを信用しきれません」

チャキッ

「・・・・・」

シャドームーンに姿を変えた月影は紅い剣先をショッカーの喉に突き立てる。

「あなたの本性・・・いえ、あなたの本質は一体何なのですか?」

「・・・俺は組織に忠実なだけだ。・・・首領の命令とあらば総てを壊す。何者でも殺す。・・・殺す相手がたとえ幹部でもな。・・・・それが俺だ。・・・分かったら剣を下ろせ」

ショッカーはシャドームーンの剣を掴んで下ろすと・・・シャドームーンは月影の姿に戻る。

「・・・私はあなたをこれからも信用しません。もしあなたが首領様に危害を加えるようならば・・・・刺し違えることになってもあなたを破壊します」

「・・・・俺もお前と争う気はない。失礼させてもらう」

「・・・ええ・・」

ショッカーは人間の姿に変わると薄暗い廊下を歩いて何処かに行ってしまった。月影はショッカーが見えなくなるまで視線を逸らそうとはしなかった。

・・・・

・・バスカービルのメンバーが病室に集まってきた。

「キンちゃん！オーズの力が暴走しちゃったって聞いたんだけどホントなの！？」

「あ・・・あぁ、そうだ・・・」

病室に入ってきた途端に問い詰めてきた白雪に俺は少し引きながらも返事をすると・・・

「アンクがもっとしっかりしてないから～～～！！」

「なっ！？俺のせいにするなよ・・・ぐあぁぁぁぁっ！？」

ドカッドカッ

アンクは白雪から理不尽な暴力を喰らった。・・・すまんアンク。

「ゆきちゃんはあんな調子だけど・・・実際、相当やばいんじゃないのきーくん？」

「・・・・・」

裏理子じゃない普段の理子がシリアスなことを言ってきたので、白雪の暴走のせいで緊張感の緩みかけていた俺は改めて事の重大さを理解する。・・・仮面戦士の力を暴走させるってことは自分の仲間をさらにピンチにするってことなんだ。そう考えるとあの姿での暴走は本当に危なかったな。

「・・・とりあえずキンジさんがご無事で何よりです」

「レキも・・・心配かけたな」

俺は以前預けた黒いメダルを強く握り締めていたレキに謝り、みんなにも謝ろうとすると・・・閉じていた窓が開いて誰かが入ってきた。

「・・・やっぱりオーズの力が暴走しちゃったかぁ」

「リク・・・」

本日2回目の不法侵入・・・もとい、壁を登ってやってきた五代さんに気づいたアンクはボロボロになりながらも起き上がる。

「その声・・・あの時の仮面の男!!」

「正解!・・・そういえば自己紹介がまだだったね。俺は五代祐輔２０００の技を持つ冒険家だよ」

五代さんは俺とアンク以外のバスカービルに名詞を渡すと、先ほどの柔らかい表情とはまったく違う厳しい表情でアンクの方を振り向く。

「・・・アンク・・・オーズの力が暴走しちゃった今・・・そろそろキンジ君やアリアちゃんに８００年前に起こったあの出来事を話してもいいんじゃないの?」

「なっ!?あのことをキンジ達に言う必要はないだろ!!」

「・・・はぁ・・」

アンクは８００年前のことを俺達に知られることに抵抗があるようで五代さんに怒鳴るも・・・五代さんは「これを俺に言わせるの？」とでも言いたげな表情でため息をつき、再び話し始める。

「・・・かといってずっと隠しているのも駄目でしょ。・・・そろそろきちんとキンジ君たちにもしゃべっろうよ。かつてのオーズだったクガ王のこと。・・・そのオーズと戦ったあの戦いのこと。それに・・・アンクのコアメダルを作ったアリアちゃんそっくりの錬金術師・・・‘アミカ’のことを・・・」

アミカ？・・・戦徒（アミカ）じゃなくてか？

「・・・確かに知りたいわね。オーズことも・・・それにアンクのことも、あたし達が知っていることは少なすぎるわ」

「「「「・・・・・・」」」」

アリアは少し鋭い視線をアンクに送ると・・・バスカービルの面々は全員アンクに視線を送る。

「アンク・・・あの時のことを１人で抱え込もうとするのはやめなよ。・・・なんなら俺がみんなに８００年前のことを話すよ。どうする？」

「いや・・・俺が話す・・・」

俺達バスカービルはこの日・・・・現代の遠山家や星伽にすら伝えられていない８００年前の真実を知ることになった。

暴竜零度（後書き）

次回はようやく８００年前の説明回＆オーディンがいよいよ行動を起こします。

王・様・強・欲（前書き）

今回の前半は過去話です。あくまで語り形式なので詳しい描写などはありません。そして今回はサブタイトルの書き方で分かる通り、今回はいよいよあのライダーの登場です。・・・サブタイは別にアメフトのキングとは関係ありませんよ。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

「俺は８００年前・・・正確に言うと８０９年前に‘赤の錬金術師’という二つ名を持っていた‘アミカ’から作られたグリードだ」

「そのアミカって人はどんな人だったの？」

アリアはアンクに『アミカ』のことを聞くと、口ごもるアンクの代わりに五代さんが口を動かす。

「アリアちゃんにそっくりな顔立ちで、長い金髪を右側にまとめた感じ・・・今で言うサイドテールって言ったかな？・・・いつもみんなが幸せに暮らせるようになることを考えていて、そのために錬金術師になった優しくも熱心な人だったよ。・・・リクもベルトの霊石の力で不老不死みたいな身体になっていてね。数百年もたった１人でグロンギと戦い続けていたから心が枯れかけていたんだ。けれど彼女の優しさのおかげで・・・リクは枯れずに済んだんだよ。五代裕輔になった今でも本当に彼女には感謝してる」

数百年も１人でグロンギと戦っていた？

「あの・・・どう聞けばいいのか分からないですけど‘リク’って人はどのくらい生きてたんですか？」

「えっと・・・だいたい１３００年ぐらいは生きていたかな？」

それはつまりリクは紀元前から生きていたってことかよ。・・・そんな長い間生きていると戦わなくても枯れちまうと思うのに戦って・・・その枯れを癒すことのできたアミカって人は本当にすごい

人だったんだな。・・・そう俺達が関心してるとアンクはようやく口を動かし始めた。

「・・・アミカは色金・・・特に緋緋色金の研究をしていて、それを人々のために使おうとしていたんだ。そしてその過程で俺のコアメダルが１０枚作られた。・・・その頃は自我も無ければ欲望もない置物程度だったんだが・・・」

アンクのメダルを作った人が色金の研究をしてて・・・アンクを作ったのか。

「今からちょうど８００年前にオーズとなった人物・・・クガ王がアミカの評判を聞きつけてやってきたんだよ。世界を支配するのにコアメダルを利用しようとするためにな。そしてほぼ強制的にクガ王の城に連れて行かれたアミカは他にも連れてこられた・・・いや、あいつ等は本人の意思で来ていたと思うが・・・そいつ等にアミカはコアメダルの作り方を伝えることになったらしい」

どうやらアンクもそこら辺は詳しくは分からないようだな。

「そしてその錬金術師達によって４種類のコアメダル・・・カザリやウヴァ達のコアメダルが作られた。そしてクガ王はそれぞれ１０枚あるコアメダルから１枚づつ抜き取ったことにより・・・俺たちグリードはメダルの化け物になりクガ王はオーズに変身した」

要するにアンク以外のグリードのコアが作られる原因になったのはクガ王で、グリードとして覚醒するようになったのもクガ王のせいってことか。

「最初は１つの王国の王様程度だったクガ王は・・・オーズの力で

次々と国を滅ぼして世界を支配しようとしていた。そしてそれと同時期にウヴァ達はその満たされることのない欲望を少しでも満たすために欲深い人間達を襲った」

そのことは前に鴻上のおっさんから聞いたな。そんで初代ファンガイアの王やらレジェンドルガの王も賛同して暴れたって・・・・。

「その頃の俺はそのことを何も知らなかった上に『今の自分を維持したい』程度にしか欲望がなかったからほとんど外に出ないヒキコ・・・籠の鳥みたいに城から出ないで、ただ壁にボールを投げつけるだけの日々を過ごしていた。そんな満たされもどうもしない日々を変えてくれたのが・・・俺のコアメダルを作った錬金術師であるアミカと、その妹で助手のアミコ・・・そしておまけのリクだった。3人は城の中では自由に行動できる権利を持っていて、俺のところにやってきては人間っていうのは何なのかを・・・チェスとかトランプの娯楽を教えてくれた」

「アミカと接してたおかげでアンクは根は優しくなったんだけどね。研究熱心な錬金術師だったアミカはどんどんアンクと会う時間が減って、リクもアミカの手伝いをしていたから時間が取れなくてね・・・アンクに1月ぶりに会うと言動がアミコっぽくなっていたんだ。昔は『僕』って言っていて純粋な子だったのに・・・教育って難しいよね」

五代さんはちょっと横目でため息をつく。・・・そのアミコって人は口が悪かったんだなぁ。それにアリアそっくりのアミカの妹ってことは顔もそっくりってことだよな?・・・それってある意味まんまアリアじゃね?

「あんた・・・なんか失礼なこと考えてない?」

「・・・べ、別にそんなことはないぞっ」

ジト目で睨んできたアリアから俺は顔を背けると・・・アンクは右腕を怪人の姿へと変えて自分の腕を見る。

「そんな日々が続くある日・・・アミコは俺に食い物を持ってきたんだ。だけど俺は所詮‘メダルの化け物’で生き物じゃない。味覚が・・・五感がまともに機能しているはずもなく反応をしなかった。・・・それがきっかけでアミカは『俺に五感を与える』っての目的に『緋色の研究』を再開して・・・やがて世界で最初の色金の銃弾・・・『緋弾』を作ったんだ。そしてアミカは特別な『緋弾』を俺に撃ち込んで・・・俺は人間のように五感を感じることができるようになった」

最近はあまりにも人間らしくて忘れていたがアンクはグリード。メダルの塊であって生き物ではないから五感が濁っていてもおかしくはなかった。・・・だけどアンクは味覚などを感じていた。まさかその理由がアンクの身体に『緋弾』が入っていたからだったとはな。

「俺たちは当然喜んださ。・・・だけどその時だった。グリードやファンガイアのキング、レジェンドルガの王を倒したクガ王は、さらなる力を求めて俺のコアメダルを奪いに俺に襲い掛かってきた。そしてその時に・・・アミカはメダルの化け物でしかない俺なんかを庇って・・・トラの爪に腹を刺されてしまった」

アンクは怪人態になっている右の拳をセルメダルが落ちてしまうほど強く握ると・・・五代さんも辛そうな表情で語り始めた。

「リクが駆けつけた頃にはもうアミカは息をしていなくて・・・ア

ンクは怒りに身を任せてクガ王のオーズと戦っていたんだ。リクもすぐにクウガに変身して戦おうとしたけど・・・アミコを人質にされてしまって変身できなかったんだ。アンクは何とかしてアミコを助けたけれど・・・今度はアンクがアミコを庇って爆発したんだ。そんでリクはなりたくなかった‘黒の４本角’にまで変身して・・・目から光を失うほどがむしゃらに戦ったよ。そして何とかオーズを倒したけど、リクの力の源だった霊石アマダムに亀裂ができちゃっていて・・・相当なダメージを受けていたリクはそのまま亡くなったんだよ」

「元から‘命’なんてない俺はメダルに戻っても死んだ訳じゃなかったが・・・ダメージのせいで意識を失ってしまった。・・・そして気がつくと・・・」

「・・・今の時代だったってワケね」

アンクはアリアの言葉に頷くと複雑そうな表情をする。

「・・・キンジ、これで分かっただろ?オーズの力は‘正義の味方’みたいな力なんかじゃなく、もっとドス黒い・・・神をも殺そうとする力なんだよ。欲望の力なんて人間が使っていること自体がおかしいんだよ!このままじゃお前・・・紫のメダルに完全に飲み込まれて心を失って・・・いずれグリードになるぞ」

「「「「っ!?」」」」

アンクのその言葉に五代さん以外の病室にいる全員が驚いた表情になる。

「キンジ!これ以上変身をするのはやめなさい!」

「そうだよキンちゃん！もしキンちゃんが暴走して完全にグリードなんかになっちゃったら・・・・」

アリアは焦った様子で、白雪は涙目でオーズの変身をやめるように言ってくる。すると理子はアリアの左肩に手を置いて首を横に振る。

「無駄だよアリア。どうせきーくんはオーズの力を手放そうとしないよ。・・・そうでしょ？きーくん」

「あぁ、心配してくれるのはありがたいが・・・・エヴィルのことも・・・それにグリードのことも何も解決してない。だから俺はまだ変身するぞ」

オーズのベルトを懐にしまった俺は、メダルホルダーを上着の内ポケットにしまう。矢車も後藤は「・・・やっぱりな」といった表情で何も言おうとはしなかった。たぶんこいつ等は俺がこう言うことを感づいていたんだろうな。

「レキ・・・もし俺がまた暴走してお前達に襲い掛かるようなことがあったら俺を撃ってく・・・」

「お断りします。・・・私達は誰もあなたの死を望んでいません。望みたくありません。私の銃弾はキンジさんを殺す弾ではなく、キンジさん達を守るための弾ですから。あなたが死んでしまえばあなたにこのメダルを返すこともできませんし、人の心を失いグリードとなってしまったあなたにメダルを渡すつもりもありません。・・・ですからしっかりと人間として生きることを考えてください」

「・・・・そうか」

俺が以前渡した黒いメダルを2枚握っていた感情初心者のレキですら俺を撃つのは嫌だと言ってくれた。

「大丈夫だ。俺はグリードになるつもりはない」

みんなのためにも・・・紫のコアメダルの力を俺の中で押さえ込んでいないとな。

「・・・・・」

『ｐｐｐ』

俺が決意を固めている時、矢車は誰も気づかれないようにバッタカンを起動して俺達の会話を誰かにも聞こえるようにしていたことに・・・もしかしたらアンクと五代さんは気づいていたかもしれないが・・・・少なくとも俺やアリアは気づいていなかった。

俺の病室からバスカービルの面々が出て行くのと同時刻、バッタカンを持った正太郎と陽は病院の屋上で俺達の会話を聞いていた。

「まったくキンジもアンクも面倒な性格しやがって。１人で抱え込

もうとせずに、もっと仲間を頼れよな。キンジは自分だけで紫のコアメダルを何とかしようってことがバレバレだぜ」

「矢車君に頼んでこんなことをしている君も相当面倒な性格をしているけどね。だから君は何時までたってもハーフボイルドのままなのさ」

「はぁ～。どうして俺はハードボイルドになりきれないんだろうな。・・・あんた等はどうしてだと思う？」

「「「「・・・・・」」」」

正太郎は目の前に立っていた数体のショッカーライダーに質問してみるも・・・誰も答えようとはしなかった。

「ノーコメントかよ。鋼鉄マッチョはあんなに言葉のキャッチボールをしてくれたのに冷たいぜ。まぁ、とにかくだ。・・・キンジをこのままグリードにする訳にはいかない。俺達もできることをしようぜ」

『ＪＯＫＥＲ』

正太郎は少しずれていた帽子を被り直すとジョーカーメモリを起動する。

「そのためにはまず・・・エクストリームを完全に使いこなせるようにならないとね」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

そして陽も上空に待機したエクストリームメモリをちらりと見るとサイクロンメモリを起動する。

「「変身っ！！」」
『ＣＹＣＬＯＮＥ・ＪＯＫＥＲ』
「ハァァァァッ！！」
Ｗに変身した正太郎と陽は目の前に立っていたショッカーライダー数体に立ち向かっていった。そしてその後ろの物陰からは・・・・
「・・・あれが本気じゃなかったとはいえカツミの変身するエターナルを圧倒した２色の仮面戦士、仮面ライダーＷ。・・・・彼らならエヴィルの包囲網を破ってカツミを助け出してくれるかしら？」
茶髪の女性がＷの戦いを眺めていた。
・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
あれから三日後、また来るだろうなと医者に思われながらも退院した俺は武偵高に特捜科（レンジャー）が設立されていたことを知った。特捜科ってのは仮面ライダーの支援及び怪人対策を専門とする学科で、初代仮面ライダーの協力組織である仮面ライダー隊をもとに作られたらしい。怪人と言う人外相手の危険な戦闘をするから他学科のＡランク以上の武偵によって構成されていて、武装も怪人対策用の極めて強力なものを使用っぽい。レンジャーという呼び名は、集団戦闘を

専門とする事と、仮面戦士（ライダー）科と対の意味を持つ。

「一條先輩や氷川のパートナーの小沢さんも特捜科に転科したのかぁ」

日本ではあまりメジャーじゃない学科だが、横浜武偵高には部活としてなら4月頃から存在していたらしい。陽から聞いた話だと『仮面ライダー部』とか言うらしいが・・・そこら辺は俺も詳しく聞いていないからよく分からないな。

「それにしてもアンクやライト達もいきなりよね。放課後になった途端に『会議をするからクスクシエに来てくれ』だなんて・・・」

「あぁ、何なんだろうな。俺達の知らない奴らも呼んでるって言ってたしなぁ。・・・ん？」

そんな会話をしながら俺とアリアはクスクシエに向かっていると・・・この学校の生徒じゃない奴らを見かけた。

「なぁ健吾。俺たちはどんな奴らに会いに来たんだっけ？」

1人は短学ランにリーゼントの不良っぽい生徒。

「何度言ったら覚えるんだ？この学園に通うチーム・バスカービルのメンバーとチーム・テンペストのメンバーと、通信では話すことのできなかった機密事項、及び現状確認をするためにやってきたんだぞ。お前が‘フォーゼ’のアストロスイッチを20番まで使いこなせるようになったとはいえ、俺達の戦力でこれからの敵にどこまで通用するかは分からないからな」

もう1人は青い制服を着て、右手にハンバーガーみたいな何かを持った真面目そうな生徒だ。

「カタカナ多いって！・・・だけどそうだよな。俺らの学園でもまともに動ける仮面戦士は仮面ライダー部の数人だけだし・・・」

ん？今『仮面ライダー部』って聞こえたような気がしたが・・・。それに俺らのチーム名も聞こえたし・・・なんだあいつ等？あの青い制服・・・たしか横浜武偵高の生徒だよな。

「・・・んっ？」

すると俺に気づいた様子の学ランリーゼントは俺の方に歩いてきた。

「すまねぇがこの学園の食堂・・・クスクシエの場所を教えてくれないか？俺の名前は銭形玄太朗（ぜにがたげんたろう）。横浜武偵高の2年F組の生徒だ！」

「別に構わないぞ。俺は遠山キンジ。そんで隣が神崎・H・アリア。・・・この学校の2年A組の生徒・・・」

「遠山キンジだと！！」

青い制服を着たもう1人の他校の生徒は俺の名前を叫ぶとこっちにやってくる。

「なら・・・お前がチーム・バスカービルのリーダー・・・そして隣が副リーダーの神崎・H・アリアという訳だな？」

「えぇ。たしかにそうだけど・・・あんたは？」

「俺は歌星健吾（うたほしけんご）。横浜武偵高の2年F組、装備科所属で、チーム・ユニバースのリーダーだ。今日はチーム・バスカービルとチーム・テンペストから東京武偵高の現状確認をするために来た。よろしく頼む」

俺と歌星は握手をした後、さっそく俺達はクスクシエへ向かおうとした矢先のことだった。

「久しぶりだな・・・仮面ライダーオーズ」

「・・・仮面ライダーオーディン」

突如俺達の数十メートル先の鏡からオーディンが出現した。

「知り合いか？」

玄太朗は俺の隣に立つとオーディンのことを聞いてくる。

「・・・あいつはこの前この学校を襲撃したエヴィルって組織の幹部の1人だ。あいつに俺達の仲間・・・城戸信司って奴が操られて連れて行かれちまった」

「なるほど・・・つまり悪の組織の幹部ってことだな？」

「ああ、そういうことだよ。・・・変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺はオーズに変身するとトラクローを展開してオーディンに切り

掛かるも・・・瞬間移動で避けられてしまう。

「お前・・・いったい何をしに来た!!」

「首領様の命令でな。・・・ちょっとしたショーを行いにやってきた。・・・どうだ?我が部下になる気になったか?」

「そんなはずないだろ。・・・俺はエヴィルを潰す。だから当然お前とも戦うぜ」

「そうか・・・残念だ・・」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

オーディンは2本の黄金の剣を俺に向けて構える。どうやら力ずくでも連れて行く気らしい。

「キンジ!援護するわ!」

アリアは2丁拳銃を構えてオーディンを狙撃しようとすると・・・

「銭形っ!」

歌星は玄太朗に向かって叫んだ。

「あぁ、分かってる!」

『3・2・1』

玄太朗は4つのスイッチがセットされたベルトを腰につけると、ベルトのレバーを握った。

「変身っ！」

レバーを前に押した玄太朗は白い光に包まれる。その光からWが変身する時の強風と同じくらいの風が吹いたかと思うと・・・玄太朗の身体は白い宇宙飛行士のような仮面戦士へと変わっていた。

「宇宙キターーーーーー！！！」

「っ！？」

何だいきなり！？別にここは地球なのに、どうして宇宙なんだ！？

「仮面ライダーフォーゼ！助太刀させてもらうぜ！」

『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ』

フォーゼと名乗った白い仮面戦士は右腕にオレンジ色のロケットを装備すると・・・・

「ロケットライダーパァァァンチ！！」

ドカッ

「ぐおっ！？」

その推進力で加速しながらオーディンを殴り飛ばした。

「お前が先月、新幹線の事件解決に貢献していた仮面ライダーだよな！えっと・・・その姿は・・・」

ロケットのような装備を解除したフォーゼは俺の隣に立つと、起き上がってきたオーディンに拳を構えながら俺の変身のことを言お

うとするが・・・・どうやら名前が出てこないらしい。

「オーズ。・・・仮面ライダーオーズだ」

「なるほど！仮面ライダーオーズか！・・・ならオーズ！一緒に仮面ライダーの力を悪用しているアイツをぶっ倒そうぜ！」

「あぁ、そのつもりだ」

「いいだろう。予定の時間までは少々時間があるから相手をしてやろう」

オーズに変身した俺と、フォーゼに変身した玄太朗は何やら六面全てが鏡のようになっている四角い箱を右手に握り締めていたオーディンと戦い始めた。・・・この時の俺達はまさかこの戦いがあんなことになるとは知るよしもなかった。

王・様・強・欲（後書き）

今回はようやくこの物語でもフォーゼをデビューさせることができました。次回もまたもや各場所で乱戦をする展開になりそうです。

カンザキの策略（前書き）

今回は今までで一番登場キャラが多いです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

カンザキの策略

「「ハァァァッ！」」

「・・・・・・」

俺とフォーゼは同時にオーディンに殴りかかるも瞬間移動で回避されてしまう。

「その程度では俺を倒すどころか時間を稼ぐことすらできないぞ？」

「くっ！？」

ガギィィンッ

再びトラクローを展開して切りかかろうとするも・・・その爪はオーディンの剣に止められてしまった。・・・やっぱり作り手が違うだけでほとんどの能力はシャーロックのラスと同じだな。

「このヤロウ！」

『ＣＨＡＩＮＳＡＷ・ＯＮ』

ギュイィィィィン

フォーゼは右脚に水色のチェーンソーを装備して跳び回し蹴りをするも・・・・

「どうした？フォーゼの力はその程度か？」

ドカッ

「ぐおっ！？」

チェーンソーの刃の部分ではない部分の脚を掴まれてしまい、あっさりと地面に叩きつけられてしまった。

「畜生・・・こいつ・・・今まで戦った中で一番強ぇ・・・」

起き上がったフォーゼはチェーンソーのスイッチをオフにすると俺の横に並び立つ。

「こうなりゃオーズ！ダブルキックだ！」

『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ』

『ＤＲＩＬＬ・ＯＮ』

フォーゼは先ほどのロケットを再び右腕に装備すると空中に飛び上がり、左脚にドリルを装備する。

「・・・分かった！」

『スキャニングチャージ！』

俺もベルトを再スキャンして跳び上がると、フォーゼは空中で身体を逸らし、ドリルの先端をオーディンに向けてレバーを引く。

『ＲＯＣＫＥＴ・ＤＲＩＬＬ・ＬＩＭＩＴＢＲＥＡＫ』

「ライダーロケットドリルキィィィィック！！」

「セイヤァァァァッ！！」

ロケットで加速したフォーゼのドリルキックとほぼ同時に俺はオーディンにタトバキックを命中させる。

「やったか!?」

ダブルキックで巻き起こった爆煙に俺とフォーゼは振り返ると・・・煙の中では黄金の盾を持って平然と立っていたオーディンがいた。

「・・・どうやらまだっぽいな」

「畜生・・・ならこいつだ!」

『ＥＬＥＣ・ＯＮ』

クリアカラーの黄色いスイッチをベルトにセットしてスイッチを入れて、右手に剣のような武器を握ったと思うと、フォーゼの姿は雷神の太鼓のようなものを複数纏い、左腕と両脚を除いて金色になった。

「その姿は何だ?」

「フォーゼ・エレキステイツって奴だ。お前はメダルで戦い方を変えるように、俺もスイッチで戦い方を変えるんだよ!」

ブンッ!

フォーゼは右手に握った剣をオーディンに向かって振りかざすも・・・やはり瞬間移動で回避されてしまう。

「単調な動きだな」

ドカッ

「うわっ!?・・・畜生、ちょこまかにはちょこまかだ!」

背後から殴り飛ばされたフォーゼは体勢を立て直してピンク色の

スイッチをベルトにセットする。

『ＨＯＰＩＮＧ・ＯＮ』

「ウオラァッ！」

ドカッ！

「ぐっ！？」

左脚にピンク色のバネのような装備を装着したフォーゼはキックホッパーの連続ジャンプのように跳び上がってはオーディンを蹴るこを繰り返す。・・・どうやらオーディンでもあんな予測不能な動きは回避できないらしいな。

「くっ！？鬱陶しい！」

ドカッ！

「うわっ！？」

とうとう攻撃を当てられてしまったフォーゼは地面に叩きつけられるとスイッチをオフにしてバネのような装備を解除する。

「さぁ・・・次はどのような戦法を見せてくれるんだ？」

「・・・どうするんだキンジ？あんな動きをする相手じゃキツイぞ・・」

「問題ないぜ。お前のおかげであいつの瞬間移動の攻略法はもう見つかった」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーゾ、サッゴ～～ゾ！！』

「ウオォォォォォォ！！」

「ぐおっ！？」

サゴーゾコンボに変身した俺は重力操作でオーディンの動きを封じる。・・・さっきのフォーゼの攻撃を見たとき、俺はなんとなく気づいた。シャーロックが変身していたラスなら持ち前の推理力でフォーゼのトリッキーな動きをすべて読んで回避していただろうが、オーディンは動きを完全に読むほどのことはできずに攻撃を喰らっている。つまりあいつはシャーロックのように戦闘力、推理力がパーフェクトな相手じゃない。どちらかと言うと、自身の力じゃなく仮面戦士だけで戦っている感じだ。それに目で確認することのできる攻撃を瞬間移動で回避してるだけなら・・・目に見えるはずのない重力対策なんか無理だろ。

「思った通りだな。・・・今だフォーゼ！」

「ああ！」

『ＬＩＭＩＴＢＲＥＡＫ』

「ライダー１００億ボルトブレイクッ！！」

「ぐあぁぁぁぁぁぁっ！？」

バチンッ・・・バチンッ

フォーゼの攻撃をまともに喰らったオーディンは装甲の各部から火花を散らしながら膝をつく。するとその変身が解除されてようやく素顔を晒したかと思うと・・・その人物は信じられない人物だった。

「か、神崎士郎だと・・・・」

後ろでオーディンの分析をしていた歌星がそう呟く。・・・そう。俺達の前で膝をついているのはミラーライダーに変身するためのカードデッキを作り上げた天才、神崎士郎（かんざきしろう）博士だったんだ。

「・・・士郎・・・伯父さん？」

「アリア？・・・知り合いなのか？」

「あの人はあたしのママ・・・神崎かなえのお兄さんよ」

「「「なっ！？」」」

神崎士郎は９年前にいきなりライダーデッキを発表したかと思えば、すぐさま表舞台から存在を消してしまったので、彼自身のほとんどの情報がなかった。それがアリアの伯父だと！？大抵のことでは驚かないつもりだった俺でもさすがにびっくりしたぞ。フォーゼと歌星なんかは驚きで動きが止まっちまってるし。

「伯父さん・・・どうしてエヴィルの幹部なんかになってるの？」

「・・・アリア、お前には関係ない。口出しするな」

そう言った神崎士郎はポケットから紫色のメダルを取り出すと手に持っていた六面体の鏡に重ねた。すると紫のメダルはミラーライダーがミラーワールドに入っていくように鏡をすり抜けると、６面すべてが鏡であるにも関わらず、まるでガラスのように６面すべてから中心に紫のメダルが見えていた。

「先ほど何をしに来たのか？・・・と聞いていたな。オーズ・・・いや、遠山キンジ。その答えは・・・これだ」

紫のメダルが入ってしまった鏡は禍々しい紫色の光を放ったかと思うと、引き寄せられるように様々なところからやってきた１０人の仮面戦士がその鏡の中に吸い込まれていった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺達がオーディンの正体が神崎士郎だったことに驚いている頃、凍条は病室でノートに次々と新聞の切り取りなどを貼り付けていた。

「フフ。あと少し・・・あと少しで僕オリジナルのライダー大全集が完成だ。正規登録されている仮面戦士だけじゃなく先輩のコンボとかのフォーム写真も全て貼れてるし、確認されてるだけの戦闘データも書いてるから戦闘にも役に立つ！これを先輩に見せたら驚くだろうなぁ」

そんなテンション高めの凍条の横に置いてあったデッキが突如怪しげな光を放ちながらカタカタと揺れ始めた。

「えっ！？何っ！？なんなの？」

ビュンッ

そして凍条は自分の意思とは関係なしにデッキに変身させられると何かに引き寄せられるように何処かに飛んで行ってしまった。

「あと少しで完成だったのに～～～～～！！」

それとほぼ同じくしてクスクシエ。秋山と北岡、そして由羅はテーブルに置いている龍騎のカードデッキを見て深刻な表情を浮かべていた。

「桃井さんの報告だと・・・校舎の鏡に時折黒い仮面戦士が何かを確認するように写っているとの目撃証言が幾つかあったそうです。これは・・・おそらく・・・」

「城戸・・・いや、リュウガだろうねぇ」

「・・・絶対にオーディンの呪縛から城戸を解放するぞ。・・・ん？」

「・・・・・・」

秋山が信司を助けるという決意をさらに固めると、近くの鏡にリュウガの姿が写り、さらにはナイトのデッキとゾルダのデッキも怪しげな光を放ちながら揺れ始めた。

「・・・おそらくは相手の罠かと思うけど・・・どうする？」

「たとえ罠だとしても・・・城戸を助け出すためにはやるしかない

だろ」

ナイトとゾルダに強制変身させられた秋山と北岡は凍条と同じように何処かに引き寄せられていった。

さらに同時刻、日本の何処か。デッキが怪しげな光を放ち何か起こると確信したカナは・・・

「えいっ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』

ドォン！

一瞬にしてドレイク・ライダーフォームに変身すると必殺技でデッキを破壊した。

「いいのかカナ？自身のライダーシステムを壊して？」

成美さんはドレイクとなったカナがデッキを自ら壊したことに驚いた表情を見せるが、変身を解除したカナは特に気にした素振りも見せずに遠くの空を見上げる。

「別に構わないわ。おそらくこれはエヴィルの仕業でしょうし・・・たしかにミラーワールドに入るための貴重なアイテムを失うのは残念ですけど、契約モンスターのカードはある人物に預けてるもの。契約破棄で私が狙われることはないし・・・あの子ならきっと戦況を何とかできるはずよ。それよりも私達はエヴィルの本部を探さないと・・・」

カナはそう言うと再び何処かに向かって歩き始めた。

・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「お前・・・いったい何をしやがった!!」

ガシッ

ナイトやゾルダ、そしてタイガが鏡の中に吸いこまれていったのをたしかに目撃した俺は神崎の胸倉を掴む。

「フッ・・・俺はただこの‘プテラコアメダル’の力を利用して、すべてのミラーライダーを強制変身させ、ミラーワールドという牢獄に閉じ込めただけだ。それも自分達の意思で出ることもできなくしている完全遮断空間にな。・・・しかしファムのデッキ所持者はそのことに感づいていたようで自らのデッキを砕き、このショーに不参加したようだがな」

「ふざけやがって!佐野!今助けるからな!」

フォーゼはどうやら仲間が閉じ込められてしまったらしく、自分も鏡の中に入ろうとするするも・・・当然ミラーライダーではないので入ることはできなかった。

「畜生！どうすりゃいいんだよっ！？健吾！何かいい手はないのかよ！」

「・・・・・」

悔しさで地面を殴りつけたフォーゼは歌星の方を振り向くが・・・歌星は首を横に振るとカバンのようなパソコンの画面を見つめていることしかできなかった。

「伯父さん！どうしてそんな事をしてるのよ！」

「・・・・・」

神崎士郎はアリアの言葉にまったく耳を傾けずにオーディンのデッキを握り締める。

「ところで遠山キンジ。お前はミラーライダーがミラーワールドに入っていられる制限時間を知っているか？」

「・・・９分５９秒。そのタイムを過ぎてしまうと、いくらミラーライダーでも粒子化してしまう」

「そうだ。そしてすでに彼らが入って１分は経過した。この限れた時間の中ではいくらお前でも助けることはできまい」

俺の手を払いのけて再びオーディンに変身した神崎士郎は自身もミラーワールドへと入って行ってしまう。

「ついでに・・・これは置き土産だ。貰っておけ」

六面体の鏡の向こうにいるオーディンはこちらに剣を向けると、紫のメダルが怪しく輝きだした六面体の鏡からは数十体の青いトンボのような怪人が湧き出てきた。

「うわっ！？何だこいつ！？」

「銭形！そいつはレイドラグーン！ミラーワールドに生息しているはずの怪人だ！はやく片付けないと時間がなくなってしまうぞ！」

歌星はフォーゼに向かって指示をするも・・・さすがに数が数だけあってフォーゼも思うように動けない。

「こうなったら・・・・」

『ＺＯＯＯＯＯＯＵ』

俺は以前平賀さんに作って貰ったゾウカンドロイドを駐車場のオーラインクロスに向かって投げつける。するとオーラインクロスは前輪が半分に割れて後輪にくっつくと、ゾウカンドロイドは巨大化して前輪だった部分にドッキングされた。そしてゾウのような鼻を伸ばすと、オーラインクロスは重装甲形態・オーラインタンクに変形した。

「一気に潰してあいつ等を助け出す方法を探るぞ！！」

『ＰＡＯＯＯＯＯＮ！！』

サゴーゾコンボのままオーラインタンクに跨った俺は、その圧倒的パワーで次々とレイドラグーンを撥ね飛ばし始めた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺がオーラインタンクに跨りフォーゼと共にゲルニュートを相手にしている頃、オーディンはほとんど真っ白な空間でミラーライダー達の中心に立つ。

「ライダー達よ。さぁ戦え。限られた時間で戦い抜き、そして最後に生き残った者のみを元の世界に帰らせてやろう」

オーディンはタイガやドリルのような茶色い仮面戦士が外に出ようともがく中、とんでもない言葉を仮面戦士達に告げた。

「そりゃあいいぜ。こんなに仮面戦士が集まってんなら久々にイライラせずに楽しめそうだ」

オーディンの言葉に真っ先に発言したのは紫色の蛇のような仮面戦士、連続殺人犯の朝倉が変身している‘仮面ライダー王蛇’だ。

「こういうスリルのあるゲームができるなんてね」

続いて発言したのは灰色のサイのような仮面戦士‘仮面ライダーガイ’。どうやらこいつもこの戦いに乗る気のようだ。

「何がどうなってるんだよ?僕はただ仮面ライダー部の部室で調べ者をしてただけなのに・・・」

どうやらドリルっぽい角を生やした茶色の仮面戦士、仮面ライダーインペラー、は仮面ライダー部の部員らしいな。そりゃフォーゼも部員が閉じ込められてるから必死になる訳だ。

「やはり・・・俺の占いは当たってしまったか」

エイのような仮面戦士、仮面ライダーライア、もどうやら望まない戦いを強いられた様子だ。

「北岡ぁ・・・会いたかったぜ」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

「・・・できればこっちは、こんなピンチに会いたくなかったよ」

ゾルダはマグナバイザーの銃口を独特の形をした剣を握った王蛇に向ける。

「蟹君が私の相手ですか？張り合いがなさそうな相手ですね」

「・・・連続強盗犯、高見沢逸朗（たかみざわいつろう）・・・この場で逮捕する」

たぶん須藤じゃないと思うシザースは・・・すでにストライクベントを装備して何時でも戦える状態で黄緑色のカメレオンのような仮面戦士、仮面ライダーベルデ、と向かい合っていた。

「それで？俺とゲームをするのは誰？」

「・・・あんたが誰かは分からないけど・・・戦いをゲームのように思ってる奴なら止めるよ」

「・・・微力ながら手伝おう。こんな戦いはあってはならない」

戦いをゲームのように捉えているガイに、インペラーとライアが向かい立つ。

「オーディン様以外、全員・・・この俺が倒す」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

「城戸・・・絶対に助けるからな。・・・少し我慢しろよ」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

ナイトはリュウガと向かい立つとウイングランサーを右手に構える。

「・・・どういうつもりだよオーディン。お前は何が目的なんだよ・・」

「フン。そんなことはお前たちが知る必要はない。・・・さぁ、残りの時間は7分だ。戦わなければ生き残れないぞ?」

「・・・だったら僕がお前を倒して全員を脱出させる」

チャキッ

タイガはデストバイザーをオーディンに構える。

「では掛かって来い仮面ライダータイガ。お前を最初の脱落者にしてやる」

「ハァァァァッ！」

ガギィィンッ

タイガのデストバイザーとオーディンの剣がぶつかり合う。・・・・こうして鏡の向こうで１１人のミラーライダーによるそれぞれのライダーバトルが始まってしまった。

カンザキの策略（後書き）

前回の後書きで乱戦と言っておきながら今回は対戦カードが決まっただけになってしまいました。次回こそはミラーライダーズによる乱戦です。・・・もう2話ほどオリジナルのミラーライダーバトルが続きそうです。

六面鏡の黒と赤（前書き）

何とか平日更新2回はできました。今回は1人1人の戦いはそれほど長くないです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

六面鏡の黒と赤

俺がオーラインタンクで怪人達と戦っている頃、ミラーワールドではそれぞれの仮面戦士が戦いを始めていた。

「ミラーライダーシリーズの中で最も低出力のシザースが私に勝てると思ってるのですか？」

「別にお前に勝つことが目的じゃない。逮捕することが目的なんだ」

ガギィィィン

シザースの大きな鋏と、ベルデのヨーヨーのような武器が近距離でぶつかり合い火花が散る。

「お馬鹿さんですか？勝って倒さないとここから出られないんですよ？」

「・・・武偵憲章1条『仲間を信じ仲間を助けよ』・・・きっと他の武偵が解決策を考え、自分達を脱出させてくれると信じているんでな」

ベルデのヨーヨーの糸を掴んでベルデを引き寄せたシザースは鋏でその糸をぷつりと切る。そしてさらにシザースは鋏を地面に捨てると別のカードをバイザーにセットしようとするが・・・・

「これでどうですか？」

『ＣＬＩＡＲ　ＶＥＮＴ』

バイザーにカードをセットしたベルデは透明になって見えなくな

ってしまった。

「・・・姿を消すカードか。今までその力を使って強盗を繰り返したんだな」

「ご名答です。しかしそれが分かった程度で私を倒せるはずがないでしょうがね！」

「・・・それはどうかな？」

『ＡＤ　ＶＥＮＴ』

「キシャァァァッ！」

契約モンスターであるボルキャンサーを召喚したシザースはバイザーの鋏を居合いのように構える。

「・・・キャンサー。頼む」

「キシャァァァッ！」

ブシャァァァッ

ボルキャンサーは口から泡を吹きながら一回転をすると・・・その泡は透明になっていたベルデに付着して、どこにいるのかを特定させた。

「そこかっ！」

ドカッ！

「ハァァッ！」

ドサッ！

バイザーで殴りつけたシザースは、そのままベルデの腕を掴んで背負い投げをした。

「くっ!?・・・申し訳ありませんオーディン様っ」

「・・・どうやら今回の黒幕とも関与しているらしいな。後でしっかりと話を聞かせてもらうぞ。高見沢逸朗・・・確保」

ガシャッ

シザースは倒れたベルデの両腕を押さえると何処からともなく手錠を取り出して、ベルデの腕につけた。

シザースがベルデと戦っている頃、インペラーとライアはガイと少し距離を取りながらデッキからカードを取り出していた。

「・・・そういえば君の名前を聞いていなかったな。俺は手塚美幸(てづかみゆき)。職業は占い師だ。・・・君の名前は?」

「横浜武偵高1年の佐野充(さのみつる)です。この姿は仮面ライダーインペラーです」

『ＳＵＰＩＮ　ＶＥＮＴ』

ライアにあいさつをしたインペラーはドリルのような武器を装備する。

「そうか。では佐野君。・・・あくまでも彼も被害者なのだから仮面戦士の力の悪用ということで倒さずに、身柄を拘束するように戦おう」

「了解しました！デヤァァァッ！」

ガギィィィン

インペラーはドリルでガイを攻撃するも・・・サイの頭部のような手甲に防がれてしまう。

「はぁっ！」

「2対1のときってさぁ・・・こうやるといいんだよねぇ」

バッ！

「くっ！？」

鞭のような武器でガイを攻撃しようとすると・・・ガイはインペラーを盾のようにして攻撃をさせないようにした。

「まだまだっ！ハッァ！」

ブンッ

ガイと距離を置いたインペラーはドリルのような武器をガイに向けて振るおうとするも・・・・

「遅い遅い・・・」

『ＡＤ　ＶＥＮＴ』

契約モンスターであるメタルゲラスの体当たりによって阻まれてしまう。

「くっ・・・」

「はぁぁぁっ！」

ライアは鞭のような武器でメタルギラスを巻きつけると、そのまま自分の方に引き寄せる。

「佐野君！こいつは俺に任せて君は仮面ライダーガイを！」

「ありがとうございます！ハァァァッ！」

ドカッ！

「これで・・・どうだぁぁぁぁっ！」

ドスッ！

ムエタイのキックをガイに決めたインペラーはそのままドリルのような武器でバイザーとなっているショルダーを突く。バイザーを壊されて戦う手段を失ったガイはその場に膝をついた。

「まさか・・・俺がゲームで負けるなんて・・・」

「命が掛かってる戦いをゲームなんて言わない。・・・リアルとゲームは違うんだよ」

インペラー＆ライアＶＳガイの戦いも死者を出さずに無事終了し

た。

連続殺人犯である朝倉が変身してる王蛇はゾルダに剣を向けながら首を回す。

「おいおい・・・撃ってこないのかよ？・・・せっかくの祭りなんだから楽しもうぜ？」

「今日のおれはお前と戦う気にはなれないんだけど・・・それでもやるの？」

「そんなん聞かなくても分かるだろ？」

王蛇はゾルダに向かって走り出すと、ゾルダもデッキからカードを取り出す。

「は～。やっぱりこうなっちゃったかぁ。仕方ない」

『ＳＴＯＯＴ　ＶＥＮＴ』

ドォォン！

ゾルダは自身の身の丈よりもデカイ大砲のような装備を両手で持つと王蛇に向かって放ち始める。しかし王蛇はその攻撃による爆発

に怯むことなくゾルダに向かって走る。

「楽しいなぁオイ。祭りはこうでなくちゃなぁ」

「言ってることは普通なのに・・・状況が全然普通じゃないね」

ガギィィィン

大砲の銃身を剣で逸らされたゾルダは、その武器を捨てて後ろに下がる。

「くっ！？」

バンバンッ

王蛇から距離を取ったゾルダはマグナバイザーで狙撃するも・・・王蛇は「そんな攻撃なんか効くか」と言った様子でダメージをものともせずに近づいてくる。

「ほらよっ！」

「・・・っ！？」

『ＡＤ　ＶＥＮＴ』

王蛇の剣を契約モンスターのマグナギガにして防いだゾルダは・・・自身のライダーマークが描かれているカードを取り出したが、すぐにデッキに戻した。

「こんな狭い場所で使ったら危ないからね・・・」

「俺はそんなの気にしないんだがなぁ！」

ガギィィン

ゾルダはマグナバイザーで王蛇の剣を防ぐも・・・勢いまでは殺しきれずに後退する。

「おらぁっ！」

「ぐはっ！？」

そしてとうとう防御が間に合わなくなってしまったゾルダは王蛇の剣を喰らい、胴体から火花を散らしながら倒れてしまう。

「・・・・くっ・・」

「何だよ？もう終わりかよ？・・・せっかく盛り上がってきたのによぉ」

王蛇は倒れたゾルダに背を向けると次の相手を誰にしようかと辺りを見渡した。

ナイトに向かって殺気を放つリュウガは複眼を怪しく赤に輝かせながら、ナイトへの距離を詰める。

「戦え、仮面ライダーナイト。お前が生き残る術は2つだけ。・・・俺や他の仮面戦士を倒して最後の1人になるか・・・オーディン

様に忠誠を誓うかだ」

「どっちもお断りだな。俺は誰も殺さないし、オーディンなんかに忠誠を誓う気もない。それに・・・お前に人を傷つけさせないぞ。もしお前が誰かを殺してしまったら・・・お前は仮面ライダー龍騎・・・城戸信司で無くなってしまうからな」

「俺はオーディン様の部下の仮面ライダーリュウガ。それ以外の何者でもない」

リュウガは黒いドラグセイバーをナイトに向けて構える。

「城戸・・・やっぱりお前と戦うしかないのか？」

チャキッ

リュウガに剣を向けられたナイトはウイングランサーを突き出すように構える。するとリュウガは一気にナイトとの距離を詰めると剣を振り下ろした。

「くっ！？」

ガギィィン！

ナイトはウイングランサーでリュウガの剣を受け止めるも・・・スピードはともかくパワー面では信司・・・リュウガの方が上回っていたせいでやや押され気味だった。

「どうした仮面ライダーナイト。お前の力はその程度か？」

「・・・くそっ・・・ぐあっ！？」

リュウガの蹴りを喰らって壁際に追い込まれてしまったナイトはウイングランサーを落としてしまい絶対絶命の状況に追いやられてしまった。

「残り時間は5分。・・・お前は他の仮面ライダーを倒しきれるのか？」

「だから倒す気がないと言ってるだろ！記憶力がないのか！この馬鹿！」

「・・・お・・」

ナイトに馬鹿と呼ばれたリュウガは先ほどとは違う雰囲気で何かを呟く。

「お・・・れは・・・馬鹿じゃ・・・」

「っ！！」

先ほどよりははっきり聞こえたリュウガの呟きで、ナイトは信司を元に戻す方法に気づいた。

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い。国語以外は常に赤点を取る成績最下位め」

「・・・また馬鹿だとっ！・・っ！？」

再びリュウガが先ほどの冷酷なしゃべり方でなく、信司のようなしゃべり方で呟くと・・・突如リュウガの前に龍騎のライダーデッキが飛んできた。

「龍騎のライダーデッキ。・・・ドラグレッダーも城戸が元に戻ることを望んでいるのか？」

「なっ！？デッキが俺のベルトに・・・ぐわぁぁぁぁぁ！？」

龍騎のデッキはリュウガのデッキを弾き飛ばしベルトに収まると・・・リュウガはまるで内側から炎に焼かれているかのように苦しみ始めた。その身体からは黒い炎が追い出されるかのように抜けていく。

「いい加減帰ってこい馬鹿！仮にもお前は俺の相棒だろ！」

「・・・お。俺は・・・俺は・・・」

リュウガのアーマーに少しづつ亀裂が入ると・・・その隙間からは赤いアーマーが見え始めた。

「俺は馬鹿じゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

バリィィィン

その大声の叫びとともに全身が炎に包まれるとリュウガのアーマーはすべて吹き飛び・・・その姿は赤い龍の騎士・・・仮面ライダー龍騎へと変わっていた。

「だいたい馬鹿っていうほうが馬鹿なんだよバ～カ！」

「・・・現在進行形でお前が馬鹿と言っているがな」

「ち、畜生ぉぉぉぉ！！はめやがってぇぇぇぇぇ！！・・・ってあ

れ？どうして俺はこんなところにいるんだ？たしか俺達はオーディンと戦って・・・あれ？その後のことを思い出せないな」

「リュウガになっていた記憶がないのか。お気楽な奴め。・・・まぁいい、よく戻ったな城戸」

「なんだかよく分からんが・・・ただいま！」

「戻って早々だが・・・オーディンを倒すぞ。手を貸せ」

「しゃぁぁ！それじゃサバイブに変身しようぜ！」

「ああ。行くぞ！」

『『ＳＵＲＶＩＶＥ』』

‘ＳＵＲＶＩＶＥ烈火’のカードをデッキから取り出した龍騎は炎に包まれたかと思うと何処からともなく現れた銃のような形のバイザーを握りしめる。そしてそのバイザーにカードを入れると各部の色は赤よりも真紅に近くなり形状もさらに重装備に変化した強化形態‘龍騎サバイブ’へと姿を変える。そして同じく何処からか出現したバイザーに‘ＳＵＲＶＩＶＥ疾風’のカードをセットしたナイトも黒いカラーリングから青を重視したデザインに変わり、各部の形状も西洋騎士の姿に近くなった強化形態‘ナイトサバイブ’へと姿を変えた。

「何だかよく分からないけど・・・とりあえずオーディンを倒せってことでいいのか？」

「ああ、間違いではないな。・・・だが・・」

サバイブナイトはデッキからカードを引き抜くと足元に散らばるリュウガのアーマーだった破片を見る。

「だが、なんだよ？」

「・・・いくら敵だからって殺すなよ」

「俺がそんなことする訳ないだろ。たしかに仮面戦士の力を悪用する奴らを殺す権利を仮面戦士が持っているとしても・・・そんなのは間違ってると思うからな」

「・・・それでこそお前だ」

『『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』』

それぞれのバイザーを剣に変形させたサバイブ龍騎とサバイブナイトはオーディンと戦っているタイガの加勢をするために走りだした。

ナイトが信司をリュウガの呪縛から解放した頃、タイガはやはりオーディンに押され気味だった。

「はぁ・・・はぁ・・・くそっ」

ドサッ

装甲が傷だらけになりながらも戦ったが・・・とうとう力尽きてその場に倒れてしまったタイガにオーディンはゆっくりと歩み寄る。

「前回の戦闘の傷が癒えないまま俺に勝負を挑むという愚かなことをするからだ。タイガのスペックはたしかに低い方ではないが何かが優れているわけでもない。・・・おっと、余計なことをしゃべって無駄な時間をすごしたな。そろそろ死んでもらおう」

「・・・まだ・・・終わってない」

『ＡＤ　ＶＥＮＴ』

オーディンの剣がタイガに振り下ろされた時、タイガがデストバイザーに入れたカードは・・・・

「キィィィィ！！」

「なっ！？ブランウィングだと！？」

本来はファムの契約モンスターを召喚するはずのアドベントカードだった。ブランウィングはオーディンを翼を羽ばたかせて巻き起こっている突風で吹き飛ばすとタイガの後ろで羽根を休めた。

「くっ！？・・・どうしてお前がそのカードを持っている。そのカードはファムのカードのはずだぞ？」

「昨日遠山先輩の知り合いを名乗る女の人が僕の病室にやってきてこのカードを渡したんだ。『キンジが認めてる後輩なら託すことができる』って言いながらね。その人の期待に背かないためにも・・・

僕は諦めないよ」
『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』
デストバイザーを杖にしながら薙刀のような武器，ブランスラッシャー，を召喚して両手で握ったタイガは棍棒のようにそれを振り回すと左手を前に、スラッシャーを持った右手を後ろにするようにして構える。
「途中で諦めたら何も解決しない。・・・だから僕は最後まで諦めない。だから投げ出さないためにも戦うんだ」
「よく言ったぜ凍条！」
「えっ？」
タイガは後ろから聞こえてきたその声に振り返ろうとした途端、赤と青の騎士は・・・・
「「ハァァァァッ！！」」
「ぐあっ！？」
同時にオーディンに斬りかかった。・・・サバイブとなった龍騎とナイトだ。
「すごい！サバイブだ！初めて生で拝見しましたよ！」
「・・・お前、それよりも先に言うことはないのか？」
呆れた様子でサバイブナイトはタイガに語りかけると、タイガは

手で「ああ！」といった動作をしながら話す。

「城戸先輩、元に戻ったんですね！」

「えっ？あ、あのどゆこと？」

「城戸は操られてた時の記憶がない。・・・そんな能天気な馬鹿だからそんなことは気にしなくていい」

「誰が能天気な馬鹿だよ！もうお前に餃子食わせねぇぞ！」

「・・・そんなことよりも・・・今はあいつだ」

サバイブ龍騎が「無視かよっ！」と叫びながらもサバイブナイトはオーディンの方を向く。すると騒いでいたサバイブ龍騎も大人しくなって剣を構える。

「1人で相手をしたらあいつには勝てない。俺と城戸が突破口を作るから、お前が決めろ」

「頼んだぜ！」

「・・・はい。了解しました」

チャキッ

サバイブナイトも再び剣を構えると・・・タイガは右手にブランスラッシャー。左手にデストバイザーを持った。

・・・

声と共に聞こえてきた電子音に振り向くと、そこにはW・サイクロンジョーカーエクストリームがプリズムビッカーに４本のメモリをセットしてエネルギーを溜め込んでいた。

「正太郎にライト！？どうしてここに来たの！？」

W・ＣＪＸの存在に気づいたアリアはガバメントでレイドラグーンを狙撃して自己防衛をしながらも驚いた反応を見せる。

「こんだけ怪人が出てたら当然気づくだろ。・・・それに歌星から大体の状況が聞かされてるからミラーワールドの打開策もちゃんとあるんだぜ。っと・・・それよりもまずこの大量発生してるトンボからだな。陽、決めるぜ？」

「ああ、正太郎もタイミングを合わせてね」

「「ビッカー！ファイナリュージョン！！」」

プリズムビッカーから放たれた４色に輝く光線は次々とレイドラグーンを倒し、残りの十数体を一箇所に集めた。

「これで・・・最後だぁぁぁぁぁ！！」

『ＰＡＯＯＯＯＯＯＯＮ！！』

「「「ギィィ！？」」」

ドオォォォォォン！

最後のレイドラグーン達を轢き倒すとオーラインタンクから降りてW・ＣＪＸの方へと向かう。するとオーラインタンクは俺が降りるとオーラインクロスとゾウカンドロイドに分裂した。

「それで・・・どうすればいいんだ？」

「ガイアサーバーにアクセスして見つけ出した方法は２つしかないんだ。１つはミラーワールドで散った仮面戦士達のライダーパワーによる脱出。・・・しかしこれは他の仮面戦士を倒して、集めたものでなくてはならないから実現してほしくない。・・・だからこそもう１つの方法だ。だけど・・・その方法は君にしかできない」

「俺にしか？・・・そのもう１つの方法ってのはどうすればいいんだ？」

「電磁力操作が可能なサカエコンボの力を空間を鏡面にぶつけて、鏡の次元断層に裂け目を作るんだ」

次元断層に裂け目だと？

「そんなことができるのか？」

「・・・サカエコンボにどれくらいの出力があるのかは未知数だけど・・・理論上は可能なはずだよ。同じ理屈で‘擬似ライダー’と呼ばれる特殊ライダーはミラーライダーでもないのにミラーワールドに入れるからね」

「なるほど。それじゃあすぐにレキを呼んでサカエコンボに・・・・」

「その必要はありません」

声のした方向に振り向くと・・・そこには赤い仮面戦士、仮面ラ

イダーアクセルが変化したようなバイクに乗ったレキがいた。
「陽さんの作戦を照井さんからお聞きして連れてきてもらいました」
「どうやらトンボ達の始末は終えたらしいな」
レキがバイクから降りると・・・バイクはアクセルに変形した。
もしかしたらと思っていたが本当にアクセルだったとはな。
「キンジさん。思っていたよりもお早いですが預かっていたメダルをお返しします」
チャリン
黒いメダルを2枚取り出したレキは俺にその2枚を渡してくる。
「使い終わったらまたレキに預けるからな」
俺はメダルホルダーからサソリのメダルを取り出すとW・CJXも何やら缶のようなものを取り出した。
「それと・・・平賀さんから〝とっておき〟を預かってるよ」
W・CJXは俺に向かって黒いカンドロイドを1つ投げつけてくる。俺はそれをキャッチして起動すると・・・
『EBI~』
海老のような形に変形した。
「そいつエビカンドロイドの〝え~びん〟という名前らしい。その

カンドロイドをオーラインクロスに合体させて特殊浮遊形態のオーラインマグレブにするんだ。そうすればサカエコンボの電磁力の出力を倍にすることができるはずだぜ」

正太郎の声で説明してきたW・CJXは自分達の役目はここまでといった様子で変身を解除する。

「つまりサカエコンボでそのオーラインマグレブに乗れってことだな・・・」

『サソリ！エビ！カニ！サッカッエッ！サッカッエッ！サカエ～～ロ！！』

オーズ・サカエコンボに変身した俺はエビカンドロイドをオーラインクロスに向かって投げつけると・・・後輪が半分に開いて前輪になり、後輪の部分に巨大化したエビカンドロイドが合体したかと思うと、エビカンドロイドの尻尾部分がオーラインクロスを包むように広がった。・・・この形・・・まるでミラーライダーがミラーワールドに突入するためのバイクの‘ライドシューター’にそっくりだな。

「・・・キンジ。士郎伯父さんが何をしようとしてるかは分からないけど・・・伯父さんを絶対に止めて」

「ああ、もちろんだ」

『スキャニングチャージ！！』

俺は長刀を右手に持ち、左手に短刀を構えるとベルトを再スキャンして剣に電磁力を溜めながらオーラインマグレブに変形したオーラインクロスに跳び乗る。

「それじゃ・・・ちょっと行ってくる」
バチィィィィン！

六面鏡に向かって突っ込んだ俺は電磁力で空間を歪ませるとそのままミラーワールドへと入っていった。・・・残り時間、あと1分。

六面鏡の黒と赤（後書き）

次回でＶＳカンザキ編はラストです。その次は少しだけ原作を進めます。

特別な血筋（前書き）

思っていた以上に長く続いてしまったＶＳ神崎戦も今回で終了です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ
カニギジ
エビギジ

特別な血筋

「「ハァァァッ！！」」

サバイブ龍騎とサバイブナイトは両サイドから同時に剣を振るってオーディンに斬りかかる。

「くっ！？」

ガギィィィン！

瞬間移動も間に合わずに左右からのサバイブとなってより強力になった龍騎とナイトの剣を両手の剣で受け止めたオーディンは少し後ずさる。

「ハァァァァッ！！」

オーディンは1回転をして龍騎達を払いのけると・・・剣の矛先をタイガへと向けて斬りかかろうと駆け出すも・・・・

「楽しそうだなぁオイ。俺も混ぜろよ」

ブンッ

「っ！？」

ガギィィィン！

乱入してきた王蛇の剣に阻まれた。

「くっ！？」

オーディンは瞬間移動で王蛇との距離を取るも・・・

「オリャァァァ！」

ブンッ！

サバイブ龍騎はさらに追い討ちを仕掛ける。

「・・・・さすがに４対１だと武が悪いな」

「・・・残念だったね。４じゃなくて５だよ」

バァァン！

その声と共に飛んできた銃弾はオーディンの左手の剣を弾き落とす。その銃弾を放ったのはうつ伏せになりつつもマグナバイザーの引き金を引いたゾルダだった。

「北岡ぁ・・・やっぱりてめぇやられたフリをしてやがったな」

「今は無駄な体力を消耗したくないんだから当然でしょ。・・・秋山、それに城戸！チャンスだよ！」

ゾルダに呼ばれたサバイブ龍騎とサバイブナイトはデッキからベルトのマークと同じ印のカードを取り出した。

「しゃぁ！行くぜ煉！」

「ああ！」

『『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』』

サバイブ龍騎とサバイブナイトはそれぞれサバイブの力で強化さ

れた契約モンスターの上に跳び乗ると・・・・2人の契約モンスターはバイクのような形に変形した。

「北岡！死にしたくなかったら退けろ！」

「ちっ・・・せっかく楽しもうと思ったのによぉ」

サバイブナイトがバイクに乗って迫ってきたのを目撃した王蛇はオーディンを蹴り飛ばすと、その場から離れる。

「でやぁぁぁぁぁぁ！！」
ドォン！ドォン！

「くっ！？」

サバイブ龍騎の乗ったバイクから放たれた火炎弾はオーディンに喰らわせると、本来はそのままぶつかるはずの技をそこで止める。

「ハァァァァッ！」
ビュンッ

サバイブナイトもバイクを急ブレーキで止めると、その衝撃波だけをオーディン目掛けて放つ。

「・・・おのれ・・」

その攻撃をぎりぎりのところで瞬間移動をして回避したオーディンに向かってタイガは・・・・

「ハァァァァッ！」

ドカッ！

全身全霊で放った拳を決めた。

「ぐはっ！？」

いくらミラーライダーの中で最も高スペックのオーディンといっても、さすがにこの連続攻撃には耐え切れずに膝をつく。

「まだだ。・・・まだ俺は終わる訳にはいかない」

オーディンは杖のようなバイザーにまだカードを入れようとしているところを・・・

「・・・もう止めとけよ」

ガシッ

少し出遅れたオーズ・サカエコンボの俺が取り押さえた。

「先輩っ！・・・ってあれ？先輩のライダーシステムじゃ、ミラーライダーのように鏡の世界に入ることはできないんじゃ・・・」

「ちょっとした裏技を使ったんだよ。・・・ひとまず話は後だ。お前らの残り時間はもう1分もないからここから出るぞ！」

『スキャニングチャージ！』

両手に剣を構えた俺はベルトをスキャンしてエネルギーを溜めると再びオーラインマグレスに跳び乗り次元断層を作り出す。するとミラーライダー達は次々と断層の亀裂から元の世界へと出て行った。

「煉!?そろそろ粒子化が始まりだしたぞ!?」

「・・・遠山。俺達も残り時間がないので先に出て行くぞ」

「先輩お先に失礼します!」

そしてサバイブ形態を解除した龍騎とナイト、それからタイガも出て行ったのを確認した俺は・・・・

「ほら、お前もだ」

ぐぃ

未だに膝をついているオーディンを掴んだ。

「・・・何のつもりだ?」

「お前もここから出すんだよ。どうせ『敗者は生きる価値なし』って感じでここに残って消滅したりするつもりなんだろ?そんなことはさせねぇよ。悪いが俺は悪の美学的な死に方をしようとする奴でも見殺しにしたくないんでな」

「・・・それは偽善だぞオーズ」

ああ、たしかに偽善だな。だけど俺はやっぱり見殺しにはできない性格なんだよ。

「・・・俺はただアリアにお前を止めてって言われたから止めたんだよ」

ブゥン!

オーディンの右腕を掴み上げた俺は、そのままオーディンを次元の亀裂へと投げ飛ばした。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

ミラーワールドから出てきた俺は辺りを見渡す。周囲には逮捕されてそのまま正太郎や照井に連れて行かれるものや、そのまま逃亡した仮面戦士もいたが・・・俺は事の原因を作った六面鏡の前で膝をつく神崎士郎の前に歩み寄った。

「士郎伯父さんどうしてこんなことをしたの？」

鏡から出てきて変身が解除されてしまった神崎士郎にアリアは空しそうな目をしながら駆け寄る。

「・・・・・」

「・・・やっぱり・・・ママのため？」

アリアの問いかけに神崎士郎は少し悩んでから首を横に振った。

「たしかにそれもあるが・・・お前のためだ。アリア」

「えっ？」

あまりに意外な答えにアリアは拍子抜けした様子で反応してしまう。

「いいかアリア・・・よく聞け。お前は・・・」

「神崎士郎・・・発見」

ドォォン

突如後ろから聞こえてきた声に俺達が振り向こうとした途端・・・

声の聞こえた場所から銃声が辺りに響き渡った。

「・・・ぐはっ!?」

「士郎伯父さん!?」

神崎士郎はうつ伏せに倒れると地面に赤い液体が広がる。撃たれてしまったのだ。エヴィル幹部でありながらアリアの伯父である神崎士郎がだ。救護科でも衛生科でもない俺でもすぐに気づく。・・・この量は間違いなく致死量だ。

「・・・くっ。ショッカー・・・どういうことだ。首領の命令か?」

「違う・・・これは組織の意思だ。お前は武偵高の仮面戦士達との戦いに敗北した。敗者となった幹部など組織にはいらない。この場で処刑する」

指から煙を出している黒いマフラーのショッカーライダーは神崎士郎に今度こそトドメを刺そうと銃弾を発射した指をもう1度向けようとする。・・・俺はすぐさま攻撃を止めるために変身しようとすると・・・

「止まれショッカー！」

「「っ！？」」

２０歳前半の旧式カメラを首に掛けた男とショッカー首領のように赤い覆面とマントを被った人物が俺達の前にやってきた。

「首領・・・それにショッカーグリード・・」

「なっ！？あいつがエヴィル首領だと！？」

俺は神崎士郎が『エヴィル首領』と呼んだ人物を睨みつける。首領はその視線に気づくと、面白いものを見たように少し笑った。

「実はなぁカンザキ。お前がエヴィルになった時点でいずれこうなるのはだいたい分かってたんだ。だけどこんなところで仮面ライダーショッカーに殺させるのは俺がつまらないから生かしておくぜ。・・・だが・・・次にお前に会ったときは『存在していたことも無くなる』ぐらいに破壊してやる」

まるで悪魔のような冷酷な目で首領は神崎士郎を睨みつけると・・・‘仮面ライダーショッカー’と呼ばれていた仮面戦士と‘ショッカーグリード’と呼ばれた謎の覆面は、それぞれリュウガのデッキとオーディンのデッキを回収して彼らの前に出現した歪んだ空間へ入っていった。

「はっ！？待ってて士郎伯父さん！今、救護科を呼ぶから！」

「もう呼んである。・・・だが・・・」

歌星はすでに救護科の手配は済ませてくれたらしいが・・・間に合うかはギリギリと言った様子で神崎士郎を見た。

「・・・あ、アリア・・」

「伯父さんこれ以上しゃべったら駄目！血が・・・血が・・・」

神崎士郎の傷口は相当酷く・・・アリアが必死に布や手で押さえても血は止まる気配がない。

「・・・気にするな。罪には罰だ。俺はただ罰を受けるだけだ。・・・そんなことよりもアリア。どうして俺がエヴィルの幹部になったかの話だったな」

神崎士郎は懐からちょっと釣り目の小さい子ども・・・おそらくはアリアと思われる少女と手を繋いで写っているかなえさんの写真を取り出して眺める。

「・・・シャーロック・ホームズは先祖から『緋色の研究』・・・すなわち色金の研究を受け継いだ‘赤の錬金術師’に所縁のある家系。そして神崎の家は『欲望の結晶』・・・コアメダルとセルメダルの研究を受け継いでいる家系なんだ。・・・そしてその2つに別れてしまった‘赤の錬金術師’の血筋が偶然にも交わって誕生したのが・・・アリア・・・お前だ」

「「っ！？」」

その言葉に俺もアリアも言葉を失ってしまった。・・・その話が本当ならアリアは両親が2人共あの‘アミカ’の血筋ってことにな

るんだからな。

「お前はエヴィルにも・・・そして今は影を潜めているが、それよりももっと強大な組織にも研究対象として狙われている。そのことに気がついた俺は大切な妹の一人娘を守るためにも単身でエヴィルに挑むも・・・圧倒的過ぎる力の前に敗北してしまった。俺はその矛先がアリアに向けないためにも・・・俺自身がエヴィルの幹部になってその矛先を別へと向けていたが・・・どうやら俺はいつの間にか目的を見失っていたらしい」

星空を見上げた神崎士郎の目は・・・悲しみと後悔で埋め尽くされてしまったかのようだった。

「・・・仮面ライダーオーズ。いや、遠山キンジ。エヴィルから・・・‘財団’と名乗る組織から俺の大切な妹の一人娘であるアリアを守ってやってくれないか？」

オーズとしてではなく遠山キンジとして神崎士郎は俺に「アリアを守ってくれ」と頼んできた。俺はその頼みを・・・・

「悪いが神崎士郎。その約束はできないぜ」

バッサリと断った。

「・・・どうしてだ？」

「・・・『どうして？』ってアリアはお前が思っている以上に強いからに決まってんだろ。実際、俺の方が何度も守られてるんだぜ。・・・それに俺達はバスカービルっていうチームなんだ。守るためじゃなく一緒に支えあって戦うのがチームってもんだろ？」

「なるほど。・・・そういう考え方もあったか。ならばキンジ、もう1つ頼みがある」

「何だ?俺にできることならやってやるぜ」

神崎士郎は六面鏡を握り締めると、その中から紫色のコアメダルがゆっくりと出てくる。神崎士郎はそれを掴むと俺にそれを突き出してきた。

「この恐竜系コアメダル、プテラコアメダル、を受け取ってくれ。・・・エヴィルの連中に扱われないためにもお前が持っていた方が安全だからな」

「・・・ああ、分かった。安全なところにしまっといてやるよ」

ドクンッ

俺はそう言うとプテラコアメダルを胸の中央にあてる。するとプテラコアは宣戦会議のときに3枚のコアメダルが俺に入ってしまった時のように、俺の身体・・・俺の欲望の隙間に入っていった。

「くっ!?・・・ぐぁぁぁぁっ!?」

あの時と同じように内側から何かが飛び出てくるような苦痛が俺を襲う。

「ちょっ!?何してるのよバカキンジ!!そんなことしたらグリード化が・・・」

「くっ、大丈・・・夫だアリア。・・・俺は・・・グリードになら

ない」

少し目が霞むが何とか苦痛に耐え抜いた俺は再び神崎士郎の方を振り向く。

「ハァ・・ハァ・・・よく聞け神崎士郎・・・。エヴィルは俺達が必ずぶっ潰す」

「エヴィルは1人2人の仮面戦士が集まった程度で倒せる相手じゃないぞ？」

「俺だけじゃない。仲間が・・・バスカービルの奴らがいる。正太郎達が・・・この学校の奴らがいる」

「俺達もいるぜ！」

フォーゼの変身を解いた玄太朗はこちらに右手の拳を向けながら大声で叫ぶ。この様子だとエヴィルのことはあまり分かっていないが・・・手を貸してくれるのはありがたい。

「それでも足りないなら・・・オールライダーをかき集めてでも絶対エヴィルを倒す。だからその間お前は入院でも何でもしてろ」

「・・・士郎伯父さん。あたしはキンジと一緒なら大丈夫よ。・・・だから士郎伯父さんもこんなところで死なないで」

「そうか、かなえの娘は最高のパートナーを持ったんだな。・・・遠山キンジ。アリアをこれからもよろしく頼むぞ」

そう言って神崎士郎は意識を失うと・・・駆けつけた救護科に凍

条や北岡と共に運ばれていった。

「ああ、任せとけ」

運ばれていく神崎士郎を見ながら俺は聞いた本人に聞かれるはずもない返事をすると・・・コンボの疲労と紫のメダルをさらに取り込んだ反動でその場に倒れこんでしまった。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺がコンボや紫のメダルの反動で気を失った頃、エヴィル本部では帰還した様子の首領がグリードとしての姿になったショッカーグリードが生け捕りにしてきた人間の頭を掴んでいるのを面白そうに見ていた。

「何をしてるんですか首領?」

「おお、影月!丁度いいところに来たな!まぁ見ていけよ・・・今からショッカーグリードがヤミーを作るぜ!」

影月は首領に言われるがままにショッカーグリードの方を見てみる。

「ひぃぃぃぃっ!?た、助けてくれぇ・・・」

「ショオォォォォカァァァァァ！！」
チャリィィン
怯えきっている生け捕りの男の額にショッカーグリードはセルメダルを入れると・・・・・
「うわぁぁぁっ！？」
チャリン　チャリン
男は２～３０枚のセルメダルになってしまった。
「・・・これは・・・失敗ということですか？」
「いや、よく見てろ影月」
セルメダルはまるで人間に戻ろうとするかのように人型に集まると・・・そのセルメダルはまるでかつて一号と二号が倒したショッカー怪人である死神カメレオンのような姿になった。
「どうやら成功のようだな。ショッカーグリード！手始めにそいつを遊ばせてこい！」
「ショォォォカァァァァ！！」
神崎や信司の件が片付いたと思っていたら・・・再び新たな戦いが始まろうとしていた。

特別な血筋（後書き）

今回は他のライダーを活躍させたかったのでミラーワールドでの戦闘パートでサカエを活躍させることを止めておきました。・・・そのせいで今回のキンジは道を作るだけの活躍に・・。ひとまずこれでＶＳ神崎編は終了です。次回は最近シリアスがどうしても続いているので軽く日常を挟みたいと思います。

破壊者と指輪と呪われたライダーシステム（前書き）

今回は平成ライダーにも昭和ライダーにも分類されることがない、あのライダー達が登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア×2
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

破壊者と指輪と呪われたライダーシステム

俺がコンボと紫のコアメダルの影響で気を失っている頃、富士の樹海では3人の仮面戦士が辺りを探索していた。かつてネオ生命体と戦った金色のラインに緑色のボディをした仮面戦士である‘仮面ライダーZO’の麻生勝(あそうまさる)さん。そしてZOと容姿が似ていて噂だと巨大化もできるらしい‘仮面ライダーJ’の瀬川耕司(せがわこうじ)さん。もう1人は仮面戦士・・・というよりは怪人のような印象が強い感じがする意味では他の仮面戦士よりもちょっと有名な仮面戦士‘仮面ライダーシン’に変身している風祭真(かざまつりしん)さんだ。

「・・・Jそっちどうだ?」

集まった3人はそれぞれ結果を聞く。

「こちらにはもう既にいなかった。・・・シンの方は・・・」

「・・・・・」

シンは首を横に振るとZOは「そうか」と呟きながら周囲をもう一度見渡す。

「・・・もうあいつの気配はない。少なくともこの場で再び戦闘になることはないだろうな」

「しかしあいつの狙いは何なんだ?俺達を倒そうとしていたことは、まるでついでのようだったぞ」

「・・・おそらくあいつの狙いは例の仮面ライダーオーズと行動を

共にしている少女だろうな」

「つまり東京武偵高に向かう可能性が高いということか？」

「タブン・・・ソウダロウナ」

シンが片言を言うと・・・辺りを見渡していたＪはＺＯとシンの方を振り向く。

「・・・東京はその場にいる仮面ライダーに任せて俺達は本郷先輩達に言われた通り怪人と戦える人達がいない場所を守るぞ」

「しかし現在の東京はただでさえ先日の東京武偵高襲撃で傷ついた仮面戦士が多い上にガスーパー１とスカイライダーが‘世界の破壊者’を探して世界各地を転々としているから守りが手薄になっているんだぞ」

「まだ戦える仮面ライダーの中には本郷先輩と一文字先輩が鍛えた矢車兄弟や、風見先輩が戦い方を教えた明智君とそのパートナーがいる。それに噂のオーズとなる少年もだ。それに近くには光太郎先輩もいるんだから大抵の敵は凌げると思う。・・・しかし世界の破壊者か。ほとんどの情報がないがいったいどんな仮面ライダーなんだ？」

ＪはＺＯに世界の破壊者とはどんな仮面ライダーかを聞くと・・・ＺＯは無言で首を横に振った。どうやらＺＯもほとんどのことが分かっていないらしい。

「俺もほとんどのことが分からないままだが・・・少なくとも１つだけ分かっていることがある」

「ソレハナンダ？」

「・・・それは、この世界、にはまだ来ていないということだ」

ＺＯの言い放った言葉にＪとシンは首を傾げてしまう。

「・・・どうゆうことだ？」

「言葉どおりの意味だ。世界の破壊者はいくつもの並行世界を移動する力があるらしい。本郷先輩が言うには・・・『彼がこの世界に来るかこないかでエヴィルとの戦況は大きく変わる』らしい」

「・・・なるほどな」

Ｊとシンは「本郷さんが言うなら真実だろう」と言った感じにそのことを信じ始めた。

「それともう１つ。・・・本郷さんはその仮面ライダーにあったことがあるのか？」

「・・・詳しくは聞かされていないから分からないが・・・おそらくあの口ぶりからして出会ったことがあるんだろうな」

本郷さんが勝利の鍵となる人物のことを知っている可能性があるかもしれないと思った３人はあらゆる可能性を考えながら少しの間沈黙をする。

「・・・とりあえず俺達は世界の破壊者がこの世界にやってくるのを信じていながら、戦えない人々を守ろう」

ＺＯの言葉にＪとシンは頷く。そして3人は変身を解除するとそれぞれのバイクに乗って何処かへと向かっていった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

神崎士郎の引き起こした事件から三日が立った。神崎士郎の手術は無事成功したが、昏睡状態で今も眠り続けている。

「・・・とっとと起きろよ。色々聞きたいこともあるが・・・」

何よりアリアが心配してるからな。

「・・・とっとと目を覚ませよ」

俺はそう言って病室を出ていった。・・・すると病室の外にはパッと見４０代後半で眼鏡を掛けた怪しい服装のおっさんが立っていた。

「・・・君が仮面ライダーオーズ。遠山キンジ君だね？」

「・・・確かに間違いないが・・・誰だおっさん？」

はっきり言って不審者にしか見えないぞ。

「私は鳴滝・・・預言者だ」

預言者?・・・ってことはあれか?超能力者か?

「そんで?・・・その預言者が俺なんかに何のようだよ?」

「いずれこの世界にはすべてを破壊する存在・・・ディケイドがやってくる。君はそいつを倒して欲しい」

鳴滝のおっさんが言っていることはワケが分からないが・・・どっちみち俺の答えは1つだ。

「断る」

初対面の変なおっさんがいきなり言ってきたことなんか信じられるかよ。

「では頼んだ・・・っな!?」

「初対面のおっさんがそんなこと言ってきても普通信用できないだろ」

「そ、そうだったな。では順を追って話そう。君は平行世界というものを知ってるかね?」

「・・・そんなん知るかよ。じゃあな」

鳴滝のおっさんが何かを言おうとしていたが、面倒なことに巻き込まれそうだったので俺は聞く耳を持たずに走り出した。

あの後・・・病院の廊下を走ったことで看護士に注意を喰らってしまい、数十分ほど色々言われた後に外を出て行くと・・・病院の手前にある公園のベンチにはアリアが座っていた。あの様子だと・・・相当、神崎士郎がああなっちまったのが堪えているな。

「・・・キンジ」

「アリア・・・隣・・・いいか？」

アリアが頷いてくれたので俺はゆっくりとその隣に座る。

「そういえば猫探しの時もこんな風に座ってたよな。そういえばあの時俺達は始めて一緒にヤミーと戦ったんだったな」

「そうね。・・・あれから色んなことがあったわね」

飛行機を止めるために初めて3枚同色のコンボ・・・ガタキリバに変身したり。・・・アドシアードの時にやってきたメズールとガメルにラトラーターになったり。アークに変身したブラドを倒すためにサゴーゾを使ったりもしたな。そんでパトラの時にはシャウタに

変身したりもした。・・・俺達はそんなことを思い出して語った。

「曾お爺様との勝負の時には・・・始めてアンクのメダルを3枚使った姿になって戦ったわよね」

「ああ、あの戦いは本当にきつかったぜ」

未だにあいつ以上にやばい相手と戦ってない気がするしな。・・・・グランザイラスはたしかに強力な相手だったけど、それは破壊力とかパワーだけで、しかも4人で闘っていたから未来予知みたいな推理をするシャーロックとタイマン勝負をした時と比べると無理ゲーじゃなかった。もしかしたらプテラヤミーは相当やばかったのかもしれないが・・・暴走したせいで戦ったって感覚がないしな。・・・俺がそんなことを思い出しているとアリアは何かを決意したように口を開いた。

「曾お爺様に連れて行かれた時・・・あたしがホームズ家としては失敗作って呼ばれてたことを言ってたでしょ？」

「・・・・・」

その言葉に・・・俺はどう答えてやればいいのか少し迷ってから無言で頷いた。

「あたしは推理能力に長けてはいない失敗作だったからいないものとして扱われてた。だからこそ士郎叔父さんはね・・・そんなあたしの数少ない理解者だったのよ。ママ以外にあたしのことを認めてくれた人、あたしのことを見てくれた人だったの。・・・だけど数年前・・・ママに『お前たちは絶対に守る』って言って忽然と姿を消してしまったの。そしてやっと会えたと思ったらエヴィルの幹部

になっていたんでビックリしたわ。・・・だけどママとあたしのためにやってくれてたって聞いて・・・嬉しかった気持ちもあるけど、やっぱりイラってきたわ。・・・あたしとママのために無関係の人を傷つけてたんですもの」

そう言ったアリアの様子はやっぱりちょっと暗い感じだった。

「やっぱり・・・神崎士郎のことが昏睡状態なのがショックか？」

「いいえ。・・・と言ったら嘘になっちゃうけど今は大丈夫よ。・・・今は只・・・自分があのアンクのめダルを作った錬金術師・・・アミカの子孫だったことに気持ちの整理がつかないだけ。それよりもキンジの方こそ大丈夫なの？あんたの中にはコアメダルが４枚も入っちゃってるのよ！」

アリアは俺の身体に入ってしまっている紫の恐竜系コアメダル４枚のことを聞いてきた。・・・とりあえず今のところは問題ないな。

「平気だって。少なくともあの姿にならない限りは暴走することもないんだし・・・」

「もっと自分を大切にしなさいって言ったでしょ！あんたの身体はあんた１人のものじゃないのよ！」

「えっ！？」

ドクンっ

その言葉に俺はどういう訳かヒステリアの血流を感じたような気がした。

「べ、別にそんな意味で言っているんじゃないわよっ！あんたとあたしはパートナーだからそう言っているわけであって・・・・深い意味は・・・」

パートナーとしてじゃなかったらどういう意味で言っていたんだ？

「それとねっ！言い忘れてたけど・・・これ。あんたの気持ちは嬉しかったけど・・・」

アリアは左手を突き出して指を見せてくる。

「指輪。まだしないから」

ああ。誕生日のときにあげた指輪のことか。別につけるつけないはアリアの勝手だと思うんだが。

「・・・気に入らなかったか？だったら悪かったな。俺、センスなくて」

「ちっちがう！ちがうちがう！」

アリアは阿修羅像のように顔がいくつも見えてしまうようなスピードで首を横に振った。そしてもう一度俺の方を向きなおす。

「そ、そうじゃなくてっ。まだ、しないってだけよっ！かっ返さないからね！もうスイス銀行貸金庫に送ってしまっちゃったから。厳重に！」

「返さなくてもいいよ」

苦笑した俺に・・・どういう訳かアリアは顔を急速に赤面し始めた。・・・相変わらず赤面する速さが物凄いな。

「相変わらずステップを飛ばしまくるわね。指輪のこともそうだったけど・・・士郎伯父さんにも認めてもらうなんて・・・」

何を言ってるんだ?声が小さすぎてはっきり聞こえないぞ。

「と、とにかくっ!やっぱりあたし達には早すぎるの!だから・・・まだしない。でも、その、それにしても・・・・あんた、あたしの誕生日を覚えてたのね」

「それは・・・一応、バスカービルのリーダーだしな。メンバーのことを知っておくのは任務の1つだろ」

「『任務』かぁ。それじゃ他のメンバーの誕生日も知ってるの?白雪とか・・・理子とかレキの」

「あー・・・正確には知らん」

何月かまでは覚えているんだが・・・日にちまでは覚えていないな。・・・そう正直に言うと、アリアは『勝った』という表情をする。・・・何でだ?

「ねぇ。・・・じゃあもう1つ。あんたのこと聞いていい?」

「いいよ。別に隠すようなことはない」

ヒステリアモード以外はな。

「その・・・えっと。キンジってさ・・・い、今まで何人カノジョがいたの？」

「いたことねーよ」

「ウソだわ。だってあんたモテるでしょ」

「んなワケねーだろ。俺はネクラで昼行灯って周りから言われているような人間だぞ。０人だ０人。聞くまでもないことを聞くなよ」

俺がへの字みたいな口でそう答えると・・・アリアはデレデレしたようなだらしない笑顔になった。たしかに神崎士郎のことがあったから慰めようと話しかけたんだが・・・ここまで元気になられるとどういう反応をすればいいのかちょっと困るぞ。

「そういうお前はどうなんだよ？」

「えっ？」

一発、同じ質問で逆襲してみると・・・アリアはアリアで口をへの字にした。

「・・・最初から言ってるでしょ。あたしは恋愛なんかしたことがない。なかった。いつもママのことでいっぱいだったから・・・」

何か・・・悪いこと聞いちゃったみたいだな。

「悪い・・・売り言葉に買い言葉で・・」

「い、いいのよ。ママの裁判は２週間後だし、無罪なのは間違いな

いし。無罪になったら検察も上告はしないって言ってた。日本も即日判決を言い渡すように法改正してるから、ママは再来週自由になれるのよ」

「その前に・・・色々と解決しておきたいことはあるがな」

亮太郎の救出が最優先だが・・・神崎士郎は一応エヴィルを裏切った形で入院しているんだ。神崎士郎やアリアどころか、かなえさんを狙ってくる可能性だってある。・・・刑務所はある意味安全な環境だからこそ・・・かなえさんが刑務所から出てくるまでにエヴィルをぶっ潰さないとな。

「とりあえず・・・今まで頑張った甲斐があったな。・・・アリア」

「うん。だから・・・これからはその、少しそういう事・・・それ的な事を考える余裕ができたかな・・・ってちょっと思って。そしたらキンジがちょ、ちょうどあんなゆ・・・ゆび、指輪を・・・」

母親の話からボソボソと恋愛トークに移ろうとするので・・・俺は先ほどから少しいつもと様子が違うアリアに・・・

「なんか・・・お前いつもと違うな。やっぱり相当神崎士郎のことが堪えているのか？」

「そうじゃなくて！これからあたしはキンジと・・・ってあれ？どうしてあたしはこんな話ばっかをしているの？」

「俺に聞くなよ」

やっぱり堪えてるんじゃないか？

「もう帰るか。寒くなってきたし・・・」

「そ、そうね・・・」

ベンチから立ち上がって歩き出そうとすると・・・アリアは俺の制服の背を小さい手で掴んできた。そして俺が振り返る前に・・・おでこをコツンと背につける。

「じゃあ・・・これで少しステップを上がったことにするわ」

「ステップ？」

「うん。たった数分間。ただ2人きりの公園で話していただけだったけど・・・これはあたしの人生初めてのデート。そのステップを上がった。そういうことにしておくわ」

まぁ、何といおうとアリアの勝手だけどな。

「ほら・・・帰るぞ」

俺は「そうだな」とは言わないで置こう。何となくだが・・・今のアリアは少しおかしいからな。いや、おかしいというか・・・俺は直感は優れてないタイプだが・・・公園でのアリアは心の深いところから出てきた感じがしたからな。・・・それに何よりも怪しいと思えるのは・・・・

「・・・くっ・・」

ドクンっ

アリアがこんな反応をし始めてからずっと俺の中にある紫のメダルが反応してるってことだ。最初はいつもと違うアリアに反応したのかとも思った。・・・いや、最初は反応していたのかもしれないが・・・アリアの様子がどんどんおかしくなり始めるにつれてヒステリアの感覚よりも、メダルの感覚の方が強くなりやがった。

「どうしたのキンジ?さっきから恐い顔して・・・」

「い、いや何でもない」

さっきよりは紫の力が収まってきたので俺はどうして紫のメダルが反応したのかを少し考えてみる。・・・もしかしてアリアの緋緋色金に紫のメダルが反応しているのか?だけどアリアのそれは戦と恋に反応するものであって今の状況で出てくるはずのものじゃないはずだぞ?

「・・・アリア駐車場にバイクを止めてるからそれに乗ってけよ」

「分かったわ!」

とりあえず紫のコアメダルも緋緋色金も俺にはよく分からないので、深く考える止めて病院の駐車場に停めてあったオーラインクロスに跨ってアリアを後ろに乗せようとした途端・・・・

「っ!?」

俺は紫のメダルを通じて何処かから感じたヤミーの気配に気づいた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・

俺が男子寮へと帰ろうとしている頃、特捜科の一室では小沢さんがひたすらパソコンのキーボードをカタカタと打っていた。

「・・・ふぅ。とりあえずこれでＧ３－Ｘの防御力を1、2倍まで上げることはできたわ。これならＧ４のギガントを2～3発は凌げるはずよ」

「・・・そう・・・ですか」

氷川はまるで身体に魂が宿ってないかのような返事をする。

「それと・・・ＧＸランチャーも強化をしておいたからね」

「・・・そう・・・ですか」

氷川はまともや感情の篭っていない返事をする。

「・・・氷川君。たしかに装着者の生命力を奪ってしまうため‘呪われたライダーシステム’とも呼ばれるＧ４システムを使っていたのが水樹さんだったのはショックだったと思うけど・・・そろそろ落ち込んでいるのもいい加減にしなさい！」

「たしかにそうですが・・・僕はどうすればいいんですか？Ｇ３－Ｘでは間違いなくＧ４には敵わないですし・・・何より僕は・・・あの人と戦いたくはない」

「G3―Xに関しては先ほども言っていた通り出力アップをしたから気にしなくてもいいわ。・・・だけどたしかにあなたの気持ちの方に問題があるわね。でもそうしたら誰が水樹さんをG4の呪縛から解放するの?」

その言葉に先ほどまで生きる希望を失っていた様子の氷川は顔を上げる。

「それは・・・どういうことですか?」

「言葉通りの意味よ。・・・たとえG4システムのパーツにされていたとしても・・・たとえ悪の幹部になっていたとしても・・・そのことを自ら氷川君に話したってことはあなたに自分を止めて欲しかったんじゃないの?自分と一番関わりの多かった生徒だからこそ・・・自分を倒して欲しいと思ったんじゃないの?」

小沢さんの言葉に・・・氷川は「そんなこと、考えてなかった」と言った感じな表情をするとようやくはっきり意思の篭った発言をする。

「・・・僕に・・・できるんでしょうか?」

「私はあなた以外に水樹さんを救うことができるのはできないと思っているわ。自身を持ちなさい」

「・・・はい。僕にどこまでできるかは分かりませんが・・・それでもできる限りのことはやってみたいと思います」

氷川は仮面ライダーG4・・・水樹志朗さんと戦う決意を固めた。

そしてその矢先に・・・

ドオォォォォォン！！

何処からともなく爆発音が響いた。

破壊者と指輪と呪われたライダーシステム（後書き）

日常・・・って言っておきながらそんなに日常もできずにシリアスが多くなってしまいました。とりあえず今回はようやくまだ登場していなかった平成主役ライダーの最後の１人のフラグを立てることができました。

プロジェクトG４（前書き）

普段更新する時間よりもだいぶ遅くなってしまいました。今回は久しぶりにメダルに動きがあります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
サイコア
ライオンコア
トラコア
ゴリラコア
バッタコア
ゾウコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

プロジェクトＧ４

俺が神崎士郎の病室に向かう数時間ほど前・・・エヴィル本部では首領が少しつまらなそうに玉座に座っていた。

「あ～～暇だ！何処かを破壊したい！ぶち壊したい！完膚なきまでに破壊したい！」

「・・・３日前に勝手に出歩いたばかりではありませんか。とりあえず駄目ですよ。世界の破壊をするためには生け贄として数十個のライダーパワーが必要なんです。首領が勝手に出歩いては高確率で仮面戦士と戦ってしまいます。ライダーパワーを持つ仮面戦士は稀少なんですから迂闊に破壊しようとしないでください」

影月は少しだけ怒った口調でそんなことを言うと・・・首領は四角いカードホルダーのような物から何枚かのカードを取り出す。

「・・・破壊させてくれないせいで使ったことがないカードがまだいっぱいあるんだぜ？なぁ少しだけ破壊しに行かせてくれよ。１００円やるから」

「・・・子供のお小遣いですか？・・・別にお金の問題ではありません。しつこいようですが絶対に行かせませんよ」

「・・・はぁ・・仕方がないから適当な幹部の破壊を見てることにするか。・・・えっとミサイルとかの近代武器で破壊してくれそうなのは・・・Ｇ４！」

「・・・ＹＥＳ」

首領の呼び出しにより、その部屋に入ってきたＧ４はその場に跪く。

「東京の武偵高・・・その駅の辺りで手当たりしだい破壊して見せろ。ギガントの破壊力を強化したんだろ?その火力を見せてみろ」

「了解」

命令を受けたＧ４はすぐにその場を立ち去ると・・・再び首領と影月が２人きりになる。

「そういえば・・・ショッカーグリードとそのヤミーは何処で暴れているんだ?」

「このままの進路予想からすると・・・数時間後には東京の武偵高駅周辺で次の破壊活動をすると思われます」

「・・・だいたい分かった。つまりＧ４とショッカーグリードは出くわしてしまう確立が高いっていうことだな?」

影月は「失敗でしたね」と言いながら頷くと、首領は面白そうに笑う。

「それはそれで面白そうだ!」

不適な笑いを浮かべた首領はと中央のモニターに映し出されているショッカーグリードの様子を見始めた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺がアリアの話しこんでいる頃、アンクは空き地島の片隅で渉と話をしていた。

「それで・・・・ファンガイア族はエヴィルについての情報はどれぐらい集まっているんだ？」

「・・・ビショップさん達にそれらしいフリをしてもらって支部の数箇所を偵察してもらいました。それで分かったのが・・・これです」

渉はアンクに数枚の用紙にまとめた資料のようなものを渡すと・・・アンクはすぐさまその資料に目を通した。

「なるほど。幹部は８人ほどいるが、襲撃の時に矢車達が倒したケルベロスアンデットと凍条達が倒したオーディン・・・神崎士郎も含めて２人の幹部を倒しているんだな」

アンクが資料を返すと渉はさらに別の資料を取り出す。

「つい先日・・・アメリカのニューヨークに出現した‘ゼイビアックス’と名乗っていた幹部はアメリカ武偵の仮面戦士‘ドラゴンナイト’と‘ウイングナイト’の２人によって撃退に成功。手傷は負わせたものの、決定打を決めることはできなかったらしいです。今後、目標を日本に変えて仕掛けてくる可能性も充分に考えられます」

「そうか。別の国でもエヴィルが活動しているんだな。・・・そう

いえば・・・」

それにも目を通したアンクはふと思い出したように尋ねる。

「現在のキング・・・オトヤの具合はどうだ?」

「正直・・・あまり容態はよくありませんね。父さんは純潔のファンガイア王家なのでハーフの僕よりも回復力は早いはずなんですが・・・エヴィル首領から受けたダメージは、まるでファンガイアの再生力自体を破壊されてしまったかのように回復する兆しがないんです。一応現在の外交政治は僕の兄が行ってくれているので問題ありませんが・・・こっちに住んでいる次郎さん達アームズモンスターと襲撃の際たまたま留守にしていたビショップさん以外も相当なダメージを受けていて・・・・」

「ファンガイア族の協力は仰げないってことか」

その言葉に頷いた渉の後ろにはいつの間にやら城のようなドラゴン・・・キャッスルドランが舞い降りていた。

「もう時間か。・・・・アンクさん。僕はこれからファンガイア王家としての仕事があるので失礼させて頂きます」

「ああ、オトヤもだが・・・絶対に死ぬなよ」

その言葉に頷いた渉はキャッスルドランに乗ると・・・そのままキャッスルドランは飛び去っていってしまった。するとアンクは何処からかヤミーの気配を感じた。

「っ!・・・この気配はヤミーか!・・・だけどこの感じは何だ?

まるで大きな欲望で元々あった欲望を塗りつぶしたような感じは？」

アンクはヤミーの気配に少し違和感を感じながらも、気配を感じた武偵高駅前へと向かって行った。

・・・

「あっ！？」

俺がメダルホルダーからタトバのコアメダルを取り出した途端・・・アリアは武偵高駅の屋根の上を指差した。

「キンジ！あれっ！」

「ん？・・・っ！」

アリアの指差した先を振り向いてみると・・・そこには黒いＧ３のような仮面戦士がミサイルのような何かを持って構えていた。

「キンジ・・・何かやばそうなんだけどあの仮面戦士は何なの？」

「あのライダーシステムは・・・確かＧ４システムとか言って、元々警察が作り出したＧ３システムを軍が独自に改造した代物らしい」

「・・・たしかに表向きにはそう発表されていますが・・・実際は違います」

その声に振り返ってみると・・・俺達の後ろにはＧ３－Ｘが立っていた。

「氷川・・・それはどういうことだ？」

「本当は１年前・・・自主退学をした深水先輩が小沢さんの開発したＧ４チップを盗み出して開発されてしまったライダーシステムなんです」

氷川はＧ４のことをそのように説明したが・・・

「・・・それだけじゃないんでしょ？」

アリアはＧ３－Ｘの中から聞こえる氷川の声でそれだけじゃなさそうな雰囲気を悟って問い詰めた。

「・・・・・・」

しかしアリアの問い掛けにＧ３－Ｘは答えない。・・・何か訳ありっぽいな。

「変身っ！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

オーズに変身した俺はトラクローを構えながらカメレオンヤミーへと歩み寄る。そして後ろで援護しようとしているＧ３－Ｘに先ほどから思っていたことを告げる。

「・・・Ｇ４システムの装着者が誰だかは知らないが・・・その人物は氷川が戦わないといけない奴なんだろ？だったらとっとと先に行けよ。俺はこのカメレオンの怪人をぶっ飛ばす」

「・・・ありがとうございます」

Ｇ３－Ｘを見送った俺はカメレオンヤミーに向かって駆け出すとトラクローで切り掛かるが・・・

「・・・なっ！？」

カメレオンヤミーは透明になってしまい、トラクローを空振りさせてしまった。だけど俺には透視もできるほどの超視力を持つタカヘッドがあるんだ。そう思った俺は複眼を紅くしながら辺りを見渡そうとすると・・・・

「キシェェェェエ！」
ドカッ

「うわっ！？」

突如伸びてきた舌に攻撃されてしまった。

「くっ！？ならこれだ！」
『サイ！ゴリラ！ゾウ！サッゴーゾ！サッゴーゾォォ！！』

「フンッ！」
ドカッ

サゴーゾコンボとなった俺はカメレオンヤミーの舌を掴んで引き寄せると、力いっぱい殴りつけた。

「キシェっ！？」

悪いがこっちも色々と忙しいんだ。次の一撃で終わらせてもらうぞ。

『スキャニングチャージ！』

「ハァァァッ！」

俺はサゴーゾコンボとなって重力操作でカメレオンヤミーの動きを封じようとすると・・・

「ショォォォォォカァァァァ！！」

謎の声と共に怪しげに光る無数の光弾が俺に飛んできた。

「なっ！？ぐわぁぁぁぁぁぁっ！？」

チャリィィン

その光弾を喰らってしまった俺はベルトから重量系メダルが3枚吹き飛んでしまい、変身が解除されてしまった。

「キンジ！」

「来るな！！」

こちらに駆け寄ろうとしたのを止めると・・・俺の前にこの前、エヴィル首領と一緒にやってきた赤いフードとマントを纏った何者かが舞い降りてきた。そういえば神崎士郎はこいつのことを‘ショッカーグリード’とかって呼んでいたな。地面に着地したショッカーグリードは蛇のついた鷲のような怪人に姿を変えると翼を広げた。

「お前・・・何しに来た？」

「ショォォォカァァァ！」

「・・・・・」

何だこいつ？まるで話が通じるように感じられないぞ。・・・だ

けどさっきの攻撃と独特の雰囲気で俺なんかでもすぐに分かる。・・・下手な動きをしたら一瞬であの世行き決定だってことがな。

「くそっ！異常なまでの欲望を感じて嫌な予感をしていたが遅かったか。・・・キンジ！そいつから離れろ！そいつはショッカーグリードとかいう完全体のグリードに限りなく近い化け物だ！」

アリアの近くまでやってきたアンクは俺に向かってそのように叫んでくる。・・・完全体のグリードに限りなく近い化け物か。・・・こいつは予想以上にやばそうだな。

「ショォォォカァァァ！！」
チャリン、チャリン
「「なっ！？」」

ショッカーグリードは先ほどの攻撃で吹き飛ばされた重量系コアメダル３枚を、その身体に吸収してしまった。・・・あんな風にメダルを吸収したってことはまさか、カザリのように他のグリードの能力を自分のものにする気か？

「そうはさせるかっ！」
『ライオン！トラ！バッタ！』

再びオーズに変身した俺はライオネルフィッシャーの光で一瞬だけでも視界を奪ってコアメダルを取り返そうとするが・・・

「ッ！！」
ドォォン！

ショッカーグリードは本来は鳥系グリードのアンクの技である火球を放ってきた。

「ぐわぁぁぁぁ！？」

その攻撃をまともに喰らってしまった俺は数メートル吹き飛ばされてまたもや変身を解除されてしまうと・・・すぐさまトラとバッタのコアメダルを回収する。しかしライオンのコアメダルだけは俺から離れた場所だったせいで回収ができずにそのまま奪われてしまう。

「チッ！何やってやがる！」
ドォォン！

右腕を怪人の姿に変えたアンクは俺の前に立つとショッカーグリードに向かって火球を放つも・・・ショッカーグリードは怯みもせずにこちらとの距離を詰めてきた。

「ショォォォッカァァ！」

ショッカーグリードはアンクの首と右腕を掴み動けないようにすると、頭部から生えている蛇が動き出しアンクの右腕を貫いた。

「ぐっ！？」

そして蛇の口には赤いコアメダル・・・コンドルメダルが加えられていた。

「アン・・・ク・・・」

起き上がった俺は投げ捨てられたアンクのところに駆け寄ろうとするも・・・ダメージが思っていた以上に大きくその場に倒れてしまう。そしてショッカーグリードは今度こそトドメと言わんばかりに光弾を放とうとすると・・・・

「させないわ！」
ドンッ！

アリアはガバメントでショッカーグリードの腹部を撃った。・・・するとショッカーグリードはダメージこそないはずだが自分を攻撃したという理由からか、攻撃対象をアンクからアリアに移してしまった。

「ショォォォォカァァァァ！！」
ビュンッ！

「っ！？」

ショッカーグリードは複数の蛇をアリアに向かって差し向ける。・・・怪人の姿になっているアンクの腕を簡単に貫いてしまうほどの蛇だ。生身の人間であるアリアにそれが複数も襲い掛かったとしたら・・・アリアの口癖通り、本当に風穴になっちまうぞ。

「アリアァァァァ！！」

俺がアリアを守るためにショッカーグリードの前に出ようとした途端・・・俺はカメレオンヤミーの舌に巻きつけられて身動きが取れなくなってしまった。・・・このままじゃアンクもアリアもヤバイ。・・・だけど並大抵の力じゃこいつには敵わない。こうなったらあれしかないな。・・・俺は左胸に右拳をあてると・・・強く念

じる。

「・・・頼む。俺に力を貸してくれ！！」

ドクンッ！

身体から飛び出てきた紫のコアメダルを3枚掴み取った俺はその力に飲み込まれないように耐えながらベルトにセットする。

「駄目よキンジ！そんなことをしたら、またあんたが・・・・」

「また暴走するぞ！」

「・・・その時はまた何とかしてくれよ。・・・変身！」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プットッティラ～ノザウル～ス！』

「ガァァァァッ！」

バキィィィン

オーズ・プトティラコンボに変身した俺は冷気でショッカーグリードの蛇を氷付けにすると、そのまま蛇を殴って砕く。・・・俺はそこでメダルの力に飲み込まれてしまい、俺の身体は俺の意思に反応せずに動き出した。

「ガァァァッァ！」

地面から恐竜の頭部のような斧・・・メダガブリューを取り出した『俺』はカメレオンヤミーを叩き割るかのように斬り付ける。

「キシェェェエ！？」

「ガァァァウッ！！」
ドカッ！

斬り付けて怯ませた所に『俺』は追い撃ちで殴りつける。そしてそのままメダガブリューでカメレオンヤミーにトドメを刺そうとした所を・・・・

「ショォォォッカァァァァ！！」
バサッ！

ショッカーグリードの翼に止められてしまった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺がプトティラコンボに変身して力に飲み込まれて暴れながらショッカーグリードとカメレオンヤミーを相手にしている頃、Ｇ３－ＸはＧ４と向かい合っていた。

「・・・水樹先生。できれば僕は戦いたくありません。武器を捨てて投降してくれませんか？」

「・・・嫌だと言ったら？」

「・・・僕はあなたと戦わなくてはいけなくなってしまいます」
『カイジョシマス』

Ｇ３―ＸはＧＸ０５のパスワードを解除して展開するとＧ４に向かって銃口を向ける。するとＧ４もミサイルをＧ３－Ｘに向けた。

「これが俺の答えだ。小沢の開発したＧ３－Ｘシステムと深水の開発したＧ４システム・・・どちらが高性能か確かめようじゃないか」
ドオォォォォン！！

Ｇ４はＧ３－Ｘに向けてギガントのミサイルを一気に発射する。

「くっ！？」
ガガガガガガッ！

それに対してＧ３―ＸはＧＸ０５でミサイルが自身に直撃するよりも前に打ち落とすが、爆風でそれなりにダメージは喰らってしまう。数メートル吹き飛ばされて左肩と片方の角が無くなってしまったＧ３－Ｘはふらふらしながらも立ち上がると小沢さんから通信が入る。

『氷川君！今の攻撃でＧ３－Ｘのメインカメラを破壊されてしまったわ。・・・こちらはあなたの状況を分からなくなってしまったせいでサポートはできなくなってしまったけど・・・私はあなたを信じているわ。絶対に勝ちなさい！』

「・・・善処しますが・・・難しいですね」

先ほどのミサイルはＧ３－Ｘの複数の武器を格納しているバイク

‘ガードチェイサー’にも被弾してしまい、武器の追加はできない。かと言ってＧＸ０５もさっきの攻撃により大破してしまい使用できなくなっている。つまりＧ３―Ｘ攻撃手段のほとんどを失ってしまっているのだ。

『損傷状態を確認したわ。・・・氷川君。・・・確かにＧ３－Ｘのほとんどの武器を無くしてしまっているけど・・・あなたにはまだ破壊されていない最強の武器があるでしょ？』

「・・・えっ？」

『技術者の私が言うのも何なんだけど・・・人の心っていうのは最大の武器よ。自分の意思が折れてしまわない限り何度でも立ち上がることができるんですもの。・・・ここからは仮面ライダーＧ３－Ｘとして戦うのではなく武偵高生徒の１人・・・氷川真として戦いなさい』

小沢さんの通信を聞いたＧ３－Ｘは・・・頭部のアーマーを外して地面に捨てた。

「・・・何のつもりだ氷川？」

「このままでは・・・Ｇ３－ＸではＧ４に勝つことはできない。だから僕は仮面戦士ではなく１人の人間として・・・氷川真として水樹先生と戦います」

そう言った氷川は左手にＧＫ０６ユニコーンと呼ばれるコンバットナイフ、右手にＧＭ０１スコーピオン・・・サブマシンガンを握り締めてＧ４へと立ち向かった。

プロジェクトＧ４（後書き）

これ以上引っ張るつもりもないので次回ぐらいでＶＳＧ４編も終了させたいと思います。

人としての強さと信念の力と使い方（前書き）

昨日は諸事情により更新できなくてすみませんでした。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

人としての強さと信念の力と使い方

俺がプトティラに振り回されながらもショッカーグリード達と戦っている頃、氷川は1人の人間としてG4と戦っていた。

「ハァァァァッ！」
ドン！ドン！

GM01を連射しながら距離を詰めようとしてくる氷川に向かって、同じくGM01を向けようとするG4だったが・・・

「ッ！！」
ドン！

氷川はG4の持つGM01の銃口を的確に狙い撃ち、それを破壊した。

「・・・くっ！？」

G4は少しだけ後ずさると、再びギガントを持ち直して氷川に標準を合わせようとすると・・・G4はダメージを喰らっていないにも関わらず、いきなり膝をついた。

「ハッァ！！」
ドカッ！

それをチャンスだと思った様子の氷川は、すぐに距離を詰めるとGM01を捨ててギガントを殴り落とす。

「テリャァァァ！！」

さらにはＧ４に反撃されてしまうよりも先にＧＫ０６で胴体を斬りつけると・・・・

「ハァァァァッ！！」

ドカッ！

追い討ちをかけるように胸部にキックを決め込んだ。

「ぐあっ！？」

バチィン

氷川の攻撃に耐え切れなくなったＧ４は蹴られた場所から火花を散らしながら後ろに倒れると・・・氷川はすぐさまその横にしゃがみ込む。

「・・・強くなったな氷川」

「『仮面戦士である以前に人間として強くなれ』・・・あなたの教えがあったから・・・僕は強くなれたんですよ」

戦意を失った様子のＧ４は自分の予想以上に強くなっていた氷川に語りかけると・・・氷川は彼から教わったことだと言った。

「どうして悪の組織の・・・エヴィルの幹部なんかになってしまったんですか？」

氷川はＧ４にエヴィルになってしまった理由を尋ねると・・・Ｇ４は少し苦しそうに、その理由を語り始める。

「・・・俺は半年前・・・G2システムでエヴィルと戦闘し・・・敗北し・・・捕らえられた。そして強制的に肉体を改造され・・・エヴィル首領の命令には逆らえない機械人形のような存在になってしまった。・・・そしてエヴィル首領の命令で何を壊したか・・・何人を殺したかすらも分からなくなってしまうほどに破壊を繰り返した。・・・そして先日の襲撃でお前と再会してから・・・ようやく俺は自分の意思を少しだけ取り戻した。・・・しかし俺はもう罪を重ねすぎていたので・・・教え子であるお前に倒してもらおうと思って・・・な」

「水樹先生。・・・生きていればきっとやり直せます。だから生きてください」

「・・・悪いが・・・それは無理だ。G4システムは装着者の生命力をエネルギーにして活動する。・・・それに先日にも言ったはずだぞ。『俺はG4のパーツ』だと・・・。俺はG4に必要だった動力源というパーツに過ぎない。・・・俺は力を使い果たした。もうすぐ・・・俺の命も終わるだろうな」

「なっ!?そんな・・・」

氷川は絶望したような表情になると・・・G4はゆっくりと氷川の右肩に左手を置く。

「・・・俺の命は終わってしまうが・・・俺の『人間としての魂』はお前に救われた。感謝してるぞ」

「水樹・・・先生ぇ。・・・ぼ、僕も感謝しています。」

「ありがとう氷川。・・・これからも・・・立派な仮面戦士として・・・生き・・・ろ」
ガクッ

Ｇ４のベルトのバッテリーが０になった途端、水色に輝いていた複眼から光が消えてしまい、氷川の肩に置かれていた手も力を無くしたかのようにずり落ちてしまう。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

夕日が沈み、星も輝いていない真っ暗な夜・・・氷川は力尽きたＧ４の前で悲しみの叫びを響かせてる。

『ひ・・・君！・・・川君！』

すると先ほど外していた仮面から小沢さんの通信が聞こえてきた。

「・・・・はい」

氷川は悲しみを隠しきれていない様子で仮面を回収し、通信に答えると・・・・

『死んだと思って悲しんで入るところ悪いけど・・・まだ水樹さんは生きているわよ』

予想外だったことを言われた。

「ど、どうして分かるんですか！？カメラが破壊されたのに！？」

氷川は目の前にいる自分にも分からなかったことを知っていた小

沢さんに驚くと・・・小沢さんは「当然でしょ？」とでも言いたげな口調で氷川に説明をした。

『・・・あくまでこちらで分からなくなったのは画像による情報だけで通信やダメージ被害は確認できるわ。もちろん生体反応もね。・・・水樹さんの心臓はまだ止まってはいないわよ。かといって心拍数がどんどん下がっていて危険な状況には変わりないけど・・・そこは未だに戦場になっているから救護科の生徒は近づけないわ。今から指示する場所まで水樹さんを運びなさい』

「りょ、了解しました！」

Ｇ４の装備を引き剥がして水樹先生を運び始めた氷川は、急いで指示された場所へと走り出した。

・・・

ショッカーグリードにメダガブリューを振り下ろすも・・・メダガブリューはあっさりと受け止められてしまう。

「キシェェェェェ！！」

透明になって『俺』の後ろに回りこんでいたカメレオンヤミーは本来の色に戻った途端に舌を伸ばして攻撃をしてくるも・・・・

「ガァァァァッ！！」
ピキピキッ　バキィィィン

『俺』は頭部から冷気を放ちその舌を凍らせてから、すぐに出現させた尻尾で叩き割った。

「キシェェェェェっ！？」

舌が砕かれたカメレオンヤミーは後ろに引き下がると、何処からともなくサーベルのような剣を取り出して復讐と言わんばかりに襲い掛かってくるも・・・

「ガァァァァッ！！」
バキィィン

『俺』は一度ショッカーグリードから離れてメダガブリューでその剣を木の枝をへし折るかのように砕いて、そのままカメレオンヤミーを斬りつけた。

「キシェェェェェエ！？」
チャリィン

そして斬りつけたところから出てきたセルメダルを1枚握った『俺』はメダガブリューにセルメダルを喰わせると・・・・

「・・・・・」

『プットッティラ～ノヒッサ～ツ！』

ドォォン！

銃のような形態にしてセルメダルのエネルギーを凝縮した紫色の光弾でカメレオンヤミーを撃ち抜いた。

「き、キシェェェェェェ！？」

ドオォォォォォン！！

光弾に撃ち抜かれたカメレオンヤミーは爆散して周囲にセルメダルが散らばると・・・『俺』はショッカーグリードの方を振り向く。

「ショォォォォッカァァァァァ！！」

ドドドドッ！

「ガァァァァァッ！！」

ショッカーグリードはアンクが放つような火球を放ちながら複数の蛇を俺に噛み付かせる。・・・しかしその攻撃を喰らっても『俺』の勢いは止まらずにショッカーグリードへと駆ける。

「ショォォォッカァァ！！」

チャリィィン

「「「イーーーー！！」」」

翼を広げたショッカーグリードは無数の割れたセルメダルをばら撒くと・・・割れたセルメダルは突如黒タイツの戦闘員達・・・ショッカー戦闘員に姿を変えた。

「・・・屑ヤミーを作り出すのと同じ理論で過去の組織の戦闘員を作り出しやがるのか」

アンクは自分に寄ってきたショッカー戦闘員の1体を殴り倒すと・・・双剣でショッカー戦闘員と戦っていたアリアと合流して状況を整理する。

「別にこんな雑魚はどうでもいいわ。それよりもあの『しょっかー』って鳴いている鳥よ。・・・矢車や後藤が2人がかりでも止められなかったキンジのあの姿とほぼ互角に戦っているのよ。・・・相当ヤバイわね」

「・・・さっき奪ったメダルを4枚も取り込んで・・・たぶん俺のメダルも何枚か取り込んでいるショッカーグリードと紫のメダルで暴走しているキンジの戦いだ。・・・ここにいたら危険だから離れてろ」

「嫌よ!あたしは・・・」

「あれを見ろ・・・」

アンクがアリアの頭を掴んで振り向かせた先では・・・『俺』がセルメダルを再びメダガブリューに込めていた。

「・・・・・」

『プットッティラ～ノヒッサ～ツ！』

「ショオォォォォカァァァァ！！」

それに対してショッカーグリードは怪しげに輝く光弾に炎の力を組み合わせてさらに強力な攻撃をしようとしていた。

「あの2つの攻撃がぶつかったら間違いなく危険だ。・・・どこまで被害が出るか・・・」

「・・・離れないといけないのは分かったけど・・・アンクも離れないの？」

「・・・俺が離れたら誰がキンジの暴走を止めるんだ？・・・とっとと離れろ。メダルが2枚の俺じゃお前を守りきることはできないからな」

「ガァァァァァッ！！」
ドォォォォォォン

アリアは悔しそうに去っていった途端・・・『俺』とショッカーグリードの攻撃がぶつかった。その攻撃は周囲にいたショッカー戦闘員を一掃してしまうほどの衝撃で、当然のようにアンクもその衝撃を受けてしまう。

「ぐぁぁぁぁぁっ！？」

アンクは咄嗟に自身の炎を壁のようにしてダメージを軽減していたが・・・セルメダルがかなり吹き飛び、人間態の身体を維持するのすらギリギリの状態だった。

「ショォォォォカァァァァッ！」
ピカァァァァ
「っ！？」
しかしダメージを受けたのは『俺』もショッカーグリードも変わらず・・・ショッカーグリードは「ここら辺が潮時」と言わんばかりに俺から奪って取り込んでいたカザリのコアメダルの力で強い光を放って目くらましをした。
「ガァァァァァッ！」
すると『俺』がその光に一瞬だけ目を背けてしまっている間に・・・ショッカーグリードはその場からすでにいなくなっていた。
「チッ！あのぶつかり合いでも変身を解除されていないなんてな」
アンクはふらつきながらも『俺』の前に立つと・・・『俺』は再びメダガブリューを斧の形態にしてアンクに狙いを定める。
「・・・キンジ、俺は前にも言ったよな？『力』ってのは自分の信念を貫くためのものってな。・・・たしかにお前は守るために戦うっていう信念を貫いている。だがなぁ！この状況は何だ！その力は何だ！そんな力の使い方じゃ守るべきものも一緒に傷つけちまうぞ！お前はそれでもいいのか！！」
良くないに決まっている。だけど・・・今の『俺』じゃそれに答えることもできない。

「ガァァァァッ！！」

そして力に飲み込まれている『俺』はメダガブリューをアンクに振り下ろす。するとアンクはメダガブリューの刃を怪人態にしている右手で受け止めた。

「うおぉぉぉぉっ！！」

ガシャンッ

メダガブリューを掴んだアンクはそのままベルトを掴むと・・・それを傾けて変身を解除させた。

「・・・・っ・・」

紫の力からようやく開放された俺はそのまま前に倒れそうになると・・・アンクは俺の左肩を掴んで倒れそうになるのを止める。

「・・・そういやお前にも助けられてばっかだったな。・・・何度目だっけ？」

「そんなのいちいち気にすんな。俺だって覚えてねぇよ」

「キンジィィィ！アンクゥゥゥ！」

俺とアンクの無事を視界に捉えたアリアは半泣き状態でやってくると・・・

「バカキンジ！自分からあんな力を使うなんてどういう考えよ！」

などと言って怒鳴りつけてきた。

「はは・・・悪かったな」

俺が苦笑しながら謝りながらその場に座り込むと・・・アリアはゆっくりとしゃがみ込み自分の右手を俺の左手に重ねてくる。

「・・・心配したのよ。あの姿になって暴れていたキンジは・・・まるで怪人・・・いえ、それ以上の何かだったわ。・・・あの鳥の怪人が『破壊』っぽかったら・・・キンジのあれはまるで『無』・・・何もかもを消し去るような感じだった」

『怪人以上の何か』か。・・・たしかに幹部クラスとタイマンできる力だから一般的な怪人レベルのCレベルじゃないよな。確実に上級怪人であるBランクか、大幹部クラスのAはあるんだろうな。・・・どんどん人間離れして大丈夫なのか俺?

「大丈夫じゃないに決まってるだろ」

「・・・やっぱりそうか。・・・っ・・」

久々にアンクに心を読まれてしまった俺は・・・さすがにコンボの反動にはこれ以上耐えられずに意識を失ってしまった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺がアンクのおかげで紫の変身を解除された頃、エヴィル本部では玉座に座っていた首領がモニターをつまらなそうに見ていた。

「あ～あ。そろそろＧ４のエネルギーがなくなっちまう頃だとは思っていたが・・・ここでアウトになっちまうとはなぁ」

「Ｇ４システムはライダーパワーを持った人間を改造しなければならなかったので量産化が不可能でしたが・・・ここでＧ４まで失ったのは大きいですね」

影月はモニターの映像を変えると・・・画面には幹部達８人が映し出される。

「ケルベロスアンデットことドクター天王寺は襲撃の際にキックホッパー＆バースに敗北。続く神崎士郎はコアミラー作戦に失敗後・・・ショッカーによって粛清。アメリカを攻めたゼイビアックスはドラゴンナイトとウイングナイトの２人に痛手を喰らい・・・その後の消息は不明。・・・残る幹部は半分の４人になってしまいましたね」

画面からは影月の説明した幹部の４人が消えて、生き残っている幹部が拡大されて移し出される。

「ドクター真木は科学者ですので戦力として考えないとすると・・・残る幹部は３人だけですね」

影月がそう言った途端・・・首領は黒いバックルを腰にセットすると何処からともなく取り出したカードをベルトに挿入する。

「そろそろ・・・俺も表に出てもいいだろ？」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ・・・』
その機械音が鳴り響くと・・・首領はバックルの両サイドを真ん中に押すように閉じる。
『ＤＡＲＫ　ＤＥＣＡＤＥ』
９枚の虚像が重なった途端、首領は薄い黒のボディにバーコードのようなライン。水色の複眼をした仮面戦士に変身した。
「いいぜいいぜ。楽しくなってきやがった。・・・あいつ等にも幹部達と戦えるほどの戦力はあるってことだろ？ますます破壊しがいがあるってもんだぜ」
ドカッ！
首領は突如何かを殴りつけるような動作をすると・・・魔法か何かで姿を見えなくしていたファンガイアが腹部を押さえながら実態を表した。
「くっ！？・・・まさかバレていたとは・・・・」
「「「た、隊長！？」」」
それに動じたファンガイア達は次々と姿をみせてしまう。
「ファンガイア族の偵察部隊か。・・・影月・・・誰にも手出しはすんなよ。折角の来客なんだから俺に相手をさせろ」

「承知いたしました」

偵察に来ていたファンガイア部隊は・・・それから数十秒と経たないうちに全滅してしまった。

人としての強さと信念の力と使い方（後書き）

ようやく首領を変身させることができました。彼が変身するライダーは・・・クライマックスヒーローズに登場したゲームオリジナルのライダーです。

たとえ悪党でも・・・（前書き）

今回はいよいよあの昭和ライダー達も参戦します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

たとえ悪党でも・・・

俺が紫のコンボを使った反動で倒れてしまった頃、横浜武偵高では突如やってきた怪人軍団による襲撃を受けていた。

「宇宙キターーーー！！」
『ＬＯＵＮＣＨＥＲ・ＯＮ』
『ＲＡＤＡＲ・ＯＮ』

フォーゼこと玄太朗は右足にランチャーミサイル、左腕にレーダー型の装備を装着するとレーダーで怪人達に狙いを定める。

「喰らいやがれ！」
ドドドドドッ！

ミサイルを怪人達に放ったフォーゼはランチャーとレーダーの装備を解除して怪人達を殴り倒して突き進んでいく。

「ちょ！？銭形先輩！１人で突っ込みすぎですよ！」

スカル魔を蹴り飛ばしたインペラーはフォーゼに呼びかけるも・・・先に進みすぎていたフォーゼには聞こえなかった。

「芦原先輩・・・どうしましょう？」

「知らん。アイツの戦い方にいちいち突っ込んでいられるか」

芦原と呼ばれた緑色のカミキリムシのような仮面戦士・・・たしか凍条の見せてきた本によると‘仮面ライダーギルス’と記されて

いた仮面戦士は右腕から生えているような鎌でイマジンを切り倒す。

「・・・お前が大将か？」

奥へと突き進んでいったフォーゼはネガ電王と向かい立つ。

「ああ、俺様は仮面ライダーネガ電王。エヴィル８幹部の１人だ。・・・１人で俺様に挑みに来た貴様の名前は何だ？」

「俺は銭形玄太朗！この学校の平和を守る仮面ライダーフォーゼだ！タイマン張らせてもらうぜ！」

バカ正直に名乗ったフォーゼは右拳を突きつけるようなポーズをするとネガ電王に向かって走り出す。

「フォーゼか。・・・俺の強さは別格だ。覚悟しろ」

ネガ電王は腰についている装備を剣型に組み立てると凄まじい殺気を放ちながらフォーゼに向かって歩き出した。

「でりゃぁぁぁぁ！！」

フォーゼはネガ電王に向かって右拳で殴りかかろうとするも・・・その拳はあっさりと剣を握っていない左手に止められてしまった。

「なっ！？」

一旦離れて距離を取ろうとするフォーゼだったが・・・その拳は強く止められてしまったため身動きができない。ネガ電王はフォーゼの右腕に剣を振り下ろそうとすると・・・

「くっ!?間に合え!」
『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ』

「ライダーロケットパンチ!!」
ドカッ!
フォーゼはロケットを右腕に装着してネガ電王の左手を剥がして、そのまま殴りつけた。

「・・・ずいぶんと軽いパンチだな」

しかしフォーゼのロケットを装備したライダーパンチはネガ電王の剣によって止められてしまっていた。

「なんつう瞬発力だよ・・・速すぎだろ」

「フンっ!!」
ズバッ!

「ぐわぁぁぁぁぁ!?」

ネガ電王に剣で斬られたフォーゼは各部から火花を散らしながら後退して膝をついてしまう。

「・・・どうすりゃいいんだ?・・・ここは剣同士エレキか?それとも距離を取るためにもファイヤーか?・・・どっちにしろそれだけじゃ勝てそうにないくらい強ぇ・・・」

「格の違いが分かったか?・・・ならば大人しく死ね」

そういいながらネガ電王はゆっくりと剣をいつでも振り下ろせるように上にかざしながらフォーゼに近づく。

「格の違い？そんなん関係ねぇ！俺は仮面ライダーだから平和を守るために戦うんだ！その仮面ライダーが負けちまったら誰が守るんだよ！学校のみんなは俺達仮面ライダー部を頼ってくれているんだ！死ぬわけにはいかねぇんだよ！」

トドメと言わんばかりにネガ電王がフォーゼに剣を振り下ろした瞬間・・・

「ハァァッ！！」
パシッ

赤い複眼をした銀と白のボディの仮面戦士？仮面ライダースーパー1‘に変身した沖一也さんがネガ電王の剣を止めてくれた。

「沖コーチ！？まさか助けに来てくれたんですか！？」

「いや・・・俺だけではないぞ」

スーパー1がそうフォーゼに言った途端・・・次々とその場に伝説の仮面戦士達がやってきた。

「V3キック！！」

V3こと風見志郎さんはインペラーに襲いかかろうとしていたイマジンをライダーキックで蹴り飛ばす。

「パワーアーム！！」
ドカッ！

右腕を特殊改造している仮面戦士、ライダーマン、こと結城丈二さんはギルスを切りつけようとしていたイマジンの1体を強力な2本の爪が付いたアタッチメントであるパワーアームを装備して殴り飛ばす。

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ。俺の名は仮面ライダーストロンガーー！！」

長い名乗りを終えた胸部にSの文字が入ったカブトムシのような仮面戦士、仮面ライダーストロンガー、こと城茂さんは右拳に電気を溜めると・・・

「電パンチ！！」

ドカッ！

電パンチで近づいてきたスカル魔を殴り倒した。

「すげぇ・・・レジェンドライダーが4人も集まった。・・・でもどうしてここで戦闘中だって・・・」

「ラビットハッチにいた健吾君から通信が入ったんだ。玄太朗達がエヴィル幹部と戦っているとね。・・・エヴィル幹部はSランク武偵の仮面戦士でも倒せないと言われているほどの戦闘力を持つもの達だと聞いていたので心配していたが・・・よく持ちこたえた。さすが俺の教え子達だ！」

「・・・うっす！！あいてっ！？邪魔だって！」

ドカッ！

立ち上がろうとしたフォーゼは襲い掛かってきたスカル魔の顎に

頭をぶつけると・・・とりあえず殴り飛ばす。

「それで沖コーチ。この数なんすけどどう攻めればいいっすか？」

フォーゼ達はそれなりに怪人を倒したものの・・・それでも幹部であるネガ電王を含めなくても３０体はいる。それに比べてこちらの数は７人・・・見た感じは不利なように見えるが・・・・

「スカル魔を含めてもたったの３０体だ。臆することはない」

数々の戦いを乗り越えてきたレジェンドライダー達にとってはそうでもないようだ。

「コーチ！銭形先輩！ここは僕達が食い止めますからネガ電王の方をお願いします！」

ドカッ！

インペラーはムエタイのようなキックでイマジンの１体を蹴り飛ばしながらフォーゼとインペラーに向かって叫ぶ。

「すまねぇな充！・・・沖コーチ！」

「冷熱ハンド！」

フォーゼと共にネガ電王の目の前まで詰め寄ったスーパー１は冷熱ハンドで炎と氷の攻撃を与える。

「これでどうだ！！

『ＧＡＴＲＩＮＧ・ＯＮ』

ダダダダダダッ！

そしてフォーゼは左脚に水色のガトリング砲のような装備を装着すると追い撃ちを掛けるかのように銃弾を連射する。

「くっ！？・・・だが悪の幹部であるこの俺がこの程度で・・・」

フォーゼとスーパー１の攻撃をまともに喰らったネガ電王は剣にしていた装備を銃に組み替えてフォーゼに向けようとするも・・・・

『ＰＯＷＥＲ　ＤＡＩＺＡＲ』

ドカッ！

「なっ！？・・・ぐおっ！？」

アメフトのタックルのように突進してきた大きな黄色いマシンに吹き飛ばされたせいで銃弾がそらされてしまった。

『遅れて済まない。正門の方からやってきた戦闘員を倒すのに手こずってしまった』

「いや全然遅れてなんかねぇよ。・・・むしろ４～５０体はいた戦闘員を仮面戦士じゃない駿がパワーダイザーに乗って１０分ぐらいで片付けてくれたんだから早すぎるぐらいだぜ」

黄色いマシン‘パワーダイザー’は何やらピキーン！と効果音の付きそうなポーズをすると、ネガ電王はふたたび立ち上がろうとしてきた。

「玄太朗・・・いや、仮面ライダーフォーゼ！お前が決めろ！」

スーパー1はフォーゼの肩を軽く叩きながらそのように言うと・・・フォーゼはゆっくり頷いて数歩ほど前に出る。

「おっしゃぁ！いくぜ！」

『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ　ＤＲＩＬＬ・ＯＮ』

フォーゼはロケットの装備とドリルの装備を装着すると空中に飛び上がる。

『ＲＯＣＫＥＴ・ＤＲＩＬＬ・ＬＩＭＩＴＢＲＥＡＫ』

空中でロケットの角度を調整してドリルをネガ電王に向けたフォーゼはレバーを引いて急降下をする。

「ライダーロケットドリルキィィィク！！」

「ぐわぁぁぁぁっ！？」

ドォオオオン！！

フォーゼの必殺キックを喰らったネガ電王はアーマーから火花を散らしながら前に倒れて爆発した。

「やったか！？」

ロケットとドリルの装備を解除して地面に着陸したフォーゼはネガ電王の爆発した煙に振り返ると・・・そこにはモモタロスにそっくりな黒いイマジンが立っていた。

「ちっ！・・・しぶとい奴だな」

フォーゼは何処からともなく１０番のスイッチを取り出してスイ

ッチを取り替えようとするが・・・黒いイマジンは後ろに後退し始めた。

「まったく・・・せっかく手に入れたライダーシステムをよくも壊してくれたな。この借りはいつか返してやるから覚えていろ」

そして光のような物体になった黒いイマジンはそのまま何処かに飛んでいってしまった。

「・・・とりあえず・・・勝ったんだよな?」

フォーゼは倒し損ねたが逃亡してしまったイマジンの光を眺めながらそう言うと・・・スーパー1は力強く頷いた。

「ああ、仮面ライダー部の勝利だ。頑張ったなみんな!」

「「「しゃぁぁぁぁぁぁぁっ!!」」」

フォーゼ達仮面ライダー部は勝利の雄たけびを学校中に響き渡りそうなぐらいの大声で叫んでいた。

・・・

ンクから横浜武偵高が襲撃を喰らったが幹部の1人に痛手を負わせたという話を聞いた。

「これで残る幹部は3人か」

「いや・・・ファンガイア族の報告によると幹部の1人は真木の野郎らしい。あいつは科学者として幹部の地位に立っているらしいから戦力には数えなくていいと思うぞ」

アンクはファンガイア族と定期的に連絡を取り合っているようで真木博士が幹部の1人になっていたことを俺達に話した。・・・前々から思っていたがアンクって情報科向きだよな。そんなことを考えていると・・・

「ちょっ!?センパイ落ち着きなって!」

「そうやで桃の字!」

「うるせぇ!もう藁にでも何でも縋るしかねぇんだよ!」

何やら外が騒がしくなってきた。

「邪魔するぜ!キンジはいるか!」

そして勢いよく開いた扉の方を見ると・・・そこにはモモタロスが立っていた。

「頼む!亮太郎を助けるために手伝ってくれ!」

俺の部屋に入ってきて早々にモモタロスは俺達に頭を下げてくる。

たしかに亮太郎が操られてしまって助けたい気持ちは分かるが・・・色々と問題があるんだ。

「・・・もちろんそうしたいのは山々だが・・・俺達は奴らが動かないとどこにいるかも分からないから後手に回って戦うしかないんだ」

せめてエヴィルの本部や支部のある場所がどこなのかさえ分かればいいんだがなぁ。そう思ったとき、再び俺の部屋に誰かが入ってきた。

「キンジ・・・その幹部がいるかどうかは分からねぇけど・・・エヴィル支部の1つがどこにあるかは分かったぜ」

そう言いながら入って来たのは正太郎と陽だった。

「正太郎・・・その場所はいったい何処なんだ?」

「・・・もしかしたら罠かもしれないが・・・昨日俺が部屋に帰ったら一通の封筒が届いていた。差出人の名前はミーナ。封筒の中には『カツミを助けて』・・・その一言が書かれていた手紙と、その場所を示す地図が入ってやがった」

カツミってあの・・・NEVERとか名乗っている組織のボスのことだよな。そいつを助けてってどういうことだ?

「・・・カツミ・・・どっかで聞いたことがあるような・・・」

アリアはその名前を聞いて違和感のようなものを感じていたが・・・本人も気づいていないようだ。

「俺にどうしてこんなものが届いたのかは分かんねぇけど・・・一応俺に届いた依頼なんだから乗り込んでみようとは思う。キンジはどうする？」

「・・・たしかにＮＥＶＥＲはテロリストだが・・・だからといって手を伸ばさずに見殺しにするつもりはないぜ」

俺は正太郎の持っていた地図を借りて拝見すると・・・支部の場所は以外にも武偵高からはそれなりに遠い場所だがバイクで２～３時間程度程度で行くことのできる山だった。

「たしかに支部なんだから幹部が１人くらいはいてもおかしくはないわね。しかも残り幹部は３人でそのうち１人は科学者。テロリストのボスを生かして捕らえておくほどの支部なら戦闘系の幹部を配置していてもおかしくないと思うわ」

アリアが冷静に支部にいそうな戦力を考えると・・・

「頼むキンジ！俺も一緒に行かせてくれ！」

モモタロスは再び俺達に頭を下げてきた。

「何言っているんだモモタロス。お前がついて来ないと誰が亮太郎を助けるんだよ。当然引っ張ってでも連れていくぞ」

「それなら俺も連れていってくれよ」

声の方向を振り向くと・・・そこにはたくさんの餃子を乗せた皿を持った信司がいた。色々と突っ込みたいところはあるが・・・こ

いつも不法侵入かよ。俺の部屋の不法侵入確立が高すぎだと思うんだが・・・。

「亮太郎は俺の戦弟だからな。俺が助けに行かないでどうするんだよ」

「・・・お前が理解していないと思ってもう1回言っておくが・・・そこには亮太郎がいないかもしれないんだぞ。それでも行くのか？」

アンクが信司に向かってそう伝えると・・・信司は餃子の皿をテーブルに置いてポケットからデッキを取り出す。

「それぐらいは俺でも分かってるって。俺もさすがに馬鹿じゃないからな。俺は人を守りたいから仮面戦士になったんだ。たとえ亮太郎がそこにいなくても、助けを求めてるのが悪党だろうが誰だろうが関係なく助ける。・・・馬鹿って言われても仕方ないかもしれないけど・・・これが俺なんだ」

「あぁ、たしかに馬鹿だな。だけどそんな考えをする馬鹿な奴はお前だけじゃないぜ」

ここにいる奴らがみんな悪党でも助けるって考えをしてる馬鹿なんだからな。

「アリア・・・ついてくるって言うと思うから先に言っておくぞ。絶対に俺から離れないでくれよ」

神崎士郎の話だと・・・お前は一応エヴィルに狙われているらしいんだからな。

「あんたが士郎伯父さんに言ったんでしょ。『パートナーだから一緒に戦う』って。だから怪人相手だからどこまでやれるかは分からないけど・・・雑魚ぐらいは問題なく倒せるわ。安心して背中を任せなさい！」

もしかしたら本当に危ないと心配をしてた俺だったが・・・アリアのその言葉に不思議と安心してしまう。

「もしかしたら亮太郎に入ったイマジンはまたここにやってくるかもしれないからお前らはここに居てくれ」

「でもセンパイ・・・」

「もしも俺に何かあったら・・・その時は頼んだぜ」

モモタロスは他の亮太郎の仲間のイマジン達にそう言った直後・・・台所から勝手に割り箸と醤油を持ってきて黙々と餃子を食べ始めた。

「何1人だけ食っとるんや桃の字！」

「せっかく真面目に聞いていたのにモモタロスのバカ！」

「センパイの言葉にちょっとシリアスになって損したよ！」

「うるせぇ！腹が減ってはナントカだろ！」

まぁ・・・こいつ等はシリアスなことをしているよりは、騒いでいる方がこいつ等らしいな。・・・そう思いながら一時の猶予を過ごした。

・・・

「仮面ライダーW・・・あなた達はカツミと戦ったでしょ？」

「あぁ、それがどうかしたか？」

「・・・それから数時間後の深夜1時、私達ＮＥＶＥＲは総動員で人間の可能性を奪うエヴィルを倒そうと本部へ乗り込んだのよ。だけど３０人はいた私達はほんの数分で敗れてしまったわ。・・・エヴィルの首領である‘ダークディケイド’とか言う仮面戦士に敗北して・・・」

ミーナが言った‘ダークディケイド’という単語に俺は何処か引っ掛かりを感じた。・・・ディケイドって・・・どっかで聞いたような気がしてならないんだが・・・イマイチ思い出せないな。

「私達のリーダーであるカツミはエヴィルにとっての『来たるべき日』のために捉えられたけど・・・私を含む数人の幹部はどういうワケか解放されたわ。だけど私以外の幹部のみんなは大怪我をしていてカツミを助けようにも動けないの」

「・・・だから僕達にこの依頼をしてきたってワケだね」

陽がそのようにミーナに言った途端、俺達の後ろの空間が突如として歪んだかと思うと何十体もの怪人と2人の仮面戦士が出てきた。

「侵入者ってのはお前らか？」

歪んだ空間から出てきた1体の仮面戦士はスカルイマジンに取り憑かれた亮太郎が変身してしまっている幽汽・スカルフォーム。そしてもう1体は・・・・

「組織の命令だ。貴様らを排除する」

この前、神崎士郎を撃ったエヴィル幹部・・・仮面ライダーショッカーだった。

「・・・かかれ」

「「「イーーーー!!」」」

ショッカーの命令によりショッカー戦闘員達は一斉に俺達に襲い掛かってきた。

「正太郎と陽、それと後藤はミーナと一緒にカツミが閉じ込められているらしい牢獄へ行ってくれ!ここは俺達が相手をする!」

「分かった!負けんなよ!」

俺はショッカー戦闘員を殴り倒しながらそう言うと・・・正太郎達は頷いて洞窟の奥へと進んで行った。

「変身っ!」

『タカ!トラ!バッタ!タットッバッ!タトバ、タッ!トッ!バッ!』

「セイッ!」

ズバッ!

オーズに変身した俺はアンクからメダジャリバーを受け取ると、それでショッカー戦闘員達を切り倒す。

「・・・お前か。本郷さん達の姿を真似た幹部ってのは・・・・」

「確かにそうだ。俺の名前は仮面ライダーショッカー。組織の命令と有ればなんだろうと破壊する」

ショッカーと向かい合った矢車は自身に跳んできたホッパーゼクターをキャッチするとベルトにスライドさせるようにセットする。

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

「・・・お前に地獄ってのを見せてやる」

キックホッパーに変身した矢車はショッカーに向かって蹴り込むが・・・・まるでクロックアップでもしたかのような一瞬で受け止められてしまう。

「・・・どうした？俺に地獄を見せるんじゃないのか？」

「・・・本郷さんのような仮面戦士の姿でそんな言葉を口にするな」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

相手が只の幹部クラスではないことを悟ったキックホッパーはライダージャンプで後ろに跳び下がり距離を取った。そしてキックホッパーの戦う場所から数メートル離れたところでは龍騎に変身した信司とモモタロスがスカル幽汽と向かい合っていた。

「亮太郎！俺だ！信司だ！分かるよな？」

「なぁ信司・・・たしかに亮太郎にお前の声が届いてるとは思うが・

・・イマジンが憑依してるんだから反応はできないと思うぜ」

今の亮太郎の身体の主導権がスカルイマジンの手にあることを簡単に説明したモモタロスは悔しそうに俯くと・・・スカル幽汽はモモタロスと龍騎を子馬鹿にするように剣を向ける。

「ハッハッ！そういうこった！この身体はすでに俺のものだからな！とっとと死ねよ！」

「くっ！？」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

ガギィィン！

スカル幽汽の剣をとっさにドラグセイバーで受け止めた龍騎は力いっぱい剣を振り払ってスカル幽汽との距離を取る。

「・・・やっぱり何とかして亮太郎に取り憑いている怪人を追い払わないとな」

「あぁ最初っからクライマックスでいくぜ！」

それぞれ剣を構えたモモタロスと龍騎はそれぞれ剣を構えるとスカル幽汽に向かって突っ込んでいった。

たとえ悪党でも・・・（後書き）

今回の前半は微妙にフォーゼ回になっていましたが、とりあえず次回は亮太郎・・・ではなくモモタロスの回になります。

亮太郎とモモタロス（前書き）

今回は全体的に考えるとモモタロスメインの話になります。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

亮太郎とモモタロス

俺とアリア・・・そしてアンクが雑魚・・・ショッカー戦闘員達の相手をしている頃、龍騎とモモタロスは亮太郎に取り憑いたスカルイマジンが変身した幽汽・スカルフォームと向かい合っていた。

「フンッ！」

「おっとっ！？」

ガギィィン！

スカル幽汽の振り下ろしてきた剣を・・・龍騎はモモタロスを庇うようにして受け止める。

「モモタロス！今だ！」

「おう！」

モモタロスは半透明になってスカル幽汽に入ろうとするが・・・・

「うおっ！？」

どういう訳か取り憑くことはできずにすり抜けてしまう。

「あれ？どうしてモモタロスが取り憑けないんだ？」

「・・・俺もサッパリ分かんねぇが・・・たぶんあの骨野郎が亮太郎の意識のかなり深いところまでは入っていったと思うぜ。手羽先

ヤロウと同じようにな」

実体化したモモタロスはジークが亮太郎に取り憑いた時のように解釈をして龍騎に説明をすると・・・龍騎はドラグセイバーを持ち直す。

「モモタロス。俺があいつの攻撃を止めるからお前はまた亮太郎に取り憑きにかかれ。・・・1回じゃ駄目なら2回3回と突っ込めばいいだけだろ。俺達にごちゃごちゃ考えることは似合わないぜ！」

「・・・そうだな。亮太郎を助けるためにも何度だってやってやるぜ！」

「うおぉぉぉぉっ！！」

龍騎はスカル幽汽の後ろに回りこんで両腕を押さえようとするも・・・

「龍のくせにノロマだなぁ！」

ズバッ！

「うわっ！？」

後ろに回りこむよりも先に斬られて後ろに後退してしまった。

「信司っ！？」

「俺のことはいいから突っ込め！」

龍騎にそう言われたモモタロスは再び半透明になって取り憑こう

とするも・・・やはりすり抜けてしまった。

「畜生！またかよ！・・・亮太郎絶対に助けるからもう少し待ってろよ！」

モモタロスは再び実体化して地面を殴りつけながらそう叫ぶと・・・スカル幽汽の右腕はピクリと反応した。

「・・・亮太郎？」

まるで亮太郎の意思が働いて動いたかのような動作に気づいた龍騎はドラグセイバーを杖のようにして立ち上がる。

「モモタロス・・・どうやら亮太郎はまだ負けてない様子だぜ」

「・・・当然だろ。あいつは周りが思っているほど弱くねぇよ」

「もう一押しだ。いけるよな？」

「まだまだ俺はクライマックスだぜ！」

モモタロスは剣を取り出してスカル幽汽に突っ込んでいくと・・・

「いい加減しつこいんだよっ！！」

ズバッ！

スカル幽汽の剣に以前と同じ場所を斬られてしまった。

「ぐわぁぁぁぁ！？」

「モモタロスぅぅぅぅ！？」

斬られた場所から砂を漏らすモモタロスに龍騎は駆け寄ろうとした瞬間・・・

「・・・・・」

ガシッ

スカル幽汽の右手は倒れようとしているモモタロスの左腕を掴んで自分へと引き寄せた。

「なっ！？」

そして自身の身体にモモタロスを憑依させると・・・・スカルイマジンは亮太郎の身体から追い出されてスカル幽汽の変身が解除された。

「亮太郎・・・？」

亮太郎の身体から出てきたモモタロスは、本当に亮太郎なのかを確認しようと話かけると・・・・亮太郎は確かに頷いた。

「ありがとねモモタロス・・・色々と心配かけちゃったね」

「へっ！そんなこと気にすんな！それよりも今は・・・あいつをぶっ倒すぜ」

「うん！いくよモモタロス！」

『ＳＷＯＲＤ　ＦＯＲＭ』

ベルトを腰に巻きつけた亮太郎は赤いボタンを押してモモタロスを憑依させると・・・素体となるプラットフォームに赤いアーマーが装着されていく。そして頭部に装着された桃が顔面で半分に割れた。・・・電王の基本ともいえる形態・・・電王ソードフォームだ。

「俺、ようやく参上！」

電王・ソードフォームに変身した亮太郎とモモタロスは歌舞伎のようなポーズをするとベルトについているパーツを組み立てて剣にする。

「長かった前ぶりも終わりだ。こっからは最初っから最後までクライマックスでいくぜ！」

スカルイマジンに斬りかかった電王は剣を剣で受け止められてしまうも・・・スカルイマジンをやや押している。

「くっ！？・・・どこからこんな力が湧いてきているんだ！？」

「てめぇには分かねぇだろうな！こいつが，絆の強さ，ってやつだ。俺と亮太郎の絆を舐めんじゃねえぞ！」

電王はそう言いながら何度も剣を振るってドンドンスカルイマジンを追い詰める。

「ついでに言っておくがなぁ！戦いってのはノリのいい方が勝つんだよ！！」

ドカッ！

ヤクザのキックのようにスカルイマジンを蹴り飛ばした電王はすぐさまパスを取り出す。

「決めるぜ・・・」

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

パスをベルトにセタッチした電王はパスと剣を近くに投げ捨てて両脚にエネルギーを溜め込むと・・・

「このおぉおぉおっ！！」

ブンッ！

「うおらぁぁぁ！！」

ドカッ！

スカルイマジンの攻撃をギリギリで回避して回し蹴りを決めた。

「俺の超必殺技！」

ドカッ！ドカッ！

そしてさらに身体を捻って2回連続でスカルイマジンに回し蹴りを決め込んだ電王は再び剣を握り直した。

「くっ！？・・・こんなはずじゃ・・・畜生ぉおおぉお！！」

ドオォォォン！！

そのダメージに耐え切れなくなったスカルイマジンが爆発すると・・・電王は小走りで龍騎のところに向かった。

『・・・城戸先輩迷惑をお掛けしてすみませんでした。それと・・・ありがとうございます。おかげで助かりました』

電王は亮太郎の意識で龍騎のそのように話すと・・・龍騎は首を横に振る。

「俺は何もしてねぇよ。せいぜいイマジンの攻撃を喰らってやられてただけだ。本当に頑張ったのはお前を助けようと頑張ったモモタロスと・・・モモタロスが亮太郎を助け出すのを邪魔させないためにショッカー戦闘員と戦ってくれているキンジ達だと思うぜ」

『・・・そうですね』

「お～～いキンジ～～～!!亮太郎は助けたぜ～～!!」

「やっとかよ・・・」

電王はちょうどショッカー戦闘員達を倒し終えた俺達のところに走ってきた。・・・その時はすでにアンクの姿が周囲にはなかった。

・・・

「はぁ・・はぁ・・・くそっ・・」

クロックアップを使ってさえショッカーを倒せなかったキックホッパーはだいぶ息が上がっていていた。

「・・・クロックアップからの反転キックを回避できる奴がいるとはな。・・・お前は何者だ?ただのエヴィル幹部なんかじゃないだろ?」

「・・・俺は仮面ライダーショッカー。組織に従うエヴィル幹部だ。それ以外の何者でもない。・・・今はな」

「・・・『今は』だと?それはどういうことだ?」

ショッカーの言っていたことを問い詰めようとするも・・・ショッカーは黙り込んで何も答えようとはしない。

「答えないってことは・・・何かあるんだな」

「あったとしてどうする?貴様に何ができるというんだ?」

「・・・お前を地獄に落とすことだ」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

そう呟いたキックホッパーは空中に跳び上がると、そのままキックの体勢になる。

「ライダーキック・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

そしてショッカーに向かってようやくライダーキックを直撃させるが・・・

「・・・痒いな」

ほとんどダメージを与えられていなかった。

「仮面ライダーキックホッパー。お前はエヴィルにも・・・そして財団にも近づきすぎている。そろそろ消えてもらうぞ」

キックホッパーの頭部を掴み上げたショッカーは強力な握力で頭を握りつぶすように殺しにかかろうとすると・・・

「今だ！」

どこからともなくアンクの声が響いた。

「ライダーパンチっ！」
『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

「ハァァァッ！！」
『ＥＮＧＩＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

すると俊の変身しているパンチホッパーのライダーパンチと仮面ライダーアクセルトライアルの剣がキックホッパーを締め付けていたショッカーの右腕に直撃した。

「・・・くっ！？」
ドサッ

「兄貴！大丈夫？」

さすがに仮面戦士２人の同時攻撃には怯んだショッカーはキックホッパーを離して後退すると・・・パンチホッパーはすぐさまキックホッパーの元へと駆け寄る。

「・・・シュンどうしてここに来たんだ？お前にエヴィルの支部を攻めることは伝えていないぞ？」

「兄貴達がここに乗り込む前からアンクに連絡を受けてたんだ。・・・アンクから待機してろって言われててなかなか動けなかったけどね」

パンチホッパーがキックホッパーにそう説明すると・・・物影からゆっくりとアンクが歩いて出てきた。

「そういうことだ。色々と手間はかかったがそれなりに人選は集めたぜ」

アンクが空に向かって火球を放った瞬間・・・物陰からはさらに仮面戦士が出てきた。

「おらっ！！」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

物陰から飛び出てきたファイズはフォトンブラッドを溜め込んだファイズショットでショッカーを殴りつけようとするも・・・その拳はあっさりと受け流されてしまうも・・・

「乾君！」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

さらに出てきたオーガは黄金に輝く剣でショッカーを斬りつけた。

「ファイズにオーガ・・・それにナイトとゾルダに加えてシザースか。よく短時間でこんなに人選を集めたな」

「このぐらいは余裕だ。・・・さぁてお前ら・・・いけるか？」

「俺に質問するな」

アンクの問いかけにアクセルトライアルは「聞かなくても分かっているだろ」とでもいいそうな雰囲気で答える。

「城戸ですら頑張っているんだ。俺も何かをしないとな」

「そうそう。ちょっとは良いところを見せないとね。・・・まぁそれでも依頼代は受け取るけどね」

「・・・１人に対してこの人数で戦うのは気が引けるが・・・仕方ない」

シザースがそう言った途端・・・ショッカーの後ろに空間の歪みが発生する。するとその歪みからは１０体ものショッカーライダーがやってきた。

「それは気にしなくていいぞ。俺はショッカーライダーを従える幹部だ。少数の部隊でも精鋭揃いだからな」

「なるほど・・・たしかにそれは相手に困らないな」

アンクが皮肉まじりにそう言い捨てた瞬間・・・キックホッパーとパンチホッパーはショッカーに挑み、他の仮面戦士はそれぞれショッカーライダーと戦い始めた。

・・・

・・そう考えながらどんどん暗くなっていく洞窟の奥へと進んでいくと・・・

「キンジ！止まりなさい！」

「っ！？」

アリアが何かに気づいた様子だったのでおそらくは牢獄の入り口だと思われる扉が見えてきた辺りで足を止めた。

「どうしたアリア？」

「・・・あそこ・・・誰かいるわ」

殺気を感知したか直感で分かったかは知らないが・・・アリアが指差した数メートル先を俺達が振り向いて見ると・・・たしかに何者かが立っていた。俺はタカヘッドの複眼を輝かせて何者かを確かめようとすると・・・・

「ここから先には通さん」

エヴィル幹部の1人である天草死郎・・・仮面ライダー幽汽が立っていた。

『・・・城戸先輩は先に進んでください。あの仮面戦士は僕なりのケジメをつけるためにも僕が戦います』

亮太郎の意思で話した電王は数歩前に出て自分とモモタロスだけで幹部を相手にしようとするが・・・俺も数歩前に出てジャリバーを構える。

「そうだ亮太郎の言うとおりだ。信司は先に正太郎達の所に行ってくれ。ここは俺と亮太郎で引き受ける」

「・・・分かった。後でしっかりと追いつけよ！」

「させんっ！」

「それはこっちの台詞だ！！」

『ＦＵＬＬ　ＣＨＡＲＧＥ』

ガギィィィン！！

龍騎が奥へと進み出そうとした瞬間・・・幽汽は爆発するコマを使って妨害しようとするも・・・・電王はエネルギーを溜め込んだ剣を大きく振りかぶって打ち返した。

『モモタロス・・・一回出て。ここは僕の電王でいくよ』

「分かった！頑張れよ亮太郎！」

モモタロスが抜け出た電王は素体のプラットフォームへと変わる。そして何処からともなく赤い携帯を取り出してベルトにセットすると・・・その携帯から空に光のレールが伸びていく。すると空に伸びたレールから電王の基本４フォームの仮面が４つも付いている大きな剣が流れるように走ってきた。

「おっと！？」

少しバランスを崩しかけながらもそれをキャッチした電王はその剣の剣先よりも少し下の峰にパスをセットすると・・・

『ＬＩＮＡＲ　ＦＯＲＭ』

ベルトからそのような電子音が響いた。

「えっ！？何あれ！？」

「んっ？」

アリアが驚いた声を上げたので指を差している方向に振り向くと・・・電車のようなものが電王目掛けて走ってきた。

「アリア・・・あれはな・・」

「ちょっと１年生！そこにいたら轢かれちゃうわよ！！」

あれが何なのか凍条の本を読んで知っている俺はアリアにも説明してやろうとするが・・・アリアはそれよりも先にぶつかりそうなことを電王に叫んでいた。そしてその‘電車’は電王のところまでやってくると・・・突如半透明になって電王をすり抜けた。

「アリア、あれはフリーエネルギーっていう本人の意思を力に変えたようなエネルギーの塊であって実際のものじゃないんだ。だからあんなふうにすり抜けるんだ」

「えっ？それじゃあ結局あの電車はどうして１年生に向かって走って行ったの？」

「それは・・・ああゆうことだ」

俺が電王を指差した瞬間・・・電王は半透明の電車から力を与えられえるかのように次々と赤いアーマーを装着する。それはモモタロスが憑依した電王のような角張った装甲ではなく所々が丸みを帯びているような装備だ。

「貴様・・・何だその姿は?」

「これが僕の電王・・・ライナーフォームだよ」

ライナーフォームとなった電王は大きな剣の柄を両手で握りしめると・・・ゆっくりと前に歩み出して幽汽との距離を詰める。

「・・・いくよ!」

「ずいぶんと遅い刃だな」
ガギィィン!

幽汽に剣を振りかざした電王はその剣をあっさりと止められてしまう。

「・・・どうした?姿が変わってもこの程度か?」

「たしかに僕1人の力はこの程度だよ。・・・だけど・・・」

ライナー電王は力負けをしてしまい少しずつ押され始める。

「俺のことを忘れんなよ!!」
ブンッ!

そこに割り込むようにして俺は幽汽に向かって切り込もうとする

も・・・俺の剣は後ろに下がって回避されてしまう。

「僕たちは1人じゃない。一緒に戦ってくれる人達がいるんだ。・・・それがたとえ遠くにいても・・・その人達の想いがあるかぎり負ける気はないよ」

ライナー電王は武偵高に残っている自分の仲間達を想いを受け取っているかのように語る。・・・言葉や雰囲気に気迫はないけど、亮太郎としての意思と想いの強さが伝わってくるな。

「・・・そうゆうことだ。ライダーは助け合いだからな。亮太郎1人に相手をさせる気はねぇよ」

「2対1か。いいだろう相手になってやる」

そう言った幽汽に向かって俺とライナー電王は連携して幽汽へと挑むも・・・

「セイッ！・・・ぐわっ！？」

「うわぁぁぁぁっ！？」

俺達の攻撃はまるで見切られているかのように回避されてしまい、さらにはカウンターで俺達は幽汽の剣を喰らってしまう。

「もう我慢できねぇ！キンジ！身体を貸せぇ！！」

「えっ！？」

俺がモモタロスの言い放った言葉に驚いて後ろを振り向こうとす

ると・・・モモタロスはすでに半透明になって俺の身体に入ろうとしていた。

「っ！？」

チャリィン

そしてモモタロスが俺の身体に入った瞬間・・・ベルトにセットされていたトラのコアメダルが追い出されるように飛び出てしまうと・・・オースキャナーが勝手に動き出して俺のベルトをスキャンした。

『タカ！イマジン！バッタ！』

その音声と共に・・・トラアームだった場所は、まるでモモタロスを思わせるような赤いデザインになり、両肩にはモモタロスの角を模した角がついたものに変わった。

『俺！参上！・・・あれ？何かおかしくね？』

俺に取り憑いたはずのモモタロスは・・・どういう訳か俺の意識を乗っ取らずにメダルになってしまっていた。しかも俺はそのメダルで知らない変身にまでなってるし・・・どういうことだ？

『こうなったら仕方ねぇ！キンジもごちゃごちゃ気にしてんな！俺たちのグレートな戦いを見せ付けてやれ！！』

メダルとなっているモモタロスはベルトから声を響かせる。・・・どうやらこんな状態になっちまっている本人はとりあえず気にするのを止めるらしい。

「・・・何だかよく分からんが・・・やってやるか」

チャキッ

右手にメダジャリバーを握り締めた俺はモモタロスの戦い方のように荒々しく剣を振り回しながら幽汽へと突撃していった。

亮太郎とモモタロス（後書き）

今作でのイマジンメダルはモモタロスがオーズに憑依すると変わっての登場にしてみました。次回はイマジンメダルの活躍と牢獄に向かった正太郎の話になります。

居場所と侍と不吉な知らせ（前書き）

今日のフォーゼ。橘さんが校長！？やっぱり橘さんは一流だなぁ！まぁ・・・この物語では学生で三流程度ですが。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ
イマジンコア

居場所と侍と不吉な知らせ

アンクが矢車の所に向かって俺とアリアがまだショッカー戦闘員を相手にしていた頃、正太郎達はミーナに案内されながら洞窟の奥へと進んでいた。

「ミーナ。・・・お前がＮＥＶＥＲの一員ってことは分かったが、お前がカツミを助けたいのは『組織のボスとして助けたい』って理由なんかじゃないだろ？いったいどうしてだ？」

「カツミは・・・私達のような人権すら与えられない人々を救った・・・ヒーローだったのよ」

「つまり・・・仮面ライダー・・・だったとでも？」

正太郎はエターナル・・・カツミをテロリストと思っていて人々を助ける‘正義の仮面ライダー’だとは考えていなかったらしく驚いた表情を見せる。陽は少なくとも仮面戦士だとは思っていたようだが人々を助けるような人間だとは思っていなかったようで少し意外そうな表情をしていた。

「カツミは数年前まで・・・イ・ウーの？3だったのよ。だけど2年前・・・自分の信念である『人間の限りない可能性』を証明するために事実上組織を辞めて自身の組織であるＮＥＶＥＲを立ち上げたのよ。そして昔は極道に生きていたはずだったのにどういう訳かオカマになってしまった鏡水さん、元殺し屋の芦原さんと言った人達が集まったのよ。私も・・・とある組織の超能力開発実験のモルモットにされていた時にカツミが外に連れ出してくれたわ。・・・カツミは・・・人権のない私達を助けるために様々な国の政府に喧

囁を売りまくって、いつしか世界からテロリスト扱いになったのよ」

「なるほどな。・・・つまりあいつは仮面ライダーになりきれなかった仮面戦士ってわけか」

先ほどまでカツミを仮面ライダーとして思っていなかった正太郎はミーナの話を聞いて少しずつその考えを変え始めた。

「そして行く宛もない私達は・・・カツミと共に行動するようになって、いつしかいつしかそこが私達の居場所になっていたの。・・・それが世界からは1つの組織として見られるようになってネクロオーバー・・・死を超える者という名前を略したNEVERという名前がついたの」

ミーナがNEVERの名前の由来を言った頃にはすでに白い部屋が幾つも連なる牢獄が目の前だった。

「・・・無駄話が過ぎたわね。急ぎましょう」

「あ、ああ・・・」

正太郎達が牢獄へと入っていくと・・・そこには扉だけがガラスのようになっていて、それ以外は白い壁になっている部屋が幾つもあった。

「ぎゃっぁぁぁぁぁ!?」

「・・・こんな部屋に閉じ込められていれば発狂するのも無理はないな」

個室から聞こえてきた悲鳴を聞いた後藤は悔しそうに呟く。

「・・・こいつ等も助けてやろうぜ。だけど・・・まずは今回の依頼のカツミからだ」

そして牢獄のさらに奥まで進んでいくと・・・そこにはだいぶ傷だらけになっていた元ＮＥＶＥＲのボスであるカツミがいた。

「ミーナ!?何故ここに来た!?」

「お前を助けるためにわざわざ俺達に依頼をしたんだぜ」

そう言った正太郎はポケットからスタッグフォンを取り出す。

「・・・カツミ、少し下がってろ」

『ＳＴＡＧ』

正太郎はスタッグフォンにギジメモリをセットしてライブモードにするとガラスのような扉に向かって突っ込ませた。

バキィィィン

「カツミィィィ!」

そしてスタッグフォンがガラスのようなものを叩き割ると・・・ミーナは真っ先にカツミに駆け寄っていった。

「カツミ・・・これ・・」

ミーナはカツミにロストドライバーとエターナルメモリを渡した。

「ミーナ・・・。ふっ・・・それにしてもまさかお前達に助けられるとは思ってなかったぞ。礼を言うぞWの2人・・・それと・・・誤砲心十郎」

「俺は後藤だ！後藤信太郎だ！」

後藤の名前をちゃんと調べてなかった様子のカツミは後藤の名前を間違えると、後藤は大声でそれを訂正する。

「ちょっと後藤君。たしかに今は誰もいないが、ここは敵陣なんだ。大声で叫ぶのは控えてくれ」

「す、すまない・・・」

「さぁてと・・・他にも捕まってる人を助けないとな」

『ＢＡＴ』

正太郎はさらにバットショットをライブモードにして次々と他のガラスを割る。

「これで全部だな。よし・・・ここからとっとと・・・」

何とかカツミや他にも捕らえられていた人々を全員助け出して外へと脱出しようとすると・・・・

「残念だったなぁ！逃がしはしないぜカスども！」

何処からともなく雄たけびのように響く声が聞こえてきた。

「「「っ！？」」」

突如聞こえた声に正太郎達が振り返ると・・・そこには空間の歪みが発生していて、そこからはすでに狼男のような姿となっていたブラドが出てきた。

『ドロロ～ン！おいちゃんふっか～つ』

そしてそのブラドの左肩にはどういう訳か以前カツミが破壊したはずのアークキバットが止まっていた。

「何っ！？いくつもの血を吸収しているブラドが死んでいなかったのは分かるが、アークの鎧は俺があの時たしかに破壊したはずだぞ！？」

「ゲラララララッ！ようやくアークの鎧が直ったんだ！さすがエヴィルの科学力といったところだぜ！さぁて・・・長いこと退屈な部屋の中にいたんだ。楽しませてもらうぜ！」

『ドロ～ン！へんし～～ん』

アークへと変身してしまったブラドは地響きを周囲に響かせながら正太郎達にどんどん近づいてくる。

「・・・後藤。お前はミーナと他に捕らえられていた人々を安全な場所まで避難させてくれ。あいつは俺達が相手をする」

そう言った正太郎はWドライバーを腰にセットすると・・・陽の方にも同様のものが出現する。そして2人が前に立とうとすると・・・カツミもロストドライバーを腰につけて前に出た。

「ミーナ。はやく避難しろ。俺のＴ２メモリはエヴィル首領との戦闘でほとんどのメモリを失ってしまった。だから以前よりは戦闘力が下がってしまっていてお前を守るまで手を回せないと思うからな」

「・・・分かったわ」

ミーナは後藤と共にその場を離れると・・・・正太郎と陽はカツミの左に並び立つ。

「あのミーナって娘から聞いたぜ。やり方は少し気に入らないところもあるが・・・お前も人を守るために戦える仮面戦士なんだってな」

「君達の組織に加わる気はないけど・・・一緒に戦うぐらいなら僕達も力を貸すよ」

２人の発言に目を丸くしたカツミは・・・・再び真面目そうな表情に戻したが口の辺りは少し笑っていた。

「生憎すでにＮＥＶＥＲという組織は壊滅してなくなっているんだ。その手助けは組織ではなく、俺個人に対して・・・ということになるが・・・・どうする？」

「お前・・・案外鈍いんだな。俺達は最初からお前に対して手を貸すって言ってんだぜ？」

『ＪＯＫＥＲ』

「正太郎に鈍いって言われるのはよっぽどだよ。これでもしキンジ君にも同じ事を言われていたら、君は理子の持っていそうなゲームの主人公になっていたね」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

カツミからの質問に軽く答えた2人はそれぞれのメモリを取り出して並び立つ。

「何をごちゃごちゃ言ってやがる！はやく掛かって来いよ！！」

アークは「久しぶりに暴れられる」とでも言いたげな様子で3人を殴りつけようとした瞬間・・・・

『ＣＹＵＵＵＵＵ』

ドカッ！

どこからともなく飛んできたエクストリームメモリがアークに体当たりをしてその拳を阻んだ。

「さぁ・・・いくぜ陽。前の俺達じゃないって所をこいつに見せ付けてやろうぜ」

「あぁ正太郎・・・」

「「変身！」」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

正太郎と陽はＷへと変身を遂げるとすぐさま陽の身体を取り込んだエクストリームメモリを掴み取る。

「「これが今の俺達（僕達）の全力だ！」」

『『ＸＴＥＲＥＭＥ』』

「「プリズムビッカー！」」
『ＰＲＩＳＭ』

そしてＷはサイクロンジョーカーエクストリームへと強化変身するとプリズムビッカーにプリズムメモリをセットしてプリズムソード引き抜いた。

「変身！」
『ＥＴＥＲＮＡＬ』

そしてエターナルに変身したカツミはコンバットナイフのような武器を手に握りながらＷの横に並び立つ。

「フンっ！カツミぃ！あの時の借りはしっかりと返させてもらうぜぇ！」

「真実の強さを知らない今のお前に・・・仮面ライダーＷと共闘するこの俺が負けると思うなよ」
チャキッ

ナイフを逆手に持ったエターナルとプリズムソードとシールドを構えたＷ・ＣＪＸはアークに向かって走り出した。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

正太郎達がカツミを救出してアークと戦闘になった頃、モモタロスが変化したメダルを使ったオーズに変身している俺はライナー電王と共に幽汽と戦っていた。

「てやぁぁぁっ！」

ライナー電王は幽汽に剣を振るうも・・・剣が重たすぎるせいで振りかぶるのが遅くあっさりと避けられてしまう。・・・まぁそこが狙いなんだがな。

「セイッ！」
ドカッ！
「くっ！？」

俺はライナー電王の攻撃を回避したばかりの幽汽に剣の持っていない左手で殴る。・・・すると先ほどまで俺達の攻撃で怯まなかった幽汽はようやく怯んだような動作をみせた。

「よし・・・このまま・・・」
ガシャン

剣を逆手に持とうとして指で回そうとすると・・・俺は剣を落としてしまう。あれ？ペン回しのように軽くできると思ったんだけどな。

『何やってんだキンジ！そんな亀公がしそうなことを俺ができるわけねぇだろ』

モモタロスの発言で俺は少しだけ冷静にメダルの能力について考える。・・・このイマジンアームになっていると細かい動作は何だかやりにくくなっているが、そのブンサゴーゾ並みの力で殴れているな。・・・つまりモモタロスの変わったメダルの能力は極限まで筋力を強化する代わりに精密作業が難しくなるってことか。さすがモモタロス。長所と短所がはっきりしてやがるぜ。

「キンジ！何ボサッとしてるのよ！はやく剣を拾いなさいよ！！」

「分かってる！」
ガシッ

剣を拾わずに少し考え込んでいるとアリアに怒られてしまったので、俺はとりあえずモモタロスが変化したメダルのことを考えから外して、剣を握り直す。

「フンッ！」

「くっ！？」
バキッ！

幽汽が振り下ろしてきた剣を左手で掴んで止めた俺は、そのまま剣を力ずくでへし折った。

「何だとっ！？」

「亮太郎！今だ！」

「はいっ！」

『ＭＯＭＯ　ＳＷＯＲＤ』
『ＵＲＡ　ＲＯＤ』
『ＫＩＮ　ＡＸＳ』
『ＲＹＵ　ＧＡＮ』

ライナー電王は自身の剣のレバーを引いて回すと・・・ライナー電王の後ろからはフリーエネルギーで構築されている赤・青・金・紫の４色に輝く電車が迫ってきた。

「えいっ！」

そしてライナー電王は足元にやってきた光るレールに跳び乗ると・・・ライナー電王は赤いフリーエネルギーの電車に包まれながら幽汽へと突撃していく。

「電車斬り！！」
ズバッ！

正直センスがないと思える技名で幽汽を斬り付けたライナー電王は俺の方を振り返る。

「遠山先輩。トドメはお願いします！」

どうやらライナー電王の必殺技だけじゃ力不足だったらしく・・・トドメは俺に任せるらしい。

「さぁて・・・決めるぜモモタロス」

『オウよ！カッコよく決めてやれ！』

モモタロスがそう答えると・・・俺はメダジャリバーに3枚のセルメダルを入れてオースキャナーでそれをスキャンをした。

『トリプル！スキャニングチャージ！』

『もののついでだ！これも使えよ！』

その声と共に俺の左手にはモモタロスのフリーエネルギーが集まったかと思うと、それは剣のような形になった。・・・これってモモタロスが使ってた剣じゃないか？

「まぁ・・・これもモモタロスの力ってことか。セイヤァァっ！」

ザンッ！

「ぐふっ！？」

俺は幽汽に駆け寄るとモモタロスの剣で一太刀を決める。

『俺とオーズの必殺技！パート1』

「っセイヤァァァァ！！」

モモタロスの技名に「何だそれ？」と思いながらも俺は思い切り剣を振り下ろした。

「・・・見事。・・・がはっ！？」

ドオォォォォン！

そしてジャリバーの次元斬で空間ごと幽汽を切り裂くと・・・数秒後に空間の裂け目が戻り幽汽は爆発した。

「・・・おい・・・っ!?」

爆煙の中に入っていった俺は倒れている天草死郎からエヴィルの情報を聞き出すために掴み上げようとするが・・・どういう訳か俺の手は天草死郎からすり抜けてしまった。

「・・・俺を逮捕して情報を絞ろうとでもしたのか?・・・残念だったな。俺はすでに３００年ほど前に死んでいて肉体なんぞない」

「なっ!?」

ってことはこいつはマジで幽霊かよ!?でもそれじゃあ何でさっきまで物理的にダメージを与えたり与えられたりしてたんだ?

「俺はただ・・・仮面戦士の力を触媒にして身体を構築していたに過ぎん。そしてその力も壊れてしまった今・・・俺は再びこの世から消えるだけだ」

天草死郎は自身の壊れたベルトとパスを横目でチラリと見ると・・・外へと向かって歩き出す。

「・・・いつか我が妻・・・空を殺した‘黒の仮面’に復讐をしようと力を手に入れて蘇ったが・・・・それすらも達成できなかったか」

自身の身体がどんどん薄くなっていくのを見た天草死郎は月の光が洞窟の中まで届いたことで、まるで後光が差しているかのように写る。

「・・・敵に我が宿願を任せる気はないが・・・1つ助言をしてやろう。黒いマフラーをした幹部の1人。仮面ライダーショッカーと名乗る者には気をつけろ。あいつの力は1号の紛い物ではない。・・・まるで物の怪。否、百鬼夜行や地獄そのものと言ってもいいような怪しげな気配を漂わせている」

まるで付き物がなくなったかのように俺達にそう告げた天草死郎は・・・その場に独楽を1つ落として完全に消えてしまった。・・・天国に行くかは分からないが・・・もし行けたとしたら奥さんに会えるといいな。

「ところで・・・どうやってモモタロスは元に戻るんだ?」

「さぁ?メダルを外してみればいいんじゃないの?」

「・・・・・」

俺はベルトを傾けて変身を解除するとモモタロスが変化してしまっているメダルを外して足元にワザと落としてみる。

「あいてっ!?」

すると思ってたとアリアの言ったとおり俺の手から離したメダルは半透明なものになり、そしてすぐにもとのモモタロスへと戻った。

「・・・これでエヴィル幹部は実質1人ってことね」

「あぁ。後は矢車しだいか・・・」

アンクがいるから死にはしないと思うが・・・天草死郎の言うと

おり何もつかみ所のない怪しい奴だし、かなり苦戦しているかもな。

「・・・少し心配だな。モモタロスと亮太郎は矢車達のところに向かってくれ。俺とアリアは牢獄の方に向かう」

「おうっ！こっちは任せとけ！」

「・・・遠山先輩。気をつけてください。何だか分からないけど・・・矢車先輩が戦っている方からも・・・そして牢獄の方からも不吉な予感がします。・・・もしかしたら明智先輩たちが向かった牢獄にも幹部クラスの相手がいるかもしれません」

言っちゃ悪いかもしれないが・・・亮太郎は不幸だ。まるで呪われているかのように交通事故の被害にあったり、自転車で木の上に引っ掛かってしまったりしてしまうことがある。しかしその経験上、ＳＳＲのように不幸なことや不吉なことを悟ることには優れていることがある。・・・・って信司が前に話していたことがある。

「分かった。警戒しておく」

亮太郎の不吉センサーがどれほどの精度なのかは知らないが・・・警戒しておくに越したことはない。そう思ってトラのコアメダルを拾い上げた俺はいざとなったら紫のコアメダルを使う覚悟でアリアと共に洞窟のさらに奥へと進んでいった。

居場所と侍と不吉な知らせ（後書き）

次回で支部襲撃編が終了します。

仮面ライダーの意地（前書き）

ようやく支部襲撃編が終了。今回はいよいよ彼らも登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

仮面ライダーの意地

俺とライナー電王が幽汽を倒した頃、W・サイクロンジョーカーエクストリームとエターナルは復活したアークと戦っていた。

「ハァッ！」
ガギィィン！

跳び上がったエターナルはアークに向かってナイフを振り下ろすが・・・その刃はアークの右腕にあっさりと受け止められてしまった。

「何ッ！？」

「ゲララッ！残念だったなぁカツミぃ！前にぶっ倒された時よりもアークの鎧の性能が上がってんだよ！」

そう言ったアークはエターナルの右足を掴んで地面に叩きつける。

「ぐはっ！？・・・ならばこれでどうだ」
『ＵＮＩＣＯＲＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

エターナルはナイフのマキシマムスロットにユニコーンメモリをセットして螺旋状のオーラを纏ったナイフを突き刺そうとするが・・・その刃すらアークの装甲に弾かれてしまった。

「陽！俺達も続くぜ！」

「正太郎・・・くれぐれも慎重にね」

『ＰＲＩＳＭ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

Ｗ・ＣＪＸはプリズムソードのスイッチを押してマキシマムを発動させる。

「加減なんて必要ねぇ。一発で決めるぜ」

「「プリズムブレイク！！」」

黄緑色の斬撃をＷ・ＣＪＸは放ったが・・・その攻撃すらもアークには通用していなかった。

「駄目だ、これも通じない」

「ゲララッ！お前らの力はこんなもんか？だったらこっちからいくぜ！」

ブンッ！

振り下ろされたアークの拳をＷ・ＣＪＸはギリギリの所で避ける。そしてエターナルもかかと落としのように振り下ろされた左足を何とか回避した。

「どうする正太郎？マキシマムが通用しない以上・・・僕達に勝ち目は・・・」

「諦めんな！１つのメモリで足りないなら何個かのマキシマムをぶつければいいだろ！」

「・・・やってみようか」

剣を楯に収めたW・CJXはプリズムビッカーに次々とメモリをセットしていく。

『CYCLONE　MAXIMUM　DRIVE』
『LUNA　MAXIMUM　DRIVE』
『HEAT　MAXIMUM　DRIVE』
『JOKER　MAXIMUM　DRIVE』

「「ビッカーファイナリュージョン！！」」

そしてプリズムビッカーから4色に輝く光線を放つと・・・

「ぐおっ！？・・・なかなか効いたじゃんか」

アークの装甲に傷をつけれたほどのダメージは与えることができた。

「さすがに2つ以上のマキシマムなら通用するようだね」

「カツミこれ以上ここで戦いを長引かせるとマジで洞窟が崩れるかもしれない。決めにかかろうぜ」

「W・・・このメモリを使え」

エターナルは自身のベルトからエターナルメモリを変身解除をせずに外してW・CJXに渡す。

「カツミ・・・分かった。ありがたく使わせてもらうぜ」

『ETERNAL　MAXIMUM　DRIVE』

W・ＣＪＸは腰のマキシマムスロットにエターナルメモリをセットするとエクストリームメモリを一度閉じてすぐに開く。

『『ＸＴＥＲＥＭＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』』

そしてエターナルメモリとエクストリームメモリの２つの力を両脚に溜め込んだW・ＣＪＸは、ベルトから放たれる黄緑色の風に乗って空中に浮かぶとそのままアークへとキックの体勢となった。

「「ダブルエターナルエクストリーム！！」」

ドカァァッ

まるでＶ３の回転キックのように身体を捻らせながらアークに向かって青い光と黄緑色の光を交互に輝かせる両脚で蹴り飛ばした。

「ごおっ！？」

しかし強化されていたアークにはその一撃だけでは力不足だったようで・・・アークはそれなりのダメージを受けているはずなのに起き上がろうとしてくる。

「カツミ、トドメは君が決めたまえ」

再びエターナルの横に並び立ったW・ＣＪＸはエターナルメモリを返すと、さらにはプリズムソードからメモリを外してプリズムメモリもエターナルに渡した。

「・・・・・」

『ＺＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

メモリを受け取って頷いたエターナルはマントを脱ぎ捨てて腰のマキシマムスロットにZと記されたメモリをセットした。

『ＥＴＥＲＮＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
『ＵＮＩＣＯＲＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』
『ＰＲＩＳＭ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

するとエターナルの胴体に幾つも連なっている右胸部のスロットに3本のメモリがセットされてマキシマムが発動される。

「カツミ！あいつにお前の仮面ライダーとしての意地をぶつけてやれ！」

「ああ・・・とうっ！」

エターナルは高く跳び上がって空中で一回転をするとキックの体勢になった。

「ライダーキック！！」
ドカァッ！

そして螺旋回転をする青い光を纏ったキックを決め込んだエターナルが地面に着地すると同時にアークも後ろへと倒れようとする。

「畜生！畜生！畜生っ！！こんなはずじゃ・・・こんなはずじゃあぁぁあぁぁぁ！！」
ドオォォン！！

背中を地面につけたアークは最後にそう叫びながら爆発した。それほどのダメージを受けたアークは変身こそ解除されてはいなかっ

たがピクリとも動かない様子だった。

「・・・死んではいないと思うが・・・しばらくは意識を取り戻さないだろう。今のうちに人員を集めて拘束しておくといい」

「あぁ。・・・これから特捜科とか強襲科の生徒を手配するが・・・お前はどうするんだカツミ?このままだとお前は捕まっちまうぜ」

変身を解除した正太郎はエターナルの後ろに立つと・・・エターナルは変身を解除してエターナルメモリを眺める。

「Wの2人。今回の件は本当に感謝している。しかし生憎だが・・・俺はまだ捕まる気はない。・・・俺が次に向かう場所は決まっているんだ」

「・・・仲間のところだろ。別に止める気はねぇよ。見逃してやるからとっとと洞窟の外にいるミーナと一緒に行けよ」

「・・・この借りはいつか返す」

そう言い残したカツミは洞窟の外へと走っていった。

「まったく・・・君は本当にハーフボイルドだねぇ。情に流されて仮にもテロリストを逮捕しないなんて。・・・まぁ、そんな君じゃなかったら僕は君のパートナーにはならなかったけどね」

半熟が抜けきらない正太郎に陽が苦笑しているところにようやく奥までついた俺とアリアがやってきた。

「おい!今誰かが走っていったけど・・・あいつは誰だ?」

「どっかで見た感じの顔だったんだけど・・・」

俺達が正太郎と陽にそう尋ねると・・・2人は1度向かい合って同時に明後日の方角を見る。

「・・・まぁ同じ仮面ライダーってところだな」

「僕達と進む道は違うけどね」

「「っ？」」

良くは分からなかったが・・・とりあえず俺とアリアは『アンクの呼んだ助っ人の1人』という解釈をした。

「・・・あれ？そういえば信司はどこ行った？」

俺は辺りを見渡してみるが・・・それらしい人物はいなかった。

「あたし達よりも先にこっちに向かったはずよ」

「あいつのことだから道にでも迷ってんだろ。俺達も矢車達のところに向かおうぜ」

正太郎の発言に頷いた俺達は矢車達が戦っている洞窟の外へと向かっていった。

俺達が外へと向かっている頃、信司はと言うと・・・

「うわっ!?ちょっ!?やめっ!・・・誰かあぁぁ!!ヘルプミ～～!!」

どうして過ぎてしまったかは分からないが牢獄よりも更に奥で大量の蝙蝠達に襲われていた。後から聞かされた話だが・・・信司はこれから2時間後に特捜科の生徒達によって助け出されたらしい。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

俺とアリアが正太郎と陽と合流して洞窟の外へと向かっている頃・・・キックホッパー達はショッカーライダー達と戦っていた。

「これで最後だ!」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

「「・・・・・・・」」

ドオォォォン!!

オーガは残っていた2体のショッカーライダーを金色に輝く刃で切り裂く。

「残りはお前だけだ。・・・はぁぁぁぁぁっ！」

サバイブとなったナイトは剣でショッカーに向かって斬りかかるが・・・ショッカーはそれを右手であっさりと掴み取ってしまう。

「何っ！？」

サバイブナイトは距離を取るためにその手を振り払おうとするが・・・剣はピクリとも動かない。

「秋山！避けてくれ！」

ドォォン！

ゾルダは自身の背丈よりも長い大砲をショッカーに向けて放つと、サバイブナイトは自身の剣を手放してすぐさま離れる。そしてゾルダが放った弾丸はショッカーに着弾するも・・・・

「・・・無駄弾だったな」

ショッカーはその弾丸を左手一本で受け止めていた。

「おいおい・・・どうゆう身体をしてるんだよ？」

その防御力の高さにファイズは驚いていると・・・ショッカーは右手に掴んでいたサバイブナイトの剣を投げ捨てて電撃を放った。

「くっ！？」

それが直撃したサバイブナイトは通常形態のナイトに戻ってしまうと・・・ショッカーはすぐさまナイトとゾルダの前まで駆け寄ってきた。

「ショッカーパンチ」
ドカァッ！！

「「ぐわぁぁぁっ！？」」

ナイトとゾルダはショッカーのパンチを喰らって吹き飛ばされてしまい変身が解除されてしまう。

「秋山！北岡！？」

ファイズは2人が変身が解除されて吹き飛ばされた方向を振り向こうとすると・・・

「・・・邪魔だ」
ドカッ！

「ち・・・畜生・・」

いつの間にか目の前に迫って来ていたショッカーのキックを喰らってベルトが吹き飛び変身が解除されてしまった。

「仮面ライダーファイズ・・・乾匠・・・抹殺」
ガギィィン

そう言ったショッカーは手刀を振り下ろそうとすると・・・オーガは剣でその攻撃を止めた。

「乾君！はやくベルトを！」

「すまねぇ木場」

タクミは吹き飛ばされたベルトの所へと走り出そうとすると・・・力負けしてしまったオーガの剣が弾かれてしまった。

「うわっ！？」

「人間の進化となったオルフェノクなのに人間なんぞに味方する者達。・・・今ここで滅びろ」

ショッカーは走っている途中のタクミと武器を吹き飛ばされて防御手段を失っているオーガに指ミサイルを放とうとすると・・・

「させるかぁぁぁぁっ！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

ドカッ！

パンチホッパーは指ミサイルを放とうとしていた右手を殴りつけて弾道を逸らした。

「・・・エヴィルの裏切り者のシュン・ヤグルマか。・・・わざわざ死にに来たか」

「違うね！お前を倒しに来たんだ！」

お互いに何度も拳をぶつけ合うショッカーとパンチホッパーだったが・・・パンチホッパーですら実力だけじゃなくスペックですら上を行くショッカーには押され始めてしまう。

「俺を倒すか。・・・兄弟揃って無理なことを言っているな。その自信はどこから沸いてきているんだ？」

「お前なんかに分かるはずもないだろうね。・・・これは自信なんかじゃないよ。ただの意地さ。・・・これ以上お前達にみんなを傷つけさせないっていうね」

バキッ

右腕のアンカージャッキが壊れてしまったパンチホッパーは肩膝をついてしまい、ショッカーはトドメと言わんばかりに拳を振り下ろす。

「シュン！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーは今にもやられてしまいそうなパンチホッパーを助けるためにショッカーに向かってライダーキックを決めにかかる。

「フンっ・・・そんな攻撃なんぞ弾き返して・・・」

「そうはさせない！」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

パンチホッパーを殴りつけながらも片手でキックホッパーのライダーキックを止めようとするショッカーに対してシザースはボルキャンサーにバレーボールのトスのように打ち上げられながら回転し

て突撃する。

「くっ！このチャンスを逃がすか！」

『ＲＩＤＥＲ　ＰＵＮＣＨ』

それをチャンスだと判断したパンチホッパーはほぼ０距離と言っていい場所からライダーパンチを決めに掛かる。

「くっ！？」

さすがに３ライダーの必殺技を受けるのは危険と判断したショッカーはそれらを回避しようとすると・・・・

「させねぇよ」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

変身し直していたファイズによってフォトンブラッドによるポイントをつけられてしまい身動きができなくなった。

「みんなの技を同時にぶつけるんだ！」

『ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

「ハァァァッ！」

オーガはフォトンブラッドによって輝く刃をショッカーに向けて振り下ろすと・・・再び変身したナイトも必殺技を放つ。

「まったく・・・面倒な相手だねぇ」

『ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ』

ゾルダは必殺技では周りに被害が及ぶと判断したのか、先ほどの身の丈以上の大砲を装備してショッカーに向けて放った。

「振り切るぜ」

『ＡＣＥＬＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

アクセルは跳び回し蹴りでショッカーに向かって蹴り込みにかかる。

「くっ！？・・・ぐわぁぁぁぁぁぁっ！？」

ドオォォォォン！！

そしてそれらの必殺技がすべて直撃したショッカーは数歩後ろに後ず去ってから爆発した。

「・・・何とか倒せたか。・・・厄介な相手だったぜ」

アンクは爆炎を見ながらそのように呟くと・・・キックホッパーとパンチホッパーは同時に変身を解除する。

「・・・シュン。やっぱりエヴィルの首領はこいつよりも強いのか？」

「え？そりゃあこいつ等を従える相手だし強いと思うよ。・・・俺はあったことなんてないけど」

「そうか・・・」

俊にエヴィル首領のことを聞いた矢車は後ろを振り返って何処かへと歩き出した。

「どこに行くの兄貴？」

「・・・本郷さん達のところだ。今の俺の力じゃ幹部クラスを誰かと協力して倒すので精一杯だ。このままじゃ・・・今のままじゃ駄目だ。もう1度鍛えなおしてもらう」

「だったら俺も・・・」

矢車に俊も付いていこうとしたが・・・矢車は片手を広げて「付いてくるな」の合図をした。

「お前はまずショッカーにやられた傷を癒せ。付いてくるとしたらそれからだ」

「でも兄貴の方がダメージは・・・」

身体の各部から血を流している矢車は・・・誰がどう見ても俊よりもケガをしているようにしか見えない。

「エヴィルとの決戦には間に合わせる。・・・相棒たちにも伝えておいてくれ」

「・・・別に止めることなんてしないが・・・無茶はするなよ。今現在の戦力で俺達の中で一番強いのは間違いなくお前なんだからな」

アンクの言葉に頷いた矢車が何処かに走って行って数分後・・・俺達がようやくアンク達と合流すると実質最後の幹部であるショッカーを倒したことと、矢車が特訓に行ってしまったことを聞かされた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺達がアンク達と合流した頃、俺やアリアが普段利用している男子寮の真下にあるコンビニでは異変が起きていた。

「・・・士君、ここは何の世界でしょうか？」

コンビニだった場所は何故か『光写真館』という名前の写真館になっていて、そこからは２０代前半の３人の男女が出てきた。

「知っていたらわざわざ出る必要なんかないだろ夏ミカン」

‘士（つかさ）’と呼ばれた人物はアジアン風の服装で出てくると辺りを見渡してみる。

「何だか今回の士の服装は珍しくまともだな！」

「『今回は』だと？・・・まぁまともじゃない服装でも着こなせる俺は常人じゃく天才であることはたしかだがな。それよりユウスケ、海東はどこに行った？」

‘ユウスケ’と呼ばれた人物は辺りを見渡してみるが・・・どうやら探している人物は見当たらなかったようだ。

「・・・まぁあいつのことだから、この世界、のお宝でも探しに行ったんだろ」

「それにしても今回は『ライダーシンボルが緋色の結晶を中心に集まっている絵』だなんて、よく分からない世界だな」

「・・・俺のライダーシンボルはなかったがな」

少し悔しそうに言った士はとりあえず適当に辺りを歩き始める。

「待ってください士君！」

「ちょっ！？置いてくなよ！」

先ほど、夏ミカン、と呼ばれていた女性は士に付き添うように追いかける。するとユウスケも置いて行かれまいとその後を追う。

「何だかこの世界・・・気にいらない何かがありそうな気がするんだよな」

そう呟いた士はユウスケ達と共に東京武偵高の方へと歩いていった。

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

「うっぅ・・」

俺達がその場から去っていった後、倒したと思っていたショッカーの身体はピクリと動き出した。そして起き上がったショッカーの仮面は半分ほど割れてしまい・・・その中からは黒い別の仮面が出てきた。

「まったく・・・死んだフリをするのがここまで面倒だとはな。だがこれでエヴィルには俺がやられたと思わせることができたはず」

バキッ！

残りの仮面を自ら剥がして完全に『黒い仮面』となったショッカーはその場を移動し始める。

「何度も身体を作り変えて様々な組織に介入してきたが・・・ここまで俺がダメージを受けたのは久しぶりだな。あいつ等、仮面ライダーというのもなかなか侮ってはいけないな。さぁて・・・しばらく俺は影を潜ませてもらおう。我らが財団が再び動き出す、運命の至る日まで」

星が輝かない夜、そのように呟いたショッカーは暗闇の中に消えていった。

仮面ライダーの意地（後書き）

次回はエヴィル最終決戦・・・の前につかの間の休息回とは名ばかりの破壊者との邂逅回です。

特訓と１０の称号と訪れる旅人（前書き）

今回はいよいよキンジ達が破壊者と出会います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

特訓と１０の称号と訪れる旅人

支部襲撃から翌日。俺とアリアは冷蔵庫の中身が消費期限だらけだったので男子寮の下にあるコンビニに買い物に来ていた。

「まったく！ちゃんと冷蔵庫の中身はチェックしておきなさいよ！」

「いやさぁ・・・そんなこと言われても・・・」

最近エヴィルの連中との連戦ばっかりで外食が多かったから部屋で何かを作るなんてことがなかったんだよ。もしかしたら白雪が何かを作ってどうにかしてくれた。・・・ってことも考えたかったが、白雪はエヴィルの動きが激しいせいで星伽の警護に行っちまってるしな。さすがにどうしよもないぜ。

「アンクもアンクでいなくなっちゃうし」

アンクはエヴィル本部の情報を探るためにどっかに行っちまった。たぶん渉のところか特捜科辺りだと思うが・・・連絡がないってことはほとんど情報がないんだろうな。

「あれ？キンジ・・・ここ・・」

「ん？」

少し動揺しているアリアに気づいた俺は目の前を見てみると・・・今までコンビニがあった場所は『光写真館』という写真館に変わっていた。

「どういうことなのキンジ？」

「・・・俺が知るかよ」

寮に住んでる生徒が寄ることが多いから売り上げは悪くなかったはずなんだが・・・どうしてなくなったんだ？

「まぁいいわ。この写真館の人にコンビニはどうなったのか聞いてみましょう」

「お、おい！」

ズケズケと店の中に入っていくアリアを止めようと、俺も店の中に入っていくと・・・その店内は完全にコンビニだった面影がないものになっていた。そしてそこには後ろで束ねられるほどに白髪を伸ばした６０代ぐらいの爺さんがいた。

「あぁ、お客さんだね」

「い、いえ・・・俺達は・・・」

俺は爺さんに別に俺達は客じゃないことを伝えようとすると・・・・奥の方から３人の男女がやってきた。

「爺さん。それじゃ今日も出かけてくるぜ」

「あぁ、夕飯には戻ってきなよ。今日はカレーだ」

「・・・にんじんは入れないでくれよ」

ピンク色のカメラを首に下げた奴。・・・俺よりも4～5歳年上そうなくせに、にんじんを嫌いなんだな。

「士君。このお2人に‘この世界’のことを聞いてみたらどうでしょう？」

‘この世界’ってどういうことだ？まるで別の世界から来たような言い方だな。

「・・・・・」

士と呼ばれていた男は微妙そうな目で俺とアリアを眺めると・・・無言で玄関の扉を開けた。

「はぁ・・・そいつ等は何も知ってそうに見えねぇよ。俺は‘この世界’の仮面ライダーかスーパー戦隊を探しに行くぜ」

また‘この世界’って言ったな。それに‘スーパー戦隊’って何だ？・・・俺が士にそのことを尋ねようとすると・・・・士は外へと出て行ってしまった。

「まったく何よアイツ！失礼しちゃうわね！」

「すいません。士君・・・根は悪い人じゃないんですけど・・・あっ、私は光夏海（ひかりなつみ）って言います」

「あ、いえ・・・お気になさらず。俺は遠山キンジ、そんでこいつが神崎・H・アリアって言います」

光夏海さんが自己紹介をしてきたので俺達も名前を言うと・・・

もう1人の男も自己紹介をしようとしてくる。

「俺は小野寺(おのでら)ユウスケ。君達はもしかして・・・あそこの東京武偵高って学校の生徒だよね？」

「まぁ・・・そうですが・・」

「別に敬語なんて使わなくてもいいって。そんなに年も離れてないだろ？」

どうやら敬語に気を使ってることに気づいたようで・・・敬語を使わなくてもいいと言われた。なら気楽に呼ぶか。

「それじゃあ小野寺。ここにあったコンビニはどうしたんだ？」

「まぁいきなり呼び捨ては気になるけど・・・まぁいいか。・・・・・俺達がこの世界に来る前はコンビニだったのか。そう言えば士達が‘俺の世界’に来たときも喫茶店が写真館に変わってたっけ」

「まぁ立ち話もあれですし奥の方で話を・・・」

俺とアリアは光夏海さんに言われて奥へと進もうとすると・・・

ドオォォォォォン！

「「「「っ！？」」」」

何かが墜落したような音が響いた。

「キンジ！」

「あぁ、分かってる！・・・悪いけど話はまた後で！」

俺とアリアは写真館を出るとその音が聞こえてきた場所へと向かうために寮の駐車場に置いてあるオーラインクロスに跨って走り出した。

「ユウスケ！私達も行きましょう！」

「えっ？あぁ、そうだね！」

そして俺達の切り替えに少し驚いた様子の小野寺は光夏海さんに言われて、俺達を追い駆け寄るように音の響いた場所に向かった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺達がまだ光写真館の中にいた頃、東京武偵高近くの上空ではスカイライダーこと筑波洋さんが重力低減装置を使い滑空するセイリングジャンプという技で空を飛んでいた。

「こちらスカイライダー！ディケイドはまだ発見できない。ＺＸの方はどうだ？」

スカイライダーはレジェンドライダー特有のテレパシーで空き地島で待機しているＺＸこと村雨良さんも辺りを見渡してみる。

「・・・駄目だ。本郷先輩の話だとすでにディケイドはこの世界に到着したらしいが・・・そもそも別世界の仮面ライダーがどんなものかも分からないから気配を探すこともできない」

「・・・別世界特有の気配を出していたりはしないのか？」

スカイライダーは自分達の中でもっとも気配を探ることに優れているＺＸに聞いてみるが・・・・

「別世界の者がやってくること自体始めてだからな。・・・正直言って分からん」

どうやら気配を探ることは不可能そうだった。

「仕方ない。一度俺も地上に降りて周辺の目撃証言を聞くとしよう」

そう言ったスカイライダーが地上へと降下しようとした途端・・・

・

「ケェーーーー！！」

「なっ！？ぐおっ！？」

スカイライダーの飛んでいた場所よりもさらに上空からショッカー怪人のフクロウ男とそっくりの怪人が飛んできた。そしてスカイライダーはその怪人が放った手裏剣のように鋭利な羽根を喰らってしまい地上に落下してしまった。

「スカイライダー！？」

「滅びればいいんだっ！！」

ブンッ！

「っ！？」

ＺＸは墜落してしまったスカイライダーのところに駆け寄ろうとすると・・・そこにはダチョウのような怪人が現れた。

「エヴィル以外の生命体は滅びればいいんだっ！！」

「・・・その発言からしてお前達はエヴィルの手先らしいな。しかし各部の特徴はグリードの作り出すヤミーと似ているようにも見える。さしずめフクロウヤミーとダチョウヤミーと言ったところだな。・・・まぁいいだろう、相手をしてやる！衝撃集中爆弾！」

ドォォォン！

ダチョウヤミーに向けてＺＸは膝についている衝撃集中爆弾を放ったが・・・ダチョウヤミーはほとんど無傷と言っていい様子だった。

「まずは様子見として先手を取ったが・・・衝撃集中爆弾でほとんどダメージを与えられないとはな」

「ぐわぁぁぁぁっ！？」

想像以上に防御力の高いダチョウヤミーにＺＸは格闘戦に持ち込もうと構えると・・・スカイライダーはＺＸの方に転がってきた。

「スカイライダー！？」

「くっ！？中距離からの攻撃とは分が悪い。こうなったら1体ずつ確実に倒すぞ」

「あぁ！」

スカイライダーとＺＸはまずはフクロウヤミーを倒そうと走り出すと・・・フクロウヤミーは黒い包帯のようなものを放ってＺＸを巻きつけた。

「くっ！・・・こんなもの・・・」

ＺＸは黒い包帯を力で振り解こうとすると・・・ダチョウヤミーが近くまで迫ってきていた。

「滅びればいいんだっ！」

ドカッ！

「ぐっ！？」

何とか黒い包帯を振りほどいたＺＸだったが・・・さすがに回避までは間に合わずにダチョウヤミーのパンチをまともに喰らってしまう。

「・・・片方を先に倒そうとすると、もう片方が襲い掛かってくるか。・・・たしかに基本のような話だが、ここまで俺達と相性が悪いと対応が難しいな」

ダチョウヤミーと距離を取ったＺＸはスカイライダーと背中合わせにそう話す。するとＺＸとスカイライダーがヤミー達と戦っている場所に士がやってきた。

「・・・スカイライダーとＺＸか。もしかしてここは１０人ライダーの世界なのか？」

「そこの君！ここは危険だ！はやく逃げるんだ！」

スカイライダーは士に忠告するが・・・士はそんな忠告を無視するかのようにどんどん歩み寄ってきた。

「まあ苦戦しているようだし、少し手伝ってやるぜ」

士は懐から見たこともないバックルを取り出すと、それを腰に装着する。そして左腰についているホルダーから１枚のカードを引き抜いた。

「まさか・・・君が・・・世界を旅する仮面ライダーの・・・」

「あぁ、そのまさかだよ。変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

バックルにカードをセットした士は９枚の虚像が重なったかと思うと、その姿はバーコードを思わせるピンク・・・マゼンタカラーの仮面戦士になった。

「はぁ・・・はぁ・・・確かここら辺だよな」

「キンジ！あれ！」

爆発音の響いた場所に到着した俺とアリアはスカイライダーとＺＸの前に立っている見たこともないマゼンタの仮面戦士を見つめる。

「ケェー！首領様の姿に似てるお前は何者だぁ！」

「俺が首領に似てるだと？ふざけたこと言いやがって！俺は通りすがりの仮面ライダー。仮面ライダーディケイドだ！覚えておけっ！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＳＬＡＳＨ』

ディケイドと名乗った仮面戦士はバックルに１枚のカードをセットすると、腰のホルダーを剣の形にしてフクロウヤミーに斬りかかった。

「ケェッ！？」

不意打ちと言わんばかりの攻撃に怯んだフクロウヤミーはつかさず両目を見開く。

「気をつけろディケイド！そいつはおそらくフクロウ男と同じ能力を持っている！その眼は殺人レントゲンという人間を白骨化させる技を使ってくるぞ！」

スカイライダーはディケイドに忠告しながらもＺＸと共にダチョウヤミーと戦い始める。すると今度は忠告を受けた様子のディケイドは何やら他の仮面戦士のついているカードを取り出した。

「生憎俺は健康そのものなんで・・・レントゲンはお断りだ」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＤＥ』

バックルから出てきた青い光の壁はフクロウヤミーを吹き飛ばすと、ディケイドはそれを突き抜けてブレイドに変身した。

「・・・なっ！？あれは剣崎の変身する仮面戦士のはず・・・」

「どうなってんのキンジ！？あいつは何者なの！？」

そんなこと俺が聞きたいぜ。たしか剣崎の変身するブレイドはカテゴリーシステムとか言うラウズカードとの適合率が重要なライダーシステムだったはずだぞ。それにどうして仮面戦士が別の仮面戦士になるんだ？

「ハァッ！」
ズバッ！
「ケェーーー！」

ディケイドが変身したブレイドは自身の剣でフクロウヤミーを斬りつけると・・・フクロウヤミーは逃げるように空へと飛んだ。

「逃がすかよ・・・。悪いが俺も飛ぶことぐらいできるんだぜ」
『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＤＥ　ＪＡＣＫ』

ブレイドジャックフォームへとさらに姿を変えたディケイドはその翼で空へと飛び上がるとフクロウヤミーを追いかける。

「・・・ってキンジ！何ボサっとしてるのよ！あんたも戦いなさい！」

「えっ？いや・・・そう言われても・・・」

別にダチョウヤミーの方はスカイライダーとＺＸだけで大丈夫そうだし、フクロウヤミーの方は・・・・今あるメダルじゃ紫のコンボにならないと空を飛ぶことはできないから戦うことはできなさそうだ。・・・まぁ念のためってこともあるし、変身はしておくか。

「変身っ！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

オーズに変身した俺はとりあえずスカイライダーとＺＸの方に加勢しようと振り向いて見るが・・・・

「スカァァイ大旋回キック！」

「ＺＸキック！」

「滅びるぅぅぅぅぅ！？」

ドオォォォォン！

ダチョウヤミーはスカイライダーとＺＸのダブルキックによって倒されて俺は必要なかった。

「フクロウは夜に行動しやがれ！！」

「ケェェェーー！？」

するとブレイドＪフォームとなっているディケイドに翼を斬られて落ちてきたフクロウヤミーは俺とアリアの方に落ちてきた。

「キンジ！」

「あぁ！分かってるって！」

『スキャニングチャージ！』

「セイヤァァァァァっ！」

ドカッァ！

メダルのエネルギーを溜め込んだ俺は空中に跳び上がってフクロウヤミーにタトバキックを決め込んでやった。しかしそれでもフクロウヤミーは耐え抜いたようで、フラフラしながらも起き上がろうとすると・・・俺とアリアの前に元の姿に戻ったディケイドが着地した。

「・・・お前、仮面ライダーだったのか。・・・まぁいい。トドメは俺が決めるぞ」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

その機械音と共にディケイドの前には１０枚の大きなカードの立体映像が出現した。

「ハァァァァッ！」

ドカァッ！

「ケェーーーー！？」

ドオォォォン！！

そしてディケイドはそれを突き抜けながらフクロウヤミーに跳び蹴りを決め込むと・・・フクロウヤミーは数歩後退して後ろに倒

れるようにして爆発した。

「あっちゃ～もう終わってたか」

「もう！ユウスケが途中で道に迷うからですよ！」

小野寺と光夏海さんがこちらにやってくると・・・士はディケイドの変身を解除して俺とアリアの方を振り向く。

「この世界にもオーズはいるらしいが・・・火野映司じゃないのか。俺は門矢士（かどやつかさ）・・・お前達は？」

士が名乗ってきたので俺も変身を解除して名乗ろうとする。

「俺は遠山キンジ。そこにある東京武偵高の2年だ。それでこっちが・・・・」

「神崎・H・アリアよ。あんたもやっぱり仮面戦士だったのね」

俺とアリアが自己紹介をすると・・・スカイライダーとZXも変身を解除してこちらにやってくる。

「君が本郷さんの言っていたディケイドか。思ってたよりも若いな」

「・・・本郷？ってことは仮面ライダー1号のことか。まぁいい。この世界のことを聞かせてもらうぞ」

俺達は再び光写真館に向かうと・・・士達にこの世界のことを説明することになった。

・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺達が光写真館に戻って話し合っている頃、矢車はキックホッパーに変身して1号と2号を同時に相手をしていた。

「ハァァァァッ!!」
ドカッ!

キックホッパーの回し蹴りを左腕で受け止めた1号はそのまま脚を掴んで投げ飛ばす。

「くっ!?」

「どうしたキックホッパー!その程度では今のお前の壁は越えられないぞ!」

そのように叫んだ2号は強く地面に叩きつけられたキックホッパーに向けてライダーパンチを決めにかかる。

「っ!?・・・ライダーキッ・・・」

キックホッパーはその攻撃を相殺しようとライダーキックを放とうとすると・・・

「大切断ッ！！」

突如跳びかかって来たアマゾンの大切断にライダーキックが弾かれてしまった。

「何っ！？ぐわぁっぁぁ！？」

そして2号のライダーパンチを喰らってしまったキックホッパーはアンカージャッキの機能を活用して空中で体勢を立て直そうとするが・・・その足はワイヤーによって捕らえられてしまい地面に再び叩きつけられた。

「たとえジャンプをして上を取っていたとしても油断はするな」

「ハァァァッ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

ライダーマンのロープアームを振りほどいたキックホッパーはストロンガーに向かってライダーキックを決めにかかると・・・

「Ｖ３回転キック！！」

Ｖ３の回転キックに阻まれてしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

さすがのキックホッパーでもレジェンドライダーを数人相手にするのはきつかったようでだいぶ息が上がってしまう。

「電キック！」
ドカッ！
「?キック！」
ドカッ！
そして息が上がっているキックホッパーに追い討ちを掛けるかのようにストロンガーと?ライダーはそれぞれの必殺キックを決め込む。
「がはっ！?」
ストロンガーとXライダーのキックをまともに喰らってしまったキックホッパーはここで倒れまいと堪えるも・・・だれがどう見ても限界が近いように見える。
「しっかりするんだ矢車！君が今よりも強くなるためには俺達7人ライダーを倒せるようにならなければならないんだぞ！」
「分かって・・・ます」
ストロンガーの問いかけに答えたキックホッパーはもう1撃ライダーキックを放つ体勢になるが・・・途中で膝をついて変身が解除される。
「・・・もう一度お願いします」
矢車は今にも気を失ってしまいそうになりながらも、もう一度立ち上がってホッパーゼクターを掴む。

「双君・・・君なら俺達にできなかったことがきっとできる。だから俺達という壁を越えて身につけてくれ。ライダーパワーを最大限まで開放して放つ必殺技を・・」

「・・・・・」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＫＩＣＫ　ＨＯＰＰＥＲ』

矢車は1号の言葉に頷きながらも変身し直すと再び7人ライダーに挑んでいった。

特訓と１０の称号と訪れる旅人（後書き）

次回はディケイド邂逅の後半・・・さらにエヴィル首領と影月がいよいよ動き出します。しかしテスト期間に入ったので日曜から木曜日まで更新を停止します。申し訳ありません。

封印と人工衛星と様々な世界（前書き）

テストも終わったので更新を再開します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

封印と人工衛星と様々な世界

矢車が7人ライダーと特訓を続けている頃、俺達は光写真館で士達に‘この世界’の説明をしていた。村雨さんと筑波さんは士に‘この世界’のことを説明するとすぐにどこかへ行ってしまった。・・・たぶん本郷さんとかと連絡を取るつもりなんだろうな。

「なるほど。だいたい分かった。・・・つまりここは俺達以外の仮面ライダーがすべて存在する世界ってことか」

「いや、俺以外のクウガもいるって言ってただろ！それとも逆に俺を仮面ライダー扱いしてないのか！どうなんだ？」

「・・・ユウスケ。最近お前が変身したのはどこの世界だった？」

「えっと・・・映司のオーズと幸太郎の電王がその世界の1号と2号と一緒にショッカーと戦ってた世界で一度変身したっきりだから・・・もう数ヶ月ぐらい変身してないかもしれない」

俺にとっては変身しないってことはいいことだと思うんだが・・・どうやら小野寺にとっては不本意らしい。

「仕方ないじゃんか！毎回毎回俺が戦おうとした時には事件が解決した感じになるんだから！」

正直言って俺はディケイドの平行世界を旅する能力というのをイマイチ信じられないでいる。たしかに平行世界っていうのは様々な可能性がある限り無限にあるものだとは分かっているつもりだが・・・

・それを仮面ライダーの力で移動できるってのは普通に考えて不可能だと思う。一応こいつ等が別世界から来たっていうのは信じているつもりだがな。

「スーパー戦隊・・・たしかお前らが会ったって言ってたのはシンケンジャーとゴーカイジャーだったな。本当にそんな世界まで存在するのか？」

巨大なロボットに乗って戦うなんて・・・いや、それはありえるか。タクミの人型に変形するバイクとか、仮面ライダー部にも黄色いロボットがあるくらいだし。

「何なら証拠を見せてやる」

そう言って士は1枚の写真を取り出してきたが・・・・

「・・・何だこれ？」

あまりにピントがずれ過ぎていて判りにくかった。・・・とりあえずビルよりもデカイ何かが写っているのは分かるんだが・・・何だこれ？

「歪みすぎじゃない！もっとちゃんと撮りなさいよ！」

写真を見たアリアは士に苦情を言うと・・・士はため息をつきながら写真をしまった。

「・・・ある意味それは俺がディケイドである代償みたいなもんだ。・・・俺の撮る写真は世界が俺を拒絶するようにブレちまうんだ」

そう言えば鳴滝のおっさんがディケイドは何かだって言ってたな。

「・・・もしかしてそれは・・・お前が『世界の破壊者』だからか？」

「士君は破壊者なんかじゃありません！！」

俺が『世界の破壊者』と発言した途端、光夏海さんはイスから勢いよく立ち上がって怒鳴ってきた。・・・どうやら失言だったらしい。

「わ、悪い士。・・・変なこと言っちまったな」

「・・・いや、どの世界でも似たようなことを言われるからもう慣れた。酷いときは俺をディケイドって知った途端に殴りかかってきた奴もいるんだからな。・・・どうせ今回もそのことを広めているのも鳴滝だろ？」

小野寺が何故か視線を逸らすと・・・士は鳴滝の名前を言ってくる。それに頷いた俺はふとした疑問を述べる。

「ああ。いったいあのおっさんは何なんだ？」

「だいたい知らん。確実に言えることは行く先々に現れるストーカーみたいなおっさんってことだけだ。」

つまり士達にも鳴滝の正体は分からないってことか。まぁ、別にそれほど知りたいわけでもないから別にいいけど。

「・・・とりあえずあんた達が別の世界から来たってことは信じるわ。・・・ところであの鳥のヤミーを倒した後、別世界にもオーズ

がいるっぽいことを言っていたけど・・・別の世界のオーズはキンジじゃないの？」

ああ、それは俺も少し気になった。さっきも小野寺がそれっぽいことを言っていたしな。

「オーズが存在する世界には2つ行ったが・・・1つの世界はとある事件のせいで1号と2号がショッカーとの戦いに敗れた世界だったぜ。俺達もちょっと存在が消えそうになったが・・・まぁ何とかなった」

だいたいの内容をすっ飛ばされた気がするが・・・本郷さんや一文字さんがショッカーとの戦いに負けるなんて信じられない・・・というよりも信じたくない世界だな。

「その世界にいたのがお前じゃない仮面ライダーオーズ。・・・火野映司だ」

「そのエイジって奴はどんなやつだったの？」

「なんつうか・・・欲がなくて人間味がない奴だったな。自分の命よりも他人の命を優先して手を伸ばそうとして・・・・心が枯れてるっぽい奴だった」

「手を伸ばそうとして・・・枯れてる・・」

おいアリア、どうしてこっちを見る。俺は別に心は枯れてないぞ。

・・・たぶん。

「もう1つのオーズの世界でもオーズはその火野映司で、そこの世

界では他の世界の仮面ライダーがごちゃごちゃに混ざってなかったな」

「ごちゃごちゃ？」

「この世界はまだ何の世界かは分からんが・・・それぞれの世界には主役・・・核になっている奴が存在する。たとえばクウガの世界にはユウスケだったりする。・・・そしてWの世界では左翔太郎とフィリップ。オーズの世界では火野映司。フォーゼの世界では如月玄太朗って感じに存在していて、その世界には同じライダーシステムのライダーしか存在しないはずなんだ。・・・もっとも・・・今言った3つの世界はどういう訳か繋がりやすいがな」

なんて言うか・・・一応パラレルワールドってことは何となく理解しているんだが、やっぱり自分達以外のオーズとかWって言われてもピンとこないんだよな。・・・たしかに俺はオーズの力を好んでいる訳じゃないが・・・自分以外の人間がオーズになるってのはやっぱり変な感じだ。

「とりあえずこの世界ごちゃごちゃと色んなタイプのライダーがいる世界ってことは分かった。それにこの世界にはエヴィルとかいう大ショッカーみたいな組織があることもな。・・・しかもあの時の鳥のヤミーの話を聞く限りじゃそこの組織のボスは俺にそっくりらしいな。それがディケイドの姿か俺自身の姿かは知らないが・・・何となく気にいらねぇな。一発ぶん殴ってやる」

士の変身するディケイドって仮面戦士は・・・話によるとライダーカードに描かれている他の仮面戦士に変身して様々な戦闘スタイルで戦うことができる仮面戦士らしい。さっきの戦闘を見る限りじゃフォームチェンジもできるらしいし・・・メダルを使って戦い方

を変える俺よりも戦術は広いと思う。だけどもしエヴィルの首領がディケイドみたいな仮面戦士に変身する奴だったら・・・心底最悪な相手だと思う。

「まぁ俺も士もこの世界にいられる間はエヴィルの戦いを手伝うから！」

「俺の活躍は期待していて損はないが・・・ユウスケの活躍は期待すんな。どうせすぐにやられて変身解除がオチだぞ」

「なっ！俺だってやる時はやるぞ！」

小野寺は自身を期待するなという士に言い返すが・・・・

「やる時は・・・な。やらない時は本当に何もしないじゃんか。フアイズの世界では海東の作った飯を食べたくらいじゃなかったか？」

「ぐっ！・・・・」

すぐに反論できなくなった。

「・・・海東って誰？」

アリアは会話に出てきた人物の名前を聞く。・・・すると後ろから感じた気配に振り返るよりも先に俺の学生鞄が奪われた。

「武装探偵のくせに隙だらけだよ。たとえ会話中でも、もう少し周囲を警戒した方がいい」

後ろを振り返ると・・・そこには士と同じぐらいの年齢に見える

青年が俺に学生鞄を返してきた。

「海東・・・お前またコソドロか？」

「コソドロとは人聞きの悪いな。僕はトレジャーハンターだって言ってるだろ？・・・あぁ一応僕の名前も教えておいてあげるよ。僕の名前は海東大樹（かいとうだいき）。仮面ライダーディエンドさ」

仮面ライダーディエンド？知らない仮面戦士の名前だな。

「まぁ君達は知らなくて当然さ。僕も士と同じ‘通りすがりの仮面ライダー’だからね。君が知っているのはこの世界の仮面ライダーだけだろ？僕や士が変身するライダーは1つの世界に留まっていないライダーだからね。・・・まあ簡単に言うと様々な世界を転々としている僕達には普通は会うことがないから、会えるだけ凄いってことだよ」

なるほど。・・・つまり簡単に例えるならレアカードみたいなもんか。・・・そう思いながら俺は腕時計の時間を確認すると・・・時計の針はすでに午後8時を示していた。

「もうこんな時間か。・・・それじゃあ俺とアリアは帰るわ」

「あれ？もう帰っちゃうのかい？せっかくだからカレーを食べていかないかい？」

「あ、いえお構いなく・・・」

写真館の爺さん・・・栄史郎さんが夕食に招いてくれたが・・・さすがに出会って初日で食事を肖るのもあれなので俺とアリアは寮

へと帰っていった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

俺とアリアが写真館を出て部屋に帰った頃、エヴィルの本部では首領と影月が羅針盤のような何かを眺めていた。

「ドクター真木が自身の部下を数名引き連れてエヴィルを脱退したことにより幹部格は完全にいなくなってしまいました。・・・さらには量産型ショッカーライダーは先日の１０人ライダーとの戦闘でとうとう全滅。スカル魔も残すところ三千体となってしまいました。いくらショッカーグリードが怪人を作り出すことが出来ると言っても・・・我らの戦力が当初の半分以下ではさすがに次の作戦の実行は危ういかと・・・」

「この程度じゃ問題ないだろ。第一こっちには・・・まだあいつ等がいるだろ？」

「「「・・・・・」」」

そう言った首領の後ろにはいずれもＡランク以上に値する3体の怪人が立っていた。１体はかつてＺＯが激闘を繰り広げたネオ生命体ドラス。もう1体はかつてアマゾンが戦った十面鬼に似ているところもあるが罪人の顔ではなく仮面ライダーの顔になっているデザ

インの十面鬼。さらには見るだけでも恐怖を感じてしまいそうになる大きな青い仮面にマントを羽織ったガイアメモリの怪人テラードーパントだ。

「・・・それは別世界におけるあなた様が怪人態となったお姿では？・・・それをこの世界で別固体として用意なされるということは・・・今回の作戦はいよいよ・・・」

「あぁ、次で決めるぜ」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＡＲＫ　ＤＥＣＡＤＥ』

黒いディケイドに変身した首領は部屋の中央にある地球儀のような物体に触れると・・・エヴィル本部が大きく揺れ始めた。どうやら本部自体が移動しているらしい。

「・・・何も本部ごと向かわなくてもよいのでは？」

「・・・この前ネガタロスが横浜武偵高の襲撃に失敗したのは覚えているだろ。どうして襲撃のターゲットにしたか分かるか？」

「いえ、首領様のことですから単純にライダーパワーを持つ人間を集めるためだけだと・・・・」

「影月・・・お前時々さりげなく俺のこと馬鹿にしてるよなぁ？・・・まぁ許すけど。・・・あそこには仮面ライダー部ってものが存在しているんだ。その部活はフォーゼのライダーシステムに取り入れているコズミックエナジー・・・つまり宇宙のエネルギーを研究しているんだ。・・・・そろそろ分かっただろ？」

「なるほど・・・そういうことですか。たしかにそのような技術が

あるならこのエヴィル本部を発見してしまっても無理はありませんね」

影月がモニターを眺めると・・・そこには地球にどんどん近づいていく映像が映し出されていた。

「まぁさすがにレジェンドライダーや武偵高の仮面戦士達といえどエヴィルの本部が地球の大気圏外に存在するとは思ってもいないはずですけどね」

「だけどまぐれで見つけちまうってこともありえる。確かに見つけられてもあっちから乗り込んでくる奴は少ないとは思うが・・・もう‘あの日’は迫って来ているんだ。これ以上邪魔をされる訳にはいかねぇ。あいつ等を再起不能になる寸前まで破壊して・・・例のマシンのエネルギーとして電池になってもらおうぜ」

「仮面戦士の中でも心の強きものが持つと言われる周波エネルギーであるライダーパワー。・・・４０年に一度の地球のコアからの特殊なエネルギーの噴火。そして仮面戦士からライダーパワーを奪い取り、例の計画の鍵となるマシン。この条件が揃えられるこの世界だからこそ・・・わざわざ様々な世界の自分と記憶を共有しただけありました。ぜひとも宿願を達成してください。首領様・・・いえ、我が主。ツカサ様」

エヴィル本部であった人工衛星は地上へ向けての降下を進めていた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

深夜４時、俺が自室で深い眠りに入っている頃、剣崎こと仮面ライダーブレイドは何故か戦場になりやすい空き地島でスペードのキングであるアンデットのコーカサスアンデットと戦っていた。

「ウェェェェッ！！」
ガギィィン！

ブレイドは大きく振りかぶったブレイラウザーをコーカサスアンデットに向かって振るうが、周囲にバリアを張る力のある盾に受け止められてしまった。

「はぁ・・・せっかく三日ぶりに仮面戦士との戦いだと思って期待したけど・・・君はあんまり強くないね」
ドカッ！

「ぐはっ！？」

腹部を殴りつけられたブレイドは少し後ろに後退してしまう。

「この前戦った青い銃使いの仮面戦士の方がまだ強かったよ。同じ青い仮面戦士なのにこんなにも違うものなの？」

「うわっ！？」

サイコキネシスのようなもので吹き飛ばされてしまったブレイド

はブレイラウザーを落としてしまい、それに入っていたカードをコーカサスアンデットに奪われてしまう。

「これで君はもう対抗手段がないでしょ？とっとと降参しなよ。今なら命だけは助けてあげてもいいよ。まぁ、一生動けない状態にはするけどね」

「誰が降参なんかするか。・・・たとえカードが一枚も無くてもお前を封印できるはずだ。俺に・・・仮面ライダーの資格があるのなら！！・・・ウェェェェイ！！」

ドカッ！　ドカッ！

ブレイドはがむしゃらに拳を振るうが・・・その攻撃はすべてコーカサスアンデットの周囲にバリアを展開する盾に防がれてしまう。

「だからそんな攻撃じゃムダだって」

「ウェェェェェ！！」

ドカァッ！

さらに何度もブレイドは拳を振るうと、その拳はラウズカードとは違った別の力を発動したかのように青白い光を放った。・・・そしてその拳を受け止めたコーカサスアンデットの持っている盾に亀裂が入り始めた。

「えっ！？まさか・・・そんな！？」

「ウェェェェイ！！」

バキィィィン！

「ぐっ！？」

そして盾を壊されて怯んでしまったコーカサスアンデットは自身の剣を持っていた手を緩めてしまう。

「っ！」

それをチャンスだと判断したブレイドはコーカサスアンデットの持っている剣を力ずくで奪い取った。

「ウェェェイ！」

ズバァッ！

その剣を使ってコーカサスアンデットを斬りつけたブレイドは、その足元に落ちていたブレイラウザーを拾い上げて二刀流に構えた。

「ウェェェェェッ！！」

ズバァッ！

「ぐわっ！？」

二刀流でコーカサスアンデットに斬りかかったブレイドは横に１回転をしてさらに斬りつける。

「これでっ！」

ズバァッ！

そしてコーカサスアンデットの剣を投げ捨てて跳び上がったブレイドはトドメと言わんばかりに先ほどの青白い光を纏ったブレイラウザーで頭上から斬りつけた。

「くっ!?注意した方がいいよ。・・・君が油断をしたら・・・君は僕の力に飲み込まれちゃうからね」

「・・・俺はお前の力には負けない。・・・絶対にな」

ドスッ

ブレイラウザーから何も封印されていないブランクのカードを取り出したブレイドは、そのカードをコーカサスアンデットの腹部に突き刺した。

「それと・・・もうすぐあいつ等が最後の作戦を実行に移しに掛かってくるから・・・覚悟を決めときなよ」

そう言い残したコーカサスアンデットはラウズカードの中に封印された。

「・・・・・」

そしてそのカードをしばらく眺めたブレイドはラウザーにカードをしまうと自身の拳を見つめる。

「さっきの光・・・まさかあれは俺のライダーパワーか?・・・だとしたら俺も・・・ちゃんと仮面ライダーってことだよな」

ブレイドの変身を解除した剣崎は自身のバイクに乗って帰宅しようとすると・・・星空が少ない夜空に赤く輝いている発光体が地上へと落ちてきているのが見えた。

「おっ!流れ星か!・・・活舌良くなりますように。活舌良くなり

ますように。活舌良くなりますように」

剣崎は切実な願い事を3回言い終えるが・・・流れ星は未だに見えていた。

「あれ?まだ言えるっぽいな。えっとそれじゃあ・・・Sランク武偵になれますように。Sランク武偵になれますように。Sランク武偵に・・・つーか良く見ればあれって流れ星じゃなくないか?・・・ってなんだ人工衛星かよ。期待して損したぜ」

流れ星だと思っていた物体は地上に落下してくる人工衛星だと気づいた剣崎はため息をついて自身のバイクに跨ろうとした途端・・・

ガラガラガラッ!

「っ!?」

人工衛星が突如崩れ始めて城のようなものが見え始めた。

「なっ!?えっ!?城!?何だあれ!宇宙人がやってくるのか!?えっとこういう時ってどうすればいいんだ?・・・えっとやっぱりまずはお互いの人差し指同士をくっつければいいのか?」

完全に宇宙人がやってくると判断した剣崎はどのような対応をすればいいのかを考えていると・・・城からは数十体のスカル魔が地上へ向かって飛び降りてきた。

「スカル魔だと!?ってことはまさかあれは例の組織の・・・・急いで遠山達に知らせないと・・・」

人工衛星だった城がエヴィルの本拠地だと直感した剣崎は武偵高の仮面戦士科の方に連絡を取った後、すぐさま男子寮の俺の部屋へと向かった。

封印と人工衛星と様々な世界（後書き）

次回からはいよいよエヴィルとの最終決戦です。

エヴィルの城（前書き）

今回は登場ライダーが過去最多です。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×2
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

エヴィルの城

午前４時３０分。まだ日が昇っておらず辺りが薄暗い頃、俺とアリア・・・それと先ほど帰ってきたばかりのアンクは剣崎の後を追いかけるようにしてバイクで走っていた。

「キンジ！見えてきたわよ！」

俺の後ろに乗っているアリアは夜空に赤く光る城を指差す。どうやらまだ地上に着陸していないらしいが・・・何だあのサイズは。横幅だけで東京ドームの３倍ぐらいはありそうだぞ。

「しかも城の上が見えないほどデカイときたもんだ。・・・アンク、最上階までどれぐらいありそうだ？」

「・・・だいたいスカイツリーぐらいはあるんじゃないか？」

おいおいマジかよ。その高さであれぐらいの幅だとすると・・・あの中に怪人はどれだけいるんだ？

「ただの怪人だけだったらいいが・・・この気配はあの時感じた気配だぞ」

「あの時？」

「神崎と戦ったときにやってきたエヴィルの親玉の気配だ」

「なっ！？」

アンクがそう言うってことは、まさかあの城がエヴィルの本部ってことか。・・・そう思った俺はもうすぐ空き地島の近くに着地してしまいそうなエヴィルの城からショッカー戦闘員やスカル魔が大量に降りてくるのが見えた。

「「「イィーーー!!」」」

「くっ!?先へ進みたいが・・・戦うしかないか」

「・・・そうだな」

ショッカー戦闘員やスカル魔が十数体俺達の前に立ち塞がったので戦おうとベルトを透けようとすると・・・・

ドォンッ!

「イィー!?」

俺達の後ろから無数の銃弾やら風の矢などが飛んできてショッカー戦闘員達を狙撃した。後ろを振り向いてみると・・・そこにはギャレンとイクサさらにはカリスといった3年生の仮面戦士がそれぞれの武器を構えていた。

「橘先輩!それに名護先輩と藍川先輩も!」

「ここは俺達に任せろ!」

「君達は先に進みなさい」

「・・・はやく行け」

俺達に先に進むように言った3年生達はその場にいるスカル魔達との戦闘を始めた。

「急ぐわよキンジ！」

「すいません。・・・お任せします」

「はっはっはっ！どこへ行こうというのかね？」

エヴィルの城が着陸しそうな場所へ向かおうとしていると・・・突如周囲に広がった紫色の怪しげな液体から青い大きな仮面にマントを羽織った怪人が出現した。

「っ！？」

一目見ただけでも充分に伝わってくる。・・・こいつは間違いなくヤバイ。そう直感してしまうほどこの怪人を見ただけで恐怖を感じてしまった。

「・・・キンジ。何だかコイツ、見てるだけでも恐怖を感じてしまいそうになるわ」

この天才Sランク武偵のアリアですら恐怖をさせちまう怪人だと！？・・・ってことは確実に大幹部クラスである危険度Aランク以上の怪人だな。

「一目見ただけで恐怖を感じさせる怪人ってことは・・・・」

「おそらくは直接人間の精神や感情に作用してしまうドーパントだ

ろうね」

「えっ？」

突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえたので振り返ってみると・・・そこには正太郎と陽、それと照井が立っていた。

「・・・となるとメモリは恐怖・・・テラードーパントだろうな」

「正太郎・・・それに陽まで・・・来てくれたのか」

「エヴィルの襲撃なんだから当たり前だろ。・・・・まさかこんなところで足止めを喰らうとはなぁ」

『ＪＯＫＥＲ』

「たしかにそうだよな」

剣崎はバックルとラウズカードを取り出して腰につけ、正太郎はジョーカーのメモリを取り出してＷに変身しようとすると・・・カリスが剣崎の肩を軽く叩いて首を横に振った。

「先ほども言っただろ。ここは俺たちに任せて先へ進めと。それはお前たちならばきっと何とかできると思っているからこの先の戦いを任せるんだ。それにこんな所でお前たちを城に到着してすらもいないのに疲労させるわけにもいかないからな。・・・テラードーパントも俺たちが相手をする」

「始・・・分かった。あいつは任せるぜ！」

カリスである藍川先輩と知り合いの様子の剣崎は、その場を先輩

達に任せて先へと進もうとすると・・・照井がベルトとメモリを取り出した。

「俺は精神攻撃系の技が効かない体質でな。あの怪人と戦うのは俺が適しているだろう。残って戦わせてもらうぞ」

何を言っても聞かないと悟った様子の正太郎はフッと笑うとバイクのハンドルを握りなおす。

「・・・死ぬなよ・・・照井」

「・・・知らないのか?俺は不死身だ」

『ＡＣＣＥＬ』

「変・・・身っ！」

『ＡＣＣＥＬ』

アクセルに変身した照井は自身のバイクからエンジンブレードを引き抜くとゆっくりと先輩達と並び立つ。

「話の通りだ。・・・加勢させてもらう」

「精神攻撃が効かないとあれば正直助かる。始はまだ平気そうだが・・・俺と名護にはそれなりに効いているからな」

よく見るとギャレンの銃を持っている手が小刻みに震えているのが分かる。それにイクサも剣先が定まっていない。・・・いくら先輩達だって人間なんだから恐怖はしてしまうよな。

「ボサっとすんなキンジ！先へ進むぞ！」

「あ、ああ！」

テラードーパントはアクセル達に任せて俺達は先へと進んでいった。するとその場に残った仮面戦士達はそれぞれの武器を構える。

「・・・俺達の精神汚染がこれ以上進まないうちに倒すぞ！」

「その命、神に返しなさい！」

「さぁ思い切り・・・振り切るぜ！」

「・・・最善は尽くそう」

ギャレンとカリスはそれぞれ銃と弓で距離を取って攻撃を始め、イクサとアクセルは剣でテラードーパントに切り掛かった。

「その程度で私をどうにかなると思っているのかね？」

銃弾や矢を先ほどまで足元に出現していた紫色の液体を操作して防いだテラードーパントは青い仮面からドラゴンのような怪物を出現させてイクサとアクセルに突撃させた。

「何ッ！？」

「ぐあっ！？」

イクサとアクセルは予想もしていなかったドラゴンの体当たりをまともに喰らってしまい、近くのビルにめり込んでしまうほど吹き飛ばされてしまう。

「もしこの程度で私を倒そうとしているのなら・・・興冷めなのだが」

ドラゴンを仮面に戻したテラードーパントは腰の後ろで手を組みながらゆっくりとギャレンとカリスに近づいてくる。

「・・・たしかに最近はあまり良い活躍はしてはいないが・・・この程度と見限られては困るな」

『ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ　ＦＵＳＩＯＮ　ＪＡＣＫ』

「まったくだ。・・・俺たちの力はこの程度ではない」

『ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ』

ギャレンが孔雀の力を宿したジャックフォーム、カリスが赤い強化形態のワイルドカリスに変わると・・・・

『ラ・イ・ジ・ン・グ』

『ＡＣＣＥＬ　ＵＰ　ＧＲＡＤＥ　ＢＯＯＳＴＥＲ』

ビルの瓦礫の中からはライジングイクサとアクセルブースターが出てきた。

「イクサの真の力・・・見せてやる」

「絶望がお前のゴールだ」

「はっは！そうでなくては面白みがない」

強化変身した仮面戦士達は再びテラードーパントへと突撃していった。そしてそれとほぼ同時に・・・エヴィルの城がとうとう空き

地島近くの海に着地してしまった。

・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

俺達が着地したエヴィルの城に向けてバイクを走らせている頃、士はディケイドに変身してショッカー戦闘員達に剣を振るっていた。

「ハァァァッ！」
ズバァッ！

「「イィーーー！？」」

「ちっ！何だこの数！鬱陶しいんだよ！」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

敵の数にだんだんイライラしてきた様子のディケイドは１０枚のホログラムのカードを自身の前に出現させると、剣から銃に変形させたホルダーからマゼンタの光線を放って目の前の敵を吹き飛ばした。

「士！」

「士君！」

するとディケイドの元には小野寺の声をしたクウガと光夏海さんの声をした白いキバが駆け寄ってきた。

「・・・海東はどうした？さっきまでそこら辺にいただろ」

「海東なら・・・ほら、あそこに」

小野寺クウガの指差した場所では青・・・シアン色にバーコードラインのついた仮面戦士が怪人達の爆発後から何かを物色していた。

「・・・何やってんだ海東？」

「何って・・・見て分からないのかい？掘り出し物を探しているんだよ。この世界は僕でもほとんど知らない世界だからね！どこにお宝があるか分からないから探しているのさ！」

海東が変身しているシアンの戦士・・・たしか本人がディエンドと名乗っていた仮面戦士はそう言いながら半分に割れたセルメダルを手に取った。

「どうした海東？まさか本当に掘り出し物を見つけやがったのか？」

「・・・見たまえ士。これが何かは分かるかい？」

ディケイドはディエンドから半分に割れたセルメダルを受け取ると・・・周囲を見渡してみる。

「さっきショッカー戦闘員を倒しただけの数はありそうだな。もしかしてさっきまでの戦闘員は・・・」

「あぁ、たぶん推測通りだと思うよ」

次々と現れるショッカー戦闘員がセルメダルでできていることに気づいたディケイドは目の前にそびえ立つエヴィルの城を眺める。

「・・・しかし見れば見るほど城のデザインが大ショッカーの城と似ていやがるな。嫌なこと思い出すぜ。・・・本当に気にいらねぇな。絶対にエヴィルとやらのボスを殴り倒してやる」

「士！」

ディケイドがそんなことを呟く中、俺達はようやくその場にたどり着いてディケイド達と合流する。

「キンジ・・・お前らも来たのか？」

「まぁ・・・な。エヴィルは俺達が戦わないといけない相手だからな。それに奴らには色々と借りが・・・・」

「キンジ！アリア！とっとと下がれ！」

「っ！？」

俺はアンクに言われて後ろに下がった途端、さっきまで俺とアリアが立っていた場所に水色に光る電撃が飛んできた。

「いきなりあたし達に攻撃してくるなんていい度胸してんじゃない

！何者なの！！」

俺達は電撃のような攻撃が飛んできた方向を振り向く。するとそこにはかつてＺＯを苦しめた最強のネオ生命体・・・ドラスが立っていた。

「お兄ちゃん達が遊んでくれるの？」

「遠山・・・先に行ってくれ。こいつは俺達が倒す」

『ＴＵＲＮ　ＵＰ』

ブレイドに変身した剣崎はそう言いながらブレイラウザーを構える。

「士・・・君も先へ進みたまえ。小野寺君は少しマイナスになるかもしれないが・・・夏メロンは役に立つからね」

「海東・・・分かった。ユウスケ！絶対に足手まといになるんじゃねぇぞ！」

「お前ら！俺をやられ役みたいな扱いすんなよ！俺だってやる時はやるんだからな！」

ドラスを剣崎や小野寺達に任せることにした俺達はディケイドである士も連れてエヴィルの最上階へと向かうために城の中へ入っていった。

「僕の遊び相手はお兄ちゃん達だけ？」

「俺たちもいるぜ！」

「っ！？」

ブレイドがその声に振り返ってみると・・・そこには電王やキバなどの８人の仮面戦士が立っていた。

「・・・剣崎先輩達、手伝いに参りました」

真っ先にブレイドに駆け寄ったキバは両腕をクロスさせるような独特の構えをでドラスに対して身構える。

「教務科で最も俺が近かったんで・・・こっちに参戦することにしました」

津上さんの変身するアギトは近くのショッカー戦闘員を殴り倒しながら小野寺クウガの隣に立った。

「げっ！やっぱりこの世界にもモモタロスっているんだ」

「あぁ！何だおめぇ！俺になんか言いたいことでもあるのか？」

自身を見て少し後ず去った小野寺クウガに電王が近づいていく。その後ろには信司の変身する龍騎や明日夢の変身した響鬼・紅などの仮面戦士もやってきた。

「おばあちゃんが言った。この世に不味い飯屋と悪が栄えた試しがない・・・と」

「・・・面倒だな」

さらには天道のカブト・ライダーフォームとファイズまでがやってきた。

「・・・まさか9つの世界の仮面ライダーが一箇所に揃うなんてね。ショッカーの時の決戦以来かな?」

「9つのライダーの中で俺だけ別世界からで仲間ハズレだけどな。・・・それよりもみんな!行くぞ!」

小野寺クウガやブレイド達はドラスと戦闘を始めた。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺達が城の中に入って最上階を目指している頃、首領はモニター画面を眺めていた。

「お~!色んな仮面ライダー達が戦い始めたなぁ!お前も見てみろよ影月!」

「えぇそうですね。・・・おや?ツカサ様、城の上空に何やら未確認飛行物体が・・・ただいま拡大します」

影月は1つのモニターに映った城の上空の映像を拡大すると・・・そこには黒い大きなクワガタムシのようなものが映し出された。そ

してそのクワガタムシの足の部分には赤い仮面戦士が掴まっているようにも見えた。

「あれは・・・まさかゴウラムと・・・・・」

「っ！？今すぐそこから離れろ影月！！」

ドオォォォォン

影月がモニターから離れた途端・・・天井を貫いてクワガタムシと赤い仮面戦士・・・五代さんの変身するクウガがそこにやってきた。

「やっと見つけたよ。エヴィル首領・・・これ以上君達に悪事を続けさせるわけにはいかない」

「っ！！」

影月がシャドームーンに姿を変えてクウガの前に立とうとすると・・・首領は右腕を広げて影月を下げるように合図をする。

「下がってろ影月。・・・こいつはたぶんお前の手には負えない」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＡＲＫ　ＤＥＣＡＤＥ』

黒いディケイドに変身した首領はクウガと向かい立つ。

「・・・おいおい、かつての英雄さんよぉ。幾らなんでも敵陣に空から突っ込んでくるのはどうかと思うぜ？」

「・・・俺は英雄なんかじゃないよ。俺は所詮・・・無力な人間の1人に過ぎないよ。だから話し合いで解決したい。・・・これ以上

の悪事を辞めて武装を解除してから投降してくれないか？できれば争いで解決したくない」

クウガは黒いディケイドにそのように告げるが・・・黒いディケイドは腰のホルダーからカードを取り出す。

「無力な人間だと？まったく・・・かつて、究極の闇、って時代の怪人達に恐れられた最強の戦士がよく言うぜ。とっとと本気の姿になれよ。マイティフォームじゃ俺相手には1分も持たないぜ。俺は破壊者だぞ。それに悪事を辞めろ、武装を解除しろ？そんなことするはずないだろ」

「君の答えは分かったよ。・・・ごめんねアミカ。悪いけど君との約束をもう1回破る。俺はみんなの笑顔を守るために・・・もう1度あの姿になることにするよ」

黒い霧のようなものを纏いながら周囲に電撃を散りばめたクウガはその姿を黒く刺刺しい4本角へと変える。

「へ～！生でアルティメットクウガを見たけど、やっぱりこっち側っぽく見えるよな。どうせ断られると思うけど一応聞いておくぜ。・・・俺の下で世界を破壊しないか？自分の力を押さえ込まないで暴れてみないか？」

「俺の拳はみんなの笑顔を守るために振るう拳なんだ。みんなから笑顔を奪うために振るう拳じゃない」

そういった‘黒の4本角’となったクウガ・・・アルティメットクウガは両拳を強く握って構えると黒いディケイドは先ほど引き抜いたカードをベルトにセットした。

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ・・・』

「せっかく俺に挑んできたんだから１つだけ忠告しといてやるぜ。・・・俺に挑むってことはよぉ・・・全ての仮面戦士達を相手にしているのと同じことだと思えよ！」

『ＯＯＯ』

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ　ＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡＣＯＭＢＯ』

複眼が黒いオーズ・タトバコンボに変身した黒いディケイドはさらに次のカードを取り出してセットすると・・・ガタキリバコンボとなって５０人に分身をした。

「はぁ・・・リクの時と同じようにオーズとまた戦わないといけなくなるなんてね」

「「「「おいおい、これだけだと思うなよ」」」」

『『『『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ』』』』

ガタキリバコンボに変身して大量に分身した黒いディケイドは一斉にホルダーからそれぞれ違う仮面戦士のついたカードを取り出してベルトにセットした。

『ＫＵＧＡ』『ＡＧＩＴＯ』『ＲＹＵＫＩ』『ＦＡＩＺ』『ＢＬＡＤＥ』『ＨＩＢＩＫＩ』『ＫＡＢＵＴＯ』『ＤＥＮ－Ｏ』『ＫＩＶＡ』『ＤＯＵＢＬＥ』『ＯＯＯ』『ＦＡＵＲＺＥ』『ＩＣＨＩＧＯＵ』『ＮＩＧＯＵ』『Ｖ３』『ＲＩＤＥＲＭＡＮ』『？』『ＡＭＡＺＯＮ』『ＳＴＯＲＯＮＧＡＲ』『ＳＫＹＲＩＤＥＲ』『ＳＵＰＥＲ１』『ＺＸ』『ＢＬＡＣＫ』『ＢＬＡＣＫＲＸ』『ＳＨＩＮ』『ＺＯ』

『Ｊ』・・・・

黒いディケイドだったガタキリバの分身達はその姿を次々と他の仮面戦士の姿に変えていく。しかしいずれも本物とは違い複眼が黒くなっているものにだ。

『ＤＡＲＫ　ＤＥＣＡＤＥ』

そしておそらくは本体だったと思われる１人のガタキリバが黒いディケイドに姿を戻すと・・・アルティメットクウガの前に５０人もの仮面戦士が並び立った。

「究極の闇とまで言われた英雄にはこれぐらいしないと駄目だろ。・・・さぁ、お前からはライダーパワーなんて奪わず完膚なきまでに破壊してやるぜ」

「・・・偽者なんかに俺は負けないよ。・・・旅先で出会った子供が言っていたんだ。『仮面ライダーは正義の味方』だってね。もしも俺なんかでも仮面ライダーって認められるんだとしたら・・・俺はその子の笑顔を守るためにも正義の仮面ライダーの姿を使って悪事をしようとする君を許すわけにはいかない！」

アルティメットクウガはたった１人で黒いディケイドが分身した偽者の仮面戦士達に勝負を挑んでいった。

エヴィルの城（後書き）

エヴィル首領が行った技は・・・ＴＶのディケイドはイリュージョンからカメンライドなどはしませんでしたが、映画のオーズはそれっぽい離れ技をやっていたのでやってみました。

とある依頼とレジェンドと爆熱音撃（前書き）

今回は何人かの仮面戦士がある意味恐ろしい技を使います。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

とある依頼とレジェンドと爆熱音撃

俺達がエヴィルの最上階を目指して走っていた頃、武偵高駅前では仮面ライダーバースこと後藤は1人で十数体もいるショッカー戦闘員やスカル魔達と戦っていた。

「くっ！？」
チャリン！
『ブレストキャノン』

ショッカー戦闘員達の間を潜りてそれなりに広い場所に出てきたバースはブレストキャノンを装備して、ショッカー戦闘員達にそれを向ける。

チャリン！チャリン！
『セルバースト』
チャリン！チャリン！
『セルバースト』

そして次々とセルメダルをベルトに入れてエネルギーを溜めると・・・そのトリガーを引いた。

「ブレストキャノン！シュウウウウウト！！」
ドオォォォォォォ！！

自身の最大の攻撃であるブレストキャノンを放ったバースは疲労で膝を付きながらブレストキャノンを解除する。

「はぁ・・・はぁ・・・とりあえずこの辺までやってきた怪人は片

付いたな」

「そうでもないぞ」

ブンッ！

「っ！？」

『ドリルアーム』

ガギィィン

咄嗟にドリルアームを装着したバースはどこからともなく襲い掛かってきた怪人の攻撃をそれで受け止める。

「お前！何者だ！」

「お前ごときが知る必要はない。我が組織としては幹部がいなくなり戦力が格段に落ちたエヴィルが滅びることには構わないことだが、データを取るためにも1時間ほどは保ってもらわねば困るのだ」

エヴィルとは違う組織を名乗るカブトムシのような怪人は、そのままバースを殴り飛ばすと眼の色を紫色に変えて自身の装飾の1つをむしり取って剣に変えた。

「・・・くっ！？」

『セルバースト』

バースはバースバスターを手に取るとセルバーストをカブトムシのような怪人に向けて放つが・・・

「フンッ！」

ズバァッ！

カブトムシのような怪人はセルバーストの光弾を剣で真っ二つに切り裂いてしまった。

「・・・この程度では我が組織が貴様を狙う価値もないな。・・・小僧、今すぐこの場から立ち去れ。俺は弱者に興味はない」

「俺を舐めるな！」

バースはバースバスターの光弾を何度も放つが・・・まるで怯んだ様子はない。

「ほぅ・・・威勢の良さに免じて特別にこの姿の名前だけは教えてやろう。・・・この姿の名前はゴ・ガドル・バ。８００年以上前に影の英雄とまで言われた戦士に倒された怪人の姿だ。ＤＮＡを元に復元したに過ぎないが・・・この戦闘力は並の怪人の比ではないぞ」

眼を青くして剣を槍に変えたガドルはバース目掛けてそれを投げつけると・・・バースはギリギリのところで回避してバースバスターを放とうとするが・・・

カチッ

バースバスターの中のセルメダルがなくなってしまっていた。

「・・・弾切れか。・・・しかし・・・」

バースは手持ちのセルメダルはすでに無くなっていて、セルメダルを大量に入れているリュックサックはガルドの後ろの方にあり補充ができなくされてしまっていた。

「くっ・・・せめて奴の背後に行ければ・・・・・」

後ろのセルメダルを取りたいと考えたバースだったが・・・ガドルには隙があるようには見えずになかなか動けない様子だった。

「・・・あのリュックを取ればいいの？」

「あぁ、できればそうしてほしいのだが・・・ん？」

後ろから聞こえてきた声にバースは振り返ってみるが・・・そこには誰もいなかった。

「さぁ・・・潔く死ぬがいい」

「しまっ・・・！？」

ガギィィン！

バースは咄嗟に両腕で受け止めるように構えるが・・・そこには何もぶつかってはこなかった。

「・・・どうやら間に合ったようだな」

するとそこには秋山の変身するナイトのような仮面戦士がランスのような武器でガドルの剣を受け止めていた。

「・・・お前は何者だ？」

「チーム・ベンタラのリーダー・・・レン。またの名を仮面ライダーウイングナイトだ」

「ウイングナイト・・・聞いたことがあるぞ。たしか先日エヴィルの幹部の1人であるゼイビアックスとやらをドラゴンナイトと共に撃退した仮面戦士か」

ガドルから跳び下がったウイングナイトはランスと剣の二刀流で戦おうと構えた途端、バースの後ろにある黒光りした車から赤い龍のような仮面戦士がリュックサックを持って出てきた。

「はい、これ！君のでしょ！」

「あぁ・・・助かった」

信司とは違う龍騎士・・・仮面ライダードラゴンナイトからリュックを受け取ったバースは、それを開くとバースバスターのポッドの予備を取り出して、バースバスターにセットした。

「作戦成功だよレン！」

「そう言っている暇があったらこっちを手伝ってくれ。俺1人では攻撃を受け止めるだけで精一杯だ」

「あぁ今行くよ。・・・仮面ライダー・・・えっと・・」

「・・・バースだ」

「そうそう！バース！」

ウイングナイトに言われて思い出した様子のドラゴンナイトはデッキからカードを一枚取り出しながらバースの前に立った。

「仮面ライダーバース。・・・ここは僕たちに任せて君はエヴィルの城に向かいなよ」

「しかし・・・こいつは・・・」

「・・・俺達2人はある人物からの依頼で『バースが城にたどり着けていなかったら手助けしてやってくれ』と言われたんだ。俺達はその任務を遂行しようとしているだけだから気にするな」

ガルドの拳を何とか受け止めているウイングナイトはそのように言いながら跳び回し蹴りをして斬りつける。

「・・・その人物と言うのは?」

薄々は気づいている様子のバースは一応ドラゴンナイトに尋ねてみると・・・

「現在手術中のドクター伊達だよ」

「やっぱりか」

やはり案の定伊達さんだった。

「・・・この依頼は手術室に入る寸前で彼がナースに伝えて、間接的に伝わってきた依頼なんだ。ちょうどエヴィルとの戦いに参戦しようと日本にやってきたばっかりだったけど・・・君をちょうど発見したんでそっちの方を優先させてもらうよ」

『ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ』

「・・・すまない。この借りは必ず返す」

ドラグセイバーを手に取ってガルドに突撃していったドラゴンナイトにバースはお礼を言うと後ろを振り向いて走りだした。

「・・・あいつは行ったか。・・・まぁいい。あの程度が向かおうがエヴィルの壊滅予定時刻に支障はでないだろう。それに問題はこっちだ」

ガドルは再び眼を紫色にすると装飾をさらに1つ手に取って2本の剣を構えた。

「ようやく思い出したぞ。チーム・ベンタラと言えばベンタラのデッキを作っただけではなく、自らもそれなりに高い実力のあるアドベントマスター直属の武偵チームだったな。お前達2人がエヴィルの城へ行ってしまうと財団の計画予定時刻に支障が生じる。ここから先へは行かせん」

「財団？どうやらエヴィル以外の陰謀も蠢いているらしいな。いくぞキッド！」

「ＯＫ！」

ドラゴンナイトとウイングナイトは2人同時にガドルへと斬りかかっていった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

バースがエヴィルの城に向けて走っている頃、数人の仮面戦士達が数々の怪人達と戦っていた。

「ガァァァァウッ！」

蝙蝠のような怪人の脊髄を引っこ抜いたシンは、その脊髄を数メートル先にいる敵に向かって投げつける。

「ライダーパンチッ！」
ドカッ！

ＺＯは蜘蛛のような怪人にライダーパンチを決め込んで倒すと後ろにやってきた敵を蹴り飛ばす。

「ライダーキィィク！」

ライダーキックで数体の怪人を一気に蹴り飛ばしたＪはキックを喰らって爆発した怪人達の爆煙を突き抜けて次の怪人へと向かう。

「リボルケイン！！」
ドスッ！

ブラックＲＸはリボルケインで３体の怪人を一気に貫くとすぐさま後ろを振り向いて、その姿をロボットのような仮面戦士に変える。

「ＲＸロボライダー！ボルティクシューター！」
ドォン！

ロボライダーに姿を変えたブラックＲＸは銃型の武器であるボルティクシューターで次々と怪人達を狙撃すると・・・後ろから数体の怪人が一斉に襲いかかってきた。

「フンっ！」

怪人達の攻撃が直撃する寸前、ロボライダーは液体に変わって怪人達の攻撃は当たらなかった。

「バイオライダー！バイオブレード！」

液体から青い仮面戦士・・・バイオライダーに姿を変えると、バイオライダーは剣を取り出してその怪人達を次々と切り倒した。

「赤心少林拳の力を受けてみろ！・・・ハァッ！」
ドカッ！

「喰らえぇぇぇ仮面ライダー！！・・・ぐはっ！？」

スーパー１は赤心少林拳という拳法で次々とショッカー戦闘員を蹴散らすと自分に襲い掛かってきた怪人に強めのキックを叩き込んだ。

「衝撃集中爆弾！」
ドォォォン！

スカル魔達に衝撃集中爆弾を投げつけたＺＸだったが・・・敵の

数はあまり減っているようには感じられない。

「・・・しかしこれほど多くてはなかなかエヴィルの城にたどり着けないな」

さすがにこの数は苦戦すると判断したスカイライダーは小声でそう呟くと・・・後ろにやってきた怪人の1体がいきなり倒れた。

「皆さん！ここは僕達が何とかしますから先にお進みください！」

そこに立っていたのはタイガやパンチホッパーといった1年の仮面戦士科の生徒達だった。

「お前達・・・仮面戦士科の1年は戦闘を控えてくれと教務科から連絡がいかなかったのか？」

「先輩達があんなに頑張ってるんですから自分も頑張らないといけないと思ったんですよ！」

「そうか。ならばここを任せるぞ」

ZXは歴戦の仮面戦士達と共にエヴィルの城に向かおうとすると・・・

「ちょっと待ってください！」

タイガが声を張り上げて仮面戦士達を呼び止めた。

「どうかしたのか？」

「エヴィルの戦いの後・・・ぜひともサインをお願いします」

「あ・・・あぁ、それぐらいなら」

拍子抜けしてしまった様子のＺＸ達はひとまずはそのことを考えから外してエヴィルの城へと走り出した。

・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

バースや７人のレジェンドライダーがエヴィルの城に向かっている頃、俺達はようやく城の真ん中辺りにある広間のような場所までたどり着いていた。

「キンジ、あそこに誰かいるわよ」

「っ？」

ほとんどの怪人が外に出て行っていたおかげで城内の警備がだいぶ手薄になっていたから、ここまで戦わずに上がってこれたが・・・さすがにここら辺までくると誰かいるか。そう思いながら俺はアリアが睨んでいる薄暗くなっている廊下の方に視線を移すと・・・そこには執事服を着た男が歩いてきた。

「お待ちしておりました。仮面ライダー様の方々」

「お前は・・・シャドームーン！」

シャドームーンだって!?たしかエヴィルのシャドームーンと言えば2人の変身するWの最強形態のエクストリームを一瞬で破ってしまった相手だろ。

「確かにシャドームーンでも間違いはありませんが、この場はもう一度名乗らせてもらいましょう。・・・私の名は影月信彦。エヴィル首領・・・いえ、ツカサ様に仕える執事です。本日はよくぞ来てくださいました」

「・・・ちっ！エヴィルの首領は名前まで俺と同じかよ。しかも執事がシャドームーンって明らかに俺に喧嘩売ってるだろ」

俺の左側に立っているディケイドは以前に何かあったのか、シャドームーンを見てイライラしている様子だった。

「・・・キンジ達は先に行っててくれよ。俺達が戦わないといけないっぽいのは・・・思ってた以上に客の俺達にも至れり尽くせりらしいからな」

『ＪＯＫＥＲ』

「ちょっとリベンジ戦を頼んでくるよ」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

正太郎が腰にWのベルトをつけてメモリを起動させると、陽もメモリを取り出して起動した。２人の様子からして手を貸すのは無粋だと思った俺はバッタカンを取り出して正太郎に渡した。

「負けるなよ二人共、いざって時になったらそれでアンクでも呼んでくれ」

「おいおい、そこは俺を呼べってところだろ？」

生憎俺は正義のヒーローなんかじゃないんでな。誰かがピンチのときに必ず駆けつけられる自身がないんだよ。

「・・・まぁいいか。お前らはとっととエヴィルのボスのところに行けよ。いくぞ陽」

「あぁ、今度こそシャドームーンに勝利しよう」

「「変身！」」
『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

正太郎と陽はＷに変身をするとすぐさま影月のところへと走っていった。

「よし、俺達はエヴィルの首領のところに一気に向かうぞ」

俺達はディケイドにそう言われて先へと足を進めようとした途端・・・

「おっと！それはさせんぞ！」

上の階からは仮面戦士の顔のような装飾のついた１０の顔の怪人がやってきた。

「・・・十面鬼か。アマゾンの世界以来だな。・・・俺の前に出て

くるのは」

「ほぅ、別の世界でもこの俺と戦ったことがあるようだなディケイド。しかしこの俺はただの十面鬼ではない！俺の名は十面鬼・ユム・キミル！ライダー狩りの天才であるこの俺に貴様ら程度の仮面ライダーは勝てるのか？」

「上等だ！売られた喧嘩は買ってやるぜ！お前みたいな雑魚今の俺なら5分でぶっ倒して・・・ん？」

何やら天井から瓦礫が落ちてきたので俺達は上に視線を移すと・・・いきなり天井が崩れてしまったので俺とアリアは少し後ろに後退すると、天井に開いた穴からは見たことがある白い仮面戦士がやってきた。

「宇宙キターーーーーーーーーーー！！」

「玄太朗・・・」

銭形玄太朗の変身する白い仮面戦士・・・仮面ライダーフォーゼは両腕を広げながら、そのように叫ぶと右拳を十面鬼に向けた。

「仮面ライダーフォーゼ！タイマン張らせてもらうぜ！」

「・・・下がってろフォーゼ。こいつとタイマンするのは俺だ」

フォーゼを無理やり下げたディケイドは腰についているホルダーを剣に変形させて刃を磨くような動作をして数歩ほど俺達の前に出た。

「何だお前？知らない仮面戦士だな。一緒に戦うからダチになろうぜ！」

「・・・この世界の玄太朗もこうゆう奴なのか。・・・まぁいい。3分で勝負を終わらせたいから足手まといにはなるなよ」

そう言ったディケイドは俺に向かって一枚のカードを手裏剣のように飛ばしてきた。

「っと！・・・おい、これはどういうことだ？」

パシッ

そのカードを受け取った俺はディケイドに再び視線を送ると・・・

「すぐに追いつくから先に行ってろ。・・・もし相手がディケイドみたいなのに変身してお前らがピンチっぽくなったら、そいつのベルトにそのカードをセットしてやれ。きっと隙ができるぜ」

仮面の中で笑っているかのような声で、俺達に先に進むように言ってきた。・・・このカードがどう役に立つかは分からないが一応持っておくことにしよう。

「士！玄太朗！ここは任せるぜ！」

「「おうっ！」」

俺とアリア、そしてアンクはエヴィル首領のいる最上階へと急いだ。

「いきなりだけど速攻で決めるぜ！」

『ＦＩＲＥ・ＯＮ』

消火器のような赤い銃を装備してほぼ全身が赤くなったフォーゼは、すぐにベルトから赤いスイッチを引き抜いて銃にセットした。

『ＬＩＭＩＴＢＲＥＡＫ』

「ライダー爆熱シュゥゥゥウト！！」

ドォォォォォォ！

強力な炎を銃口から放ったフォーゼだったが・・・十面鬼はその攻撃に対して驚いた動作すらしなかった。

「フォーゼ返し！」

ドォォォォォォ！

十面鬼はそう呟きながらフォーゼの放った炎を同じぐらいの炎を放った。

「何っ！？・・・ぐおっ！？」

そして攻撃が跳ね返されてしまったフォーゼはその炎をワザと喰らおうとするが・・・ディケイドはフォーゼを蹴り飛ばしてそれを妨害した。

「おい何すんだよっ！ファイヤーステイツは炎を吸収することができんだぞ！」

「そんなことは知っている。だが、今のはただの炎じゃなくお前自身の炎だ。そんなのを吸収できるはずがないだろ。お前どころかス

イッチが壊れるぞ」
『ＫＵＧＡ　ＡＧＩＴＯ　ＲＹＵＫＩ　ＦＡＩＺ　ＢＬＡＤＥ
ＨＩＢＩＫＩ　ＫＡＢＵＴＯ　ＤＥＮ－Ｏ　ＫＩＶＡ』

何やらＰＳＰにも見えなくもない何かを取り出したディケイドはそれについているマークを次々と押し始まる。

「今から凄く強力な炎を出してやるからしっかりと吸収しろよ」
『ＦＩＮＡＬ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

ディケイドはそのアイテムをベルトにセットして９枚のライダーカードを並べた姿に変わると、響鬼のライダーシンボルのマークをタッチした。

『ＨＩＢＩＫＩ　ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＡＲＭＥＤ』

するとディケイドの隣にはいきなり装甲響鬼が出現した。

「えっ！？何がどうなってるんだ！？」

「いいから黙ってこいつを吸収しろ」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＨＩ・ＨＩ・ＨＩ・ＨＩ・ＨＩＢＩＫＩ』

驚いた様子のフォーゼを気にしないディケイドは腰にセットされた本来のバックルに響鬼のシンボルのついたカードをセットして、隣で自分と同じ動作をしている装甲響鬼と共に刀身に十数メートルは伸びる炎を灯した。

「・・・よっしゃ！覚悟を決めたぜ！来いっ！」

「いくぜフォォォゼエエエ！！」
ゴオォォォォ！！

「おぉ！すっげー炎だ！半端なく燃えるぜ！」

ディケイドと装甲響鬼が振り下ろした刀身の炎を吸収したフォーゼは全身が炎に包まれながらも再び引き金を引く。

「ディケイドライダー音撃爆熱シュゥゥゥウト！！」
ドオォォォォン！

そしてフォーゼの持つ銃からはやたらと長い名前で十面鬼に向けて先ほどの炎とは段違いの炎を放たれた。

「なんの・・・ならばもう一度フォーゼ返しで・・・」

十面鬼はもう一度フォーゼの放った炎と同様の炎をぶつけて跳ね返そうとしてくるが・・・十面鬼の炎はあっさりとフォーゼの炎に打ち消された。

「何っ！？」

「残念だったな十面鬼！俺は別の世界でお前と戦ったことがあるから、お前が１つの仮面ライダーの技しか返せないことくらい知ってるんだよ！幾つかの仮面ライダーの技を組み合わせた技を放てばお前は受け止めきれないだろ！」

「おのれぇぇぇぇぇぇぇディケイドォォォォ！！」
ドオォォォォォォォォォン！

デイケイドとディケイドに召喚された装甲響鬼、そしてフォーゼの技を組み合わせた技を組み合わせた必殺を喰らった十面鬼はそう叫びながら爆発した。

「鳴滝みたいなことを言いながら爆発しやがった。・・・まぁ3分ジャストだから予定通りだな」

「・・・ところで・・・見たことない仮面戦士だけど、何者なんだお前？」

通常の白い姿に戻ったフォーゼは同じく通常の姿に戻ったディケイドに尋ねた。

「俺か？・・・そう言えばこの世界のお前とは初対面だったな。俺は門矢士。又の名を仮面ライダーディケイド。・・・通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

そうフォーゼに告げたディケイドはフォーゼと共に再び最上階を目指した。

とある依頼とレジェンドと爆熱音撃（後書き）

明日から冬休みに入ったので、冬休みの間は可能な限り2日に一回の更新にしたいと思います。

クライマックスライダーズ（前書き）

今回は前半はギャレン達とテラードーパント。中盤からは平成９人ライダー＋２とドラスの戦いとなっています。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

2001

クライマックスライダーズ

ディケイドとフォーゼが十面鬼を撃破した頃、テラードーパントとアクセル達の戦いはさらに激化していた。

「「うおおぉぉぉぉ！！」」

「ギャオォォォォォ！！」

空を自在に飛ぶことのできるギャレン・ジャックフォームとアクセルブースターは空でテラードーパントの分身とも言えるテラードラゴンと戦い・・・・

「「ハァァァッ！！」」

「はっはっはっ！」

地上ではライジングイクサとワイルドカリスがテラードーパント本体と戦っていた。

「ぐおっ！？」

テラードラゴンの尻尾に叩き落とされたギャレンはジャックフォームから通常形態に戻されてしまう。

「はっはっはっ！トドメだ！」

叩き落されたギャレンにテラードーパントはトドメを刺そうと喉に突き立てた右手を振り下ろすと・・・その手が喉に刺さる寸前で

ギャレンは横に転がって回避した。

「はっはっ！さすがは若い仮面戦士だけあって粘るねぇ」

何度も殴られて仮面が半分割れてしまいながらも・・・ギャレンはテラードーパントの腹部にギャレンラウザーを突き立てた。

「この距離なら・・・どんな防御もできないな！」

ドォン！

ゼロ距離でテラードーパントに銃弾を浴びせたギャレンは、すぐさまテラードーパントを蹴り飛ばして壁に背中を寄りかからせた。

「ぐおっ！？」

「後は任せたぞ・・・」

そう言い残して変身を解除した橘先輩は先ほどまで感じていた恐怖が限界をとっくに過ぎていたらしく、そのまま気を失ってしまった。

「橘・・・お前の作ったチャンスは無駄にはしない」

『ＷＩＬＤ』

１３枚のカードを１枚に変えたワイルドカリスは、そのカードをカリスアローにスラッシュしてそれに宿った力を矢のようにしてテラードーパントに放った。

「イクサ・・・爆現！！」

『イ・ク・サ・カ・リ・バー・ラ・イ・ズ・アッ・プ』

そしてワイルドカリスの攻撃に続くかのように刀身にエネルギーを収束したライジングイクサは、ワイルドカリスの矢がテラードーパントに直撃したと同時に駆け出して斬りつけた。

「絶望がお前の・・・ゴオォォォォォルだぁぁぁ！！」

『ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＥＮＧＩＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

アクセルブースターはアクセルとエンジンのマキシマムを発動させて炎に包まれながらテラードラゴンを貫いて倒すと地面に着地した。

「まさかこの私の恐怖に耐え切るとは・・・見事としか言いようがない。だが覚えておけ。人間に恐怖という感情がある限りテラーは滅びん！何度でも蘇るのだぁぁぁ！！」

テラードラゴンが自身にぶつかって爆発したテラードーパントはどうやら人間が変わったものではなかったようで、そこにはメモリブレイクされた人間が倒れてはいなかった。

「メモリを直接怪人にする技術・・・そのようなものが奴らの組織にはあると言うのか？」

壊れたテラーのメモリを手にとって変身を解除した照井はエヴィルの城の方を眺める。

「負けるなよ。・・・みんな」

そう呟いた照井は戦闘のダメージや疲労やらで限界が来た様子で、その場に膝をついてしまう。

「うぅ・・・」
ドサッ

テラードーパントを倒したと言ってもそれまで蓄積された恐怖はすでに耐えられないところまで来てしまった名護先輩は変身解除と同時に震えながらその場に倒れた。

「後は・・・遠山達しだいだな」

変身を解いた藍川先輩は「自分達にこれ以上できることはない」とでも言った様子で倒れている3人を抱えたり引きずったりしながら武偵病院へと足を進めていった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・

照井や先輩達が何とかテラードーパントを倒し終えた頃、剣崎の変身するブレイドや小野寺の変身している別世界のクウガはドラスに苦戦を強いられていた。

「邪魔だよお兄ちゃん」

「うわぁぁぁぁっ！？」

ドラスに投げ飛ばされてしまった小野寺クウガはディエンドの前で頭から落ちてしまう。

「ユウスケ！？・・・きゃっ！？」

白いキバは吹き飛ばされた小野寺クウガに駆け寄ろうとしたが・・・ドラスが殴りかかってきたので咄嗟に受け止めた。

「何をやってるんだい小野寺君？夏メロン・・・仮面ライダーキバーラもあんなに頑張っているんだよ？」

光夏海さんが変身している白いキバ・・・仮面ライダーキバーラはアギトやブレイドの支援を受けながら後ろに後退する。

「し、仕方ないじゃんか！？相手はあのドラスだぞ！」

「はぁ・・・これで少しは役に立ってくれよ」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ・・・』

言い訳している小野寺クウガにため息をついたディエンドは銃のような武器にホルダーから取り出したカードをセットする。

「えっ？・・・海東・・・まさか！？」

「そのまさかだよ・・・痛みは一瞬だ！」

『ＫＵ・ＫＵ・ＫＵ・ＫＵＵＧＡ』

「ぐおっ！？」

ディエンドの放った銃弾に撃たれてしまったクウガは関節とかがどうなってしまっているのか分からないが・・・何故かクワガタのような飛行物体・・・クウガの相棒とも言われているゴウラムと瓜二つの姿に変形してしまった。

『海東！後で覚えてやがれ！』

そう言い残したクウガゴウラムはドラスに突撃していく。

「・・・いったいどうなっているんだ？どうしてあの赤い仮面戦士はあんな姿に？」

同じくディエンドの前に転がってきたブレイドは・・・ゴウラムの姿に変わってしまった小野寺クウガを気になってディエンドにどういうことか聞いてみた。

「まぁ・・・世界を移動する仮面ライダーの力って言ったところかな？・・・そういう訳だから君も変わってくれ」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ・・』

「痛みは一瞬だ！」

『Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ』

ダァァン！

「ヴぇッ！？」

ディエンドに撃たれてしまったブレイドは２メートルはありそうな青い大きな剣へと変形させられた。その光景の一部始終を見ていた周囲の仮面戦士達は「うわぁ・・」と言った感じにドン引きして

いたが・・・ディエンドはそんなことをまるで気にもせずにその剣を握った。

「これならどうかな？」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｂ・Ｂ・Ｂ・ＢＬＡＤＥ』

そしてディエンドはブレイドが変形してしまった剣を思い切り振り下ろして水色に輝く電撃の斬撃をドラスに放ったが・・・・

「今のはちょっと痛かったよ。面白いことをするね」

それほど大きなダメージを与えることはできなかった。

「どうするんだ海東？」

クウガゴウラムから本来のクウガに戻った小野寺はドラスから少し後退しようとするが・・・・

「次はどんなことをしてくれるの？」

「ぐわっ！？」

ドラスは小野寺クウガの首を掴んで持ち上げた。

「危ない！？ハァァァッ！」

ドカッ！

バーニングフォームとなったアギトは炎を宿したパンチをドラスに叩き込むと・・・とうとう日が昇り始めてアギトに太陽の光が当たった。

「フンッ！」

そして太陽の光によってアギトは，光の戦士，とも言われるシャイニングフォームに強化変身してベルトから出てきた武器を双剣にしてドラスを斬りつけた。

「うわっ！？ありがとうございます。助かりました」

何とかドラスから開放された小野寺クウガはアギトにお礼を言うと・・・シャイニングアギトは首を横に振った。

「助かっているのはこっちです。見ず知らずの俺たちにこんなに力を貸してくれているんですから・・・俺たちももっと頑張らないといけませんね」

「シャァ！気合入れてくぜ！」
『ＳＵＲＶＩＶＥ』

「まったくよぉ・・」
『ＡＷＡＫＥＮＩＮＧ』

龍騎は炎に包まれてサバイブに姿を変えると、バイクのような人型のロボットに強化アイテムを届けてもらったファイズもブラスターフォームに姿を変えた。

「カテゴリーキング・・・お前の力・・・使わせてもらうぞ」
『ＡＢＳＯＲＢ　ＱＵＥＥＮ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ　ＫＩＮＧ』

「うおぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

13枚すべてのカードがブレイドの各部に次々と融合していくと・・・ブレイドの姿はまるで重騎士のような金色の装甲の剣士に変わった。

「これが俺の新しい力・・・仮面ライダーブレイド・キングフォームだ!!」

キングブレイドは通常の剣よりも一回り大きい剣を強く握るとドラスに剣先を向ける。

「響鬼・・・装甲!」

アカネタカが届けてくれたアームドセイバーを掴み取った響鬼・紅は真紅の炎に包まれると数々のディスクアニマル達を身体に纏って装甲響鬼に強化変身を遂げた。

「・・・そういえばお前の強化変身は見たことがないな。つーかあんのか?」

ブラスターファイズはカブトの強化変身を見たことがなかったようで本人に尋ねてみると・・・カブトは人差し指で天を示すようなポーズをした。

「俺はすでに未来を掴んでいる。・・・そしてこれからも掴み続ける」

その手には以前コーカサス・・・シャーロックが使っていたハイパーゼクターが収まった。

『ＨＹＰＥＲ　ＣＡＳＴ　ＯＦＦ　ＣＨＡＮＧＥ　ＨＹＰＥＲ　ＢＥＥＴＬＥ』

ハイパーゼクターを左腰につけて、その角を一度下ろすと・・・カブトの装甲はさらに分厚くなった。

「カブト・ハイパーフォーム。・・・これが俺の掴み取った未来だ」

ハイパーカブトは時空の歪みから飛んできた剣を掴み取った途端・・・何処からともなくザビーゼクターとドレイクゼクター、さらにはサソードゼクターまでもがその剣に合体した。

「へっ！いい武器持ってんじゃねぇかよ。俺らも負けてらんねぇよな亮太郎！」

『そうだね！僕達もまだまだ頑張ろう！』

「お前らいくぜ！超てんこ盛りだ！」

『待ってました！』

電王は赤い携帯でどこかに連絡を取ると・・・何処からともなく４つの仮面が電王に向かって飛んできた。

「よっし！来い！」

クライマックスフォームにジークを加えた姿・・・超クライマックスになった電王は剣を肩に担ぐように乗せる。

「こっからが正真正銘のクライマックスだぜイナゴ野郎！」

『たぶんあれはイナゴじゃないよ』

超電王となったモモタロスはドラスのことをイナゴと呼んだが・・・亮太郎は一応否定しておいた。

「・・・相変わらず亮太郎君達は面白い集まりだね」

『渉も王様らしくビシッと決めてやれ！出番だぜタッちゃん！』

『ビュッビュゥ～ン！テンションフォルテッシモ！』

小さい金色の竜が左腕についたかと思うと・・・キバの身体中についている鎖はすべて外れて赤いマントを羽織った黄金の姿に変わった。

「黄金のキバ・・・仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム。これよりヴァンガイアの副王として判決を下します」

ダークキバが使っていた宝剣ザンバットソードをドラスに向けたエンペラーキバは後ろに赤く染まったキバの紋章を浮かべる。

「みんなすごいなぁ。・・・仕方ない、俺もあの姿になるか。ハァアァァァッ！！」

小野寺クウガは紫色に光る電撃を周囲に放ちながら黒い霧を発生させると・・・小野寺クウガの姿はまるでクウガとは思えないゴツゴツした金部分が多めの過去にリクが変身したことがないクウガになった。

「別世界のクウガ・・・小野寺さんでしたよね？そのお姿はいったい？」

過去のクウガのことを知識としては分かっているエンペラーキバは自身の知らないクウガの姿を尋ねる。

「クウガ・ライジングアルティメット。とある世界で操られてから使えるようになった力なんだけどイマイチ制御が難しいからあんまり使うことは少ないんだ。・・・でも今回は相手が相手だからね」

「ライジング・・・アルティメット？つまり別の世界には、究極の闇、をさらに越えた力があるということですか？」

「まぁ・・・そうなるね」

エンペラーキバは「そんな力までクウガに宿っているのか」と呟くと再びドラスに集中する。

「あれ？大樹さんは強化変身をしないんですか？」

キバーラはディエンドに強化変身をしないのか尋ねてみると・・・ディエンドは青いＰＳＰのようなものを取り出しながら首を横に振った。

「僕のケータッチはどうもこの世界では不具合らしくてね。使うのはやめておくよ」

ディエンドはケータッチと呼ばれた機械を眺めると・・・それについているライダーシンボルが点滅していた。

「おそらくはこの世界にこれらのライダーがいるせいだとは思うけど・・・１つの世界に２人も同じライダーを存在させるとどうなる

か分からないからね」

そう言ったディエンドはライジングアルティメットクウガに一度視線を送って1枚のカードを取り出した。

「みんな色々と変わったねぇ！それで僕を楽しませてくれるの？」

「・・・さぁね。君を倒すぐらいには楽しめるんじゃないかな？」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩ・ＤＩＥＮＤ』

ディエンドはらせん状に回転する無数のホログラムのカードを展開すると・・・引き金を引いて水色の光線をドラスへと放った。

「夏メロン！」

「夏海ですっ！・・・ハァッ！」

薄紫の翼を広げたキバーラは、その翼を羽ばたかせてドラス目掛けて突っ込んで剣で貫いた。

「アギトさん！お願いします！」

「ハァァァァッ！！」

剣を引き抜いたキバーラはドラスから離れた途端にシャイニングアギトが2本の剣を何度も斬りつけた。

「信司君！」

「待ってました！」

『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』

契約モンスターのドラグランザーをバイクに変形させて突っ込んでいくサバイブ龍騎はそのままドラスを轢いてしまう。

「・・・やっぱあれってひき逃げだよな」

『ＥＸＣＣＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ』

「・・・喰らえっ！」

ブラスターファイズはファイズブラスターから熱線を放ってドラスを怯ませると・・・キングブレイドは次々とラウザーにカードをセットしていた。

「これでっ！」

『ＲＯＹＡＬ　ＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＦＬＵＳＨ』

剣から響いた機械音と共に5枚のホログラムのカードがキングブレイドの前に出現すると・・・キングブレイドはそれを突き抜けながらドラスに向かって走る。

「どうだっ！」

そしてカードを突き抜けるたびに力を蓄えた剣でキングブレイドはドラスを攻撃した。

「・・・鬼神覚醒！」

声に音撃効果を与えるアームドセイバーの音響部分を開いた装甲響鬼は口元にそれを構えると大きく深呼吸をする。

「ハァァァァァァ・・・・破ッ！！」

声による音撃を斬撃のようにドラスへと放った装甲響鬼はハイパーカブトの方を振り向く。

「天道くん。・・・バトンタッチ！」

「言われなくても分かっている」

『ＭＡＸＩＭＵＭ　ＨＹＰＥＲ　ＣＹＣＬＯＮＥ』

ハイパーカブトは先ほど掴んだ剣を銃のような形態に変形させると・・・その銃身をドラスへと向けながら各部の装甲を展開して光の翼を広げる。

「ハァッ！！」

「うわっ！？」

そして銃口から放たれた竜巻のような攻撃はドラスを超電王の前まで吹き飛ばした。

「俺達の出番か？よっしゃ！いくぜいくぜ！」

『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＵＰ』

自分達の出番だと判断した超電王はベルトにパスをセタッチすると剣にエネルギーを集める。

「俺達の必殺技！スーパークライマックスバージョン！」

超電王はドラスへと駆け抜けると横から大きく振りかぶって一閃

した。

「キバット！タツロット！」
『おっしゃあ！ＷＡＫＥ　ＵＰ！』

ザンバットソードの刀身を赤く輝かせたエンペラーキバは血のように赤い斬撃をドラスに向けて放った。

「トドメはお任せしますよ小野寺さん」

「よしっ！任せてくれ！」
ドカッ！

自身の拳を真っ赤に燃やしているライジングアルティメットクウガは空中に跳び上がると、真っ赤に燃える拳をドラスにぶつける。

「オリャァァッァァァ！！」
ドカァッ！

その攻撃の反動を利用にながら再び空中に跳び上がったライジングアルティメットクウガは今度は右脚を燃やしながら蹴り込んだ。

「はっは・・・全然駄目だと思ってたけど・・・意外と強いんだねお兄ちゃん」

身体中から火花を出しているドラスはライジングアルティメットクウガの方を振り向いてそう告げる。

「そりゃどうも・・・士や海東ほどじゃないけど、これでも俺だっていくつもの世界の怪人を相手にしてるんだよ」

「・・・フッフそうなんだ。楽しかったよお兄ちゃん達。またいつか遊んでね」
ドオォォォォォン！！

最後にそこにいる仮面戦士達にそう告げたドラスは後ろに倒れこむようにして爆発した。

「・・・ふぅ、結構しんどいなキングフォーム」

ブレイドが通常フォームに戻ると・・・他の仮面戦士達も次々と通常フォームへと戻っていく。

「君達も士や遠山キンジ君のところに向かうのだろう？だったらオールライダーの中でこの世界に足りない仮面ライダーも連れていくといい」

「えっ？それはどうゆう？」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＣＫ』

ディエンドが言った言葉に疑問を感じたブレイドがエヴィルの城から視線を逸らして振り向こうとした途端・・・そこには仮面ライダーブラックが立っていた。

「えっ！？光太郎さん！？でもなんでＲＸじゃなくてブラック！？」

「僕は仮面ライダーを召喚することができるんだ。・・・どうゆう訳かこの世界ではすでに存在する仮面ライダーは呼ぶことはできないけど・・・ブラックの発展系がＲＸとなっているこの世界ではブラックはすでにいないからね。このライダーは召喚できたんだよ。・

・・さぁボサッとしてないで進みたまえ!敵は待ってくれないよ!」

「何だかよく分からないが・・・とりあえずありがとう!」

ブレイドがディエンドにお礼を言うと・・・ブラックを追加した仮面戦士達はエヴィルの城の最上階を目指して走り出した。

「よし海東、夏海ちゃん!俺達も・・・・」

「待ちたまえ小野寺君」

ライジングアルティメットクウガが彼らについて行こうとすると・・・変身を解除した海東がそれを止めた。

「どうしたんだ海東?」

「この世界にもクウガはいるのだからこれ以上君がクウガとして干渉してしまうとどうなるか分からない。それにこれは物語なんだから、後は手出しはせずに見守るんだ」

「あぁ・・・分かった・・・。みんな頑張れよ」

海東の言葉の意味を何となく理解した様子の小野寺は変身を解除して城の屋上を見上げた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

橘先輩や照井達がテラードーパントを撃破した頃、五代さんの変身するクウガとエヴィル首領の変身する黒いディケイドの戦いは未だに続いていた。

「オリャァァァァァッ！！」
ドカァッ！

「・・・・・」
ドオォォォン！！

「はぁ・・・はぁ・・・」

黒いディケイドの最後の分身であった黒目のオーズを倒したアルティメットクウガは・・・自身が受けたダメージや疲労のせいでその場に膝をつくと角が短い白いクウガになってしまう。

「さっすが英雄と呼ばれただけはあるなぁ！俺の分身だったオールライダーをたった1人で倒すなんて！・・・まぁ・・・強力すぎる必殺技を使わないために、ただのパンチやキックだけで倒すっていう縛りプレイをしたせいで結構ダメージを受けてグローイングフォームにまでなっちまったがなぁ！」

「はぁ・・・はぁ・・・この姿で俺が必殺技を使っちゃったら・・・城だけじゃなく外で戦っている仮面戦士の人達も巻き込んじゃうからね」

「まぁ俺はそれを分かってて疲労するまで待ってたんだがなぁ！」

黒いディケイドは自身の剣を磨くような動作をしながら白いクウガに向かって歩みよってくる。

「死ねよ・・・英雄」

そしてクウガの目の前まで歩みよった黒いディケイドが、クウガに剣を振り下ろした瞬間・・・・

「変身ッ！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

ギリギリで間に合った俺はオーズに変身してメダジャリバーでその攻撃を受け止めた。

「仮面ライダーオーズ・・・てめぇそんなに破壊されたいか？」

「破壊？ハッ！笑わせんなよ。俺はお前をぶっ倒してエヴィルをぶっ潰すだけだ！」

ドカッ！

黒いディケイドを蹴って後ろに下がらせた俺は剣を逆手に持って距離を取る。

「キンジ！こいつを使え！」

アンクの投げてきたクジャクのコアをキャッチした俺はベルトにそれをセットしてタカジャバに変わろうとすると・・・・

「ショォォォォカァァァ！！」
ドカッ！

「うわっ！？」

ショッカーグリードが横から襲い掛かってきた。

「キンジっ！？」

「ショォォォカァァァ！！」
ドォン！　ドォン！

「アリア、アンク！五代さんを頼む！俺はこいつを・・・」
『タカ！クジャク！バッタ！』

俺はタカジャバに変わってタジャスピナーでショッカーグリードの攻撃を防ごうとするが・・・

「ぐっ！？・・・うわぁぁぁぁぁ！？」

あまりの攻撃力に押し負けてしまい４枚のタトバのコアとクジャクコアの４枚をその場に落として下の海へと落下していった。

「キンジっ！？キンジぃぃぃぃぃぃ！！」

するとタトバの３枚を慌てて拾い上げたアリアは涙目になりながら俺の落ちていった海へと飛び込んでいった。

クライマックスライダーズ（後書き）

次回はWとシャドームーンの戦いがメインです。しかしその前に今年最後のＡＡをクリスマスに更新したいと思います。

2023

黄金のW／声援の風（前書き）

今回は中盤にWの戦いやらエヴィル首領と仮面戦士の戦いなどで今まで以上に長いです。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×2
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

2024

黄金のW／声援の風

俺が海に落ちてしまってすぐの頃、武偵高が最も激戦区となっているため星伽から帰ってきた白雪は理子達と合流して俺の落ちた海へと走っていた。

「待っててキンちゃん。今行くから！」

「き～くんピ～ンチ！・・・って冗談も言いづらいくらいヤバそうなんだよねぇ」

「・・・キンジさん。・・・っ！？」

しかし仮面戦士達が戦って数は減ってはいるものの敵の最前線とも言える場所なので当然のように戦闘員達が白雪達の行く手を阻んだ。

「キンちゃんが危ないって時によくも邪魔を・・・」
チャキッ

「ゆきちゃん。・・・後ろのオーラが黒いよ」

「っ！？・・・誰かがこちらにやってきます」

レキが誰かに気づいた様子で振り向くと・・・そこには数人の仮面戦士科ではない生徒達がいた。

「特捜科2年・・・志羽武瑠（しばたける）。・・・参る」
チャキッ

2025

いきなり白雪達の前にやってきた武瑠は持っている独特の刀で次々と戦闘員達を切り倒した。

「風が鳴き空が怒る・・・椎名陽助(しいなようすけ)！あ・参上～！」

陽助は忍者刀を目にも止まらない速さで振るい次々とショッカー戦闘員を切り伏せた。

「特捜科3年獅子翔(ししかける)！いくぜぇぇ！」

「お～！灼熱の獅子さんひっさ～！」

「そんなことよりも早く遠山君のところに・・・ガァウ！」

理子に話しかけられながらも翔先輩は赤いライオンを思わせる鈎爪のような武器で戦闘員達を殴り飛ばしたり、切り倒したりした。

「君達は遠山キンジ君が落ちてしまった場所まで向かいたいのだろう？だったら乗っていくといい」

「あなたは・・・誰ですか？」

レキは見知らぬ特捜科の武偵生徒に名前を尋ねると・・・その男は車から一度降りてムダに1回転をして決めポーズのようなことをした。

「俺は江住京介(えすみきょうすけ)！特捜科の3年だ！遠慮はいらん。さぁ乗りたまえ！」

「・・・ありがとうございます。白雪さん、理子さん。お2人も早く乗ってください」

サル顔の先輩が運転する赤い車に乗り込んだ白雪達はそのまま俺が落ちてしまった海へと急いだ。

「しかしキリがないよなこの数、さすがにキツイぜ。誰かまだ戦える仮面戦士が戦ってくれれば助かるんだけど・・・・」

陽助がそんな弱音を吐いた瞬間・・・武瑠は後ろから感じた殺気に振り返ってみると・・・そこには金色の仮面戦士が2人立っていた。

「・・・・」
『ＭＩＧＨＴＹ』

グレイブは1枚のカードを武器にスラッシュすると金色の斬撃で陽助達の前にいたショッカー怪人を一掃する。

「・・・・・」
『ＲＩＤＥＲ　ＳＴＩＮＧ』

それに続くようにザビーはザビーゼクターの針を突き刺すようにしてスカル魔を次々と殴り倒した。

「・・・弟の友人に道を作ってくれた礼だ」

「カツミ・・・そろそろお願い」

ザビーがそう言いながら後ろを振り向くと・・・そこにはいつの

間にかエターナルがZのメモリを持ちながら立っていた。

「もういいのか？お前達の弟を助けに行ったりはしないのか？」

「たしかに俺達もエヴィルの行動を探っていたが・・・これはもうあいつ等の戦いだ。俺達が行っていい戦場じゃない」

「そうか。・・・俺はWに借りを返そうと思っていたが・・・参戦は余計みたいだな。また別の機会にしておこう」

『ＺＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

エターナルが腰のマキシマムスロットにメモリをセットすると・・・グレイブやザビーもエターナルと共に消えてしまった。

「・・・なんだったんだ？」

陽助や翔先輩らは彼らが立っていた場所をポカンとしばらく見ていた。

・・・

くれました。そろそろ頂かせてもらいます」

「エヴィル？2シャドームーン・・・いや、ツカサ首領の執事の影月信彦！」

「「さぁ、お前の罪を数えろ！」」

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

半分に分かれたＷはそれぞれのタイミングをずらしての２度のキックを決めに掛かるが・・・・

「残念ながら今更数えられるほどでは収まりませんよ！！」

片手だけで受け止めて投げ飛ばされた。

「ハァァァァッ！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＥＴＡＬ』

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「メタルツイスター！！」」

サイクロンメタルとなったＷは風を纏ったメタルシャウトで竜巻を起こすように回転しながらシャドームーンに攻撃しようとするが・・それはあっさりとシャドーサーベルに受け止められてしまった。

「まだまだぁ！！」

『ＬＵＮＡ　ＭＥＴＡＬ』

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「メタルイリュージョン！」」

さらに追い討ちを掛けるためにルナメタルになったWはメタルシャウトを鞭のように振り回しながら黄色い円盤状のエネルギーを複数生成すると自在に弾き飛ばして様々な方位からシャドームーンに攻撃を与えた。

「くっ！？・・・以前の力ではありませんね」

「俺達だってあれから特訓したんだよっ！」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「メタルブランティング！！」」

さらにヒートメタルに変わったWは再びメタルシャウトにメモリをセットしてシャウトの先端に炎を灯すと、その炎を至近距離でぶつけるかのように振り被って叩き付けた。

「ぐおっ！？」

「お次はこいつだ！」

『ＨＥＡＴ　ＪＯＫＥＲ』

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ』

「「ジョーカーグレネイド！！」」

ヒートジョーカーになって半分に分かれたWはそれぞれの拳にメモリの力を炎のように灯らせて何度も殴りつけた。

「くっ！？・・・ハァッ！！」

「逃がさないよ」

『ＬＵＮＡ　ＪＯＫＥＲ』

マキシマムの連撃から一旦逃れようとしたシャドームーンが後ろに跳び上がった瞬間、Ｗはさらにルナジョーカーに変わって右腕を伸ばしてシャドームーンの足を捕まえた。

「「ハァッ！」」

ドカッ！

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

そしてシャドームーンを思い切り地面に叩きつけたＷはさらにマキシマムスロットにメモリをセットする。

「「ジョーカーストレンジ！！」」

半分に分かれてルナサイドを５つに分身させたＷは、５つのそれぞれのルナサイドの腕を伸ばしてチョップのような攻撃を喰らわせる。

「おらっ！！」

ドカッ！

その攻撃に怯んでいるところにジョーカーサイドが殴りかかると・・・ルナサイドの分身は１つに戻ってルナサイドとジョーカーサイドは再び１つに戻った。

「くっ！？シャドービーム！！」

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

シャドームーンが電撃のような攻撃を放ってきた途端、Ｗはルナトリガーとなり、すぐさまメモリをトリガーマグナムにセットした。

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「トリガーフルバースト！」」

金色や青く輝く無数の弾丸はそれぞれ様々に移動して電撃のような攻撃を相殺すると・・・Ｗはさらに次のメモリを取り出す。

「・・・早撃ち一点狙いだ」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「トリガーエアロバスター！！」」

ダァァン！

「くっ！？」

溜めなしで放たれた風よりも速い弾丸はシャドームーンの電撃を放っている手に直撃し、電撃を中断させる。

「サタンサーベル！！」

「「・・・・・・」」

『ＨＥＡＴ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

切り込んできたシャドームーンの剣を上に跳んで回避したWは空中でヒートトリガーに変わるとトリガーマグナムに再びメモリを入れる。

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「トリガーエクスプロージョン！！」」

そして銃口から強力な熱線を放ってシャドームーンを城の外へ吹き飛ばしたWの元にはエクストリームメモリが飛んできた。

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

「エクストリームで勝負だ」

「おうっ！」

『『ＸＴＥＲＥＭＥ』』

『ＰＲＩＳＭ』

サイクロンジョーカーエクストリームとなったWはプリズムビッカーにプリズムメモリをセットして剣を引き抜いて外へと出ると・・・城の屋上ではシャドーセイバーを2本持ったシャドームーンが立っていた。

「どうやら私はあなた方を見くびっていたようです。ここからは本気で戦わせてもらいます」

「上等だ・・・掛かってきやがれ！」

『ＰＲＩＳＭ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「プリズムブレイク！！」」

黄緑色に輝く斬撃をシャドームーンに向けて飛ばしたＷ・ＣＪＸだったが・・・その斬撃は２本のシャドーセイバーから放たれた真っ赤な十字の斬撃によってあっさりと打ち消されてしまった。

「なっ！？プリズムブレイクが・・・」

「正太郎！今はあの攻撃を防がないと！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＬＵＮＡ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＨＥＡＴ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「ビッカーファイナリュージョン！！」」

プリズムビッカーから放たれる光を拡大した雪の結晶のような魔法陣っぽく収束したＷ・ＣＪＸは、プリズムブレイクを打ち消してさらに迫ってきたサタンサーベルの斬撃を収束された光の盾で受け止めるが・・・・

「くっ！？止めきれない！」

「ぐっ！？」

ガギィィィンッ

勢いを殺しきれずにプリズムビッカーが城の真下へと落下させてしまった。

「しまっ・・・」

「仮面ライダーW・・・これで終わりです」

真っ赤な十字の斬撃を無数に放ったシャドームーンは・・・それを回避するW・CJXに向けて、先ほどまで放っていた電撃よりも一回りも大きい電撃を放ち吹き飛ばした。

「「うわあぁぁぁぁぁぁっ!?」」

吹き飛ばされてしまったW・CJXはそのまま真っ逆様に地上へと落ちていく。

「僕達の力ではここまでが限界だったようだね・・・ん?」

いくら仮面戦士といえども、このまま落ちたら唯では済まない勢いと高さで落ちているW・CJX・・・陽はどこからか聞こえてきた声に気づいた。

「「・・・って・・・・・ダー!」」

「あれは・・・」

正太郎も何かに気づいて振り向いてみると・・・そこにはたくさんの武偵生徒達がそれぞれの学科棟の屋上に上がって声援を送っていた。

「「「仮面ライダー!!」」」

「・・・正太郎。耳には聞こえないけど・・・アキちゃんやジャン

ヌ、中空知さんの声がはっきりと聞こえた気がするよ」

「あぁ・・・俺もだ」

「「「頑張って！仮面ライダー！！」」」

その声援はどういう訳かは分からないが・・・空き地島にある風車を急速に回転させるほどの突風を引き起こした。

「っ！？陽！風が・・・学園中の風が！！」

「あぁ！僕達に・・・力をくれる！」

突風をベルトに受けたW・CJXはクリスタルカラーになっていた部分を黄金に輝かせて、背中に出現した6枚のマフラーをまるで風車を思わせるかのように広げると屋上に向かって飛び上がった。

「なっ！？その姿はいったい・・・いえ、どんな姿となろうと同じことです」

新たな姿になったWを視界に捉えたシャドームーンは少し後退してしまうが・・・すぐに冷静さを戻す。

「ハァァァァッ！！」

シャドームーンは真っ赤な斬撃と同時に電撃を放って、文字通り全力でWへと放つが・・・新たな姿のWはそれらの攻撃をすべて払いのけながらシャドームーンへと飛び上がる。

「「ライダーキィィィィィィク！！」」

ドカッァ！

「ぐわぁぁぁぁぁぁっ！？」

金色のWの両脚キックをまともに喰らったシャドームーンはそのまま何百メートルも空に吹き飛ばされると、その後すくに急降下してきて地面にめり込んだ。

「・・・ツカ・・・サ様・・」

最上階へと手を伸ばすかのような動作を見せたシャドームーンは・・・そう呟いて力尽きてしまい変身が解除されて人間の姿に戻った。

「あいつはただ・・・エヴィルの首領を守りたかっただけなのかもな」

「たとえ誰かを守るためだとしても・・・力の使い方を間違えてしまえばそれは‘悪’になってしまうんだね」

再び城の中に戻ったWは・・・途端に黄金からクリスタルに戻って6枚のマフラーも消えてしまい、通常のＣＪＸに戻るとエクストリームメモリがベルトから外れて変身が解除された。

「・・・どうやら先ほどの形態の反動で力を大量に消費してしまったようだね」

陽は自身の手に着地した力がまるでなさそうなエクストリームメモリを見てそのような判断をした。

「まだこれからって時に仕方ねぇな。やっぱり基本が大事ってこと

か？」

『ＪＯＫＥＲ』

「・・・何事も基本だよ正太郎」

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

正太郎と陽は再び最上階を目指して走り出した。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

Ｗがシャドームーンに連続メモリチェンジをしている頃、アンクと五代さんの変身するクウガは黒いディケイドと向かい合っていた。

「エヴィル首領・・・ツカサとか言ったな！お前の姿はさっきまで一緒に行動してたピンクの仮面戦士にそっくりなように見えるんだが・・・その姿はなんだ？」

「仮面ライダーダークディケイド・・・‘いくつもの世界’に存在する秘密結社の悪意の結晶みたいなもんだ。お前らグリードみたいな欲望の塊だと思っとけ！」

アンクは「なるほどな」と呟くとクジャクのコアメダルを拾い上げてクウガの方を振り向く。

「それにしてもエヴィルの親玉だけじゃなくショッカーグリードも相手にしないといけないとはな。・・・まだ戦えるかリク？」

「うん・・一応はね。だけどもう一度‘究極の闇’に変身して、それを制御するほどの体力は残ってないって感じかな」

何とか立ち上がったクウガは基本となる赤い姿へと変わるが・・・ダークディケイドとショッカーグリードとの2体を相手にする力は残っていない様子だった。

「ならばショッカーグリードは俺達が相手をしよう！」

「えっ？」

クウガとアンクは後ろから聞こえてきた声に振り返ると・・・そこには1号や2号そしてV3といった7人ライダーが立っていた。

「仮面ライダー1号・・・おい、お前らの所で特訓を受けていた矢車はどうした？」

「双君は新たな必殺技を完成させるために最終調整をしている。・・・もう少し遅れるだろう。それはそれとしてディケイドとフォーゼは2人と協力してエヴィル首領の方を頼む。俺達はショッカー首領の遺物でもあるショッカーグリードを倒す！」

「言われなくても分かってる。あんた等はとっととケリをつけろ」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

いつの間にかやってきたディケイドはホルダーを変形させた銃でダークディケイドを狙撃するも・・・大して効いているようには見

えない。

「仕組みは同じディケイドなのに防御が俺よりも高いってなんだよ。本当にこの世界は俺に喧嘩を売ってる奴らばっかだな」

「んなこと気にすんなって！今度は俺がタイマン張らせてもらうぜ！」

『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ』

「ライダーロケットパンチッ！」

フォーゼは右腕にロケットを装備して、その推進力を活かして特攻するも・・・そのパンチはあっさりとダークディケイドに受け止められてしまう。

「えっ！？この距離で掴むなんてマジかよっ！？」

「マジだよ！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

ダークディケイドはベルトにカードをセットしてクロックアップをし始めた途端・・・・

「・・・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「仮面ライダー・・・カブト！」

カブトがダークディケイドの剣をクナイのような武器で受け止めていた。

「ナイス天道！」

そしてそれに続くかのようにして次々とドラスと戦っていた仮面戦士達のメンバーがやってきた。

「ちっ！7人ライダーだけじゃなく平成１０人ライダーの仮面戦士までそろいやがったか。さすがに面倒になりそうだぜ」

「「「彼らだけではないぞ！！」」」

「ん？」

ダークディケイドは何人かの声が聞こえた場所に視線を移すと・・・そこにはスカイライダーやスーパー1、ＺＸにブラックＲＸといった7人ライダー以外のレジェンドライダー達が立っていた。

「まさかレジェンドライダーが全員揃っちまうとはなぁ。しかもどっかのだれかは知らんがブラックを召喚するなんて余計なことをしやがって！」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ　ＧＡＴＡＫＩＲＩＢＡＣＯＭＢＯ』

『『『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ・・・』』』

再びガタキリバコンボに変身したダークディケイドはまたもやそれぞれ追加変身して偽ライダーとなって並び立つ。

「いくら我々と同じ姿になろうとも、心を持たん偽者では我々を倒すことはできん！！」

「本物の仮面ライダーの力を見せてやる！」

「いいぜ！掛かって来いよ！たとえどんなに仮面ライダー共が束になろうと俺には敵わないってことを教えてやるぜ！」

ダークディケイドは剣を突き刺すように構えると・・・自身の周りにいる偽ライダー達は本物の仮面戦士達を取り囲む。

「いくぞ隼人！」

「おう本郷！」

「ショォォォカァァァッ！！」

1号と2号は自分達の目の前にいた偽ライダーを殴り飛ばしてショッカーグリードへと駆け出すと・・・1号はキック、2号はパンチをショッカーグリードに決め込む。

「くっ！？これでは浅いか・・・」

「ショォォォカァァァッ！！」

「「ぐあぁぁぁぁぁぁっ！？」」

ショッカーグリードの放ったエネルギー弾に吹き飛ばされた1号と2号は再び立ち上がると、もう一度ショッカーグリードに駆け出した。すると他のその場にいる仮面戦士達はダークディケイドの分身達が変身した偽ライダー達と戦い始める。

「フンっ！」

ドカッ！

レジェンドライダーではないメンバーの中で真っ先に駆け出したアギトは偽者のアギトと互いの拳をぶつけ合った。

「なぁ・・・つまり本郷さん達が怪人を相手にしてくれるってんなら俺達は偽者達を倒せってことだよな？」

『ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ』

「さっきから本郷さん達はそう言っているだろ。きちんと理解をしろよ馬鹿・・・ハァァァッ！」

手首をスナップさせてファイズはイマイチ理解をしていなかった様子の龍騎を馬鹿呼ばわりすると偽者のファイズに殴りかかる。それに続くようにして龍騎も自分の偽者にドラグセイバーを振り下ろした。

「ウェェェェェイ！！」

『ＳＬＡＳＨ』

ガギィィン

ブレイドはラウザーの切れ味を上げてダークディケイドが変身している偽者に斬り込むが・・・あっさりと剣を受け止められてしまった。

「・・・おばあちゃんが言った。時折は鏡の前で自分と見詰め合い、今の自分を確かめなければならない・・・と。今の俺がどれほど実力か試させてもらうぞ！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「・・・・・・」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＫＡ・ＢＵＴＯ』

カブトは偽者のカブトと互いの周り蹴りをぶつけ合う。

「天道くん。・・・たぶんおばあさんは今の状況とは違う意味で言ったんだと思うよ。それ以前に鏡じゃないし・・・波っ！」

ドカッ！

響鬼・紅はカブトの言葉になんとなくツッコミを入れながらも偽・響鬼を2本の音撃棒で叩く。

「いくぜ！いくぜ！いくぜぇぇぇっ！」

パシッ！

電王はヤンキーのように剣を振り回しながら偽・電王に突撃するも・・・その剣は片手だけで受け止められてしまった。

「・・・偽者とはいえカッコイイ止めかたじゃねぇか。さすが俺」

『モモタロスってこんな止め方できないよね？』

「うるせぇ！くっそ～！せっかく俺がここのボスをカッコよくぶっ倒してヒーローになりたかったのによぉ！」

『だったら早く偽者を倒して挑めばいいんじゃないかな？』

「んなことわかってんだよ！あ～～！俺の偽者が邪魔だぁぁ！！まだまだクライマックスでいくから覚悟しとけよこん畜生！！」

電王はそう叫びながら何度も偽者に剣を振りまくった。

「キバと戦うことになっちゃったけど・・・どうしたらいいのキバット？」

『んなの大丈夫だって！こういう特訓で自分との戦いっていうシチュエーションによって新しい力が目覚めて主人公ってのは強くなるもんなんだからよぉ！』

「・・・それはマンガの中での話でしょ？第一これは特訓なんかじゃないし。とりあえず頑張ってみるよ・・・明日もあかりさんと会うためにもね」

偽キバに飛び掛ったキバはかかと落としでパンチを弾くと、すぐにパンチをしてきた腕を掴んで背負い投げをした。

「おぉと！どうやら舞台は整っているらしいぜ」

「僕達もいくよ正太郎」

「「ハァァッ！」」

ようやく最上階に辿り着いたWは偽者のWに風を纏った回し蹴りを繰り出した。

「もう一回言うけど・・・宇宙キターーーーーーーーーーー！！俺の偽者！お前とはしっかりとタイマン張らせてもらうぜ！」

「う、宇宙キター・・・」

「って!?マネすんなよっ!?しかもテンション低いしっ!」

気分的に宇宙を叫んだフォーゼは偽者のフォーゼにタイマンを希望すると・・・偽者のフォーゼはやる気のなさそうに両腕を上げて囁いた。

「オリャァァァァッ!」

ドオォォォォン!

自分の偽者を倒したクウガは再びダークディケイドと向かい立つと・・・その横にはメダジャリバーを持ったアンクが並び立った。

「リク・・・お前とこうして肩を並べんのは久しぶりだな」

「だから俺は五代祐輔だって・・・それにリクとしての時だって肩を並べて戦ったのなんてグリード達と当時のアークやダークキバから城を守ったときの2回だけだろ?」

クウガがアンクの方を向きながらそう告げると・・・アンクは「フッ」と笑いながらジャリバーをダークディケイドへと向ける。

「あぁ・・・そうだったな。リク・・・まだ戦えるよな?」

「みんなの笑顔を守りきるためにも・・・俺はまだ倒れないよ」

「おいおい・・・俺も忘れて貰っちゃ困るぜ!」

ズバッァ!

偽者のアクセルとデルタを切り倒したディケイドはアンクとは反対側のクウガの横に並び立つ。

「俺はあのヤロウをぶん殴んないと気が済まないんだよ！いくぞアンク！それと、この世界のクウガ！」

「へっ！なら破壊者同士、破壊し合おうじゃんか！」

アンクとクウガ・・・そしてディケイドはダークディケイドへと立ち向かっていった。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

Wがシャドームーンを倒した頃、海に落ちてずぶ濡れの俺は海岸で横たわりながら同じくずぶ濡れのアリアに呼びかけられていた。あの時の攻撃で気を失ってしまったから、海に沈んだかと覆っていたが・・・どうやらアリアが引き上げてくれたらしい。

「キンジ！キンジ！しっかりして！」

「・・・あぁ大丈夫だよアリア」

すると意識を取り戻した俺は自身の身体・・・というよりも血流に違和感を感じた。

「・・・・？」

どうして俺はヒステリアモードになっているんだ？・・・アゴニザンテのヒステリアでもなければベルセでもないし・・・だけど通常版のヒステリア・ノマ―レになる条件である性的興奮に繋がるようなことはしていないはずだぞ。

「本当に良かった。・・・あの時落ちたときはもう駄目かと思ったよ」

「心配をかけちゃったね。ごめんよ」

しかしどうしてだか分からんが・・・何だか唇にさっきまで何かが当たっていたような感触が残っている気がするんだよな。もしかしてアリアが人工呼きゅ・・・いや、アリアが自分からそうゆうことをするなんてありえないな。どうやらアリアも相当俺を心配してくれてたみたいで涙目になりながら顔を物凄い赤面させている。そんなに心配してくれたのか。

「キンジ・・・これ・・」
チャリィン

アリアはタカとトラとバッタ・・・3枚のコアメダルを俺に渡してくる。これで一応は紫を使わずにオーズに変身できるな。

「ありがとうアリア・・・これは俺からのお礼だ」

メダルを受け取ったヒステリアの俺はアリアの右手をやさしく握ると・・・その手の甲にキスをする。こんな恥ずかしいことをしてくれるからヒスるのは嫌なんだが・・・今回はさすがにヒステリアの力が必要不可欠っぽいな。

「王子様はお城に住んでいる魔物を倒してくるから・・・お姫様は王子様の帰還を信じて待っていてくれ」

ヒスってる俺はそんなメルヘンチックな言い回しでアリアに「ここで待っていてくれ」と伝えると・・・最初はあんなにも一緒に着いていこうとしていたアリアは頷いてくれた。

「あたしの武偵パートナーとしてじゃなく・・・1人の仮面ライダーとして戦いたいって訳ね。いいわ、それじゃあ行ってきなさい！その代わり、絶対に戻ってこないと風穴なんだからね！」

約束は守るさ・・・ヒステリアモードの俺は女との約束を破ることはできなくなるんだからな。

「無事だったんだねキンちゃん！」

「きーくん相変わらず見かけ以上にタフだね～！」

「ご無事で何よりです」

ベルトにメダルをセットしていると・・・サル顔の京介先輩が運転する車から降りてきた白雪達がこちらにやってきた。・・・どうやら俺が海に落ちるのを見ていた様子だな。

「・・・きーくんもしかして・・・」

「・・・・・」

理子とレキは俺がヒスってることに気づいたような反応を見せる

と顔が真っ赤のアリアに視線を移す。すると顔を真っ赤にしているアリアを見て何かを悟った様子の白雪は般若のような形相になった。

・・・何だか怪人とかよりも怖いからそろそろ行こう。

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

オーズに変身した俺はバッタレッグのジャンプ力を最大限まで発動して何度か城の壁を蹴りながら一気に先ほど落とされた最上階まで上っていった。

「もう一度言うけど負けたら風穴だからね！」

「頑張ってねキンちゃん！」

「いっけ～～！きーくん！！」

「・・・キンジさんご武運を」

アリア達の声援を受けながら・・・俺は今度こそ首領を倒すために最上階へと急いだ。

黄金のW／声援の風（後書き）

今回は仮面戦士達の活躍に隠れてしまっていた特捜科が数人登場しました。たぶん何人かの名前には心当たりがあるかと思います。

※特捜科のメンバーはあくまで仮面戦士の支援組なので変身したりはしません。

今回は平成ライダーメインでしたが、次回の前半は昭和ライダーメインとなります。

超戦士魂（前書き）

今回はいよいよあのコンボが登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

超戦士魂

俺がヒステリアモードでオーズに変身して最上階へと目指して跳んでいる頃、1号と2号のダブルライダーはショッカーグリードに苦戦をしていた。

「ショォォォォカァァァァッ！！」
ドォン！

「「ぐおぉぉぉぉっ！？」」

ショッカーグリードの放ったエネルギー弾に吹き飛ばされてしまったダブルライダーはオールライダー達が戦う場所とは別の部屋まで転がってしまう。

「大丈夫か隼人？」

「あぁ・・・だがあれほどの怪人では俺達のライダーキックが通用するかどうか・・・」

ショッカーグリードの戦闘力がこれまで戦ったエヴィル怪人以上と悟った2号は1号に対抗策を聞くと・・・1号は右の拳を強く握り握りながら立ち上がった。

「力が足りないならば俺達のライダーパワーを全開にしたキックを叩き込むだけだ。いけるな隼人！」

「当然だ！」

そして1号に釣られるように立ち上がった2号はショッカーグリードを掴んで階段から飛び降りた。

「あの場では少し狭いんでな！場所を変えさせてもらうぞ！」

「ライダーきりもみシュート！！」

ドカッ！

ショッカーグリードをさっきまでディケイド達が十面鬼と戦っていた場所まで突き落とすと・・・1号が地面に叩きつけられたショッカーグリードに追い討ちを掛けるかのようにきりもみシュートを決めてやった。

「ショッカァッァァァ！！」

「「くっ！？」」

強烈な光を放ったショッカーグリードから一旦離れたダブルライダーは、次々と放たれるエネルギー弾や火球を回避しながらも少しずつ近づいていく。

「仮面ライダーはどんなに強い悪にも屈しない！！」

ドカァッ！

「この世の悪はすべて俺達が打ち砕く！！」

ドカァッ！

ダブルライダーはライダーチョップやライダーパンチといった必殺技でショッカーグリードの技を相殺しながらも少しずつショッカーグリードとの距離を縮めていく。

「おのれ！？・・・ショ、ショッカァァァァ！！」

どんなに攻撃を喰らっても諦める様子を見せないダブルライダーの気迫に押され始めたショッカーグリードは少し焦ったような反応を見せながら空中に飛び上がった。

「行くぞ隼人！ライダーパワー全開だ！！」

「おうっ！！」

ダブルライダーは空中に跳び上がるとそのまま飛んでいるショッカーグリードに脚を向ける。

「「ダブルライダァァァキィィィック！！」」

1号と2号のダブルキックはショッカーグリードの攻撃を喰らっても怯まずに・・・そのままショッカーグリード目掛けて突き進む。

「「ウオォォォォォ！！」」

ドカァッ！

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

そしてダブルライダーのキックを喰らったショッカーグリードは天井に叩きつけられてから足元へと落下すると・・・・

「ショオォォォォォカァァァァッ！？」

ドオォォォォォン！！

最後にそう叫んで爆発して辺りに無数のメダルが散らばった。

「やったな本郷！」

「あぁ・・・ん？」

1号が何かに気づいて爆煙に視線を向けると・・・そこには空間の切れ目のようなものが発生していて、そこにオレンジのコアメダルが3枚吸い込まれていってしまった。

「本郷・・・今のはいったい？」

「分からない・・・おそらくはショッカーグリードがオーズのメダルを大量に吸収した力が俺達のライダーキックとぶつかり合ったことにより発生した次元の裂け目だとは思うが・・・」

1号はその場に散らばるコアメダルを拾い上げようとすると・・・

「こいつはもらっていくで！」

中央に置かれていた水晶玉からアックスが飛び出てきてメダルを何枚か拾い上げた。

「くっ！？新手か。ライダーチョォォップ！！」

メダルをそれ以上奪われないように1号はアックスにチョップをしようとするも・・・そのチョップはアックスがベンタラに逃げ込んでしまったことにより当たらなかった。

「コアメダルはマッキーやカザリンが色々とやるために必要なんや。

あんた等やオーズなんかには渡さへんで」

そう言い残したアックスは1号と2号が見ている水晶に映らなくなってしまった。

「マッキー・・・ドクター真木のことか。どうやらエヴィルを抜け出た後も何かをしでかすつもりのようだな」

「おっと!それよりも残ったメダルをオーズに届けないとな」

1号が真木博士の計画を怪しがる中・・・2号は4枚の赤いコアメダルとショッカーコアを拾い上げる。

「なぁ本郷・・・もしかしてこのショッカーのメダルもオーズが使うことができるんじゃないか?」

2号は拾い上げたショッカーコアを1号に手渡すと・・・1号は何かに気づいたかのように足を進める。

「そういえば報告によるとオーズ・・・キンジ君はモモタロスをメダルに変えて仕様したことがあるとも聞いたことがあるな。・・・グリードのメダルとイマジンのメダル・・・そしてショッカーのメダル。もしかしたらこの3つの力を1つにすることができるのかもしれないな」

ダブルライダーは再び最上階へと目指して走り出した。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

ダブルライダーがショッカーグリードを倒した頃、他の仮面戦士達は自身の分身達と対峙していた。

「本物のＶ３の力と技を見せてやる！トォゥ！」

跳び上がったＶ３は右腕にエネルギーを込めながら一気に振り下ろす。

「Ｖ３電熱チョップ！！」

Ｖ３電熱チョップを喰らった偽Ｖ３は後ろに吹き飛ばされたが体勢を立て直そうとすると・・・Ｖ３はもう一度跳び上がっていた。

「Ｖ３フル回転キックッ！！」
ドカァッ！

空中で前方に３回転をして勢いをつけたＶ３は両脚で偽・Ｖ３にキックを叩き込むと・・・偽・Ｖ３は無言で爆発して消えていった。

「・・・分身は倒すと消える仕組みなのか。ロープアーム！！」

その戦闘の一部始終を見て自身の偽者をロープアームで引き付けたライダーマンはそれを地面に叩きつけたと同時にアームをドリル

アームに切り替える。

「喰らえっ！！」

ドオォォォォン！！

「次はお前だな！」

ドリルアームで自身の偽者を倒したライダーマンは次に偽者のバースへと戦いを挑んだ。

「ライドル！」

ブンッ！

？ライダーはライドルを巧みに降り回しながら偽・Ｘライダーが使ってるディケイドと同じような武器を弾き飛ばす。

「？キック！！」

ドカァッ！

空中でライドルを使って大車輪を行って加速をつけた？ライダーは？の体勢を取ってエネルギーを集束すると、そのまま偽・？ライダーに蹴りこんで偽者を撃破した。すると？ライダーのところには偽者のＧ３－Ｘがやってきた。

「来るなら来いっ！」

自身の偽者を撃破した？ライダーは次に偽・Ｇ３－Ｘと戦いを始めた。

「アァァァマァァァァゾォォォォン！！」

アマゾンは野獣が獲物に襲い掛かるかのように偽者に襲い掛かると・・・噛み付き技のジャガーショックで噛み付きに掛かる。

「くっ!?」

偽・アマゾンは腰についてるホルダーを剣に変形させて本物に斬りかかる。

「本物のアマゾン、そんな戦いしない。キキィィィ!!」

攻撃を回避したアマゾンは大きく跳び上がると、かわら割りでもするかのように大きく腕を振り上げる。

「大切断ッ!!」
ドオォォォォォン!!

大切断によって真っ二つにされた偽・アマゾンが爆発した途端・・・アマゾンに向かって偽者のギルスが走ってきた。

「お前達、心無いニセモノ。本物の俺タチには勝てない。キキィィィ!!」

アマゾンは次に偽者のギルスとの戦いを始めると・・・ストロンガーは自身の偽者と同時に偽者のコーカサスと対峙していた。

「おっと!そんな程度じゃ俺に攻撃を当てることはできないぜ!」

偽者のコーカサスの攻撃を軽く流したストロンガーは両腕を擦り合わせて右腕に電気を溜め込むと・・・それを地面に押し付ける。

「エレクトロファイヤー！！」

すると導電体を通して伝わっていった電気は偽・コーカサスに直撃した。

「次はお前だ！ストロンガー電キック！！」

ドカァッ！

偽・コーカサスを倒したストロンガーは同じくエレクトロファイヤーを放とうとしていた偽。ストロンガーに対して必殺のストロンガー電キックを繰り出して撃破した。

「セイリングジャンプ！」

滑空しながら偽・スカイライダーを攻撃するスカイライダーは一度地面に着地すると、再び跳び上がる。

「スカイキィィィクッ！！」

スカイライダーは空中前方宙返りからキックを叩き込むと・・・偽者のスカイライダーは爆発した。

「スーパーライダー月面宙返りキック！！」

ドカッァ！

空中で一定の型を決めて、その後大の字になって、前方月面宙返りをしてからキックを叩き込んで撃破した。

「さぁ掛かって来い！赤心少林拳の力を見せてやる！」

自身の偽者を撃破したスーパー1は偽者のケタロスとの戦いを始めた。

「衝撃集中爆弾！」
ドォォン！

「十字手裏剣！」

衝撃集中爆弾で偽者を怯ませたZXはさらに十字手裏剣で偽者を怯ませる。

「ZXイナズマキィィィクッ！！」
ドカッ！

そして十字手裏剣を中断したZXは、ZXのポーズから赤い雷と共に破壊力の増したキックを決めた。

「たとえ別世界だろうと・・・悪事をするものは俺が許さん！！キングストーンフラッシュ！！」

ディエンドに召喚されたとはいえ心の芯は光太郎さんと同じブラックは偽者のブラックに向けてそう叫ぶとキングストーンフラッシュで偽者を吹き飛ばす。

「ライダーパンチッ！」
ドカッ

「ライダーキックッ！！」
ドカッ

「ぐあぁぁぁぁっ！？」
ドオォォォン！！

そしてさらにライダーパンチからのライダーキックを喰らわされた偽者のブラックはそのまま爆発した。

「仮面ライダーの力を悪事のために使うなど・・・この俺が許さん！！リボルケイン！！」

ブラックＲＸはリボルケインを手に取ると偽ブラックＲＸへと突き刺そうとすると・・・偽者はベルトがダークディケイドのものなので、ダークディケイドのホルダーを剣に変形させると、その剣でリボルケインを受け止めた。

「何っ！？」

「見くびるなよＲＸ。たとえ偽者と言っても一体一体がこの俺の分身なんだ。初撃で倒せるほど弱いはずがないだろ」

「なるほど・・・さすがは首領だけあって一筋縄ではいかないようだな」

後ろに下がって距離を取ったブラックＲＸはもう一度偽ブラックＲＸに立ち向かっていっく。

「性懲りもなく・・・オラ来てみろよ！」

偽ＲＸはブラックＲＸの腹部を突き刺したかと思うと・・・
「・・・残念だったな」

剣が刺さった部分だけがゲル化をしていた。そしてＲＸの全身がバイオライダーになって全身をゲル化させると・・・そのまま偽者の後ろに回りこんだ。

「いくら他の仮面ライダーに変身できるとはいえ・・・すぐさま姿を変えることはできない。それがお前の弱点だ！ＲＸキック！」

ドカッ！

後ろに回りこんだバイオライダーはゲル化状態からブラックＲＸに戻るとキングストーンの力を溜め込んだＲＸキックで偽者を蹴り飛ばす。

「トドメだ！リボルケイン！！」

「ぐおぉぉおっ！？」

ドオォォォォン！

そして蹴り飛ばした偽者にリボルケインを突き刺すと・・・偽者はそのまま爆発した。

「ガァァァァッ！！」

ベルトが付いていて明らかに偽者と分かりやすい自分の偽者を掴み上げたシンはそのまま偽者の頭をがっちりと掴む。

「ガァァァァ！！」

そしてシンは偽者とはいえ自分と同じ姿の相手の脊髄を引っこ抜いた。

「ちょっ！？・・・幾らなんでもそりゃないだろ」

するとダークディケイドと剣をぶつけ合うディケイドは世界を旅するとは言ってもシンの技が脊髄抜きだったことを知らなかったようで・・・そのグロイ光景を見てだいぶ引いてしまっていた。

「ライダーパンチッ！」
ドカッ！

「ライダーキック！！」
ドカッ！

偽者を殴り飛ばしたＺＯは同じく偽者を蹴り飛ばしたＪと背中を合わせる。

「まだまだいけるよなＪ」

「あぁ！先輩達や武偵高の生徒達にも負けてられないからな！」

「「ハァァッ！！」」
ドカッ！

そして同時にそれぞれ反対方向に走り出したＺＯとＪはそれぞれ自分達の前にいる偽・１号や２号を殴り倒した。

「俺達も続くぞ！」
『ＬＩＧＨＴＮＩＮＧＢＬＡＳＴ』
ドオォォォン！！

「しゃぁ！」
『ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ』
ドオォォォォォン！！

ブレイドや龍騎などの仮面戦士科のそれぞれも次々と偽ライダー達を倒し始めた。

・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・・

俺がようやく最上階に到着すると・・・目のまえの状況はさっきショッカーグリードに落とされた時とはだいぶ変わっていた。

「ライダーロケットドリルキィィィク！！」

「灼熱真紅の型！！」

目の前にはフォーゼや響鬼・紅・・・仮面戦士達が黒いディケイドと同じベルトをした仮面戦士と戦っている光景が広がっていた。

「アンク・・・これはどういう状況なんだ？」

「お前こそどうしてヒステリアになってやがる。・・・まぁいい。簡単に言うと黒いディケイド・・・ダークディケイドが大量に分身して、その姿を仮面戦士達に似せてきたって訳だ」

なるほどな。だからそれぞれ自分との戦いっぽくなっている訳か。

「遠山！後ろだ！」

ブレイドは後ろから襲い掛かってくる相手のことを俺に知らせてくるが・・・ヒステリアの俺にはすでに分かっていた。

「・・・・・」

ドカッ！

後ろを振り向かずに偽者のオーズのトラクローを左手で軽く弾いた俺はそのまま回し蹴りで偽者を蹴り飛ばす。

「偽者に用はない。下がっていてくれ」

『スキャニングチャージ！』

「せいやぁぁぁぁっ！！」

ドオォォォォン！

タトバキックで偽・オーズを撃破した俺はそのままダークディケイドへと足を進める。

「なっ！？遠山ってあんなに強かったのか！？」

ブレイドは今までとは全然違うオーズの強さに驚いていた。・・・そういえばヒステリアモードの状態を剣崎に見せたことはなかったな。・・・まぁ見せる気なんてまったくなかったけど。

「キンジ！復活したんならコイツを使えっ！」

「・・・・・」

『シングル・スキャニングチャージ！』

「ハァァァァッ！！」

ドオォォォォン！！

アンクから受け取ったジャリバーにセルメダルを1枚入れてスキャンした俺は襲いかかってきた偽者のグレイブとドレイクをすれ違い様に切り伏せる。

「なぁ陽・・・。キンジがヒステリアになってたとしてもよぉ・・・あのヒステリアの強さは前にブラドと戦ったときのレベルじゃないぜ？」

Wに変身するようになってからは陽に負担が掛かるとのことでヒステリアからの変身を控えるようになった正太郎は、俺のヒステリアの戦いを見て違和感を感じていた。

「ヒステリアに関しては正太郎の方が詳しいとは思うんだけど・・・ヒステリアモードはたしか今までのことを一瞬で思い出せたりするんだろ？だとすると今までの戦闘経験をすべて思い出して戦い方を考えて・・・ヒステリアで足りない分をオーズのスペックで補っているとしたら、あの戦闘力にも合点がいくよ」

「そしておそらくはグリードやヤミー。それにエヴィルの幹部とか怪人達をヒステリアにならない状態で相手にしている内に、ヒステリアにならなくてもそれなりに実力がついてきて・・・ヒスったらその力を全力で引き出してるってところだろうな。・・・ん？」

陽の考えに追加をするようにアンクが自分の考えを述べると・・・アンクの隣には1号がやってくる。

「お前ら・・・ショッカーグリードは倒したのか？」

「あぁ。何枚かは横取りされてしまったが・・・これは戦利品だ」

チャリィィン

アンクに４枚の赤いコアメダルを渡した１号はさらにもう１枚のメダルを取り出す。

「キンジ君！・・・いや、仮面ライダーオーズ！これを受け取れ！」

チャリィン！

「おらっ！！」

「・・・使わせてもらうぞ」

メダルを掴もうとするのを妨害しようとしてきたダークディケイドに・・・俺はディケイドから受け取ったとあるカードを手裏剣のように投げつけて強制的にカードをセットさせる。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＯＲＥＳＡＮＮＪＯＵ』

「俺、参上！・・・って何だよこれ！！」

ダークディケイドが電王の姿に変わり残念な名乗りをしてくれている隙に・・・俺は１号の投げつけてきたメダルをキャッチする。

「っ！・・・これは・・」

そのメダルが何なのかを見てみると・・・それはショッカーのマ

ークが刻まれているコアメダルのショッカーコアだった。ってことはダブルライダーがショッカーグリードを倒してくれたのか。

「そのショッカーコアメダルとモモタロスの変化したメダルというのを使ってみるんだ！」

ショッカーコアと・・・モモタロスのメダルを？

「どうなるかは分からないけど・・・とりあえずやってみます」

ベルトを横にした俺はトラとバッタのコアメダルを抜き取るとバッタコアが入っていた場所にショッカーコアをセットする。

「来い！モモタロス！」

「おっしゃ！クライマックスな見せ場が来たぜ！」

電王から離れて俺に取り憑いたモモタロスは瞬時にメダルへと変わってベルトに収まると・・・俺はオースキャナーを手に取ってベルトを一気にスキャンした。

『タカ！イマジン！ショッカー！タマーシー！タマシー！タマッシー！ライダァァァッ！魂（タマシー）い！！』

「「おぉ！」」

スキャナーから聞こえる音声と共にトラアームだった部分はモモタロスの変化したメダルの力が宿っているイマジンアームに変わり、バッタレッグだった部分は金色のコンドルレッグのようになっているショッカーレッグへと変わった。

「・・・イマジンってのはどういう体の仕組みをしてんだ？」

モモタロスがメダルになったのを初めて見たアンクは少し呆れ気味にそう呟いていた。そんなこと当事者である俺が1番知りたいっての。

「オーズ・タマシーコンボ・・・なんてのはどうだキンジ？」

新たなオーズの姿を見たW・・・正確に言うと正太郎は新たなオーズの姿に名称をつける。・・・タマシーコンボか。悪くない名前だな。

「ライダー魂か。たしかに仮面ライダーの原点を宿しているような姿だな」

俺の後ろに立っている1号はかつてのことを思い出すかのような口調でそう呟く。・・・最近は装備型が普及していて忘れ去られがちだが元々仮面ライダーってのは改造人間。言い方を少し悪くすると怪人だった。そしてこのタマシーコンボもタカのコアはグリードの力。モモタロスが変化しているメダルもイマジンの力。そしてショッカーコアもショッカーという悪の力だ。・・・おそらく1号・・・本郷さんは自分が改造人間としてショッカーに改造されてしまったことを思い出したんだろうな。

「遠山！お前が決めろ！今のお前ならきっと勝てる！」

「遠山君！頑張って！」

ブレイドや響鬼・紅・・・仮面戦士科の奴らは俺がトドメを決め

ろと押し進める。

「行け！仮面ライダーオーズ！」

「俺達のライダーパワーを受け取れ！」

後ろに立っているレジェンドライダーの皆さんは俺にありったけのライダーパワーを分けてくれる。

「ここまでやられたら・・・俺が決めないわけにはいかないよな。五代さん・・・後は俺が決めますんで下がっていてください」

『スキャニングチャージ！！』

「・・・任せたよキンジ君」

俺がベルトを再スキャンしながら前に出ると・・・クウガは俺を信じるように頷いて後ろに下がる。

「タマシーコンボか。・・・その姿を見たのはショッカーの支配する世界以来だな。まさかお前もなれるとは思ってなかったぜ」

どうやら別世界でこのコンボを見たことがある様子のディケイドは久々に興味深いものを見たような口調でそう呟きながら後ろに下がる。

「「「仮面ライダー！！」」」

「「「頑張って！仮面ライダーオーズ！」」」

「っ！・・・いくぜ！」

そして外から聞こえる声援にアリア達の声を聞こえた感じがした
俺は両手でエネルギー弾を作るかのように構えると・・・そこには
イマジンの砂のようなものと共に全てを焼き尽くすかのように燃え
盛る炎が集まっていく。

「上等だ！かかって来いよ仮面ライダーオーズ！」

いつの間にかもとの姿に戻っていたダークディケイドに向けて視
線を移すと・・・しっかりと狙いを定めた。

「ハァァァッ！セイヤァァァァッ！！」
ドォォォォォン！

最初にイマジンメダルの桃のようなシンボルを描いたエネルギー
弾を放った俺は、さらにタカとショッカーのシンボルを描いたエネ
ルギー弾を飛ばす。

「くっ！？たしかに中々の威力だが・・・この程度じゃ俺には敵わ
ないぜ」
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ・ＤＡ
ＲＫＤＥＣＡＤＥ』

しかしダークディケイドはタマシーコンボのエネルギー弾を銃か
ら放っている光線で相殺していた。

「くっ！？このままじゃあ・・・」

このままじゃ押し負けてしまう。

「俺達のライダーパワーも受け取れ遠山！」

「みんなの声援から受け取ったライダーパワーだ！受け取れキンジ！」

ブレイドやW・・・この場にいる仮面戦士科のみんなが俺に力を分けてくれる。

「遅れて済まない遠山！」

カッターウイングで飛んできた後藤・・・バースも不安定ながらもライダーパワーを分けてくれる。

「オーズ！！俺達のライダースピリッツで・・・エヴィル首領を！」

レジェンドライダー達もさらにライダーパワーを俺に分けてくれるなか・・・クウガとディケイドはポツンと立っていた。

「ねぇ・・・ピンクの仮面ライダー。俺みたいな一度は道を間違えかけたのでもさぁ、仮面ライダーを名乗っていいのかな？正義の味方でいていいのかな？ずっと昔から・・・ぞれが気がかりだったんだ」

「さぁな。だがどんなに強い奴でも・・・誰かが付いていなくきゃ簡単に間違った道へといってしまう。・・・俺もそうだったようにな。仮面ライダーっての人を守るために戦って・・・だけど時には人に守られたりもする。仮面ライダーってのはそういう助け合いでなりたってんなんだよ。それとついでに言っておくが俺のこの色はマゼンタだ。断じてピンクなんかじゃない」

そうクウガに言ったディケイドはホルダーから飛び出てきた1枚のカードを掴み取る。

「・・・新しいカードか?まぁいい、使ってみるか」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＳＣＡＲＬＥＴＡＭＭＯ』

ドォン!

そのカードをベルトにセットしたディケイドはホルダーを銃へと変形させると緋色に輝く弾丸をダークディケイドの光線へと放った。するとその弾丸は俺の放ったエネルギー弾と混ざり合って真紅のエネルギー弾になって少しずつダークディケイドの光線を押し始めた。

「昔のお前がどうだったかは知らないが・・・お前を支えてくれる仲間はいたんじゃないか?そいつ等のおかげで道を踏み外してなかったら・・・お前はれっきとした仮面ライダーだと思うぞ」

「ライダーは助け合い・・・か。キンジ君!俺の力も君に!」

「ウオォォォォォォォッ!!」

「なっ!?まさか!?うわぁぁぁぁぁぁっ!?」

そしてこの場にいるディケイド以外のオールライダーからライダーパワーを分けて貰った俺はさらにエネルギー弾の威力を上げて・・・ダークディケイドの光線をぶち破ってエネルギー弾をぶつけてやった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

オールライダーからライダーパワーを受け取って打ち出すなんて

荒技を使った俺は膝をついて変身が解除されてしまう。

「さすがに首領もただでは済んでいないだろ・・・」

「・・・くっ!?」

俺は爆煙に視線を移すと・・・そこには変身が解除されてボロボロになりながらもその場に立っている首領がいた。

「まさか俺様がここまで追い詰められちまうとはな。・・・こうなったら最後の手段だ」

『ＭＥＭＯＲＹ』

「俺の身体を器にして・・・計画を実行してやる!!」

後ろにある機械から黄緑色に輝くエネルギーを受け取った首領は・・・メモリーメモリを自身の右腕に挿し入れると数十メートルの炎に包まれているような仮面戦士に姿を変えた。

「くっ!?こいつはやばいんじゃないか・・」

この場にいる仮面戦士のほとんどはライダーパワーを出し切っていて戦いのも辛そうな状態。唯一まともに戦えそうなのはディケイドだけだと思っていたその時・・・・

「エヴィル首領・・・俺はお前を仮面ライダーだとは思わねぇ」

矢車・・・キックホッパーがゆっくりとこの場に歩いてきた。

超戦士魂（後書き）

次回でエヴィルとの戦いはラストです。

ライダースピリッツ（前書き）

今回はオーズのＦＦＲとキックホッパーの新技が登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア
ショッカーコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

ライダースピリッツ

エヴィルの首領が変な機械からエネルギーを受け取ってメモリを自分の身体に挿して巨大な火だるま仮面戦士になったかと思うと・・・ようやくキックホッパー・・・矢車がやってきた。

「俺を仮面ライダーだと認めない？別にいいぜ。雑魚の仮面戦士達程度に理解されたくもねぇからな。なんせ俺は下等な仮面ライダーなんかを超越した究極の存在！仮面ライダーコアになったんだからな！！」

「・・・・・」

『ＲＩＤＥＲ　ＪＵＭＰ』

今の自分の姿を‘仮面ライダーコア’だと名乗った首領はキックホッパーを殴り飛ばそうとするが・・・キックホッパーはライダージャンプで高く跳んで回避する。

「結局は仮面ライダーを名乗ってんじゃねぇか。・・・まぁどっちみち俺はお前を否定するけどな。お前は究極の存在でも何でもない。・・・人々を苦しめた最悪で最低な奴だ」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

キックホッパーはコアに向かってライダーキックを放つも・・・そのキックはあっさりとコアの右手に止められて捕まえられてしまう。

「その程度の攻撃で俺を倒せると思ってんのか？俺は地球の中心から無限にあふれる力を常に身体に取り込んでるんだぞ」

「テメェが地球の力を補充してるってんなら俺は宇宙の力だこのヤロウ！」
『ＬＡＵＮＣＨＥＲ・ＯＮ』
『ＲＡＤＥＲ・ＯＮ』

何だか変なところで対抗してきたフォーゼはふらふらしながらも立ち上がると右脚にミサイルランチャー、左手にレーダーを装備した。正直その装備からはあまり宇宙っぽさを感じられないんだが・・・。

「ロックオン！喰らいやがれ！」

レーダーでコアの右手を狙ったフォーゼはミサイルを一斉に放ってキックホッパーを助けようとするも・・・・

「そんなものは効かねぇよ」

コアはキックホッパーを放していないどころか無傷だった。

「だったら俺達がメモリブレイクしてやる！」
『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

Ｗもマキシマムを発動して右と左に別れた半分のキックを決めるが・・・ここまでの戦闘やライダーパワーを俺に分けたこともあってかいつもの半分以下の威力だったようで当たってもビクともしなかった。

「くそ・・・俺も戦えたら・・・」

さっきのオールライダーパワーを受け取ったタマシーコンボの必殺の反動で動けない俺はただ見ていることしかできていない。

「動けないってんなら動かしてやろうか？」

「えっ？」

いきなり話しかけてきたディケイドは何やら1枚のカードを取り出しながら俺に尋ねてくる。おそらくは回復みたいなものだと思い頷いてみると・・・

「だったらまずは変身しろ」

「わ、分かった」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

俺がオーズに変身した途端・・・ディケイドはベルトに先ほど取り出していたカードをセットした。

「ちょっとくすぐったいぞ」

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＯＯ』

「えっ！？うわっ！？」

背中に手を突っ込まれて・・・何だか関節がとんでもない方向に曲がったりしてトラカン・・・というよりもトライドベンダーに近

い形の何かにされてしまった。

『おいっ！！これどうなってんだよ！！』

「前にオーズの世界で手に入れたカードの力だ。動かしてやる代わりに俺の踏みだ・・・俺を乗せろ」

今こいつ「踏み台」って言いそうになりやがった。しかも「乗せろ」って言ってる時点であんまり訂正してるようにも感じられないし！

『ざけんなっ！とっとと元の姿に戻しやがれ！』

「効き目が切れたらそのうち戻る。今は俺が運転してやるからとっとと走り出せ」

こいつ・・・マジで悪魔だ。一応この状態にされてるおかげでそれなりに動けるっぽいが・・・これはすごく嫌なんだが。

『こうなりゃヤケだ！いくぞディケイド！』

「その意気だ！オーズ！」

トライドベンダーみたいになった俺に跨ったディケイドはハンドルを握り締めて俺をコアへと特攻させる。

『でもどうするんだ？たぶんこの程度じゃあいつには通用しないと思うぞ』

「・・・大丈夫だ。問題ない」

なんかそれ理子からも聞いたことがある台詞だな。・・・こういう時ってきっと大丈夫じゃないんだろうな。

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｏ・Ｏ・Ｏ・ＯＯＯ』

ベルトからそんな機械音が響くと・・・ディケイドの剣はメダジャリバーが空間を斬る時のように青白く発光する。

「喰らいやがれっ！！」

ディケイドは自身の剣でメダジャリバーの放つ空間切断と同じことをやってコアの右手を切断した。そしてキックホッパーと共に着地した途端に俺は元の姿に戻った。

「・・・も、戻った」

「・・・助かったぞ相棒。・・・それと誰だ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

キックホッパーに適当な自己紹介をしたディケイドはまたさらにカードをベルトにセットする。

「これでどうだっ！」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ』

１０枚のホログラムのカードを自分の前に出現させたディケイドは武器を剣から銃に変形させるとマゼンタの光線を放って一瞬だけ

怯ませる。

「おいおい・・・俺がこれだけやっても右手切断だけってどういうことだよ。マジでこの偽者は俺に喧嘩売ってんだろ」

どうしてこの破壊者は城に入ってからずっと喧嘩腰なんだよ。お前だけ首領と戦う理由が違う気がするし。

「右手を切断しただけ？・・・それすらもできてねぇよ」

コアは斬られた場所から大量の炎を噴き出すと、なくなった右手を再生させる。・・・なんて野郎だ。再生力も普通じゃない。

「・・・こうなったらもう一度俺がタマシーコンボになって・・」

ショッカーコアを握った俺は何とかして立ち上がろうとするが・・・やっぱり力が入らない。

「相棒も・・・それに本郷さん達も下がっててください。あいつは俺が倒します」

「いや・・・さすがに1人じゃあいつは無理だろ・・・」

「・・・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

フォーゼは加勢しようとしてキックホッパーを呼び止めようとするも・・・キックホッパーはクロックアップをしてしまう。

「・・・・・」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

「これでも喰らえ！」

そしてクロックアップを終えてすでにコアの目の前まで近づいていたキックホッパーは、クロックアップに反応していたとしか思えないコアの拳が真正面から直撃する。

「・・・・がはっ！？」

「矢車！？」

Ｗとバースは真っ先に地面に叩きつけられたキックホッパーへと駆け寄ろうとするが・・・１号がそれを止めた。

「本郷さん。どうして止めるんですか？」

「君達も双君の仲間だろう。だったらここは双君の言葉を信じて見守ってあげるんだ。それにまだあの必殺技を・・・特訓の成果を発揮していない」

特訓の・・・成果？そういえば矢車はエヴィルと戦う直前まで７人ライダーと特訓をしてたんだったな。

「オラァ！」

「・・・・くっ！？」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

コアが口からビーム状の超熱線をライダーキックで受け止めるキ

ックホッパーだったが・・・相殺しきれずにまたもや吹き飛ばされてしまう。

「いい加減諦めて死んだらどうだ?」

「・・・誰が諦めるかよ。お前は俺が倒す・・・・ライダーパワー全開」

ボロボロになりながらも立ち上がったキックホッパーは全身から青白い光を放つと・・・その光は左脚に集まり始める。

「喰らってみろよ。・・・これが仮面ライダーの魂を込めた必殺技だ」

左脚を青白く輝かせたキックホッパーは普段のライダージャンプよりもさらに高くジャンプをする。

「そんなキック!避けるまでもないぜ!」

コアは避けようともしないで殴り飛ばそうとすると・・・キックホッパーの後ろには半透明の7人ライダーが見えた気がした。そしてそれらの姿が消えたかと思うとキックホッパーは空中で身体を捻らせて3回転をしながら破壊力を増大させると、そこからの急降下をしてキックの体勢になった。

「・・・あれが俺達のライダースピリッツを受け継いだ双君・・・キックホッパーが左脚に全ライダーパワーを集中して7人ライダーの必殺キックを組み合わせた必殺技だ。その名も・・・」

「ライダースピリッツキィィィク!!」

ドォォォン！

キックホッパーの新しい必殺キックはコアの腹部にあるベルトを貫いた。するとコアは先ほど自身にエネルギーを送っていた機械へと倒れこんでしまう。

「まさか・・・俺の計画が・・・こんなところで・・・・畜生っ！！仮面ライダァァァァどもめぇぇぇぇ！！」

ドオォォォォォォン！！

機械と共に爆発したコアからは壊れたメモリーメモリと首領の人間態が出てきた。

「ツカサ様・・・」

ボロボロで片脚を引きずりながらやってきた影月は燃え盛る機械の残骸へと駆け寄ろうとすると・・・・

「ご苦労だったな仮面戦士達」

グサッ！

影月はいつの間にか背後に立っていた仮面ライダーショッカーの手刀に腹部を貫かれてしまった。

「がはっ！？・・・ツカ・・・サ様・・」

首領に手を伸ばそうとしていた影月は・・・身体を引きずりながらも首領へと進んでいき、あと数センチで手が届くというところで力尽きてしまった。そしてもう動くことのなくなった影月の肉体はこれまでの人体改造の影響からか形を失って砂鉄のようなものにな

ってしまった。

「影・・・月・・」

炎の中から起き上がった首領はショッカーを睨みつけると・・・ヒビだらけのバックルを手に取った。

「そう言えばメモリブレイクをされてしまっても生きてはいるんだったな。エヴィル首領・・・今まで世話になったな。俺がトドメを刺してやろう」

「へっ！てめぇなんかにトドメを刺されてたまるかよっ！よくも影月を・・・」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＡＲＫ　ＤＥＣＡＤＥ』

ガギィィン！

首領はベルトから火花を散らしながらもダークディケイドに変身すると・・・ホルダーの剣をショッカーへと突き刺そうとするが・・・その刃は一瞬にして粉々に砕かれてしまい、ダークディケイドも手刀で腹部を貫かれてしまった。

「がはっ！？・・・財団・・・Ｘめ・・」

ドオォォォォン！

ダークディケイドは何やら気になる単語を呟きながら爆発してしまうと・・・俺の足元にはダークディケイドのベルトの欠片のようなものと首領が持っていたらしいオーディンのカードデッキが吹き飛んできた。

「破壊者が最後に破壊されるとは・・・皮肉なものだな」

「・・・仮面ライダーショッカーとか言ったな。お前・・・今何をしたか分かってんのか？」

オーディンのカードデッキを拾い上げてゆっくりとポケットにしまった俺はショッカーを睨みつける。・・・もう戦えない相手を平然と・・・しかも元々仲間だったのにこうもあっさり殺しやがった。

「あぁ・・・いらなくなったゴミを処分しただけだ」

「ふざけんじゃねぇぞ！！」

コンボで疲労している身体を無理やり動かした俺はトラクローを展開してショッカーに向かって跳びかかる。すると1号とブラックRXさらにはブレイドとキバが一斉にショッカーに向かって走り出すが・・・ショッカーは未だヒステリアになっている俺でさえ反応ができなかった速さで俺達を1人づつ殴り飛ばした。

「ぐはっ！？いったい何が・・・」

「遠山っ！それに本郷さん達も・・・この野郎っ！」

『ＲＯＣＫＥＴ・ＯＮ』

床に強く叩きつけられたブレイドが立ち上がろうとすると・・・今度はフォーゼが右腕にロケットを装備して殴りかかる。

「フォーゼに続くぞ！」

「おうよっ！」

そしてフォーゼに続こうとする龍騎とモモタロスの馬鹿2人も、

叫ぶよりも前にフォーゼとともに吹き飛ばされてしまった。

「うわっ！？・・・何だあいつは？」

「・・・エヴィルも無くなったからな。そろそろ本当の姿に戻ることにしよう」

ショッカーがそう囁いた途端、身体から発せられた黒いオーラがまるで霧のようにショッカーを包み込んだ。するとショッカーは血のようなもので‘ＳＵＰＥＲ’と描かれたマントを羽織って、ベルトは1号のようなベルトからブラックに近いベルトに変わってしまうと、アーマーの胸部は鷹と蛇が混ざったようなシンボルが刻まれたものへと変化した。

「以前戦ったときも怪しかったが・・・お前はいったい何者だ？」

キックホッパーはいつでも仕掛けられる体勢になるも・・・ショッカーは俺達から視線を外して後ろを振り向いた。

「悪いが今回の予定にお前達は入っていない。これ以上相手をしても時間の無駄なので邪魔はしないで頂こう」

「・・・ショッカー様、ライダーパワー吸収システムのプログラムとガイアクリスタルのサンプルを回収しました」

いつの間にか俺達を取り囲むように立っていた白い服を着た数人の人達は先ほど首領がコアに変身するときに発動していた機械から何やらＲのガイアメモリと黄緑色に輝く宝石を回収していた。

「ご苦労・・・では戻るぞ。・・・ん？」

ショッカーは自身の目の前にブラックホールのようなものを出現させて、その中に入っていこうとした時・・・ショッカーは一度振り返って足元に落ちていたリュウガのデッキを拾い上げる。

「ゴミでもリサイクルできそうなものがあったな。・・・貰っていくとしよう」

「待てっ！・・・くっ・・」

立ち上がった俺はショッカーを追いかけようとしたが・・・タマシーコンボの疲労や反動が大きい俺はすぐに膝をついてしまう。

「待ちやがれ！」
『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「逃がすかよ・・・」
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「「ジョーカーエクストリーム！！」」

「ライダーキック！」

Ｗとキックホッパーは片脚がすでにブラックホールのようなものの中に入っているショッカーに向かって必殺キックを決めようとするも・・・そのキックはショッカーの手前でバリアのようなものに阻まれてしまった。

「くっ！？・・・待て・・」

「落ち着け双君！あのブラックホールのようなものがどこに繋がっているかも分からない上に、君もそんなにボロボロだ！これ以上戦うのは君が危ない！」

その衝撃で変身を解除されてしまった矢車はそれでもショッカーを追いかけようとするも1号に止められる。

「とりあえず今はここを脱出する方が先決だ」

2号がそう言ったので俺達が周りを見渡すと・・・さっきのコアとの戦闘のせいで最上階・・・いや、それどころか城の全体に亀裂が生じた様子で何時崩れてもおかしくはない状態になっていた。

「やばいな、このままじゃ崩れるぞ！」

「・・・・・」

『キャッスルドラ～～ン！！』

このままでは不味いと思った様子のキバはベルトのキバットに1つのフエッスルを吹かせると・・・城のすぐ近くにはキャッスルドランが迫ってきた。

「皆さん！はやくキャッスルドランに乗ってください！」

「あぁ。すまない・・・」

ガラガラッ・・・

「「っ！？」」

キバは召喚したキャッスルドランにレジェンドライダー達を次々

と乗せるが・・・崩れてきた瓦礫が俺達の行く手を阻んでしまいキャッスルドランに乗れなくなってしまった。すると足元には一気に亀裂が広がってしまいクウガのところから崩れ始めた。

「ゴウラムっ！」

クウガはゴウラムを呼んで前脚に掴まって落下を回避する。

「キンジ君！掴まって！」

「くっ！？」

俺はクウガの差し伸べてきた手を伸ばそうとするが・・・足元が崩れてしまいその手を掴みきれずに落下をしてしまう。

「ハッ！」

アギトはトルネイダーと言う自身のバイクをスライダーモードにしてそれに跳び乗って空中を飛ぶ。

「こりゃ駄目だな。・・・落ちるしかないか」

「ほら城戸君掴まって！」

馬鹿の信司・・・龍騎にはドラグレッダーを召喚するという発想は浮かばなかったようでそのまま海へと落ちようとしているとアギトに助けられていた。

「・・・・・」

ピッ・ピッ

ファイズはベルトの携帯を外して3・8・2・1という数字を押している。たしかあの番号ってジェットスライガーとかいうデッカイマシンだよな。

「ウェェェェ！？」

『ＦＵＳＩＯＮ　ＪＡＣＫ』

ブレイドは慌てながらもジャックフォームになって空中を飛び始める。

「・・・これも特訓かな」

そもそも‘飛ぶ’という概念がない響鬼・紅はすでに海を泳ぐ気満々で飛び込みの体勢になっている。あそこまでの覚悟だといっそ清々しい。

「・・・・・」

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

一度変身を解除して再び変身したカブトはクロックアップを発動して目の前から消えてしまった。おそらくは光速で瓦礫を踏み台にして地上へ降りてるんだろうな。そう思ってる間にクロックアップを終えて地上に足をつけて変身を解除した天道は「さぁどうする？」とでも言いたげな感じでこちらを面白そうに見てきやがった。

「てめぇ！何見てんだよっ！」

逆様になって落下しているモモタロスは天道に向かって怒鳴るが・

・・見事にスルーされてる。今更ながら何だかこいつ周りからの扱い可哀想に思えてきた。

「まぁまぁ先輩。亮太郎は僕がついてるから大丈夫だって」

いつの間にか水中でも活動が可能なロッドフォームになっていた電王はそのまま飛び込む体勢になっている。

「誰か助けてぇぇぇ!!俺泳げねぇぇぇんだぁぁぁ!!」

「まったく・・・」

ここに来て残念なことをカミングアウトしたモモタロスはブレイドに掴まれて何とか助かった。

「ブレイドのジャックは被るとして・・・他に飛べる方法といえば・・・こいつだな」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＯＯＯ　ＴＡＪＡＤＯＲＵＣＯＭＢＯ』

ディケイドはオーズ・タジャドルコンボに変身してゆっくりと降り始める。あの野郎、俺の姿までパクりやがって。

「悪いキンジ・・・ハードタージュラーは最大２人なんだ」

「ごめんね・・・」

陽の身体の都合で変身を解除したＷの２人はいつの間にか呼んでいた飛行ユニットのハードタービュラーに乗っていた。

「・・・・・」

バースはカッターウイングを装備して飛行していた。そう言えば足元が崩れてから矢車が見当たらないな。

「後藤・・・矢車はどうした？」

「矢車なら瓦礫が崩れる寸前で気を失ってしまい、本郷さんに助けられていたぞ」

そうか。ってことはキャッスルドランの方に乗っているから大丈夫だってことだな。

「ところで後藤・・・できれば助けてほしいんだが・・・」

「あぁ待ってろ。今・・・・ん？おわっ！？」

バースが手を伸ばして俺がその手に掴まろうとした途端、カッターウイングに瓦礫が直撃して機動が不安定になってしまったバースは地上へと墜落していった。一応それほど勢いがあるものじゃなかったから助かっていたが・・・結局のところ俺は助かってない。

「えっと！？たしかこういう時は・・・」

『ＰＡＲＡＣＨＵＴＥ・ＯＮ』

フォーゼは左腕からパラシュートを広げてゆっくりと降下し始める。お前・・・どれだけスイッチってのは便利なんだよ。・・・しかも助けてほしいにも俺からは遠い位置にいるし。

「アンク・・・できればタジャドルコンボを使わせてほしいんだが・・・」

「ざけんな。貴重な俺のメダルを水に落ちる程度で使うな。落ちたら引き上げてやるから素直に落ちろ」

アンクはそう言いながら翼を羽ばたかせてゆっくりと降下している。タトバじゃ飛ぶことはできないんだぞ。この状況でトラとバッタに何ができると思ってやがる。ヒステリアの俺だったら瓦礫を跳んで何とかできたかもしれないが・・・生憎タマシーコンボとかライダーパワーを受け取ったりした上に、さっきのショッカーへの特攻でヒステリアは終わってるし・・・てかそれ以前にもう動く力すらない。つーか動けない俺が海に落ちたら溺れて死ぬんじゃないか？

「俺を抱えて飛ぶって選択肢はないのか？」

「コアメダルを5枚取り込んでてもセルメダルが足りないせいで、お前を抱えて飛ぶ力はない」

そっかないのか～。そういえば最近ヤミーを相手にしてなかったからセルメダルを補充できてなかったな。・・・本当に俺死ぬかも。そう思った瞬間・・・俺は後ろから何かに挟まれた。

「大丈夫かいキンジ君？」

どうやら助けてくれたのはクウガ・・・五代さんらしいけど・・・ゴウラムの鋏で挟むのはどうかと思う。

「はい・・・何とか大丈夫ですけど・・・これはちょっと・・・」

「ごめんね。悪いけどもう少し我慢して」

「・・・はい」

俺はそのままゴウラムの鋏に挟まれている状態で地上に下ろされることになった。正直に言うと挟まれ心地は最悪だった。クワガタに挟まれた昆虫の気持ちが嫌というほど理解をできた気がするぜ。

俺達はようやくエヴィルを倒すことに成功はしたが・・・それは同時にこれまで影を潜めていた組織が動き出す鍵にもなってしまった。

ライダースピリッツ（後書き）

次回はエヴィル編のエピローグです。

変装食堂と別れと次の世界（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も頑張ります！

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア
ショッカーコア

プテラコア×2
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

変装食堂と別れと次の世界

様々な仮面戦士達が奮闘したエヴィルとの戦いから3日が過ぎた。

「ガキども！それじゃ文化祭でやる『変装食堂』の衣装決めをするぞ！」

俺達はようやく平穏な日々を取り戻し始めて、現在はエヴィルとの戦いのせいで先延ばしになってしまっていた文化祭の役割を決めるために2年生が体育館に集められている。ジャンヌは・・・この場には来ていない。アンクの話によるとエヴィルとの決戦の時には戻ってきていたらしいが再びヒルダを探しに行ってしまったらしい。

「よぉし！各チーム同士で集まって待機ィー！ゴホッゴホッ！？」

綴の野郎・・・むせるぐらいなら体育館でタバコを吸うなよ。お前仮にも教諭だろ？

「キンちゃん、くじ引きの番が来たよ」

「あ、ああ・・」

気がついたら真横にいた白雪が言うので俺は我に帰ると・・・手伝いの1年が上に丸い穴の開いた箱を持ってきた。この箱の中身が武偵高の2年の一部が担当する『変装食堂』・・・そこで着る衣装を決めるくじ引きである。

「ある意味このくじ引きも命がけなんだよな・・・」

普通の高校なら変装食堂ってのはコスプレ喫茶みたいな出し物なのだが・・・普通からほど遠いこの武偵高ではなんちゃって程度では駄目で、着た衣装の職業を完璧に演じきらないといけないんだ。武偵高からしてみれば生徒の潜入捜査技術をアピールするチャンスだから、真面目にやらないと教務科のオールスターズによって恐ろしい懲罰が喰らわされるらしい。去年は・・・橘先輩がその被害者だ。

「ささ師匠引いてくだされ。こちらが男子の箱でござる」

今更気づいたが・・・箱を持ってんの風魔じゃねぇか。てか人前で師匠とか呼ぶなよ。恥ずかしいじゃんか。ジャリバーでボコるぞ。

「なお、引き直しは1度のみ認められるでござる。ではご武運を・・・」

なぜかニヤニヤ見上げてくる風魔から箱を受け取った俺は、その箱の中に手を突っ込んで四つ折り紙をまさぐり始めた。・・・ちなみに大ハズレには女装と言うものがある。それだけは絶対に引きたくない。

「どうだ?・・・」

引っ張り出した紙を恐る恐る開くと・・・

『ゾンビ』

俺はゾンビですか?・・・って何でだよっ!?衣装どころか職業でも何でもないじゃんか!何だ?周りから根暗って思われてるからって顔色悪いゾンビになってろっても言うのか?誰だよこんなふざ

けた紙を入れた奴っ！

「チェンジだ！」

こんなおかしなのを演じられるはずがねぇだろ。

「チェンジすると1枚目は無効。2枚目は強制となるでござる」

それを知っていた俺は覚悟を決めて引き抜くと・・・

「警官・・・それも巡査か」

思っていたほど悪くない引きだったんで安心した。

「次は矢車先輩殿でござる」

「・・・・あぁ・・」

矢車も凄く嫌そうな表情で紙を引き抜くと・・・

「・・・ブレイク限界な金色のパイロット」

指令染みたキーワード付きでパイロットを指定されてしまった。

「・・・チェンジ」

凄く不快そうな様子の矢車はクロックアップでもしたのかと言いたくなるほどの速度で新しい紙を箱から引くと・・・今度は『歌手』が出てきた。・・・もはや衣装ではなく直接職業をいってしまっているものが時折あるのがある意味これの酷いところだ。

「・・・・・」

先ほどよりはマシだと思った様子の矢車は何処からともなくマイギターを準備してポケットから楽譜を取り出していた。何だか凄くノリノリだな。

「後藤は・・・どうだった？」

「どうもこうもあるか・・」

屈辱的な表情をしている後藤の紙を見てみると・・・そこには『宅配』と書かれていた。後藤はことあるごとに鴻上のおっさんから配達を頼まれているからイライラしてんだろうな。

「嫌なら引き直せばいいんじゃないか？」

「すでに2回目だ」

あっちゃ～。それは・・・なんつうか残念だったな。

「一回目は『石』だった」

もはや職業や所属どころか生物ですらないじゃんかそれ。すごく悪意を感じるぞ。マジでそんな変なの入れているのは誰だよ。見つけたら唯じゃおかないぞ。

「そんで・・・アンクは？」

「フンっ！」

アンクが差し出してきた紙を見ると・・・そこには『刑事』と書かれていた。

「アンクは・・・案外普通だったな」

ここまで来るとアンクもおかしなものを引いているんじゃないかと思ったが・・・そんなことはなかった。

「・・・よっしゃ！探偵か。ハードボイルドな俺にはピッタリだぜ！」

「そんなことを言ってる時点でハードボイルドなんかじゃないと思うよ」

隣チームでくじを引いている正太郎はどうやら探偵だったらしい。

「えっと僕は・・・『パジャマで引きこもり』だって！？」

正太郎の隣で女子の箱を引いた陽はある意味ラッキーな『引きこもり』を引いたらしい。

「正太郎・・・この引きこもりはどうゆうことをすればいいんだい？」

「簡単に言うとなぁ・・・ずっと仕事をしないで教室で適当に過ごしてていい代わりに、休憩時間になるまで教室を出られないってルールなんだ」

だからこそ『引きこもり』は、絶対に教務科にリンチにされない

’という利点があるが、一定時間自由を失うという意味では残念な職業だ。まぁ・・・これはある意味張り込みを鍛えるためにあるとも言われてるんだが・・・これもおふざけの類なんだろうと俺は考えている。

「どうする？変えるか？」

「いや、せっかく引いたんだからこのままでいいよ」

俺だけではなく矢車や後藤ですら嫌がって1度は変えたのに、あんなにあっさり受け入れられると変更組の俺達はちょっとへこむぜ。

「師匠、ジャンヌ殿は本日欠席でござるが、前もってくじ引き代理人に師匠を指定されていたでござるよ。忍！」

風魔は今度は女子用の箱を突き出してきたので適当に引いてみると・・・そこには『ウェイトレス』と書かれていた。まぁ・・・俺に直接は関係がなさそうだからこれでいいか。その後理子は1度『泥棒』を引き当てたが「これじゃコスプレし甲斐がない」とか言いながら『ガンマン』を引き当てた。続く白雪も最初は『チャイナドレス』を引き当てたが「身体のラインが出るのは恥ずかしい」という理由でキャンセルして『教諭』を引き当てた。レキは『魔法使い』を引き当てて無言で変更していたが・・・突っ込んだら負けなような気がしたので俺達は何も言わずに見届けていると『科学研究所職員』というのを引き当てていた。・・・中でも一番ウケたのは・・・他でもないアリアだった。

「『アイドル』・・・」

「「「ぷっ！？」」」

アリアがアイドルを引き当てると理子が「アイマスですよ！アイマス！」と連呼していたが、俺や正太郎達もアリアがアイドルと考えただけで吹き出しそうになってしまった。

「チェ、チェン、チェンジよ！」

引き直したアリアが確定される2度目を引くと出てきたのは何と『小学生』と書かれてあった。なんて運の悪さなんだ。ギャンブルとか一生やるんじゃないぞ。

「やった～～～！やったよアリア～！ある意味ハマリ役だよ！キャハハハっ！」

「今のは無し無しな～～～し！！」

その後・・・理子に散々笑われたアリアが暴走してしまい大人しくさせるのに大変だった。・・・そして昼休みとなって午後から学科ごとの授業となると・・・俺とアリアはとある場所へと歩いて向かった。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「それにしても・・・あんたがまたこんなにも大物を相手にしてしまうなんて思ってもなかったわ」

「俺はただ・・・いなくなっちまった友達のために頑張っただけだ」

俺はそう言いながらメダルホルダーから取り出したサソリのメダルを握り締める。様々な謎は残ることになったが・・・ひとまずはエヴィルとの戦いが終わった。ショッカーコアは俺が持っているよりは本郷さんが管理しているほうが安全だと思うから預けることにした。そもそもあんな強力なコンボを多様する気はなかったからありがたいとは思ったが・・・結局ショッカーコアってのが何なのかは分からなかった。そして仮面戦士科の学科棟も完全修復されて授業も再開されることとなったが・・・今日の午後はヒビキさんに頼み込んで出席扱いで授業を抜け出してアリアと一緒に光写真館に来ていた。

「そろそろこの世界を出て行くんだってな。色々とありがとな士」

正直トライドベンダーっぽいのにされたことに関してはイラついてるけど・・・まぁ色々と手伝ってもらったから許してやるか。

「別に俺は何もしてねぇよ。それに俺がお前らに協力したのは大ショッカーの時に手伝ってくれた1号と2号に借りを返すのと・・・個人的な首領への怒りだけだ。キンジ・・・お前もオーズになるってことは見つけてないんだろ?」

見つけてない?何をだ?

「オーズは何かを見つけないといけないの?」

アリアは俺が聞こうと思ったことを先に士に尋ねると・・・士は少し複雑な表情になった。

「まぁ・・・見つけないといけないのは・・・簡単でもあるし、難しくもあるものだな」

「訳が分からないわよ。はやく答えを言いなさいよ！」

「・・・その答えはオーズであるこいつ自身が見つけないと意味がないんだよ。答えは人それぞれだと思うからな」

俺自身が見つけないといけないもの？

「お前の欲望・・・見つけろよ」

俺の・・・欲望？

「さぁ・・・俺達はそろそろ別の世界にいくからお前らはとっとと出て行けよ」

そう言った士は後ろを振り向いてたくさんのライダーシンボルに囲まれた緋色の結晶の絵を眺める。

「相変わらず口が悪い奴だなぁ」

「まるで誰かさんにそっくりね」

アリアはそう言いながら俺の方を見てきた。・・・おいおい、俺は士ほど口は悪くはないはずだぞ。

「まあいいか。・・・じゃあな士」

「気が向いたらまた来なさいよ！」

俺とアリアはそう言って席を立つとドアの外へと出て行く。

「あぁ・・・」

無愛想ながらも返事をした士の横では小野寺と光夏海さんが俺達に軽く手を振っていたのを最後に見た俺とアリアは写真館のドアを閉めた。

「しかし今回の世界は本当に俺に喧嘩を売ってるとしか思えない世界だったな」

「この世界でもお宝はゲットできなかった。・・・ねぇ士。この世界では何かカードは手に入れたのかい？」

海東にそう聞かれた士はホルダーから緋色の弾丸が描かれた1枚のカードを取り出す。

「結局よく分からない弾丸のカードだけだったな」

「っ！？それはまさか・・・士！そのカードをくれ！」

そう言った海東はカードを求めてくるように手を出してくる。

「どうした海東？今まで色んな訳の分からん物をお宝って言ってきたが、とうとう俺のカードまでお宝って言うようになっちまったのか？」

「海東・・・お前、落ちたなぁ」

「残念です大樹さん」

その様子を見た小野寺や光夏海さんまで海東を哀れな目で見てくる。

「いや、別にそんなことはないからね!?そのカードはこの世界を象徴するカードだったんだよ!」

「この世界?ってことはこの世界がなんだったのか分かったのか海東?」

「あぁ・・・この世界は‘緋弾の世界’。色金と呼ばれる特殊な金属で色んなライダーシステムを作っていた世界だったのさ。そして色金の中で最も価値の高い物が緋緋色金と呼ばれ、それを銃弾のように加工したのが緋弾ってわけさ。今いたピンク色のツインテールの女の子の中にその緋弾と呼ばれる銃弾が入っていたらしいんだけど・・・取り出す方法までは分からなくてね」

「・・・だいたい分かった。つまり盗めなかった物の代わりにそれっぽいものを欲しいって訳だな」

士が呆れ顔で海東に問いかけると・・・海東は笑顔で頷いた。

「そうゆうこと!だからカードを・・・」

「誰がやるかよ」

カードを貰おうとした海東を避けた士はホルダーにカードをしまおうとする。

「前だってバスコ・ダ・ガマの調味料をくれたじゃないか！だったらそれぐらいくれてもいいだろう？」

「大樹さん・・・まだあの胡椒のことに気づいてなかったんですね」

「しゃべらないでおいてあげよう」

光夏海さんと小野寺は何かを話さないでおいてあげる様なことを話していると・・・

「くれって！」
ドカッ！

「うあっ！？」

海東が士からカードを奪おうとすると・・・小野寺が海東とぶつかってしまい倒れかける。小野寺は咄嗟に背景ロールのワイヤーを掴んで引っ張ると・・・背景ロールの絵は赤い人型のロボットと青いゴリラ、そして黄色いうさぎのようなロボットが描かれた絵に変わった。

「また訳の分からん絵だな。・・・次の世界は何だ？」

士達はこうして俺達の世界を去って別の世界へ行ってしまった。

・・・

『ガゥガゥ！がぁ～』

「こ、こらっ！キンジにそのことをばらさないでよっ！」

残念ながらトラくん。・・・俺にはトラくんが何を言ってるのかさっぱり分からないぜ。つーか分かってるアリアが逆に分からねぇよ。

「トラくん・・・ジャスチャー」

『ガゥ～がぁ～！』

アリアのペットにされてしまって忘れられがちだが・・・元々は俺の所有物だったトラくんは俺の言葉にもちゃんと反応してくれる。だから俺はアリアのやった行動をジェスチャーで伝えるように言うと・・・トラくんは何やらアリアの制服を噛んで引っ張るような動作をした。

「・・・アリア。もしかして俺を助けに飛び込んだのはいいが、泳げないからトラくんに岸まで引っ張ってもらったってことはないよな？」

「そ、そんなのある訳ないじゃないっ！」

ヒステリアになってない俺でもはっきりと分かった。間違いなく溺れかけてた所をトラくんに助けられたんだろうな。

「キンジ・・・あんた失礼なこと考えてない？もし考えてるってんなら風穴マグナムショットよ」

アリア・・・それはアポロガイストの技だぞ。

「何やってんだお前ら？」

「アンク・・・」

俺がアリアに銃を向けられてしまったそのタイミングで空からアンクが降りてきた。コアメダルが６枚になったことで一応自在に飛べるようにまではなったらしいが・・・怪人態にはやはりなれないらしい。

「アンク・・・どこ行ってたの？」

「近くにあったキャッスルドランでエヴィルの事後処理についてどうするかを相談してきた。逃げ出した幹部のこととかもあるからな・・・それに・・・例の組織も気になるからな」

２時間前、ファンガイア族が全力を持って残党幹部であるネガタロスとゼイビアックス、そして真木博士を捜索中と渉からの報告があった。そして同時進行で例の組織・・・‘財団？’と呼ばれていた組織のことも調べてくれているらしいが・・・それに関してはほとんどの情報が入っていないらしい。

「分かってるのは現在２つ。・・・１つはエヴィルと何らかの繋がりがあったらしいってこと。もう１つはその財団？がエヴィルを上回る戦力を持っているってことだ」

いくら首領を撃破して気を抜いていたとはいえ、あの場にいたオールライダーが誰一人として白服が近づいていたことに気づくこと

ができなかった。歴戦の勇者とも言える本郷さんですらだ。・・・しかも奴らはエヴィルの首領が使っていた機械からRのメモリと黄緑色の宝石も奪っていった。きっとまたいつか奴らは行動を始めるんだろうな。

「あっ！そういえばアリア・・・1つ思い出したんだが・・・」

俺は内ポケットからオーディンのカードデッキを取り出すとアリアに差し出す。

「オーディンの・・・神崎士郎のデッキだ。明日辺りにでもあいつに届けに行ってやれよ」

聞いた話によると2日くらい前に神崎士郎がようやく目覚めたらしいし・・・せっかく身内に意識が戻ったんだから俺が行っても野暮なだけだろ。

「キンジは行かないの？」

「せっかく身内で会うんだから・・・俺はいないほうがいいだろ」

「べ、別にいいと思うわよ。あんたはこれから・・・なんだし」

ゴニョゴニョしてて何を言ってたか分からなかったが・・・何だかあまりいい予感はしないので問い詰めないでおこう。・・・無理に問い詰めると風穴を開けられそうだし。

「はぁ・・・っ！」

ため息をついた俺は何となく部屋の前の廊下から写真館を振り覗

いて見ると・・・すでにそこには写真館はなく、いつものコンビニが戻っていた。どうやらすでにこの世界からは去っていったらしい。

「またな・・・士」

そう呟いた俺はアンクとアリアの2人と共に寮へと向かっていった。

「そういえばもうすぐかなえさんの裁判だったな」

「えぇ！理子も来てくれるって約束してるし、証拠もバッチリ何だからきっと大丈夫よ！」

そしてアリアがそんな意気込みを告げてから数日・・・とうとうアリアにとっての運命の日・・・かなえさんの裁判の日がやってきてしまった。

・・・

電王が変身に使うようなパスを持った1人の少年と青鬼みたいな怪人はお金を置いて席を立つと何処かへ歩いていった。

変装食堂と別れと次の世界（後書き）

今年も欲望の交差を読んでくれると嬉しいです。

裁判と影と新しい電王（前書き）

欲望の欠片を宣言通りに更新したらこちらの更新が遅れてしまいました。申し訳ありません。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×2
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

裁判と影と新しい電王

裁判の前日、真っ暗な夜空が見える暗いどこかではヒルダが大量のセルメダルの上に青と灰色の布を被せて、その上に置いてある数枚のコアメダルを眺めていた。

「青が1枚に・・・灰色が3枚ねぇ。・・・もう少しメダルが欲しいわね」

数枚のコアメダルを小さな箱のようなケースにしまったヒルダは玉座のような装飾のされているイスに座る。

「そう言えば・・・たしかカザリとかいうグリードがメダルを独り占めしようとしてるらしいじゃない。・・・そうね、足りないなら奪えばいいのよね」

そう呟いたヒルダはマントと牙のような絵でVと記されたガイアメモリを手に取りながら微笑する。

「そのためにもまずはトオヤマキンジ・・・王様になりきれてないオーズを利用しないとね」

コアメダルの入ったケースをガチャガチャと振ったヒルダは夜空に輝く月を眺めた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

「被告人・神崎かなえを・・・懲役５６８年の刑に処す」

東京高等裁判所第８００法廷の響いた判決に・・・弁護席にいた俺は耳を疑った。死刑や終身刑なら後回しにされるはずの『主文』を裁判長が最初に言わなかったから嫌な予感はしていたが・・・・まさか神崎かなえさんが有罪判決だなんて。

「・・・・」

隣に座っているスーツ姿の理子は鋭い目つきで検察側を睨む。あの戦いの後、再びヒルダを探しにいったジャンヌと、この前正太郎と陽・・・仮面ライダーＷともう１人の仮面戦士に倒されて捕えられたブラドは不参加だったが、この裁判は勝てると思っていたのに。

「おかしい・・・この裁判は明らかに・・・」

なぜか傍聴人は１人もいないし、マスコミすら１人もいない。俺達には分からない何かが背後にあるような気もする。

「不当判決よ！こんな・・・どうして！？こんなに証拠は揃っているのにどうして！？ママは潔白よ！」

勢いよく立ち上がったスーツ姿のアリアは検察側に駆け寄ろうとするが・・・若い女性弁護士の連城黒江さんが抱きつくようにして止めた。

「騒ぐなアリア！次の心証が悪くなるッ！即日上告はする！落ち着けっ！」

次と言うのは最高裁のことだ。そこで終身刑にされてしまえばもう覆せない。アリアは検察官や裁判官が悪いなどと言ってから何度も「やり直せ！」と言って彼らに殴りかかろうとするアリアを俺も押さえようとすると・・・

「アリア。落ち着きなさい」

「っ！？」

被告人席にいるかなえさんの一言でアリアは我を取り戻した。するとアリアの瞳は裁判官達への怒りの目から「行かないで」とでも言いたげな悲しみの目へと変わった。

「ありがとうアリア。あなたの努力・・・本当に嬉しかったわ。まさかアリアがイ・ウーを相手にここまで成し遂げるなんて。あなたは大きく成長したのね。それは親として最高の喜びよ」

涙目のアリアにそう告げたかなえさんは今度は俺の方を振り向く。

「遠山キンジさん。あなたにも心から感謝しています。アリアに協力してくれるだけでなく、行方不明になっていた兄さんが悪い道に行ってたのを正してくれたりもしてくれましたね。本当にアリアは良いパートナーに恵まれました。それを直接見届けられて嬉しいです。でも・・・こうなることは分かっていたわ」

結局減刑できたのはイ・ウーだった理子とジャンヌ、ブラドに加

えて、つい先日自ら元・イ・ウーを名乗り出てきたＮＥＶＥＲのリーダーの大道・Ｍ・カツミの分だけだった。ＮＥＶＥＲのリーダーであるカツミが自首をしてきたのは意外だったが・・・たった今来た報告によると刑務所から逃走をしてしまったらしい。

「・・・減刑させてから逃げ出すなんて。・・・警察や武偵にとっては手間でしかないな」

まるで借りを返すためにでもやってきたみたいだな。しかしそれでも他のメンバーについては証拠不十分で残されたままだ。それにかなえさんに対する検察側の主張は、素人の俺でさえ支離滅裂に思えた。理屈が成り立っていないし、証拠だってあやふやだった。・・・俺がそんなことを考えていると連城弁護士は自分のＡｕｄｉｎｉに俺達を乗せるとかなえさんを乗せた護送車を追うように車を出した。アリアをかなえさんの近くに居させたいという計らいだろうな。

「どうすりゃいいんだ？」

世界中に散らばったイ・ウーの残党をすべて逮捕しなきゃいけないのか？どれだけいるかも分からないのにそんなことできるはずがないじゃんか。仮にやれたとしても最高裁までに間に合うわけもない。俺にはグリードの問題だってあるんだぞ。・・・そんなことをぐちゃぐちゃ考えながら俺は隣に座っている理子を見た。何だか理子はさっきから何かを考えている様子だった。

「・・・・？」

車は護送車を追いすがるように走っていると・・・山王下に近づいた辺りで護送車が停まった。連城弁護士が見ている先を見て俺もすぐに異変に気づいた。

「信号が・・・」

前方の信号が全部消えてしまっているんだ。赤・青・黄色のいずれも光らずに・・・。歩道者用の信号も消えてしまっていて、人々は横断歩道の前で辺りをキョロキョロと見渡している。

「なんだ?・・・」

見れば道路の左右のビルからサラリーマン達が困り顔で出てきている。昼間だから気づくのが遅れたが、ビルの1階にあるコンビニやカフェが薄暗い。

「停電か?」

「っ!」

連城弁護士がそう呟いた瞬間、理子は何かを警戒するように目を開いた。そして次の瞬間・・・俺の目が異様なものを捉えた。・・・前方の護送車の下から黒いものがこちらに向かって広がっていた。燃料漏れのようにも見えるが・・・違う。あれは影・・・影が伸びているんだ。

「・・・っ!」

影はみるみるうちに車の下を覆っていく。そしてようやく俺がこの影の正体に気づいた瞬間・・・閃光に続いて車を包み込むような放電音が周囲に響いた。

「くっ!?」

「～～～～～っ！！」

連城弁護士の驚く声とアリアの悲鳴が聞こえた。最初は炸薬かとも思ったが・・・これは違う。高圧流が車を通り抜けたのだ。幸い電流は外側の金属部分だけを通り過ぎて、中の俺達は無事だが・・・ボンネットからは煙と炎が出ている。

「みんな車から出ろ！危険だ！」

ドアを蹴り開けて外に出ると、前方の護送車からも煙が上がっていた。しかもタイヤはすべて潰れている。

「かなえさん！！」

護送車に俺とアリアが駆け寄ろうとした時、放電が護送車の後部から弾けた。

「ママっ！」

「待てアリアッ！あれは罠だ！」

よく見れば運転手がドアをガンガン叩いている。おそらくは壊れて開かなくなってしまったか、何らかの仕掛けで出れなくなったかだろうな。まぁどっちみち出られなくなっているのには変わりないが・・・。

「っ！」

道路に出た俺は足元にあって異様な影がなくなっているのに気づ

く。

「ヒルダ・・・！」

その名前を呼んだのは・・・そいつが見えたからだ。退廃的でどこか不吉なゴシック&ロリータ衣装の女。あの時の宣戦会議で『眷属』を名乗り、あのばで最も好戦的で・・・アリアに噛み付いた吸血鬼だ。

「ヒルダ！写真では見てたけど、会うのは初めてね！」

あの時の記憶がないアリアは反射的に拳銃を抜いてヒルダへと向けたが・・・ヒルダはそっぽを向いた。

「私、今日は戦う気分じゃないのよ。日の光だって嫌いだし。・・・でもつい手が出ちゃった。だってタマモの結界からノコノコ出てきてくれたんですもの。それに・・・」

日傘の柄を抱くようにして頬に寄せたヒルダは・・・黒いエナメルのヒールの片方を鳴らして護送車の中を示す。

「これ、あなたのママよね？お父様のカタキは一族郎党根絶やしにしてやるわ」

「っ！！」

アリアはいつもの行動パターン通り真正面からヒルダへと駆け寄っていく。俺も銃を抜いてヒルダの日傘を狙おうと駆け出して、俺とアリアの影が護送車の影を踏んだとき・・・

「・・・ンッ！」

ヒルダが小さく力むのが見えたかと思うと・・・

バチィィィィッ！！

「うッ！？」

「きゃぁぁぁっ！？」

俺とアリアが同時に転倒してしまった。まるで６０万ボルトのスタンガンを喰らったみたいな衝撃。・・・これがこいつの超能力か。・・・電撃を角から出すウヴァみたいな技を使いやがって。

「だからぁ・・・そんな血の気の多い姿を見せないで。ガマンできなくなっちゃうでしょ？あぁ、もう食べちゃおうかしら？お前たちなんか第一態でもやっちゃえそうだし」

「・・・くっ！」

立とう・・・立って戦おうと力を入れるが・・・駄目だった。たしかに神経が痛みつけられて動けないってのもあるが・・・今の衝撃で俺の中にある紫のメダルがまた暴走しそうになっているので、それを押さえ込むのに精一杯になってしまっているからだ。

「この前は感じられなかったけど・・・今のあなたからは少しだけ王様の気配がするわね。この数週で何かあった？」

「・・・まぁ色々とな」

色々ありすぎて大ピンチの連続だったぜ。紫のメダルの暴走とか、エヴィルとの決戦とかな。まぁピンチなのは現在もだけどな。

「ヒ・・・ルダ・・」

ガクガクと膝を振るわせつつ、まだ煙を上げている護送車のナンバープレートにしがみついたアリアだったが・・・さすがに立つことはできなさそうだ。

「・・・あぁ、私ったら駄目ね。アリア、あなたを見ていたら食欲が沸いてきちゃった。あなたの美味しい味、覚えちゃって、覚えちゃって・・・」

アリアの拳銃なんかお構いなしに、アリアに近づいてきたヒルダは両膝を揃えてしゃがむ。

「またつまみ食いしちゃおうかしら?そっちの王様モドキは今はワインというよりぶどうジュースが似合いそうね。でもあなたは１００年物のワインのようなもの」

王様モドキって・・・明らかに俺のことだよな?たしかに俺はオーズであって王様なんかじゃないし、ぶどうジュースも嫌いじゃないが・・・アリアとの格差がハンパ無いな。

「くっ!?・・・ガァァッ・・」

やばい・・・だんだん紫のメダルが抑えきれなくなってきたぞ。こんな状況じゃ間違いなくアリアだけじゃなく、かなえさん達にも危害を加えちまう!何とかして押さえ込まないと!

「ヒルダッ！」

叫んだ声は・・・車から出てきた理子だった。目だけでそっちを見てみれば、理子は両手でワルサーを持ち、髪のテールでナイフを構えている。

「よせ・・・ヒルダっ」

双剣双銃で構えている理子だったが・・・遠目でも分かるぐらい震えてしまっている。恐怖を押し殺して虚勢を張っている感じだ。そういえば理子は幼い頃、ブラドに監禁されていたんだったな。顔見知りしてる様子を見るに、その頃に理子とヒルダは会っているのか。

「あぁん４世。なんて凶暴な目、かわいい。・・・だから好きよ４世。私が最も高貴なバルギー犬なら、お前は狂犬病にかかった野良犬。でも・・・分かるでしょう？あなたと私はお友達」

自分を抱きしめるような動作をしたヒルダは俺とアリアなんかをもう見ていないように理子に語りかける。

「お父様がご不在の今は、私がドラキュラ家の主。お父様がしたように檻に閉じ込めたりはしないわ。私の大理石のお部屋も、シルクの天蓋付きのベッドも、純金の浴場もみんな貸してあげる。ヨコハマの紅鳴館を任せてあげてもいいわ」

「近づくなっ！甘く見るな！そんな下らないウソにあたしが騙されるか！」

叫ぶ理子にヒルダは自身の口元に指を寄せて笑った。

「私の目をみなさい理子。私の目がウソをついているように見える？」

「っ！？」

ヒルダの目・・・金色の輝きを僅かにたたえた赤い瞳をつい視界に捉えてしまった理子は・・・・「しまった」と言いたげな表情で小さく息を呑んだ。

「ほら、剣と銃を下ろしなさい。私との友情のために。私の目を見ながら・・・そう。ゆっくり見ながら。・・・ゆっくり、ゆっくり・・」

すると理子は手に持っていたワルサーと髪で握っていたナイフをゆっくりと下ろしていく。

「そう、それでいいのよ４世。偉いわ。私の言うことをよく聞くいい子ね」

どうやら理子は理子自身の意思とは関係無しに身体が動いてしまっているようだ。自身の目の前まで迫ってきたヒルダに発砲をせず呆然と見ているだけだ。どうやら催眠術か何かに掛けられたらしい。・・・やばいぞ。これで戦える奴がいなくなった。生かすも殺すもヒルダの思いのままじゃねぇか。

「友情の証に・・・あなたにあげる」

理子の目の前まで近づいてきたヒルダは自分の耳から蝙蝠の翼の形をしたイヤリングを片方だけ外し、理子の耳につけた。

「っ！」

震えながらも目だけはヒルダを睨む理子に・・・ヒルダはニコニコと笑顔を向けてくる。

「・・・ガァァッ」

近くのミラーを見ると・・・俺の目が紫色に発光していることに気づく。・・・このままじゃ紫の力を抑えきれずに暴走しちまうな。

「くっ！・・・このままじゃ・・」

このままじゃ本当に全滅してしまう。・・・そう思った時・・・

「・・・・？」

ヒルダが日傘を傾けて、整った細い眉を寄せて青空を眺めた。紫色になっている俺の瞳に写った空には・・・

「電・・・王？」

今まで見た事がない姿をした青い電王がバイクに乗りながらこちらへと落下しようとしていた。

「ハァッ！」

ブゥゥゥン！

俺達の前に着地した青い電王はバイクの前輪を軸に後輪を回転させてヒルダへと攻撃しようとするが・・・ヒルダはすぐに後ろへと

下がって回避する。

「危ないところだった。君がアリアだね？・・・一目で分かったよ」

バイクから降りた青い電王はアリアの方を見ながらそう言った後、背中に抱えている先端に銃口のついた青い剣を手に取ると・・・アリアを守るようにヒルダへと立ちふさがった。

「ヒルダ・・・キミは最も傷つけてはならない人を傷つけた」

ヒステリアの時の俺みたいな口調でそう言った青い電王は独特のデザインの剣をヒルダへと向ける。すると日光を受けて宝石のように煌めく剣にヒルダは不愉快そうに眉を寄せた。

「ヒルダ。キミにはアンラッキーなお知らせが3つある。1つはマチェーテディ・・・この剣の刃には加齢４００年以上の十字架を削り取った純銀をコーティングしている。2つ目にマチェーテディの弾丸は基本的にエネルギー弾だが、実弾を装填することも可能だ。なので法化銀弾・・・それもキミが慣れていないプロテスタント教会で儀式済みの純銀弾を装填している。・・・キミはお父上ほどに僕らとの戦いに慣れていないのだろう？」

銀の弾丸・・・購買で売っているあのバカ高い通称『銀弾』のアレかよ。それもおそらく法化被覆・・・俺の苦手な分野だが、名のある教会や神社でまじないを掛けられている対超能力者弾を使ってるってことかよ。

「3つ目・・・ボクは怒っている。キミがアリアを傷つけたことに」

独特な武器を突き出すように構えた。あの武器であの構えなら隙

があればいつでも狙撃ができるし、斬り込むこともできるな。俺のジャリバーとかトラクローじゃできない構えだな。

「・・・イヤだわ。とってもイヤなニオイ。どうも銀臭いと思ったら・・」

ヒルダは黒い駝鳥の羽を使った扇を開くと、自身の口と鼻を隠す。どうやら青い電王の威嚇が効いているみたいだ。

「貴族が正しい手順を踏まず、奇襲をする非礼をするのは承知の上だが・・・竜遂公姫・ヒルダ。キミをここで倒す。アリア、目を閉じて。淑女に・・・アイツの血なんか見せたくないからね」

アリアにそう告げた青い電王はヒルダを‘倒す’ために一気に距離を詰める。・・・このままじゃマズイっ！

「っ！・・・変身っ！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバッ！タトバ、タッ！トッ！バッ！』

ガギィィィンッ！

紫のメダルを何とか押さえ込んでオーズに変身した俺は、すぐさま駆け出して青い電王の刃をトラクローで受け止めた。

「仮面ライダーオーズ。・・・先の戦いの時に最前線で戦っていた仮面戦士の1人か。どうして邪魔をする？ヒルダは竜遂公姫だぞ」

「たしかに吸血鬼で犯罪だってしているが・・・仮面戦士の力を怪人相手以外に使うのは間違ってるだろ」

犯罪に加担している仮面戦士・・・たとえばエヴィルの仮面戦士とかには例外的に使われるがな。

「それは日本人だけが意識している決まりだ。他の国では怪人でない犯罪者相手にも仮面戦士の力を使う。それにヒルダは吸血鬼・・・れっきとした怪人だ。そこを退きたまえ」

「・・・断る。それじゃまるでガイアメモリを持っているだけの人間を怪人って言ってるようなもんだぞ。吸血鬼と言っても少なくとも今は人の姿をしてるだろ。だったら人として相手をしてやれ。それにここは日本だ。業に入れば業に従えって言葉が日本にはあるんだよ」

そう言った俺は青い電王の剣をアッパーをするようにトラクローで弾いて吹き飛ばすと・・・剣はモモタロスに似ている青い鬼に変わった。

「エル、ここは彼の言う通り仮面戦士の力をヒルダ相手に振るうのはやめておこう。・・・と言いたいところだが、すでにこの件は一度終了のようなのでそうする必要もないようだ」

「「・・・・?」」

話の分かる青鬼が向いている先を振り向くと・・・ヒルダは車の影に溶けるように沈んでいた。

「淑女と遊びたいのなら時と場所を考えなさい無礼者。こんな天気の悪い日、昼遅くに遊ぼうなんて・・・気高い竜遂公姫が受けると思って?・・・まぁ今回は許してあげる。じゃあね。今日はガマンしておいてあげるわ」

そう言ったヒルダはついに完全に影の中に沈んだ。
「ふぅ～～」
変身を解除した俺は気の抜いた声が聞こえた方を振り向くと・・・
そこには理子がアスファルトにへたれ込んでいた。催眠術と緊張の糸がまとめて切れた感じだな。
「・・・で？お前は何者なんだ？」
「・・・・・」
俺が青い電王に振り向くと・・・青い電王はベルトを外して変身を解除した。するとそこにいたのは外国の武偵高らしき灰色のブレザーの制服を着た黒髪の美少年だった。
「大丈夫か、アリア」
美少年は倒れているアリアに肩を貸す。俺は肩を貸されて立ち上がるアリアのところへと歩み寄っていくと・・・
「もういいわ。肩、放して」
プライドの高いアリアが、まだ小さく震える膝で少年と向き合った。
「ママは・・・？」
アリアが車の方を見るので俺も見ると・・・かなえさんは青鬼に片脇を支えながら、安心したような目でこちらを見ていた。規則上しゃべることはできないが、どうやら大丈夫そうだ。・・・しかし

本当にできた青鬼だな。特徴からしてイマジンか？

「助けてもらって言うのも何だが・・・お前は何者だ？電王みたいだが・・・何しに来た？」

俺が亮太郎のバイクとそっくりなバイクを眺めながら言うと・・・少年は黒曜石のような瞳で俺のことを睨んできた。

「・・・人に素性を聞く前に、まず自分から名乗れ」

「・・・遠山キンジだ」

「知っている。キミは仮面ライダーオーズとして有名だからね」

じゃあ聞くなよ。

「ボクはエル・ワトソン」

その名を聞いたアリアが「えっ？」と呟きながら少年の方を振り向いた。ワトソン・・・その名は探偵科の教科書にも載っているほど有名な人物だ。シャーロック・ホームズ。アリアの曾祖父にしてイ・ウーのリーダーの名パートナー。元軍人の医師で終生シャーロック・ホームズの相棒だった人物の苗字だ。

「えっ？・・・じゃあ、あんた・・・まさか・・」

さっきの電流とは別に身体を震わせたアリアはワトソンを見上げる。するとワトソンはアリアに小さく笑顔を向けたこくりと一度頷いた。

「そう、ボクはＪ・Ｈ・ワトソン卿の曾孫だよ」

今度は俺の方に眉を寄せながら振り向いてくる。

「トオヤマ、キミは『何しに来た』とボクに聞いたが・・・理由が必要かい？」

まぁ、仮面ライダーは助け合いだからそれでも充分理由になるが・・・何だかよく分からんが引っ掛かるんだよな。

「それぐらい聞いてもいいだろ。俺はお前を知らないんだぞ」

俺がそう言うと・・・ワトソンはアリアとかなえさんを順々に見た。

「ボクは許嫁と義理の母親を助けに来た。それだけだよ」

「・・・？」

意味の分からなかった俺がアリアの方を見ると・・・アリアは目を丸くして俺を見ると・・・驚いた表情のまま、慌てるように目を逸らした。

「・・・許嫁？」

何だか訳の分からない場の空気に・・・俺はもう一度ワトソンに尋ねる。

「アリアのことだ」

ワトソンは「当たり前だろ？」と言わんばかりにサラッと言い放つと・・・

「アリアはボクの許嫁（フィアンセ）だ」

自分よりも背が高い俺を見上げて繰り返しそう言った。

裁判と影と新しい電王（後書き）

次回は久しぶりにあのグリード達が動きます。

転入生とお金と蠢く欲望（前書き）

今回は久々にグリード達が登場します。

カウンザメダル！現在、オーズの使えるメダルは

タカコア
トラコア
バッタコア

プテラコア×２
トリケラコア
ティラノコア

サソリギジ

あの後、再びヒルダが襲ってきる可能性は低かったので駆けつけた警察達に状況を説明し、改めてやってきた護送車に乗せられて拘置所へと運ばれていくかなえさんを見送った。虎の門まで歩いて帰る弁護士と話すことがあったらしく、ついていったワトソンと解散して、理子も急に用事があるとか言い出して乃木坂方面へと行ってしまった。そんな訳でオーラインクロスで来たわけじゃない俺は近くにライドベンダーがなかったので、アリアと共に電車で帰ることにした。

「・・・・・」

アリアはワトソンの許嫁。歴史モノのマンガとかを見ると・・・たまにそういうのがあるよな。本人達が若い間から親同士が勝手に婚約者を決めちまうって奴。それがアリアにもいたんだな。探偵科の授業で聞いたことがあるがホームズ家とワトソン家は元々初代の時代からの親密な一族同士。家庭的にも相応しいだろう。えぇお似合いだと思いますよ。・・・という雰囲気を無意識に俺は放ってしまっているのか・・・どうもさっきからピリピリしてる空気だった。

「ねぇ・・・」

モノレールで武偵高駅に降り立った時、アリアが俺の制服の袖を掴んできた。

「なんで黙っているのよ・・」

部妙に声を震わせていたアリアに俺は振り向いた。

「お前が黙っているからだろ。俺は銀座線に乗ったときにいっぺん話しかけたぞ。それをお前が無視するから・・・・」

「そんな怒らないで。冷静に話を聞いて」

「なんで俺が怒る必要があるんだ」

「ワトソンなんかどうでもいいだろ。俺には関係ない」

結局『ワトソン』の名前を言わされた俺はアリアをホームに置いて、先に階段を降りていく。

「自分だってレキと婚約したくせに・・」

追いついてきたアリアは小声でそう言ってきた。誤解はいつものことなので別に怒る気は無かったが・・・何だかモヤモヤした気持ちがあった俺は挑発に乗る気で振り返った。

「お前な、レキとのあれは・・・」

「初めてあったのよ」

俺の思いを先読みしたのか、アリアは強く言葉を刺してくる。

「ワトソンは・・・あたしのお祖母様が勝手に決めちゃった婚約者なの。でもその話は昔、一度だけ聞かされただけだったし・・・お祖母様はお年を召しているから、よく空想と現実が混ざった話をされるの。だから気にしてなかったし・・・正直忘れてた。その話自

体」

「・・・・・」

「これは本当よ。神に誓うわ。あたしとワトソンは今日、始めて会った」

真摯に俺を見上げて言うアリアは・・・何だか必死な感じだ。

「もっと言えば彼が本当に存在するのかも分からなかったわ。『ワトソン家には嫡男がいる』って噂には聞いていたけど・・・今、あの家はリバティー・メイソンっていう結社の上級職を任されていて、女王陛下から御許しが無い限り、みだりに正体を明かしちゃいけないの。だからみんな偽名で過ごしてるし、カモフラージュの仕事を・・・」

「・・・何でそんなに必死なんだよ」

捨てられる表情みたいなアリアに・・・俺は無性に腹が立ってきた。まるで俺がアリアに婚約者がいたことをなじったような感じじゃんか。別に俺は最初から納得しているんだ。お前がいずれここからいなくなることや、お前がそういう貴族の世界を生きていることが。

「キンジ・・・」

だからお前は言い訳みたいなムードで話す必要なんてないんだ。俺とお前は一時的に武偵として組んでいるだけ。結局のところ俺とお前は何もかも違うんだ。・・・そう思った俺は無言で階段を降りていった。

翌日、ビビリの担任の高天原ゆとり先生は「それではみなさ～ん！特別ゲストの転入生を紹介しま～す！マンチェスター武偵高から来たとってもカッコいい留学生ですよ～！」と言うからもしかしたらと思っていたが・・・案の定ワトソンだった。

「エル・ワトソンです。これからよろしくね」

男子にしては少し高めの声の少年っぽい声でワトソンが言い、１番後ろの席についた時、朝のホームルーム終了のチャイムが鳴り響いた途端・・・陽とアリア以外のクラスの女子どもがワトソンの席を取り囲んだ。・・・まるでジャニーズ系アイドルの取材みたいだな。

「前の学校では専門科はどこだったの！？ここではどこにはいるの！？」

「ニューヨークでは強襲科。マンチェスターでは探偵科。そして東京では衛生科と仮面戦士科・・・ボクは自分の武偵技術に最後の磨きをかけに来た」

そろいも揃って女子どもは目をハートマークにしている感じだな。

「王子様みたい！」

「うちは王家じゃない。子爵家だよ」

何だかさらに盛り上がってるな。・・・何人かはハートマークから¥のマークに目を変えてるし。

「肌きれい！女子みたい！」

「・・・ありがとう」

白い歯を見せて笑顔を見せたワトソンに声を上げた何人かの女子はフラット来たらしく支えられているものまでいた。・・・理子が今日休みで良かったな。あいつはこういう祭りごとが好きだから過剰に煽ってたと思うぞ。

「しかし大したものだな・・・ワトソンは」

俺があれだけの女子に囲まれたら・・・たぶんすぐにでも逃げ出そうとしていたと思うぞ。だけどワトソンは平然としている。女子の群れに対して一切構えていない感じだ。あそこまで美少年となると格が違うってことか。

「ワトソン君はどこの部に入るの？」

「予定はないよ」

その答えに女子達は次々と目の色を変えて「サッカー部に入ろうよ！あたし今からマネージャーになるし！」「え、演劇部如何です

か？」「水泳部に入ろうよ！」「野球部はどう？マネージャーになるためにドラッカーの本を読んだよ！」などと勧誘合戦を始めていた。

「ごめん、ボクはどこの武偵高でもクラブ活動はしないんだ。特に水泳はＮＧで・・」

苦笑いするワトソンだったが・・・女子達は簡単に引き下がらない。よっぽどお近づきになりたいんだな。留学生のイケメン公爵家サマと。

「ダメだよ帰宅部なんて！」

「そうよ！キンジと一緒に屋上で昼寝をするつもり？」

おいコラ水泳部！俺はいずれ転校するつもりだったから部活動をやっていなかったが、そこで俺の名前を出すなよ！ていうか見てんのかよ俺の昼寝！アリアや白雪の機嫌が悪い時は帰りたくないからそこで昼寝をしたり、空き教室でカードゲームをやったりして暇つぶしをしているけどさ。

「でも、ワトソン君が遠山君と吊るんだらたらしが移って・・・ああ、それなら私にもチャンスがあるかも」

演劇部はウットリ独り言をしている。たらしが移る？なんだそりゃ？

「たらしが移る？」

俺と同じ場所に引っ掛かりを感じたワトソンは女子に聞くと・・・

女子達は読唇術封じのために口を隠しながらごにょごにょとワトソンに何かを囁いた。それを聞いたワトソンは俺の方を向いて、急に顔を赤らめ・・・

「なっ!?・・・トオヤマは、そんな・・・・好色なっ!?」

こっちを睨みつけてきた。美形だから睨みつけてもそんなに凄みはないが・・・どうせ『キンジはああ見えて女ったらし。神崎さん、星伽さん。その他にも被害者多数なんだよ』とか吹き込まれてるんだろ?俺は女子にそうゆうスキャンダルを噂されてるからな。だがあの輪に特攻してアリアとか白雪、理子、レキのことを1つ1つ弁解する気にはなれない。というかできない。ヒステリアって秘密や、俺にとって不明な点が多すぎて。そしてさらに根も葉もない噂を聞かされた様子のワトソンは・・・

「・・・まさに女殺しだなトオヤマは。そんなに毒牙に掛けるなんてッ」

さらに赤面し、すごいテンパって慌てている。お前、いい年こいた男が他人のゴシップ程度で血相を変えるなよ。ていうか普通の男子はフィクション女性遍歴を聞くと「なんて大した奴だ。見習いたい」とか言って勝手に一目置いてくれたりするんだけどな。経験上、なぜか。

「まぁ・・・いいか。勝手に言わせとこう」

そしてしばらく時間が過ぎて一般校区から専門校区へと移動するための巡回バスに乗ろうとすると・・・こない。普段はオーラインクロスにアリアを乗せながら移動するのだが、今みたいにアリアとギクシャクしてる時は別行動で移動する。それにオーラインクロス

は以前貰ったクワガタカンとかの連動をさせるために整備してもらっているからバイクには乗れない。なので辺りにライドベンダーがないか探してみるが・・・どこにも無い。たぶん誰かが乗っていったんだろうな。

「アリア・・・」

アリアは昨日・・・俺の部屋に帰ってこなかった。少し心配だったので諜報科の風魔に探らせたら、女子寮の自室で後輩とももまんダルマ落としになるストレス発散ゲームをやっていたらしい。しかも物凄くイライラした様子だったから、戦妹の間宮は怯えきってたとか。

「はぁ・・・」

俺がため息をついていると・・・俺の前に黒い車が停まった。バスじゃない。ハザードランプをつけたポルシェ９１１カテラ・カブリオレじゃんか。一千万は下らない超高級車だぞ。そんな風に驚いていると・・・幌が自動的に開いて車輛の後部に格納されていきオープンカーになった９１１の助手席を見ると・・・

「やっぱりトオヤマか」

予想通りワトソンだった。運転席には青鬼・・・たしかテディとか言ったイマジンがハンドルを握っていた。

「バスはこないぞ。前の交差点で強襲科の生徒同士が乱闘していた。駆けつけた蘭豹先生が怒ってバスを手で横転させてたから、しばらくは通行止めだよ」

強襲科の奴らめ！公に迷惑を掛けるのはやめてくれよ。ていうか蘭豹も蘭豹だ。素手でバスを横転させるな。鬼の訓練でも受けてんのか？

「乗れ、トオヤマ。徒歩でも間に合うだろうが探偵科まで送ろう。キミとは少し話したいことがあるからね」

そう言ってドアを開けたワトソンに・・・俺は戸惑いを覚える。・・・一応今はテディもいるが、なんだかワトソンと2人っきりになったら嫌な気がする。単に気に食わないってわけじゃなく・・・直感的に危険を感じる。だがバスは来ないし・・・ここはお言葉に甘えて乗っておくか。

「・・・いい車だな」

「ツーシーターに直してあるカレラがあったから昨日買った。日本では小柄なボディじゃないと持て余すからね」

すげぇな。国によって乗る車を変えるのかよ。武藤が聞いていたらうらやましさで発狂してるだろうな。そしてそれきり会話が続かない俺達がしばらく黙っていると・・・信号待ちの際、俺を横目で睨んできたワトソンが口火を切った。

「・・・そう見えて女ったらしらしいな。キミは」

やっぱりその話かよ。

「そう言われてるらしいな、女子には」

「ボクは・・・そういう男が一番嫌いだ。ヒルダの前での体たらく

に加え、じょ・・・女性に対する・・・その、ふしだらさ。それが最も良くない。キミの第一印象は悪い。非常に悪い。最悪だよ」

ここまでのやり取りでなんとなく理解をしたが・・・どうやらこいつは生真面目で頭に血が上りやすいタイプらしい。・・・俺の苦手なタイプだな。

「だからアリアにはトオヤマの部屋に住むのをやめろと言ってきた」

「・・・それはありがたいな。俺は迷惑していたんだ」

俺が鼻を鳴らしてソッポを向くと・・・ワトソンも同じように鼻を鳴らした。

「何となく・・・キミとは気が合わないみたいだな」

「何となくじゃない。俺もそう思うからな」

そして探偵科の前でテディが車を停車させると・・・ワトソンはムッとした様子で・・・

「アリアとは成人してから正式に組む予定だったが・・・その前にまずキミからアリアを遠ざける。アリアは妙にキミを気に入っている様子だからな」

「勝手にしろよ。・・・送ってくれてありがとな」

俺が車のドアを開けて外に出ると・・・

「よく覚えておけ。アリアのベストパートナーはボクだ。キミじゃ

ない」

ワトソンは宣戦布告するような態度で、俺にそう言ってきた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

同日の深夜１１時５９分、とある金融会社・・・というよりもちょっとアレな事務所では二十数人の社員達が電話でそれぞれの相手と交渉をしていた。

「ですからぁ！おたくに貸した１００万を・・・えっ？もう少し待って欲しい？・・・ダメですよぉ！こちとら商売なんで！」

それぞれ社員達が対応していてガヤガヤとしている中、時計は１２時を示した瞬間・・・

「「「・・・・・」」」

社員達は話すどころか全員動きを停止した。

「・・・時間だ」

部長のような人物が自身の席を立って、小さな袋を手にすると・・・
・社員の人達からは屑ヤミーが身体を半分ほど出してきた。

「「「ヴォォォ」」」

屑ヤミー達は1体からそれぞれ1枚ずつのセルメダルを外へと出すと・・・再び社員の身体の中に戻っていった。

「・・・・・」

部長は社員から出てきたセルメダルを回収して袋へと詰めると・・・

「夜分遅くに失礼。ご苦労さまでござる」

どういう訳か風魔がやってきた。

「・・・・・」

部長が風魔に袋を差し出すと・・・風魔は片手で袋の紐の部分を掴んだ。

「それでは今日も依頼人へと届けるでござる」

そう言い残した風魔が事務所を去っていくと・・・社員達は再び慌ただしい仕事へと戻っていった。そして風魔はその事務所から3キロほど離れた事務所へとやってくると・・・薄暗い2階にいた緑色のジャケットを着た男へと歩み寄っていく。

「依頼された品、持ってきたでござる」

チャリン

風魔はメダルが入っているような金属音のする袋を緑のジャケットを着ている男に渡す。

「フッ・・・ご苦労」

緑のジャケットを着ている男は袋を受け取ると、その袋の中に入っていたセルメダルを木箱にしまって、懐にしまっていた財布から５００円玉を３枚取り出した。

「今日の報酬だ。明日も頼むぞ」

「承知したでござる。・・・しかしその中に入っているセルメダル。・・・そんなに集めてどうする気でござるか？それにどうしてあそこの事務所には毎日セルメダルがあんなにも溜まっているでござるか？」

風魔は頷きながら報酬を受け取ると・・・木箱に入っていた大量のセルメダルを眺める。

「お前なんかが気にすることじゃない。そこの焼きそばパンを持っていってもいいからとっとと帰れ」

「・・・それでは遠慮なくもらうでござる」

腹の虫を鳴らし、焼きそばパンを加えた風魔はそのまま緑のジャケットを着た男から去っていった。

「これだけのセルメダルがあれば・・・メモリの力を最大限まで発揮することが可能だろうな。・・・今に見てろよカザリ！それにオーズとアンク！もうじきお前達からメダルを根こそぎ奪い取ってやるからな！」

緑のジャケットを着た男は昆虫系グリードのウヴァへと姿を変えると木箱に入っているセルメダルを次々と取り込み始めた。

・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・

そしてウヴァがセルメダルを取り込み始めたのと同じ頃・・・真木博士とカザリはどこかの屋敷のような場所で自分達が手に入れているコアメダルが映されたモニターを眺めていた。

「そういえば知っていますかカザリ君」

「え？何を？」

人間態のカザリは以前俺から奪ったパンダのメダルをテーブルの上で転がしながらも真木博士へと振り向く。

「最近、オーズでもグリードでもない第3者・・・ドラキュラ家のヒルダとか言う令嬢がガメル君のメダルやメズール君のメダルを集めているらしいですよ」

「へぇ、ドラキュラの一族がねぇ。ドクター・・・もう少し詳しく聞かせてよ」

興味を持った・・・というよりも利用できそうだと思った様子のカザリは怪人体になってパンダのメダルを取り込みつつもモニターへと歩み寄っていく。

「なるほどねぇ・・・もしかしてこのヒルダって子は・・・フフ、なるほどね。面白いじゃん」

再び人間態に戻ったカザリは不適に笑いながら外へと出て行こうとする。

「どこへ行く気ですかカザリ君?まだこの場所を拠点にしたばかりですから、位置が特定されてしまわないように、しばらく外出は控えて欲しいのですが・・・」

「ちょっとヤミーを作りにいくだけだよ。それに・・・状況をもっと面白くする方法を思いついたんだ」

そう言い残したカザリは2枚のセルメダルを手に持ちながら何処かへと歩いていった。

・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

ワトソンの車に探偵科まで乗せてもらった翌日の昼休みのことだ。

俺はクスクシエに向かっていると・・・ある事に気づいてしまった。

「・・・金が無い」

財布の中には諭吉さんが1枚も入っておらず、経済的にピンチだった。エヴィルとの戦いの時には結構バイクで移動しまくってガソリン代で諭吉さんとおさらばしまくったから仕方ないといえば仕方ないのだが・・・。たとえ依頼を受けたとしても、報酬が入るのは来月になってしまう。今月は諭吉さんがいない財布の中身と格闘しながら過ごさないといけないってことか。お金を借りようにも、借りる相手がいないし。

「矢車は依頼を受けないから俺よりも財布が軽いし・・・正太郎は風邪で休みだし・・・陽は確かに財布が重たいが・・・だから気まずくて逆に借りにくいんだよなぁ」

白雪は神社の祭事でいないし、アンクは・・・何だかショッカーグリードから取り戻したメダルを取り込んでから、調子が悪くなることが多々あるようになってしまい、今日も休んでしまっている。もしかしてショッカーグリードの悪意的なものに当てられたのか？

「後輩から金を借りるのもあれだし・・・今日はコッペパンにしとくか」

そう思った俺はクスクシエへと入って1人寂しくパンを食い始めると・・・

「・・・何だよ？」

「一緒にいいかな？」

俺のテーブルにワトソンがやってきた。しかも隣にいるテディはワトソンの注文したたっぷいステーキ・プレートを持ってるし。

「・・・・・」

見とれてしまうようにキレイな仕草で十字を切り、食前の祈りを捧げたワトソンはナイフを溶け込むようにしてステーキを切った。

「トオヤマ・・・」

「何だよ?」

「食べたいか?・・・キミにはやらん」

じゃあ聞くなよ。・・・俳優みたいに優雅に食事をするワトソンに対し・・・俺はパンを頬張る。地味にくる格差だな。

「見たところキミはお金に困っているようだな」

「悪かったな」

平賀さんの作ったオリジナルカンドロイドとか、オーラインクロスとかで俺はすぐに諭吉さんがいなくなっちまうんだよ。

「武偵にとってお金は弾倉や装備に繋がる生命線だ。途切れるとどんな武偵でも弱体化するからね」

「そんなことは分かっている」

ワトソンが言うことは事実だ。武偵高でも1年で習う。公金で装備を整えられる警察や自衛隊とは違って、武偵は常に装備にかかる金繰りを考えなければいけない。

「アンクのアイスだけじゃなく武藤兄妹や平賀文にだってお金が掛かるだろう」

「・・・調べやがったな」

武偵は基本、金で動く。俺が場当たりにやってしまった仕事は別として通常の依頼には報酬や分配などが学生間でもしっかりできるように教務科から色々と言われている。なおその際に金を『積む』ことは禁止されていない。逆に支払いが滞る際は依頼を中断することもルール違反じゃない。そういうシビアで現実的なことも武偵にはあるんだよ。学生でもな。

「トオヤマの弱点を1つ見つけたな」

フッと笑うワトソンに・・・俺は再び本能的な危険を感じた。何だか分からないが・・・こいつは俺にとって危険だ。・・・だけど俺には何が危険なのかは分からないままだった。

転入生とお金と蠢く欲望（後書き）

次回はウヴァが最近ようやく活躍したとある人物からヤミーを作ります。そしていよいよ第2回人気投票を行いたいと思います。今度の人気投票は欲望の交差、欠片を合わせた投票にします。登場キャラが軽く１００人を超えているので一人辺り一日で3票ということで何回でもＯＫにしたいと思います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7694t/

緋弾のアリア　欲望の交差

2012年1月8日21時47分発行